

百間川兼基遺跡 1
百間川今谷遺跡 1

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査 Ⅲ

1982

建設省岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会



卷頭図版 今谷遺跡弥生時代中期建物群

序

百間川遺跡の発掘調査は、昭和52年4月の開始以来すでに5か年が経過しております。その間の調査面積は87,000㎡に達し、発掘調査報告書は3分冊目を刊行することになりました。

本報告書では、昭和53年7月から昭和56年7月中旬まで調査を行った兼基、今谷両遺跡（第3微高地）をとりあげます。これらの調査区においては、弥生時代中期のガラス溶滓出土の土壌、弥生時代中・後期の水田 および 灌漑施設等 の 貴重な遺構・遺物が発見され、全国的にも注目されました。

調査の成果は必ずしも充分とはいえませんが、この報告書が文化財の保護、保存、更には今後の研究の一助となれば幸いと存じます。

現地調査の実施、報告書の作成にあたって、建設省中国地方建設局、岡山河川工事事務所、並びに百間川遺跡埋蔵文化財保護対策委員をはじめとする関係各位から寄せられた多大の御協力と御指導に対し、厚く御礼申しあげます。

昭和57年11月

岡山県教育委員会

教育長 佐藤 章 一

例 言

1. 報告書は旭川放水路（百間川）改修工事に伴い、建設省中国地方建設局の依頼を受け、岡山県教育委員会が昭和53・54・55・56年に発掘調査を実施した百間川兼基・今谷遺跡の発掘調査概要である。なお、上記発掘調査部分は第1次確認調査における第3微高地の一部にあたる。
2. 調査期間は1978年7月4日～1981年7月16日である。
3. 発掘調査および報告書の作成にあたって、旭川放水路（百間川）埋蔵文化財保護対策委員会の助言を受けた。また、石材の肉眼同定には岡山理科大学三宅寛教授、木器の樹種鑑定は岡山大学農学部畔柳鎮教授、種子分析には笠原安夫岡山大学名誉教授、 ^{14}C 年代測定には京都産業大学理学部山田治教授、花粉分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、有益な教示と助言を得た。
4. 報告書の作成は、昭和56年4月以降57年3月まで文化課分室にて整理作業を実施し、文化課職員が執筆し、文責は文末に記した。
5. 遺物の整理、実測および実測図の浄写、遺構図の浄写は、おもに各担当者が行い、一部の土器の実測に亀田菜穂子、馬場昌一、平井典子、石器の実測および浄写に平井典子、文章の浄写は浅山千恵、宇野まりこ、亀田菜穂子、山本和美、横田宗子の助力を得た。遺物の写真撮影および全体編集は高畑知功があたった。
また、遺物整理には森本耶須子、網沢靖枝、平岩章子の協力を得た。
6. 報告書で用いる断面図高度値は海拔高であり、方位は第1・2・5図を除き磁北である。
7. 報告書に掲載の図の縮尺率は、それぞれに示した。出土遺物の実測図で数値で示していないものは、 $\frac{1}{4}$ の縮尺である。
8. 報告書で用いる時代区分は、一般的な政治的区分に準拠し、それを補うために文化史区分と世紀を併用した。
9. 調査地区は調査後、小字名に準拠し、西より大上田、東苗代、大地、の3区にわけた。
遺物については土器、石器、鉄器など、それぞれの通し番号を付した。
10. 報告書に掲載した地形図で、 $\frac{1}{50000}$ の地形図は建設省国土地理院発行のもの、 $\frac{1}{2500}$ の地形図は、岡山市発行のものを複製したものである。
11. 報告書に關係する遺物、実測図、マイクロフィルム等は、文化課分室にて保管している。

目 次

第1章 地理的・歴史的環境	11
第2章 調査の契機及び経過	15
・第1次確認調査に至る経過概要	15
・第1次確認調査の成果	17
・調査の構成	18
・本格調査の経過	20
第3章 百間川兼基遺跡	25
第1節 大上田調査区	29
第2節 東苗代調査区	151
第4章 百間川今谷遺跡	253
第1節 大地調査区	253
第5章 ま と め	441
第1節 兼基・今谷遺跡の集落	441
第2節 竪穴式住居	448
第3節 弥生時代中期の建物	450
第4節 古墳時代前期の建物	454
第5節 水 田	455
第6節 ガ ラ ス	458
第7節 石 器	460
第8節 弥生時代中期の土器	470
第9節 弥生時代後期の土器	489

表 目 次

表—1 調査工程表	21	表—15 石器一覧表	149
表—2 編年対比表	24	表—16 木器一覧表	150
表—3 弥生時代中期土器観察表	50	表—17 弥生時代前・中期土器観察表	215
表—4 弥生時代後期土器観察表	106	表—18 弥生時代後期土器観察表	234
表—5 古墳時代土器観察表	136	表—19 古墳時代土器観察表	239
表—6 古代・中世土器観察表	143	表—20 遺構一覧表	242
表—7 遺構一覧表	144	表—21 井戸一覧表	244
表—8 井戸一覧表	145	表—22 土壙一覧表	244
表—9 土壙一覧表	145	表—23 建物一覧表	246
表—10 建物一覧表	146	表—24 竪穴式住居一覧表	247
表—11 竪穴式住居一覧表	147	表—25 玉類一覧表	247
表—12 玉類一覧表	148	表—26 金属製品一覧表	247
表—13 金属製品一覧表	148	表—27 土製品一覧表	247
表—14 土製品一覧表	148	表—28 石器一覧表	248

表—29	弥生時代中期土器観察表	361
表—30	弥生時代後期土器観察表	412
表—31	古墳時代土器観察表	429
表—32	古代・中世の土器観察表	429
表—33	竪穴式住居一覧表	430
表—34	建物一覧表	430
表—35	井戸一覧表	431
表—36	土壌一覧表	432
表—37	土製品一覧表	434
表—38	石器一覧表	434

表—39	竪穴式住居面積一覧表	449
表—40	ガラス成分表	459
表—41	打製石庖丁形態別消長	461
表—42	石鏃の長さとの比率	463
表—43	石鏃の厚さ	463
表—44	石鏃の重さ	463
表—45	出土石器一覧表	467
表—46	岡山県下の弥生時代中期土器編 年対比表	483

目 次

第 1 図	百間川位置図(1/990,000)	11
第 2 図	百間川周辺遺跡分布図 (1/50000)	12
第 3 図	グリッド設定および改修工事名 称 (1/4000)	20
第 4 図	兼基遺跡出土第 3 号銅鐸	25
第 5 図	兼基・今谷遺跡周辺地形図 (1/7500)	26
第 6 図	大上田地区遺構全体図 (1/500)	27
第 7 図	大上田地区土層断面	29
第 8 図	竪穴式住居—1 (1/30)	30
第 9 図	大上田地区弥生時代中期遺構配 置図 (1/500)	31
第 10 図	竪穴式住居—1 出土遺物	33
第 11 図	竪穴式住居—2 (1/60)	34
第 12 図	竪穴式住居—2 出土遺物	35
第 13 図	竪穴式住居—3 (1/60)・出土 遺物	36
第 14 図	竪穴式住居—4 (1/60)・出土 遺物	37
第 15 図	竪穴式住居—4 出土遺物	38
第 16 図	井戸—1 (1/30)・出土遺物	38
第 17 図	土壌—1 (1/30)・出土遺物	39
第 18 図	土壌—2 (1/30)・出土遺物	40
第 19 図	土壌—5 (1/30)・出土遺物	41
第 20 図	土壌—8 (1/30)・出土遺物	41
第 21 図	土壌—10(1/30)・出土遺物	42

第 22 図	土壌—12出土遺物	42
第 23 図	土壌—12 (1/30)	43
第 24 図	土壌—18(1/30)・出土遺物	43
第 25 図	土壌—22(1/30)・出土遺物	44
第 26 図	溝—2・3・4 (1/150・1/100)	45
第 27 図	溝—2 出土遺物	46
第 28 図	溝—3 出土遺物	46
第 29 図	溝—1 出土遺物	47
第 30 図	包含層出土遺物	48
第 31 図	包含層出土遺物	49
第 32 図	竪穴式住居—6 (1/60)	52
第 33 図	大上田地区弥生時代後期遺構配 置図 (1/500)	53
第 34 図	竪穴式住居—6 出土遺物	55
第 35 図	竪穴式住居—6 出土遺物	56
第 36 図	竪穴式住居—7 (1/60)・出土 遺物	57
第 37 図	竪穴式住居—8 (1/60)	58
第 38 図	竪穴式住居—8 出土遺物	59
第 39 図	竪穴式住居—8 出土遺物	60
第 40 図	竪穴式住居—9 (1/60)・出土 遺物	60
第 41 図	竪穴式住居—10 (1/60)	61
第 42 図	竪穴式住居—10出土遺物	62
第 43 図	竪穴式住居—10出土遺物	62
第 44 図	竪穴式住居—11 (1/60)・出土 遺物	63

第45図 建物—1 (1/100)	64	第85図 水田・304ライン(上)・Dライン(下)断面(1/400)	97
第46図 建物—3 (1/100)	64	第86図 水田区画面積一覧図	97
第47図 建物—4 (1/100)	64	第87図 低位部土層柱状図(1/60)	98
第48図 井戸—2 (1/30) ・出土遺物	65	第88図 水田層出土遺物	98
第49図 土墳—25(1/20) ・出土遺物	66	第89図 微高地端部土層断面(1/40)	98
第50図 土墳—26(1/30) ・出土遺物	67	第90図 溝—10~20 (1/400)	99
第51図 土墳—27(1/30) ・出土遺物	68	第91図 畝畝土層断面(1/40)	100
第52図 土墳—28(1/30) ・出土遺物	68	第92図 溝—13出土遺物	101
第53図 土墳—29(1/30) ・出土遺物	69	第93図 畝畝出土遺物	101
第54図 溝—6 (1/1000)	70	第94図 溝—13出土遺物	102
第55図 溝—6 出土遺物	70	第95図 杭列(1/200)	103
第56図 溝—7・8・9 (1/250)	71	第96図 杭列使用の建築材・木器	104
第57図 溝—7・8・9 (1/40)	72	第97図 淡灰緑色粘土層出土遺物(1/2) ..	105
第58図 溝—7 (1/40)	73	第98図 杭列遺構土層断面(1/40)	105
第59図 溝—6・7 (1/40)	73	第99図 大上田地区古墳時代遺構配置図(1/500)	113
第60図 溝—7 出土遺物(1)	74	第100図 竪穴式住居—12 (1/60)	115
第61図 溝—7 出土遺物(2)	75	第101図 竪穴式住居—12出土遺物	115
第62図 溝—7 出土遺物(3)	76	第102図 竪穴式住居—13A・B(1/60) ・出土遺物	117
第63図 溝—7 出土遺物(4)	77	第103図 竪穴式住居—14 (1/60) ・出土遺物	118
第64図 土器溜り—A 出土遺物(1)	78	第104図 建物—5 (1/100) ・出土遺物 ..	119
第65図 土器溜り—A 出土遺物(2)	79	第105図 建物—6 (1/100)	119
第66図 土器溜り—A 出土遺物(3)	80	第106図 建物—7 (1/100) ・出土遺物 ..	120
第67図 土器溜り—A 出土遺物(4)	81	第107図 建物—8 (1/100)	120
第68図 土器溜り—A 出土遺物(5)	82	第108図 建物—13 (1/60)	120
第69図 土器溜り—A 出土遺物(6)	83	第109図 建物—9 (1/100) ・出土遺物 ..	121
第70図 溝—1・6・7 土層断面 (1/80) ..	83	第110図 建物—10 (1/100)	122
第71図 土器溜り—B 出土遺物(1)	84	第111図 建物—11 (1/100)	122
第72図 土器溜り—B 出土遺物(2)	85	第112図 建物—12(1/100) ・出土遺物 ..	123
第73図 土器溜り—C 出土遺物(3)	86	第113図 建物—14 (1/100)	123
第74図 土器溜り—D 出土遺物(1)	87	第114図 建物—15 (1/100)	124
第75図 土器溜り—D 出土遺物(2)	88	第115図 建物—16 (1/100)	124
第76図 土器溜り—D 出土遺物(3)	89	第116図 建物—17(1/100) ・出土遺物 ..	125
第77図 土器溜り—D 出土遺物(4)	90	第117図 井戸—3 (1/30)	125
第78図 土器溜り—D 出土遺物(5)	91	第118図 井戸—3 出土遺物	126
第79図 土器溜り—E (1/150)	92	第119図 井戸—4 (1/30)	127
第80図 土器溜り土層断面 (1/60)	92	第120図 井戸—4 出土遺物	127
第81図 土器溜り—E 出土遺物(1)	93		
第82図 土器溜り—E 出土遺物(2)	94		
第83図 土器溜り—E 出土遺物(3)	95		
第84図 水田 (1/400)	96		

第121図 井戸—5 (1/30).....	128	第153図 竪穴式住居—15~18出土遺物(1)	160
第122図 井戸—6 (1/30).....	128	第154図 竪穴式住居—15~18出土遺物(2)	161
第123図 井戸—6 出土遺物.....	128	第155図 竪穴式住居—19 (1/80).....	162
第124図 井戸—5 出土遺物.....	129	第156図 竪穴式住居—20 (1/60)・出土	162
第125図 土壙—32・33 (1/30).....	130	遺物.....	162
第126図 土壙—33出土遺物.....	130	第157図 建物—20 (1/100)	163
第127図 土壙—35 (1/30)・出土遺物...	131	第158図 井戸—7 (1/30)・出土遺物...	164
第128図 土壙—36 (1/30)・出土遺物...	131	第159図 井戸—8 (1/30)・出土遺物...	165
第129図 土壙—38 (1/30)・出土遺物...	132	第160図 土壙—44(1/30)・出土遺物(1)...	166
第130図 土壙—40 (1/30)・出土遺物...	132	第161図 土壙—44出土遺物(2).....	167
第131図 土壙—39出土遺物.....	132	第162図 土壙—47・49 (1/30)・出土遺	168
第132図 土器溜り (1/40)・出土遺物...	133	物.....	168
第133図 溝—23 (1/1000)・出土遺物...	134	第163図 土壙—50・51 (1/30)・出土遺	169
第134図 溝—24 (1/60).....	134	物.....	169
第135図 古墳時代の出土遺物.....	135	第164図 土壙—56・57・130 (1/30)・	170
第136図 現存条里遺構 (1/5000).....	138	土壙—56出土遺物.....	170
第137図 出土遺物.....	138	第165図 土壙—57出土遺物(1).....	171
第138図 畝状遺構 (1/500)	139	第166図 土壙—57出土遺物(2).....	172
第139図 溝—25・牛の頭.....	140	第167図 土壙—59・60 (1/30)・出土遺	172
第140図 建物—18 (1/100)	140	物.....	172
第141図 建物—19 (1/100)	140	第168図 土壙—61 (1/30)・出土遺物...	173
第142図 柵—1 (1/300)	141	第169図 土壙—62 (1/30)・出土遺物...	174
第143図 建物—20 (1/100)	141	第170図 土壙—63 (1/30)・出土遺物...	175
第144図 古代・中世の遺物.....	142	第171図 土壙—65 (1/30)・出土遺物...	175
第145図 東苗代調査区 (1/400)	151	第172図 土壙—70 (1/30)・出土遺物...	176
第146図 五反田樋門・五反田樋門導入水	153	第173図 土壙—71 (1/30)・出土遺物...	176
路・低水路土層柱状図(1/60)...	153	第174図 土壙—72出土遺物.....	177
第147図 今谷樋門導入水路西壁土層図	154	第175図 土壙—73 (1/30)・出土遺物...	178
(1/120).....	154	第176図 土壙—75 (1/30)・出土遺物	178
第148図 今谷樋門西壁土層図(1/100)	155	(1).....	178
.....	155	第177図 土壙—75出土遺物(2).....	179
第149図 五反田樋門(左)・五反田樋門	156	第178図 土壙—76(1/30)・出土遺物(1)...	179
導入水路(右)遺構配置図	156	第179図 土壙—76出土遺物(2).....	180
(1/500)	156	第180図 土壙—79 (1/30).....	180
第150図 低水路(L~Q)・今谷樋門導	157	第181図 土壙—79出土遺物.....	181
入水路・今谷樋門遺構配置図	157	第182図 土壙—80 (1/30)・出土遺物...	181
(1/500)	157	第183図 土壙—86・90 (1/30)・出土遺	182
第151図 包含層出土遺物.....	158	物.....	182
第152図 竪穴式住居—15~18 (1/60)	159		
.....	159		

第184図 土壙—91 (1/30)・出土遺物…	183	第219図 その他の遺物(2)……………	212
第185図 土壙—101 (1/30)・出土遺物 (1)……………	183	第220図 その他の遺物(3)……………	213
第186図 土壙—101出土遺物 (2)……………	184	第221図 その他の遺物(4)……………	214
第187図 土壙—96(1/30)・出土遺物(1)…	184	第222図 土壙—129 (1/30) ……	224
第188図 土壙—96出土遺物(2)……………	185	第223図 土壙—129出土遺物 ……	225
第189図 土壙—100(1/30)・出土遺物…	185	第224図 土壙—130出土遺物 ……	226
第190図 土壙—99 (1/30)・出土遺物…	186	第225図 土壙—131(1/30)・出土遺物…	227
第191図 土壙—98(1/30)・出土遺物(1)…	187	第226図 土壙—132(1/40)・出土遺物…	228
第192図 土壙—98出土遺物(2)……………	188	第227図 溝—36～40土層断面図(1/60)…	228
第193図 土壙—104(1/30)・出土遺物…	188	第228図 溝—41 (1/120) ……	229
第194図 土壙—105 (1/30) ……	189	第229図 溝—41断面図 (1/50)……………	229
第195図 土壙—106(1/30)・出土遺物…	189	第230図 溝—41出土遺物……………	230
第196図 土壙—107(1/30)・出土遺物…	190	第231図 土器溜り—1 出土遺物……………	231
第197図 土壙—108(1/30)・出土遺物…	190	第232図 土器溜り—2・3 出土遺物……………	232
第198図 土壙—109(1/30)・出土遺物…	191	第233図 土器溜り—4 出土遺物……………	233
第199図 土壙—110(1/30)・出土遺物…	192	第234図 竪穴式住居—21 (1/60)・出土 遺物……………	236
第200図 土壙—111(1/30)・出土遺物…	193	第235図 井戸—9 (1/40)……………	236
第201図 土壙—112(1/30)・出土遺物…	194	第236図 井戸—10 (1/30)・出土遺物…	237
第202図 土壙—113(1/30)・出土遺物…	195	第237図 土壙—133(1/30)・出土遺物…	237
第203図 土壙—114出土遺物 ……	196	第238図 溝—43出土遺物……………	237
第204図 土壙—114・115 (1/30)・ 土壙—115出土遺物 ……	197	第239図 溝—45柵列(1/100)・出土遺物…	238
第205図 土壙—116・117 (1/30)・出土 遺物……………	198	第240図 包含層出土遺物……………	239
第206図 土壙—118(1/30)・出土遺物…	199	第241図 建物—22・23 (1/100) ……	240
第207図 土壙—119(1/30)・出土遺物…	200	第242図 建物—24・柵—2・3 (1/100)…	241
第208図 溝—30断面図 (1/60)……………	201	第243図 土層断面図 (1/40)……………	253
第209図 溝—30出土遺物(1)……………	202	第244図 包含層出土遺物……………	254
第210図 溝—30出土遺物(2)……………	203	第245図 大地地区(今谷橋脚部)弥生時 代中期遺構配置図 (1/300) (1/1000)……………	255
第211図 溝—31～34土層断面図 (1/60)……………	204	第246図 竪穴式住居—1 (1/30)・出土 遺物……………	256
第212図 溝—32出土遺物(1)……………	205	第247図 竪穴式住居—1 出土遺物……………	257
第213図 溝—32出土遺物(2)……………	206	第248図 竪穴式住居—2 (1/30)……………	257
第214図 溝—32出土遺物(3)……………	207	第249図 竪穴式住居—3 (1/80)……………	258
第215図 溝—34断面図 (1/20)・溝— 33・34出土遺物……………	208	第250図 竪穴式住居—4 (1/80)……………	258
第216図 溝—34・35出土遺物……………	209	第251図 竪穴式住居—5 (1/80)・出土 遺物……………	258
第217図 溝状遺構 (1/100) ……	209	第252図 大地地区弥生時代中期遺構配置 図 (1/500) ……	259
第218図 その他の遺物(1)……………	211		

第253図 建物—1 (左)・建物—2 (右) (1/100)	260	第289図 井戸—1 出土遺物(2).....	280
第254図 建物—1・2 出土遺物.....	260	第290図 井戸—1 出土遺物(3).....	281
第255図 建物—3 (1/100)・出土遺物...	261	第291図 井戸—2 (1/30).....	281
第256図 建物—4 (1/100)	261	第292図 井戸—3 (1/30)・出土遺物...	281
第257図 建物—3・4 出土遺物.....	262	第293図 井戸—4 (1/30)・出土遺物...	282
第258図 建物—5 (1/100)・P—5 (1/20).....	262	第294図 井戸—5 (1/30).....	283
第259図 建物—5 出土遺物.....	263	第295図 井戸—6 (1/30)・出土遺物...	283
第260図 建物—6 (1/100)	263	第296図 井戸—7 (1/40)・出土遺物...	284
第261図 建物—6 出土遺物 (1/6) ...	263	第297図 井戸—8 (1/40)・出土遺物(1)...	285
第262図 建物—7 (1/100)	264	第298図 井戸—8 出土遺物(2).....	286
第263図 建物—8 (1/100)	264	第299図 井戸—8 出土遺物(3).....	287
第264図 建物—9 (1/100)	264	第300図 井戸—9 (1/30) 出土遺物.....	288
第265図 建物—10 (1/100)	265	第301図 井戸—10 (1/30)・11 (1/40)・ 出土遺物.....	289
第266図 建物—11 (1/100)	265	第302図 井戸—12(1/30)・出土遺物(1)...	290
第267図 建物—12(1/100)・出土遺物...	266	第303図 井戸—12出土遺物(2).....	291
第268図 建物—13 (1/100)	267	第304図 井戸—13(1/30)・出土遺物(1)...	292
第269図 建物—14 (1/100)	267	第305図 井戸—13出土遺物(2).....	293
第270図 建物—15 (1/100)	268	第306図 井戸—14 (1/30)・出土遺物...	294
第271図 建物—16(1/100)・出土遺物...	269	第307図 土塋—1 (1/30)・出土遺物...	295
第272図 建物—17 (1/100)	270	第308図 土塋—2 (1/20)・出土遺物...	296
第273図 建物—17出土遺物.....	270	第309図 土塋—3 (1/30)・出土遺物(1)...	297
第274図 建物—18 (1/100)	271	第310図 土塋—3 出土遺物(2).....	298
第275図 建物—19 (1/100)	271	第311図 土塋—3 出土遺物(3) (1/6) ...	299
第276図 建物—20 (1/100)	271	第312図 土塋—4 (1/30)・出土遺物...	300
第277図 建物—21 (1/100)	271	第313図 土塋—5 (1/30).....	300
第278図 建物—22 (1/100)・P—8 (1/30).....	272	第314図 土塋—6 (1/30).....	300
第279図 建物—22出土遺物.....	272	第315図 土塋—8 (1/20)・出土遺物 (1/6)	301
第280図 建物—23 (1/100)・P—2 (1/30)・P—3 柱根.....	273	第316図 土塋—9 (1/40)・出土遺物...	301
第281図 建物—24 (1/100)	274	第317図 土塋—10 (1/30)・出土遺物...	302
第282図 建物—25 (1/100)	274	第318図 土塋—12 (1/30)・出土遺物...	303
第283図 建物—25出土遺物.....	275	第319図 土塋—13 (1/30)・出土遺物...	304
第284図 建物—26(1/100)・出土遺物...	276	第320図 土塋—14 (1/30)・出土遺物...	304
第285図 建物—27 (1/100)	277	第321図 土塋—16・17・18 (1/30).....	305
第286図 建物—28 (1/100)	277	第322図 土塋—16出土遺物.....	306
第287図 建物—28出土遺物.....	278	第323図 土塋—17出土遺物.....	307
第288図 井戸—1 (1/30)・出土遺物(1)...	279	第324図 土塋—18出土遺物.....	308
		第325図 土塋—19 (1/30)・出土遺物(1) (1/6)	308

第326图 土壙—19出土遺物(2).....	309	(1/6)	337
第327图 土壙—20 (1/30).....	309	第366图 土壙—54 (1/30).....	337
第328图 土壙—20出土遺物.....	310	第367图 土壙—54出土遺物.....	338
第329图 土壙—22 (1/30)・出土遺物...	311	第368图 土壙—55 (1/30)・出土遺物...	339
第330图 土壙—23(1/40)・出土遺物(1)...	312	第369图 土壙—56 (1/30)・出土遺物...	339
第331图 土壙—23出土遺物(2).....	313	第370图 土壙—57 (1/40).....	340
第332图 土壙—23出土遺物(3).....	314	第371图 土壙—57出土遺物(1) (1/6) ...	340
第333图 土壙—24 (1/50).....	315	第372图 土壙—57出土遺物(2).....	341
第334图 土壙—24出土遺物(1).....	315	第373图 土壙—58 (1/40).....	341
第335图 土壙—24出土遺物(2).....	316	第374图 土壙—58出土遺物(1).....	342
第336图 土壙—24出土遺物(3).....	317	第375图 土壙—58出土遺物(2).....	343
第337图 土壙—24出土遺物(4).....	318	第376图 土壙—59 (1/10).....	343
第338图 土壙—27 (1/30).....	319	第377图 土壙—59出土遺物.....	344
第339图 土壙—27出土遺物.....	320	第378图 溝—1 (1/120)・出土遺物(1)...	345
第340图 土壙—28 (1/40).....	321	第379图 溝—1 出土遺物(2).....	346
第341图 土壙—28出土遺物.....	321	第380图 溝—1 出土遺物(3).....	347
第342图 土壙—29 (1/30)・出土遺物...	322	第381图 溝—2 (1/30)・出土遺物.....	348
第343图 土壙—30 (1/30)・出土遺物...	323	第382图 溝—3 (1/30)・出土遺物.....	349
第344图 土壙—31 (1/40)・出土遺物...	323	第383图 溝—12 (1/80).....	350
第345图 土壙—33 (1/30)・出土遺物...	324	第384图 溝—12 (1/30)・出土遺物(1)	
第346图 土壙—34 (1/40)・出土遺物...	324	(1/6)	351
第347图 土壙—35 (1/30)・出土遺物...	325	第385图 溝—12出土遺物(2).....	352
第348图 土壙—36 (1/40)・出土遺物...	326	第386图 溝—12出土遺物(3).....	353
第349图 土壙—38 (1/30)・出土遺物...	327	第387图 溝—12出土遺物(4).....	354
第350图 土壙—39 (1/40)・出土遺物...	327	第388图 溝—12出土遺物(5) (1/2)	355
第351图 土壙—40 (1/40)・出土遺物...	328	第389图 溝—14 (1/30)・出土遺物.....	356
第352图 土壙—41 (1/40)・出土遺物...	328	第390图 包含層出土遺物(1).....	357
第353图 土壙—42 (1/40)・出土遺物...	329	第391图 包含層出土遺物(2).....	358
第354图 土壙—43 (1/40).....	330	第392图 包含層出土遺物(3).....	359
第355图 土壙—44 (1/40)・出土遺物...	330	第393图 包含層出土遺物(4) (1/3) (1/6)...	360
第356图 土壙—45 (1/40).....	331	第394图 大地地区(今谷橋脚部)弥生時代	
第357图 土壙—46 (1/30).....	331	後期遺構配置図	
第358图 土壙—46出土遺物(1).....	332	(1/300) (1/1000)	374
第359图 土壙—46出土遺物(2).....	333	第395图 竪穴式住居—6 (1/60).....	375
第360图 土壙—48 (1/40).....	333	第396图 竪穴式住居—7 (1/60)・出土	
第361图 土壙—49(1/40)・出土遺物(1)...	334	遺物.....	375
第362图 土壙—49出土遺物(2).....	335	第397图 竪穴式住居—8 (1/60)・出土	
第363图 土壙—50 (1/40).....	336	遺物.....	376
第364图 土壙—51 (1/40).....	336	第398图 井戸—15 (1/50)・出土遺物...	377
第365图 土壙—53 (1/40)・出土遺物		第399图 土壙—60・61 (1/30).....	378

第400図 土壙—61出土遺物……………	378	第441図 土器溜り—1 出土遺物(3)……………	405
第401図 土壙—62 (1/30)……………	378	第442図 土器溜り—1 出土遺物(4)……………	406
第402図 土壙—62出土遺物……………	378	第443図 土器溜り—1 出土遺物(5)……………	407
第403図 土壙—63 (1/20)・出土遺物…	379	第444図 土器溜り—1・2 出土遺物……………	408
第404図 土壙—64 (1/20)・出土遺物…	379	第445図 土器溜り—3 出土遺物……………	409
第405図 土壙—65出土遺物……………	380	第446図 土器溜り—4 出土遺物……………	410
第406図 土壙—65・66 (1/30)……………	380	第447図 包含層出土遺物……………	411
第407図 土壙—66出土遺物……………	380	第448図 大地地区(今谷橋脚部)古墳時代 遺構配置図 (1/600) (1/2000) ……………	418
第408図 土壙—67 (1/30)……………	381	第449図 大地地区古墳時代遺構配置図 (1/500) ……………	419
第409図 土壙—67出土遺物(1)……………	382	第450図 竪穴式住居—9 (1/60)・出土 遺物……………	420
第410図 土壙—67出土遺物(2)……………	383	第451図 建物—29 (1/80)……………	420
第411図 土壙—68 (1/20)・出土遺物…	384	第452図 井戸—16 (1/30)・出土遺物…	421
第412図 土壙—69・70・71 (1/30)・出 土遺物……………	385	第453図 井戸—17 (1/20)……………	422
第413図 土壙—72 (1/30)・出土遺物…	386	第454図 井戸—17出土遺物……………	423
第414図 土壙—73 (1/30)・出土遺物…	386	第455図 井戸—18 (1/30)・出土遺物…	424
第415図 土壙—74 (1/40)・出土遺物…	386	第456図 井戸—19 (1/30)……………	424
第416図 土壙—75 (1/20)・出土遺物…	387	第457図 土壙—92 (1/20)・出土遺物…	425
第417図 土壙—76 (1/20)……………	388	第458図 溝—25・26・27・28 (1/30)…	426
第418図 土壙—76出土遺物(1)……………	389	第459図 溝—25・27・28出土遺物……………	427
第419図 土壙—76出土遺物(2)……………	390	第460図 包含層出土遺物(1)……………	427
第420図 土壙—76出土遺物(3)……………	391	第461図 包含層出土遺物(2)……………	428
第421図 土壙—76出土遺物(4)……………	392	第462図 包含層出土遺物(3)……………	428
第422図 土壙—76出土遺物(5)……………	393	第463図 微高地形状と水田の分布図 (1/30000) ……………	441
第423図 土壙—77 (1/30)・出土遺物…	394	第464図 兼基・今谷遺跡全体図 (1/2000)……………	442
第424図 土壙—78 (1/30)・出土遺物…	395	第465図 兼基・今谷遺跡の時期別遺構分 布図……………	444
第425図 土壙—79 (1/30)・出土遺物…	395	第466図 大上田西部建物配置図 (1/400)……………	454
第426図 土壙—80~86出土遺物……………	395	第467図 打製石庖丁形態分類図……………	460
第427図 土壙—87~91出土遺物……………	396	第468図 石鏃形態分類図……………	462
第428図 柱穴出土遺物……………	397	第469図 楔形石器……………	464
第429図 溝—15出土遺物……………	397	第470図 百・中・Ⅱ・新相の土器 文様 (1/2) ……………	476
第430図 溝—15 (1/40)……………	398	第471図 百・中・Ⅱ・新相, 器種分類図 (1/8) ……………	481
第431図 溝—16 (1/30)……………	398	第472図 弥生時代後期の土器対照図……………	493
第432図 溝—17 (1/30)……………	398		
第433図 溝—18 (1/30)……………	398		
第434図 溝—19・20・21 (1/30)……………	398		
第435図 溝—17・18出土遺物……………	399		
第436図 溝—21出土遺物……………	400		
第437図 溝—22出土遺物……………	401		
第438図 土器溜り—1 (1/30)……………	402		
第439図 土器溜り—1 出土遺物(1)……………	403		
第440図 土器溜り—1 出土遺物(2)……………	404		

図 版 目 次

巻頭図版 今谷遺跡弥生時代中期建物群

図版 1 兼基遺跡 D・E・F・G 区画全景
(航空撮影)

図版 2 1. 兼基遺跡全景 (南より)
2. 今谷遺跡全景 (南西より)

図版 3 1. 竪穴式住居—2 (北より)
2. 竪穴式住居—3 (北より)

図版 4 1. 竪穴式住居—2・3 (北より)
2. 土壇—1 (南より)

図版 5 1. 杭列 (東より)
2. 杭列 (西より)

図版 6 1. 竪穴式住居—6 (北西より)
2. 溝—7 (西より)

図版 7 1. 土器溜り—E (南西より)
2. 水田 (北東より)

図版 8 1. 水田・畝畝 (北より)
2. 水田・畝畝下の遺構 (北東より)

図版 9 1. 溝—7・土器溜り—A (東より)
2. 溝—7・8・9 (東より)

図版 10 1. 竪穴式住居—13A・B (北より)
2. 建物—9 (北より)

図版 11 1. 大上田調査区 (西より)
2. 大上田 F・G 調査区 (北より)

図版 12 1. 畝状遺構 (北より)
2. 柵—1 (北より)

図版 13 1. 竪穴式住居—20 (北より)
2. 竪穴式住居—19上層 (西より)

図版 14 1. 溝—41 遺物出土状況 (南西より)
2. 溝—41・土器溜り—4 (西より)

図版 15 1. 土壇—24 (北より)
2. 土壇—12 出土ガラス溶滓
3. 土壇—59 (北東より)
4. 井戸—13 (北より)

5. 溝—12 (西より)

6. 建物—22 (東より)

7. 建物—22 pit 8 出土壺 (南東より)

8. 作業風景 (北西より)

図版 16 1. 弥生時代中期建物群東側 (北北西より)

2. 弥生時代中期建物群西側 (北北東より)

図版 17 百間川弥生時代中期 I

図版 18 百間川弥生時代中期 II (1)

図版 19 百間川弥生時代中期 II (2)

図版 20 百間川弥生時代中期 II (3)

図版 21 百間川弥生時代中期 III (1)

図版 22 百間川弥生時代中期 III (2)

図版 23 百間川弥生時代後期 I

図版 24 百間川弥生時代後期 II (1)

図版 25 百間川弥生時代後期 II (2)

図版 26 百間川弥生時代後期 II (3)

図版 27 百間川弥生時代後期 III (1)

図版 28 百間川弥生時代後期 III (2)

図版 29 百間川弥生時代後期 IV (1)

図版 30 百間川弥生時代後期 IV (2)

図版 31 百間川古墳時代 III

図版 32 大上田調査区出土石器

図版 33 東苗代調査区出土石器 (1)

図版 34 東苗代調査区出土石器 (2)

図版 35 大地調査区出土石器 (1)

図版 36 大地調査区出土石器 (2)

図版 37 大地調査区出土石器 (3)

図版 38 百・中・II・新相の土器文様

図版 39 大地調査区出土ガラス溶滓

第1章 地理的・歴史的環境

百間川は江戸時代（寛文年間）に、岡山藩が土木巧者津田永忠の起用により、岡山下城を旭川の洪水から守るため築造された一大人工河川である。岡山市竹田から分かれた旭川放水路（百間川）は、旭川左岸を南東に流走して原尾島付近で東に向きを変え、操山山塊の北側を東進し、米田で再び南に流路を変え、沖元で児島湾に注ぐ。その幅 200 ～ 300 m、流程約 13 km におよぶものである。

百間川が位置する旭川の左岸平野（旭東平野）は、北に竜の口山系、東に山王山、南に操山山塊をひかえた肥沃な水田が展開する一大穀倉地であるが、近年市街化の波に押され、その景観は急激に変貌しつつある。



第1図 百間川位置図

岡山平野は中国山地に発源する高梁川・旭川・吉井川の三河川及び吉備高原から流れ出る笹ヶ瀬川・足守川・砂川などの沖積作用によって形成され、歴史時代に入ってから干拓事業によって拡大された平野である。この旭川も現在は一主流にまとめられているが、古くは数条に分かれており、また幾筋もの支流が平野一帯に流走していたらしく、それら旧河道の兩岸にはいくつもの自然堤防が形成されている。

岡山市付近で確認されている遺物のうち、最も古いものとしては、旭東丘陵第1・2地点出土の石英脈岩・珪岩製の石器があげられ周口店第一地点などの技法の共通点が認められてい

る。（註1）後期旧石器時代のものでは、操山旗振台北部遺跡（註2）出土のナイフ形石器・常住寺東南遺跡（註3）出土の石器があげられる。

縄文時代の遺跡は、丘陵に散布する後期の朝寝鼻貝塚（註4）と他に数カ所石器散分地が存在しているが、新たに百間川改修工事に伴い、沢田遺跡（註5）から縄文時代中期の土器片2片、及び同後期の土器片10数片を採集した。この中期の土器片は磨滅が激しく、上流域あるいは丘陵部からの流入の可能性も考えられるが、後期の土器片においては残りもよく、また昭和34年の国道2号線百間川橋建設の際にも出土していることなどから、岡山平野においてはこの



1. 百間川原尾島遺跡 2. 百間川沢田遺跡 ③. 百間川兼基遺跡 ④. 百間川今谷遺跡 5. 百間川当麻遺跡
6. 兼基遺跡 7. 雄町遺跡 8. 乙多見遺跡 9. 赤田遺跡 10. 一本松古墳 11. 神宮寺山古墳 12. 唐人塚古墳 13. 備前草塚古墳 14. 山王山古墳 15. 沢田大塚古墳 16. 金蔵山古墳 17. 旗振台古墳 18. 操山103号墳 19. 操山106号墳 20. 浅茶臼山古墳 21. 網浜茶臼山古墳 22. 操山109号墳 23. 網浜廃寺
24. 幡多廃寺 25. 成光廃寺 26. 實田廃寺 27. 井寺廃寺 28. 備前国府

第2図 百間川周辺遺跡分布図 (1/50000)

時期から沖積地における集落の開始が考えられる。

縄文時代晩期の遺跡は、いずれも弥生時代につながる複合遺跡である。調査で明らかにされた例としては、津島遺跡（註6）、百間川原尾島遺跡、同沢田遺跡、雄町遺跡（註7）などがある。百間川原尾島遺跡においては、遺構の性格を明らかに出来なかったものの縄文時代晩期の柱穴状土壌を検出している。津島遺跡は縄文時代晩期～弥生時代にかけての遺物及び弥生時代の水田・住居・高床倉庫・貯蔵穴などの遺構が検出されている。雄町遺跡は縄文時代晩期～平安時代にかけての遺物及び、旧河道・溝・井堰・住居・土墳墓などの遺構が検出されており、特に、弥生時代中期の水利施設が明らかにされるとともに居住区と墓域が明確に区別されていることが判明した。

弥生時代の中期の遺跡は、前述の遺跡の他に南方遺跡（註8）、赤田遺跡（註9）乙多見遺跡（註10）などがある。南方遺跡からは人骨及び土墳墓、灰穴などが検出されており、赤田遺跡からは、高杯形土器で蓋をした甕棺墓が出土している。百間川兼基遺跡・今谷遺跡は弥生時代中期・後期を中心として、古墳時代に及ぶ複合遺跡であるが、特に弥生時代中期の土器片とともにガラス溶滓・焼土・炭・砂が多量に出土しており、また1間×2間～5間までの建物を28棟検出している。なお当遺跡の南側に位置する操山の谷部（向山口・鳥坂山）からは3個の銅鐸が出土している（註11）。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡は、急激にその数をふやし、当平野に形成された微高地の大半は集落が営まれた可能性が強い。一方、百間川沢田遺跡では、弥生時代後期終末までに洪水によって埋没した水田が明らかになった。これによると、微高地縁辺部及び旧河道上に水田が形成されており、前者は10㎡～40㎡前後の小規模な田面積であるのに対し、後者は200㎡前後とその規模も大きい。また最近の調査では後期末の水田は、後期中葉の居住地・水田を掘削拡張して造田されたことが判明し、さらに一部下層においても弥生時代中期中葉の水田が存在することが確認されている。

古墳時代の遺跡は、百間川原尾島遺跡、同兼基遺跡などがある。兼基遺跡からは、堅穴住居群とともに、3間×3間を2棟含む倉庫群が検出されている。一方古墳についていえば、平野の北にある竜の口山系には13面の舶載鏡を出土した備前車塚古墳（註12）が、南にあたる操山山系には網浜茶臼山古墳、湊茶臼山古墳、金蔵山古墳（註13）、東にあたる山王山には、山王山古墳群がある。これらの丘陵上には、これ以降後期古墳も含め200基をはるかに越える古墳が確認されている。

古墳時代以降の調査にかかる遺跡としては賞田廃寺（註14）幡多廃寺（註15）などの寺院址がある。現在の国府市場を中心に備前国府域が、推定されている。（註16）他に百間川当麻遺跡の調査では多量の瓦器が出土するとともに、古代の倉庫群及び中世の建物群を検出してい

る。

註

- 註1 高橋護「旭東丘陵出土の珪岩石器」『蒜山研究報告第4・5』岡山理科大学 1980.3
- 註2 鎌木義昌「第1編原始時代」『岡山市史・古代編』岡山市役所 1962
- 註3 『宇野地区の歴史』宇野学区史刊行会 1981.12.15
- 註4 註2に同じ。
- 註5 岡山県教育委員会の昭和53年度の調査において出土している。
- 註6 『岡山県津島遺跡調査概報』岡山県教育委員会 1970
- 註7 「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1 岡山県教育委員会 1972
- 註8 『南方遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会 1971
- 註9 『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会 1976
- 註10 正岡睦夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴う出土土器」『岡山県埋蔵文化財報告3』1973
- 註11 鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」『日本農耕文化の生成』1961
- 註12 註2に同じ。
- 註13 西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館 1959
- 註14 『賞田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会 1971
- 註15 註7に同じ。
- 註16 高橋護「古地形からみた備前国府」『岡山県埋蔵文化財報告1』1971

本章は、江見正己他「旭川放水(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39 岡山県教育委員会1980.11の第1章を若干加筆、修正したものである。

第2章 調査の契機及び経過

第1次確認調査に至る経過概要

百間川改修工事計画は、昭和初年に構想が出来たといわれている。しかし、第2次大戦で計画が中断され、終戦前後の食糧難で百間川の河床を利用した田畑に変わった。建設省は同43年幅180mの放水路を改修し、旭川の増水時に毎秒1,200トンを放流するという計画をたて、地元耕作者と土地買収交渉に入ったが難航が続き、最終的には49年に決着をみた。こうした経緯をへて建設省は昭和50年10月本格的工事の姿勢を示すべく、岡山市原尾島国道2号線周辺に百間川改修工事の立看板を上げるとともに河川敷に盛土にする工事用道路を施工したのである。

ところで、この百間川河床下には、「百間川遺跡」が存在することは周知され、岡山県遺跡地図には国道2号線をはさみA地点、B地点と2か所が記載されている。当遺跡は、旭川対岸に所在する津島遺跡と常に対比され、その重要性を問われながらも、範囲、性格等不明確な点が多い。岡山県教育委員会文化課では、昭和43年百間川改修工事計画を知り、建設省岡山工事事務所に対しその説明と次の要望をしている。その内容は、改修工事計画予定地には文化財保護法に基づいて、周知されている「百間川遺跡」が存在すること。事業者である建設省は、文化財保護法に基づく措置、特に昭和32年6月11日閣議了解になった「文化財保護に関する関係官庁間の連絡強化について」の趣旨にそって、事前に文化財の保護に遺憾のないように計らうこと。以上大略二点である。これに対して建設省は、当時河川内の土地買収交渉及び工事施工の調査計画を進めている段階であるとの回答であった。

一方、岡山県教育委員会では、この時点で新幹線、中国縦貫道建設に伴う発掘調査、報告書作成の対応に追われ、特に中国縦貫道の発掘調査については、8年間にわたる発掘調査と14巻の膨大な報告書作成のためピーク時には調査員18名を配置し、その作業に専念している状況にあった。

前述の昭和50年10月の百間川改修工事用道路着手時には、中国縦貫道発掘調査事業の現地調査が翌51年10月に終了する見通しにあり、百間川遺跡への対応が順次出来る体制にあった。

岡山県教育委員会は、このような百間川改修事業の状況をふまえ、直ちに協議を申し入れ、実情の聴取を行うとともに、改修事業にともなう百間川遺跡の取扱いについて、協議した結果、基本的には埋蔵文化財包蔵地の範囲が確定したならば、当該地は発掘調査が終了した後に改修工事を施工することに合意した。

百間川兼基・今谷遺跡

しかしながら、今後遺跡範囲の確認、遺跡の現状保存、発掘調査計画等、種々細部にわたる協議を必要とするため、建設省に対して文化財保護法第57条の3に先だつ事前協議の文書（別添）の提出を求めた。一方岡山県教育委員会は、この協議の基礎資料となる百間川遺跡（関連遺跡を含む）の範囲確認調査計画概要を建設省に提出した。其後2～3回の協議のうえ、昭和51年9月7日付 建中河計 第187号をもって中国地方建設局長より、確認調査の依頼文書（別添）を受け、同年11月1日から確認調査を実施するに至った。

資料1

建中岡河第329号

昭和51年4月10日

岡山県教育委員会教育長殿

建設省中国地方建設局

岡山河川工事事務所長

埋蔵文化財に関する事前協議について

文化財保護法第57条の3に先立ち、下記のとおり事前協議いたしますのでよろしくお取計らいください。

記

1. 事業計画予定地の所在地及び地番

岡山市今在家、中島、竹田、東川原、浜、撮、原尾島、藤原、沢田、兼基、今谷、神下、米田、長利、海吉、沖元、中川町、益野町、光津、政津、升田地内

2. 事業計画予定地の面積

300 ha

3. 事業計画予定地の土地所有者の氏名

建設省

4. 事業計画予定地の用地買収の状況、計画、予定等

予定地の用地買収はほぼ完了。

5. 事業計画予定地に係わる遺跡の種類、員数及び名称並びに現状

埋蔵文化財包蔵地として弥生時代他。

6. 事業計画の名称、目的及び内容

イ. 名称 旭川放水路（百間川）

ロ. 目的及び内容

旭川の派川百間川を改修し、旭川放水路としての機能を確保し、洪水の疎通を

図り岡山市の災害を防除する。

7. 土木工事の計画及び方法の概要

河川のほぼ中央部に現地盤より約3mの掘削を行い低水路を施行する。その掘削土を利用し現堤の前復付で計画堤防の前面計画高水位まで及び低水路には護岸を施行する。

また、現在横断する県道、市道は抜粋橋とし、水路網については統廃合し、堤脚添いに水路を施行するとともに2、3のサイフォンを設け用水路を確保する。

なお、排水については、要所に樋管（門）を施行するものである。

8. 事業主体となるものの名称及び代表者の氏名所在地

岡山市鹿町町2丁目4番36号

建設省中国地方建設局岡山河川工事事務所

9. 土木工事予定期間

昭和51年4月～昭和62年3月

資料2

岡山河川工事事務所長経由

建事河計第187号

昭和51年9月1日

岡山県教育委員会

教 育 長 殿

中国地方建設局長

旭川放水路埋蔵文化財の予備調査について（依頼）

旭川放水路改修事業に係わる百間川遺跡については、文化財保護法第57条の3に基づいて協議させていただいておりますが、百間川遺跡およびその周辺地域の遺跡確認調査を貴所で昭和51年度に実施されるようお願いいたします。

なお、調査に必要な経費につきましては、当局で負担いたします。また、調査に必要な手続きについては、岡山河川工事事務所長とされるよう申し添えます。

第1次確認調査の成果

第1次調査（註17）は、中央低水路部分の遺跡の確認及び古地形の復原と新田サイフォン部分の一部発掘調査であった。調査期間は、昭和51年11月1日～昭和52年3月31日まで実施した。

百間川兼基・今谷遺跡

遺跡の確認調査は2m四方のグリッドを基本とし、建設省の設定した低水路中央杭を中心に115か所のボーリングを行った。ボーリングの範囲は旭川本流から百間川支流への分岐点である岡山市竹田から、古代の海岸線付近と推定される岡山市海吉までの約7.5kmの間である。調査の結果、岡山市原尾島（第1微高地）、同沢田（第2微高地）、同兼基（第3微高地）の3か所に大規模な微高地が確認されるとともに、岡山市米田付近は古代においては海水の侵入する湾であった可能性が強いこと等が判明した。また、上記の微高地には多時期に渡る遺構、遺物等が重複して存在することが明らかになると共に、これまで周知されていた百間川遺跡A地点（註18）は第1微高地の、百間川遺跡B地点（註19）は第2微高地の範囲に入るものと判明した。なお、第1、第2微高地間においては低湿地を呈しており、十分な土層観察が必要と考えられた。

ボーリング調査に引き続き、新田サイフォン部分（第1微高地）の発掘調査に入った。調査範囲は幅7m、長さ約200mで、調査上4区に地区割をし、南端にあたる1区のみを完掘し、3区の上層を一部調査した。調査の結果、近世の溝と、古墳時代～中世に至る遺物が出土している。

調査の構成

発掘調査は建設省中国地方建設局と委託契約を締結した県教育委員会があたり、調査にあたる専門的指導及び助言を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた下記の方々に「旭川放水路改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」（以下、対策委員会）の委員を委嘱した。

旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会委員（あいうえお順）

福南中学校	池葉須藤樹	岡山市立岡輝中学校	角田 茂
岡山大学	小野 昭	岡山市教育委員会	出宮 徳尚
岡山理科大学	鎌木 義昌	岡山大学	春成 秀爾
岡山大学	近藤 義郎	岡山女子看護専門学校	水内 昌康

昭和53年度

岡山県教育委員会

文化課長	飛田 真澄
課長補佐	吉光 一修
主幹	小川 佳彦
文化財主幹	難波 進
主事	小倉 昇
文化財二係長	光吉 勝彦

昭和54年度

岡山県教育委員会

文化課長	近藤 信司
課長補佐	吉光 一修
主幹	光吉 勝彦
文化財主幹	難波 進
文化財二係長	河本 清
主任	林 正人

第2章 調査の契機及び経過

文化財保護主査	河本 清	文化財保護主査	正岡 睦夫（調査担当）
同	正岡 睦夫（調査担当）	文化財保護主事	下澤 公明（同）
文化財保護主事	下澤 公明（同）	同	渡辺 光（同）
同	井上 弘（同）	同	井上 弘（同）
同	松本 和男（同）	同	岡田 博（同）
同	岡田 博（同）	同	高畑 知功（同）
同	高畑 知功（同）	同	二宮 治夫（同）
同	二宮 治夫（同）	同	江見 正己（同）
同	浅倉 秀昭（同）	主事	藤井 守雄（事務担当）
同	福田 正継（同）	文化財保護主事	中野 雅美（調査担当）
同	江見 正己（同）	主事	内藤 善史（同）
主事	藤井 守雄（事務担当）	同	平井 泰男（同）
同	中野 雅美（調査担当）	同	島崎 東（同）
同	内藤 善史（同）	同	光永 真一（同）
調査補助員	平井 泰男	調査補助員	平井 典子
	島崎 東		
	堀川 純		
	山本 悦世		

昭和55年度

岡山県教育委員会

文化課長	近藤 信司
課長補佐	吉光 一修
文化財主幹	難波 進
文化財二係長	河本 清
主任	田中 建治
文化財保護主査	正岡 睦夫（調査担当）
同	井上 弘（同）
文化財保護主事	渡辺 光（同）
同	山磨 康平（同）
同	岡田 博（同）
同	高畑 知功（同）
同	二宮 治夫（同）

昭和56年度

岡山県教育委員会

文化課長	早田 憲治
課長代理	吉光 一修
文化財主幹	高原 健郎
埋蔵文化財係長	河本 清
主任	田中 建治
文化財保護主査	正岡 睦夫（調査担当）
文化財保護主事	渡辺 光（同）
同	山磨 康平（同）
同	岡田 博（同）
同	二宮 治夫（同）
同	浅倉 秀昭（同）
同	岡本 寛久（同）

百間川兼基・今谷遺跡

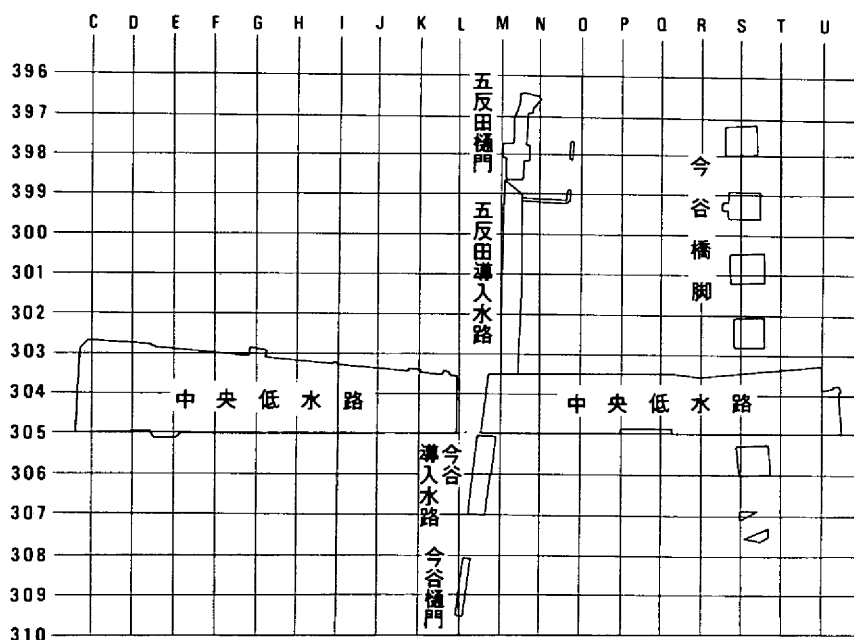
文化財保護主事	岡本 寛久（調査担当）	主事	金尾 一志（事務担当）
主事	金尾 一志（事務担当）	文化財保護主事	中野 雅美（調査担当）
文化財保護主事	中野 雅美（調査担当）	同	内藤 善史（ 同 ）
同	内藤 善史（ 同 ）	主事	平井 泰男（ 同 ）
主事	平井 泰男（ 同 ）	同	島崎 東（ 同 ）
同	島崎 東（ 同 ）	同	光永 真一（ 同 ）
同	光永 真一（ 同 ）	調査補助員	平井 典子
調査補助員	平井 典子		

最後に4年間の発掘調査にあたって、厳寒、猛暑の中で我々と労苦を伴にさせていただいた現場作業員の皆様に心より感謝いたします。

本格調査の経過

今回報告を行う兼基・今谷遺跡（第3微高地）の発掘調査は昭和53年7月に開始され、昭和56年7月末に終了したものである。その間、2人1組の14パーティが編成され、合計20か所14,470㎡を約54ヶ月をもって実施した（表-1）。

調査は百間川堤防上に打ち込まれている建設省基準杭9/000を利用し、兩岸杭を結んだ線を南北基準線とし、東西線の301～399、南北線のC～Uにより20×20mの最小基準区画を設定した（第3図）。海拔高は兼基加圧ポンプ場敷地内に設置された建設省のB・M-9（H=3.8055



第3図 グリッド設定および改修工事名称 (1/4000)

m)を基準高とした。

実動は表一1に提示したように水路部分では中央低水路・導入水路、構造物では橋脚・樋門が対象となり、東西に約370m、南北に260m、深さ約1mの「十字」形に発掘調査を実施した。しかし、紆余曲折的な面が表出し、たとえば中央低水路では、同一水路内を継続して調査が可能ではなく、工事工程、消化面積等の関係から年度別継続的に実施せざるを得ない状況を生み出していた。次に年度別の調査事項および対策委員会によって協議された問題点についてのとてみる。

53年度（1978年）

7月より中央低水路の発掘調査が開始され、5班が投入される。市道321号線を境に上流側で2か所、下流側で5か所の記査が実施され、古墳時代の集落址の下層より弥生時代中期中葉の集落址を確認した。掘立柱建物28棟、住居4軒、土壇約60基以上を検出した。また、土壇中には多量の土器、焼土・炭・砂とともに深緑色を呈するガラス溶滓が出土したことにより、マスコミ関係に「ガラスの製造地？」として大きくとり上げられる。いわゆる「菰池式」の時期のものである。当然保存されるべき貴重な遺構であるにもかかわらず、河川改修という人命・財産に直接的な関わりを有する事業の前に消滅をやむなくしている。また、関連する遺構は東側に150m延長して存在していることが判明したが、すでに低水路工事が完了している。第1

表一1 調査工程表

年度	53年度												54年度												55年度												56年度							
地区	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8						
S-U 低水路													(正岡・内藤)																															
Q・R 低水路													(井上・浅倉)																															
P 低水路													(下澤・江見)																															
Q 低水路													(高畑・浅倉)																															
J・K 低水路													(高畑・浅倉)																															
L-Q 低水路													(井上・福田)																															
I 低水路													(正岡・内藤)																															
R・S 橋梁													(下澤・内藤)																															
R・S 橋梁													(江見・光永)																															
G・H 低水路													(高畑・渡辺)																															
E・F 低水路													(高畑・渡辺)																															
M 五反田樋門																									(下澤・内藤)																			
Q 低水路																									(中野・平井孝)																			
B-D 低水路																									(高畑・島崎) (山崎・内藤)												(高畑・島崎)							
L 今谷樋門																																					(高畑・島崎)							
M 導入水路																																					(浅倉内藤) (中野渡辺)							
L 導入水路																																					(山崎 内藤)							

次確認調査の重要性と多くの分野からの検討の必要性を痛感させられる。

54年度（1979年）

4月より橋脚、低水路の発掘調査が続行され、4班が投入される。市道321号線を境に上流側で2か所、下流側で今谷橋脚部分にあたる6か所、樋門1か所が実施され、前年度の弥生時代中期建物群がさらに北側に広がる事実、微高地形状に沿って走る数本の弥生時代中・後期の溝、7棟からなる古墳時代前半の掘立柱建物群、遺物では曲線文の描かれた弥生時代後期の高杯・器台が発見された。また、この年は第3微高地西端下がり部分に弥生時代後期末水田の存在することが確認された。2地区の弥生時代中期・古墳時代前期の建物群の航空写真撮影を実施した。調査上での問題点は、用地内に半分位検出した住居・土壌等の遺構に対する取り扱いについて協議されたが、種々の事例を考慮して用地外残部についても調査することに決定した。

55年度（1980年）

4月より低水路、樋門の発掘調査が続行され、4班が投入される。短期間で小区画を中心に市道321号線より上流側で4か所、下流側で2か所が実施され、上流側では弥生時代後期末の灌漑用水路と水田が検出された。上層では中世の溝内より雨乞いの儀礼を想定させる牛の頭骨が出土している。下流側ではガラス溶滓、掘立柱建物群の西端部を確認できたことは重要であった。南端今谷樋門部では弥生時代後期末水田が存在していないことが判明し、後世の洪水による破壊が考えられる。

56年度（1981年）

4月より導入水路の発掘調査が実施され、3班が投入される。市道321号線下流側2ヶ所が対象となり5か年の最終発掘調査地区となる。現在使用している地下埋設物が現状での調査ゆえ、困難をきたした。低水路北側では従来あまり確認できなかった弥生時代中期末の遺構が多く発見され、微高地利用に関連する資料を提供した。

報告書作成について

『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査』Ⅲは、昭和56年度1か年をその作成作業にあて、56年10月から57年3月迄は、これに専務となった。しかし、4か年が費やされ、調査員の配置転換等の事情も加わって、昼間の発掘調査と夜間の報告書作成作業を同時に進めざるを得ない状況は継続している。

また、前述のように4年間に14パーティ、合計20か所14,470㎡の内容に対して、1冊の報告書では収めきれないという問題に直面した。これについては、調査員間の協議により種々の調整を試みたが、やはり詰め込みの体裁に終始してしまった。参考までに提示しておく、出土土器は54.5cm×15cmのプラスチックコンテナに約700箱（水洗い終了時点）が対象となった。

時期区分について

近年、岡山県南部においては、考古資料が急増するなかで、弥生時代～古墳時代前期にかけての編年試案（註20）がいくつか提示されており、その時期区分も年々細くなり、かつ修正されつつある。

一方、百間川河川敷内においては縄文時代中期～近世に至る遺物が出土しており、特に弥生時代～古墳時代前期にかけての遺物は圧倒的な量にのぼる。このため当遺跡群においてもこれら各地区出土の遺物を検討した上で、時期区分し、前記したものとの比較検討する必要がある。しかしながら調査は現在も進行中であり、また遺物の微細な点においてこれまで出されている各遺跡の編年案はそれぞれ若干の相違がみられることから、現段階では弥生時代～古墳時代前期にかけては百間川の遺跡に最も近接する雄町遺跡における編年案及び、備中ではあるが上東遺跡の編年案、さらに雄町遺跡の並行関係を参考にしながら大きく区分しておいた。なお、現段階でもより細分し得る遺構・遺物があり、これは文中の中では古相・新相として標記しておく。以下、表について若干の説明を加える。

弥生時代前期をⅠ～Ⅲ、同中期をⅠ～Ⅲ、同後期をⅠ～Ⅳ、古墳時代前期をⅠ～Ⅲに大別し、その頭に百間川を付した。なお文中では百間川前期Ⅰは百・前・Ⅰ、百間川古墳時代Ⅱは百・古・Ⅱのように表記する。

百・前・Ⅰは当遺跡では現在確認されていないが、無軸木葉文を、百・前・Ⅱは壺形土器における削り出し突帯および、甕形土器の篋描沈線を、百・前・Ⅲは甕形土器の篋描沈線の多条化を目安とする。百・中・Ⅰは甕形土器の櫛描沈線を、百・中・Ⅱは従来菰池式と呼ばれていたものを、百・中・Ⅲは凹線文の盛行を目安とする。百・後・Ⅰは雄町7, 8類及び上東鬼川市Ⅰを、百・後・Ⅱは雄町9, 10類及び上東・鬼川市Ⅱを目安とする。百・後・Ⅲは長頸壺の最終段階と考え、百・後・Ⅳは甕形土器の擬凹線の出現を目安とする。百・古・Ⅰは甕形土器の櫛描平行沈線文の出現を目安とし、百・古・Ⅱは甕形土器の櫛描平行沈線文の退化及び壺形・甕形土器の丸底化を目安とし、百・古・Ⅲは川入・大溝上層出土の土器を目安にし、また当地方における須恵器出現以前の時期を呼ぶ。

なお、この時期区分は当遺跡群調査終了の時点で、弥生時代以外の時代も含め、改めて組み直し、それぞれの時代区分及び細分を行う予定である。（江見）

註

註17 葛原克人・松本和男・内藤善史『百間川遺跡第1次調査概報』岡山県教育委員会 1976

註18 鎌木義昌「第1編原始時代」『岡山市史・古代編』岡山市役所 1962

註19 国道2号線の橋脚工事によって発見された。

表一2 編 年 対 比 表

遺跡 時代			百 間 川	雄 町	上 東・川 入
弥 生 時 代	前 期	津 島	百 間 川 前 期 I		
		門 田	百 間 川 前 期 II	雄 町 1	
			百 間 川 前 期 III	雄 町 2 船 山 2	
	中 期	南 方	百 間 川 中 期 I	高 田 雄 町 3	
		菰 池	百 間 川 中 期 II	船 山 5 菰 池 雄 町 4	
				前 山 東 雄 町 5	
		前 山 II	百 間 川 中 期 III	雄 町 6	上 東・鬼川市 0
		仁 伍		雄 町 7	上 東・鬼川市 I
	後 期	上 東	百 間 川 後 期 I	雄 町 8	上 東・鬼川市 II
			百 間 川 後 期 II	雄 町 9 雄 町 10	上 東・鬼川市 III
		グランド上層	百 間 川 後 期 III	+	上 東・鬼川市 III
		酒 津	百 間 川 後 期 IV	雄 町 11	才 の 町 I 才 の 町 II
				雄 町 12	下 田 所
	古 墳 時 代	王 泊 六 層	百間川古墳時代 I	雄 町 13	亀 川 上 層
			百間川古墳時代 II	雄 町 14	+
			百間川古墳時代 III	雄 町 15	川 入・大 溝 上 層

註20 正岡睦夫他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1 岡山県教育委員会 1972

伊藤晃・柳瀬昭彦「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・第2集』岡山県教育委員会 1974

間壁忠彦他「王墓山遺跡群」『倉敷考古館研究集報第10号』倉敷考古館 1974

出宮徳尚他「幡多庵寺発掘調査報告」岡山市教育委員会 1975

柳瀬昭彦他「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977

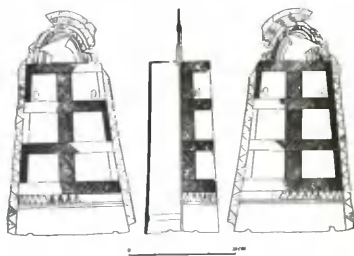
藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌第64巻第4号』1979

高橋護「弥生土器」『月刊考古学ジャーナル3』1980

第3章 百間川兼基遺跡

百間川兼基遺跡は岡山県岡山市兼基に所在する。現在東流する旭川放水路（百間川）の河床（海拔約 2.7 m）および北西に延びる水田、宅地を含み延長約 1 km、幅 200～300 m を推定することができ関部落付近まで継続していると考えられる。

第1次調査により確認された第3微高地（第5図）がその一部にあたり、北側を国道2号線および旧山陽道が東西に走り、南側には操山山塊が約 100 m まで間を詰める（図版2）。

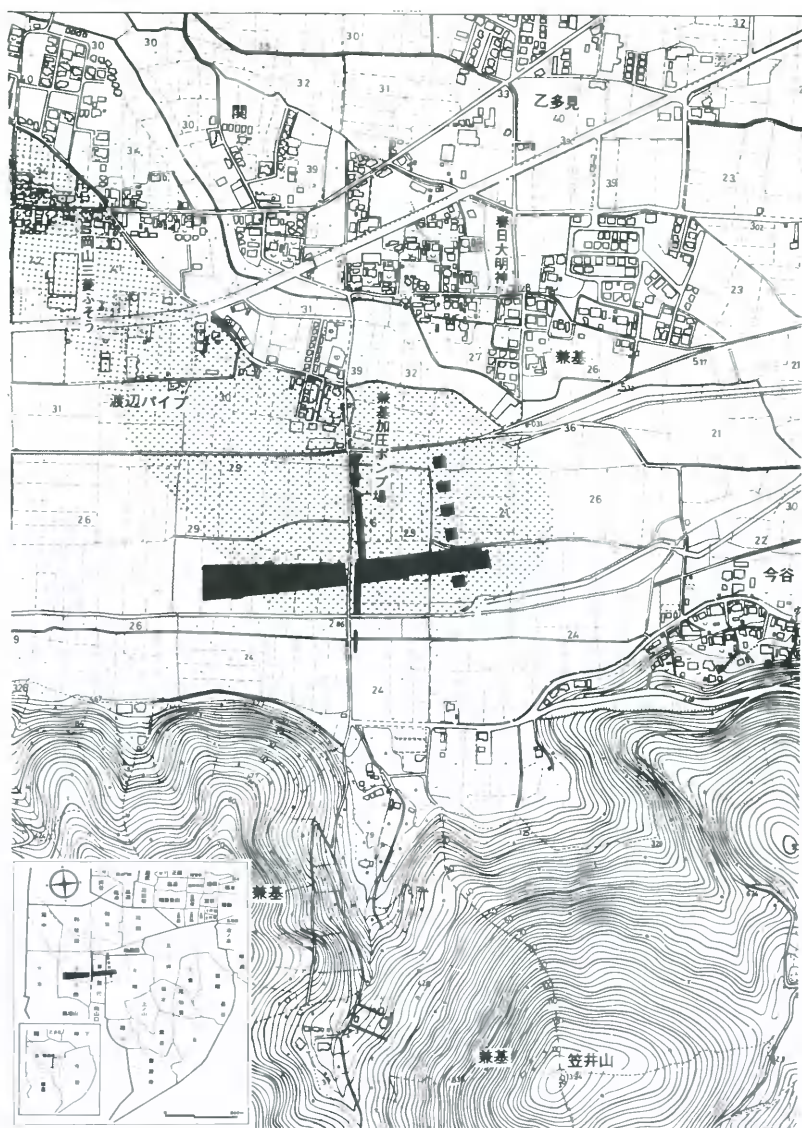


第4図 兼基遺跡出土第3号銅鐸
（『日本農耕文化の生成』より縮尺転載）

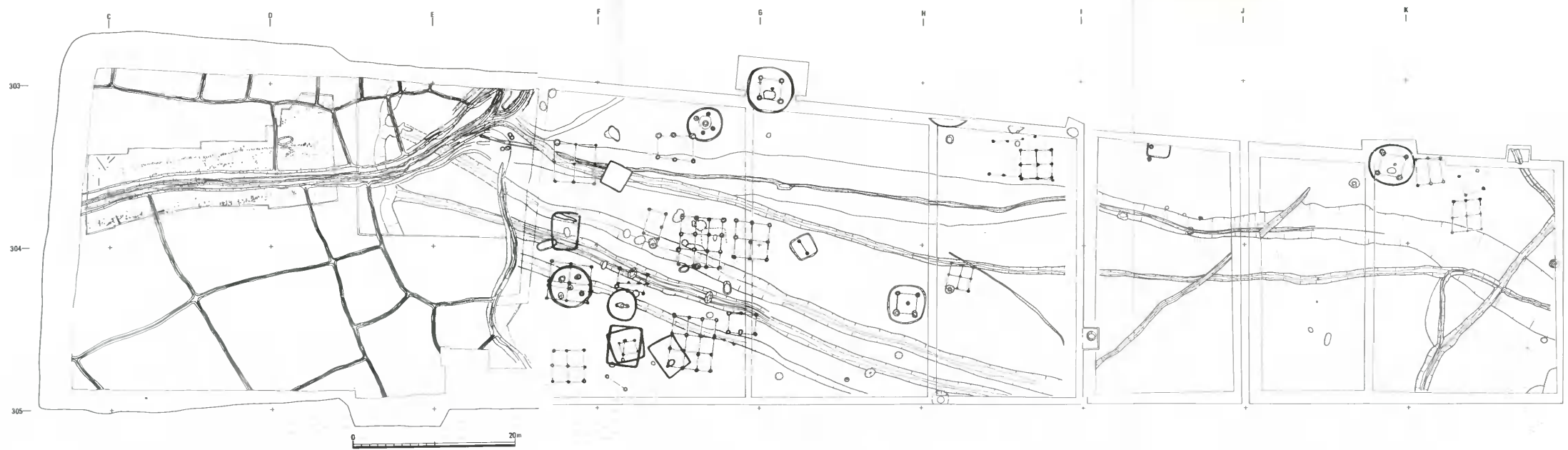
遺跡に北面する操山山塊の向山口、鳥坂山では明治末頃、昭和7・8年頃、昭和25年に計3個の6区画袈裟櫛文銅鐸（註21）が発見されている。そして、県立博物館藏品として現存している3号銅鐸（第4図）は「上道郡幡多村兼基出土銅鐸」として著名である。

兼基・今谷遺跡は銅鐸出土地より約 750 m 北方に位置し、河川敷内に存在する 650×400 m の微高地である。弥生時代中期前半（百・

中・Ⅰ）より微高地西端に住居5軒、土壇24基の広がりが見られ、それらに切られた溝3本、および前期土器片数点が存在することなどから掘開地区以外に前期居住域の存在する可能性は充分考えられる。弥生時代中期中葉（百・中・Ⅱ）は五反田樋門の一部に土壇が確認されたにとどまり、隣接する今谷遺跡の建物群、ガラス溶滓出土土壇等の密集度とは対称的な在り方を示す。次いで五反田樋門に接続する導入水路部分に弥生時代中期後半（百・中・Ⅲ）の溝、柱穴等の遺構が集中して存在する。弥生時代後期（百・後・Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ）は全域に遺構が限なく分布し、溝、住居、建物が有機的関連をもって存在し、なかでも百・後・Ⅱの時期に最も広がり認められる。西端低位部においては洪水砂により埋没した弥生時代後期末（百・後・Ⅳ）～古墳時代前半（百・古・Ⅰ）の水田が検出され、低水路工事は完了しているがさらに西に延びていたと考えられる。古墳時代前半（百・古・Ⅱ）は希薄であり、次にくる百・古・Ⅲの建物群・住居・井戸が微高地西端を中心に全域に広がっており、他に古式の須恵器を持つ土壇、溝が検出されている。中世までの間は遺構が認められず、斜面部に奈良・平安時代の須恵器、土師器の小破片が検出されたにとどまった。中世では性格不明の畝状遺構が市道321号線を境に西側全域をほぼ真北方向に走っており、大規模な事業が実施されたことをうかがわせる。



第5図 兼基・今谷遺跡周辺地形図 ($\frac{1}{7500}$)



第6図 大上田地区遺構全体図 (1/500)

第1節 ^{おおかみ だ}大上田調査区

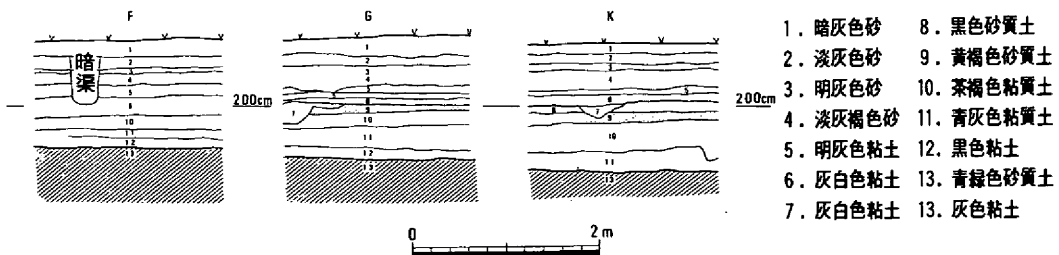
1 大上田調査区の概要（第6図）

改修幅に沿い延長 190 m, 東端幅 27m より除々に広がり西端幅 45m, 約 7050 m^2 の発掘調査を実施した。調査区は第3微高地の西南端に近い部分に位置し, 居住地区と生産地区（水田）が確認された。

基本層序を述べると, 現地表面は田畑に利用されており, 海拔 270 cm をはかる。現存条里はこの面に存在するものである。1～4層は砂を中心に構成されており, 4層では鉄, マンガンの顕著な互層を看取できた, 層中には備前焼小皿, 京焼, 伊万里焼の小片が採取され, 近世・近代の田畑としての利用が考えられる。5, 6層は粘土を中心に構成されており, 5層は若干青く, 6層は灰白色を呈する。6層は古代, 中世の須恵器片, 土師器片が出土している。7層は6層同様の粘土で, 本地区はほぼ全域に確認できた素掘りの溝内に堆積したものであり, 中世に機能していたと考えられる。8層はC～J区画では確認されず, 東端K区画付近より東苗代地区に向かって下降しており, 百・古・Ⅲの時期の土師器片が出土している。9層是水田の埋没砂と同質であり, 多くの土器を検出したことにより, 水田埋没期が百・後・Ⅳであることが判明し, 8層同様に西より東へ傾斜している。10層はマンガン粒が多い粘質土であり, 弥生時代中期土器片を含む。11層は弥生時代前期, 中期包含層であり, グライ化が著しく認められる。12層は粘質が強く, 遺物は確認していないが, 東苗代地区のO, P, Q区画では11層間に弥生時代前期土器片を数点検出した。13層を基盤と呼称し, 粘質と砂質の両方が存在する。第7図でもあきらかなよう大上田地区は東より西に, 北より南に緩やかに傾きを持っている。

遺構総数 110 を数える。

（高畑 知功）



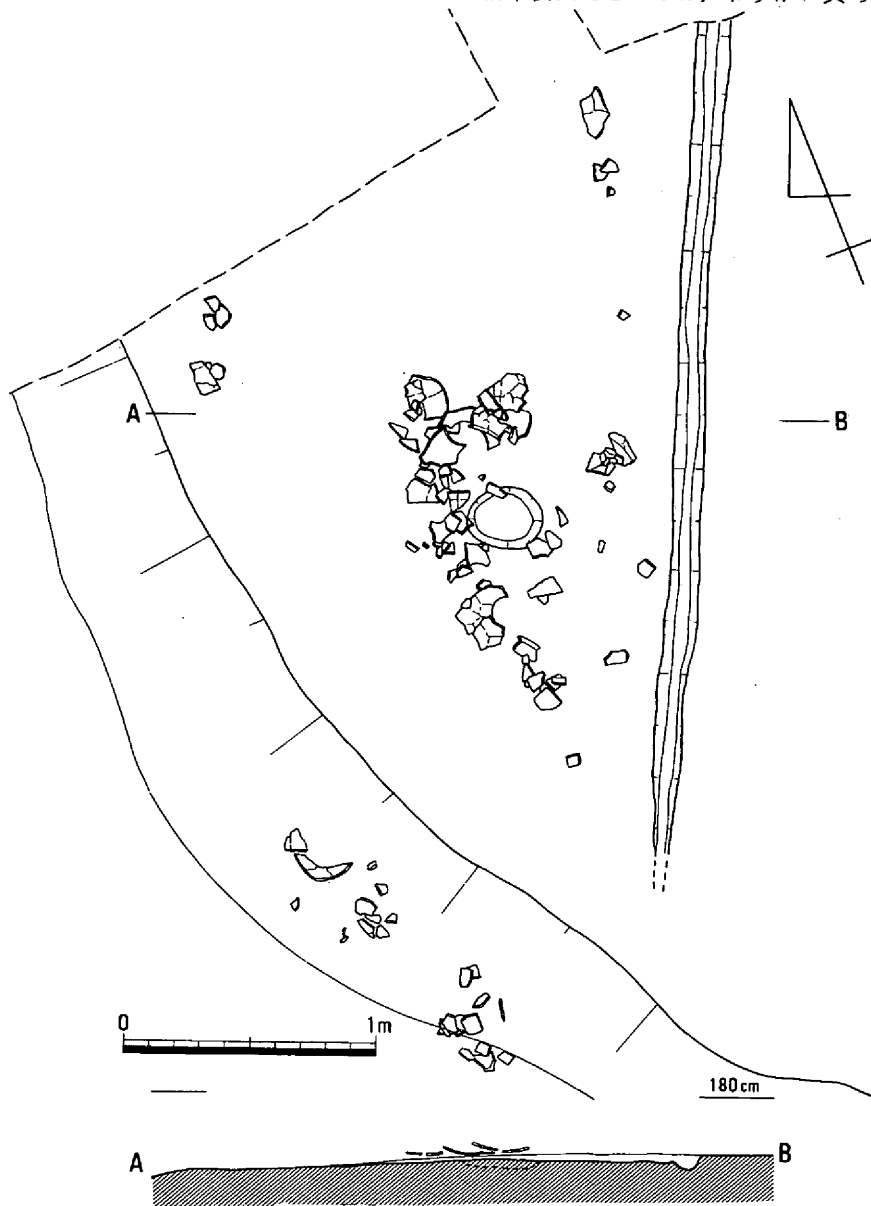
第7図 大上田地区土層断面

2 弥生時代中期の遺構・遺物

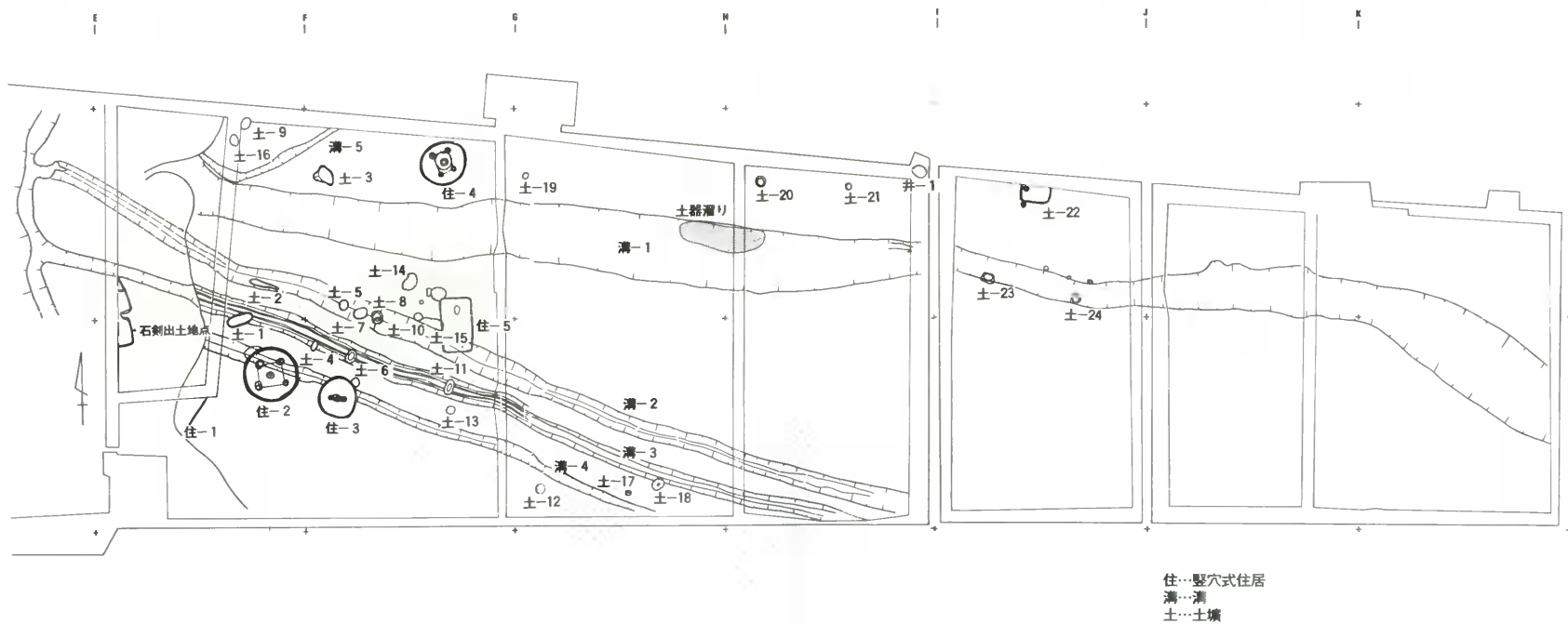
(1) 竪穴式住居

竪穴式住居—1 (第8・10図)

微高地西端部に検出された竪穴式住居である。ところが、この住居は、弥生時代後期後半頃の大規模な水田開発に伴う微高地縁辺部の掘削により、その大部分がカットされたものである。そのため、遺構の残りは極めて悪く、調査の結果検出できたのは、わずかに真っすぐに伸



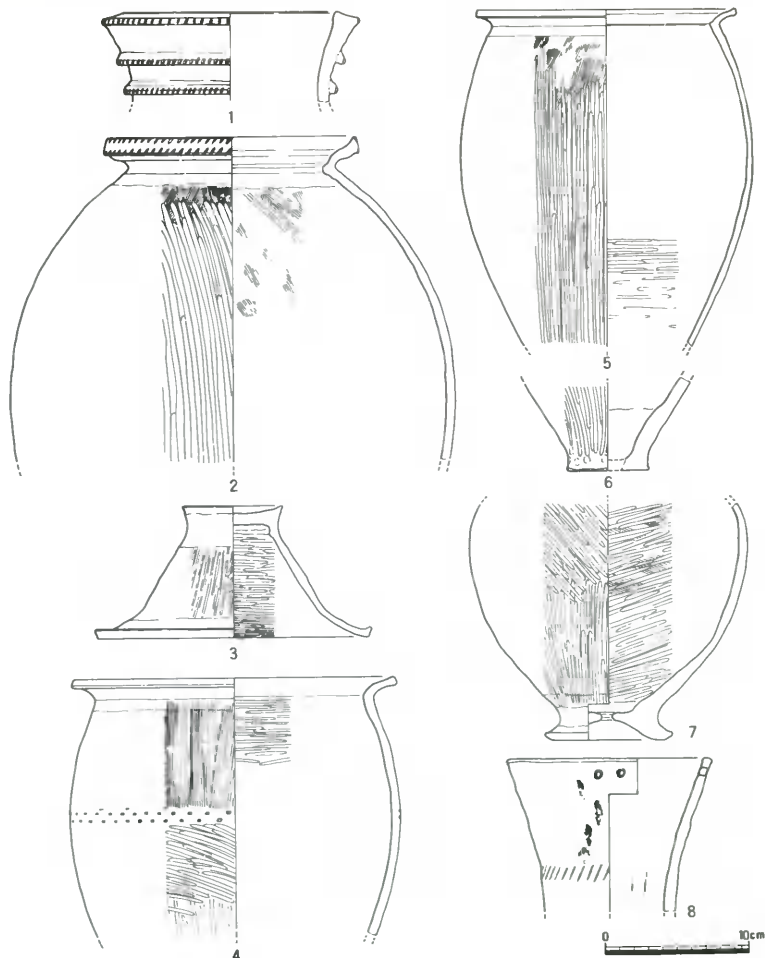
第8図 竪穴式住居—1 ($\frac{1}{30}$)



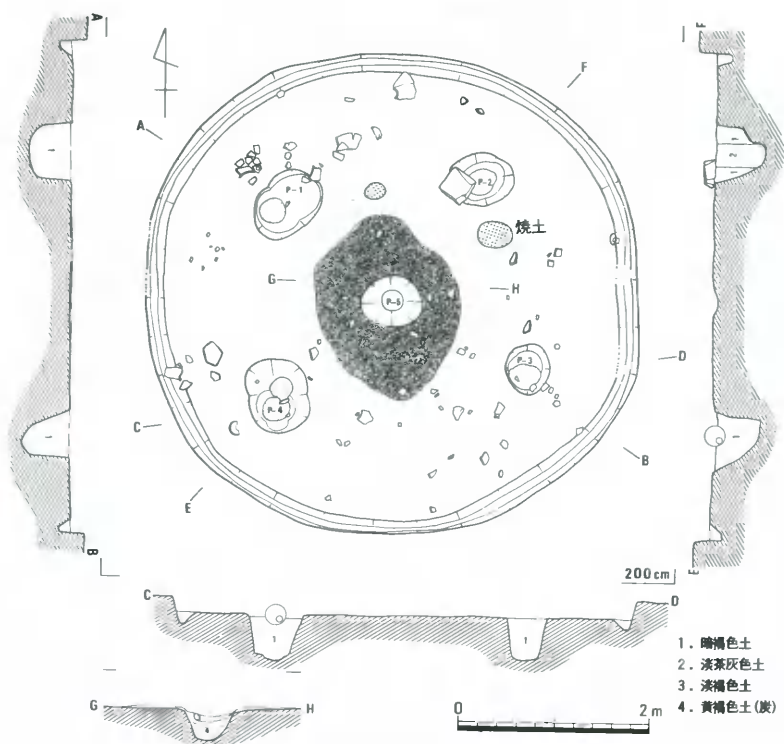
第9図 大上田地区弥生時代中期遺構配置図 (1/500)

びた東側壁体溝と浅いピットの2個にすぎない。したがって、これだけの遺構からは、住居の規模・平面形態等の詳細についての言及はできない。ただ、直線的に走る壁体溝の存在から、方形、もしくは長方形のいずれかの平面形態が想像される。遺物は、土器が床面に貼り付いた状態で検出できた。時期は、百・中・Iの新相である。雄町遺跡第4調査区A・B・C・H・J等の土墳墓群と同時期である。

(島崎 東)



第10図 壁穴式住居-1 出土遺物



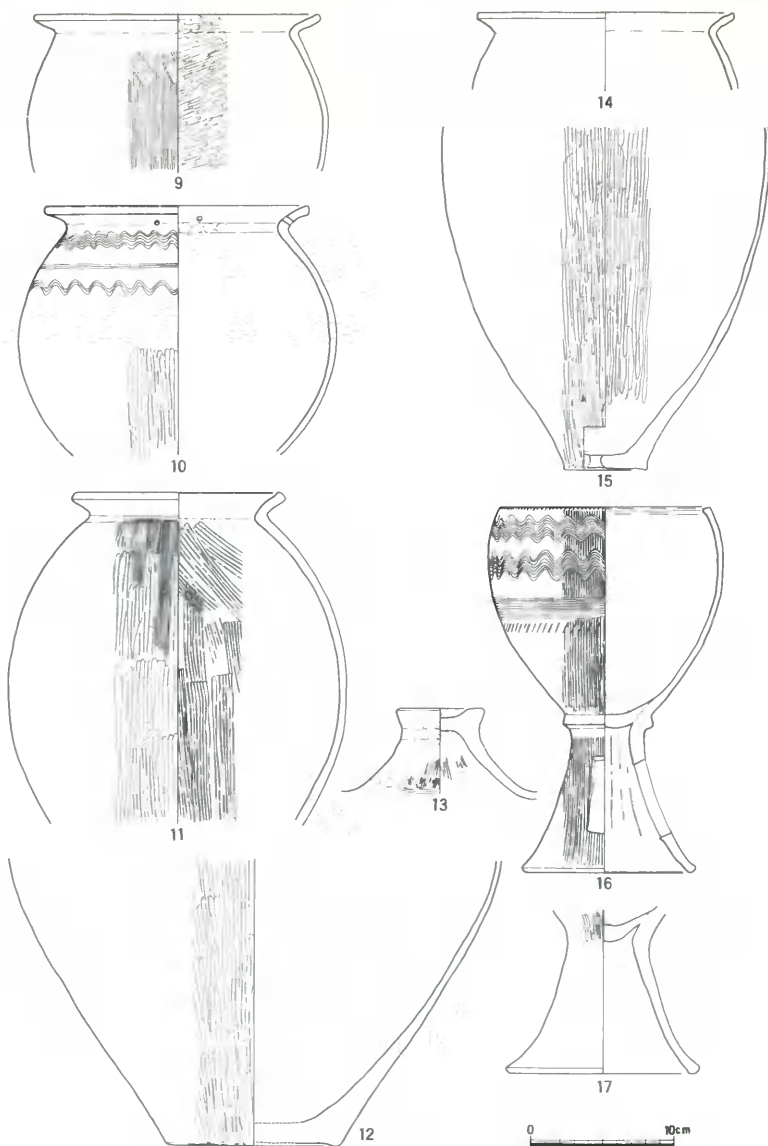
第11図 竪穴式住居-2 ($\frac{1}{60}$)

竪穴式住居-2 (第11・12図, 図版3-1・4-1)

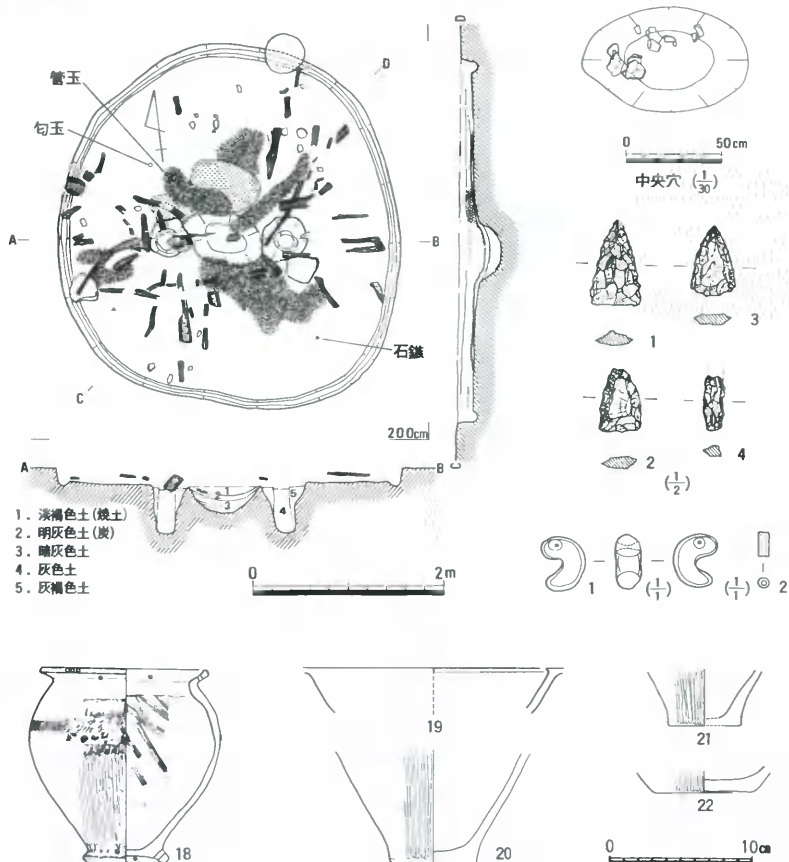
竪穴式住居-1の東側約4mに位置し、隈丸6角形を呈している。火災により放棄された状況での検出であり、遺物は原状をとどめるものが少なく、二次焼成による破片がみられる。それらは支柱穴と壁体溝間に存在するものが多いが、P-4内上位では壺、P-1では10の甕が石と伴に埋められている。P-2西側では27×25×10cmの花崗岩が広口面を上下にして配置され、作業台の機能をうかがわせる。支柱穴は二回の重複が認められ、P-2のように土壌化した柱痕を残すものがある。P-1・P-2、P-2・P-3間に2個の焼土面が存在する。竪穴式住居主軸は若干西に傾いており、竪穴式住居-4と共通点を有している。百・中・Ⅰの新相の時期のものである。

溝-4を切り、百・古・Ⅲ期の建物-6により切られている。

(高畑)



第12図 竪穴式住居—2出土遺物



第13図 竪穴式住居-3 (1/60)・出土遺物

竪穴式住居-3 (第13図, 図版3-2・4-1)

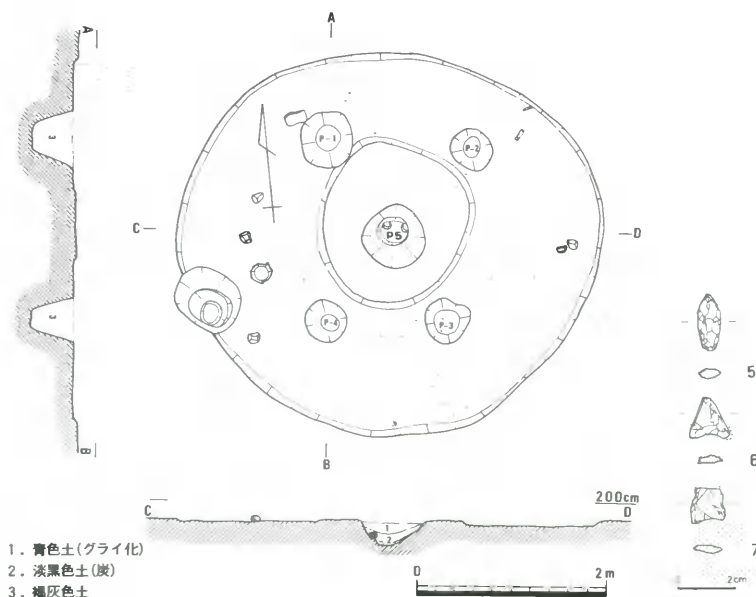
304-Fの中央西部分に位置する。北辺隅を一部、弥生時代後期の建物によって切られているが、ほぼ完全な状態で検出した円形の二本柱の住居である。直径約370cmを測り、床面積は約13.68㎡と小規模である。住居床の周囲には幅13cm前後、深さ5cm余の壁体溝が巡る。現在壁高は約14cmを測る。

主柱穴は先述した如く、二本柱であり、各柱穴の直径・深さは東から順に47cm・55cm・42cm・

53cmで、心々距離は124cmを測る。柱痕跡からして、立てられた柱の太さは15cm前後と考えられ、住居の規模に比較すれば十分な柱である。また、東西の主柱穴に抱かれるように、長径85cm、短径55cm、深さ30cmを測る長楕円形を呈する中央穴が存在する。上層においては、甕形土器18が落ち込んだ状態で検出され、下層では何重にも炭層が確認された。

当住居も他の住居と同様、火災により廃棄されたと考えられるものであり、その状況を非常に良好に残している。樺木材と推定される径5～10cm前後の炭化材が放射状に倒壊しており、梁と考えられる横木も中央穴のやや南部分に検出した。また西隅の一部は壁体溝に接し、壁体溝を覆う様に炭化材と焼土が折り重なるような状況を呈していた。さらに、中央付近には広範囲に茅を想起させる細い繊維状の炭化物が5～6cm位の層になり、炭化材を覆っていた。これらは住居の上屋構造の復元に好資料を示唆するものである。尚、炭化材の分布、並びに西側柱穴の柱根の倒立状況より判断して、北西から南東方向へ倒壊したものと思われる。

遺物は床面出土のものは殆んど無く、中央穴内のものが主である。中央穴の南東には34×29cm大の作業台、更に住居南西隅には30×29cm大の上面がやや凹みを呈した磨きの使用痕がある

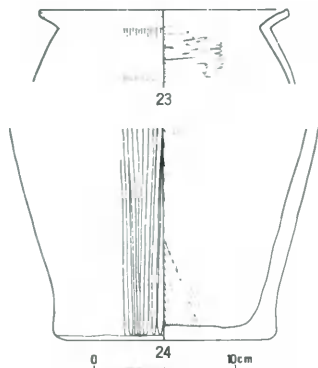


第14図 竪穴式住居—4 (1/60)・出土遺物

台石が検出された。その他、共伴遺物として、サヌカイト製の石鏃3点、管玉、硬玉（軟玉）製の勾玉が各1点ずつ出土しており、勾玉については県内出土例では古い部類に入るものと考えられる。時期は百・中・Ⅰの新相に比定できる。

竪穴式住居—4（第14・15図）

303—F北東隅に位置し、平面は不整円形を呈し、主柱穴は南北に長くつくられている。壁体溝は確認できず、主柱穴4本も北側が広く、南に狭い歪んだ中型の住居形態をとる。竪穴式住居中央部はP—5（中央穴）を囲む幅約50cmのたかまりが認められる。西側床面に約15～20cmの河原石4，南側を中心にサヌカイト小片が多数散布しており、その内に3点のサヌカイト製石鏃が含まれている。土器では大型の甕底部が直立した状態で出土している。甕底部床面接着の高さは海拔177.5cmをはかる。竪穴式住居—2・3同様に火災を受けて放棄されたものと考えられる。百・中・Ⅰの新相の時期である。（高畑）

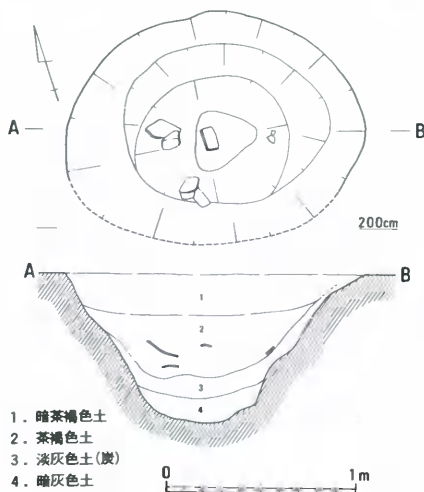


第15図 竪穴式住居—4 出土遺物

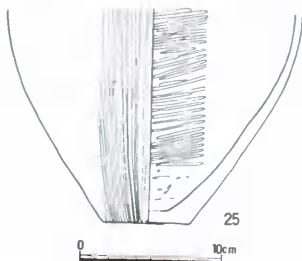
（2）井戸

井戸—1（第16図）

303—Hの北東隅に位置し、用地外を一部拡張調査した遺構である。長軸158cm，短径約120cmの楕円形を想定させる。深さは78cmを測り、底面の海拔高は98cmである。堆積状況は4層に分けることが



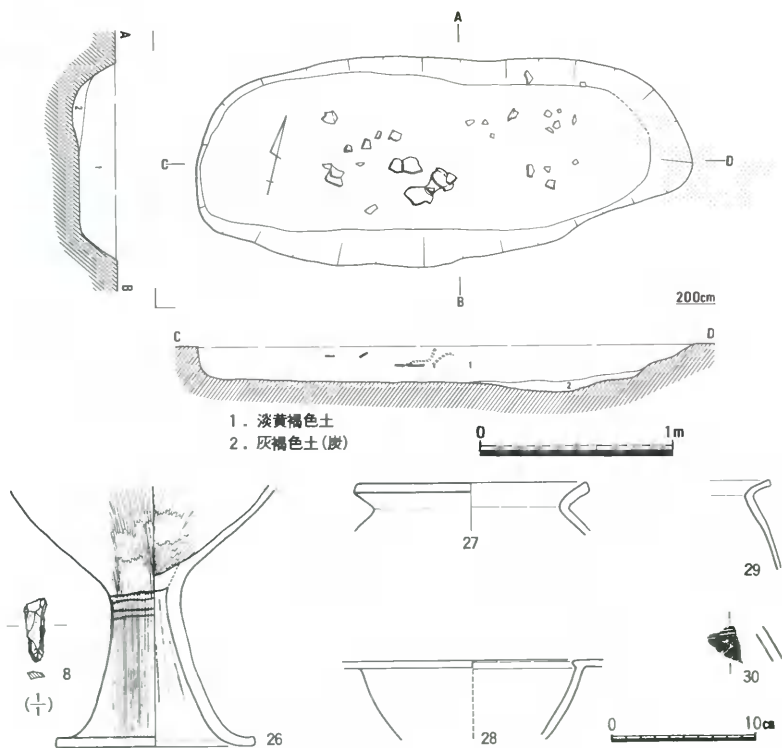
第16図 井戸—1 (1/30)・出土遺物



でき、4層の暗灰色粘土層の上面に厚さ1cm程の炭の層が認められた。遺物は少ないが2層に全て包含され、中期の土器片である。当遺構は湧水層に達しており、井戸としての機能を充分持っていたと想定できるが、後にはゴミ捨て穴と化したものであろう。時期は百・中・Ⅰの新相と考えられる。(渡辺)

土壌-1 (第17図)

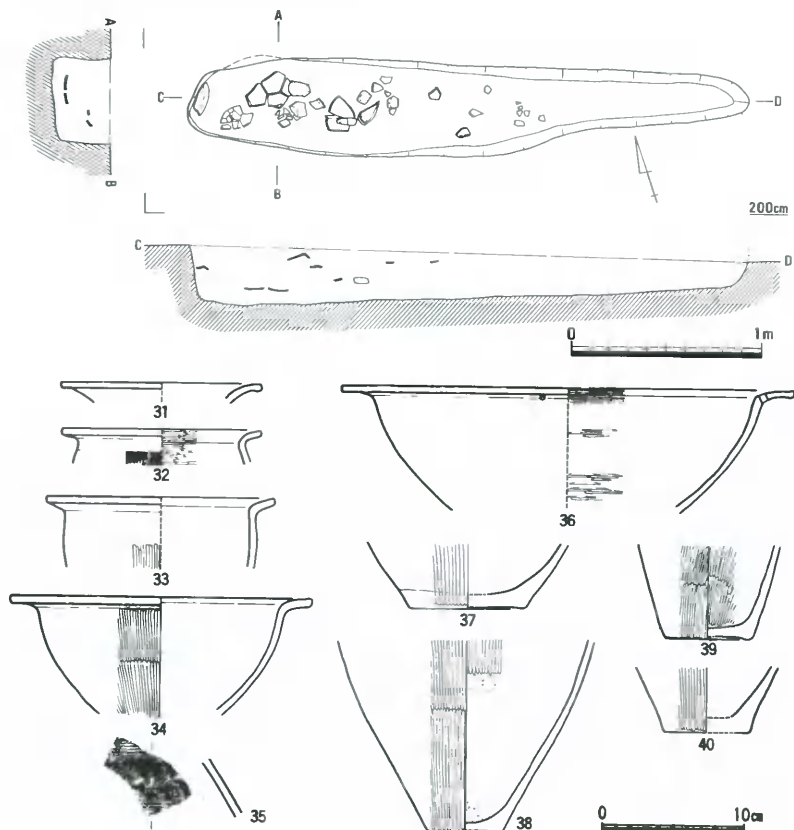
304—E北端中央部に位置し、溝-13を切り、百・後・Ⅳの住居に切られた形で検出した土壌である。平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸261cm、短軸110cm、深さ20~26cmを測る。底面は、東側に皿状の凹みを有する以外、ほぼ平坦である。土壌内堆積土は基本的には均質であり、東部分のみ、炭・焼土を包含する層を検出した。遺物は高杯以外は破片であり、床面から遊離散在した状況で出土している。百・中・Ⅰの新相の時期と考えられる。(渡辺)



第17図 土壌-1 (1/30)・出土遺物

土壇-2 (第18図)

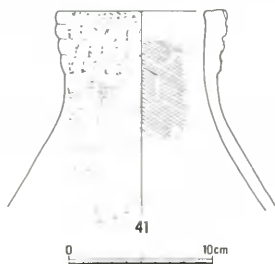
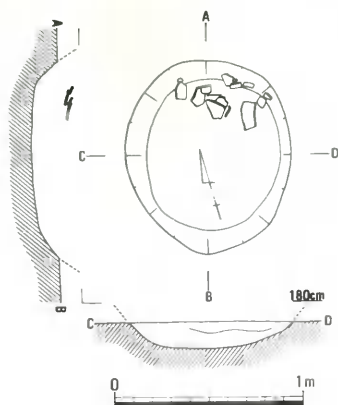
土壇-1 に近接し，細長い楕円形を呈する土壇である。長軸 296 cm，短軸 52 cm，最大深 31 cm を測る。土壇壁はかなり急斜であり，底面の状態は，東から西にかけて幾分傾斜している。堆積土は均質で茶褐色土が充填していた。遺物は土壇の規模に比較して少なく，小片のものが主であるが，鉢類が西側隅に潰れた状態で出土している。尚，35 の遺物は土壇-1 の30の遺物と全く類似しており，土壇-1 と土壇-2 がほぼ同時期に機能したと推される。時期は出土遺物から考えて百・中・I の新相と考えられる。



第18図 土壇-2 (1/30)・出土遺物

土墳—5 (第19図)

303—F西側中央部に位置し、土墳—7に隣接する。長軸 103 cm, 短軸 86 cm, 現存深さ約 15 cm を測り、楕円形を呈する。土墳壁は緩やかで

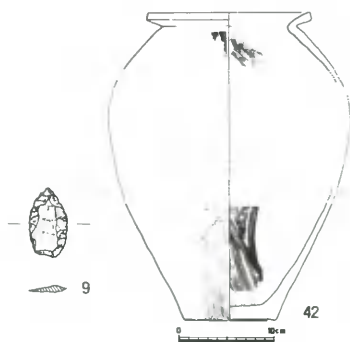
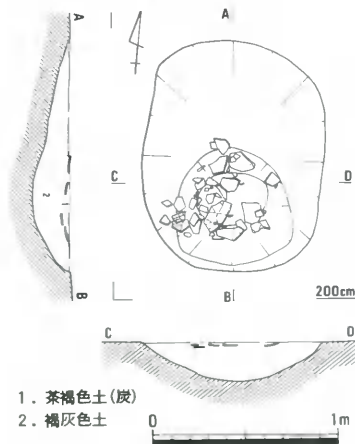


第19図 土墳—5 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

浅い鉢状を呈し、遺物は18cm程浮いた状況である。土墳内はほぼ均質な堆積土であるが、中層部分に炭の分布が認められる。百・中・Iの新相の時期と考えられる。

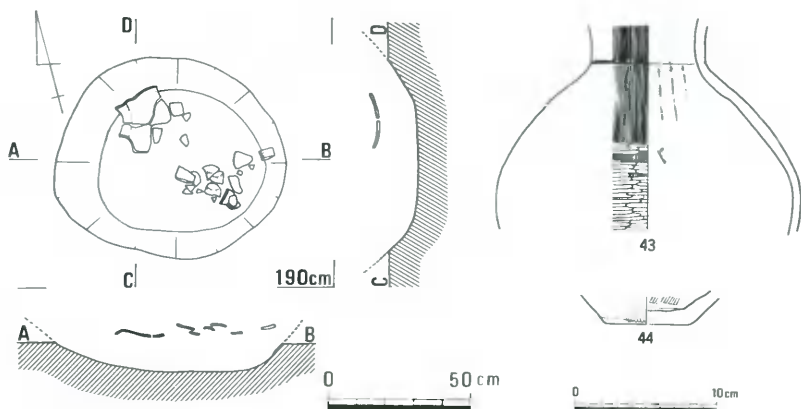
土墳—8 (第20図)

F区のはほぼ中央に位置する。長軸 121 cm, 短軸 95 cm, 最大深 21 cm を測り、隅丸長方形の平面



第20図 土墳—8 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

形態を有する。長軸の方向は、ほぼ南北であるが、やや西に偏っている。土墳壁の傾斜は特に北側が緩く、土墳底も丸味をもって皿状を呈する。遺物は土墳底より15cm程、浮いた状態で出土しており、かなりの量の土器片が一括投棄された様子が窺える。また遺物の直下には、レン

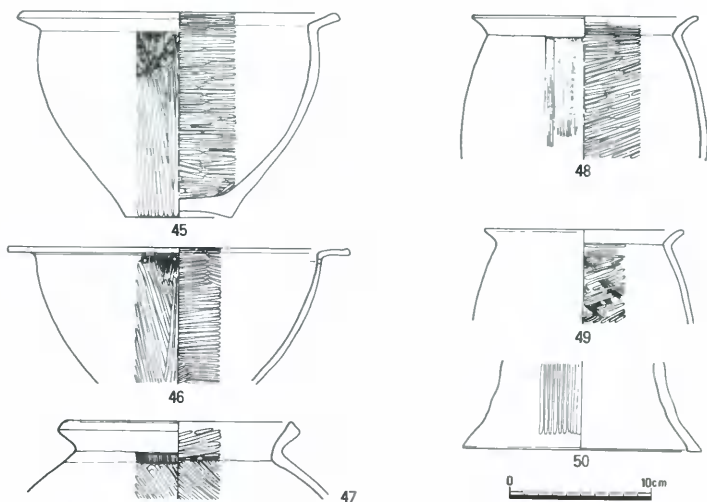


第21図 土壌-10 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

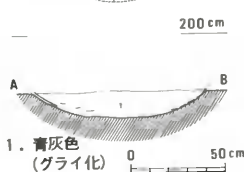
ズ状の炭の分布層を確認した。百・中・Iの新相と考えられる。

土壌-10 (第21図)

303—Fの南端部に位置する。長軸80cm, 短軸70cm, 深さ10cm前後を測る。平面プランは不



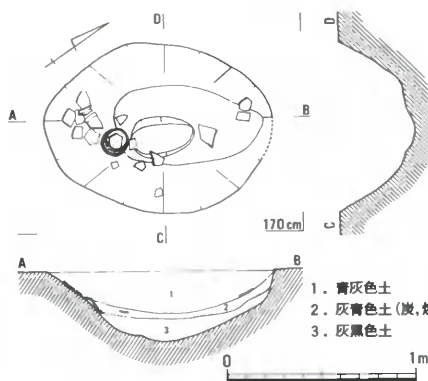
第22図 土壌-12出土遺物

第23図 土壌-12 ($\frac{1}{30}$)

整円形を呈す断面形は全体として緩やかな鉢状を呈す。堆積土は炭を若干含む茶褐色粘土であり、均質である。遺物は12 cm程、浮いた状態で出土しており、北側に直口壺が押し潰された状況が窺える。実際の掘り込みは、検出面より上である。時期は百・中・Ⅰと考える。(渡辺)

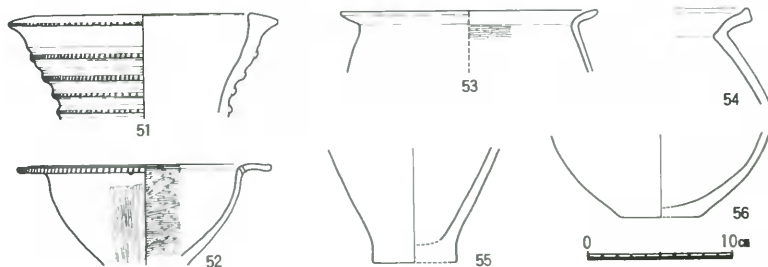
土壌-12 (第22・23図)

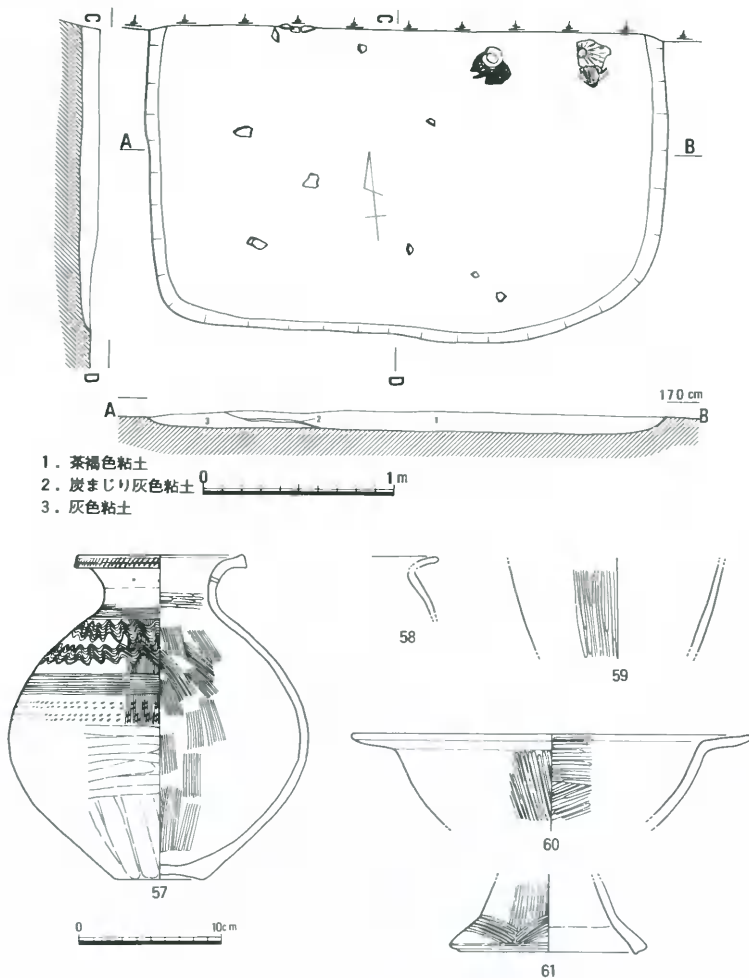
304—G南西部に位置し、直径約90cm、深さ14cmを測る円形土壌である。含土中は2〜3重に土器片が底に斜向して出土している。形態規模は土壌-5に類似しており、土壌底の海拔は166 cmをはかる。44・45・46・47等の口縁部内面にはヘラミガキが施されている。時期は百・中・Ⅰの新相と考えられる。(高畑)



土壌-18 (第24図)

304—Gの北側部分に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長軸121cm、短軸90cm、深さ約38cmを測る。断面形は掘り鉢状を示す。坑内の堆積状況は、土壌縁辺部から中央へ流入堆積した様子をみせ、第3層上面には、炭、焼土の混在した薄い層が確認された。土器は各層より出土しており、主として南側から流れ込んだ状況が窺えた。百・中・Ⅰの新相と考えられる。(渡辺)

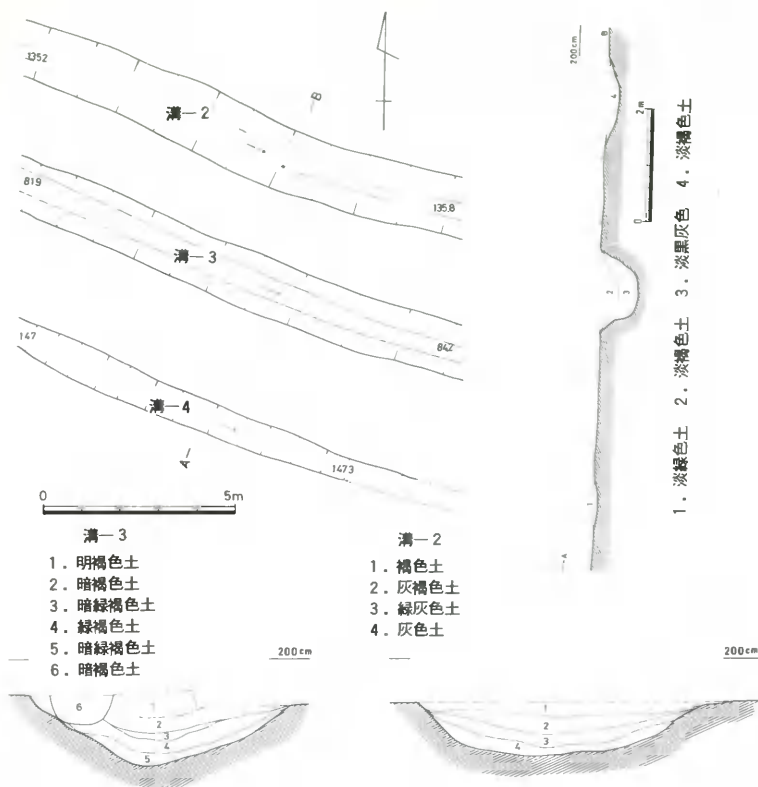
第24図 土壌-18 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物



第25図 土壇-22 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

土壇-22 (第25図)

303-Iの北端部に位置し、一部は調査区域外に及んでいる。方形のプランを呈し、床面は平坦である。床面の直上から壺・甕・高杯の破片が出土した。床面において柱穴は検出されなかったが、小型の竪穴式住居とも考えられる。時期は、百・中・Iの新相に属する。(正岡)

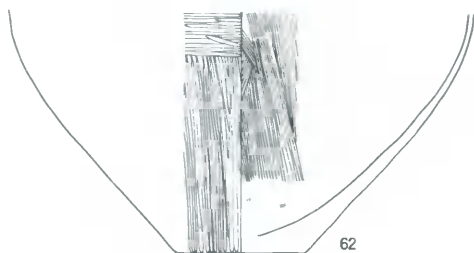
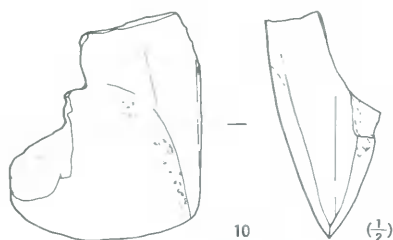


第26図 溝-2・3・4 ($\frac{1}{150} \cdot \frac{1}{100}$)

(3) 溝

溝-2 (第26・27図)

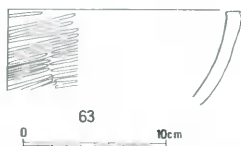
第3 微高地形状に沿う姿で 303—Dより 303—Hに向かって南東に下がる延長約90mの溝である。しかし、北西部約10mは弥生時代後期後半の造田の際に削平を受けて消失しており、西端下りの凹地部を目安に推定復原を行った。溝上端部幅約200m、深さ約50cm、断面は皿状の形態を呈する。基本的には西より東に向い緩かに傾斜をもっている。しかし、各所で凹凸が存在しており、一方から水圧がかからない限り水は停滞すると思われる。機能は排水面を大きく考慮したものと思われる。百・中・Iの時期の土壌に切られており、若干遡る時期のもの



であろう。

溝—3（第26・28図）

溝—2より約2m南側に位置し、同一方向に走る延長80mの溝である。北西部は溝—2同様に削平を受けているが、上半部が消失し溝底は残存しており、西端下がりで開口している。溝上端部幅約200m、深さ約70cm、断面は椀状の形態を呈する。溝

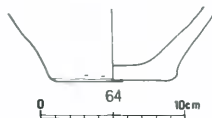


第27図 溝—2出土遺物

底海抜高は85cm～95cmで凹凸があり、溝—2同様の機能を有すると考えられる。百・中・Iの土壌により切られている。

溝—4（第26図）

3本の内最も浅い溝であり、溝—3の南側同一方向に位置する。延長45m、上端部幅約150cm、深さ約15cm、断面は皿状を呈する。溝底海抜高は約150cmを前後する凹凸がみられ、溝—2・3同様の機能が考えられる。百・中・Iの堅穴式住居に切られている。



溝—2・3・4は同一方向を走り、溝底海抜高からは溝—4・2・3と深くなっている。また、百・中・Iの遺構に切ら

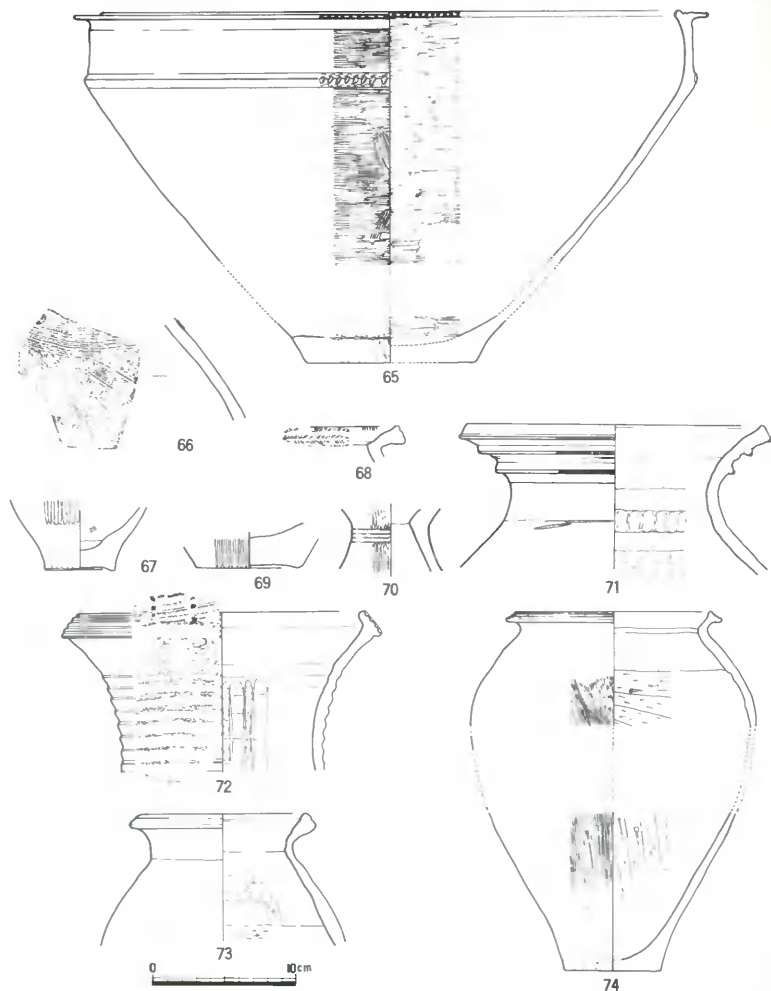


第28図 溝—3出土遺物

れる共通点を持つことなどより返接した時期に機能したものと考えられる。

溝-1 (第29図)

304-E付近より出て、大上田調査区を東西に走り、東苗代調査まで延長約180 mをはかる溝である。旧地形の凹地を利用したものと考えられ、下層より百・中・I、中層より百・中・

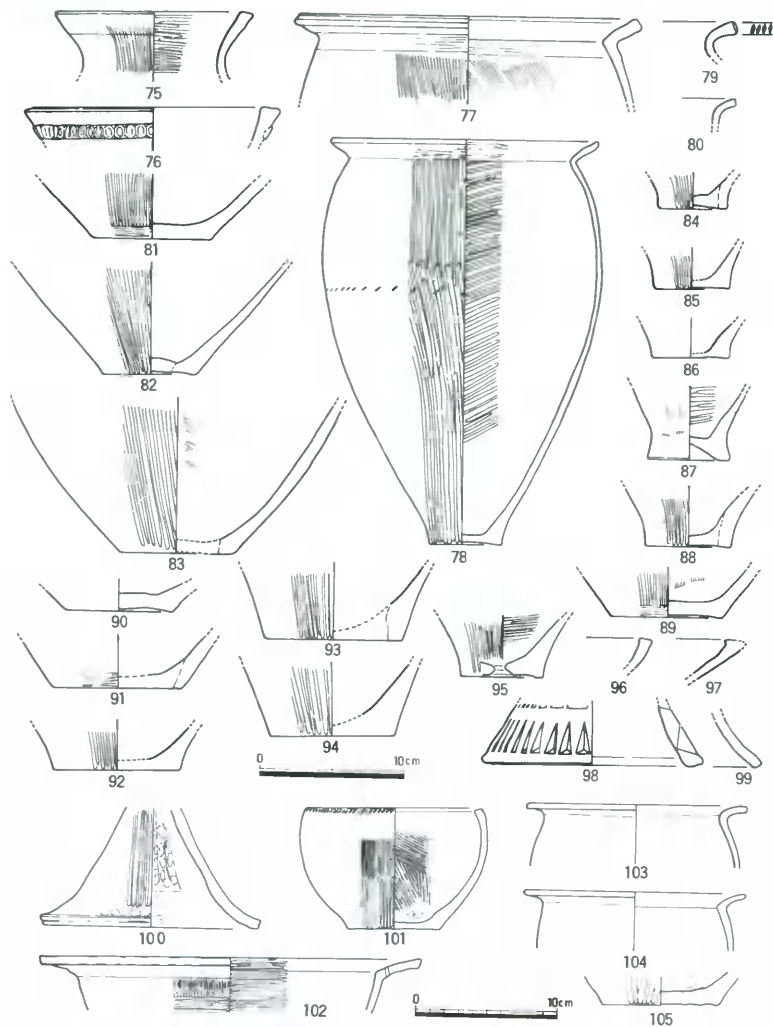


第29図 溝-1 出土遺物

Ⅱ・Ⅲ，上層より百・後・Ⅰの土器片が出土している。基本的には東に傾向している。(高畑)

(4) 包含層出土の遺物

75～99の土器は 303-Ⅰを中心に出土しており，溝-1の北側に分布範囲が集中している。

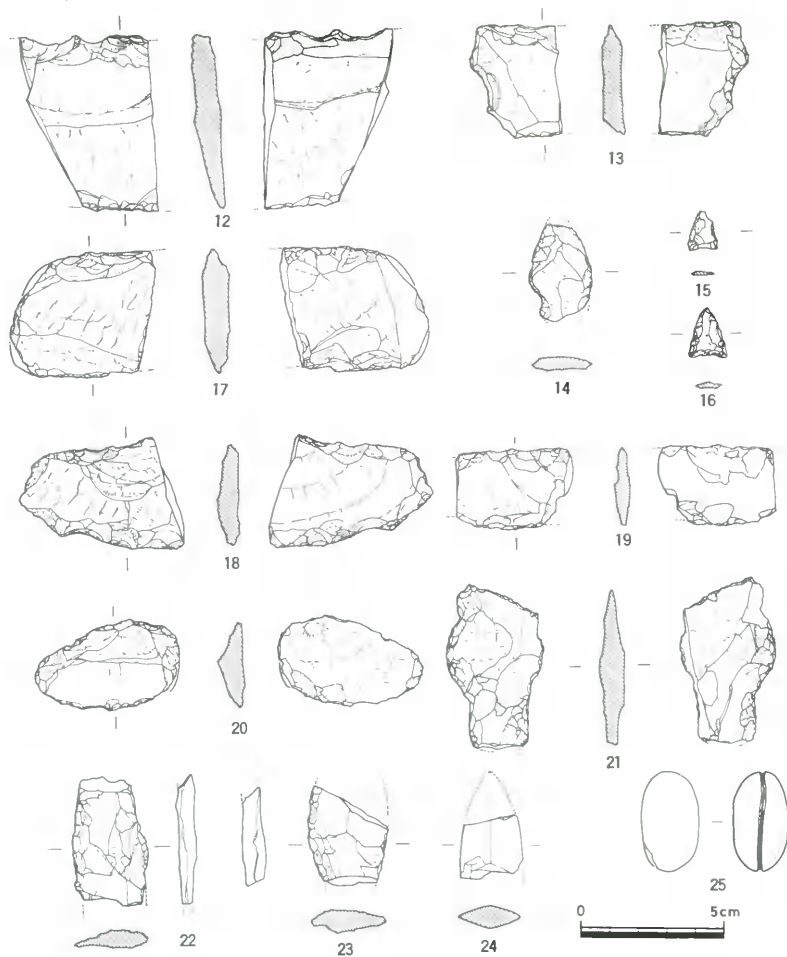


第30図 包含層出土遺物

10層（第7図）に多くみられる。100～105は303—Fの建物—9周辺において検出したものである。竪穴式住居—1・2等に代表される百・中・Iの新相と一致するものである。

12～25は303・4—E・Fを中心に出土しており、サヌカイト製品が多い。24は磨製石剣の部分と考えられ、幅2.15cm、厚さ0.8cmを測り、石材は結晶片岩が利用されている。

25は石錘であり長さ3.6cm、幅2.05cm、厚さ1.9cmを測る。（高畑）



第31図 包含層出土遺物

表一 3 弥生時代中期土器観察表

陶器番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
1	壺形土器	15.0	—	—	・口縁部・頸部外面ヨコナデ。内面ナデ。	灰 黄 色	砂粒多く含む	良 好	
2	〃	17.8	—	—	・内面ナデの後縁はいへメ。外面縦位ハケメの後縁位ヘラミガキ。	〃	微砂多い	〃	
3	甕形土器	19.0	7.0	9.4	・内面横位ヘラミガキ。外面縦位ハケメ。	〃	〃	〃	
4	甕形土器	23.0	—	—	・内面ナデの後縁位ヘラミガキ。外面はナデ・縦位ヘラミガキ。胴部に列点文。	黄 灰 褐色	砂粒含む	〃	
5	〃	18.0	—	—	・内面ナデの後下縁位ヘラミガキ。外面縦位ハケメ後縁位ヘラミガキ。	暗 灰 褐色	微砂が多い	〃	
6	〃	—	5.8	—	・外面荒めの縦位ヘラミガキ。	灰 色	白色砂粒を含む	良	
7	付帯甕形土器	—	8.0	—	・内面ハケメの後、肩位ヘラミガキ。外面斜位及び縦位ヘラミガキ。	灰 黄 色	砂粒多い	良 好	・底部焼成後の穿孔。
8	鉢形土器	14.0	—	—	・内面丁寧なナデ。外面細かいハケメ。内面にシボリメが残る。	暗 灰 褐色	砂粒を含む	〃	・口縁部に焼成前の穿孔。
9	甕形土器	20.0	—	—	・外面ハケメ。内面ヘラミガキ。	暗 灰 色	白色小砂粒	良 好	
10	〃	18.8	—	—	・外面無指紋状文。	黄 灰 色	〃	〃	・2孔一對。
11	〃	14.6	—	—	・外面ヘラミガキ。内面ハケメ。	〃	〃	〃	・外面黒斑。
12	甕形土器	—	12.0	—	〃	暗 褐 色	〃	〃	
13	甕形土器	6.3	—	—	・円板形。	暗 灰 褐色	〃	〃	・内面篋付蓋。
14	甕形土器	17.8	—	—	・外面ハケメ。	淡 褐 色	〃	〃	
15	〃	—	6.0	—	・内面ヘラミガキ。	明 褐 色	〃	〃	・外面黒斑。
16	高杯形土器	13.6	11.6	25.8	・外面ハケメ。胴3孔。	〃	〃	〃	
17	〃	—	12.6	—	〃	淡 黄 灰 色	〃	良	
18	甕形土器	11.3	5.2	13.6	・「く」の字状に外反する口縁部を有し、高い位置に重心を得つ。浮紋や刺突紋によって加飾されている。体部内面下半ヘラケズリ。	灰 茶 褐色	微砂粒を含む	良 好	・完形品
19	高杯形土器	—	—	—	・鋭い鉢形の杯部を有す。	淡 赤 褐色	微 砂 粒	〃	
20~22	底 部	—	—	—	・外面は全てヘラミガキ。	灰 白 色	〃	〃	
23	甕形土器	17.5	—	—	・口縁部内外面ヨコナデ。	暗 灰 黄 色	砂粒を含む	良 好	・中央穴内。
24	底 部	—	14.1	—	・底部削落。	淡 黄 茶 色	石灰石粒を多く含む	〃	・風乾。
25	甕形土器	—	6.2	—	・内面ヘラミガキ。	暗 灰 黄 色	微砂を含む	良	
26	高杯形土器	—	—	—	・口縁部は欠損しているが、脚を形成する口縁部をもっと推される。	淡 灰 茶 色	微 砂	良 好	
27・29	甕形土器	—	—	—	・口縁部はいずれも端面をもつ。	灰 茶 色	〃	〃	
28	高杯形土器	—	—	—	・口縁部ははや肥厚し、水平な面を呈す。	暗 灰 褐色	〃	〃	
30	甕形土器	—	—	—	・胴部か。土塊一2のOSと同一か。	淡 褐 色	〃	〃	
31・32	甕形土器	—	—	—	・31の口縁部はヨコナデ。32は横位のヘラミガキ。	淡 褐 色	微 砂	良 好	
33	鉢形土器	15.0	—	—	・「く」の字状に外反する口縁部を呈す。	赤 茶 褐色	〃	〃	
34	高杯形土器	21.0	—	—	・半球形の杯部と脚を成す口縁部を有す。	茶 褐色	〃	〃	
35	〃	32.0	—	—	・胴部には2対の貫通孔を穿つ。	淡 褐 色	〃	〃	
36	甕形土器	—	—	—	・胴部か。土塊一1の30と同一のものか。	〃	〃	〃	
37~40	底 部	—	—	—	・内面はヘラミガキ。またはナデ。	赤 褐 色	砂粒多し	〃	
41	甕形土器	9.0	—	—	〃	黄 褐色	白色小砂粒を含む	良 好	
42	甕形土器	17.4	10.2	—	・体部外面上半、ハケメ下半ヘラケズリ。体部内面はハケメ。	赤 褐色	微 砂	良 好	
43	甕形土器	—	—	—	・胴・胴上半部の破片。胴部には一条の縦溝き状線が走る。	淡 灰 白色	微 砂	良 好	
44	〃	—	5.8	—	〃	〃	〃	〃	
45	鉢形土器	21.7	7.4	14.5	・外面縦位ハケメ後ヘラミガキ。上げ底。	淡 黄 灰 褐色	砂粒、雲母	良 好	・風乾。
46	高杯形土器	23.7	—	—	・口縁部を突き出している。	淡 黄 褐色	白色小砂粒	〃	・口縁部下に焼成前の穿孔。
47	甕形土器	15.8	—	—	・内面ヘラミガキ。口縁内面ヘラミガキ。	淡 黄 灰 色	〃	良	
48	甕形土器	16.0	—	—	・外面縦位のハケメ。口縁内面ヘラミガキ。	淡 黄 褐色	白色小砂粒	良 好	・外面篋付蓋。

第3章 第1節 大上田調査区

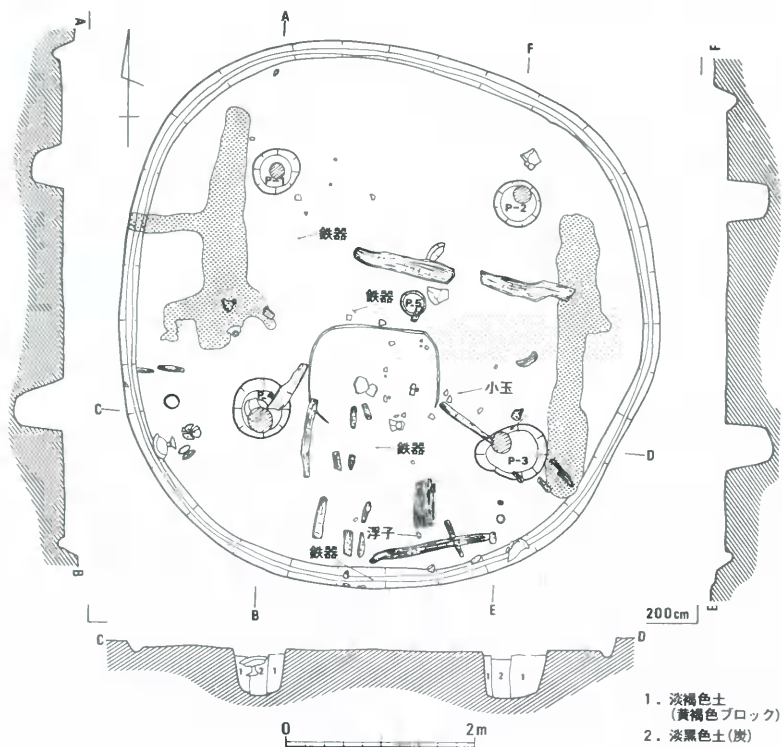
神田第号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
49	甕形土器	14.15	—	—	＊49Cに近似する。	淡灰褐色	白良小砂粒	良好	
50	合形土器	—	15.0	—	＊簡部内面にシボリダ。	—	—	—	＊器形不明。
51	甕形土器	15.1	—	—	＊4条の貼り付け突帯。	淡茶褐色	微砂粒	良好	
52	高杯形土器	17.9	—	—	＊内外面ヘラミガキ。	淡褐色	—	—	＊2孔一対。
53	甕形土器	18.2	—	—	—	暗褐色	—	—	
54	—	—	—	—	—	—	—	—	
55	—	—	6.0	—	—	淡赤褐色	—	—	
56	浅形土器	—	5.3	—	—	—	—	—	
57	甕形土器	11.6	6.0	22.7	＊口縁部に2個一対の穿孔あり。	灰白色	細かい砂粒を含む	良好	
58～59	甕形土器	—	—	—	—	暗灰褐色	—	—	＊小破片。
60～61	高杯形土器	24.0	12.4	—	—	灰褐色	—	—	＊胴部に黒斑。
62	甕形土器	—	8.9	—	＊内面下位ハケメ後指頭圧痕。	暗灰褐色	細かい砂粒を含む	良好	
63	鉢形土器	—	—	—	＊斜位のハケメ後ヘラミガキ。外面縦位ハケメ。	暗黄褐色	—	—	
64	甕形土器	—	8.1	—	—	暗褐色	石英粒大を含む 6mm	良好	＊内面縦付帯。
65	鉢形土器	41.0	12.0	—	＊口縁平坦面に凹線4条。	黒褐色	白色小砂粒	良好	
66	甕形土器	—	—	—	＊縦位ハケメ後にクシガキ。	淡茶褐色	—	—	
67	甕形土器	—	4.9	—	＊外面ヘラズリ後ヘラミガキ。	灰黄色	—	—	＊外面縦付帯。
68	—	—	—	—	＊口縁部に3条の凹線。	黄褐色	—	—	
69	甕形土器	—	7.0	—	—	黄灰色	—	—	
70	高杯形土器	—	—	—	—	褐色	—	—	
71	甕形土器	20.4	—	—	＊内面指頭圧痕。	黄灰色	—	—	＊壁中黒色。
72	—	19.9	—	—	＊簡部内面シボリダ。横状浮文。	暗黄灰色	—	—	＊〃
73	甕形土器	11.4	7.5	—	＊内面ヘラズリ。頸部焼成前穿孔。	淡茶灰色	—	—	＊外面縦付帯。
74	—	13.6	—	—	＊内面頸部までとどかないヘラズリ。	暗褐色	—	—	＊〃
75	甕形土器	12.0	—	—	—	灰白色	細かい砂粒を含む	良好	
76	—	15.2	—	—	—	—	—	—	＊小破片。
77	甕形土器	23.5	—	—	—	淡黄褐色	—	—	
78	—	18.5	5.0	28.5	＊ハケメの後ヘラミガキ。	黄褐色	—	—	＊完形に復元。肩上簡部下半に黒斑あり。
79・80	甕形土器	—	—	—	—	灰白色	—	—	
81	—	—	9.0	—	—	に白い褐色	—	—	
82	—	—	6.5	—	＊底面ナデ。内面うすいハケメ。	淡黄褐色	—	—	
83	—	—	2.0	—	＊内面うすいハケメ	灰白色	—	—	
84	甕形土器	—	6.0	—	—	—	—	—	
85	—	—	5.2	—	—	—	—	—	
86	—	—	5.5	—	—	—	—	—	＊表面割痕。
87	—	—	5.8	—	＊外面うすいハケメ。	淡黄褐色	—	—	
88	—	—	6.0	—	—	灰白色	—	—	
89	甕形土器	—	8.2	—	—	—	—	—	
90	—	—	7.4	—	＊少し上げ底を呈する。	—	—	—	＊表面割痕。
91	—	—	9.0	—	—	に白い褐色	—	—	
92	—	—	8.8	—	—	灰白色	—	—	
93	甕形土器	—	9.6	—	—	—	—	—	
94	—	—	8.8	—	—	—	—	—	
95	—	—	7.8	—	—	茶褐色	—	—	＊焼成後穿孔。
96	高杯形土器	—	—	—	—	—	—	—	
97	—	—	—	—	—	灰白色	—	—	
98	—	—	14.5	—	—	—	—	—	
99	—	—	—	—	—	—	—	—	
100	—	—	14.9	—	＊胴内面シボリダ。ヨコナデ。	茶褐色	黒・金雲母が目立つ	—	
101	鉢形土器	11.2	6.4	8.6	—	—	白色小砂粒	—	
102	高杯形土器	26.9	—	—	—	—	—	—	
103	甕形土器	15.65	—	—	—	灰黄色	—	—	＊割痕。
104	—	15.7	—	—	—	黄褐色	—	—	
105	甕形土器	8.0	—	—	—	—	—	—	

3 弥生時代後期の遺構・遺物

(1) 竪穴式住居

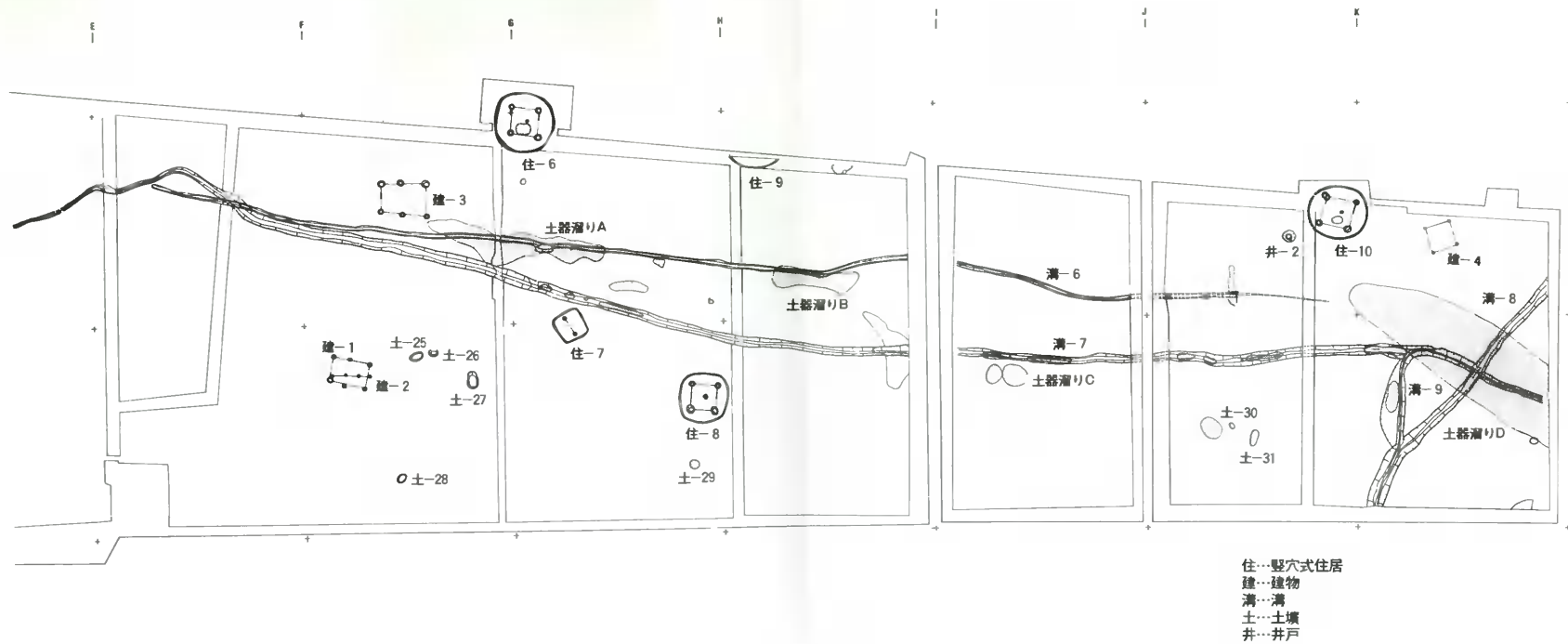
竪穴式住居—6 (第32・34・35図, 図版6)

竪穴式住居—4の北東約4mに位置し、不整円形を呈している。火災により放棄された状況を示し、住居内床面には炭化材、焼土が目立つ。とりわけ焼土は東西の主柱穴、壁体溝間に集

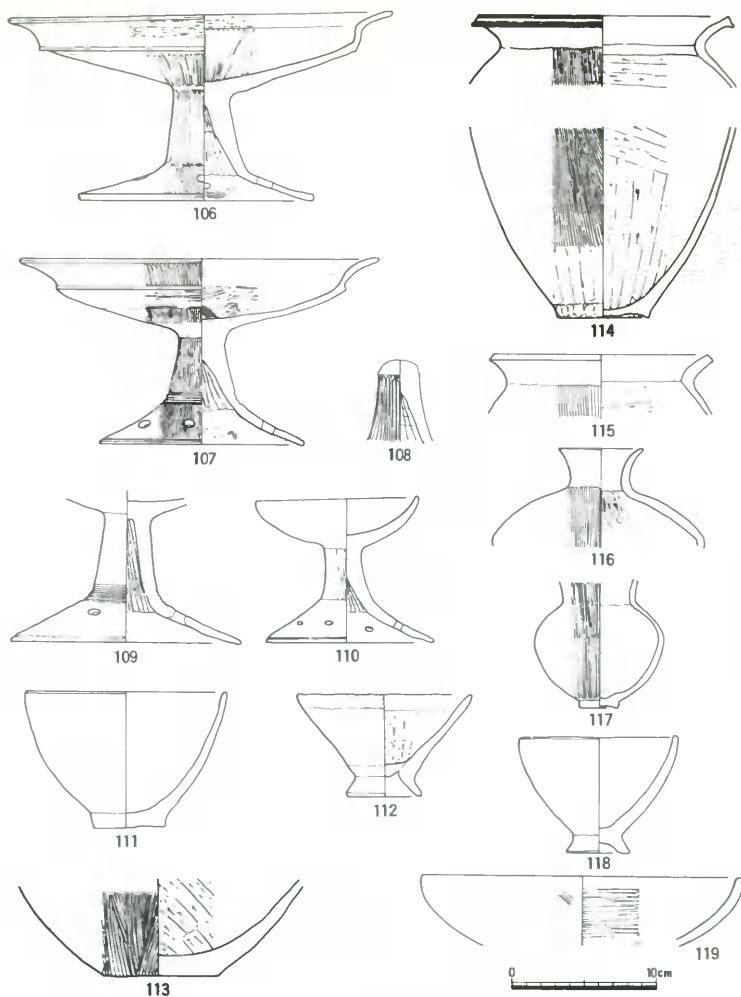


第32図 竪穴式住居—6 ($\frac{1}{60}$)

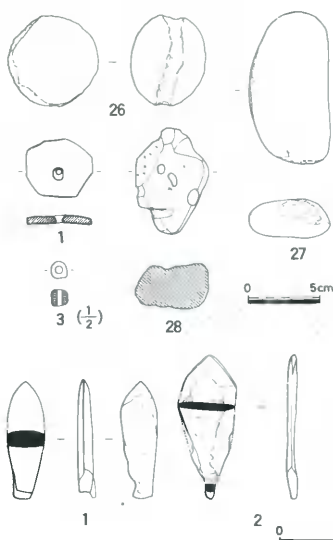
中し、東側45×300cm、西側50×250cmととまり、南北に長く延びた壁状の粘土が内側に倒れた(落した)形状を呈する。中央部東西に直径約15cm、現存長235cmの棟木と考えられる炭化材が焼土上にあり、南側には放射状にそれに向う屋根、垂木等の炭化材が検出された。このことは家屋の南側部分が完全燃焼をし、北側が不完全燃焼したであろうことがうかがえる。主



第33図 大上田地区弥生時代後期遺構配置図 (1/500)



第34図 竪穴式住居—6 出土遺物



第35図 竪穴式住居—6 出土遺物

P—3 南側には河原石が4石並んでおり、その内の1点が花崗岩製の錘であり、すぐ西側60 cmには軽石製の浮子が出土している。各主柱穴とも柱痕跡が認められ、P—4では掘り方内に西に若干傾向した高杯101が埋設されていたP—2底部には柱を支える機能を有する角材状の炭化物が存在する。

出土遺物には土器、鉄器、石器、玉があり、出土レベルは海拔170 cmが低く、183 cmのものが高い位置になる。住居床面は平均海拔175 cmを測る。高杯5・甕3・台付鉢2・鉢2・壺2・鉄器1・3・4・5の4点、浮子（軽石）・石錘・紡錘・ガラス小玉（アルカリ石灰ガラス）（註22）等の多くの遺物が出土している。ガラス小玉は青緑色を呈し、最大長0.60 cm、最大幅0.58 cm、最大厚0.59 cm、重量0.12 g以下を測る。鉄器は鉄鍔と考えられる1・3・4は全長4.95 cm、最大幅0.6 cm、最大厚0.3 cm、重量2 gを測り、一方端が若干鋭く造られている。線刻等を行う工具とも考えられる。5は両面に木質痕が斜位に残存しており、長辺両面は縁が折り返されている。全長3.97 cm、最大幅2.0 cm、最大厚0.48 cm、重量8.1 cmを測る。用途、機能は不明である。

百・後・Ⅱの新相の時期となり、左岸用水6—井戸—1（註23）が同時期である。

本竪穴式住居は中世の削平により海拔185 cmまで壁体部分を消失している。これは住居内西

柱穴は4本がほぼ等間隔に配されるが必ずしも正方形にはなっていない。壁体溝および主柱穴は住居内中央を起点に同心円上に設定され、その中心部をはずして東側に30×25 cmの小土壇が設けられている。深さ46 cmをはかり炭が充満し、これとセットを成すように南側には、140×105 cmの浅い隅丸長方形の炭の詰った土壇が存在する。土器等の遺物は壁体溝と主柱穴間にみられ、鉄器および小物は主柱穴内側にみられる傾向を有する。

南隅に検出された高杯 102 の杯部が海拔 185 cm にて水平に掻き取られている事実より理解することができる。すなわち、中世の畝状遺構を造る時点で F 線以東の^{おしろかみ}大上田調査区内に大規模な平坦整地面（海拔 185 cm）が造り出されたことを意味している。（高畑）

竪穴式住居—7（第36図）

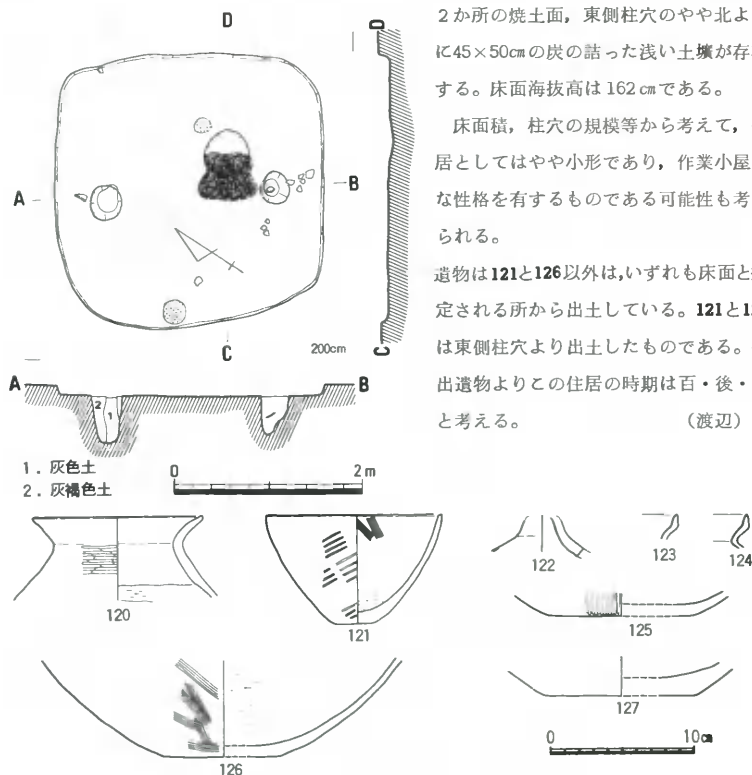
303・4—Gの中央に位置し、N—36.5°—Wに主柱穴長軸方向を持ち、西方に胴張り傾向を呈する住居である。平面形態は隅丸方形にて一辺約 285 cm，主柱穴間 173 cm，床面積は約 8.13 m^2 である。

住居内は広範囲に炭の分布が認められ、茅状の炭化物、焼土等が検出され、当住居が火災により放棄されたものであることが理解できる。現存壁高は約 10 cm をはかる。2 本よりなる主柱穴は一段掘り下げた段階で確認できたものであり、直径 30 cm，深さ 40～50 cm をはかる。他には

2 か所の焼土面、東側柱穴のやや北より 45×50 cm の炭の詰った浅い土壌が存在する。床面海拔高は 162 cm である。

床面積、柱穴の規模等から考えて、住居としてはやや小形であり、作業小屋的な性格を有するものである可能性も考えられる。

遺物は 121 と 126 以外は、いずれも床面と推定される所から出土している。121 と 126 は東側柱穴より出土したものである。伴出遺物よりこの住居の時期は百・後・Ⅲ と考える。（渡辺）

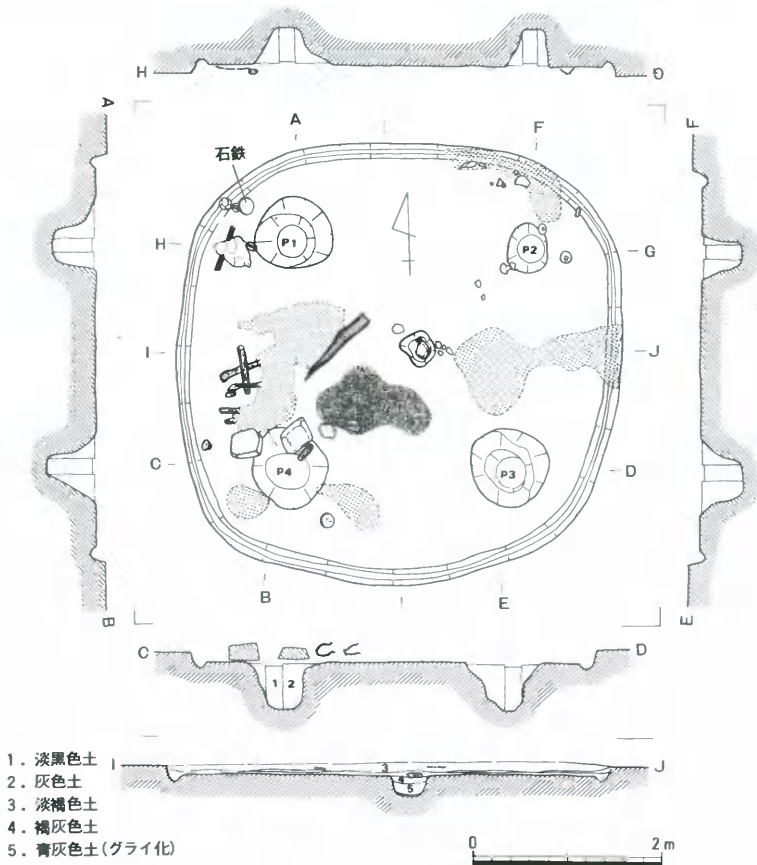


第36図 竪穴式住居—7 (1/60)・出土遺物

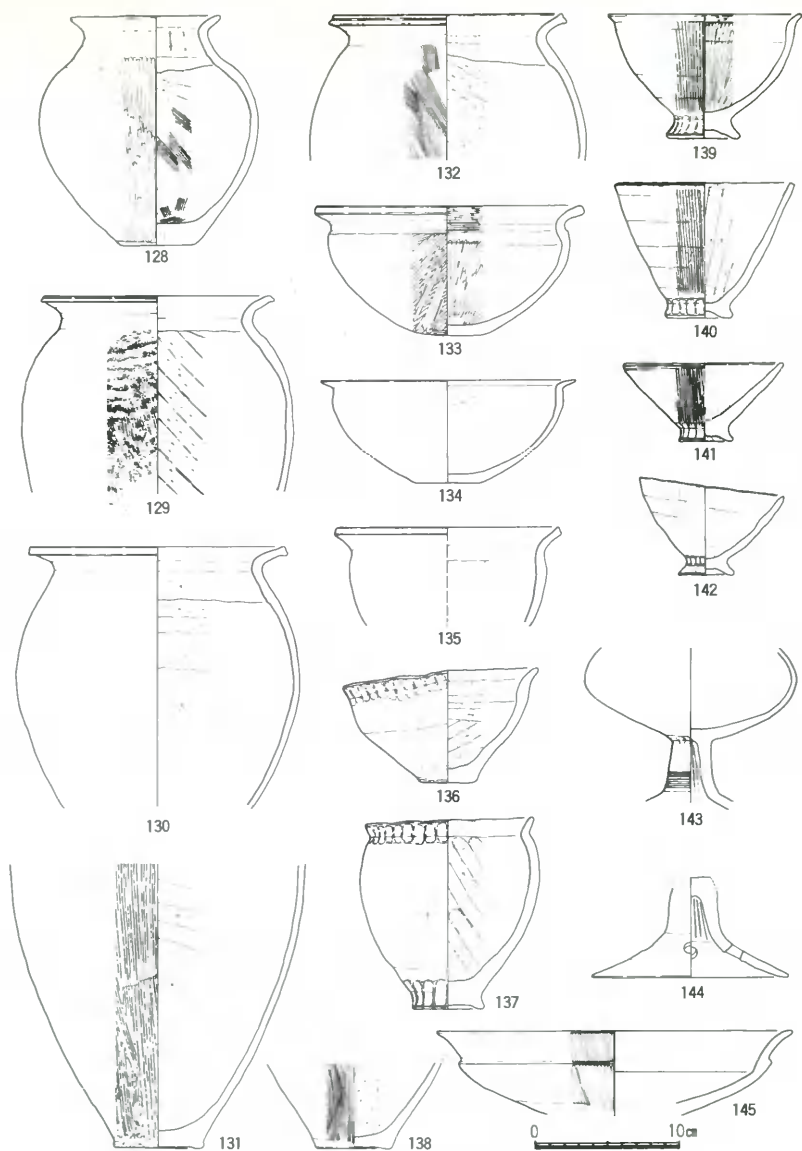
竪穴式住居—8（第37～39図）

304—Gの南東部分にあり、溝—7の南側10m付近に位置する竪穴式住居である。隅丸方形を呈し、長径470cm、短径470cmを測り、床面積は約22.09㎡である。現存壁高は約15cmであり、幅20cm未満の壁体溝が巡る。

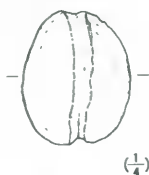
柱穴は4本で、北辺より右回りに、251cm・235cm・251cm・235cmを測り、深さは約50cm前後である。各柱穴共、柱痕跡が認められ、柱材の太さは径約19cmである。柱穴の掘り方、並びに、掘り方上層部に、住居中央部分にみられた二次的貼り床を形成したと考えられるものと



第37図 竪穴式住居—8 (1/60)



第38図 竪穴式住居-8 出土遺物



同質の黄色砂ブロックの混入が認められることから、建て替えも推定される。

中央穴は、中心よりやや東にずれて位置し、長径35cm、短径30cm、深さ約20cmを測る。下層には薄い炭の層が確認された。なお中央穴上面には平面をもつ割り石が配置されていた。



29

第39図
竪穴式住居—8
出土遺物

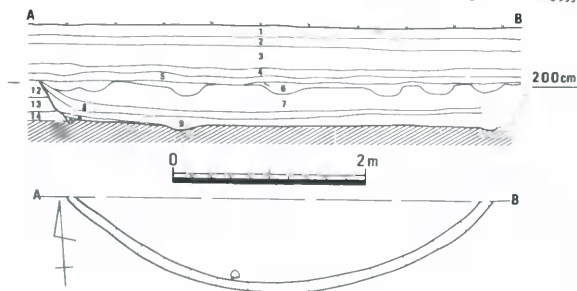
また、当住居は、火災に遭遇した状況を呈しており、極木材と想定される炭化材が数本、住居中央に向かって放射状に存在しており、茅状炭化物も散逸的に検出した。尚、火災により形成されたとみられる広範囲の焼土塊が二ヶ所認められた。

出土遺物は全て床面より出土したものであり、火災による二次的焼成を受けている。共存遺物としては、石鉄、石錘、砥石各1点ずつと作業台2個が出土している。時期は出土遺物より、百・後・Ⅱ・新相に比定できる。

(渡辺)

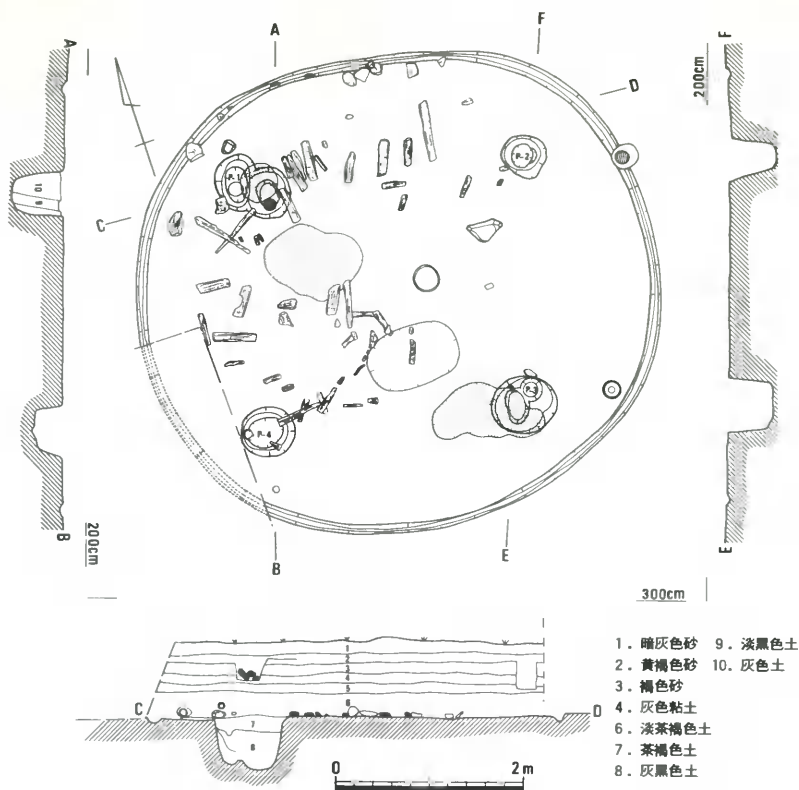
竪穴式住居—9 (第40図)

303—Hの北東端に位置し、南側約3/4が用地内に表われている。他の竪穴式住居同様に火災により放棄された状況を示す。推定6mの円形を呈すると考えられ、壁体溝近くで小型の壺が出土している。現地表より約60cm下にて住居肩口が確認可能であり、住居内覆土上面は畝状遺構の6本の溝が縦走する。覆土下層では炭、焼土面等が確認でき、貼り床の存在が考えられる。床面は明確には把握できなかったが、遺物接着面から想定すると海拔160cmが考えられ、他の竪穴式住居と比較すると若干深いようである。百・後・Ⅲの時期のものである。(高畑)



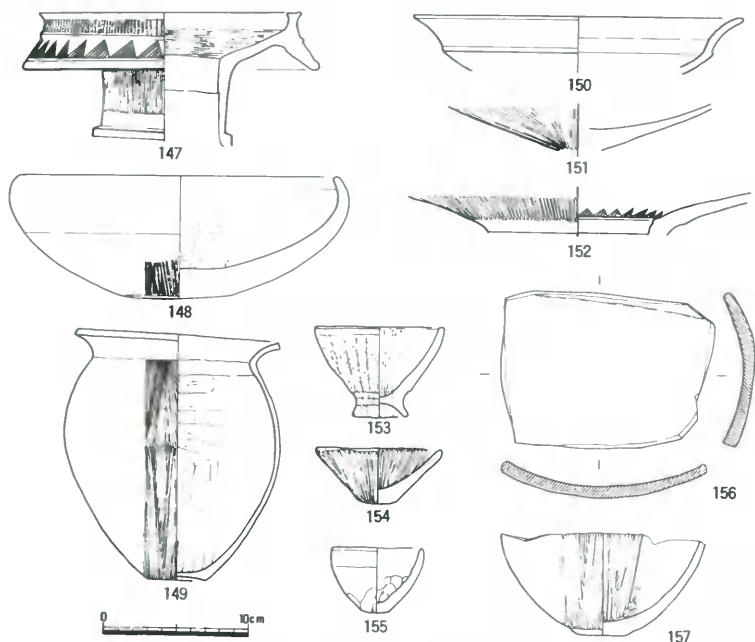
- | | | |
|------------|----------|-----------|
| 1. 暗灰色砂耕作土 | 6. 淡青灰色土 | 11. 灰褐色土 |
| 2. 暗黄褐色砂 | 7. 暗黄褐色土 | 12. 茶褐色土 |
| 3. 淡灰褐色砂 | 8. 灰褐色土 | 13. 暗黄褐色土 |
| 4. 灰色粘土 | 9. 暗灰色土 | 14. 黒灰色土 |
| 5. 暗青灰色土 | 10. 黄褐色土 | 15. 黄褐色土 |

第40図 竪穴式住居—9 (1/60)・出土遺物

第41図 竪穴式住居-10 ($\frac{1}{60}$)

竪穴式住居-10 (第41・42・43図)

303-Jの北東端に位置する。現地表面より約60cm下に住居上端を確認可能であった。第1次確認調査においてB-37a(註24)で発見されていた竪穴式住居である。東西に若干長い円形を呈し、主柱穴4本からなる。竪穴式住居-6同様に火災による炭化材が多量に残存しているが、炭化材分布状況は竪穴式住居-6と異なり北側を中心に分布している。その状態は極端な放射状ではなく、主柱穴を結んだ辺に対して直角に垂木を配置した様子がうかがえる。主柱穴には1回の建直しが認められ、P-1・2・3・4が最終の柱穴であり、最初の柱穴には焼土が被さっている。主柱穴と壁体溝は、住居中央を起点とする同心円上に存在し、住居中央



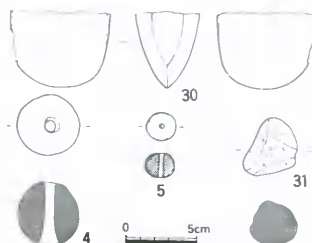
第42図 竪穴式住居—10出土遺物

東側に 22×23 cm、深さ34.5cmのP—5が設けられている。P—5は竪穴式住居—6、8等には付属しており、百・後・Ⅱ、Ⅲの時期のものに認められる。P—6も南側に炭の詰まった隅丸長方形の浅い土壇がセット関係として存在する。

遺物は主柱穴と壁体溝間に存在し、とりわけ北辺部を中心に集中している。P—2南西50cmには 40×20 cmの広口面を上下に持つ石が設置され、さらに2・3の河原石が住居内に点在する。

遺物は壺口縁部1、大型の鉢1、転用の鉢1、小形の鉢3、高杯片3、甕1、土器の胴部を打ちかいて方形の皿状に転用したもの等があり、土製丸玉大小2、軽石製の浮子1、磨製石斧片もみられた。

百・後・Ⅱの新相の時期と考えられる。(高畑)



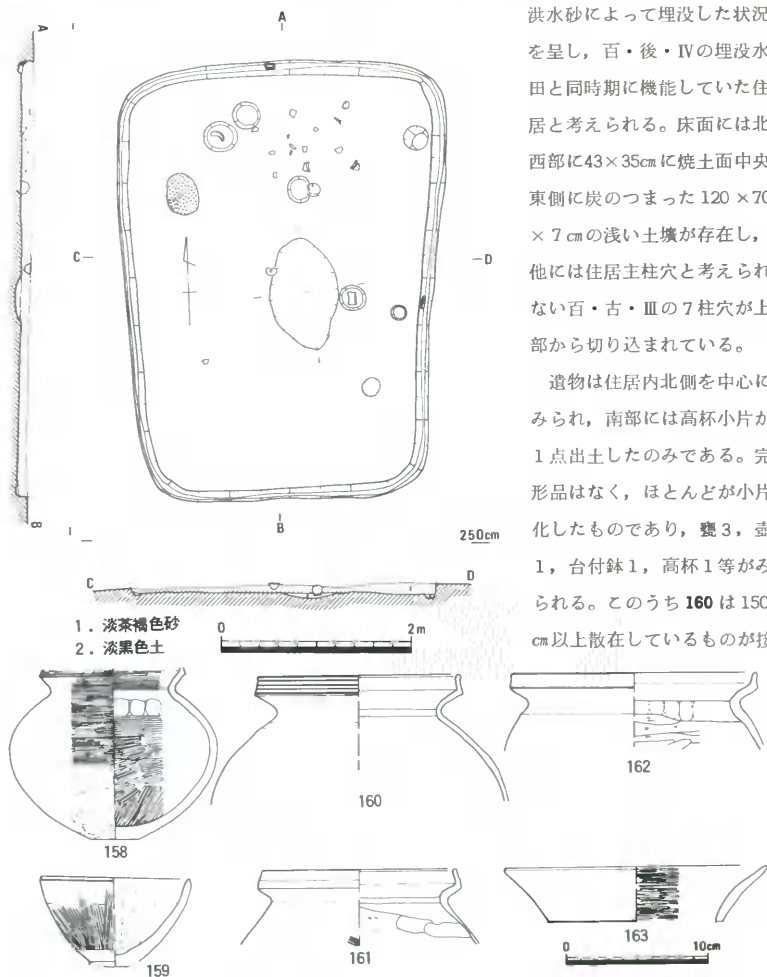
第43図 竪穴式住居—10出土遺物

竪穴式住居—11（第44図）

303—E南東隅に位置し、床面長軸 460 cm、短軸 320 cm、深さ約10cmをはかる。南北に長い隅丸長方形を呈し、柱穴を持たない竪穴式住居である。中世包含層である灰色粘土を除々した直後に検出したものであり、海拔高 208 cm にあたり大上田調査区内最高所に位置する。住居は

洪水砂によって埋没した状況を呈し、百・後・IVの埋没水田と同時期に機能していた住居と考えられる。床面には北西部に43×35cmに焼土面中央東側に炭のつまった120×70×7cmの浅い土壇が存在し、他には住居主柱穴と考えられない百・古・Ⅲの7柱穴が上部から切り込まれている。

遺物は住居内北側を中心にみられ、南部には高杯小片が1点出土したのみである。完形品はなく、ほとんどが小片化したものであり、甕3、壺1、台付鉢1、高杯1等がみられる。このうち160は150cm以上散在しているものが接



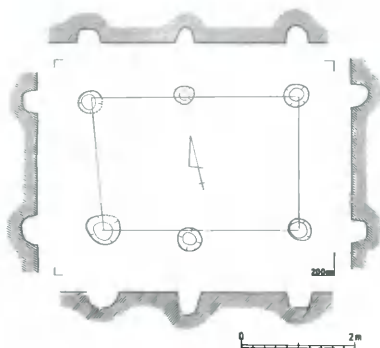
第44図 竪穴式住居—11 (1/60)・出土遺物

合した例である。百・後・Ⅳ～百・古・Ⅰ（註25）の時期範中である。苗代、水田、水利等に
関連する見張り番小屋的な機能を考慮することができる。（高畑）

（2） 建物

建物—1（第45図）

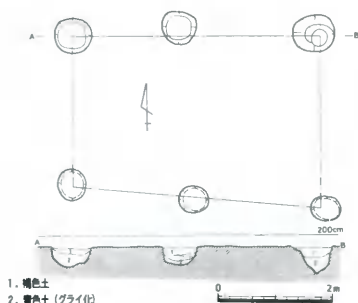
F調査区のほぼ中央部に位置する。東西方向に棟をもつ2×1間の掘立柱建物である。桁行343～362cm、梁行232～248cmを測る。各柱穴の心々距離は、北東隅より順に248cm・193cm・150cm・232cm・167cm・195cmを測る。柱穴直径約40cm、深さ25～40cmである。時期は小片の出土遺物から百・後・Ⅲに比定できる。（渡辺）



第45図 建物—1 (1/100)

建物—3（第46図）

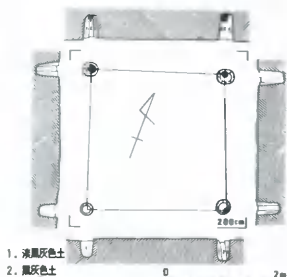
303—Fの北東部に位置し、堅穴式住居—4を切る。主軸方向を東西に持つ2×1間の掘立柱建物である。南側桁部柱穴は若干不安定であり、柱間距離は185～250cmとバラツキがある。柱穴直径60～70cm、深さ30～45cmを測り、柱痕は認められなかった。時期は百・中・Ⅰの堅穴式住居を切っていることより、それ以後であることがわかる。建物—1と類似使用数値がみられること等から弥生時代後期と推定可能である。



第46図 建物—3 (1/100)

建物—4（第47図）

303—Kの北側に位置し、1×1間の掘立柱建物である。面積約6㎡の小型であり、柱穴掘り方も24×24×45cmと小型である。柱痕径15～18cmをはかり、北東・北西柱穴底部にコナ材を利用した柱根が残存していた。時期については明確でなく、掘り方、規模等からは古墳時代と考えたほうが妥当であろう。



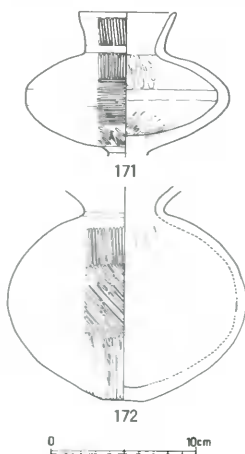
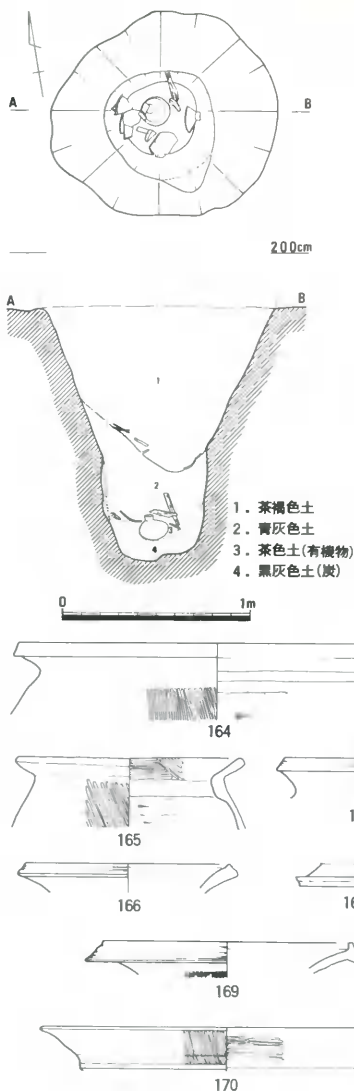
第47図 建物—4 (1/100)

（高畑）

(3) 井 戸

井戸—2 (第48図)

303—J 東側、竪穴式住居—10の西南150cmに位置する。上面がグライ化しており、天日に数日さらされた結果、円形にひび割れを生じたことにより判明した井戸である。正円ではなく、上端約120×107cm、深さ132cmをはかる。上端より約65°の角度で傾斜し、海拔100cmにて垂直に変換しながら約62cm下がり井戸底となる。井戸底の海拔高は38cmをはかる。遺物は上層より60cmまでに小片が約30点出土し、1・2層間に大きめの171・170等が出土している。約30cmの間層を持ち、3・4層間に169・172等が存在する。しかし、上下層出土土器は接合可能なものが含まれている。3層底にはレンズ状に草木、炭化材等が集中してみられ、ヒョウタン・桃の種子等が多く出土している。井戸底では遺物は何もみられず、底部は段状になっている。井戸掘り方ベースでは海拔65cm付



第48図 井戸—2 (1/30)・出土遺物

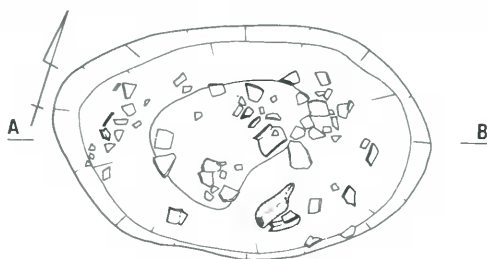
近にて暗茶褐色ピート層が壁周囲にみられ、南に向って傾斜している。百・古・Ⅲの井戸に形態は類似するが、井戸底レベルは井戸-2が65~70cmも深くはられている。百・後・Ⅱと考えられる。堅穴式住居-10と有機的な繋りを持つと考えていたが、井戸-2が若干古い時期にあたる可能性がある。

(高畑)

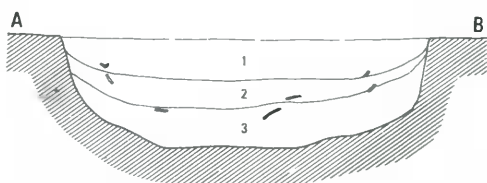
(4) 土 墳

土墳-25 (第49図)

304-Fの北側に位置し、土墳-26に近接する。長軸133cm、短軸84cm、深さ38cmを測り、



200cm



- 1. 茶褐色土
- 2. 淡灰色土
- 3. 灰褐色土



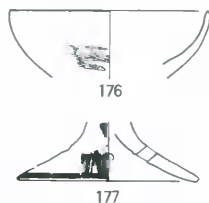
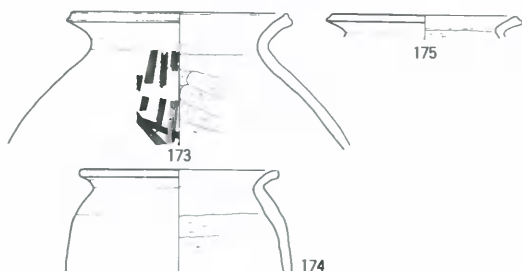
卵形状の楕円形を呈する。

土墳壁はかなり急傾斜で、屈曲して椀状の底面に移行する。土墳内の堆積状況は土墳縁部から中央へ流入堆積した様相を示す。また、2層・3層の上面には薄い炭の層を認める。土器は全体に散在し、いずれの層にも包含する。

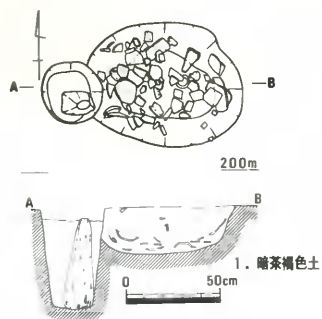
遺物は壺・甕・高杯等がみとめられ、小片化した土器が多い。百・後・Ⅱの時期と考えられる。(渡辺)

土墳-26 (第50図)

304-Fの北側に位置し、

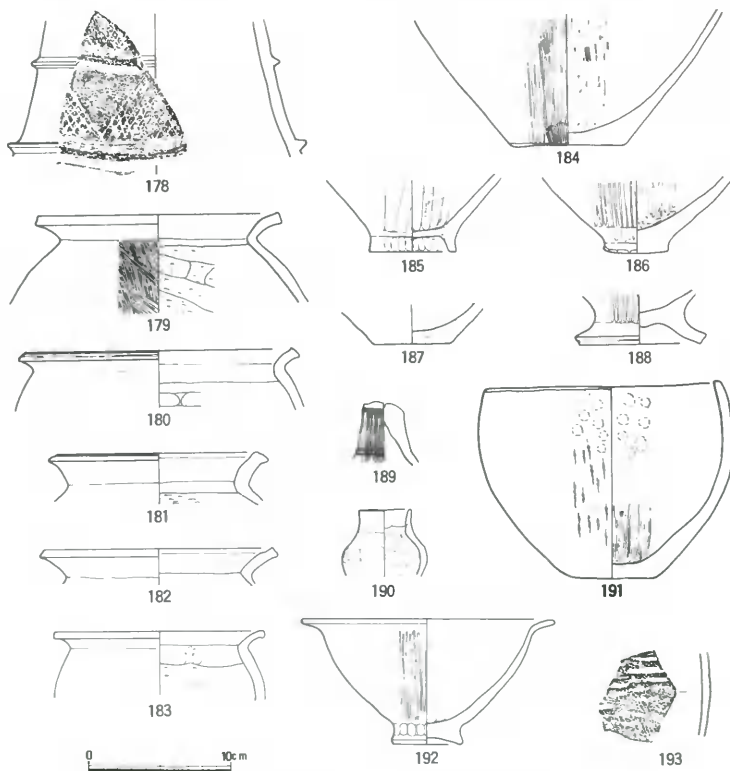


第49図 土墳-25 (1/20)・出土遺物



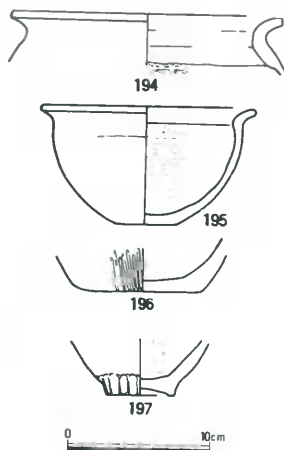
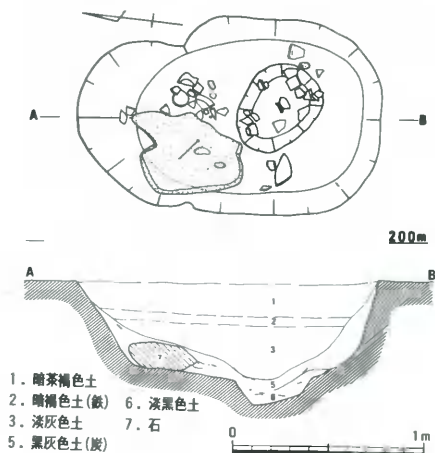
百・古・Ⅲの建物一9に切られた楕円形の小土坑である。84×66cm、深さ24cmをはかる碗状の土坑であり、東西に土坑一27、土坑一25と同時期の遺構が存在する。遺物は折重なるように土坑底に沿って分布する。遺物には壺、甕、高杯、鉢、小壺、台付鉢、タタキメをもつ甕等があり、すべて二次的に火を受けている。なかでも178の壺形土器頸部片は303—Fの土器盛りAにて接合可能な同一個体330が出土している。

時期は百・後・Ⅱの新相に比定できる。(高畑)



第50図 土坑一26 (1/30)・出土遺物

百間川兼基遺跡

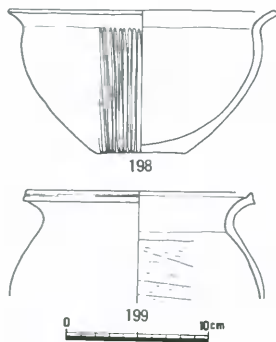
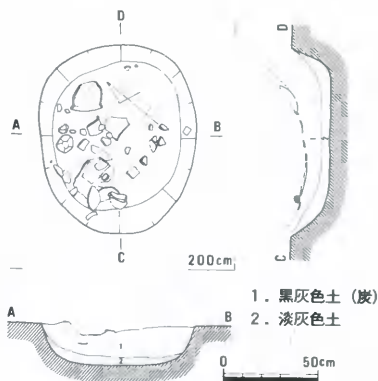


第51図 土坑—27 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

土坑—27 (第51図)

304—Fの北側に位置し、楕円形を呈する2段掘りの土坑である。160×104cm、深さ64cmにて、底部海拔高は115cmと測る。1段高い底部に50×40cm、厚さ13cmの軽石状の平石が設置されている。5・6層は黒灰色を呈し、炭・灰等を多く含む。遺物は灰層中に皿状に堆積し、下層にゆくにしがたい大型品が多く、炭は南側に多く分布する。遺物は鉢・甕の破片が出土している。

(渡辺)



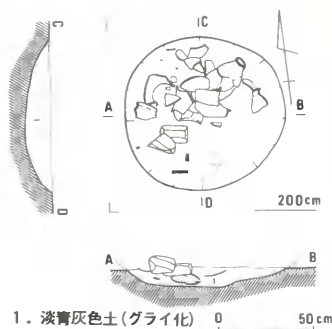
第52図 土坑—28 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

土壌-28 (第52図)

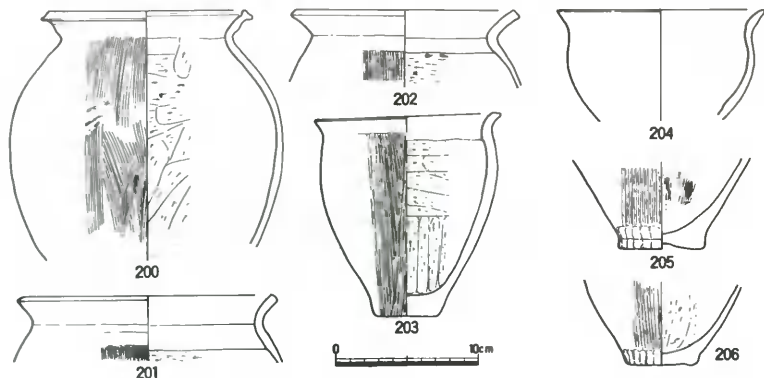
304—Fの南側に位置し、竪穴式住居-14の床面下より出土した土壌である。100×83cm、深さ19cmを測る楕円形の土壌である。土壌底海拔高は150cmである。土器および河原石がレンズ状に堆積し、その下位には多量の炭がみられた。下層の灰色土中にも若干であるが炭が入っている。

土壌-29 (第53図)

304—Gの東側に位置し、円形を呈する浅い土壌



1. 淡青灰色土 (グライ化)



第53図 土壌-29 (1/30)・出土遺物

である。86×82cm、深さ10cm、土壌底の海拔高は161cmをはかる。土壌内の土層は、炭・灰を多く含む暗褐色を呈する。竪穴式住居-7の覆土と類似するものである。

遺物は北側半分に集中し、土器は土圧により破砕された状況を示す、遺物には、甕・鉢がみられる。時期は土壌-27・28伴に百・後・Ⅱである。(高畑)

(5) 溝

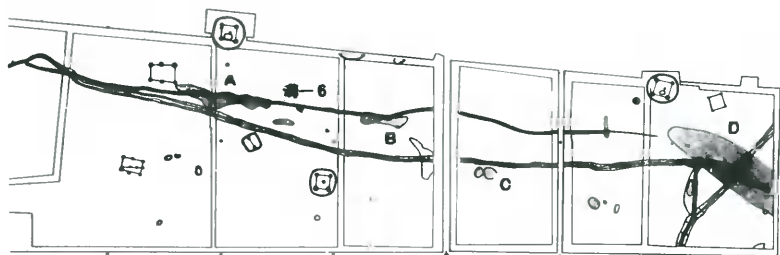
弥生時代後期の溝には微高地形状に沿って東西に走行するものと、水田に付随する畝^{けんぼ}畝^{けんぼ} (註26) との2通りが存在する。百・後・Ⅰ～Ⅳの溝は走行方向、位置、形状等に有機的な関連を持ちながら、なかには規模を大きくしながら同一コースを踏襲するものがみられる。これらの溝は303—E北側の微高地の高さが西に変換する地点に集中しており、水利の要所にあたる重要な部分と考えられる。弥生時代中期の溝も西側に15m移動した地点で類似形状を呈すること

などから弥生時代後期の溝と同一機能を果していた可能性が充分に考えられる。特に溝-6の西端部は自然に終る形でなく、西に向って高くなる溝が削平作業を受けて東側部分が丸みをもって急に終る形状を示す。

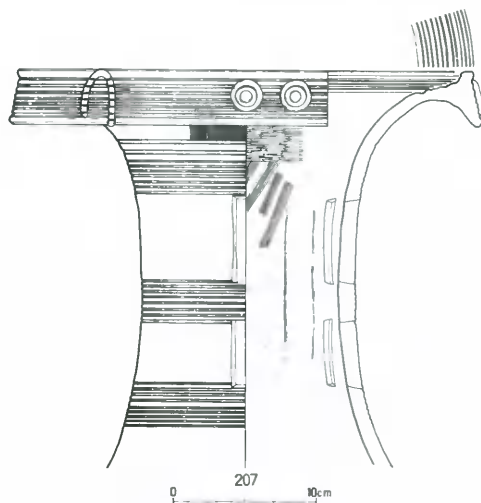
(高畑)

溝-6 (第54・55・59・70図)

大上田地区で最も北側に位置する溝で、303-Fより303-Jまで東西約100mが確認できる。しかし、303-J付近より地形の下がりに伴い顕著にあらわれてこない。百・中・I~IIの溝-1が埋没する途中にて、その凹部中央に幅50cm、深さ20~30cmの溝が開設された状況を呈

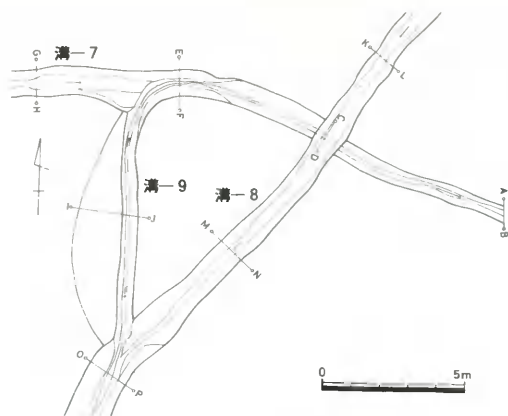


第54図 溝-6 (1/1000)



第55図 溝-6出土遺物

する。弥生時代中期前半の溝2・3・4と同様に微高地地形に即して設けられており、機能的にも大きくは異なるものではないと考えられる。すなわち、溝底は一方向的な角度を持たず若干の凹凸が存在し、レベル的(海拔110m前後)には近似数値を呈しており、他方からの水圧による流水の可能性が考えられる。微高地を縦走する溝は南に若干下降するものが多いのに比べて、横位の溝底は海拔高に近似数値を示すものが多い。



第56図 溝-7・8・9 (1/250)

縁部を西にして倒れた状況を呈する。百・後・Ⅰにあたると考えられる。この時期には溝の機能は果していないと考えられる。

(高畑)

溝-7 (第56～63・70図, 版図6-2・9-2)

303—E中心付近より304—E北側まで調査区中央を走行し、延長約133mをはかる。西端では溝-6同様に削平により消失し、東端は溝-9と接続し、溝-8と交差する。304—Jを通過する溝部分では東にレベルダウン箇所がみられる。溝-9と連絡した溝は大地調査区301—Sまで継続していると考えられる。溝上端幅約80～100cm, 下端約35～40cm, 深さ40～60cmをはかる。断面形は底に若干丸みをもつV字形を呈し、推積土は2層に分層が可能である。場所の高低差にもかかわりをもつが、304—J・Kでは最上層に淡茶褐色砂がみられ、水田を埋没させた洪水砂と同質である。下層は炭混りの黒色積土が堆積しており、層中に数多くの土器が比較的まとまって出土している。その出土状況は溝の埋没状態に即応するかたちである(第58図)。溝中の比較的まとまったブロックは後述する土器溜りA・B・C・Dの分布と一致するものであり、場所に対する同一意識の働いた跡である。

出土遺物には完形品に近いものが多く放棄されており、長頸壺・壺・甕・鉢・高杯等の土器類と大型蛤刃石斧片を叩石に転用したもの等がみられる。

溝-7は百・後・Ⅰの溝を切っていることより、溝-6より新しく、埋没している土器によれば、百・後・Ⅱにはすでに廃絶していたものと考えられる。

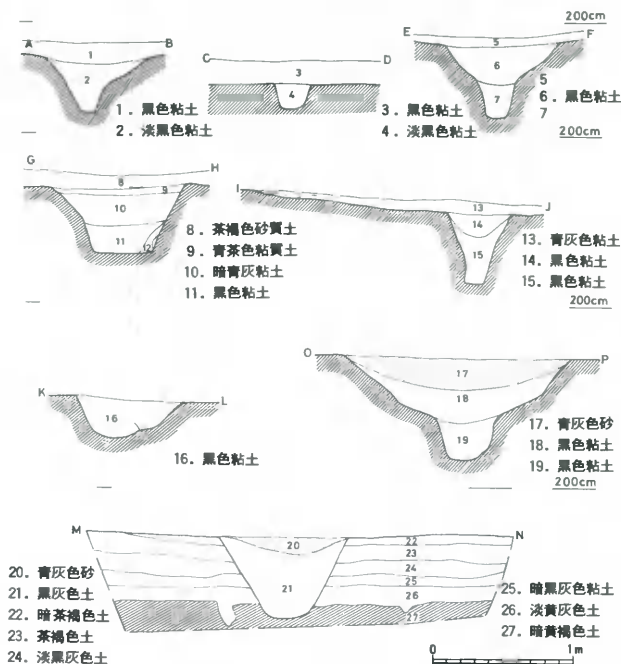
(浅倉秀昭・高畑)

溝-8 (第56・57図, 図版9-2)

304—K中央を北東より南西に幅を拡大しながら走行する溝である。溝上端部幅約75～160

溝-6の場合は常時流水があるのではなく日常は底部に淀んでいる状態で居住地の排水機能を有していたものと考えられる。また、畑地に関する機能も考慮しなければならない。

遺物は溝内にほとんどみられず、303—Fにて完形に近い器台207が1点出土している。溝底より約17cm浮いた状態で口



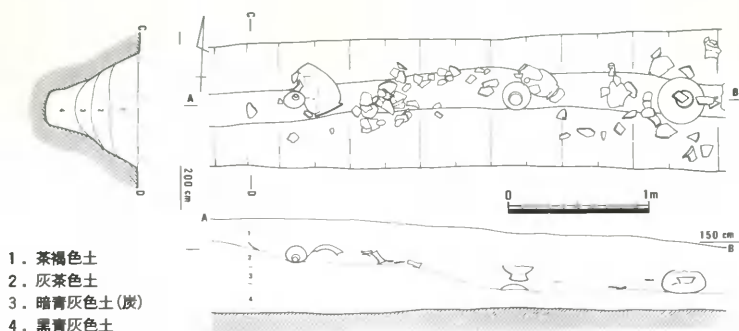
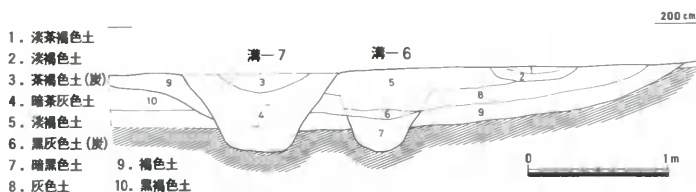
第57図 溝—7・8・9 ($\frac{1}{40}$)

cm, 下端部幅約50~100 cm, 深さ約28~47 cmをはかる。底部に丸みをもち, 断面形は碗状を呈する。溝底は北側で海拔高110 cm, 南側では117 cmをはかり, 微高地地形の凹地中央である溝—9の交差部に南北より集水することになる。上層には水田を埋没させた砂が堆積しており, 下層は黒灰色を呈する。遺物はほとんど確認できず, 百・後・Ⅲの甕小片が16層より出土している。北より南に傾斜する微高地地形を考慮に入れると溝—8は南側に流れるものであろう。溝—8北東, 東苗代調査区には溝—9が枝分れをすると考えられる中規模の溝—41が存在し, 溝—8も溝—9同様に枝分れするものと考えられる。すなわち, 東苗代調査区を東西に走行し, 今谷遺跡大地調査区の302—Sに一部あらわれている溝—41を中心にして, 百・後・Ⅱ~Ⅳの溝が分流する形態をとっている。同一の目的に対して, 溝が若干場所を移動しながら同一機能を果たしている形状を認めることができる。

(高畑・浅倉)

溝—9 (第56・57図, 図版9—2)

304—Kより302—Sまで延長180 mを測る。東側より西に向って走行し, 304—Kで屈曲

第58図 溝-7 ($\frac{1}{40}$)第59図 溝-6・7 ($\frac{1}{40}$)

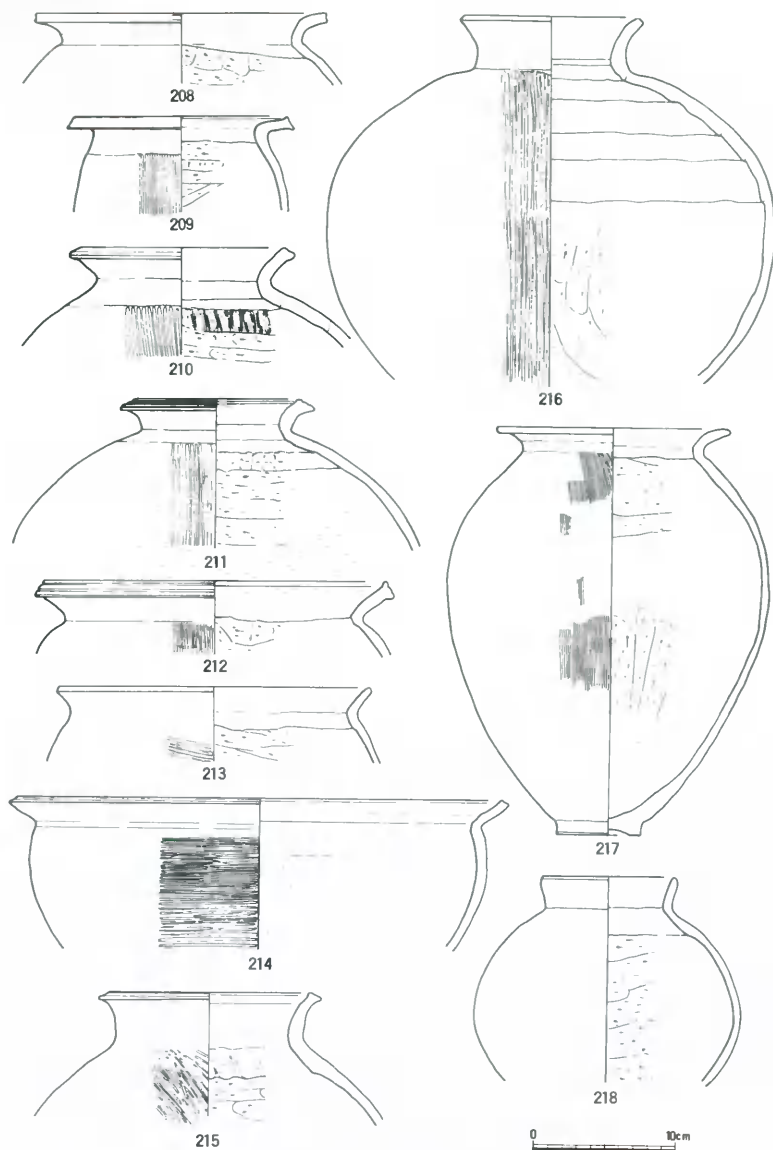
し南へ下降する溝である。上端幅約 50～100 cm，底部幅約 10～20 cm，深さ 35～57 cm をはかる。溝-7・8・9 の交差する 3 本の溝の中では最も古く，南へ下降するコーナーに西より延びてくる溝-7 が接続し，両溝が同時か，溝-7 がやや遅れた状態で存在していたことが考えられる。さらに溝-8 に切れられ，南端では溝-9 同一コース上に重複する形状を呈している。

溝-7 と同様の埋没状況を呈し，百・後・Ⅱの遺物が溝中層を中心にみられることより，百・後・Ⅱの時期には廃絶していたと考えられる。（高畑）

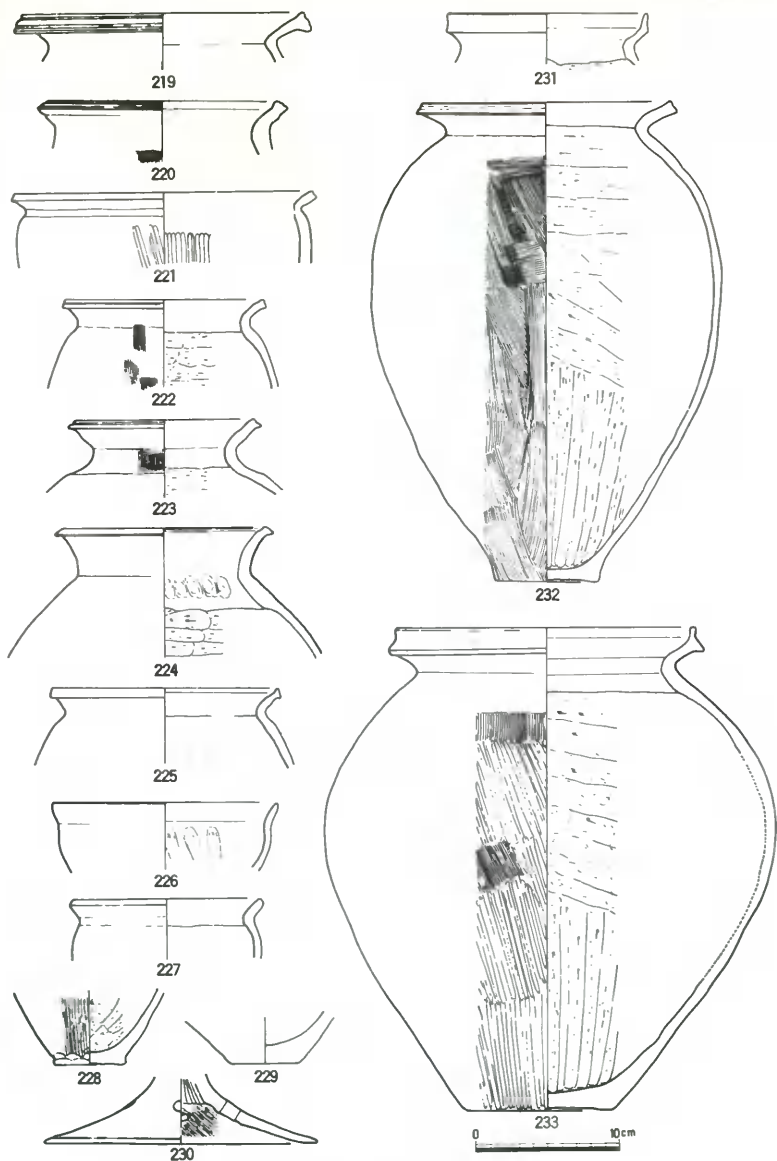
土器溜り-A（第33・64～69図，図版9-1）

303-F・Gの境界を中心にして東西約 20 m，南北約 4 m の範囲内に遺物が分布している。溝-1 の自然堆積途中の凹地を廃棄場所に利用したものである。その凹地底は海拔高約 122 cm をはかり，炭・焼土が特に下層に目立ち，海拔 170 cm まで土器片を中心に遺物が投げ込まれている。廃棄場所は堅穴式住居-6 の南側約 8 m の所に位置する。

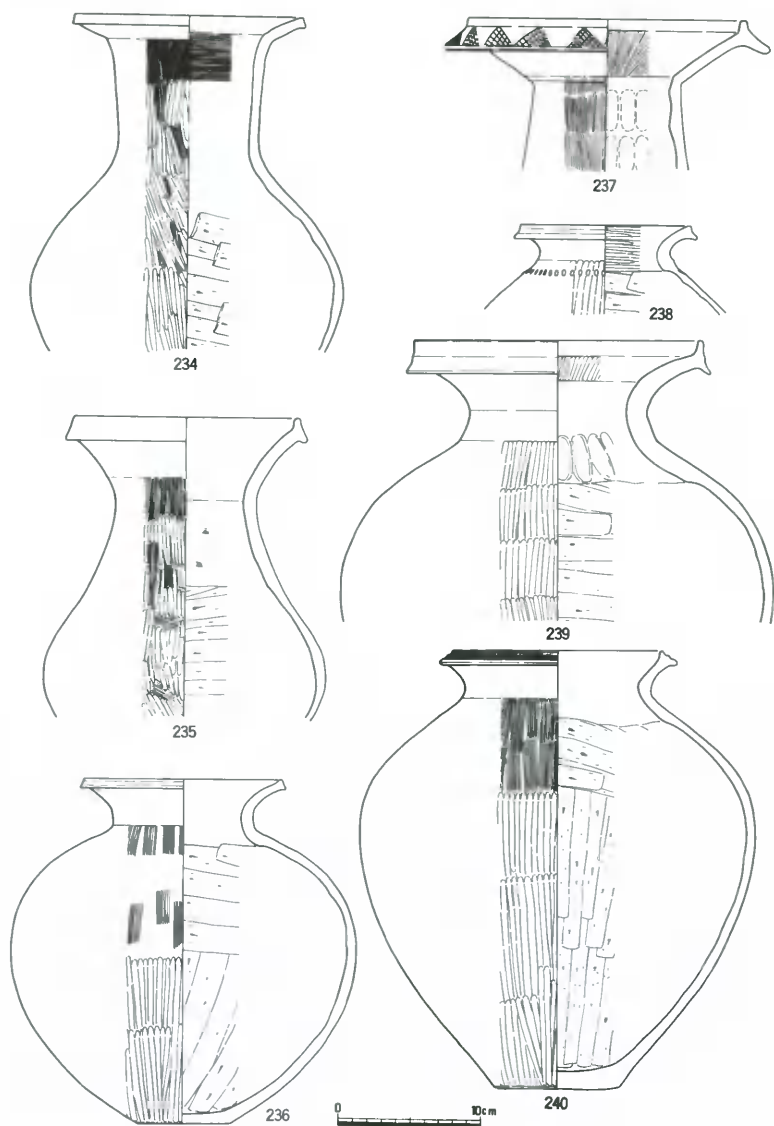
遺物，なかでも土器類は大半が破砕されており，何重にも密着して出土する部分と，散乱している部分とがある。破損および使い古したものを廃棄する場所と考えられる。大型片を中心



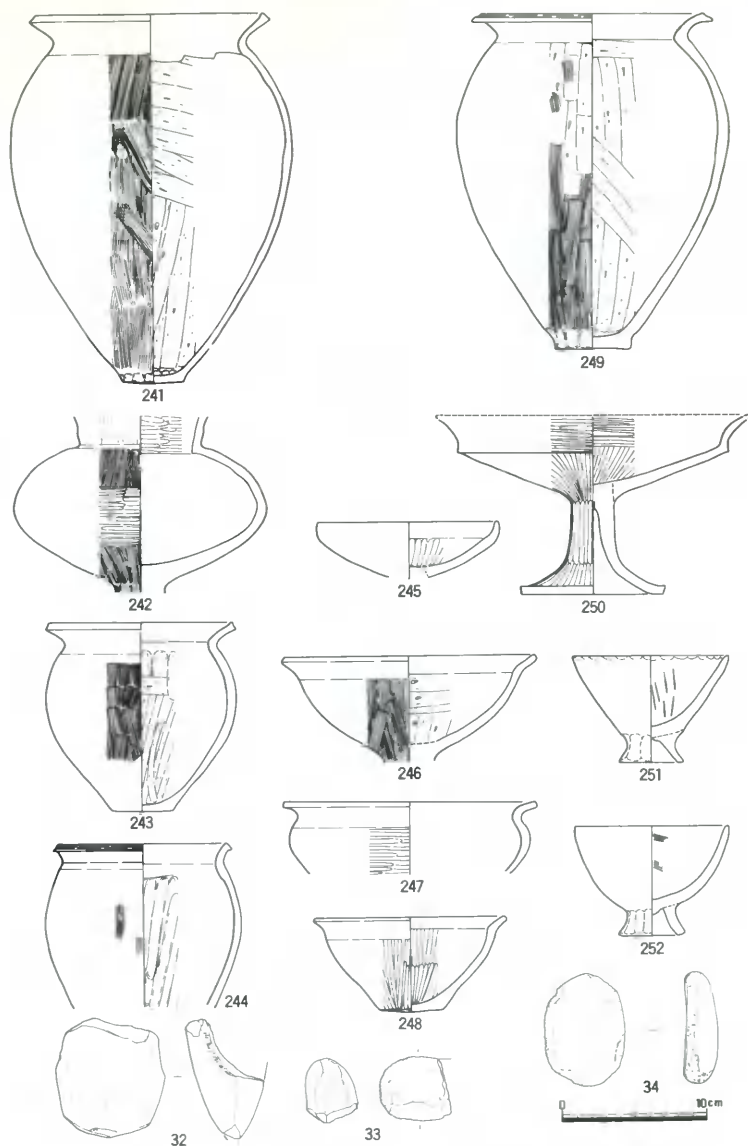
第60図 溝一7出土遺物(1)



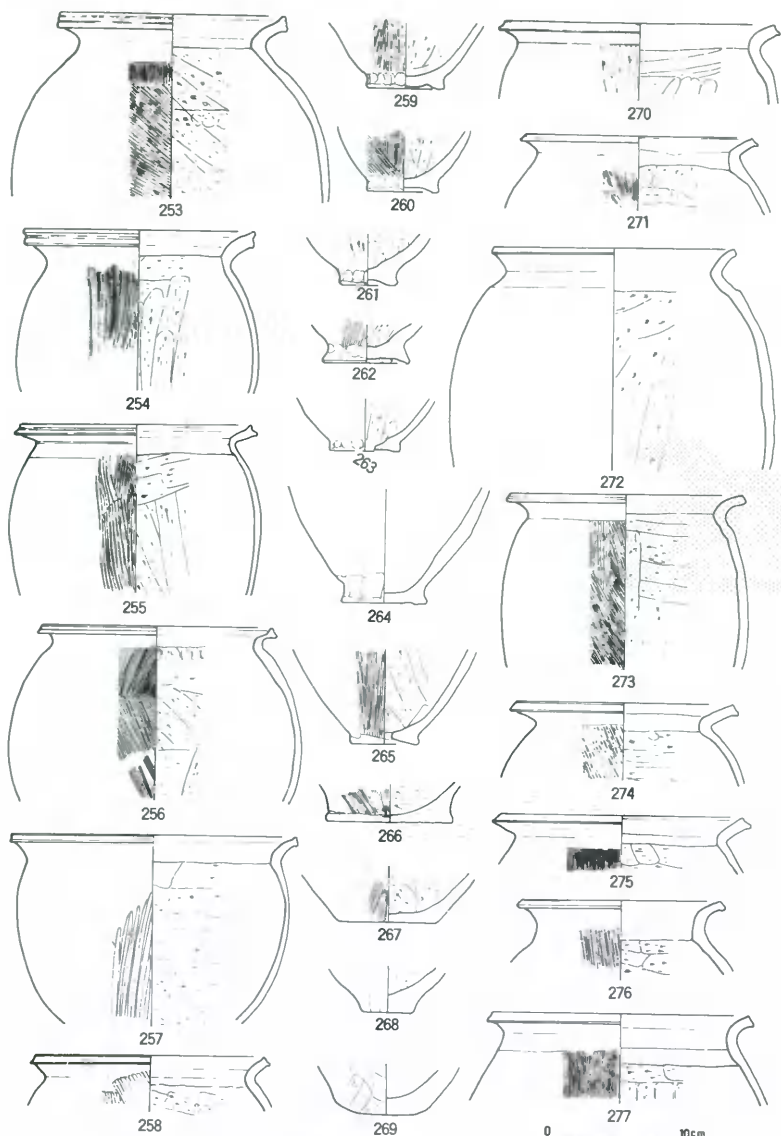
第61図 溝一7出土遺物(2)



第62図 溝一7出土遺物(3)



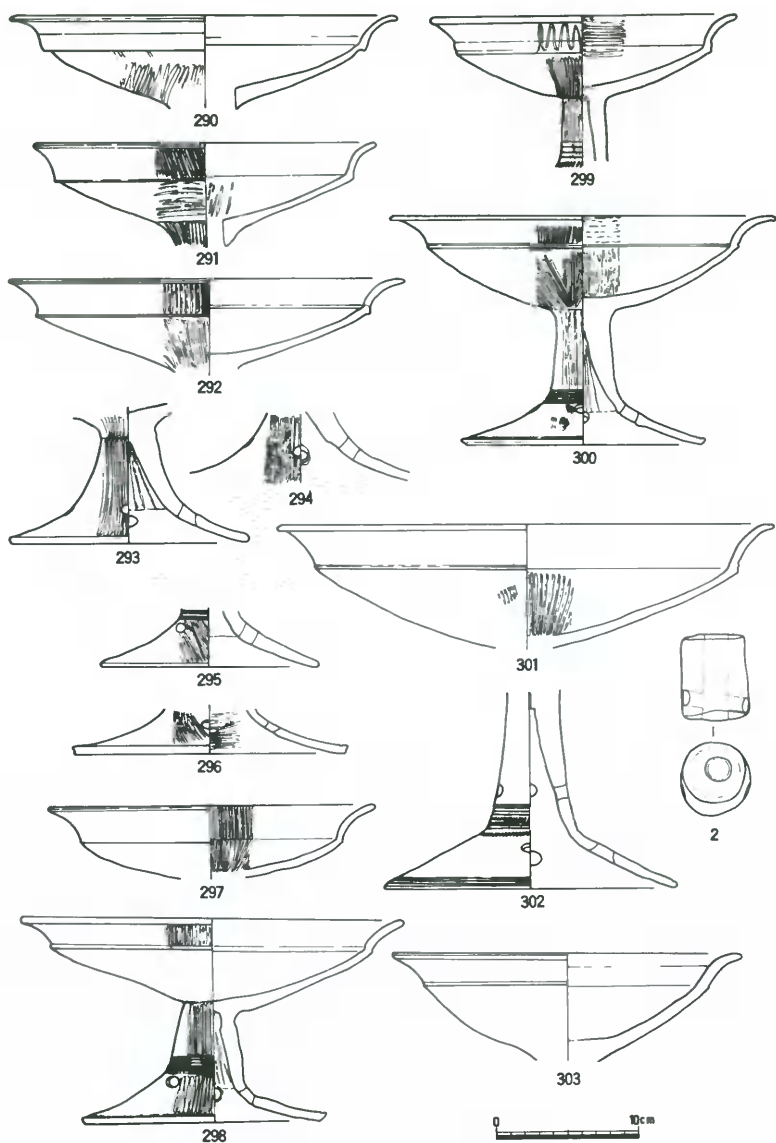
第63図 溝-7 出土遺物 (4)



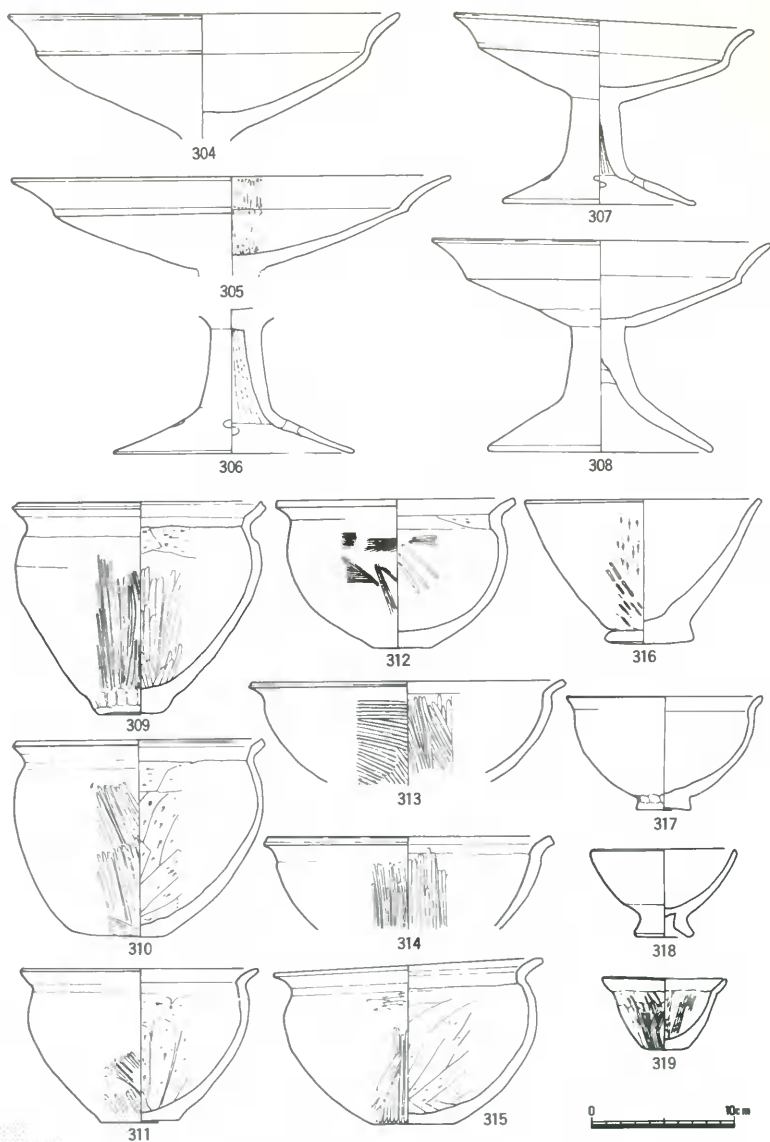
第64図 土器溜り-A 出土遺物 (1)



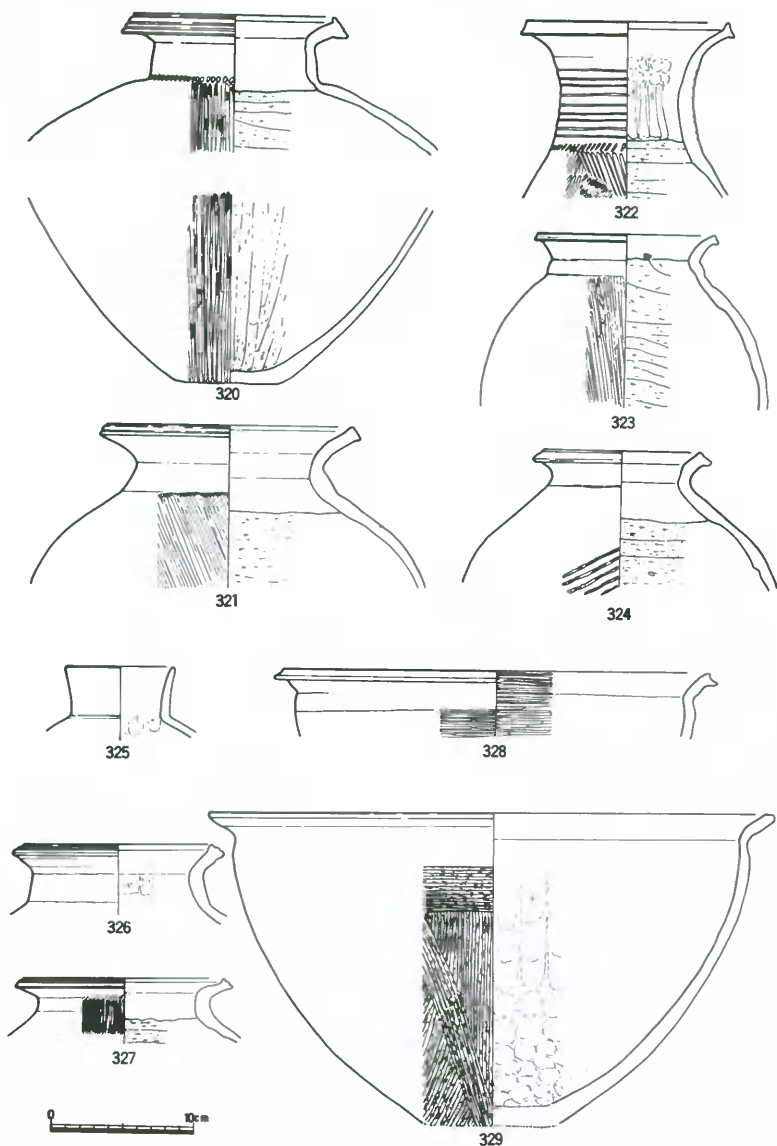
第65図 土器溜り-A 出土遺物 (2)



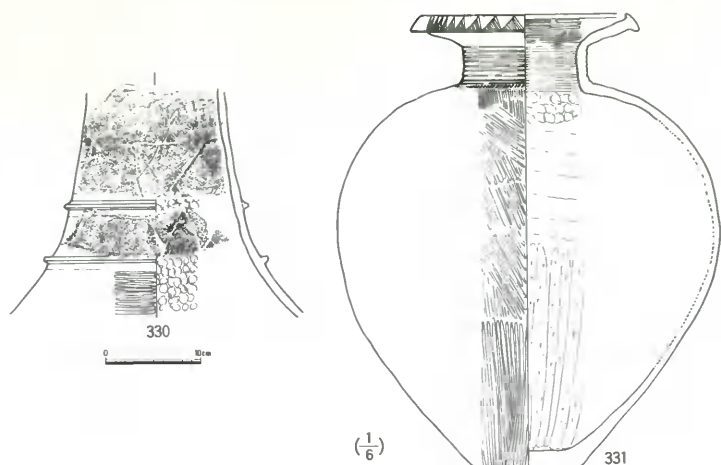
第66図 土器溜り-A出土遺物(3)



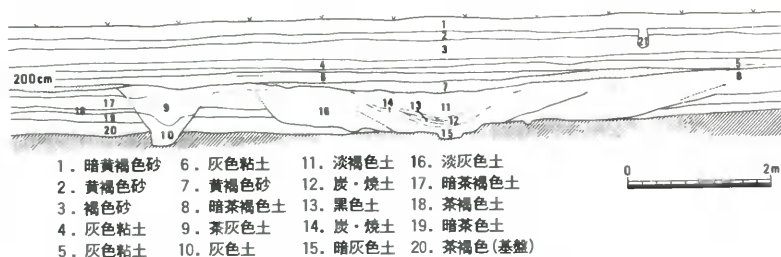
第67図 土器溜り-A 出土遺物 (4)



第68図 土器溜り-A出土遺物(5)



第69図 土器溜り-A出土遺物 (6)

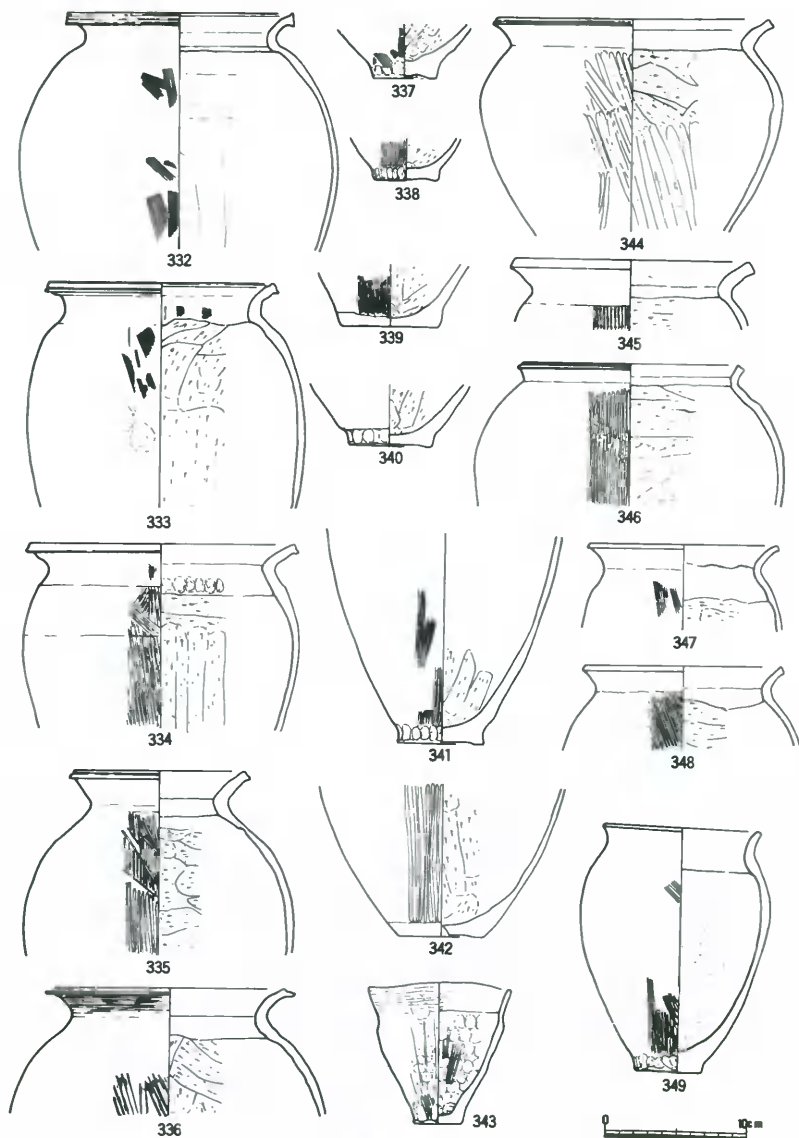


第70図 溝-1・6・7土層断面 (1/80)

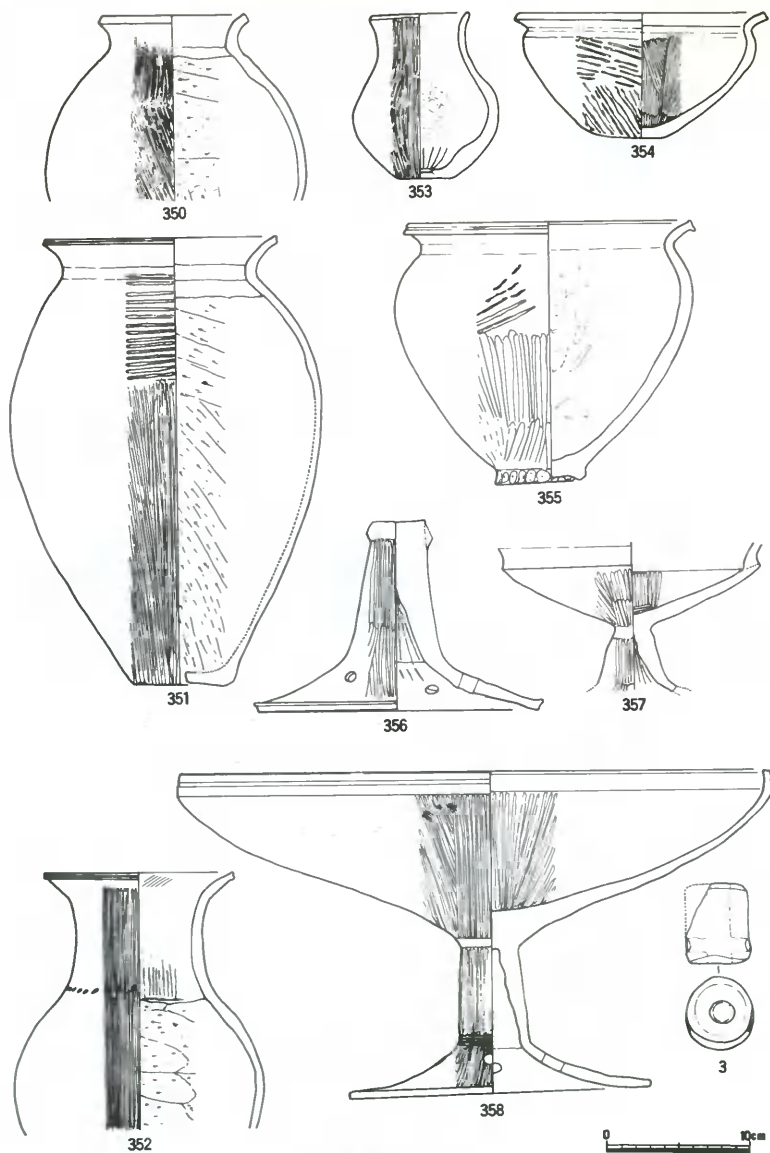
に実測を行ったが、79個体中に甕37・高杯18・鉢13・壺10の器形がみられ、甕が圧倒的に多いようである。甕のなかには従来発見例の少いタキメを有するもの9点、鉢316にもみられた。また330の壺形土器は土壌-26内の破片と接合可能である。高杯・鉢等の器形はバラエティに富み、まったく同じというものは存在しない。時期は大きく百・後・Ⅱの範疇に入るものであるが、廃棄量等を考慮すると同時的な存在には限定しがたい。

土器溜り-B (第33・71・72図)

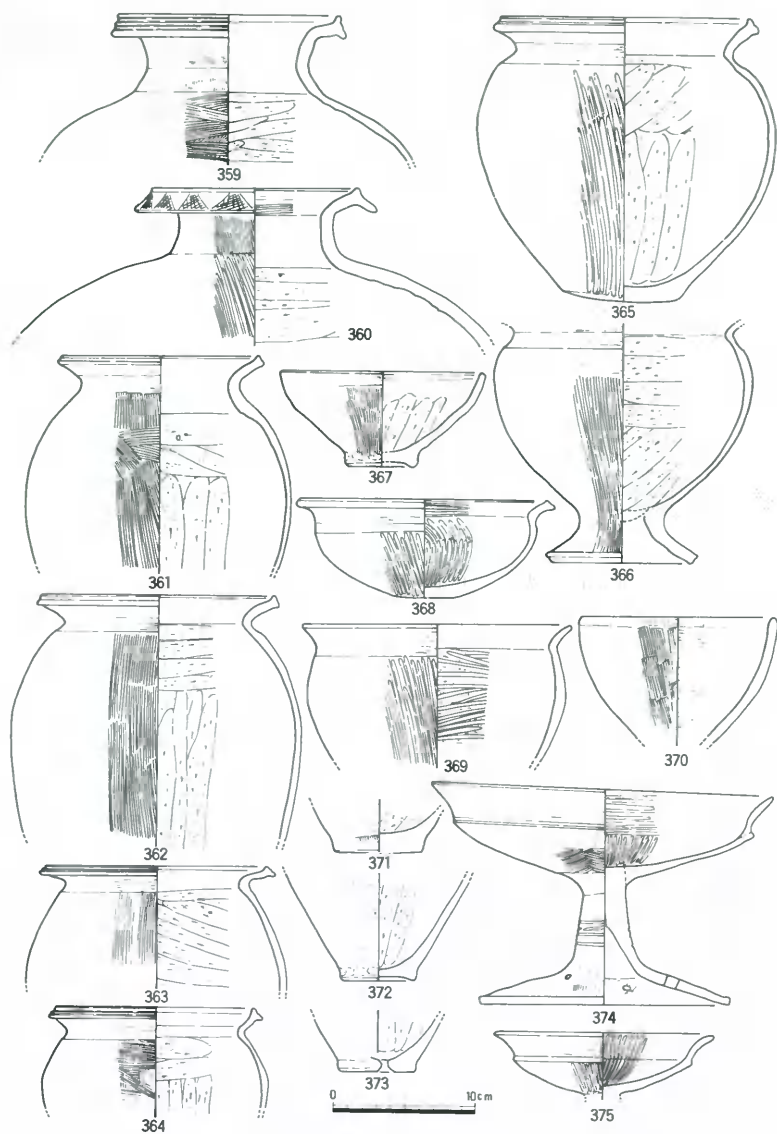
303・4-Hの中央部に位置し、2ブロックに分れる。北側ブロック東西約9m、南北約2mの東西に長いもの、南側ブロック南北約7m、東西約3m。南北に長い2通りの形状を呈す



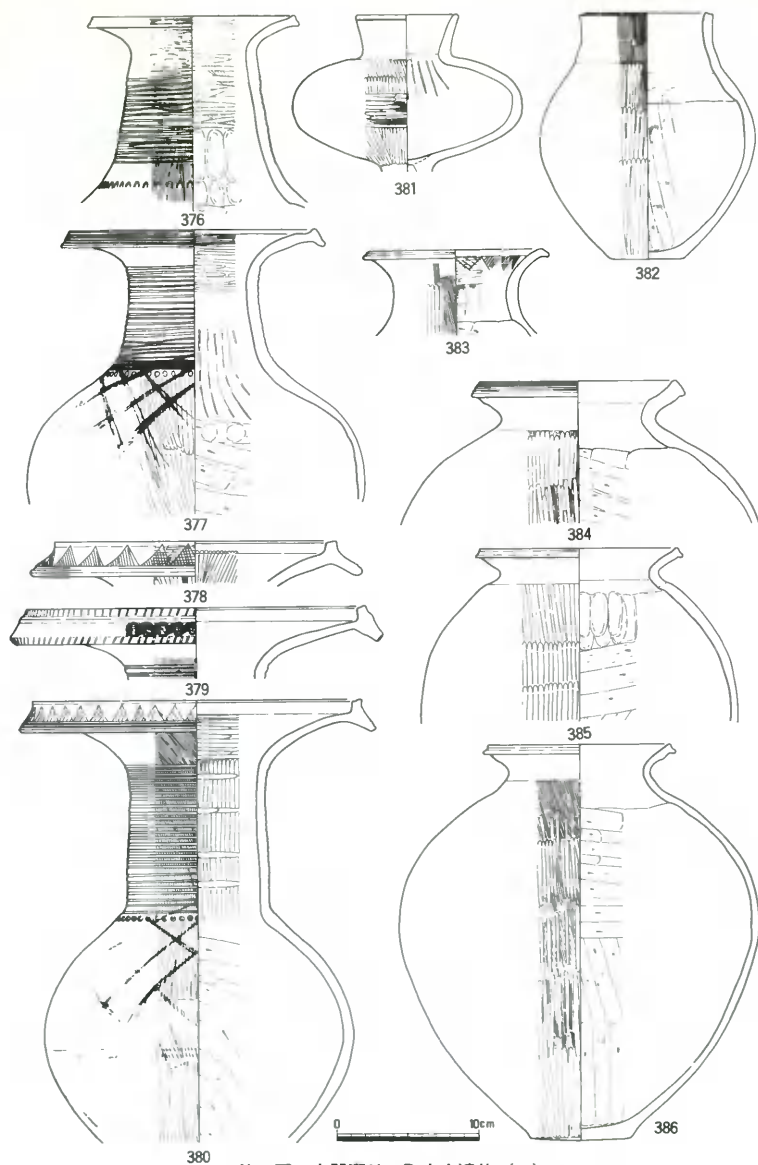
第71図 土器溜り-B出土遺物(1)



第72図 土器溜り-B出土遺物(2)



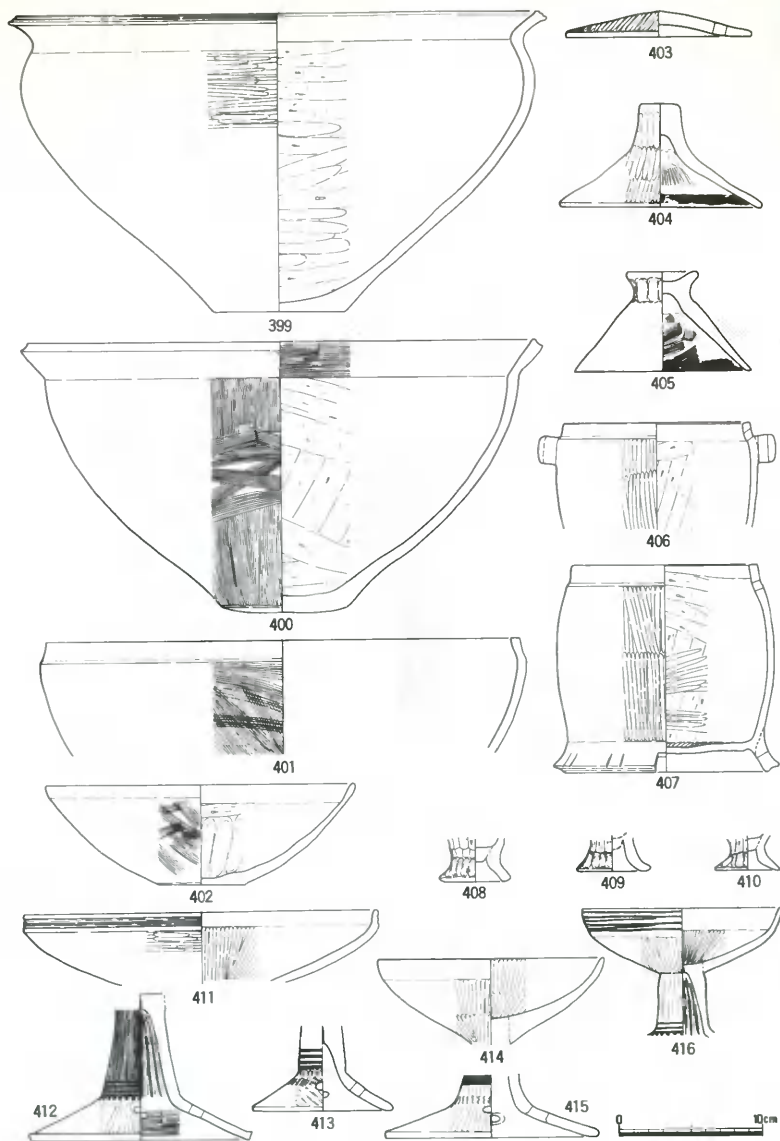
第73図 土器溜り—C 出土遺物 (1)



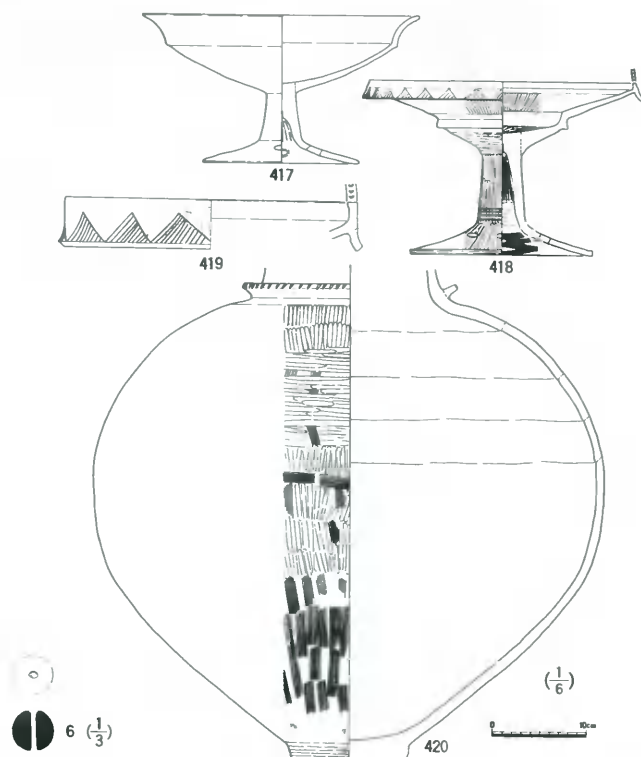
第74図 土器溜り-D出土遺物(1)



第75図 土器溜り-D出土遺物(2)



第76図 土器溜り-D 出土遺物 (3)

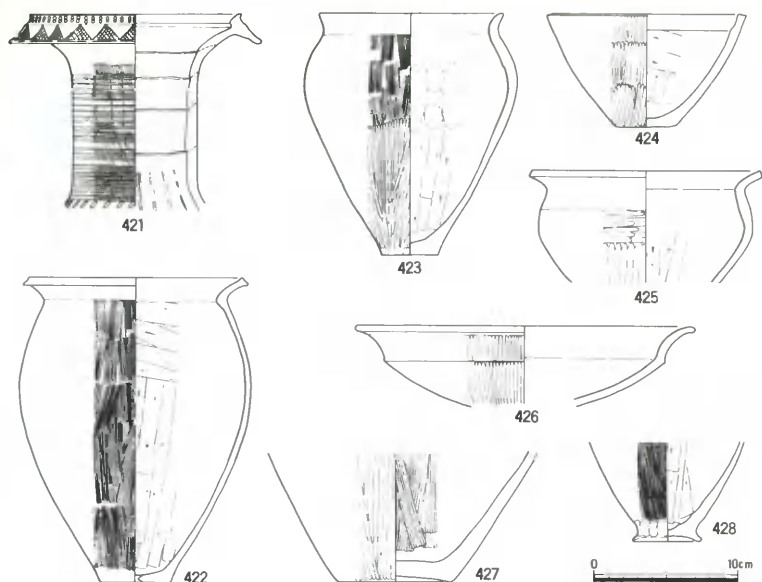


第77図 土器溜り-D 出土遺物 (4)

る。土器溜り-Aと同様に溝-1の埋没状況に即して凹地に投げ込まれたものと、溝-7の凹地に投げ込まれた両者がある。遺物では土器溜り-Aと同様に甕が多く、鉢・高杯・壺等がみられる。タタキメを有するものが認められ、底部に穿孔を有する 351 の甕、354・355 の鉢等がある。他に3孔を有する土鍾が1点出土している。

土器溜り-C (第33・73図)

304-Iの北側に位置し、溝-7南側を中心にする凹地内に認められた。東西約4m、南北約2mの範囲内に集中し、比較的完形品に近いものが多い。土器溜り-A・B同様に個体数は甕・鉢・高杯・壺の順序が存在する。溝-7の中層出土の遺物とほぼ同時期に廃棄されたと考えられる。百・後-IIの範疇のものであるが、小型化した高杯がみられる。



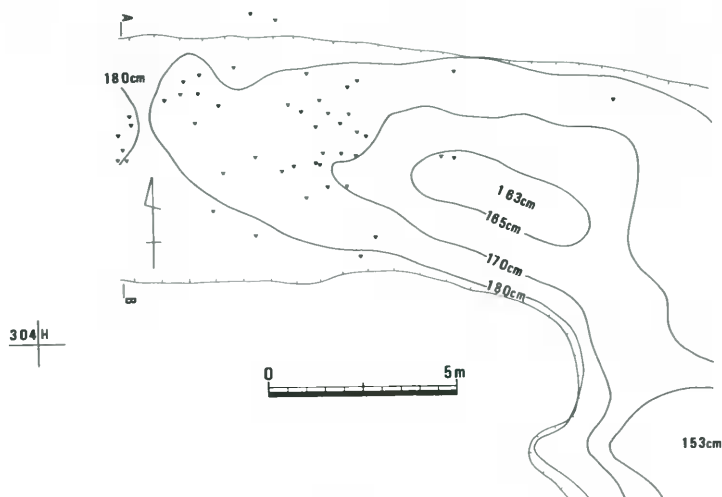
第78図 土器溜り-D 出土遺物 (5)

土器溜り-D (第33・74～78図)

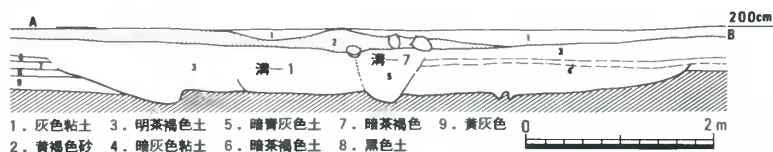
303・4-Kの中央部に位置し、調査区では最大規模を有する土器溜りである。長軸約20m、短軸約7mの範囲内に分布し、特に北側部分に集中している。竪穴式住居-10の南側4m付近より変換する凹地肩口に折重なって廃棄されている。このような廃棄状況は竪穴式住居-6・9等と土器溜り-A・B等の位置関係に共通点を有する。

本土器溜りは、水田埋没砂と同様の洪水砂を除去すると、溝-7・8・9等の上端凹状部分が出表する。深い所での海拔高は127cmをはかり、すでに場所により土器溜り底より低い部分もあらわれてくる。この間には、遺物は見当らず、黒灰色土を約5～10cm除去すると遺物が出土し始める。最高部の遺物は海拔高155cm、最低部では108cmをはかる。土器溜り-Aは溝-7と同時に廃棄状況を呈し、溝中層に同様の遺物が認められる。溝-8の上面には、土器溜りの遺物は存在せず、土器溜りより新しく開設されたことを裏づけている。

遺物は完形品に近いものも多く出土しており、器形の明確なもので約60点を数える。長頸壺・壺・直口壺・甕・鉢・蓋・高杯等がみられ、個体数では甕・鉢・高杯・壺の順となる。406・407等のような樽形の器も出土している。百・後・Ⅱの範囲内におさまるものである。



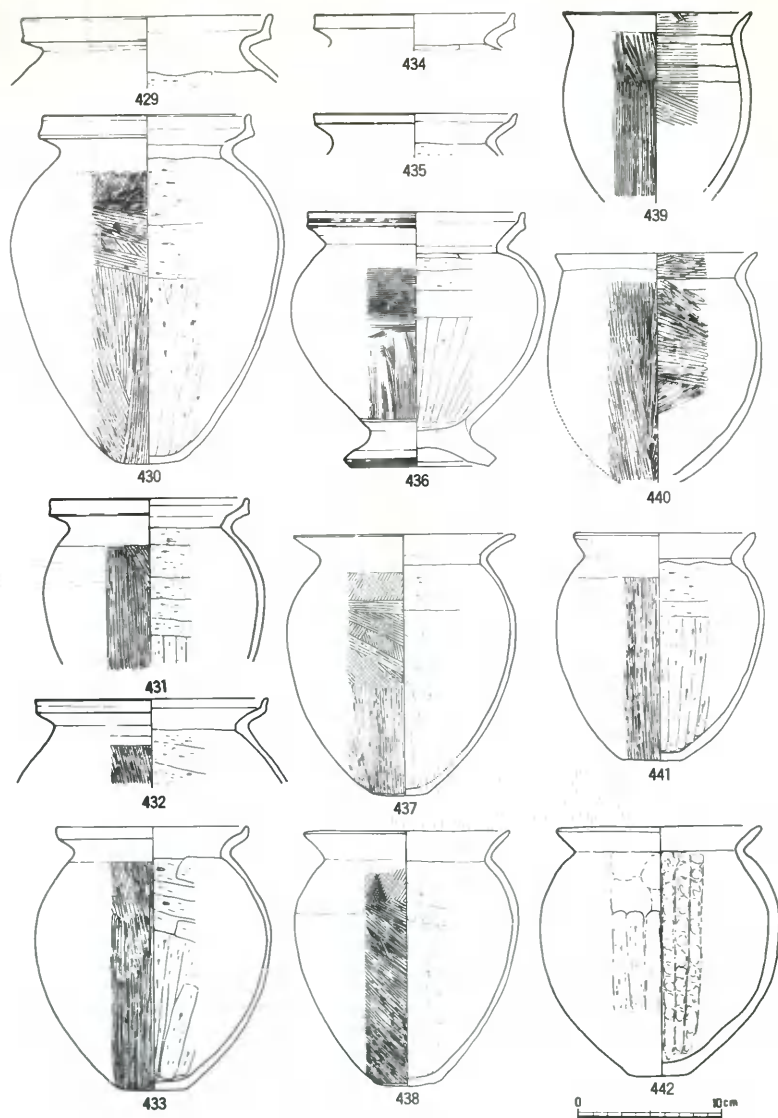
第79図 土器溜り-E (1/150)



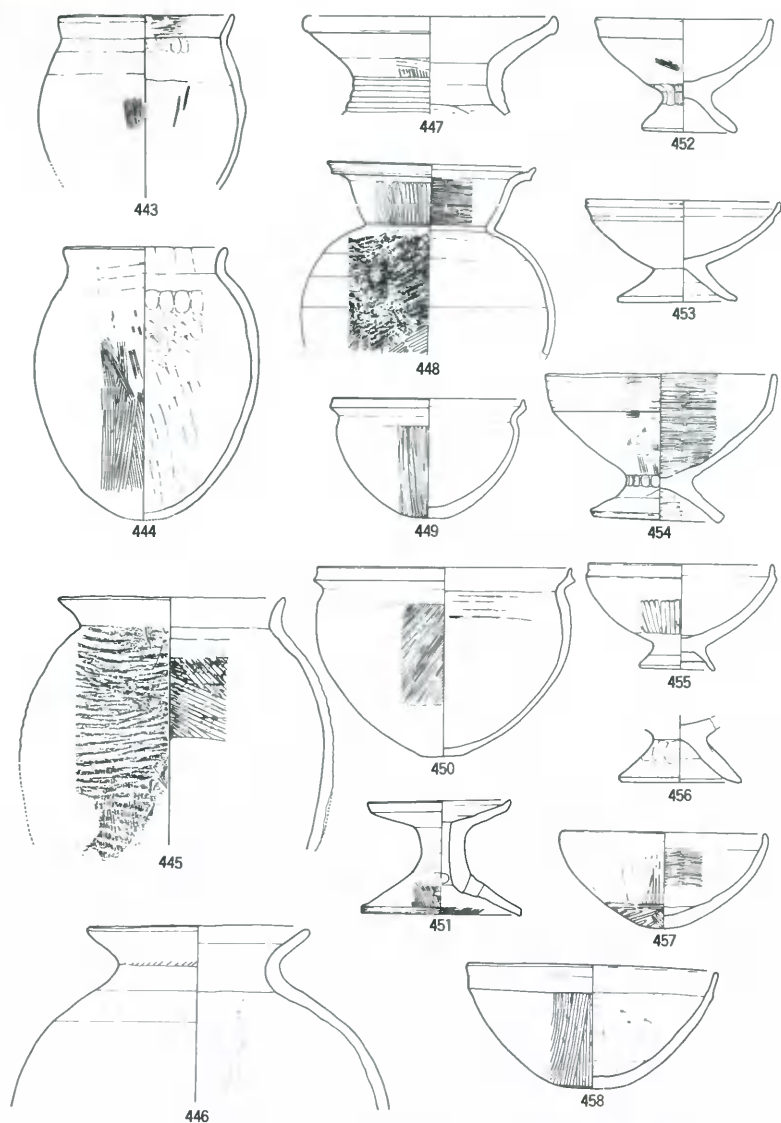
第80図 土器溜り土層断面 (1/60)

土器溜り-E (第80～83図, 図版 7-1)

303—Hの西方凹地を中心に、長軸8m、短軸2.5mの範囲内に遺物が分布する。溝-1の埋没過程に溝-6が開設され、埋没後微高地凹部に溝-7が若干位置を南にずらせて開設され、その廃棄後の凹地に水田を埋没させた洪水砂が堆積したものである。砂の厚さは25～30cmをはかり、東西に走る幅約6.5mの凹地を埋めている。北側上流から洪水により押し流された遺物が凹地底を中心に砂中より約48点検出された。遺物の海拔高は163～180cm間におさまり、凹地底には集中せず、170～180cm間に最も多いようである。その出土状況は大きく8～9ブロックに分れ、単独、および有機物にひっきりと並んだ姿をとどめるものもある。ブロック別に記すと、437・443・449・453が西端部、450・460・462・467・430・431・



第81図 土器溜り-E出土遺物(1)

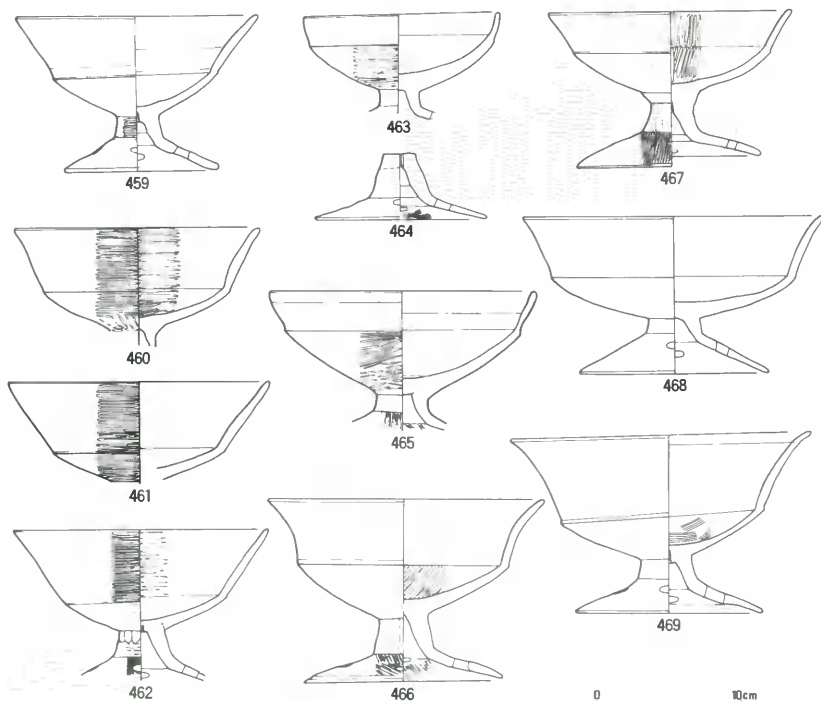


第82図 土器溜り-E出土遺物(2)

434・436・438・439・441・445・446・448・451・412・454・455・456・457・468が最高の17点、433・442・432・435・463と東に向かって分布する。

遺物は甕17点・壺3点・鉢9点・高杯11点・器台1点が出土しており、完形品になるものが多数である。445・448の甕・壺にはタタキメが施されており、胎土が若干他の土器と異なる。447の長頸壺はいわゆる上東式の系譜をひくものであるが、最も新しい段階のものと考えられる。甕・鉢の底部は接地面に若干平底を残すのみであり、丸みを持ち始めている。高杯では口縁、体部高が最大になる時期のものと考えられ、百間川原尾島遺跡の在岸用水D-3（註27）より若干先出的な様相を呈する。

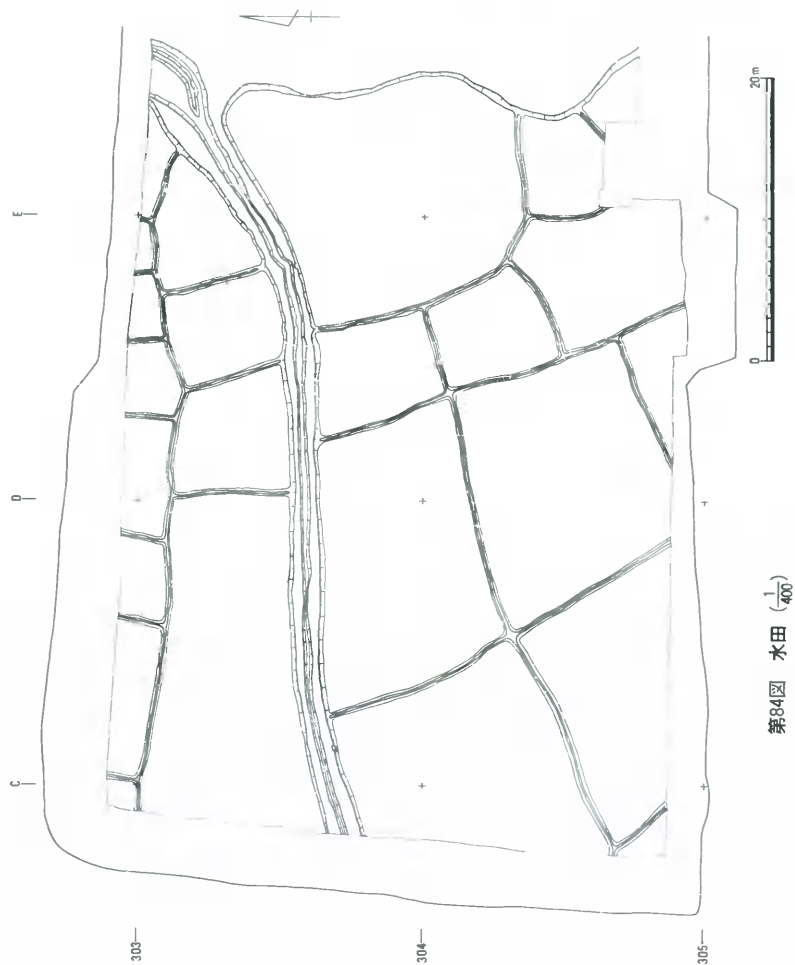
酒津遺跡（註28）の高杯の比較では、土器溜り-Eの脚部はさらに短脚にて、体部高は全体に高い形状を呈する。百・後・IV～百・古・Iの時期が考えられる。（高畑）

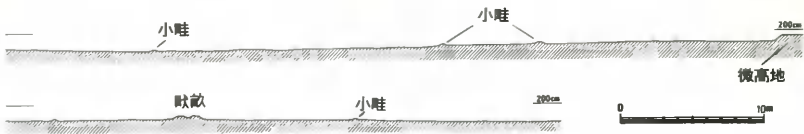


第83図 土器溜り-E 出土遺物（3）

水田（第84～89図，図版 7・2・8-1）

水田は，東西幅約 400 m に及ぶ微高地の西側低位部に営まれたもので，全面が厚さ約 20 cm の洪水砂で覆われていた。洪水砂除去後検出できた水田枚数は，合計 24 を数えた。また，この他にも水田に伴う畦畝^{けんぼ}が 1 本検出できた。畦畝は，微高地を流走してきた溝を水田部へと続け，



第85図 水田304ライン(上)・Dライン(下)断面 ($\frac{1}{400}$)

水田番号	面積 (㎡)
8	211.7+α
9	59.0
10	44.9
11	40.3
12	179.8+α
13	201.6(推)
14	55.4
15	254.7
16	205.5(推)
19	49.3
23	38.2(推)

第86図 水田区画面積一覧図

さらにその溝からの用水を水田面へと導く機能を有するものである。また、畦畝上面中央部に位置する溝の両脇には農道としての平坦面が付属する。形態的には、上端幅 180～200 cm・下端幅 200～300 cm・水田面との比高15～20 cmを計り、断面台形を呈する。

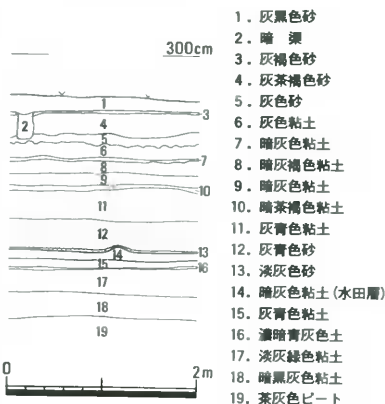
水田は、この畦畝によって南、北に2分される。基本的には南・北水田ともに畦畝と微高地の形状に沿った展開をみせる。個々の水田面積は、第86図の通りである。傾向としては微高地沿いが一般に小さく、微高地から遠のくにしたがい規模も拡大する。ただし、16の水田に関しては例外で、微高地沿辺の小区画水田の中にあつては極めて広い面積を有する。なお、8の水田は、当初、畦畝以北の畦のとりつきの傾向からさらに南北方向に2本の畦の存在が予想されたが、精査にもかかわらず確認できなかった。

水口は畦畝上にも、また水田を区画する小畦のいずれの箇所にも検出できなかった。しかし、畦畝上面には、水利との有機的な関係を想像させる人頭大の平石が1個検出できた。

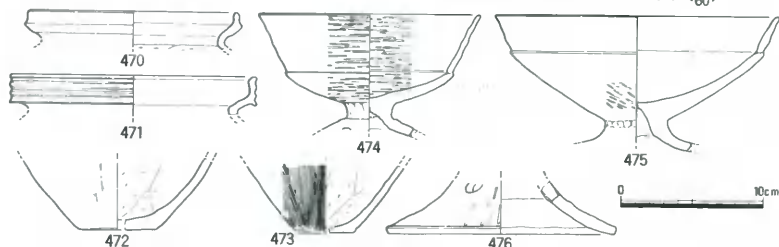
水田の時期は、従来から言われている通り百・後・IVである。それは、本水田においても同

時埋没を示す洪水砂の存在と、他に洪水砂層上面から掘削された土壌—35出土の壺 580 が百・古・I と水田の洪水による埋没時期の下限を示すこと等からも首肯される。

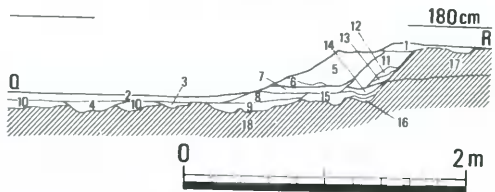
ところが、これ以外にも微高地の一部土層断面（第98図）に百・後・IV に先行する2枚の水田層の存在が認められた。そして、その層序からは、水田が埋没する度に新たに水田が営まれ、しかもその都度水田の東端が若干ではあるが西に移動していったことが看取できた。しかし、今回は残念ながらこれら水田層の時期を言及できるだけの資料は検出できなかった。



第87図 低位部土層柱状図 (1/60)



第88図 水田層出土遺物



1. 淡灰黄色細砂
2. 暗灰色粘土（水田層）
3. 黒灰色粘土
4. 暗青灰色粘土
5. 暗灰褐色土
6. 淡黄灰色微砂
7. 暗灰褐色粘質土
8. 灰青色粘土
9. 暗青灰色粘質土
10. 暗灰緑色粘土
11. 暗黄褐色土
12. 黒灰褐色土
13. 淡黄灰色土
14. 灰色粘質土
15. 暗灰色粘質土
16. 淡灰黄色粘質土
17. 灰黄褐色土
18. 黄褐色土

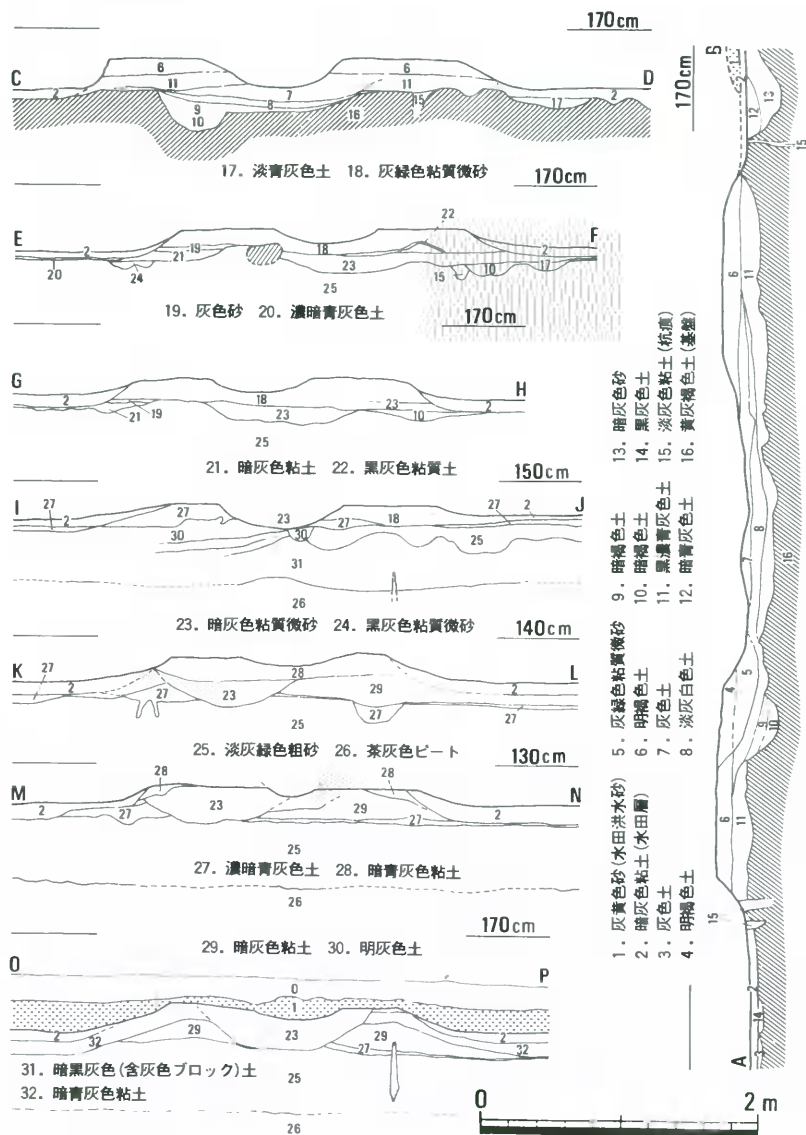
第89図 微高地端部土層断面 (1/40)



溝

溝-10 (第90図, 図版-2)

百・後・IVの水田面除去後、微高地端部と畎畝沿いに検出された溝である。検出面での規模は、幅30~50cm・深さ5~14cmと小さい。長さも5m位しか検出できなかった。出土遺物がな



第91図 畝畝土層断面 ($\frac{1}{40}$)

かったことから分期の詳細は不明である。いずれにせよ水田関連遺構の1つであろう。

溝—11（第90図，図版8—2）

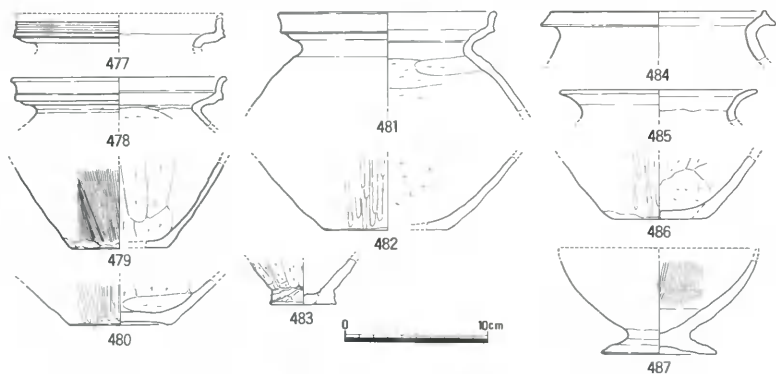
溝—10同様に百・後・Ⅳの水田層除去後に検出できた溝である。溝の流路は，溝—10に並行し，また，規模も類似する。深さは，上流側で溝—10より深く，下流側で浅くなり溝—10の底のレベルに等しくなっている。遺物が検出できなかったことにより時期の詳細は不明である。ただ，流路が畝畝に並行することからこれも溝—10同様に水田関連遺構の1つと考えられる。

溝—12（第90図，図版8—2）

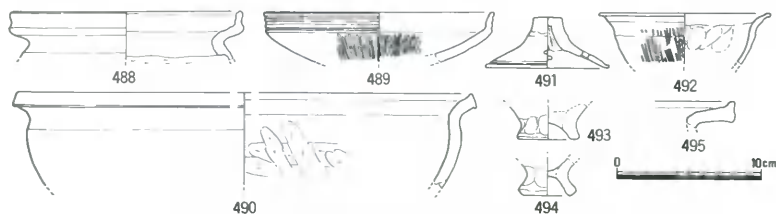
微高地とりつき部の畝畝を削平除去後検出できた溝である。溝—11に切られる。遺物は，検出されなかった。水田関連遺構の1つと考えれば，百・後・Ⅱ～Ⅳに位置づけが可能である。

溝—13（第90・92・94図，図版8—1）

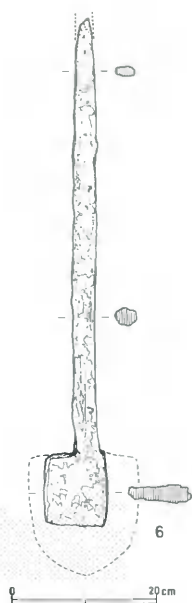
百・後・Ⅳの水田に伴う畝畝除去後検出できた溝である。流路は，百・後・Ⅳの水田への用水路とほぼ等しく，調査区をほぼ東西に貫く。遺物は，あまり多くなく，若干の土器片と木器が1点検出されたにすぎない。木器は，溝底に密着並行した状態で検出できた。スコップ状の



第92図 溝—13出土遺物



第93図 畝畝出土遺物



第94図 溝-13出土遺物

鋤と考えられるものである。時期は、土器から百・後・Ⅲに位置づけられる。

溝—14 (第90図)

溝—13に並行する。しかし、幅20cm・深さ5cm・検出流路140cmと極めて小規模な様相を呈する。遺物は、検出されなかった。溝—10～13と一連のものであろう。

溝—15 (第90図)

溝—16・18の間に検出できた溝状の遺構である。底は、遺構検出面より約10cm程低い、流路は溝—16・18の分流域点にまでは至らない。出土遺物は認められなかった。

溝—16 (第90図)

微高地部の用水たまり部東の畦の下に検出できた溝である。溝は、先づ弧状に南西流し、その後・溝—18と合流して水田方向へと流路を伸ばす。遺物は、検出できなかった。したがって詳細な時期は不明である。しかし、溝—18との関係から百・後・Ⅳの時期と考えられる。

溝—17 (第90図)

検出面での溝の規模は、最大幅40cm・深さ5cmと比較的小さい。流路は、水田部まで至らず、溝—15同様途中で消える。時期は、

百・後・Ⅳと考える。溝—16に後出する。

溝—18 (第90図)

溝—16と合流し、流路を水田部へと伸ばす。検出面での規模は、最大幅50cm・深さ8cmと小さい。時期は、出土遺物より百・後・Ⅳと考えられる。

溝—19 (第20図)

溝—10・11・20と同様に百・後・Ⅳの水田層除去後・微高地・あるいは畝畝沿いに検出された溝である。規模は、検出面で最大幅40cm・深さ4cmと小さいものである。出土遺物が認められないことから時期の詳細は不明である。しかし、水田との関係から百・後・Ⅳと考える。

溝—20 (第90図)

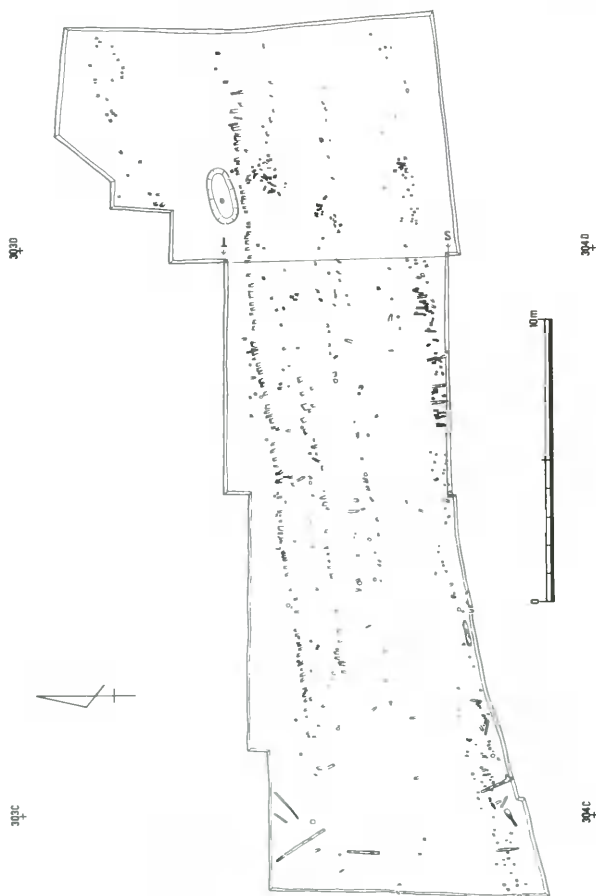
溝—19同様に微高地端部、および畝畝沿いに検出されたものである。規模も溝—19に類似する。検出面での最大幅70cm・深さ10cmを測る。出土遺物を伴わないことから時期は、明確にできない。しかし、これも溝—19同様に水田・用水路等との関連から百・後・Ⅳと考える。

杭列 (第95・96図, 図版5)

杭列は、水田面より一段高く、土手状を呈する。畝畝の部分的な抜き掘りにより一部確認された杭を、さらに面的に追求した結果検出できた遺構である。それは、東西方向に大きく6列の杭列が互いにはば並行関係を保ちながら展開するものであった。杭には、アラカシ材を中心に大・小の自然木・丸太・板材・角材等の種類が認められた。

杭列は、杭の種類により大きく2通りのものに分類できた。それは、板材のみで形成されたものと、大・小の自然木と角材を数多く打ち込んで杭列群としたものであった。前者は、検出

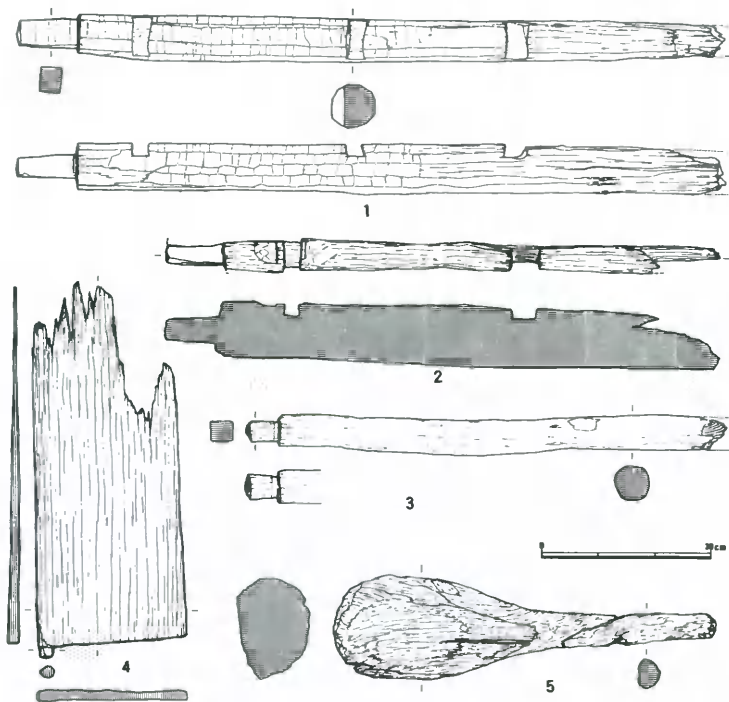
した杭列群のほぼ中央部に3本が集中する。その中で最も顕著なものは、全長約24mを測る杭列である。それは、杭のいずれもが約60°~70°に斜向した面を南に揃え、整然とした並びをみせるものであった。また、これより約150cm南に位置するものも不揃いながら南面する。ところが、これら南面する2本の杭列に対して北向きのものも存在する。しかし、この北向きの一群は、並びに前



二者ほどの一貫性が認められなく、本来南向きの板杭と対応関係にあったものかどうかは不明である。なお、これら板材杭は、そのいずれもが検出段階ですでに上半のほとんどが欠損しており、他の自然木・丸太等の杭に比較しても打ち込み先端レベルは浅い。一方、後者は板材杭列を中央に挟むかのように北と南に3～4mの間隔を保ち、中央の板材杭に並行する杭群列であった。南北いずれもが大・小の自然木と角材を中心に数多く打ち込まれ、列状を成していた。南の杭群列中には、建築材を転用したものが若干認められた。概して杭の打ち込み先端レベルは、板材杭のものに比較して深く、上半の残りも良かった。

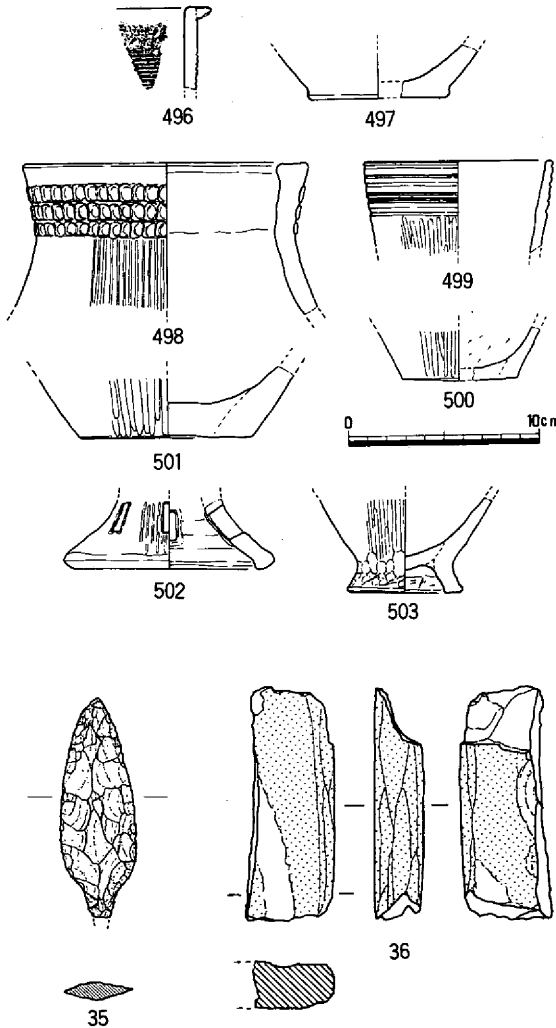
時期は、杭列に直接伴う土器がまったく認められなかったことからその詳細は不明である。ただ、微高地上に所在する百・中・Ⅰの竪穴式住居1～4と竪穴式住居—11に切られた溝—2との関連から百・中・Ⅰ、もしくはそれを若干遡る可能性も存在する。

杭列の性格については、土層断面に杭列に関連した遺構の存在がまったく認められず、ま

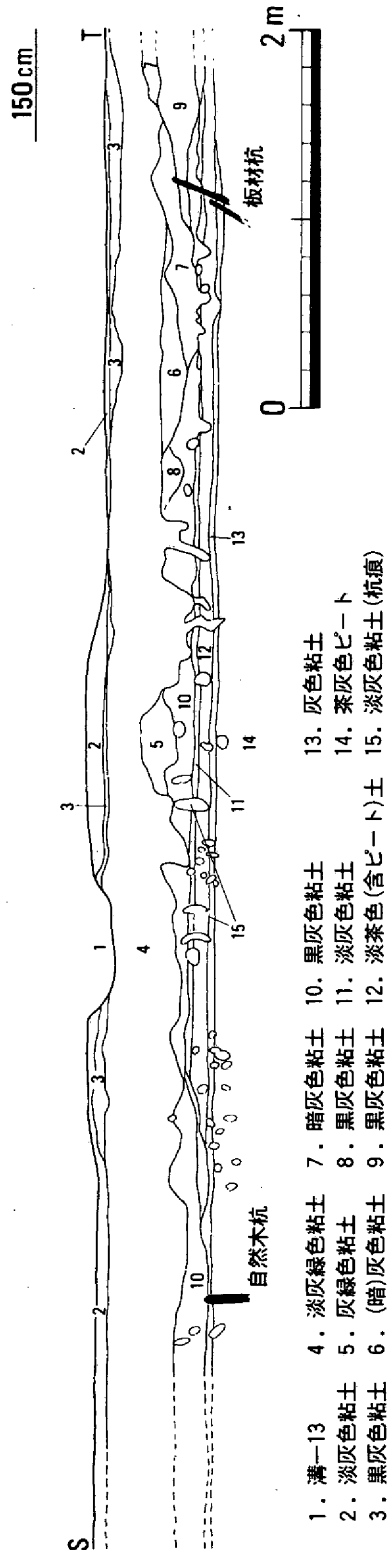


第96図 杭列使用の建築材・木器

た、杭列ごとの関連性もまったく認められなかったこと等から判然としない。ただ、この杭列が微高地から西流してきた2本の百・中・Iの溝のほぼ延長線上に位置し、しかもピート層直上に所在する状況から、これら杭列は、軟弱な低湿地に営まれた用水路の基礎杭であり、用水路自体の側壁板である可能性が強く考えられる。さらに、この杭列が存在するその背景には、かなり整備された同時期の水田の存在も考えられる。(島崎)



第97図 淡灰緑色粘土層出土遺物(1/2)



第98図 杭列遺構土層断面(1/40)

表-4 弥生時代後期土器観察表

挿図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
堅穴式住居 - 6 (第34図)									
106	高杯形土器	26.8	16.4	13.8	・杯部接合部ヨコナデ, 脚内面シボリメ。	黄 灰 色	白色小砂粒を含む	良 好	・完形。
107	"	25.3	14.3	13.1	・脚部縦ナデ。	"	"	"	・杯部黒斑。
108	"	—	—	—	"	赤 褐 色	"	"	"
109	"	—	16.2	—	・脚内面シボリメ。	淡黄褐色	白色小砂粒を含む	"	・黒斑。
110	"	11.5	11.35	10.7	・脚内面シボリメ。	赤 褐 色	長石粒を多く含む	"	・二次焼成。
111	鉢形土器	14.1	5.0	9.7	"	黄 褐 色	白色小砂粒	"	"
112	台付鉢形土器	12.0	5.41	7.3	・円板充填。	褐 色	精製粘土	"	"
113	甕形土器	—	8.0	—	・底部ハケナデ。	淡暗褐色	白色砂粒	"	・黒斑。
114	甕形土器	17.25	6.25	—	・上げ底。	褐 色	白色小砂粒	"	・外面煤付着。
115	"	14.7	—	—	"	淡黄灰色	"	"	"
116	甕形土器	6.0	—	—	"	淡 褐 色	精製粘土	"	"
117	"	—	2.7	—	・胴部内面ヘラケズリ後指頭ナデ。	淡黄灰色	"	"	・胴部下半黒斑あり。
118	"	10.7	4.1	8.15	"	"	"	"	"
119	鉢形土器	22.0	—	—	・内外面円滑に仕上げている。	淡 褐 色	白色小砂粒	"	"
堅穴式住居 - 7 (第36図)									
120	甕形土器	12.0	—	—	・口縁部は「く」の字状に鋭く外反。体部内面はヘラケズリ。	淡 褐 色	微 砂	良 好	"
121	鉢形土器	12.5	2.7	7.6	・体部外面に左下がりのタタキメ。	"	"	"	"
122	高杯形土器	—	—	—	・短い脚柱部より, 「ハ」の字状に広がる。	赤 褐 色	"	"	"
123~124	甕形土器	—	—	—	・口縁部である。	茶 褐 色	"	"	"
125~127	底 部	—	—	—	・平底を呈す。	淡 褐 色	細 砂	"	"
堅穴式住居 - 8 (第38図)									
128	甕形土器	10.6	5.1	16.2	・「く」の字状の口縁部に, やや肩を張る体部をもつ。体部外面はヘラミガキを施す。	明 褐 色	微砂を含む	良 好	・完形品。
129	甕形土器	15.9	—	—	・体部外面は左下りのタタキメを施す。	灰 褐 色	細 砂	"	・体内系の土器か。
130~133	"	—	—	—	・133の口縁部は1条の退化凹線を施す。131・133とも, 外面はハケメ。	茶白色~暗茶灰色	砂粒多し	"	"
134	鉢形土器	18.5	4.9	9.2	・口縁部外面はヨコナデ仕上げ, 内面ヘラミガキ。	淡 褐 色	細 砂	"	・完形品。
135	"	17.9	—	—	・平底の底部を有し, 口縁部は鋭く外反。	赤 褐 色	"	"	"
136	"	—	—	—	・磨耗が激しい。	灰 褐 色	微 砂	"	"
137	"	13.8	4.0	7.8	・手捏ね土器。	明灰茶色	"	"	・底部黒斑。
138	"	11.7	4.4	13.2	・手捏ね土器。低い脚部を有す。	淡 褐 色	"	"	・完形品。
139	"	13.4	4.4	8.7	・体部外面はハケメ, 内面はヘラミガキ。	"	"	"	"
140	"	12.5	4.4	9.5	・口縁端部に一条の凹線を施す。	"	"	"	"
141	"	10.9	3.6	9.5	・体部外面はハケメ, 内面は指頭によるナデ。	"	"	"	"
142	"	10.1	3.5	6.2	・手捏ね土器。	"	"	"	"
143	甕形土器	—	—	—	・台付の直口壺か。	淡赤褐色	"	"	"
144~145	高杯形土器	—	—	—	・144は透し孔を4つ穿つ。	赤 褐 色	"	"	"
堅穴式住居 - 9 (第40図)									
146	甕形土器	9.23	3.35	8.2	・外面ヘラミガキ, 内面指頭ナデ。	淡黄褐色	微 砂	良 好	・胴部焼成後内面より穿孔。
堅穴式住居 - 10 (第42図)									
147	甕形土器	16.2	—	—	・口縁平坦面に2条の凹線。	黄 灰 色	精製粘土	良 好	・器台に転用。
148	鉢形土器	23.3	7.6	8.7	・底部に荒いハケメを残す。	褐 色	白色砂粒	"	・底部に黒斑。
149	甕形土器	14.35	4.0	17.3	・歪があるが, 非常にシャープに作られている。器壁の均一化。	暗 灰 色	雲母を多く含む	"	・胴部下半に煤付着。
150	高杯形土器	23.2	—	—	"	明 褐 色	白色小砂粒	"	・小片。
151	"	—	—	—	"	褐 色	"	"	"
152	"	—	—	—	・杯部外面に淡い刻線あり。	赤 褐 色	精製粘土	"	"
153	台付鉢形土器	8.6	3.65	6.35	・指頭圧痕を中心に手捏ねと考えられる。	淡黄灰色	白色小砂粒	"	・完形品。
154	鉢形土器	8.6	2.3	3.9	・内外面ヘラミガキ。	褐 色	"	"	"
155	"	5.7	1.7	4.65	・外面はヘラによる面取りがみられ, 内面指頭圧痕。	暗黄褐色	"	"	・完形品, 黒斑。
156	皿形土器	—	—	2.3	・内面ハケメ。	褐 色	"	"	・蓋の胴部を再利用。
157	鉢形土器	13.5	3.4	7.0	・内外面ヘラミガキ。	明 褐 色	精製粘土	"	・下位に黒斑, 蓋の再利用。
堅穴式住居 - 11 (第44図)									
158	甕形土器	—	3.4	—	・底部ヘラミガキ。	淡赤褐色	精製粘土	良 好	"
159	台付鉢形土器	10.5	—	—	"	"	"	"	・外面煤付着。
160	甕形土器	14.1	—	—	・口縁部に4本のクシガキ。	暗 褐 色	白色小砂粒	"	"
161	"	13.2	—	—	・器壁は薄く作られている。	淡茶灰色	"	"	"

第3章 第1節 大上田調査区

挿図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
162	壺形土器	14.5	—	—	◦内面凹状の荒いヘラケズリ。	黄 灰 色	白色小砂粒	良 好	
163	高杯形土器	18.2	—	—		赤 褐 色	〃	〃	◦小片。
井戸 - 2 (第48図)									
164	壺形土器	27.6	—	—	◦外面ハケナデ後ヘラミガキ。	褐 灰 色	白色小砂粒	良 好	
165	〃	15.4	—	—	◦口縁部内面ヘラミガキ。	淡 褐 灰 色	〃	〃	◦煤付着。
166	壺形土器	14.1	—	—		黄 灰 色	〃	〃	◦小片。
167	〃	10.4	—	—		灰 色	〃	〃	〃
168	合付鉢形土器	—	7.7	—		明 灰 色	〃	〃	〃
169	壺形土器	16.8	—	—		褐 色	〃	〃	◦外面煤付着。
170	高杯形土器	26.4	—	—	◦杯部中位の器壁が厚い。	赤 褐 色	〃	〃	
171	合付壺形土器	6.6	—	—	◦胴部外面ハケメ後ヘラミガキ。	灰 黄 褐色	精製粘土	〃	
172	壺形土器	—	3.5	—	◦粘土紐幅約2.7cmにて輪積み痕跡をとどめる。	淡 黄 灰 色	〃	〃	◦黒斑2か所。
土壙 - 25 (第49図)									
173	壺形土器	14.9	—	—	◦「く」の字状に外反する口縁部を呈す。	淡 褐 色	細 砂	良 好	
174	〃	13.0	—	—	◦ナデ肩の胴部より、「く」の字状に外反する口縁部を有す。	暗 灰 褐色	〃	〃	
175	〃	—	—	—	◦くびれ部直下よりヘラケズリ。	灰 褐 色	微 砂	〃	
176	高杯形土器	14.1	—	—	◦内湾する杯部を有し、杯部はヘラミガキ。	淡 赤 褐色	〃	〃	
177	〃	—	—	—	◦裾部に3条のヘラガキ沈線が巡る。	灰 白 色	〃	〃	
土壙 - 26 (第50図)									
178	高杯形土器	—	—	—	◦線刻による鋸歯文。	暗 灰 色	白色小砂粒	良 好	◦二次焼成。
179	壺形土器	16.95	—	—	◦内面荒いヘラケズリ。	灰 褐 色	〃	〃	〃
180	〃	18.85	—	—		明 灰 色	精製粘土	〃	〃
181	〃	13.75	—	—		淡 黄 褐色	白色小砂粒	〃	〃
182	〃	16.0	—	—		〃	〃	〃	〃
183	〃	15.0	—	—		淡 黒 灰 色	〃	〃	〃
184	壺形土器	—	7.8	—		明 灰 色	〃	〃	〃
185	壺形土器	—	5.1	—	◦内板充填。	暗 茶 褐色	〃	〃	◦黒斑。
186	壺形土器	—	4.6	—		灰 褐 色	〃	〃	◦二次焼成。
187	〃	—	5.3	—		褐 色	〃	〃	〃
188	合付鉢形土器	—	8.4	—		灰 白 色	〃	〃	〃
189	高杯形土器	—	—	—		赤 褐 色	精製粘土	〃	〃
190	壺形土器	3.8	—	—		暗 灰 色	白色小砂粒	〃	〃
191	鉢形土器	15.7	6.5	13.2	◦内外面に指ナデ、指頭圧痕。	灰 黄 色	〃	〃	◦黒斑2か所。
192	〃	18.0	4.7	8.85		褐 色	〃	〃	◦二次焼成。
193	壺形土器	—	—	—	◦外面タタキメ、内面ヘラケズリ。	暗 褐 色	〃	〃	◦外面煤付着。
土壙 - 27 (第51図)									
194	壺形土器	19.2	—	—		暗 褐 色	白色小砂粒	良 好	
195	鉢形土器	15.2	4.3	8.3		灰 黄 色	〃	〃	
196	〃	—	8.8	—		〃	〃	〃	
197	壺形土器	—	4.9	—		〃	〃	〃	
土壙 - 28 (第52図)									
198	鉢形土器	18.6	6.1	10.1		淡 褐 色	白色小砂粒	良 好	◦黒斑。
199	壺形土器	16.0	—	—	◦口縁部凹線1条。	褐 色	白色小砂粒 長石粒が多い	〃	〃
土壙 - 29 (第53図)									
200	壺形土器	13.8	—	—		暗 褐 色	白色小砂粒	良 好	
201	〃	17.4	—	—		淡 褐 色	〃	〃	
202	〃	—	—	—		暗 黄 褐色	〃	〃	
203	〃	12.5	—	—		暗 茶 灰 色	〃	〃	
204	鉢形土器	14.6	—	—		淡 黄 褐色	〃	〃	◦剥落。
205	〃	—	5.7	—		暗 黄 褐色	〃	〃	◦外面煤付着。
206	〃	—	4.3	—		暗 灰 褐色	〃	〃	
溝 - 6 (第55図)									
207	器 台	31.2	—	—	◦口縁部円形、棒状浮文。体部沈線、長方形透し窓2段3か所。口縁内部凹線。	淡 黄 褐色	白色小砂粒	良 好	◦外面黒斑。
溝 - 7 (第60～63図)									
208	壺形土器	20.4	—	—		淡 褐 色	白色小砂粒	良 好	
209	〃	14.8	—	—		暗 灰 色	〃	〃	
210	壺形土器	14.1	—	—	◦外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。輪積み痕がみられる。	灰 黄 色	白色小砂粒	〃	
211	〃	11.1	—	—	◦内面荒いヘラケズリ。	淡 灰 黄 色	〃	〃	

百間川兼基遺跡

押図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
212	甕形土器	24.0	—	—		淡 褐 色	白色小砂粒	良 好	◦外面煤付着。
213	“	22.0	—	—		赤 褐 色	“	“	
214	鉢形土器	34.2	—	—	◦外面ヘラミガキ。	淡 褐 色	“	“	
215	壺形土器	14.0	—	—	◦外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	明 灰 褐 色	“	“	
216	“	12.3	—	—	◦ハケ状工具によるミガキ。輪痕み痕跡。	淡 褐 色	“	“	◦黒斑。
217	甕形土器	16.4	5.9	28.6	◦外面極細のハケメ。	暗 褐 色	細砂を多く含む	“	◦外面煤付着。
218	壺形土器	9.2	—	—		淡 褐 色	白色小砂粒	“	◦黒斑。
219	甕形土器	19.8	—	—		“	“	“	◦外面煤付着。
220	壺形土器	15.8	—	—	◦口縁部ヨコナテ幅が広い。	“	“	“	
221	甕形土器	21.0	—	—	◦内外面ヘラミガキ。	“	精製粘土	“	◦小片。
222	“	—	—	—					
223	壺形土器	12.5	—	—	◦外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	茶 褐 色	白色小砂粒	良	
224	“	14.3	—	—		淡 褐 色	赤色粘土粒を含む (1mm大)	良 好	
225	甕形土器	15.8	—	—		赤 褐 色	白色砂粒	“	
226	鉢形土器	15.8	—	—		淡 褐 色	白色小砂粒	“	
227	甕形土器	13.3	—	—		“	赤色粘土粒を含む	“	
228	“	—	4.9	—		淡 黒 色	白色小砂粒	“	
229	壺形土器	—	4.8	—		暗 褐 色	赤色粘土粒	“	◦黒斑。
230	高杯形土器	—	19.4	—	◦内面ハケメ。	灰 褐 色	白色小砂粒	“	
231	甕形土器	13.8	—	—	◦胴部内面ヘラケズリ。	淡 褐 色	“	“	
232	“	17.2	7.1	33.6	◦胴部外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	淡 灰 色	“	“	◦外面胴部煤付着。
233	壺形土器	20.4	10.0	33.9	◦胴部右上りのタタキメ。その上部をハケメ、ヘラミガキにて仕上げ。	灰 黄 色	“	“	◦黒斑。
234	“	16.0	—	—	◦外面ハケメ後ヘラミガキ。荒いヘラケズリ。外組接合。	赤 褐 色	“	“	
235	“	16.0	—	—	◦外面ハケメ後ヘラミガキ。	茶 褐 色	“	良	
236	“	14.0	6.2	24.2		淡 褐 色	“	良 好	◦内面黒色。底部黒斑。
237	“	19.6	—	—	◦口縁部縦溝文は荒い雄な線刻。	淡 茶 褐 色	“	不 良	◦内面黒斑。
238	“	12.0	—	—	◦口縁内面ヘラミガキ。	暗 茶 褐 色	“	良 好	
239	“	20.2	—	—		黄 白 色	“	良	
240	“	14.6	8.4	31.0		茶 褐 色	“	良 好	◦黒斑。
241	甕形土器	16.2	4.4	26.0		黄 褐 色	白色砂粒	“	◦二次焼成。
242	台付壺形土器	—	—	—	◦胴部外面ハケメ後ヘラミガキ。	淡 褐 色	“	良	
243	甕形土器	13.0	4.2	13.2	◦単位の細いヘラケズリ。	黄 褐 色	白色小砂粒	良 好	
244	“	12.0	—	—		黄 灰 白 色	“	不 良	
245	高杯形土器	13.0	—	—		黄 茶 褐 色	“	“	◦小片。
246	鉢形土器	18.0	—	—	◦内面荒いヘラケズリ。	淡 茶 褐 色	白色砂粒	良 好	◦内面黒斑。
247	“	18.0	—	—		茶 褐 色	白色小砂粒	“	◦磨滅している。
248	“	13.6	4.3	6.7	◦内外面ヘラミガキ。	淡 茶 色	白色砂粒	良	
249	甕形土器	15.6	5.3	23.5	◦胴部外面上半ヘラケズリ。	淡 褐 色	“	良 好	◦完形品
250	高杯形土器	22.0	10.0	12.6	◦内外面ヘラミガキ。	黄 褐 色	“	良	
251	台付鉢形土器	11.0	4.4	7.5		茶 色	白色小砂粒	不 良	◦完形品。
252	“	10.8	4.6	7.7	◦内外面ナデ。	灰 褐 色	“	良	
土器溜り - A (第64～69図)									
253	甕形土器	15.3	—	—	◦外面ハケメ。	淡 褐 色	白色砂粒	良 好	◦外面煤付着。
254	“	16.0	—	—		黒 褐 色	白色小砂粒	“	◦胴部下半煤付着。
255	“	16.0	—	—	◦外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	淡 褐 色	“	“	◦外面煤付着。
256	“	16.0	—	—	◦外面極細のハケメ。	暗 褐 色	“	“	“
257	“	20.0	—	—	◦外面ヘラミガキ。	赤 褐 色	“	“	
258	“	16.0	—	—		淡 褐 色	“	“	
259	“	—	—	—	◦外面底指頭圧痕。				
260	“	—	5.0	—	◦外面ハケメ。	暗 褐 色	白色小砂粒	良 好	
261	“	—	3.6	—	◦内外面指頭圧痕。	淡 褐 色	精製粘土	“	
262	“	—	5.9	—		赤 褐 色	白色小砂粒	“	
263	“	—	4.9	—		灰 色	“	良 好	
264	“	—	5.8	—		灰 褐 色	“	良	◦二次焼成。
265	“	—	4.65	—	◦外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	暗 褐 色	“	良 好	◦焼成後穿孔。
266	“	—	8.8	—		“	“	“	
267	“	—	6.6	—	◦外面ハケメ後指ナデ。	淡 褐 色	“	“	
268	“	—	3.4	—		淡 灰 色	精製粘土	“	
269	“	—	6.0	—	◦外面ヘラケズリ。	暗 褐 色	“	“	
270	“	19.0	—	—	◦内外面とも円滑に仕上げられている。	“	“	“	◦323に類似。
271	“	16.0	—	—		淡 褐 色	白色小砂粒	“	

第3章 第1節 大上田調査区

押図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口徑	底徑	器高					
272	甕形土器	17.0	—	—	・内面荒いヘラケズリ。	淡 褐 色	白色砂粒	良	
273	"	16.2	—	—	・内面荒いヘラケズリ。	暗 灰 褐 色	"	"	・胴部煤付着。
274	"	16.2	—	—	・外面ヘラミガキ。	淡 褐 色	"	良 好	
275	"	16.9	—	—		"	"	"	・胴部煤付着。
276	"	14.0	—	—	・内面荒いヘラケズリ。	"	"	"	
277	"	18.4	—	—		"	"	"	
278	"	17.7	—	—	・右上りのタタキメ。内面ヘラケズリ。	淡 黄 灰 色	白色小砂粒	"	・胴部煤付着。
279	"	15.3	—	—	・外面中位平行タタキメ。上位右上りのタタキメ。その後ハケメ。内面荒いヘラケズリ。	黄 灰 色	"	"	
280	"	16.75	—	—	・外面に横位のタタキメ。外傾接合。	淡 黄 灰 色	"	"	
281	"	16.0	—	—	・外面平行タタキメ。内面指ナデ後ヘラケズリ。	"	"	"	
282	"	20.9	—	—	・外面右上りのタタキメ。	"	"	"	
283	"	—	5.6	—	・タタキメ後縦位のハケメ。	暗 灰 色	"	"	・内面煤付着。
284	"	—	5.6	—	・タタキメ後縦位のハケメによるナデ消し。	赤 褐 色	"	"	
285	"	—	5.9	—	・タタキメ後縦位のハケメによるナデ消し。	暗 褐 色	"	"	
286	"	15.4	—	—	・胴部下半タタキメ後ハケメ。	淡 黄 灰 色	"	"	
287	"	14.9	5.5	24.45	・外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	茶 褐 色	"	"	・外面煤付着。
288	"	15.1	—	—		淡 褐 色	"	"	"
289	"	14.55	—	—	・外面極細のハケメ。	淡 茶 褐 色	"	"	
290	高杯形土器	27.1	—	—	・外面ヘラミガキ。	淡 褐 色	"	"	
291	"	24.0	—	—	・内外面ヘラミガキ。	"	精製粘土	良	
292	"	27.8	—	—		赤 褐 色	白色砂粒	"	・外面黒斑。
293	"	—	16.4	—	・円板充填。	灰 色	白色小砂粒	良 好	
294	"	—	—	—		"	"	"	・煤付着。
295	"	—	15.2	—	・脚部の透し孔3穴。	赤 褐 色	"	良	
296	"	—	19.0	—	・脚端に1条の凹線。器内外面ハケメ。	淡 褐 色	"	良 好	・290に近い。
297	"	23.0	—	—		灰 色	"	"	
298	"	26.75	16.9	14.6	・脚部の透し孔5穴。脚端に1条の凹線。	淡 褐 色	"	"	・完形品。
299	"	21.8	—	—	・内外面ハケメ後ヘラミガキ。	淡 赤 褐 色	"	"	
300	"	27.4	16.6	16.15	・口縁部端凹線1条。杯部屈曲部凹線1条。	赤 褐 色	赤色粘土粒を含む	"	
301	"	35.0	—	—		灰 黄 色	白色小砂粒	"	
302	"	—	20.4	—	・筒部透し孔4穴。裾部透し孔4穴。	"	"	"	
303	"	24.8	—	—	・内外面が円滑に仕上げられている。	淡 灰 褐 色	"	"	
304	"	27.8	—	—		"	"	良	・外面黒斑。
305	"	31.0	—	—		灰 黄 色	"	"	
306	"	—	17.0	—		淡 赤 褐 色	精製粘土	"	
307	"	21.0	13.5	13.3	・面剥落。	灰 褐 色	白色小砂粒	"	・外面黒斑。
308	"	24.0	15.7	15.1		灰 黄 色	"	"	
309	鉢形土器	17.1	4.5	14.8	・内外面ヘラケズリ。	暗 褐 色	"	良 好	・外面煤付着。
310	"	17.4	6.6	13.8		黒 色	白色砂粒	"	・外面黒斑。
311	"	16.6	5.6	10.85		淡 褐 色	白色小砂粒	"	・外面黒斑。
312	"	16.15	4.1	10.4	・内外面ともに円滑に仕上げ。	灰 褐 色	精製粘土	"	
313	"	21.9	—	—	・外面ハケメ。	赤 褐 色	白色小砂粒	"	
314	"	19.9	—	—	・内外面ともヘラケズリ後ヘラミガキ。	淡 褐 色	精製粘土	"	・完形品。
315	"	19.0	5.75	11.6	・内面ヘラケズリ後ハケメ。	"	白色小砂粒	"	・外面黒斑。
316	"	16.4	6.5	10.1	・外面左上りのタタキメ。	赤 褐 色	"	"	
317	台付鉢形土器	13.3	3.8	7.95		"	"	不 良	・剥落。
318	"	9.8	3.4	6.3		"	"	良 好	
319	鉢形土器	8.6	3.0	5.05	・外面ヘラケズリ後ヘラミガキ。	暗 褐 色	"	"	
320	甕形土器	13.8	6.9	—	・胴部上位ハケメ。下位ヘラミガキ。	淡 褐 色	"	"	
321	"	17.0	—	—	・外面ハケメ。	灰 黄 色	白色砂粒	"	
322	"	14.0	—	—	・沈線ははっきりしていない。	淡 茶 褐 色	白色小砂粒	"	
323	"	12.4	—	—	・内面荒いヘラケズリ。外面は円滑。	淡 褐 色	精製粘土	"	
324	"	10.9	—	—	・外面右上りのタタキ後、円滑に仕上げ。	黄 褐 色	白色小砂粒	"	
325	"	7.3	—	—	・肩部ヘラミガキ。	淡 褐 色	精製粘土	"	
326	"	12.9	—	—		"	"	"	
327	"	13.8	—	—	・外面ハケナデ。	暗 灰 色	白色小砂粒	"	
328	鉢形土器	30.5	—	—	・内外面ヘラミガキ。	褐 色	"	"	・外面黒斑。
329	"	39.8	—	—	・外面ハケメ。	"	"	"	・内面円滑(使用痕)
330	甕形土器	—	—	—	・タガ状の突帯が2本、その間に縦位のハケメ後擦刻による竪線文。	淡 黄 褐 色	白色砂粒	良 好	・土壌-26と同一個体。
331	"	21.3	11.1	47.8	・胴部・中位はヘラ工具によるひっぱり痕か。	淡 灰 黄 色	"	"	・黒斑。
土器溜り-B (第71~72図)									
332	甕形土器	15.6	—	—	・外面極細のハケナデ。内面丁寧なヘラケズリ。	淡 褐 色	白色砂粒	良 好	・外面煤付着。

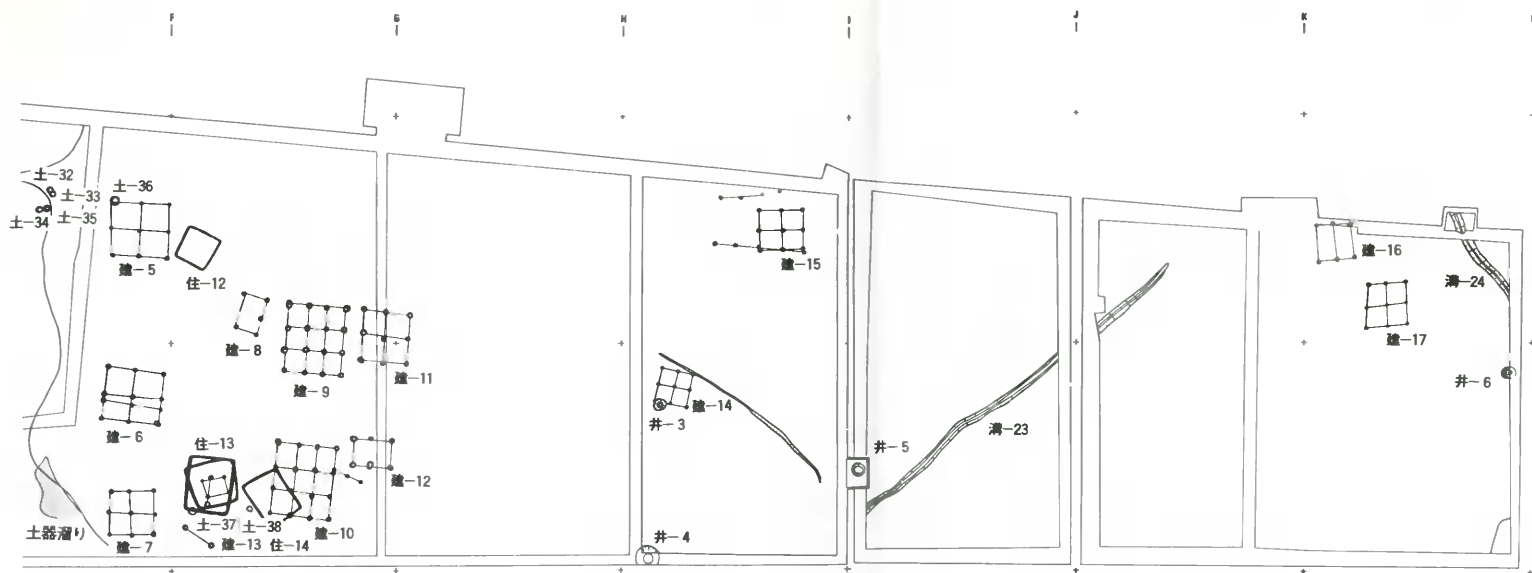
百間川兼基遺跡

挿図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
333	甕形土器	15.5	—	—	・ 胴部外面指頭圧痕。外面ハケナデ後指ナデ。	淡 褐 色	白色小砂粒	良 好	
334	“	18.6	—	—	・ 外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	“	“	“	
335	甕形土器	11.7	—	—	・ 頸部内面粘土を補充。	“	“	“	
336	甕形土器	15.8	—	—	・ 幅広いハケメ。	“	白色砂粒	“	
337	“	—	4.3	—	・ 外面ハケメ後指頭圧痕。	暗 褐 色	“	“	
338	“	—	4.35	—		“	白色小砂粒	“	
339	“	—	6.7	—		“	“	“	
340	“	—	5.7	—	・ 底部指頭圧痕。	茶 褐 色	“	“	
341	“	—	6.0	—		暗 褐 色	“	“	
342	“	—	6.0	—	・ 外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	淡 褐 色	“	“	・ 外面黒斑。
343	鉢形土器	9.8	3.2	10.0	・ 内面ヘラケズリ状のナデ。	褐 色	精製粘土	“	
344	甕形土器	19.1	—	—	・ 内面円滑なヘラケズリ。	淡 褐 色	白色小砂粒	良	・ 外面黒斑。
345	“	16.5	—	—		“	“	良 好	
346	“	15.3	—	—	・ 外面ハケメ後ヘラミガキ。内面ヘラケズリ後指頭ナデ。	灰 褐 色	精製粘土	“	・ 外面黒斑。
347	“	13.2	—	—	・ 内面屈曲部粘土結痕跡。	“	白色砂粒	不 良	
348	“	13.8	—	—	・ 内面荒いヘラケズリ。	“	“	“	
349	“	11.8	4.6	17.4	・ 内面丁寧なヘラケズリ。	赤 褐 色	“	不 良	
350	甕形土器	10.0	—	—	・ 外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	灰 褐 色	“	良 好	
351	甕形土器	16.35	7.0	31.5	・ 外面タタキメ後にハケメ。	暗 褐 色	“	良	・ 胴部中位に煤付着。
352	甕形土器	13.3	—	—	・ 外面極細のヘラミガキ。頸部、胴部接合組痕跡。	淡 褐 色	“	良 好	
353	“	6.7	3.65	11.5	・ 内面指頭ナデ、底部シボリメ後粘土充填。	“	精製粘土	“	・ 完形品。
354	鉢形土器	16.9	4.0	8.8	・ 外面太筋のタタキメ、後ヘラミガキとナデ。	淡 灰 色	“	“	
355	“	19.6	5.75	18.3	・ 外面右上りのタタキメ、下半ヘラミガキ。	灰 褐 色	白色小砂粒	良	
356	高杯形土器	—	19.8	—	・ 胸筋透し孔6穴。	淡 褐 色	“	良 好	・ 内面に煤付着。蓋に転用。
357	“	—	—	—	・ 胸接合部粘土を補充し、ヘラ先にて押えこんでいる。鈍重な感じ。	“	“	“	
358	“	40.8	21.3	23.5	・ 杯部外面ハケメ後ヘラミガキ。	淡 灰 色	“	“	
土器溜り - C (第73図)									
359	甕形土器	15.6	—	—	・ 外面は交差したハケメ。	灰 白 色	細かい砂粒を含む	良 好	
360	“	14.4	—	—		“	“	“	
361	甕形土器	15.4	—	—		“	“	“	
362	“	16.3	—	—		“	直径4mmの砂粒を含む	“	
363	“	15.5	—	—		“	細かい砂粒を含む	“	・ 煤付着。
364	“	14.0	—	—	・ 外面は交差した細かいハケメ。	灰 黄 褐色	“	“	
365	鉢形土器	17.0	8.4	20.3	・ 不安定な底部。	灰 白 色	直径4mmの砂粒を含む	“	
366	台付鉢形土器	—	10.0	—	・ 肩部はヨコナデ。	“	細かい砂粒を含む	“	
367	鉢形土器	14.0	4.4	6.8	・ 底部つまみだし。	褐 灰 色	“	“	
368	“	17.4	4.0	7.0	・ 内面ヘラケズリ後ヘラミガキ。	淡 黄 褐色	“	“	
369	“	19.0	—	—	・ 内面ヘラケズリ後ヘラミガキ。	灰 白 色	“	“	
370	“	13.8	—	—		“	“	“	
371	甕形土器	—	6.0	—		“	“	“	
372	“	—	5.0	—	・ 底部つまみだし。	淡 黄 褐色	“	“	
373	“	—	5.0	—		灰 白 色	“	“	・ 焼成後穿孔。
374	高杯形土器	24.4	17.8	15.6		黄 褐色	“	“	・ 杯部と脚部の一方に黒斑。
375	“	15.8	—	—		淡 黄 褐色	“	“	
土器溜り - D (第74～78図)									
376	甕形土器	14.4	—	—	・ 頸部外面にヘラガキの乱れた平行沈線。	暗 褐 色	精製粘土	良	・ 内面黒色。
377	“	17.5	—	—		灰 褐 色	白色小砂粒	良 好	・ 外面に眼目。
378	“	20.0	—	—		黄 灰 褐色	有色の鉱物を含む	良	
379	“	24.0	—	—		赤 褐 色	白色小砂粒	“	・ 器台に転用。
380	“	22.0	—	—	・ 土器全体が丁寧に作られている。	淡 褐 色	白色砂粒	良 好	・ 外面に眼目。内面黒斑。
381	台付甕形土器	7.2	—	—	・ 口縁端に1本の沈線を有す。	淡 茶 褐色	“	良	
382	甕形土器	9.4	5.0	17.3	・ 胴部外面ハケメ後ヘラミガキ。胴部と頸部に外傾接合痕跡。	淡 黄 褐色	“	良 好	・ 外面煤付着。
383	“	12.0	—	—	・ 内面鋸歯文は一周せず、半周。	黒 褐 色	白色小砂粒	良	
384	“	13.6	—	—	・ 外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	褐 色	白色砂粒	“	
385	“	13.8	—	—	・ 外傾接合。胴部中位に稜線。	淡 茶 褐色	“	良 好	
386	“	12.6	6.6	27.8		灰 茶 褐色	“	良	・ 外面黒斑。
387	甕形土器	15.0	—	—		黒 色	“	“	・ 外面煤付着。
388	“	16.0	4.8	25.5	・ 外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	淡 茶 褐色	“	不 良	・ 外面煤付着。内面に炭化物痕跡。

押図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
389	甕形土器	16.0	5.6	30.0		淡茶褐色	白色小砂粒	良	・焼成後穿孔。外面煤付着。
390	"	11.0	4.0	12.0	・内面は指によるナデ上げ。	淡褐色	"	良好	・外面煤付着。
391	鉢形土器	12.0	3.4	12.0	・口縁部外面ヨコナデ。	茶褐色	"	良	
392	"	17.2	4.8	8.6	・内外面ともヘラミガキ。	淡黄色	"	良好	
393	"	10.2	4.4	9.5	・外面平行タタキメ後ナデ消し。	黄褐色	"	不良	・手捏ね。
394	台付鉢形土器	16.5	—	—	・胸部外面はヘラケズリ後ヘラミガキ。	淡茶褐色	白色砂粒	"	
395	"	14.0	9.8	16.5	・胸部外面はハケナデ後ヘラミガキ。	黒色	"	良好	・外面煤付着。
396	鉢形土器	19.0	—	—		淡褐色	"	良	・外面黒底。
397	"	18.0	6.8	9.0		褐色	"	"	
398	"	20.5	5.8	16.5	・胸部はハケメ後ヘラミガキ。	"	白色小砂粒	"	・底部に草丘痕が残る。
399	"	36.8	9.0	21.0	・内面ヘラケズリ後ナデ。	明褐色	"	"	・外面煤付着。
400	"	36.0	9.0	19.0		暗褐色	"	良好	
401	"	33.6	—	—	・外面は荒いハケメ。	淡茶黄灰色	"	不良	・外面黒斑。
402	"	22.0	6.0	7.0	・内面ヘラケズリ後ナデ。	淡褐色	"	良	"
403	蓋形土器	13.0	13.0	1.8	・円孔は2個。	淡赤褐色	"	良	・407の蓋か。
404	"	14.0	—	7.3	・天井部は指頭により丁寧に仕上げ。	淡茶褐色	"	不良	・内面煤付着。
405	"	4.8	12.5	7.0		"	"	"	・内面煤付着、鉢の転用か。
406	鉢形土器	13.0	—	—	・左右一對の耳を持ち、口縁部にも一對の円孔を有する。	淡褐色	白色小砂粒	良好	
407	台付鉢形土器	13.0	14.0	14.5	・脚端透し孔5穴。	黄茶褐色	"	"	・403とセットか。
408	"	—	4.0	—		桃色	白色砂粒	良	・製塩土器。
410	"	—	4.6	—		"	"	"	・二次焼成。
411	高杯形土器	25.5	—	—		"	"	"	
412	"	—	15.4	—		暗灰茶褐色	白色小砂粒	良好	
413	"	—	10.0	—		桃色	"	良	
414	"	16.0	—	—	・内外面ともヘラミガキ。	暗褐色	"	良好	
415	"	—	15.0	—		淡茶色	白色砂粒	良	
416	"	14.0	—	—	・口縁部外面に乱れたヘラガキ沈線を4〜8本巡らす。	暗褐色	白色小砂粒	良好	
417	"	29.5	16.5	15.8	・ヘラミガキを主とする。	暗茶褐色	"	不良	
418	"	28.5	19.5	18.5		黄褐色	精製粘土	良好	・丹塗り。
419	器台形土器	30.8	—	—	・口縁上端に半截竹管文。	"	白色小砂粒	良	
420	壺形土器	—	12.3	—	・外面ハケメ後ヘラミガキ。外傾接合輪痕み。	褐色	"	良好	・最も大型の土器。
421	"	15.0	—	—	・輪痕みにより外傾接合。	"	白色砂粒	良	・器台に転用。
422	甕形土器	15.2	5.0	21.4	・外面ハケメ、内面ヘラケズリ。底部焼成後穿孔。	黄褐色	白色小砂粒	"	・外面煤付着。外面黒斑。
423	"	13.0	4.0	17.0	・外面荒いハケメ。	黒褐色	"	"	・外面黒斑。
424	鉢形土器	14.0	4.0	8.0		明茶褐色	"	良好	
425	"	16.0	—	—		茶褐色	"	"	・外面黒斑。
426	高杯形土器	24.0	—	—		暗褐色	"	不良	
427	壺形土器	—	8.0	—		茶褐色	"	良好	
428	甕形土器	—	4.8	—		黒色	"	不良	
土器溜り-E (第81〜83図)									
429	甕形土器	17.3	—	—		淡褐色	白色砂粒	良好	
430	"	14.1	4.45	24.55	・体部外面ハケメ。内面ヘラケズリ。底部ハケメにより丸底化。	暗褐色	"	"	・外面煤付着。
431	"	13.6	—	—	・外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	"	"	"	
432	"	16.3	—	—		淡黄褐色	精製粘土	"	
433	"	13.3	4.7	18.5	・外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	灰褐色	白色砂粒	良	
434	"	13.8	—	—		黄褐色	精製粘土	良好	
435	"	14.3	—	—		赤褐色	白色小砂粒	"	
436	台付鉢形土器	15.0	9.7	17.9	・外面は横位ハケメを基調とし、その上を縦位ハケメ。	淡褐色	"	"	
437	甕形土器	15.48	4.1	18.3	・外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	暗褐色	白色砂粒	"	・438に近似。
438	"	14.6	4.5	17.9	・面全体にゆるやかな凹凸がある。	"	"	"	
439	"	13.3	—	—	・内外面ともハケメ。工具が異なるハケメ。輪痕みによる。ハケメ下は指頭圧痕。	暗茶色	"	良	・粗製の土器。
440	"	14.1	—	—	・内面に約1cm幅の粘土紐輪痕み痕を残す。	暗黄褐色	"	"	・外面煤付着。
441	"	12.5	4.15	15.9		淡黄褐色	"	"	・外面黒斑。
442	"	14.4	3.7	17.5	・器面凹凸激しい。内面指によるナデ上げ。	暗褐色	"	不良	"
443	"	12.3	—	—	・巻き上げ状の粘土紐。	淡褐色	精製粘土	良	
444	"	11.0	—	19.4	・内面ヘラケズリ後ナデ。外面底部ハケメ。	黄灰色	白色砂粒	不良	・外面煤付着。
445	"	15.7	—	—	・外面右上りのタタキメ。内面下半丁寧にヘラケズリ。	赤褐色	赤色粒を含む	良好	・口縁部歪。
446	壺形土器	15.0	—	—		淡褐色	黄母・赤色粒を含む	良	・胎土が異なる。
447	"	17.3	—	—		明茶褐色	白色小砂粒	良好	・器台に転用。

百間川兼基遺跡

邦図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
448	壺形土器	14.6	—	—	・体部外面右上りのタタキ。内面指頭によるナデ。輪郭みによる接合。	暗黄灰色	白色小砂粒より赤色粒が目立つ	良好	・器形が異なる。
449	鉢形土器	13.4	2.5	8.5		乳灰色	精製粘土	—	・外面黒斑。
450	—	17.8	3.1	13.4	・内外面とも指頭ナデにより丁寧に調整。	—	—	—	—
451	器台形土器	10.0	11.35	8.1	・脚部ねじり気味。	—	—	—	—
452	台付鉢形土器	12.2	6.4	8.1		明褐色	白色砂粒	—	・粗製の土器。
453	—	13.4	8.2	7.3		淡灰色	白色小砂粒	—	・剥落。
454	—	13.8	8.8	10.3	・外面ハケメ後ヘラミガキ。	赤褐色	精製粘土	良好	—
455	—	12.9	5.1	7.4	・外面ハケメ。	暗黄褐色	—	—	・外面黒斑。
456	—	—	8.4	—		暗茶褐色	白色砂粒	良好	・粗製の土器。
457	鉢形土器	14.2	—	6.8	・内外面ヘラミガキ。丸底。	淡茶褐色	精製粘土	良好	—
458	—	17.3	—	8.65	・内面ヘラケズリ後ヘラミガキ。	淡褐色	白色砂粒	—	・外面黒斑。
459	高杯形土器	16.8	10.55	11.1		明茶褐色	精製粘土	—	—
460	—	17.1	—	—	・内外面ヘラミガキ。	赤褐色	白色砂粒を含む	—	・外面黒斑。
461	—	18.2	—	—	・内外面細筋のヘラミガキ。	淡褐色	—	—	—
462	—	17.8	—	—	・脚・杯部接合部ヘラケズリ。	暗黄灰色	—	—	—
463	—	13.5	—	—		暗褐色	—	—	—
464	—	—	11.8	—	・柱状部にさし込み痕を残す。	明茶灰色	—	—	—
465	—	18.3	—	—	・内面ヨコナデ。	淡灰茶色	—	—	・外面黒斑。
466	—	19.1	13.9	13.1	・内外面ハケメ。	淡黄灰色	—	—	—
467	—	16.6	12.7	11.3	・接合部粘土継痕。	明黄灰色	—	—	—
468	—	20.8	13.0	11.1		赤褐色	—	良好	—
469	—	20.9	12.9	12.85	・杯部ヨコナデ。	明褐色	白色小砂粒	—	—
水田層中 (第88図)									
470	壺形土器	14.0	—	—	・口縁部ヨコナデ。内面ヘラケズリ。	淡灰色	細砂を含む	良好	・煤付着。
471	—	17.0	—	—	・口縁部ヨコナデ。	灰色	細砂	—	—
472	—	—	5.2	—	・外面縦位ハケメ。	淡灰白色	—	—	—
473	—	—	4.0	—	・内面ヘラケズリ。外面縦位ハケメ。	暗灰色	—	—	—
474	高杯形土器	15.4	—	—	・内外面丁寧にヘラミガキ。	灰黄色	精選粘土	—	—
475	—	20.0	—	—	・内外面剥落して調整不明。	灰褐色	微砂	—	—
476	—	—	16.0	—	・底内面ヘラケズリ。外面縦位ヘラミガキ。	淡灰色	砂粒	—	—
溝-13 (第92図)									
477	壺形土器	14.6	—	—	・内面ヨコナデ。	灰茶色	細砂多い	良好	・煤付着。
478	—	15.0	—	—	・口縁部ヨコナデ。内面ヘラケズリ。	淡灰緑色	微砂	—	—
479	—	—	7.0	—	・内面ヘラケズリ。外面縦位ハケメ。	黒灰色	砂粒多い	—	・煤付着。
480	—	—	7.0	—	・外面ヘラミガキ。底面ナデ。	灰色	—	—	—
481	—	15.0	—	—	・外面調整不明。口縁部ヨコナデ。	—	細砂を含む	—	—
482	—	—	8.4	—	・内面ヘラケズリ。外面縦位ヘラミガキ。	黒灰色	砂粒多い	—	・外面煤付着。
483	小型鉢形土器	—	4.6	—	・内面ナデ。外面荒いヘラケズリ。	—	—	—	—
484	壺形土器	15.0	—	—	・内外面剥落して調整不明。	赤灰褐色	白色砂粒多い	—	—
485	—	14.0	—	—	・内外面ヨコナデ。	暗灰色	大きい砂粒	—	—
486	—	—	6.0	—	・外面縦位ヘラミガキ。底面ヘラケズリ。	淡灰色	細砂	—	—
487	小型台付鉢形土器	—	6.0	—	・内面ハケメ。外面ナデ。	灰青色	精製粘土	良好	—
畦畝 (第93図)									
488	壺形土器	16.0	—	—	・口縁部ヨコナデ。	淡灰茶色	細砂多い	良好	・外面煤付着。
489	高杯形土器	16.2	—	—	・口縁部ヨコナデ。	淡灰白色	精製粘土	—	—
490	鉢形土器	—	—	—	・外面剥落して調整不明。	灰黄色	砂粒多い	—	—
491	高杯形土器	—	8.6	—	・内外面調整不明。	—	精選粘土	—	—
492	小型鉢形土器	12.0	—	—	・内面ナデ。外面タテハケ。	灰褐色	砂粒少ない	—	—
493	小型深鉢形土器	—	4.0	—	・底内面ヨコナデ。	淡灰茶色	大粒砂多い	—	・製土器。
494	—	—	3.0	—	・底内面ヨコナデ。	暗灰色	砂粒多い	—	—
495	—	—	—	—	・内外面調整不明。	淡灰色	小石を含む	—	—
包含層 (第97図)									
496	壺形土器	—	—	—	・器表面剥落。一部クシガキ沈線が残る。	淡灰褐色	砂粒多い	良好	—
497	壺形土器	—	7.5	—	・器表面剥落して不明。	淡灰色	—	—	—
498	—	15.0	—	—	・内面ナデ。外面3条の指頭圧痕文突起貼付前に荒い縦位ハケメ。	灰黄色	細砂を含む	—	—
499	台付細頸壺形土器	10.0	—	—	・内面ナデ。外面縦位ヘラミガキ。	淡灰色	微砂粒	—	—
500	壺形土器	—	6.0	—	・内面ヘラケズリ。外面縦位ヘラミガキ。	—	微砂	—	—
501	壺形土器	—	9.0	—	・内面ナデ。外面縦位ヘラミガキ。	暗灰色	微砂多い	—	—
502	高杯形土器	—	10.0	—	・内面ヨコナデ。外面縦位ヘラミガキ。	灰黄色	微砂を含む	—	・長方形透窓。
503	台付鉢形土器	—	6.0	—	・内面ナデ。台部内面ヘラケズリ。	暗灰褐色	微砂多い	—	—



住…竪穴式住居
 建…建物
 井…井戸
 溝…溝
 土…土墳

第99図 大上田地区古墳時代遺構配置図 (1/500)

4 古墳時代の遺構・遺物

大上田調査区内全域に遺構は存在する。特に建物が多く11棟、そのうち8棟が西端高所に集中し、方向に規則性が認められる。竪穴式住居4軒、同じく西端に集まる。井戸・溝は中央より東に集中するようである。西南端下がりには土器等が斜面堆積をしている。

(1) 竪穴式住居

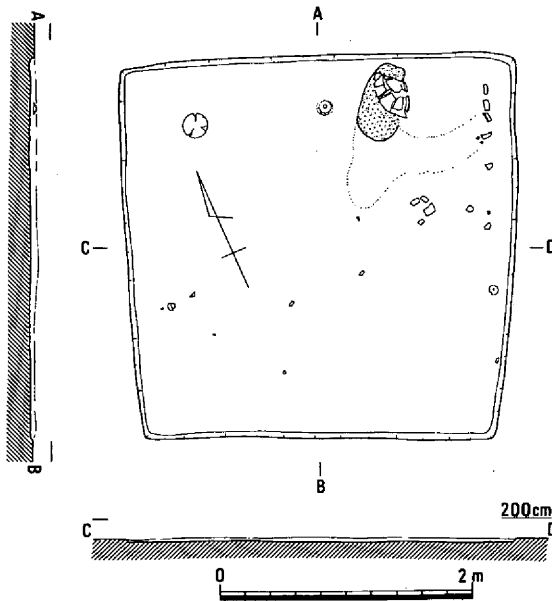
竪穴式住居—12(第99・100図)

303—Fの西側に位置し、北東に主軸方位をとる方形住居である。焼土分布により住居を想定し、遺物分布、土色をたよりに305×310cmの北東辺が広がる台形の平面を検出した。しかし、壁体溝、柱穴は確認できなかった。床面積は9.4㎡をはかる小型の住居である。北辺東側に60×35cmの焼土分布が認められ、さらに焼土南側に100×50cmの範囲で茅状の炭化物が分布する。遺物は住居内に散在しており、東辺には甕破片が壁に沿って並び、接地海拔高180cm前後をはかる。北壁には504・506の高杯が逆転した状態で出土している。海拔高186cmをはかり若干高低差が存在する。

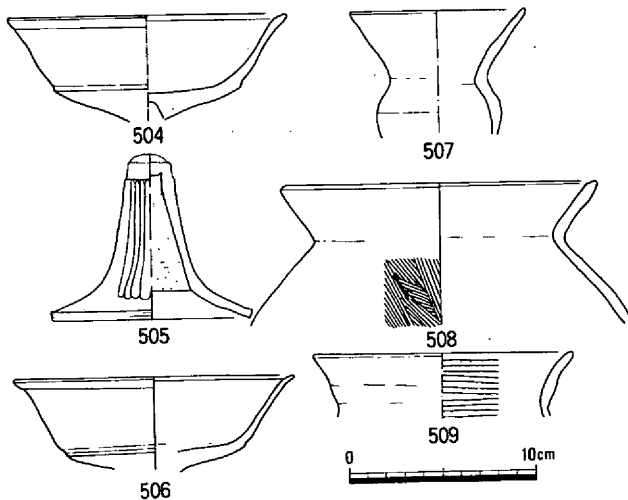
百・古・Ⅲの建物—5に隣接し、百・後・Ⅰ、Ⅱの溝—6・7を切る形で出土している。

遺物は高杯3点、甕2点、小型丸底壺等が出土している。

(高畑)



第100図 竪穴式住居—12 ($\frac{1}{60}$)



第101図 竪穴式住居—12出土遺物

竪穴式住居—13A・B（第102図，図版10—1）

304—Fの南部分に位置し，竪穴式住居—14の西側に隣接する。明らかに建て替えを想起させる重複した状態で検出した遺構であり，炭化材・炭・焼土等の散布状況から火災に遭遇したものと考えられる。

当調査区の南半はグライ化により，遺構検出に困難をきたした。住居北部分の破線はそれを示すものであり，炭，焼土の分布を基調に検出したものである。

では，都合上，P—1・2の二本柱から成る住居をA，P—3・4・5・6の四本柱から成る住居をBとする。住居西端の周溝の切り合い関係，並びに，B住居に伴うP—3内に，柱が抜きとられた後，埴510，鉢513の完形品と卵形の河原石が多分に祭祀的意味を漂わせるように埋められていた事実より，A住居がB住居より時期が新しいものと判断される。即ち，B住居廃絶ののち，A住居を拡張・施工したものであろう。A・B両住居の共通する特徴は，両住居とも主柱穴北側と北辺壁体との間に南側と比べて広いスペースを持つことである。

さて，A住居は長方形の平面形態を呈し，長径480cm，短径390cmを測り，面積約18.5㎡である。柱穴径はP—1・2の順に30cm，45cmで深さはいずれも40cm前後を測る。柱痕跡は検出できなかった。

一方，B住居は南東方向へ，やや歪んだ方形を呈しており，長径430cm，短径390cmを測り，面積約16.77㎡である。柱穴の規模はA住居と比較して小振りで，径約25cm，深さ27cm前後を測る。またP—4・6の柱穴の掘り方の状況から判断して，最低一度の建て替えが為された可能性もあり得る。尚，A・B住居内に存在する二つの浅いピットについては性格等は不明であるが，いずれにも，炭層，焼土を確認した。

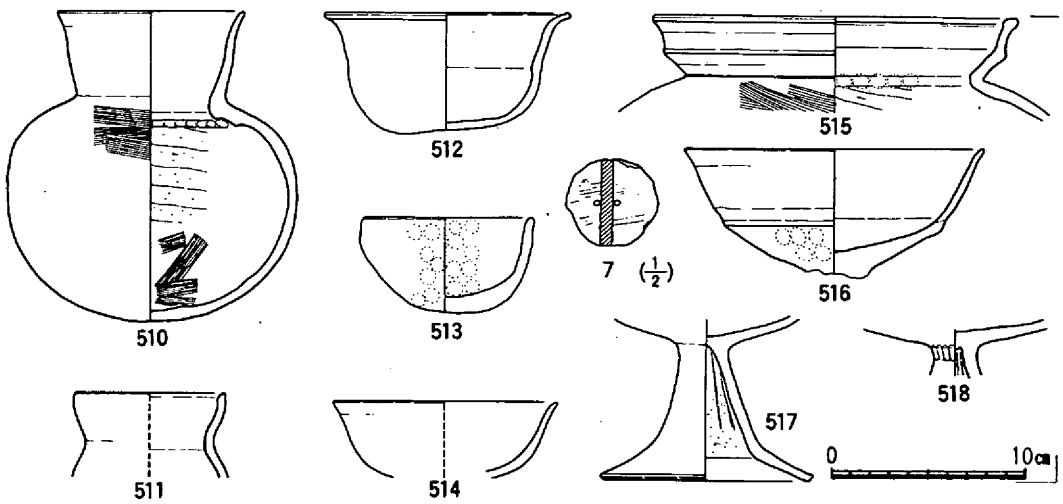
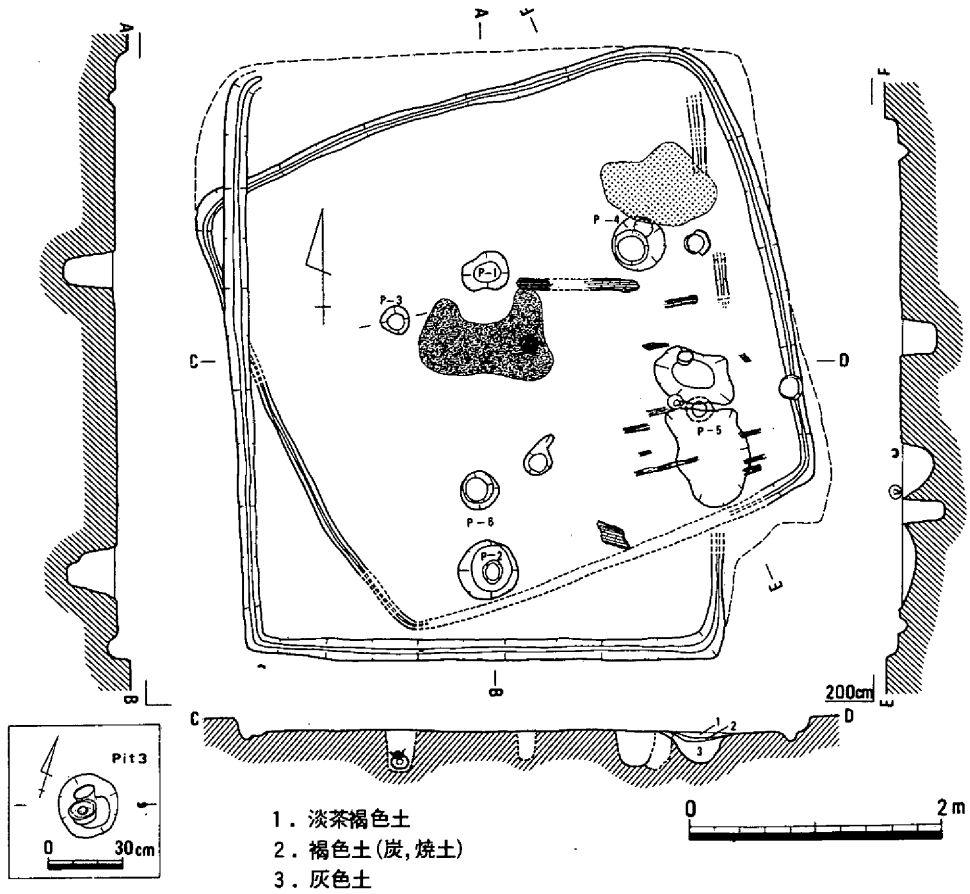
遺物は，A・Bいずれの住居に伴うものか判然としないが，全て床面出土のものである。その他の共伴遺物として，滑石製の有孔円板1点が出土している。不整円形の板状滑石に1対の小孔を穿ったもので，径約2.4cm，厚さ約3mmを測り，両面に磨り跡が確認される。

時期は出土遺物より，百・古・Ⅲに比定できると思われるが，竪穴式住居—14よりは古い様相を呈している。

竪穴式住居—14（第103図）

304—F南側に位置し竪穴式住居—13A・Bの東に近接する。長径460cm，短径350cmを測り，床面積16.1㎡である。長方形の平面形態を有する竪穴式住居である。図中の破線表示は基盤層からのグライ化現像と後世の削平により，検出が確実に為しえなかったことを示すものであり，炭の分布を基調に，他の二辺との関連により想定したものである。

当初，焼土面の上面に飯片が散在していた状況から竈を有する住居を想定したが，断面観察より単なる焼土面と判断した。また，北辺に接し，住居に伴うピットが検出され，長径65cm，



第102図 竪穴式住居-13A・B ($\frac{1}{60}$)・出土遺物

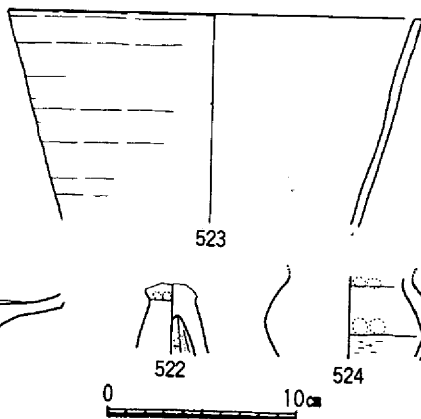
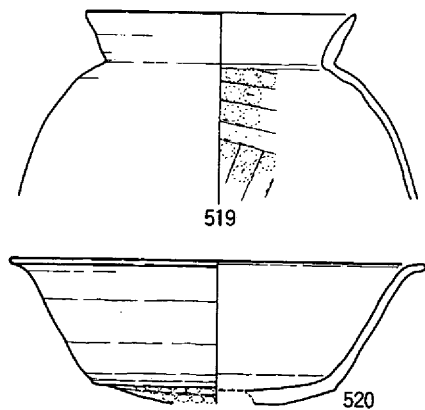
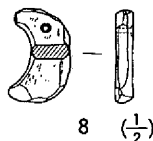
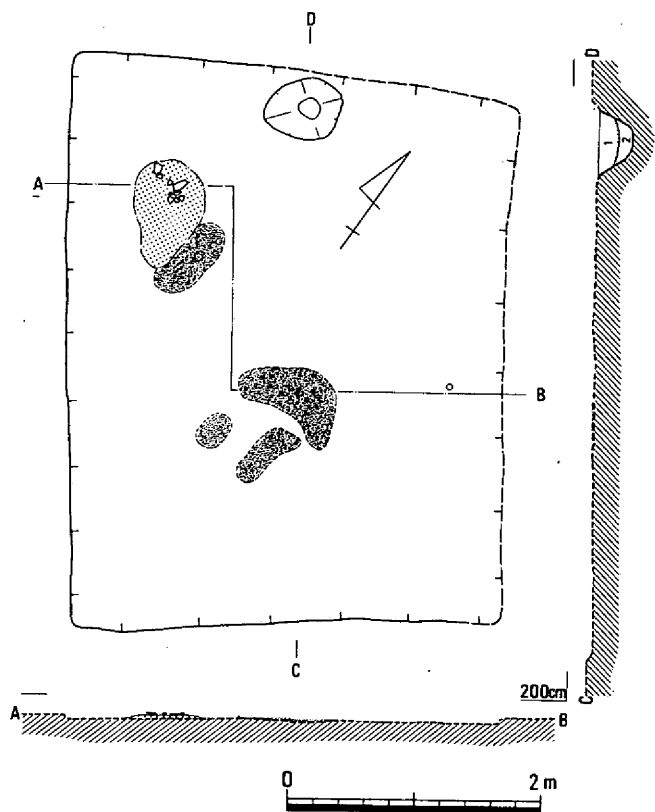
百間川兼基遺跡

短径50cm，深さ28cmを測る。性格は定かでない。

出土遺物は床面と推定される面のものが殆んどであり，519はピット内出土のものである。尚，共伴遺物として滑石製勾玉1点が出土している。淡緑色を呈し，長さ2.5cm，幅1.1cm，

厚さ0.4cm，重量2.8gを測る。円孔は片側穿孔で径0.17cmを測り，全般に粗雑である。本竪穴式住居の西方約18m付近より西・南に傾斜する部分（弥生時代後期の水田跡）に土器溜りが検出されており，類似する滑石製の勾玉が出土している。

本住居跡の時期は出土遺物から判断して，百・古・Ⅲに比定できる。（渡辺）



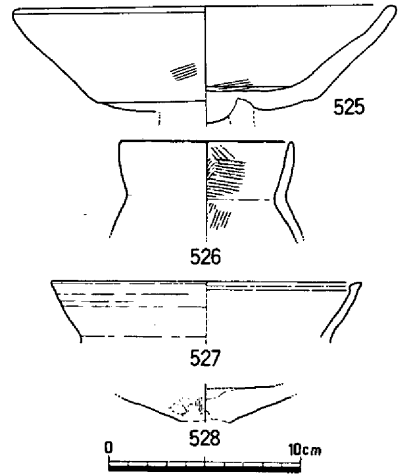
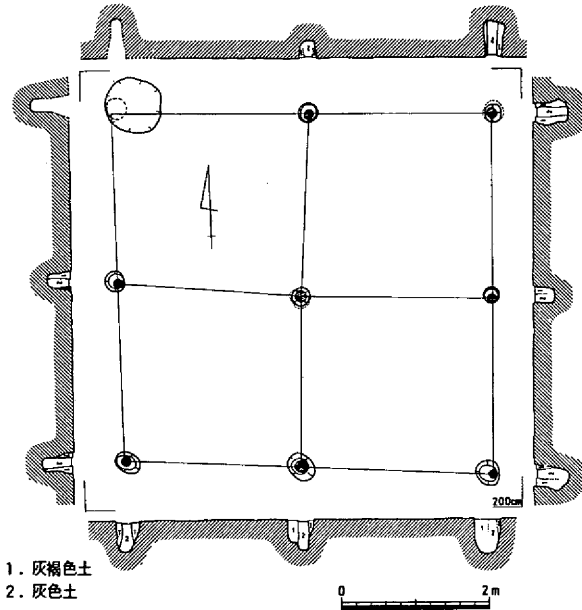
第103図 竪穴式住居—14 ($\frac{1}{60}$)・出土遺物

(2) 建物

建物—5 (第104図)

建物—6 のほぼ真北に位置する 2 × 2 間の総柱建物である。

桁行 491 ~ 504 cm, 梁行 461 ~ 476 cm



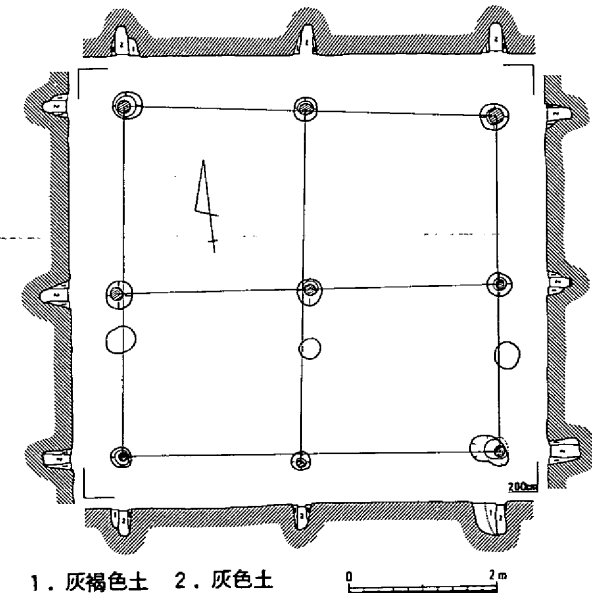
第104図 建物—5 ($\frac{1}{100}$)・出土遺物

cm を測り、面積は約 23.4 m² である。桁行 250 cm, 梁間 230 cm を基調とし、柱間はほぼ等間隔の整然とした構成美を示している。全てに柱痕跡が確認でき 12 ~ 15 cm の柱径を示し、かなり安定

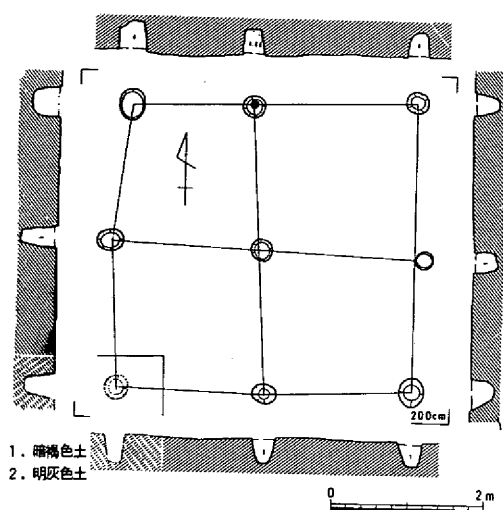
感のあるものである。時期は百・古・Ⅲと考える。

建物—6 (第105図)

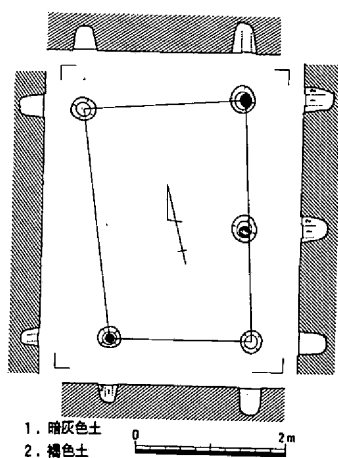
建物—5 のほぼ真南に位置し、併設の可能性が考えられる。主軸は東西方向で、2 × 2 間の整然とした構成美をもつ建物である。桁行 494.5 ~ 503 cm, 梁行 440 ~ 462 cm を測り、面積約 23.3 m² である。柱穴内に礎板と推される板材が検出されたが定かではない。時期は出土遺物が殆んど無く、小片のものばかりであるが、百・古・Ⅲと考



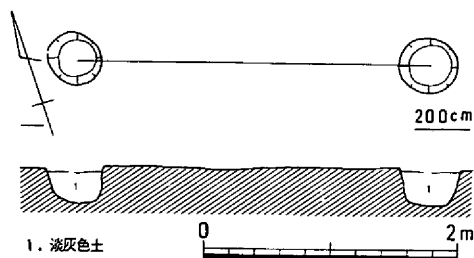
第105図 建物—6 ($\frac{1}{100}$)



第106図 建物—7 ($\frac{1}{100}$)・出土遺物



第107図 建物—8 ($\frac{1}{100}$)



第108図 建物—13 ($\frac{1}{60}$)

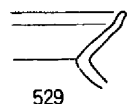
えたい。

(渡辺)

建物—7 (第106図)

304—Eの南東隅、建物—6の南側に位置する。建物—5・6と伴に南北に一直列に並ぶが2者より若干小型で総柱の掘立柱建物である。梁・桁行距離は近似値を示し、方形の平面形と呈する。個々の柱穴間、方向に若干の

バラツキが認められる。



南西隅の柱穴は微高地下がり確認トレンチにより消失している。

北辺 373 cm, 東辺 384

cm, 面積約14㎡を測り、

柱穴掘り方は円形を呈し、総じて小規模な掘り方内は暗褐色土が認められ、柱痕を残すものがある。柱は土壌化し、明灰色を呈しており直径約10cmを測る。掘り方内埋土中には土器小片が数点埋土に混入している。529は北東隅の柱穴中より出土したものである。

中世の建物—19により切られており、時期は周辺の建物群の関係等より百・古・Ⅲと考えられる。

(高畑)

建物—8 (第107図)

大型の建物—9の東に位置する掘立柱建物である。グライ化現象のため、当初、検出作業に困難をきたした遺構である。主軸はやや東に偏る南北方向であり、桁行2間、梁行1間から成り、西側の中央の柱一本は検出できなかった。柱間は、北東隅より順に、174cm, 145cm, 185cm, 305cm, 213cmを測る。時期は出土遺物が少く、歪なプランからも時期決定が困難である。

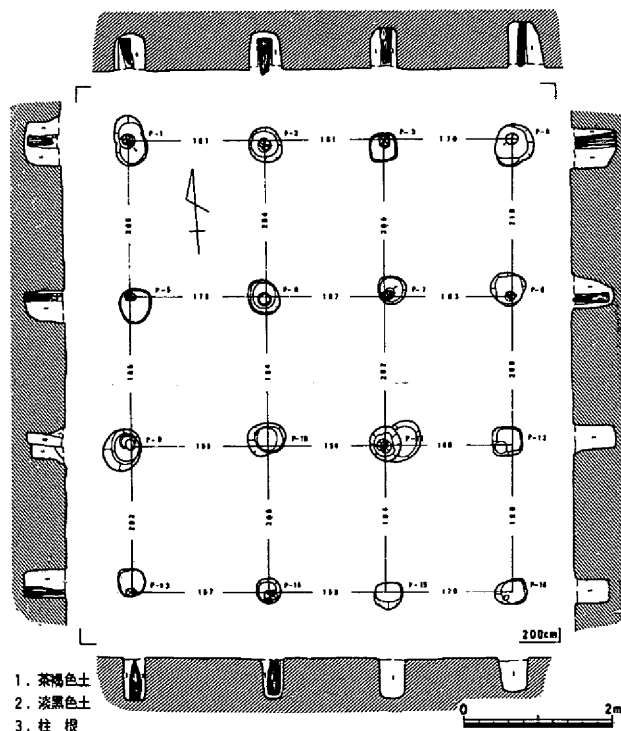
(渡辺)

建物—13 (第108図)

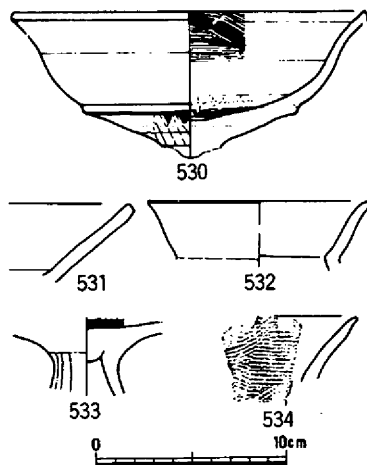
304—Fの南西隅、竪穴式住居—13の南に位置する。北西方向に2柱穴のみが確認されたものである。小型の建物の柱穴に比較すると、直径40～50cmと大きく、方向も異なること等より若干時期にちがいが認められる可能性もある。柱穴内埋土は下層灰色、上層は茶褐色を呈する。
(高畑)

建物—9 (第109図, 図版10—2)

303・4—Fの中に位置し、東側に建物—11、南側に建物—10が並行する。長軸方向を真北に近くとる3×3間の掘立柱建物であり、梁行513cm、桁行600cmを測る。梁行3間の中央梁間が両梁に比較して若干狭く、これは桁行の中央部についても同様のことが言える。柱穴掘り方は、直径約40cm、深さ約50cmを前後するものが多く、プランは円・方形が混在している。総柱の形態をとり、16柱穴内には檜を使用した柱根が10本残存している。現存柱根は基底部径約13～19cm、長さ35～67cmをはかり、円錐形を呈する。使用材である檜の幹部より枝のはる上位部分も利用しているようで、基底近くに枝を払った跡が認められる。柱根基底にはP—7・11・14より出土のものに鉄斧状の工具によるカット面が認められる。これらの柱根は掘り方中央に配置されているものは少く、掘り方壁面に接したり、中央をはずれるものが多い。掘り方基底は海拔高122～134cmを基準に平均130cmをはかるものが多い。



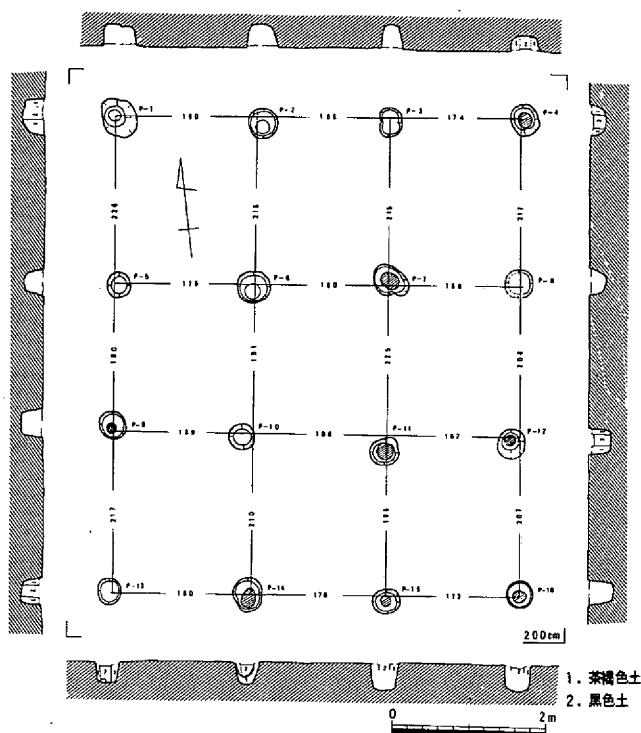
掘り方と柱根基底部の関連では、P—3・4・5・13等のように柱根基底部が掘り方底に接するものと、P—1・2・8



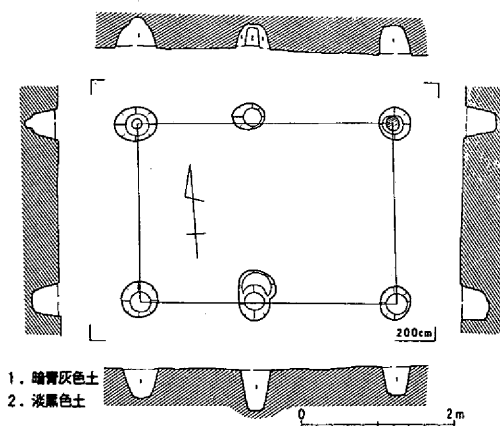
第109図 建物—9 (1/100)・出土遺物

のように掘り方底より約3～8cm浮いた状態で出土するものがある。柱根底海拔高は、111～138cmと最高27cmの隔たりが存在し、建物内部に収納する物の場所や重量等によって起こる現象であろうか。

遺物はP-8・14柱穴を除いてすべて確認されている。それらは小片が中心であり、弥生時代中・後期、古墳時代前期の土器片が多く、中でもP-1の45点は多量である。P-10・20等



第110図 建物—10 ($\frac{1}{100}$)



第111図 建物—11 ($\frac{1}{100}$)

でも25点以上が認められる。甕の破片が多く、次いで高杯・壺が存在する。また、P-11では高杯の杯部が掘り方埋土層より出土しており、これは2時期重複する古相の建物に伴うことが判明しており、時期決定の上限を知ることが可能である。百・古・Ⅲの時期と考えられる。

建物—10 (第110図)

304—Fのほぼ中央、建物—9・11と並列して位置する。長軸方向を真北に近くとる3×3間の掘立柱建物であり、梁行530cm、桁行633cmの掘立柱建物である。

総柱の形態をとるが、柱根は確認できなかった。建物—9より若干大型に作られており、柱間を近似数値にすることにより、その分だけ建物—9より大きくなる。しかし、柱穴掘り方、深さとも小規模になっており、建物—9に比較して重量感に欠ける。柱穴底の海拔高は建物—9より10cm以上高い。

遺物は柱穴内より検出されず、時期決定には不充分であるが、周辺の建物、とくに建物—9との近似形態から考慮すると相前後するものと思われる。

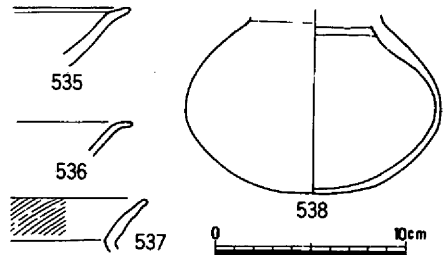
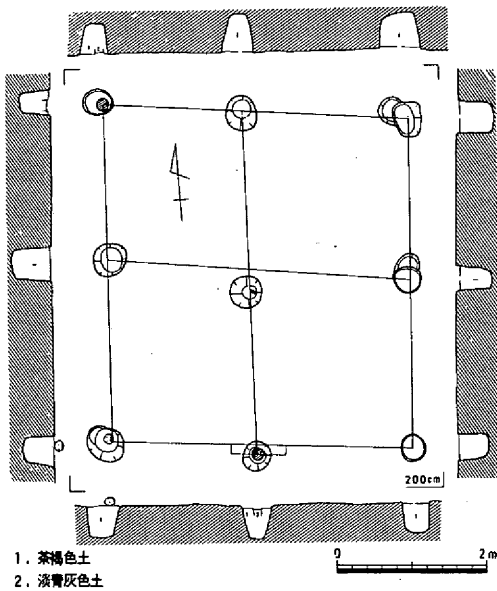
建物—11 (第111図)

304—Fの東側に位置する。建物—10と並列関係にあり、 2×1 間の掘立柱建物である。梁間245cm, 桁行333cm, 床面積約8㎡を測る。桁行の柱間は同数値ではなく、西側柱間が狭く作られており、柱穴掘り方は建物—10より大きく、深さもある。建物方向、柱間近似値等からば建物—10の時期に近いものと考えられるが、遺物は出土しておらず時期決定には不十分である。ここでは併設していた可能性を考えておきたい。

建物—12 (第112図)

303・4—F・Gの交点, 建物—9の東側に位置する。桁行447cm, 梁間407cm, 床面積約18㎡

を測る総柱の掘立柱建物である。主軸は南北に長く、方形に近い平面形を呈するが、若干歪である。東西棟を持つ 2×2 間が多いなかにあって南北棟をとる。柱穴掘り方には建物—9と同様に円・方形が混在しており、柱間においても近似を示している。

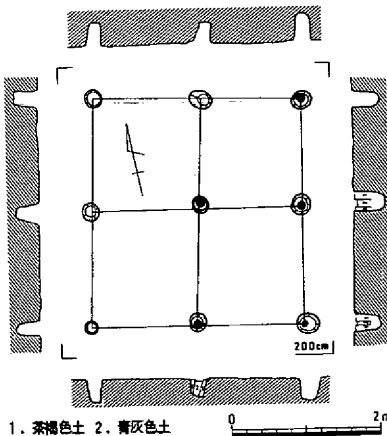


第112図 建物—12 ($\frac{1}{100}$)・出土遺物

遺物は南西隅柱穴上面より埴形土器 538 が1点出土している。百・古・Ⅲの時期が考えられる。

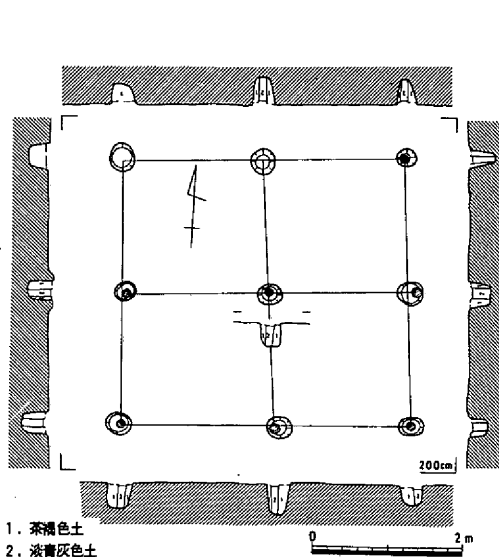
建物—14 (第113図)

304—Hの北西隅に位置する。南北方向に10数cm長い総柱の掘立柱建物であり、他の建物より東に若干主軸をふっている。柱間は約150cmが基調となり、柱穴掘り方径約25~30cmを測り、全体的に小型の建物である。南西柱穴の東側には建物内に井戸—3が入り込んでおり、百・古・Ⅲの時期を示している。切り合い関係については不明であるが、検出状況からでは建物—

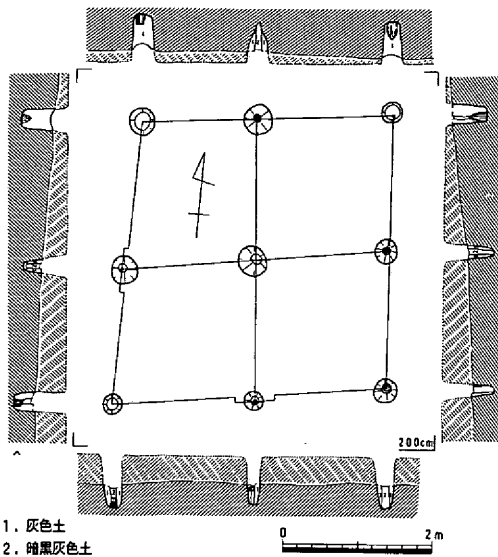


第113図 建物—14 ($\frac{1}{100}$)

14が先行すると思われた。百・古・Ⅲの時期と考えられる。



第114図 建物—15 ($\frac{1}{100}$)



第115図 建物—16 ($\frac{1}{100}$)

建物15 (第114図)

303—H の北東隅、建物—14の北東約12mに位置する掘立柱建物である。東西に主軸をもち、約20cm南北方向より長い総柱の建物である。周辺に同規模の柱穴が比較的まとまって出土したが建物にはなりえなかった。建物—7に近い規模を持つ2×2間であり、柱痕が7か所みられ、直径15cm内のものが中心になる。柱穴掘り方は小規模な部類に入るものである。

建物—16 (第115図)

303—K の南東、建物—4・17の南側に位置する。若干歪な方形プランを持つ掘立柱建物である。海拔高190cmにて一部確認をしていたが、まとまらず、下げることにより2×2間の総柱の建物となった。南北に長く、東西が不統一にて北辺の幅が331cmと短い。

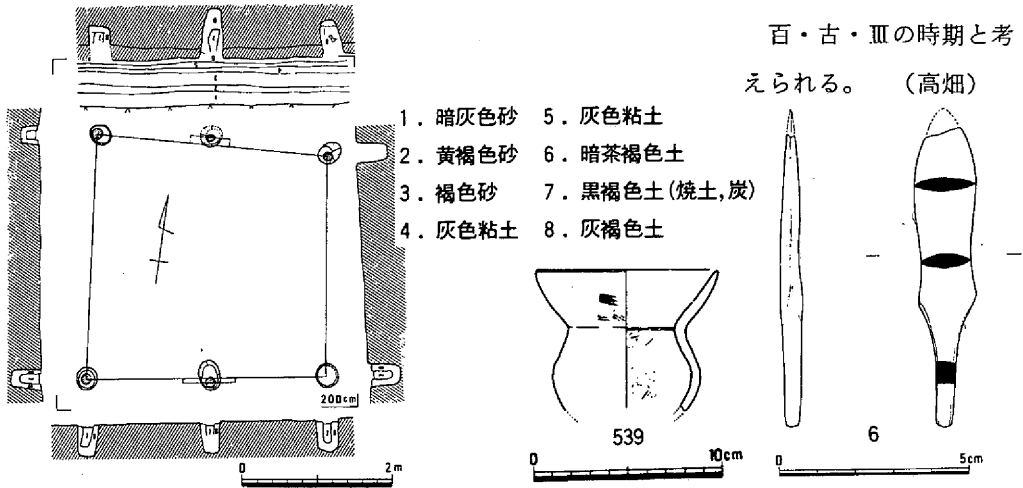
南西隅柱穴より出土した炭化木材は樹種鑑定により、コナラ、アベユキ材であることが判明している。柱穴内よりの遺物はまったく検出されず、時期決定は不充分であるが、建物—7と規模・形態に類似する点がみいだされることなどより古墳時代前期と考えられる。

建物—17 (第116図)

303—K の北西隅、建物—4の西側、建物—16の北西に位置する。本建物も歪な形態を呈し、南北が長く、東にすばまる。桁行1間・梁行2間と不安定なプランである。柱穴掘り方規模は小さく、柱痕は直径15cm未満である。柱痕内は炭、焼土が目立ち、それらが柱痕状になっている。とくに北東隅柱穴内からは小型丸底壺、鉄鏝が出土している。これらは柱穴底ではなく、掘り方の中層付近より出土している。他の建物とは若干構造が異り、総柱でもなければ、

桁行も1間のみというものである。南西隅柱穴内より出土した柱材はコナラであることが樹種鑑定されている。

百・古・Ⅲの時期と考えられる。(高畑)



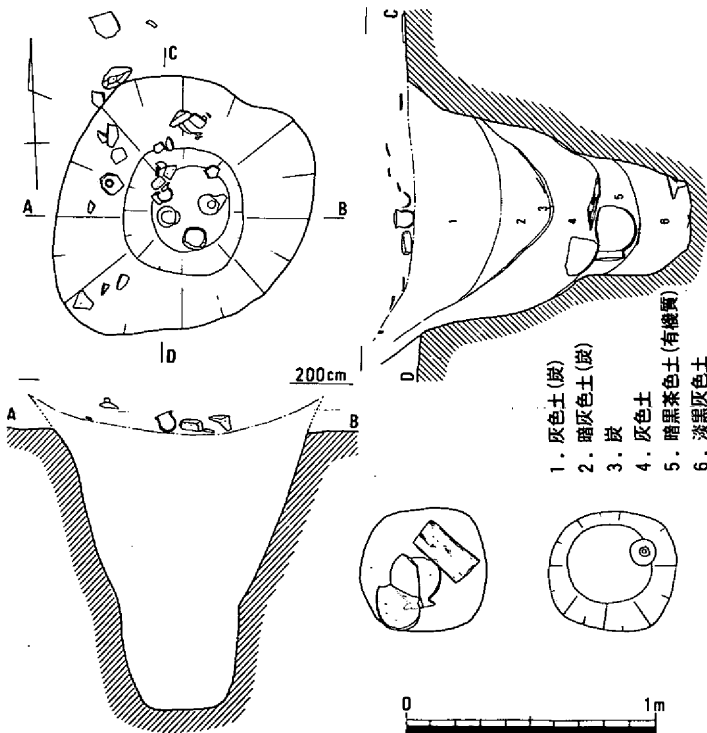
第116図 建物—17 ($\frac{1}{100}$)・出土遺物
(3) 井 戸

井戸—3

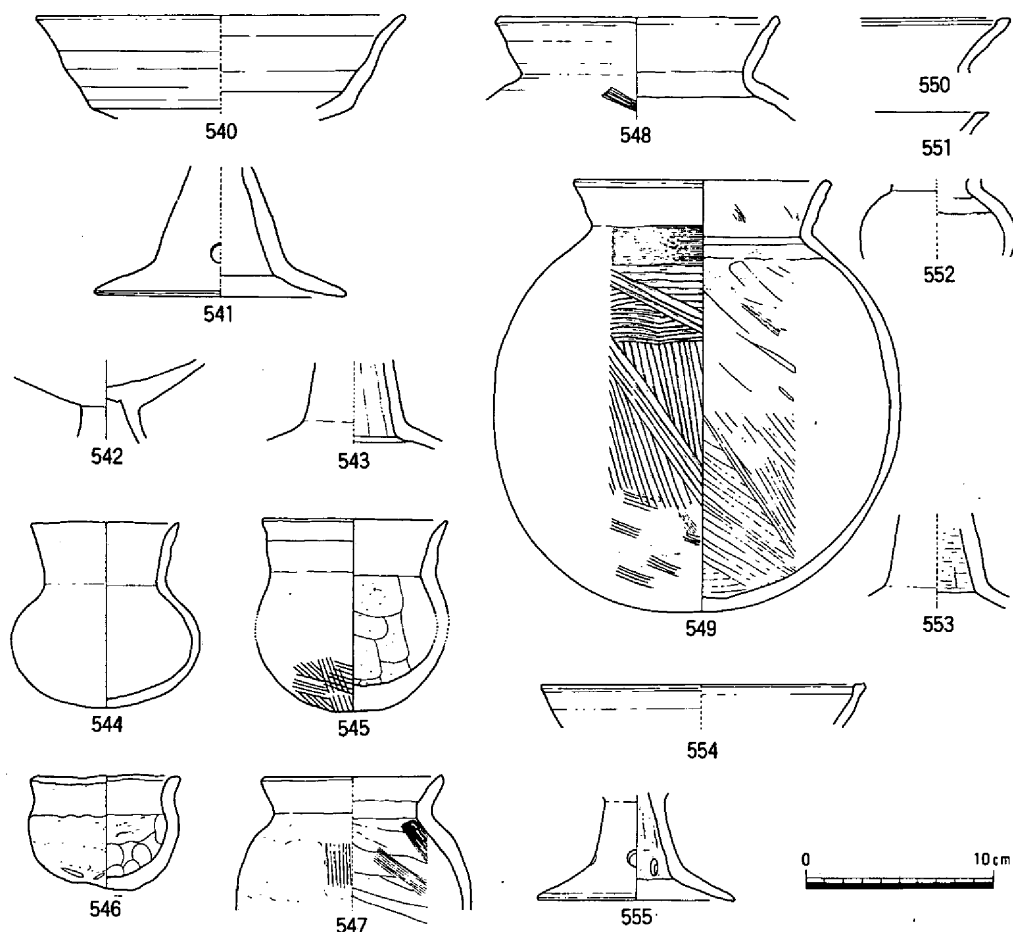
(第117図)

304—Hの北西に位置し、建物—14と切り合い関係にあると考えられる。上端部幅100×100cm、深さ130cmを測る。平面は不整形円形にて歪を持っている。掘り方は約75°の角度で掘り下げられ、約55cm下にて垂直に変換して底部に至る。断面は明瞭なレンズ状堆積を呈する。他の井戸と異なり、井戸上面凹地に遺物が一括しており、

540~550がそれらであ



第117図 井戸—3 ($\frac{1}{30}$)



第118図 井戸—3出土遺物

り、海拔高 180 ~ 195 cm 間である。続いて暗灰色を呈する海拔高 125 cm 付近、間層において有機質腐植土が見られ、それらには大型片を含んでおり、551~554等が出土している。549等はほぼ復原可能であったが、投げ込まれた時点ですでに欠損品であったようである。下層の淡黒灰色土中を除くと最下層より555の高杯が逆転して出土しており、層中には木ギレ片等を若干含む。

井戸底は海拔高70cmを測り、南側12.5mに所在する井戸—4と同数値を示す。掘り方壁は海拔高150cmに基盤粘土層が見られ、海拔高100cmにて基盤粘土層が基盤砂層に変化し、その砂層が湧水層の可能性が大である。

これらの井戸は大型建物群（倉庫）とか、竪穴式住居の集中している場所には存在しておらず、一定の距離をおいて認められる。

出土遺物から百・古・Ⅲの時期に放棄されたものと考えられる。

第3章 第1節 大上田調査区

井戸—4（第119・120図）

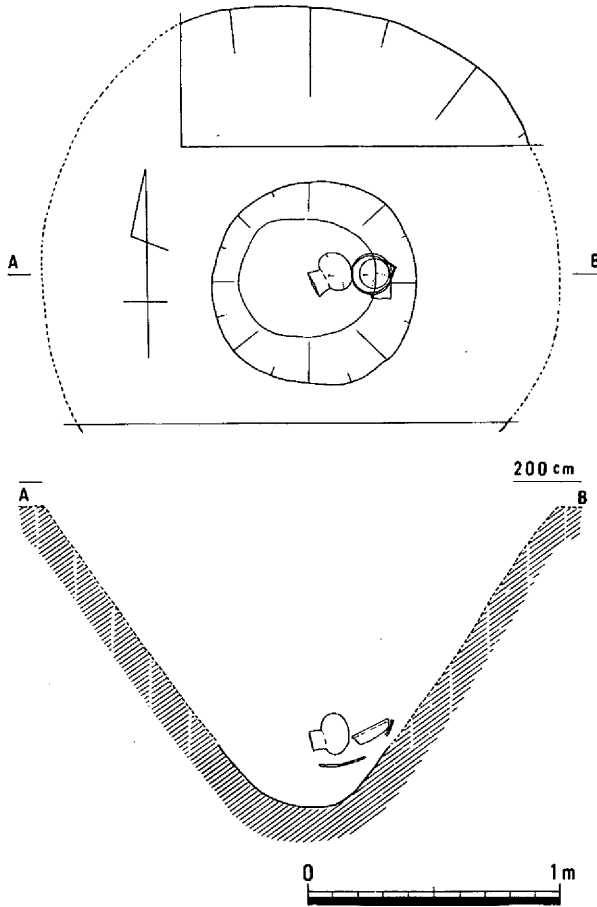
304—H の南西隅，井戸—3 の南側12mに位置する。調査時の土層観察用および排水用に設けた試掘溝内より検出したものであり，遺物出土により判明したために大半を破壊した後の調査となった。ほぼ中心部を削平した形となり，井戸底部のみが残在する。推定上端部幅110×100cm，深さ130cmを測り，平面は円形を呈する。井戸底部海拔高は70cmを測り井戸—3と同数値である。

遺物は井戸底より若干浮いた面に一括して出土しており，壺・甕がみられる。

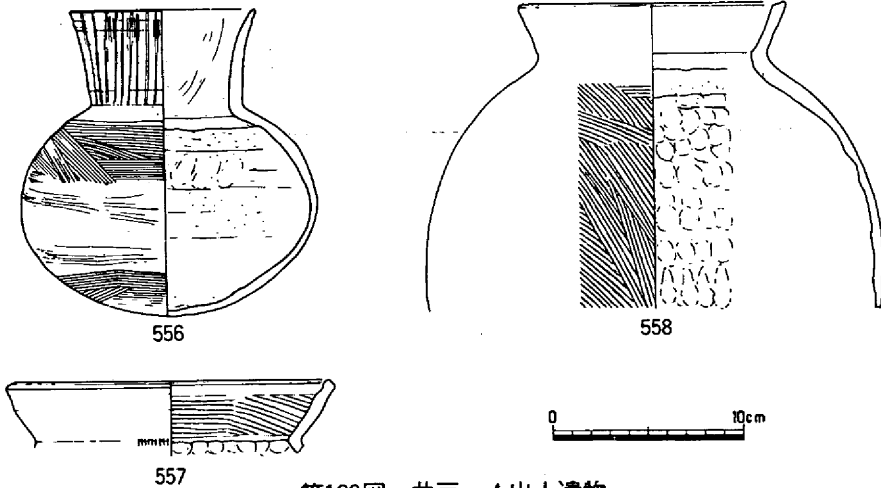
百・古・Ⅲの時期と考えられる。

井戸—5（第121・124図）

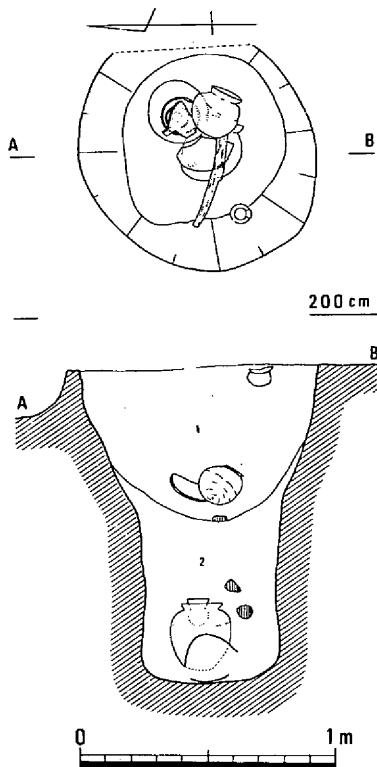
304—I の西端に位置する。す



第119図 井戸—4 ($\frac{1}{30}$)



第120図 井戸—4 出土遺物



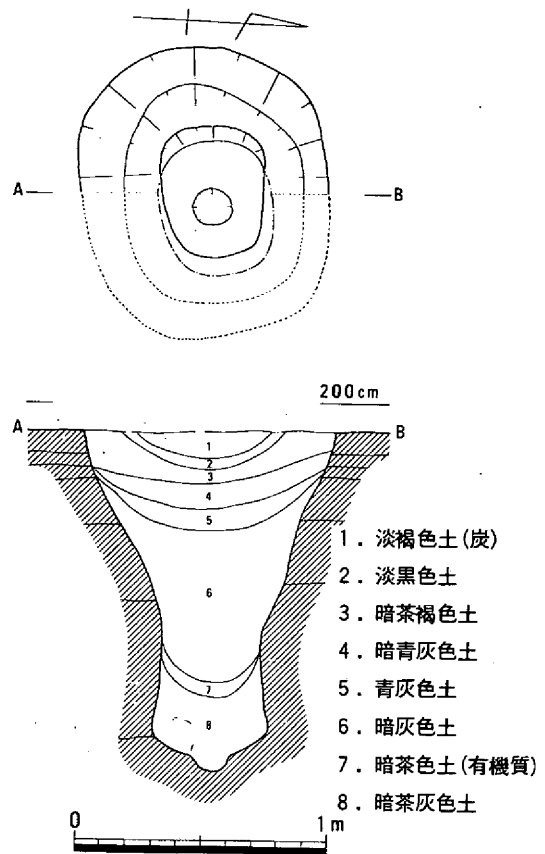
第121図 井戸-5 ($\frac{1}{30}$)

ぐ南側 2 m に溝-23 が南西に流走している。

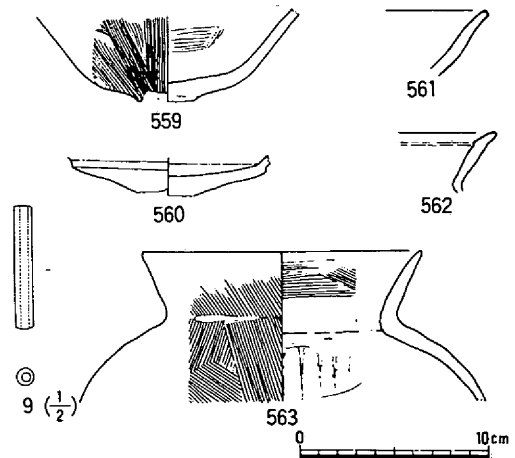
井戸上端部幅 92×90 cm, 深さ 127 cm を測り,

円形プランを呈する。素掘りにて上面より 65° の角度で掘り込み, 海拔高 120 cm 付近にて垂直に変換し下位が若干ふくらむ。井戸底は海拔高 53 cm を測り, 井戸-6 と同数値を示す。井戸内はレンズ状に堆積を呈しており, 各層に炭が目立つようである。

上層茶褐色土中より 564 の埴形土器, 566・575 が出土している。掘り方変換点にあたる部分に有機物が集中し, それらと伴に 567・569 が出土している。そして間層をおき底部を中心に 565・568・570～574 が比較的まとまって出土している。565 は 568 の内より出土している。他に桜の木皮をまとめたものもみられる。出土土器の内面は下位より上位に指による掻きナデ状の痕跡をとどめる特徴



第122図 井戸-6 ($\frac{1}{30}$)



第123図 井戸-6 出土遺物

を有する。

百・古・Ⅲの時期と考えられる。

井戸—6 (第122・123図)

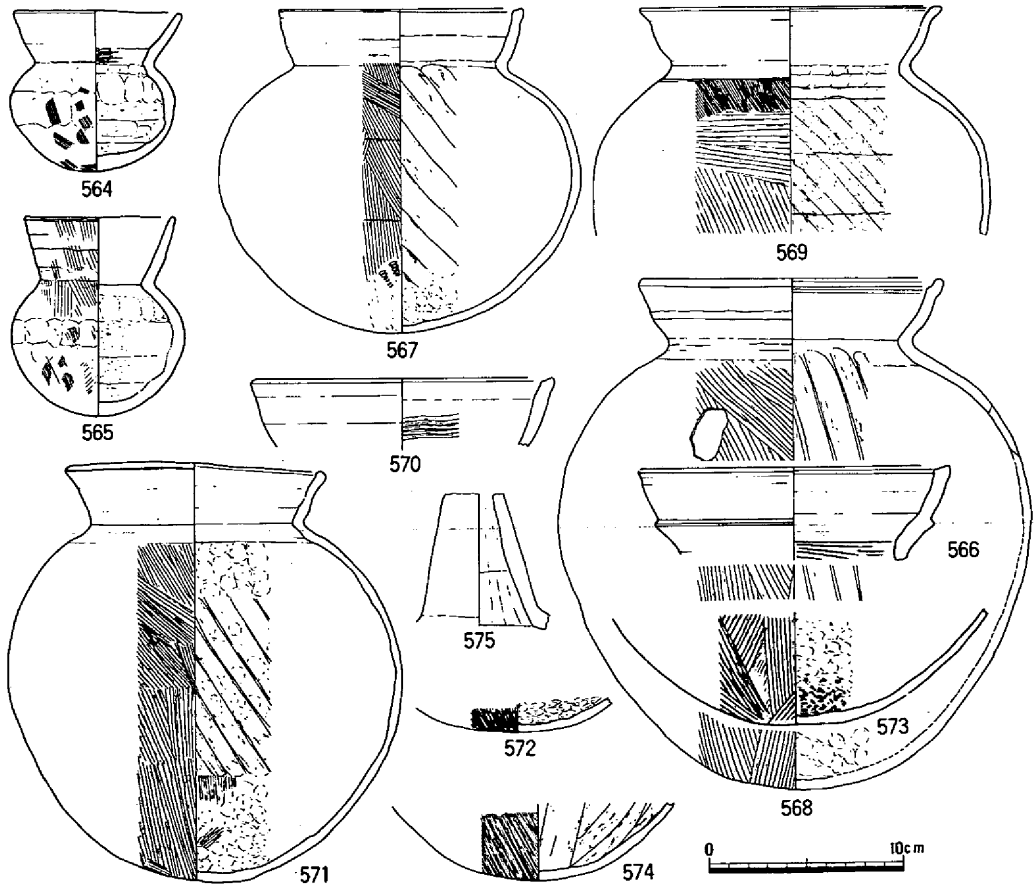
304—K の北東部に位置する。北側 5 m に溝—24 が南東に流走している。井戸—5 と同様に東半分を排水用トレンチにて削除し、遺物の出土をもって確認した井戸である。

上端部南北幅 195 cm, 深さ 137 cm を測り、平面は楕円形を呈する。素掘りにて上面より約 70° の角度で掘り込み、海拔高 120 cm 付近にて垂直に変換し、下位に向い袋状となる。堆積土はレンズ状を呈し、変換点下位に腐植土が集積している。桃の種が 20 点以上、木質もここより上部に限定された。遺物は下層の 8 にまとまり、腐植土と粘土の互層中より出土している。その土層内よりムギ 2 粒、シソ等の種子が出土している。

9 は 2 層下位より出土したもので、両側からの穿孔を施された碧玉製管玉である。長さ 3.22 cm, 幅 0.48 cm, 重さ 1.1 g を測る。

百・古・Ⅲの時期と考えられる。

(高畑)

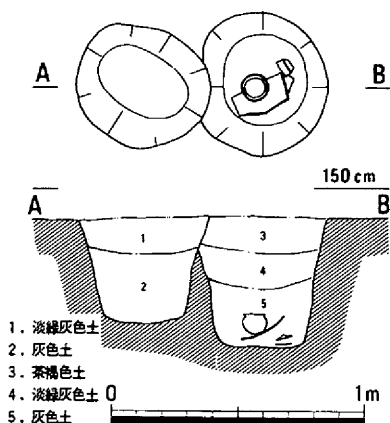


第124図 井戸—5 出土遺物

(4) 土 墳

土墳—32 (第125 図)

百・後・IVの水田洪水砂直上面より掘り込まれた土墳である。検出面での規模は、長径54×

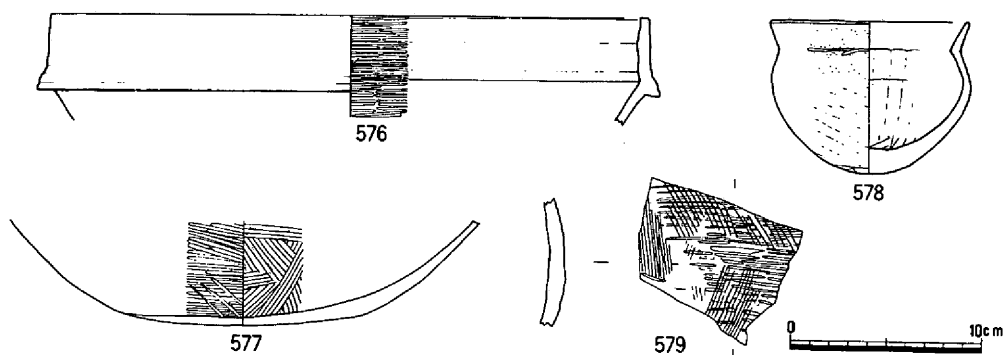


第125図 土墳—32・33 ($\frac{1}{30}$)

短径48cmと小さなものである。平面形態は、楕円形を呈する。深さは、42cmを測る。底の海拔は、96cmである。埋土は、上・下2層に分層できる。ところが、この中には遺物がまったく認められなかった。そのため、時期の詳細は不明である。しかし、土墳—33との切り合い関係によれば、その上限は百・古・Iにおくことが可能である。いずれにせよ、土墳—33とさほど隔たりのない時期のものと考えられる。

土墳—33 (第125・126図)

土墳—32同様に水田洪水砂直上面より掘り込まれた

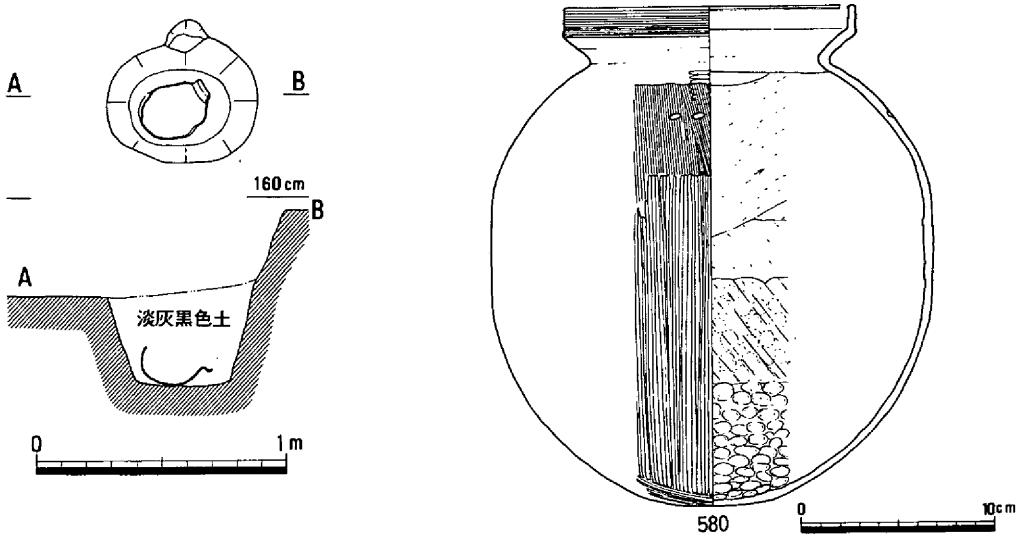


第126図 土墳—33出土遺物

土墳である。土墳—32により切られる。検出面での規模は、長径110×短径95cmと小さく、ほぼ楕円形を呈する。深さは、85cmを測る。底の海拔は、87cmである。遺物は、最下層の暗灰色土中より土器が4点検出できたにすぎない。土器には、鉢・甕・さらに外面にタタキメを施した甕の破片等が認められた。時期は、百・古・Iに比定できる。

土墳—35 (第127 図)

土墳—32・33に近接し、前二者同様に水田洪水砂直上面より掘り込まれた土墳である。検出面での規模は、長径60×短径50cmと小さく、深さも検出面から70cmと比較的浅い。底の海拔高は86cmである。平面形態は楕円形を呈する。淡灰黒色砂質土に埋もれたこの土墳の底からは、



第127図 土壌—35 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

甕が1点 割れ口を上に向けた状態で検出できた。他には遺物の検出はできなかった。時期は百・古・Ⅰと考える。(島崎)

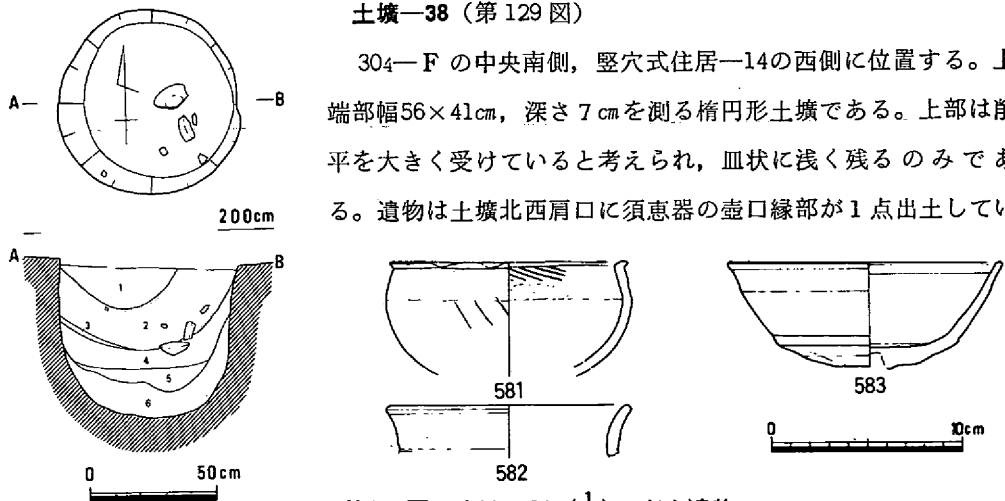
土壌—36 (第128図)

303—E の北東隅に位置する。建物—5 の北西隅柱穴によって切られている。上端部幅72×72cm, 深さ61cmを測る円形土壌である。下端は丸みを持って終り, 海拔高127 cmを測る。

土層はレンズ状の自然堆積がみつめられ, 遺物は2層を中心にみられ, 東側より土器が投げ込まれた状況を示す。同層には炭の分布が認められ同時に放棄されたものと考えられる。遺物は鉢, 甕, 高杯が出土しており, 百・古・Ⅲの新相の時期と考えられる。(高畑)

土壌—38 (第129図)

304—F の中央南側, 竪穴式住居—14の西側に位置する。上端部幅56×41cm, 深さ7 cmを測る楕円形土壌である。上部は削平を大きく受けていると考えられ, 皿状に残るのみである。遺物は土壌北西肩口に須恵器の壺口縁部が1点出土している。



第128図 土壌—36 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

る。口縁部の特徴は陶邑編年によるTK 206 窯（註29）の時期に比定され、5世紀後半と考えられる。

土壇—40（第130図）

304—Fの中央南側、土壇—38の南側に位置する。上端部幅90×76cm、深さ13cmを測り、南北に長い楕円形土壇である。土壇—38同様に削平を受けており、皿状に浅い凹を残すのみである。遺物は土壇中央、やや西側より土師器へ飯片が1点出土している。

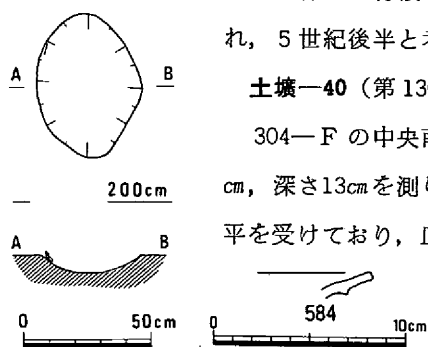
口縁部端等の特徴は新田樋門H—1（註30）内出土の飯と類似点を示す。

5世紀後半～末と考えられる。

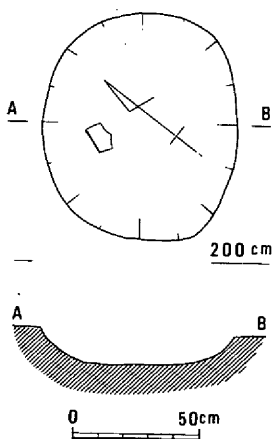
（高畑）

土壇—39（第131図）

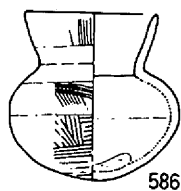
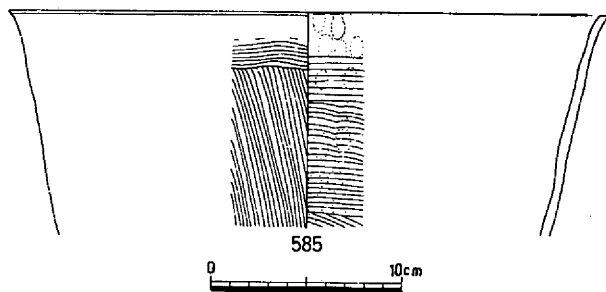
303—Iの南辺に位置する。調査中に図化を忘れ、遺物を取りあげてしまったために具体性は伴わない。上端部径約50cm、深さも浅いものであった。



第129図 土壇—38 (1/30)・出土遺物



第130図 土壇—40 (1/30)・出土遺物



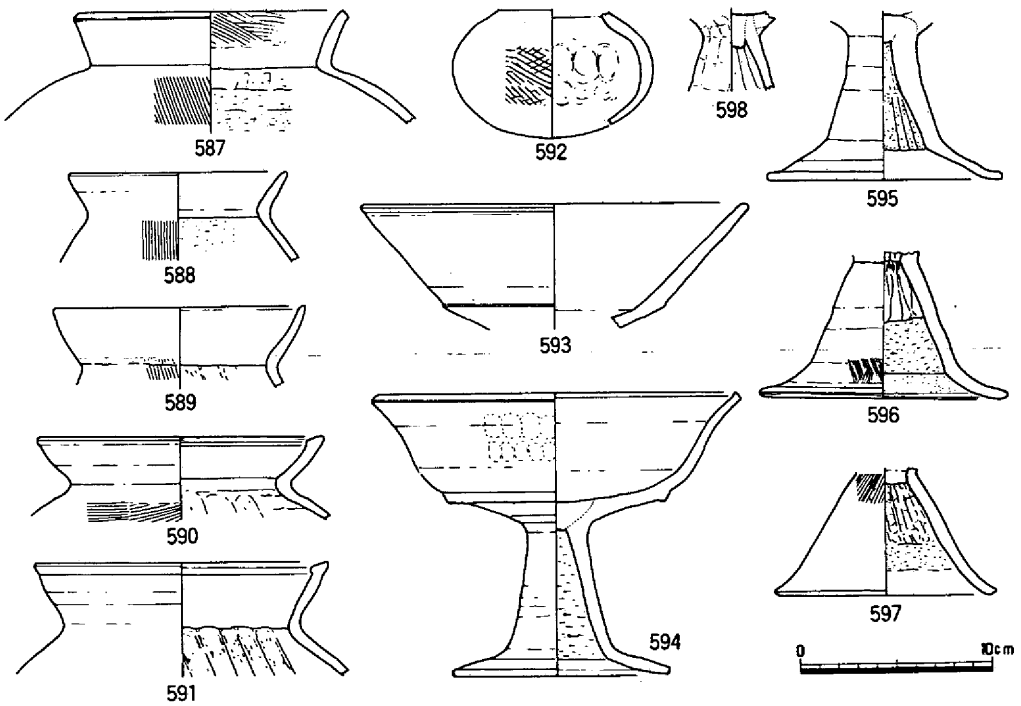
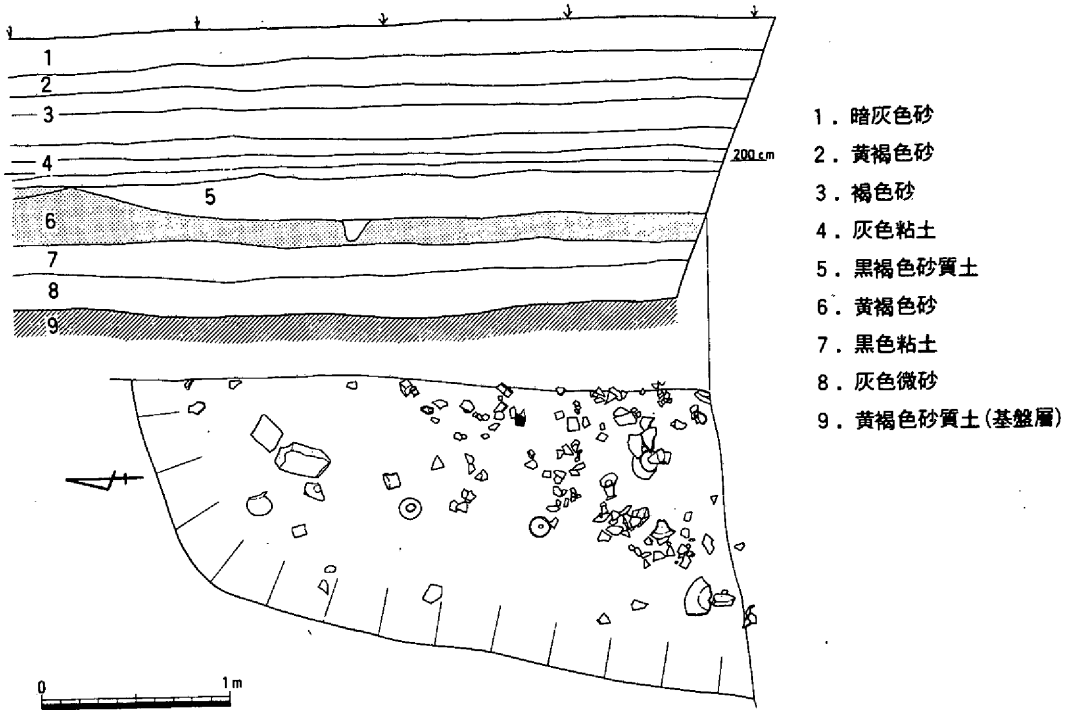
第131図 土壇—39出土遺物

遺物は小型丸底壺1点が出土しており、百・古・Ⅲの時期が考えられる。（高畑）

土器溜り（第132図）

304—Kの南東隅に位置する土器溜りである。洪水砂である黄褐色砂6層の上部にのり、東西160cm・南北310cmの範囲に土器が分布する。土器と伴に焼土塊、角礫等を含んでおり、この分布はさらに東・南に延びることが予想されるが、現段階ではいかなる遺構か判断が困難である。市道321号線付け変え時点での調査に待ちたい。

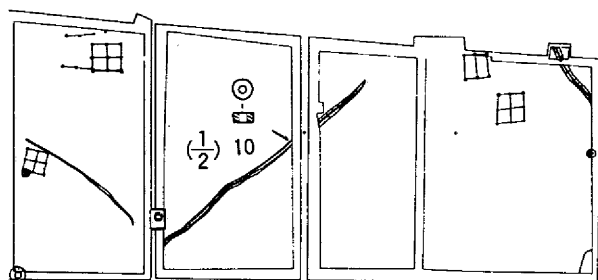
出土土器は壺・埴・高杯・甕等があり、甕の胴部内面は指による搔き上げ状の調整と、ヘラ削り調整の2通りが認められる。百・古・Ⅲの時期が考えられる。（浅倉）



第132図 土器溜り ($\frac{1}{40}$)・出土遺物

(5) 溝

溝—23 (第133図)



第133図 溝—23 ($\frac{1}{1000}$)・出土遺物

接続するか否かは明確にはできない。

また、本溝の存在する 303・4—I・J には竪穴式住居、建物等の構造物の存在した痕跡は認められない。

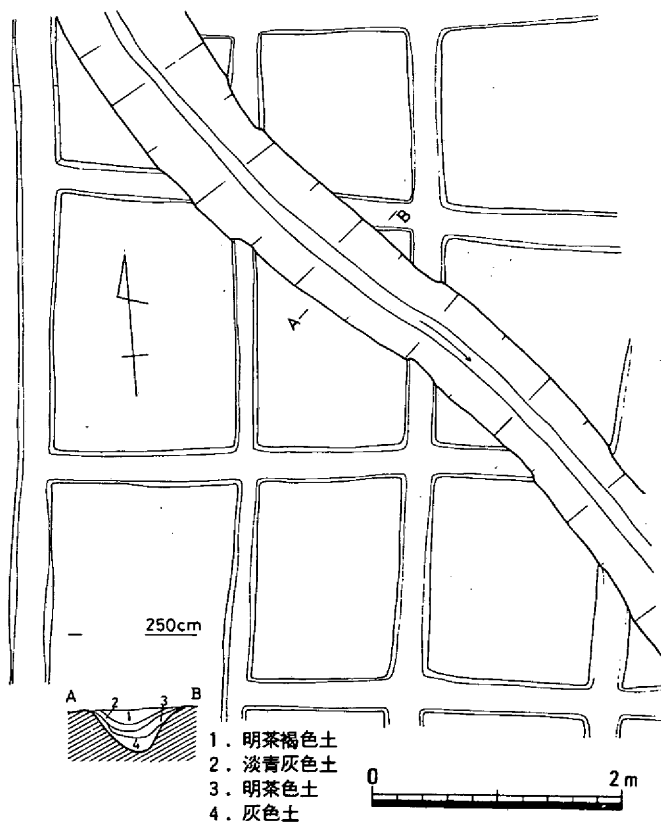
遺物は 303・4 の J 線断面に観察できる溝—23 中層より、滑石製の臼玉が出土している。最

大長 0.20cm, 最大幅 0.61cm, 重量 0.1g を測る。土器類は小片に限られ、図化不可能なものばかりであるが、小片の特徴等からは百・古・Ⅲと考えられる。

溝—24 (第134図)

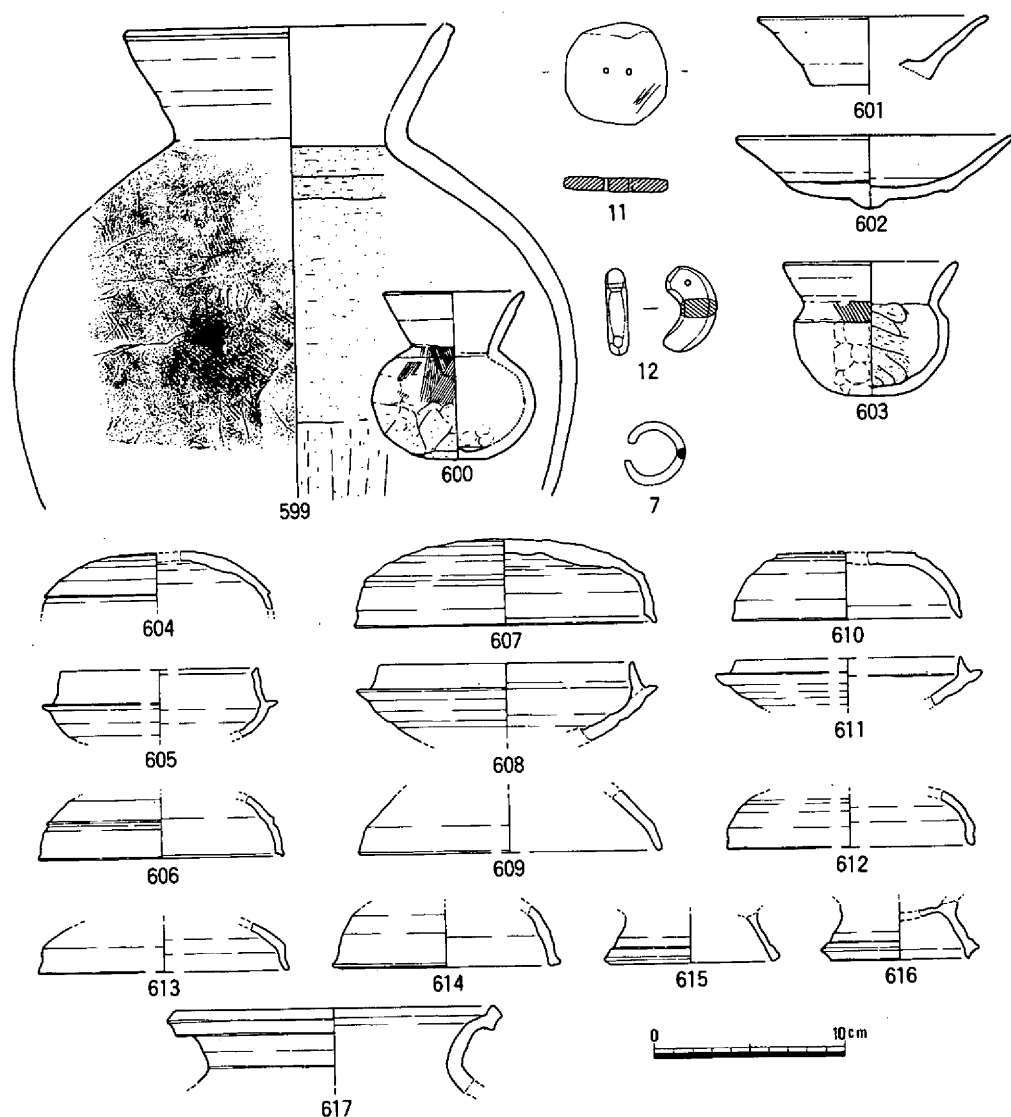
303—K の北東端に位置し、南東に流走する延長約 10m の溝である。上端部幅約 60cm, 深さ約 22cm を測り、南東に向い溝底を深くする。本溝は東苗代調査区の今谷導入水路部分 305—L の北東部まで約 45m まで延びており、溝東側に柵状の柱穴列を有していることが判明している。

遺物は溝内より細片が少量出土したのみであり、その特徴は百・古・Ⅲの時期に比定できる。



1. 明茶褐色土
2. 淡青灰色土
3. 明茶色土
4. 灰色土

第134図 溝—24 ($\frac{1}{60}$)



第135図 古墳時代の出土遺物

(6) 包含層出土の遺物

古墳時代の土師器、須恵器、滑石製の勾玉、有孔円板、耳環等が出土している。

599・600は304-Fの南辺部掘開停止線の壁面より出土したものである、周辺には建物一10・12、竪穴式住居一13、14等の百・古・Ⅲの時期の構造物が多く、何らかの遺構が存在する可能性がある。601～603は303-Fの東側でまとまって出土したものである。

604～617は303・4-Eの水田下がり斜面に追従して推積した層中より出土したものであり、5世紀後半～7世紀前半までおよぶ。

(高畑)

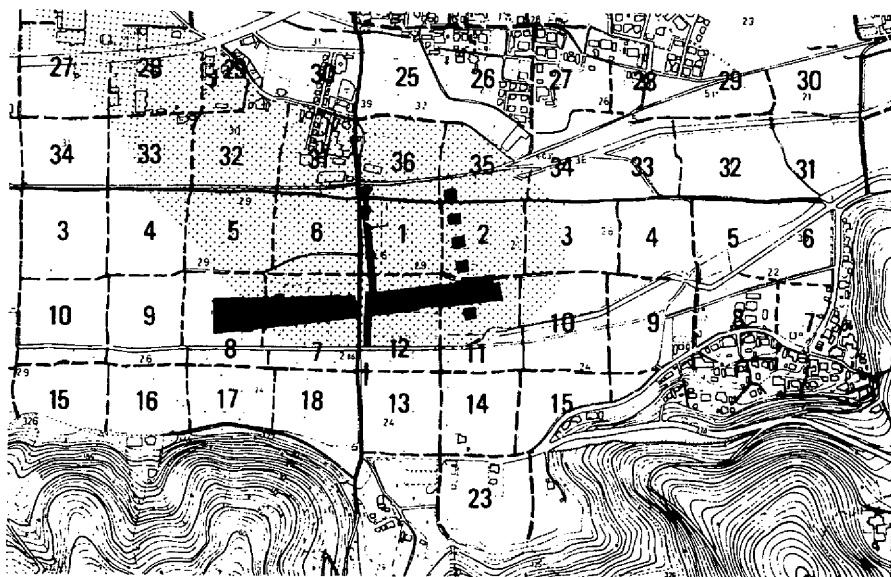
表一5 古墳時代土器観察表

押図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
竪穴式住居 - 12 (第99図)									
504	高杯形土器	14.8	—	—	・内外面ヨコナデ。	暗黄褐色	白色小砂粒	良 好	
505	"	—	10.9	—		暗 褐 色	"	"	
506	"	14.9	—	—	・内外面ヨコナデ。	暗赤褐色	"	"	・外面黒斑。
507	壺形土器	9.2	—	—		黄 褐 色	"	"	
508	甕形土器	16.4	—	—	・外面ハケメ、内面指頭ナデ。	暗黄灰色	"	"	
509	"	13.7	—	—	・外面粘土粒輪痕み痕。口縁内外面つまみ。	黄 灰 色	白色砂粒	"	
竪穴式住居 - 13A・B (第102図)									
510	壺形土器	9.9	—	16.3	・小型丸底甕で、体部はやや扁平な球形をなす。内面上半はヘラケズリ、下半ハケメ。	淡灰白色	精製粘土	良 好	・完形品。黒斑あり。
511	"	—	—	—	・小型の丸底を呈すものであろう。	淡茶褐色	微砂を含む	"	
512	鉢形土器	12.7	—	6.1	・碗形をなす土器で、口縁部はやや外反。	"	微 砂	"	
513・514	"	8.9	—	5.0	・513は手捏ね土器で指頭痕跡を残す。	"	細 砂	"	
515	甕形土器	19.0	—	—	・二重口縁をなし、端部はやや拡張。	赤 褐 色	微 砂	"	
516~518	高杯形土器	15.7	—	—	・516は漏斗状の杯部で口縁端部は少し外折する。517は脚柱部と裾部の境に稜あり。	"	細 砂	"	
竪穴式住居 - 14 (第103図)									
519	壺形土器	14.1	—	—	・胴部は球形を呈するものと推される。	淡灰白色	微 砂	良 好	
520	高杯形土器	21.7	—	—	・口縁部はほぼ水平方向に外反し、端面をもち、杯部と口縁部の境は稜をもつ。	淡茶褐色	"	"	
521・523	"	—	—	—	・破片。	赤 褐 色	細 砂	"	
522	甕	—	—	—	・上部の方が広い円筒形を呈す。	"	"	"	
524	壺形土器	—	—	—	・小型丸底甕か。体部内面下半はヘラケズリ。	淡茶褐色	微 砂	"	
建物 - 5 (第104図)									
525	高杯形土器	19.7	—	—	・内外面ハケメ。	黄 灰 色	白色砂粒を含む	良	
526	壺形土器	—	—	—	・内面ハケメ。	淡 褐 色	白色小砂粒	"	
527	甕形土器	—	—	—		暗赤褐色	"	"	
528	高杯形土器	—	—	—	・外面ハケメ。	淡赤褐色	"	"	
建物 - 7 (第106図)									
529	甕形土器	—	—	—		暗赤褐色	白色小砂粒	良 好	・小片。
建物 - 9 (第109図)									
530	高杯形土器	18.8	—	—		灰 黄 色	白色砂粒	良 好	
531	"	—	—	—	・内外面ヨコナデ。	灰 白 色	"	"	・小片。
532	壺形土器	11.8	—	—	・内外面ヨコナデ。	黄 灰 色	白色小砂粒	"	"
533	高杯形土器	—	—	—	・円板充塞。	淡灰褐色	"	"	"
534	甕形土器	—	—	—	・内面荒いハケメ。	黒 褐 色	白色砂粒	"	"
建物 - 12 (第112図)									
535	甕形土器	—	—	—		黄 灰 色	白色砂粒	良 好	・小片。
536	"	—	—	—		淡 褐 色	"	"	"
537	"	—	—	—	・内面荒いハケメ。	暗 灰 色	"	"	"
538	壺形土器	—	—	—		赤 褐 色	精製粘土	"	"
建物 - 17 (第116図)									
539	壺形土器	9.5	—	—	・外面極細のハケメ。	暗茶褐色	白色小砂粒	良 好	・小型丸底甕。
井戸 - 3 (第118図)									
540	高杯形土器	19.0	—	—	・内外面凹凸。	黄 灰 色	白色小砂粒	良 好	
541	"	—	12.8	—	・透し孔3孔。	明 褐 色	精製粘土	"	
542	"	—	—	—		"	砂粒を多く含む	良	
543	"	—	—	—	・筒部内面丁寧なナデ。	淡黄褐色	"	良 好	・小片。
544	壺形土器	7.7	—	9.9	・内外面ともに剝落。	淡 灰 色	白色小砂粒	不 良	・丸底。
545	埴形土器	9.5	—	10.2	・胴部外面下半輪状工具によるハケメ。	褐 色	精製粘土	良 好	
546	"	7.4	—	6.15	・内外面指頭圧痕目立つ。	暗 褐 色	白色砂粒	良 好	・外面に黒斑。
547	"	9.4	—	—	・内面凹凸が微しい。	"	"	良	"
548	甕形土器	14.7	—	—	・胴部内面ヘラケズリ後ナデ。	"	"	"	"
549	"	13.2	—	23.0	・胴部外面荒いハケメ。	暗 褐 色	"	"	"
550	"	—	—	—		黄 灰 色	"	良 好	・小片。
551	"	—	—	—		淡 褐 色	"	"	・外面煤付着。
552	壺形土器	—	—	—		黄 褐 色	白色小砂粒	"	
553	高杯形土器	—	—	—	・筒部内面荒いヘラケズリ。	淡黄灰色	"	"	
554	甕形土器	16.3	—	—		"	"	"	・小片。
555	高杯形土器	10.4	—	—	・透し孔3穴。	淡黄褐色	精製粘土	"	
井戸 - 4 (第120図)									
556	壺形土器	9.75	—	16.05	・口辺部にヘラによる暗文。	黒 灰 色	白色砂粒	良 好	
557	甕形土器	16.4	—	—		茶 褐 色	"	"	
558	"	12.7	—	—	・外面ハケメ。内面指頭圧痕。	淡 褐 色	"	"	・外面煤付着。
井戸 - 6 (第123図)									
559	高杯形土器	—	—	—	・内外面ハケメ。	淡 褐 色	白色砂粒	良 好	
560	"	—	—	—		暗黄灰色	"	"	
561	"	—	—	—		淡 褐 色	"	"	・小片。

第3章 第1節 大上田調査区

押図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
562	壺形土器	—	—	—	—	淡褐色	白色砂粒	良好	・小片。
563	—	15.0	—	—	・外面ハケメ。内面指頭によるナデ上げ。	褐色	—	—	—
井戸 - 5 (第124図)									
564	壺形土器	8.5	—	8.5	・口縁部ヨコナデ。	淡茶褐色	白色小砂粒を含む	良好	・完形品。
565	—	7.6	—	10.55	・口縁部に粘土結輪積み痕跡。	—	精製粘土	—	—
566	壺形土器	14.6	—	—	—	褐色	白色小砂粒	—	—
567	壺形土器	12.0	—	17.15	・外面ハケメ。内面指頭ナデによる引き上げ。 ・外面に粘土結輪積み痕。胴部に凹凸が著しく目立つ。内面底指頭ナデによる引き上げ。	茶褐色	—	—	・外面煤付着。胴部内側より穿孔。内面底に焼米。
568	—	15.3	—	27.3	・外面ハケメ。内面指頭ナデによる引き上げ。	—	—	—	・外面煤付着。
569	壺形土器	14.6	—	—	・外面ハケメ。内面指頭ナデによる引き上げ。	明褐色	白色砂粒	—	—
570	—	14.6	—	—	・外面ハケメ。内面指頭ナデによる引き上げ。	明灰色	—	—	—
571	—	12.9	—	22.3	・外面ハケメ。内面指頭ナデによる引き上げ。	淡褐色	—	—	・外面煤付着。内面底に焼米。
572~574	—	—	—	—	・外面ハケメ。内面指頭ナデによる引き上げ。 ・外面ハケメ。内面ヘラズリ(掻き取り)。	淡黒色	—	—	・外面煤付着。内面底に焼米。
575	高杯形土器	—	—	—	—	明灰色	—	—	・小片。
土壙 - 33 (第126図)									
576	壺形土器	30.0	—	—	・内面ヘラミガキ。	赤褐色	精製粘土	良好	・577と同一個体か。
577	—	—	12.0	—	・外面(底部)ヘラミガキ。内面ハケメ。	—	—	—	・外面黒斑。
578	鉢形土器	10.2	—	8.1	・外面細いハケナデか。	明褐色	—	—	—
579	壺形土器	—	—	—	・外面タタキメ後ハケメ。内面丁寧なハケメ。	淡灰色	白色砂粒	—	・外面煤付着。
土壙 - 35 (第127図)									
580	壺形土器	14.4	—	26.6	・外面上位タタキメ。ハケメ後ヘラミガキ。内面指頭痕後ヘラズリ。内面胴中位指頭ナデ。	暗黄褐色	白色小砂粒	良	・米粒状刺突。 ・外面煤付着。 ・内面煤付着。
土壙 - 36 (第128図)									
581	鉢形土器	10.2	—	—	—	淡褐色	白色小砂粒	良	・外面黒斑。
582	壺形土器	12.2	—	—	—	灰褐色	—	—	—
583	高杯形土器	14.0	—	—	・内外面ヨコナデ。	黄灰色	—	良好	・内面黒斑。
土壙 - 38 (第129図)									
584	壺形土器	—	—	—	・内外面ヨコナデ。シャープな作り。	青灰色	白色小砂粒	良好	—
土壙 - 40 (第130図)									
585	甌	30.6	—	—	・内外面ハケメ。	黄灰色	白色小砂粒	良好	—
土壙 - 39 (第131図)									
586	壺形土器	6.7	—	8.85	・外面ハケメ。	淡褐色	白色小砂粒	良好	—
土器溜り (第132図)									
587	壺形土器	14.0	—	—	・外面横位のハケメ後縦位ハケメ。	淡褐色	白色小砂粒	良好	—
588	壺形土器	11.4	—	—	・内面丁寧なヘラズリ。	明褐色	精製土器	—	—
589	—	13.3	—	—	・内面指頭ナデによる引き上げ。	明茶褐色	白色小砂粒	—	—
590	—	15.0	—	—	—	明褐色	—	—	—
591	—	15.8	—	—	・内面指頭ナデによる引き上げ。	—	—	—	—
592	壺形土器	—	—	—	・外面ハケメ。内面指頭痕。	淡茶褐色	—	—	—
593	高杯形土器	20.0	—	—	—	淡茶褐色	—	—	・剝落。
594	—	19.0	11.4	14.85	・内外面ヨコナデ。	淡茶褐色	白色砂粒	—	—
595	—	—	12.2	—	・裾端ヨコナデ。	黄灰色	—	—	・外面黒斑。
596	—	—	12.3	—	・シボリメ顕著。	—	—	—	・剝落。
597	—	—	10.9	—	・外面ハケメ。内面丁寧なヘラズリ。	淡褐色	白色小砂粒	—	・外面黒斑。
598	—	—	—	—	・外面凹凸あり。内面充填。	—	白色砂粒	—	—
包含層 (第135図)									
599	壺形土器	16.4	—	—	・外面荒いハケメ。内面ヘラズリ。	淡黄灰色	白色砂粒	良好	—
600	—	7.4	3.2	8.8	・外面下半ヘラズリ。内面底突起。	淡褐色	白色小砂粒	—	—
601	—	12.1	—	—	・内外面ヨコナデ。	暗褐色	—	—	・外面黒斑。
602	高杯形土器	—	—	—	—	淡褐色	白色砂粒	—	—
603	壺形土器	8.8	—	7.1	・外面面取り状の凹凸あり。内面えぐり込み状のヘラズリ。	—	白色小砂粒	—	—
604	杯 蓋	—	—	—	・内面ヨコナデ。天井部ヘラズリ。	青灰色	微 砂	良好	—
605	杯 身	—	—	—	・胴部以下ヘラズリ。他はヨコナデ。	—	白色細砂	—	—
606	杯 蓋	13.0	—	—	・口縁部ヨコナデ。天井部ヘラズリ。	—	砂粒多い	—	・轆轤一左。
607	—	16.0	—	4.5	・内面ヨコナデ。天井部ヘラズリ。	灰褐色	小石含む	—	—
608	—	13.4	—	—	・内面ヨコナデ。底部ヘラズリ。	青灰色	細 砂	—	—
609	—	—	—	—	・内外面共にヨコナデ。	灰 色	微 砂	良	—
610	—	12.0	7.2	3.5	・底部ヘラオコシ。他はヨコナデ。	—	細 砂	不良	—
611	杯 身	—	—	—	・内外面共にヨコナデ。	灰青色	白色砂含む	良	・轆轤一右。
612	杯 蓋	—	—	—	・内外面共にヨコナデ。	淡灰色	細 砂	—	—
613	—	—	—	—	・内外面共にヨコナデ。	灰 色	—	良好	—
614	蓋	12.0	—	—	・内外面共にヨコナデ。	—	細砂多い	—	—
615	—	—	8.6	—	・内面剝落して不明。外面ヨコナデ。	淡灰白色	砂粒少い	不良	—
616	—	—	7.2	—	・内外面共にヨコナデ。底部上面ヨコナデ。	灰 白色	—	—	—
617	壺	17.0	—	—	・内外面共にヨコナデ。	灰 色	微 砂	—	—

5 中世の遺構・遺物



第136図 現存条里遺構 (1/5000)

県内平野部には条里遺構をとどめている所が多く、旭川東岸の旭東平野もその一つである。兼基・今谷遺跡でも小字名である「五反田」が現存しており、千鳥式の地割り法（第136図）にあてはまるものである。市道321号線が里の境となっており、東側一町には兼基遺跡と今谷遺跡を分けて真北に走る用水路が存在している。これらの方向と一致する下部遺構は地表下約60cmより検出した畝状遺構（素掘り溝）が存在する。

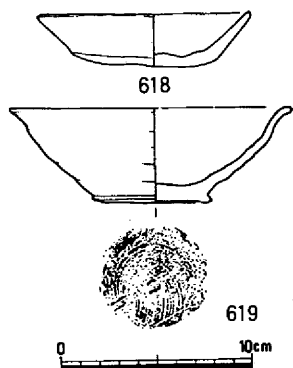
（高畑）

（1）素掘り溝

畝状遺構（第138図，図版12-1）

第三微高地E～K区，東西約120m南北約70m，約40.00㎡の範囲と，一部，五反田樋門導入水路の調査区に畝状遺構を検出した。

畝状遺構には茶褐色粘質土を等間隔に掘りこんだ小さな溝がある。この畝の溝はほぼ一直線に南北方向を基調に走り，現存する条理の真北方向と殆んど一致する。調査区の北側部分に東西方向の素掘り溝を確認したが新旧関係は定かでない。しかし，同時に共存すると思われるものも認められた。第138図の斜線で示したものは，同時期の素掘り溝と推定されるものと



第137図 出土遺物

考えられる。

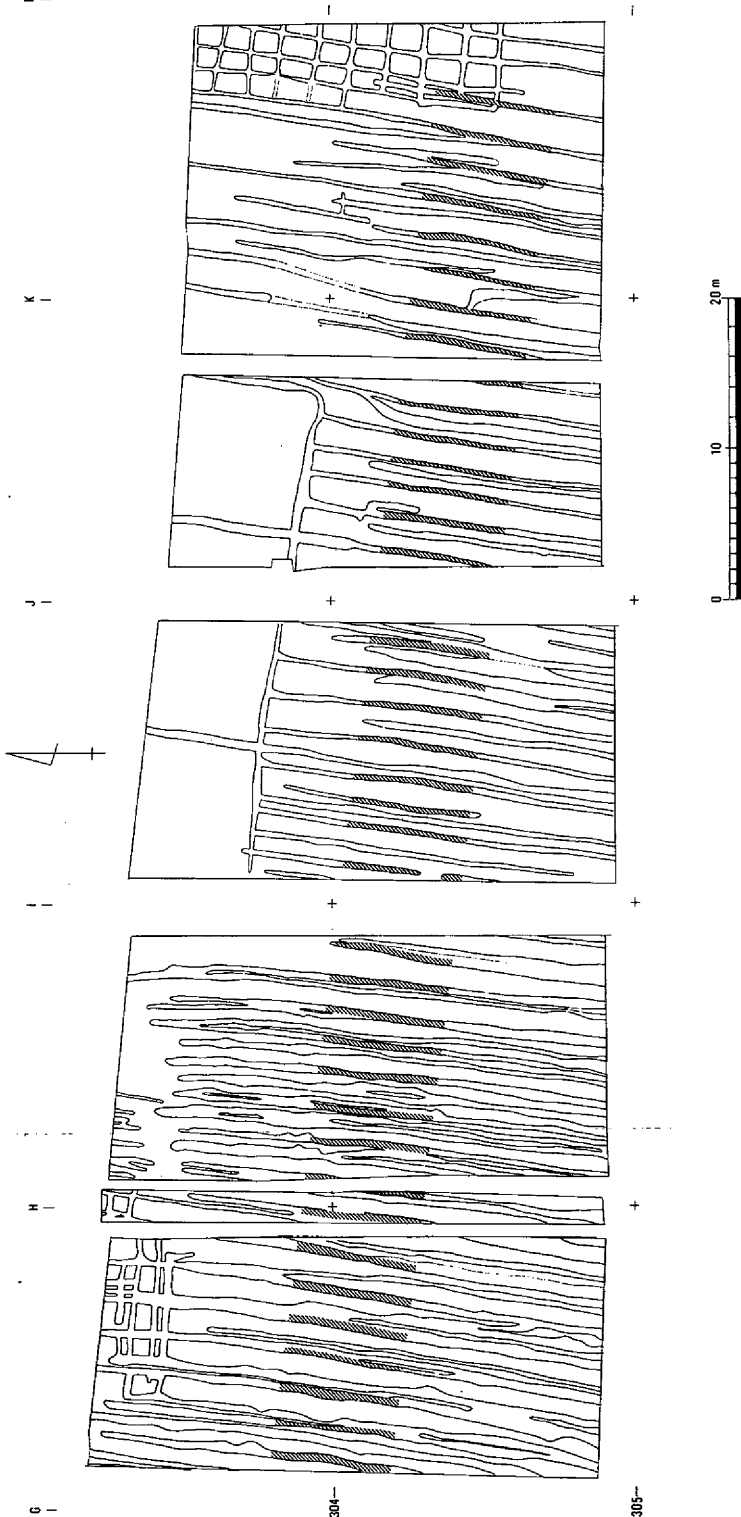
全体の平面形態からみると畝状遺構は畑の畝を推定させる。畝の上面幅は狭いところで100~130cm, 広いところで160~205cmある。畝の溝は削平されて欠失している部分もある。これらの素掘り溝(畝状遺構)を造る時点に大規模な削平造成工事がなされた可能性が考えられる。

遺物は、灰色粘土層で中世土師器片、須恵器片が出土しており、上限は平安時代末までさかのぼると考えられるが、限定できない。

(渡辺)

溝—25 (第139図)

304—Cの中央に位置する南北の溝状遺構である。南北約15m, 東西約70~80cmを測り、U字形を呈し、灰色粘土質微砂が埋没している。用地内南側が深く約40cm, そして、北に向って徐々に浅くなり、北端でのぼりき

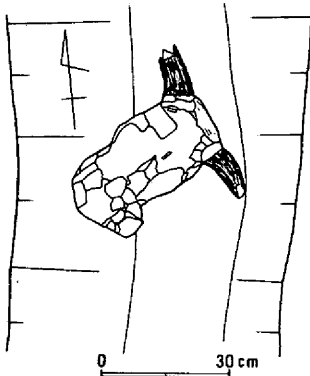


第138図 畝状遺構 (1/500)

っている。

溝内より「牛の頭骨」が検出され、意図的に入れられた可能性がうかがえる。

牛の骨は、顎部が溝の西側の法面に、頭頂部および角の部分が溝の底部にほとんど貼りついて、顔面は天を向いた仰むけの状態出土した。この牛の骨の埋まっていたところだけは、溝の幅が広くなり、底も1段低くなっている。牛の骨は頭部だけで、首から下は全くみられない。



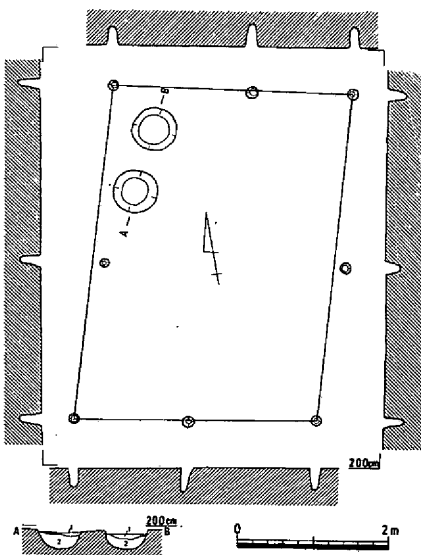
第139図 溝—25牛の頭

また歯は1本も残存せず、顎部もかなり潰れている。しかし、角や頭頂部などは、中に溝の埋土が詰まり、しっかり原形をとどめている。頭頂部から下顎までの長さは38.5cmを測り、幅は頭頂部と顎部が16~17cm、眼の部分で21cmを測る。また顔部の厚みは約8cmある。角の頭頂部からはほとんど横に突き出ており、角の先から先までの距離は41.5cmを測る。角の長さは各々約13cmで、角の付け根の周囲は約20cm、角の中央部の周囲は15cmである。角の断面は楕円形に近く、短いが太くしっかりとした角である。（内藤善史）

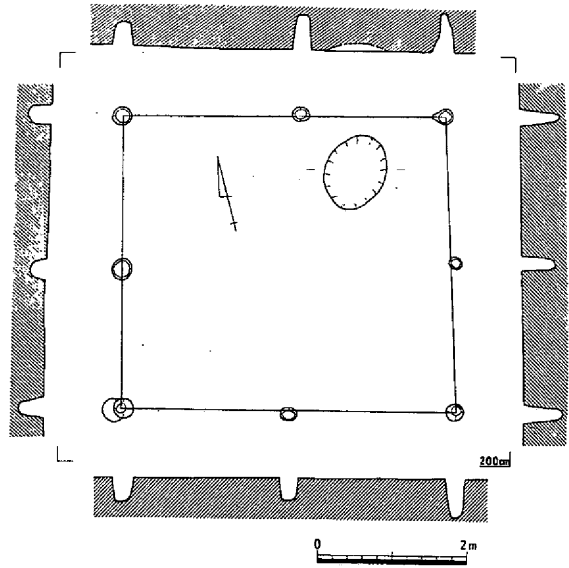
(2) 建物

建物—18 (第140図)

建物—19の北東方向に位置する掘立柱建物である。南北方向に棟を有し、桁行440~448cm、梁行313~318cmを測る。柱穴配置は南北にやや細長く歪んだ配置を呈している。柱穴はやや小



第140図 建物—18 ($\frac{1}{100}$)

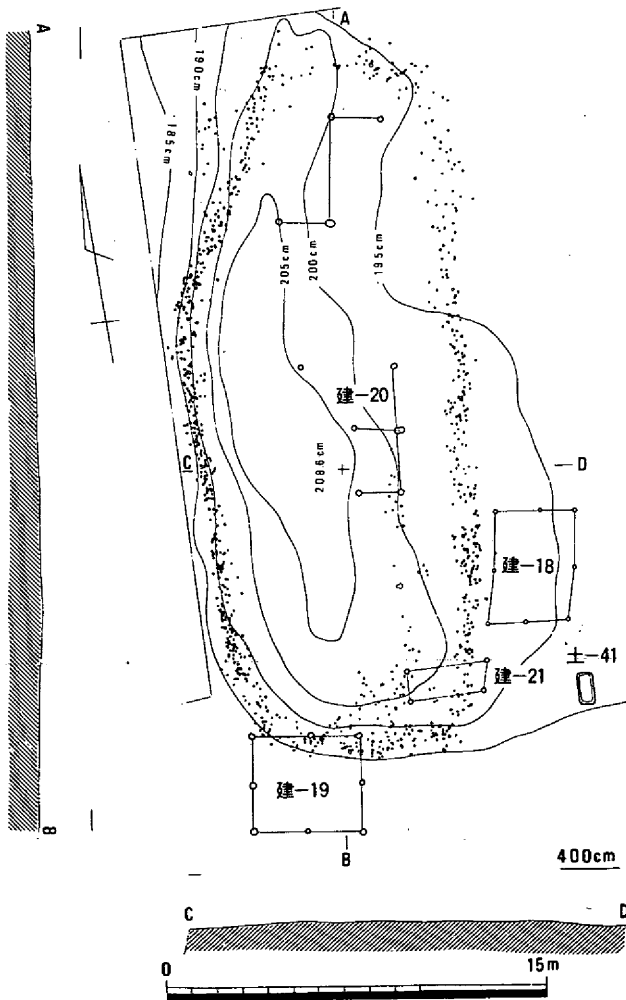


第141図 建物—19 ($\frac{1}{100}$)

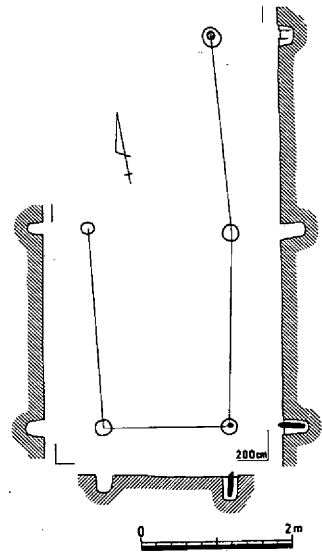
掘りで平均15cm前後で、深さは約20～31cmを測る。多少掘り下げた段階で、北西隅に二基の土壙状の遺構を検出した。いずれも円形を呈し、直径約57cm、深さ約25cmのすり鉢状を成す。柱穴内の充填土と同質であることより、建物に併設されたものと考えうる。恐らく、貯蔵を主目的としたカメ等の設置が考えられるが推定の域を脱し得ない。時期は中世と考える。

建物—19 (第141図)

建物—18の南西に位置する掘立柱建物であり、ほぼ東西方向に棟を有す。桁行414～437cm、梁行386～393cmの比較的整然とした建物である。柱穴の掘り方は円形で、平均径約22.6cmを測り、深さは約50cm前後である。柱穴内には明灰色粘土が充填され、柱痕跡はない。また建物内の浅い土壙状の遺構は埋土の性質より、建物—19に相伴う可能性はあるが、性格は判断し得ない、時期は充填土より、中世と考える。



第142図 柵—1 ($\frac{1}{300}$)



第143図 建物—20 ($\frac{1}{100}$)

建物—20 (第142図)

建物—18の北西に位置し、南北方向に主軸を有する不完全な掘立柱建物である。北西隅に柱穴を検出し得なかったが、2×1間の建物にまとまるであろう。桁行513cm、梁行163cmを測る。時期は充填

土の性格、若干の遺物から判断して、中世の一時期と考える。

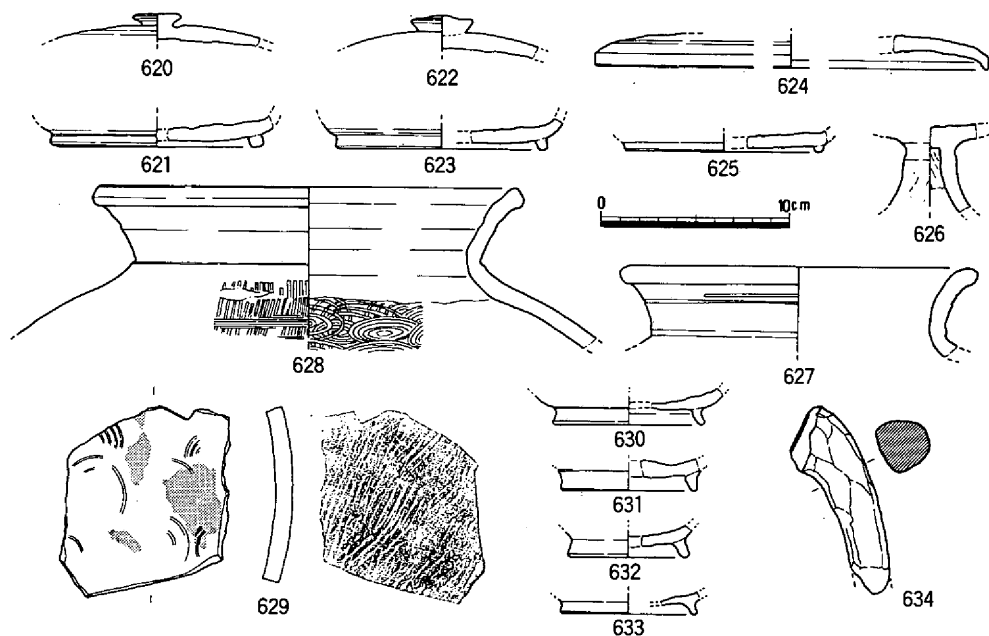
(渡辺)

(3) 柵状遺構

柵状遺構—1 (第142図, 図版12—2)

303・4—E・Fにまたがり、微高地高所に位置する杭列である。長方楕円形を呈し、杭分布は、南北約30m、東西約11mを測る。内部空間は長軸約25m、短軸10mを測る。杭は残存していないが、埋土状況から直径5cm前後のものが利用され、地面前約25cmにおよんでいる。杭痕内には古代・中世の包含層である灰色粘土が入っており、杭先は鋭利に尖った形状を呈する。囲状の長軸東辺はほぼ真北方向に沿っており、西辺は微高地地形に沿って丸みを持ち一巡している。本遺構は周辺に分布する灰色粘土の詰った柱穴、および建物—18・19・20・21土壇—41等よりも新しいと考えられる。すなわち、建物—18の柱穴は畝状遺構に切られており、建物—19は柵—1に切られている。柵—1の機能は杭内部の物を外敵より守る役目等も考えられ、内部は動物の飼育等も考えられるものである。

(高畑)



第144図 古代・中世の遺物

(4) 包含層出土の遺物

620～629の須恵器関係の遺物は検出されておらず、ほとんどが303・4—Eの水田下がり斜面に追従して堆積した層中より出土したものであり、7世紀後半を中心とする。629は壺の胴部片9×10cmは転用硯として利用されており、墨痕が付着している。630～634の土師器類もやはり包含層中より出土したものであり、細片に限られる。いわゆる早島式土器と呼称される碗類である。

(高畑)

表一6 古代・中世土器観察表

標図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
索掘り溝 (第137図)									
618	皿	11.6	7.0	2.8		灰 黄 色	白色砂粒を含む	良	
619	碗	14.8	6.1	5.2	◦水びきによる凹凸が目立つ。	暗 灰 色	白色小砂粒	〃	◦轆轤右。
古代・中世の遺物 (第144図)									
620	杯 蓋	—	—	—	◦内外面共にヨコナデ。	暗 灰 色	微 砂	不 良	
621	杯 身	—	11.6	—	◦内面ヨコナデ、底部調整不明。				
622	杯 蓋	—	—	—	◦内外面共にヨコナデ。	青 灰 色	細 砂	良 好	◦轆轤右。
623	杯 身	—	12.0	—	◦内面ヨコナデ、底ヘラケズリ。	〃	微 砂	〃	
624	杯 蓋	—	—	—	◦内外面共にヨコナデ。	〃	〃	〃	
625	杯 身	—	10.6	—	◦内面ヨコナデ。底ヘラケズリ。	灰 白 色	〃	不 良	
626	高 杯	—	—	—	◦内外面共にヨコナデ、筒部にシボリメ残る。	灰 色	〃	良	
627	壺	22.0	—	—	◦口縁部内外面共にヨコナデ。	〃	砂 粒	〃	
628	壺	16.0	—	—	◦内外面共にヨコナデ、頸部に沈線。	〃	小石含む	不 良	
629		—	—	—	◦破片を転用した硯か。	〃	細 砂	良	◦内面壘付着。
630	碗	—	8.0	—	◦内外面共にヨコナデ。	灰 褐 色	白 色 砂	〃	
631	〃	—	7.0	—	◦内面剝落、外面ヨコナデ。	灰 黄 色	小石含む	〃	
632	〃	—	6.0	—	◦内外面共にヨコナデ。	淡灰白色	砂含まず	〃	
633	〃	—	7.0	—	◦内面剝落、外面ヨコナデ。	赤灰褐色	〃	〃	
634	脚	—	—	—	◦外面面取り痕残す。	暗灰褐色	砂粒多い	〃	

表-7 遺 構 一 覧 表

遺構番号	地 区	図	図版	時 期	旧	遺構番号	地 区	図	図版	時 期	旧
竪穴式住居—1	304—E	8・10		百・中・Ⅱ	123	土 城—4	303・4—E	—		百・中・Ⅰ	115
2	304—E	11・12	3・4	百・中・Ⅱ	104	5	303—F	19		百・中・Ⅰ	108
3	304—F	13	3・4	百・百・Ⅱ	99	6	304—F	—		百・中・Ⅰ	122
4	304—F	14・15		百・中・Ⅱ	84	7	303—F	—		百・中・Ⅰ	109
5	304—F	—		百・中	107	8	304—F	20		百・中・Ⅰ	90
6	303—G	32・24・35	6	百・後・Ⅱ	40	9	303—E	—		百・中・Ⅰ	65
7	303—G・H	36		百・後・Ⅳ	43	10	303—F	21		百・中・Ⅰ	101
8	304—G	37・38・39		百・後・Ⅱ	44	11	304—F	—		百・中・Ⅰ	121
9	303—H	40		百・後・Ⅲ	31	12	304—G	22・23		百・中・Ⅰ	51
10	303—J	41・42・43		百・後・Ⅱ	10	13	304—F	—		百・中・Ⅰ	125
11	304—E	44		百・後・Ⅳ	71	14	304—F	—		百・中・Ⅰ	126
12	303—F	99・100		百・古・Ⅲ	87	15	303・4—F	—		百・中・Ⅰ	127
13 ^A B	304—F	102	10	百・古・Ⅲ	70	16	303—E	—		百・中・Ⅰ	66
14	304—F	103		百・古・Ⅲ	72	17	303—G	—		百・中・Ⅰ	61
建 物—1	304—F	45		百・後・Ⅱ	120	18	304—G	24		百・中・Ⅰ	55
2	304—F	—		百・後	94	19	303—G	—		百・中・Ⅰ	98
3	303—F	46		百・後	86	20	303—H	—		百・中	56
4	303—J	47		不 明	12	21	303—H	—		百・中	57
5	303—E	104		百・古・Ⅲ	88	22	303—I	25		百・中・Ⅰ	33
6	304—E	105		百・古・Ⅲ	89	23	303—I	—		百・後・?	29
7	304—E	106		百・古・Ⅲ	106	24	303—I	—		百・後・?	22
8	303—F	107		百・古・Ⅲ	85	25	304—F	49		百・後・Ⅱ	83
9	304—F	—	10	百・古・Ⅲ	79	26	304—F	50		百・後・Ⅱ	82
10	304—F	110		百・古・Ⅲ	97	27	304—F	51		百・後・Ⅱ	81
11	304—F	—		百・古・Ⅲ	78	28	304—F	52		百・後・Ⅱ	96
12	304—E・G	112		百・古・Ⅲ	100	29	304—G	53		百・後・Ⅱ	45
13	304—F	108		百・古・Ⅲ	95	30	304—J	—		百・後	15
14	304—H	113		百・古・Ⅲ	46	31	304—J	—		百・後	11
15	303—H	114		百・古・Ⅲ	41	32	303—E	125		百・古・Ⅰ	128
16	303—J	115		百・古・Ⅲ	9	33	303—E	125・126		百・古・Ⅰ	129
17	303—K	116		百・古・Ⅲ	13	34	303—E	—		百・古・Ⅰ	130
18	304—E	140		中 世	67	35	303—E	127		百・古・Ⅰ	131
19	304—E	141		中 世	68	36	303—E	128		百・古・Ⅲ	77
20	303—F	143		中 世	91	37	304—F	—		百・古・Ⅲ	113
21	303—E	—		中 世	132	38	304—F	129		百・古・Ⅳ	112
井 戸—1	303—H	16		百・中・Ⅰ	26	39	304—I	131		百・古・Ⅲ	25
2	303—J	48		百・後・Ⅱ	21	40	304—F	130		百・古・Ⅲ	110
3	303—H	117・118		百・古・Ⅲ	42	41	304—F	—		中 世	92
4	304—H	119・120		百・古・Ⅲ	27	溝 — 1	303・4—E・K	29・70		百・中・後	18
5	304—I	121・124		百・古・Ⅲ	23	2	303・4—D・I	26・27		百・中・Ⅰ	53
6	304—K	122・123		百・古・Ⅲ	6	3	303・4—D・I	26・28		百・中・Ⅰ	54
土 城—1	303—E	17	4	百・中・Ⅰ	103	4	303・4—E・I	26		百・中・Ⅰ	50
2	303—E	18		百・中・Ⅰ	102	5	303—E・F	—		百・中	
3	303—F	—		百・中・Ⅰ	93	6	303・4—E・K	54・55・59 70		百・後・Ⅰ	18

遺構番号	地 区	図	図版	時 期	旧	遺構番号	地 区	図	図版	時 期	旧
溝 7	303-J・K	56~63 70	6・9	百・後・Ⅱ	4	18	303-D・E	90	8	百・後・Ⅳ	e
8	303-4-K	56・57	9	百・後・Ⅲ	3	19	303-D・E	90	8	百・後・Ⅳ	m
9	304-K	56・57	9	百・後・Ⅱ	20	20	303-E	90	8	百・後・Ⅳ	j
10	303-E	90	8	百・後・Ⅱ	p	21	303-E	—	8	百・後・Ⅳ	
11	303-D・E	90	8	百・後・Ⅱ	r	22	303-B~E	—		百・後・Ⅳ	
12	303-D・E	90	8	百・後・Ⅱ	g	23	303-4-I・J	133		百・古・Ⅲ	7
13	303-B~E	90・94	8	百・後・Ⅱ	k	24	303-K	134		百・古・Ⅲ	2
14	303-E	90	8	百・後・Ⅱ	l	25	303・4	139		中世	
15	303-E	90	8	百・後・Ⅱ	c	杭 列-1	304-D	—		中世	76
16	303-E	90	8	百・後・Ⅳ	d	柵-1	303-4-E	142	12	中世	73
17	303-E	90	8	百・後・Ⅳ	b	敵状遺構	303-4-E・K	138	12	中世	1

表—8 井 戸 一 覧 表

(単位cm)

番 号	区 名	長さ×幅×深さ	平面形	断面形	出 土 遺 物	時 期
1	303-H	157×(100)×78	楕円形	逆合形	甕片	百・中・Ⅰ
2	303-J	120×107×132	不整円形	〃	台付埴・甕・高杯・壺・木片	百・後・Ⅱ
3	304-H	100×100×112	不整円形	〃	高杯・壺・甕	百・古・Ⅲ
4	304-H	110×100×130	円 形	〃	壺・甕	百・古・Ⅲ
5	304-I	92×(90)×127	円 形	〃	壺・甕・高杯	百・古・Ⅲ
6	304-K	115×100×137	楕円形	〃	高杯・甕・管玉	百・古・Ⅲ

表—9 土 塋 一 覧 表

(単位cm)

番 号	区 名	長さ×幅×深さ	平面形	断面形	出 土 遺 物	時 期
1	303-E	262×111×24	長楕円形	箱 形	高杯・甕・石錐	百・中・Ⅰ
2	303-E	296×52×31	長楕円形	箱 形	高杯・甕・鉢	百・中・Ⅰ
3	303-F	210×175×18	不整形	皿 形	サヌカイト片多数	百・中・Ⅰ
4	303-4-E	110×51×30	楕円形	階段形	高杯・甕	百・中・Ⅰ
5	303-F	103×88×14	円 形	皿 形	壺	百・中・Ⅰ
6	303-F	152×82×16	楕円形	皿 形	甕	百・中・Ⅰ
7	303-F	135×105×9	楕円形	皿 形	炭	百・中
8	304-F	122×98×20	楕円形	皿 形	甕・石鏃	百・中・Ⅰ
9	303-E	120×90×30	楕円形	皿 形	壺	百・中・Ⅰ
10	303-F	121×108×14	円 形	皿 形	壺	百・中・Ⅰ
11	304-F	130×90×20	楕円形	皿 形	甕	百・中・Ⅰ
12	304-G	90×88×14	円 形	皿 形	甕・鉢・器台	百・中・Ⅰ
13	304-F	96×85×40	不整円形	階段形	甕	百・中・Ⅰ
14	304-F	167×125×36	楕円形	皿 形	—	百・中
15	303-4-F	236×140×10	楕円形	皿 形	—	百・中
16	303-E	110×80×30	楕円形	皿 形	炭	百・中
17	303-G	30×30×10	円 形	皿 形	—	百・中
18	304-G	120×89×36	楕円形	椀 形	甕・高杯	百・中・Ⅰ
19	303-G	278×(160)×10	隅丸方形		壺・甕・高杯	百・中・Ⅰ
20	303-H	95×85×44	円 形	椀 形	焼土多量	百・中
21	303-H	82×(80)×21	楕円形	椀 形	炭	百・中

番 号	区 名	長さ×幅×深さ	平面形	断面形	出 土 遺 物	時 期
22	303—I	280×(162)×11	隅丸方形	皿 形	壺・甕・高杯	百・中・I
23	303—I	130×92×95	橢円形	筒 形	—	百・後
24	303—I	90×85×80	円 形	筒 形	—	百・後
25	304—F	133×84×38.5	橢円形	椀 形	甕・高杯	百・後・II
26	304—F	84×66×24	橢円形	椀 形	壺・甕・高杯・鉢・台付甕	百・後・II
27	304—F	160×104×64	橢円形	階段形	甕・鉢	百・後・II
28	304—F	100×83×19	円 形	椀 形	甕・鉢	百・後・II
29	304—G	86×82×10	円 形	皿 形	甕・鉢	百・後・II
30	304—J	65×40×10	橢円形	皿 形	—	百・後
31	304—J	155×70×13	橢円形	皿 形	製塩土器片	百・後
32	303—E	50×49×41	円 形	逆台形	—	百・古・I
33	303—E	57×51×51	円 形	逆台形	壺・埴	百・古・I
34	303—E	51×50×40	円 形	逆台形	—	百・古・I
35	303—E	59×50×68	円 形	逆台形	甕	百・古・I
36	303—E	72×72×61	円 形	椀 形	鉢・高杯・甕	百・古・III
37	304—F	60×60×10	円 形	椀 形	—	百・古
38	304—F	56×41×7	橢円形	皿 形	壺(須恵器)	百・古・IV
39	304—I	—	—	—	小型丸底壺	百・古・III
40	304—F	90×76×13	橢円形	皿 形	甕	百・古・II
41	304—F	120×60×20	隅丸長方形	箱 形	—	中世

表—10 建 物 一 覧 表

建物	規 模	柱間寸法 (cm)		桁 行 (cm)	梁 間 (cm)	面 積 (㎡)	棟方向	柱穴	検 出 区	時 期
1	2×1	150~195	232~246	362	248	9.7216	東 西	円形	304—F	百・後・II
2	—	107~130	—	—	—	—	東 西	円形	304—F	柱 穴 列 百・後
3	2×1	185~232	265~305	422~437	265~305	13.3	東 西	円形	303—F	百・後・?
4	1×1	238~244	233~244	238~248	233~244	6.05	南 北	円形	303—J	百・後・?
5	2×2	235~260	225~242	491~504	461~476	23.18	東 西	円形	303—E	百・古・III
6	2×2	236~254	218~248	494~503	440~462	23.3	東 西	円形	304—E	百・古・III
7	2×2	174~210	160~213	384	373	14.3232	東 西	円形	304—E	百・古・III
8	2×1	145~170	185~215	305~315	—	6.7725	南 北	円形	303—F	百・古・III?
9	3×3	185.5~210	156~187	595.5~600	512~513	30.78	南 北	円形	304—F	百・古・III
10	3×3	190~226	166~190	632~633	529~530	33.549	南 北	円形 方形	304—F	百・古・III
11	2×2	207~237	195~210	435~447	403~407	18.1929	南 北	円形 方形	304—F	百・古・III
12	2×1	145~187	235~245	332~333	235~245	8.1585	東 西	円形	304—F	百・古・III
13	—	280	—	—	—	—	—	円形	304—F	柱 穴 列 百・古・III
14	2×2	140~154	134~142	295~300	276~282	8.28~8.319	南 北	円形	304—H	百・古・III
15	2×2	179~202	173~184	377~381	356~357	14.2875	東 西	円形	303—H	百・古・III
16	2×1	150~165	290~323	306~318	290~323	9.3~9.4	東 西	円形	303—J	百・古・III
17	2×2	178~200	150~190	365~378	331~364	13.7592	南 北	円形	303—K	百・古・III
18	2×2	205~235	134~184	435~445	315~328	14.596	南 北	円形	304—E	中世
19	2×2	181~233	182~204	414~437	386~393	17.1741	東 西	円形	304—E	中世
20	2×?	255~263	163~188	513	163+α	—	南 北	円形	303—F	中世
21	1×1	300~320	120	300~320	120	3.6~3.84	東 西	円形	303—E	中世

表-11 竪穴式住居一覽表

掘削 住居址	種類	形	規模 (cm)		主 柱 穴	距 (cm)				中央穴 (cm)		焼土 焼土 焼土	壁 土 土	付 属 施 設	柱穴長軸 方 向	時 期	区	遺 物
			長軸	短軸		北辺(W)	東辺(W)	南辺(C)	西辺(D)	プラン	巾							
1	竪穴式 住居	方形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	百・中・I	304-E	甕, 甕, 釜 合付甕
2	竪穴式 住居	円形	518	510	4	220 (190)	215	260	205 (238)	円	63×55	2	—	—	—	百・中・I	304-E	甕, 甕 高杯, 作業台1
3	竪穴式 住居	円形	390	360	2	124				楕円	85×55	—	—	—	—	百・中・I	304-F	甕, 石鏝, 石皿 石臼1, 作業台 勾玉, 付玉
4	竪穴式 住居	不整形	450	400	4	150	185	125	195	円	70×65	—	—	—	—	百・中・I	303-F	甕(回転板), 石鏝 石, ササカイト片多数
5	竪穴式 住居	長方形	515	310	0	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	百・中・I	304-F	甕, ササカイト
6	竪穴式 住居	隅丸方形	580	570	4	265	255	257	257	円	27×25	2	—	—	—	百・後・II	302.3-G	ガラス小玉1, 高杯5 石鏝1, 竝4, 竝1 鉢4, 石鏝3, 罎子2
7	竪穴式 住居	隅丸方形	285	280	2	175				円	50×50	2	—	—	—	百・後・III	303.4-G	土器片, 柱穴内より土 器片の炭化材が多量出 土
8	竪穴式 重畳(竈)	隅丸方形	470	470	4	251	235	251	235	隅丸方	35×30	3	—	—	—	百・後・II	304-G	鉢6, 甕石1 竝4, 石鏝1, 石鏝1 高杯4, 石7-作業台
9	竪穴式 住居	円形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	百・後・III	303-H	竈 北壁トレンチ内より出 土 礎瓦すると6mとなる
10	竪穴式 住居	円形	550	510	4	305 (270)	265 (248)	270 (287)	260 (280)	円	20×23	2	—	—	—	百・後・II	303-J-K	甕, 鉢, 高杯 竈, 小皿土器 作業台, 罎子
11	竪穴式 住居	長方形	465	360 350	0	—	—	—	—	楕円	120×73	1	—	—	—	百・後・VI	303-E	甕, 甕, 甕石
12	竪穴式 住居	方形	305	305 (310)	0	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	百・古・III	303-F	高杯, 甕, 炭化材 量状のもの
13A	竪穴式 住居	長方形	480	400	2	235				—	—	1	—	—	—	百・古・III	304-F	甕, 高杯, 鉢 脚, 双孔円板
13B	竪穴式 住居	方形	430	390	4	195	140	187	148	—	—	1	—	—	—	百・古・III	304-F	Pit 内 甕, 鉢 (完形品)
14	竪穴式 住居	長方形	460	390	0	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	百・古・III	304-F	甕, 勾玉 (滑石製)

表-12 玉 類 一 覧 表

図	番号	遺 物	出土地区	遺 構	材 質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	備 考	時 期
13	1	勾 玉	304-F	住 - 3	硬 玉	0.95	0.4	0.44	4.6	両側穿孔	百・中・I
13	2	管 玉	304-F	住 - 3		0.44	0.19	0.19	—	両側穿孔	百・中・I
35	3	小 玉	303-G	住 - 6	ソーダガラス	0.60	0.58	0.59	0.1以下	青 緑 色	百・後・II
43	4	土 玉	304-J	住 - 10	土	4.3	4.3	4.3			百・後・II
43	5	土 玉	304-J	住 - 10	土	2.19	1.77	1.77	6.9		百・後・II
77	6	土 玉	304-K	溜り-D	土	2.19	2.15	2.15	8.7		百・後・II
102	7	双 孔 円 板	304-F	住 - 13	滑 石	2.35	2.29	0.36	3.5		百・古・III
103	8	勾 玉	304-F	住 - 14	結 晶 片 岩	2.5	1.57	0.51	2.8	打 製 品	百・古・III
123	9	管 玉	304-K	井 - 6	碧 玉	3.22	0.48	0.48	1.1	両側穿孔	百・古・III
133	10	白 玉	304-I	溝 - 23		0.26	0.61	0.26	0.1		百・古・III
135	11	双 孔 円 板	304-E	包 含 層	滑 石	2.7	2.57	3.85	5.3		百・古・III
135	12	勾 玉	304-E	包 含 層	滑 石	2.26	1.88	0.53	2.4	磨 製 品	百・古・III

表-13 金 属 製 品 一 覧 表

図	番号	遺 物	出土地区	遺 構	材 質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	備 考	時 期
35	1	鉄 鏃	304-G	住 - 6	鉄	4.23	1.44	0.265	5.4		百・後・II
35	2	鉄 鏃	304-K	包 含 層	鉄	5.12	1.97	0.28	5.9	錆ぶくれ	百・後・IV
35	3	鉄 鏃	304-G	住 - 6	鉄	3.0	2.13	0.2	2.35		百・後・II
35	4	棒 状 鉄 器	304-G	住 - 6	鉄	4.95	0.6	0.3	2.0		百・後・II
35	5	—	304-G	住 - 6	鉄	3.97	2.0	0.48	8.1	折り返し	百・後・II
116	6	鉄 鏃	304-K	建 - 17	鉄	8.5	1.6	0.5	7.0		百・古・III
135	7	耳 環	304-E	包 含 下 層	銅	1.78	1.58	0.29	2.0		百・古・III

表-14 土 製 品 一 覧 表

図	番号	遺 物	出土地区	遺 構	材 質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	備 考	時 期
35	1	紡 錘 車	304-G	住 - 6	土 器 片	2.3	2	0.3	11.5		百・後・II
66	2	土 錘	304-F	溜り-A		6.1	4.7	4.7			百・後・II
72	3	土 錘	304-G	溜り-B		5.6	4.6	4.6			百・後・II

表-15 石器一覽表

単位 (mm)

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量 (g)	備考	時期
13	1	石 鏃	304-F	住-3	サヌカイト	30.1	17.7	5.2	2.0	鏃Ⅰ・完	百・中・Ⅰ
13	2	石 鏃	304-F	住-3	サヌカイト	22.8	14.2	4.9	1.8	鏃Ⅰ・完	百・中・Ⅰ
13	3	石 鏃	304-F	住-3	サヌカイト	25.0	15.5	4.7	1.7	鏃Ⅰ・完	百・中・Ⅰ
13	4	石 鏃	304-F	住-3	サヌカイト	20.4	7.4	4.2	0.7		百・中・Ⅰ
14	5	石 鏃	303-F	住-4	サヌカイト	19.8	8.1	3.7	0.6	鏃Ⅲ・完	百・中・Ⅰ
14	6	石 鏃	303-F	住-4	サヌカイト	12.5	12.0	4.1	0.7		百・中・Ⅰ
14	7	石 鏃	303-F	住-4	サヌカイト	14.8	14.1	3.3	0.6	鏃Ⅱ	百・中・Ⅰ
17	8	石 鏃	303・4-E	土-1	サヌカイト	22.4	8.0	2.8	0.4		百・中・Ⅰ
20	9	石 鏃	303・4-F	土-8	サヌカイト	24.4	12.9	2.4	0.7	鏃Ⅲ	百・中・Ⅰ
27	10	大型蛤刃石斧	304-G	溝-2	安山岩	80.1	67.0	33.2	171.1		百・中・Ⅰ
28	11	石 庖丁	304-F	溝-3	サヌカイト	82.4	48.1	9.5	47.6	庖ⅠAa	百・中・Ⅰ
31	12	石 庖丁	304-F	包含層	サヌカイト	47.0	62.4	10.3	40.9	庖Ⅰ	百・中
31	13	石 庖丁?	303・4-C・D	包含層	サヌカイト	31.8	39.7	8.6	13.7	庖ⅠB	百・中
31	14	石鏃未製品?	303-E	包含層	サヌカイト	33.9	21.8	6.2	4.5		百・中
31	15	石 鏃	303-F	包含層	サヌカイト	13.7	10.4	1.8	0.2	鏃Ⅱ	百・中
31	16	石 鏃	303・4-E・F	包含層	サヌカイト	17.0	13.4	2.6	0.5	鏃Ⅱ・完	百・中
31	17	石 庖丁	304-K	包含層	サヌカイト	52.4	43.5	10.1	33.8	庖ⅠAb	百・中
31	18	スクレイパー	304-C・D	包含層	サヌカイト	58.3	39.0	7.9	20.5		百・中
31	19	石 庖丁	303・4-E	包含層	サヌカイト	41.0	28.0	5.2	8.6	庖Ⅲ	百・中
31	20	スクレイパー	303-F	包含層	サヌカイト	51.2	31.6	8.8	13.5	完形品	百・中
31	21	スクレイパー	303-E	包含層	サヌカイト	57.5	33.8	9.5	16.3		百・中
31	22	石 槍?	303-F	包含層	サヌカイト	44.8	26.9	7.1	9.0		百・中
31	23	石 槍?	303・4-G	包含層	サヌカイト	34.4	28.4	7.8	8.1		百・中
31	24	磨製石剣	304-E	包含層	結晶片岩	22.3	22.2	7.5	(3.8)		百・中
31	25	石 錘	304-E	包含層	—	35.4	21.0	19.3	18.22	完形品	百・中
35	26	石 錘	303-G	住-6	花崗岩	64.7	61.8	50.5	248.77	完形品	百・後・Ⅱ
35	27	敲 石	303-G	住-6	閃緑岩	108.7	55.9	27.7	236.1	完形品	百・後・Ⅱ
35	28	浮 子	303-G	住-6	軽 石	76.0	51.5	32.0			百・後・Ⅱ
39	29	石 錘	304-G	住-8	半花崗岩	95.0	74.9	62.5	455.0	完形品	百・後・Ⅱ
43	30	大型蛤刃石斧	303-J	住-10	粉 岩	54.0	70.0	47.0			百・後・Ⅱ
43	31	浮 子	303-J	住-10	軽 石	42.0	36.0	33.0	—		百・後・Ⅱ
63	32	敲 石 (大型蛤刃石斧)	303-G	溝-7	安山岩	85.0	77.1	51.0	325.0?		百・後・Ⅱ
63	33	敲 石	304-K	溝-7	花崗岩	49.8	45.1	35.6	106.7		百・後・Ⅱ
63	34	磨石・敲石	304-K	溝-7	花崗岩	79.2	55.6	23.5	147.5	完形品	百・後・Ⅱ

百間川兼基遺跡

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量 (g)	備考	時期
	35	石 鏃	303・4-C・D	包含層	サヌカイト	57.4	20.0	5.3	5.8	鏃 IV-a	百・中
	36	砥 石	303-D	包含層	流 紋 岩	62.0	23.0	13.0	—		百・中
		石 庖 丁 ?	304-F	住-3	サヌカイト	22.7	23.0	6.9	3.1		百・中・II
		不 明 石 器	303-F	住-4	サヌカイト	24.4	12.2	3.8	1.0		百・中・II
		石 錐 ?	303-F	住-4	サヌカイト	15.2	8.1	2.5	0.3		百・中・II
		石 錐 ?	303-F	包含層	サヌカイト	15.2	10.0	5.1	0.6		百・中
		スクレイパー or 不明石器	303・4-F	包含層	サヌカイト	34.3	22.4	6.7	5.5		百・中
		砥 石	304-G	住-8	砂 岩	146.3	54.1	55.3	578.0	4面使用	百・後・II
		砥 石・敲 石	304-G	住-8	頁 岩	102.8	50.5	37.3	219.06		百・後・II
		砥 石	304-J	包含層	凝 灰 岩	87.5	52.7	43.2			

表-16 木 器 一 覧 表

挿図番号	器 種	形 態 特 徴	備 考
1	鋤	◦ 器表面腐食して調整痕を留めない。	
2	建 築 材	◦ 柄部分を含め、全面が鋭利な工具で面取り調整される。3か所に切り欠きがつくられる。	
3	建 築 材	◦ 柄と2か所の切り欠きがつくられる。面取り調整は明瞭でない。切り欠きに近接して一部浅いくぼみがつくられる。	
4	—	◦ 丸太の先端部分を柄に加工している。	
5	—	◦ 板状の一端に、小さな柄をつくる。	
6	槌	◦ 表面は原状を留めない。一部に使用痕状の浅いくぼみを残す。	

註

- 註21 鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」『日本農耕文化の生成』1961
- 註22 岡山理科大学三宅寛教授の御指導、御好意により、比重測定を実施し、2.344の数値を得ている。1979.12
- 註23 江見正己他「百間川原尾島遺跡Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』岡山県教育委員会 1980.11
- 註24 高原克人・松本和男・内藤善史「百間川遺跡第1次調査概報」岡山県教育委員会 1976
- 註25 編年対比表にての百・後・Ⅳ期は甕形土器の「擬凹線」の出現を目安とし、百・古・Ⅰ期は甕形土器の「櫛描平行沈線文」の出現を目安とするの両者が「水田埋没砂」中に共伴する事実よりこのような表示を行った。「櫛描平行沈線文」は砂中出土の甕には多条化したものが無く、4～7条施された甕が確認できている。
- 註26 貝塚茂樹他『角川漢和辞典』によると、「広さ、深さ約一尺の田の用水」「田間の小流」等の意味をもつ。
- 註27 (註23)に同じ。
- 註28 間壁忠彦「倉敷市酒津・新屋敷遺跡出土の土器」『瀬戸内考古学・第2号』1988
- 註29 田辺昭三「陶邑古窯址群」Ⅰ(『平安学園研究論集』第10号)1966
- 註30 (註23)に同じ。

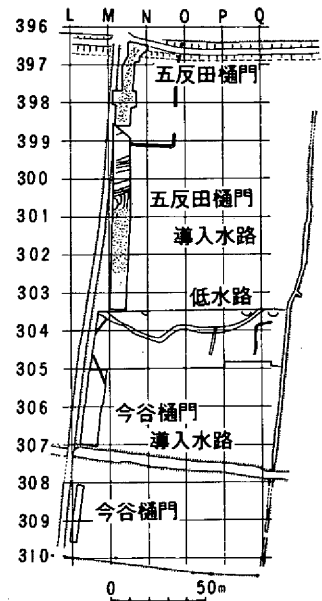
第2節 ^{ひがしなわしろ}東苗代調査区

1 東苗代調査区の概要

東苗代は、大上田と大地との間に位置し、市道幡多321号を西境とし、幅約300mの農業用水路を東境とする小字名である。この小字名の範囲は、東西100m・南北300mの南北に細長い。東苗代の範囲内に入る調査区(第145図)は、次の5ブロックに大別できる。すなわち北方から順に五反田樋門・五反田樋門導入水路・低水路(L～P)・今谷樋門導入水路・今谷樋門である。この地区の調査は、9パーティーの18名の調査員が関係し、調査期間は昭和53年から昭和56年までの3年間を費した。したがってその調査の成果を整理するにあたって遺構の名称・番号等の整理が非常に複雑になった。その調査の成果を時期別に概観して見ると、次のようになる。

縄文時代の遺構・遺物は、現時点では全く認められない。弥生時代前期の遺物は、低水路の東方部分で壺・甕の小破片が少量出土しているが、遺構は今のところ検出できていない。弥生時代中期の遺物は、大なり小なり全てのブロックで出土しているが、遺構は北の方と東の方に著しく片寄って検出された。弥生時代後期の遺構は、散在している。遺物は、低水路において土器溜り・溝41出土遺物としてかなり大量に出土している。古墳時代の遺構・遺物としては、少ないけれど全ブロックで検出できる。歴史時代には、東苗代地区はほぼ完全に水田化されている。以上この調査区は、时期的には弥生時代前期から古墳時代まで続く複合遺跡で、中心となる時期は弥生時代中期後半である。次に各ブロックごとに調査概要を述べよう。

五反田樋門(第146・149図)は、396—M～398—Mの南北45m・東西平均約8mの約360㎡の調査区で、398—Mの東壁断面が最もこの区のモデルになる。この場所のグランド・レベルは、海拔278cmを測る。1層は、暗灰色砂の耕作土で、厚さは約20cmある。2層は、茶褐色砂で数層に分層できる近世期の耕作土および床土層である。3層は、暗灰色粘土で、中世～古代の水田層と考えられる。4層は、灰茶色砂で、厚さ37cmもある。この層は、百間川遺跡全体をおおう百・後・Ⅳの時期の洪水砂層と考えられる。5・6層は、暗灰色微砂。7・8層は、黒灰色微砂で、遺構はこの層あたりから切り込んでいる。9層は、黒色粘質土。10層は、黄褐色

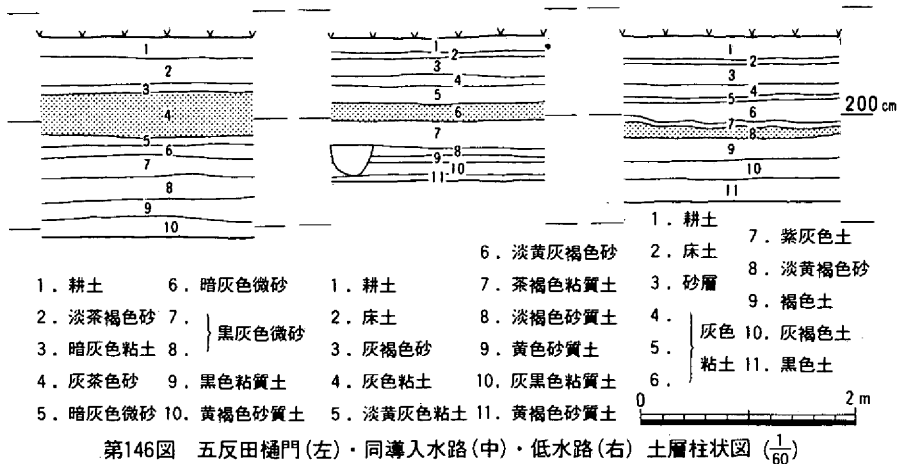


第145図 東苗代調査区 (1/400)

砂質土。そして、弥生時代中期の溝状遺構2本・土塙20余基と柱穴、弥生時代後期の土塙2基、古墳時代の溝1本が検出された。これらの遺構のうち土塙は、規模・形態とも多様であるが、いずれも多量の土器を伴っており、堆積土中に焼土や炭等を含んでいるものもある。また弥生時代中期の土塙のうち半分程からは、大地で検出されたと同様のアルカリ石灰ガラス、また新たにリン酸鉄も土器とともに出土している。弥生時代の溝は、いずれも検出面から浅く底部のみが残っていた。柱穴は、はっきり柱痕跡を伴うもの数個が認められたものの、調査面積が狭いために、建物としてまとめることは出来なかった。弥生時代の遺構面は、非常に低位に存在し、土塙の底の海拔は100cmを割るものも多い。

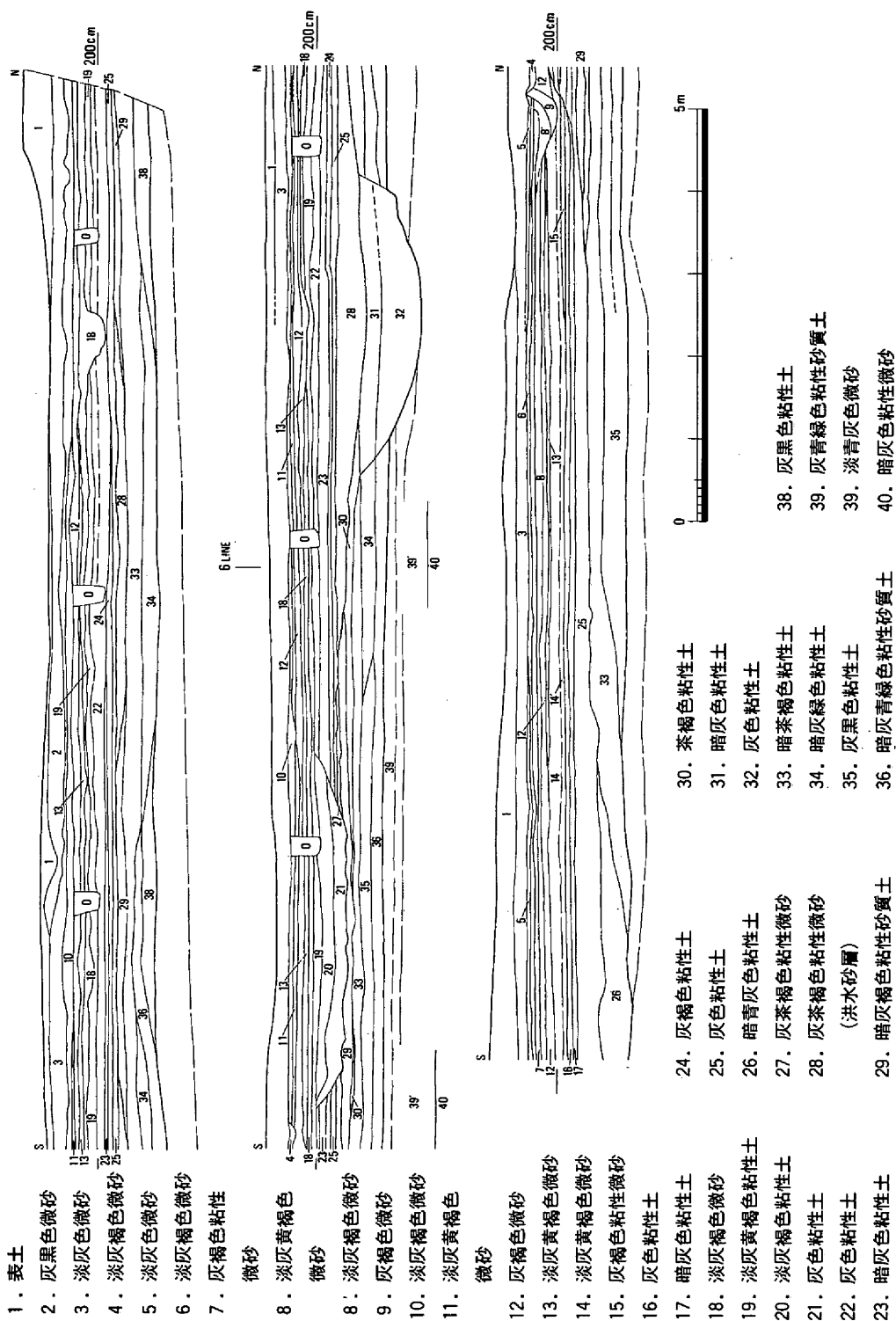
五反田樋門導入水路(第146・149図)は、399—Mから303—Mの約90m、幅約10mの約900㎡ある。北半をA区、南半をB区と仮称し、A区はさらに北・中・南の3小区に分割して調査を実施した。土層断面は、A区北が少し基盤層が樋門に向けて下降していき溝—30になる。またB区南では少し基盤層が上昇する傾向が見られる。それ以外は、この区の土層はほぼ一定している。ここに図示したものは、301—M東壁断面図である。1層は、現耕土で、グランド・レベルは海拔274cmを測る。2層は、鉄分の多い赤褐色砂の床土。3層は、灰褐色砂で2～3層の鉄分層が認められる。4層は、灰色粘土で中世の水田層と考えられる。5層は、淡黄灰色粘土で、これも中世～古代の水田層と考えたい。6層は、淡黄灰褐色砂で百・後・IVの時期の洪水砂層であろう。7層は、茶褐色粘質微砂層で、弥生時代中期後半の土器を包含する。この層の下方にこの地区の遺構の大半が検出できる。8層は、淡褐色砂質土で、9層の黄色砂質土と色は違うが同じ層と考えたい。10層は、灰黒色粘質土で、この微高地形成期の旧表土かと思われる。ここでは無遺物である。11層は、黄褐色砂質土で、この微高地の基盤層である。そして、A区では幅10m以上ある大溝が検出されたのをはじめ、北・中小区において東西に流走する溝群が検出された。また南小区からは竪穴式住居4軒と建物1棟が確認された。これらの遺構の周辺から土器を多量に含む不定形土塙及び柱穴が検出されている。これらの遺構はほとんど弥生時代中期の土器・石器・土製品を伴うものである。なお、遺構面上層において古墳時代の溝・土塙等も確認された。B区では、A区同様弥生時代中期後半を中心とする多数の遺構を検出した。おもな遺構として、土塙・柱穴・井戸・溝等があり、日常生活に密着したものである。遺構の分布状況は、調査区の北側に集中し、南側に向うにつれて土器溜りを確認したのみで希薄な状態を呈している。土塙の規模・形態は様々で、多量の土器を伴っており、そのうち3基から小豆か緑豆と推測される炭化物を検出した。また、数多くの柱穴群のうち、建物として1棟をまとめることができた。弥生時代遺構面より上層においては、北西から南東方向に走る古墳時代の溝1本、中世の畝状遺構が確認された。

低水路(第146・150図)は、303・4—L～Pの南北約30m・東西約90mあるが、土層断面

第146図 五反田樋門(左)・同導水路(中)・低水路(右) 土層柱状図 ($\frac{1}{60}$)

はいくらか凹凸はあるもののほぼ同一層序を示す。ここに示すのは、303—Mの中央部で五反田樋門導入水路と低水路との境目の土層である。この場所のグランド・レベルは、海拔 275 cm を測る。1層は、暗灰色砂の水田層で約20cmの厚さをもつ。2層は、淡茶褐色砂の鉄分を多量に含む床土層で約5 cm。3層は、淡褐色砂で数層の近世期水田層。4～6層は、灰色～灰褐色粘土層で中世～古代の水田層と考えられる。7層は、紫灰色粘質砂層で、古墳時代の包含層である。8層は、淡黄褐色砂層で、百・後・IVの時期の洪水砂層である。溝—41は、この砂で埋没している。9層は、褐色砂質土で、鉄・マンガンを含む。10層は、暗灰褐色砂質土で、鉄分を多く含むためところにより黄色味を強く帯びる。9・10層には、弥生時代中期の遺物を若干含む。11層は、黒色粘質土で、約10cmの厚さをもつ無遺物層である。その下層は、黄褐色砂質土で、微高地の基盤層となる。その海拔は、130 cmを測る。そして、この地区では弥生時代の竪穴式住居2軒・柵列及び溝と、古墳時代の竪穴式住居1軒・溝・柵列を検出した。古墳時代の遺構は、いずれも砂層を切り込むものである。出土遺物としては、土師器・鉄鏃・滑石製臼玉・勾玉等がある。柵は長方形の区画を有するもので、弥生時代中期のものと思われる。溝は、L～Pまで延々と続き、弥生時代中期から後期の土器が伴っている。

今谷樋門導入水路(第147・150図)は、305—Lと306—Lに位置する。長さ40m・幅8mの320㎡を掘削した。弥生時代後期・古墳時代前期・中世の3時期の遺構を検出した。弥生時代後期として溝・土壌が、古墳時代の遺構として溝・柱穴列・土壌・井戸が、中世の遺構のうち主要なものは、調査区北半の柱穴群と南半の柱穴列がある。次に土層断面図を示して土層の説明を加えよう。4～18層は4・8・9の溝とそこでの段の存在から旧水田層と考えられる。この段階では水田は南北2枚であったらしい。16～24層は粘土層であるが、上部の水田と同位置に段を認めることから水田層の可能性が強い。25・26層の堆積部分には洪水砂がみられず、26層の底で百・古・II期の土壌が検出されたことから、それ以降の浸蝕後に堆積したと考えられる。

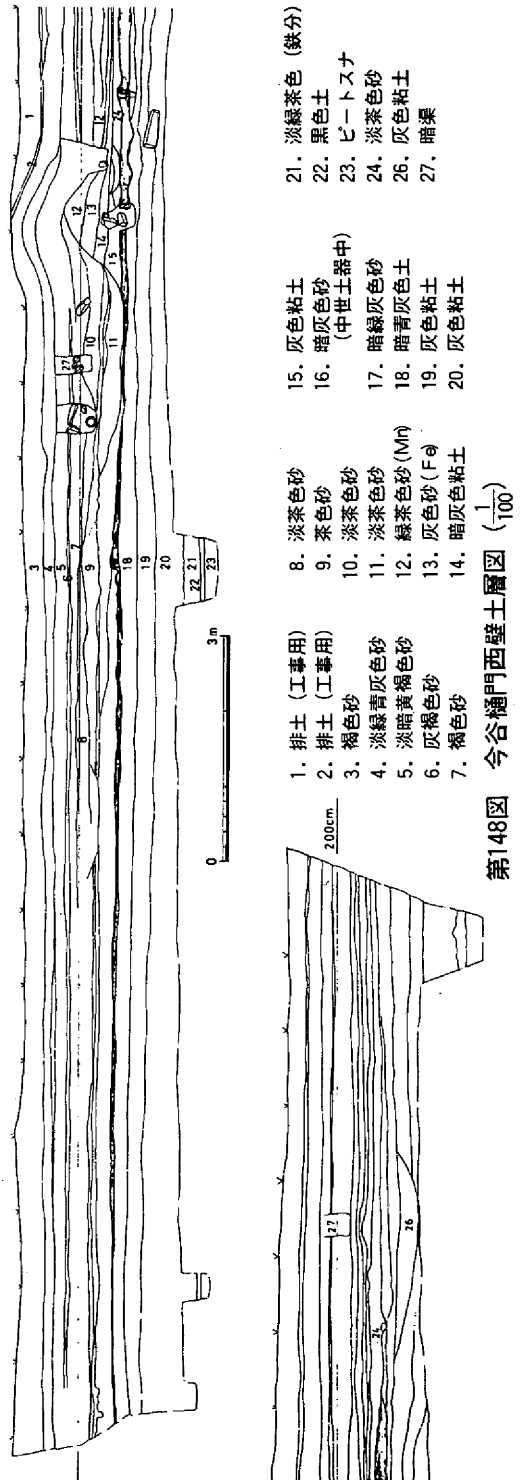


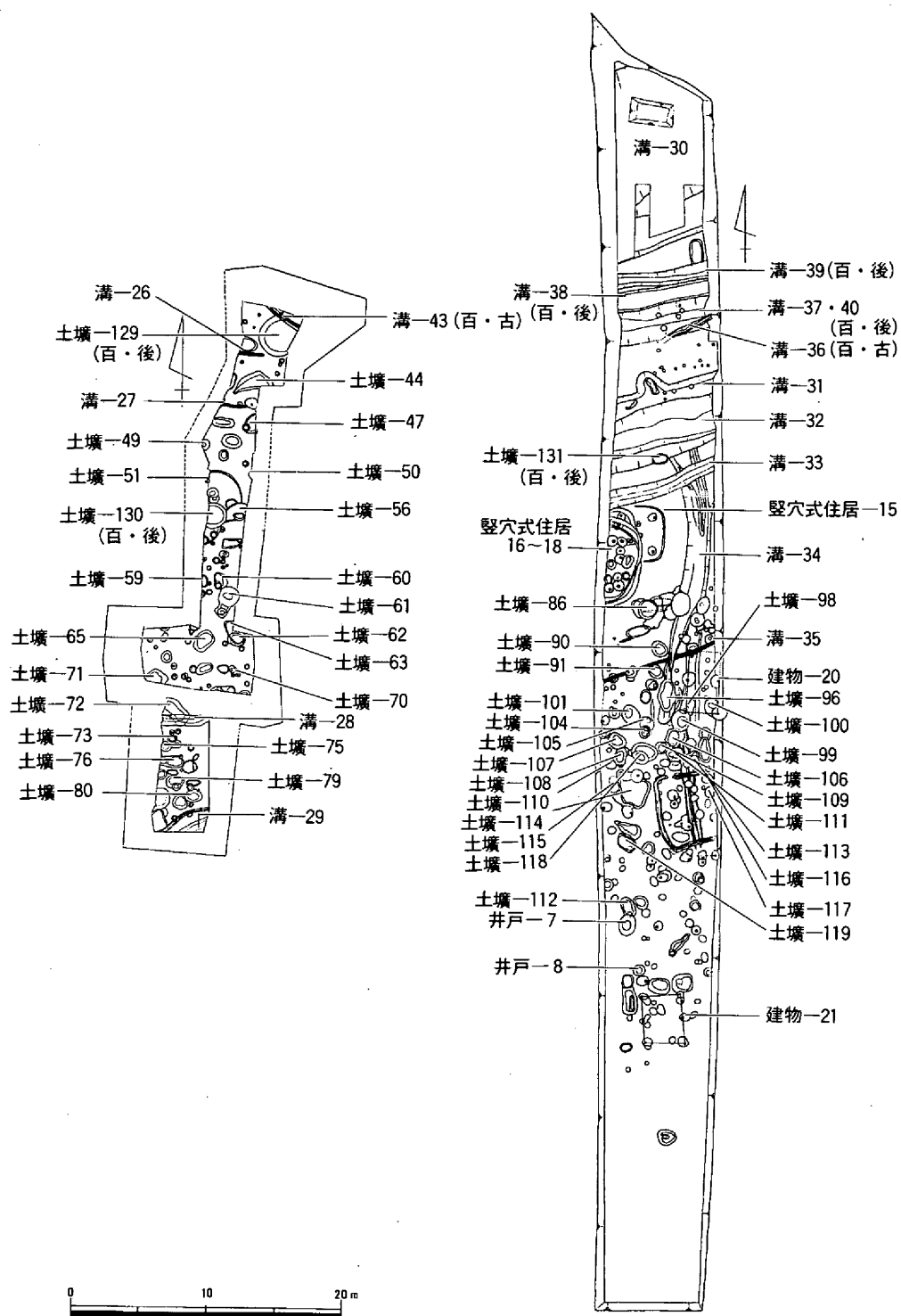
第147図 今谷樋門導入水路西壁土層図 (1/20)

22～25層では鎌倉時代までの遺物が出土した。
27層は古墳時代形成層。26～36層は遺物包含層で、29層では百・後・Ⅲ期、36層では百・中・Ⅱ期の土器が出土した。31層の上面で百・後・Ⅲ期の土器の完形品が出土、39層は無遺物の微高地基盤層。40層は粘性微砂層と腐蝕植物層の互層となる。

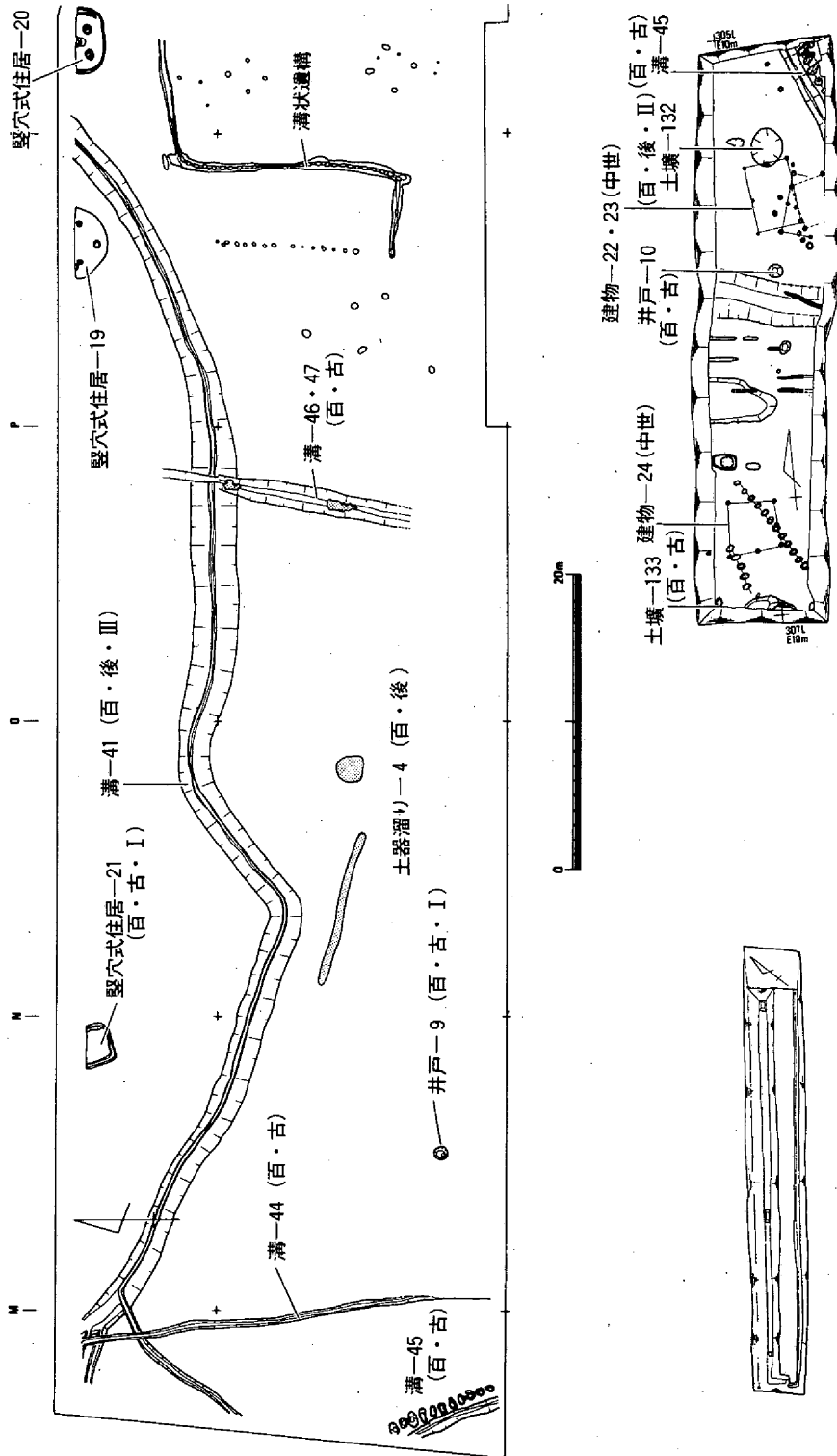
今谷樋門（第148・150図）は、308—Lと309—K・Lに位置する。樋門部に合わせて長軸30m・短軸4mの掘開部を設定し、約2mまで掘り下げる。そして、3か所に抜き掘りを実施した。微高地は存在せず、洪水砂・水田も検出することは不可能であった。概略を記すると、1～15層までは現代より近世に関連する層位と考えられ、砂層が中心になる。砂層中を暗渠5か所が東西に走っており、中世と考えられる16層（細片1点）を切る暗渠が最も古いようである。10・11層等の砂は幅約4m・深さ80cmの溝内、あるいは土壌内堆積物と考えられる。遺構と考えられるものは暗渠と溝・土壌の2つである。18～23層はほぼ水平堆積を呈しているが、南から北に向う傾向が強いようである。21層中には低位部百・後・Ⅳの水田層下位（17層）より出土した鉄分の集塊が多くみられ、23層は腐蝕植物層となっている。腐蝕植物層の海拔高は低位部（第3微高地西端）水田下に存在する腐蝕植物層より若干下位に位置するが、同一のものである。すなわち、水田層下位の鉄の集塊を含む土層が残存しており、それより上層が流出、あるいは消滅しているようである。河道はさらに南側に下がり存在する可能性が考えられる。

（浅倉・岡本・高畑）





第149図 五反田樋門(左)・同導入水路(右) 遺構配置図 (1/500)



第150図 低水路 (L~Q)・今谷樋門導入水路・今谷樋門遺構配置図 (500)

2 弥生時代前期の遺構・遺物

包含層出土の遺物（第151図）

前期遺構は当地区では発見されておらず、前期土器片36点の検出にとどまった。L～Qのグリッド中、O・P・Qに集中し、なかでもPに12点、Qに19点とまとまって出土している。出土層位は黄色基盤層の上位にのる黒色粘質土上面に多く、それより下位には認められない。

P・Qの地区は低水路調査区では凹地状を呈することなどより、土器片がまとまって堆積したと考えられる。（高畑）

650～668の土器は、303—Qの溝状遺構の北側周辺から検出されたものである。この地点は、北側から南側にかけてゆるやかに傾斜しており、基盤層である黄褐色土層の上に暗灰色土層が、堆積し始める。今回出土した前期の土器は、この暗灰色粘土層の直上及び、上部から検出されたものである。時期は百・前・Ⅲに比定できる。（中野 雅美）



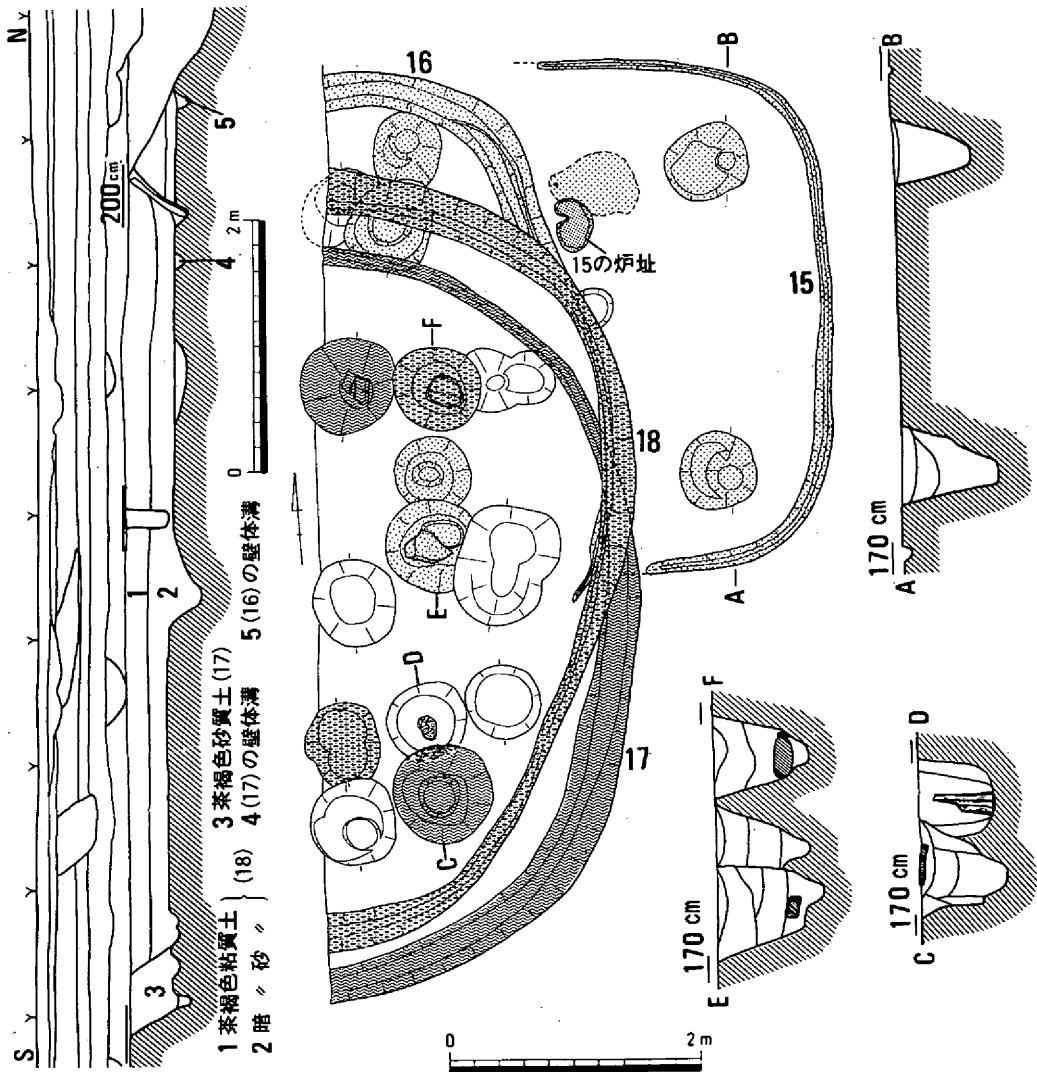
第151図 包含層出土遺物

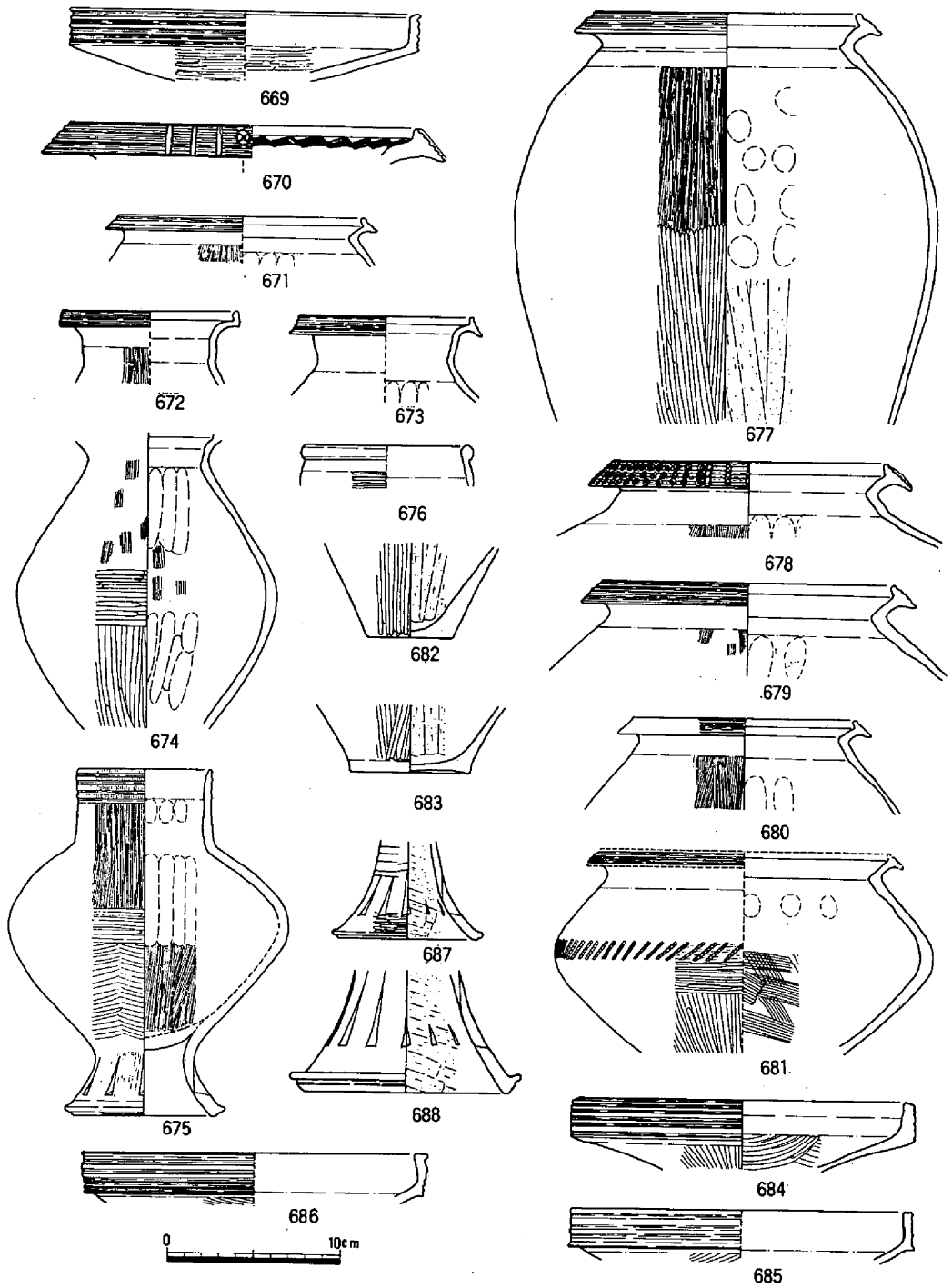
3 弥生時代中期の遺構遺物

(1) 竪穴式住居

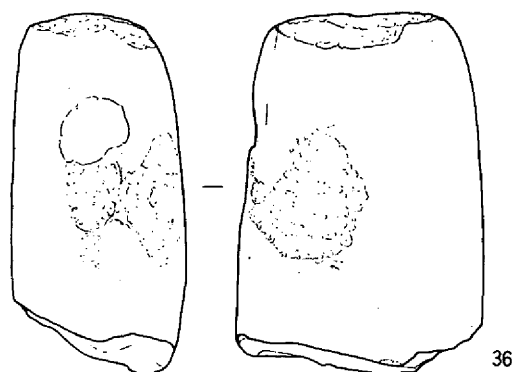
竪穴式住居—15 (第152～154図)

300—Mに位置する4軒のうち最も古い住居で、隅丸方形を呈す。壁体溝は、 $\sqcap$ の字状に検出され、東側の一辺が400cm・幅15cm・深さ0～7cmを測り、断面はU字形をなす。柱穴は、4個を検出し、柱間が北辺250cm・東辺250cm・南辺240cm・西辺260cm。直径は約60cm・深さ平均約60cmを測る。炉跡は、中央よりやや北寄りにある。長径40cm・短径30cmの楕円形を呈し、床面より3cm程盛り上って赤褐色に焼けている。その北側には炭が散布し、その中で高杯片が

第152図 竪穴式住居—15～18 ($\frac{1}{60}$)



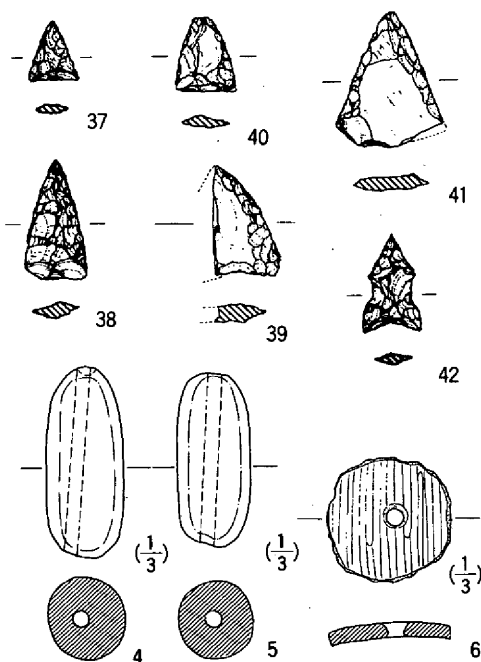
第153図 竪穴式住居—15~18出土遺物 (1)



出土した。その他柱穴内から土錘が2個出土している。この土器から時期は、百・中・Ⅲの中相に比定できる。

竪穴式住居—16（第152～154図）

竪穴式住居—15の廃絶後少し西に寄って作られた隅丸方形を呈すると考えられるもの。壁体溝は「」状に検出でき、幅30cm・深さ10cmを測り、土層観察によれば高さ50cm・厚さ5cmの板痕跡が灰色粘土として残存していた。柱穴は2



第154図 竪穴式住居—15～18出土遺物2) ($\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{3}$)

個検出している。柱間は250cm・直径はいずれも70cm・深さは平均80cmを測る。床面出土の壺から時期は百・中・Ⅲの中相に比定できる。

竪穴式住居—17（第152～154図）

竪穴式住居—16の廃絶後に少し南に寄って作られた胴張りの隅丸方形を呈するもの。壁体溝は、幅25cm・深さ7cmを測り、断面はU字形を呈す。柱穴は2個検出した。柱間は300cmで、北柱穴の直径は75cm・深さ75cm、南柱穴の直径は80cm・深さ75cmを測る。また北柱穴からは石鏃が出土し、柱穴底には平たい石が3個転落している。南柱穴の上には平石が蓋状に残されている。壁体溝内より出土の甕破片から時期は百・中・Ⅲの中相に比定できる。

竪穴式住居—18（第152～154図）

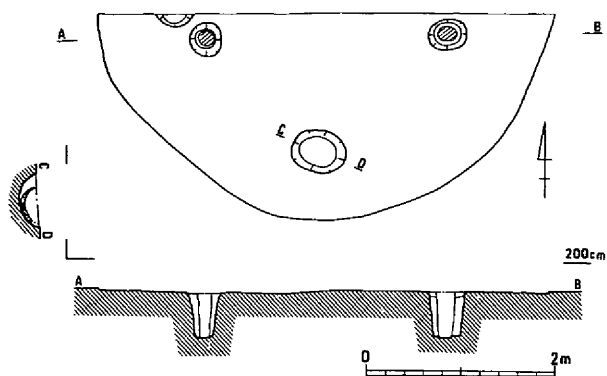
竪穴式住居—17の廃絶後少し北に寄って建て替えられた隅丸方形のもの。壁体溝は、「」状に検出でき、幅30cm・深さ15cmを測り、U字形断面をもつ。柱穴は2個検出できた。柱間は320cm・北柱穴は直径70cm・深さ75cm、南柱穴は長径65cm・短径60cm・深さ70cmを測る。覆土・床面・壁体溝・柱穴から土器・石鏃・石斧が出土。この遺物から時期は百・中・Ⅲの中相に比定できる。

（浅倉）

竪穴式住居—19（第155図，図版13—2）

303—P中央，調査区北端において竪穴式住居—20の西側に検出したもので，平面形態は，

ほぼ円形を呈し、径約 480 cm を測る。検出した柱穴の柱間の距離は、260 cm を測り、柱根痕を見ることができる。住居址の南端に検出した土壇は、長径 58 cm、短径 44 cm を測るもので、層位の中間に灰の堆積が見られた。壁体溝の検出はなく、住居址としては疑問な点もあるが、図示した規模で土層の違いは認められた。出土遺物が無いために時期は不明であるが、堅

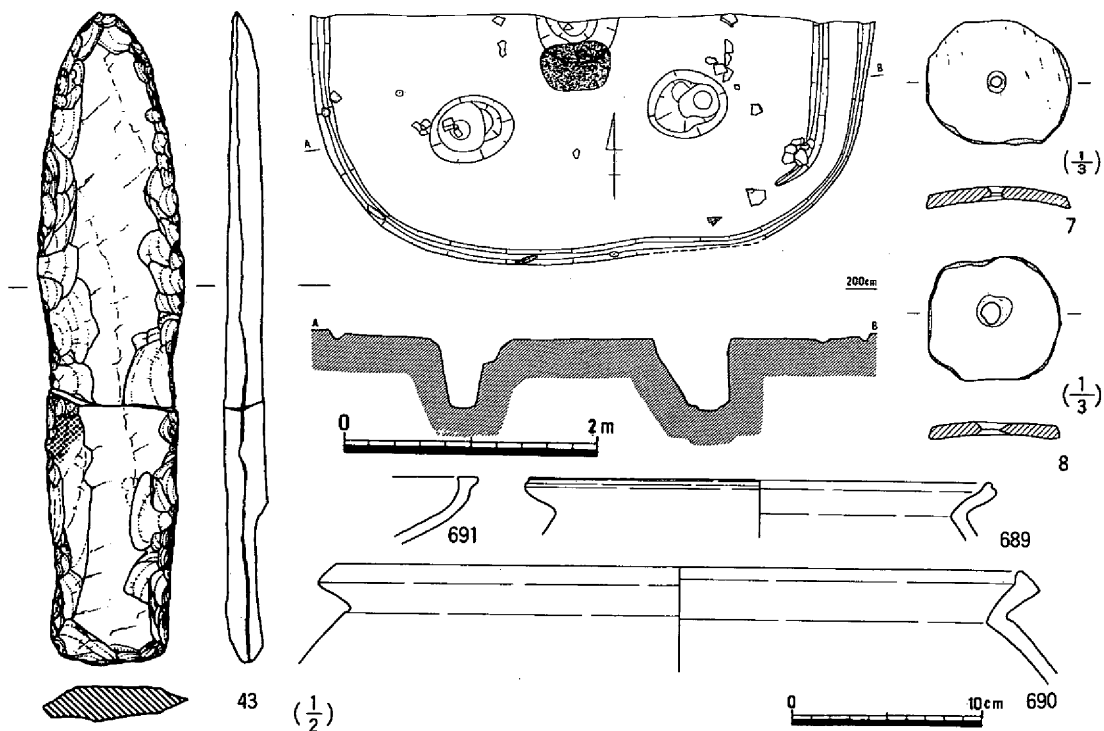


第155図 堅穴式住居—19 ($\frac{1}{80}$)

穴式住居—20と同一層位にて検出したことから、ほぼ同時期と推定される。

堅穴式住居—20 (第 156 図、図版13—1)

303—Q 中央部調査区の北端に検出した住居址で、南半分のみを調査した。平面形態を見ると、一辺に直線的な部分が見られることからすれば、隅丸方形を呈するものかと考えられる。住居址は、拡張して造り替えられており、最終的に 2 本の壁体溝を検出した。床面には、貼床



第156図 堅穴式住居—20 ($\frac{1}{60}$)・出土遺物

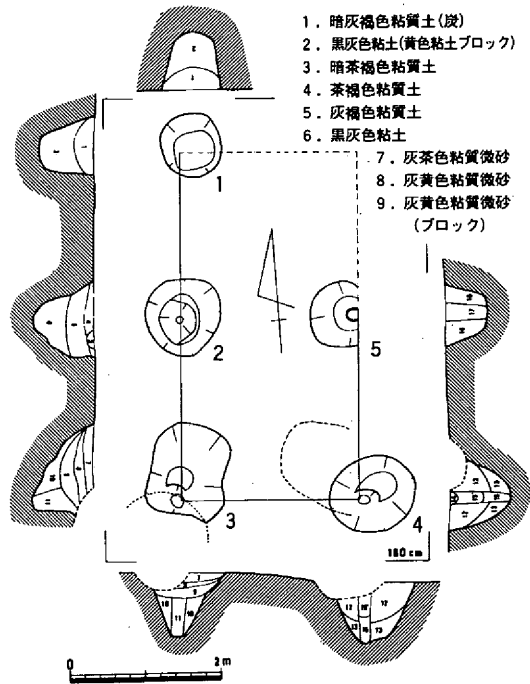
が2層見られ、上層の貼床上面に密着して土器片を検出した。壁体溝からは、石器2点と紡錘車1点が出土した。また、貼床層からも、紡錘車1点が出土した。柱穴は2本を検出した。柱間の距離は、195cmを測る。中央穴は、南側半分を検出した。中央穴の南側には、長径50cm・短径38cmの範囲に灰及び焼土が認められた。住居址の径は、約440cmを測る。出土した土器は、百・中・Ⅱの新相と考えられ、同時期の住居址とすることができであろう。(井上 弘)

(2) 建物

建物—20 (第157図)

301—M北端部で、調査区の東壁際において検出されたもので、ほぼ南北方向の2×1間(470×248cm)の規模の建物が想定される。このうち今回検出された柱穴は5本で柱間・桁行は各々約240cmを測る。検出された柱穴のうち№3は土壌—98に、№4は土壌—100によりそれぞれ切られている。

10. 暗灰色微砂
11. 暗灰色粘質土
12. 暗黄灰色粘質微砂
13. 暗黄灰色粘質土
14. 灰色粘質微砂
15. 暗灰色粘質土
16. 暗灰色粘質土
17. 暗黄灰色粘質土
18. 黄灰色粘質土



第157図 建物—20 (1/100)

る。№3・№4・№5の3本には20cm程の柱痕跡が認められる。時期は柱穴内出土の遺物および柱穴を切っている土壌—98・100から・百・中・Ⅲの中相と考えられる。(内藤)

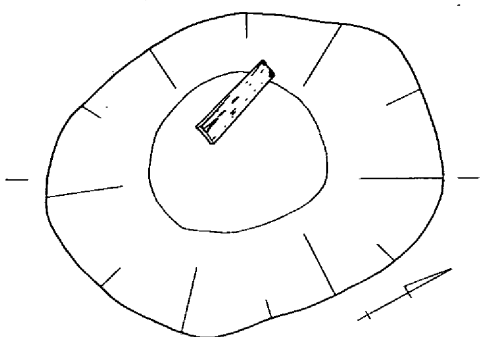
建物—21

この遺構は、302—M中央部に位置する。2×1間の南北方向に延びる掘立柱建物である。規模は、 $P_1 \sim P_3$ が345cm、 $P_1 \sim P_6$ が280cmを測る。柱間は、 $P_1 \sim P_2$ が170cm、 $P_2 \sim P_3$ が180cm、 $P_3 \sim P_4$ が270cm、 $P_4 \sim P_5$ が160cm、 $P_5 \sim P_6$ が180cmを測る。これらの柱穴は、大きさが50~80cm、深さが53~83cmのものである。出土遺物は、百・中・Ⅲの中相の特徴の土器が検出されている。

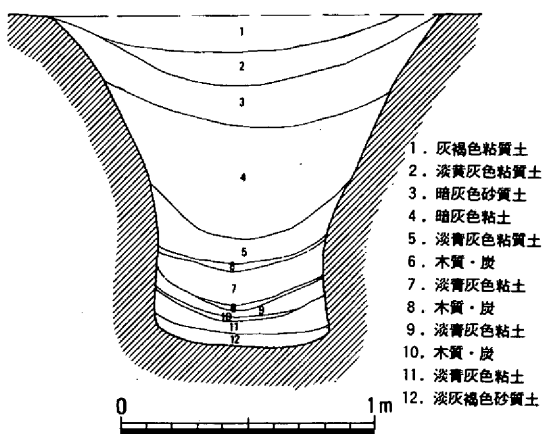
(3) 井戸

井戸—7 (第158図)

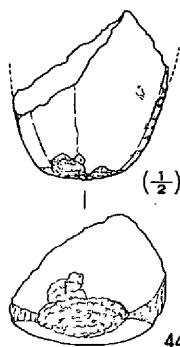
この井戸は302—M北端にあり、120×155cmの楕円形を呈する。深さは、検出面から約135cmを測る。井戸の上部は、逆八の字形に掘り、下半はほぼ垂直に掘っている。井戸内は、1~12



170 cm

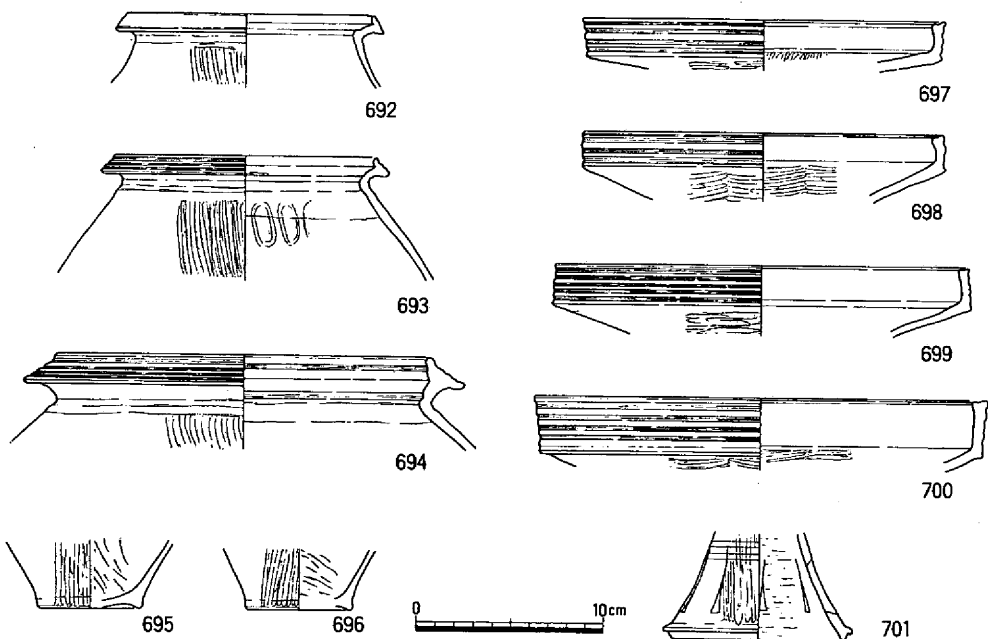


1. 灰褐色粘質土
2. 淡黄灰色粘質土
3. 暗灰色砂質土
4. 暗灰色粘土
5. 淡青灰色粘質土
6. 木質・炭
7. 淡青灰色粘土
8. 木質・炭
9. 淡青灰色粘土
10. 木質・炭
11. 淡青灰色粘土
12. 淡灰褐色砂質土



井戸-8 (第159図)

この遺構は、302
—Mの井戸-7の南
側に検出されたもの
である。平面形は、
ほぼ円形を呈し、直
径80~85cmを測る。
検出面からの深さ
は、約80cmを測り、

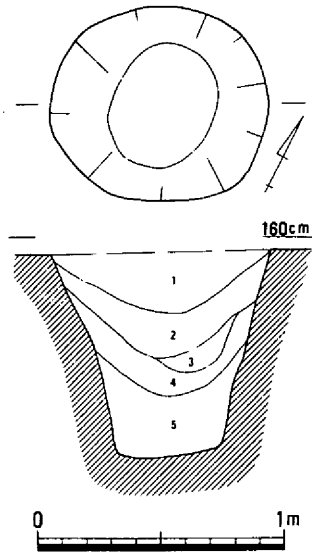


第158図 井戸-7 (1/30)・出土遺物

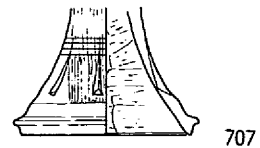
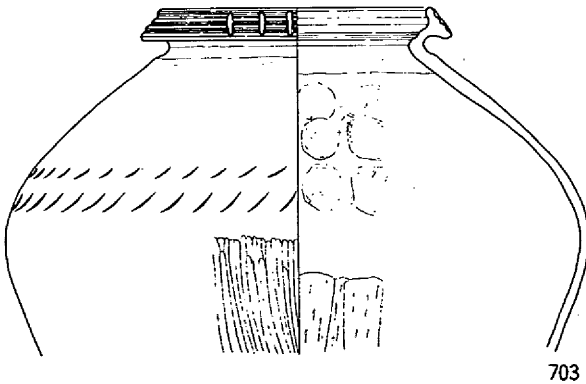
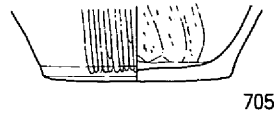
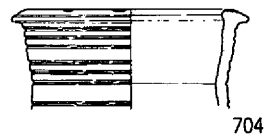
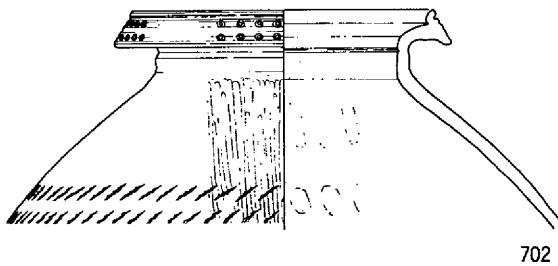
第3章 第2節 東苗代調査区

断面形は逆台形を呈する。遺構内は、1～5層が堆積しており、いずれもレンズ状に堆積していた。この遺構は、井戸として使用されたかどうか、大きさなどからみて多少疑問が残るが、状況からみてここでは、井戸状の遺構として取り扱った。

出土遺物は、比較的少量であった。ほとんどの土器は、最下層の5層から出土した。これらの土器は、百・中・Ⅲの中相の特徴を示している。（中野）



1. 灰褐色粘質土
2. 暗黄灰色粘質土
3. 焼土
4. 暗灰色粘質土
5. 暗黄灰色粘土



第159図 井戸-8 (1/30)・出土遺物

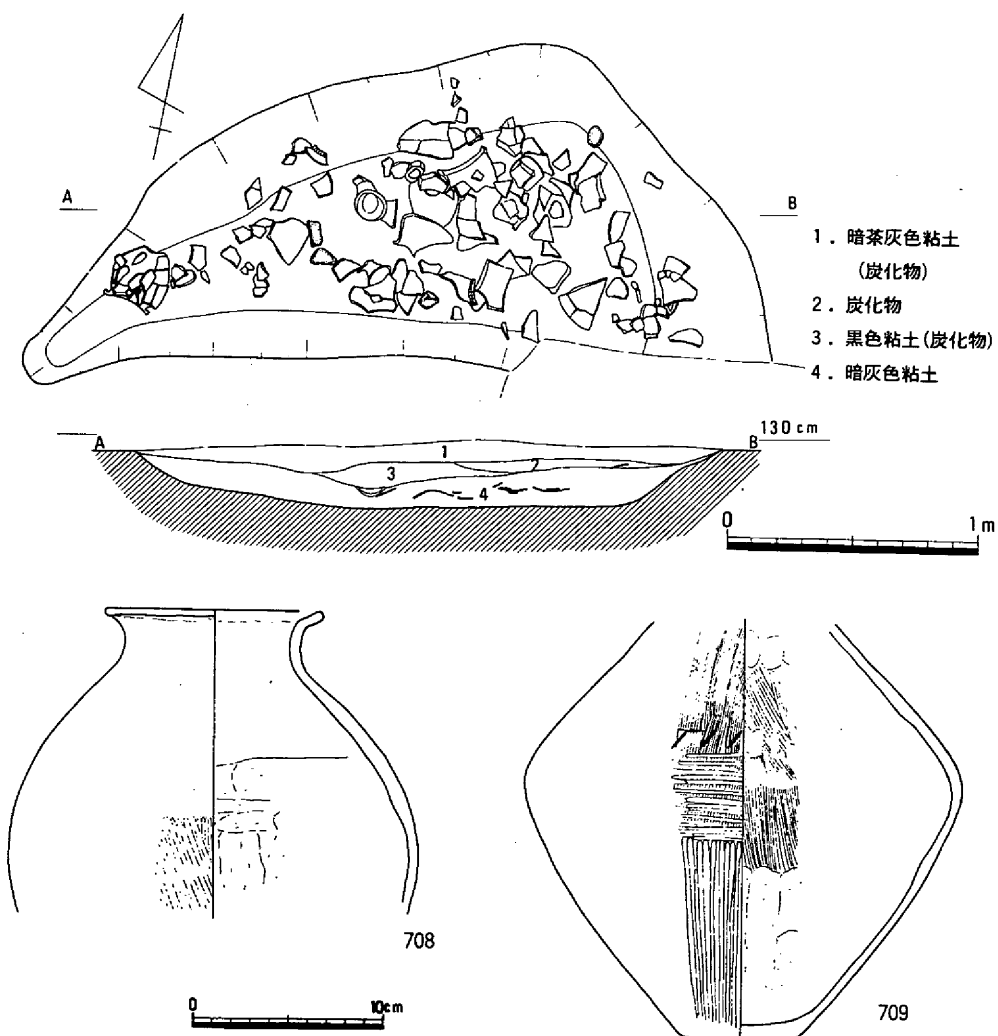
(4) 土 壙

土壙—44 (第160・161図)

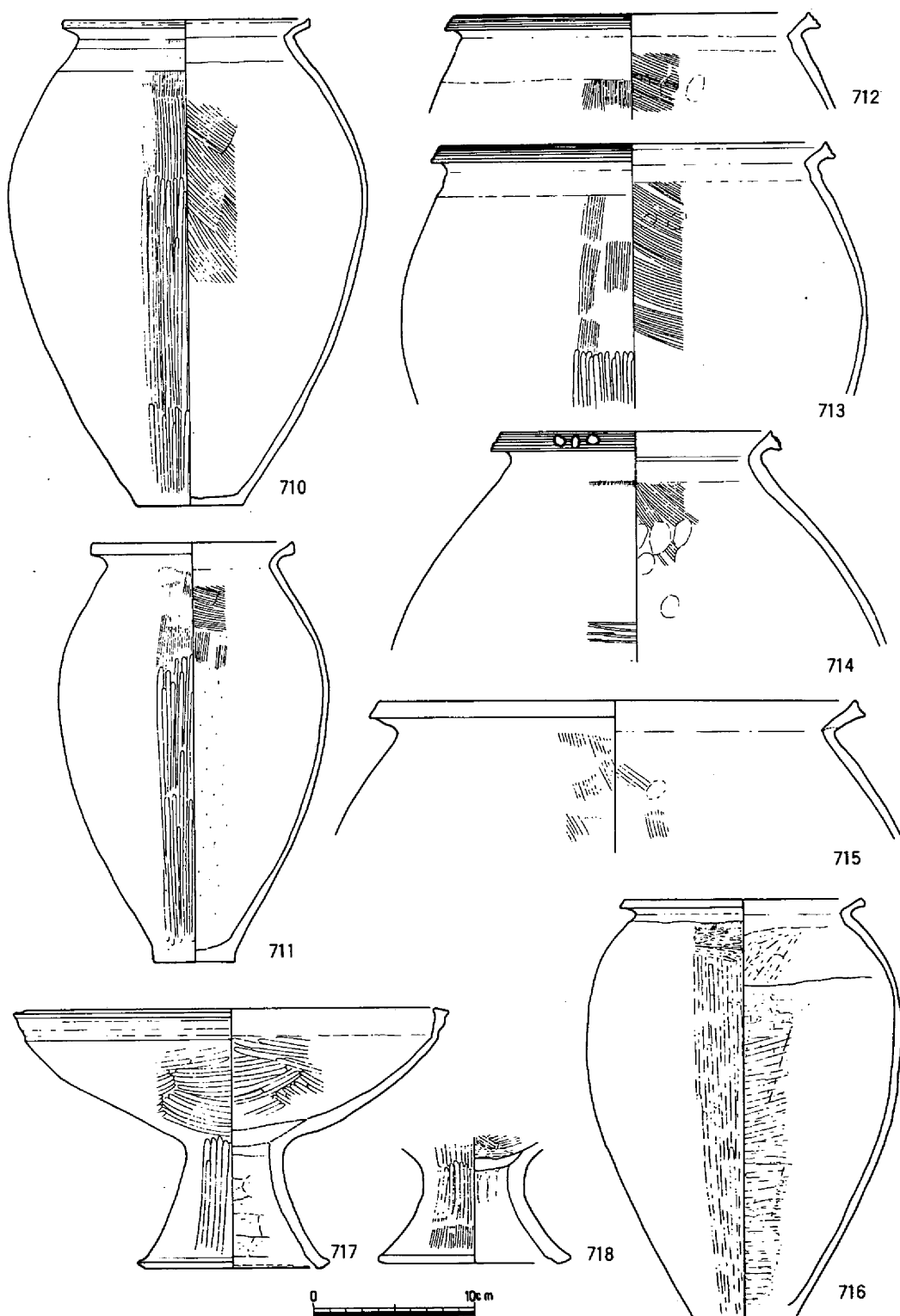
396—M南部において検出されたもので、南東端は調査区の側溝により切られている。平面形は東西に長く鈍い三角形形状を呈し、最大の長さ300cm・最大幅135cm・深さ約30cmを測り、底部は扁平である。土壙の底は海拔100cmを測る。埋土は4層に分かれ、いずれも炭化粒を多く含んでいる。遺物は壺・甕・高杯など完形のものを含む多くの土器片708～718の大半が4層中に集中している。時期は百・中・Ⅱの新相である。

土壙—47 (第162図)

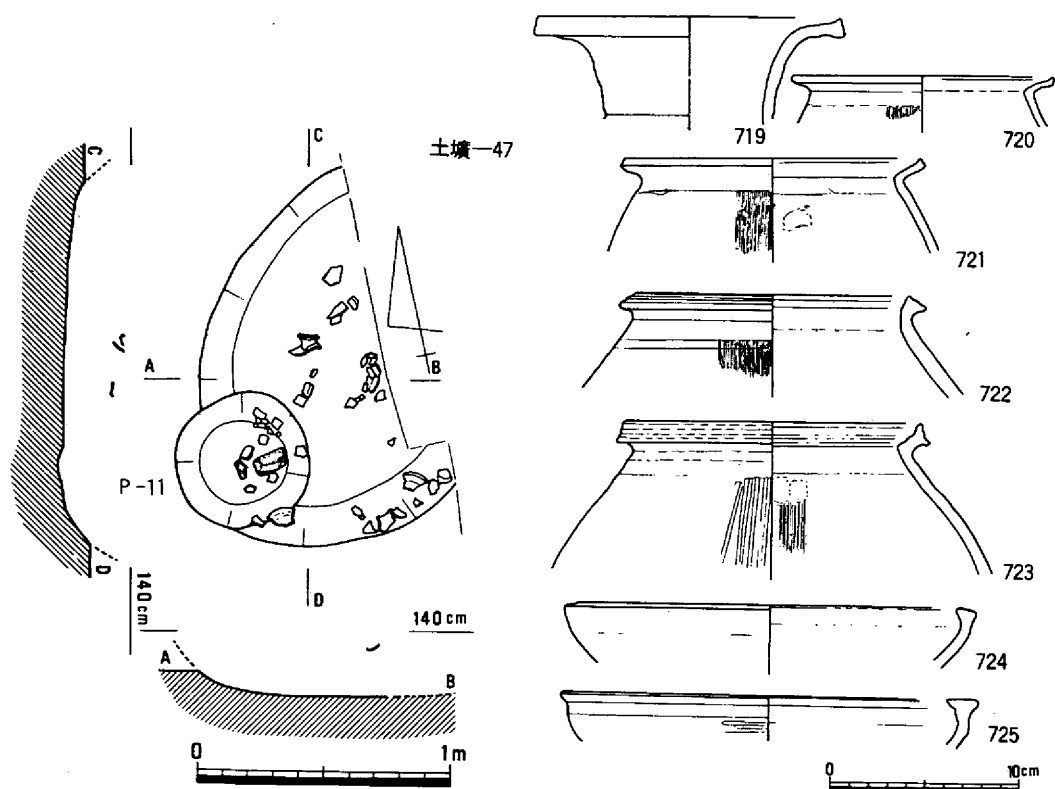
397—Mの北端、調査区東壁際において検出されたもので、東半は調査区外におよび、西端



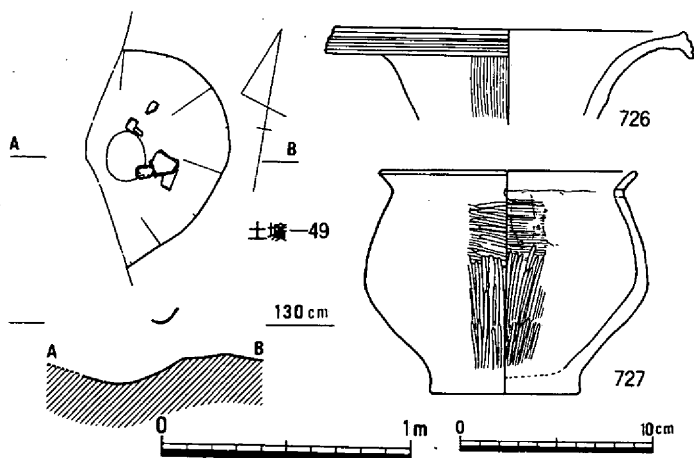
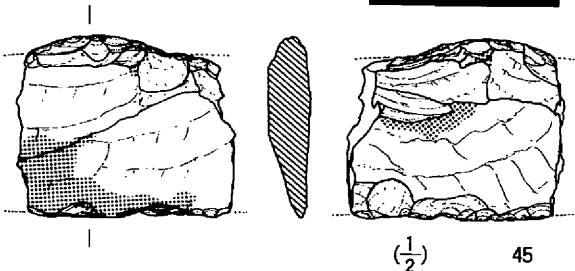
第160図 土壙—44 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物 (1)



第161図 土坑—44 出土遺物 (2)



はP-11に切られている。平面形は楕円形を呈する。短軸は125cmを測り、深さは約30cmを測る。底部は扁平で海拔114cmである。埋土は暗青緑灰色粘質微砂が1層で炭を少し含んでいる。遺物は壺・甕・高杯等の土器719~725の他にサヌカイト製の打製石庖丁45が出土している。時期は百・中・Ⅱの新相である。



土壌-49 (第162図)

397-M北部の調査区西端において検出されたもの

第162図 土壌-47・49 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

で、遺構の西半は調査区外におよんでおり、全体の形状・規模などは不明である。深さは約40cmで、底は海拔106cmを測る。中から壺等の土器726・727が出土している。時期は、百・中・Ⅱの新相である。

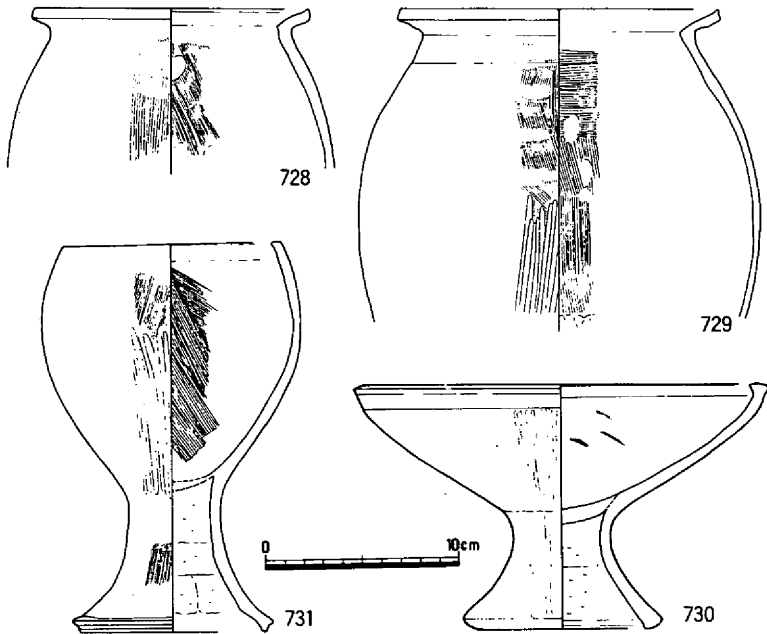
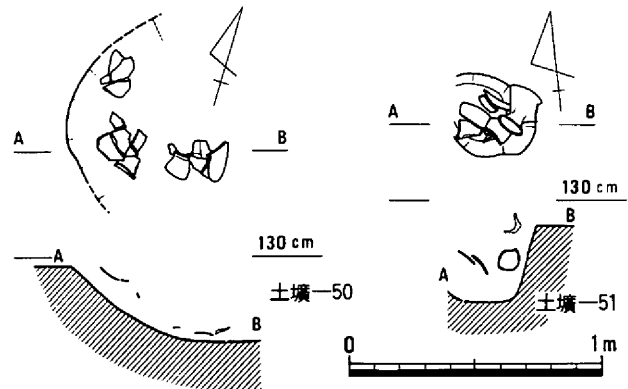
土壙—50（第163図）

397—M北部の調査区東壁際になぜかに検出され、大半は調査区

外におよんでいるもので、規模等は不明である。深さは約30cmで底は海拔95cmを測る。埋土は1層で甕等728・729の土器片が出土している。時期は百・中・Ⅱの新相である。

土壙—51（第163図）

397—M北部の調査区西壁際において検出されたもので、

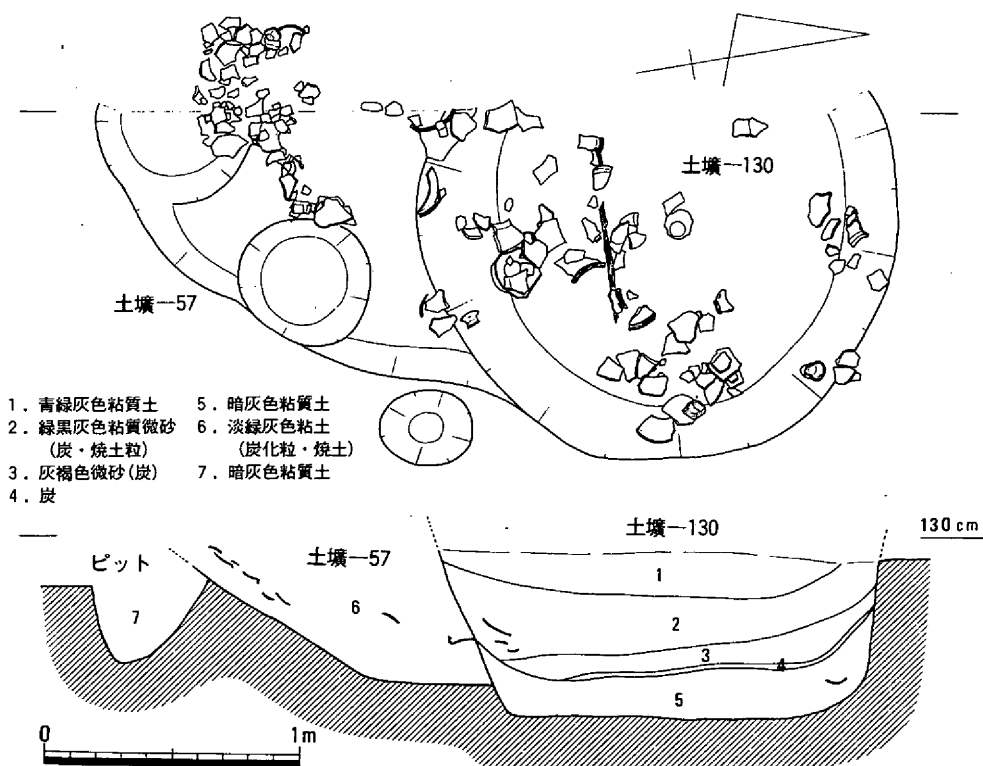
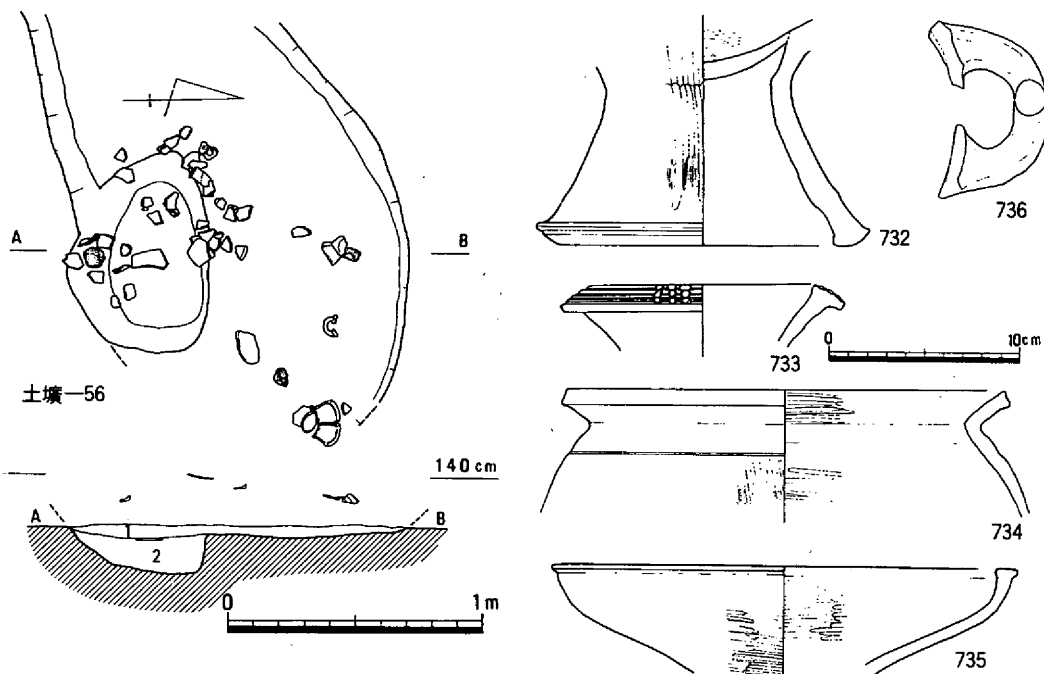


第163図 土壙—50・51（ $\frac{1}{30}$ ）・出土遺物

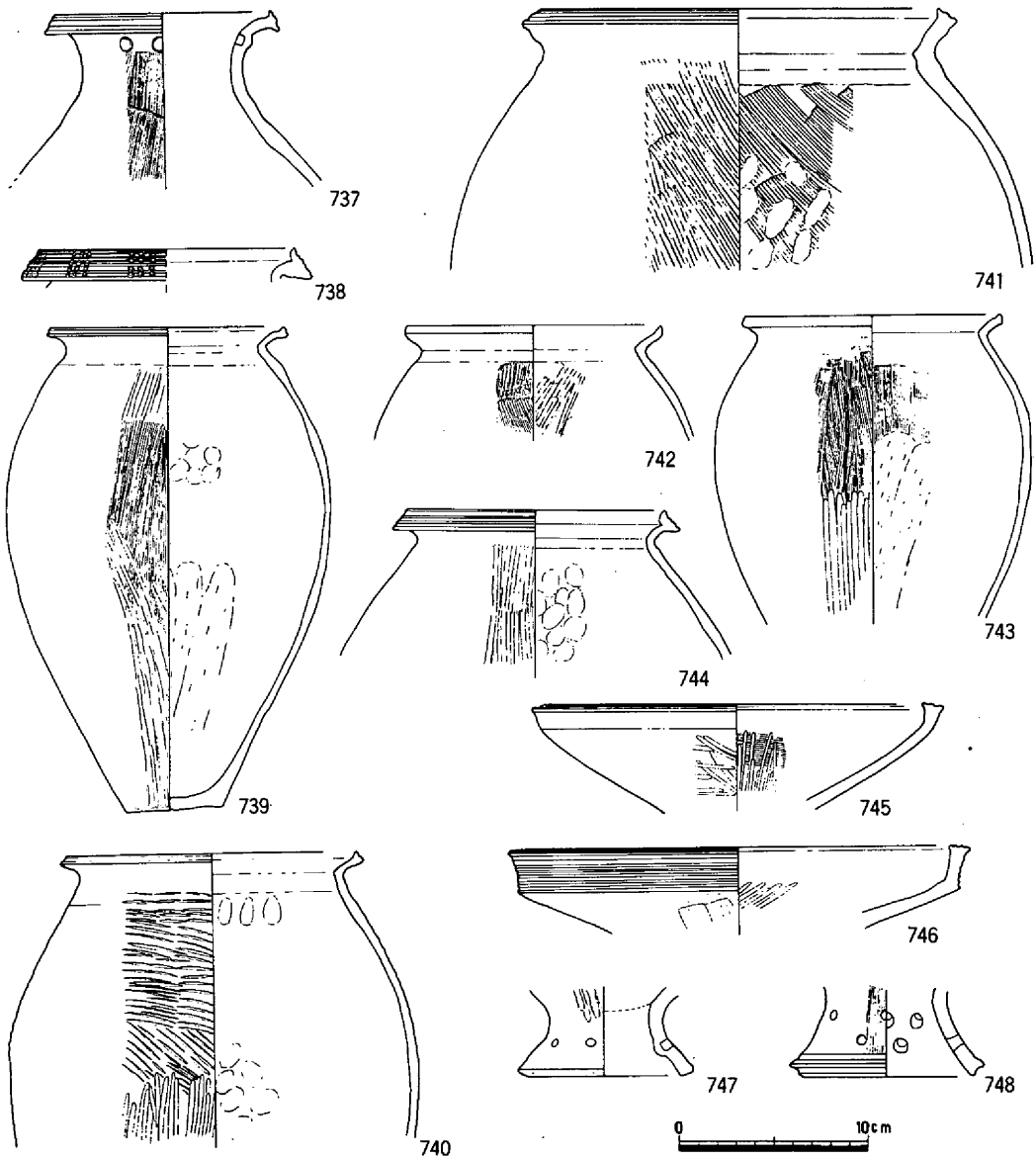
大半は調査区の側溝部および調査区外におよんでいる。土壙の規模等は不明であるが、深さ35cmを測り、底は海拔90cmである。この土壙は土壙—52の掘り上げ後に確認されたが、切り合い関係は不明である。出土遺物として完形の高杯等の土器730・731がある。時期は百・中・Ⅱの新相である。なお、この土壙は形状から柱穴とも考えられるものである。

土壙—56（第164図）

397—M中央に位置し西側は土壙—57に切られ、東側は調査区外におよぶ土壙で、扁平な底は海拔115cmを測る。埋土は淡灰青色土が1層で、底から20cm程上に壺等の土器片732～736が出土している。なお、土壙東南部下に平面形が不整楕円形（80×55cm）の土壙状遺構がある。深さ15cmで底の海拔100cm埋土は淡灰緑色粘土が1層である。時期は百・中・Ⅱの新相である。



第164図 土壌-56・57・130 ($\frac{1}{30}$)・土壌-56出土遺物

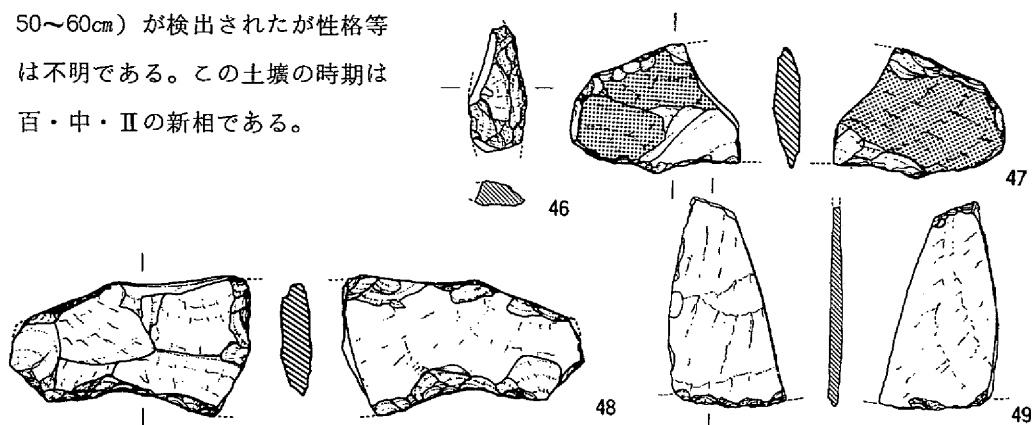


第165図 土壙—57 出土遺物(1)

土壙—57 (第164～166図)

397—M中央部の調査区西壁際において検出されたもので、北部を土壙—130に切られ、西半は調査区外におよんでいる為、形状・規模等は判然としないが、深さは55cm程を測り、底は海拔70cmである。埋土は、淡緑灰色粘土層が1層堆積しており、炭化粒・焼土を含んでいる。出土遺物には完形の甕や壺・高杯等の土器片737～748やスクレイパー等の石製品46～49がほぼ土壙の底部にそって出土している。また土壙の東南部にこの土壙に切られている柱穴状の遺構(径

50～60cm) が検出されたが性格等は不明である。この土壌の時期は百・中・Ⅱの新相である。



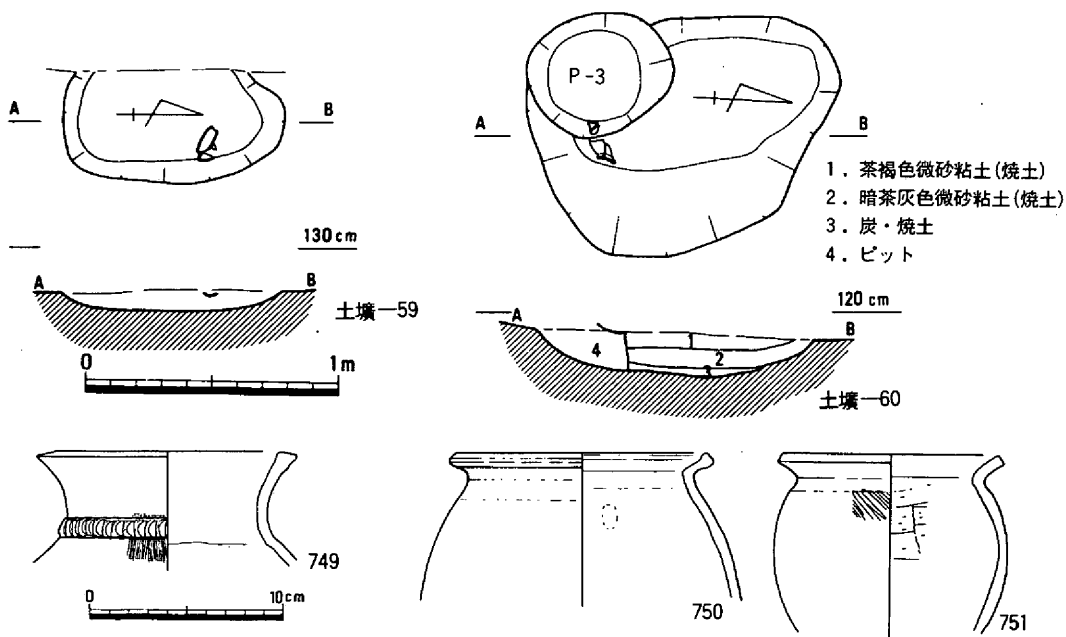
第166図 土壌—57 出土遺物 (2) ($\frac{1}{2}$)

土壌—59 (第167図)

397—M中央やや南寄りの調査区西壁際において検出されたもので、西端は調査区の側溝により切られている。平面形は不整楕円を呈し、長径87cm・短径約50cmを測る。検出された深さは約15cmで扁平な底は海拔105cmである。埋土は炭・焼土を含んだ黒灰色微砂層が1層である。出土遺物として壺749等の土器片がある。時期は百・中・Ⅱの新相である。

土壌—60 (第167図)

397—Mの中央やや南寄りにおいて検出されたもので、平面形は長径125cm・短径95cmの不整

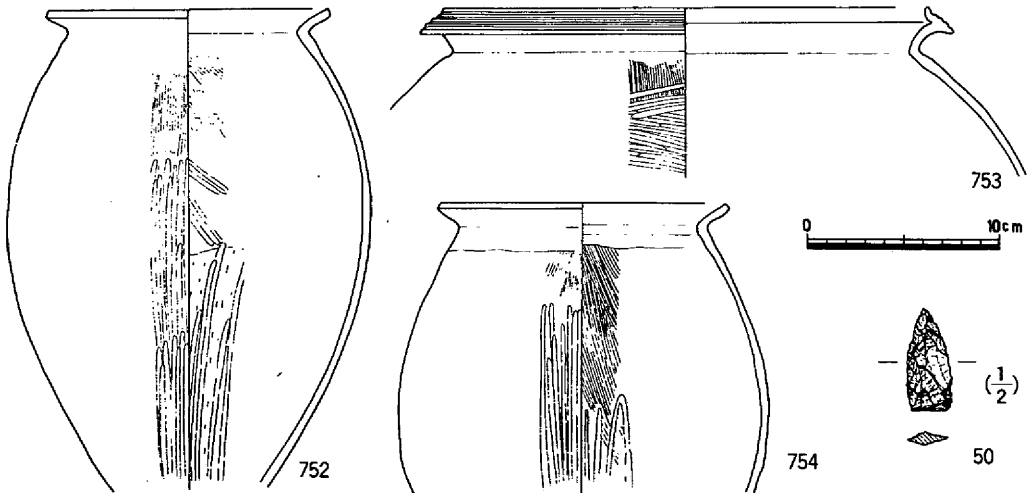
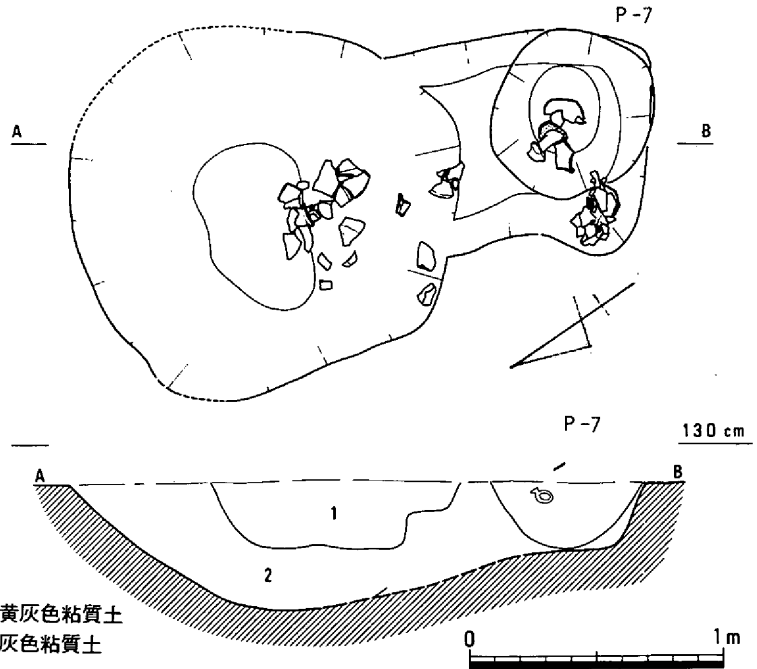


第167図 土壌—59・60 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

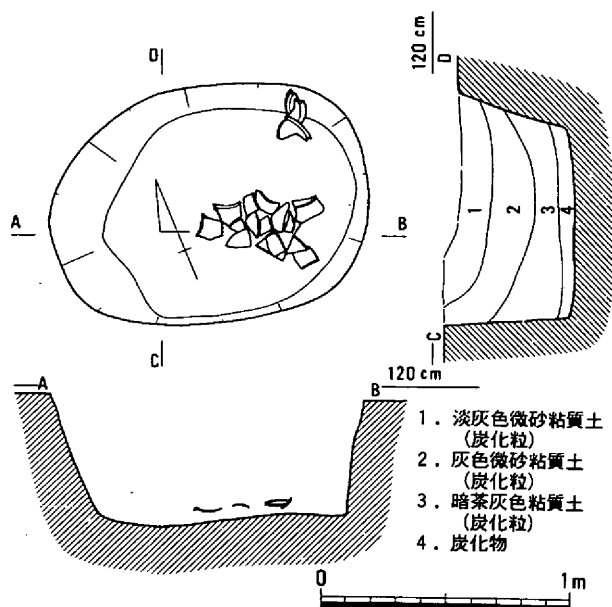
楕円形を呈す。底は扁平で深さ20cmを測る。底は海拔95cmである。南西部をP-3により切られている。また南東端において、土壙-61を切っている。埋土は3層に分かれ、いずれも焼土等を含む微砂粘土層で最下層は炭と焼土の層になっている。遺物は底から15cm程のところに甕750・751等の土器片が出土している。時期は百・中・Ⅱの新相である。

土壙-61 (第168図)

397-Mの中央やや南寄りにおいて検出されたもので、東端は調査区の側溝により切られている。平面形は丸味をおびた方形のやや大きな土壙の南側に少し小さい不整形方形の土壙が取り付いた形状を呈している。両者は前者が後者を切っているようでもあるが、判然とはしないものである。後者はP-7により切られている。深さ60cmで底は海拔65cmを測る。埋土は上層の



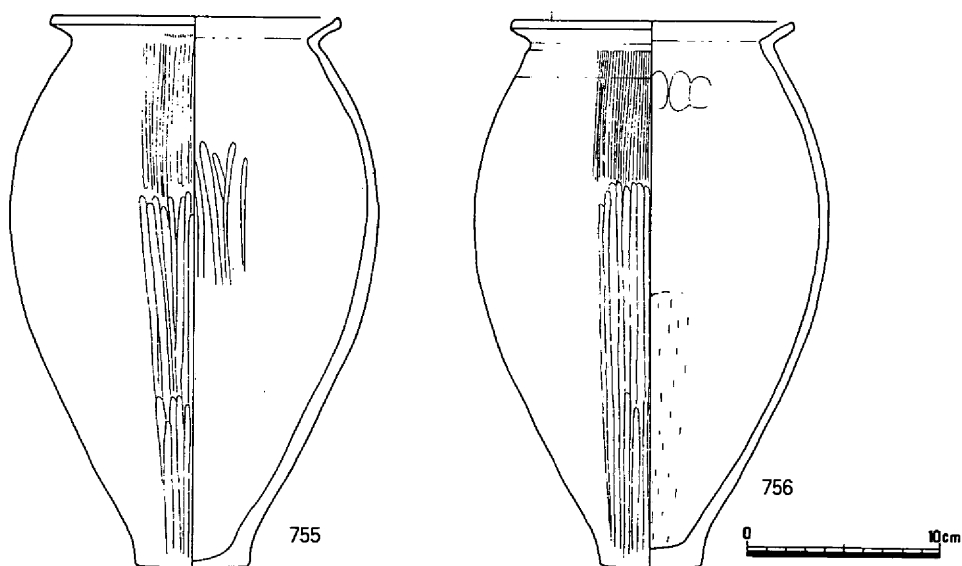
第168図 土壙-61 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物



淡青灰色粘質微砂層と下層の暗青灰色粘質微砂層の2層に分かれる。遺物の大半は下層から甕752～754等の土器片および、サヌカイト製の石鏃50が出土している。時期は百・中・Ⅱの新相である。

土壙—62 (第169図)

397—Mの南部において検出されたもので長径125cm・短径95cmの楕円形の平面形を呈し、深さ55cmを測る。掘り方は急に落ち込み扁平な底は海拔63cmを測る。北側

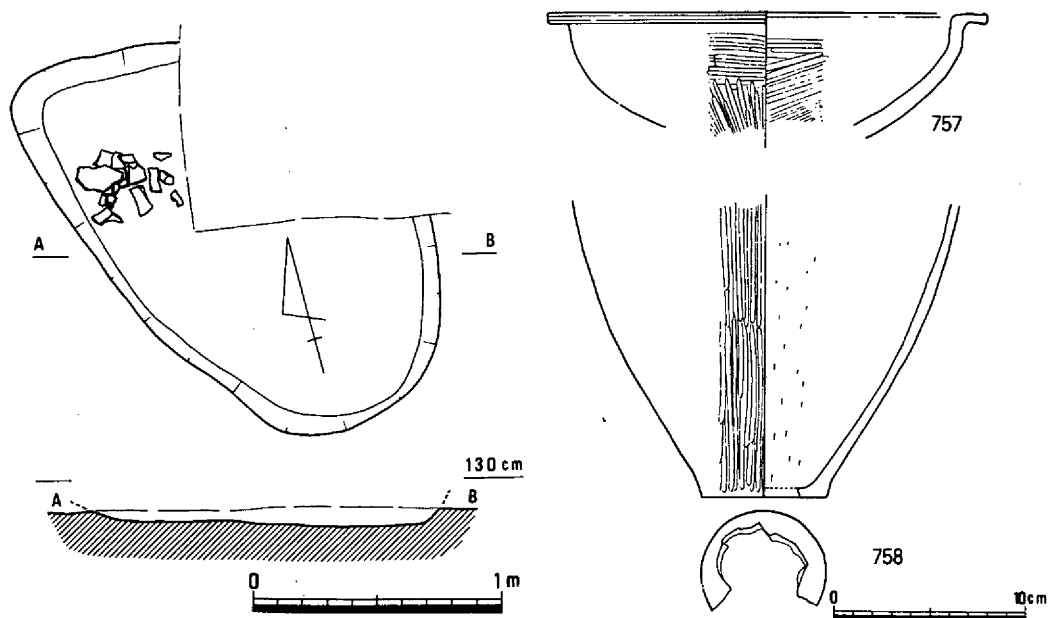


第169図 土壙—62 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

の上部は土壙—63に切られている。埋土はいずれも炭化粒を含む粘質土が堆積しており、底部には炭化物層が堆積している。遺物はいずれもほとんど底面に近いところから、ほぼ完形になる甕755・756等の土器片が出土している。時期は百・中・Ⅱの新相である。

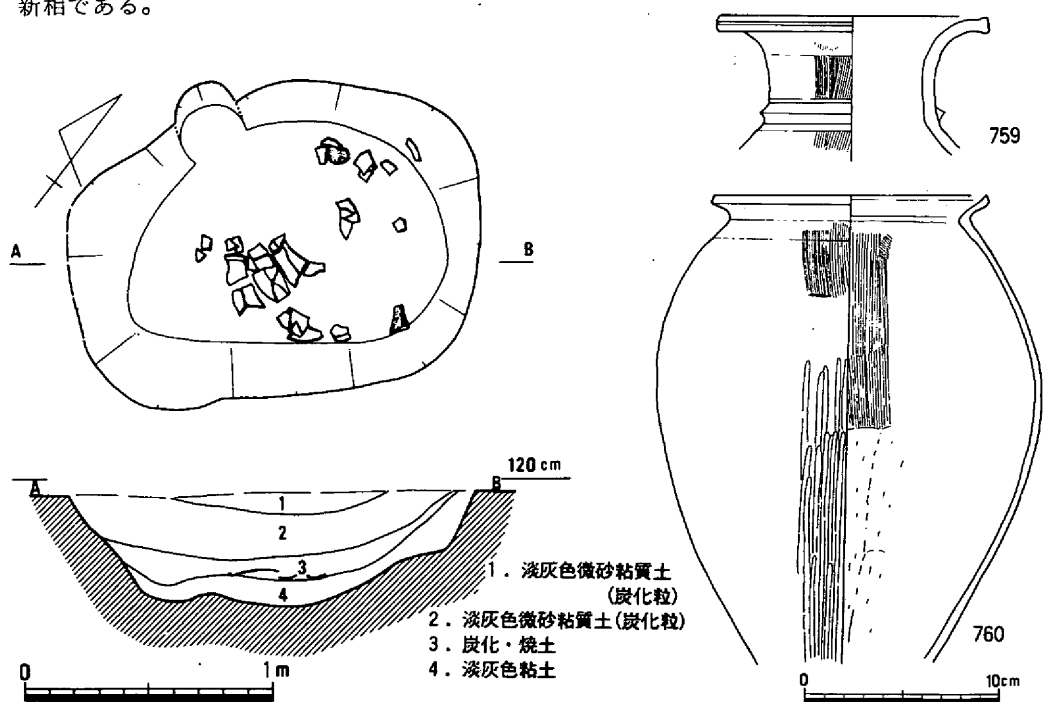
土壙—63 (第170図)

397—Mの南部、調査区東端において検出されたもので、東北部は調査区外におよんでいる。また南部では土壙—62を切っている。規模は最長部で約200cmを測る不定形の平面形を呈

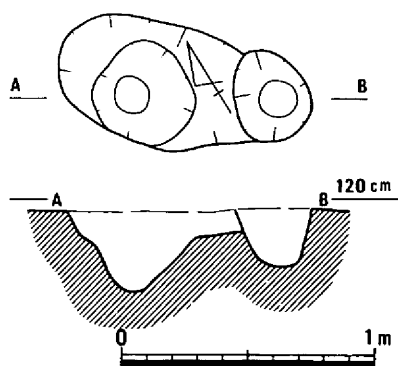


第170図 土壌—63 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

し、深さ約10cmを測る浅い土坑である。底は扁平で海拔110cmを測る。出土遺物は北東部で一括して甕等の土器片757・758が出土している他に炭化米が出土している。時期は百・中・Ⅱの新相である。



第171図 土壌—65 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

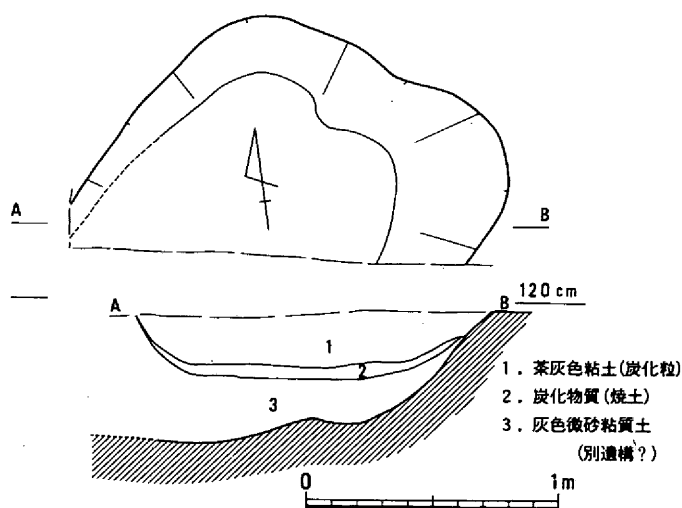


第172図 土壌—70 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

—59に切られている。長径約80cm・短径50cm・深さ35cmで途中に段がある。底は海拔83cmで埋土は炭化粒を含む暗茶灰色粘土が1層である。出土遺物に甕 761 等の土器片がある。時期は百・中・Ⅱの新相である。

土壌—71 (第173図)

397—Mの南端、調査区南西壁際において検出された不定形の土壌で、南部は調査区外にお



第173図 土壌—71 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

土壌—65 (第171図)

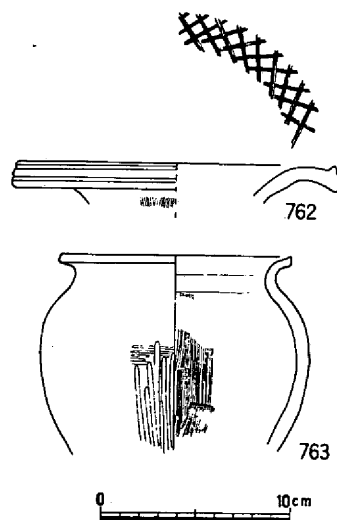
397—Mの南部で、土壌—63・土壌—62の西側において検出されたもので、長辺165cm・短辺125cmを測る不整長方形の平面形を呈する。深さは約45cmで幾分凹凸のある底は海拔70cmを測る。埋土は4層で、いずれも炭化粒を含んでいる。3層は炭・焼土層でリン酸鉄がある。出土遺物はいずれも3層の下

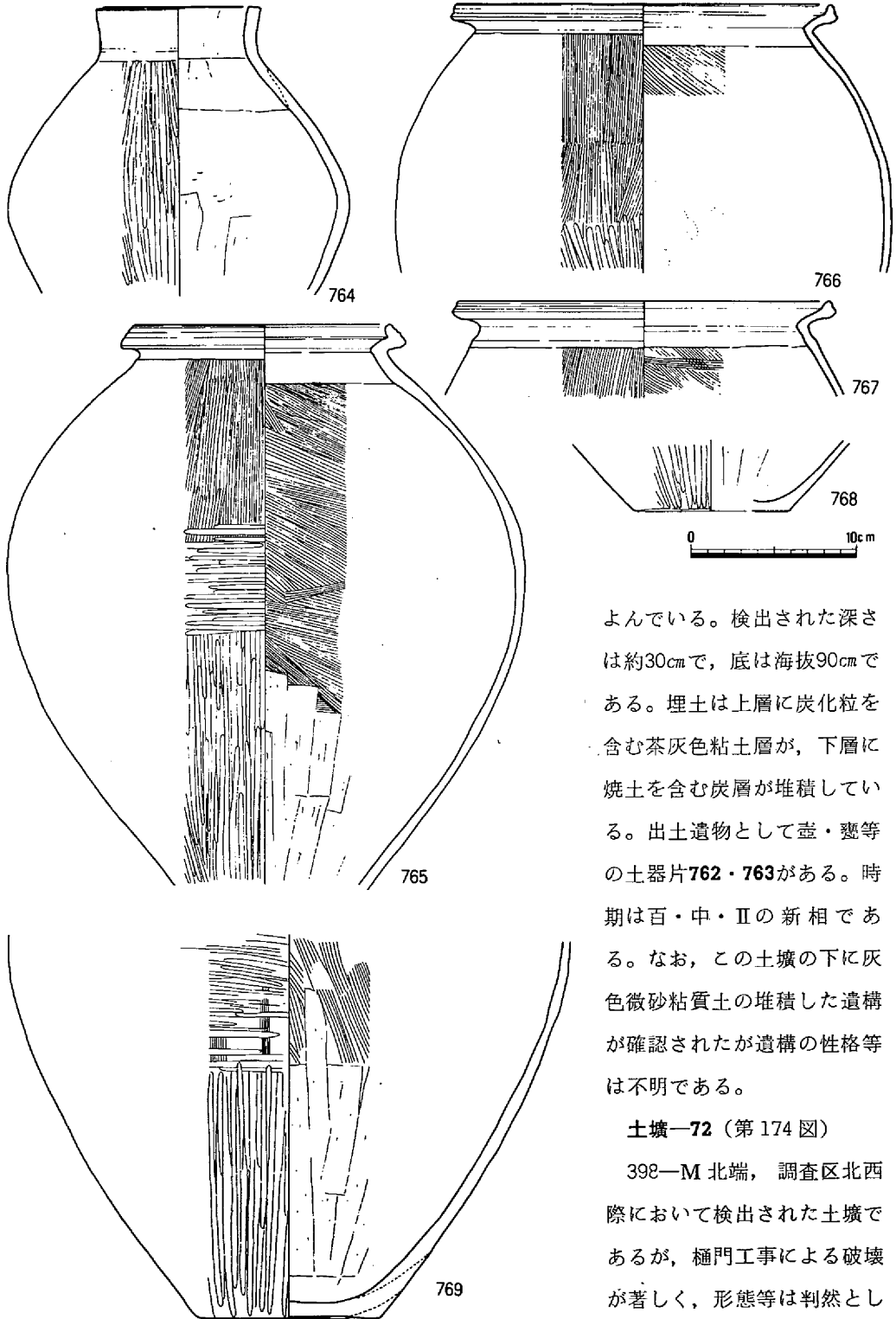
端から、壺・甕等の土器片 759・760 および炭化米・桃の種子等が出土している。

時期は百・中・Ⅱの新相である。

土壌—70 (第172図)

397—Mの南端、調査区東部において検出された、不整楕円形の平面形を呈する土壌で、東端をピットに、西端を土壌



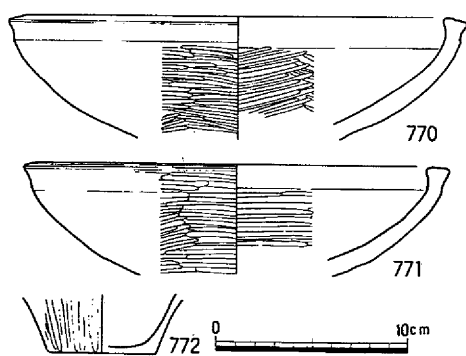
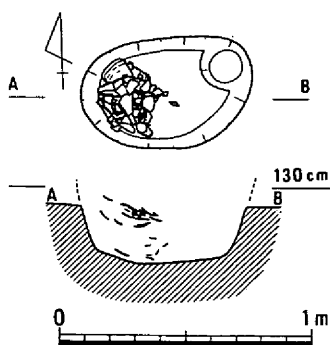


第174図 土壙-72出土遺物

よんでいる。検出された深さは約30cmで、底は海拔90cmである。埋土は上層に炭化粒を含む茶灰色粘土層が、下層に焼土を含む炭層が堆積している。出土遺物として壺・甕等の土器片762・763がある。時期は百・中・Ⅱの新相である。なお、この土壙の下に灰色微砂粘質土の堆積した遺構が確認されたが遺構の性格等は不明である。

土壙-72 (第174図)

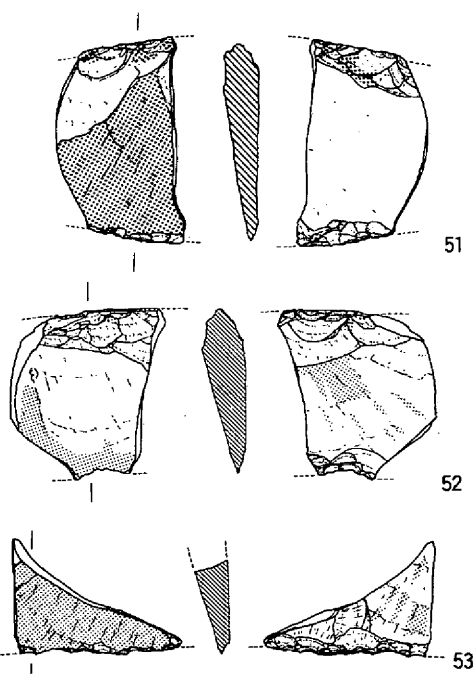
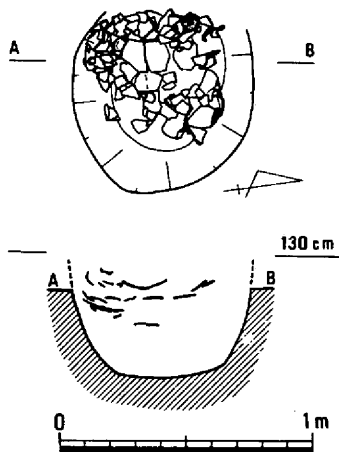
398-M 北端, 調査区北西際において検出された土壙であるが、樋門工事による破壊が著しく、形態等は判然としない。短径 120 cmを測るかな



第175図 土壌—73 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

土壌—75 (第176・177・220図)

398—Mの北部，調査区西壁際で土壌—73の南西部において検出された土壌で，西端は調査区外におよび東端は土壌—74により切られてい

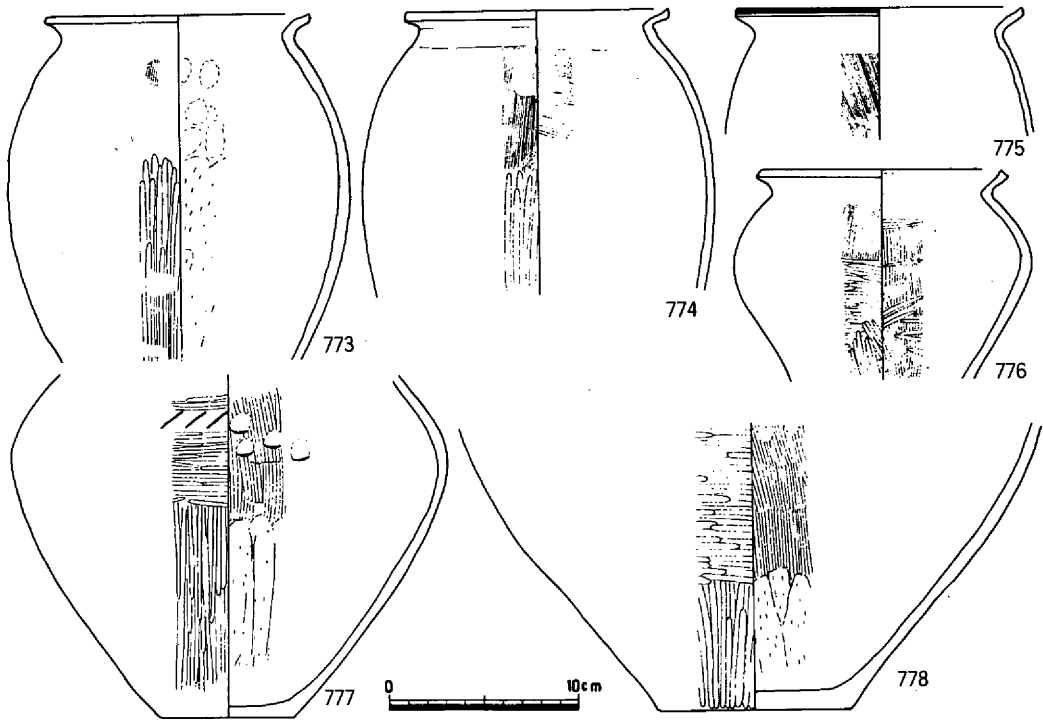


第176図 土壌—75 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物 (1) ($\frac{1}{2}$)

り大きな土壌 (第149図) と想定される遺構である。深さは約60cmで底は海拔57cmを測る。出土遺物は壺・甕等の土器片764～769が出土している。なお，土壌南端部は溝—28により切られている。時期は百・中・Ⅱの新相である。

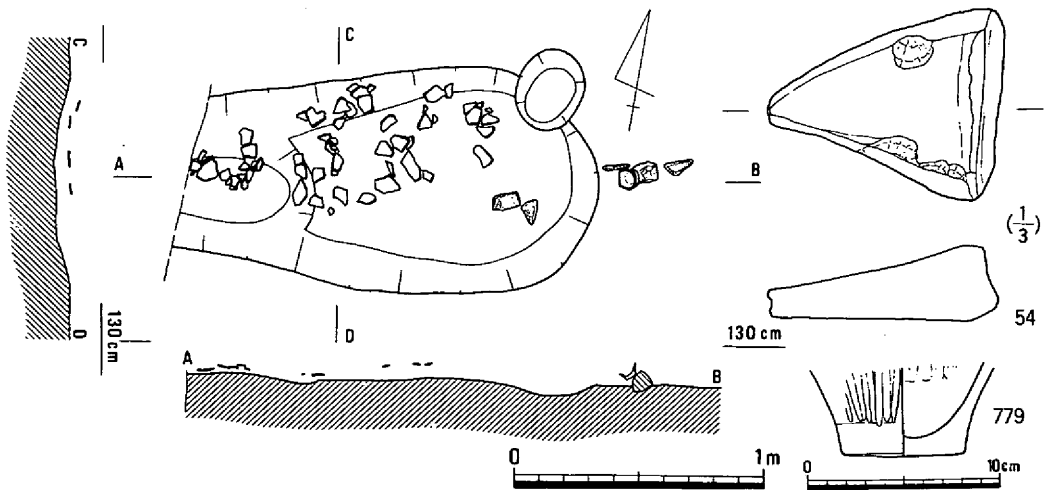
土壌—73 (第175図)

398—M北部において検出された土壌で，平面形は長径70cm・短径45cmの楕円形を呈している。検出できた面が低く深さ約30cm，底は海拔100cmを測るのみであるが遺構の北東端部に柱痕跡と考えられる約5cm低い径20cmを測る円形の窪みがある。出土遺物は高杯等の土器片770～772が遺構の西半に，西から落ち込んだ状態で出土している。時期は百・中・Ⅱの新相である。南端部で土壌—74を切っている。

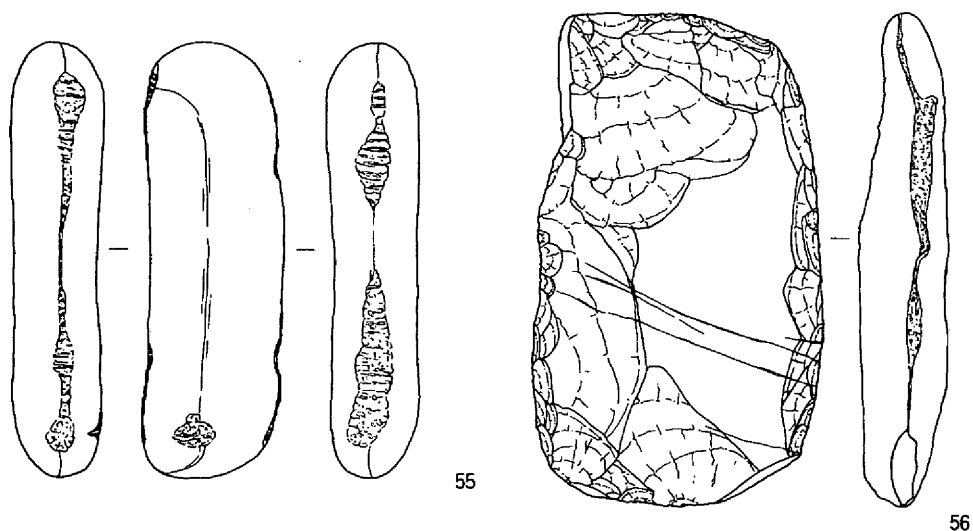


第177図 土坑一75出土遺物(2)

る。平面形は径約70cmの不整円形を呈し、深さ40cm底は海拔80cmを測る。柱痕跡等は認められなかったが、柱穴状の土坑である。出土遺物として甕等の土器片773~778の他に、サヌカイト製の石庖丁等の石製品51~53・108がある。時期は百・中・Ⅱの新相である。



第178図 土坑一76 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物(1)



第179図 土壌—76出土遺物 (2) ($\frac{1}{2}$)

土壌—76 (第178・179図)

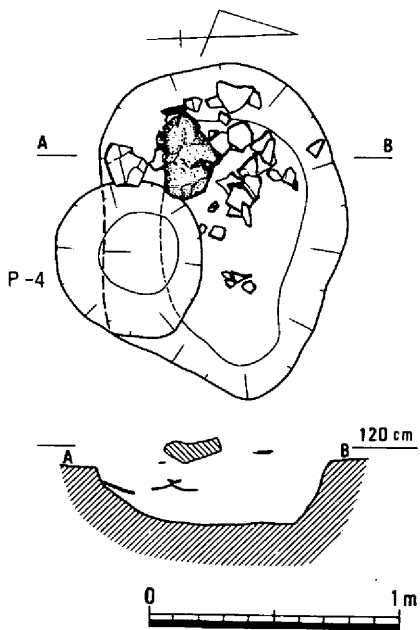
398—M北部において検出された東西に細長い土壌で、西端は調査区外におよんでいる。検出された深さは10cm程で底は海拔110cmである。出土遺物としては、底面に甕等の土器片779が出土している他に、花崗岩製の敲石55・細粒花崗岩製の砥石54・砂岩製の打製石斧56等の石製品が出土している。時期は百・中・Ⅱの新相である。

土壌—79 (第180・181図)

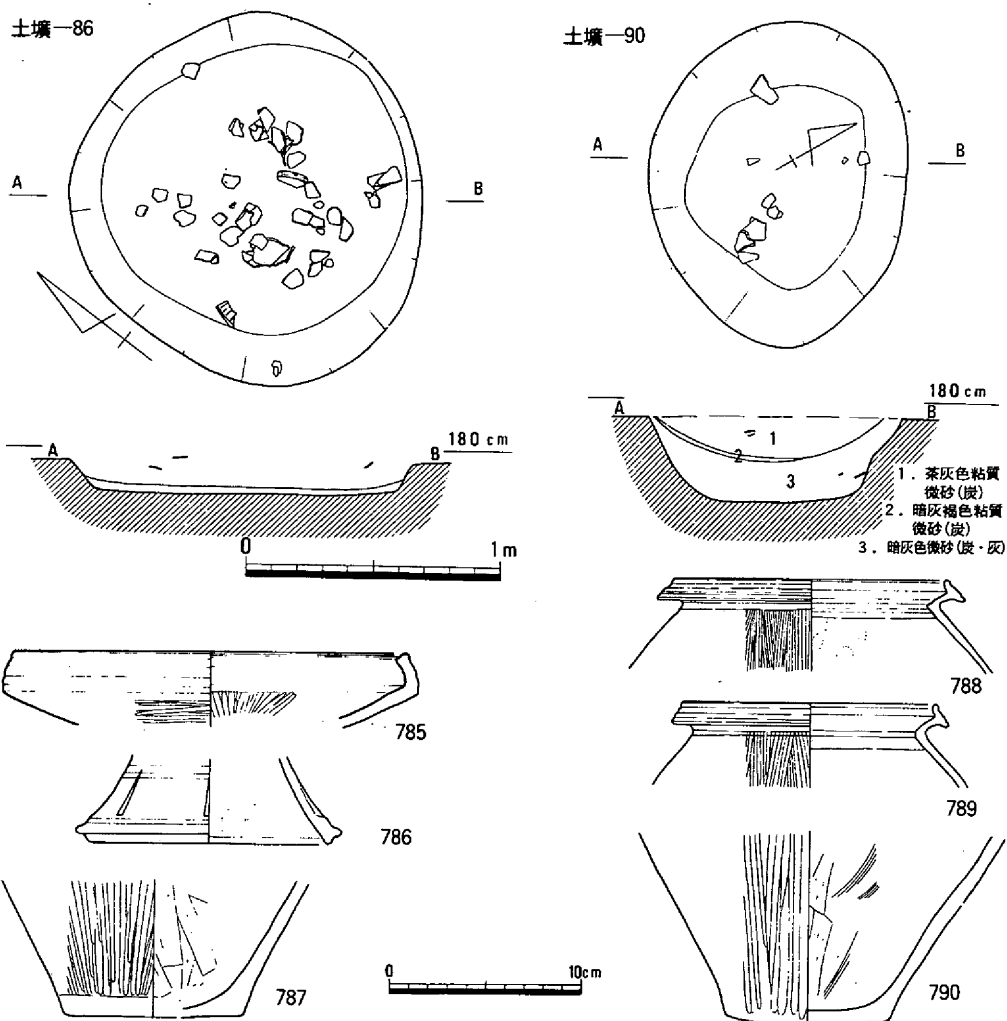
398—Mの中央部やや北寄りにおいて検出された不定形の土壌で、南部をP—4により切られている。規模は長径135cm・短径100cm・深さ35cmで底は海拔90cmを測る。埋土は炭を含んだ灰色粘質土層が1層で、遺物は西側に片寄って壺・甕等の土器片780~783が出土している。その他にサヌカイト製の石鏃2点57・58が出土している。時期は百・中・Ⅱの新相である。

土壌—80 (第182図)

398—Mの中央部やや北寄りにおいて検出された土壌で、平面形は長径125cm・短径90cmの不整楕円形を呈している。深さ約25cmで、底は海拔90cmを測る。遺物は完形に復原された甕784が出土している。時期は百・中・Ⅱの新相である。



第180図 土壌—79 ($\frac{1}{30}$)



第183図 土壙-86・90 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

暗灰茶色粘質微砂（少量の炭を含む）が、2層は灰黄色粘質微砂が間層として堆積し、3層に多量の炭を含んだ暗灰褐色微砂が堆積している。出土遺物としては、1・3層より甕等の土器片788～790がある。時期は百・中・Ⅲの中相である。

（内藤）

土壙-91（第184図）

301-Mの北部に位置する不整楕円形の土壙で、大きさは長径120cm・短径90cm・深さ30cmを測る。埋積土は、3層に分けることができ、最下層に図のような土器791～793の出土をみた。出土遺物は甕と高杯の破片で、これらからこの土壙の時期は、百・中・Ⅲの中相に比定することができる。またこの土壙の用途はゴミ穴と考えられる。

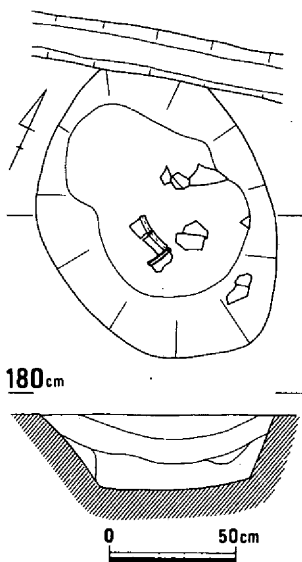
（浅倉）

土壌—101

(第185・186

図)

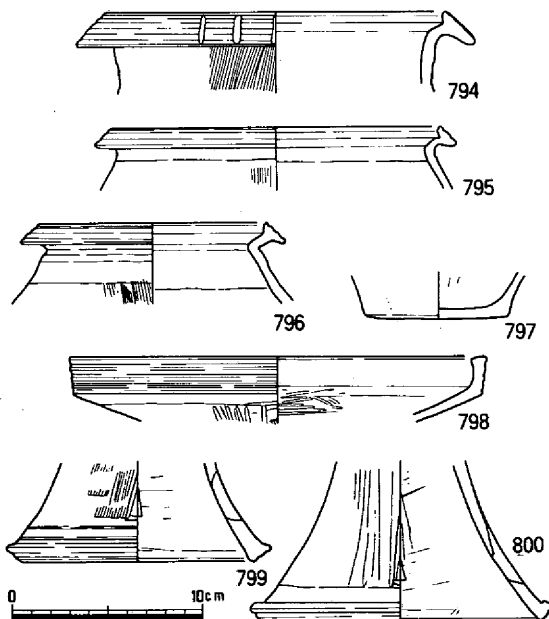
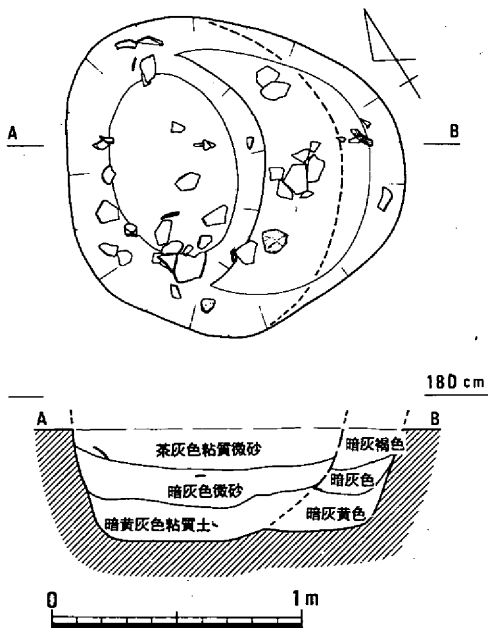
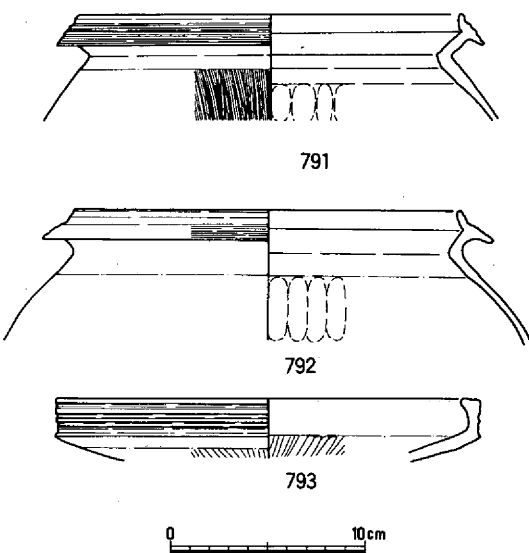
301—M北
部において検
出された不整
楕円形の平面
形を呈する土
壌で、2つの
土壌が切り合
っているもの
と思われる。



切っている西

第184図 土壌—91 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

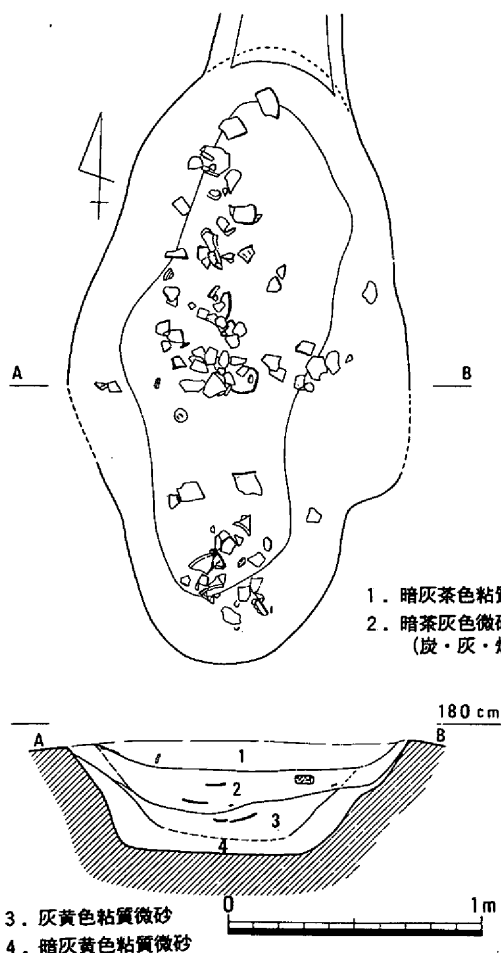
側の土壌は径120cm程の不整円形を呈し、深さ45cmで、底は海拔122cmを測る。一方切られている東側の土壌はやや浅く、底は海拔126cmで、いずれも底は扁平である。埋土は両者とも3層に分かれ、いずれの層からも甕・高杯等の土器片794~800が出土しており、両者の時期差は判然としな。土器片の他に安山岩製の砥石59がある。時期は百・中・Ⅲの中相である。



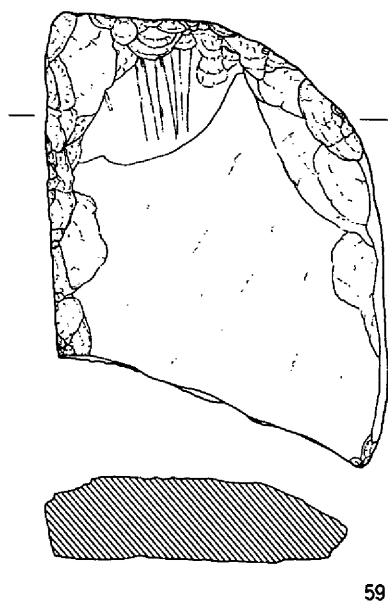
第185図 土壌—101 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物(1)

土坑—96 (第187・188図)

301—Mの北部溝—24の南端に位置し、検出面での切り合い関係は判然としていない。平面形は長径240cm・短径135cmの不整楕円形で、深さは45cm、底は比較的扁平で海拔128cmを測る。埋土は4層に分



第187図 土坑—96 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物(1) ($\frac{1}{2}$)



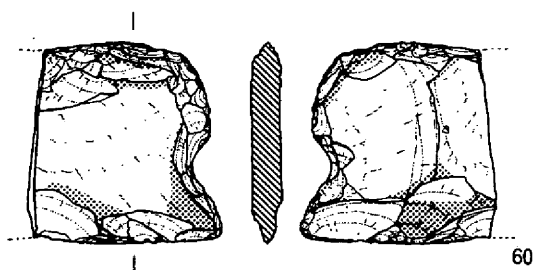
第186図 土坑—101 出土遺物(2) ($\frac{1}{2}$)

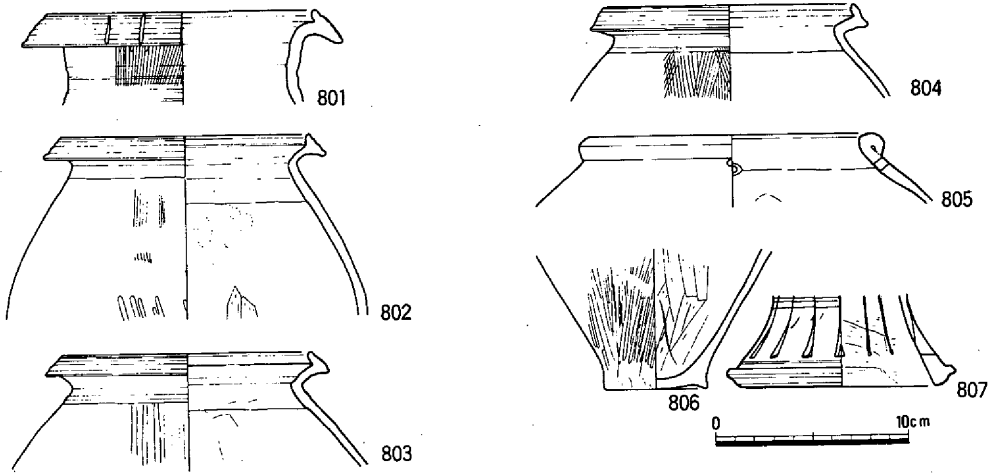
かれ2層には土器片とともに非常に多くの炭・焼土が含まれている。出土遺物としては、壺・甕等多くの土器片801～807がある。その他にサヌカイト製の石庖丁60がある。時期は百・中・Ⅲの中相である。(内藤)

土坑—100 (第189図)

301—Mの北東の壁ぎわに検出された平面不整形・断面浅い皿形の土坑である。大きさは、東西80cm以上・南北125cm・深さ20cmを測る。埋積土は、上下2層に分けることが

でき、遺物は主として下層から図のように少量出土している。実測に耐えることのできる土器は、3点あり、甕と高杯の小破片808～810である。他にサヌカイト製の打製石庖丁61が北東の肩口から出土している。これらの遺物から時





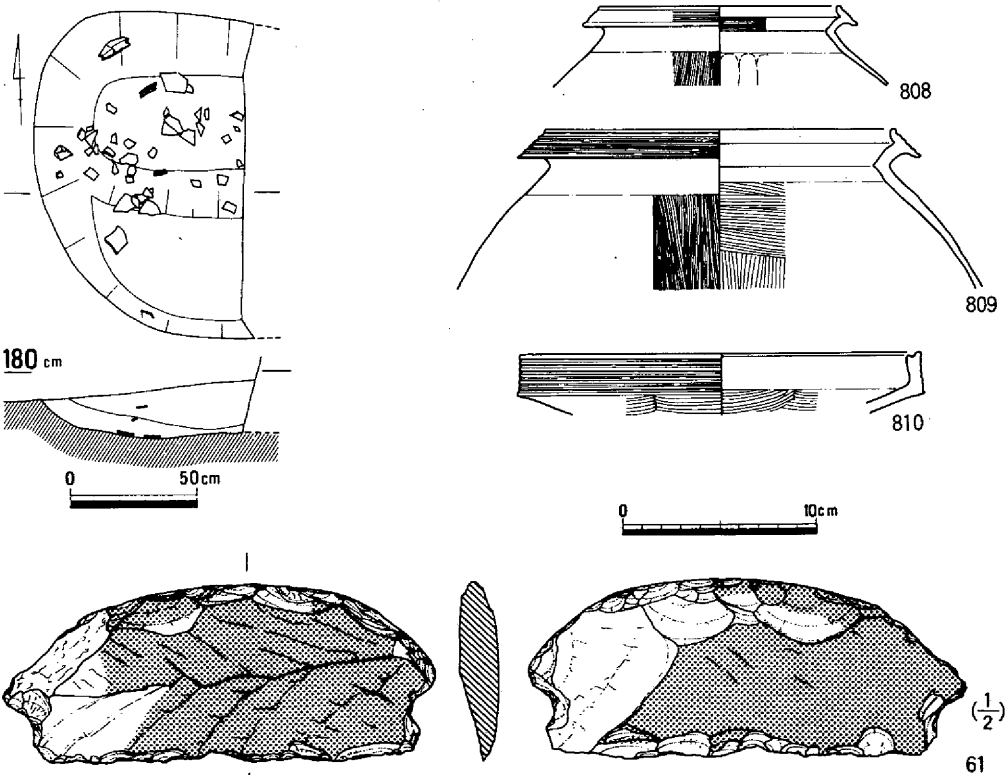
第188図 土壌—96出土遺物(2)

期は百・中・Ⅲの中相に比定できる。

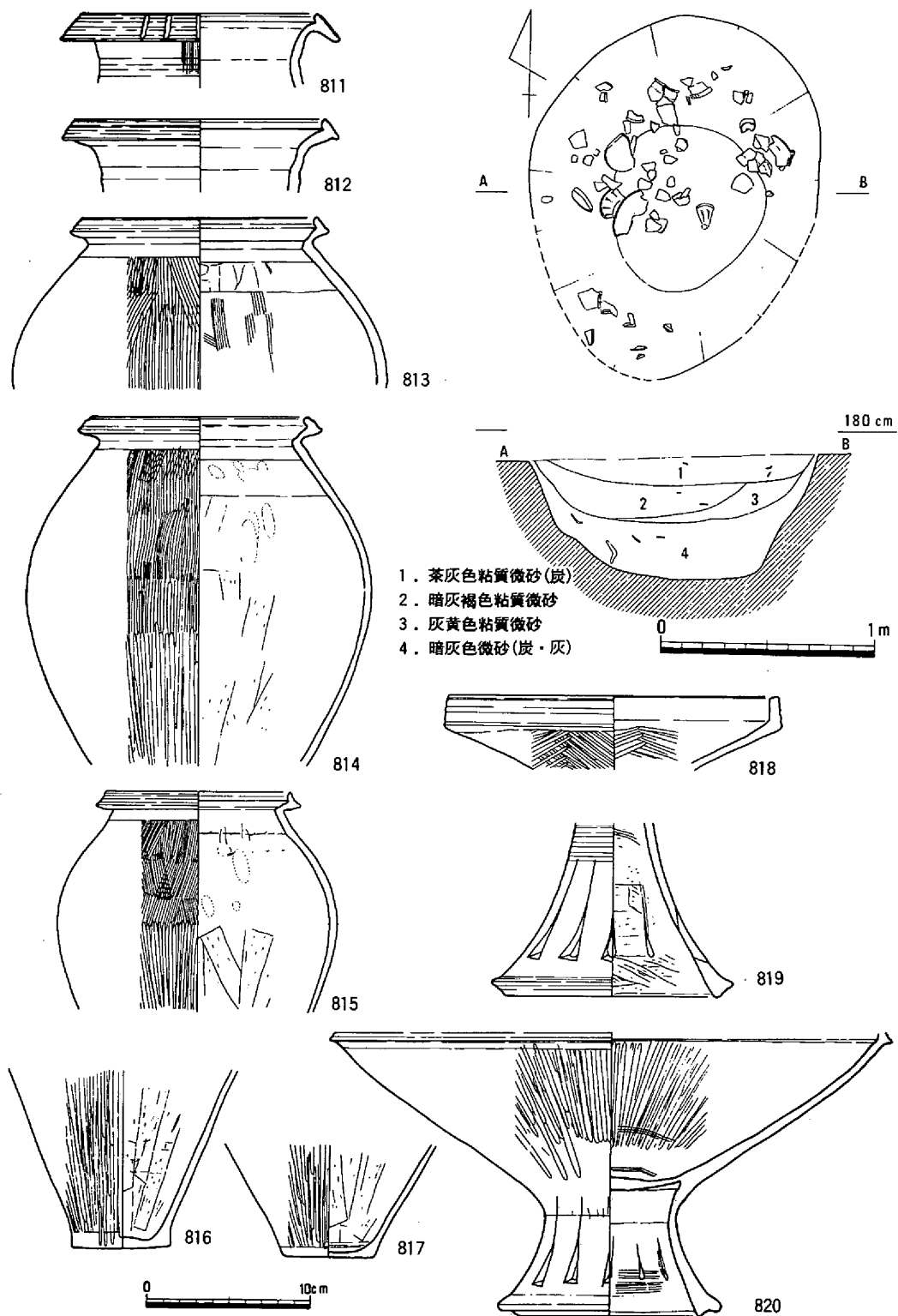
(浅倉)

土壌—99 (第190図)

301—Mの北部、土壌—98南端において検出された長径170cm・短径135cmを測る楕円形の平



第189図 土壌—100 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物



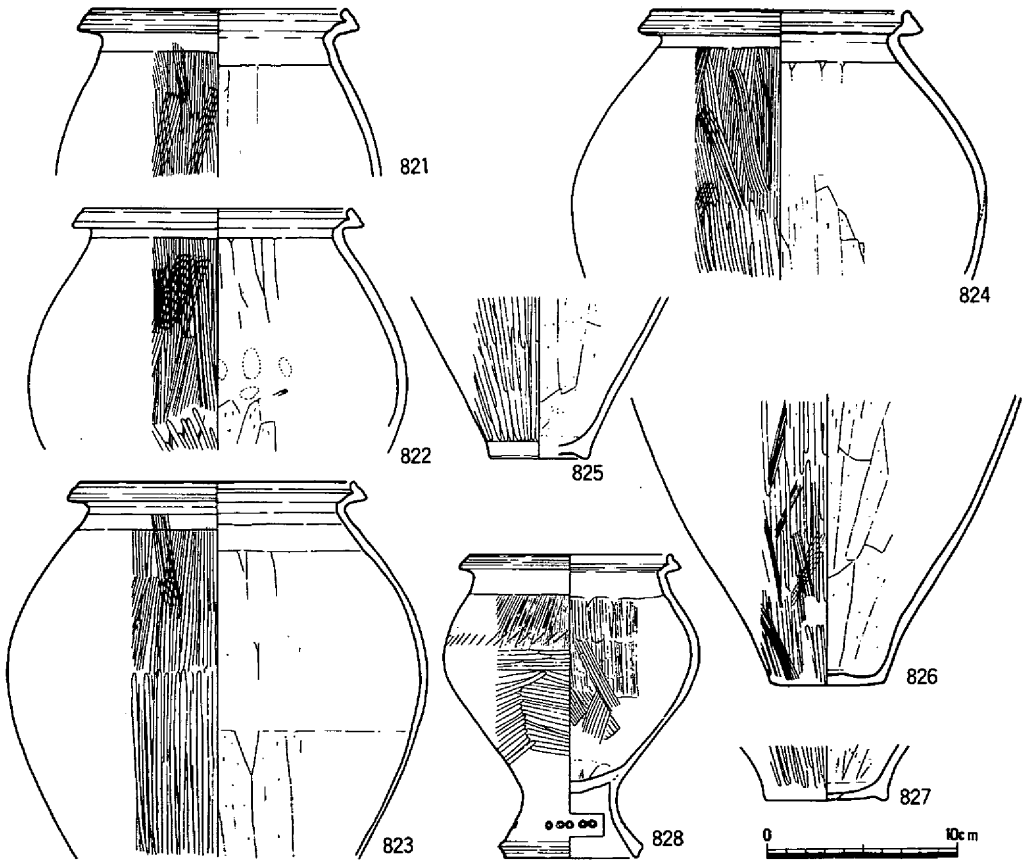
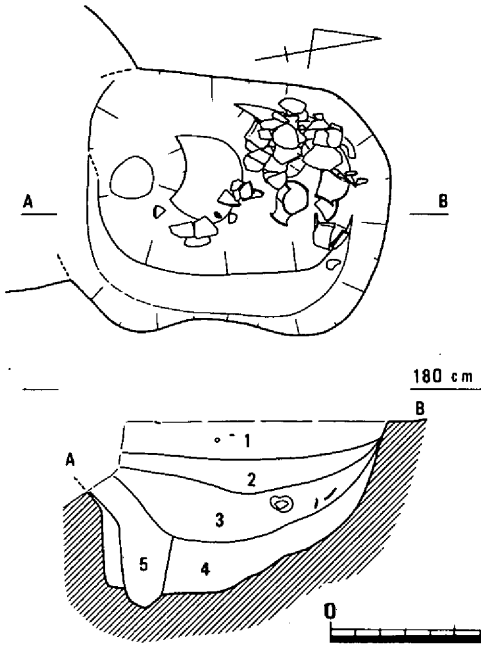
第190図 土壌—99 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

面形を呈する土壌で、深さ 60 cm、底は海拔 112 cm である。埋土は 4 層に分かれ 1・2・4 層には土器とともに炭が混っている。特に最下層の 4 層は非常に多くの炭と土器片を含んでいる。出土遺物には、壺・甕・高杯など多くの土器片 811~820 がある。時期は百・中・Ⅲの中相である。

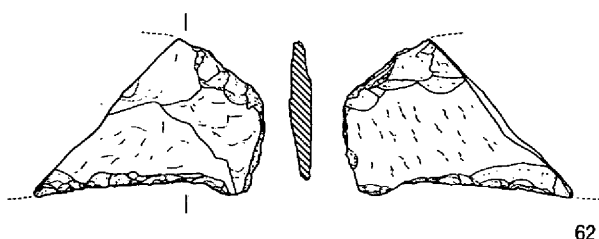
土壌—98 (第191・192図)

301—M北部で、土壌—96の西隣において検出された土壌で、南端は土壌—99により切られているが、同一個体の土器片 828 は双方から出土している。また建物—20の柱穴 Ⅲ3

1. 灰茶色粘質微砂 (ブロック・炭・灰)
2. 灰黄色粘質微砂 4. 暗灰色微砂
3. 暗灰色微砂 5. 暗灰色粘質土(柱痕)



第191図 土壌—98 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物(1)



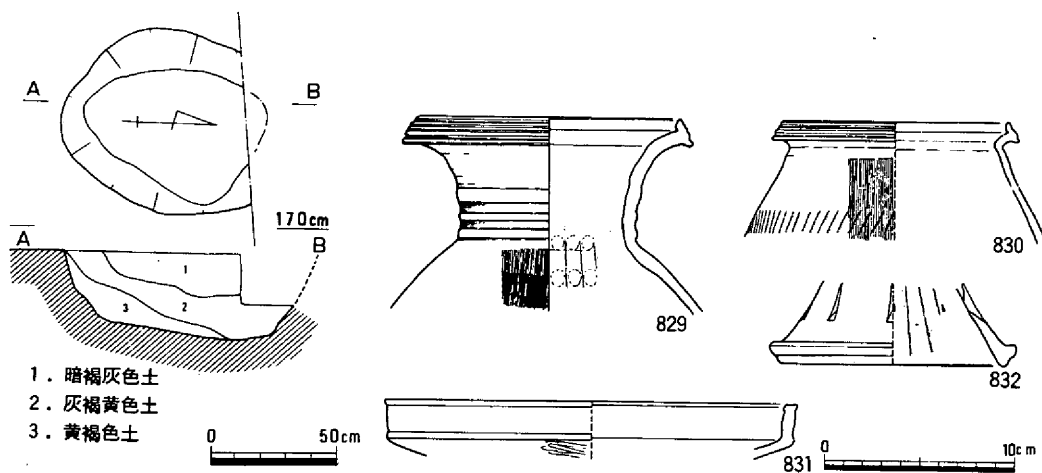
第192図 土壌—98 出土遺物(2) ($\frac{1}{2}$)

はこの土壌の南端部下から検出されている。平面形は長辺120cm・短辺100cmの不整長方形を呈し、深さ50cm、底は海拔120cmを測る。出土遺物として、甕等多くの土器片821~828がおもに3層を中心として、土壌の北西側から落ち込んだ状況で出土している。この他にサヌカイト製のスクレイパー62が出土している。時期は百・中・Ⅲの中相である。

(内藤)

土壌—104 (第193図)

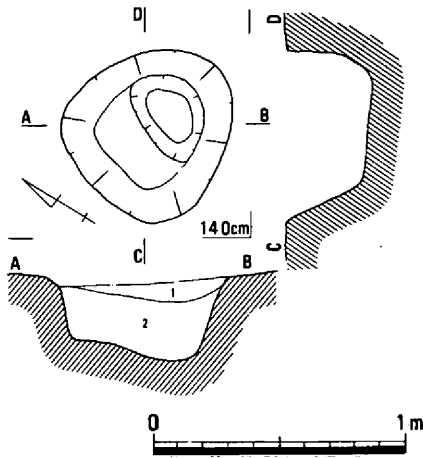
301—M中央に位置し、排水溝に切られ全体の $\frac{3}{4}$ 強が残存する。長径約90cm・短径72cm・深さ35cmを測り、楕円形を呈す。坑内の堆積土の様子より、流入堆積した状況が窺える。2層の灰褐黄色粘土、3層の黄褐色粘土には、かなりの炭を含む。遺物は、1・2層に包含され、壺形土器以外は小片であり、図示できるものは4点829~832のみである。時期は出土遺物より判断して、百・中・Ⅲの中相に比定できる。



第193図 土壌—104 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

土壌—105 (第194図)

暗灰色粘土を除去した後、海拔高126cmで検出した遺構であり、他の遺構群より、検出面は一段低い。301—Mの中央に位置し、不整円形を呈す。長径68cm・短径64cm・深さ35cmを測る。急傾斜した坑壁より、やや屈折的に坑底に移行する。堆積土は2層に分割でき、2層の暗灰色粘土層より、鑑定の結果、緑豆・小豆の炭化物が検出された。また、桃の種子も1個検出した。遺物は小片のみで、図示できるものは無い。時期は遺物の成形・手法並に層位関係より判

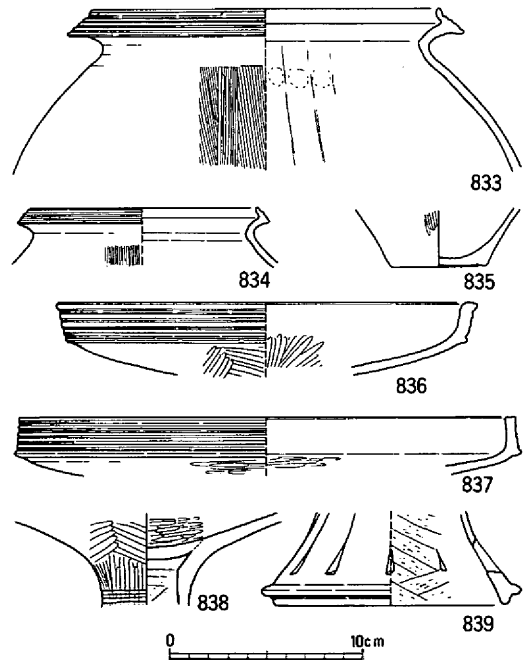
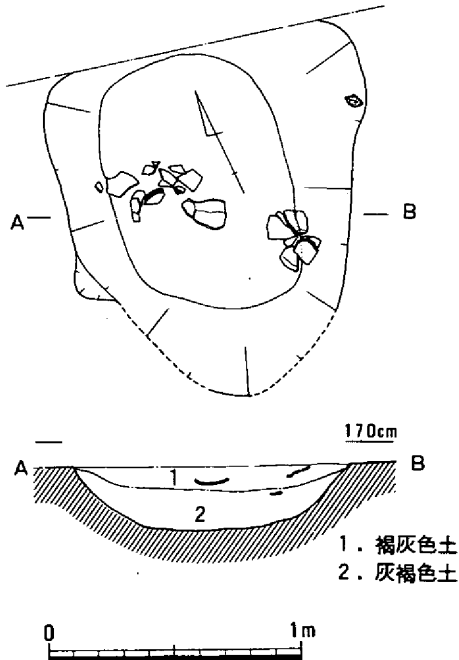


第194図 土坑—105 ($\frac{1}{30}$)

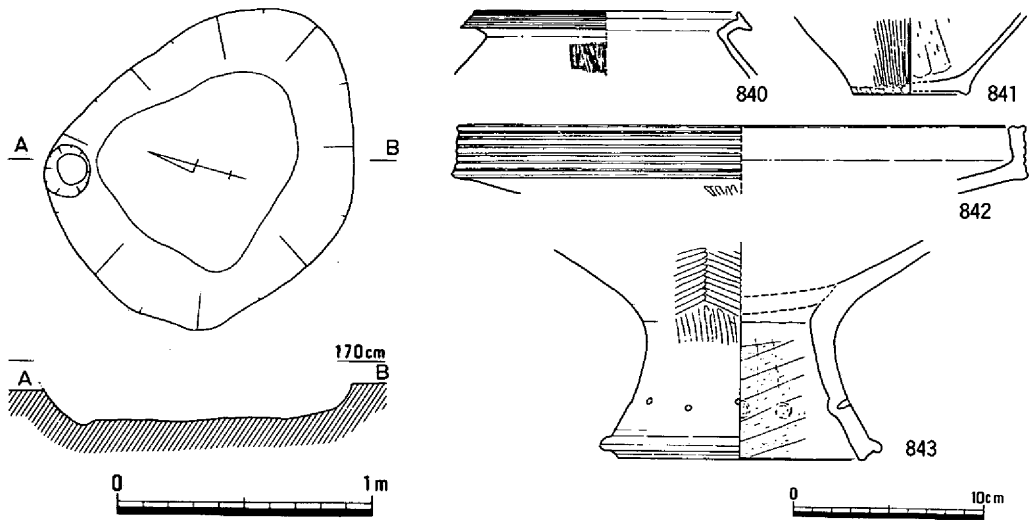
を測る敲石、大型のサヌカイト片も伴出している。以上、時期は、出土遺物より判断して、百・中・Ⅲの中相に比定できる。

土坑—107 (第196図)

301—Mの中央に位置し、不整楕円の平面形を呈す。長径135cm・短径105cm・深さ約14cmを測る。坑内の北隅による落ち込みは、新しい時期の掘り込みかも知れない。遺物は、ほとんどなく、図示した840—843だけである。時期は、出土遺物より判断して、百・中・Ⅲの中相に比



第195図 土坑—106 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

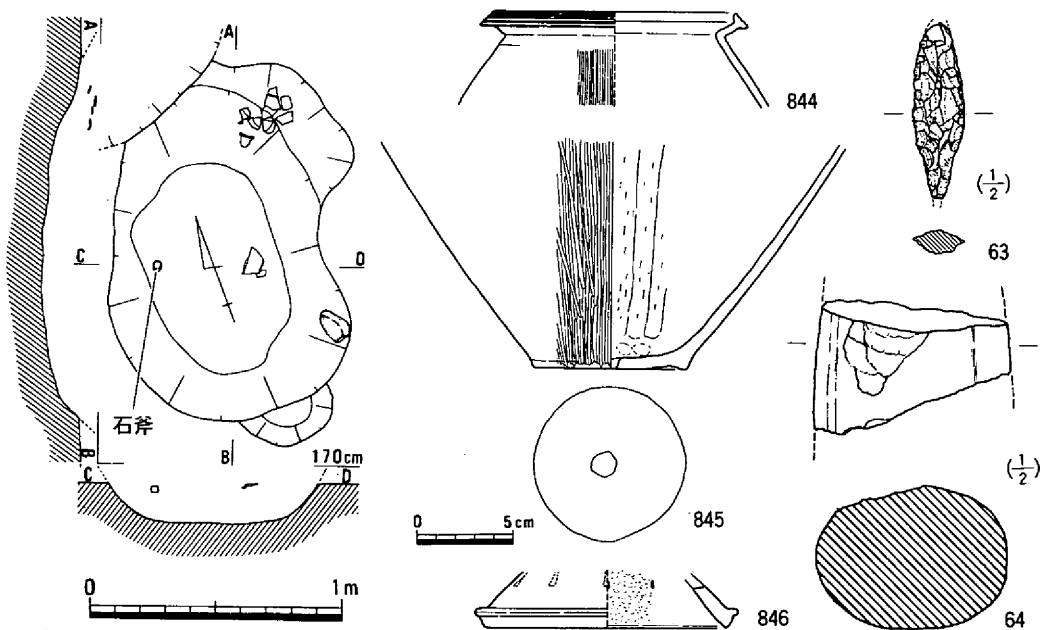


第196図 土坑—107 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

定できる。

土坑—108 (第197図)

301—Mの調査区西隅に位置し、土坑—110に近接する。遺構の北端は土坑—110に切られ、南端は浅い落ち込み状の土坑を一部切っている。長径 139cm・短径95cm・深さ約14cmを測る。坑壁は北東部分で段をなすが、全体



第197図 土坑—108 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

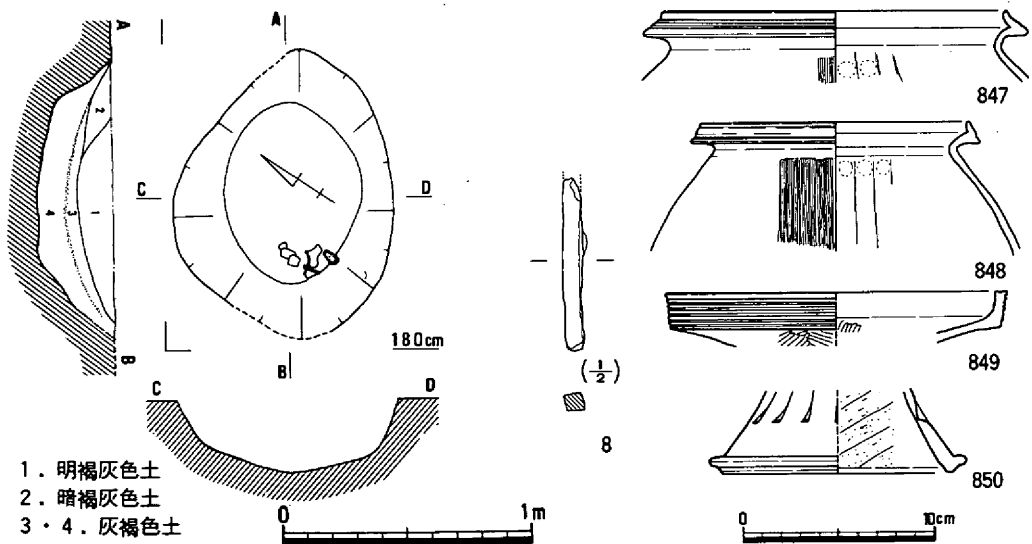
的に緩やかで、浅い皿状を呈す。壙内は、炭・焼土を含み、暗褐灰色土で分層できない。遺物は、北東隅と底面付近とに浮いた状態で散見したのみである。図示した石斧64は検出面上で出土し、上層部分に包含されていたものである。また、調整の丁寧なサヌカイト製の凸基有茎式石鏃1点63が出土している。時期は百・中・Ⅲの中相に比定できる。

土壌—109（第198図）

301—Mの中央部に位置する。一部、他の2基の土壌に切られており、不整楕円形を呈する。長径115cm・短径88cm・深さ30cmを測る。壙内堆積土は縁辺部に薄く、中央に厚いレンズ状の堆積状況を示している。堆積層は基本的には4層に区分され、4層、灰褐色粘土層上面には2～3cmの厚さで炭化物堆積層を形成する。2層・4層においては、基盤層の砂粒をブロック状に含むと共に、多量の炭・焼土が認められ、壙内の状況からして、二次的に投棄されたものと解される。遺物は4層のみに散見でき、図示したものが全てである。また、若干のサヌカイト小片・桃の種子2個体も最下層より検出された。なお、上層では、検出面において、用途・性格不明の鉄製品8が出土しており、現存長4.5cm・最大幅6mmを測る。当遺構に伴出するものと考えて差しつかえないであろう。以上、時期は、出土遺物は少ないが、百・中・Ⅲの中相に比定されうると考える。

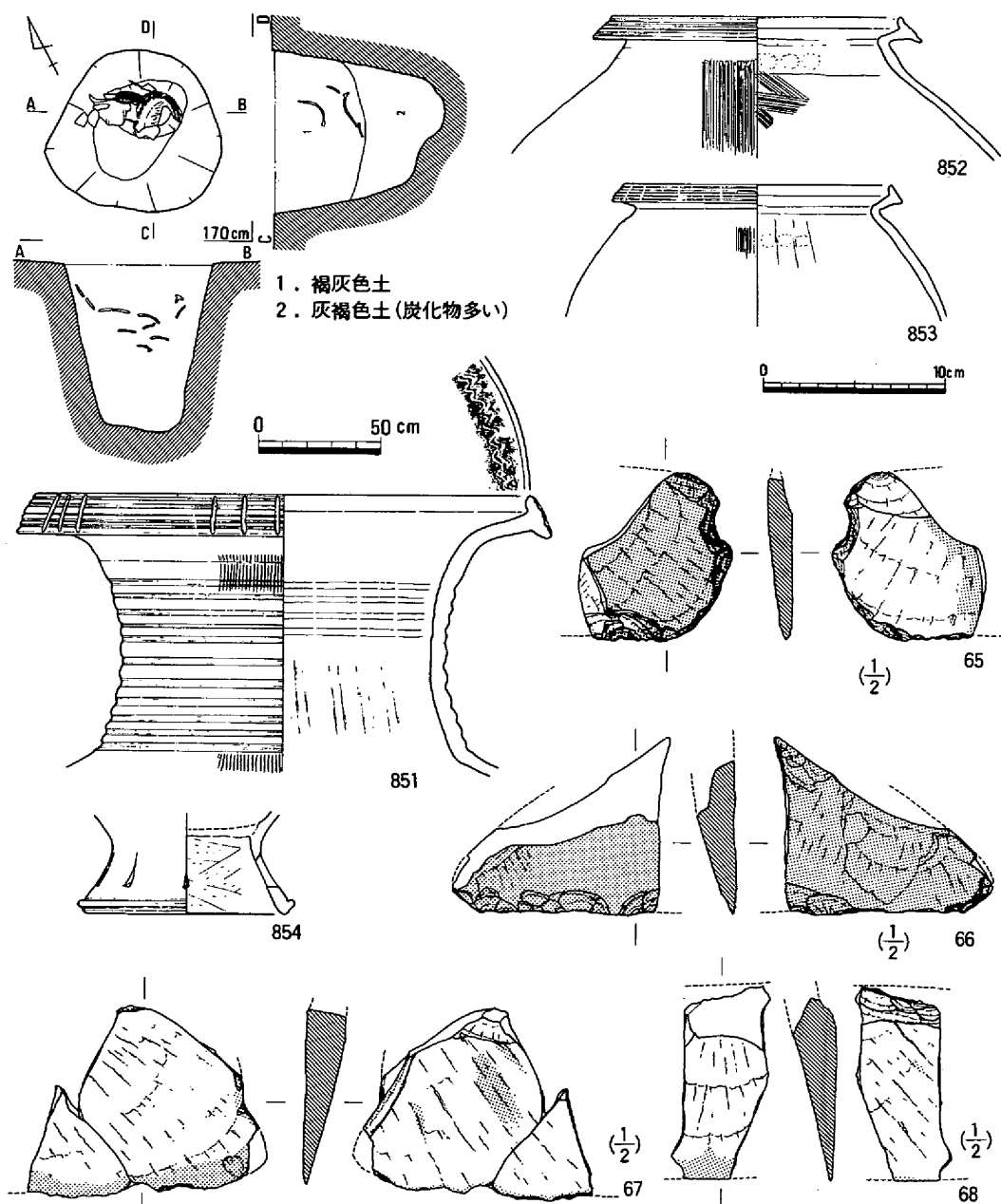
土壌—110（第199図）

301—M西隅に位置し、不整円形を呈す。長径73cm・短径69cm・深さ59cmを測る。壙壁は急



第198図 土壌—109 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

峻で、V字形を呈し、墳底は約27cmと狭い。2層では多量の炭化物が堆積していた。当土墳は、当初、柱穴であった可能性が推測される。遺物は、ほとんど1層に包含され、長頸壺など大型の土器片等851～854が一括投棄された状況で出土している。伴出遺物として、サヌカイト製石器4点65～68が出土している。いずれも石庖丁片であろう。時期は百・中・Ⅲの中相に比定できる。

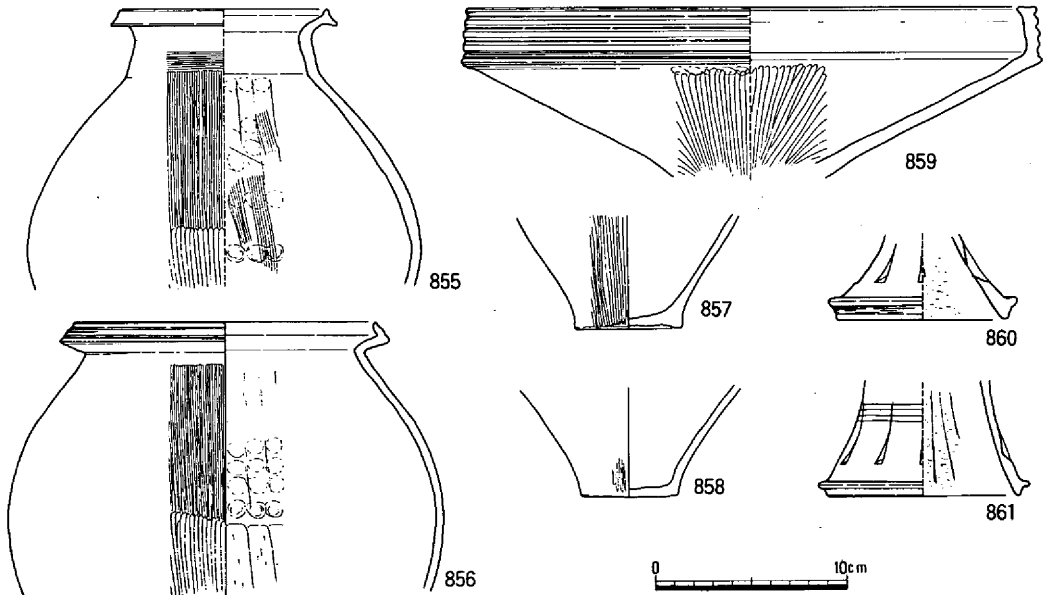
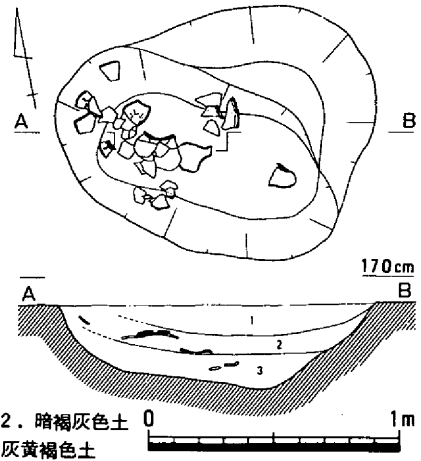


第199図 土墳—110 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

土壌—111（第200図）

301—Mの中央に位置する。長径119cm・短径106cm・最大深35cmを測り、不整円形を呈する。土壌の北東部分は浅く、緩やかな傾斜面をもち、そこから段をなして落ちこんでいる。堆積土は3層に分割され、基本的にレンズ状の堆積形態をとる。遺物はかなり多く西北隅より流入した状況で出土しているが、大型の破片がいか所に集中して見られるということとはなかった。時期は出土遺物から判断して、百・中・Ⅲの中相に比定できる。

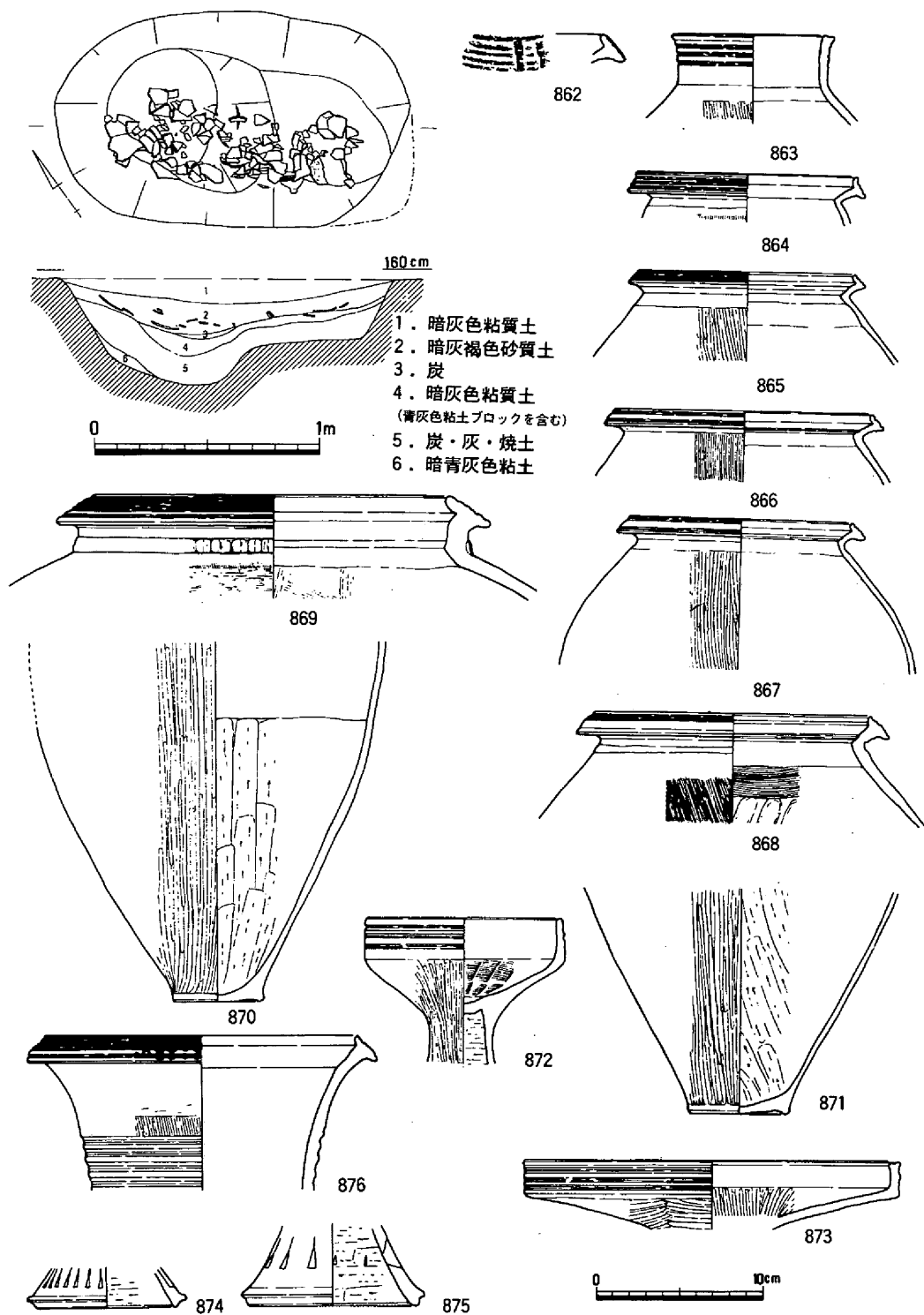
（渡辺）



第200図 土壌—111 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

土壌—112（第201図）

この土壌は301—Mで井戸—7の北側に一部切り合って検出された。平面形は、長さ160cm・幅100cmを測り、長楕円形を呈する。土壌は、2段に掘られている。深さ約30cmに第1底面があり、さらに、片側半分に深く掘られ、最深部は検出面から約50cmを測る。土壌内は、2層に多量の土器が検出され、さらに5層には、炭・灰・焼土が非常に推積していた。また、3層にも炭層がみつめられた。出土遺物は、多量の土器が検出されたが、図示出来るものは少なく破



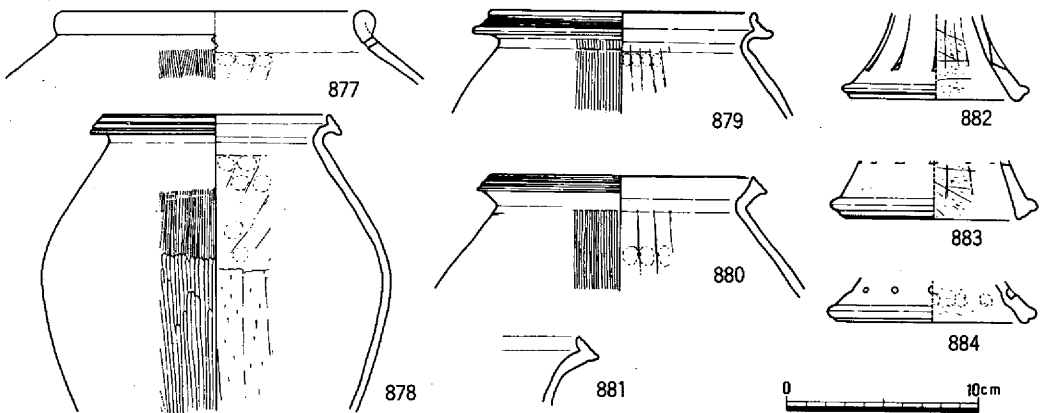
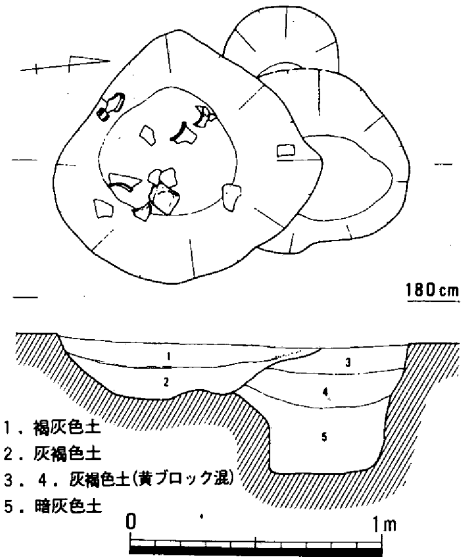
第201図 土壌-112 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

片がほとんどであった。これらの土器は、百・中・Ⅲの中相の特徴を示すものである。

(中野)

土壌—113 (第202図)

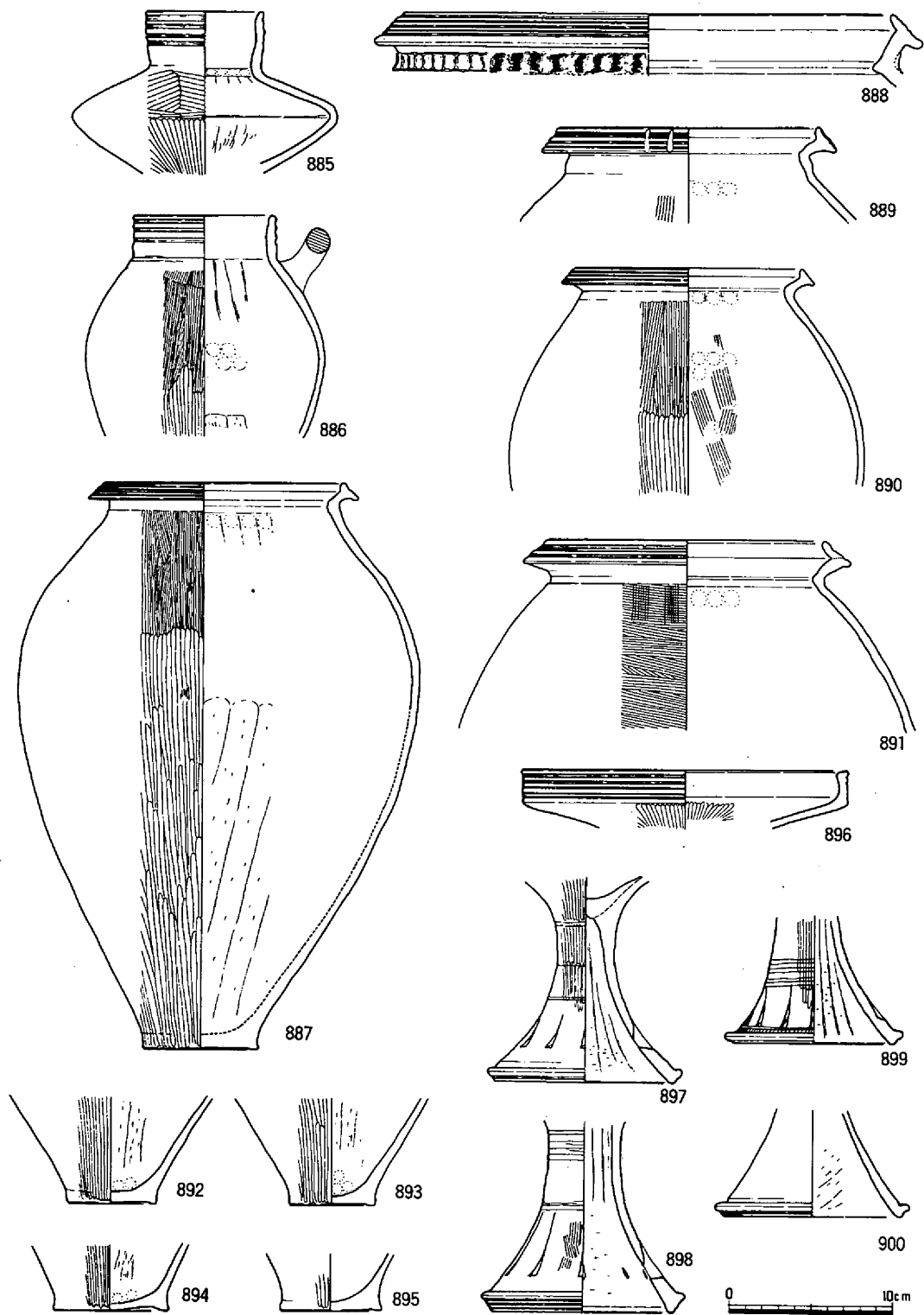
301—M中央に位置し、2つの柱穴を切った状態で検出したものである。長径105cm・短径100cm・深さ25cmを測り、不整円形を呈する。塙壁は緩やかで、若干、起伏を有する底面に移行する。堆積土は、いずれも炭・焼土を包含し、2層においては、その下層部分に顕著であった。遺物は少なく、散在した状態で出土しており、その内から、類例の少ない、玉縁口縁を有する甕形土器片877を検出している。なお、土壌—96でも出土している。時期は、一部、新しい時期の土器片が流れ込んでいたが、百・中・Ⅲの中相と考える。



第202図 土壌—113 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

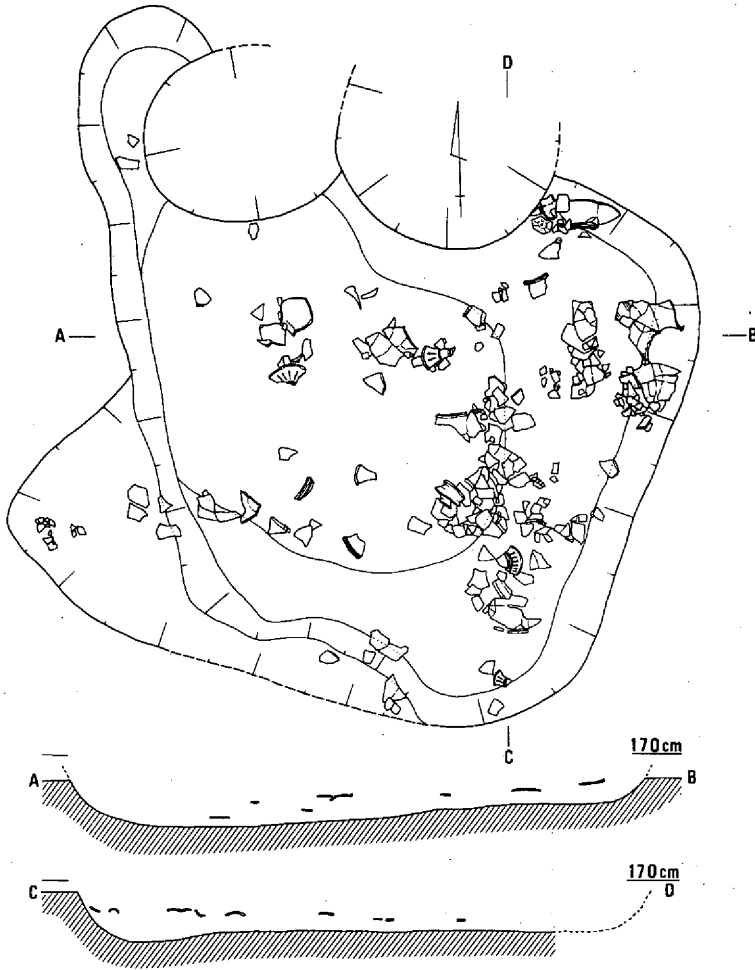
土壌—114 (第203・204図)

301—Mの中央に位置し、他の土壌、柱穴状土壌と切り合い関係にあり、新旧関係は当土壌の方が古いと考えているが断定できない。長径約235cm・短径約230cm・深さ15cm前後を測り、不整形な浅い皿状の広々とした土壌である。北西・南西隅に、別の土壌かと想われるような突出部をもつが、遺物の落ちこみ状況や、同一個体の破片等により、同一の塙内と考える。遺物は全体的に散布するが、やや東半に集中し、甕形土器をはじめ、かなり大型の破片も散見して



第203図 土壙—114 出土遺物

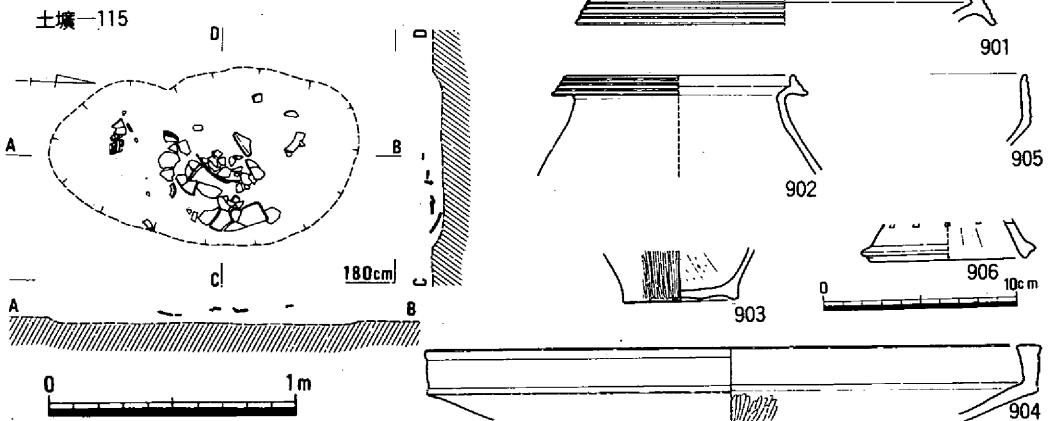
土壌—114



いる。時期は出土遺物より判断して、百・中・Ⅲの中相に比定できる。

土壌—115 (第204図)

301—M中央部 西辺に位置し、土壌—114に隣接する。推定長径125cm・推定短径70cmを測り、不整楕円形を呈すると考えられるが判然としない。遺構図の破線は、充分、検出が為し得なかったことを意図し、炭・焼土の分布を基調とした範囲を示すものである。遺物は中央部分に押し潰された状態



第204図 土壌—114・115 ($\frac{1}{30}$)・土壌—115 出土遺物

で検出され、高杯・甕の破片が集中していた。遺物の出土状況から判断して、現検出面よりも高い位置からの掘り込みが予想される。また、遺構の性格等は不明である。以上、時期は出土遺物より判断して、百・中・Ⅲの中相の範疇に入ると考えられる。

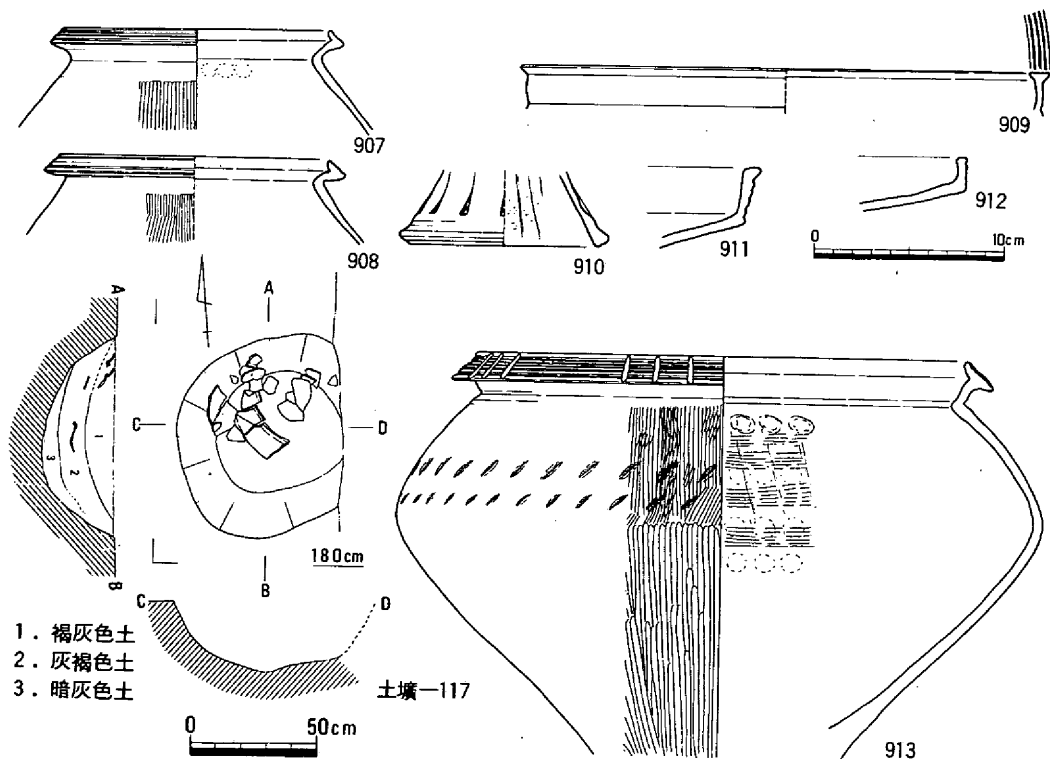
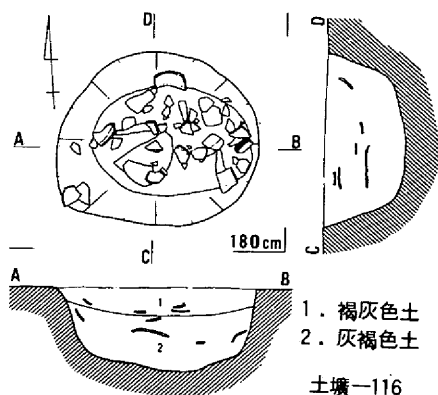
土壌—116（第205図）

301—M中央東端に位置し、土壌—117東に隣接する土壌である。平面形態は不整円形を呈し長径80cm・短径70cm・深さ84cmを測る。塋壁はかなり急峻で、皿状の塋底に移行する。推積土は2層に分割され、いずれも炭・焼土を多く含んでいた。遺物は、いずれにも包含されており、壺の底部と考えられる大型の破片をはじめとして、かなりの遺物の一括投棄された状態が窺え、ゴミ捨て穴の性格をもつと考えられる。

時期は出土遺物より考えて、百・中・Ⅲの中相に比定できる。

土壌—117（第205図）

301—Mの中央、調査区の東端に位置し、土壌—

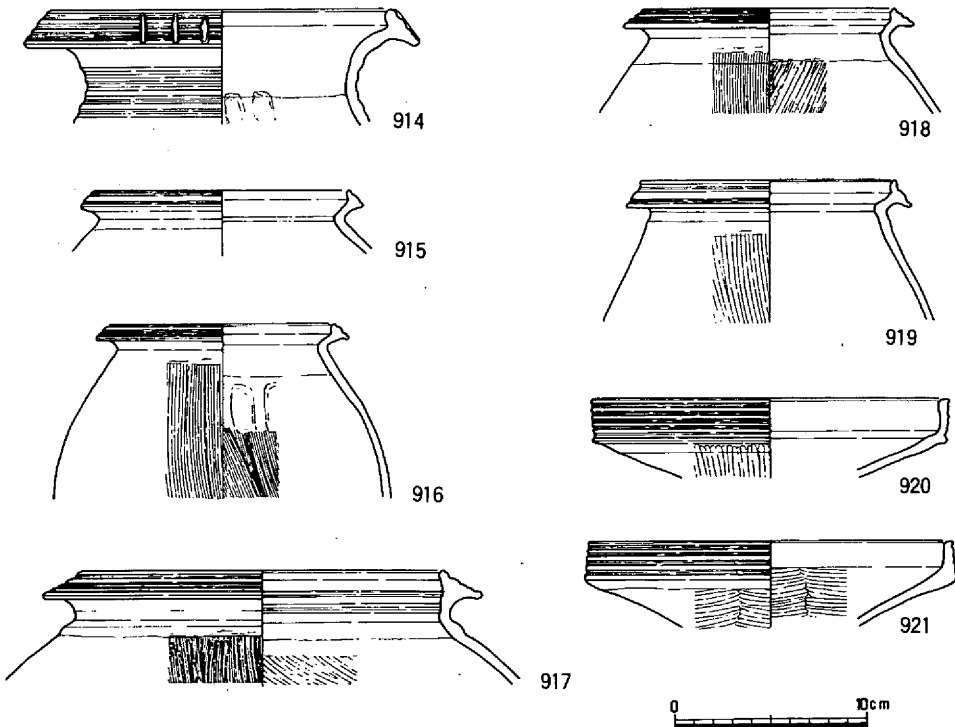
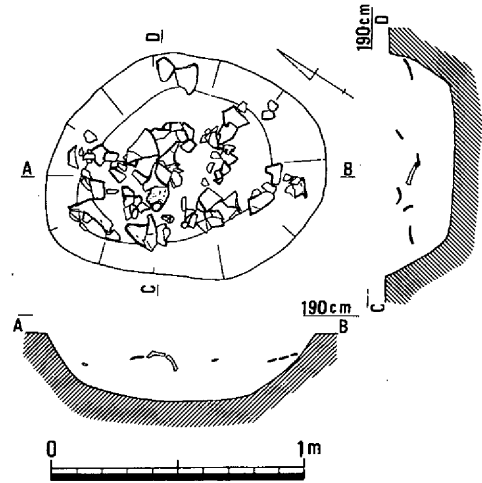


第205図 土壌—116・117 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

116の西に隣接している。一部、東側が側溝により削られているが、ほぼ完全な状態で検出できた。円形プランを呈し、直径約75cmを測る。堆積層は基本的に、中央へ厚く、縁辺部に薄い状況を呈すが、1層はやや北に偏っている。1・2層は、ほとんど均質で褐灰色土であり、炭・焼土をかなり多く含んでいた。3層は地山ブロック土の混入した暗灰色土である。遺物は、北側から流れこんだ様相を示し、鉢型土器片がほぼ一個体分、底に集中した状態で出土している。時期は出土遺物より、百・中・皿の中相に比定できる。(渡辺)

土壙—118 (第206図)

この土壙は、301—Mの土壙—112の東側に接して検出された。長軸120cm・短軸90cmの楕円形を呈する。深さは、約25cmを測る。土壙内には、底から約15cm程浮いた状態で、土器が集積し層をなしていた。出土



第206図 土壙—118 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

した土器は、復原出来るものは少なく、破片のみであった。これらの土器は百・中・Ⅲの中相の特徴を示す。

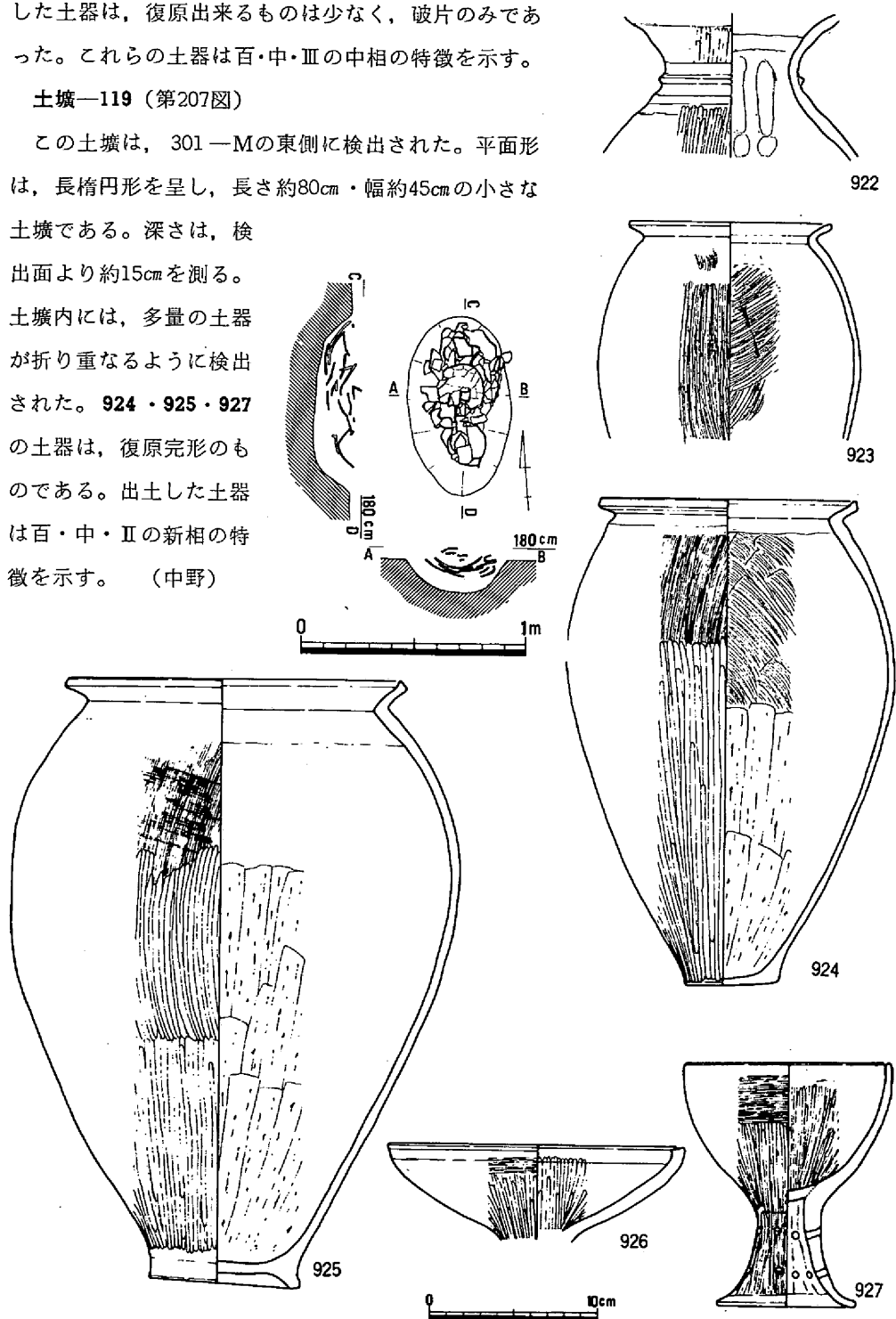
土壌-119 (第207図)

この土壌は、301-Mの東側に検出された。平面形は、長楕円形を呈し、長さ約80cm・幅約45cmの小さな土壌である。深さは、検

出面より約15cmを測る。

土壌内には、多量の土器が折り重なるように検出された。924・925・927

の土器は、復原完形のものである。出土した土器は百・中・Ⅱの新相の特徴を示す。(中野)



第207図 土壌-119 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

(5) 溝

溝—28

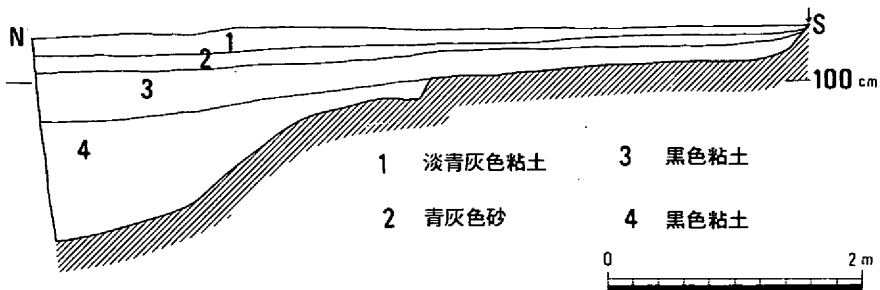
398—M北部において検出された、東西に走る溝で幅30cm・深さ20cmを測り、断面は鈍いV字型を呈する、底のレベルは海拔90cmである。流走方向は検出範囲がわずか350cmであり、また遺構が樋門の工事で壊されている為判然としない。この溝は下の土壌—72を切っている。出土遺物は土壌—72との混入があり、確実に溝の遺物として図示できるものはなかった。時期は百・中・Ⅱの新相に比定される。

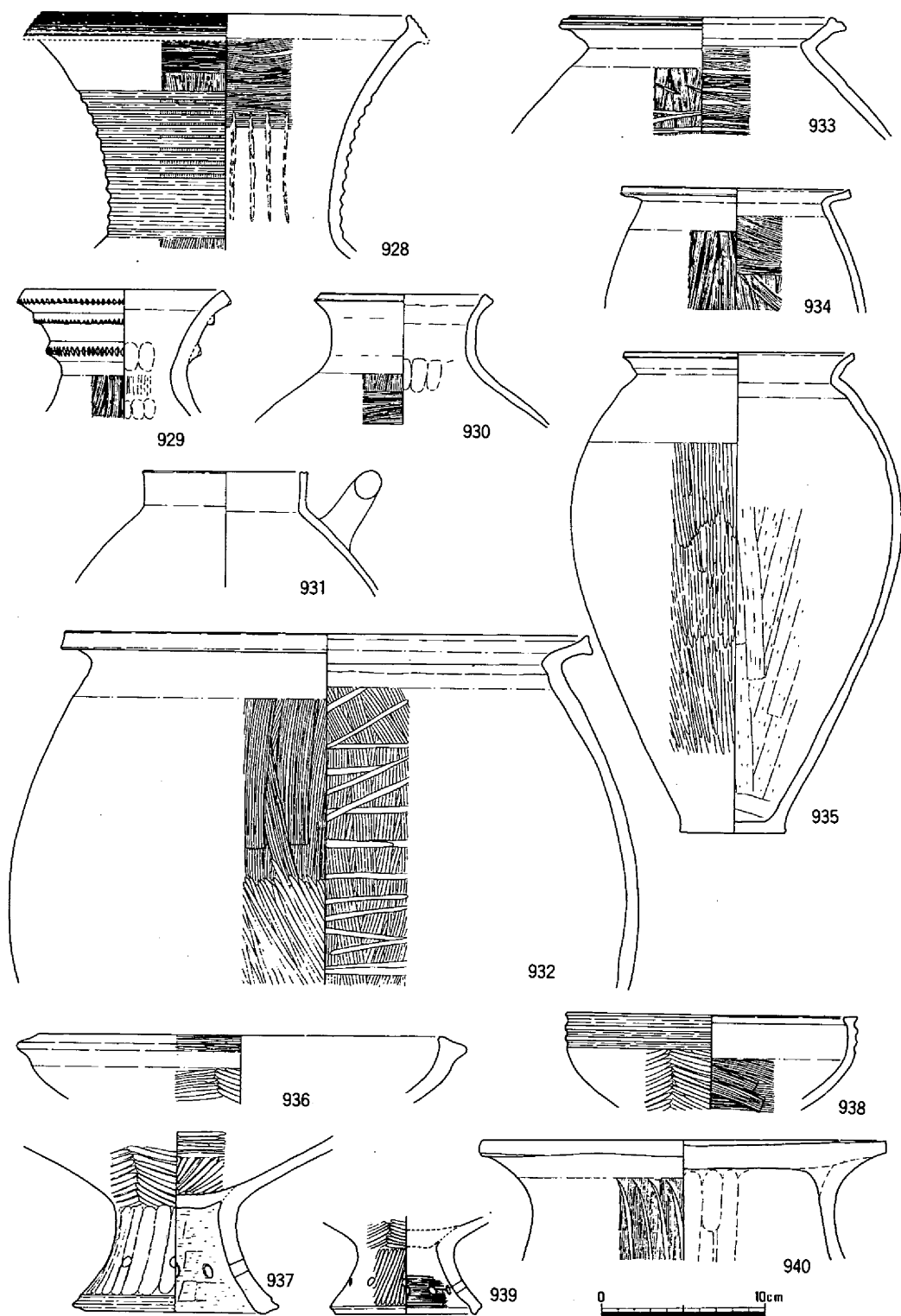
溝—29

398—Mの中央部、調査区南東端において検出された北東—南西方向に流走する溝が想定される遺構で、北側に平行してわずかに底の確認された溝状遺構が流走している。南東端は調査区外におよんでいるが、幅約90cmを測る。深さ20cmで底のレベルは海拔110cmである。断面は鈍い「U」字状を呈している。流走方向は検出部分が僅かである為不明である。出土遺物は土器細片がみられるのみである。時期は百・中・Ⅱの新相に比定される。(内藤)

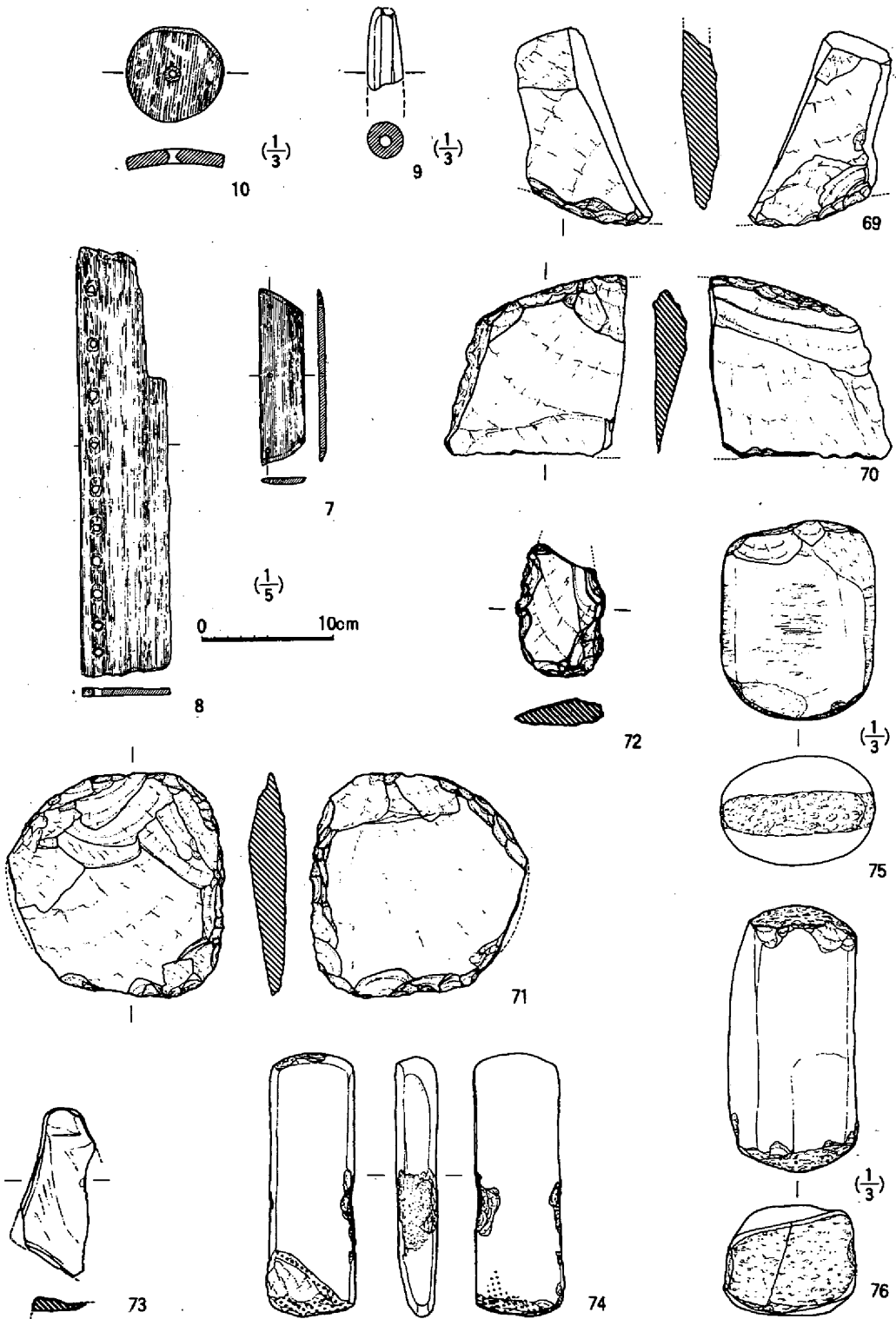
溝—30 (第208～210図)

399—Mの北端に位置する幅1,350cmの大溝である。溝は西南西から東北東に流れて行くようである。溝の中央部を東西方向に調査中現在使用されている直径50cmほどの上水道管が埋設されていて危険なため、全面掘削することができず、横断トレンチと中央部坪掘りによる調査と機械力による遺物の収集を行った。この結果、溝の深さは、検出面から160cmを測り最も深い部分は中央よりかなり北側に片寄っていることが判明した。また溝底の海拔高は—25cmを測る。埋積土は、4層に分けられ、遺物は3・4層に集中し、北方から投げ捨てられた状態であった。出土遺物には百・中・Ⅱ期の大量の土器片と石器・木器・獣骨・種子等が見られる。その他に土錘・紡錘車がある。土器については図示したのは代表的な形態のものだけにとどめた。石器は削器・敲石等。木器は一方に連続した穴を穿ったもの。獣骨は鹿・猪等。種子はモモ等。この溝の廃絶した時期は、出土土器の形式から百・中・Ⅱの新相に比定したい。

第208図 溝—30断面図 ($\frac{1}{60}$)



第209図 溝-30出土遺物(1)



第210図 溝-30出土遺物(2) ($\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{3} \cdot \frac{1}{5}$)

溝—31 (第 211 図)

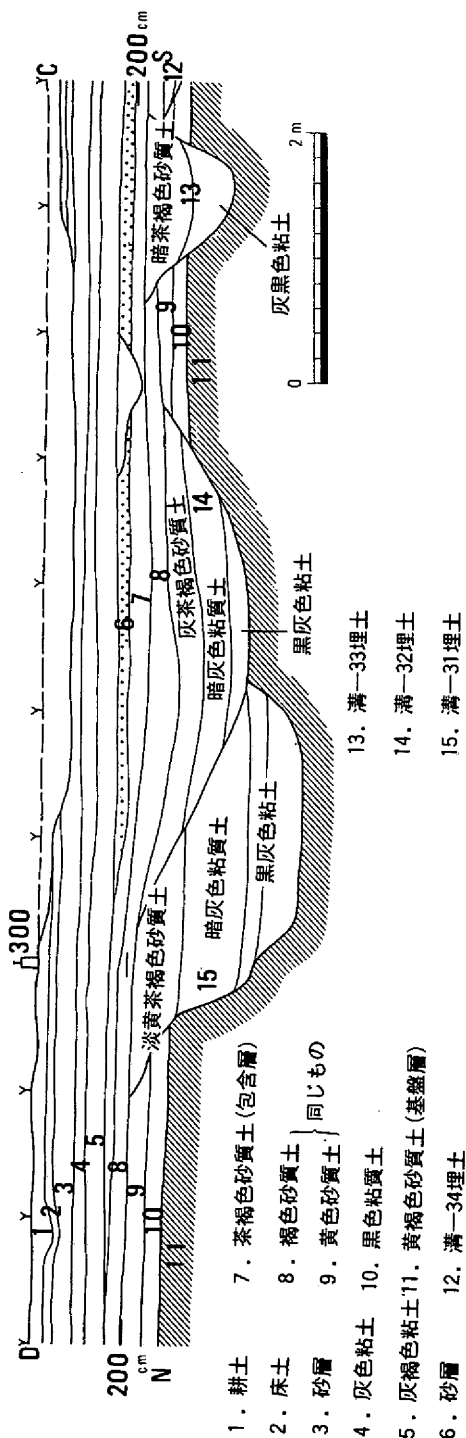
300—Mの北端に位置する西南西から東北東へ流走する幅 400 cm の比較的大きな溝で、溝—30とは約10m離れて平行の関係にあり、溝—32により南半分を切られている。深さ 130 cm、底部は比較的平坦で、下幅は 150 cm・溝底の海拔高は70cmを測り、所々底面より50cmほど深く掘れた所が見える。また北岸には直径10~15cmの円形の土坑が数個列状に並んで検出でき、これは護岸の杭痕跡と考えることができる。埋積土は3層に分けられるが、遺物は皆無。土層観察から溝—32より古いものと考えられる。

溝—32 (第211~214図)

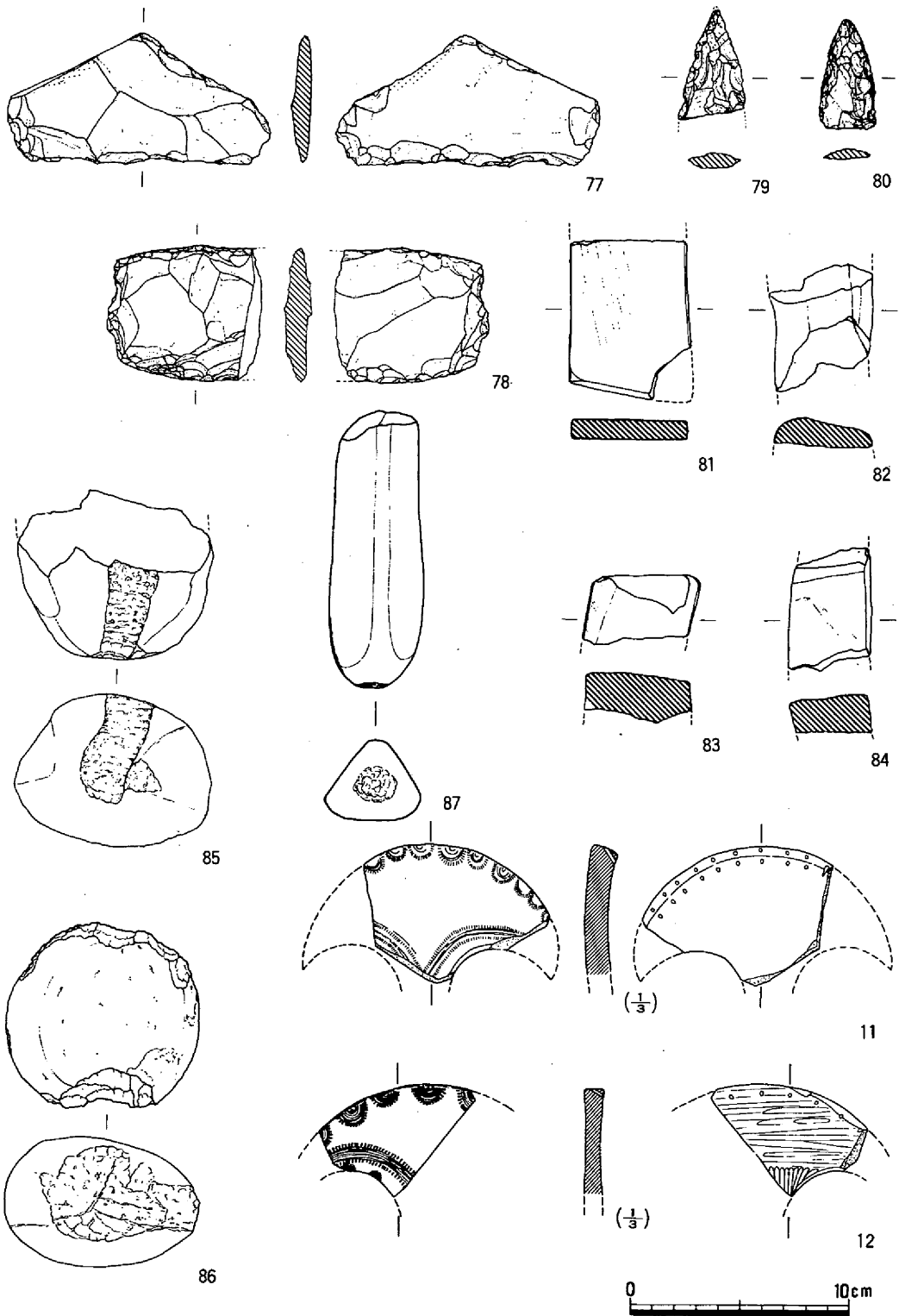
溝—31の廃絶後、やや南側に寄って掘削された幅 400 cm・深さ60cmの比較的低く幅広い大溝である。溝底の海拔高は 110 cm を測る。埋積土は3層で上から灰茶褐色砂質土・暗灰色粘質土・黒灰色粘土となる。遺物はどの層からも出土し、時期の差は認められない。土器は、壺・甕・高杯・鉢・蓋等、土製品では分銅型土製品、石器では石鏃・石庖丁・砥石・敲石・石錘等が見える。土器から考えてこの溝の廃絶された時期は、百・中・Ⅲの中相に比定できる。

溝—33 (第211・215図)

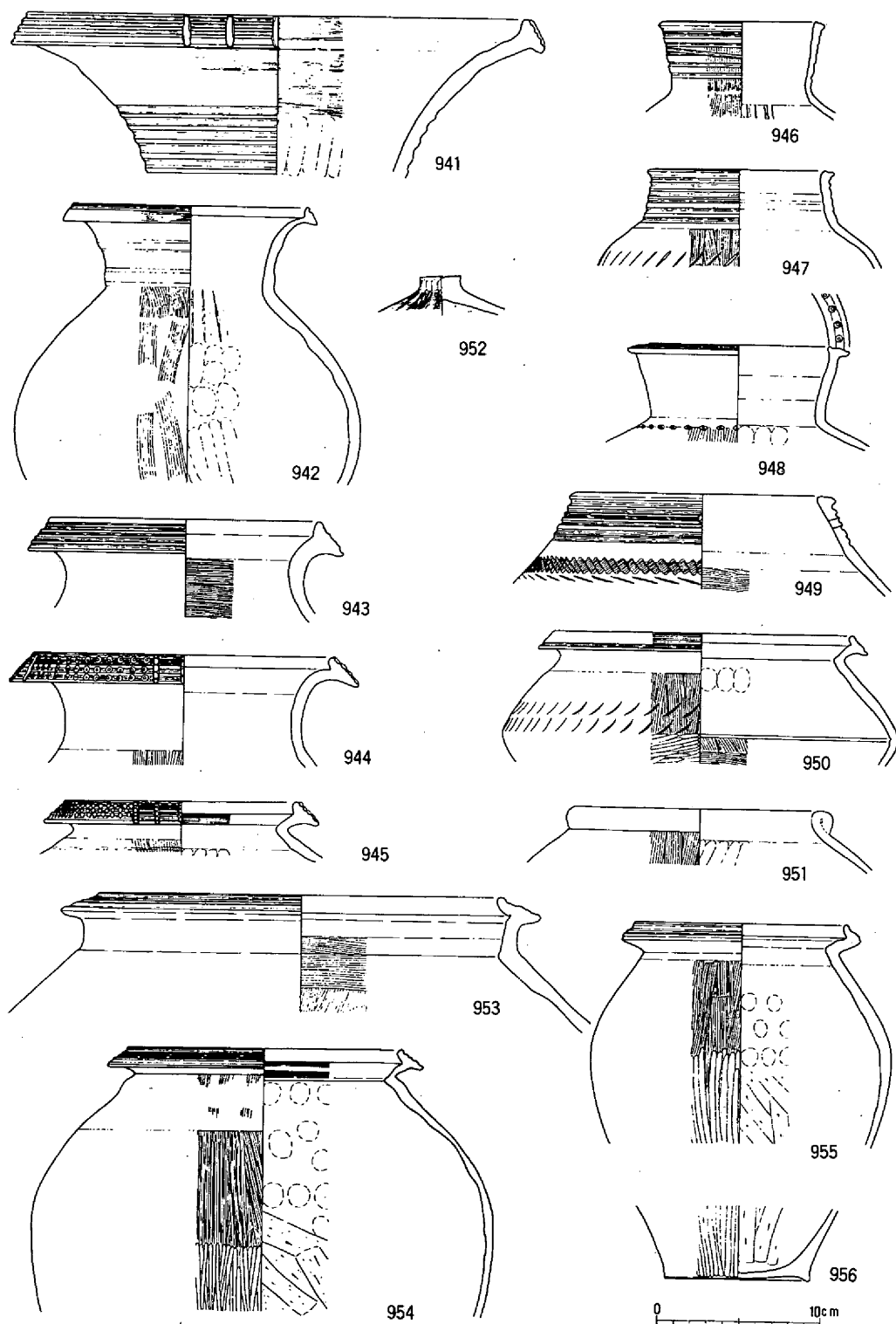
溝—31の 1.5 m 南に位置してほとんどそれに平行する溝である。長さ800cm・幅120 cm・深さ50cm、溝底は海拔 120 cm を測る。少しS字状に蛇行し、断面形はV字状を呈する。溝—34と竪穴式住居—16を切っている。埋積土は2層に分けることができるが、



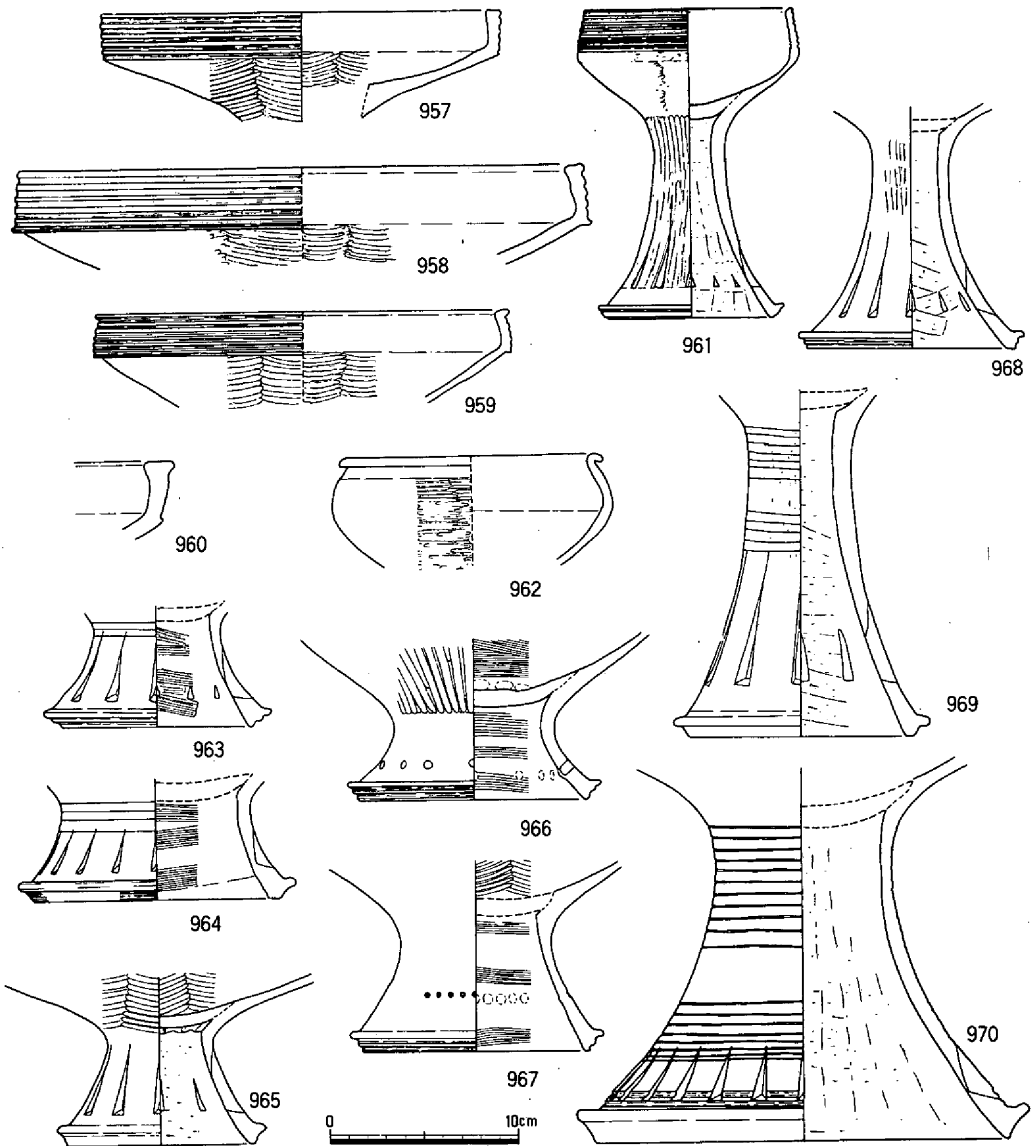
第211図 溝31~34 土層断面図 (1/60)



第212図 溝-32出土遺物(1) ($\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{3}$)



第213図 溝-32出土遺物 (2)

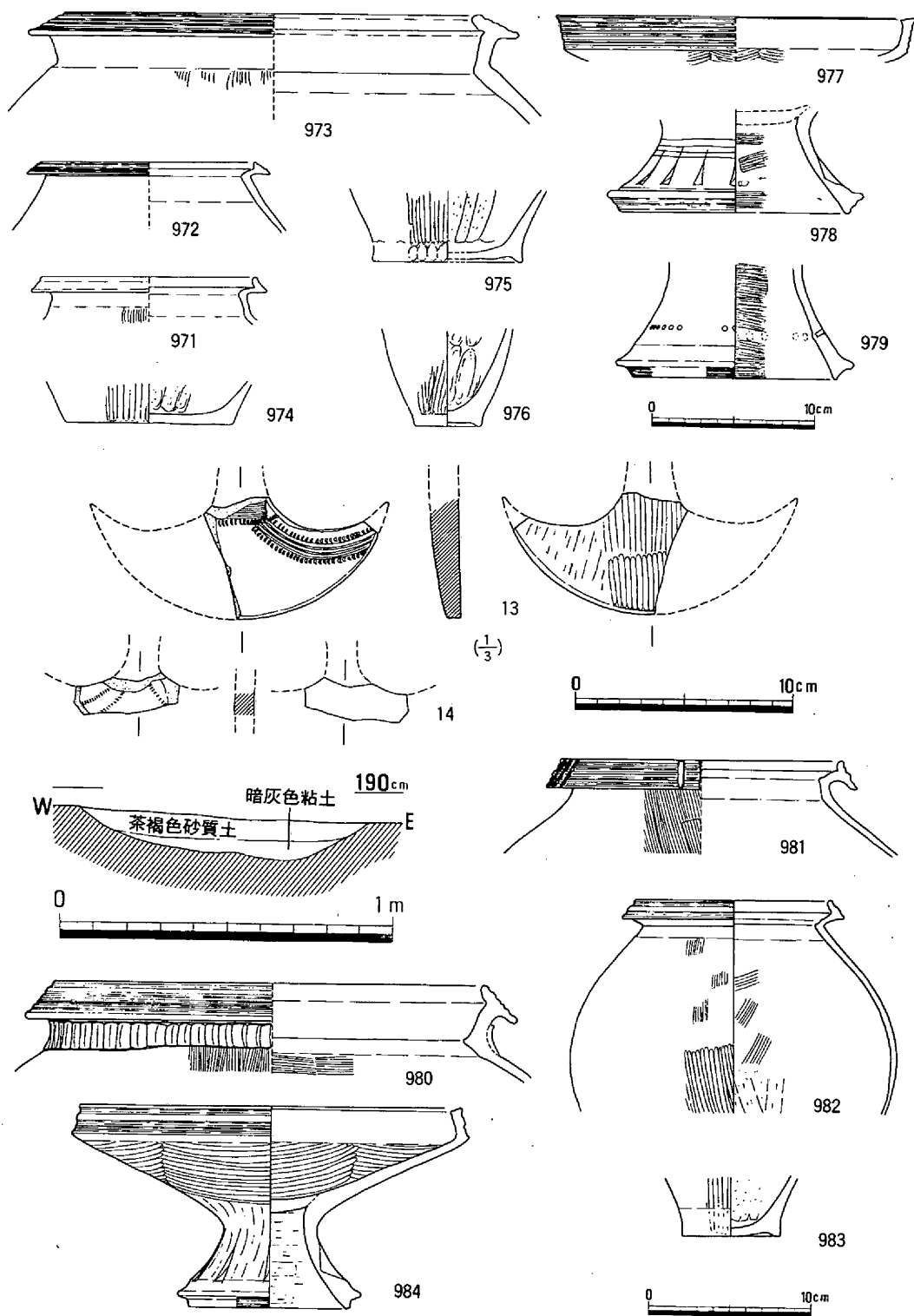


第214図 溝—32出土遺物（3）

出土遺物には時期差は認められない。出土遺物には甕・高杯などの土器片と分銅型土製品の破片2個と石鏃などの石器が含まれる。これらの遺物からこの溝の廃絶時期は、百・中・Ⅲの中相に比定することができる。

溝—34（第215・216図）

300—Mと301—Mの中央部を、南—北方向にいくらかS字状に蛇行する溝である。検出最大長は300cm・同最大幅170cm・最深12cm・溝底の海拔高170cmを測る。断面形は皿形を呈する。そしてこの溝の精査によって、2本の溝があまり時間差がなく存在していたことが判明した。

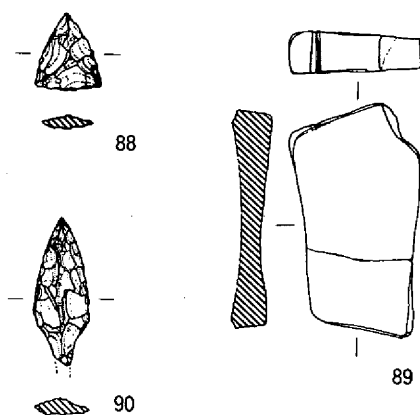


第215図 溝-34断面図($\frac{1}{20}$)・溝-33・34出土遺物

北部では溝の底部が中央に稜線をもって2条に分かれ、南部でも2股に分岐している。埋積土は上下2層に分層することができ、遺物は上層から少量出土した。出土土器からこの溝の廃絶された時期は、百・中・Ⅲの中相であろう。

溝—35 (第216図)

301—Mの北端に位置する 東南東から西北西に流走する溝である。溝—31・32・33等と平行関係にある。検出時の最大長 860 cm・最



第216図 溝34・35出土遺物 ($\frac{1}{2}$)

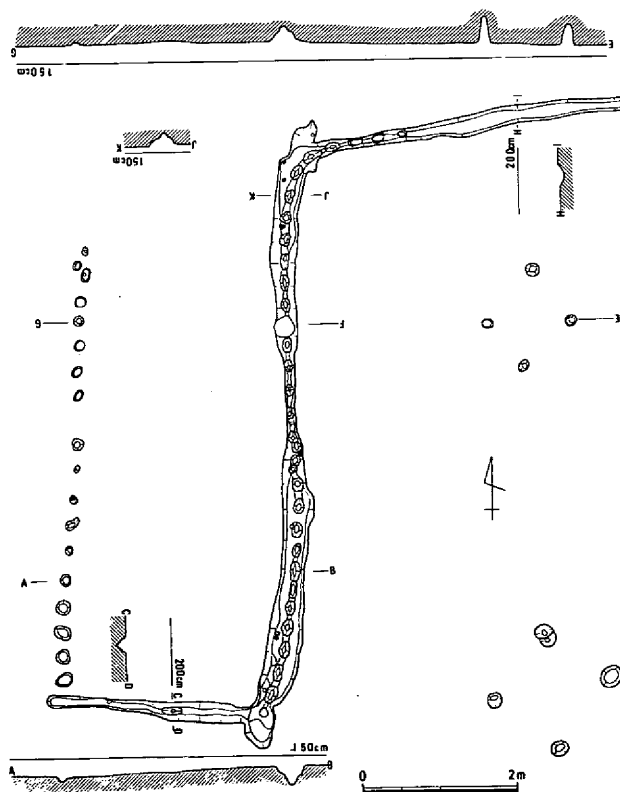
大幅20cm・最大深8cm・溝底の海拔高175cmを測る。遺物は全く出土していない。百・中・Ⅲの中相の時期の土壌—91を切っていたり、同期の土壌—92に切られている。すなわちこの溝の使用された時期は、百・中・Ⅲの中相の内の短い期間であったと言える。(浅倉)

(6) その他の遺構・遺物

溝状遺構 (第217図)

304P~Qにかけて検出されたものである。幅146~162cmを測り、南側から西側そして北側にかけて溝状となり東側がピット状となっている。西側においては、段状に掘られているが個々に独立しピット状となっている。東側についても、西側と同様の構造を有していたことが考えられ、削平により溝部分が消失したものとするのが妥当であろう。この構造は北側においても認められている。

このようなことから方形に囲む柵状の構造が存在したことが推測される。東にのびる溝はしだいに立ち上がってゆき消失す



第217図 溝状遺構 ($\frac{1}{100}$)

る。時期は、百・中・Ⅱの破片が出土している。

なお、この溝状遺構の東側に2棟の建物が存在するが、北側については、建物としての可能性はあるが南側については困難である。時期は、出土遺物はなく不明である。（下澤）

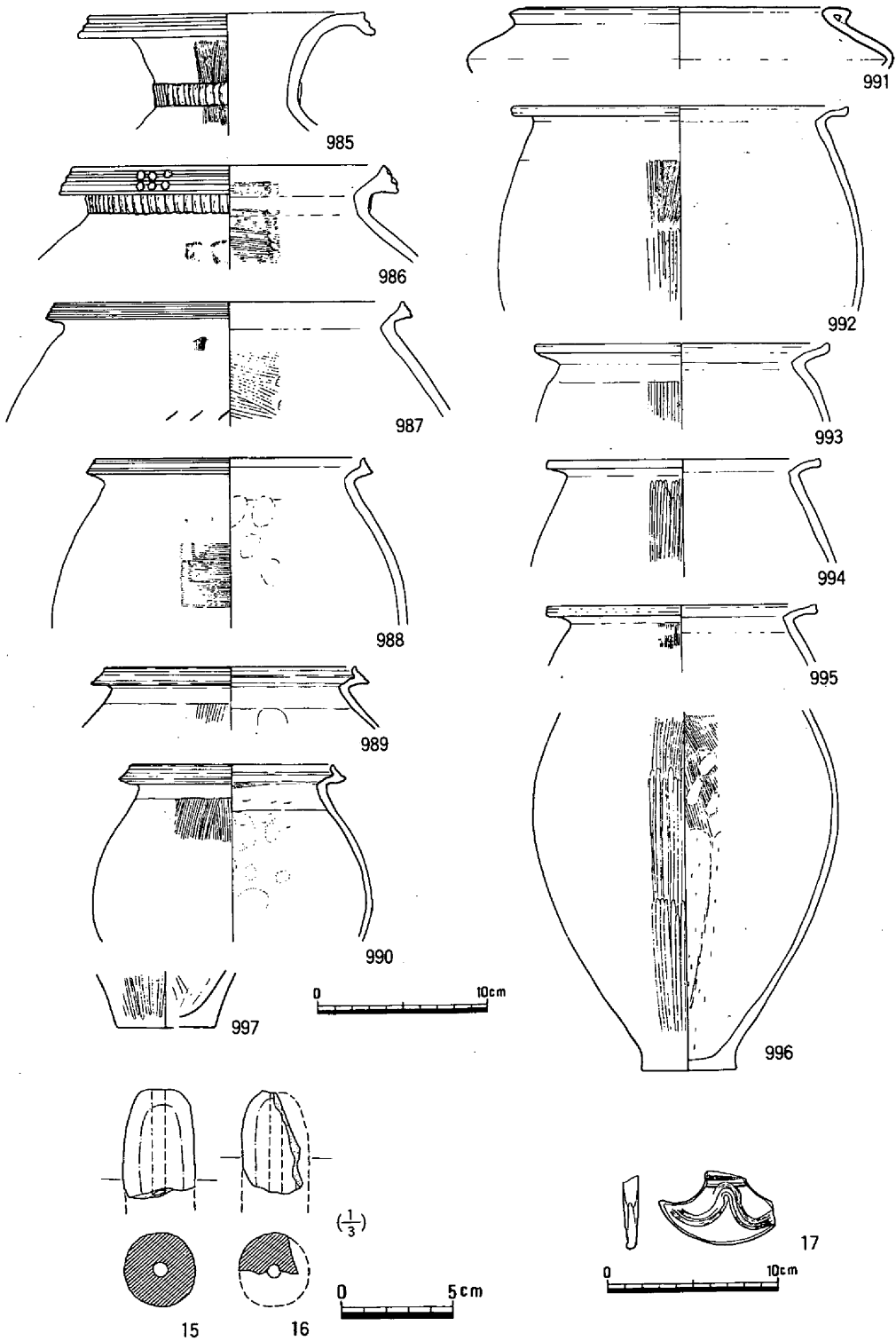
その他の遺構・遺物

当調査区においては、この他におびただしい遺構の検出、遺物の出土がある。特に中期の遺構が集中していた五反田樋門・五反田樋門導入水路の調査では調査区の幅が狭く、しかも細切れの調査を強いられたり、現在の用水路が接しているなどして調査不能になった部分もあり、柱痕跡や柱痕・柱材を伴う柱穴をいくつも確認しながら、建物としてまとめ得なかった土壌がいくつかある。397—M北部から中央部にかけて、また、397—Mの南端部においては直径50cm内外の柱痕あるいは柱痕を考えられるピットがそれぞれ数個ずつ確認されている。いずれも時期は百・中・Ⅱの新相と考えられるものである。また、301—Mにおいても非常に多くの柱痕や柱痕跡を伴う柱穴が検出されたが、建物—20の1棟の他にまとまるものはなかった。特に、この地区では土壌—92～94・103等直径1m前後で深さ80cm程の、建物—20の柱穴と同規模のものが確認されている。時期は、百・中・Ⅲの中相と考えられる。

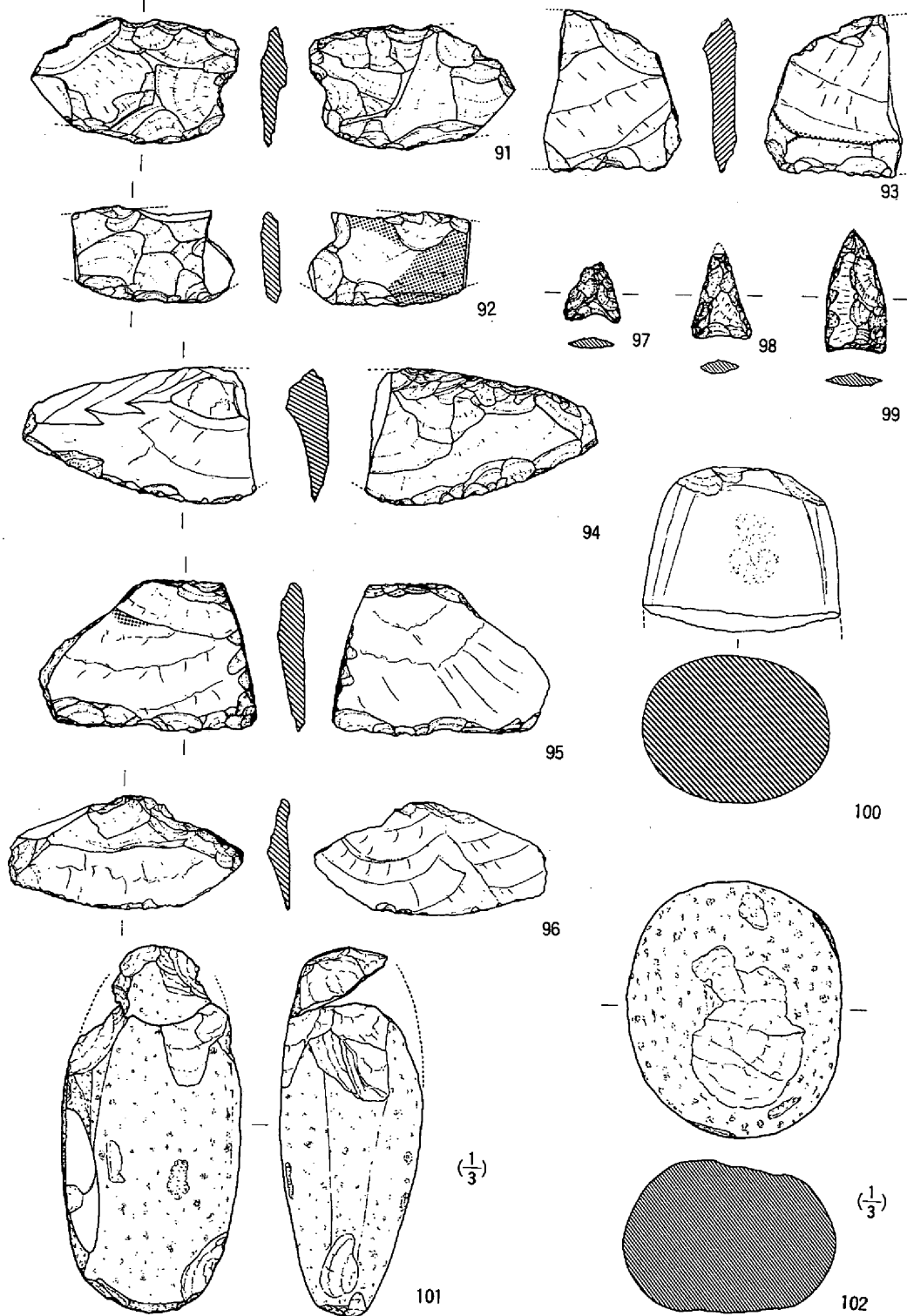
397—M南部の土壌—65からは土器等の他に米・桃等炭化した種子が出土している。また300—M南部の土壌—87からは非常に多量の緑豆等の炭化種子が出土した他、P—96・P—97からもそれぞれ2・30粒、5・60粒の炭化した緑豆が出土している。時期は土壌—65が百・中・Ⅱの新相である他は、百・中・Ⅲの中相と考えられる。

第218図はその他の土壌・包含層等から出土した土器・土製品で、985～987は396—M南端の土壌—45から、992・993は同じくP—36から、994・995は397—M中央の土壌—58、996は土壌—54からそれぞれ出土したものである。また989は301—M北部の土壌—94、990・997は溝—34とも考えられる土壌—97から出土している。988・991は397—Mで出土した土器片である。また、15・16は300—Mから出土した土錘、17は397—M北部から出土した分銅形土製品の下半部片で、胎土は長石・石英粒を多く含む微砂で、内外面共に灰褐色を呈している。また端部には丹塗りが一部残存している。焼成は良好である。

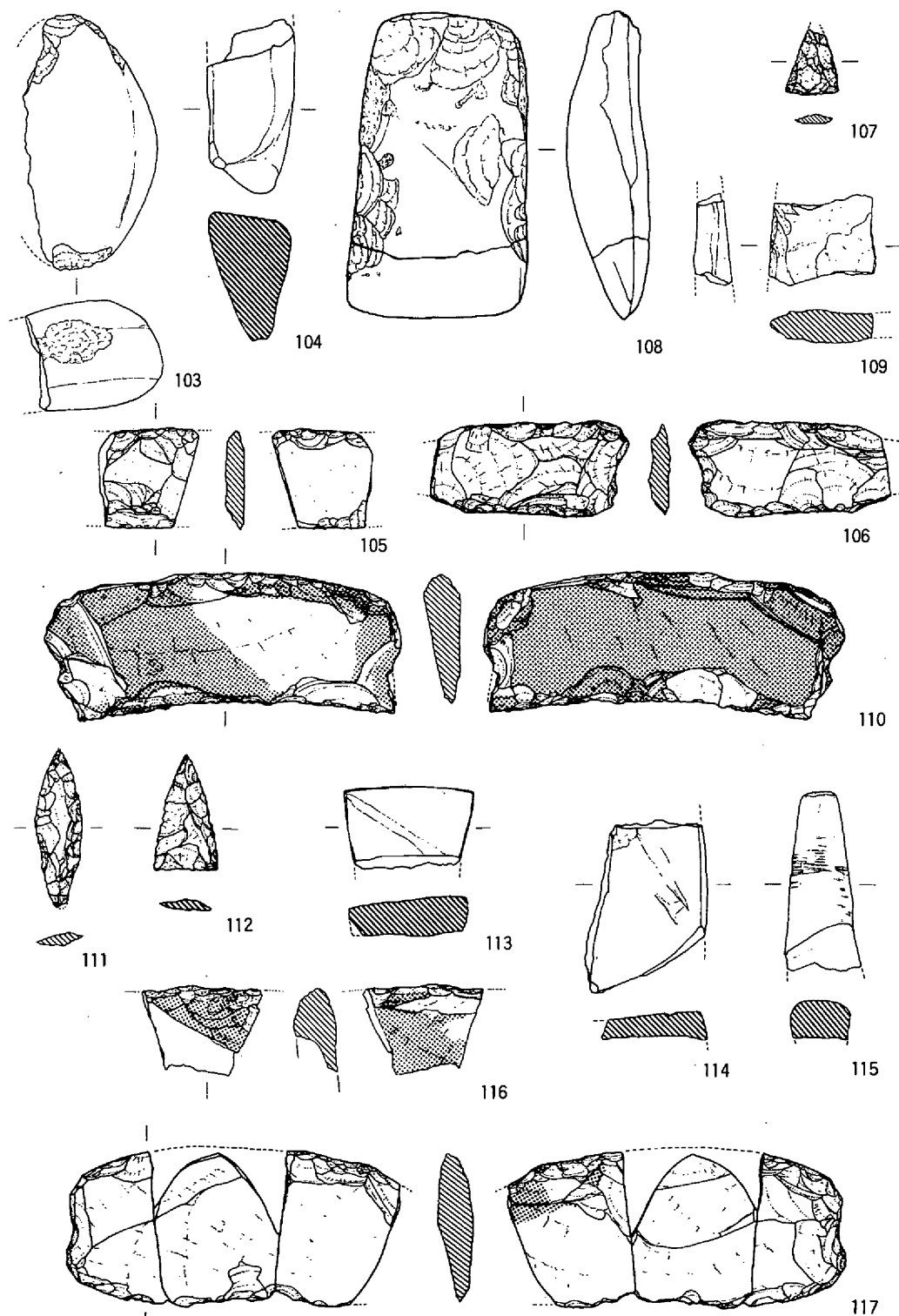
第219～221図はその他の遺構・包含層等から出土した石製品である。91～102・104は396・397—Mから出土したもので、101・102の石斧未製品は第218図996の土器と伴に土壌—54から出土したものである。また104の砥石はP—2から出土したものである。105～109は398—Mから出土したもので、108は第176図の石庖丁51～53とともに土壌—75から出土したものである。110～115は300—Mおよび301—M北半において出土したもので、112は建物—20、Ⅱの埋土中から出土したものである。116～130は、301—M南半および302—Mから出土したものである。131は304—M、132は303—Pの包含層から出土している。また133は305—Lから出土している。（内藤）



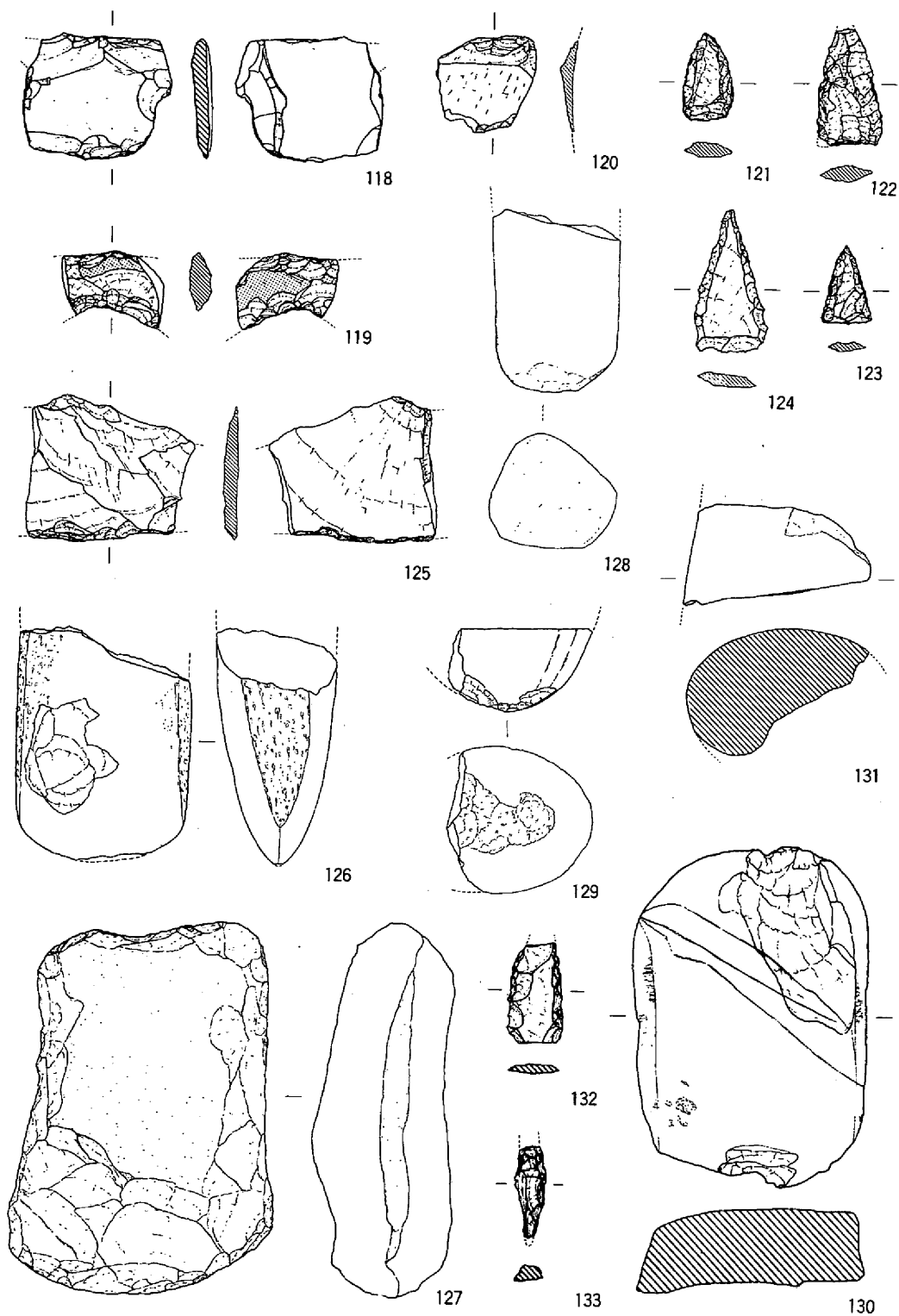
第218図 その他の遺物(1)



第219図 その他の遺物(2) ($\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{3}$)



第220図 その他の遺物(3) ($\frac{1}{2}$)



第221図 その他の遺物(4) ($\frac{1}{2}$)

表一17 弥生時代前・中期土器観察表

弥生時代前期

標図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
包含層出土遺物 (第151図)									
635	甕形土器	—	—	—		乳 褐 色	石英・長石粒1~4mmを含む	良 好	
636	"	—	—	—		褐 色	白色小砂粒	"	
637	"	—	—	—		"	"	"	
638	"	—	—	—		暗 褐 色	"	"	
639	"	—	—	—		褐 色	"	"	
640	"	—	—	—		淡 褐 色	白色小砂粒雲母粒	"	
641	"	—	—	—		乳 褐 色	白色小砂粒	"	
642	"	—	—	—		乳 灰 色	"	"	
643	"	—	—	—		"	"	"	
644	"	—	—	—	・沈線より下位は縦ハケメ。	橙 褐 色	"	"	
645	"	—	—	—		暗 褐 色	"	"	・胴部片。
646	"	—	—	—		"	"	"	
647	"	—	—	—	・内面ヘラミガキ。	"	"	"	
648	"	—	—	—		淡 褐 色	"	"	
649	"	—	—	—		褐 色	"	"	
650 652	壺形土器	—	—	—	・口縁部は、大きく外反し端部を上方につまみ出している。頸部、肩部には、数条の隆満沈線を施す。	茶 褐 色 茶 乳 褐 色	1~2mm前後の砂粒を多く含む	良 好	
653 654	"	—	7.2 8.0	—	・外面はヘラミガキ。内面ヘラミガキ、ナデで調整。	灰 褐 色 茶 褐 色	"		
655	"	—	8.4	—					
656 658	甕形土器	—	—	—	・口縁は「く」の字状に開くもの(656)逆「く」字のもの(658~662)と、やや内湾し両側に拡張するもの(657)がある。頸部には多量の垂描き沈線を施す。	暗 茶 褐 色 乳 灰 褐 色	1~2mm前後の砂粒を多く含む	良 好	

弥生時代中期

標図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
竪穴式住居 - 15~18 (第153図)									
669	高杯形土器	19.0	—	—	・口縁部外面に5条の凹線文。 ・口縁部ヨコナデ。杯部ヘラミガキ。	外淡茶褐色 内 褐色	1mm以下の砂	普 通	・約1/5以下の破片。
670	壺形土器	20.0	—	—	・口縁部外面に凹線文と棒状浮文と2個の竹管文を刺突した円形浮文。内面に歯描き波状文。	外 暗 褐色 内 赤 褐色	"	"	・極小破片。
671	甕形土器	14.0	—	—	・口縁部外面に2条の凹線文。 ・口縁部ヨコナデ。胴部外面ハケメ、内面ナデ。	外 暗 褐色 内 褐色	0.5mm以下の砂	良 好	"
672	壺形土器	10.0	—	—	・口縁部と頸部ヨコナデ。胴部ハケメ。	淡茶褐色	1mm以下	普 通	・小破片。
673	"	10.0	—	—		茶 褐 色 内 淡 褐色	"	"	・約1/5破片。
674	"	—	—	—	・胴部外面上方ハケメ、下方ヘラミガキ。内面ナデ。	外 淡 褐色 内 白 色	3mm以下の砂粒	良 好	・約1/5破片。
675	台付直口壺形土器	5.6	8.0	20.2	・口縁部外面に4本のヘラ描き沈線文。 ・三角形の切り込みは9か所。 ・口縁部~胴部上方外面ハケメ。胴部下方~胴部外面ヘラミガキ。端部外面ヨコナデ。 ・口縁部内面上方ヨコナデ。下方~胴部中央内面ナデ。胴部内面下方ハケメ。胴内面ヘラミガキ。	外暗茶褐色 内 褐色	2mm以下の砂粒	普 通	・完形品。
676	甕形土器	9.0	—	—	・口縁部は玉縁状、ヨコナデ。 ・胴部外面ヘラミガキ。 ・やや乱れた凹線文。	白 色	精選粘土	"	・珍しい土器。
677 679 680	"	15.0 17.0 13.0	—	—	・口縁部ヨコナデ。胴部外面上半ハケメ、下半ヘラミガキ。同内面上半指圧痕、下半ヘラミガキ。	外 茶 褐色 内 黒 色	1mm以上の砂粒を含む	普 通	・1/5~1/4の破片。内面に炭化物付着。
678	"	16.0	—	—	・凹線文の上に棒状浮文と3段の竹管文。 ・口縁部~胴部上端ヨコナデ。胴部外面ハケメ、内面ナデ。	外 褐 色 内 茶 褐色	"	やや良好	・口縁の約1/5。
681	鉢形土器	16.5	—	—	・刺突文は隆。 ・口縁部ヨコナデ。胴部外面ヘラミガキ、内面上半指頭圧痕、同下半ハケメ。	外淡茶褐色	2mm以下の砂	普 通	・口縁の一部と胴の1/4。
682 683	甕形土器	—	5.0 7.0	—	・胴部外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	黒 褐色 色 灰 褐色 色	1mm以下の砂	"	・底部の約1/5と全部。

百間川兼基遺跡

插图番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
684 685 686	高杯形土器	18.0 19.0 18.0	—	—	◦口縁外面に凹線文。 ◦口縁部ヨコナデ。杯部ヘラミガキ。	暗 褐 色 暗 茶 褐色 灰	2mm以下 0.5mm以下 1mm以下	普通	◦約 $\frac{1}{2}$ 以下の破片。
687 688	"	—	8.0 11.0	—	◦三角形透孔と5本の沈線。 ◦外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	淡 茶 褐色 明 茶 褐色	1mm以下 3mm以下	良好 普通	◦約 $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{2}$ 。
竪穴式住居 - 20 (第156図)									
689	甕形土器	14.6	—	—	◦口縁部は、「く」字状に外反し、端部外面に一本の凹線を施す。内外面ともにヨコナデ。	乳 褐 色	細砂を含む	良好	
690	"	36.3	—	—	◦口縁部は、「く」字状に外反し、端部は肥厚する。内外面ともにヨコナデ。胴部の外面ヨコナデ、内面はナデ。	"	細砂を多く含む	"	
691	高杯形土器	—	—	—	◦杯部の端部はやや広がり、端部上面は平坦である。端部外面は、ヨコナデ、他はヘラミガキ。	茶 褐色～ 暗 褐 色	細砂を含む	"	
井戸 - 7 (第158図)									
692 693 694 695 696	甕形土器	13.4 13.7 19.4	—	—	◦口縁部は、端面をハケ状工具 (692)・凹線 (693, 694) を施し、さらにヨコナデ。体部は、外面をハケメ、内面をヨコナデ、オサエで調整、底部は、上げ底。	淡 黄 褐色	0.5mm以下の砂粒を含む	良好	
697 698 699 700 701	高杯形土器	19.2 19.0 22.0 24.0	—	—	◦杯部は、外面を4～5条の凹線文、ヨコナデ、ヘラミガキ、内面はヨコナデ、ヘラミガキを施す。胴部は、外面をヘラミガキののち沈線文、透しを施す。内面はヘラケズリ。	淡 茶 褐色 乳 灰 色	"	"	
井戸 - 8 (第159図)									
702	壺形土器	15.8	—	—	◦口縁部端面は、凹線文、竹筥文を施す。体部外面は、篋磨き、内面は指頭圧痕、ナデで調整。	淡 茶 褐色	0.5mm以下の砂粒を含む	良好	
704	台付壺形土器	10.0	—	—	◦外面は、口縁部、頸部に多条の凹線文、内面は、ヨコナデ、ナデを施す。口縁部に竹筥文。	乳 褐 色	"	"	
703 705	甕形土器	14.0	5.7	—	◦口縁部端面は、凹線文、棒状厚文を施す。体部外面は、櫛状工具による刺突文、下半はヘラミガキ。内面は、下半がヘラケズリ、上半がハケ状工具、オサエ、ナデで調整。	灰 褐 色	"	"	◦外面に煤付着。
706 707	高杯形土器	19.0	8.7	—	◦697～701と同様。	乳 褐 色 淡 灰 褐色	"	"	
土壌 - 44 (第160・161図)									
708	壺形土器	11.1	—	—	◦外面頸部板状工具によるナデ。	灰 褐 色	細 砂	良好	◦外面黒斑。
709	"	—	6.2	—	◦外面胴部刺突は櫛状工具、内面指頭圧痕。	暗 褐 色	"	"	◦外面煤付着。
710	甕形土器	15.2	6.6	29.8	◦内面肩部に指頭圧痕、下半ヘラケズリ。	暗 茶 褐色	"	"	"
711	"	12.3	5.0	25.7	◦底部下端はヨコナデ、下半ヘラケズリ。	淡 黄 褐色	"	"	"
712	"	21.6	—	—	◦内面指押え後ハケメ。	淡 黄 灰色	"	"	"
713	"	23.6	—	—	◦内面肩部指押え後ハケメ。	淡 茶 灰色	砂 粒	"	"
714	"	16.4	—	—	◦口縁部凹線の上に3個の円形厚文貼付け、内面はハケメ後指オサエ、指頭圧痕。	淡 茶 色	細 砂	普通	
715	"	29.3	—	—	◦ハケメ後外面ヨコナデ、内面指オサエ。	明 黄 褐色	砂 粒	良好	
716	"	14.4	—	—	◦外面肩部からヘラミガキ、内面肩部以下ヘラケズリ、下半はその上をヘラミガキ。	淡 灰 白色	石 粒	"	
717	高杯形土器	25.4	10.6	15.8	◦脚部に円形透孔。	淡 茶 褐色	細 砂	"	◦黒斑。
718	"	—	10.6	—	◦脚端内面に凹線。	淡 黄 白色	"	"	
土壌 - 47 (第162図)									
719	壺形土器	16.0	—	—		淡 茶 色	細 砂	良好	◦口縁煤付着。
720	甕形土器	13.8	—	—	◦外面ハケメ。	灰 褐 色	微 砂	普通	◦外面煤付着。
721	"	15.7	—	—		灰 黄 色	細 砂	"	
722	"	14.0	—	—	◦内面ナデ。	赤 褐 色	小石粒を含む	"	
723	"	15.8	—	—		灰 黄 色	細 砂	"	
724	高杯形土器	20.4	—	—		赤 褐 色	微 砂	やや不良	
725	"	22.3	—	—		暗 灰 茶色	細 砂	普通	
土壌 - 49 (第162図)									
726	壺形土器	18.2	—	—	◦外面ハケメ。	淡 黄 褐色	細 砂	良好	
727	鉢形土器	13.3	7.8	11.7	◦内面上半は指オサエ後ヘラミガキ。	明 茶 色	"	"	◦頸部に円形透孔。

第3章 第2節 東苗代調査区

図号番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
土 壌 - 50 (第163図)									
728	甕形土器	14.3	—	—		淡茶褐色	細 砂	良 好	◦外面煤付着。
729	"	16.4	—	—	◦外面上半ハケ調整後ナデ。	淡茶褐色	"	"	"
土 壌 - 51 (第163図)									
730	高杯形土器	20.2	8.7	12.9	◦杯部内面にハケメ。	淡灰桃色	細 砂	普 通	◦外面に黒斑。
731	"	11.2	9.5	20.5	◦内面ハケメ。	灰茶褐色	"	良 好	
土 壌 - 56 (第164図)									
732	高杯形土器	—	14.5	—	◦胸部外面はハケメ後ヘラミガキ。	淡黄褐色	微 砂	良 好	
733	壺形土器	12.0	—	—	◦口縁端面に3段3列の円形浮文貼り付け。	淡茶灰色	砂 粒	"	
734	壺形土器	23.2	—	—	◦口縁部は丁寧なヘラミガキ。	"	細 砂	普 通	
735	高杯形土器	22.4	—	—		"	細 砂	良 好	
736	"	—	—	—		淡黄褐色	微 砂	"	◦把手部片。
土 壌 - 57 (第165図)									
737	壺形土器	11.5	—	—	◦口縁部内面に竹管の押圧。	茶灰色	細 砂	良 好	
738	壺形土器	13.7	—	—	◦口縁部に3列4段の竹管文。	淡黄褐色	"	"	◦口径は推定。
739	"	12.6	5.2	25.6	◦内面上半は指ナデ。	乳灰色	"	"	◦外面に黒斑。
740	"	15.6	—	—	◦頸部から胴部上半にかけてタタキ。	淡黄褐色	"	"	◦外面煤付着。
741	"	21.2	—	—	◦内外面ハケ調整、内面指頭圧痕。	淡茶灰色	砂 粒	"	"
742	"	13.6	—	—	◦内面指オサエ後ハケメ。	暗褐色	細 砂	普 通	◦黒斑あり。
743	"	13.6	—	—	◦上半はハケメ。	淡黄褐色	"	良 好	"
744	"	13.8	—	—	◦外面ハケメ、内面指オサエで器面は凹凸。	茶褐色	"	"	◦外面煤付着。
745	高杯形土器	19.8	—	—	◦杯部内面ハケメ後ヘラミガキ。	淡黄褐色	微 砂	"	◦外面に黒斑。
746	"	22.5	—	—	◦杯部端面は凹縁。	"	"	普 通	
747	"	—	8.2	—	◦脚部の穿孔は内側に抜けていない。	"	細 砂	良 好	
748	"	—	9.0	—	◦脚部の円形透孔は交互2段。	淡茶灰色	微 砂	普 通	
土 壌 - 59 (第167図)									
749	壺形土器	11.8	—	—	◦凸帯上のキザミメは爪先痕による。	茶灰色	砂 粒	良 好	
土 壌 - 60 (第167図)									
750	壺形土器	13.2	—	—	◦内面ナデ。	黄灰色	細 砂	やや不良	◦調整不鮮明。
751	"	11.4	—	—	◦外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	淡灰黄色	"	普 通	◦外面煤付着。
土 壌 - 61 (第168図)									
752	壺形土器	14.9	—	—	◦内面肩部はハケメ後ヨコナデ。	淡茶灰色	砂 粒	良 好	◦外面煤付着。
753	"	25.0	—	—		暗茶褐色	"	"	
754	"	15.0	—	—	◦肩部内面に押圧痕。	"	細 砂	"	◦外面煤付着。
土 壌 - 62 (第169図)									
755	壺形土器	15.0	6.0	29.0	◦底部下半はヨコナデ。	暗褐色	細 砂	良 好	◦外面煤付着。
756	"	14.8	5.4	28.9	◦内面上半はナデおよびヘラミガキ。	"	"	"	◦煤付着。
土 壌 - 63 (第170図)									
757	高杯形土器	23.0	—	—		淡黄白色	細 砂	良 好	
758	壺形土器	—	6.1	—		淡茶灰色	砂 粒	"	◦底部穿孔は焼成後。
土 壌 - 65 (第171図)									
759	壺形土器	13.8	—	—	◦内面肩部は指オサエ。	淡茶褐色	細 砂	良 好	
760	壺形土器	14.2	—	—	◦指オサエ後ハケメ。	暗茶褐色	"	"	◦煤付着。
土 壌 - 70 (第172図)									
761	壺形土器	21.8	—	—	◦内面指頭圧痕。	暗茶褐色	砂 粒	良 好	◦煤付着。
土 壌 - 71 (第173図)									
762	壺形土器	16.8?	—	—	◦口縁部に描かれた格子目は2条のヘラガキ。	淡茶褐色	細 砂	良 好	◦黒斑。
763	壺形土器	12.2	—	—	◦内面はハケメ。	"	"	"	

百間川兼基遺跡

図番	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
土 墳 - 72 (第174図)									
764	壺形土器	8.8	—	—	口直縁、外面ヘラミガキ、内面上半ナデ、下半ヘラケズリ。	灰 茶 色	小石粒を含む	普 通	・黒斑がみられる。
765	"	15.3	—	—	・胸部に比して口径が小さい。上半はハケメ、下半は外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	暗 灰 茶 色	細 砂	良 好	・内外面に煤付着。
766	甕形土器	22.8	—	—	・外面上半ハケメ、下半ヘラミガキ、内面上部ハケメ、肩部以下ナデ、指頭痕あり。	灰 黄 色	"	普 通	
767	"	22.6	—	—	・内外面ハケメ。	灰 茶 色	"	"	
768	"	—	9.6	—	・外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	"	"	"	・外面煤付着。
769	"	—	11.3	—	・外面胴中央ハケメ後ヘラミガキ。	淡 黄 褐色	"	"	
土 墳 - 73 (第175図)									
770	高杯形土器	21.9	—	—	・杯部内外面ヘラミガキ。	淡 黄 褐色	細 砂	良 好	
771	"	20.9	—	—	・杯部内外面ヘラミガキ。	淡 茶 灰色	"	"	・丹塗、黒斑。
772	甕形土器	—	5.7	—	・外面ヘラミガキ。	黄 灰 色	"	普 通	
土 墳 - 75 (第177図)									
773	甕形土器	13.7	—	—	・外面上半ハケメ、下半ヘラミガキ、内面上半指ナデ、指頭圧痕、下半ヘラケズリ。	外 淡 茶褐色 内 淡 茶灰色	細 砂	普 通	
774	"	13.8	—	—	・内面上半ハケメ、下半ヘラケズリ。	暗 灰 褐色	"	"	・外面煤付着。
775	"	14.9	—	—	・内面指ナデ、指頭痕。	暗 灰 色	"	"	"
776	"	12.5	—	—	・外面上半ハケメ、下半ヘラケズリ、内面はハケメ後粗いヘラミガキ。	外 黒 褐色 内 黄 茶褐色	微 砂	"	
777	壺形土器	—	7.0	—	・外面ヘラミガキ、肩部に櫛状工具による刻突が巡る。内面上半ハケ、爪、指頭圧痕。	淡 黄 茶褐色	"	良 好	
778	甕形土器	—	10.2	—	・外面ヘラミガキ、内面ハケメ、棒状工具による圧痕がある。底近くはヘラケズリ。	暗 黒 褐色 淡 黄 褐色	"	"	・外面に黒斑。
土 墳 - 76 (第178図)									
779	甕形土器	—	6.4	—	・外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	灰 黄 色	細 砂	普 通	
土 墳 - 79 (第181図)									
780	壺形土器	10.6	—	—	・頸部凸帯は爪先によるキザミが巡る。内面肩部には指オサエの痕がみられる。	外 淡 茶色 内 淡 茶灰色	長石粒を含む	普 通	・外面に黒斑。
781	甕形土器	15.8	—	—	・内面ハケメ。	茶 褐 色	細 砂	"	・器面剝離。
782	"	14.7	—	—	・内面ハケメ後、粗いヘラミガキ。	暗 灰 褐色	"	やや不良	
783	高杯形土器	—	13.6	—	・外面ヘラミガキ。	淡 黄 褐色	"	良 好	
土 墳 - 80 (第182図)									
784	甕形土器	13.8	5.8	27.6	・内面上半ハケメの下に指頭圧痕が残る。	暗 茶 灰色	細 砂	良 好	・外面煤付着。
土 墳 - 86 (第183図)									
785	高杯形土器	20.5	—	—	・杯部ヘラミガキ。	淡 黄 色	細 砂	普 通	
786	"	—	12.4	—	・内面ヘラケズリ。	灰 褐 色	"	"	
787	甕形土器	—	9.2	—	・外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	黄 褐 色	"	"	・外面煤付着。
土 墳 - 90 (第183図)									
788	甕形土器	14.2	—	—	・外面ハケメ、内面指ナデ、指頭圧痕。	淡 灰 桃色	細 砂	普 通	
789	"	13.3	—	—	・外面ハケメ。	淡 黄 灰色	"	"	
790	"	—	8.6	—	・内面ヘラケズリ、一部ハケメ。	淡 黄 色	"	"	・外面煤付着。
土 墳 - 91 (第184図)									
791	甕形土器	19.8	—	—	・凹線文とヨコハケ。	淡 茶 褐色	0.5mm以下の砂	普 通	・破片。
792	"	20.0	—	—	・口縁部ヨコナデ。胴部外面ハケメ、内面ナデ。	暗 褐 色	"	"	・約3/4片。
793	高杯形土器	18.0	—	—	・凹線は4本。杯部ヘラミガキ。	暗 灰 褐色	"	"	・1/4片。
土 墳 - 101 (第185図)									
794	壺形土器	17.8	—	—	・外面ヨコナデ後ハケメ。	淡 黄 褐色	細 砂	普 通	
795	甕形土器	17.2	—	—	・外面ハケメ。	黄 褐 色	"	"	
796	"	11.9	—	—	"	淡 黄 灰色	"	"	
797	"	—	7.5	—	・内面ヘラケズリ。	淡 黄 褐色	"	やや不良	・外面煤黒斑。
798	高杯形土器	21.8	—	—	・杯部ヘラミガキ。	淡 灰 黄色	"	普 通	・外面煤付着。

第3章 第2節 東苗代調査区

挿図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
799	高杯形土器	—	12.2	—	◦外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	灰 黄 色	細 砂	普 通	◦三角形透孔。
800	“	—	14.6	—	◦外面ヘラミガキ、三角形の透孔。	黄 褐 色	“	“	◦外面煤付着。
土 壌 - 96 (第188図)									
801	壺形土器	14.1	—	—	◦外面外反部はハケメ後ヘラミガキ。	淡 灰 桃 色	細 砂	やや不良	
802	甕形土器	13.0	—	—	◦外面上半ハケメ、下半ヘラミガキ、内面上半指ナデ指頭痕あり、下半ヘラケズリ。	外 灰 黄 色 内 淡 灰 褐色	小石粒を含む	普 通	
803	“	13.0	—	—	◦外面ヘラミガキ、内面ナデ。	灰 褐 色	細 砂	“	
804	“	13.1	—	—	◦外面ハケメ。	淡 黄 褐色	“	“	
805	“	14.6	—	—	◦口縁端部が折り返されて玉縁状をなす。	淡 黄 灰色	微 砂	“	◦口縁に穿孔。
806	“	—	5.2	—	◦端部をつまみ出している。外面ヘラミガキ。	灰 黄 色	細 砂	良 好	
807	高杯形土器	—	10.0	—	◦内面ヘラケズリ。三角の透孔が巡る。	淡 灰 褐色	“	普 通	
土 壌 - 100 (第189図)									
808	甕形土器	12.4	—	—	◦口縁端外面ヨコナデ。口縁内面も同じ。胴部外面ハケメ、内面ナデ。	外 淡 黄褐色 内 茶 褐色	0.5mm以下の砂	普 通	◦口縁の約4%。
809	“	18.0	—	—	◦凹線文は5本。 ◦胴部外面ハケメ、内面粗いハケメ。	淡 茶 褐色	1mm以下	良 好	◦土壌-90と接合。
810	高杯形土器	21.0	—	—	◦凹線は6本。 ◦口縁部ヨコナデ。杯部ヘラミガキ。	淡 黄 茶褐色	0.5mm以下の砂	“	◦口縁の約4%。
土 壌 - 99 (第190図)									
811	壺形土器	14.5	—	—	◦口縁端部に3本の棒状浮文、外面ハケメ。	淡 灰 黄色	細 砂	普 通	
812	“	15.3	—	—	◦外面はハケメ。	淡 灰 桃 色	“	やや不良	◦調整不鮮明。
813	甕形土器	14.5	—	—	◦外面ハケ、内面指およびハケ状工具のナデ。	灰 黄 色	“	普 通	
814	“	13.2	—	—	◦外面上半ハケメ、下半ヘラミガキ、内面上半指ナデ、下半ヘラケズリ。	淡 灰 黄色	“	“	◦外面煤付着。
815	“	11.3	—	—	◦外面上半ハケメ、下半ヘラミガキ、内面下半ヘラケズリ、上半指ナデ肩部に爪痕。	淡 黄 灰色	“	“	“
816	“	—	5.9	—	◦外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	“	“	“	
817	“	—	5.5	—	“	暗 灰 茶 色	“	良 好	◦外面煤付着。
818	高杯形土器	23.0	—	—	◦杯部内外面ヘラミガキ。	淡 黄 灰色	“	やや不良	
819	“	—	13.0	—	◦胴部に三角形の透孔が10個、内面ヘラケズリ。	淡 茶 灰色	小石粒を含む	普 通	
820	“	—	11.3	—	◦杯部内外面ヘラミガキ、杯部底は指ナデ、胴部内面は棒状工具によるケズリ。	淡 黄 色	細 砂	“	◦胴部に三角形の透孔。
土 壌 - 98 (第191図)									
821	甕形土器	13.6	—	—	◦外面ハケメ、内面ナデ。	灰 黄 色	細 砂	普 通	◦外面煤付着。
822	“	14.2	—	—	◦外面ハケメ、下半はヘラ磨き、内面上半ナデ、胴尖に指頭圧痕、下半ヘラケズリ。	外 赤 褐色 内 黄 灰色	“	“	◦外面の一部に煤付着。
823	“	14.6	—	—	◦胴尖より少し上で最大隆をもつ、外面ハケメ、下半ヘラミガキ、内面上半ナデ、下半ヘラケズリ。	黄 灰 色	“	“	◦外面煤付着。
824	“	13.4	—	—	“	淡 黄 褐色	“	良 好	◦外面煤付着、黒斑がある。
825	“	—	5.0	—	◦つまみ出して上げ底ぶうの底部、外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、底中央穿孔?	外 淡 赤褐色 内 黄 灰色	“	やや不良	◦外面煤付着。
826	“	—	6.1	—	◦外面ハケメ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	淡 茶 灰色	“	普 通	“
827	“	—	6.3	—	◦端部をつまみ出した底部片、中央は穿孔。	赤 褐 色	“	普 通	“
828	台付鉢形土器	10.5	6.9	15.65	◦体部外面上半ハケメ、下半ヘラミガキ、内面は指押え後ハケメ、胴尖上部の内外面にハケメ、爪による側突が巡る。	乳 褐 色	“	良 好	◦胴部外面に5つの竹管文が3巡る。土壌-99と接合。
土 壌 - 104 (第193図)									
829	壺形土器	14.0	—	—	◦筒状の頸部から外反する口縁部を呈す。	淡 褐 色	微 砂	良 好	
830	甕形土器	12.0	—	—	◦体部中程に、列点文が一巡する。	“	“	“	
831	高杯形土器	—	—	—	◦口縁部内外面ともヨコナデによる仕上げ。	“	“	“	
832	“	—	—	—	◦胴端部はヨコナデ、内面はヘラケズリ。	灰 白 色	“	“	
土 壌 - 106 (第195図)									
833	甕形土器	18.0	—	—	◦833は端部を上方へ折り曲げ、肥厚させる。	淡 褐 色	微 砂	良 好	
834		11.8	—	—					
835	“	—	4.9	—					
836	高杯形土器	22.0	—	—	◦杯部内外面とも丁寧なヘラミガキを施す。	暗 灰 色	“	“	
837	“	26.0	—	—	◦口縁部外面には4～5条の凹線文を施す。	淡 褐 色	“	“	
838	“	—	—	—	◦838の胴部上端には沈線が4条施され、杯部と胴部は円蓋充填で接合されている。	“	“	“	
839		—	12.0	—					

百間川兼基遺跡

図号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
土 壇 - 107 (第196図)									
840	壺形土器	14.0	—	—	◦口縁部末端は折り返しの手法で拡張。	暗 褐 色	微 砂	良 好	
841	"	—	6.0	—	◦底部であり、あげ底の形態をとる。	茶 褐 色	"	"	
842	高杯形土器	30.0	—	—	◦口縁部内外面ともヨコナデ。	明 褐 色	"	"	
843	鉢形土器	—	13.0	—	◦台部には貫通しない円孔を巡らす。	"	"	"	
土 壇 - 108 (第197図)									
844	壺形土器	12.9	—	—	◦口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面はハケメ。	淡 褐 色	微 砂	良 好	
845	"	—	8.1	—	◦甕として使用。底部の穴は焼成後穿孔。	"	"	"	
846	高杯形土器	—	12.8	—	◦「ハ」の字状に広がる脚部を呈す。	"	"	"	
土 壇 - 109 (第198図)									
847	壺形土器	18.0	—	—	◦口縁部は上方に外湾しながら拡張する。	淡 褐 色	微 砂	良 好	
848	"	14.0	—	—	◦口縁部はヨコナデの凹凸を形成する。	暗 灰 褐 色	"	"	
849	高杯形土器	17.9	—	—	◦杯部内外面とも丁寧なヘラミガキを施す。	明 褐 色	"	"	
850	"	—	12.0	—	◦脚部は肥厚させ、上方につまみあげる。	灰 褐 色	"	"	
土 壇 - 110 (第199図)									
851	壺形土器	27.1	—	—	◦口縁部には棒状浮文が貼付され、口縁部水平面には縄文を施す。	灰 白 色	微 砂	良 好	
852	壺形土器	16.0	—	—	◦短頸壺ともいえる器種である。	明 褐 色	"	"	
853	"	14.8	—	—	◦体部内面は指頭によるナデ。	淡 褐 色	"	"	
854	鉢形土器	—	10.7	—	◦台付鉢か。	淡 灰 褐 色	"	"	
土 壇 - 111 (第200図)									
855	壺形土器	10.9	—	—	◦短い上すばみの「ハ」の字状に広がる頸部からわずかに外反し、口縁部は上下に拡張する。	灰 褐 色	微 砂	良 好	
856	壺形土器	16.0	—	—	◦体部内面下半はヘラケズリを施す。	淡 灰 褐 色	"	"	
857	"	—	5.6	—	◦857はあげ底、858は凸面を呈する平底。				
858	"	—	4.9	—					
859	高杯形土器	30.0	—	—	◦鉢状の杯部より、やや内傾して立ち上がる口縁部をもつ。	淡 灰 白 色	微 砂	良 好	
860	"	—	8.7	—	◦脚内面はヘラケズリ。				
861	"	—	9.8	—		"	"	"	
土 壇 - 112 (第201図)									
862	壺形土器	—	—	—	◦口縁部内面、凹線文、棒状浮文を施す。	茶 灰 色	0.5mm以下の砂粒を含む	良 好	
863	台付壺形土器	8.8	—	—	◦口縁部内面、外面に凹線文、体部はヘラミガキ、内面はヨコナデ、ナデで調整。	灰 褐 色	"	"	
864	壺形土器	13.2	—	—	◦口縁部は、凹線文のちヨコナデで調整。体部外面は、上半はハケメ、下半はヘラミガキ。内面は、下半をヘラケズリ、上半はナデ、オサエを施す。底部は、やや上げ底。	淡 灰 褐 色	"	"	
865		13.1	—	—					
866		15.4	—	—					
867		13.5	—	—					
868	"	—	5.2	—	◦体部外面は、細かいハケメ、内面はハケメ、ナデ、オサエで調整。	"	"	"	
869	"	16.6	—	—					
870	高杯形土器	20.8	—	—	◦体部外面は、ハケメのちヘラミガキか。内面は、頸部までヨコナデ、下半はハケメ、ナデを施す。	淡 乳 褐 色	"	"	
871		—	—	—					
872		11.6	—	—					
873		22.6	—	—					
874	"	—	8.2	—	◦872の杯部内面は、底部にハケメを施す。脚部は、透しの多いのが特徴である。	淡 黄 褐 色	"	"	
875	"	—	10.0	—					
876	器台形土器	18.6	—	—	◦口縁部内面は、5条の凹線文を施し、さらに2、3列に竹管文を連続的に施している。体部外面は、凹線文を多条に施し、その間を、ナデ、ハケメで調整。内面はヨコナデ。	灰 褐 色	"	"	◦口縁部内面に一部煤付着。
土 壇 - 113 (第202図)									
877	壺形土器	16.0	—	—	◦類例の少ない玉縁状の折り曲げ口縁部を有するもので、体部は「ハ」の字状を呈す。	灰 白 色	微 砂	良 好	
878	"	12.0	—	—	◦体部内面下半は縦位のヘラケズリ。	淡 灰 褐 色	"	"	
879	"	14.0	—	—	◦口縁部は上下に拡張する。	淡 褐 色	"	"	
880	"	14.0	—	—	◦口縁部はあまり拡張しない。	淡 灰 褐 色	"	"	
881	壺形土器	—	—	—	◦筒状の頸部を呈し、口縁部は拡張。	暗 灰 褐 色	"	"	

第3章 第2節 東苗代調査区

図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
882 883 884	高杯形土器	—	8.7 8.9 9.8	—	・ 脚内部は下から見て、右回りのヘラケズリ。	暗灰褐色	微 砂	良 好	
土 墳 - 114 (第203図)									
885	壺形土器	7.0	—	—	・ ほぼ直立した口頸部を呈し、体部は隅丸造形をなす。体部内面下半にヘラケズリの痕跡。	灰 褐 色	微 砂	良 好	
886	—	8.4	—	—	・ 直口甕であり、把手付きである。	淡灰白色	—	—	
887	甕形土器	14.3	6.9	34.8	・ 胴部最大径が上半に位置し、口は張らず、すんなり底部に至る。内面下半はヘラケズリ。	灰 白 色	—	—	・ 完形品。
888	—	29.7?	—	—	・ 貼り付け凸帯を施す。	赤 褐 色	—	—	
889	—	16.0	—	—	・ 短頸部を有し、口唇部に捺状厚文を貼す。	明 褐 色	—	—	
890	—	14.0	—	—	・ 体部内面は一部ハケメの痕跡を認む。	灰 褐 色	—	—	
891	—	17.0	—	—	・ 体部外面はハケメ、内面は指頭ナデ。	淡赤褐色	—	—	
892 893 894 895	—	—	5.3 5.1 6.9 5.9	—	・ 底部であり、いずれもあげ底を呈す。	灰 褐 色	—	—	
896	高杯形土器	20.0	—	—	・ 杯部内外面共、丁寧なヘラミガキを施す。	灰 白 色	—	—	
897 898 899 900	—	—	10.8 10.8 9.6 10.7	—	・ 「ハ」の字形をした高杯の脚部である。	暗灰白色	—	—	
土 墳 - 115 (第204図)									
901	甕形土器	19.8	—	—	・ 5条の凹線文がめぐる。	淡 褐 色	微 砂	良 好	
902	—	12.0	—	—	・ 口縁端部は上下に拡張する。	—	—	—	
903	—	—	6.0	—	・ あげ底である。	褐 色	—	—	
904 905 906	高杯形土器	32.3?	—	—	・ 904の口縁部外面はヨコナデ仕上げ。	灰 褐 色	—	—	
—	—	—	8.0?	—					
土 墳 - 116 (第205図)									
907	壺形土器	13.9	—	—	・ 端部は折りまげ、斜め上方へ肥厚させる。	淡灰褐色	微 砂	良 好	
908	—	13.0	—	—	・ 胴部上半に最大径が位置すると思われる。	淡赤褐色	—	—	
909	高杯形土器	27.8	—	—	・ 口縁端部には3条の凹線文が巡る。	灰 褐 色	—	—	
910	—	—	9.8	—	・ 三角形の透しをもつが、貫孔はしない。	淡赤褐色	—	—	
911 912	—	—	—	—	・ 口縁部は、内傾、外傾して立ち上がる。	—	—	—	
土 墳 - 117 (第205図)									
913	鉢形土器	26.0	—	—	・ 台付鉢であろう。体部内面にはハケメの痕跡が確認できるが、主にナデを施す。	淡灰白色	微 砂	良 好	
土 墳 - 118 (第206図)									
914	壺形土器	18.0	—	—	・ 口縁部、頸部には凹線文を施す。内面は、指頭によるオサエ、ヨコナデで調整。	淡灰褐色	0.5mm以下の砂粒を含む	良 好	
915 916 918 919	甕形土器	13.4 12.0 13.1 13.2	— — — —	— — — —	・ 体部外面は、ハケメ、内面はハケメ、ナデにより調整。	淡灰褐色 暗茶褐色	—	—	
917	—	19.1	—	—	・ 口縁部は、4条の凹線文のちヨコナデ、体部外面は、ハケメを施す。内面は、口縁部から頸部までナデ、下半はハケメ。	淡黄褐色	—	—	
920 921	高杯形土器	18.6 19.0	— —	— —	・ 口縁部外面は、4～5条の凹線文を施す。内面はヨコナデ、体部外面は、920が縦方向、921は横方向のヘラミガキを施す。	淡赤褐色 黄 褐 色	—	—	
土 墳 - 119 (第207図)									
922	壺形土器	—	—	—	・ 頸部には、断面三角形の貼り付け凸帯。外面は、ヘラミガキ、内面は指頭によるオサエ、ナデで調整。	灰 褐 色	0.5mm以下の砂粒を含む	良 好	
923 924	甕形土器	12.0 15.2	— 5.5	— 28.9	・ 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面はハケメのうち体部最大径から下半をヘラミガキ。内面上半をハケメ、下半をヘラケズリ。	黄 灰 褐色 灰 褐 色	—	—	
925	—	21.0	8.8	35.9	・ 形態的には924と同じ。外面の調整も同様だが、体部外面の頸部に部分的にヘラミガキ。内面は、口部をオサエ、ナデ、下半をヘラケズリしている。	灰 褐 色	—	—	
926 927	高杯形土器	17.6 12.1	— 8.0	— 14.5	・ 内外面ともヘラミガキを施す。口縁端部はヨコナデ。	灰 褐 色 乳 灰 色	—	—	

百間川兼基遺跡

押図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
土 墳 - 30 (第209図)									
928	壺 形 土 器	22.0	—	—	・ 凹線文は口縁端面に5本、頸部に12本。 ・ 口縁部ハケメ。頸部外面ハケメ、内面上端ハケメ、下方シボリメ。	灰 褐 色	1mm以下の砂含む	良 好	・ 口縁の約1/4現存。
929	〃	12.0	—	—	・ 口縁外端と断面三角形凸帯にキザミメ。 ・ 口縁部ヨコナデ。胴部外面ハケメ。	褐 色	0.5mm以下	〃	〃
930	〃	10.0	—	—	・ 口縁～頸部ヨコナデ。胴部外面ハケメ。	淡 褐 色	〃	〃	〃
931	水差し形土器	9.0	—	—	・ 口縁部ヨコナデ。胴部内面ナデ。	黒 色	1mm以下	〃	・ 煤付着。
932	甕 形 土 器	32.0	—	—	・ 胴部外面上半ハケメ、下半ヘラミガキ。内面ハケメ後暗文状ヘラミガキ。	〃	2mm以下の砂	〃	・ 1/4現存。 ・ 煤付着。
933	〃	16.0	—	—	・ 口縁端面に2本の沈線。 ・ 胴部両面ハケメ後ヘラミガキ。	外 褐 色 内 黒 色	0.5mm以下の砂	非常に良好	・ 約1/4。 ・ 炭化物。
934	〃	14.0	—	—	・ 口縁部ヨコナデ。体部ハケメ。	黒 褐 色	〃	〃	・ 約1/4。
935	〃	14.0	6.5	29.3	・ 胴部内面下方ヘラケズリ。	褐 色	1mm以下	〃	・ 完形品。
936	高杯形土器	12.0	—	—	・ 全面でいねいなヘラミガキ。	黒 褐 色	〃	〃	・ 小破片。
937	〃	—	12.5	—	・ 円孔は9個。	淡灰褐色	2mm以下	〃	・ 脚全部。
938	〃	16.0	—	—	・ 凹線は3本。杯内面ハケメ。	黒 褐 色	0.5mm以下	やや不良	・ 小破片。
939	〃	—	8.0	—	・ 円孔は12個。脚内面ハケメ。	暗 赤 色	1mm以下	良 好	・ 脚全部。
940	回転台形土器	25.0	—	—	・ 台上面ヘラミガキ。外面ハケメ後暗文。	淡黄褐色	〃	普 通	・ 珍品。
土 墳 - 32 (第213図・214図)									
941	壺 形 土 器	30.0	—	—	・ 口縁部と頸部外面ハケメ、頸内面ナデ。	淡 褐 色	0.5mm以下	非常に良好	・ 破片。
942	〃	14.0	—	—	・ 口縁端外面沈線とヨコナデ。 ・ 頸部外面二本の低い凸帯をヨコナデ。	外淡茶褐色 内暗灰褐色	1mm以下	良 好	
943	〃	16.0	—	—	・ 凹線文は乱雑。	淡黄白色	精選粘土	不 良	・ 約1/4。
944	〃	17.0	—	—	・ 凹線文の上に棒状浮文と竹管文。 ・ 頸部外面ヨコナデ。	淡茶褐色	0.5mm以下の砂粒	良 好	〃
945	〃	14.0	—	—	・ 口縁部内面ヨコハケ。	淡 褐 色	〃	不 良	・ 約1/4。
946	直口壺形土器	9.0	—	—	・ 凹線は8～9本。 ・ 口縁外面ハケメ、内面ヨコナデ。	茶 褐 色	〃	非常に良好	・ 約1/6。
947	壺 形 土 器	10.0	—	—	・ 凹線は5本。刺突文はヘラ。	淡茶褐色	〃	良 好	・ 約1/4。
948	〃	11.0	—	—	・ 口縁端上面と体部上端に竹管文。	〃	〃	〃	・ 全口縁部。
949	〃	14.0	—	—	・ 凹線は6本。櫛歯波状文と櫛刺突文。小円孔は2個1対の4個か。	外淡茶褐色 内茶褐色	2mm以下の砂粒	非常に良好	・ 小破片。
950	鉢 形 土 器	18.0	—	—	・ 口縁端外面はヨコナデと沈線、刺突文はヘラによる。	外淡褐色 内淡茶褐色	0.5mm以下の砂粒	〃	・ 約1/4。 ・ 炭化物。
951	甕 形 土 器	14.0	—	—	・ 口縁部は折りかえして「玉縁」。	白 色	精選粘土	やや不良	・ 稀少例。
952	蓋 形 土 器	—	—	—	・ つまみは指頭整形。	暗 褐 色	2mm以下	非常に良好	・ 口縁欠く。
953	甕 形 土 器	24.0	—	—	・ 凹線は4本で乱れる。	赤 褐 色	1mm以下	不 良	・ 破片。
954	〃	16.0	—	—	・ 口縁内面ヨコハケ。	黒 褐 色	0.5mm以下	非常に良好	・ 約1/4。
955	〃	13.0	—	—	・ 口縁端部は上方にのみ拡張。	暗 褐 色	1mm以下	良 好	・ 約1/4。
956	〃	—	9.0	—	・ 高台風の上げ底。	〃	0.5mm以下	非常に良好	・ 全底部。
957 958 959	高杯形土器	20.0 25.0 20.0	—	—	・ 凹線は5～6本。 ・ 口縁部ヨコナデ。杯部ヘラミガキ。	茶褐色～ 淡茶褐色	1mm以下の砂粒	良 好	・ いずれも破片。
960	〃	—	—	—	・ 口縁端上面ヨコハケ。	暗茶褐色	3mm以下	非常に良好	・ 小破片。

第3章 第2節 東苗代調査区

図号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
961	高杯形土器	10.5	8.0	16.2	・ 凹縁は7本。脚端面に2本の沈線。三角形透しは11個。	淡茶褐色	0.5mm以下の砂粒	非常に良好	・ 杯約 $\frac{1}{2}$ と脚部分現存。
962	"	13.0	—	—	・ 口縁端部を丸く折りかえす。	"	精選粘土	"	・ 稀少例。
963 964 965	"	—	10.0 12.0 10.0	—	・ 短い脚で、三角形透しをもつ。透しは貫通しないものもある。沈線の有無もある。	暗褐色～茶褐色	2mm以下の砂粒	"	・ 脚のみ。
966 967	"	—	12.0 12.0	—	・ 966は貫通しない円形刺突を確然と13～15。 ・ 967は竹管文を5個1組で4カ所施文。	茶褐色～黄白色	"	やや不良	"
968 969	"	—	10.0 11.0	—	・ 長脚。三角形透し。沈線の有無。 ・ 外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	淡茶褐色～黄白色	1mm以下の砂粒	良好	"
970	"	—	21.5	—	・ 11本の沈線と8本の沈線。三角形切り込みを24箇施文。	外淡黄褐色 内茶褐色	2mm以下	非常に良好	"

土 壇 - 33 (第215図)

971	壺形土器	12.5	—	—	・ 口縁端外面ナデ。	暗褐色	1mm以下	やや良	・ 約 $\frac{1}{4}$ 。
972	壺形土器	12.5	—	—	・ 凹縁文は4本。	淡茶褐色	3mm以下	"	"
973	"	24.0	—	—	・ 凹縁文は5本。	茶褐色	2mm以下	"	・ 小破片。
974	"	—	10.0	—	・ 胴部外面と底部外面ヘラミガキ。	褐色	3mm以下	良好	・ 底部約 $\frac{1}{3}$ 。
975	"	—	9.0	—	・ 胴部内面下半ヘラケズリ。	暗茶褐色	5mm以下	非常に良好	・ 全底部。
976	"	—	4.1	—	・ 不安定な平底に高合。	淡褐色	1mm以下	良好	・ 底部 $\frac{1}{2}$ 。
977	高杯形土器	22.0	—	—	・ 口縁端面ナデ。凹縁は5本。	赤褐色	0.5mm以下	非常に良好	・ 細片。
978	"	—	13.5	—	・ 竹管文。	淡褐色	5mm大	普通	・ 脚 $\frac{1}{2}$ 。
979	"	—	12.0	—	・ 三角形切り込み。	"	2mm以下	"	・ 破片。

土 壇 - 34 (第215図)

980	壺形土器	26.0	—	—	・ 凹縁は5本。凸帯は指頭圧痕。	茶褐色	2mm以下	やや良好	・ 約 $\frac{1}{4}$ 。
981	"	17.0	—	—	・ 凹縁上に棒状浮文。	"	1mm以下	"	・ 約 $\frac{1}{4}$ 。
982	"	12.0	—	—	・ 胴部内面下半ヘラケズリ。	淡褐色	3mm以下	"	・ 約 $\frac{1}{3}$ 。
983	"	—	6.0	—	・ 底部は高合風。	暗茶褐色	"	"	・ 底部全。
984	高杯形土器	21.0	9.0	12.0	・ 凹縁文は雄。三角形切り込み9個。	淡茶褐色	1mm以下	"	・ 杯 $\frac{1}{2}$ 欠く。

その他の遺物 (第218図)

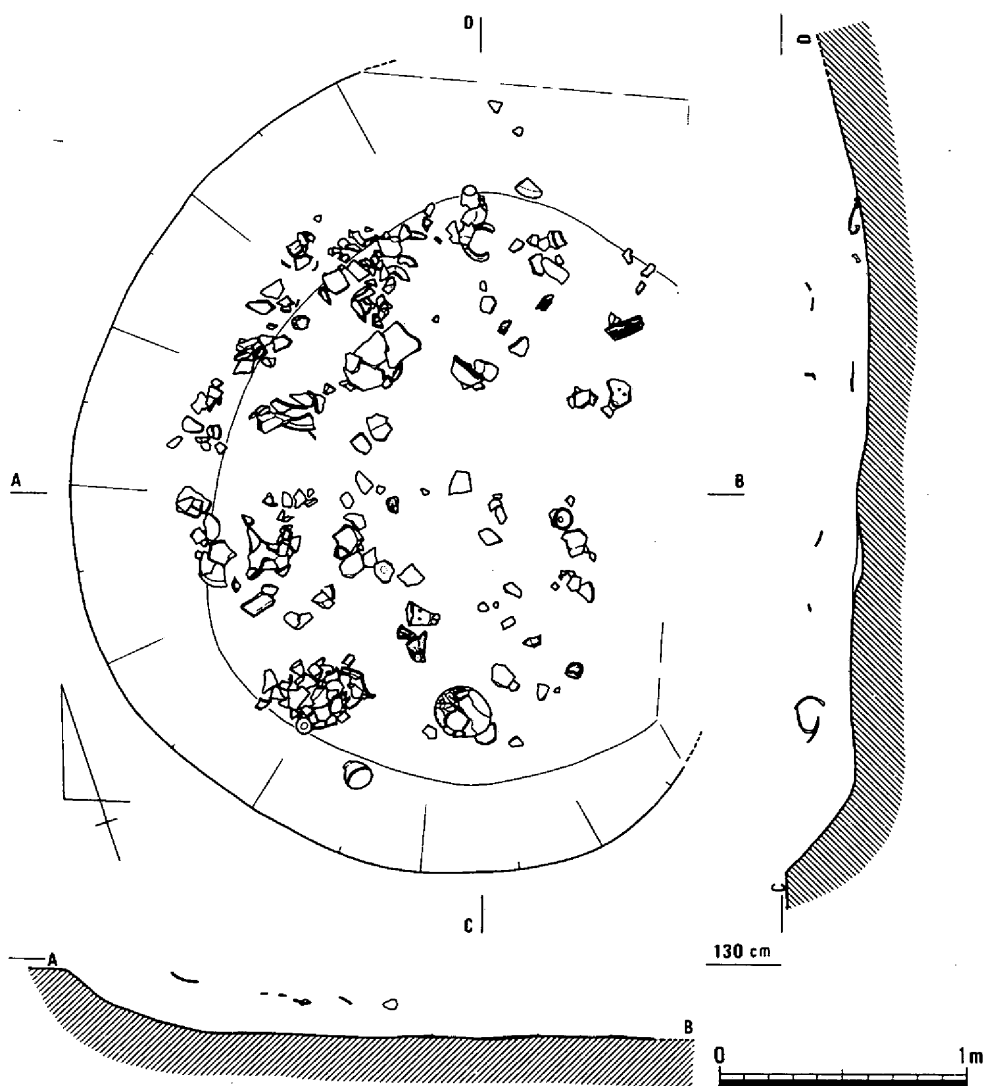
985	壺形土器	16.4	—	—	・ 頸部凸帯のキザミメは爪先痕。	暗茶褐色	長石粒を含む	良好	・ 外面煤付着。
986	壺形土器	18.5	—	—	・ 凸帯のキザミメは爪先痕。口縁端面に円形浮文3個が2段貼り付いている。	淡茶灰色	細砂	"	
987	"	20.7	—	—	・ キザミメは櫛状工具による。	淡黄褐色	微砂	"	・ 煤付着。
988	"	15.9	—	—	・ 外面はハケメがナデで消されている。	淡茶色	細砂	普通	・ 外面煤付着。
989	"	14.9	—	—	・ 内面ナデ。	黄褐色	"	"	
990	"	12.1	—	—	・ 内面指ナデ、指頭・爪先圧痕が残る。	淡灰黄色	"	"	・ 外面煤付着。
991	"	17.7	—	—	・ 口縁端部を折り曲げて、変形の玉縁状口縁。	淡赤色	"	やや不良	・ 器面剥離。
992	"	19.7	—	—	・ 内面指ナデ。	淡黄褐色	"	普通	・ 外面煤付着。
993	"	17.2	—	—	・ 外面ハケメ。	淡灰黄色	"	"	
994	"	16.0	—	—		淡茶色	"	良好	"
995	"	15.6	—	—	・ 内面ナデメ。	黄褐色	"	普通	"
996	"	—	5.7	—	・ 肩部内面に指頭圧痕。	暗茶褐色	微砂	良好	
997	"	—	5.9	—		淡黄灰色	細砂	普通	・ 外面煤付着。

4 弥生時代後期の遺構・遺物

(1) 土 墳

土墳—129 (第 222・223 図)

396—Mの南部，調査区北東端において検出された土墳で，東部および北部は調査区外におよんでいる。平面形は，径 300 cm にもおよぶ円形・あるいは楕円形の想定される大土墳で，深さは約 30 cm を測る。扁平な底は海拔 110 cm である。埋土は下半部に青灰色砂粒を含む黒灰色粘質微砂層が 1 層堆積している。底に貼り付いた状態で数か所炭の堆積がみられる。出土遺物と

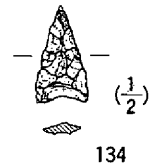


第222図 土墳—129 ($\frac{1}{30}$)

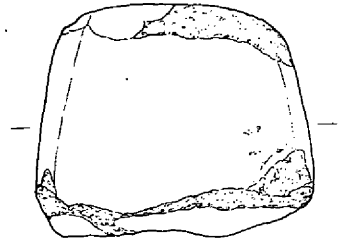
して完形のものを含み壺・甕・高杯・鉢等の弥生時代後期の土器片の他
弥生時代中期の土器片もみられ、弥生時代中期の遺構をこの土壌と一緒に
掘り上げた可能性もある。これらの土器片の他に木片
や、サヌカイト製の凹基式石鏃・磨製石斧から転用したと
思われる敲石等の石製品が出土している。時期は百・後・
Iと考えられる。

土壌—130（第164・224図）

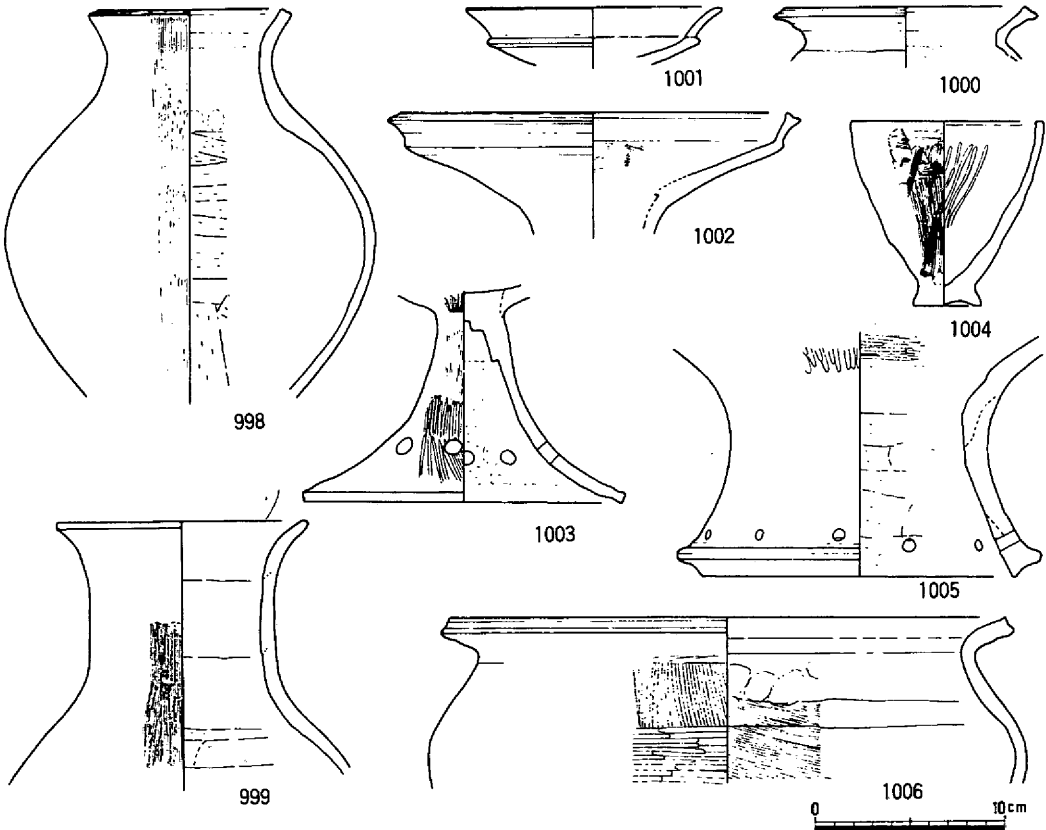
397—M中央北寄との調査区西端において検出された土
壌で北側は土壌—54を東側は土壌—56を南側は土壌—57を
それぞれ切っている。また西部は調査区外におよんでい
る。特に土壌—57との切り合いは検出面では判然とせず、
残した西端の断面からやっと確認されたもので両者の遺物



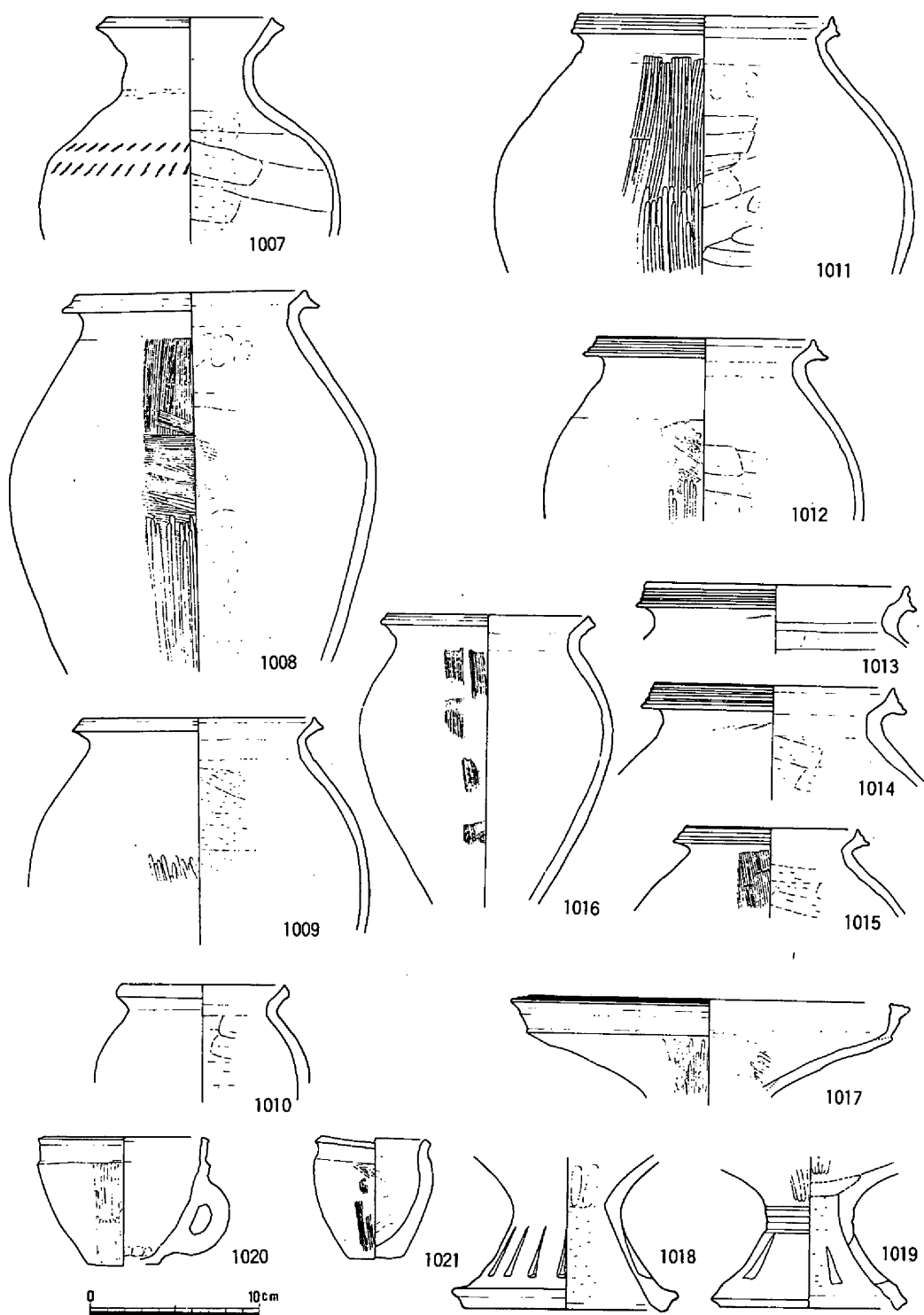
134



135



第223図 土壌—129出土遺物

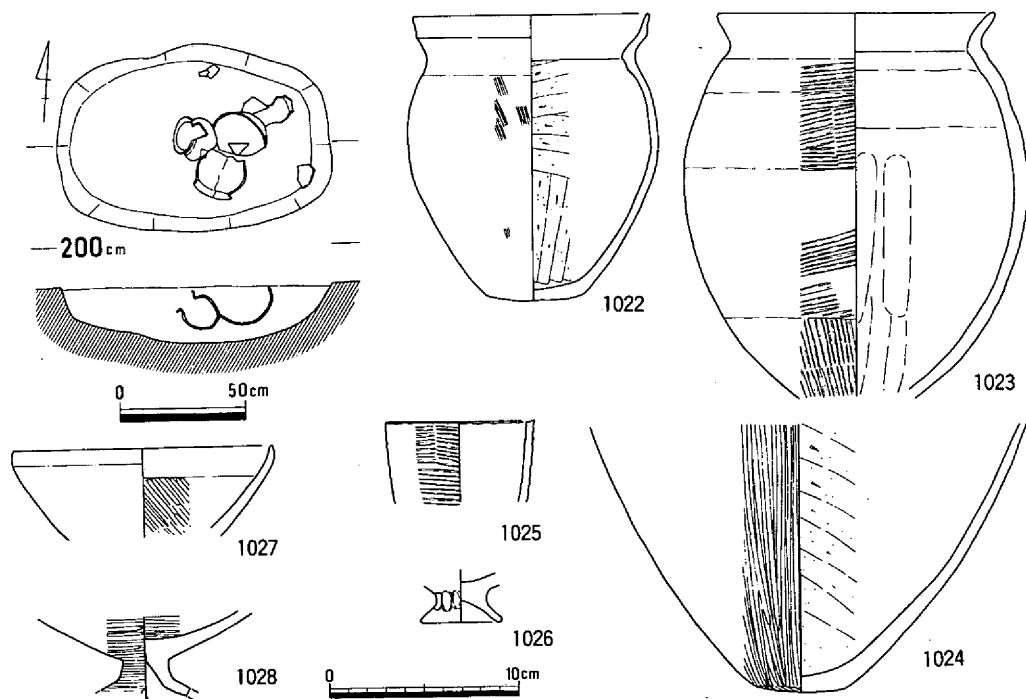


第224図 土壇一130出土遺物

が混入している可能性は高い。平面形は直径 190 cm の円形を呈し深さ 70 cm、扁平な底は海拔 57 cm を測る。埋土は 4 層に分かれ 3 層と 4 層の間に炭層が約 2 cm 堆積している。また 2・3 層には炭・焼土が含まれている。出土遺物として壺・甕・高杯等の土器片 1007～1021 の中に、カップ型の土器 1020 がある。またリン酸鉄が検出された。時期は百・後・I である。（内藤）

土壌—131（第225図）

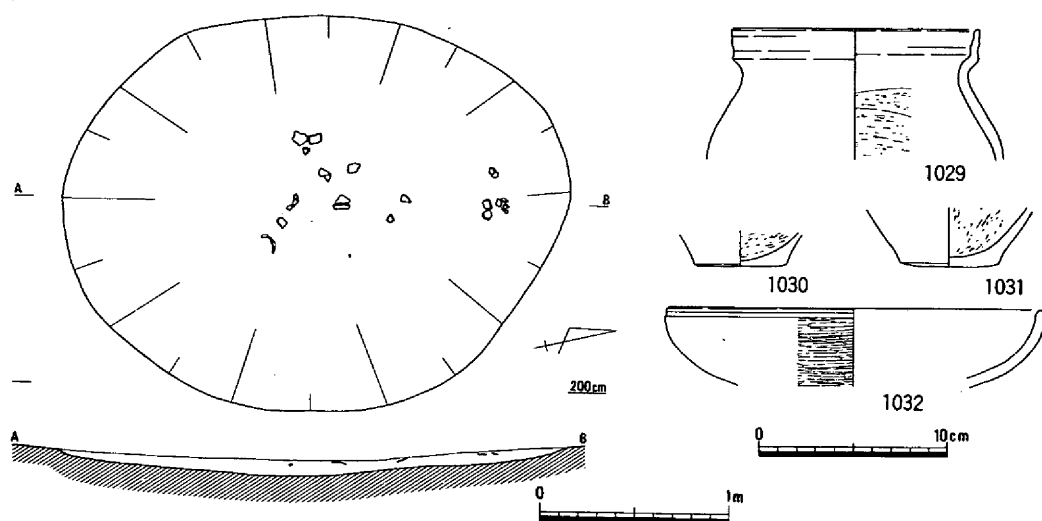
300—M の北西部に位置する東西に長軸を有する小判形平面の土壌である。大きさは長径 110 cm・短径 75 cm・深さ 23 cm を測る。埋積土は、淡茶褐色砂で百・後・IV の洪水砂と同じものである。遺物は、甕・高杯・製塩土器が出土し、甕はほとんど完形の品が土圧のみで割れた状況を示していた。叩きのある甕の胎土や吉備形の甕の胎土も岡山産のものと少し異なる様である。出土土器と埋積土から考えて、この土壌は百・後・IV に比定したい。（浅倉）



第225図 土壌—131 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

土壌—132（第226図）

305—L の中央付近、灰茶褐色微砂層（第147図、28）の上面で検出された。長径 265 cm・短径 212 cm の楕円形を呈する。残存状況はきわめて悪く、皿状の浅い底部のみで、深さは中央部で 9 cm にすぎない。坑内埋土は青灰褐色粘性砂質土 1 層のみである。坑内には土器片が散在していて、いずれも底面から 5 cm 前後浮いた状態にあった。土器片は数個体の破片で所々で密接していた。出土した土器の示す年代は百・後・IV と考えられる。（岡本寛久）



第226図 土坑—132 ($\frac{1}{40}$)・出土遺物

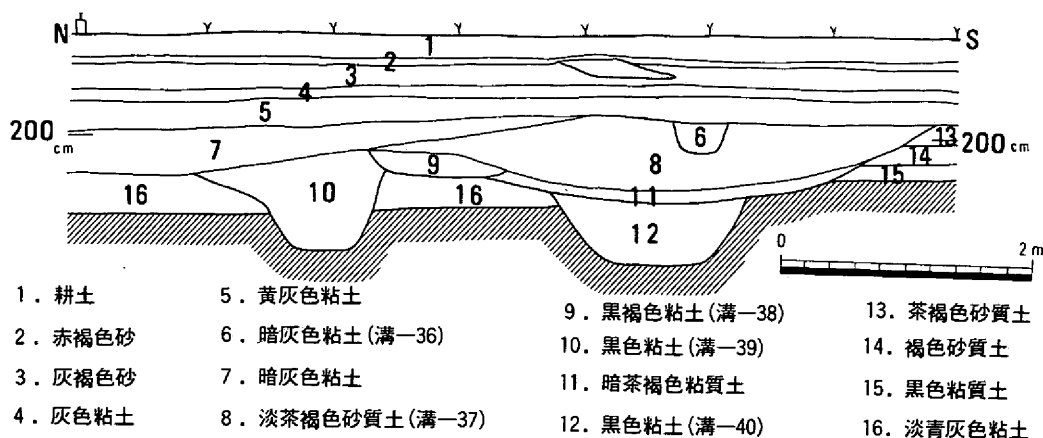
(2) 溝

溝—40 (第 227 図)

399—Mの南部に位置する溝で、溝—31の北320cm離れて平行して流走する。すなわち西南西から東北東に延びる。長さ700cm・幅140cm・深さ50cm、溝底の海拔高100cmを測る。断面形は逆台形を呈す。埋積土は黒色粘土で、遺物は全く出土していない。したがって遺物からこの溝の廃絶の時期は判らないが、土層観察によると、弥生中期終末の土器片を包含する淡青灰色粘土に切っていることから、少なくともこの溝の掘削の時期は百・中・Ⅲよりは新しいと言える。

溝—39 (第 227 図)

溝—40の北側約120cm離れて、それと平行に流走する溝である。長さ700cm・幅100cm・深さ50



第227図 溝36—40土層断面図 ($\frac{1}{60}$)

cm, 溝底の海拔高110cmを測る。断面形は、北側が2段に掘り下げられた逆台形を呈する。埋積土は、黒色粘土で遺物は全く出土していない。この溝も土層から溝—40と同時期に比定したい。

溝—38 (第227図)

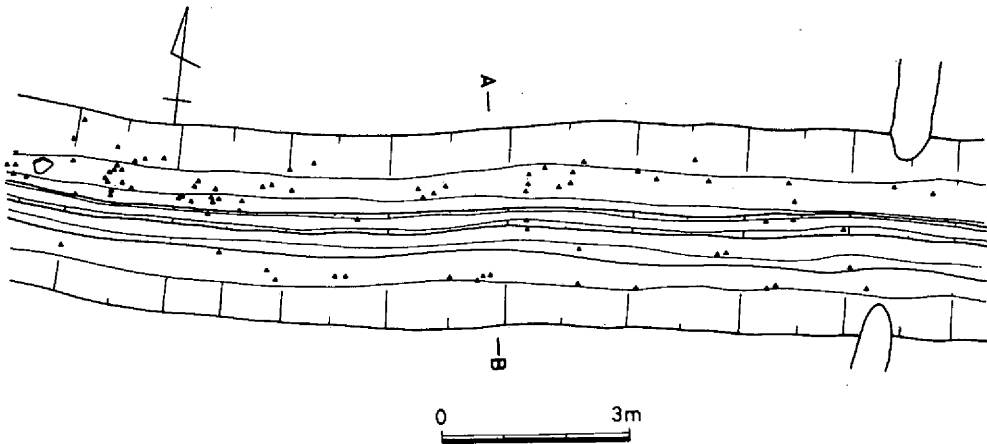
溝—40と溝—39との間にあって、どちらにも平行して流走する浅い溝である。長さ700cm・幅150cm・深さ15cm, 溝底の海拔高は170cmを測る。埋積土は、黒褐色粘土で非常に堅く締っている。遺物は全く出土していない。この溝の掘削時期は、溝—39よりは新しく、溝—37よりは古いということが土層断面の切り合いから判明する。

溝—37 (第227図)

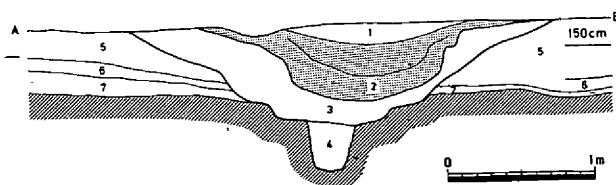
溝—40の直上にある幅の広い浅い溝である。大きさは長さ700cm・幅400cm・深さ50cm, 溝底の海拔高150cmを測る。埋積土は2層に分かれ、上層は淡茶褐色砂質土で水田址埋積土の洪水砂と同じものと考えることができる。遺物は全く出土していない。この溝の廃絶の時期は百・後・IVに比定したい。溝—40の上層の凹地と考えることもできる。今後の課題である。(浅倉)

溝—41 (第228・229図, 図版14)

L~Qに流走する溝は百・後・IIより百・後・IVまでの3期に同一コースを重複していた痕

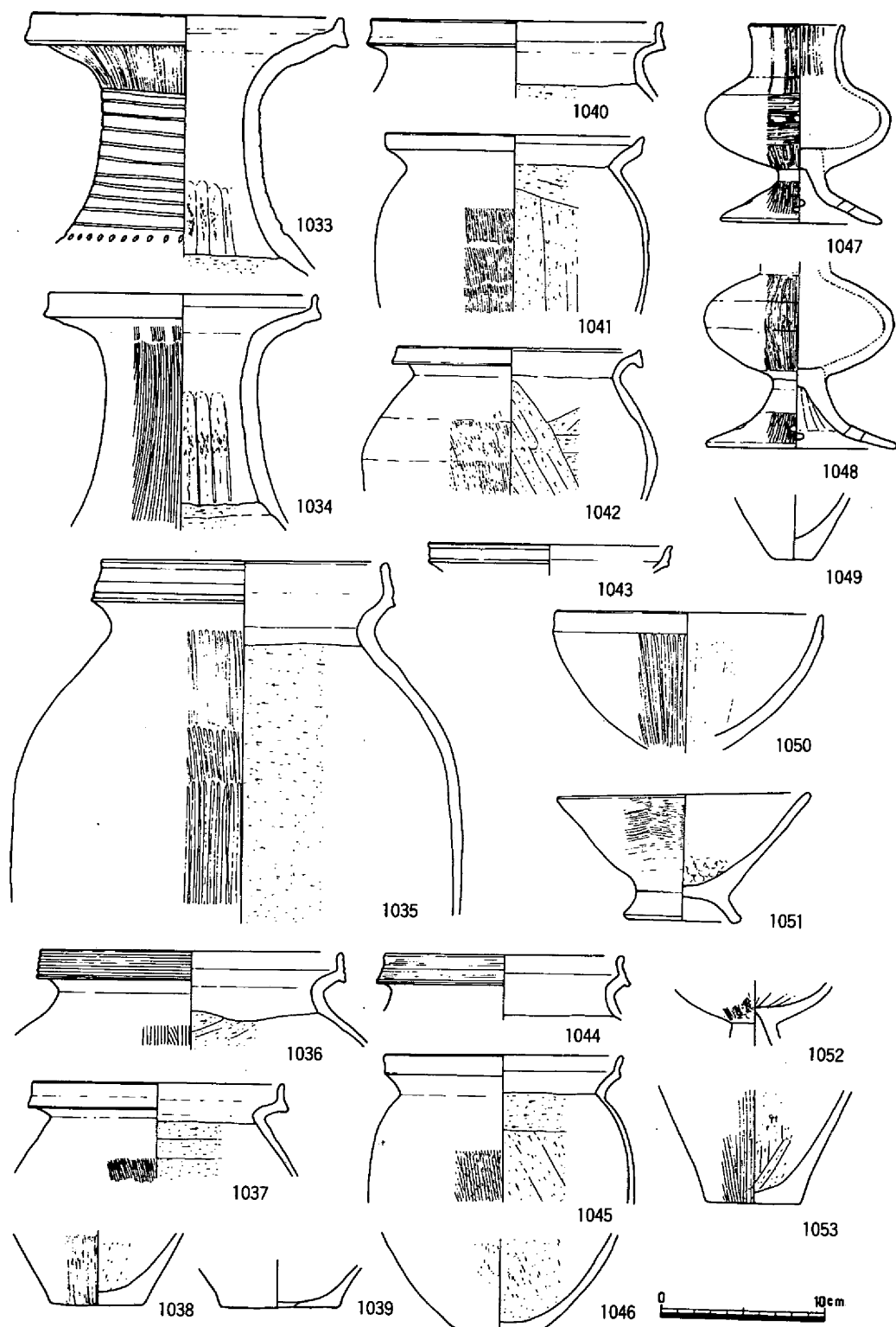


第228図 溝—41 ($\frac{1}{120}$)



第229図 溝—41断面図 ($\frac{1}{50}$)

1. 暗青灰色(粘性)
2. 黄褐色(洪水砂)
3. 暗青灰色(粘性)
4. 黒灰色(粘性・炭を含む)
5. 暗青灰色
6. 淡青灰色
7. 黒色土(粘性)



第230図 溝一41出土遺物

跡をとどめている。最下層に幅 35 cm、深さ 35 cm の溝一 9（大上田地区より延長）、中層に幅 280 cm、深さ 67 cm の溝一 41、そして最後に機能していた幅 220 cm、深さ 52 cm の溝一 42 の 3 本である。溝一 9 には黒色土が埋まり、種子分析ではアカザ 13、ノミノツヅリ 9・イネ科 8・ヒメクグ 2・コナギ 2・タカサブロウ・ノゼオトギリ・ナス科・ヒメミカンソウ各 1 等が種類同定されている。遺物は検出されなかった。

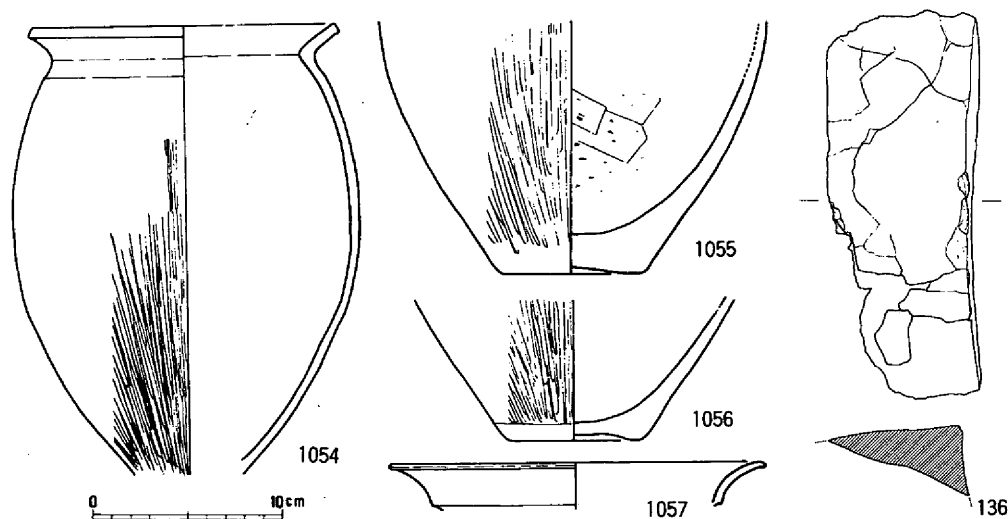
溝一 41 は百・後・Ⅲ（第 230 図）の土器片が出土しており、とくに N・O に多くみられ、溝北側より投棄された状況を示す。

溝一 41 は今谷遺跡橋脚部 302—S、五反田樋門部 399—M の 2 か所、東西方向に検出されており、第 3 微高地高所をとり巻く溝になる可能性が考えられる。（高畑）

（3）その他の遺構

土器溜り一 1（第 231 図）

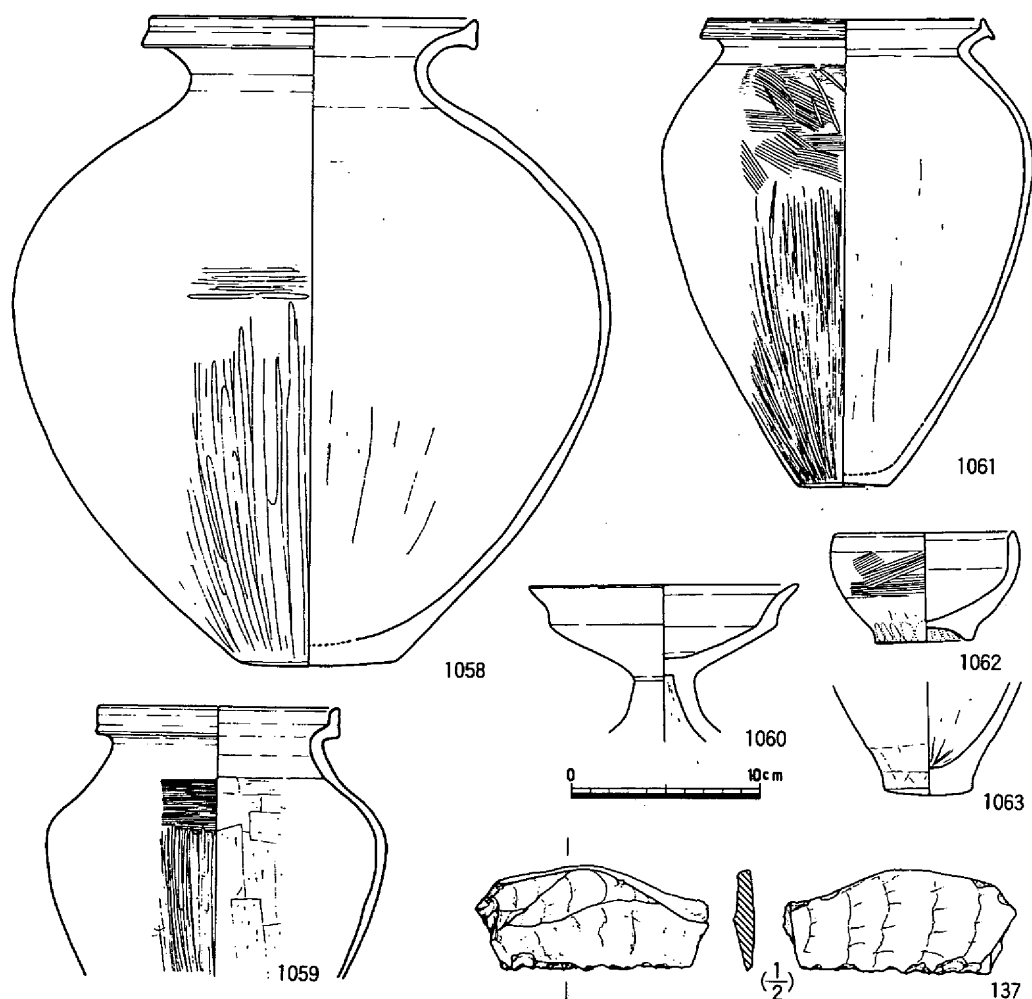
300—M と 301—M の間、調査区の東端で一括して出土したものであるが土壌等の遺構は確認できなかった。遺物は南北 95 cm・東西 75 cm の範囲で海拔 180～190 cm の褐色砂質土層中に、甕・高杯等の土器片 1054～1057 や半花崗岩製の砥石 136 がまとまってみられる。また南東部には 10 cm 程の大きさの数個の角礫がまた、その下の一部に炭もみられた。時期は百・後・Ⅱである。



第231図 土器溜り一 1 出土遺物

土器溜り二 2（第 232 図）

300—M の中央、土器溜り一 3 の東隣において完形に復原できた甕を中心にした南北 40 cm・東西 35 cm で、海拔 200～220 cm の褐色砂層中にみられた土器溜り 1061～1063 で、土壌等の遺構を検出することはできなかった。時期は百・後・Ⅲである。



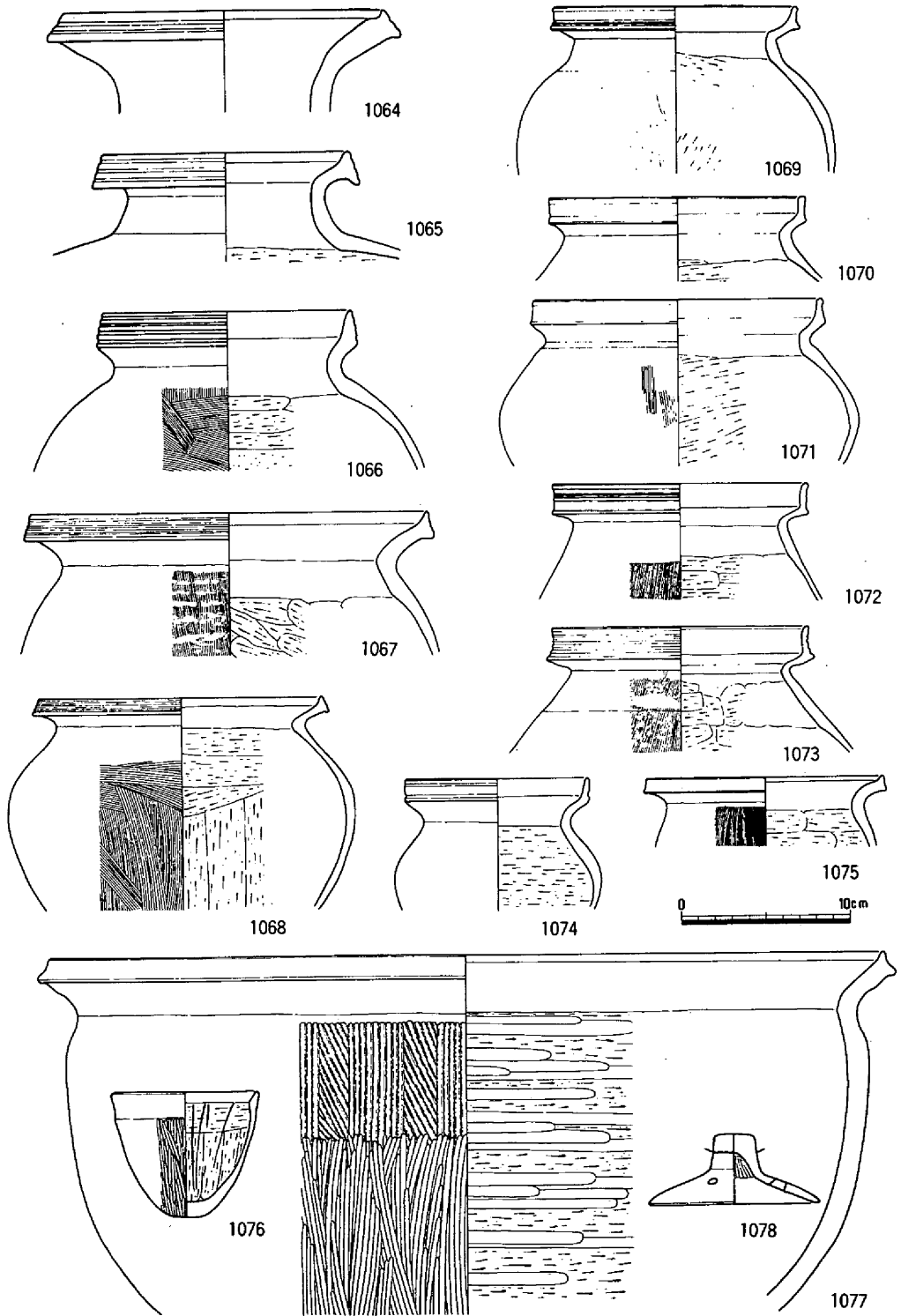
第232図 土器溜りー2・3出土遺物

土器溜りー3（第232図）

300—M中央の調査区西部で、土器溜りー2の西隣において、東西130cm、南北60cm、海拔190～200cmの濃褐色砂質土層中において、完全に復原された壺や甕・高杯等の土器片1058～1060、それにサヌカイト製の石庖丁137等が、まとまってみられたが、土壌等の遺構を検出することはできなかったもので、時期は百・後・Ⅲである。（内藤）

土器溜りー4（第233図）

304—Nのほぼ中央部に、東西方向を呈する状態で検出した土器溜りである。この土器溜りの北側には、本調査区を縦貫している溝—41が存在する。土器が固まって出土した地点は、周辺よりも緩やかに傾斜している浅い窪地になっているだけである。底部には砂質土が認められるものの、単なる土器溜りで、溝のような性格を有する遺構ではないと判断される。（福田 正継）



第233図 土器溜り一4出土遺物

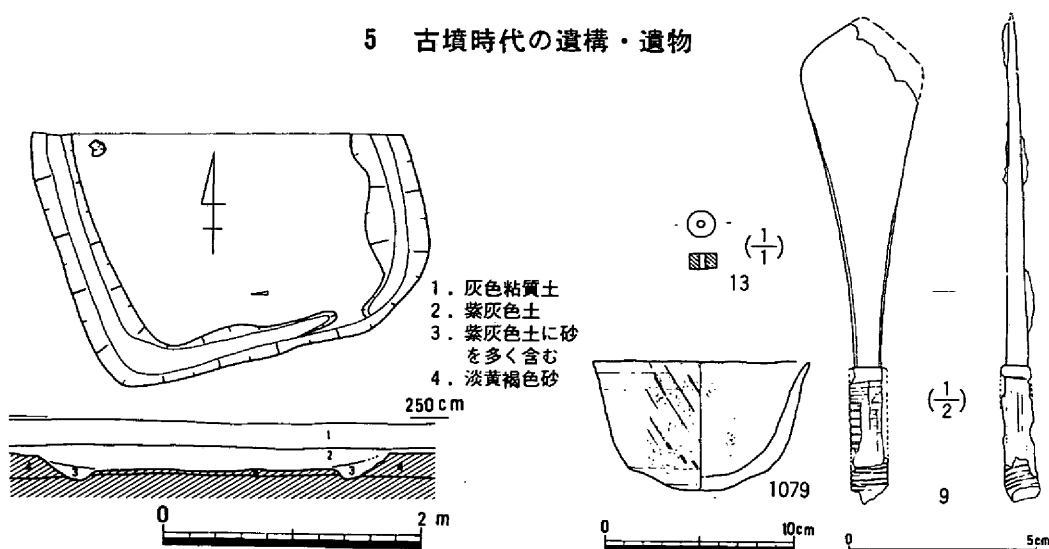
表-18 弥生時代後期土器観察表

挿図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
土 壙 - 129 (第223図)									
998	壺形土器	9.7	—	—	・頸部内面指ナデ、外面ハケメ。	黄 灰 色	細 砂	普 通	
999	〃	13.0	—	—	・外面ハケメ、内面肩部以下ヘラケズリ。	明茶褐色	微 砂	〃	・器面剝離。
1000	甕形土器	12.6	—	—	・外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	茶 灰 色	〃	良 好	
1001	高杯形土器	13.5	—	—		黄 桃 色	細 砂	や 不 良	
1002	〃	20.6	—	—	・杯部内面ヘラミガキ。	淡黄桃色	〃	〃	・器面剝離。
1003	〃	—	16.9	—	・脚部の円形透孔は2個づつ計8個。	淡 茶 色	〃	良 好	
1004	鉢形土器	10.0	3.6	9.7	・内面暗文ふうのヘラミガキ。	淡茶褐色	〃	〃	・完形品、黒斑。
1005	台付土器	—	16.5	—	・脚部に円形の透孔が巡る。	明茶褐色	〃	〃	・外面黒斑
1006	甕形土器	29.5	—	—	・内面に指頭圧痕。	淡黄褐色	〃	〃	
土 壙 - 130 (第224図)									
1007	壺形土器	9.8	—	—	・刺突は櫛状工具による。	暗茶褐色	細 砂	良 好	・外面煤付着。
1008	甕形土器	13.6	—	—	・内面肩部上半指オサエ、下半ケズリ。	淡黄褐色	長石粒を含む	〃	〃
1009	〃	13.8	—	—	・内面ヘラケズリ。	淡黄灰色	細 砂	〃	
1010	〃	9.8	—	—	〃	淡赤褐色	〃	〃	・煤付着。
1011	〃	15.3	—	—	・内面肩部指オサエ。	淡黄褐色	〃	〃	〃
1012	〃	13.0	—	—	・内面肩部指ナデ。	〃	微 砂	普 通	〃
1013	〃	15.6	—	—		暗茶灰色	細 砂	良 好	〃
1014	〃	14.3	—	—	・外面はヘラ状の工具でナデ。	淡茶灰色	〃	〃	
1015	〃	10.3	—	—		〃	〃	〃	
1016	〃	12.0	—	—	・外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	暗黒褐色	〃	〃	・煤付着。
1017	高杯形土器	21.8	—	—	・杯部外面ヘラケズリ。	淡黄褐色	微 砂	普 通	
1018	〃	—	12.1	—	・脚部三角形の透しは内側に達していない。	〃	〃	〃	・剝離が著しい。
1019	〃	—	10.6	—	・脚部三角形の穿孔が5個。	〃	長 石 粒	良 好	
1020	把手付鉢形土器	9.4	4.2	7.6	・内面指ナデ。	暗茶褐色	石 英 粒	〃	
1021	小型鉢形土器	6.2	3.2	7.1	・内面ナデ、外面胴中央部ハケ下半ヘラミガキ。	乳 褐 色	粗 砂	〃	・下部に黒斑。
土 壙 - 131 (第225図)									
1022	甕形土器	12.5	5.0	15.0	・口縁部ヨコナデ。胴部外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	淡茶褐色	2mm以下の砂	良 好	・ほぼ完形。
1023	〃	14.5	—	—	・口縁部ヨコナデ。胴部外面平行タタキメ、内面ナデ。	外暗茶褐色 内暗褐色	1mm以下の有色砂	〃	・外來の土器。
1024	〃	—	4.8	—	・胴部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	赤 褐 色	黒雲母多し	〃	・外來系。
1025	深鉢形土器	8.0	—	—	・胴部外面平行タタキメ、内面ナデ。	黄 褐 色	2mm以下	非常に良好	・製埴土器。
1026	〃	—	4.5	—	・指頭整形。	暗赤褐色	3mm以下	〃	〃
1027	高杯形土器	13.8	—	—	・口縁部ヨコナデ。胴部ヘラミガキ。	赤 褐 色	1mm以下	〃	・小破片。
1028	〃	—	—	—	・円孔は4個。外面ヘラミガキ。	〃	精選粘土	やや不良	〃
土 壙 - 132 (第226図)									
1029	甕形土器	12.9	—	—	・内面のヘラケズリは粗い。	淡赤褐色	細砂・砂粒を多量に含む	良好、軟質	・口縁部%弱残存。
1030	〃	—	4.9	—	・肩部外面と底面の調整はヘラミガキか。				
1031	〃	—	5.1	—	・底部はわずかに丸みをもつ。	外灰褐色 内灰白色	細砂・砂粒を多く含む	やや不良、軟	
1032	鉢形土器	19.6	—	—	・口縁端に沈線状のわずかな段あり。	淡褐色～ 淡灰褐色	細砂含むも精良	良 好	・%強残存。
溝 - 41 (第230図)									
1033	壺形土器	18.5	—	—		灰 黄 色	白色小砂粒	良 好	
1034	〃	16.0	—	—	・外面ハケメ。内面シボリメ。	淡 褐 色	〃	〃	
1035	甕形土器	17.0	—	—	・丁寧なヘラケズリ。	灰 白 色	〃	〃	・小片接合。
1036	〃	18.0	—	—	〃	淡 灰 色	〃	〃	
1037	〃	15.1	—	—	・外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	淡灰黄色	精製粘土	〃	

第3章 第2節 東苗代調査区

検出番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
1038	甕形土器	—	5.6	—	◦外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	褐色	白色小砂粒	良好	◦外面黒斑。
1039	—	—	7.0	—	◦底部ヘラミガキ。	暗褐色	—	—	—
1040	—	17.5	—	—	—	淡褐色	精製粘土	—	—
1041	—	18.6	—	—	◦外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	灰黄色	—	—	◦外面黒斑。
1042	—	14.7	—	—	—	灰黄白色	—	—	◦外面煤付着。
1043	—	14.8	—	—	—	褐色	白色小砂粒	—	—
1044	—	14.3	—	—	—	暗灰黄色	—	—	—
1045 1046	—	14.3	5.2	—	◦外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	淡褐色	精製粘土	—	◦外面黒斑。
1047	台付盞形土器	5.6	9.7	12.2	—	赤褐色	—	—	—
1048	—	—	11.4	—	—	—	—	—	—
1049	甕形土器	—	2.3	—	—	黄灰色	—	—	—
1050	鉢形土器	16.3	—	—	—	淡灰黄色	—	—	—
1051	台付鉢形土器	15.3	6.5	7.9	◦器内外面凹凸。	灰 色	白色小砂粒	—	◦外面黒斑。
1052	高杯形土器	—	—	—	—	淡褐色	—	—	—
1053	甕形土器	—	5.6	—	◦外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	灰白色	—	—	◦外面黒斑。
土器溜り - 1 (第231図)									
1054	甕形土器	16.1	—	—	◦「く」の字状口縁の端部が僅かに下にのびる。外面は細かいヘラミガキ。	外縁黄灰色 内縁灰白色	細 粒	やや不良	◦内器面剝離。 ◦外面煤付着。
1055	壺形土器	—	7.4	—	◦端部を少しつまみ出し、上げ底あうの底部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	黄灰色	1～2mmの小石粒を含む	普通	◦底が厚い
1056	甕形土器	—	7.0	—	—	灰黄色	—	—	—
1057	高杯形土器	20.0	—	—	—	—	微 砂	—	—
土器溜り - 2 (第232図)									
1058	甕形土器	16.9	9.2	34.3	◦外反した口縁の端部が上下に拡張。外面はヘラミガキ、内面は肩部以下ヘラケズリ。	外縁黄灰色 内縁灰白色	細 砂	普通	◦器面剝離で調整不 鮮明。
1059	甕形土器	12.5	—	—	◦外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	赤褐色	—	良好	—
1060	高杯形土器	14.2	—	—	—	淡赤褐色	微 砂	普通	◦器面剝離。
土器溜り - 3 (第232図)									
1061	甕形土器	14.6	4.7	24.8	◦外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	黄灰色	細 砂	普通	◦外面煤付着。
1062	小型鉢形土器	9.5	5.3	5.8	◦底は指でつまみ出している。外面ハケメ。	赤褐色	—	やや不良	—
1063	甕形土器	—	4.7	—	◦端部は指オサエで調整。	淡赤褐色	小石粒を含む	普通	—
土器溜り - 4 (第233図)									
1064	壺形土器	—	—	—	◦内外面とも全体にヨコナデ。	淡褐色	砂粒を含む	良好	◦黒斑。
1065	—	14.8	—	—	◦口縁部と頸部は内外面ともヨコナデ。	褐色	—	—	—
1066	甕形土器	15.0	—	—	◦外面胴部にはハケメ。	淡黄灰色	水澁粘土	—	—
1067	—	—	—	—	◦外面胴部はハケメ、上面にヨコナデ。	—	砂粒を含む	—	—
1068	—	17.0	—	—	◦口縁部はヨコナデ。外面胴部にはハケメ。	淡灰褐色	—	—	◦煤が付着。
1069	—	14.6	—	—	◦口縁部と頸部は内外面ともヨコナデ。	褐色	—	—	—
1070	—	15.2	—	—	—	淡灰褐色	—	—	—
1071	—	—	—	—	◦外面胴部にはかすかにハケメ。	褐色	—	—	◦煤が付着。
1072	—	—	—	—	◦口縁部と頸部は内外面ともヨコナデ。	—	—	—	—
1073	—	15.2	—	—	◦内面胴部はヘラケズリの後にナデアゲ。	—	—	—	—
1074	—	—	—	—	◦口縁部と頸部は内外面ともヨコナデ。	—	—	—	—
1075	—	—	—	—	◦外面胴部には縦方向のハケメ。	—	—	—	—
1076	小型鉢形土器	13.8	2.2	7.4	◦外面体部は縦方向のヘラミガキ。	淡褐色	—	—	◦黒斑。
1077	鉢形土器	—	—	—	◦内面体部はヘラケズリの後にヘラミガキ。	—	—	—	—
1078	高杯形土器	—	10.0	—	◦短脚で円孔は3箇所存在する。	淡黄灰色	—	—	—

5 古墳時代の遺構・遺物



第234図 竪穴式住居—21 ($\frac{1}{60}$)・出土遺物

(1) 竪穴式住居

竪穴式住居—21 (第 234 図)

303—Mから303—Nの調査区北端で検出されたほぼ方形を呈する住居址で、淡黄褐色細砂層に掘り込まれた住居址で、紫灰色土によって埋まるものである。住居址の埋土の上層で白玉が1点出土した。住居址は、壁に沿って溝がほぼ巡るものであるが、柱穴は検出されなかった。住居址の床面からは、鉄鏃1点9・鉢1点1079が出土した。住居址の時期は、出土した土器が、百・古・Ⅲであることから同期と考えられる。

(2) 井戸

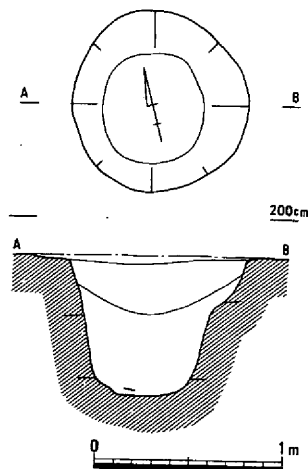
井戸—9 (第 235 図)

304—Mで淡黄褐色細砂層の上面から掘り込まれたもので、平面形態は、ほぼ円形を呈する。検出した面での径は98cm、底面の径55cmを測る。底面に接する付近で壺もしくは甕の胴部と考えられる土器片1点が出土したが、時期の決定はできない。検出した層位からすれば、古墳時代前期かと推定される。

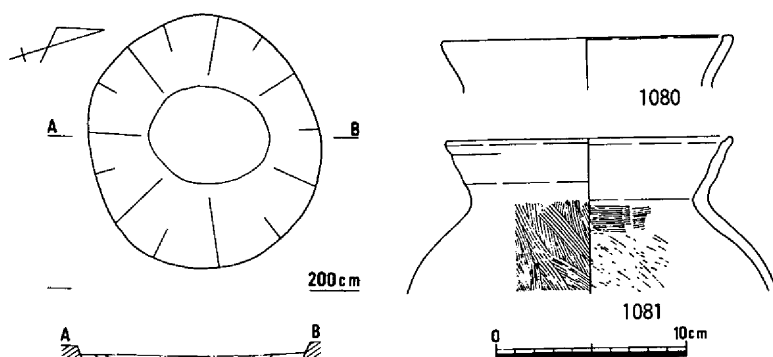
(井上)

井戸—10 (第 236 図)

305—Lの南部、調査区の中央付近で検出した径90×100cmの円形に近い井戸状の土坑である。底面では長径50cm、短径40cmの楕円形を呈す。断面は逆台形を呈しほぼ水平な底面を



第235図 井戸—9 ($\frac{1}{40}$)

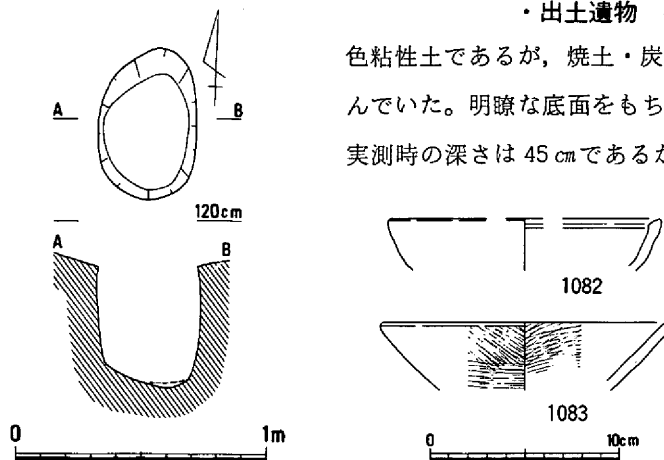


1. 茶褐色粘質土
2. 灰褐色粘質土
3. 濃灰褐色粘質土(炭)
4. 灰黄色粘質土

第236図 井戸—10 ($\frac{1}{30}$)

・出土遺物

円形土坑である。坑内埋土は暗灰色粘性土であるが、焼土・炭・木片や植物の腐蝕物を多量に含んでいた。明瞭な底面をもち、坑壁は垂直に近く立ち上がる。実測時の深さは45cmであるが、検出面は10cm程度上方であっ



第237図 土坑—133 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

られる。埋土の状況からすれば柱穴とはみなし難く、微高地端という位置と底面の標高から井戸と考えるのが妥当であろう。なお、出土土器の年代は百・古・Ⅱと考えられる。(岡本)

(4) 溝

溝—43 (第238図)

396—Mの中央南寄り、調査区北東端において検出された北西—南東方向に流走する溝状遺構で幅50cm・深さ15cm、底の海拔は150cmを測る。流走方向は検出幅がわずか260cm程で判然とはしない。出土遺物としては調査の東端部、溝の底から20cmのところで見つ

なす。遺構内埋土は4層の堆積をなし、下層より若干の土器片が出土した。出土土器から百・古・Ⅲの時期を示す。

(山磨 康平)

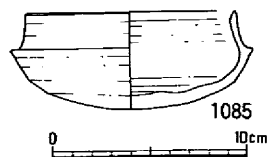
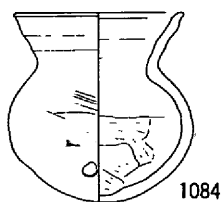
(3) 土 坑

土坑—133 (第237図)

306—Lの微高地 南端付近に位

置する。長径60cm、短径39cmの楕

円形土坑である。坑内埋土は暗灰色粘性土であるが、焼土・炭・木片や植物の腐蝕物を多量に含んでいた。明瞭な底面をもち、坑壁は垂直に近く立ち上がる。実測時の深さは45cmであるが、検出面は10cm程度上方であっ



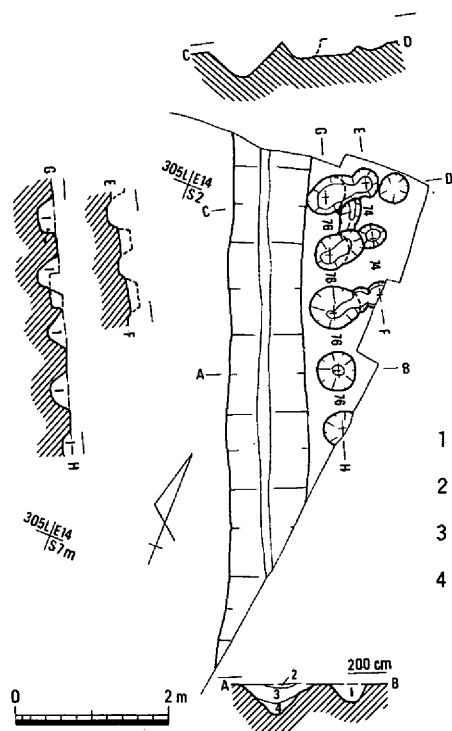
第238図 溝—43出土遺物

った小型丸底壺・須恵器の杯身等完形品がみられる。時期は5世紀後半である。（内藤）

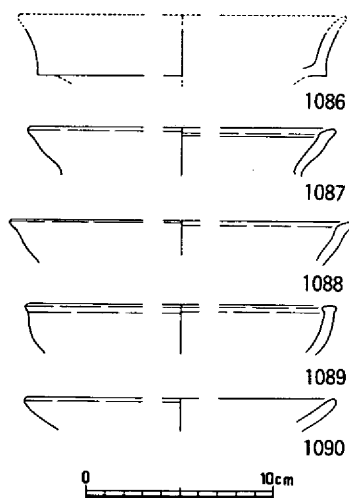
溝—44

303—Lから304—Lの東端部を北北西から南南東に流れる溝で、総延長14mを調査した。検

出した溝の上端の幅は、45～60cm、底部は、18～25cmを測る。溝は、淡黄褐色細砂層に掘り込まれたもので、紫灰色土によって埋まるものである。出土遺物が無いため、時期は明確ではないが、竪穴式住居—21とほぼ同一時期と推定される。（井上）



1. 灰褐色粘質土
2. 灰茶褐色土
3. 茶褐色粘質土
4. 暗茶褐色粘質土



第239図 溝—45・柵列($\frac{1}{100}$)・出土遺物

溝—45・柵列（第239図）

304—L中央部から305—L東部にかけて北北西—南南東方向に流走している溝に柵列を伴う遺構である。溝は検出長20m・幅1m・深さ40cmを測り断面V字形に近い形状を呈す。柵はこの溝の東側にはほぼ平行に径50cm・深さ20cm程度の浅い柱穴で約30cm前後の間隔に2列認められた。これらの遺構の時期は出土土器から百・古・Ⅲの時期とみられる。（山磨）

溝—46（第150図）

303・4—Oの東側に位置し、南北方向に流走する・幅150～170cm・深さ約15cmの溝である。溝内には6mの間隔をおいて細片の土器溜りが認められ、両者とも細片に破砕されており、特徴は口縁・胎土等より観察する以外に方法がない状態である。時期は百・古・Ⅲに比定できる。

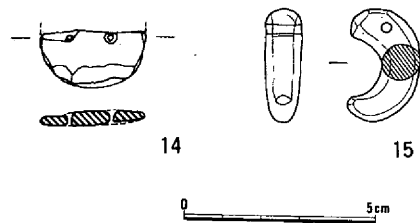
溝—47（第150図）

前述の溝—46下位より検出されたもので、長さ15m・幅約50cm・深さ約10cmを測る溝であ

る。百・後・Ⅳの溝を切り、方向を同一にする百・古・Ⅲの溝下に検出されたことなどより、百・古・Ⅲに近い時期を考えられる。(高畑)

(5) 包含層出土の遺物

当調査区においては、古墳時代の遺構がそれ程遺存しておらず、比較的薄い古墳時代の包含層からの出土遺物もあまり多くない。特に土器は細片が多く図示し得なかった。14は304—Mにおいて出土した滑石製の双孔円板で半分近く欠損している、また磨耗も激しい。15は304—Oから出土した滑石製の勾玉である。この他に包含層からは石製品がかなり出土している。(内藤)



第240図 包含層出土遺物 (1/2)

表一19 古墳時代土器観察表

挿図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
竪穴式住居 - 21 (第234図)									
1079	鉢形土器	11.7	—	6.8	・外面は凹凸が全面に認められる。指頭圧痕。	淡 褐 色	精製粘土	良 好	
井戸 - 10 (第236図)									
1080	甕形土器	15.3	—	—	・口縁端内面わずかに肥厚。	暗 灰 褐色	砂粒・細砂を多量に含む	良 好	・1/4弱残存。
1081	"	14.9	—	—	・頸部内面はヘラケズリの後にハケ。	淡 灰 褐色	細砂含むも緻密	やや不良、軟	・口縁部完存。
土壇 - 133 (第237図)									
1082	甕形土器	—	—	—	・口縁端部内面に肥厚。	暗 灰 褐色	細砂わずかに精良・緻密	良 好 緻	・小破片。
1083	鉢形土器	15.0	—	—	・内外面のハケは粗い。	灰 褐 色	細砂粒を多量に含む	"	・1/6弱残存。
溝 - 43 (第238図)									
1084	小型丸底壺	8.6	—	10.0	・外面ナデ、胴尖部はハケメ。	乳 白 色	細 砂	良 好	・黒斑あり。
1085	杯 身	10.8	—	5.1	・回転は左。	淡 灰 色	小石粒を含む	堅 緻	
溝 - 45・柵列 (第239図)									
1086	壺形土器	—	—	—	・ヨコナデ調整。	灰 褐 色	石粒・砂粒を多く含む	良 好 緻	・小破片。
1087	甕形土器	—	—	—	・断面弓状の曲線。 ・口縁端に広い内傾面をもつ。	褐 色	砂粒・細砂を多量に含む	"	"
1088	"	—	—	—	・口縁端部外側へ屈折。	淡 茶 褐色	"	良 好	"
1089	"	—	—	—	・口縁端部内外両面で肥厚。	外淡灰褐色 内 黒 色	"	"	"
1090	"	—	—	—	・わずかに内湾きみ。	淡 灰 褐色	細砂粒を多く含む	良 好 緻	"

6 中世の遺構・遺物

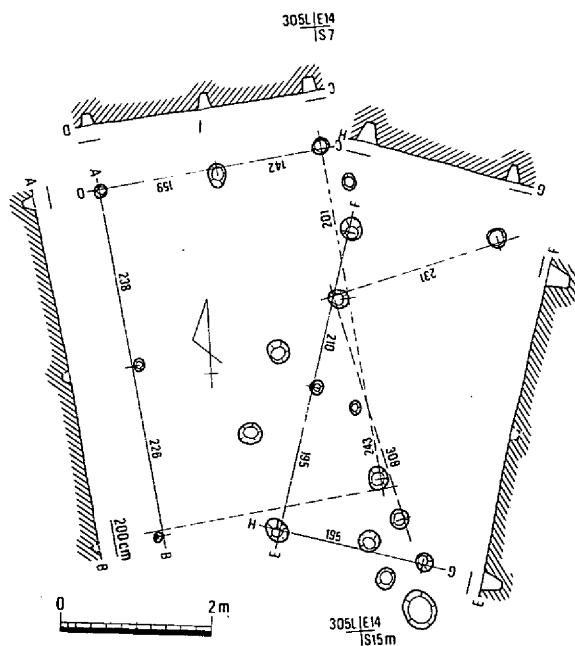
(1) 建物

建物—22・23 (第241図)

305—Lの中央部東寄りに検出した柱穴群から復元した掘立柱建物である。少なくとも2棟は確認できそうである。建物—22は2×2間と考えられるが、南辺では中央の柱穴は検出できず、南東隅の柱穴もやや北にずれて位置する。東辺の中央柱穴は別の建物の可能性がある。北辺・西辺は共に正しく二分されていない。柱穴は直径20~30cmを測る。西辺柱穴は1段深く削平されているため小さい。建物—23は西辺2間、南辺1間分を復原しているが、南辺はさらに東へ延びるようである。柱間はいずれも200cm前後とほぼ等しいが、北辺に対応する柱穴をみないこと、西辺の中央柱穴が小さいことなど、建物とすることに対して、かなり疑問の余地がある。建物—22の西辺の方位はMN—7°30′—W, 23の西辺はMN—16°15′—Eを測る。柱穴群の埋土はいずれも灰色粘土であり、おおまかに中世のものとするが、遺物もなく、的確な年代比定はできない。これらの建物はいずれも柱穴が完全に揃わず、厳密な規格性ももたない小規模な掘立柱建物である。したがって、居住に関したものではなく、農作業に付随した仮設的な小屋と考えるべきである。重複する柱穴の密集がそのことを語っている。なお、この点について306—Lの建物—24との関連が注意される。点在する掘立柱小屋とその間の広い空閑地という図式が可能かどうかである。

建物—24 (第242図)

柵と重複して検出された柱穴群から、1棟の掘立柱建物が復原された。いささか不整形ではあるが建物と認められる。東辺と南辺は直交し、共に2間である。両辺の全長は異なり、柱間も一定しないが、南東隅側がいずれも短い。建物の北西隅は対角線から北へずれて位置し、このため建物平面は不整な四辺形となる。北辺と西辺は1間である。両辺の全長はこれも一致しないが、北辺と東辺、西辺と南辺は近似した値を示す。この



第241図 建物—22・23 (1/100)

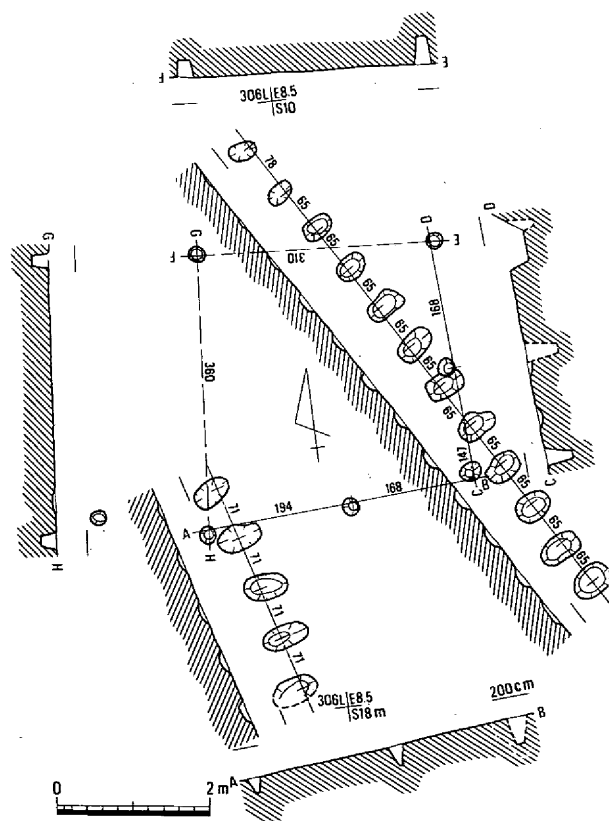
ような不定形な規格から考えて、建物一24は仮設的ないしは非居住のであり、柱穴規模も直径20~30cmと小さく、野小屋のような、農作業のための施設ではなかったかと推測される。この建物の柱穴埋土は灰色粘土であり、他の例からも中世と考えられる。なお、東辺の方位はMN—3°45′—Wである。

(2) その他の遺構

柵—2・3 (第242図)

306—Lの南西部分で、2条の柱穴列を暗茶褐色粘性土層(第147図, 33)上面で検出した。柵—2では12基, 3では5基の柱穴を検出しているが、さらに南へ続くとみられる。柱穴はいずれも不整な長楕円形を呈し、長径は2で50cm, 3で60cm内外、短径は共に30cm程度を測る。残存状況は悪く、深いものでも8.4cmで、北端のものは皿状の窪みにすぎなかった。柱穴底の高度を測ると、柵—3については北から南へわずかながら低くなるように窺えるが、柵—2ではそのような変化は認められず、規則性をもつかどうかは疑問である。柱穴列が北へ続いていたのかどうかであるが、柵—2については調査の過程上確認できず、3については、前述の南へだ

んだん低くなるという規則性を認めるならば、削平による消滅としてその可能性を考うるが、調査域内では明言できない。柱穴埋土は灰色粘土で、そのことから中世の遺構と考えたが、柱穴からの遺物の出土はなく、類例としては、むしろ古墳時代後期のものが多く検出されているため、年代については慎重を要する。なお、近接して古墳時代の溝—45と柵列があるのも注意される。柵—2の方位はMN—30°31′—W, 3はMN—16°30′—Wと平行せず、柱間も2は65cm, 3は71cm等間と異なるため、その共存関係については不明である。(岡本)



第242図 建物—24・柵—2・3 (1/100)

表-20 遺 構 一 覧 表

遺構番号	地 区	図	図版	時 期	旧	遺構番号	地 区	図	図版	時 期	旧
堅穴式 住 居 15	300—M	152		百・中・Ⅲ	五榑導A 住 — 60	土塋—60	397—M	167		百・中・Ⅱ	五 榑 土 — 16
16	300—M	152		百・中・Ⅲ	住 — 63	61	397—M	168		百・中・Ⅱ	土 — 18
17	300—M	152		百・中・Ⅲ	住 — 18	62	397—M	169		百・中・Ⅱ	土 — 13-1
18	300—M	152		百・中・Ⅲ	住 — 17	63	397—M	170		百・中・Ⅱ	土 — 13
19	303—P	155	13	百・中	住 — 2	64	397—M			百・中・Ⅱ	土 — 4-1
20	303—Q	156	13	百・中・Ⅱ	住 — 3	65	397—M	171		百・中・Ⅱ	土 — 12
21	303—M	234		百・古・Ⅲ	住 — 1	66	397—M			百・中・Ⅱ	土 — 3
建物—20	301—M	157		百・中・Ⅲ	五榑導A 土—27~29	67	397—M			百・中・Ⅱ	土 — 11
21	302—M			百・中・Ⅲ	五榑導B	68	397—M			百・中・Ⅱ	土 — 7
22	305—L	241		中世	今 榑 導 建 物 A	69	397—M			百・中・Ⅱ	土 — 8
23	305—L	241		中世	” B	70	397—M	172		百・中・Ⅱ	土 — 14
24	306—L	242		中世	” C	71	397—M	173		百・中・Ⅱ	土 — 5
井戸—7	302—M	158		百・中・Ⅲ	五榑導B P — 9	72	398—M			百・中・Ⅱ	五榑 拡 土 — 6
8	302—M	159		百・中・Ⅲ	P — 47	73	398—M	175		百・中・Ⅱ	土 — 4
9	304—M	235		百・古	井 — 1	74	398—M			百・中・Ⅱ	土 — 12
10	305—L	236		百・古・Ⅲ	今 榑 導	75	398—M	176		百・中・Ⅱ	土 — 2
土塋—42	396—M			百・中・Ⅱ	五 榑 土 — 31	76	398—M	178		百・中・Ⅱ	土 — 7
43	396—M			百・中・Ⅱ	土 — 28	77	398—M			百・中・Ⅱ	土 — 11
44	396—M	160		百・中・Ⅱ	土 — 27	78	398—M			百・中・Ⅱ	土 — 13
45	396—M			百・中・Ⅱ	P — 10	79	398—M	180		百・中・Ⅱ	土 — 5
46	397—M			百・中・Ⅱ	土 — 24	80	398—M	182		百・中・Ⅱ	土 — 9
47	397—M	162		百・中・Ⅱ	土 — 25	81	398—M			百・中・Ⅱ	土 — 8
48	397—M			百・中・Ⅱ	土 — 26	82	398—M			百・中・Ⅱ	土 — 10
49	397—M	162		百・中・Ⅱ	土 — 34	83	398—M			百・中・Ⅱ	土 — 3
50	397—M	163		百・中・Ⅱ	土 — 30	84	300—M			百・中・Ⅲ	五榑導A 土 — 35
51	397—M	163		百・中・Ⅱ	土 — 33	85	300—M			百・中・Ⅲ	土 — 37
52	397—M			百・中・Ⅱ	土 — 22	86	300—M	183		百・中・Ⅲ	土 — 15
53	397—M			百・中・Ⅱ	土 — 35	87	300—M			百・中・Ⅲ	土 — 38
54	397—M			百・中・Ⅱ	土 — 38	88	300—M			百・中・Ⅲ	土 — 20
55	397—M			百・中・Ⅱ	土 — 21	89	300—M			百・中・Ⅲ	土 — 40
56	397—M	164		百・中・Ⅱ	土 — 20	90	300~ 301—M	183		百・中・Ⅲ	土 — 14
57	397—M	164		百・中・Ⅱ	土 — 19-1	91	301—M	184		百・中・Ⅲ	土 — 26
58	397—M			百・中・Ⅱ	土 — 23	92	301—M			百・中・Ⅲ	土 — 44
59	397—M	167		百・中・Ⅱ	土 — 15	93	301—M			百・中・Ⅲ	土 — 49

第3章 第2節 東苗代調査区

遺構番号	地 区	図	図版	時 期	旧	遺構番号	地 区	図	図版	時 期	旧
土墳-94	301-M			百・中・Ⅲ	五樋導A 土 - 45	土墳-129	396-M	222		百・後・Ⅰ	五 樋 土 - 29
95	301-M			百・中・Ⅲ	土 " 83	130	397-M	164		百・後・Ⅰ	土 " 19
96	301-M	187		百・中・Ⅲ	土 " 25	131	300-M	225		百・後	五樋導A 土 - 71
97	301-M			百・中・Ⅲ	土 " 30	132	305-L	226		百・後	今 樋 導
98	301-M	191		百・中・Ⅲ	土 " 29	133	306-L	237		百・古	"
99	301-M	190		百・中・Ⅲ	土 " 23	溝 - 26	396-M				五 樋 溝 - 2
100	301-M	189		百・中・Ⅲ	土 " 21	27	396-M				溝 " 3
101	301-M	185		百・中・Ⅲ	土 " 22	28	398-M				五 樋 拡 溝 - 2
102	301-M			百・中・Ⅲ	土 " 47	29	398-M				土 " 1
103	301-M			百・中・Ⅲ	土 " 48	30	399-M	208		百・中・ Ⅱ~Ⅲ	五樋導A 溝 - 9
104	301-M	193		百・中・Ⅲ	五樋導B P - 3	31	300-M			百・中・Ⅲ	溝 " 73
105	301-M	194		百・中・Ⅲ	P " 155	32	300-M			百・中・Ⅲ	溝 " 72
106	301-M	195		百・中・Ⅲ	P " 40	33	300-M			百・中・Ⅲ	溝 " 19
107	301-M	196		百・中・Ⅲ	P " 14	34	300~ 301-M	215		百・中・Ⅲ	溝 " 24
108	301-M	197		百・中・Ⅲ	P " 15	35	301-M			百・中・Ⅲ	溝 " 16
109	301-M	198		百・中・Ⅲ	P " 30	36	399-M	227		百・後	溝 " 4
110	301-M	199		百・中・Ⅲ	P " 46	37	399-M	227		"	溝 " 5
111	301-M	200		百・中・Ⅲ	P " 20	38	399-M	227		"	溝 " 6
112	301-M	201		百・中・Ⅲ	P " 10	39	399-M	227		"	溝 " 7
113	301-M	202		百・中・Ⅲ	P " 2	40	399-M	272		"	溝 " 8
114	301-M	204		百・中・Ⅲ	P " 49	41	303-M ~303-P	228	14	百・後・Ⅲ	溝-1 B
115	301-M	204		百・中・Ⅲ	P " 8	42	303-M ~303-P	228		百・後・Ⅲ	溝-1 A
116	301-M	205		百・中・Ⅲ	P " 1	43	396-M			5C・後半	五 樋 溝 - 1
117	301-M	205		百・中・Ⅲ	P " 5	44	303~ 304-L			百・古	
118	301-M	206		百・中・Ⅲ	P " 6	45	304~ 305-L	239		百・古	
119	301-M	207		百・中・Ⅲ	P " 23	46	303~ 304-O			百・古・Ⅲ	
120	301-M			百・中・Ⅲ	P " 65	47	303~ 304-O			百・古・Ⅲ	
121	301-M			百・中・Ⅲ	P " 11	柵 - 2	306-L	242		中世	今 樋 導
122	302-M			百・中・Ⅲ	P " 38	3	"	242		中世	"
123	302-M			百・中・Ⅲ	P " 70	溝状遺構	303~4 P~Q	217		百・中・Ⅱ ?	
124	302-M			百・中・Ⅲ	P " 29	土器溜り	300-M	231		百・後・Ⅱ	五樋導A 土器溜り-13
125	302-M			百・中・Ⅲ	P " 32	2	300-M	232		百・後・Ⅲ	" " 11
126	302-M			百・中・Ⅲ	P " 82	3	300-M	232		百・後・Ⅲ	" " 12
127	302-M			百・中・Ⅲ	P " 83	4	304-N		14	百・後・Ⅲ	
128	302-M			百・中・Ⅲ	P " 84						

表-21 井戸一覧表

(単位cm)

番号	区名	長さ×幅×深さ	平面形	断面形	出土遺物	時期
7	302-M	155×120×135	楕円形	筒形	壺・甕・高杯・敲石・加工木	百・中・Ⅲ
8	302-M	80～85×80	円形	筒形	壺・甕・高杯	百・中・Ⅲ
9	304-M	96～98×75	円形	筒形	—	百・古
10	305-L	100×95×70	円形	筒形	甕	百・古・Ⅲ

表-22 土坑一覧表

(単位cm)

番号	区名	長さ×幅×深さ	平面形	断面形	出土遺物	時期
42	396-M	?×110×20	楕円形?	皿形	壺・甕	百・中・Ⅱ
43	396-M	130×?×10	楕円形	皿形	壺・甕	百・中・Ⅱ
44	396-M	300×135×30	不整三角形	皿形	壺・甕・高杯・鉢・スクレイパー	百・中・Ⅱ
45	396-M	?×80×50	楕円形?	階段形	壺・甕・石鏃	百・中・Ⅱ
46	397-M	?×145×50	楕円形	皿形	壺・甕	百・中・Ⅱ
47	397-M	?×125×30	楕円形	皿形	壺・甕・高杯・石庖丁	百・中・Ⅱ
48	397-M	150×100×10	楕円形	皿形		百・中・Ⅱ
49	397-M	?×?×30	?	逆台形	壺・甕・高杯・鉢	百・中・Ⅱ
50	397-M	?×?×30	?	逆台形	壺・甕	百・中・Ⅱ
51	397-M	?×?×35	?	逆台形	甕・高杯	百・中・Ⅱ
52	397-M	?×?×10	円形?	皿形	壺・甕・高杯	百・中・Ⅱ
53	397-M	80×55×35	楕円形	逆台形	壺・甕	百・中・Ⅱ
54	397-M	75×?×45	円形?	逆台形	甕・高杯・石斧・敲石	百・中・Ⅱ
55	397-M	90×?×16	楕円形?	逆台形	甕・高杯	百・中・Ⅱ
56	397-M	?×120×25	楕円形?	皿形	壺・甕・高杯・把手片・スクレイパー	百・中・Ⅱ
57	397-M	?×?×55	不明	逆台形	壺・甕・高杯・石鏃・石庖丁・石斧・スクレイパー	百・中・Ⅱ
58	397-M	150×70×15	不整長方形	皿形	甕	百・中・Ⅱ
59	397-M	87×?×15 (50)	不整楕円形	皿形	壺	百・中・Ⅱ
60	397-M	125×95×20	不整楕円形	皿形	壺・甕・高杯	百・中・Ⅱ
61	397-M	160×150×60 (230)	不定形	逆台形	壺・甕・高杯・石鏃・楔形石器	百・中・Ⅱ
62	397-M	125×95×55	楕円形	逆台形	甕・高杯	百・中・Ⅱ
63	397-M	200×?×10	不定形	皿形	甕・高杯・炭化米	百・中・Ⅱ
64	397-M	65×?×15	楕円形?	皿形	壺・甕	百・中・Ⅱ
65	397-M	165×125×45	不整長方形	皿形	壺・甕・高杯・鉢・石庖丁・炭化米・リン酸鉄	百・中・Ⅱ
66	397-M	70×60×30	不定形	逆台形	壺・甕	百・中・Ⅱ
67	397-M	90×80×30	不整楕円形	逆台形		百・中・Ⅱ
68	397-M	132×78×17	不整楕円形	皿形	壺・甕	百・中・Ⅱ
69	397-M	85×67×12	不整楕円形	皿形	甕	百・中・Ⅱ
70	397-M	80×50×35 (101)	不整楕円形	V字形	甕・高杯	百・中・Ⅱ

第3章 第2節 東苗代調査区

番号	区 名	長さ×幅×深さ	平 面 形	断面形	出 土 遺 物	時 期
71	397—M	140?×?×30	不 明	皿 形	壺・甕・石庖丁	百・中・Ⅱ
72	398—M	?×130×60	不 明	U 字 形	壺・甕	百・中・Ⅱ
73	398—M	70×45×30	楕 円 形	逆 台 形	壺・甕・高杯	百・中・Ⅱ
74	398—M	90×55×15	不整楕円形	逆 台 形	甕	百・中・Ⅱ
75	398—M	?×71×40	不整円形	逆 台 形	壺・甕・高杯・鉢・石庖丁・石斧	百・中・Ⅱ
76	398—M	?×90×13	不整楕円形	逆 台 形	壺・甕・砥石・敲石・石斧	百・中・Ⅱ
77	398—M	85×40×45	不整楕円形	逆 台 形		百・中・Ⅱ
78	398—M	?×75×25	不整円形	皿 形		百・中・Ⅱ
79	398—M	135×100×35	不 定 形	皿 形	壺・甕・高杯・石鏃・石庖丁	百・中・Ⅱ
80	398—M	125×90×25	不整楕円形	皿 形	壺・甕・高杯	百・中・Ⅱ
81	398—M	125×105×40	不整円形	皿 形	壺・甕	百・中・Ⅱ
82	398—M	155×?×40	楕 円 形 ?	逆 台 形	壺・甕・高杯・石鏃	百・中・Ⅱ
83	398—M	?×?×25	?	皿 形	壺・甕	百・中・Ⅱ
84	300—M	175×140×30	楕 円 形	皿 形	甕	百・中・Ⅲ
85	300—M	140×90×15	楕 円 形	皿 形	甕・高杯	百・中・Ⅲ
86	300—M	150×150×20	不整円形	皿 形	壺・甕・高杯	百・中・Ⅲ
87	300—M	105×105×60	円 形	階 段 形		百・中・Ⅲ
88	300—M	180×70×10	楕 円 形	皿 形		百・中・Ⅲ
89	300—M	85×80×75	円 形	U 字 形		百・中・Ⅲ
90	300~ 301—M	130×100×35	不整楕円形	逆 台 形	甕	百・中・Ⅲ
91	301—M	120×90×30	不整楕円形	皿 形	甕・高杯	百・中・Ⅲ
92	301—M	90×80×90	不整楕円形	逆 台 形		百・中・Ⅲ
93	301—M	65×65×75	円 形	逆 台 形		百・中・Ⅲ
94	301—M	90×85×95	不整方形	逆 台 形	甕	百・中・Ⅲ
95	301—M	100×75×20	不整楕円形	皿 形		百・中・Ⅲ
96	301—M	240×135×45	不整楕円形	逆 台 形	壺・甕・高杯・石庖丁	百・中・Ⅲ
97	301—M	?×100×?	楕 円 形 ?	?	壺・甕	百・中・Ⅲ
98	301—M	120×100×50	不整長方形	逆 台 形	壺・甕・台付鉢・スクレイパー	百・中・Ⅲ
99	301—M	170×135×60	楕 円 形	逆 台 形	壺・甕・高杯・台付鉢	百・中・Ⅲ
100	301—M	?×125×20	不整方形?	皿 形	甕・高杯・石庖丁・砥石	百・中・Ⅲ
101	301—M	120×120×45	不整円形	逆 台 形	壺・甕・高杯・砥石・石錐	百・中・Ⅲ
102	301—M	?×?×50	不整円形?	階 段 形		百・中・Ⅲ
103	301—M	70×60×70	楕 円 形 ?	U 字 形		百・中・Ⅲ
104	301—M	?×74×34	楕 円 形	逆 台 形	壺・甕・高杯	百・中・Ⅲ
105	301—M	70×65×34	不整円形	逆 台 形		百・中・Ⅲ
106	301—M	?×135×25	不整方形	皿 形	甕・高杯・敲石	百・中・Ⅲ
107	301—M	135×105×12	不整方形	皿 形	甕・高杯・鉢	百・中・Ⅲ
108	301—M	?×100×10	不整方形	皿 形	甕・高杯・石鏃・石斧・スクレイパー	百・中・Ⅲ

百間川兼基遺跡

番号	区 名	長さ×幅×深さ	平 面 形	断面形	出 土 遺 物	時 期
109	301—M	105×90×30	不整楕円形	皿 形	甕・高杯・鉄器・スクレイパー	百・中・Ⅲ
110	301—M	75×65×70	不整円形	U 字 形	壺・甕・鉢・石庖丁	百・中・Ⅲ
111	301—M	120×105×34	不整円形	皿 形	壺・甕・高杯	百・中・Ⅲ
112	301—M	160×100×30	楕 円 形	階 段 形	壺・甕・高杯・器台	百・中・Ⅲ
113	301—M	95×90×22	方 形	階 段 形	壺・甕・高杯・スクレイパー	百・中・Ⅲ
114	301—M	240×230×18	不整方形	皿 形	壺・甕・高杯	百・中・Ⅲ
115	301—M	125×70×3	楕 円 形	皿 形	壺・甕・高杯	百・中・Ⅲ
116	301—M	80×70×32	円 形	逆 台 形	甕・高杯	百・中・Ⅲ
117	301—M	?×75×30	方 形	逆 台 形	鉢	百・中・Ⅲ
118	301—M	185×130×37	楕 円 形	階 段 形	壺・甕・高杯・石斧	百・中・Ⅲ
119	301—M	145×95×10	楕 円 形	皿 形	壺・甕・高杯	百・中・Ⅱ
120	301—M	80×?×25	楕 円 形	皿 形	土器片	百・中・Ⅲ
121	301—M	120×90×25	楕 円 形	皿 形	土器片・石鏃	百・中・Ⅲ
122	302—M	210×65×20	長楕円形	皿 形	土器片・石鏃・スクレイパー	百・中・Ⅲ
123	302—M	80×45×15	長楕円形	皿 形	土器片	百・中・Ⅲ
124	302—M	150×135×30	不整円形	皿 形	土器片・スクレイパー	百・中・Ⅲ
125	302—M	155×115×20	不整長方形	皿 形	土器片・石庖丁・敲石	百・中・Ⅲ
126	302—M	95×80×30	長 円 形	逆 台 形	土器片	百・中・Ⅲ
127	302—M	220×110×50	不定長方形	階 段 形	土器片・石鏃	百・中・Ⅲ
128	302—M	130×115×25	不整円形	皿 形	土器片	百・中・Ⅲ
129	396—M	?×300×35	不整円形?	逆 台 形	壺・甕・高杯・鉢・台付鉢・石庖丁・石鏃・敲石・炭化米・桃・リン酸鉄	百・後・Ⅱ
130	397—M	190×190×130	円 形 ?	逆 台 形	壺・甕・高杯・把手付鉢・石斧	百・後・Ⅲ
131	300—M	110×74×24	楕 円 形	皿 形	甕・高杯・製塩土器	百・後・Ⅳ
132	306—L	265×212×18	楕 円 形	皿 形	甕・鉢	百・後・Ⅳ
133	306—L	60×39×48	不整楕円形	U 字 形	甕・鉢	百・古

表—23 建 物 — 覧 表

建物	規模	柱間寸法 (cm)		桁 行 (cm)	梁 間 (cm)	面 積 (㎡)	棟 方 向	柱穴 掘方	検 出 地 区	備 考
		桁	梁							
20	2×1	240	248	470	248	11.656	南北	円形	301—M	百・中・Ⅱ
21	2×1	200, 160 180, 180	190 200	360	195	7.02	南北	円形	302—M	百・中・Ⅱ
22	2×2	201, 243 238, 226	142, 159	444 464	301	13.54	N—14°—W	円形	305—L	中世
23	2×1	210, 195	195	405	195	7.90	N—9°45′—E	円形	305—L	中世
24	2×2	147, 168	194, 165	315 360	359 310	11.29	N—10°15′—W	円形	306—L	中世

表—24 竪穴式住居一覽表

細別 住居址	種類	形	規模 (cm)		床面積 (㎡)	主柱穴	距離 (cm)				焼土		壁体溝	時代	区	遺物
			長軸	短軸			北辺 (A)	東辺 (B)	南辺 (C)	西辺 (D)	焼土	墻				
15	竪穴式住居	隅丸方形	400	—	—	4	250	250	240	260	1	—	○	百・中・Ⅲ	300-M	高杯・土錘
16	竪穴式住居	隅丸方形	—	—	—	—	—	250	—	—	—	—	○	百・中・Ⅲ	300-M	壺
17	竪穴式住居	隅丸方形	—	—	—	—	—	300	—	—	—	—	○	百・中・Ⅲ	300-M	甕
18	竪穴式住居	隅丸方形	—	—	—	—	—	320	—	—	—	—	○	百・中・Ⅲ	300-M	壺・甕・高杯・鉢・石斧・石鏃
19	竪穴式住居	円?	480	—	—	—	—	—	260	—	—	—	—	百・中	303-P	不明石器
20	竪穴式住居	隅丸方形	440	—	—	—	—	—	195	—	1	—	○	百・中・Ⅱ	303-Q	甕・高杯・石槍・紡錘車
21	竪穴式住居	隅丸方形	290	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	百・古・Ⅲ	303-M	鉢・鉄鏃・白玉

表—25 玉類一覽表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	時期
234	13	白玉	303-M	住-21	滑石	0.35	0.35	0.20	0.3		百・古・Ⅲ
240	14	勾玉	304-O	包含層		3.01	1.10	0.98	6.1		百・古・Ⅲ
240	15	双孔円版	304-M	包含層	滑石	2.75	1.42	0.40	2.1	半欠	百・古

表—26 金属製品一覽表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	時期
198	8	不明	301-M	土-109	鉄	4.5	0.4	0.4			百・中・Ⅲ
234	9	鉄鏃	303-M	住-21	鉄	12.6	3.1	0.8	16.5		百・古・Ⅲ

表—27 土製品一覽表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	時期
154	4	土錘	300-M	住-15		7.6	3.2	3.2	73.93	完	百・中・Ⅲ
154	5	土錘	300-M	住-15		7.0	2.8	2.8	62.6	完	百・中・Ⅲ
154	6	紡錘車	300-M	住-18	土器片	5.0	5.0	0.6	17.07	完	百・中・Ⅲ
156	7	紡錘車	303-Q	住-20	土器片	5.2	4.9	0.5	15.08	完	百・中・Ⅱ
156	8	紡錘車	303-Q	住-20	土器片	5.8	4.9	0.5	17.70	完	百・中・Ⅱ
210	9	土錘	399-M	溝-30		4.0	1.6	1.6	7.77	半欠	百・中・Ⅲ
210	10	紡錘車	399-M	溝-30	土器片	4.5	4.5	0.6	15.29	完	百・中・Ⅱ
212	11	分銅形	300-M	溝-32		(6.3)	(8.9)	1.2	66.64	上半	百・中・Ⅲ
212	12	分銅形	300-M	溝-32		(4.8)	(7.4)	0.9	25.86	上半	百・中・Ⅲ
215	13	分銅形	300-M	溝-33		(5.4)	(7.4)	1.4	41.82	下半	百・中・Ⅲ
215	14	分銅形	300-M	溝-33		(1.7)	(4.9)	0.9	7.93	下片	百・中・Ⅲ
218	15	土錘	300-M	包含層		5.0	3.2	3.2	50.14	半欠	百・中・Ⅲ
218	16	土錘	300-M	包含層		4.8	2.6	1.8	17.69	欠	百・中・Ⅲ
218	17	分銅形	397-M	包含層		6.9	4.4	0.9		下半	百・中・Ⅱ

表-28 石 器 一 覧 表

図	番号	遺 物	出土地区	遺 構	材 質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備 考
154	36	磨製石斧	300-M	住-18	細粒花崗岩	96.0	65.3	46.1	475.0	欠 大型蛤刃
154	37	石 鏃	300-M	住-18	サヌカイト	16.0	13.0	2.6	0.4	ほぼ完 鏃Ⅰ
154	38	石 鏃	300-M	住-18	サヌカイト	31.7	16.1	5.2	1.9	完 鏃Ⅰ
154	39	石 鏃	300-M	住-18	サヌカイト	29.3	17.3	5.2	2.7	欠 鏃Ⅱ
154	40	石 鏃	300-M	住-18	サヌカイト	19.7	15.4	3.7	1.1	ほぼ完 鏃Ⅰ
154	41	石 鏃	300-M	住-17	サヌカイト	35.0	29.0	4.6	3.5	ほぼ完 未製品?
154	42	石 鏃	300-M	P-54	サヌカイト	25.5	15.1	3.1	0.8	ほぼ完 鏃Ⅴ
156	43	石 槍	303-Q	住-20	サヌカイト	171.6	38.7	10.6	77.0	完
158	44	敲 石	302-M	井-7	安 山 岩	44.5	41.3	30.7	44.5	欠
162	45	石 庖 丁	397-M	土-47	サヌカイト	57.2	48.5	12.7	50.0	欠 庖Ⅰ
166	46	石 鏃	397-M	土-57	サヌカイト	33.5	15.2	7.5	3.9	欠 鏃Ⅳ
166	47	石 庖 丁	397-M	土-57	サヌカイト	45.6	34.6	7.8	12.8	欠 庖ⅢA 刃部再生
166	48	スクレイパー	397-M	土-57	サヌカイト	63.5	37.4	8.9	23.3	
166	49	スクレイパー	397-M	土-57	サヌカイト	30.1	55.3	3.8	8.4	欠
168	50	石 鏃	397-M	土-61	サヌカイト	27.0	11.8	3.8	1.0	完 鏃Ⅰ
176	51	石 庖 丁	398-M	土-75	サヌカイト	34.1	54.5	11.5	22.0	欠 庖Ⅰ(大)
176	52	石 庖 丁	398-M	土-75	サヌカイト	41.8	44.3	11.5	25.7	欠 庖Ⅰ 刃部再生
176	53	石 庖 丁	398-M	土-75	サヌカイト	45.2	30.0	8.9	6.6	欠 刃部再生
178	54	砥 石	398-M	土-76	細粒花崗岩	93.5	75.7	31.8	191.5	完
179	55	敲 石	398-M	土-76	花 崗 岩	116.2	36.9	24.3	162.5	完 石庖丁加工 具?
179	56	打製石斧	398-M	土-76	砂 岩	131.8	76.8	23.6	323.5	完
181	57	石 鏃	398-M	土-79	サヌカイト	36.7	19.1	6.5	5.6	欠 鏃Ⅳ
181	58	石 鏃	398-M	土-79	サヌカイト	22.8	19.5	4.9	1.5	ほぼ完 鏃Ⅱ
186	59	砥 石	301-M	土-101	安 山 岩	119.2	91.8	22.5		欠 敲石?
187	60	石 庖 丁	301-M	土-96	サヌカイト	51.0	53.3	9.2	35.8	欠 庖ⅠB(大)
189	61	石 庖 丁	301-M	土-100	サヌカイト	115.1	47.1	11.0	67.1	完 庖ⅡB
192	62	スクレイパー	301-M	土-98	サヌカイト	61.0	41.9	7.7	15.8	欠 庖ⅡA
197	63	石 鏃	301-M	土-108	サヌカイト	46.1	13.9	6.7	3.3	ほぼ完 鏃Ⅳb
197	64	磨製石斧	301-M	土-108	安 山 岩	35.2	52.2	37.7	80.1	欠 大型蛤刃
199	65	石 庖 丁	301-M	土-110	サヌカイト	42.5	47.5	9.0	16.5	欠 庖ⅠB
199	66	石 庖 丁	301-M	土-110	サヌカイト	60.3	49.8	10.3	20.1	欠 庖ⅡA(大)
199	67	石 庖 丁	301-M	土-110	サヌカイト	63.2	53.8	12.2	31.1	欠 庖ⅠB
199	68	石 庖 丁	301-M	土-110	サヌカイト	26.8	53.9	11.8	17.2	欠 庖Ⅰ
210	69	スクレイパー	399-M	溝-30	サヌカイト	41.5	59.9	11.2	26.0	欠
210	70	石 庖 丁	399-M	溝-30	サヌカイト	54.9	55.7	11.7	34.8	欠 庖ⅠA(大)
210	71	スクレイパー	399-M	溝-30	サヌカイト	65.7	68.6	11.2	58.9	欠
210	72	石 槍 ?	399-M	溝-30	サヌカイト	40.3	26.5	9.1	10.63	欠 石庖丁再 利用
210	73	砥 石	399-M	溝-30	粘 板 岩	51.4	22.2	7.5	5.8	欠
210	74	敲石・砥石	399-M	溝-30	粘 板 岩	80.0	27.0	12.8	61.4	完
210	75	敲 石	399-M	溝-30	玢 岩	90.5	70.2	49.6	515.0	完 磨製石斧 転用
210	76	敲 石	399-M	溝-30	玢 岩	120.8	59.6	47.3	575.0	完
212	77	スクレイパー	300-M	溝-32	サヌカイト	80.0	40.2	7.8	25.8	完
212	78	石 庖 丁	300-M	溝-32	サヌカイト	48.0	41.4	9.3	21.0	欠 庖ⅠB
212	79	石 鏃	300-M	溝-32	サヌカイト	34.0	20.3	6.0	3.2	欠
212	80	石 鏃	300-M	溝-32	サヌカイト	33.8	16.8	3.2	1.9	ほぼ完 鏃Ⅰ

第3章 第2節 東苗代調査区

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
212	81	砥石	300-M	溝-32	頁岩	49.3	37.0	11.6	26.1	欠
212	82	砥石	300-M	溝-32	頁岩	39.4	31.8	9.0	11.1	欠
212	83	砥石	300-M	溝-32	頁岩	21.7	35.6	15.4	13.3	欠
212	84	砥石	300-M	溝-32	凝灰岩	37.8	25.3	12.5	18.4	欠
212	85	敲石	300-M	溝-32	花崗岩	52.0	59.9	47.0	168.3	欠
212	86	敲石	300-M	溝-32	花崗岩	57.5	59.0	41.1	161.4	完
212	87	敲石	300-M	溝-32	花崗斑岩	85.7	29.0	24.7	93.5	完
216	88	石鏃	300-M	溝-34	サヌカイト	20.4	17.1	3.7	1.0	完 鏃I
216	89	砥石	300-M	溝-34	凝灰岩	62.5	34.0	11.5	23.1	欠
216	90	石鏃	301-M	溝-35	サヌカイト	39.3	14.4	4.7	2.2	欠 鏃IVa
219	91	石胞丁	396-M	包含層	サヌカイト	61.3	38.2	7.8	19.4	欠 胞ⅢB
219	92	石胞丁	397-M	P-7	サヌカイト	49.3	29.0	8.6	13.8	欠 胞Ⅲ 刃部再生
219	93	石胞丁	397-M	包含層	サヌカイト	41.8	49.3	10.8	24.0	欠 胞I Aa
219	94	スクレイパー	397-M	P-11	サヌカイト	69.8	42.0	13.5	31.4	
219	95	石胞丁	397-M	包含層	サヌカイト	65.2	46.5	10.1	35.4	欠 胞I Aa
219	96	スクレイパー	397-M	P-9	サヌカイト	69.8	35.0	7.5	15.8	完
219	97	石鏃	396-M	土-45	サヌカイト	18.2	17.0	3.6	0.8	完 鏃II
219	98	石鏃	397-M	P-4	サヌカイト	26.0	18.0	4.2	1.6	ほぼ完 鏃II
219	99	石鏃	397-M	包含層	サヌカイト	37.1	18.3	4.1	2.5	ほぼ完 鏃II
219	100	磨製石斧	397-M	包含層	玢岩	50.7	59.6	48.2	228.2	欠 大型蛤刃
219	101	石斧	397-M	土-54	玢岩	168.0	80.1	64.2	1169.6	欠 未製品?
219	102	敲石	397-M	土-54	玢岩	116.5	98.8	72.2	1340.0	
220	103	敲石	301-M	土-106	玢岩	77.0	40.8	32.7	143.7	
220	104	砥石	397-M	P-2	頁岩	53.3	26.3	43.6	69.3	欠
220	105	石胞丁	398-M	包含層	サヌカイト	30.6	30.2	6.5	7.9	欠 胞Ⅲ
220	106	石胞丁	398-M	P-6	サヌカイト	60.8	24.2	7.5	16.2	欠 胞ⅢB
220	107	石鏃	398-M	土-82	サヌカイト	19.9	15.8	3.2	0.9	欠 鏃I
220	108	磨製石斧	398-M	土-75	安山岩	92.5	55.1	22.0	161.2	完 扁平片刃
220	109	打製石斧	398-M	包含層	玢岩	28.0	31.9	11.8	14.4	欠
220	110	石胞丁	300-M	包含層	サヌカイト	107.7	45.2	11.2	69.1	ほぼ完 胞IB
220	111	石鏃	300-M	包含層	サヌカイト	47.8	14.3	4.5	2.7	ほぼ完 鏃IVb
220	112	石鏃	300-M	P-28	サヌカイト	34.9	19.2	3.4	1.9	完 鏃I
220	113	砥石	300-M	包含層	流紋岩	25.6	39.2	12.2	19.4	欠
220	114	砥石	300-M	包含層	凝灰岩	52.8	36.3	9.0	22.4	欠
220	115	砥石	300-M	包含層	粘板岩	54.4	22.7	18.2	21.8	欠
220	116	石胞丁	301-M	P-21	サヌカイト	36.7	27.0	14.5	13.6	欠
220	117	石胞丁	301-M	P-21	サヌカイト	102.1	47.0	12.3	60.2	欠 胞IB
221	118	石胞丁	300-M	溝-33	サヌカイト	45.2	38.8	7.1	13.8	欠 胞ⅢB
221	119	スクレイパー	301-M	P-13	サヌカイト	30.6	21.0	7.5	5.9	欠 石胞丁再 利用?
221	120	石胞丁	302-M	土-125	サヌカイト	30.3	30.2	5.2	4.2	欠
221	121	石鏃	301-M	土-121	サヌカイト	26.7	15.9	4.8	2.1	完 鏃I
221	122	石鏃	302-M	土-127	サヌカイト	35.8	20.0	5.2	3.6	ほぼ完 鏃I
221	123	石鏃	302-M	土-122	サヌカイト	23.3	15.4	3.7	1.1	ほぼ完 鏃I
221	124	石鏃	303-M	包含層	サヌカイト	43.3	22.7	4.7	4.2	完 鏃I
221	125	スクレイパー	302-M	土-124	サヌカイト	51.0	45.5	7.2	15.0	欠
221	126	磨製石斧	301-M	土-118	花崗斑岩	71.0	53.6	37.0	198.5	欠 大型蛤刃
221	127	石斧	301-M	P-13	安山岩	113.4	81.6	41.2	540.0	完 未製品

百間川兼基遺跡

図	番号	遺 物	出土地区	遺 構	材 質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備 考
221	128	敲 石	302-M	包含層	閃 緑 岩	56.8	39.0	35.3	125.0	欠
221	129	敲 石	302-M	土-125	花 崗 岩	25.0	44.5	44.9	56.5	欠
221	130	砥 石・敲 石	302-M	P-87	頁 岩	105.0	71.9	32.9	320.0	欠
221	131	磨 製 石 斧	302-M	包含層	玢 岩	31.1	57.0	42.0	84.1	欠 大型蛤刃
221	132	石 鏃	304-M	包含層	サヌカイト	31.5	17.2	3.7	2.4	欠 鏃Ⅰ
221	133	石 鏃	303-Q	包含層	サヌカイト	28.2	9.6	6.5	1.3	欠
223	134	石 鏃	396-M	土-129	サヌカイト	24.3	12.7	4.0	0.9	ほぼ完 鏃Ⅱ
223	135	敲 石	396-M	土-129	安 山 岩	61.5	72.7	51.2	385.0	欠 磨製石斧 転用
231	136	砥 石	300-M	土器溜 1	半花崗岩	205.9	80.0	43.9	622.0	欠
232	137	スクレイパー	300-M	土器溜 2	サヌカイト	60.9	27.8	6.9	12.1	ほぼ完
		石 庖 丁	396-M	土-129	サヌカイト	16.8	34.2	6.3	3.3	欠 庖ⅠAb
		石 庖 丁	396-M	土-129	サヌカイト	20.8	37.0	6.5	5.2	欠 庖Ⅲ
		スクレイパー	396-M	土-44	サヌカイト	36.0	33.5	7.1	7.7	欠
		石 槍	396-M	包含層	サヌカイト	35.5	29.3	8.9	8.9	欠
		不明石器	396-M	溝-43	サヌカイト	15.2	16.5	5.4	1.2	欠
		敲石・砥石	396-M	包含層	安 山 岩	108.3	51.5	20.6	145.8	欠
		不明石器	396-M	土-45	サヌカイト	24.0	24.0	4.8	2.6	欠
		スクレイパー	397-M	包含層	サヌカイト	27.3	26.6	6.7	4.8	欠
		尖頭状器	397-M	包含層	サヌカイト	41.7	35.8	7.0	8.2	欠
		ノミ状石器	397-M	包含層	粘 板 岩	50.4	17.9	7.3	9.4	完
		石 庖 丁	397-M	土-65	サヌカイト	42.7	24.1	4.7	4.3	欠
		石 庖 丁	397-M	土-65	サヌカイト	20.5	31.6	6.1	4.4	欠 庖Ⅲ
		スクレイパー	397-M	P-17	サヌカイト	46.8	38.9	12.6	23.4	欠
		投 弾	397-M	包含層	花 崗 岩 ?	49.9	48.5	38.8	129.9	完
		スクレイパー	397-M	包含層	サヌカイト	34.2	11.8	4.0	1.6	欠
		尖頭状石器	397-M	包含層	サヌカイト	40.5	24.1	7.7	7.0	欠
		石 庖 丁	397-M	包含層	サヌカイト	19.0	29.2	7.8	3.2	欠
		楔形石器	397-M	包含層	サヌカイト	40.0	20.6	10.0	9.0	完 楔形Ⅱ
		石 庖 丁	397-M	包含層	サヌカイト	35.9	32.3	4.6	4.3	欠
		不明石器	397-M	P-9	サヌカイト	21.9	36.0	12.2	8.4	欠
		敲石・砥石	397-M	包含層	安 山 岩	93.9	36.4	22.0	120.5	完
		磨 製 石 斧	397-M	土-130	玢 岩	24.3	41.9	38.5	16.7	欠
		石 庖 丁	397-M	包含層	サヌカイト	48.0	45.0	9.2	19.9	欠 庖Ⅰ
		楔形石器	397-M	土-61	サヌカイト	29.3	27.8	12.8	11.2	完 楔形Ⅱ
		石 鏃	397-M	土-61	サヌカイト	24.0	18.6	3.2	1.5	欠
		スクレイパー	397-M	土-56	サヌカイト	29.7	28.7	3.5	2.9	欠
		石 庖 丁	398-M	P-2	サヌカイト	22.4	27.8	9.5	6.5	欠
		石 庖 丁	398-M	土-71	サヌカイト	15.1	32.3	6.0	2.1	欠
		石 庖 丁	398-M	包含層	サヌカイト	16.7	66.2	11.9	16.8	欠
		敲 石	399-M	包含層	閃 緑 岩	54.4	46.1	33.2	115.7	完
		楔形石器	399-M	溝-30	サヌカイト	20.4	18.7	6.2	2.6	完 楔形Ⅱ
		スクレイパー	399-M	溝-30	サヌカイト	45.6	50.0	9.0	22.2	欠
		スクレイパー	399-M	溝-30	サヌカイト	58.3	39.7	10.3	23.8	欠 石庖丁再 利用
		磨 製 石 器	399-M	溝-30	玄 武 岩	120.9	28.5	70.9	306.4	欠

第3章 第2節 東苗代調査区

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
		投 弾	399-M	溝-30	花 崗 岩	39.3	35.5	32.3	49.3	欠
		楔 形 石 器	399-M	溝-30	サヌカイト	34.2	28.4	10.3	10.9	完 楔形Ⅱ
		石 庖 丁	300-M	包含層	サヌカイト	45.6	26.1	7.2	9.5	欠 庖ⅢB 石 庖丁再利用
		スクレイパー	300-M	包含層	サヌカイト	27.4	22.0	4.2	3.0	欠
		石 鏃	300-M	包含層	サヌカイト	24.6	17.4	3.3	1.2	ほぼ完 鏃Ⅰ
		スクレイパー	300-M	包含層	サヌカイト	29.6	40.8	9.0	9.0	欠
		石 鏃	300-M	包含層	サヌカイト	20.1	15.0	3.9	0.8	欠 鏃Ⅱ
		石 錐	300-M	溝-32	サヌカイト	26.5	11.3	2.6	0.7	欠
		スクレイパー	300-M	溝-32	サヌカイト	26.7	23.9	4.8	3.3	欠
		スクレイパー	300-M	溝-32	サヌカイト	40.8	26.6	8.8	9.7	欠
		スクレイパー	300-M	溝-32	サヌカイト	36.2	36.0	7.0	6.2	欠
		スクレイパー	300-M	溝-32	サヌカイト	53.1	37.8	8.1	11.7	欠
		石 庖 丁	300-M	溝-32	サヌカイト	39.2	34.4	10.5	11.8	欠
		敲石・砥石	300-M	溝-32	安 山 岩	70.8	72.8	30.5	200.1	欠
		石 鏃	300-M	溝-32	サヌカイト	31.6	19.9	3.7	2.2	ほぼ完 鏃Ⅰ
		石 庖 丁	300-M	溝-33	サヌカイト	25.3	25.9	4.3	4.2	欠 庖Ⅲ
		楔 形 石 器	300-M	溝-33	サヌカイト	31.0	23.7	6.9	4.6	完 楔形Ⅱ
		石 庖 丁	300-M	溝-33	サヌカイト	31.3	31.0	7.1	6.4	欠
		石 鏃	300-M	住-18	サヌカイト	20.1	17.3	3.0	1.0	欠
		楔 形 石 器	300-M	住-18	サヌカイト	31.3	21.3	12.3	6.9	完 楔形Ⅱ
		楔 形 石 器	300-M	住-18	サヌカイト	38.7	23.5	9.7	11.5	完 楔形Ⅱ
		スクレイパー	300-M	住-18	サヌカイト	14.4	26.1	3.1	1.4	欠
		スクレイパー	300-M	住-18	サヌカイト	11.7	24.8	4.7	1.2	欠
		スクレイパー	300-M	住-18	サヌカイト	31.4	23.3	5.9	3.2	ほぼ完
		スクレイパー	300-M	住-18	サヌカイト	22.1	38.1	6.4	5.4	欠
		スクレイパー	300-M	住-18	サヌカイト	14.4	25.2	3.8	1.5	欠
		石 庖 丁	300-M	住-18	サヌカイト	13.5	16.2	4.5	0.9	欠
		石 錘	300-M	住-18	サヌカイト	14.2	23.6	4.2	1.3	欠
		不明石器	300-M	住-18	サヌカイト	15.2	13.4	3.5	0.8	欠
		不明石器	300-M	住-18	サヌカイト	25.0	16.6	5.1	2.4	欠
		不明石器	300-M	住-18	サヌカイト	23.2	13.0	3.1	0.9	欠
		スクレイパー	300-M	住-18	サヌカイト	41.1	48.6	11.6	26.1	欠
		スクレイパー	300-M	住-17	サヌカイト	28.8	28.2	6.3	—	欠
		不明石器	300-M	住-17	サヌカイト	19.1	20.0	4.3	1.8	欠
		砥 石	300-M	包含層	砂 石	103.2	80.0	21.0	160.2	欠
		砥 石	300-M	溝-34	半花崗岩	38.0	13.0	47.7	226.0	欠
		石 鏃	300-M	住-16	サヌカイト	20.0	23.2	3.0	1.3	欠
		スクレイパー	300-M	P-32	サヌカイト	18.2	28.3	4.6	2.0	欠
		不明石器	300-M	P-64	サヌカイト	24.7	18.7	3.8	1.7	欠
		不明石器	300-M	P-64	サヌカイト	17.4	23.4	3.2	1.2	欠
		石 鏃	301-M	包含層	サヌカイト	30.5	21.0	3.2	1.7	ほぼ完 鏃Ⅱ
		石 鏃	301-M	包含層	サヌカイト	15.3	17.8	5.3	1.4	欠
		石 鏃	301-M	包含層	サヌカイト	25.3	19.5	5.4	3.5	欠 未製品
		石 錘	301-M	包含層	花 崗 岩	71.4	58.5	40.7	251.7	完
		スクレイパー	301-M	包含層	サヌカイト	28.2	21.1	7.8	4.1	欠
		楔 形 石 器	301-M	包含層	サヌカイト	33.2	23.2	6.4	4.2	完 楔形Ⅱ
		石 鏃	301-M	包含層	サヌカイト	27.0	19.6	5.5	3.3	欠

百間川兼基遺跡

図	番号	遺 物	出土地区	遺 構	材 質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備 考
		スクレイパー	301-M	包含層	サヌカイト	38.2	31.4	7.0	8.1	欠
		石 庖 丁	301-M	包含層	サヌカイト	32.2	22.5	4.2		欠
		砥 石	301-M	土-101	半花崗岩	135.7	30.8	82.0		完
		石 錐	301-M	土-101	サヌカイト	33.7	16.3	4.9	2.0	欠
		不 明 石 器	301-M	包含層	サヌカイト	97.3	73.5	27.8	248.5	完
		石 庖 丁	301-M	包含層	サヌカイト	25.6	48.6	12.3	17.0	欠
		石 庖 丁	301-M	包含層	サヌカイト	40.6	32.8	14.8	15.8	欠
		石 庖 丁	301-M	包含層	サヌカイト	14.3	22.7	8.5	1.9	欠
		石 庖 丁	301-M	包含層	サヌカイト	43.5	32.8	6.5	9.8	欠
		スクレイパー	301-M	包含層	サヌカイト	44.2	18.2	5.0	4.0	完
		石 鏃	301-M	包含層	サヌカイト	27.6	10.5	3.1	0.8	欠
		不 明 石 器	301-M	包含層	サヌカイト	19.0	30.3	5.7	3.6	欠
		砥 石	301-M	土-100	半花崗岩	58.9	60.0	45.0	226.6	欠
		スクレイパー	301-M	土-109	サヌカイト	29.6	23.1	4.5	3.0	欠
		スクレイパー	301-M	土-108	サヌカイト	23.9	17.7	4.5	1.5	欠
		石 庖 丁	301-M	P-21	サヌカイト	42.7	53.2	9.8	14.0	欠 庖 I Aa
		石 庖 丁	301-M	P-21	サヌカイト	18.7	45.5	9.1	6.8	欠 庖 I Ab
		石 庖 丁	301-M	P-21	サヌカイト	24.0	25.3	8.5	4.2	欠
		スクレイパー	301-M	土-113	サヌカイト	12.2	19.5	3.7	0.7	欠
		スクレイパー	301-M	P-13	サヌカイト	24.8	31.7	5.7	3.7	欠
		スクレイパー	301-M	包含層	サヌカイト	32.1	19.3	4.0	2.1	欠
		不 明 石 器	301-M	包含層	サヌカイト	16.7	24.3	7.2	2.6	欠
		敲 石・砥 石	301-M	包含層	細半粒花崗 岩	53.1	37.0	30.3	86.0	欠 石庖丁加 工具?
		石 錐	301-M	包含層	サヌカイト	22.1	9.3	5.1	1.0	欠
		石 鏃	301-M	包含層	サヌカイト	25.2	22.7	4.9	3.0	欠 未製品
		石 庖 丁	301-M	包含層	サヌカイト	40.2	50.5	8.5	18.8	欠 庖 I Aa
		スクレイパー	301-M	包含層	サヌカイト	60.9	35.6	6.2	14.9	欠
		投 弾	301-M	包含層	流 紋 岩	43.5	32.8	33.5	59.0	完
		砥 石	301-M	包含層	石 英 斑 岩	138.2	103.2	87.0	1975.0	欠
		投 弾	301-M	包含層	流 紋 岩	43.8	33.3	33.2	59.0	完
		不 明 石 器	301-M	包含層	サヌカイト	30.7	13.4	5.3		欠
		スクレイパー	302-M	包含層	サヌカイト	56.4	34.9	6.2	11.6	完
		スクレイパー	302-M	土-122	サヌカイト	20.8	39.0	5.5	4.1	欠
		スクレイパー	302-M	土-124	サヌカイト	36.5	36.5	7.0	11.0	欠 石庖丁再 利用
		石 斧	303-Q	住-20	安 山 岩	173.2	72.1	43.8	800.1	完 未製品
		不 明 石 器	303-P	住-19	サヌカイト	18.9	22.7	5.9	2.4	欠
		楔 形 石 器	303-P	溝-41	サヌカイト	56.0	34.9	18.2	40.7	欠 楔形 II
		敲 石	303-P	包含層	頁 岩	68.0	38.5	19.0	62.6	欠
		砥 石	304-L	包含層	凝 灰 岩	36.7	27.5	16.1	18.6	欠
		石 庖 丁	304-M	包含層	サヌカイト	38.7	42.5	10.1	19.0	欠 庖 I A 庖 II A
		磨製石斧・敲 石	304-N・O	溝-41	花崗斑岩	95.0	81.8	21.7	238.2	完
		磨 製 石 斧	303-M	包含層	花崗斑岩	121.2	82.4	84.6	1381.0	欠
		スクレイパー	304-P	溝状遺 構	サヌカイト	50.3	41.6	6.8	11.8	欠
		砥 石	304-P	包含層	頁 岩	75.2	42.8	22.6	98.3	欠
		磨 製 石 斧	304-P	包含層	花崗斑岩	103.0	119.3	36.2	505.5	欠
		小型磨製石斧	304-P	包含層	頁 岩	60.0	17.4	9.3	13.1	ほぼ完

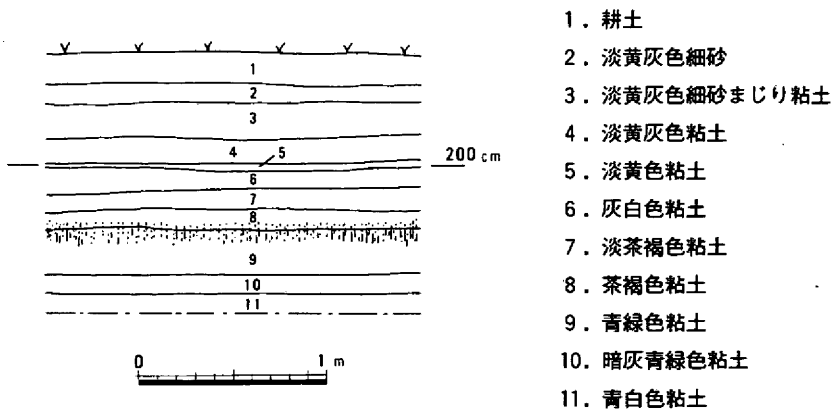
第4章 百間川今谷遺跡

第1節 ^{おち}大地調査区

1 大地調査区の概要

今谷遺跡は兼基遺跡の東へひろがっている。発掘調査を実施したのは、低水路と今谷橋にかかる部分である。ほとんどは、小字大地に含まれていることから、「大地調査区」としたが、今谷橋の北端部基礎は、小字地蔵西に入っている。調査前の状況は、兼基遺跡と同様で、数年前まで水田耕作の行われたところである。旧地形は、兼基遺跡から連続する微高地があり、東端部は旧河道に至る。大地調査区の東部は、当初遺跡であることが確認されていなかったため、未調査のまま工事が行われた。断面の観察等によって、調査区域のさらに東へ遺跡がひろがっているのが確認された。弥生時代後期の遺物包含層も確認された。

大地調査区は、土層断面図にみられるごとく、兼基遺跡との差異はあまりみられない。1層から5層までは中世後半以降のものである。6層の灰白色粘土層には、奈良時代から鎌倉時代の須恵器・土師器・瓦器の破片を少量出土した。7層の淡茶褐色粘土層を切り込んで古墳時代前期の遺構がつくられている。8層の茶褐色粘土層は、弥生時代中期の包含層で多量の遺物を出土した。この土層の上層において、一部に弥生時代後期の包含層が検出されたが、全面には及んでいない。中期の包含層までグライ化していて、管鉄層がみられる。下層はグライ化のた



第243図 土層断面 ($\frac{1}{40}$)

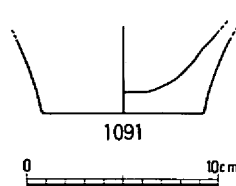
め青色をおびている。粘土層が50～60cmあり、これより下層は細砂層となる。この土層には、植物が良好に残存し、細砂と互層に堆積している。井戸は、ほとんどがこの砂層まで達している。砂層からは、はげしい出水がある。弥生時代前期の遺構は検出されていないが、壺か甕の底部破片1091が出土した。弥生時代中期中葉以降になると多数の遺構・遺物が現われる。特に低水路とその周辺部分においては、弥生時代中期中葉頃の遺構が集中して発見される。それらは直径100mくらいの範囲内に集中している。特に注目される遺構としては、建物が28棟確認された。竪穴式住居と推定される遺構は、5軒検出されたにすぎず、通常の集落遺跡とは著しい違いをみせている。建物の規模は、大小あり、4×1間、3×1間、2×1間、1×1間と長短もみられるが、いずれも梁間は1間である。方位は基本的には東西か南北を示し、少しずれるものもみられる。

井戸14基、土塋59基、溝14本も検出されている。井戸は建物に隣接している。土塋には多量に土器が入っているものがある。溝は建物の方向と一致していて、南北か東西のものがある。あるものは建物に平行していて雨落溝と考えられるものもみられる。これらの遺構の埋土中には、土器片の他、焼土・炭・砂などとともにガラス質に溶けた物質も多量に出土した。特に、土塋・溝に含まれている場合が多く、炉壁と推定されるものもある。

石器についても、石庖丁・石鏃・石錐・石斧・石錘・砥石等が多数出土している。炭化物には、コメ・モモなどがあり、炭化していない柱痕・杭・種子なども検出されている。

弥生時代後期の遺構・遺物は、主に低水路より北側の橋脚部において発見された。竪穴式住居・井戸・土塋・溝などの遺構がある。竪穴式住居は3軒あり、調査区内で完結したのは1軒だけである。井戸は1基ある。土塋は20基あり、多量の土器を伴っているものもある。溝は9本あり、北側に集中している。埋土中には多量の土器を含んでいるものもある。また、北部には包含層もひろがっていて、土器溜りもある。この土器の中には、曲線文や鋸歯文を描いたものやひさご形土器などもあって、祭祀に関する土器群の様相を示している。

古墳時代の遺構・遺物は、前の時代に比べて少ない。竪穴式住居1軒、建物1棟、井戸5基、土塋1基、溝4本、柵1列等の遺構が検出されている。遺物がまとまって出土したのは、

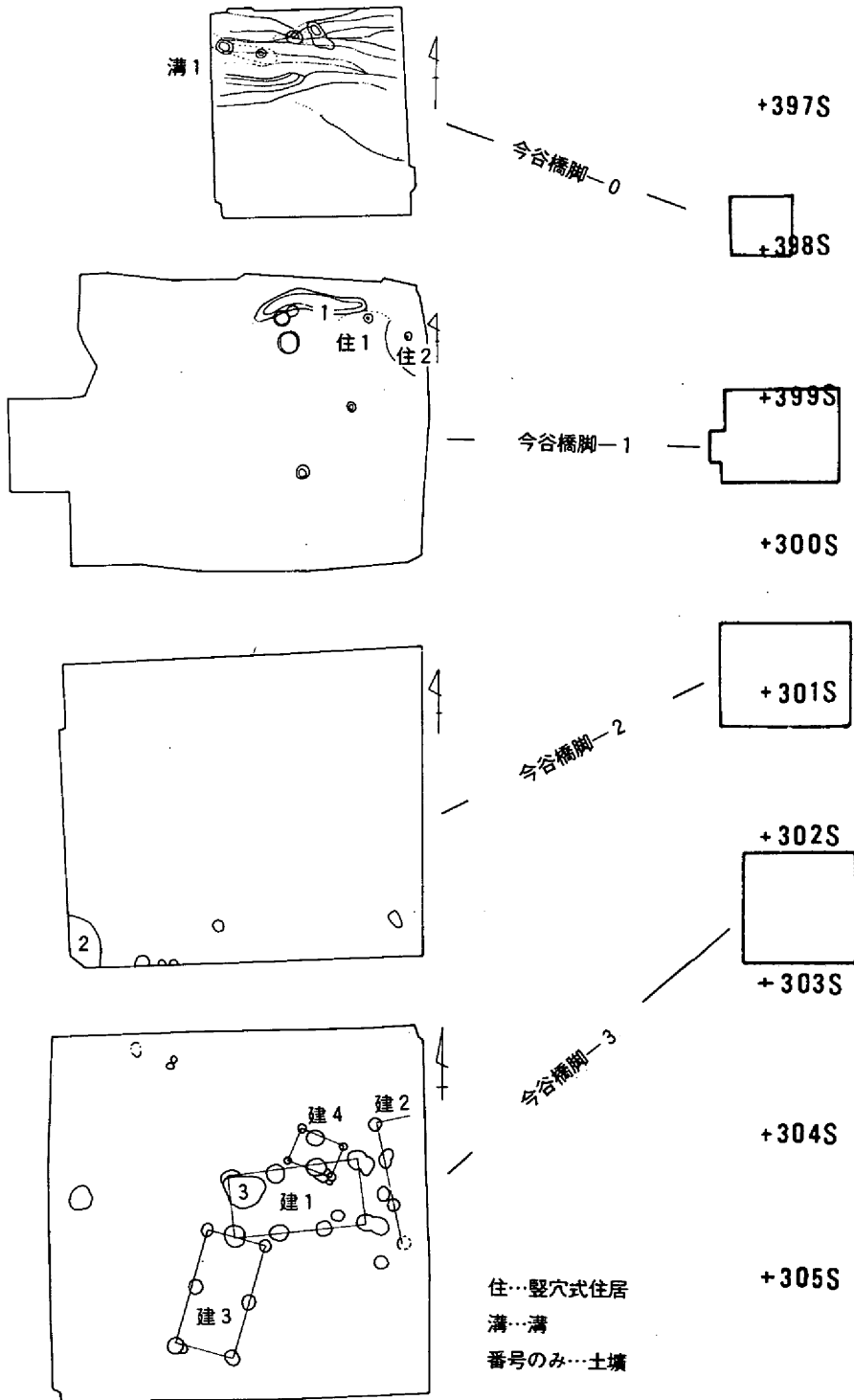


井戸で、甕の完形品なども出土している。須恵器の破片も少量出土しているが、これに伴う遺構はない。

奈良時代以降の遺物も、須恵器・土師器・瓦器・銅銭などを出土しているが、明瞭な遺構はない。

(正岡 睦夫)

第244図 包含層出土遺物



第245図 大地地区(今谷橋脚部)弥生時代中期遺構配置図 ($\frac{1}{300}$)・($\frac{1}{1000}$)

2 弥生時代中期の遺構・遺物

(1) 竪穴式住居

竪穴式住居—1 (第246・247図)

270×170cmほどの楕円形の範囲にわたって貼り床を確認したものであり、プランとしては検出することはできなかった。竪穴式住居—2とプラン的には重複する関係にあり、床面のレベルも同一であるが、具体的な切り合い等については把握できなかった。柱穴は、径12cmの柱痕跡で深さ30cmほどのものが1か所認められた。床面からは、復原されうる甕と石錐が出土している。また当竪穴式住居は、床面出土の甕から百・中・Ⅱの時期に相当するものとする。

竪穴式住居—2 (第248図)

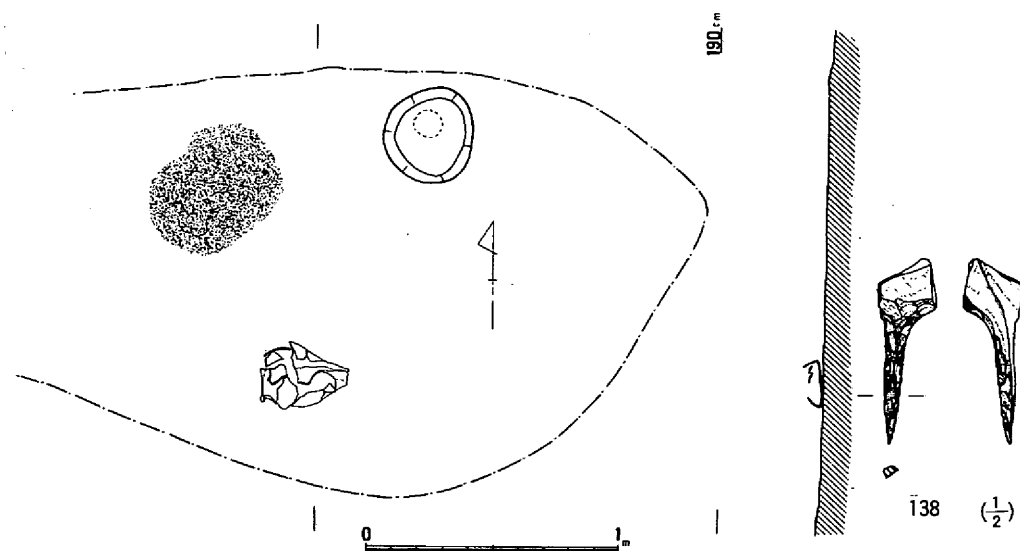
南東から北西にかけての辺が検出され、プランは円形を呈するものと推定される。この住居は火災を受けており炭化材および焼土が床面全体に認められた。特に垂木の遺存状態は良好であり、直径5～15cmのものが認められた。

壁高は26cmほどであり、壁体溝は認められない。柱穴は径13cmの柱痕跡を残すものが1か所確認され、径13cmの柱材が炭化した状態で遺存していた。石斧と石鏃を出土している。

(下澤)

竪穴式住居—3 (第249図)

304—Tに位置する。柱穴が方形に4本配置され、中央に土壌が存在することから竪穴式住居と推定されよう。掘り方は確認できなかったが、焼土や炭化物が平面的にひろがっている状



第246図 竪穴式住居—1(1/30)・出土遺物

況はみられた。柱穴には重複がみられ、建て替えが行われたことがわかる。時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。

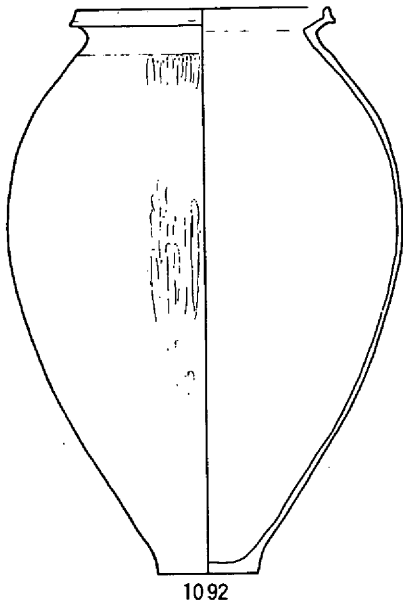
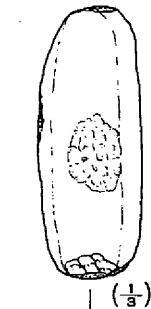
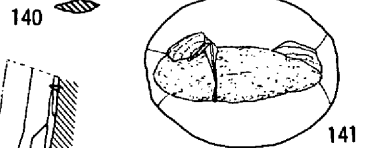
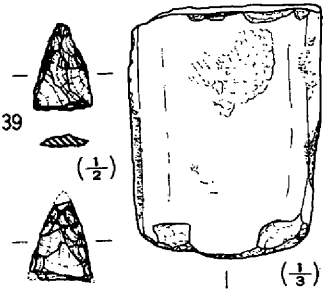
竪穴式住居—4（第250図）

304—Tに位置する。柱穴が台形状に4本配置されていることから、竪穴式住居と推定されよう。掘り方は確認できなかった。時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。

竪穴式住居—5（第251図）

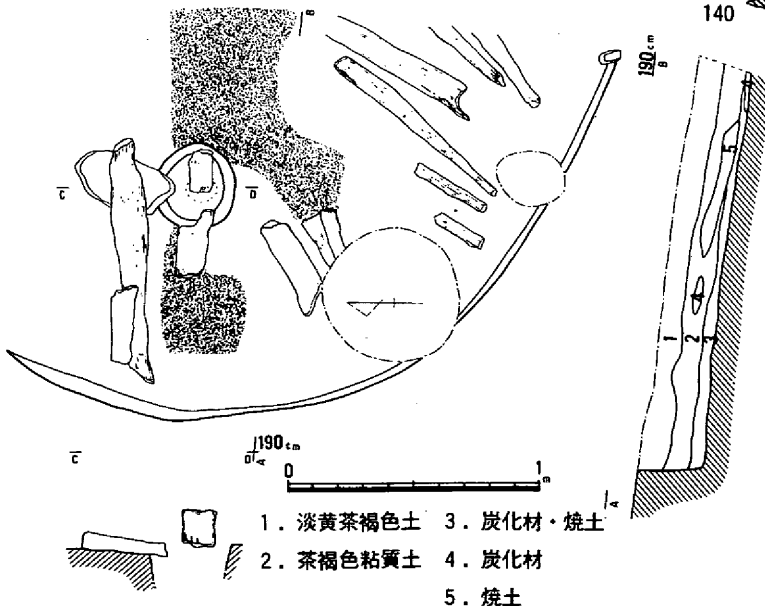
304—Tに位置する。柱穴が多数集中して、ほぼ円形に配置されていることから、円形の竪穴式住居と判断された。掘り方は確認できなかったが、柱穴が3本ずつ重な

るところが多いことから、3回の建て替

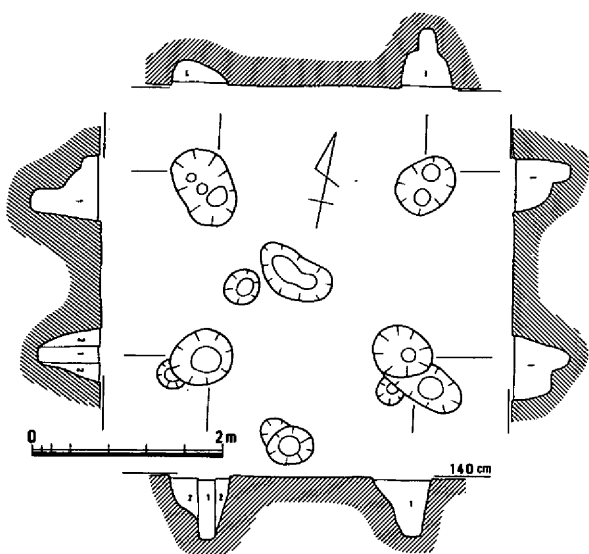


第247図 竪穴式住居—1 出土遺物

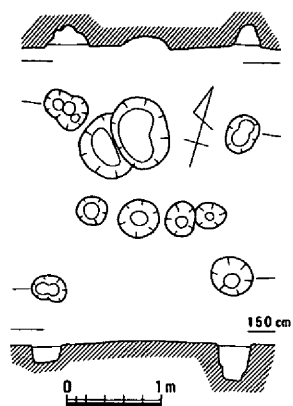
えが行われたものと推定される。北東側の柱穴には、平らな石を入れたものもみられた。また、柱穴内から石鏃1点が検出されている。時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。（正岡）



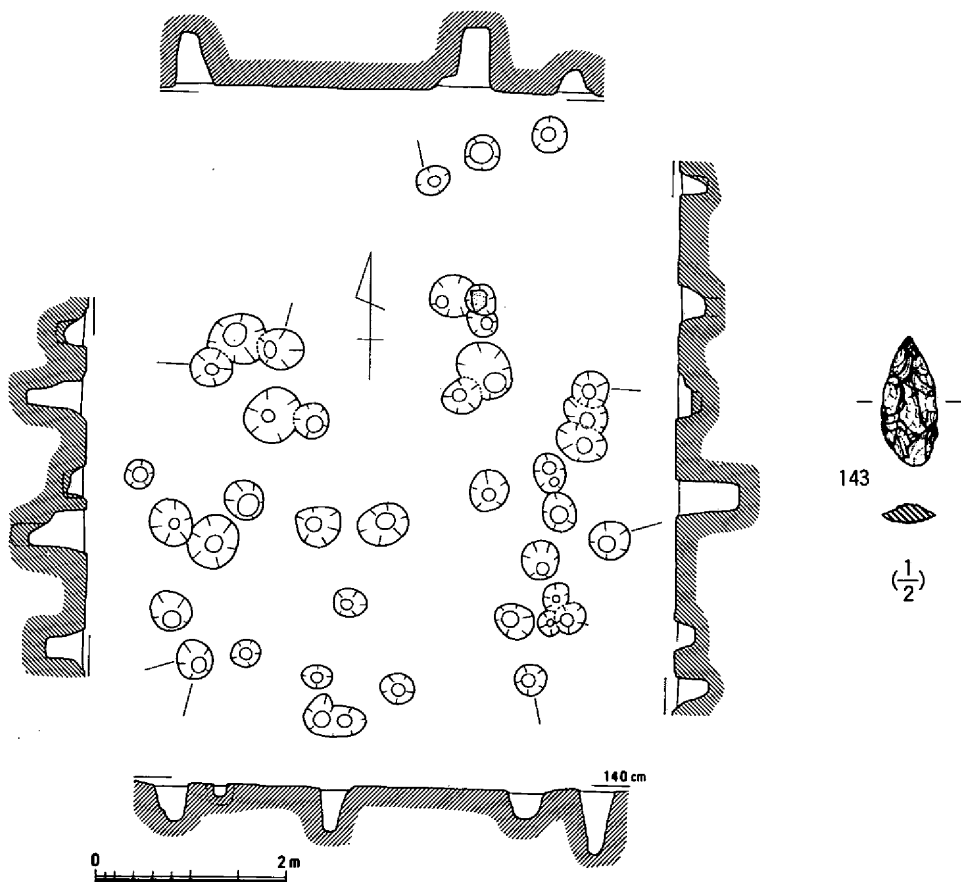
第248図 竪穴式住居—2 (1/30)



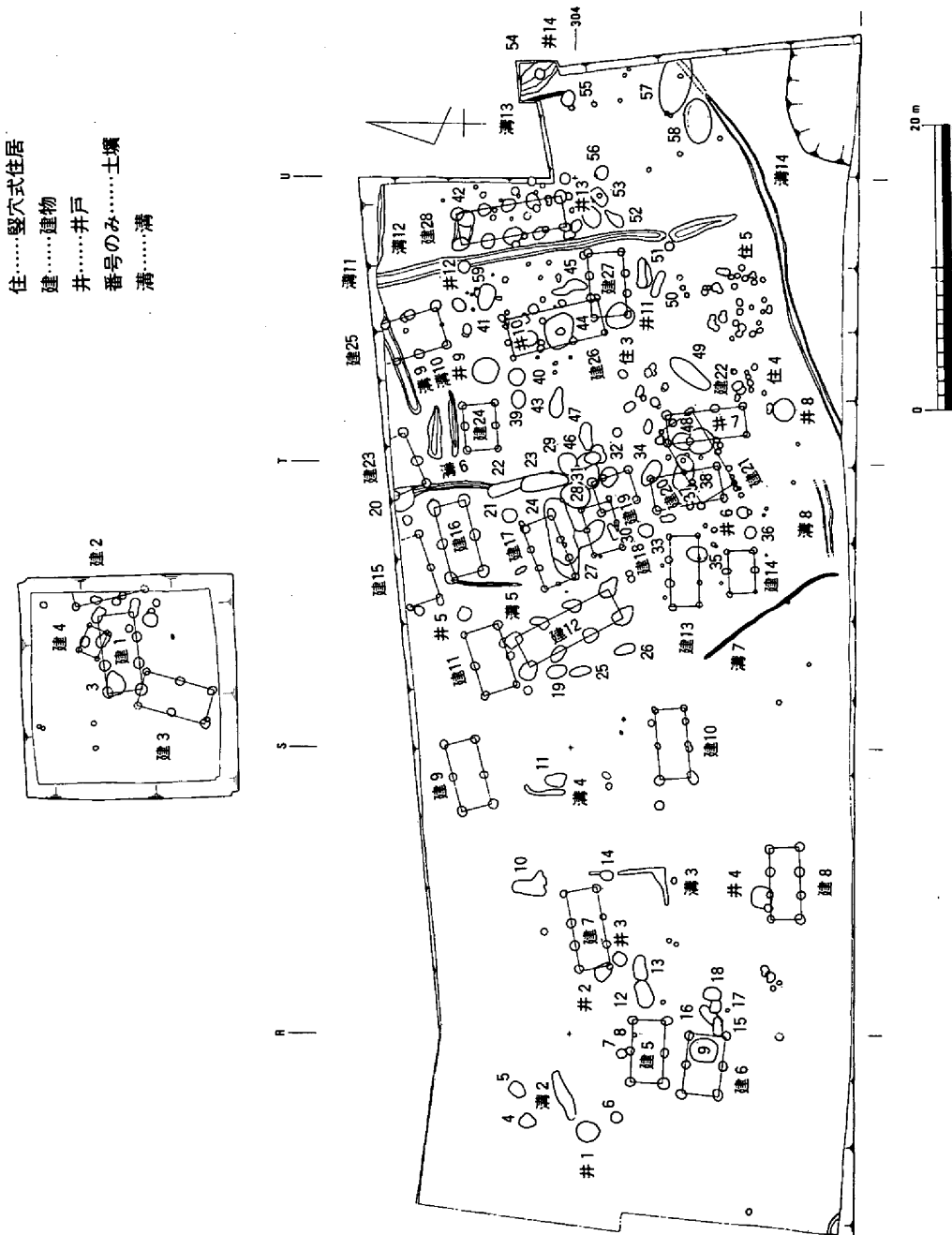
第249図 竪穴式住居—3 ($\frac{1}{80}$)



第250図 竪穴式住居—4 ($\frac{1}{80}$)



第251図 竪穴式住居—5 ($\frac{1}{80}$)・出土遺物



第252図 大地地区弥生時代中期遺構配置図 (1/500)

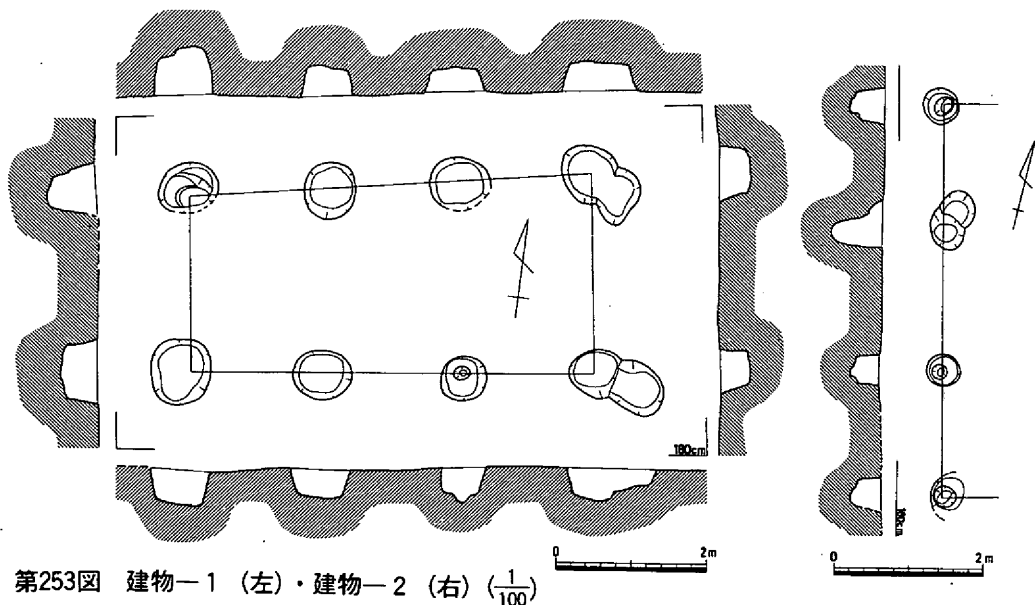
(2) 建物

建物一 1 (第253・254図)

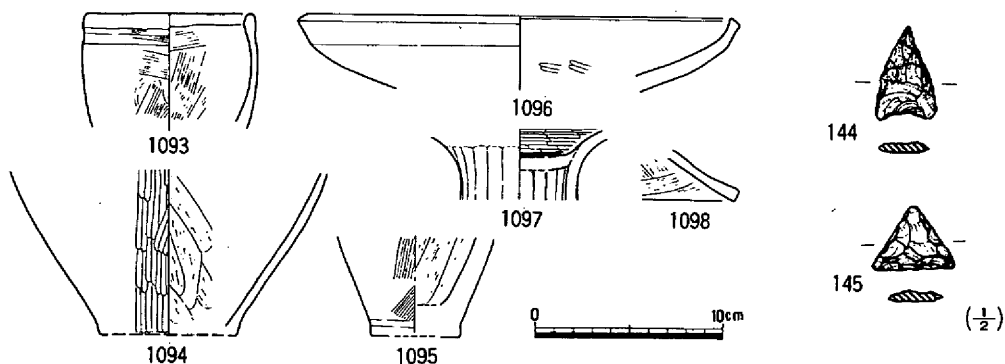
302—Sの中央部に位置し、北西隅の柱穴は土塋—6に切られる。東側梁部を構成する2本の柱穴は、その外側に柱の抜き取り跡と考えられる柱穴状土塋を伴う。東西の梁間に差があり、若干東に開いている。壺**1095**・甕**1094**・高杯**1098**・石鏃**144**が出土している。これらの遺構・遺物のあり方から、百・中・Ⅱの新相に比定できる。

建物一 2 (第253・254図)

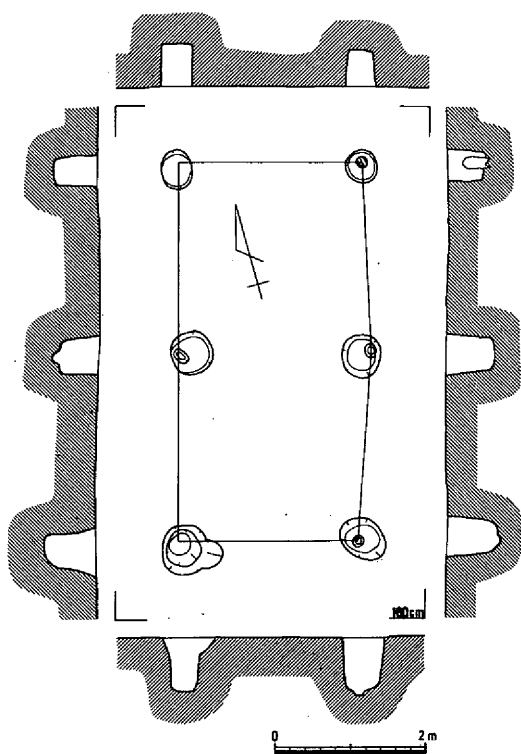
302—Sの中央部に位置し、西側桁部の柱穴4本を検出したのみで、東部分は調査区域外である。このため梁間は不明であり、西側桁部についても南へ延びる可能性を残している。建物一 1の東側梁部との距離はわずかに30cmを測るのみで、主軸方向は、ほぼ直交する。甕**1093**・高杯**1096**・**1097**・石鏃**145**を出土しており、百・中・Ⅱの新相に比定できる。



第253図 建物一 1 (左)・建物一 2 (右) ($\frac{1}{100}$)



第254図 建物一 1・2 出土遺物

第255図 建物-3 ($\frac{1}{100}$)・出土遺物

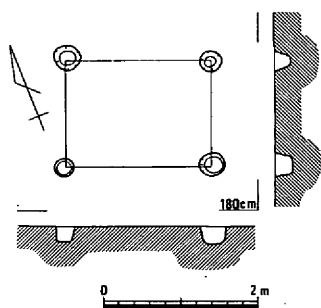
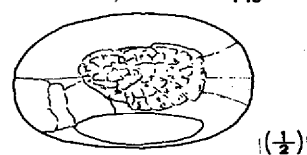
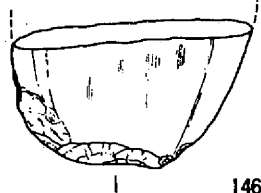
建物-3 (第255・257図)

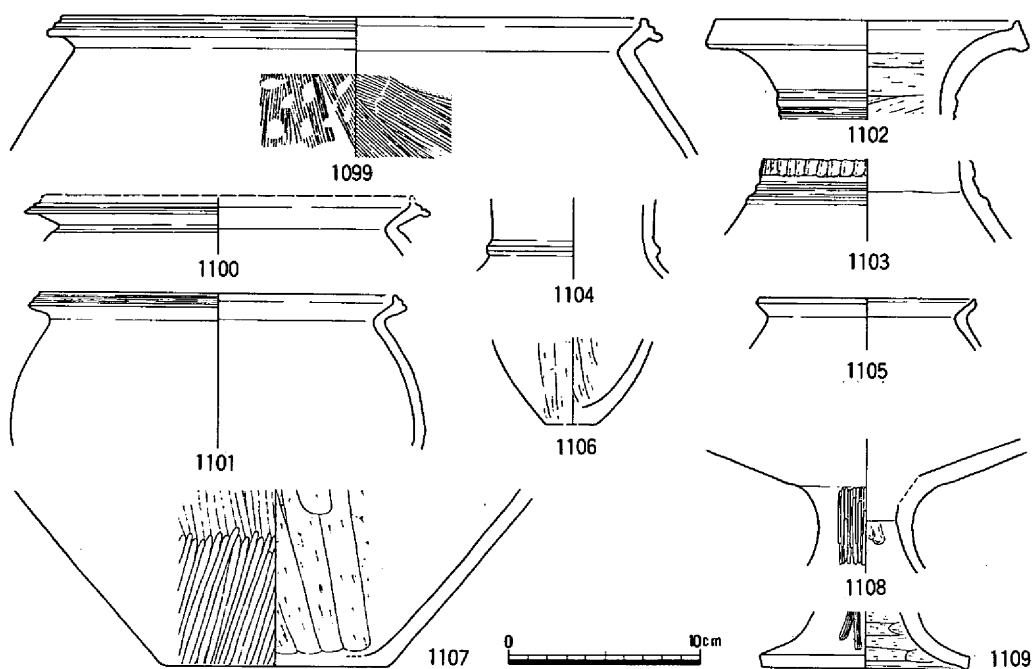
302-Sの西側に位置し、西側桁部柱穴のうち北側の2本は竪穴式住居-8に切られる。東側桁部柱穴3本は、柱痕跡をたどると直線上にのらない。柱間寸法をみると、梁部より桁部が長い。北東隅の柱穴には柱根が遺存しており、これによれば柱は推定直径20cm前後と考えられる。北側梁部の間に建物-1の南西隅の柱穴があり、これとの時期差が考えられる。

遺物は1101以外が本遺構に伴うもので、壺・甕・高杯・鉢・敲石が出土している。主に南西隅の柱穴から出土している。これらの遺構・遺物のあり方によれば、本遺構の時期は百・中・Ⅱの新相に比定できる。

建物-4 (第256・257図)

302-Sの北西部に位置する。南東の柱穴は建物-1の中に位置し、検出状況では建物-1が本遺構に先行すると考えられる。柱穴掘り方は径25~35cm、深さ20~30cmと規模が小さく、柱間寸法も桁行・梁間ともに短い。これらの規模が小さいこと、および桁行が1間しかないことから、本遺構を竪穴式住居の柱穴とも考えたが、壁体溝・中央穴・焼土面等の竪穴式住居を構成する他の要素が検出されておらず、やはり建物と考える。遺物は壺1101の1点であるが、検出遺構面および建物-1との関係から、百・中・Ⅱの新相に比定しうる。(光永 真一)

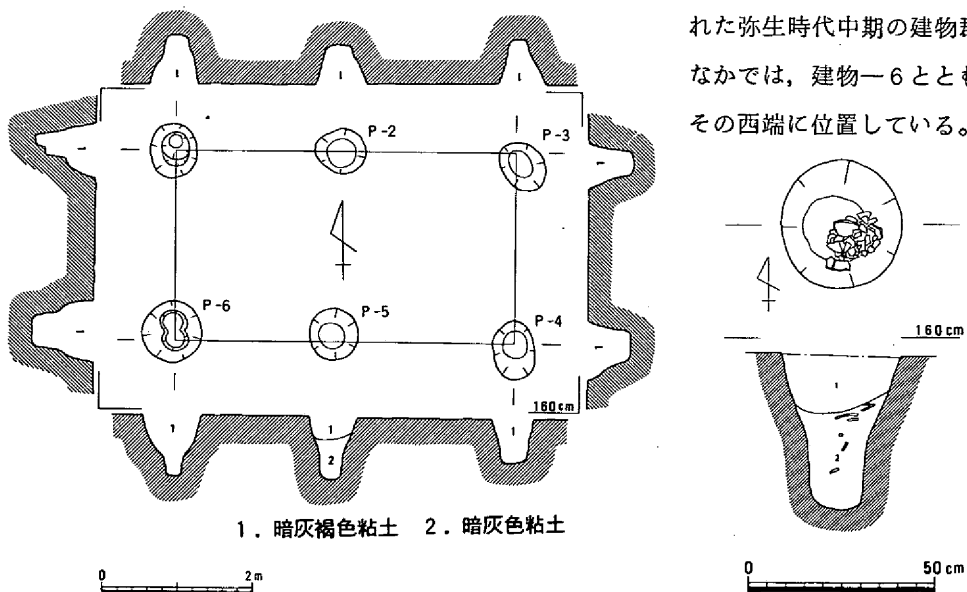
第256図 建物-4 ($\frac{1}{100}$)



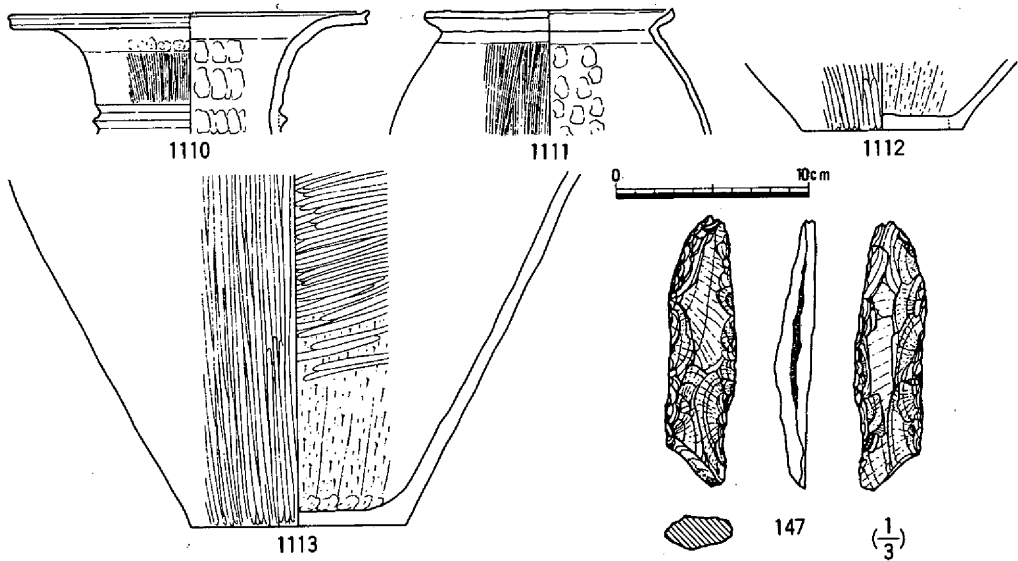
第257図 建物—3・4出土遺物

建物—5（第258・259図）

304—Qと304—Rとにまたがって存在する東西方向の建物である。当調査区において検出された弥生時代中期の建物群のなかでは、建物—6とともにその西端に位置している。各

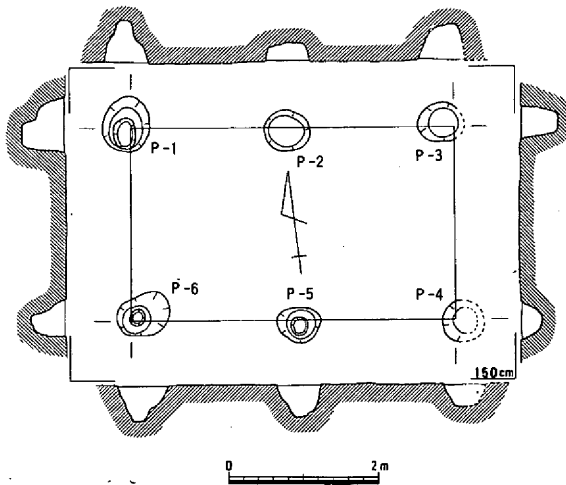


第258図 建物—5 ($\frac{1}{100}$)・P—5 ($\frac{1}{20}$)

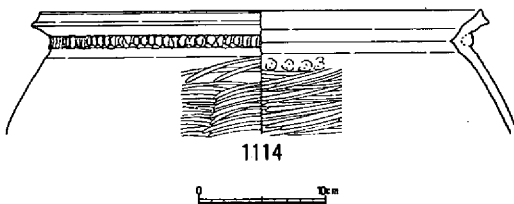


第259図 建物—5 出土遺物

柱穴の平面形及び断面形からみて柱はすべて抜き取られているものと考えられる。また、P—1には柱がめり込んだものと考えられる痕跡があり、直径15cm前後の大きさの柱が想定できる。各柱穴の埋土中には1層・2層ともに炭粒・焼土粒・砂粒や黄色砂のブロックを含んでいる。



第260図 建物—6 ($\frac{1}{100}$)



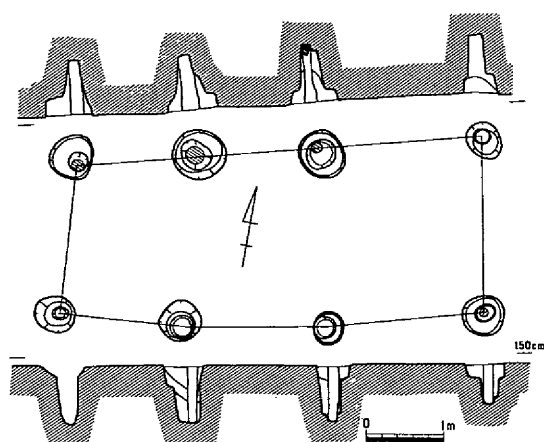
第261図 建物—6 出土遺物 ($\frac{1}{6}$)

遺物は各柱穴内より出土しているが主にP—5の2層中からは土器・石器がまとまって出土している。(第259図1110~1113, 1110はP—6から出土。) 石器は、石槍の破損品かとも考えられるが、両側面とも刃つぶしが施されており決断し難い。また、P—2からはごく少量ではあるが、ガラス滓が出土している。

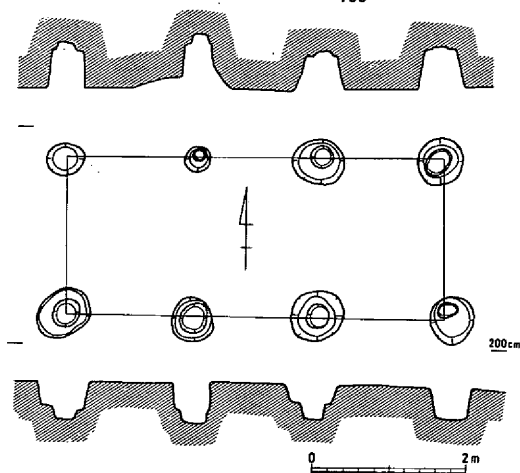
時期は、百・中・Ⅱの新相と考えられる。また、P—6からはモモの種子が出土している。

建物—6 (第260・261図)

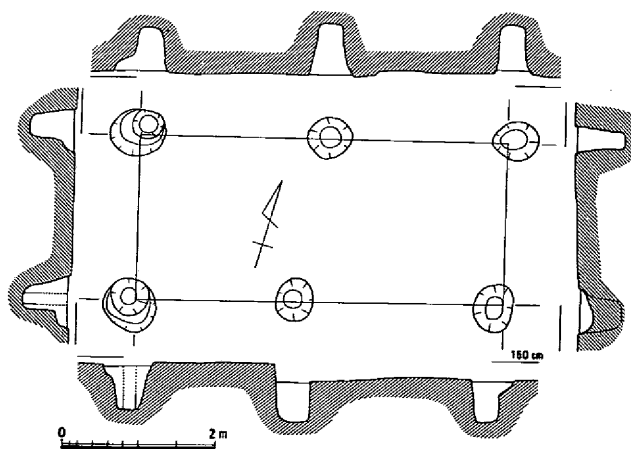
304—Qの東端、建物—5の南に位



第262図 建物—7 ($\frac{1}{100}$)



第263図 建物—8 ($\frac{1}{100}$)



第264図 建物—9 ($\frac{1}{100}$)

置している。建物の規模や柱穴の形状は近似しているが両建物は非常に近接しており同時期に存在していたものとは考え難い。各柱穴の埋土は、いずれも暗青緑灰色粘土で、少量の炭粒・焼土粒及び黄色砂のブロックを含んでいる。またP—1, P—6で明らかなように柱はすべて抜き取られたものと考えられる。P—5, P—6には柱がめり込んだ痕跡があり、15~20cmの大きさの柱が想定できる。遺物はP—1, P—2から少量出土しているのみである。時期は、百・中・Ⅱの新相と考えられる。(平井 泰男)

建物—7 (第262図)

南側柱穴列の西端の柱穴は、井戸—2と重複している。建物は、3×1間で、規模は、西側の梁間が210cm, 東側が240cmを測る。桁行は、北側が530cm, 南側が555cmを測る。数値からも判るように、建物としては歪な形態を

呈している。柱穴列も、北側は直線的であるが、南側は少し南に張り出しており、柱穴列は、直線的ではない。しかし、周辺に柱穴の検出されないこと、柱穴に、柱根の痕跡の見られることからすれば、建物であることに誤りはないものと考えられる。建物の長軸は、概略東西を向く。柱穴の平面形態は、円形を呈し、径40~70cmを測る。各柱穴ともよく柱根

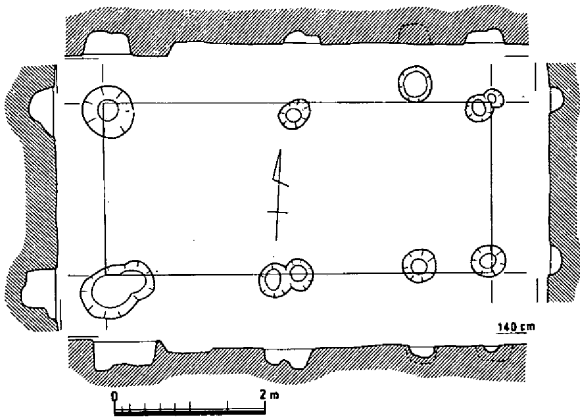
跡を見ることができ、北側柱穴列の東から2本目には、柱根が残存していた。柱穴の残存する深さは、60~80cmを測る。

建物—8（第263図）

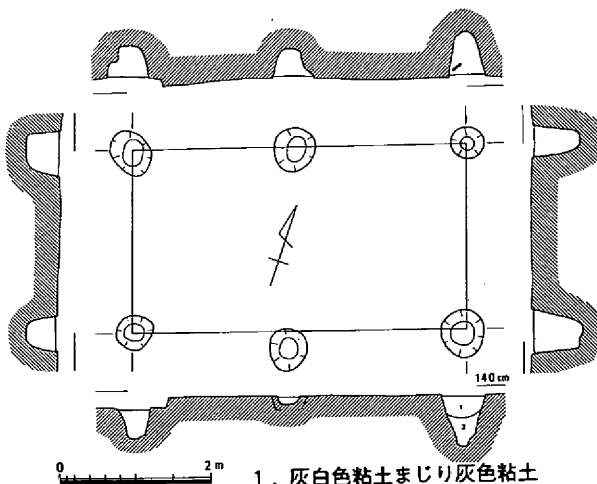
柱穴の北側列西から2本目の柱穴と、井戸—4が重複する状態で検出した。調査の結果、井戸より出土した土器の一部が、柱穴を覆う状態で出土しており、井戸が新しいことが判明した。建物は、3×1間で、規模は、梁間230cm、桁行500cmを測る。建物の長軸は、ほぼ東西を向くもので、柱穴は、直線的に並び、整然としている。柱穴の平面形態は、ほぼ円形を呈するもので、径50~60cmを測る。残存する柱穴の深さは、40~60cmを測る。（井上）

建物—9（第264図）

303—Rと303—Sとにまたがって位置している。西端の柱は比較的揃っているが、東端の柱



第265図 建物—10 ($\frac{1}{100}$)



第266図 建物—11 ($\frac{1}{100}$)

1. 灰白色粘土まじり灰色粘土
2. 暗灰色粘土

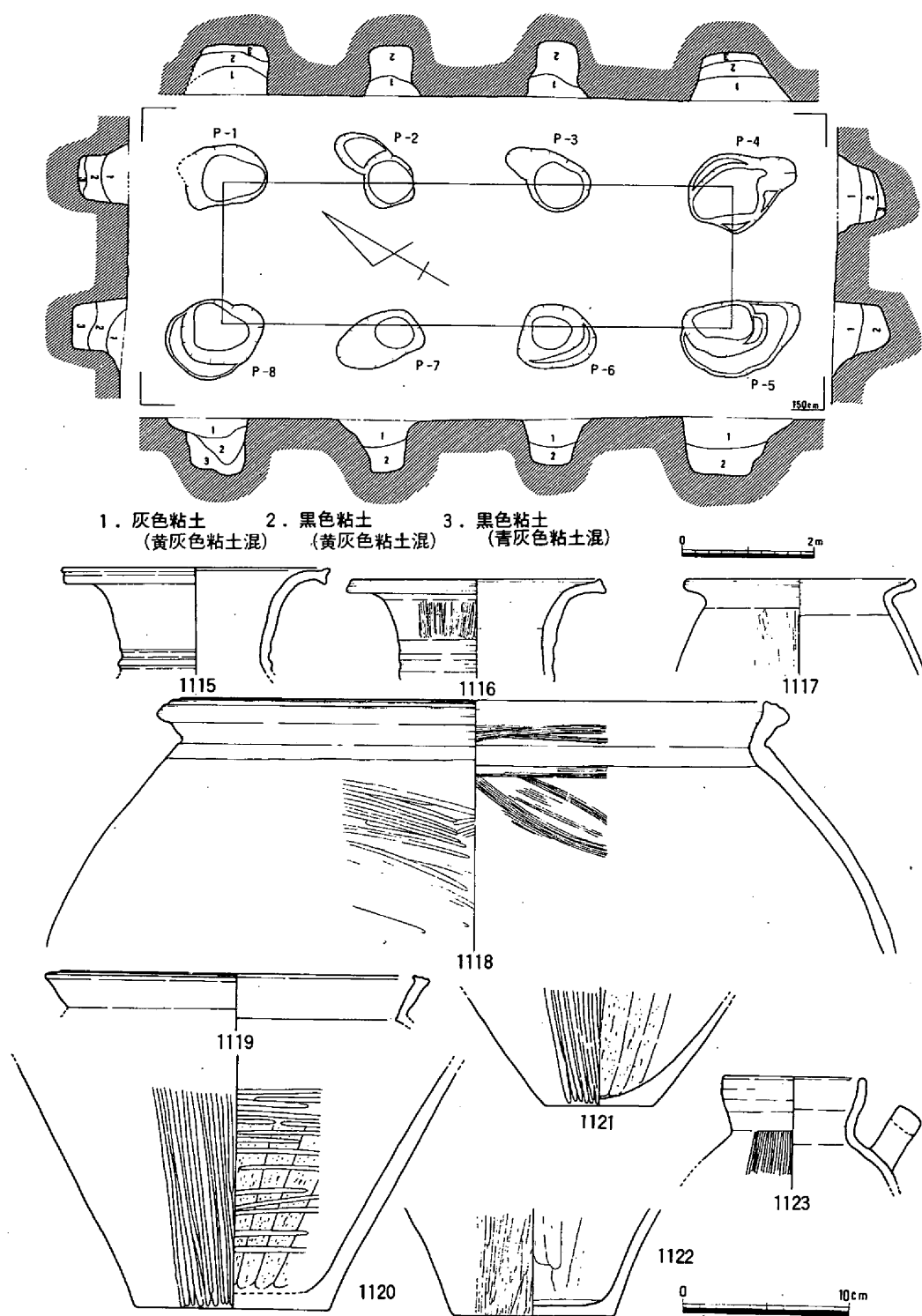
は東西に少しずれている。南側の柱列では、中の柱が少し西に寄っている。柱穴の上端部の掘り方が拡張し、柱の抜き取り痕を残している。時期は、百・中・Ⅱに属する。

建物—10（第265図）

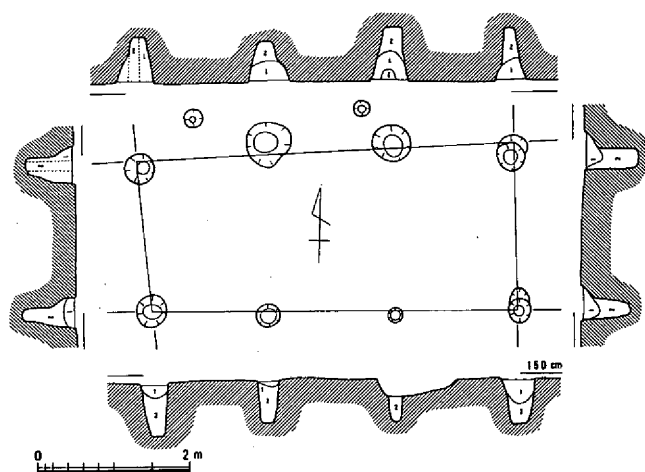
304—Rと304—Sにまたがって位置している。北東隅と南側柱列の中柱には、それぞれ2個重なっていて、補強か柱の建て替えの痕跡を示している。さらに、それぞれの桁の近くに1個ずつの柱穴がある。周辺に関連するものがなく、この建物の補強のものと推測されよう。時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。

建物—11（第266図）

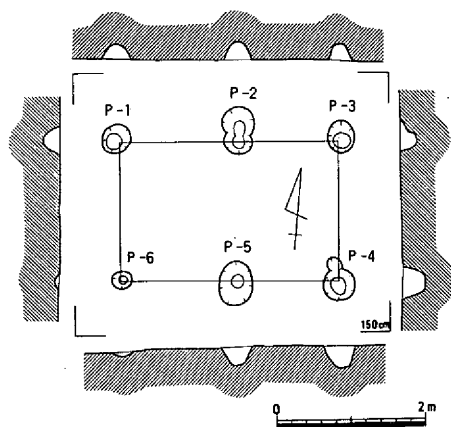
303—Sに位置している。桁の中央柱穴は、いずれも少し浅く、一方は外側へずれている。柱穴掘り方の肩部に段がみられるものが



第267図 建物-12 ($\frac{1}{100}$)・出土遺物



第268図 建物—13 ($\frac{1}{100}$)



第269図 建物—14 ($\frac{1}{100}$)

あり、柱は抜きとられたものと推測される。北東隅の柱穴内には炭化材が含まれていたが、土器等の出土物はない。時期は、百・中・Ⅱに属する。(正岡)

建物—12 (第267図)

303—Sから304—Sにかけて検出された掘立柱建物で、今回検出された建物群のうちで最も大きなものの1つである。柱穴はいずれも径100cm・

深さ80cm前後の掘り方をもつ大型のもので、最も小さなP—2でも径75cmを測る。しかしいずれの柱穴も柱を抜き取ったと思われる掘り方によりかなり変形している。使用されていた柱材は、すべて抜き取られて残っていないが相当に大きなものであったと想定される。柱穴の底は海拔50cmで概ね一致している。出土遺物としては、それぞれの柱穴から壺・甕等の土器片が出土している。1115はP—2から、1123はP—3から、1119はP—4から、1116・1118・1122はP—5から、また1117はP—6からそれぞれ出

土したものである。時期は百・中・Ⅱの新相である。

(内藤)

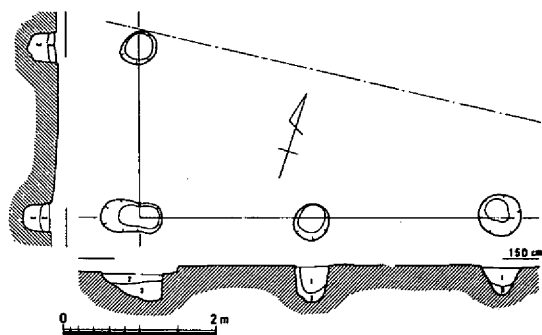
建物—13 (第268図)

304—Sに位置している。南柱列の東から2本目は、土塙—35に切られている。北側柱列の外側50cmに2本の小柱穴があり、足場ヤグラの可能性はある。柱穴からの出土遺物はない。柱穴の肩部はいずれもひろがって、柱を抜きとった痕跡であろう。土層は、1が灰白色粘土ブロック混り灰色粘土、2が暗灰色粘土である。時期は、百・中・Ⅱに属する。(正岡)

建物—14 (第269図)

304—Sの中央部において検出された東西に長い2×1間の規模をもつ掘立柱建物で、主軸はわずかに北へ振っている。この建物の約200cm北側には、平行して建物—13が、また200cm東側

には、井戸—6がある。柱穴は底近くで検出された為いずれも径40cm・深さ約30cmと小さなもので、柱穴の底は海拔約100cmである。P—6はわずか深さ8cmを検出したのみであるが底は海拔120cmで一番高い。P—2は北側に柱穴が重なって検出されたが、柱の建替えが行われたものであろう。柱穴中に出土遺物はなかった。時期は百・中・Ⅱの新相である。（内藤）



1. 茶褐色粘土 2. 淡灰色粘土 3. 暗灰色粘土

第270図 建物—15 ($\frac{1}{100}$)

建物—15 (第270図)

303—Sに位置する。調査区北端部のため、全体は不明であるが、南側柱列が2間となることから2×1間と推定される。柱穴には抜き取りの痕跡がある。柱穴内からは、甕・高杯の小破片を少量出土している。付近にまとまらない柱穴がみつめられるが、補強の柱かどうかは不明である。時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。（正岡）

建物—16 (第271図)

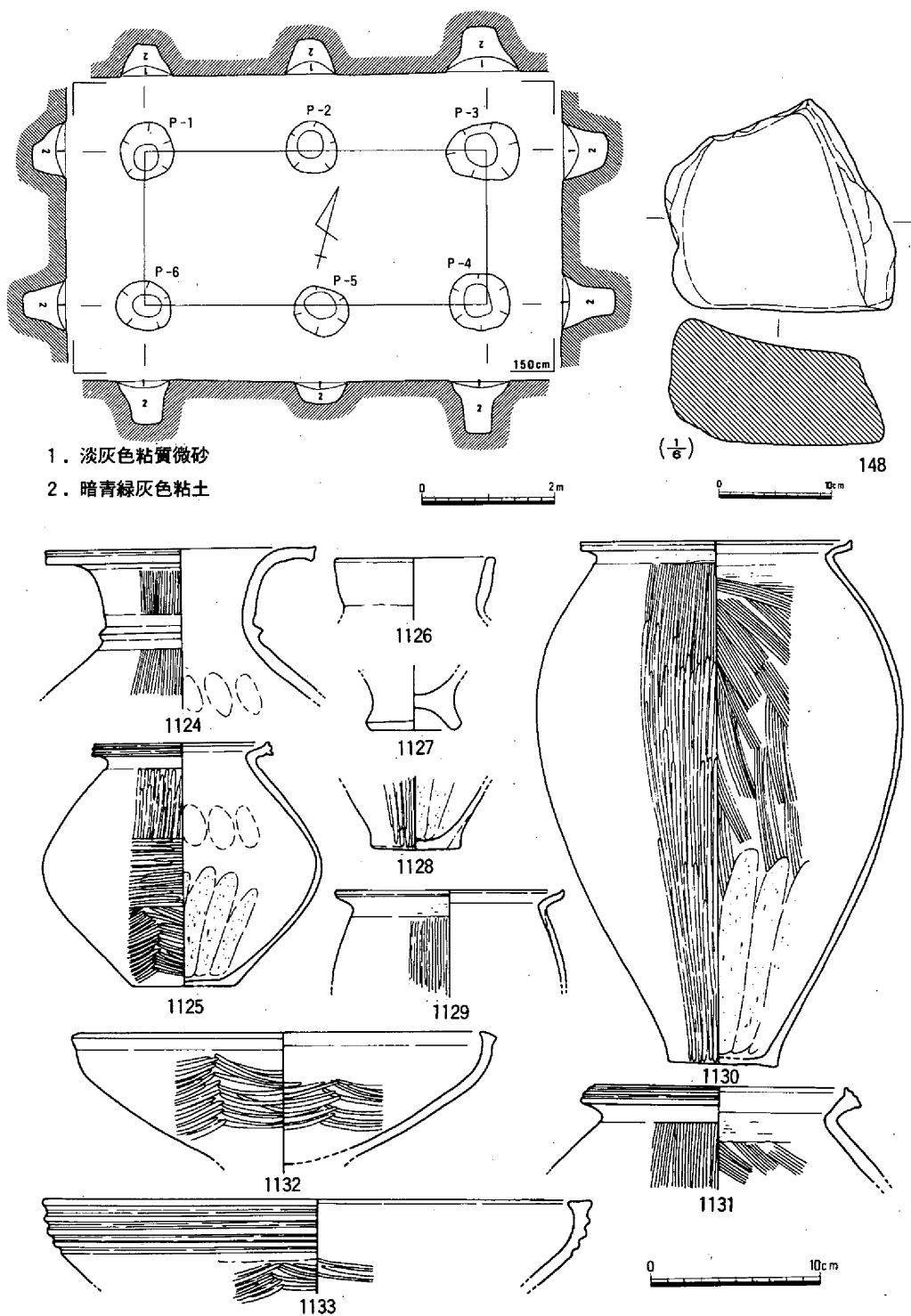
303—Sの中央のやや南東寄りに位置する東西方向の建物である。他の同規模の建物と比較すると、柱穴の規模が直径80~100cmと大きいのが特色である。各柱穴の柱は、すべて抜き取られているものと考えられる。また、各柱穴の埋土中には、1・2層ともに炭・焼土粒や青灰色砂のブロックが含まれている。遺物はすべての柱穴から土器等が出土している。第271図に図示したものうち、1124・1130・1133はP—6から、1125・1132はP—5から、1126・1128・1129・1131はP—3から、1127はP—4から出土したものである。148は、P—3から出土した砥石である。材質は砂岩である。図の表・裏及び側面の3面に使用痕が認められる。1125・1130は、いずれもほぼ完形に復原できる。時期は、百・中・Ⅱの新相である。（平井）

建物—17 (第272・273図)

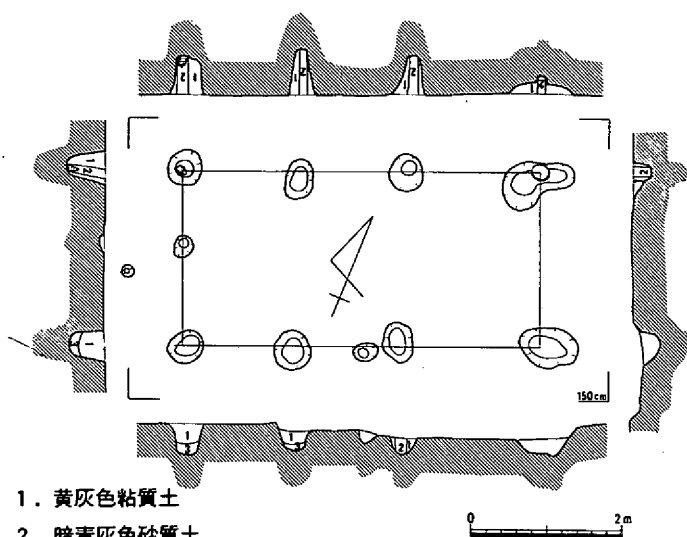
303—Sの南端に位置し、一部304—Sに及んでいる。北西隅の柱穴内から、甕1134・鉢1135を出土している。この柱穴には柱根の一部が残っている。樹種はアラカシである。西側には梁の外側に小型の柱穴がみられるが、建物—13でみられる足場ヤグラの可能性もある。西側の梁の中間部に1個の柱穴がみられるが、他に比べて小さく、東側には存在しないことから補強のための柱と考えられる。柱穴の肩部はひろがっているものもあり、柱の抜き取り痕であろう。時期は、百・中・Ⅱの新相である。（正岡）

建物—18 (第274図)

304—S北東隅において検出された東西に長い2×1間の掘立柱建物で、主軸は約20°北へ振



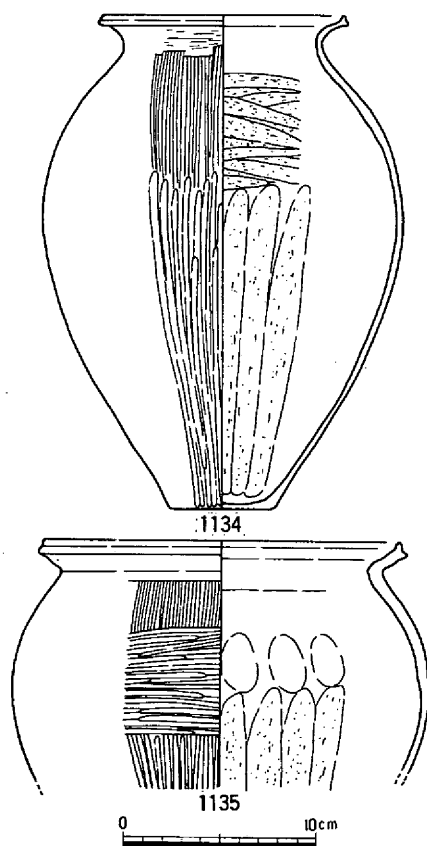
第271図 建物—16 ($\frac{1}{100}$)・出土遺物



1. 黄灰色粘質土
2. 暗青灰色砂質土
3. 灰青色粘質土

第272図 建物-17 ($\frac{1}{100}$)

っている。この建物の150cm北側には建物-17がほぼ平行してみられ、南東部では建物-19と切り合っている。検出された柱穴は、径40cm・深さ約20cmといずれも小さく、柱穴の底は、海拔約100cmである。P-3・4・5は柱穴が重なっており柱の建替えが行われたものであろう。P-2からはコダイヒメモモの種子が出土している。時期は百・中・IIの新相である。



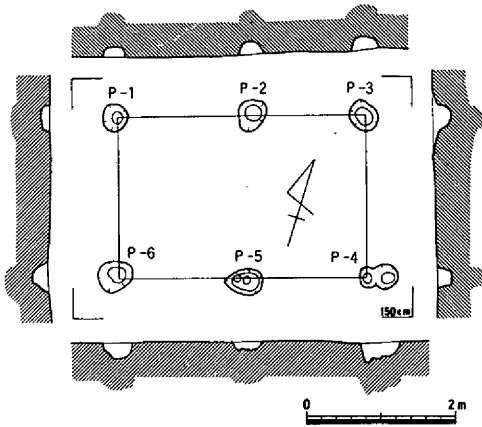
第273図 建物-17出土遺物

建物-19 (第 275 図)

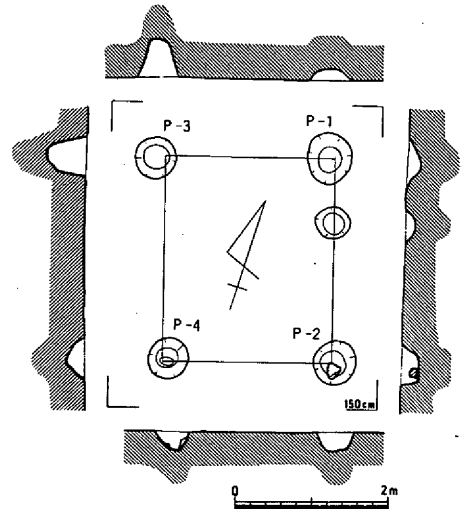
304-S北東隅において建物-18と切り合って検出された、少し南北に長い1×1間の掘立柱建物で、主軸は20°程西へ振っている。1m南に建物-20があり、P-1は土壌-31により切られている。検出した柱穴の径は約60cm、深さは約60cmで、柱穴の底は海拔約100cmである。P-1は深さ50cm、底は海拔60cmを測る。柱穴中に土器の細片があったが図示できるものはなかった。P-2の底には厚さ5～6cmの角礫がみられた。時期は百・中・IIの新相である。(内藤)

建物-20 (第 276 図)

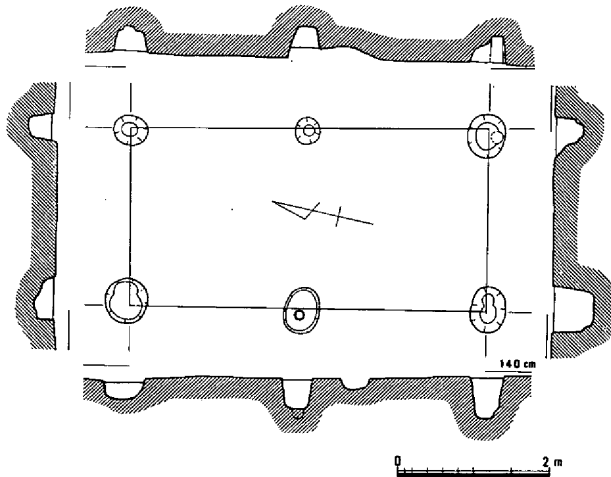
304-Sに位置している。土壌や他の建物と重複していて検出が難しかった建物である。西側柱列の中央の柱穴には、柱の沈下したあととおもわれる穴が検出された。この直径は15cmを測る。柱穴からの出土遺物はない。時期は、百・中・IIに属する。



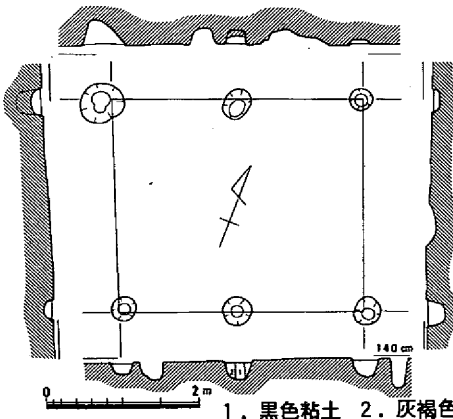
第274図 建物—18 ($\frac{1}{100}$)



第275図 建物—19 ($\frac{1}{100}$)



第276図 建物—20 ($\frac{1}{100}$)



第277図 建物—21 ($\frac{1}{100}$)

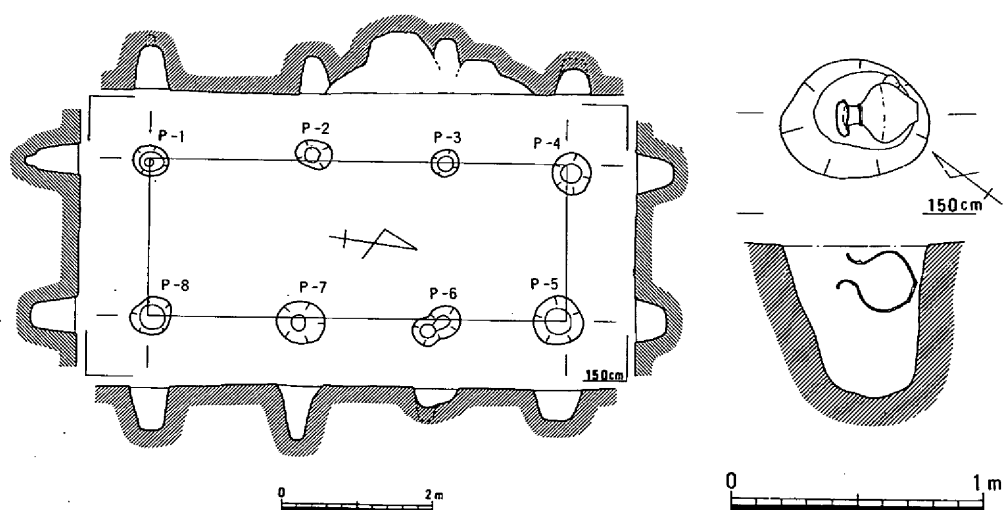
1. 黒色粘土 2. 灰褐色粘土

建物—21 (第 277 図)

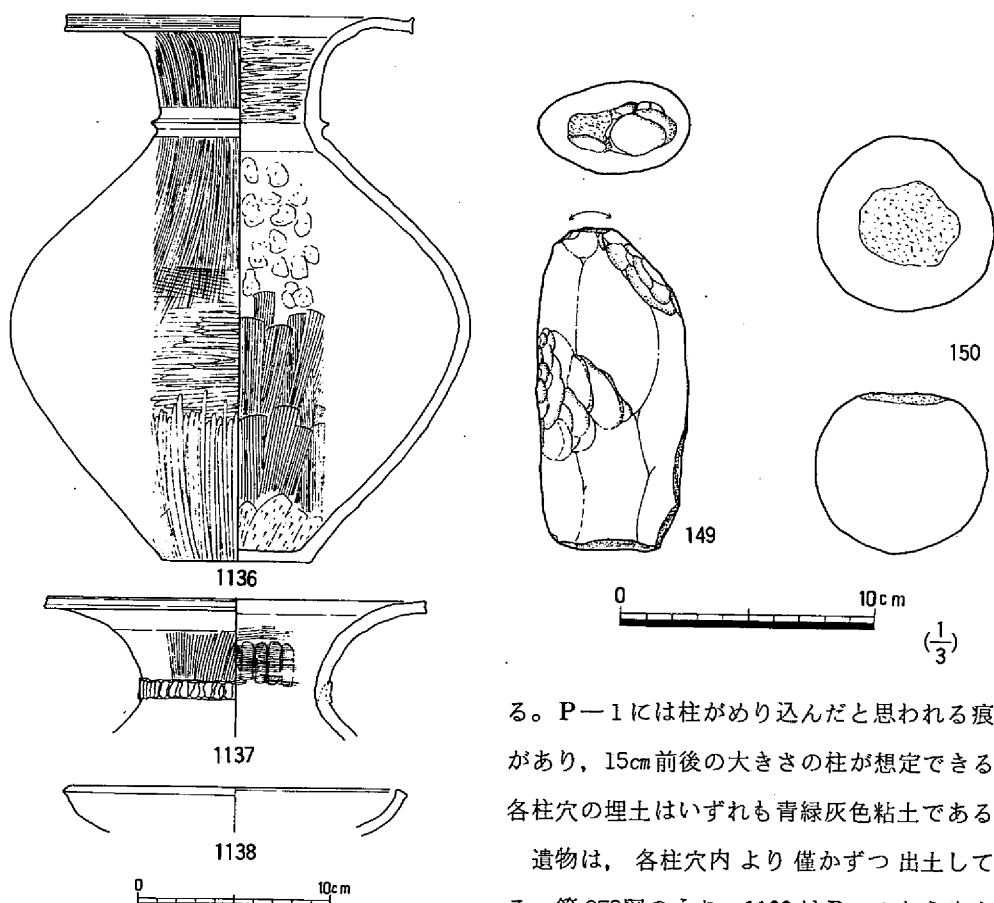
304—Sに位置し、建物—20と重複している。桁の柱列線にいくつもの柱穴があり、補強のための柱とも推測されるが、検出を困難なものとしていた。北西隅の柱穴はやや外側に寄っていて、やや大きい。時期は、百・中・Ⅱに属する。(正岡)

建物—22(第278・279図, 図版15—6・7)

304—Tの西端に位置し、建物—20・21の東隣りに近接して存在する南北方向の建物である。各柱穴のうち、P—2は井戸—7によって切られており、P—3は井戸—7及び土塹—48によって切られている。またP—6では明瞭な抜き取り穴があり、P—8からはほぼ完形品の壺が出土しており、各柱は抜き取られたものと考えられ



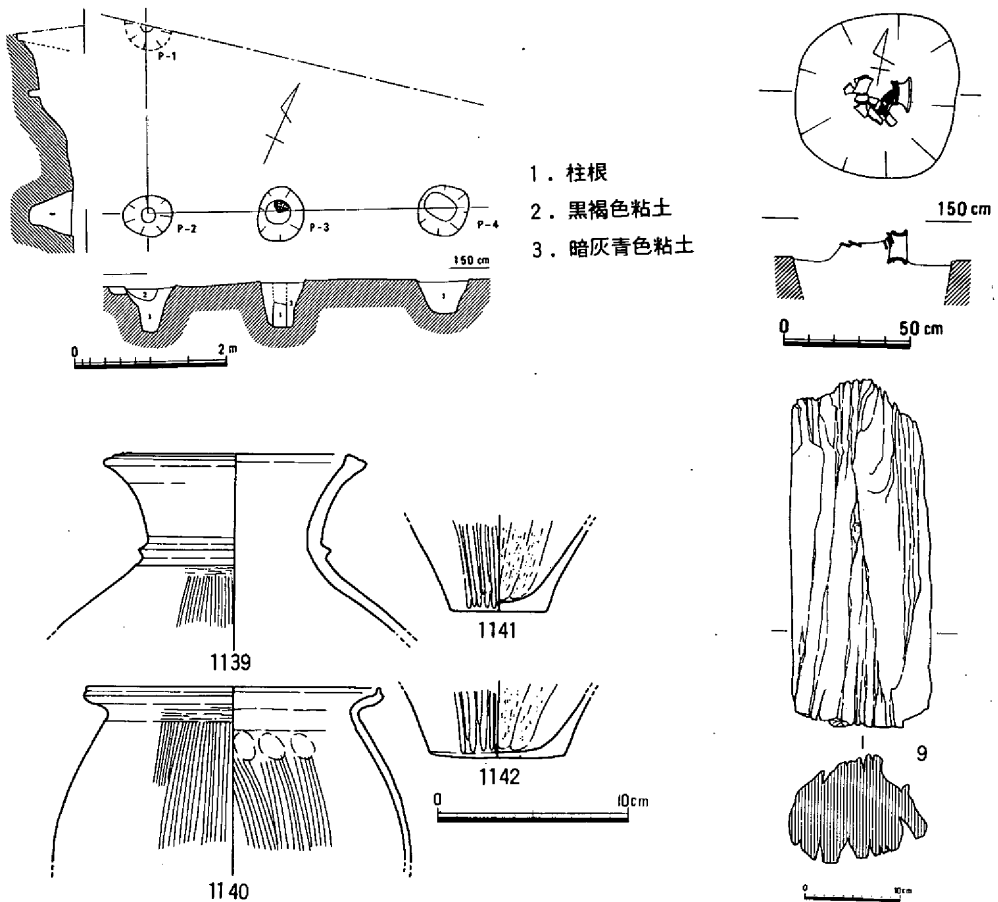
第278図 建物-22 ($\frac{1}{100}$)・P-8 ($\frac{1}{30}$)



第279図 建物-22出土遺物

る。P-1には柱がめり込んだと思われる痕跡があり、15cm前後の大きさの柱が想定できる。各柱穴の埋土はいずれも青緑灰色粘土である。

遺物は、各柱穴内より僅かずつ出土している。第279図のうち、1136はP-8から出土したもので、口縁の一部を欠いているもののほぼ



第280図 建物—23 ($\frac{1}{100}$)・P—2 ($\frac{1}{30}$)・P—3 柱根

完形品である。1137はP—7，1138はP—1から出土している。149はP—5，150はP—1より出土した。149は安山岩製の磨製石斧，150は安山岩製の敲石であると考えられる。時期は、百・中・Ⅱの新相である。(平井)

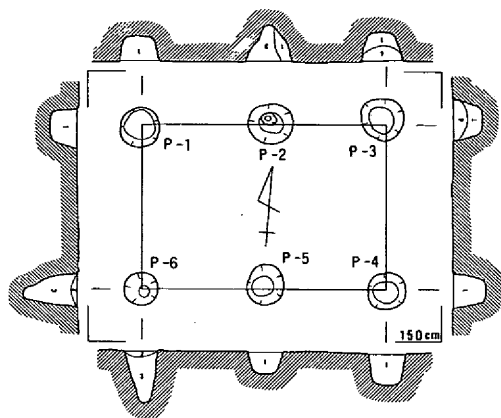
建物—23 (第280図)

303—Sと303—Tにまたがっている。調査区の北端に位置しているため全体は不明である。北西隅の柱穴は土壇—20を切っている。桁行は南側柱列で、3本の柱穴が並んでいる。さらに東へのびるとすれば、調査区北端と接する地点にあたっていて、柱穴の一部でも確認されそうな位置であることから、桁行は2間と考えてさしつかえなからう。

柱穴から遺物が出土している。P—2の埋土上層には壺1139の上半分が埋没していた。他に甕底部片1141を出土している。P—3から底部片1142，P—4から甕上半部片1140，P—2からサヌカイト片を出土している。P—3の下部には柱根が残存していた。柱痕9は直径24cmの

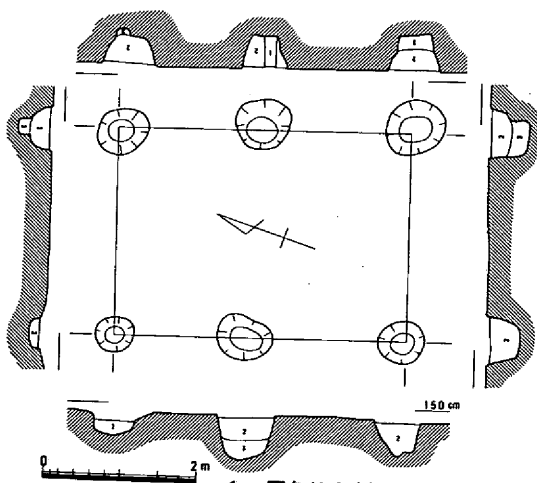
丸太材を4分割したものを使用している。材質はクスノキである。時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。

(正岡)



1. 暗青緑灰色粘土(青灰色砂ブロックを含む)
2. 淡茶褐色粘質微砂
3. 暗青緑灰色粘土
4. 青灰色粘質微砂

第281図 建物-24 ($\frac{1}{100}$)



1. 灰色粘土(炭を含む)
2. 灰褐色粘土
3. 灰青色粘土

第282図 建物-25 ($\frac{1}{100}$)

建物-24 (第281図)

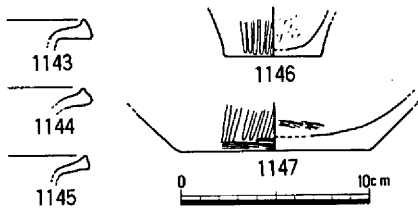
303-Tの西端に位置する東西方向の建物である。規模は小さい。P-2の断面には抜き取りの痕跡が観察できる。各柱穴の埋土状況は一致していない。1・3層は暗青緑灰色粘土、2層は淡茶灰色粘質微砂、4層は青灰色粘質微砂であり、1層には青灰色砂のブロックを含んでいる。遺物は、P-1、P-3、P-4から土器の小片が僅かに出土している。時期は、百・中・Ⅱの新相と考えられる。

(平井)

建物-25 (第282・283図)

303-Tに位置している。調査区の北端部に位置しているため、さらに北へ伸びる可能性もある。付近の南北方向の建物の状況からすると、3×1間の可能性が強い。

南東隅の柱穴から壺 1147・甕 1143・1145・1146の破片、北東隅の柱穴から甕 1144の破片を出土している。その他には甕の小破片を含んでいるものがある。柱痕跡の残っているものをみると直径15cmの円形を呈している。また、北東隅の柱穴内にみられる柱のめり込んだ痕の大きさも、ほぼ同様であることから、直径15cm前後の円形の柱を用いていたものであろう。時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。



第283図 建物—25出土遺物

建物—26 (第 284 図)

303—T から304—T にかかる位置にある。建物—27とは重複している。南北に主軸をもつ3×1間の建物である。北東隅の柱穴は、やや外側に寄っている。その他の柱穴も少し列からずれたものもある。

柱穴からは遺物を出土している。P—2からはサヌカイト製スクレクレイパー 151, P—3

からは甕1148・1151と砥石を転用した敲石 152, P—7からは甕1149・鉢1150の破片が出土している。いずれの柱穴も、土器片が出土したのは上層の埋土からである。掘り方が拡張していることからしても、柱の抜き取り痕へ流入したか埋められたものであろう。P—8の上層には多量の砂が含まれていた。P—1, P—3, P—6, P—7の中には炭や焼土が含まれている。P—4, P—5, P—6, P—8からは甕・高杯等の土器片を出土している。時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。

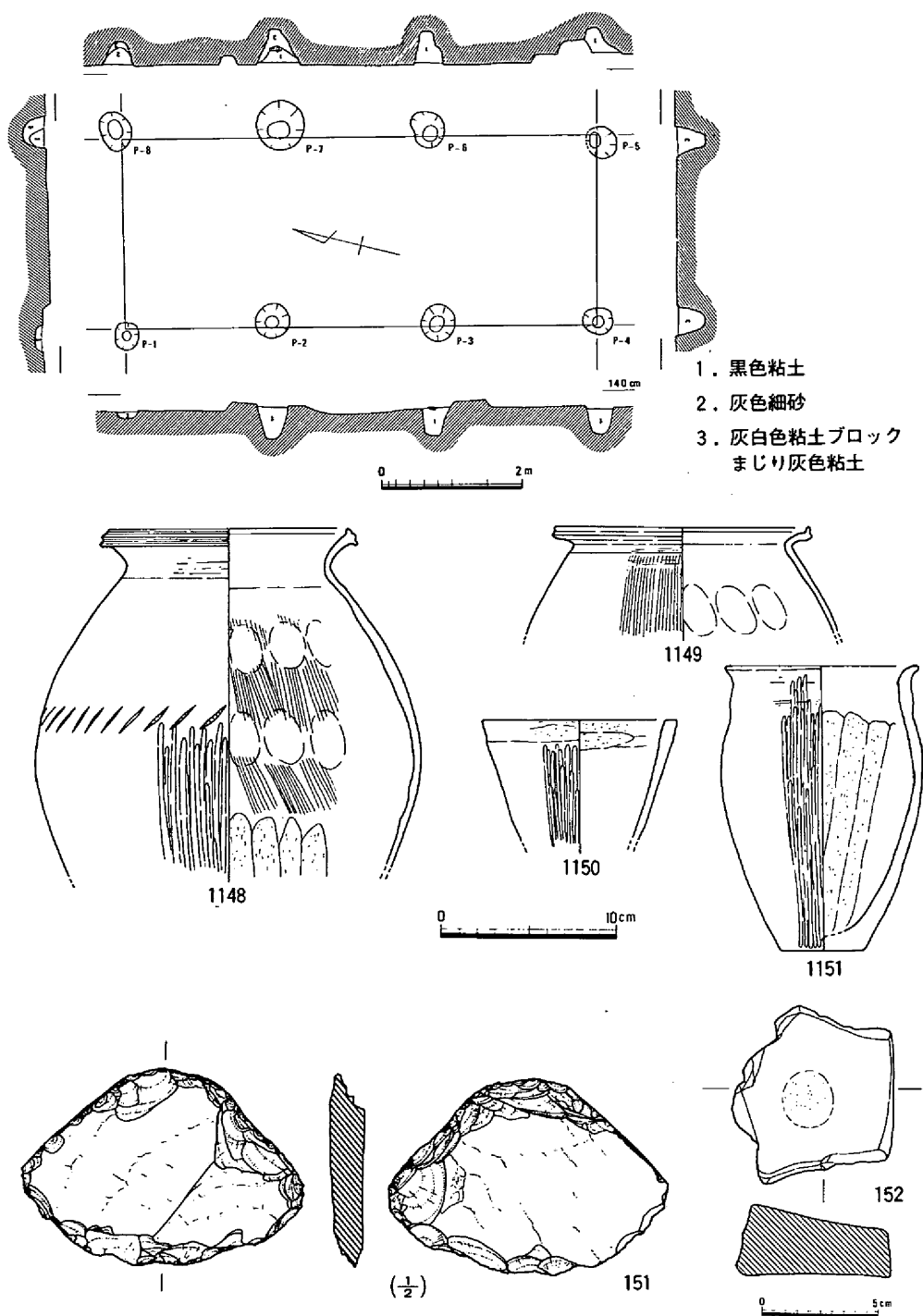
建物—27 (第 285 図)

304—Tに位置している。柱穴は比較的整然と並んでいる。南西隅の柱穴は井戸—11と重複している。柱穴内には柱のめり込んだ痕とおもわれる跡があり、その直径は、15~20cmくらいである。柱穴の埋土には、明緑灰色粘土塊が含まれている。また、炭化物を含んだ柱穴も多い。

柱穴内には、壺・甕・高杯の小破片が含まれている。土器片はほとんどの柱穴から出土し、甕の底部には煤の付着したものもみられる。時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。(正岡)

建物—28 (第286・287図)

303—T西部において検出された、南北に長い4×1間の規模の掘立柱建物である。今回検出された建物群のうちでは最も大きなものの1つで、最東端に位置している。主軸は約10°西へ振っている。この建物の西側には、建物に沿うように多量の土器が埋没していた溝—12が流走している。また、西側に井戸—12が南側に井戸—13がそれぞれ検出されている。柱穴はいずれも、径100cm・深さ90cm前後の大きなもので、柱穴の底は海拔50cmでほぼ一致している。検出された10個の柱穴は、いずれも柱を抜き取ったり、抜き取りを試みた掘り方(抜き取り穴)の為、かなり変形している。柱材が残存していたP—4は柱を抜き取ろうとした掘り方が南側に見られるが、途中で柱が折れたものか底に直径18cm・長さ65cmの柱材10が埋っていた。この柱は丸太材をそのまま使用したもので、材質はネズミサシである。P—1とP—5には柱痕跡が認められるものの柱材は残存していなかった。その他の7個の柱穴はいずれも柱が抜き取ら

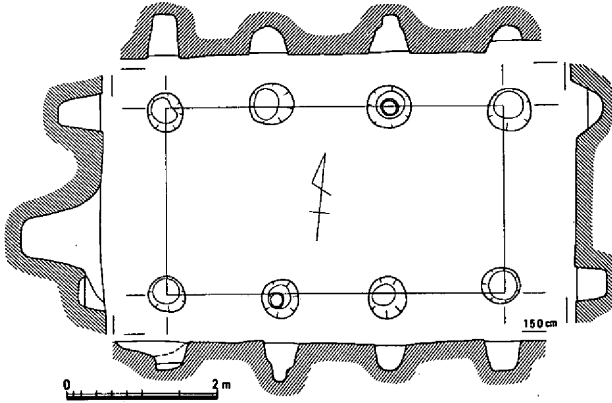


第284図 建物—26 ($\frac{1}{100}$)・出土遺物

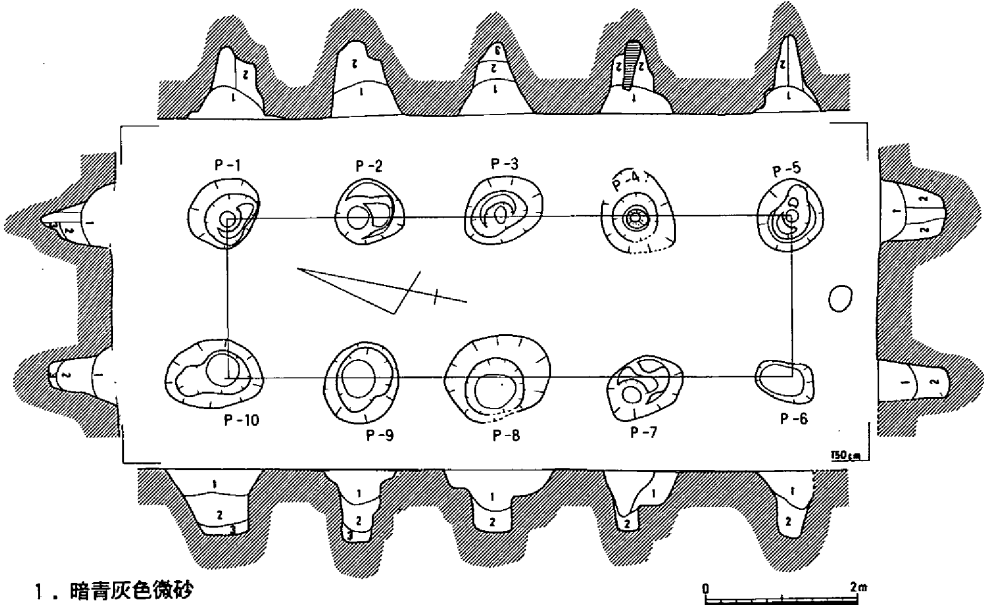
れた跡に埋土が堆積したものである。これら柱穴の埋土中からは、壺・甕・高杯などの土器片が出土している。**1152**はP-10、**1153**はP-6、**1154**はP-3、**1155**はP-7、**1156**はP-1からそれぞれ出土したものである。またP-4からは炭化米が出土している。時期は百・中・Ⅱの新相と考えられる。(内藤)

以上のように、建物は28棟確認された。1×1間のものを2棟含めているので、これを除く

26棟が長方形プランの建物である。柱の抜き取り穴に多量の土器を含むものがあつたり、ほぼ完形の壺が入れられていたものもあって、建物の年代は、百・中・Ⅱに属していることがわかる。それも、土壌中の土器などと比較すると各建物柱穴から出土する土器は、そのうちの新相に含まれていることがわかり、年代

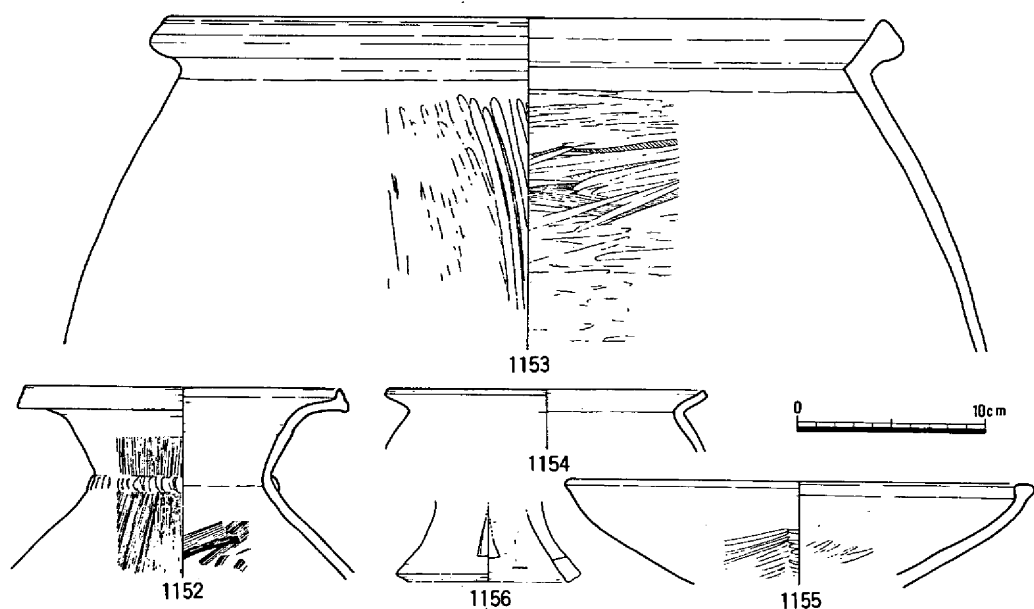


第285図 建物-27 ($\frac{1}{100}$)



1. 暗青灰色微砂
2. 暗灰色粘土 3. 暗灰茶色粘質土

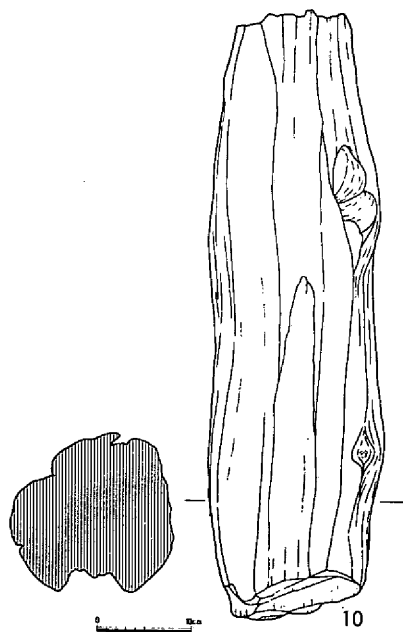
第286図 建物-28 ($\frac{1}{100}$)



幅は小さい。26棟の棟方向をみると東西方向のものと南北方向のものがある。これらには接近しているものもあり、同時に建っていたものでないことは明らかである。土器による年代幅や建物の配置から同時に建っていた建物は、26棟の半分ないし3分の1と推定することができよう。建物の分布範囲は低水路部分よりさらに北へ伸びていることからすれば、10棟あまりの建物がまとまっていることになる。このことは、従来竪穴式住居址群に伴って、1～2棟の建物があるというのとは異なったものとして注目される。

周辺で確認される竪穴式住居は、数棟にすぎず、これらも建物の分布する中心部には存在しない。また、建物の分布する範囲に、井戸14基と土

壙59基が確認された。これらの遺構の時期も建物群の時期と一致している。土壙中には土器の他に、焼土、ガラス滓を多量に含むものもみられた。土器は、周辺の遺構に含まれているのと同様であるが、ガラス滓や多量の焼土が建物付近で検出されるのは特異な状況である。



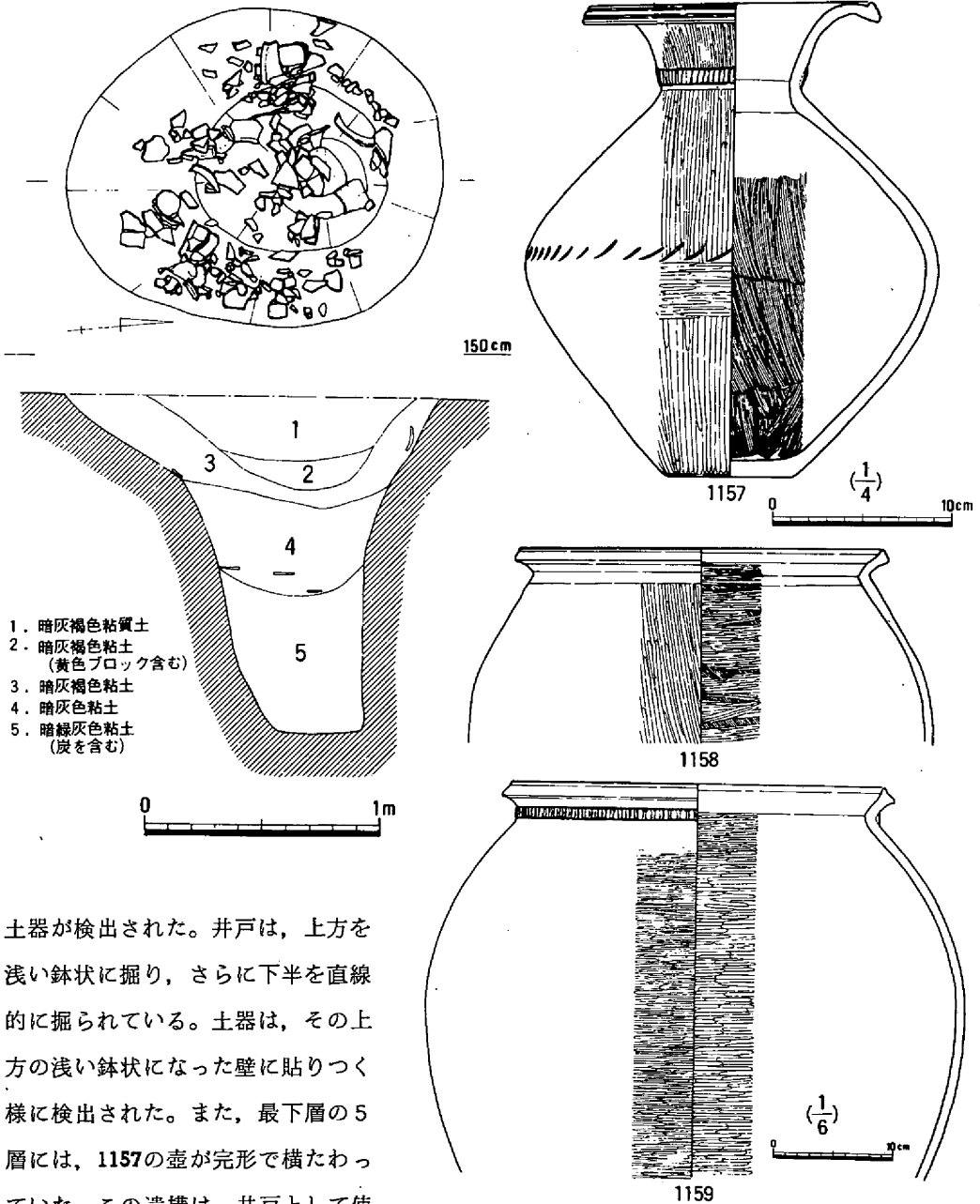
第287図 建物—28出土遺物

(正岡)

(3) 井 戸

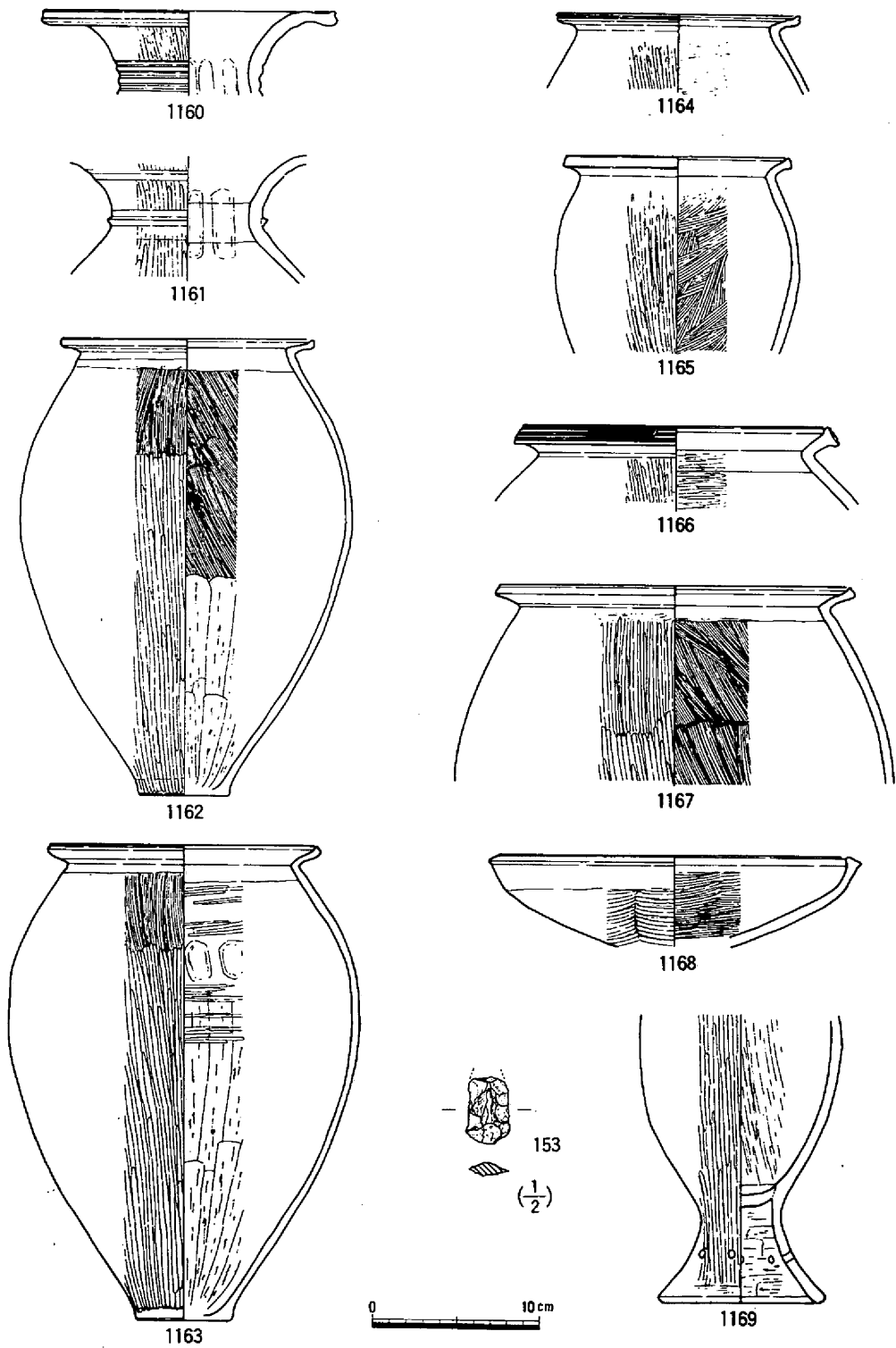
井戸一1 (第288・289・290図)

調査区中央に検出された井戸である。規模は、162×135cmの楕円形を呈する。底部の規模は約36cmである。深さは142cmを測る。遺構内の堆積は、1～5層までである。3、4層に多くの

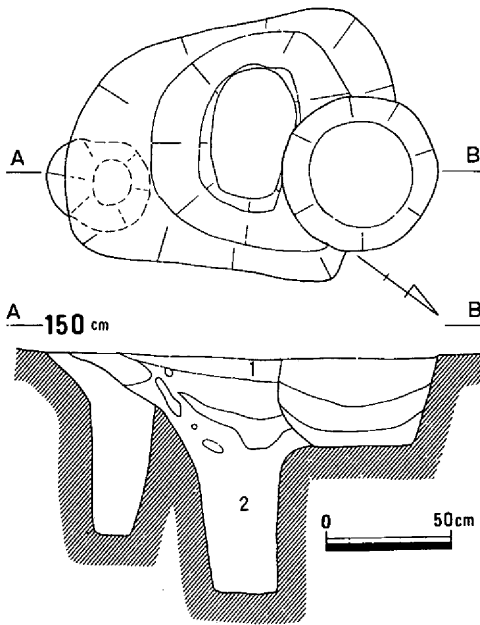


土器が検出された。井戸は、上方を浅い鉢状に掘り、さらに下半を直線的に掘られている。土器は、その上方の浅い鉢状になった壁に貼りつく様に検出された。また、最下層の5層には、1157の壺が完形で横たわっていた。この遺構は、井戸として使用されていたもので、1157の土器

第288図 井戸一1 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物(1)

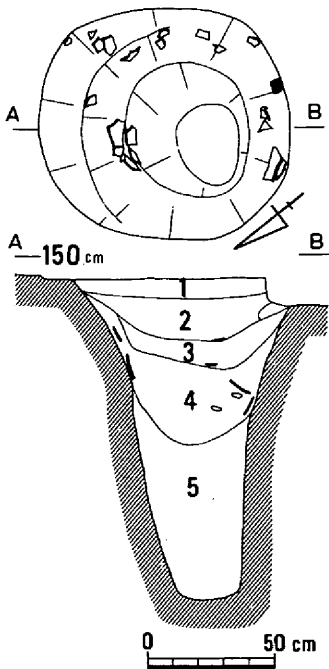


第289図 井戸一1出土遺物(2)

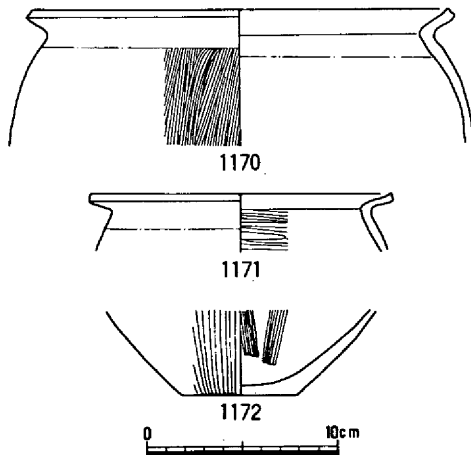


第291図 井戸—2 ($\frac{1}{30}$)

し、中位部で円形、底部で楕円形を呈する。大きさは長辺 130 cm、短辺 110 cm、深さ 95 cm を測り、井戸底の海拔高は 45 cm を測る。北端を古墳時代のピットに切られ、南端で建物—7 の柱穴を切っている。堆積土は 2 層に分けることができるが、ほとんど一気に埋めたような状況であ



第292図 井戸—3 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物



1. 茶灰色粘土
2. 炭・焼土を含む黒色粘土
3. 炭を含む黒色粘土
4. 黄色ブロックを含む黒色粘土
5. 暗灰色粘土

第290図 井戸—1 出土遺物 (3)

は、井戸の使用時、または、使用停止時に際して有機的関係がうかがわれるものである。出土した土器は、ほぼ単一の時期のもので、百・中・Ⅱの新相の特徴を示すものである。

(中野)

井戸—2 (第 291 図)

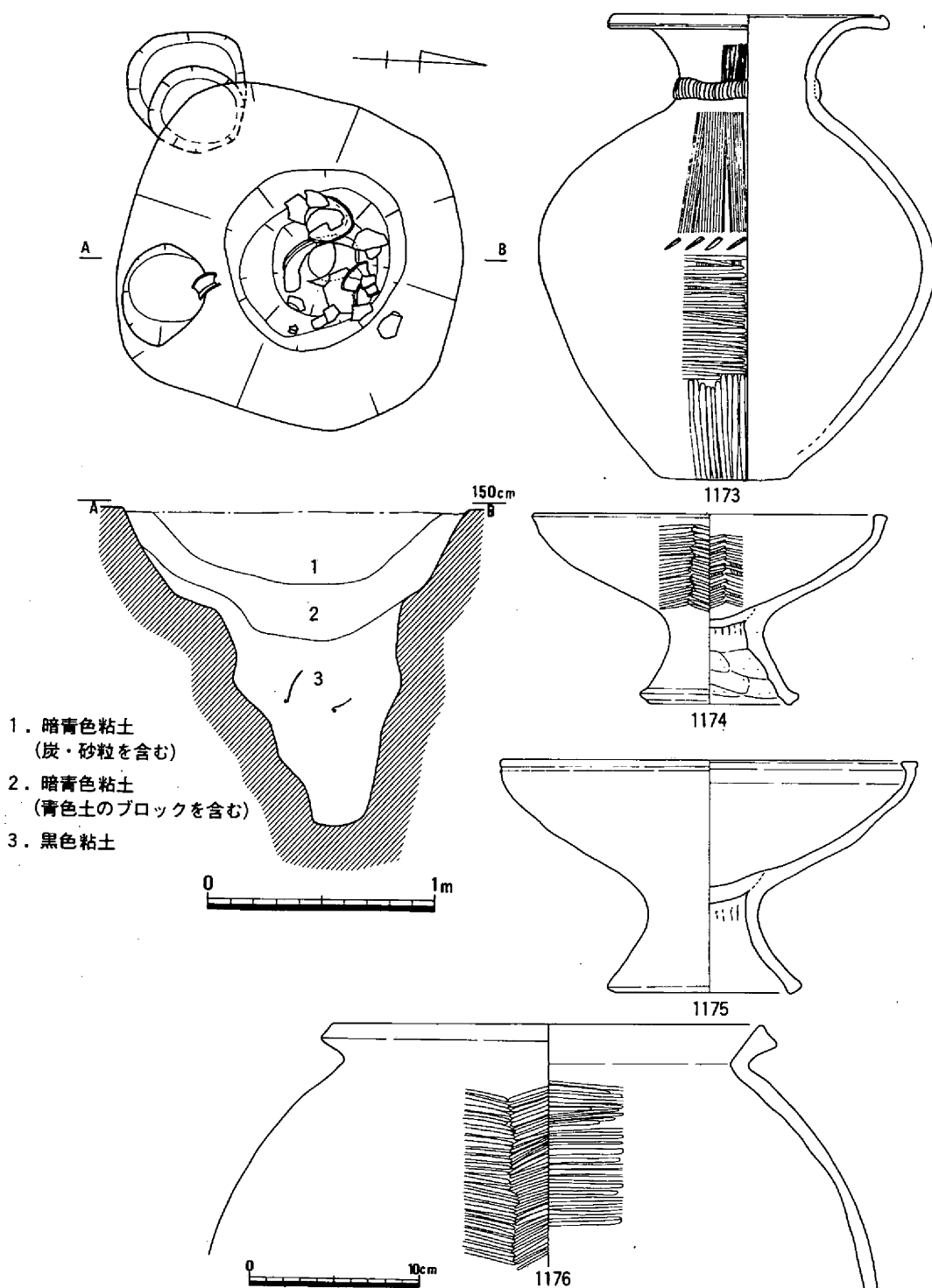
井戸—3 の北東 70 cm 程離れて検出できた井戸で、平面形はくずれが著しく不定方形を呈

る。遺物は全く出土していないが、百・中・Ⅱの新相に推定する。

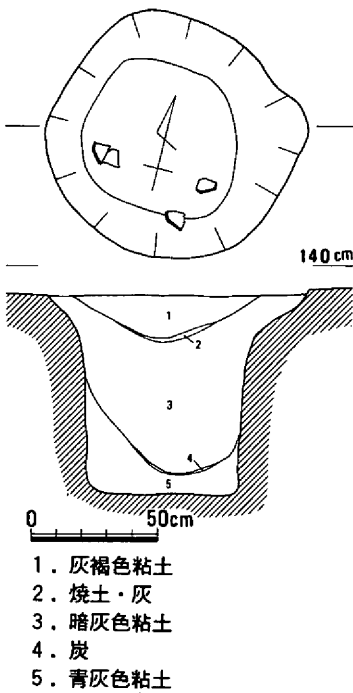
井戸—3

(第 292 図)

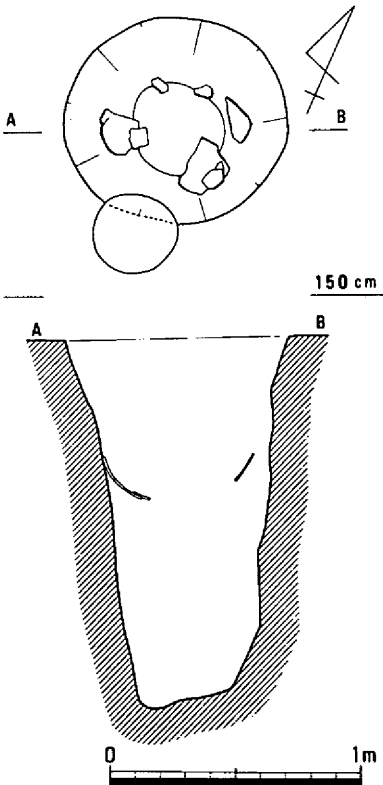
304—R の北西部にあり、建物—7 の南に位置する直径 100 cm、深さ 130 cm を測る井戸である。底部は長



第293図 井戸-4 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物



第294図 井戸—5 ($\frac{1}{30}$)



第295図 井戸—6 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

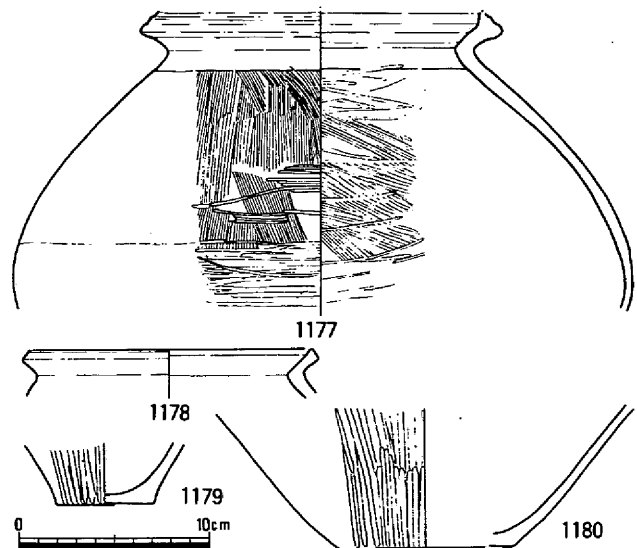
径30cm・短径25cmの楕円形を呈し、肩部は北側が少しくずれて傾斜が変換している。底部の海拔高は15cmである。埋積土は5層に分けることができ、遺物は2～4層に包含している。出土遺物は甕の破片ばかりである。これらの土器からこの井戸の埋った時期は百・中・Ⅱの新相と想定することができる。(浅倉)

井戸—4 (第293図)

建物—3と重複する状態で検出した。掘り方の平面形は、隅丸方形を呈し、最大径約170cmを測る。井戸は、底に向うにしたがい広さを減じてゆき、底面は、円形を呈し、径約22cmを測る。井戸の中央部やや下半からは、壺・甕・高杯が出土した。土器の時期は、百・中・Ⅱの新相と考えられる。この井戸は、建物—8よりも新しい。(井上)

井戸—5 (第294図)

303—Sに位置する。ほぼ円形を呈し、深さは80cmにすぎないが、調査を実施した冬季にもかかわらず著しい湧水があった。埋土は暗灰色粘土を主とするが、中間に

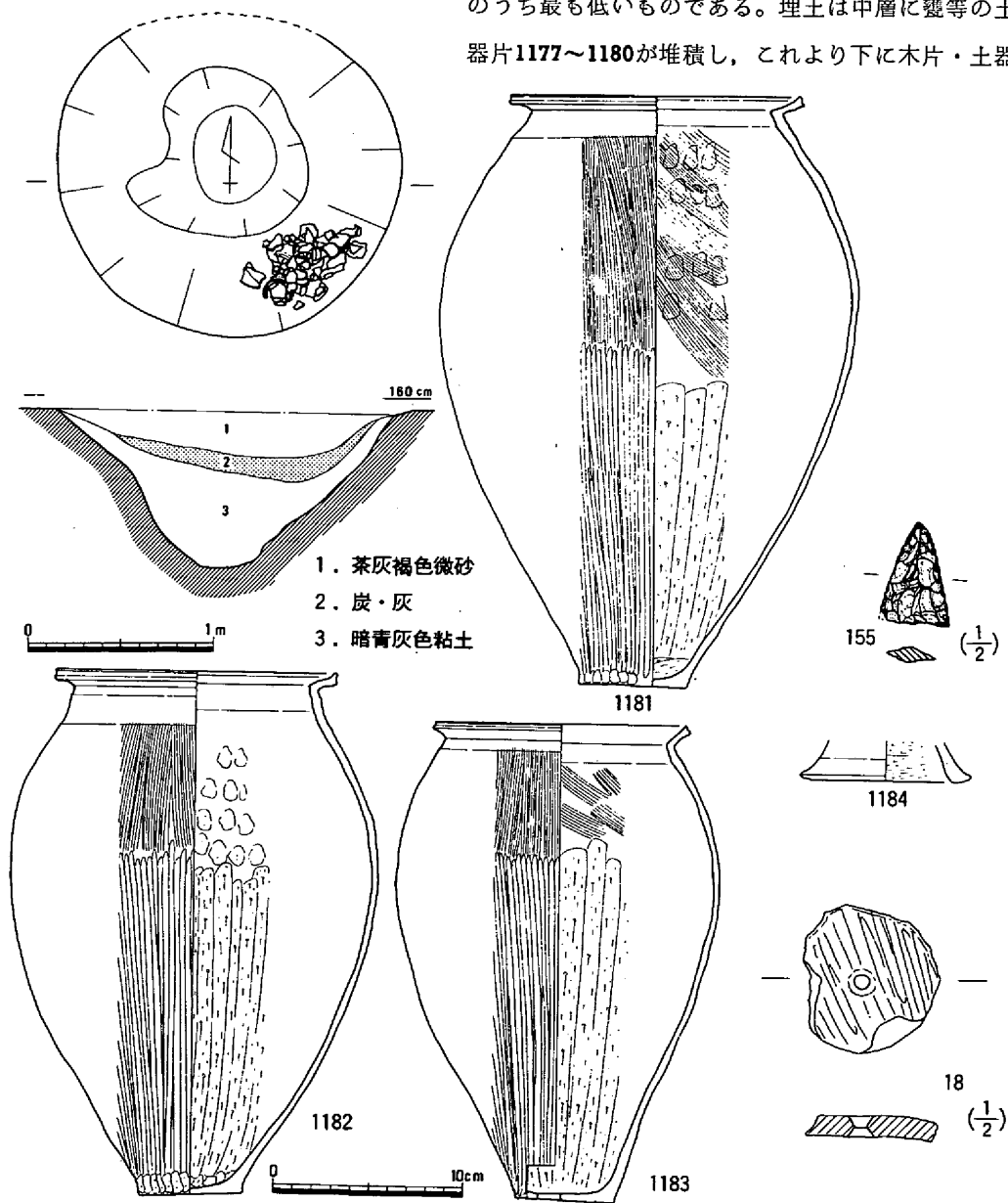


百間川今谷遺跡

うすい炭と灰の層がある。また、少量の土器片も出土している。時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。(正岡)

井戸—6 (第295図)

304—S東部の建物—14と建物—21の間において検出された、長径90cm、短径80cmの円に近い楕円の平面形をもつ深さ150cmの井戸状遺構で、底は海拔-10cmを測り、今回検出された井戸のうち最も低いものである。埋土は中層に甕等の土器片1177~1180が堆積し、これより下に木片・土器



第296図 井戸—7 ($\frac{1}{40}$)・出土遺物

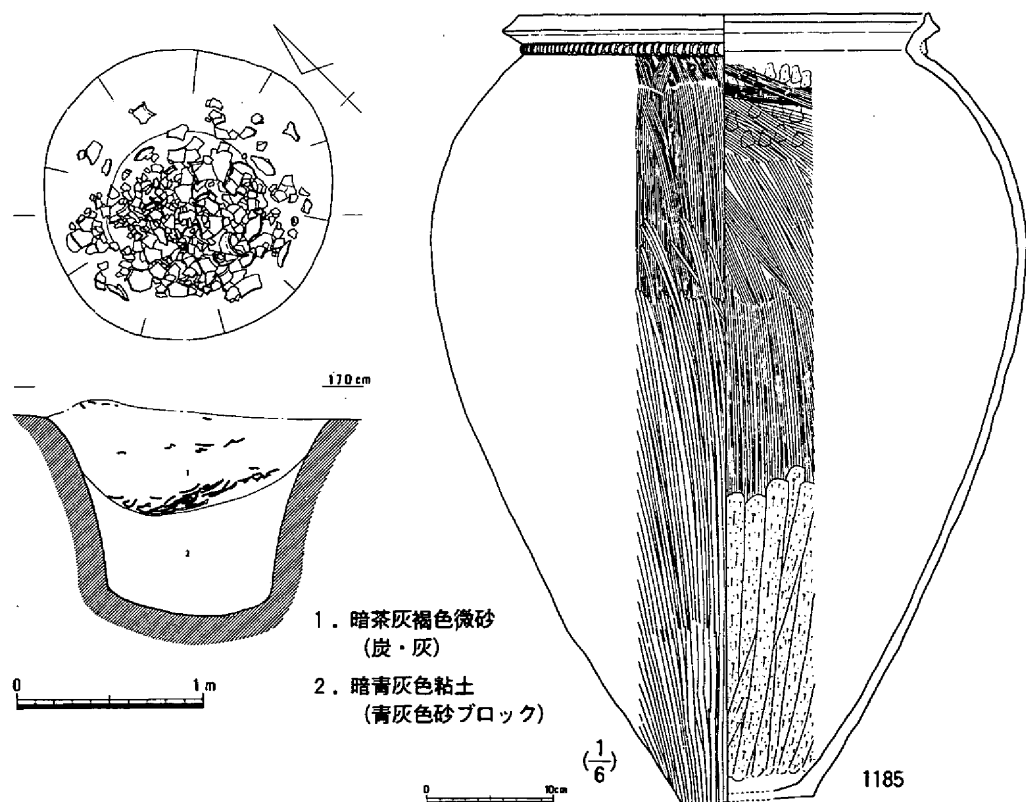
細片を含む暗茶灰色粘質土層が堆積している。木片はアラカシ・ニワトコ・ネズミサシ等の樹種がみられるがいずれも自然木と思われる。時期は百・中・Ⅱの新相である。 (内藤)

井戸—7 (第296図)

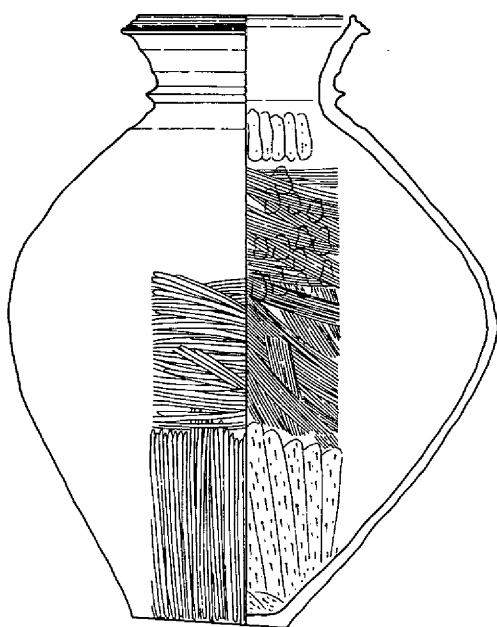
304—Tの西端部中央で検出した井戸で、建物—22の柱穴の一部及び土壇—51を切っている。平面形は、直径約180cmの円形を呈し、深さは、検出面より86cmを測る。断面は、検出面より約45°の角度で徐々に底部にむかっている。底のレベルは海拔67cmである。平面形の大きさに比べて浅い感じをうける井戸である。遺物は、主に1層と3層から出土している。平面図に示した土器は3層出土のもので、東南肩部に約30°の傾斜で3個体分の甕が一括廃棄されていた。図の1184及び紡錘車・サヌカイト製の石鏃は1層出土、1181~1183は3層出土のものである。時期は、百・中・Ⅱの新相であると考えられる。

井戸—8 (第297~299図)

304—Tの西南部で検出された。平面形は、直径約155cmの円形を呈し、深さは、検出面より104cmを測る。底のレベルは海拔49cmである。埋土は2層あり、図の1層は炭・灰を含む暗茶灰褐色微砂、2層は青灰色のブロック土を含む暗青灰色粘土である。底面には、植物遺体(葉など)が薄い面をなして堆積していた。



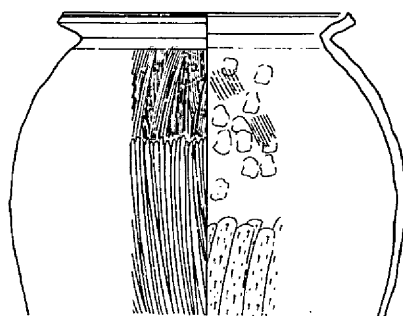
第297図 井戸—8 (1/40)・出土遺物(1)



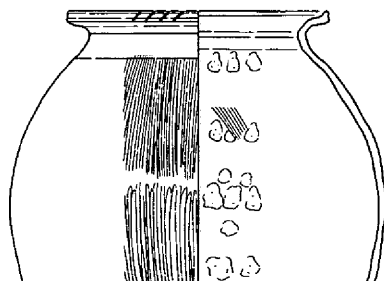
1186



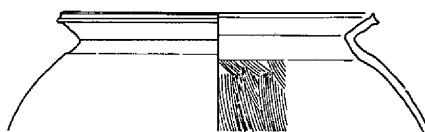
1187



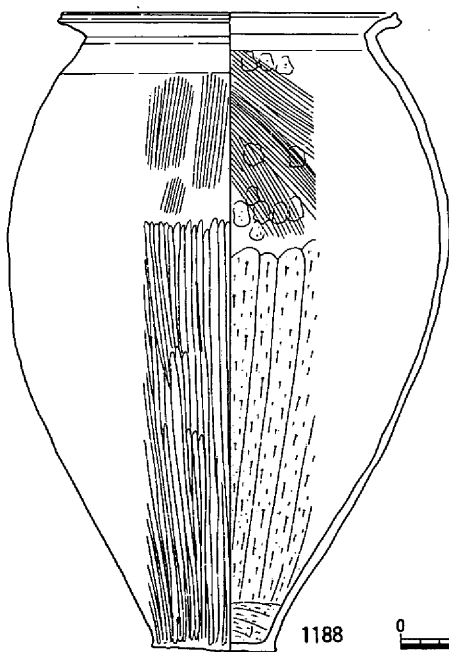
1189



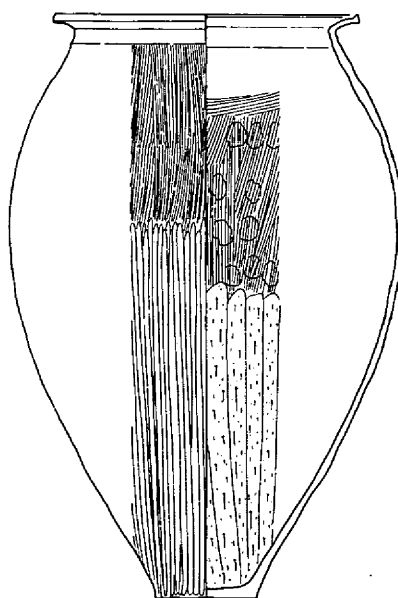
1190



1191



1188

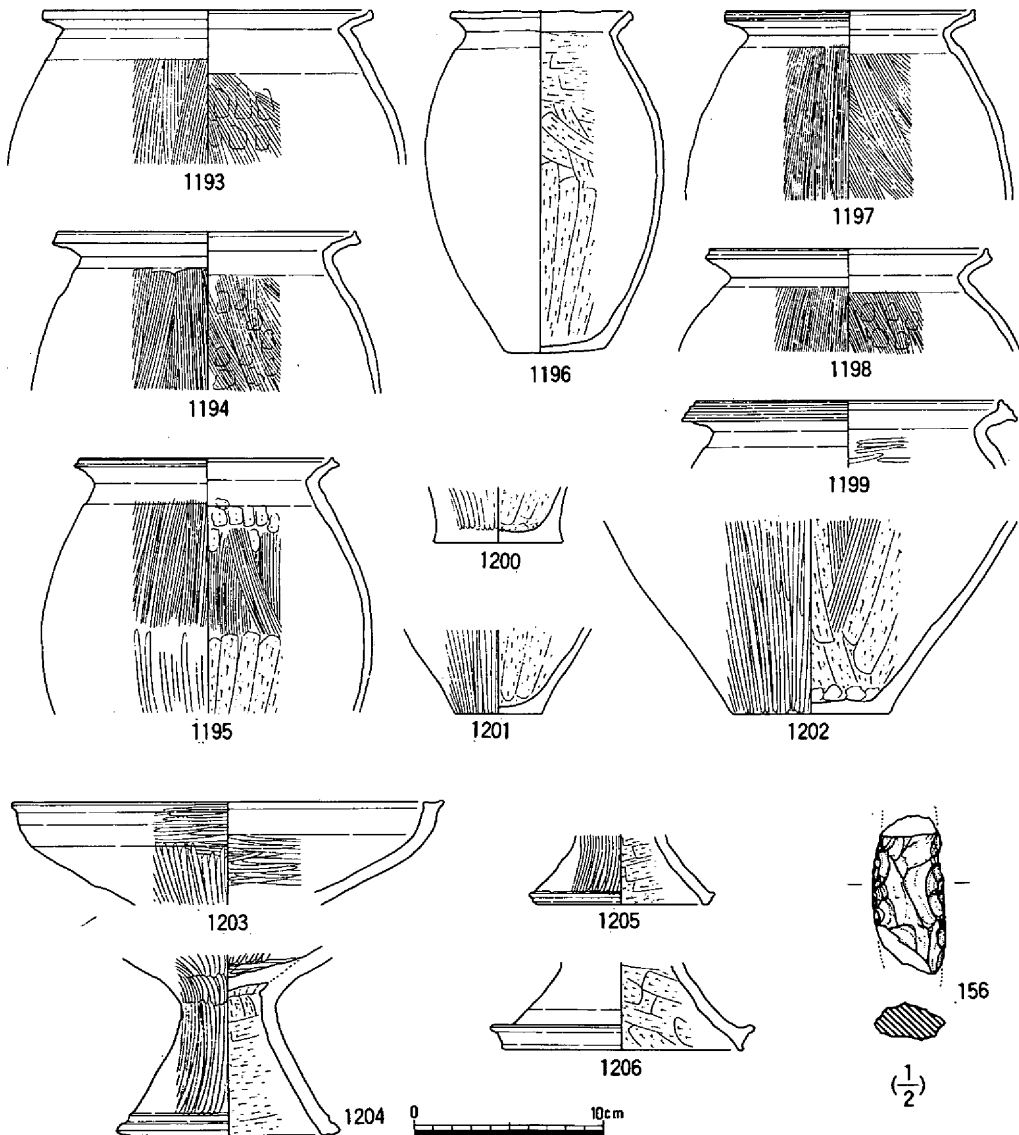


1192

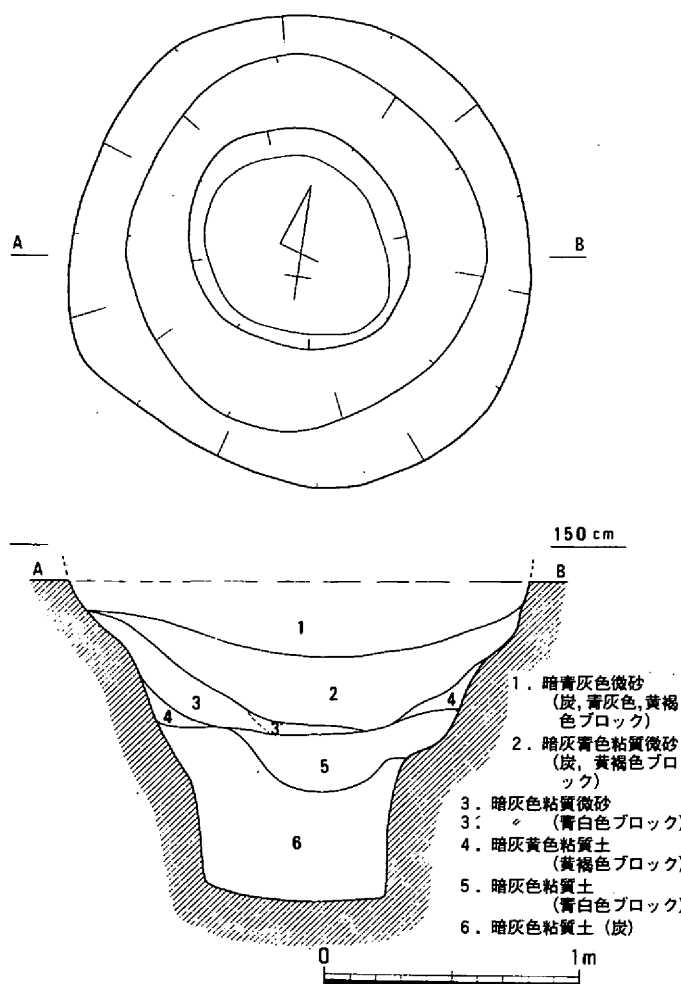
第298図 井戸—8 出土遺物 (2)

遺物は、1層・2層とも出土しているが、1層からの出土が圧倒的に多い。土器の多くは、1層の下面にあたかも東南方向から投げ込まれたかのように破片が重なった状態で出土している。図示した遺物はすべて1層出土のものである。156は、サヌカイト製の石槍の破損品であると考えられる。また、1層からはコダイヒメモモの種子が出土している。更に、2層の土壌の分析結果によれば、マタタビ、コナギ、ホタルイ、ヤナギタデ、タマガヤツリ、アゼオトギリ、ノチドメ、ツユクサ、ノミノフスマ、メナモミ、クワクサ、サクラソウSP.、カラムシ、オオバコ、イヌタデ、エノキグサの種子が検出されている。時期は、百・中・Ⅱの新相であると考えられる。

(平井)



第299図 井戸—8出土遺物(3)

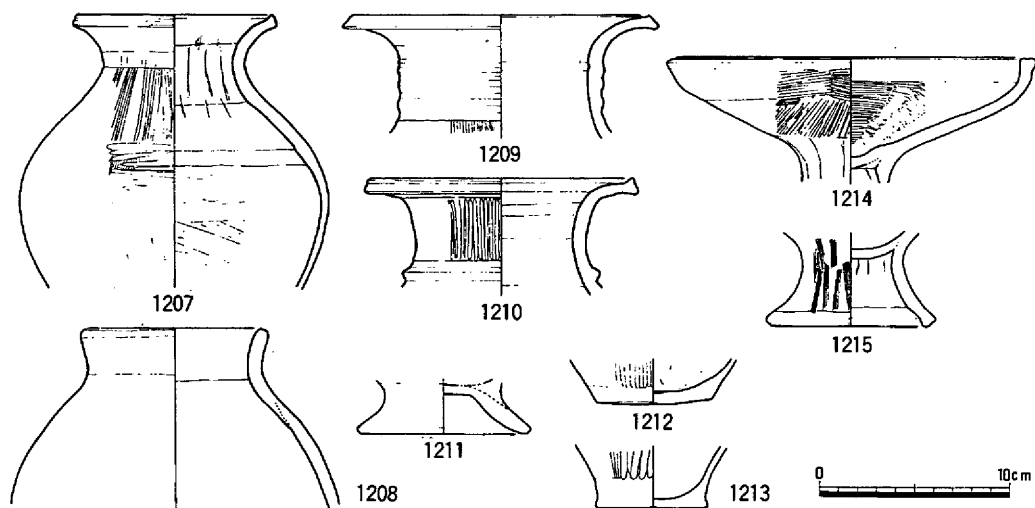


井戸—9 (第 300 図)

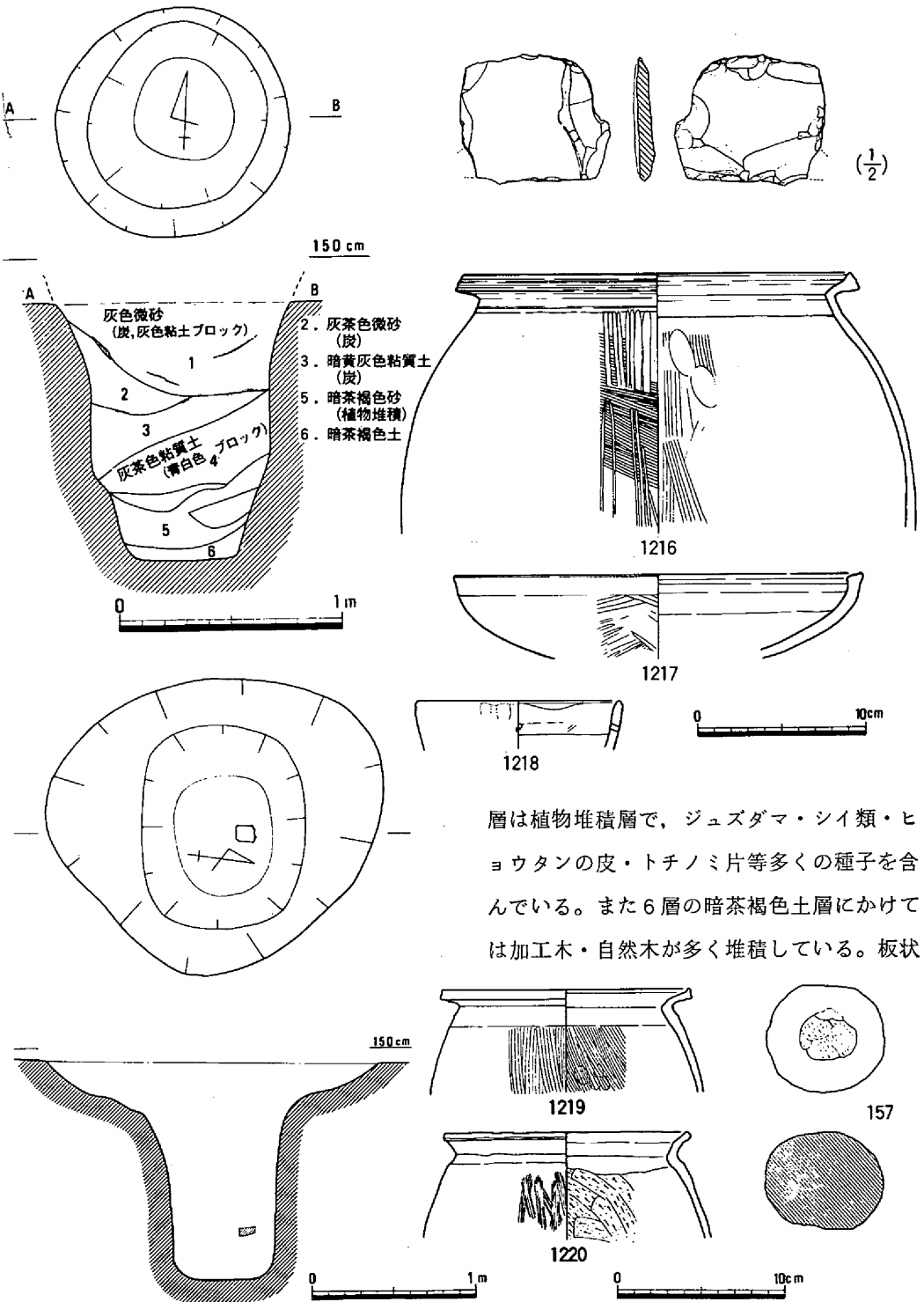
303—Tの中央, 建物—24・25・26に囲まれた位置において検出された。径180cmの円形の平面形を呈し, 深さ130cmの井戸状遺構で底は海拔10cmである。最下層の暗灰色粘質土層には, 壺・甕・高杯等の土器片1207~1215の他にコダイモモの種子や加工木が埋没している。加工木には板状のものと杭状のものとがみられ, 前者にはコウヤマキ・カヤノキ・アラカシが, 後者には, カマツカ・アラカシ等の樹種がみられる。時期は百・中・Ⅱの新相である。

井戸—10 (第 301 図)

303—Tの南部, 建物—26 の中心において検出された, 径105cmの円形平面形を呈する深さ120cmの井戸状遺構で底は海拔13cmを測る。埋土は6層に分かれ, 5層の暗茶褐色砂



第300図 井戸—9 (1/30)・出土遺物



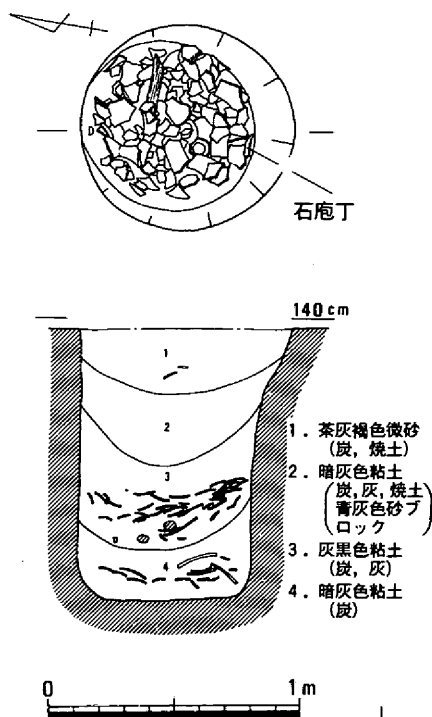
層は植物堆積層で、ジュズダマ・シイ類・ヒョウタンの皮・トチノミ片等多くの種子を含んでいる。また6層の暗茶褐色土層にかけては加工木・自然木が多く堆積している。板状

第301図 井戸-10 (1/30)・11 (1/40)・出土遺物

の木片にスギ・ヒノキ・ウバメガシが、杭状のものにノグルミ・ウバメガシ・アラカシ・ヤブツバキ等の樹種がみられる。土器は甕・高杯等の土器片1216~1218がわずかに出土しているのみである。時期は百・中・Ⅱの新相である。(内藤)

井戸-11 (第301図)

304-Tの北側中央部に検出した井戸で、建物-27の柱穴の一部を切っている。平面形は、約200×180cmの不整形な円形を呈し、検出面からの深さは134cmを測る。検出面から深さ20cm

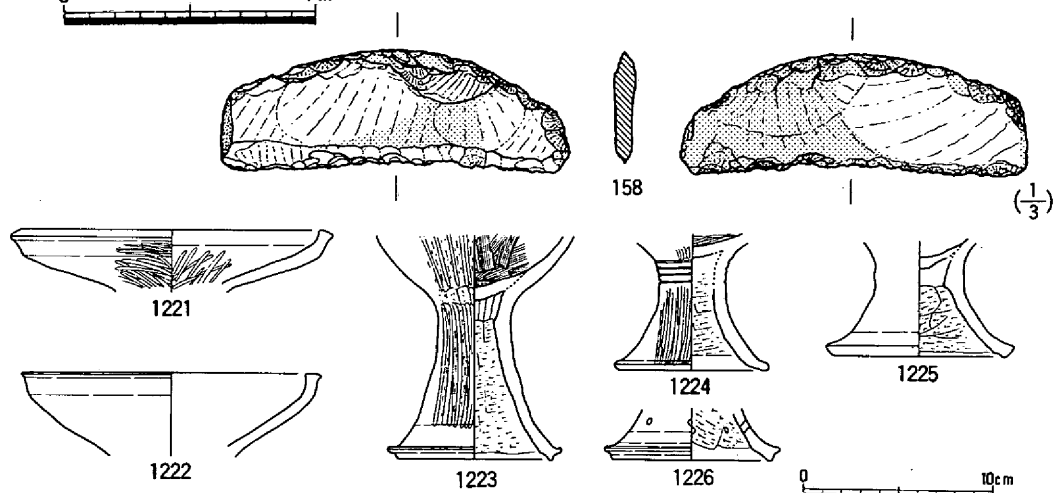


前後までは皿状を呈し、そこから急傾斜で底にむかう。底のレベルは海拔10cmである。埋土は、青緑色のブロック土を含む暗青緑灰色粘質微砂が1層である。

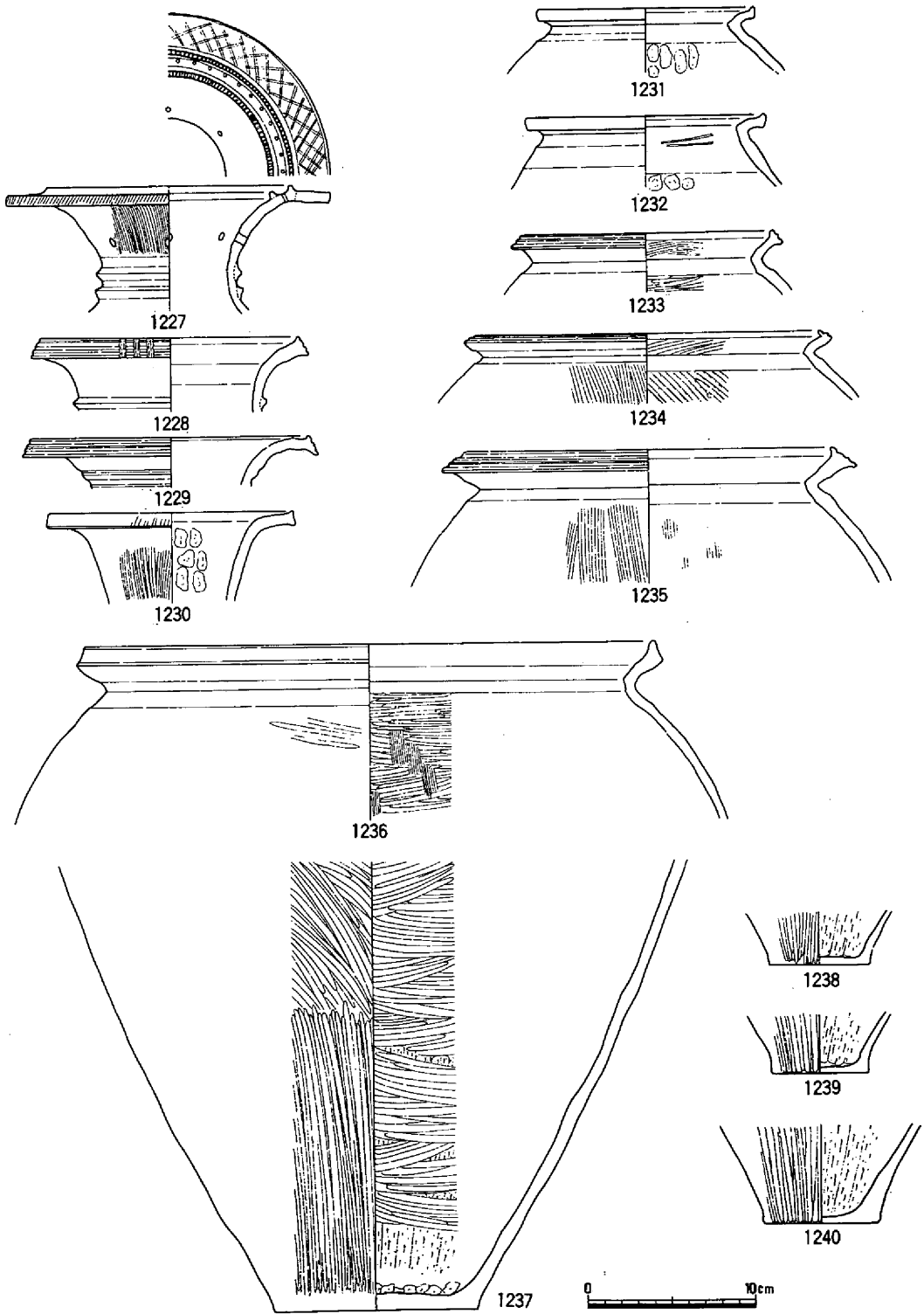
遺物は、少量の土器及び閃緑岩製の敲石157が出土している。また、種子として、マツカサ1、モモ1、ムギ1が出土している。更に、イヌシデの板状木片が1片出土している。時期は、百・中・Ⅱの新相であると考えられる。

井戸-12 (第302・303図)

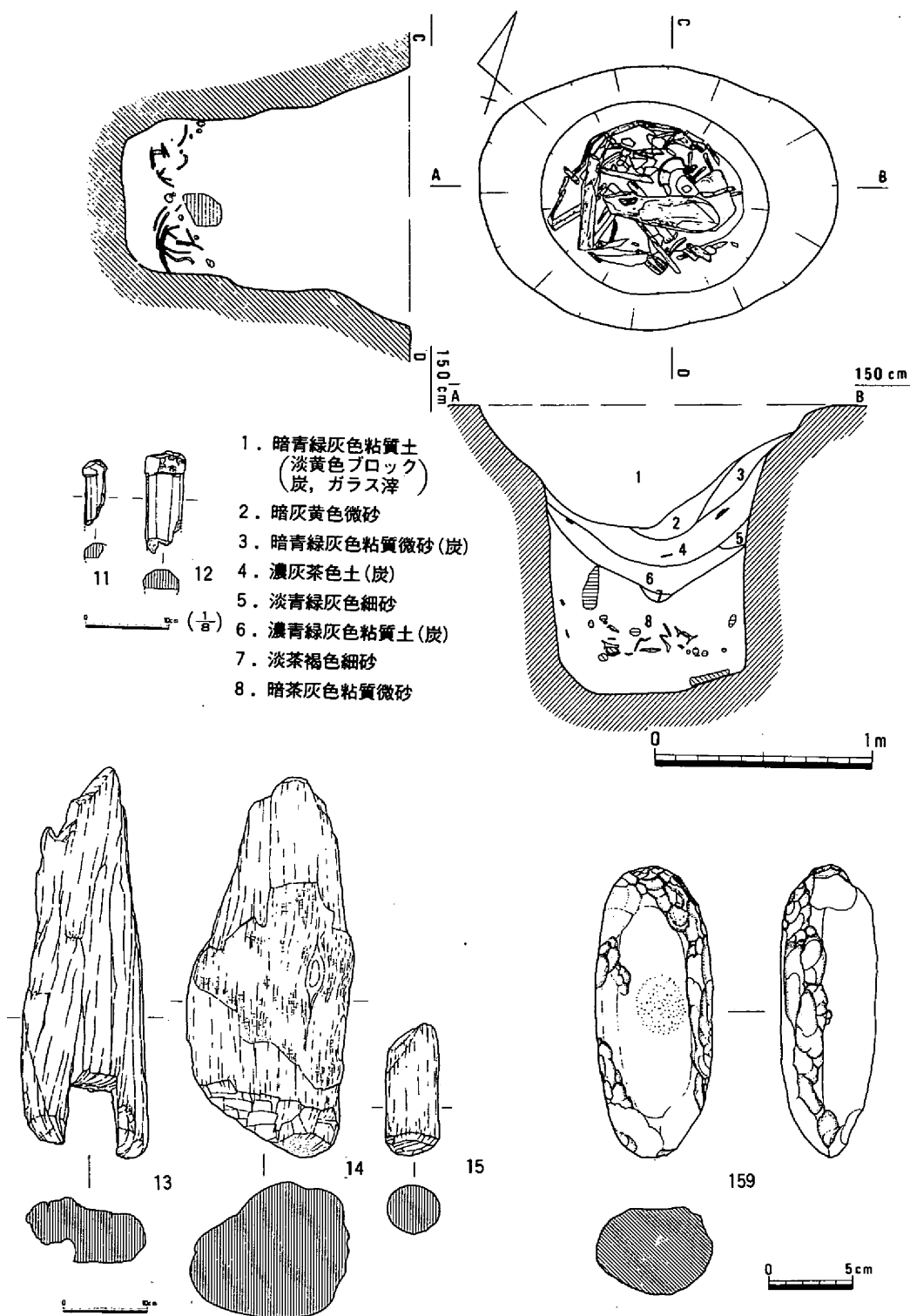
303-Tの中央よりやや東側において検出した井戸で、溝-12によって切られている。平面形は、直径約80cmの円形を呈し、検出面からの深さは、109cmを測る。底のレベルは海拔26cmである。埋土は4層



第302図 井戸-12 (1/30)・出土遺物 (1)



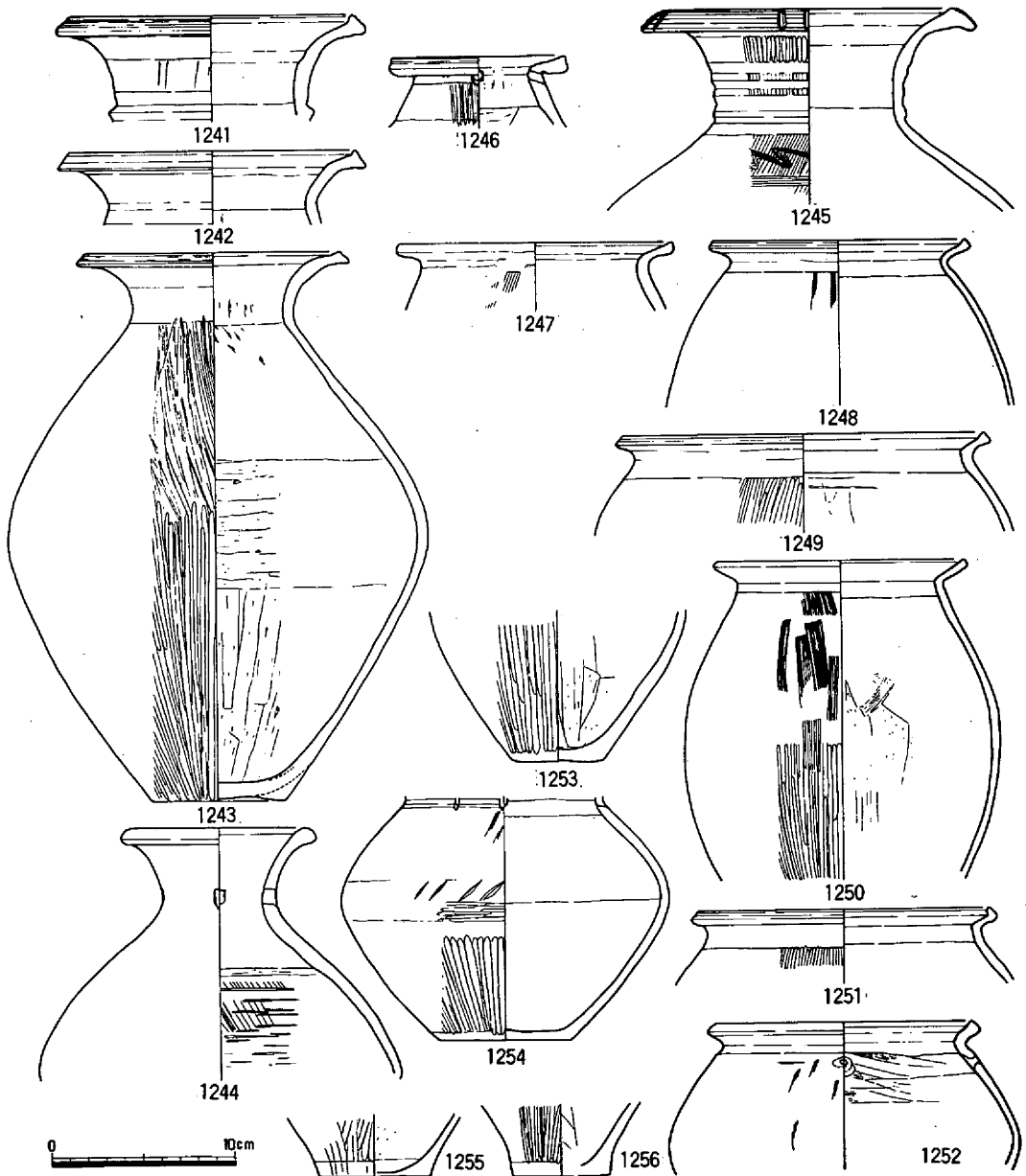
第303図 井戸-12出土遺物 (2)



第304図 井戸-13 (1/30)・出土遺物 (1)

あり、図の1層は炭・焼土を含む茶灰褐色微砂，2層は炭・灰・焼土及び青灰色のブロック土を含む暗灰色粘土，3層は炭・灰を多く含む灰黒色粘土，4層は炭を含む暗灰色粘土である。

遺物は、おもに3・4層から出土している。第302図 158 はサヌカイト製の石庖丁で、3層から出土したものである。図示した土器のうち、1228は2層から、1221・1224・1227・1232・1233・1235・1238・1239・1240は3層から、1225・1234・1236は4層から、それ以外は3層よ



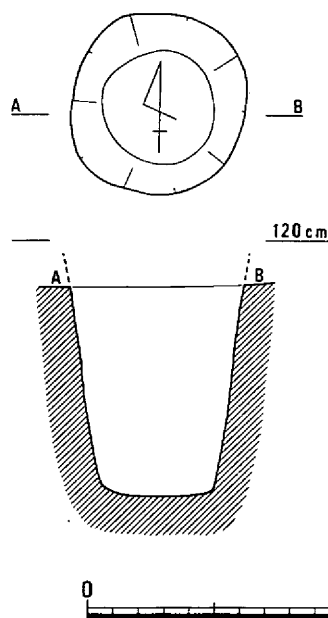
第305図 井戸-13出土遺物 (2)

り上層から出土したものである。また、3層からはコダイモモ1が出土している。更に、2層の土壌分析の結果、ザクロソウの種子が検出されている。また、この井戸からはいくつかの木片が出土しており、樹種鑑定の結果によれば、コウヤマキの杭片、スギの板材、ケヤキ、ネズミサシ、コウヤマキ、スギの木片等であった。

時期は、百・中・Ⅱの新相であると考えられる。

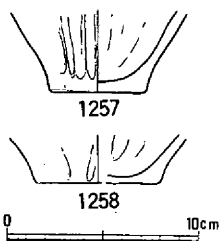
(平井)

井戸—13 (第304・305図、図版15—4)



第306図 井戸—14 (1/30)・出土遺物

304—T北東端、建物—28の南、溝—12の東側において検出された長径165cm、短径120cmの楕円形の平面形を呈する、深さ135cmの井戸状遺構で、底は海拔10cmを測る。埋土は8層に分かれ、1層の暗青緑灰色粘質土層中には炭およびガラス滓を多量に含んでいる。4層および6層には土器片とともに灰・炭を非常に多く含んでいる。8層の暗茶灰色粘質微砂層には、壺・甕等非常に多くの土器片1241～1256とともに



珩岩製の磨製石斧未製品159および多くの木片・円礫が埋没している。また底の東端には貼りついた状態で1辺20cmで、厚さ2cm程の石が埋没している。木片はいずれも柱の一部や杭等、加工されたもので、すべて焼けたあとが認められることから火災にあった建築資

材を投棄したもののようなものである。樹種はウバメガシ・ヤマザクラ・アラカシ等が確認されている。時期は百・中・Ⅱの新相である。

井戸—14 (第306図)

303—U南部の調査区北東端において、土壌—54の下から検出されたもので、上半は土壌に切られ、検出したのは直径70cmの円形の平面形を呈する深さ80cmの井戸状遺構で底は海拔20cmを測る。出土したのは図示した甕の底部片1257・1258などわずかな土器片のみである。時期は百・中・Ⅱの新相である。

(内藤)

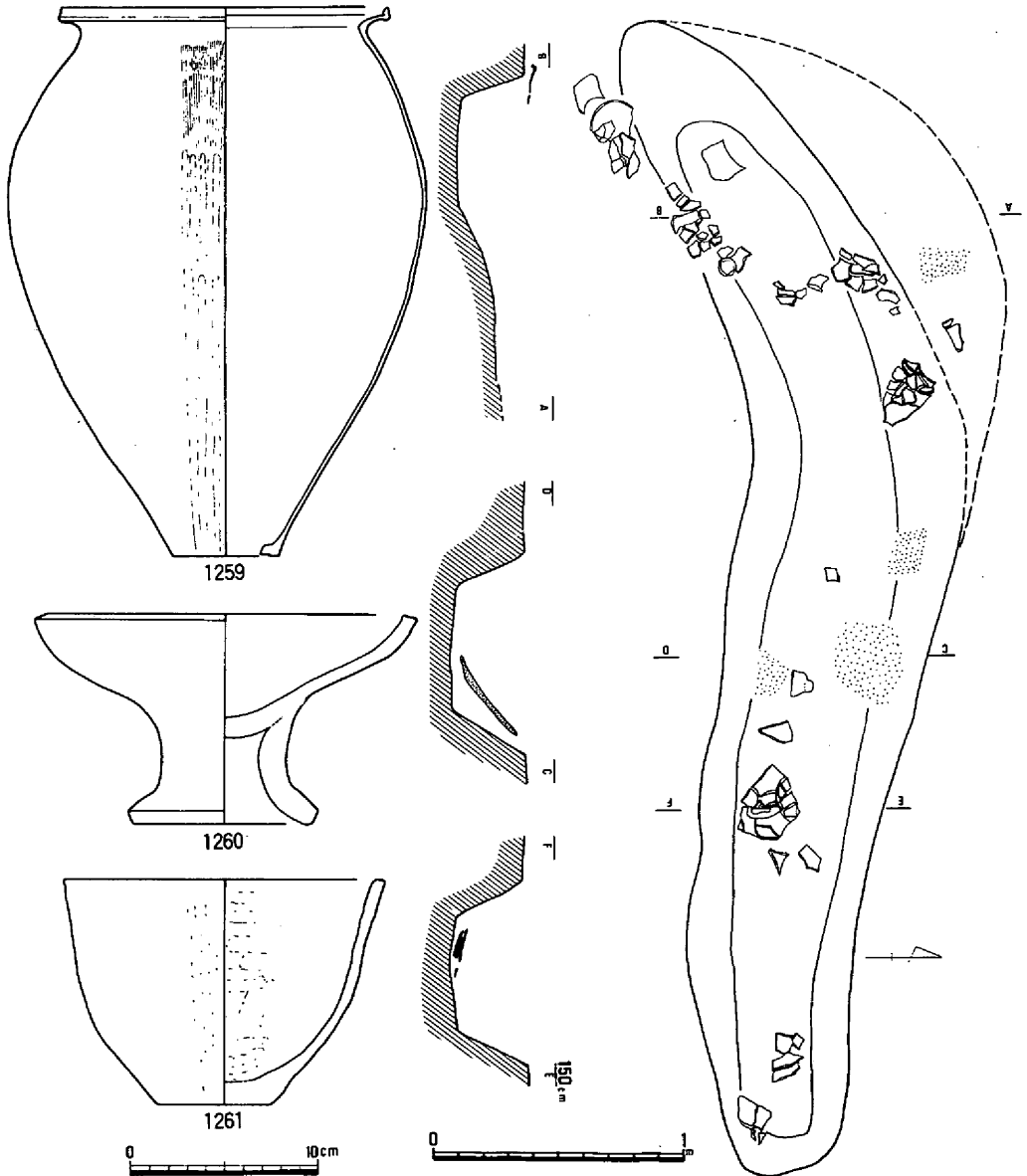
以上、弥生中期の井戸は、14基検出された。井戸中には多量の土器を含むものが多く、木片等の保存状態も良好であった。出土する土器によるといずれも百・中・Ⅱの新相に属するもので、建物と同一時期のものである。建物の分布とまったく一致している。このことから建物と密接な関係をもっていたことがわかる。

(正岡)

(3) 土 墳

土墳一1 (第307図)

今谷橋脚一1の北東よりに検出されたものである。東西にのびる土墳で、中ほどで南西方向へ屈曲する形態を示す。この屈曲部北側の周辺においては、土墳内に認められた花崗岩の風化土が存在していることなどから図に示した破線の部分まで土墳として含まれる可能性が大であ



第307図 土墳一1 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

る。さらに、南側のプラン外に高杯が埋土されている土壌が存在する。この土壌はプランの検出が非常に困難であり、かなり掘り下げた状態で確認されているため、これらを含めた土壌であったと推定されるのである。

なお、土壌内に示した点部分は、花崗岩の風化土であり、この種の砂粒は他の土壌において検出されているものと同一のものである。

出土遺物は、甕・高杯・鉢であり、時期は百・中・Ⅱの新相と考えられる。

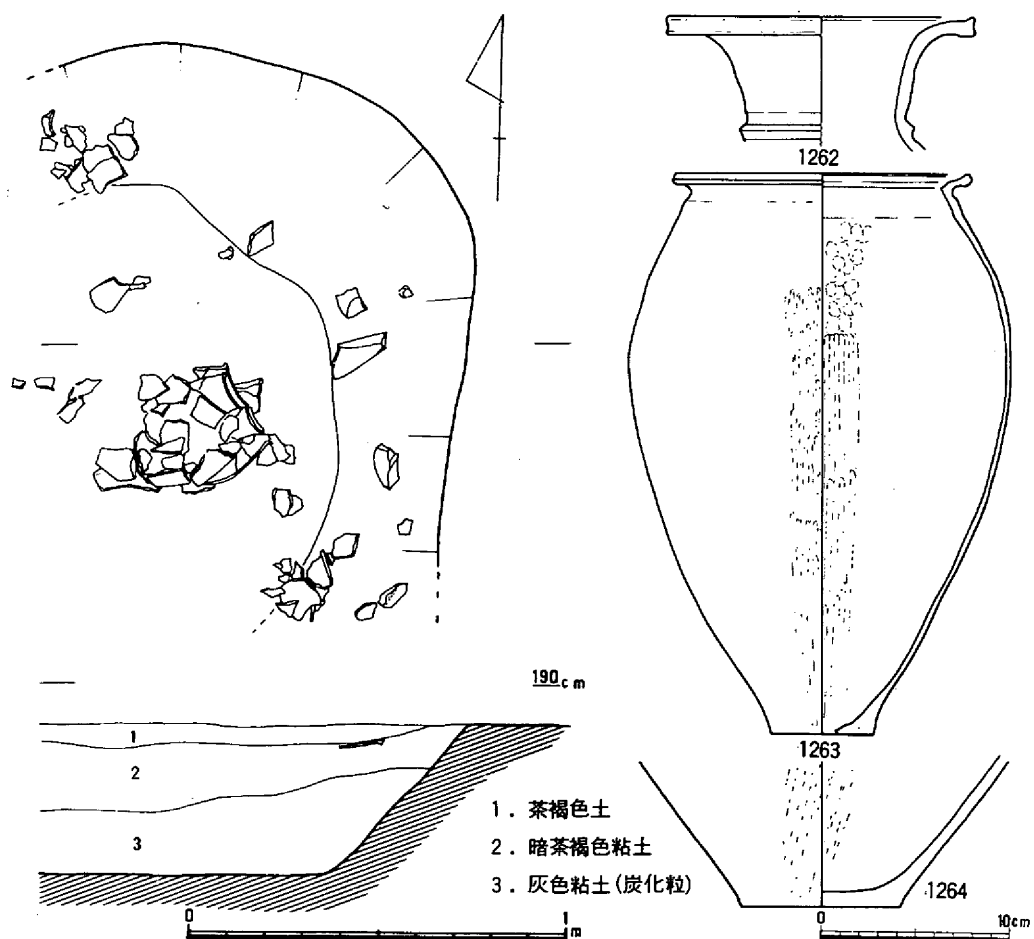
土壌－2（第308図）

今谷橋脚－2の南西隅に接して検出されたものである。土壌埋土中には、花崗岩の風化土が認められているが、土壌－1のようにまともでは認められていない。

出土遺物は、壺及び甕がつぶされた状態で出土している。

時期は、百・中・Ⅱの新相であると考えられる。

（下澤）



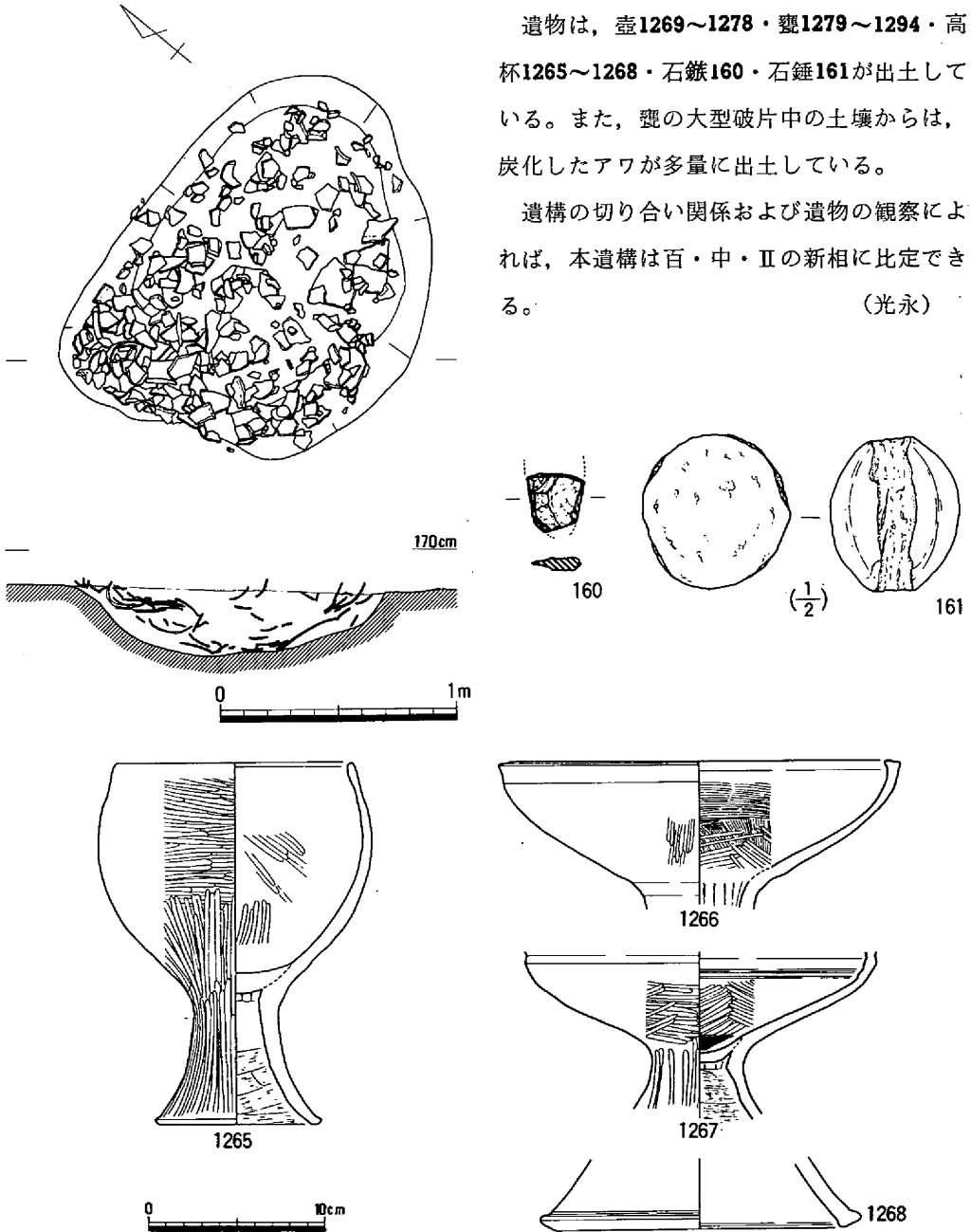
第308図 土壌－2 (1/20)・出土遺物

土壌-3 (第309・310・311図)

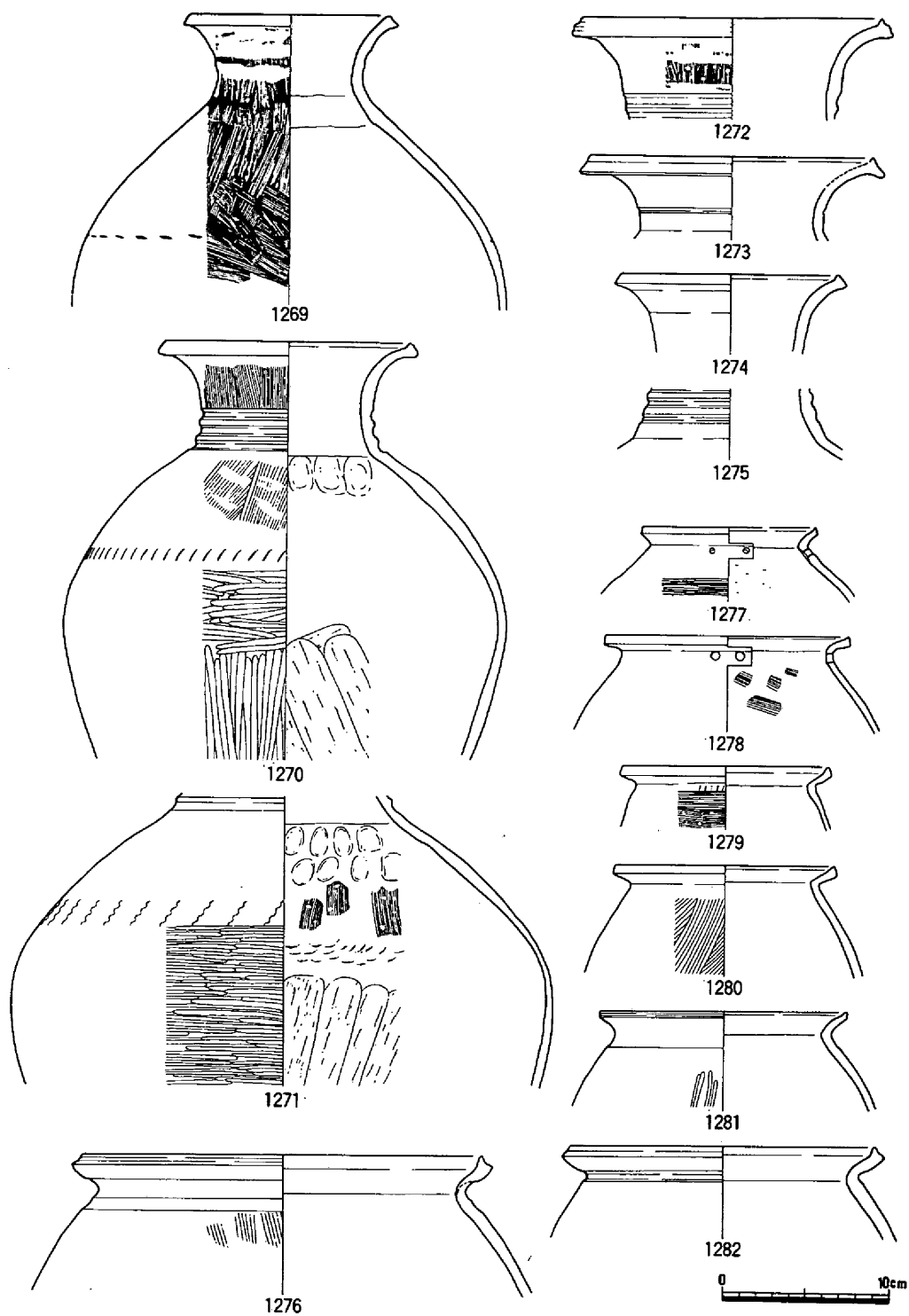
302-Sの中央部やや西寄りに位置する。建物-1の北西隅の柱穴を切り、竪穴式住居-3に切られている。堆積土中には、後述する遺物の他に焼土塊・炭化板材片が多く含まれており、土器片は大型片が多い。

遺物は、壺1269~1278・甕1279~1294・高杯1265~1268・石鏃160・石錘161が出土している。また、甕の大型破片中の土壌からは、炭化したアワが多量に出土している。

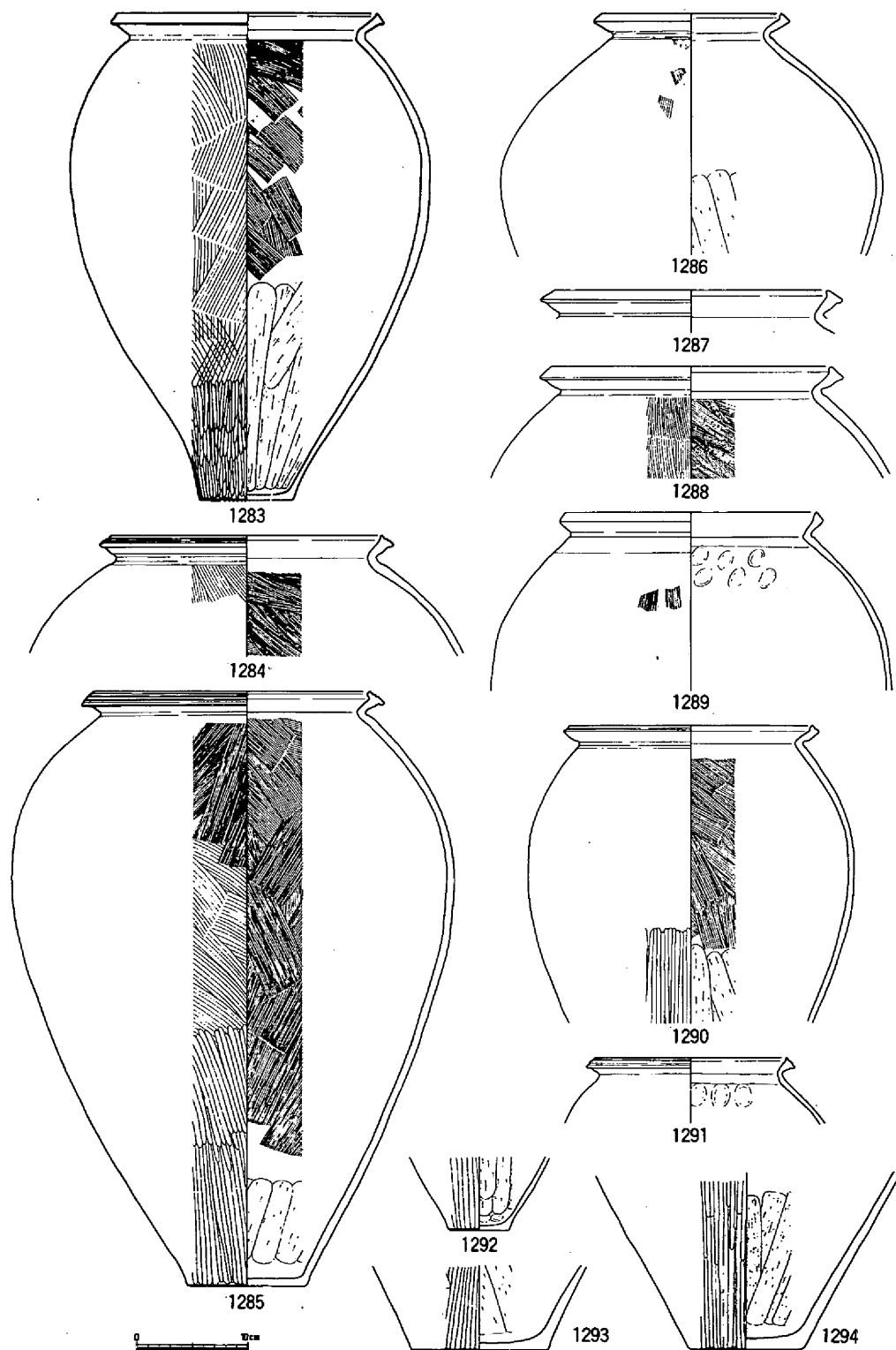
遺構の切り合い関係および遺物の観察によれば、本遺構は百・中・Ⅱの新相に比定できる。
(光永)



第309図 土壌-3 (1/30)・出土遺物(1)



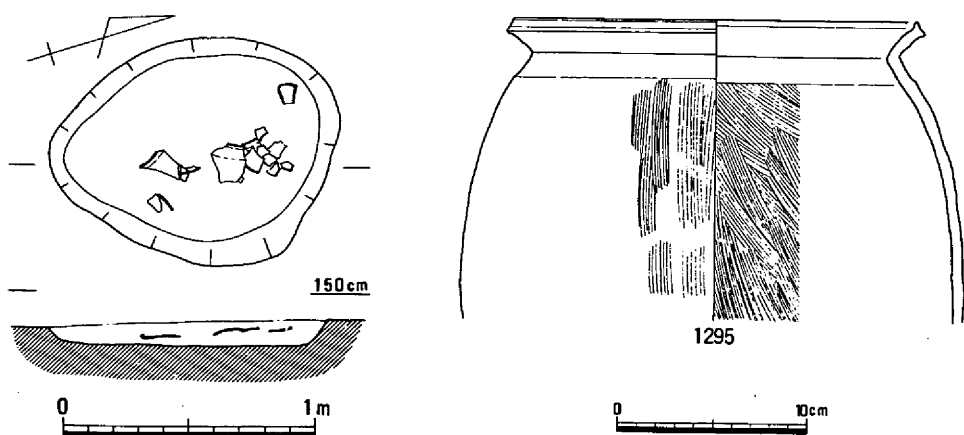
第310図 土壇一3出土遺物(2)



第311図 土壇-3 出土遺物 (3) ($\frac{1}{6}$)

土坑—4 (第 312 図)

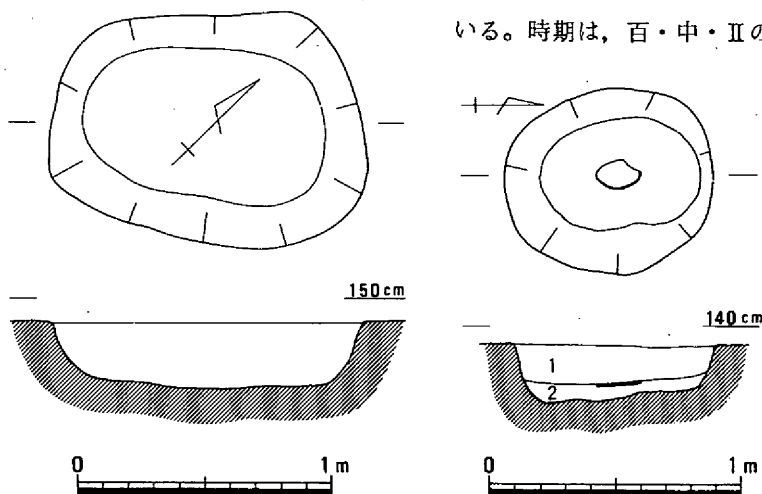
303—Qの東南部において検出された、平面形は、115×91 cmの不整形な円形を呈し、深さは、検出面より10 cmを測る。埋土は少量の炭粒・焼土粒を含む暗灰色粘土が1層のみである。土器は、図示した甕以外には壺の小片が出土しているのみである。時期は、百・中・Ⅱの新相であると考えられる。



第312図 土坑—4 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

土坑—5 (第 313 図)

303—Qの東南部、土坑—4の東側において検出された。平面形は、125×89 cmの不整形な楕円形を呈し、深さは、検出面から27 cmを測る。埋土は1層のみで、少量の炭粒・焼土粒・砂粒(石英・長石など)を含む暗青緑灰色粘土である。土器は、壺・甕の小片がわずかに出土している。時期は、百・中・Ⅱの新相である。



第313図 土坑—5 ($\frac{1}{30}$)

土坑—6 (第 314 図)

304—Qの東北部、井戸—1の南東に位置する。平面形は、84×74 cmの楕円形を呈し、深さは、検出面から23 cmを測る。埋土は2層あり、図の1層は、炭・焼土粒を含む暗青緑灰色粘

第314図 土坑—6 ($\frac{1}{30}$)

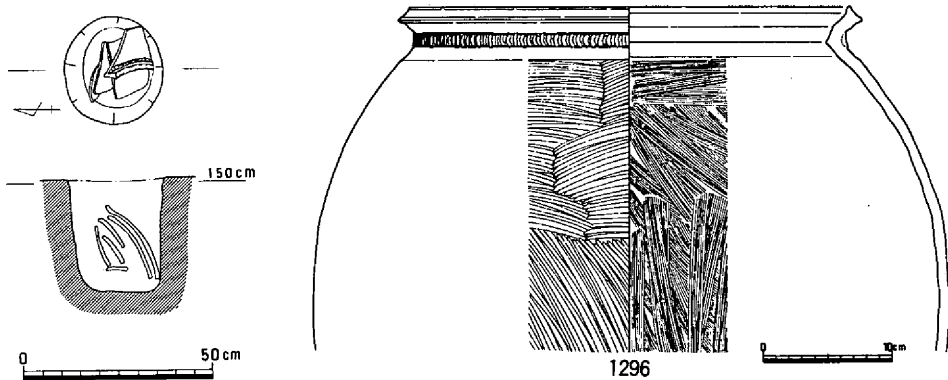
土、2層は暗青灰色細砂である。遺物は、土器が少量出土している。時期は、百・中・Ⅱの新相である。

土壌—7

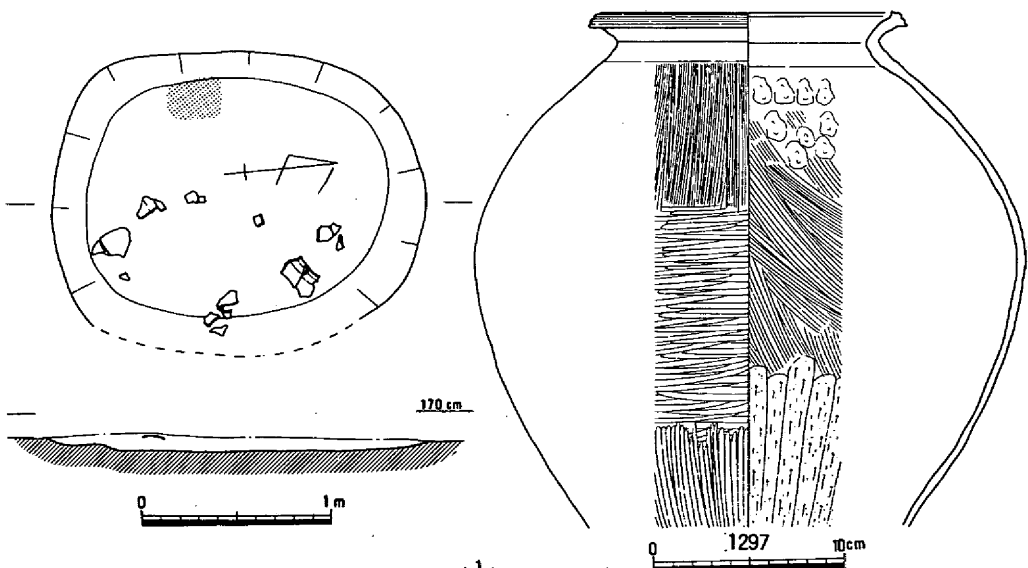
304—Qの北東部、建物—5の北側において検出された。平面形は直径約70cmの円形を呈し、深さは検出面より15cmを測る。埋土は、炭・焼土粒・黄色ブロック土を含む暗灰褐色粘質微砂が1層のみである。土器が出土していないので時期は明らかではないが、検出面や埋土等から百・中・Ⅱの新相であると考えられる。

土壌—8 (第315図)

304—Qの北東部に位置する。平面形は直径26cmのほぼ円形を呈し、深さは検出面より30cm



第315図 土壌—8 ($\frac{1}{20}$)・出土遺物 ($\frac{1}{6}$)



第316図 土壌—9 ($\frac{1}{40}$)・出土遺物

百間川今谷遺跡

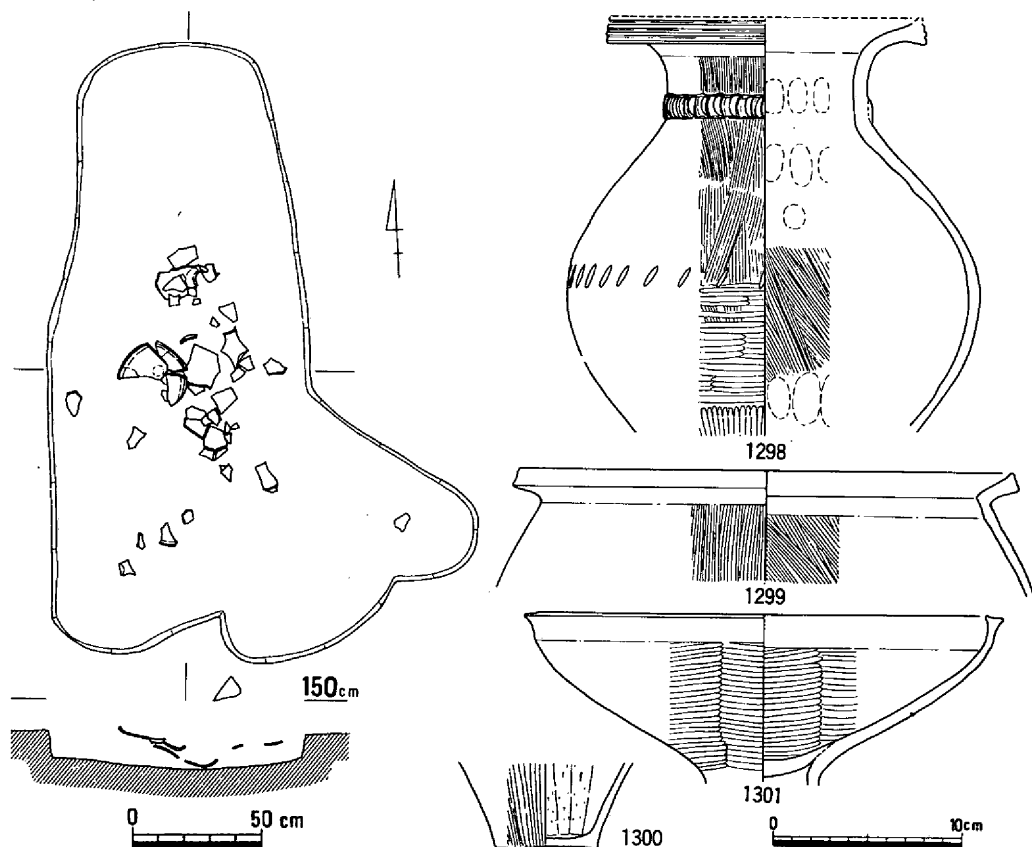
を測る柱穴状の土壌である。埋土は、炭・灰・焼土・砂粒（石英・長石など）を多く含む灰黄色粘質土が1層のみである。遺物は、大型甕が出土している。時期は百・中・Ⅱの新相である。

土壌—9（第316図）

304—Qの東端中央部において検出された。長径198cm，短径は推定約160cmの楕円形を呈し，深さは検出面より6cmを測る。埋土は、炭・焼土・1～3mm前後の砂粒（石英・長石など）及び黄色ブロック土を含む暗灰褐色粘質微砂が1層のみである。また，南西部において，約25×20cmの範囲に焼土がまとまって出土している。遺物は，壺などの土器とともに，ガラス滓が少量出土している。時期は，百・中・Ⅱの新相である。（平井）

土壌—10（第317図）

303—Rの南部に位置し，建物—7の北東端の柱穴から1m離れている不定形な土壌である。基本的には南北に長軸を持つ長方形の土壌とすることができる。大きさは長さ250cm，最大幅170cm，最小幅70cm，深さ10cmを測る。土器は壺・甕・高杯の破片が中央部に図示した状況で



第317図 土壌—10 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

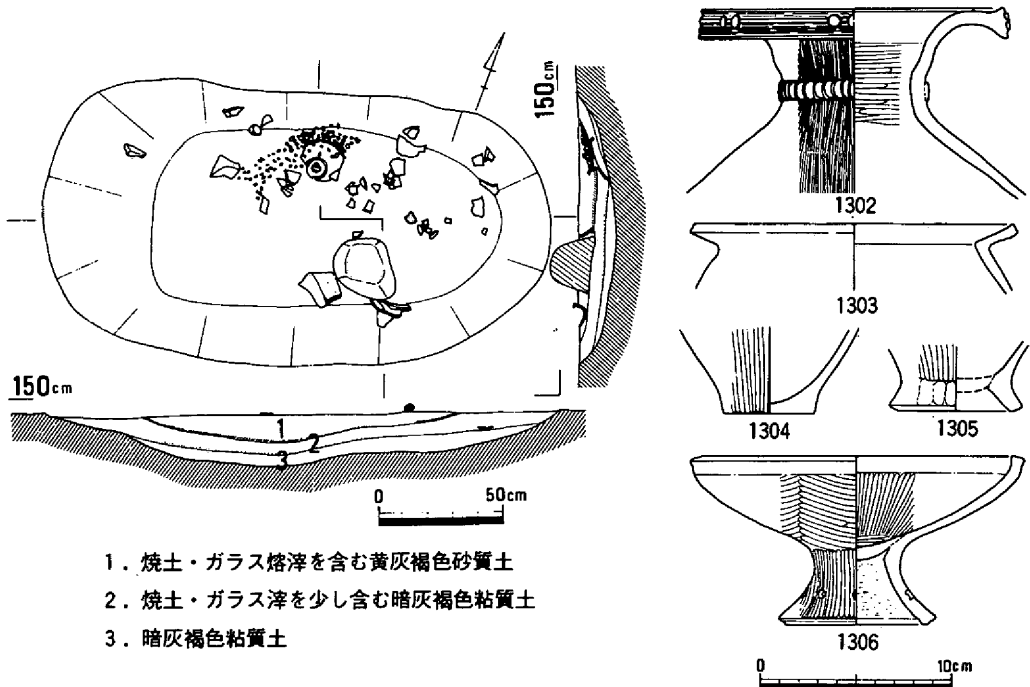
出土した。この土壌でもガラス滓がわずかに採集できた。ごみ捨て穴かあるいは単なる土地の凹みなのかははっきりしない。時期は土器から百・中・Ⅱの新相に比定できる。

土壌—11

303—Rの東南端で検出した南北に長軸を有する不整楕円形の土壌である。大きさは長さ150cm、幅100cm、深さ10cmを測る。埋積土は暗茶褐色粘質土で、土器片とガラス滓を僅かに含んでいる。しかし図化するほどのものではない。時期は百・中・Ⅱの新相と考えられる。

土壌—12 (第318図)

井戸—3の南に位置する2つの土壌のうち西側のものを言う。ほぼ東西に長軸を有する楕円形の平面形を呈し、断面形は浅い皿状を呈する。大きさは長径200cm、短径110cm、深さ20cmを測る、埋積土は3層にはっきりと分けることができ、その境界は焼土粒によって明解である。遺物は主として最上層に包含しており、土器・ガラス滓を含むほかに径25cm大の丸い花崗岩礫



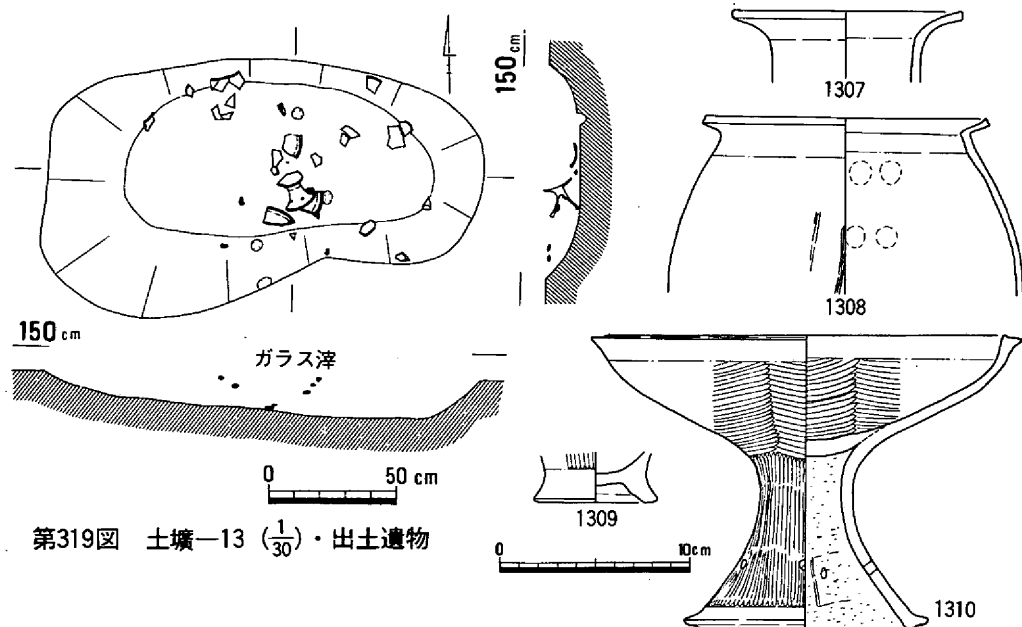
第318図 土壌—12 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

と径5cm以下の河原石を図示したように含んでいた。ごみ穴と考えてよい。時期は百・中・Ⅱの新相と土器から言うことができる。

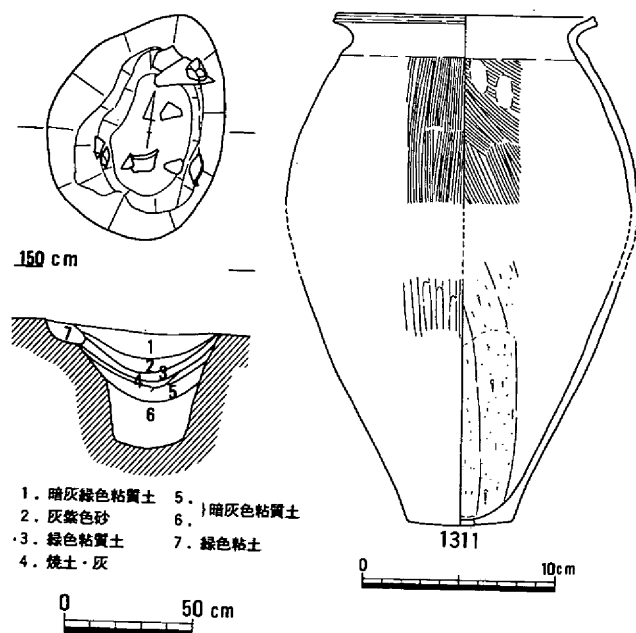
土壌—13 (第319図)

土壌—12の東隣りに接している不整楕円形の土壌である。長軸をほぼ東西に有する。大きさは長さ170cm、最大幅100cm、最小幅70cm、深さ15cmを測る。底部は平坦だが東側が最も深くな

っている。本遺跡で最初にガラス滓が流入した状態で出土した土壌である。埋積土中には炭・灰・焼土塊を含むほか壺・甕・高杯の破片を含む。ガラス滓の大きさは、径2cm程のものが最も多く採集できたが、それが最大で、小さなものは顕微鏡で見えるほどのものまでがある。比較



第319図 土壌—13 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物



第320図 土壌—14 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

的大きなものには、うすい板状を呈したものがみられる。時期は出土土器から百・中・Ⅱの新相に比定できる。

土壌—14 (第320図)

304—Rの北中央部にあり、建物—7の南東端の柱穴から70cm離れて検出したうずらの卵形を呈する土壌である。大きさは長径90cm、短径70cm、深さ50cmを測る。埋積土は6層に分けることができた。遺物は4・5層に集中して含まれ、甕のほぼ1個体分であった、他の土壌と少し形態が異

なるため用途も異なると考えられるがよく判らない。この土壌の時期は土器から百・中・Ⅱの新相に比定できる。

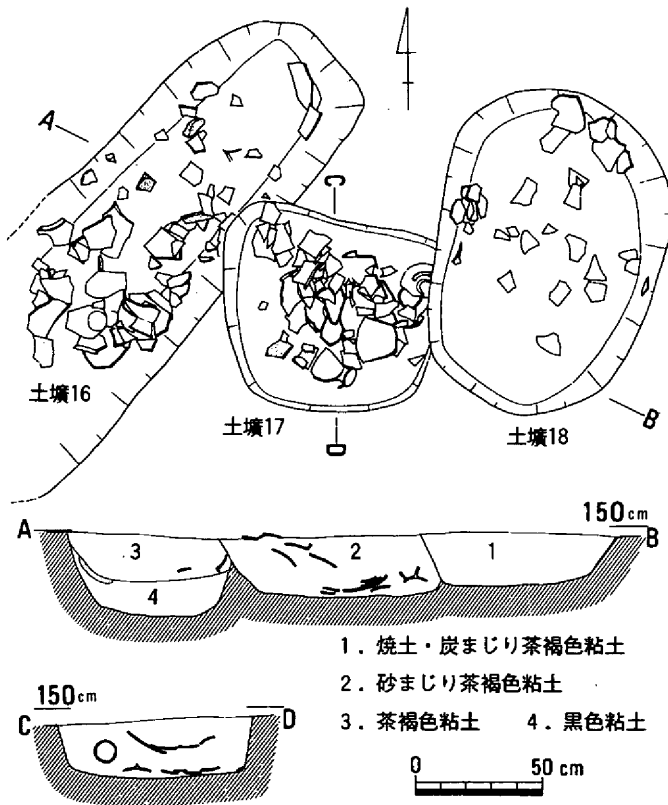
土壌—15

304—Rライン上で検出したもの。土壌—16の南端を切って長軸をほぼ東西に向ける長楕円形の土壌である。Rライン上に位置するために調査上やむを得ず側溝で中央部分を破壊したがQ調査区を後日発掘したので全体が明らかになった。大きさは、200×70cmで深さ35cmを測る。横断面は逆台形を呈し、土壌底の海拔高は116cmを示し、これは土壌—16とほぼ同じである。

遺物は、土壌—16出土遺物と区別が難しい。時期は、百・中・Ⅱの新相と考えられる。

土壌—16 (第321・322図)

304—Rの西端にある土壌群の1つで、長さ約220cm、幅75cm、深さ35cmを測る長方形の土壌である。長軸は北東から南西に向いている。底部はほぼ平坦である。埋積土は2層に分かれるが、遺物は上層にのみ包含する。出土遺物は甕・鉢・高杯の大きな破片が少量とガラス滓が2～3粒見られた。この土壌の南西隅は他の土壌によって切られているため、その部分だけ土器が削平されて消失していた。この土壌の用途は不明だが、時期は土器から考えて百・中・Ⅱの新相に比定される。



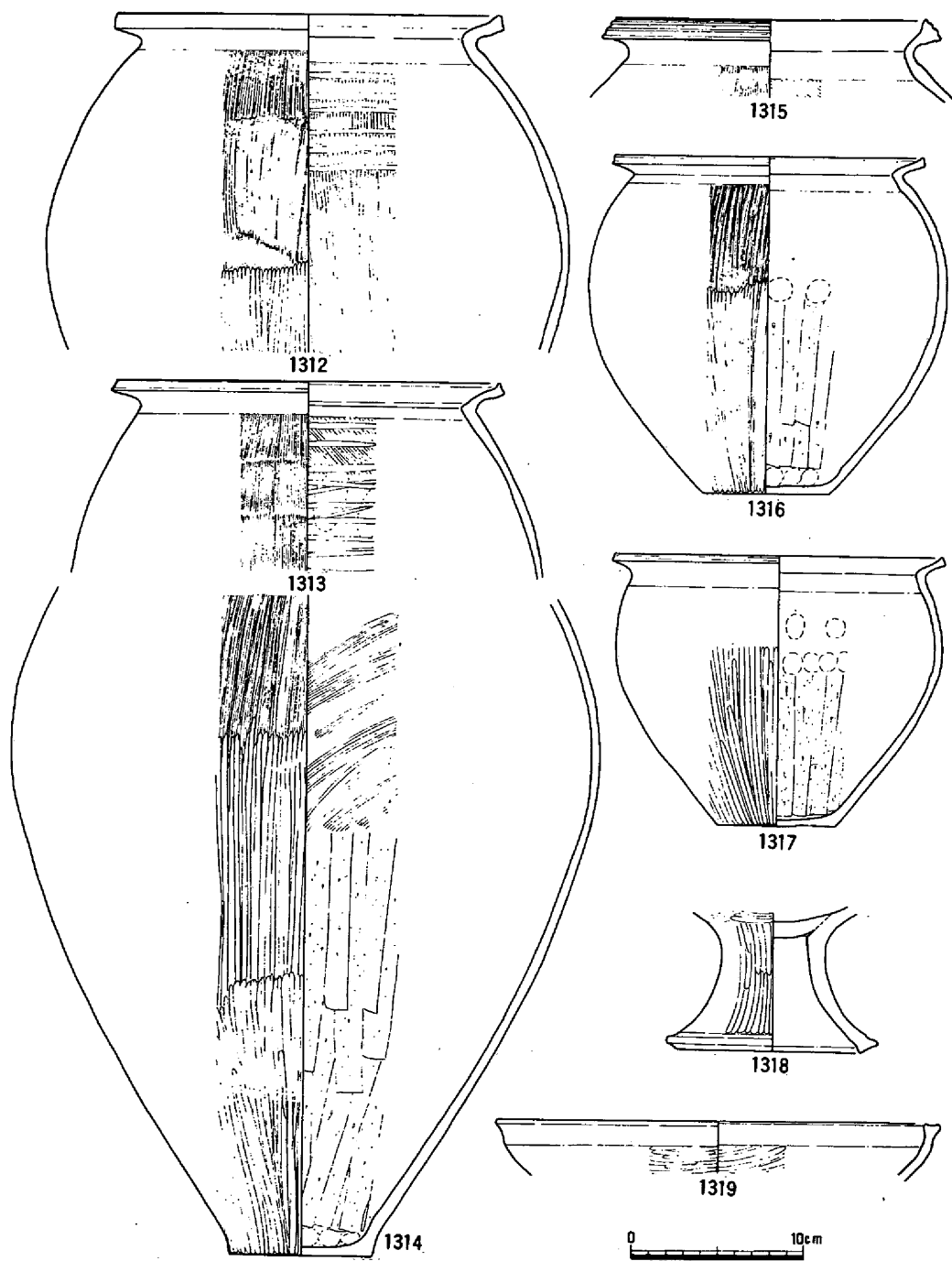
第321図 土壌—16・17・18 ($\frac{1}{30}$)

土壌—17 (第321・323図)

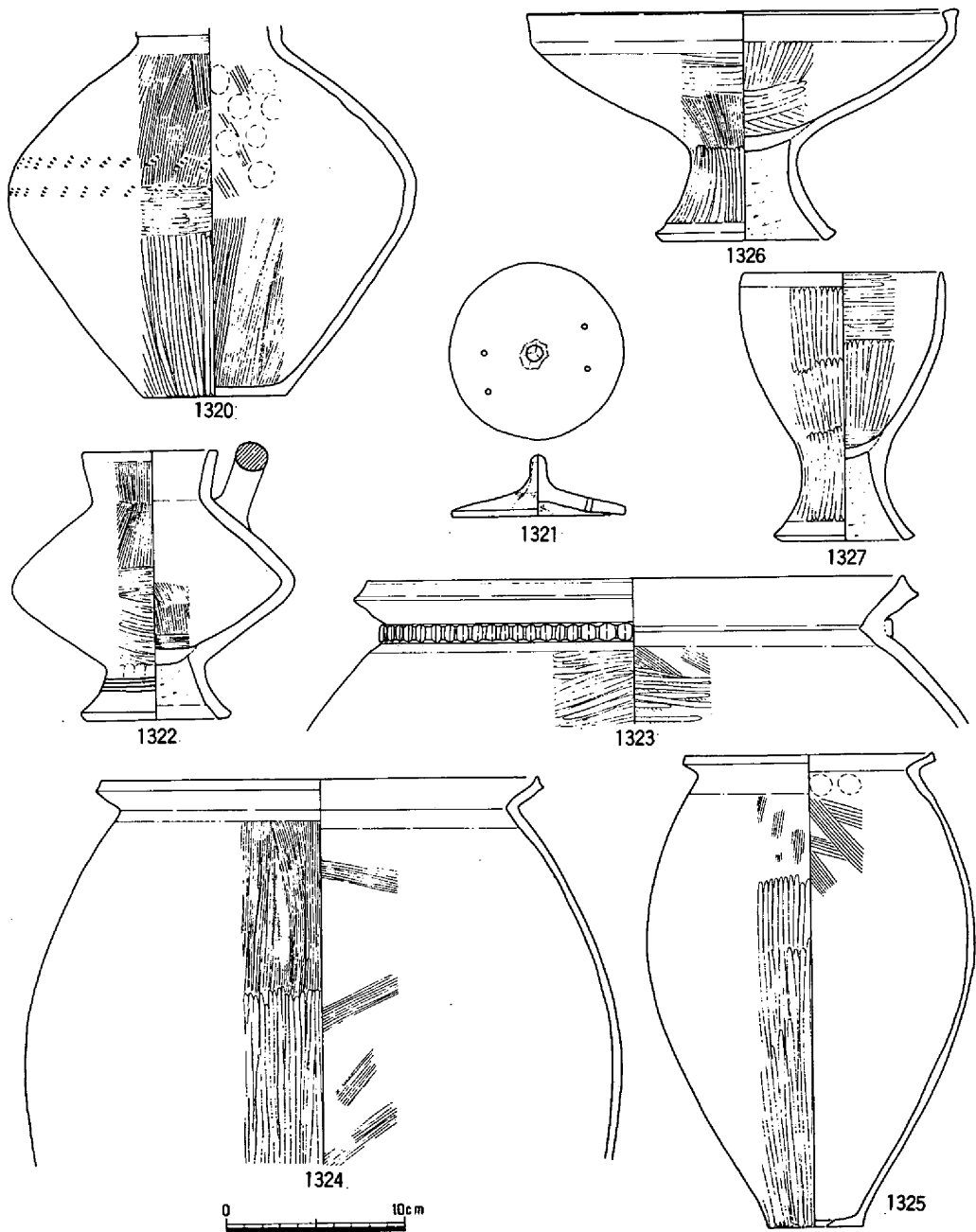
土壌—16の東にあってこれを切っているほぼ方形の平面を呈す土壌で、断面形は逆台形を呈す。大きさは一辺80cm、深さ25cmを測る。遺物はほぼこの土壌に一杯埋っていた。その種類は、全て土器で、ほぼ完形に近いものも混っている。壺・甕・高杯・蓋・把手付直口壺等がある。埋積土には炭・焼土も混入している。この土壌の用途はごみ捨て穴と考えることができよう。出土遺物から考えてこの土壌の時期は百・中・

百間川今谷遺跡

Ⅱの新相に比定される。



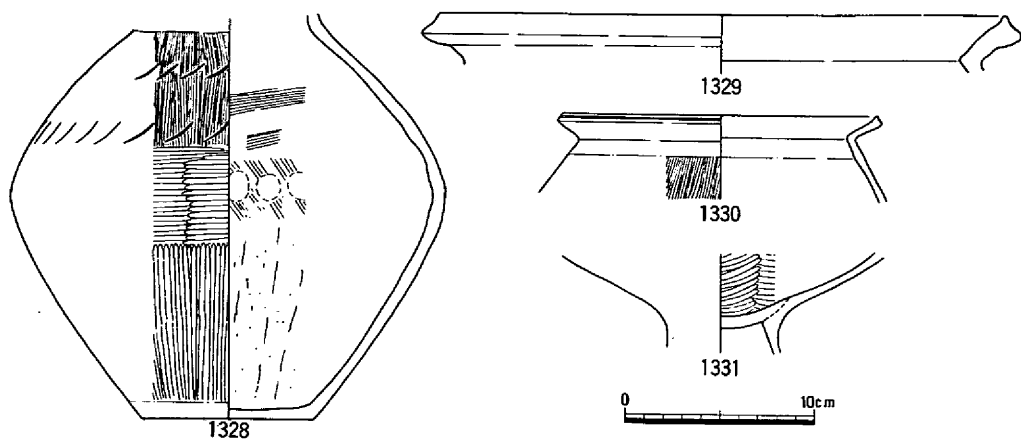
第322図 土壙-16出土遺物



第323図 土壙—17出土遺物

土壙—18 (第321・324図)

土壙—17の東側にあつてそれを切っている平面が小判形を呈し、断面が逆台形を呈する土壙である。大きさは長径130cm、短径90cm、深さ20cmを測る。土壙—17・18に比べて土器の量は少ない。出土した土器は壺・甕・高杯である。埋積土中に焼土・炭を混入するのは他の土壙と

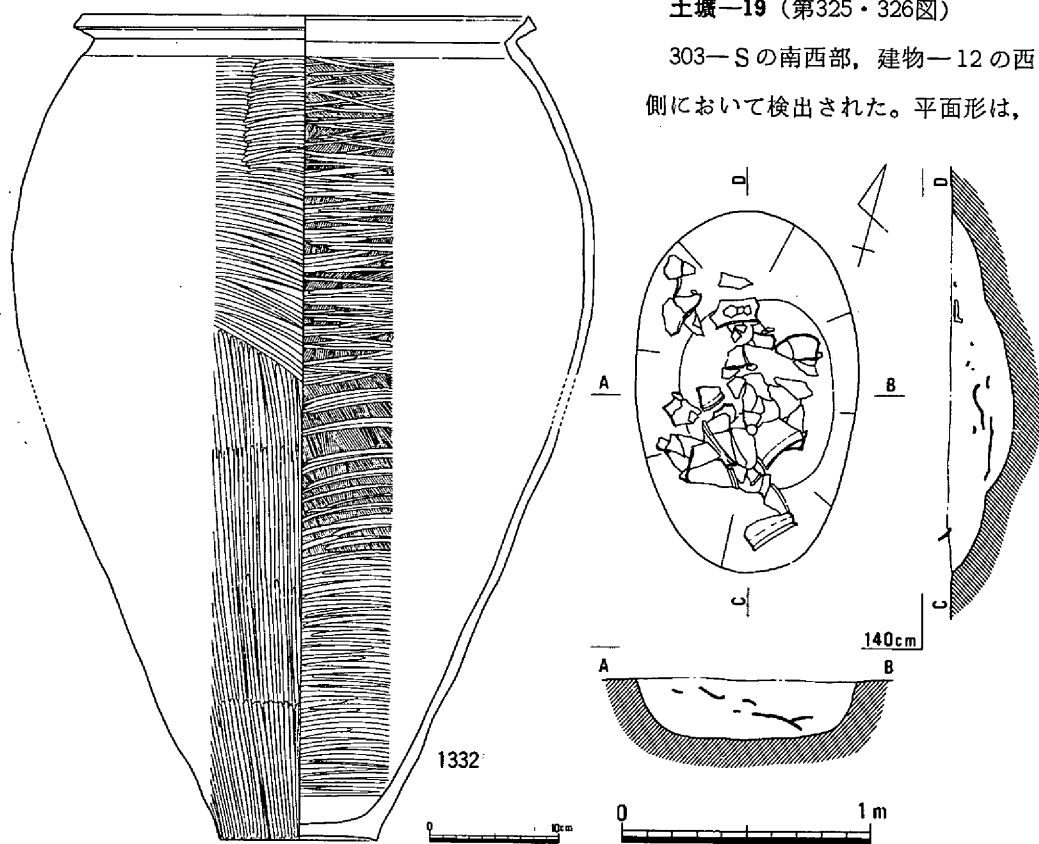


第324図 土坑—18出土遺物

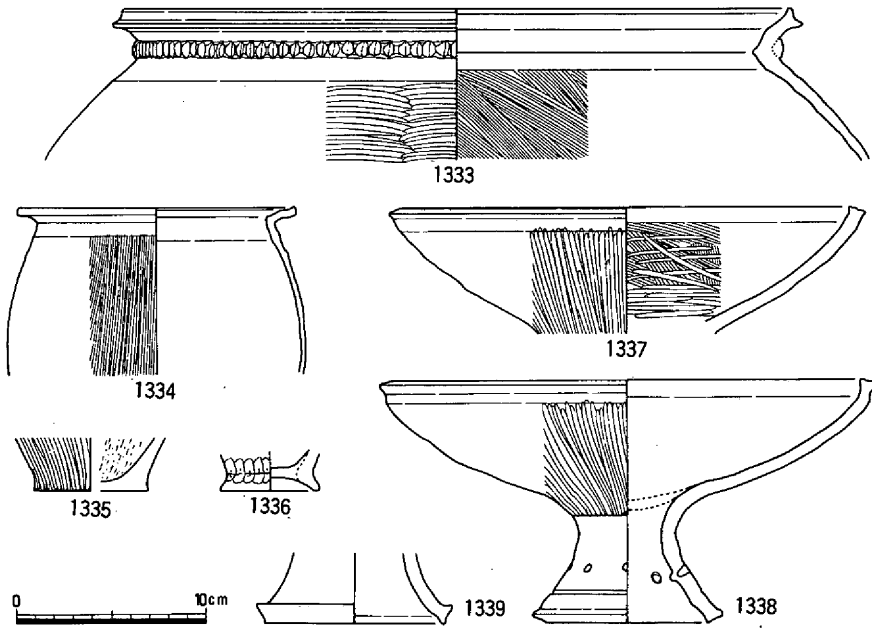
同じである。この土坑も恐らくごみ捨て穴として使用されたもので、時期は土器から考えて百・中・Ⅱの新相に比定できる。(浅倉)

土坑—19 (第325・326図)

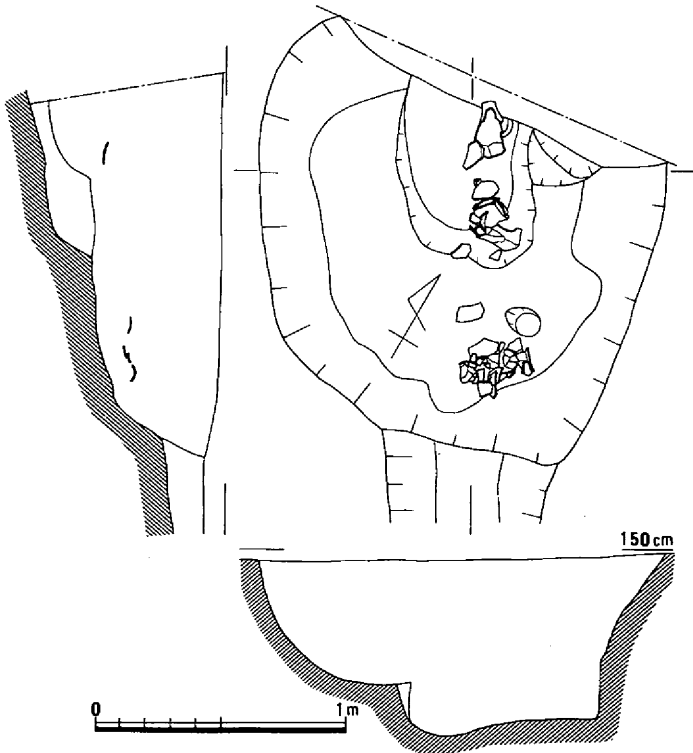
303—Sの南西部、建物—12の西側において検出された。平面形は、



第325図 土坑—19 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物 (1) ($\frac{1}{6}$)



第326図 土壌—19出土遺物（2）

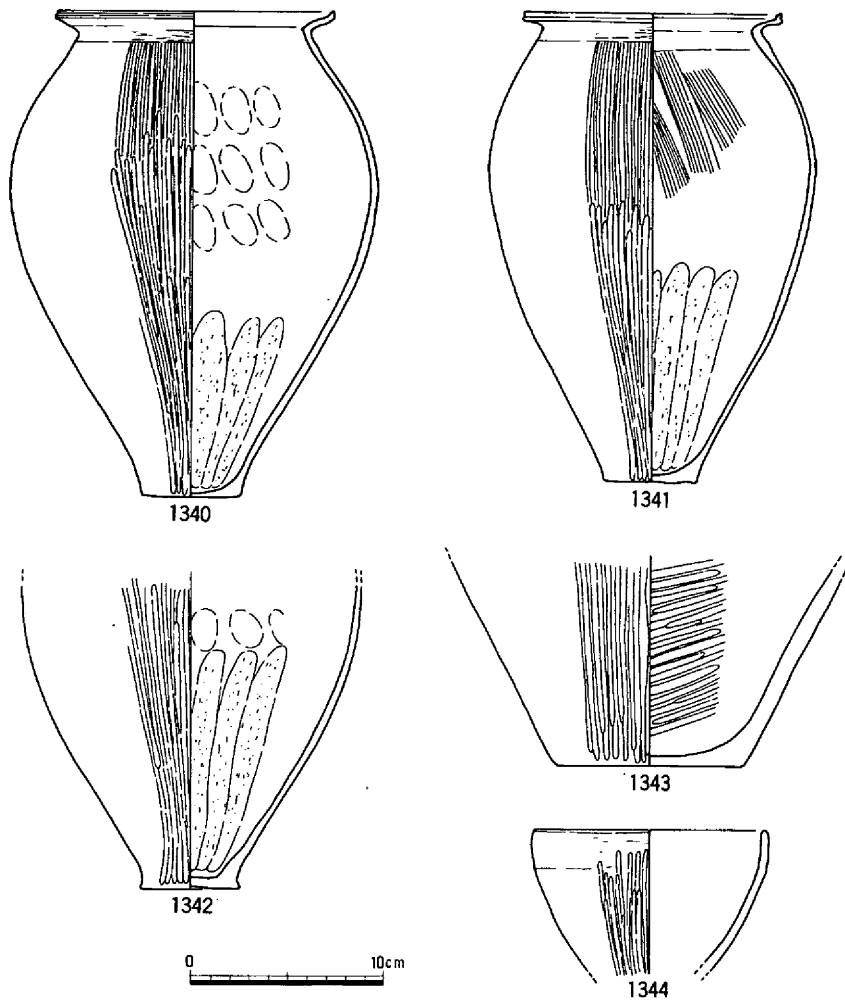


第327図 土壌—20 ($\frac{1}{30}$)

143×89cm の長楕円形を呈し、深さは、検出面より23cmを測る、埋土は暗青緑灰色粘土が1層のみである。遺物は大型甕・高杯の他に、トウガンの種子が出土している。時期は、百・中・Ⅱの新相である。（平井）

土壌—20（第327・328図）

303—Sに位置している。調査区の北端部に位置し、一部は調査区外に及んでいる。南側は溝—6と重複している。形態は南北に長い楕円形を呈



第328図 土壙—20出土遺物

している。中央部分は一段深くなっている。埋土中には多量の焼土・炭を含み，ガラス滓も検出される。土器には，壺・甕・鉢・高杯がある。壺では，頸部に断面三角形の凸帯・指頭圧痕文凸帯を用いたものがある。土壙を埋没した後，建物—23の柱穴が掘られている。時期は，百・中・Ⅱの新相に属する。

土壙—21

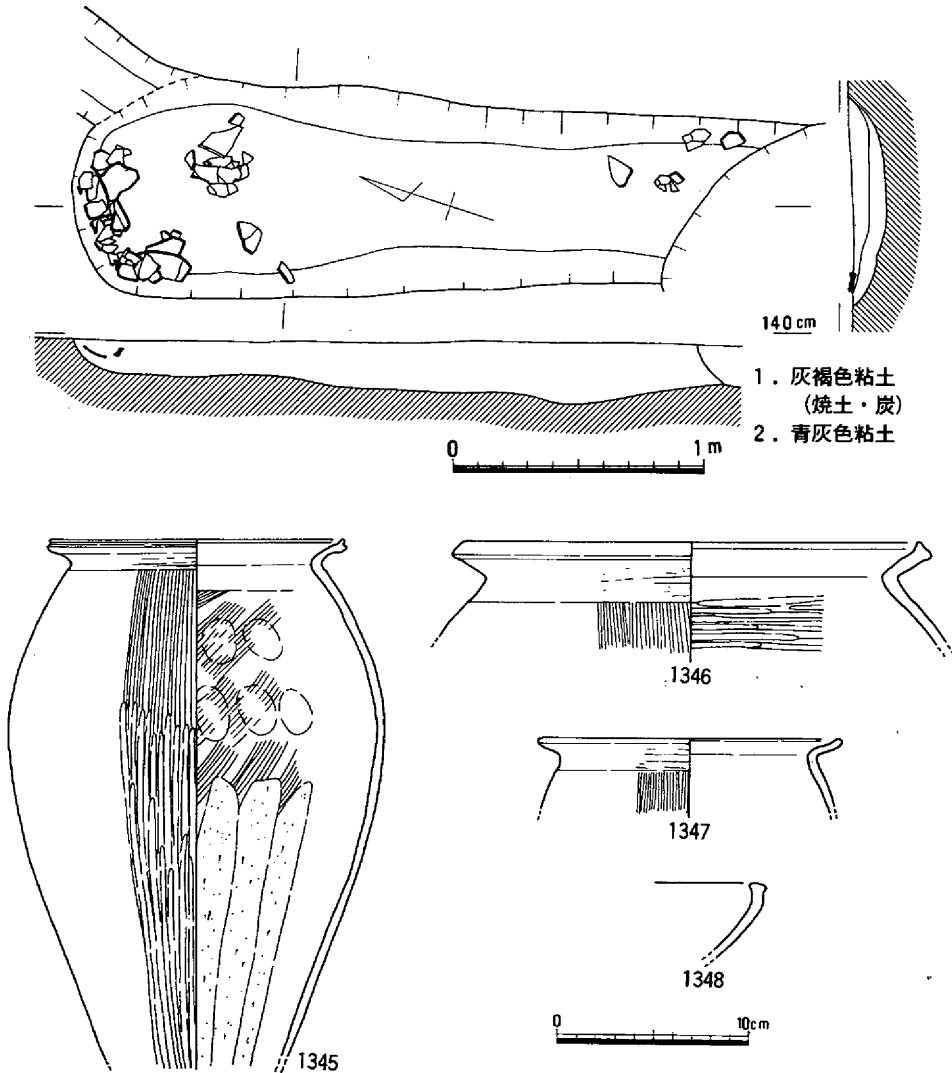
303—Sに位置する。少し変形しているが，ほぼ円形に近い。南北方向に少し長い。南北104cm，東西96cm，深さ22cmを測る。底面は，ほぼ平坦で，壁の傾斜はきつい。

埋土は，下層から炭を含んだ暗青色粘土，焼土・炭を多く含んだ黒褐色粘土，最上層は焼土・炭を含んだ暗灰色粘土となっている。土器等の出土はなかった。時期は，埋土の状況等から，百・中・Ⅱの新相に属すると推測される。

土墳—22 (第 329 図)

303—S に位置している。南北に細長く、溝状を呈している。北端部では、小さな溝状の遺構と重複し、南側は、土墳—23 に切られている。検出面からの深さは、13cm と浅く、もともとあまり深いものではない。埋土は上下2層に分離できるが、上層には、焼土・石・炭をかなり含んでいるが、下層では少ない。

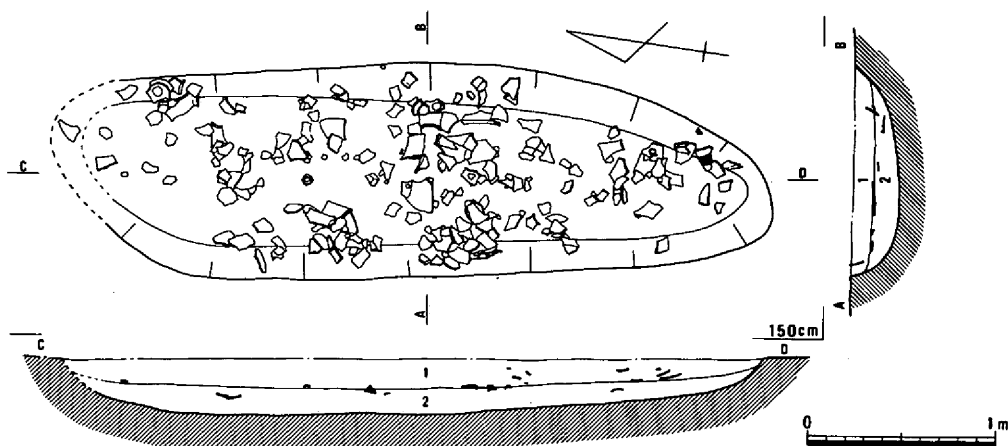
土器は北に寄って多く検出され、甕1345・1346・1347、高杯1348の破片がある。時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。(正岡)



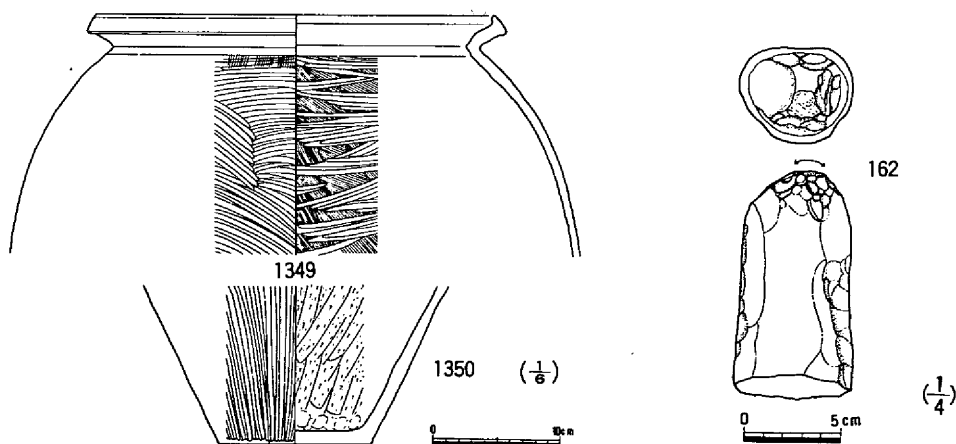
第329図 土墳—22 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

土壇—23 (第 330・331・332 図)

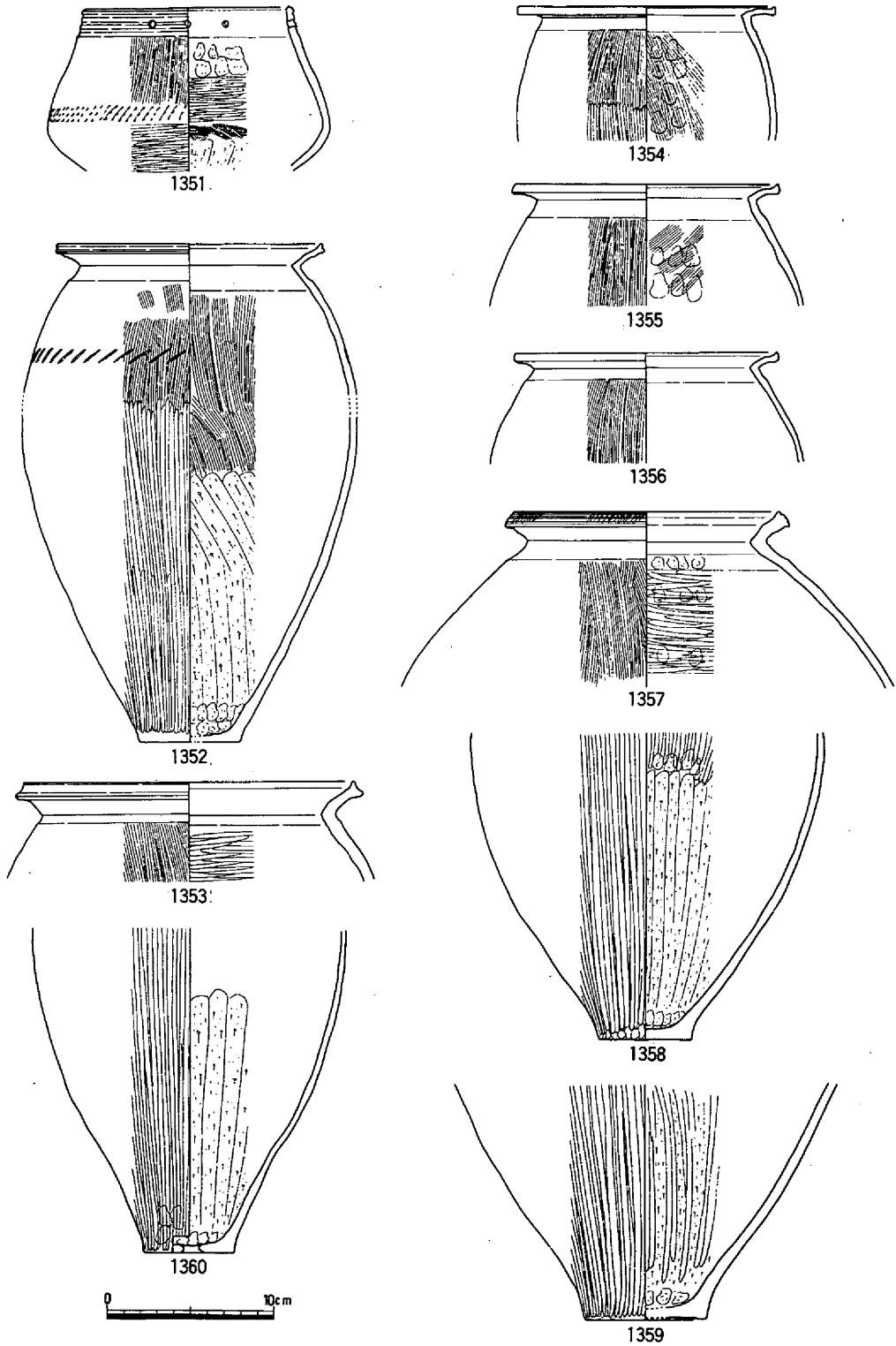
303—S の東南隅において検出された。土壇—22 との切り合いは不明確だが、おそらく土壇—23 が土壇—22 を切っているものと考えられる。平面形は、推定長径 375cm、短径 113cm の不整形な長楕円形を呈し、深さは、検出面より 24cm を測る。埋土は 2 層あり、図の 1 層は暗青緑灰色粘質微砂、2 層は炭・焼土を含む暗青緑灰色粘土である。遺物は壺・甕・高杯などの土器とともに敲石 162 が出土している。材質は、玢岩或いは安山岩であると考えられる。また、1372 の土器は、1423 や 1427 のような器台の口縁部であろう。更に、約 30g のガラス滓がこの土壇から出土している。時期は、百・中・Ⅱ の新相である。(平井)



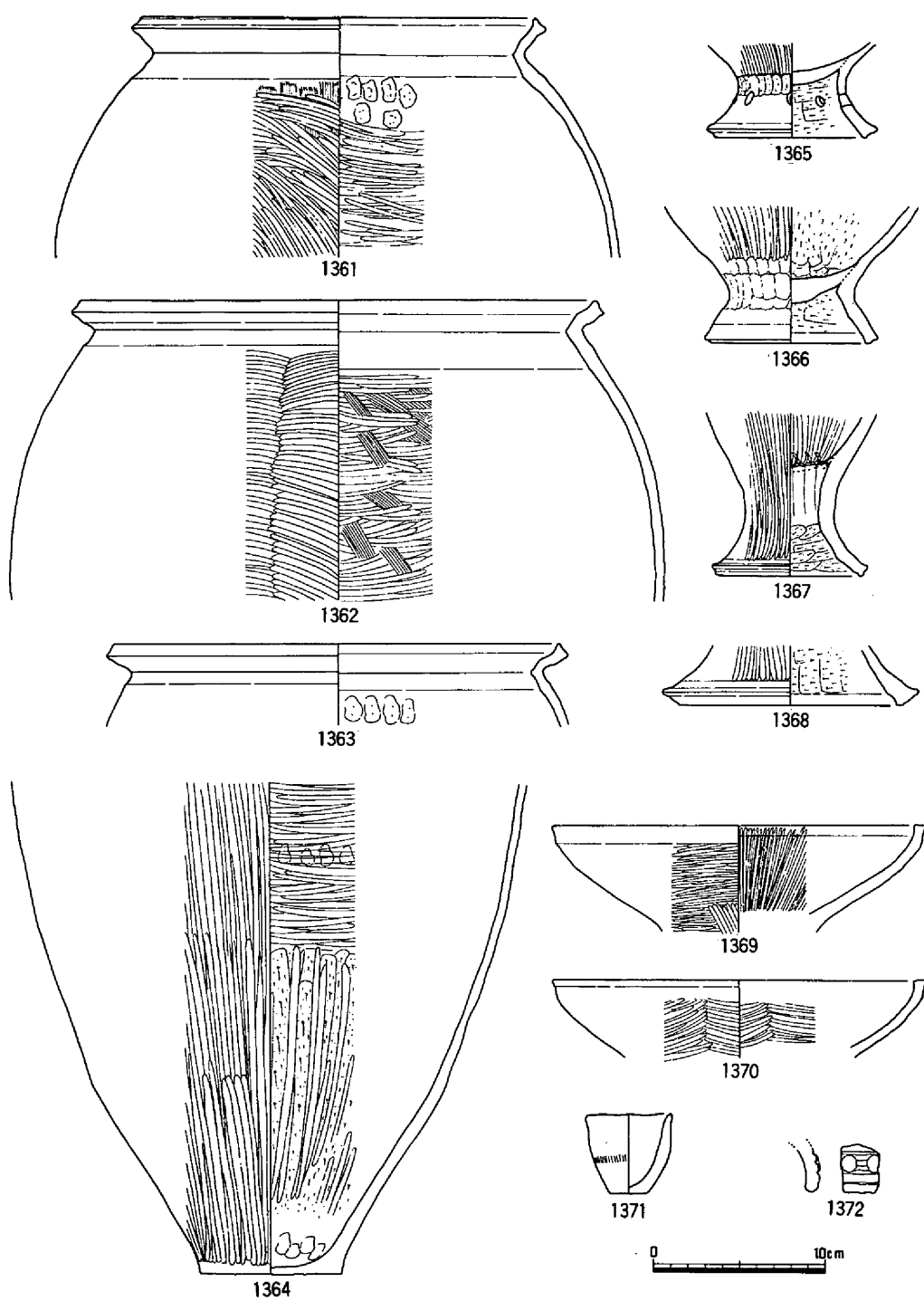
1. 暗青緑灰色粘質微砂
2. 暗青緑灰色粘土 (炭・焼土を含む)



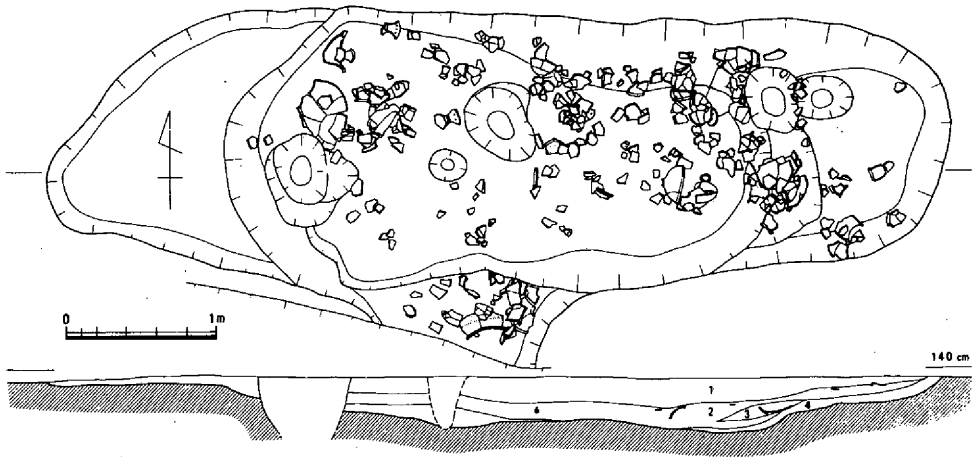
第330図 土壇—23 ($\frac{1}{40}$)・出土遺物 (1)



第331図 土壇-23出土遺物(2)



第332図 土壇一23出土遺物 (3)

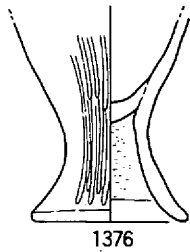
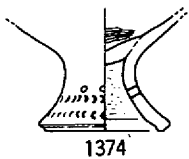
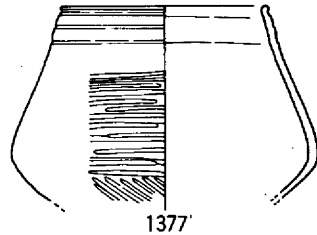
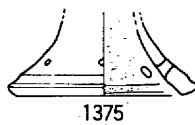
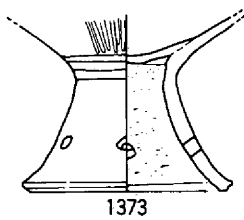
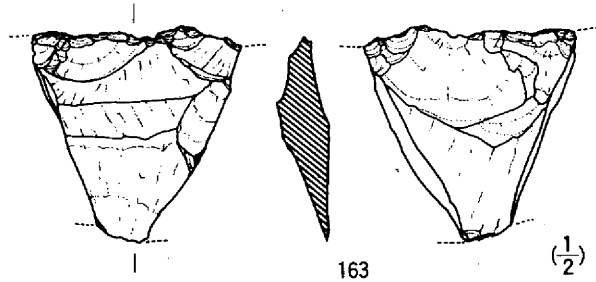


1. 灰青色粘土 3. 灰青色粘土
2. 黒褐色粘土(焼土・炭) 4. 炭まじり灰青色粘土

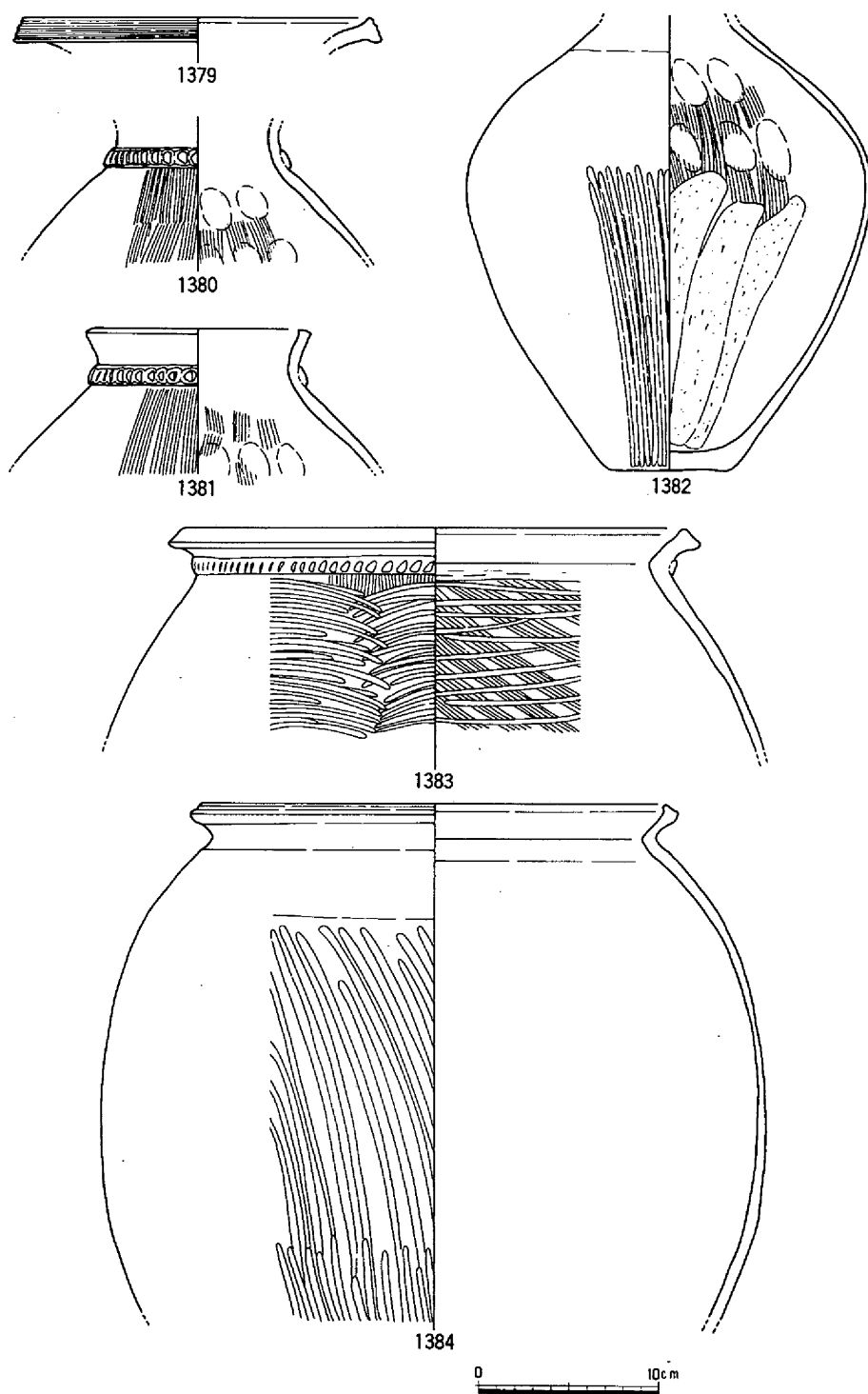
第333図 土壌-24 ($\frac{1}{50}$)

土壌-24 (第333~337図, 図版15-1)

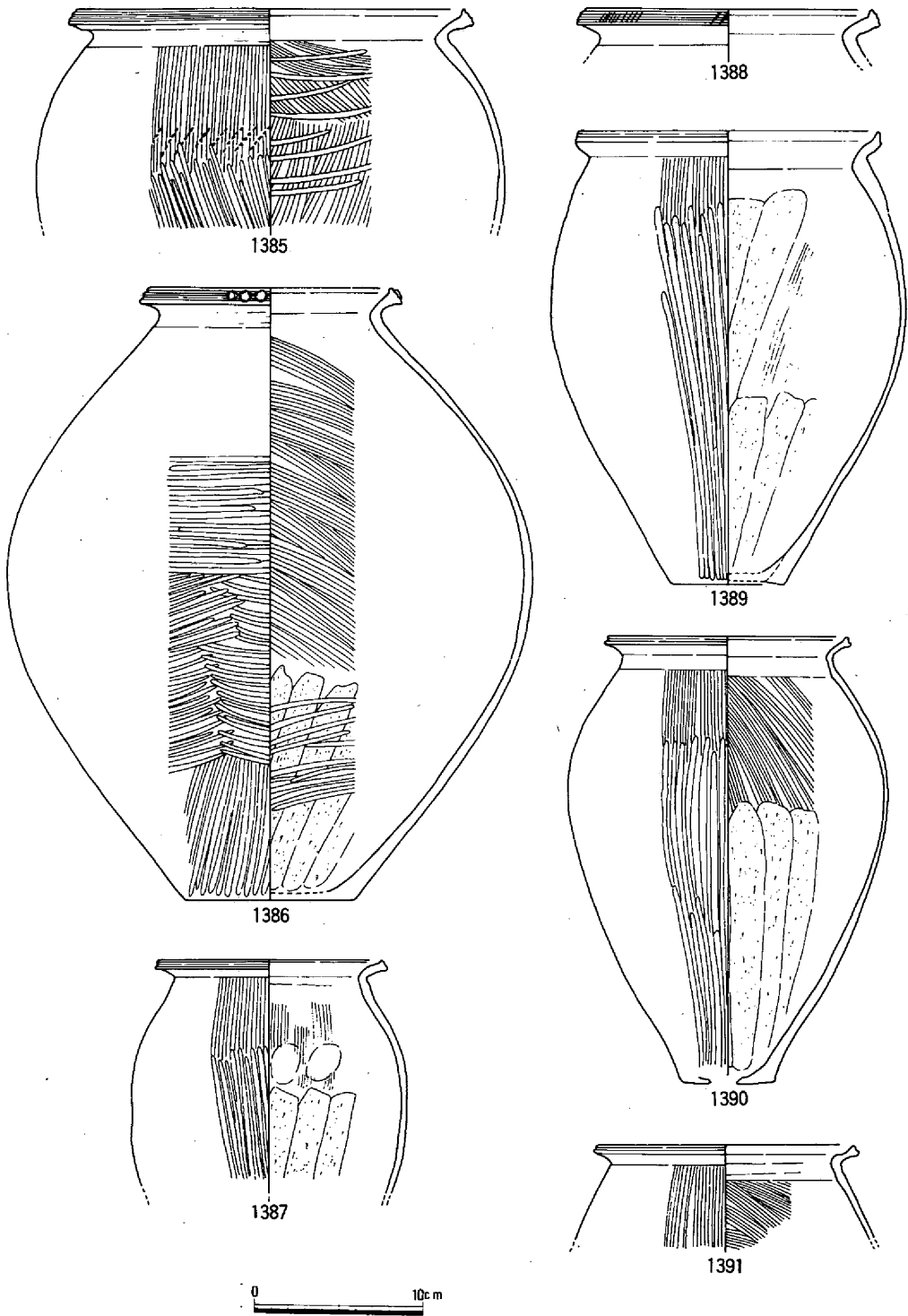
303-Sの南端部に位置し、
一部は304-Sにかかっている。
この地域で検出された土壌では
最大のもので、長さ6mの長楕
円形を呈する。東西に長く、両



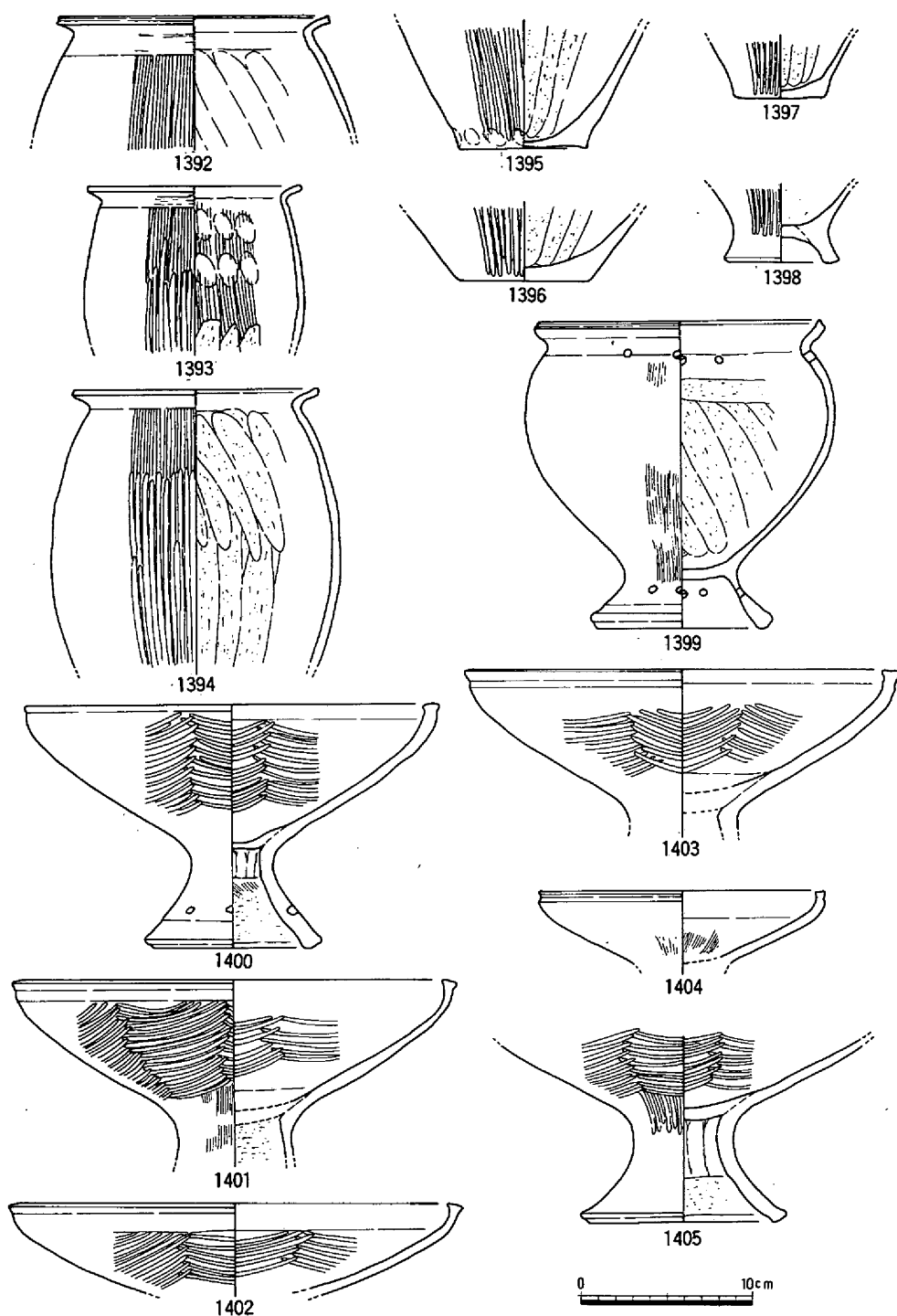
第334図 土壌-24出土遺物 (1)



第335図 土壙-24出土遺物(2)



第336図 土壙-24出土遺物 (3)



第337図 土壙—24出土遺物（4）

端部に浅い部分があり、中央部分の3.5mは、一段深くなっている。埋土の下半部は黒褐色粘土を主とし、砂・焼土・炭を多く含んでいる。土器も多く、壺・甕・高杯・鉢・台付鉢を含んでいる。甕では、内面上端部までヘラケズリを施したものがある。石器には、サヌカイトの石庖丁片がある。時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。 (正岡)

土壌—25

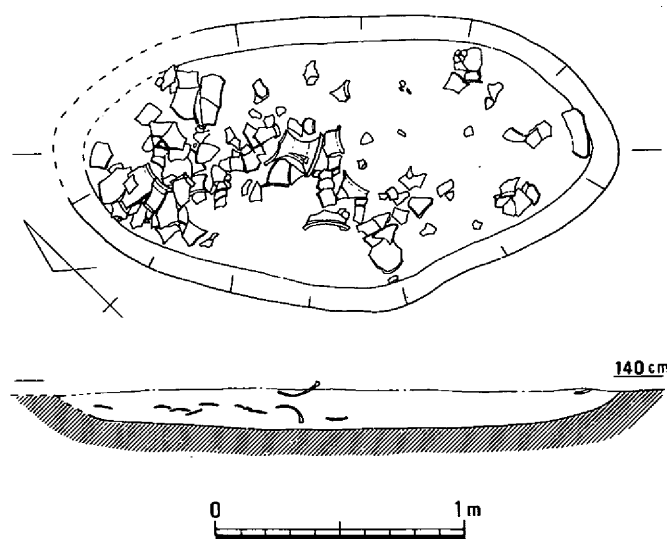
304—Sの北西部、土壌—19の南側において検出された。平面形は、157×62cmの長楕円形を呈し、深さは検出面より10cmを測る。埋土は、暗青緑灰色粘土が1層のみであった。埋土中には、土器は出土しなかったが、炭・焼土及び1～3mm程度の砂粒(石英・長石など)とともに少量のガラス滓を含んでいた。時期は、土器が出土していないため明らかではないが、百・中・Ⅱの新相であろう。 (平井)

土壌—26

304—S北西部において確認された遺構で、土器片およびガラス滓・焼土等の広がっている範囲は、長さ90cm、幅35cm、深さ10cmにおよび最下部は海拔127cmである。これらの土器片は土壌埋土中のものと想定されるが、当調査区において最初にみつかったもので、土壌の掘り方等を確認することができなかったものである。時期は百・中・Ⅱの新相である。 (内藤)

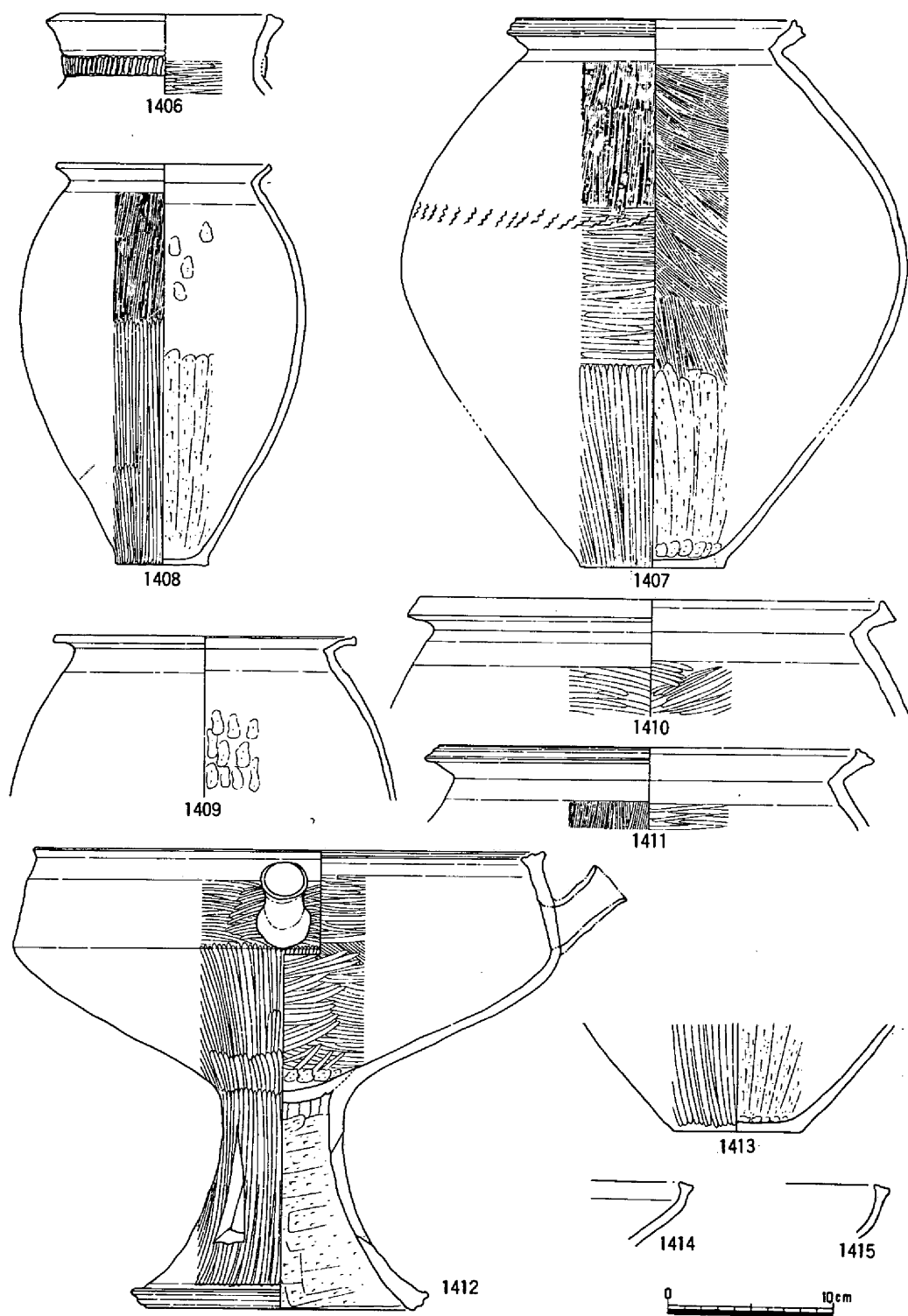
土壌—27 (第338・339図)

304—Sの北東部、土壌—24の南側において検出された。建物—18の柱穴が埋ったのちに掘られている。平面形は、推定長径226cm、短径116cmの不整形な長楕円形を呈し、深さは、検出面より16cmを測る。北西隅は排水溝のために明確ではない。埋土は、炭・焼土を含む暗緑色粘



質土が1層のみである。土器は、壺・甕・高杯・台付鉢が出土している。1412は、注口付の台付鉢で土壌の西半分に一括廃棄されており、ほぼ完形に復原できる。また、この土壌からは、コダイヒメモモの種子が3点出土している。時期は、百・中・Ⅱの新相であると考えられる。(平井)

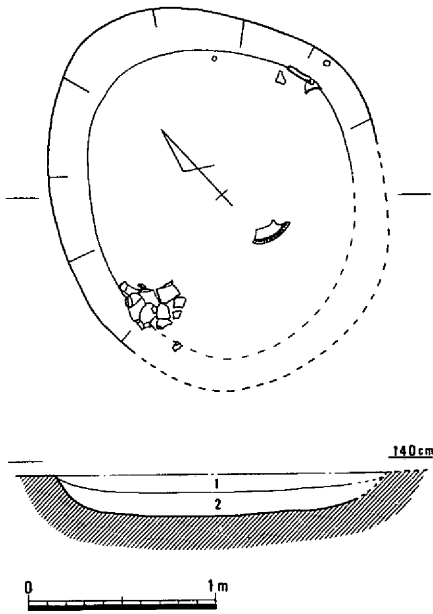
第338図 土壌—27 ($\frac{1}{30}$)



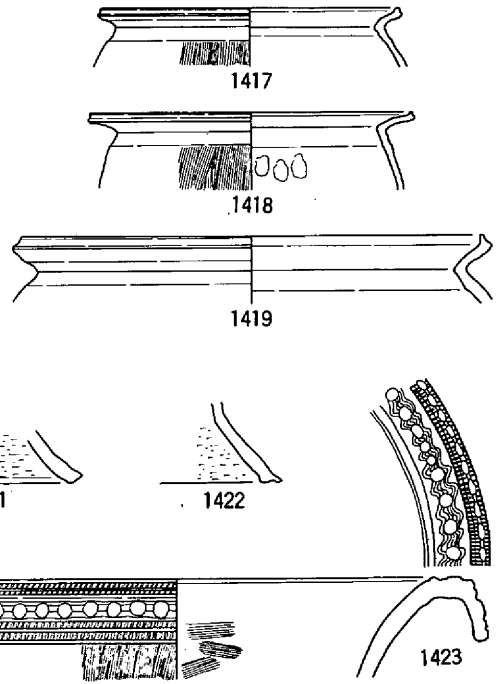
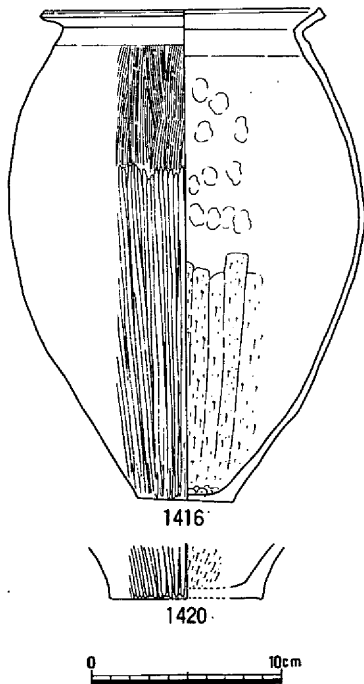
第339図 土壙-27出土遺物

土壌—28（第340・341図）

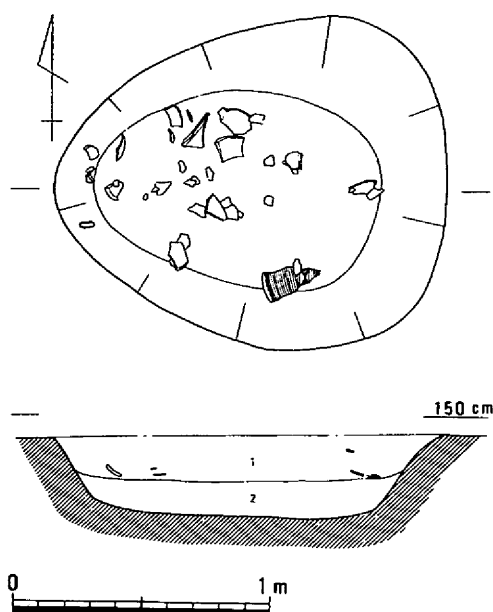
304—Sの北東部に位置し、一部303—Sにかかる。南側部分は排水溝のために確認できず、土壌—34との新旧関係については明確にすることはできなかった。平面形は、不整形な円形を呈すると思われる。深さは、検出面より22cmを測る。埋土は2層あり、図の1層は、黄緑灰色粘質微砂、2層は炭を含む暗青緑灰色粘土である。遺物は、1層・2層ともに出土しており、土器の他にサヌカイトの剥片が少量出土している。**1416**は、西の肩部にまとまって出土した。また、**1423**は、器台の口縁部で、文様構成・焼成・胎土などから考えて、この土壌の東側において検出された土壌—29から出土した器台**1427**、**1428**と同一個体である可能性が強い。時期は、百・中・Ⅱの新相である。



第340図 土壌—28 ($\frac{1}{40}$)



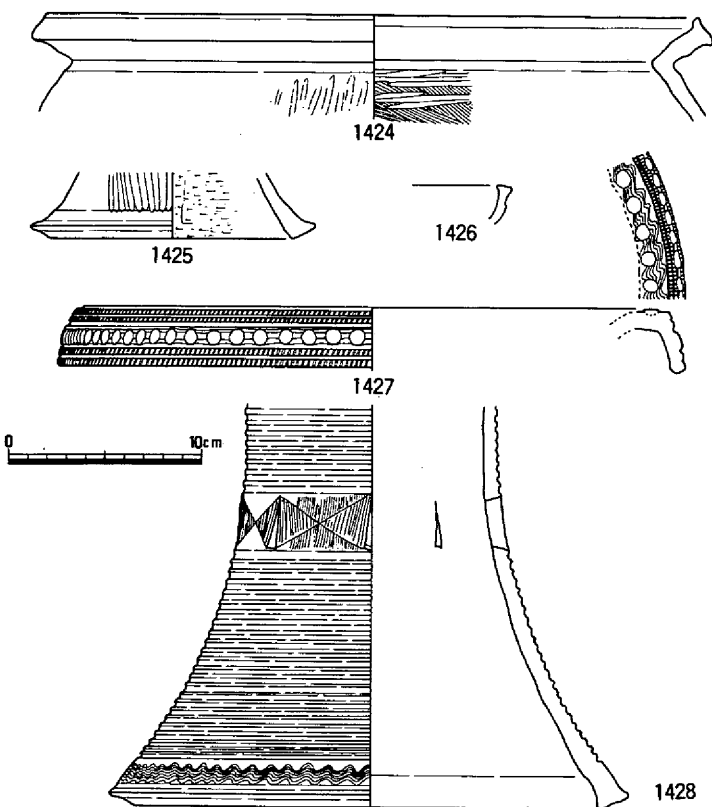
第341図 土壌—28出土遺物



土坑—29 (第 342 図)

303—S, 304—S, 303—T, 304—Tにまたがって検出された土坑である。平面形は、三角形に近い不整形な円形を呈している。深さは、検出面より33cmを測り、断面形は逆台形になっている。埋土は2層に分離することができる。図の1層は、炭・焼土及び1～3mm前後の砂粒(石英や長石など)を含む暗青緑灰色粘質微砂、2層は、1層よりも多量の炭・焼土を含む暗青緑灰色粘土である。土器は、甕・高杯・器台及び手づくねの小壺の破片が出土しており、主に1層からの出土である。1427・1428は、胎土や焼成などから考え

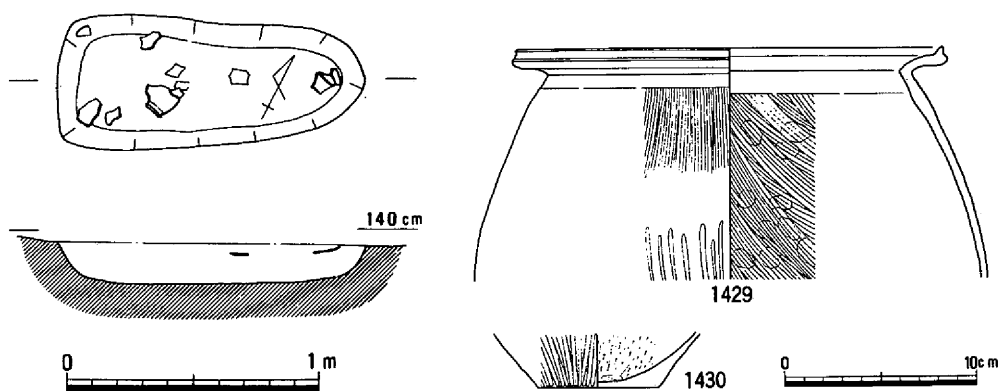
て同一個体である可能性が強いものである。時期は、百・中・Ⅱの新相である。



土坑—30 (第343図)

304—S 北東部、土坑—27の南側において検出された土坑である。平面形は、121×53cmの不整形な長方形を呈している。深さは、検出面より16cmを測る。埋土は、暗緑灰色粘質土が1層のみである。遺物は、土器(甕)が出土しているのみである。時期は、百・中・Ⅱの新相であると考えられる。(平井)

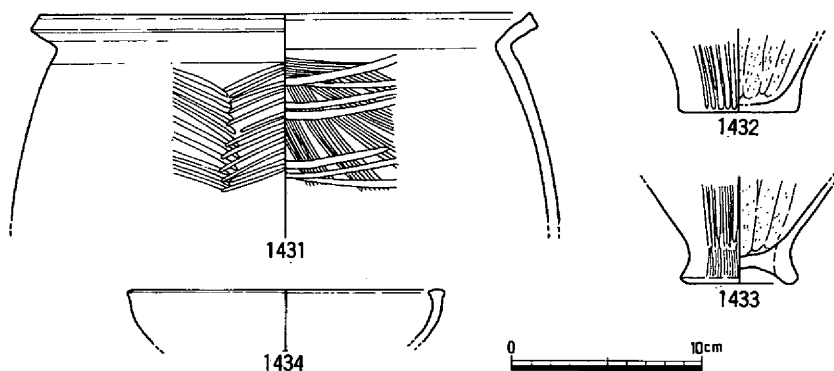
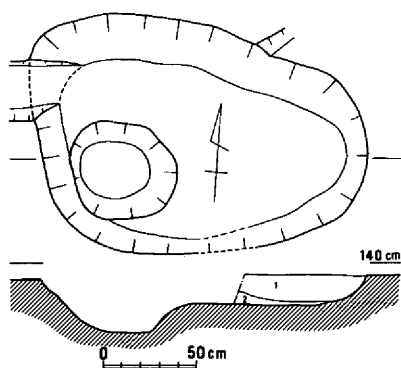
第342図 土坑—29 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物



第343図 土壌—30 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

土壌—31 (第344図)

304—Sに位置する。この周辺は、数基の土壌がまとまっている。東西に長い楕円形を呈している。埋土は2層に分離され、上層には、砂・焼土・炭・ガラス滓を含んでいるが、下層には少ない。土器には、甕・高杯の破片がある。建物—19と重複している。時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。



第344図 土壌—31 ($\frac{1}{40}$)・出土遺物

土壌—32

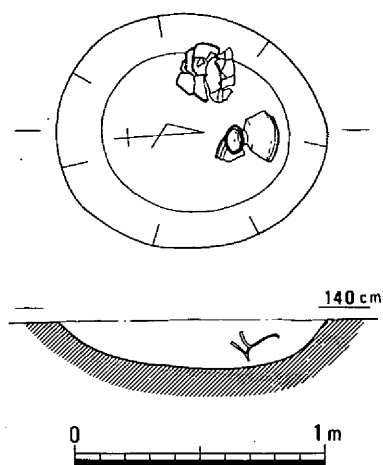
304—Sに位置する。東西に長い楕円形を呈し、深さは浅い。埋土は暗灰褐色粘土で、少量の土器片と焼土・炭を含む。土器には甕の小破片がある。

時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。

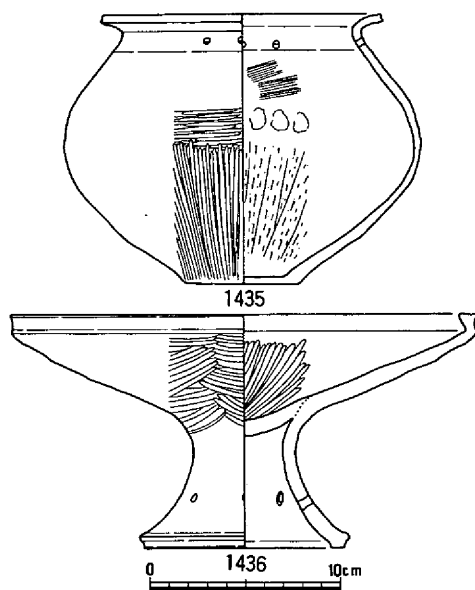
(正岡)

土壌—33 (第 345 図)

304—S の北東部、土壌—30の南側において検出された。平面形は、直径約100cmの円形を呈し、深さは検出面より20cmを測る。埋土は、暗灰色粘質土が1層のみである。遺物は、壺・高杯が各1個体分出土しており、いずれも完形に近く復原可能なものである。時期は、百・中・IIの新相である。
(平井)



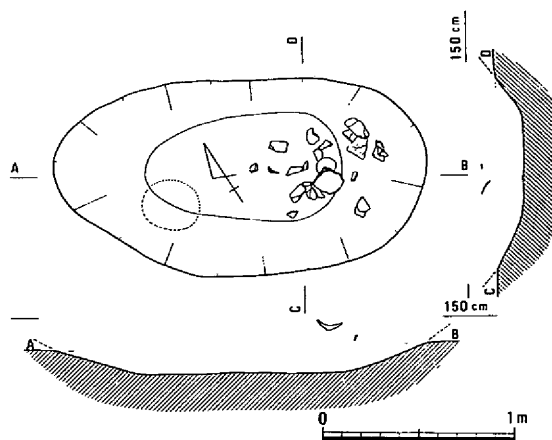
第345図 土壌—33 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物



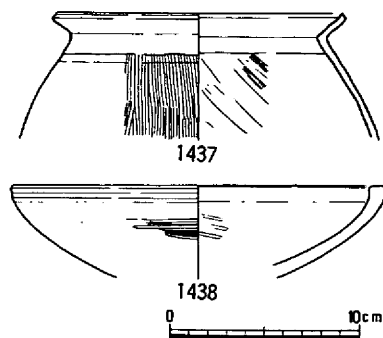
土壌—34 (第 346 図)

304—S 東端において検出された長径 195 cm・短径105cmの不整楕円形の平面形を呈する深さ 30cmの土壌で底は海拔 120 cmを測る。土壌の西部下から建物—20のP—1が検出されている。埋土は暗青灰色粘質微砂層が1層堆積している。出土遺物としては壺・高杯等の土器片が、土

壌の東部に埋没している。時期は百・中・IIの新相である。

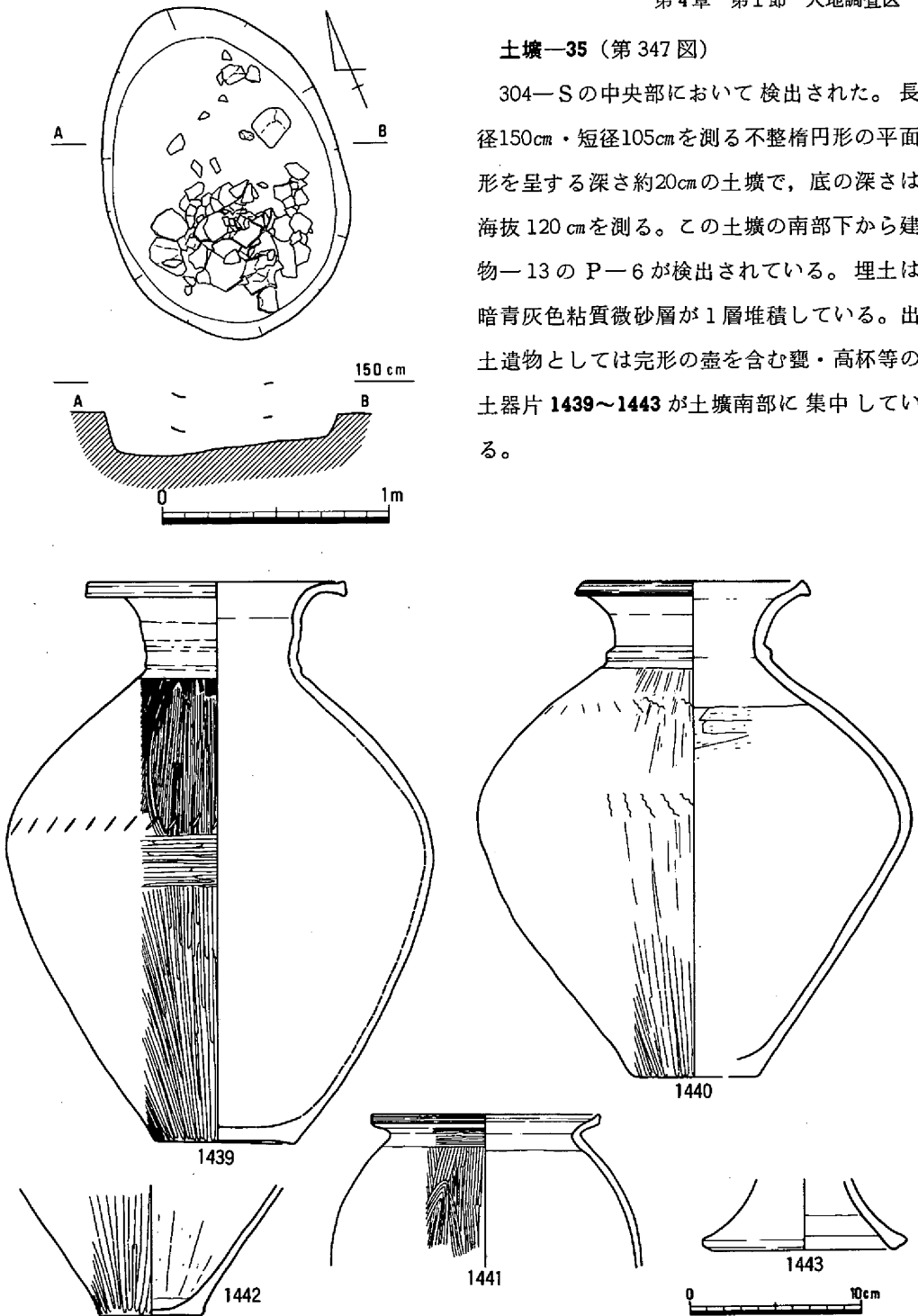


第346図 土壌—34 ($\frac{1}{40}$)・出土遺物

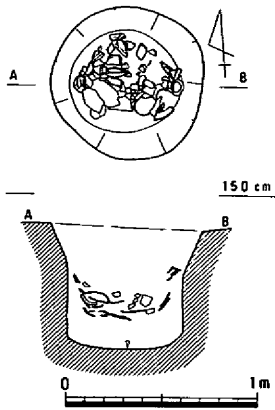


土壙—35（第347図）

304—Sの中央部において検出された。長径150cm・短径105cmを測る不整楕円形の平面形を呈する深さ約20cmの土壙で、底の深さは海拔120cmを測る。この土壙の南部下から建物—13のP—6が検出されている。埋土は暗青灰色粘質微砂層が1層堆積している。出土遺物としては完形の壺を含む甕・高杯等の土器片1439～1443が土壙南部に集中している。

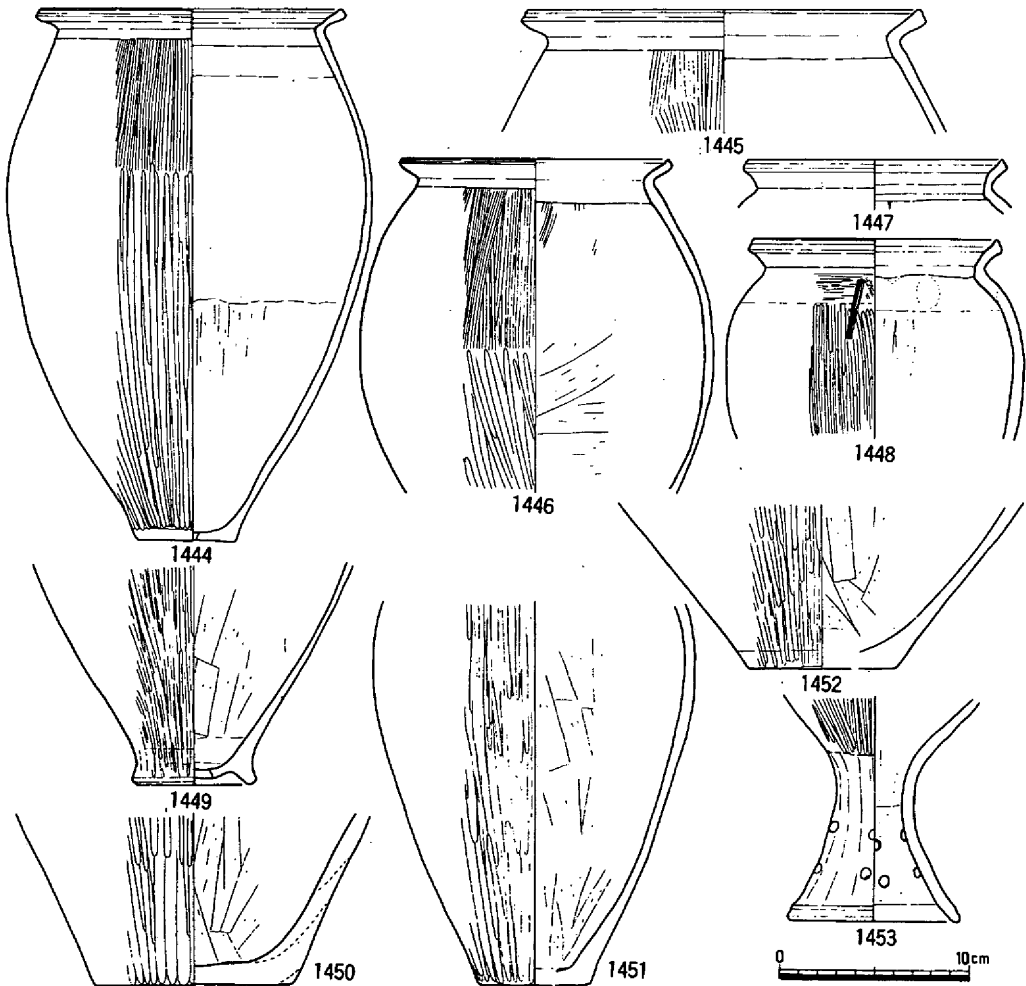


第347図 土壙—35 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物



土坑—36（第348図）

304—S東部で井戸—6と建物—14の間において検出された、径80cmの円形の平面形を呈する深さ70cmの土坑で、底は海拔68cmを測る。いっけん井戸状を呈する土坑であるが、東隣の井戸—6に比べて底が80cm高く井戸の用はなし得ないものである。埋土は暗青灰色粘質微砂層が1層堆積している。出土遺物としては土坑の中央部を中心にして甕・高杯等の土器片1444～1453が10cm前後の多くの角礫とともに埋没している。時期は百・中・Ⅱの新相である。（内藤）



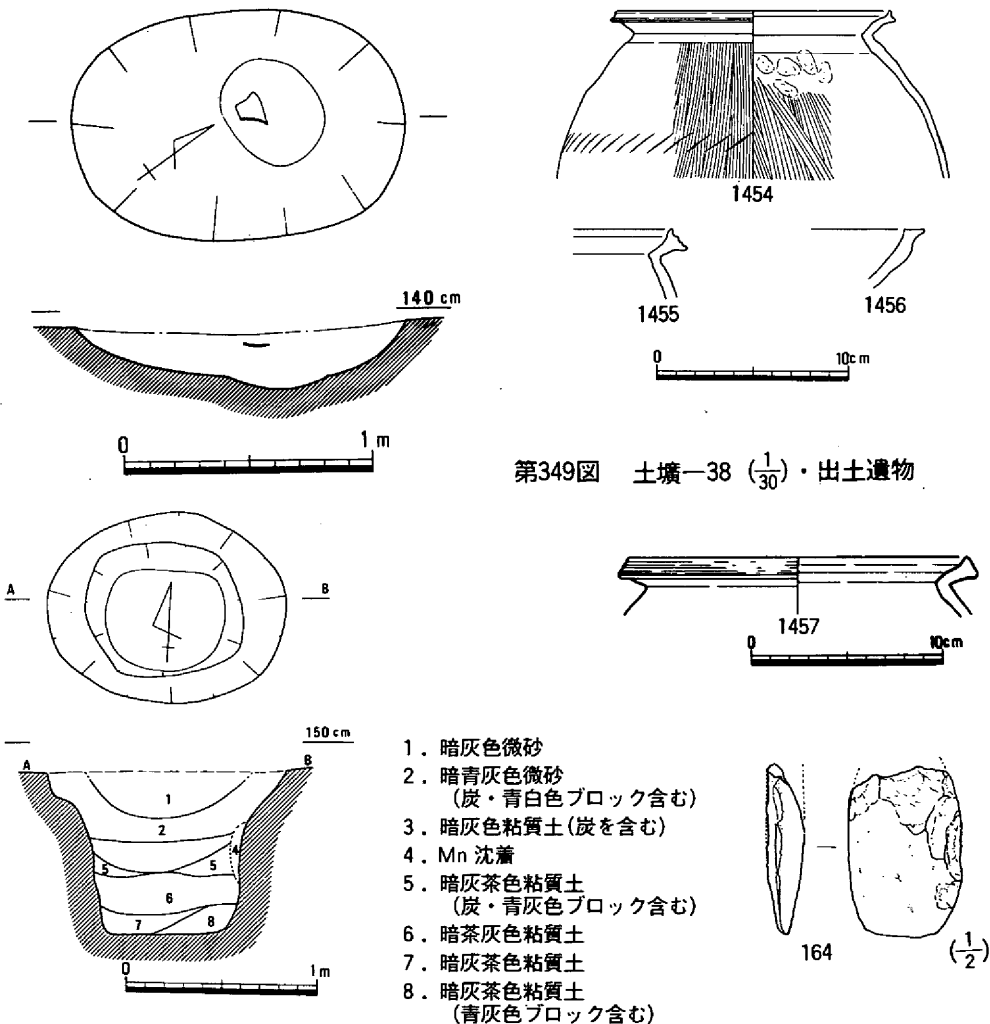
第348図 土坑—36 ($\frac{1}{40}$)・出土遺物

土壌—37

304—Sの東端部中央において検出された土壌で、土壌—38によって切られている。平面形は、推定長径約200cm。短径138cmの長楕円形を呈し、深さは検出面より最大で7cmを測るにすぎない。埋土は、青緑灰色粘土が1層のみである。土器等の遺物は出土していないので時期は明確ではないが、百・中・Ⅱの新相であろうと考えられる。

土壌—38 (第349図)

304—Sの東端部中央に位置し、一部304—Tにかかっている。土壌—37を切っており、平面形は、132×90cmの楕円形を呈し、深さは、検出面より21cmを測る。埋土は、炭・焼土や1～3mm前後の砂粒（石英・長石など）を含む暗青灰色粘土が1層のみである。土器は、甕・高杯が出土している。時期は、百・中・Ⅱの新相である。 (平井)

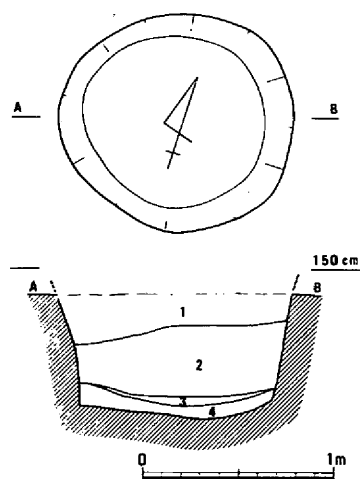


土壌—39 (第 350 図)

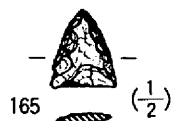
303—T南西部, 建物—24の東端南で土壌—43と並んで検出された。長径125cm・短径 100 cmの楕円形の平面形を呈する深さ90cmの土壌で, 底は海拔50cmを測る。検出面から20cm程下で段をもち, これより底にかけて平面形は長方形を呈する。井戸状を呈する大土壌であるが, 底は約 2 m北西に位置する井戸—9 より40cmも高い植物体の堆積している茶褐色砂質土まで湧水層には達していないと思われる。出土遺物としては甕1457等の土器片および安山岩製小型磨製石斧等がわずかにみられるのみである。時期は百・中・Ⅱの新相である。

土壌—40 (第 351 図)

303—Tの南西部, 井戸—9の南に土壌—39と並んで検出された直径 120 cmの円形の土壌で 深さ 70 cm, 底は海拔70cmの暗灰茶色粘質土まで, 埋土は 4 層に分かれる。いずれも炭を含んでいるが, 土器片等は見られず, わずかにサヌカイト製の石鏃 165 1点が出土しているのみである。時期は百・中・Ⅱの新相である。(内藤)



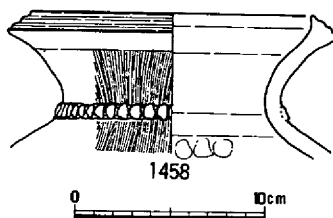
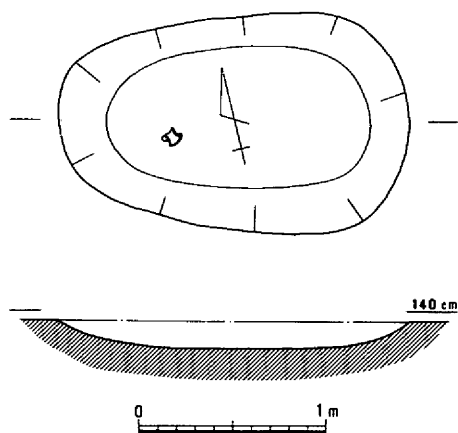
1. 暗灰色微砂(炭を含む)
2. 暗灰色微砂
(淡青白色ブロック・炭を含む)
3. 暗灰色細砂
(青白色ブロック・炭を含む)
4. 暗灰色粘質土
(淡灰色ブロック・炭を含む)



第351図 土壌—40 ($\frac{1}{40}$)・出土遺物

土壌—41 (第 352 図)

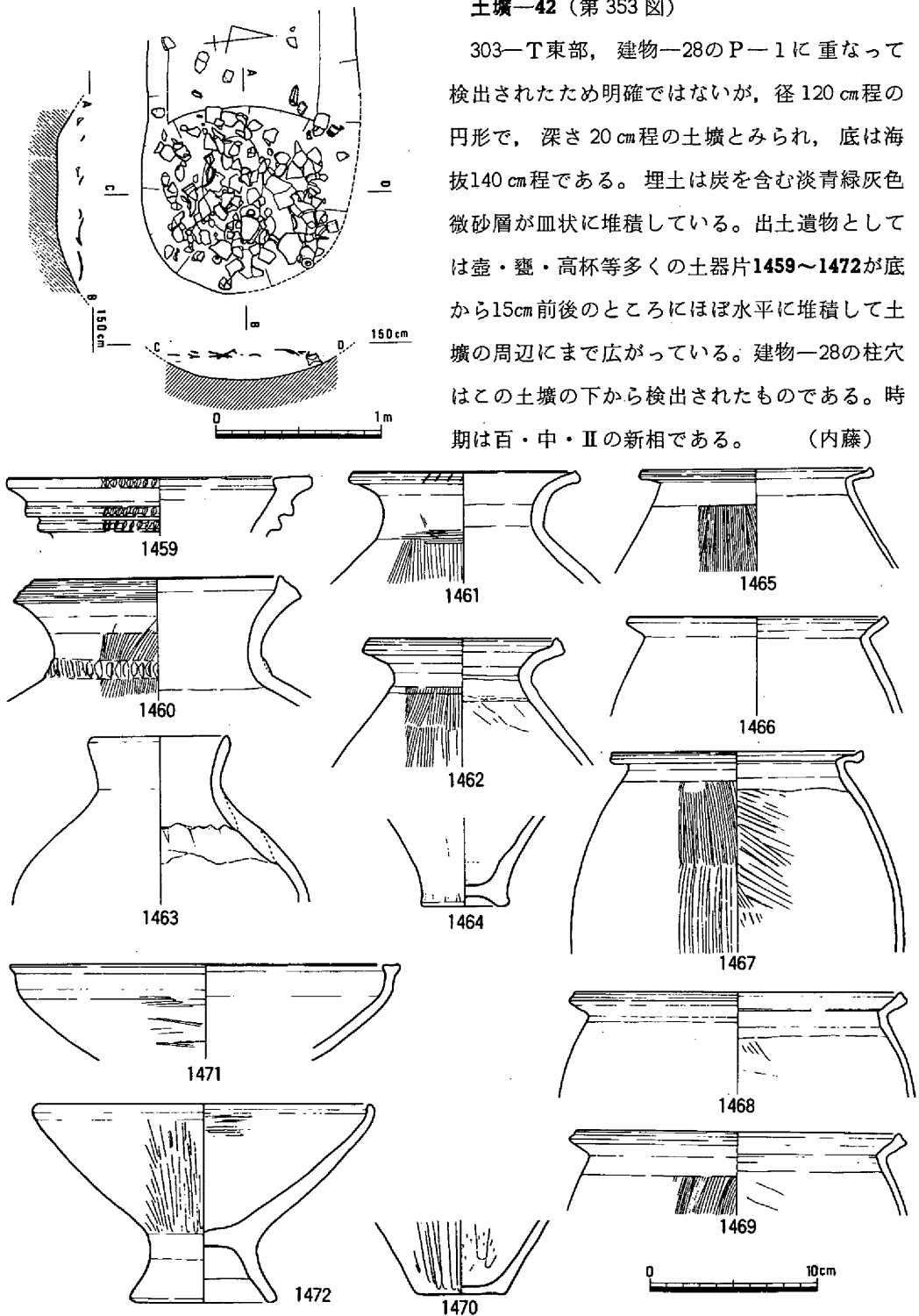
303—Tの南部分に位置する。平面形は不整形な楕円形を呈し, 深さは検出面より 14 cmを測る。埋土は, 炭, 焼土及び 1~3 mm前後の砂粒を含む淡青緑灰色粘質微砂が 1 層である。遺物は, 土器の他にガラス滓が少量出土している。時期は, 百・中・Ⅱの新相である。(平井)



第352図 土壌—41 ($\frac{1}{40}$)・出土遺物

土壌—42 (第 353 図)

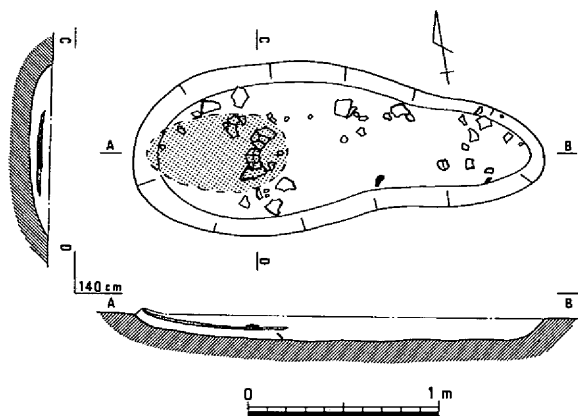
303—T東部, 建物—28のP—1に重なって
 検出されたため明確ではないが, 径 120 cm 程の
 円形で, 深さ 20 cm 程の土壌とみられ, 底は海
 抜140 cm 程である。埋土は炭を含む淡青緑灰色
 微砂層が皿状に堆積している。出土遺物として
 は壺・甕・高杯等多くの土器片1459~1472が底
 から15cm 前後のところにはほぼ水平に堆積して土
 壌の周辺にまで広がっている。建物—28の柱穴
 はこの土壌の下から検出されたものである。時
 期は百・中・Ⅱの新相である。(内藤)



第353図 土壌—42 ($\frac{1}{40}$)・出土遺物

土坑—43 (第 354 図)

303—Tの西南部に位置する。平面形は第354図のように不定形な形態を呈し、深さは、検出

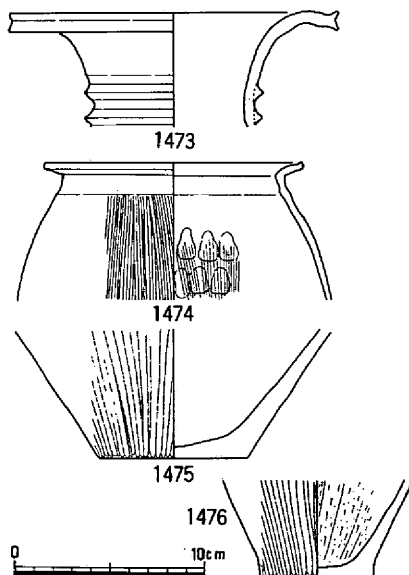
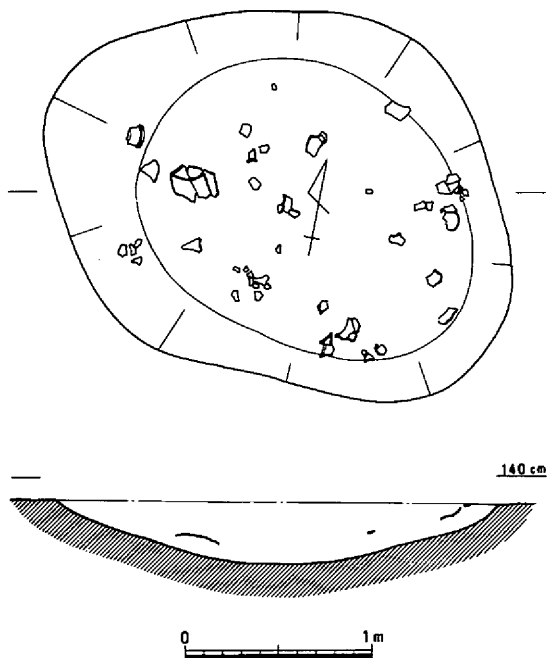


第354図 土坑—43 ($\frac{1}{40}$)

面より13cmを測る。埋土は、青緑灰色のブロック土を含む暗青緑灰色粘土で、この中には、炭・焼土及び1～3mm前後の砂粒とともにガラス滓を含んでいた。特に、図に点で示した範囲内にはガラス滓を含んだ炭・焼土が多く分布していた。出土した土器は甕などの胴部や小破片が多くここに図示することはできなかった。時期は百・中・Ⅱの新相であると考えられる。

土坑—44 (第 355 図)

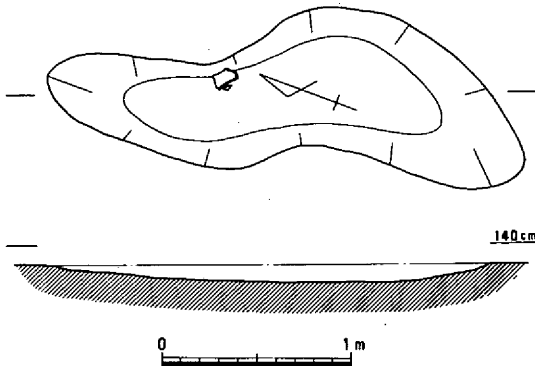
303—Tの南端部中央において検出された。平面形は、265×200cmの不整形な楕円形を呈し、深さは、検出面より32cmを測る。埋土は、炭・焼土を含む暗青緑灰色粘質微砂が1層のみである。遺物は、壺・甕が出土している。時期は、百・中・Ⅱの新相である。



第355図 土坑—44 ($\frac{1}{40}$)・出土遺物

土壌—45 (第356図)

303—Tの南端部のほぼ中央、土壌—44の東側において検出された。平面形は、第356図のように不定形な形態を呈し、深さも最大で9cmを測るにすぎない。埋土は、炭、焼土を含む暗青緑灰色粘土が1層のみである。遺物は、土器が少量出土している。時期は、百・中・Ⅱの新相であると考えられる。(平井)

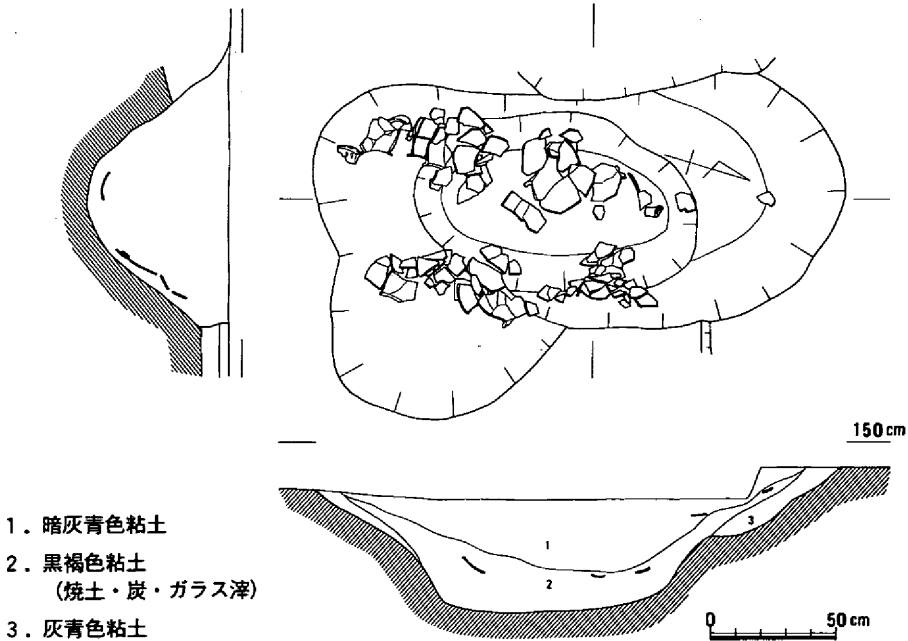


第356図 土壌—45 ($\frac{1}{40}$)

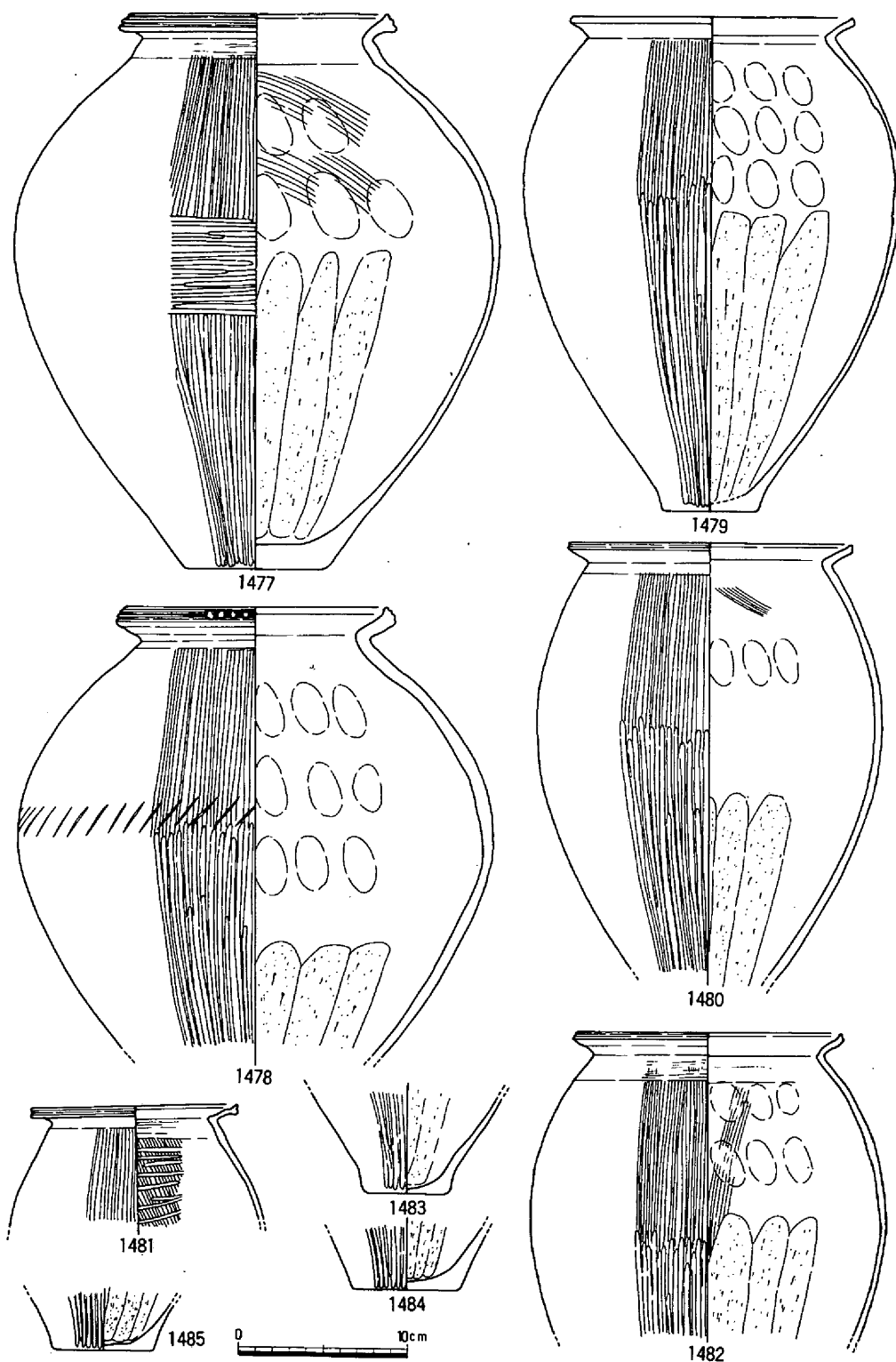
土壌—46 (第357～359図)

304—Sと304—Tにかかるところに位置している。南北に長い楕円形を呈する。他のものに比べて、深さは57cmと深い。埋土には、炭・焼土・ガラス滓を含んでいる。土器は多く、甕は潰れた状態で壁面に貼りついている。土器には、壺・甕・高杯を出土している。甕では、ほぼ完形に復原されるものがある。

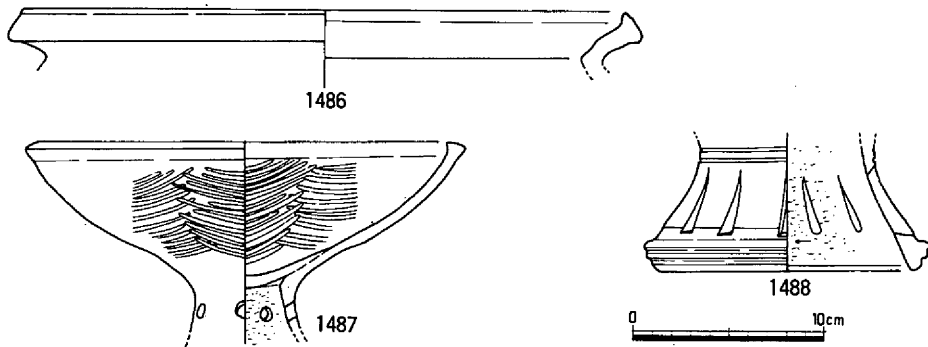
時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。



第357図 土壌—46 ($\frac{1}{30}$)



第358図 土壙—46出土遺物 (1)

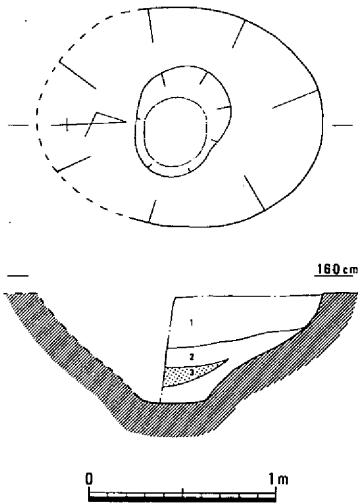


第359図 土壌—46出土遺物 (2)

土壌—47

304—Sの北端部に位置している。東西に長い楕円形を呈し、深さは比較的浅い。土壌—46の東側に位置し、竪穴式住居—3と接している。埋土は、暗灰色粘土で、土器片はほとんど含まれていない。時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。(正岡)

土壌—48 (第360図)



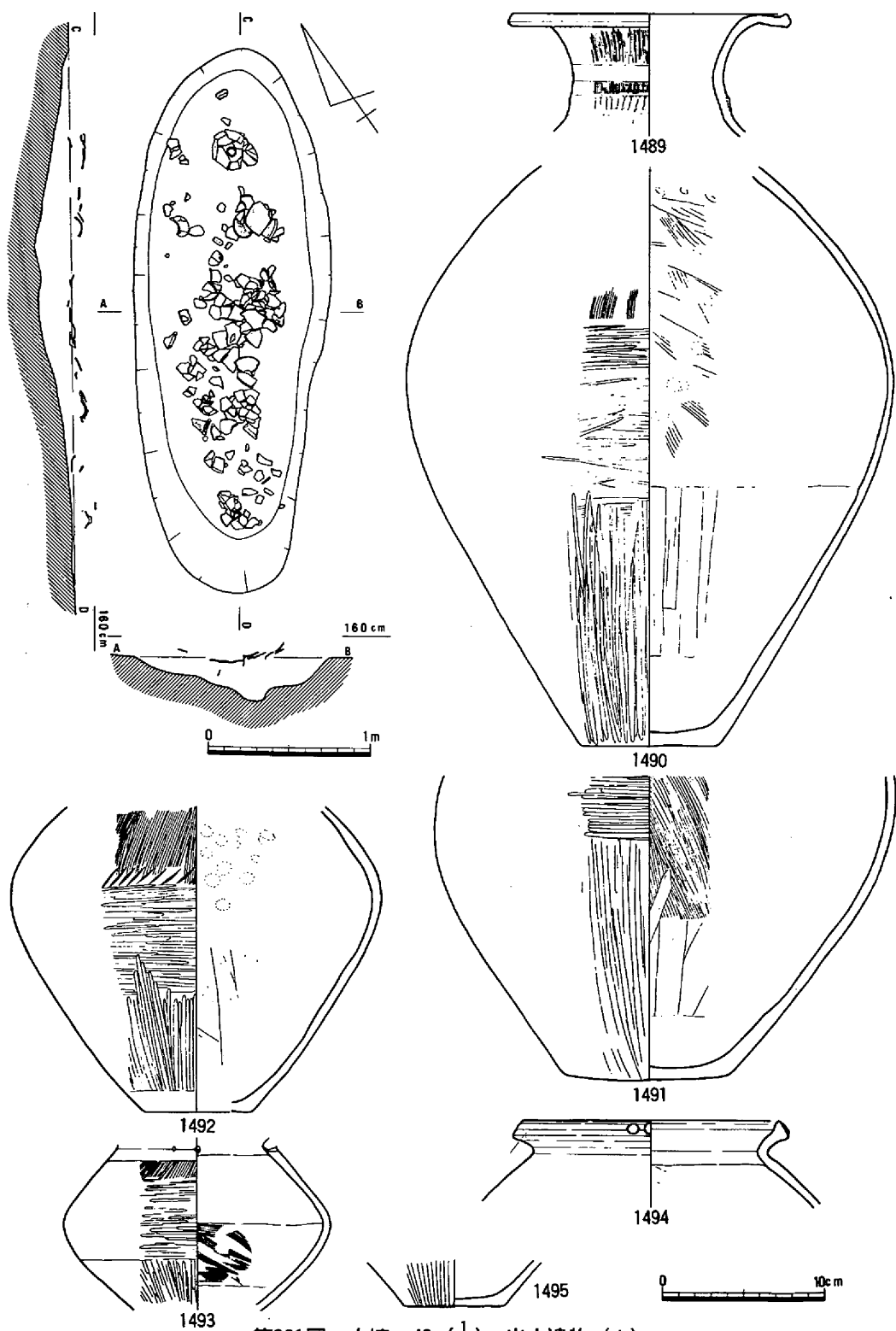
第360図 土壌—48 ($\frac{1}{40}$)

304—Tの西端部のほぼ中央において検出された土壌で、井戸—8、及び建物—22のP—3と重複している。これらの切り合い関係は必ずしも明確ではないが、建物—22のP—3が最も古く、次に土壌—48、そして最後に井戸—8が掘られたものと考えられる。平面形は、円形或いは楕円形を呈すると思われ、深さは、検出面より57cmを測り、底のレベルは海拔91cmである。埋土は3層あり、図の1層は茶灰褐色微砂、2層は青緑灰色のブロック土を含む暗青灰色粘土、3層は1～3mmの砂粒を含む暗灰色粘土である。土器は出土していないが、時期は、百・中・Ⅱの新相であると考えられる。

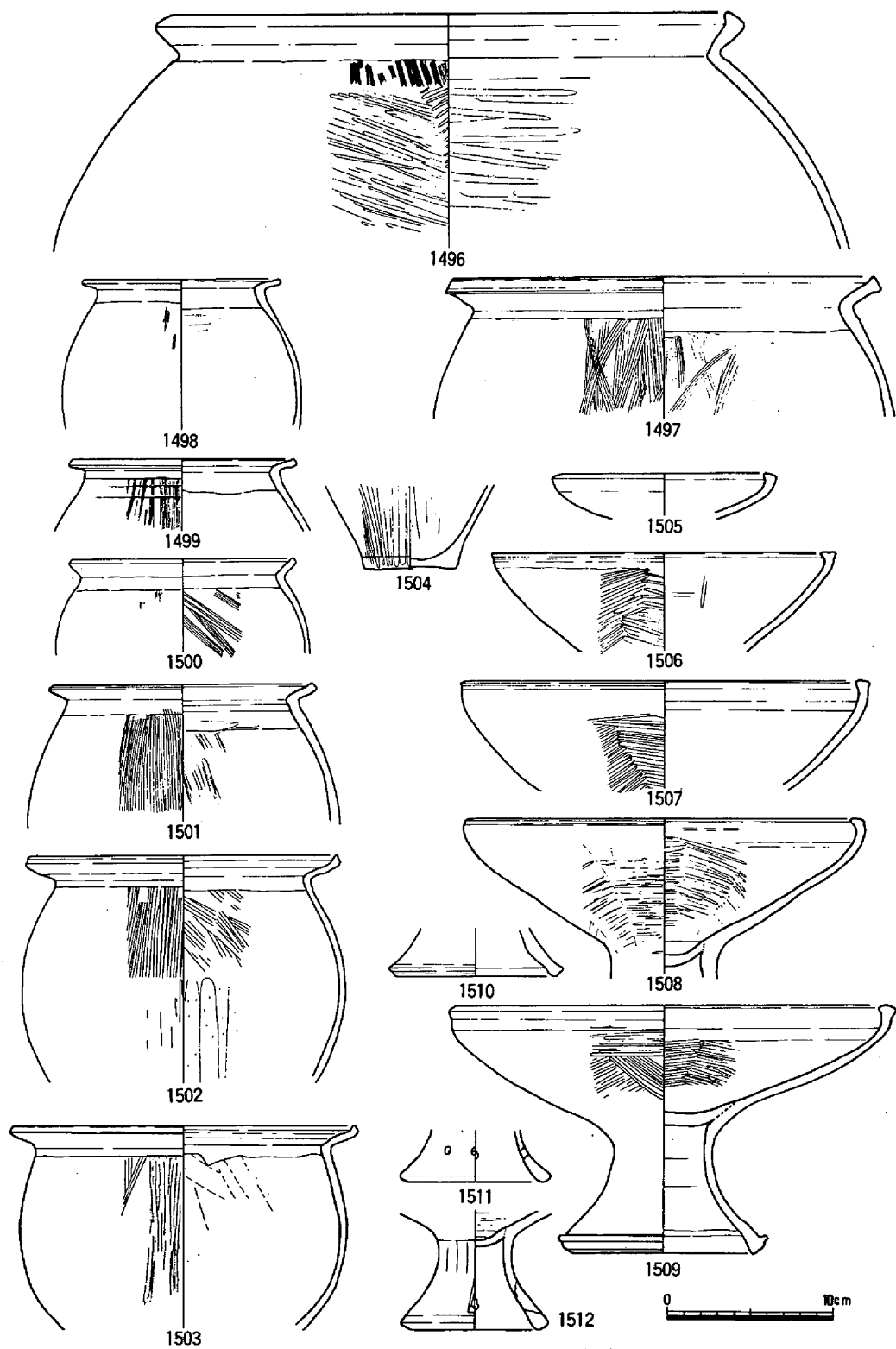
(平井)

土壌—49 (第361・362図)

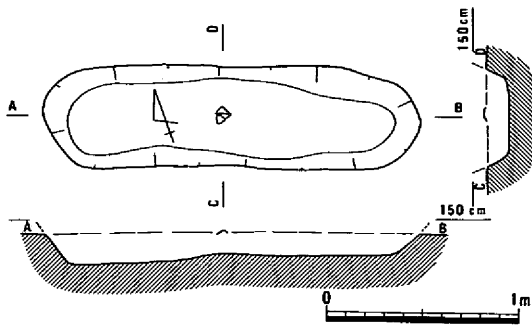
304—T西部、建物—2の東において検出された。長さ304cm、幅120cmの長楕円形の平面形を呈する深さ40cm程の土壌で底は海拔120cmを測る。埋土には淡黄褐色砂のブロックを含む暗青緑灰色粘質土層が1層堆積している。出土遺物としては復原完形の高杯形土器をはじめ壺・甕・高杯等多くの土器片1489～1512が底から約10～20cm上に広がっている。また、ガラス滓も出土している。時期は百・中・Ⅱの新相である。



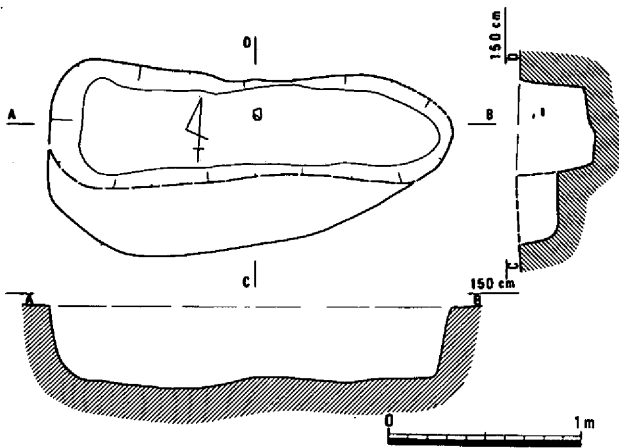
第361図 土坑—49 ($\frac{1}{40}$)・出土遺物 (1)



第362図 土壇一49出土遺物（2）



第363図 土壙-50 ($\frac{1}{40}$)



第364図 土壙-51 ($\frac{1}{40}$)

土壙-50 (第 363 図)

304-T の中央より 少し北東寄り
で、土壙-51 のすぐ南側において検
出された、東西に長い長楕円形の平
面形を呈する土壙である。土壙の規
模は長径195cm、短径55cm、深さ20cm
を測り、土壙の底は海拔 125 cm で比
較的扁平である。埋土は暗青緑灰色
粘土層が 1 層堆積し、土器は細片が

堆積土の比較的上層部におい
てみられたのみである。時期
は百・中・Ⅱの新相と想定さ
れる。

土壙-51 (第 364 図)

304-T の北東部、建物—
27 の南側で土壙-50 と並んで
検出された長径 210 cm、短径
60 cm、深さ 45 cm の長細い土壙
で、南側の底が約 20 cm 浅い土
壙を切っている。土壙の底は

海拔 100 cm である。埋土は青緑灰色砂のブロックを含む暗青灰色粘土層が 1 層で遺物は土器細
片がわずかに出土したのみである。時期は百・中・Ⅱの新相である。

(内藤)

土壙-52

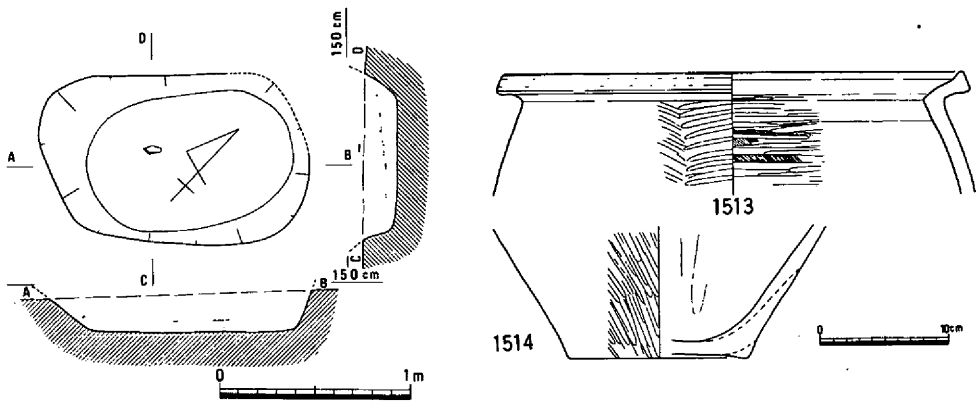
304-T の北東隅に位置する。平面形は長楕円形を呈している。長径156cm、短径74cm、深さ
16cmを測る。埋土中には、ガラス滓、焼土を多く含んでいた。土器片はほとんど含まれていな
いが、埋土等の状況から時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。

(正岡)

土壙-53 (第 365 図)

304-T の北東隅、井戸-13 の東側で検出された、長辺140cm、短辺90cmの不整長方形を呈す
る土壙で深さ20cmを測る。土壙の底は海拔 125 cm で扁平である。埋土には途中炭層をはさんだ
暗灰色粘土層で、ガラス滓が多く含まれている。また大型の甕等土器片1513・1514もわずかに
みられる。時期は百・中・Ⅱの新相である。

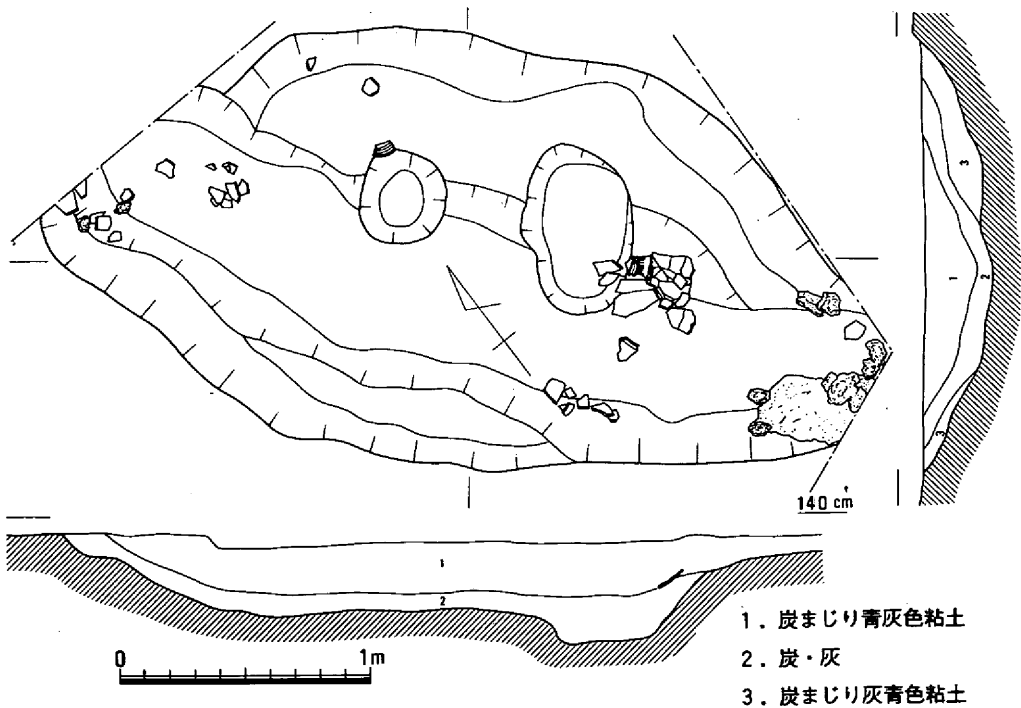
(内藤)



第365図 土壌—53 ($\frac{1}{40}$)・出土遺物 ($\frac{1}{6}$)

土壌—54 (第366・367図)

303—Uに位置する。調査区の北端に位置し、一部が調査区域外に及んでいる。長楕円形を呈し、深さ30cmを測る。埋土中には、焼土・炭・ガラス滓・土器片を多量に含んでいる。ガラス滓には、明らかに炉壁と判断されるものがある。内面はガラス質に溶けており、順次、黒色・黄色・赤色と変色した塊が検出された。



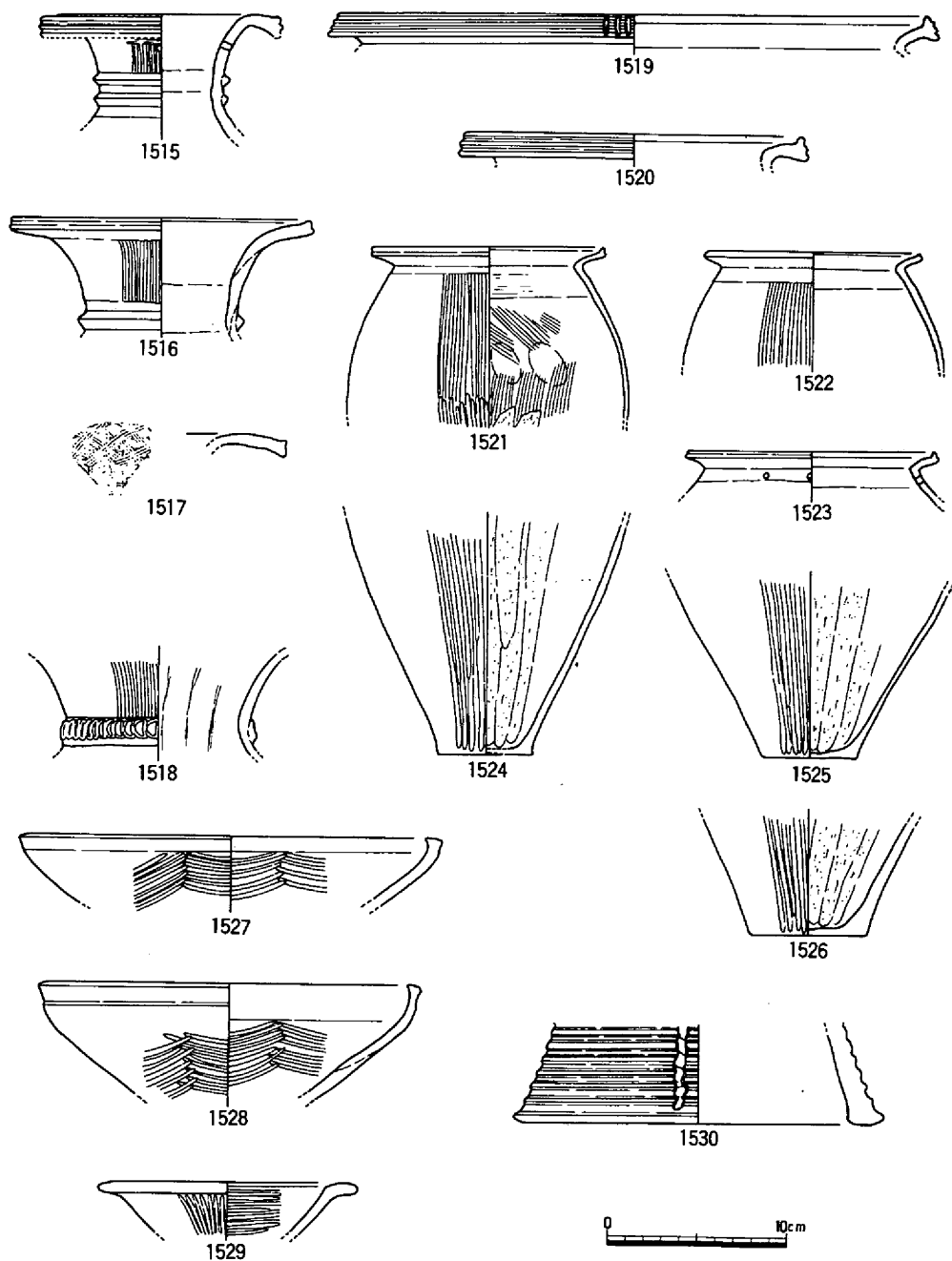
第366図 土壌—54 ($\frac{1}{30}$)

百間川今谷遺跡

土器には、壺1515～1518、甕1519～1522・1524・1525・1526、高杯1527・1528・1529、器台1530がある。

時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。

(正岡)

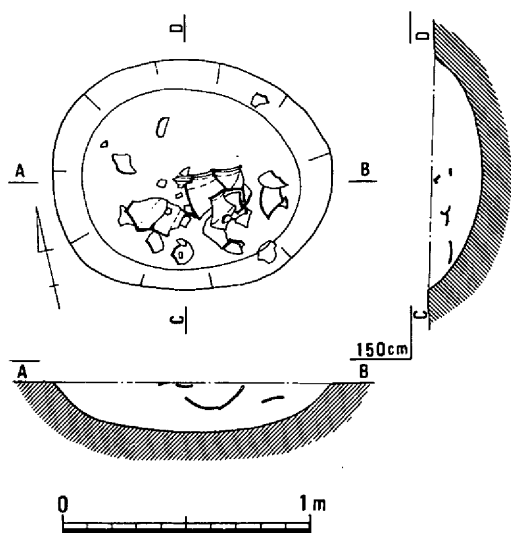
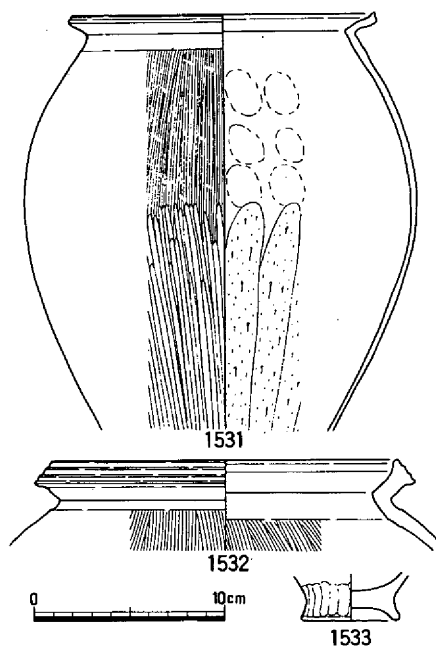


第367図 土壙—54出土遺物

土壌—55 (第 368 図)

303-Uの南端部の西寄りにおいて検出された土壌で、溝—13を切っている。平面形は111×91cmのほぼ円形を呈し、深さは、検出面より18cmを測る。埋土は、炭及び1～3mmの砂粒（石英・長石など）を多く含む暗青緑灰色粘質微砂が1層のみである。土器は、壺・甕が出土している。時期は、百・中・Ⅱの新相である。

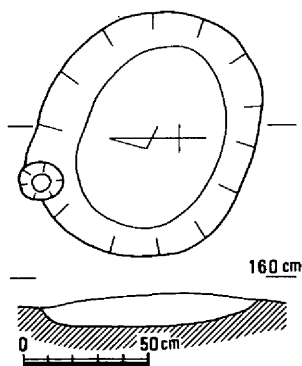
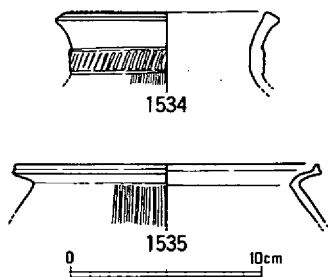
(平井)

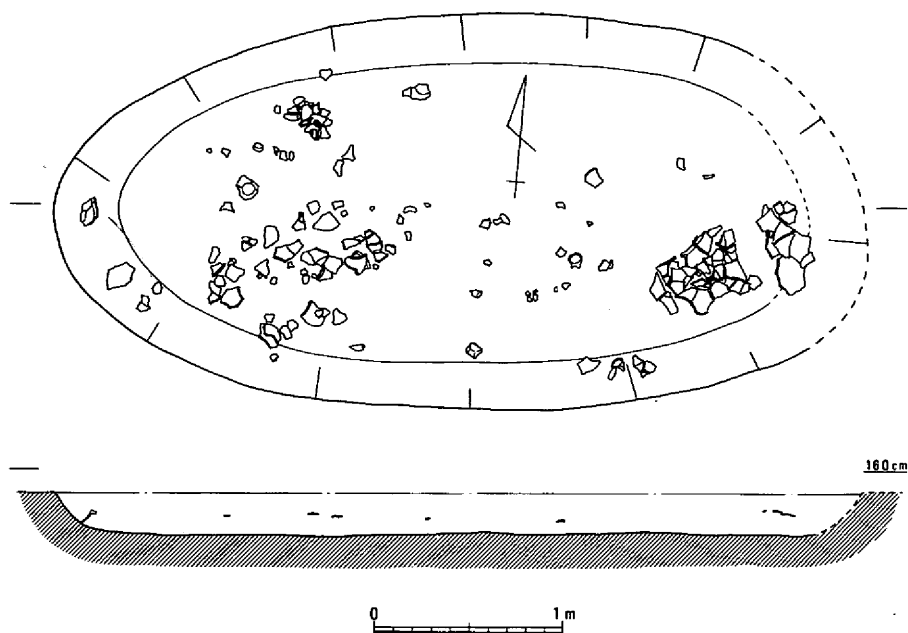
第368図 土壌—55 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

土壌—56 (第 369 図)

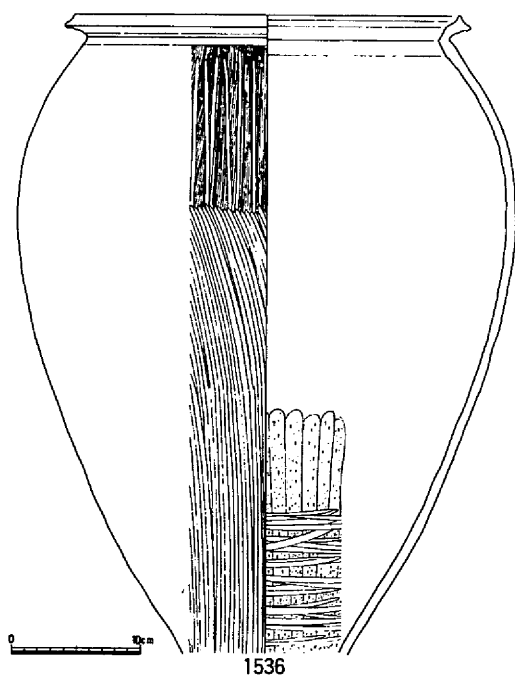
304-Uの西端に位置する。ほぼ東西に長い楕円形を呈し、深さは浅い。埋土は暗青灰色粘土で、小角礫・炭・焼土・土器小片を含む。土器には、壺1534・甕1535の小片がある。時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。

(正岡)

第369図 土壌—56 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物



第370図 土壌—57 ($\frac{1}{40}$)

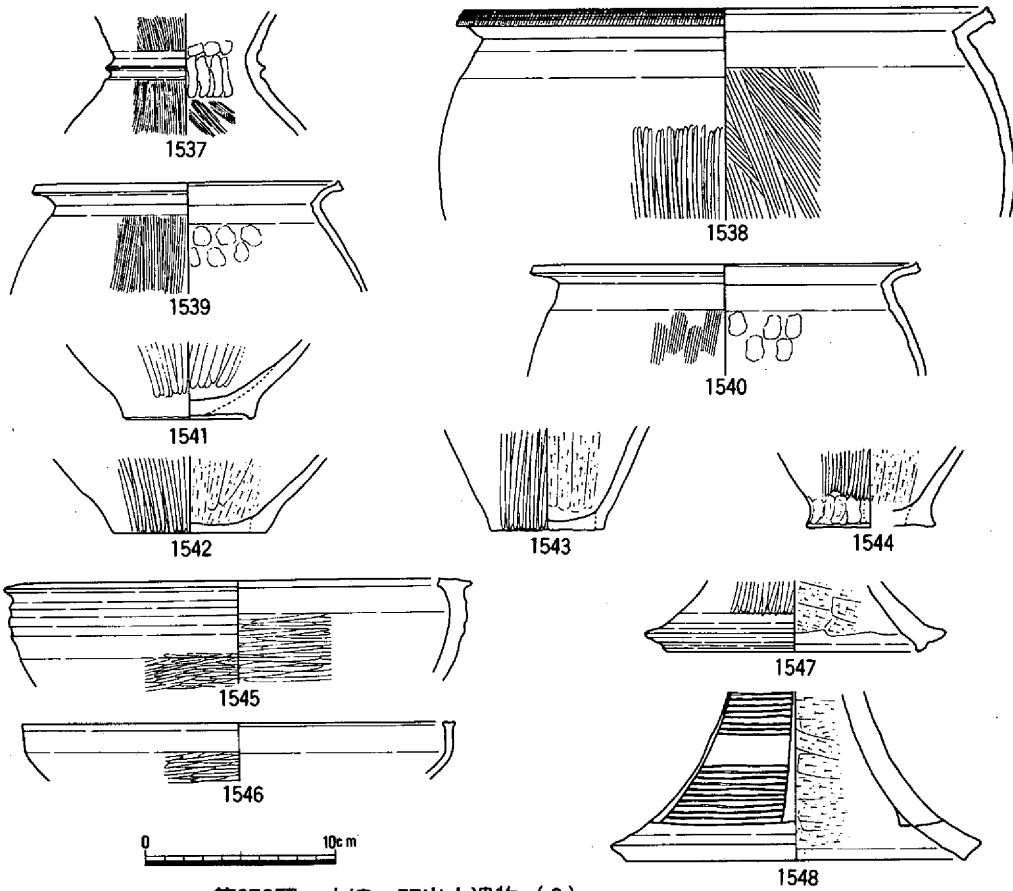


第371図 土壌—57出土遺物 (1) ($\frac{1}{6}$)

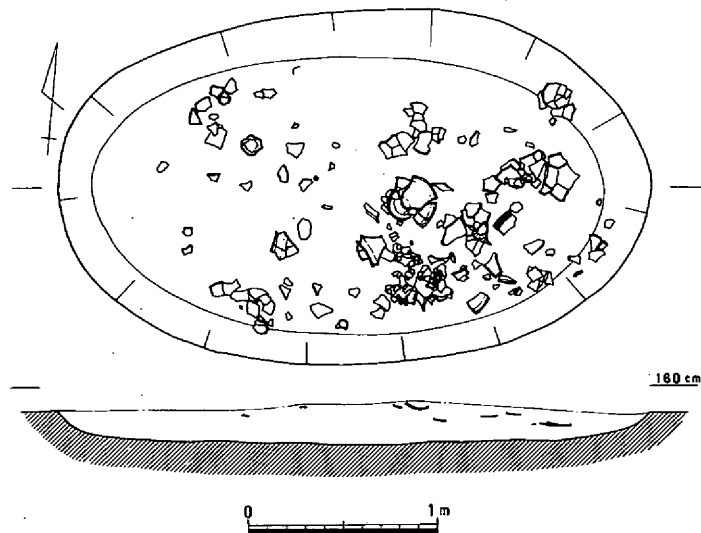
土壌—57 (第 370 ~ 372 図)

304—Uの中央部のやや西寄り、今回の調査区域の東端部に位置する大きな土壌である。平面形は、長径推定428 cm、短径210 cmの長楕円形を呈し、東端部は一部調査区域外にのびている。深さは、検出面より22 cmを測る。断面形は、逆台形を呈し、底面は平坦である。埋土は、炭、焼土及び1~3 mm前後の砂粒(石英・長石など)を含む暗青緑灰色粘質微砂が1層のみである。遺物は、壺・甕・高杯・鉢などの土器の他に、ガラス滓が少量ではあるが出土している。時期は、百・中・Ⅱの新相である。ガラス滓は、土壌—53や土壌—58において、また

この周辺の弥生中期の包含層中より炭・焼土を伴って出土しており、今回の調査区域から続いて東側に、ガラス滓を伴う遺構が検出される可能性は高いと考えられる。



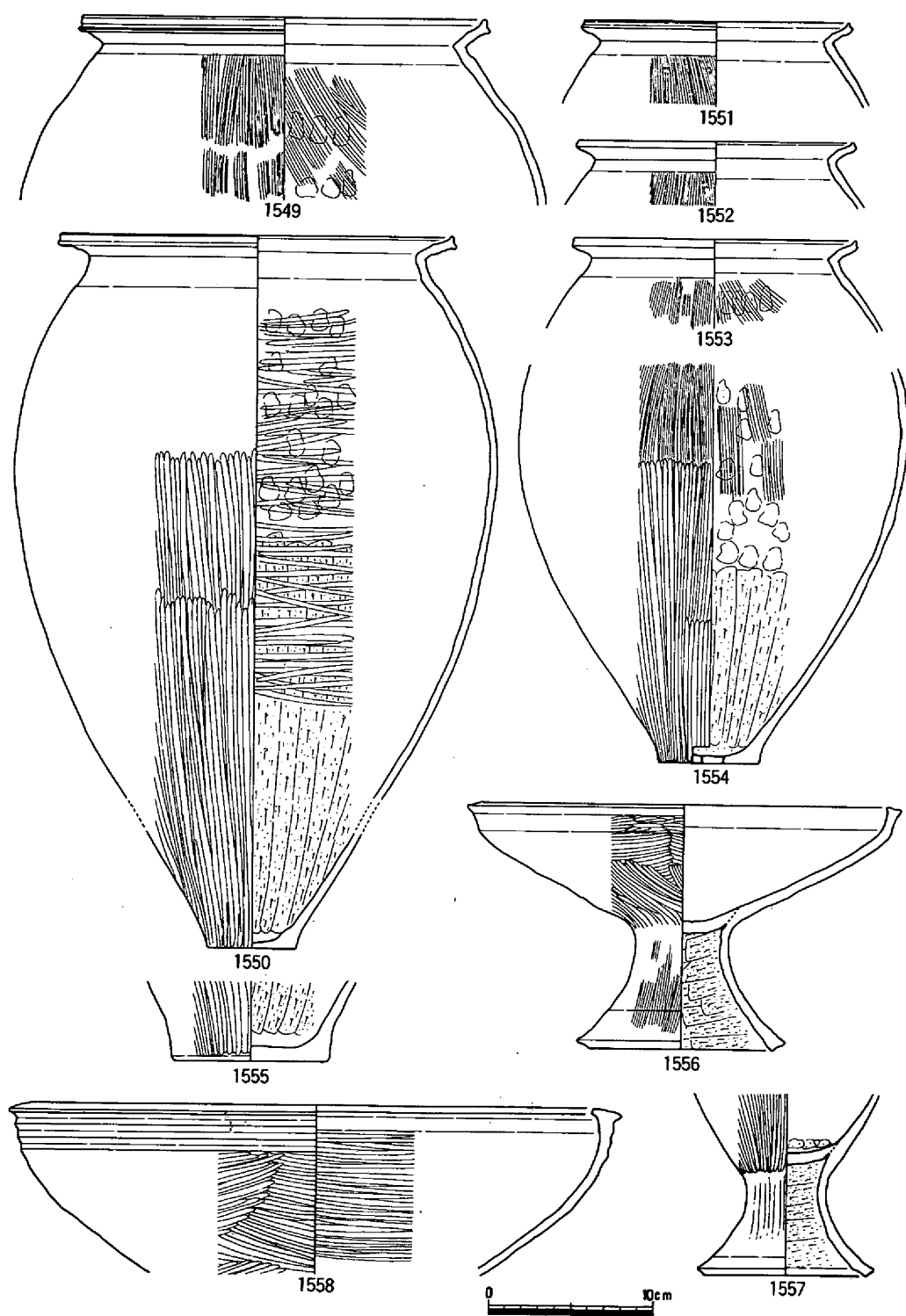
第372図 土壙—57出土遺物（2）



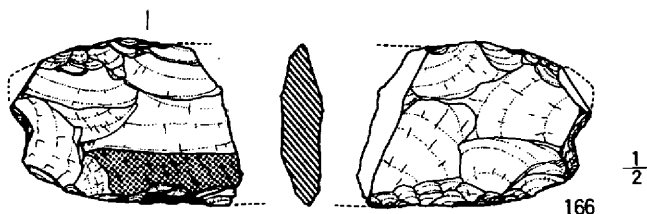
第373図 土壙—58 (1/40)

土壙—58（第373～375
図）

304—Uの西側の中央部、土壙—57の西南部において検出された。平面形は、 $316 \times 187 \text{ cm}$ の長楕円形を呈し、深さは、検出面より 17 cm を測る。断面形は、浅いすり鉢状を呈している。埋土は、炭・焼土及び $1 \sim 3 \text{ mm}$ 前後の砂粒（石英・長石など）



第374図 土壙-58出土遺物 (1)

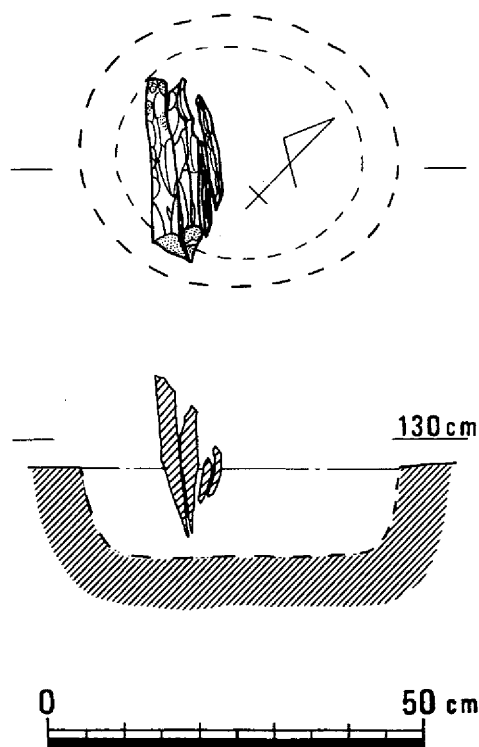


第375図 土壙—58出土遺物（2）

を含む暗青緑灰色粘質微砂が1層のみである。遺物は、甕・高杯・鉢・手づくねの小壺などの土器とともに、少量のガラス滓（合計9.5g）が出土している。また、サヌカイト製の石庖丁片が1片出土している。時期は、百・中・Ⅱの新相であると考えられる。この土壙は、ガラス滓を含むこと以外に、平面形・埋土・遺物の出土状況など全体として土壙—57に非常に類似している。

土壙—59（第376・377図、図版15—3）

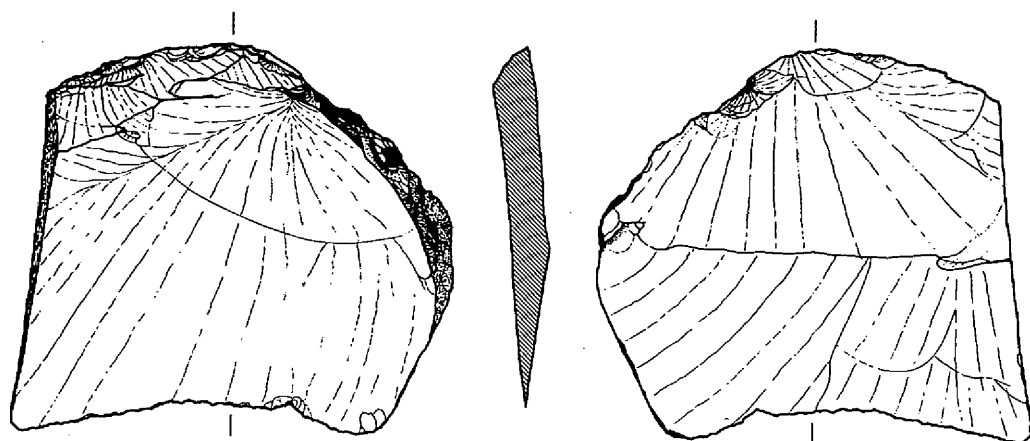
303—Tの南東部、土壙—41と溝—12との間に位置する。当初、遺構検出作業中にサヌカイトが第376図のような状況で出土したため何らかの遺構があるものと考え周辺の精査及び断面観察を行ったが、図の点線内がやや黒っぽい色調を呈するのみで明確な遺構を検出することはできなかった。第376図の平・断面図と第377図との関係は、第376図の最も西寄りのものが第

第376図 土壙—59 ($\frac{1}{10}$)

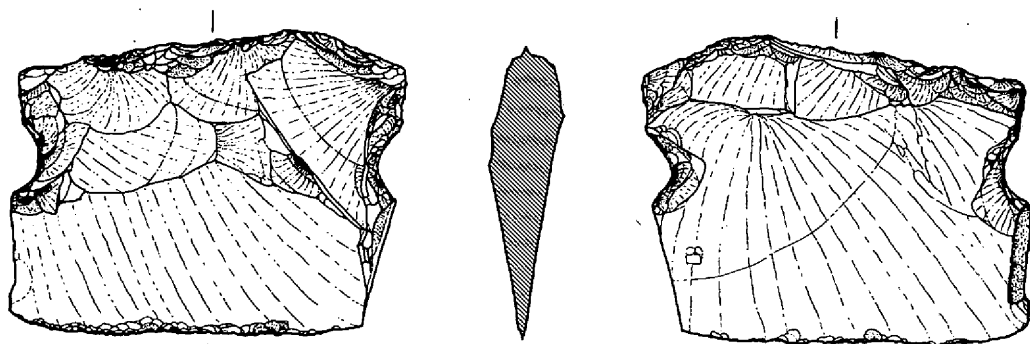
377図の167, その東側のものが168, その東が170, 最も東寄りのものが169である。

出土したものはすべてサヌカイト製で、167はいわゆる「原材」と考えられているものである。168は、製品で通常の打製石庖丁を大型化したような形状を呈しているがこの大きさや重量から考えて打製石庖丁と同様な用途（穂摘み）に用いたとは考え難い。他に、スキ先に用いた可能性も考えられるが、磨滅痕等の観察からは断定し難い。いずれにしても、用途、名称ともはっきりしない石製品である。169・170は打製石庖丁の完形品である。いずれも磨滅痕を明瞭に観察することができ、何度も使用されているものと考えられる。時期については、土層関係より百・中・Ⅱの新相であると考えられる。

（平井）



167



168



169



170



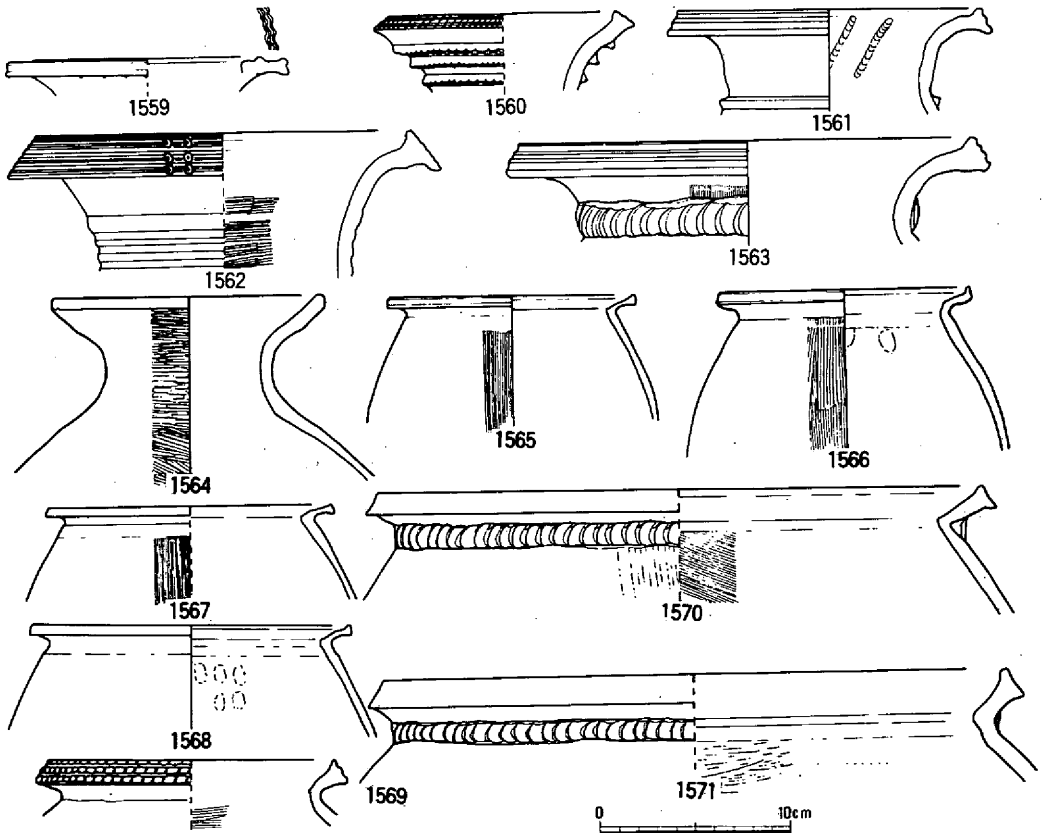
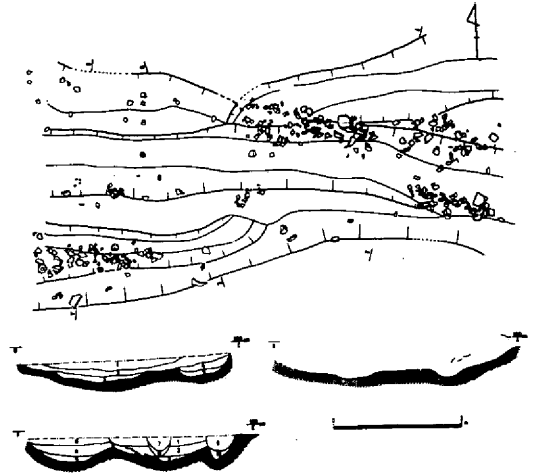
第377図 土壙—59出土遺物

(4) 溝

溝—1 (第378~380図)

2本の溝が重複しており
東西方向の溝は、最大幅385
cm, 最少幅160 cmであり、
深さ33cmほどを測る。この
溝と交差する溝は、幅130
cmほどで深さ31cmを測る。
前者の溝は東側において二
段となり幅も一段と広くな
る。後者の溝は、中央部分
において垂直に交差してい
るが、前者の溝がこの部分

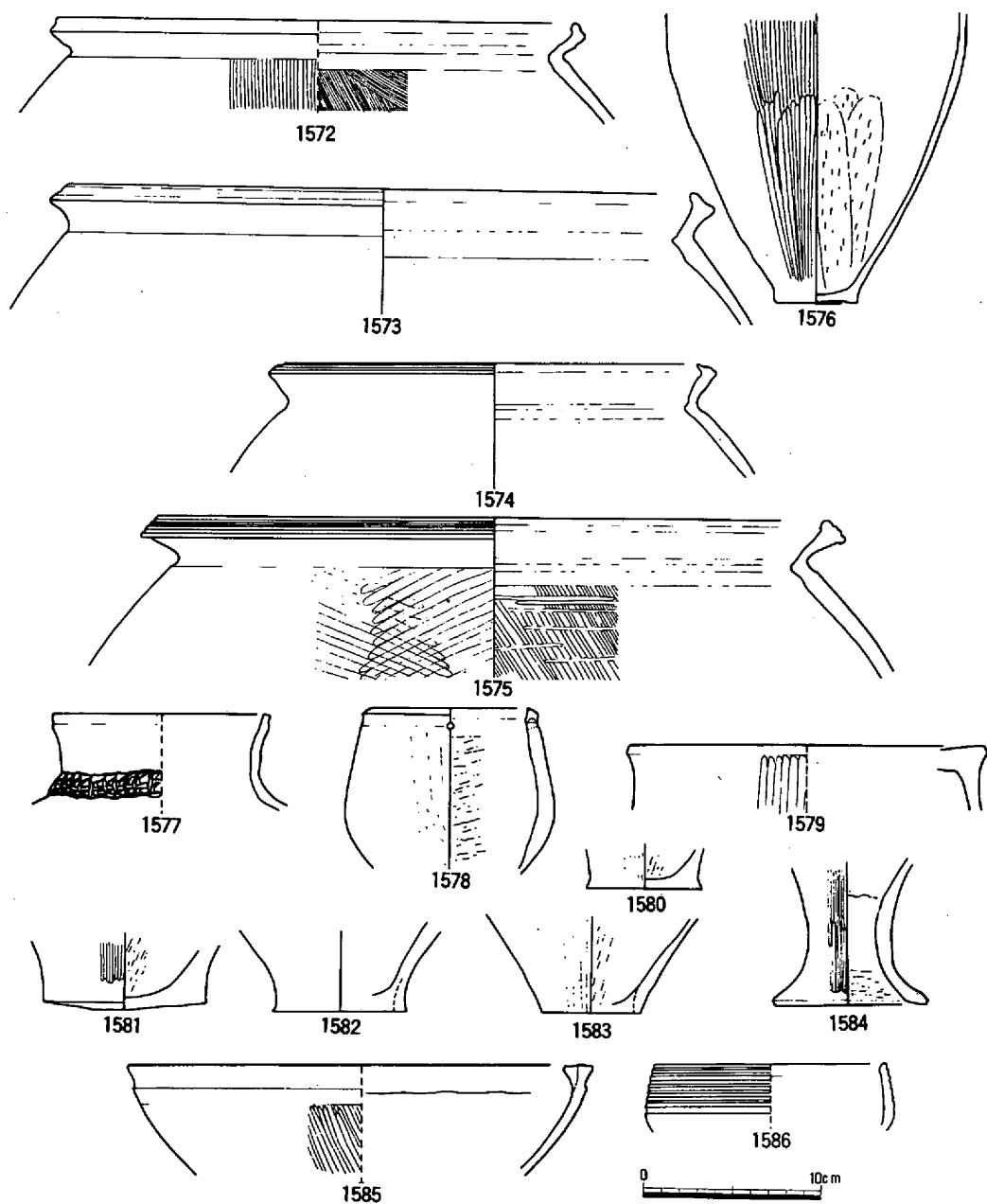
1. 茶灰色土
2. 淡黄灰色土
3. 暗黄灰色粘土
4. 茶褐色砂質土
5. 淡灰色粘質土
6. 茶灰色砂質土



第378図 溝—1 ($\frac{1}{120}$) 出土遺物 (1)

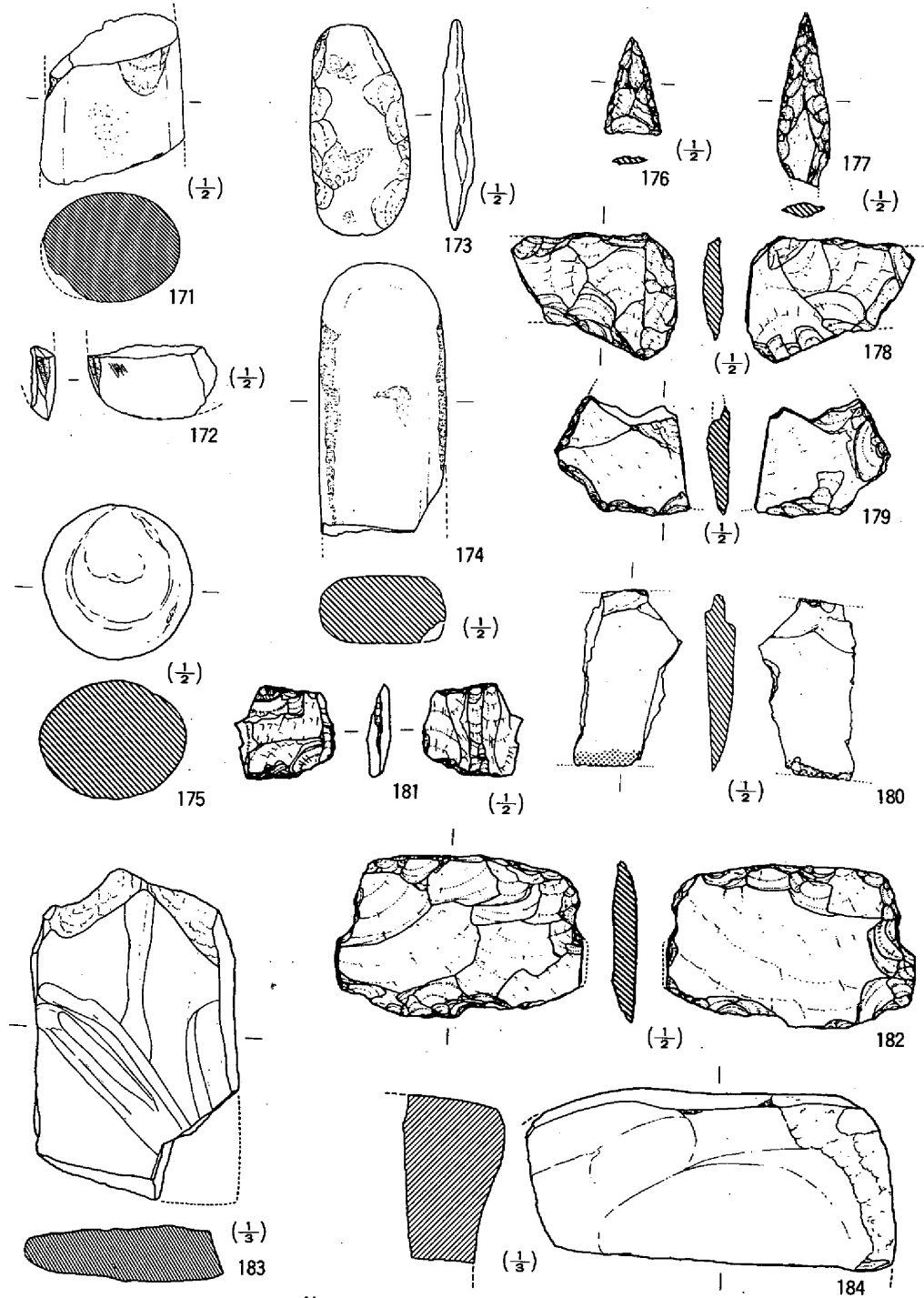
を切ってくっつけている。

出土遺物は、ほとんどが前者の溝の肩口が西側に落ち込んだ状態で出土しており、後者に伴う状態での遺物は見られない。

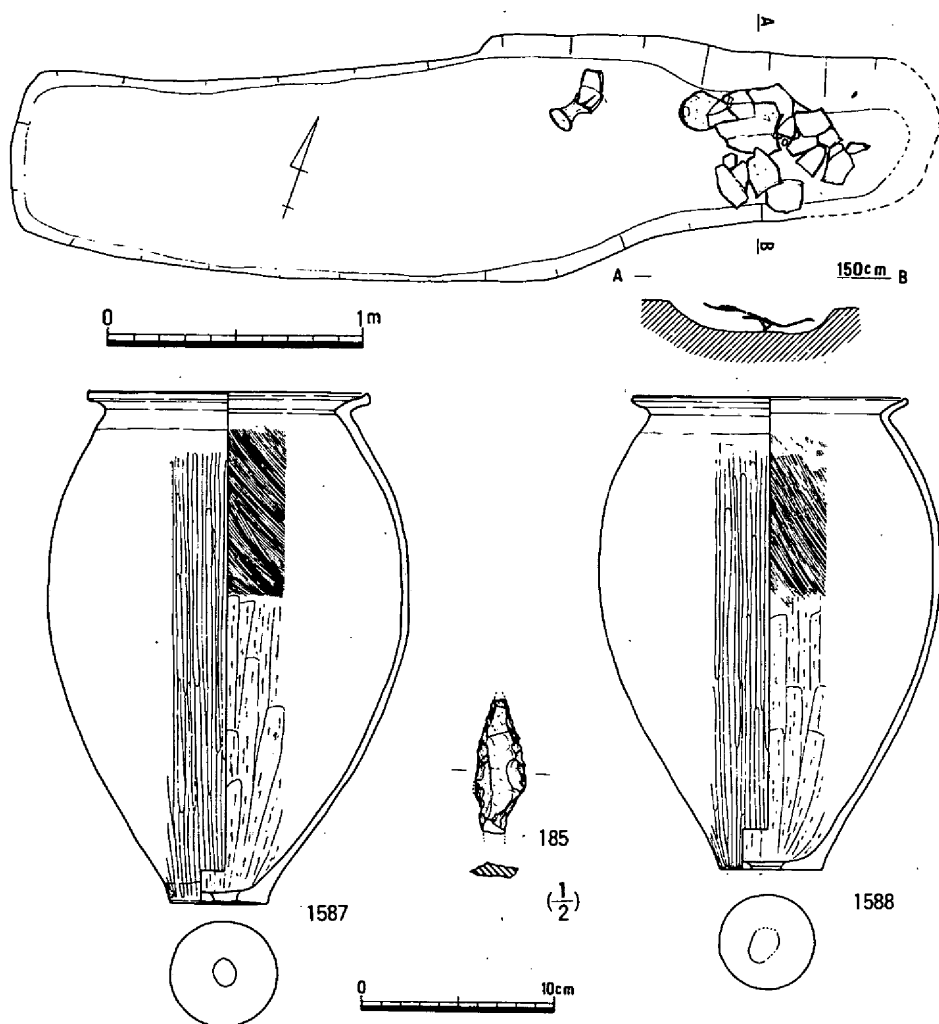


第379図 溝一1出土遺物(2)

時期は、前者は百・中・Ⅱの新相が主体を占める。したがって後者の溝は、これらの時期よりもさかのぼる。 (下澤)

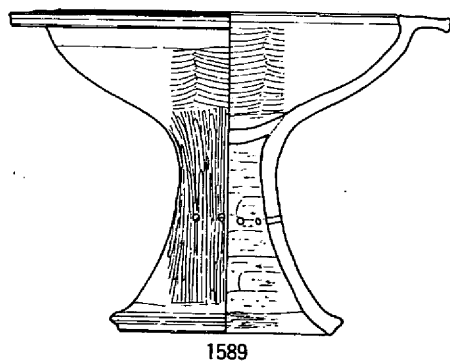


第380図 溝一1出土遺物 (3)



溝—2（第381図）

304—Qの北側に検出した。残存していた溝は長さ320cm、幅98cmである。深さは、10cmを測る。遺物は、遺溝の東側に土器が3個体出土した。いずれの土器も復原完形になるものである。甕が2、高杯1個体である。甕には、底部に穿孔があり甕である。また石鏃も1本出土している。これらの土器は、その特徴から百・中・Ⅱの新相のものであろう。（中野）



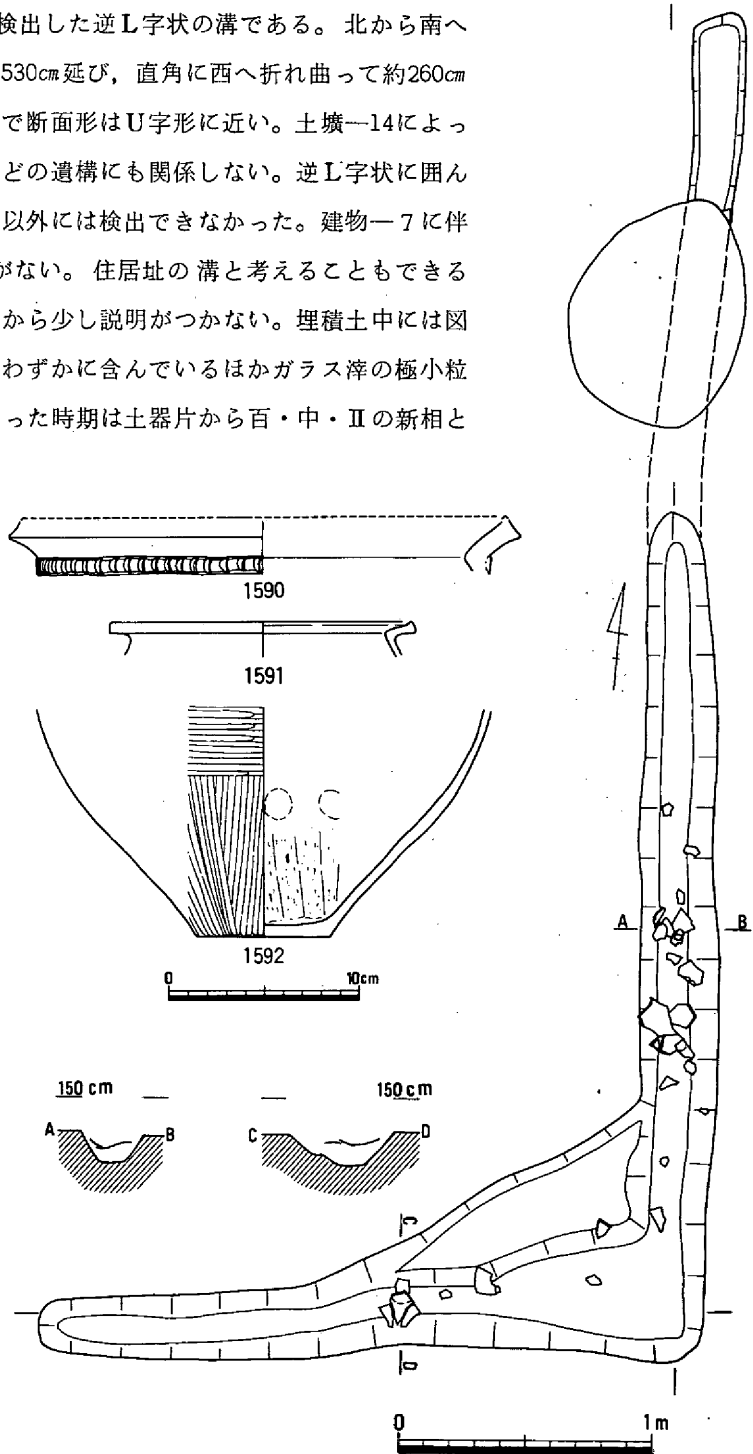
第381図 溝—2（ $\frac{1}{30}$ ）・出土遺物

溝—3 (第382図)

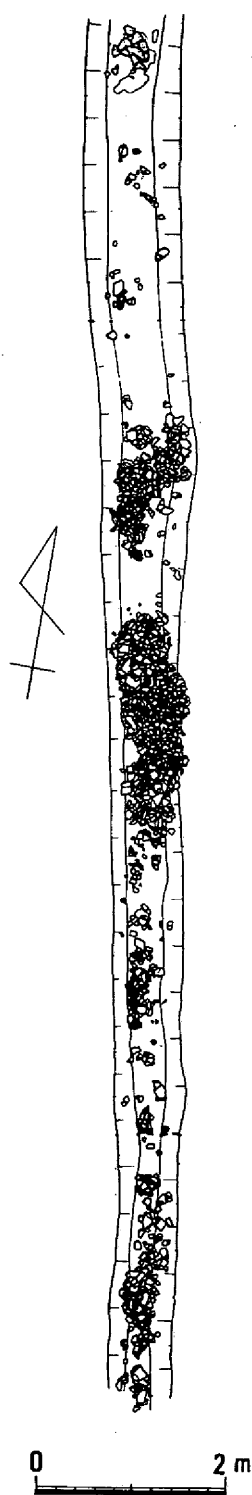
304—Rの北中央部で検出した逆L字状の溝である。北から南へ直線的に1部切れるが約530cm延び、直角に西へ折れ曲って約260cm延びる。溝の深さは14cmで断面形はU字形に近い。土壌—14によって切られているほかにはどの遺構にも関係しない。逆L字状に囲んだ中には柱穴は建物—7以外には検出できなかった。建物—7に伴う溝と考えるには根拠がない。住居址の溝と考えることもできるが、柱穴を伴わないことから少し説明がつかない。埋積土中には図示のように甕の破片をわずかに含んでいるほかガラス滓の極小粒も見られた。この溝の埋った時期は土器片から百・中・Ⅱの新相と考えられる。

溝—4

303—Rの南東隅に位置し、土壌—11を取り囲むようにして検出できた溝である。南から直線的に約270cm延びて如意状に曲って東へ約50cm延びる。溝の幅は最大40cm、深さは10cmを測る。埋積土中には遺物は全く含んでいなかった。何に用いられた溝なのか判らないが土壌—11と何らかの関連があると考えられないこともない。あるいは住居址の壁体溝の可能性もないことはない。時期については土壌—11と同じ百・中・Ⅱの新相と考えて



第382図 溝—3 (1/30)・出土遺物



第383図 溝-12 (1/80)

おきたい。

(浅倉)

溝-5

303-Sの中央部で確認された南北方向の細い溝である。

溝-6

303-Sに位置する。南北方向へ直線的にのびていて、土壌-20と土壌-22とに切られている。幅43cm、深さ11cmを測り、埋土には土器片・炭・砂粒を含んでいる。時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。

(正岡)

溝-7

304-Sの中央から南にかけて約10m検出できた溝で、深さは6cm程度検出した。流走方向等は不明である。また出土遺物もない。時期は土層関係から百・中・Ⅱの新相と思われる。

溝-8

304-S南東隅でわずか5m程が検出された東-西に流れる溝であるが、流走方向は不明である。時期は百・中・Ⅱの新相である。

溝-9

303-T北西部で溝-10と並んで検出された東-西の溝状遺構で、溝の底は海拔130cmである。検出範囲がわずかで流走方向は不明である。わずかに土器の細片がみられた。時期は百・中・Ⅱの新相と思われる。

溝-10

303-T北西部において溝-9の南側に検出された東-西の溝で、溝の底は海拔140cmである。流走方向は不明である。僅かに土器の細片がみられる。時期は百・中・Ⅱの新相である。

溝-11

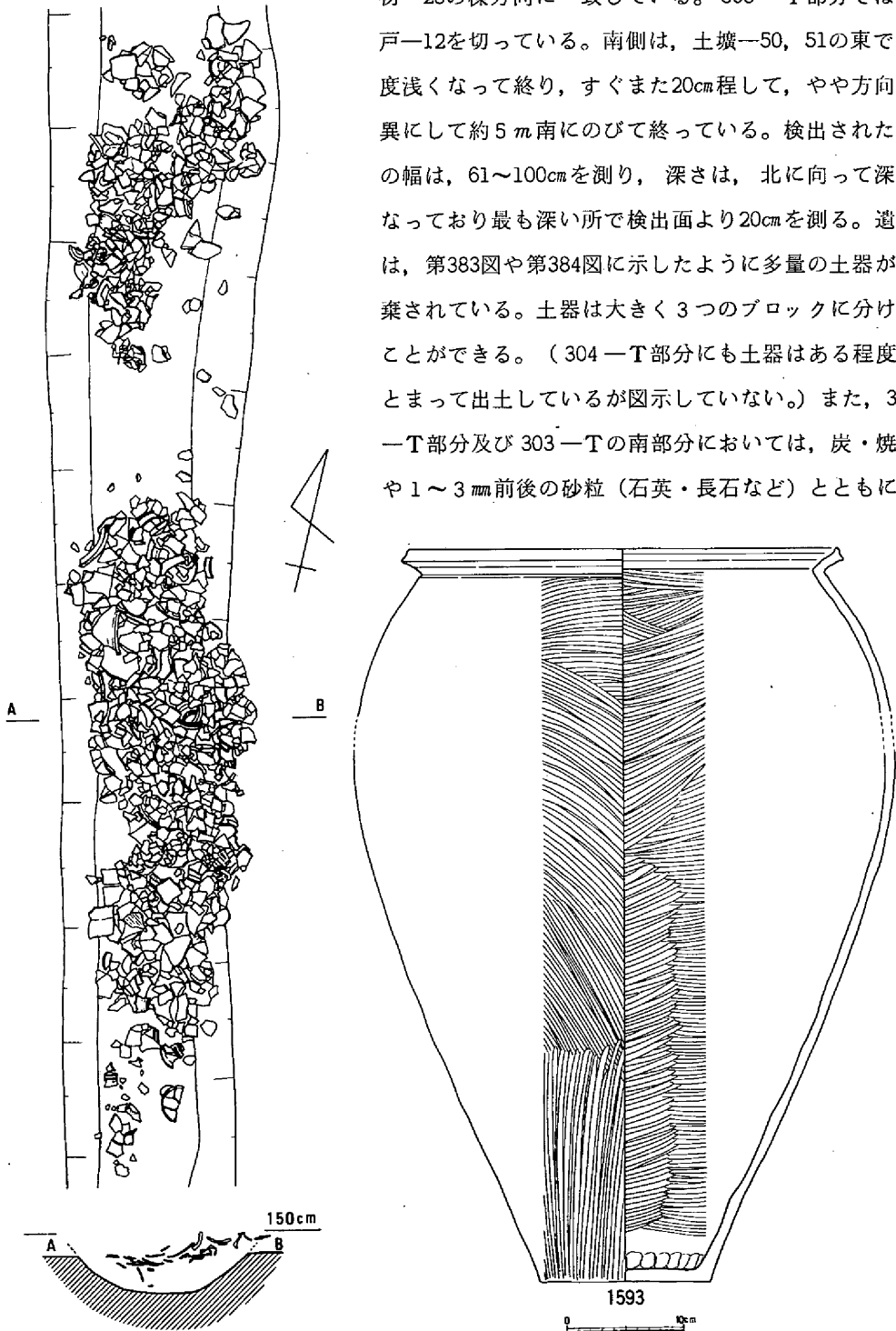
303-T北部において検出された東-西に流走する溝状遺構で建物-25の柱穴を切っている。また調査区外で溝-12と交差すると思われるが、切り合い関係は不明である。時期は土層関係から百・中・Ⅱの新相と思われる。

(内藤)

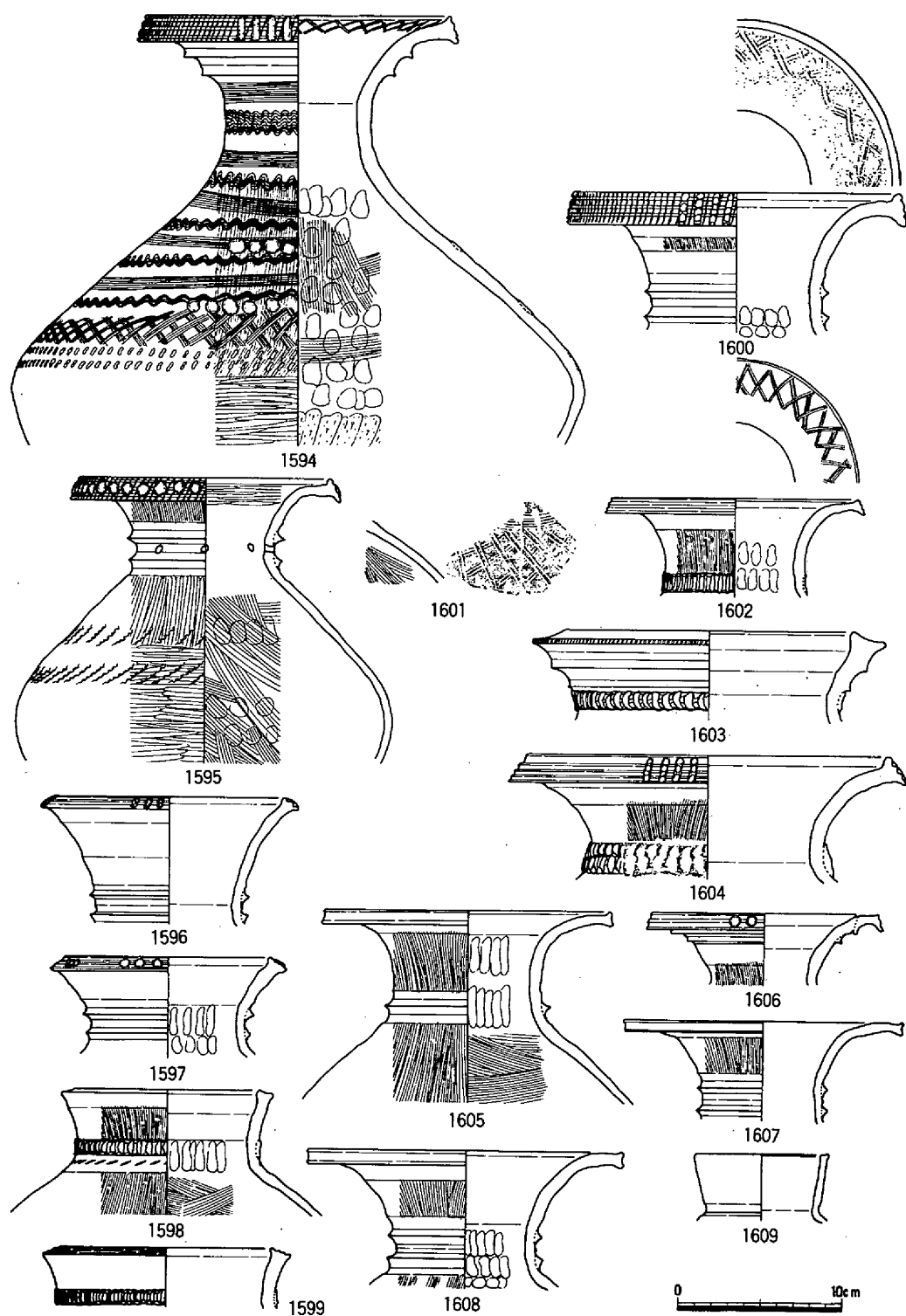
溝-12 (第383～388図、図版15-5)

304-Tの東側中央部から、303-Tの東部分にはほぼ直線的にのびる溝である。方向は、南北方向よりやや西にふれており、建

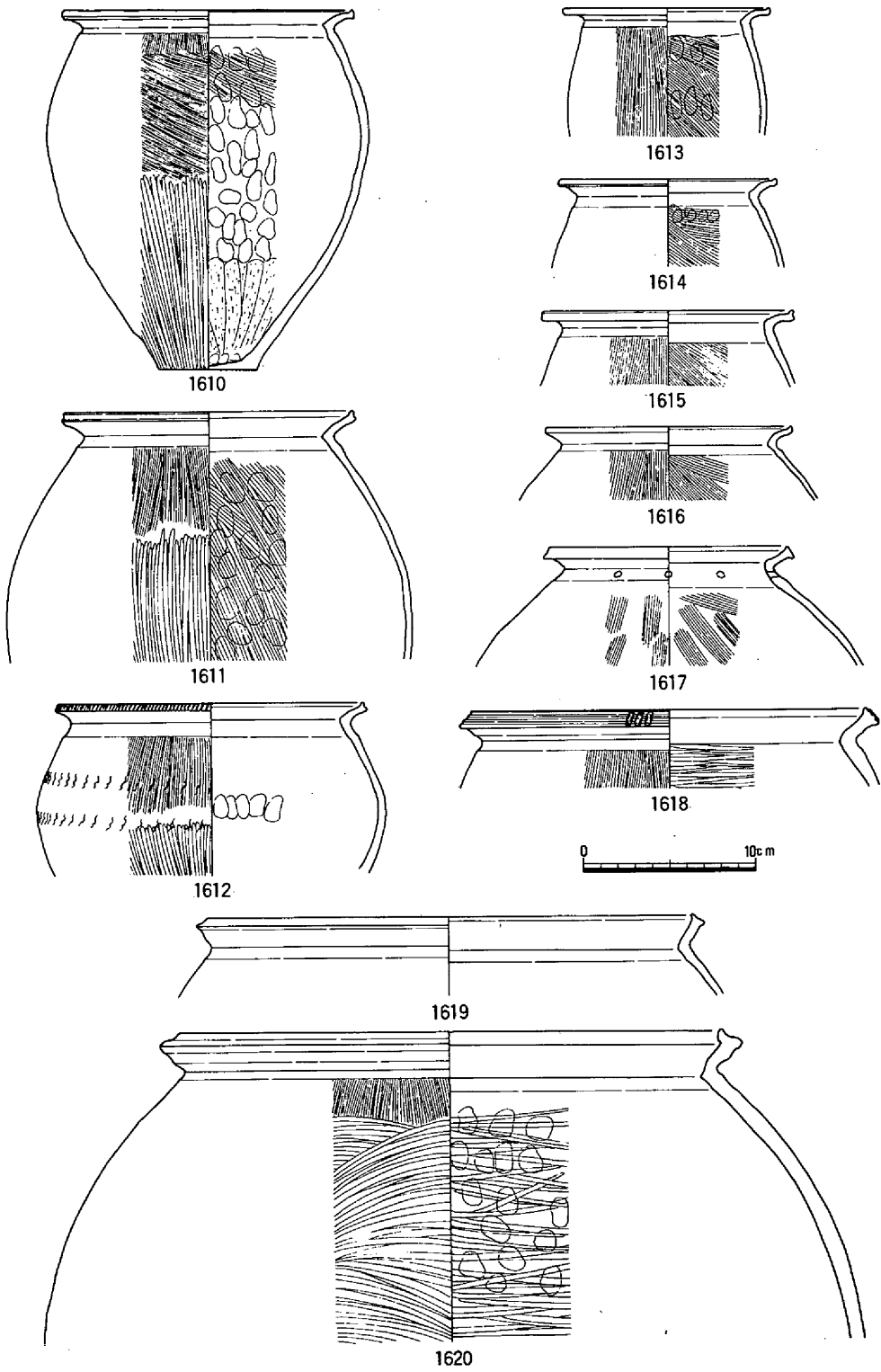
物一28の棟方向に一致している。303-T部分では井戸一12を切っている。南側は、土壇一50, 51の東で一度浅くなって終り、すぐまた20cm程して、やや方向を異にして約5 m南にのびて終っている。検出された溝の幅は、61~100cmを測り、深さは、北に向って深くなっており最も深い所で検出面より20cmを測る。遺物は、第383図や第384図に示したように多量の土器が廃棄されている。土器は大きく3つのブロックに分けることができる。(304-T部分にも土器はある程度まともに出てきているが図示していない。) また、304-T部分及び303-Tの南部分においては、炭・焼土や1~3 mm前後の砂粒(石英・長石など)とともにガ



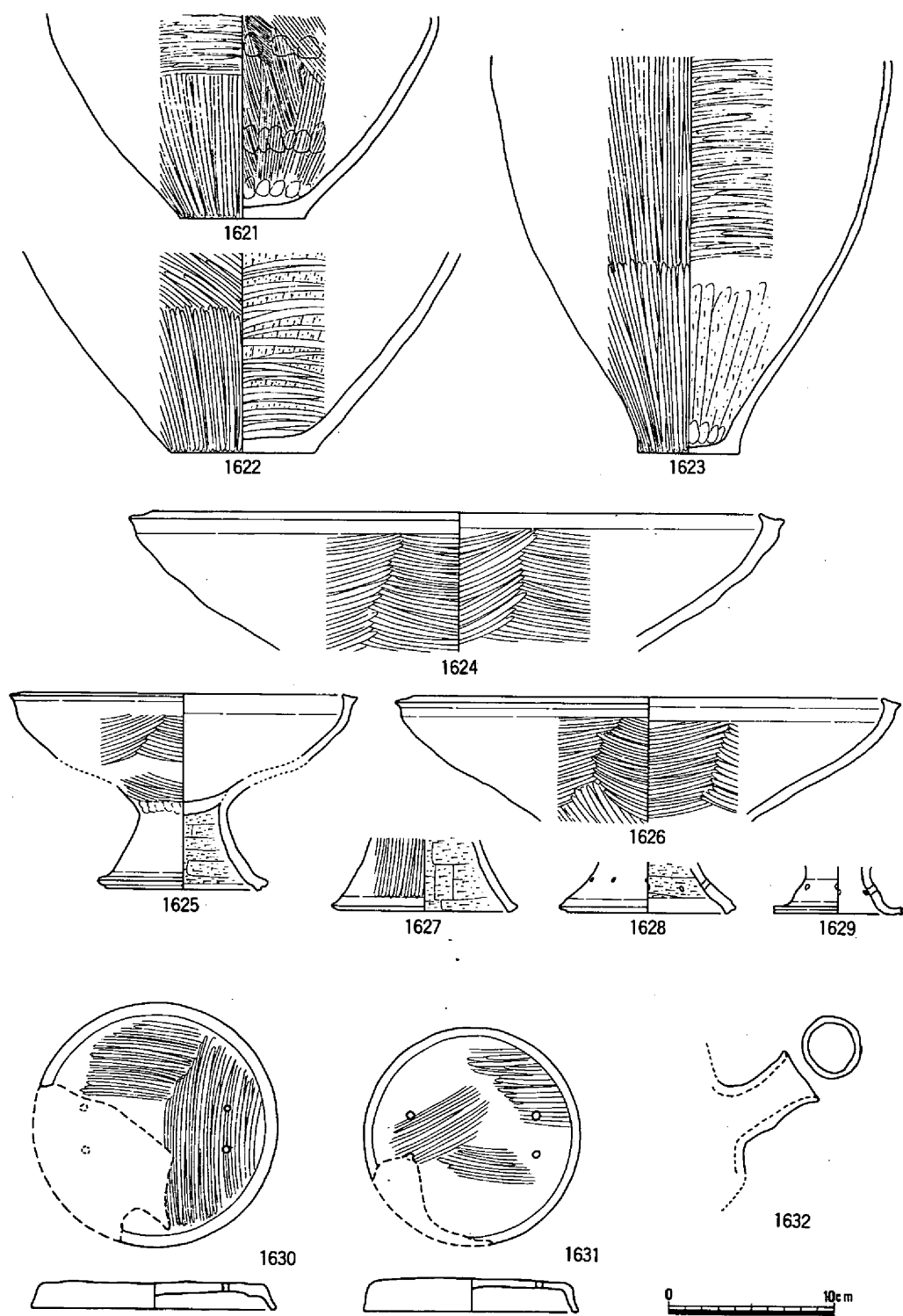
第384図 溝一12 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物 (1) ($\frac{1}{6}$)



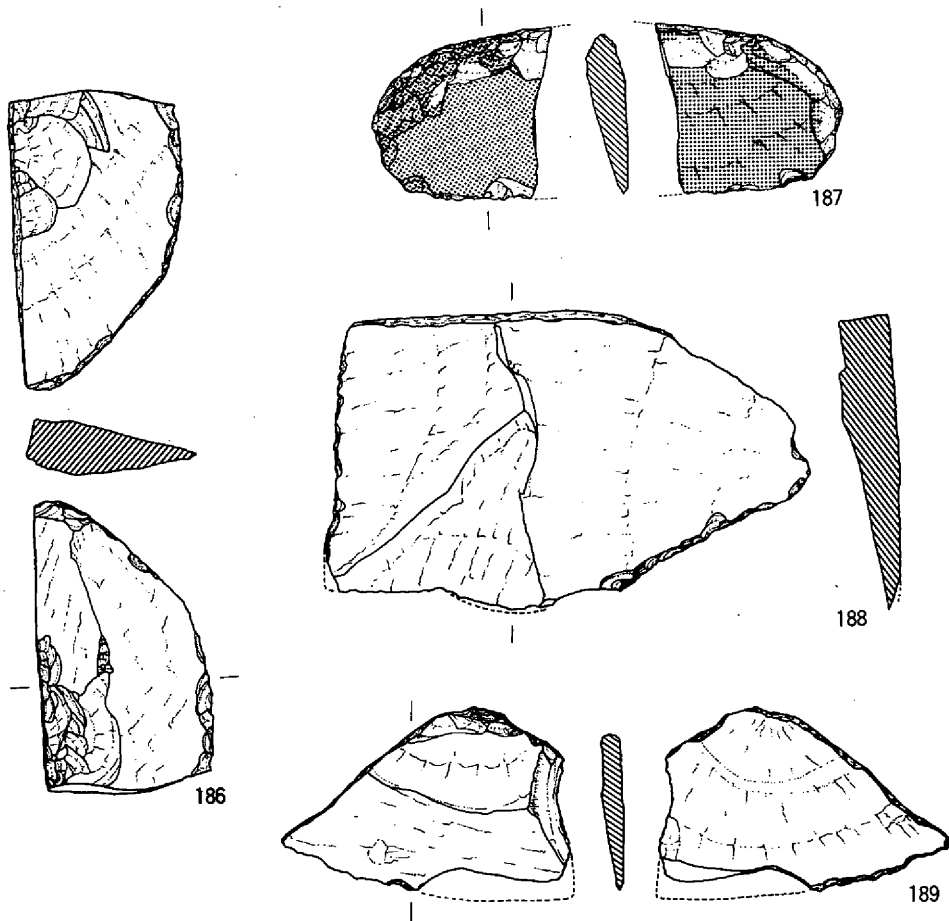
第385図 溝—12出土遺物（2）



第386図 溝—12出土遺物 (3)



第387図 溝—12出土遺物（4）



第388図 溝—12出土遺物 (5) ($\frac{1}{2}$)

ラス滓が、合計 598.4 g 出土している。土器は、壺・甕・高杯・蓋など多量に出土しており、合計で整理箱20箱を数えた。時期は、百・中・Ⅱの新相である。 (平井)

溝—13

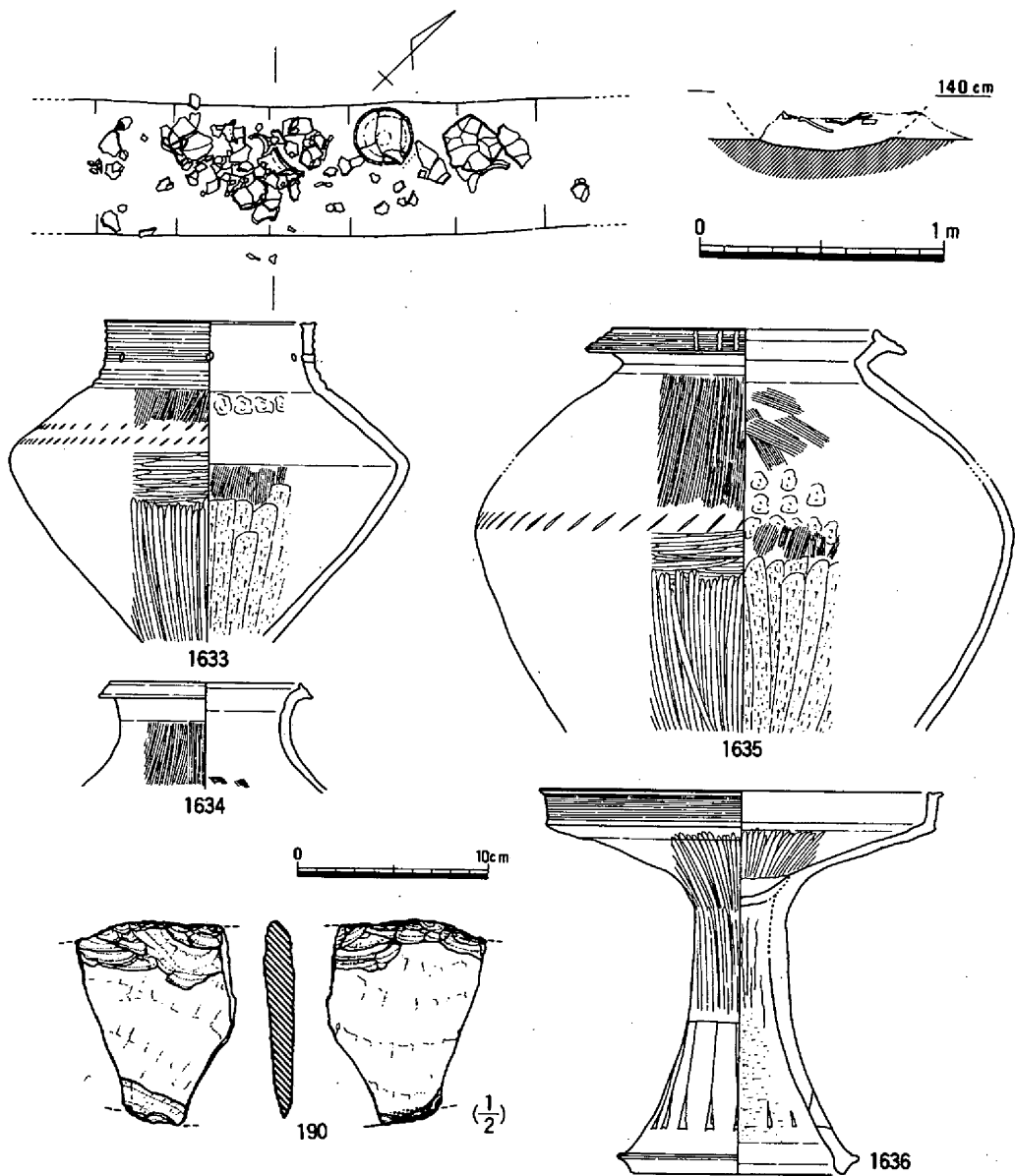
303—Uに位置する。南北方向の細い溝で、南は土壌—58によって切られ、北は調査区外に及んでいる。埋土には土器片・炭を含んでいる。時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。(正岡)

溝—14 (第 389 図)

304—Tの西南端から304—Uの中央部にかけてはほぼ西南から北東に走る溝である。北東部分では土壌—60を切っている。この地域は、調査区全体からみても土壌のグライ化の度合が著しく、遺構検出が困難な条件にあったため、この溝も検出した面は、基盤層の僅かに上層であり、溝の幅・深さについてはこの点を考慮に入れる必要がある。そうしたうえで、検出された溝の幅は、36~75cm、深さは、最大で14cmを測るにすぎない。底のレベルは、海拔118~131cm

百間川今谷遺跡

で地点によって異なっている。埋土は、暗青緑灰色粘土が1層である。遺物は、304—Tにか
かる部分ではほとんど出土していないが、304—Uの南西部分では第389図に示したように底面
から10cm近く浮いた状態で土器が一括出土している。これらの土器は、ほぼ溝の平面形にそっ
て長さ約200cmにわたって出土しており、この溝に伴うものと考えられる。土器は、壺・甕・
高杯があり、いずれも磨滅が著しい。その他にサヌカイト製の石庖丁片が1片出土している。
時期は、百・中・Ⅲの新相で、この溝の北側の建物群や土塋群などとは異なっている。(平井)

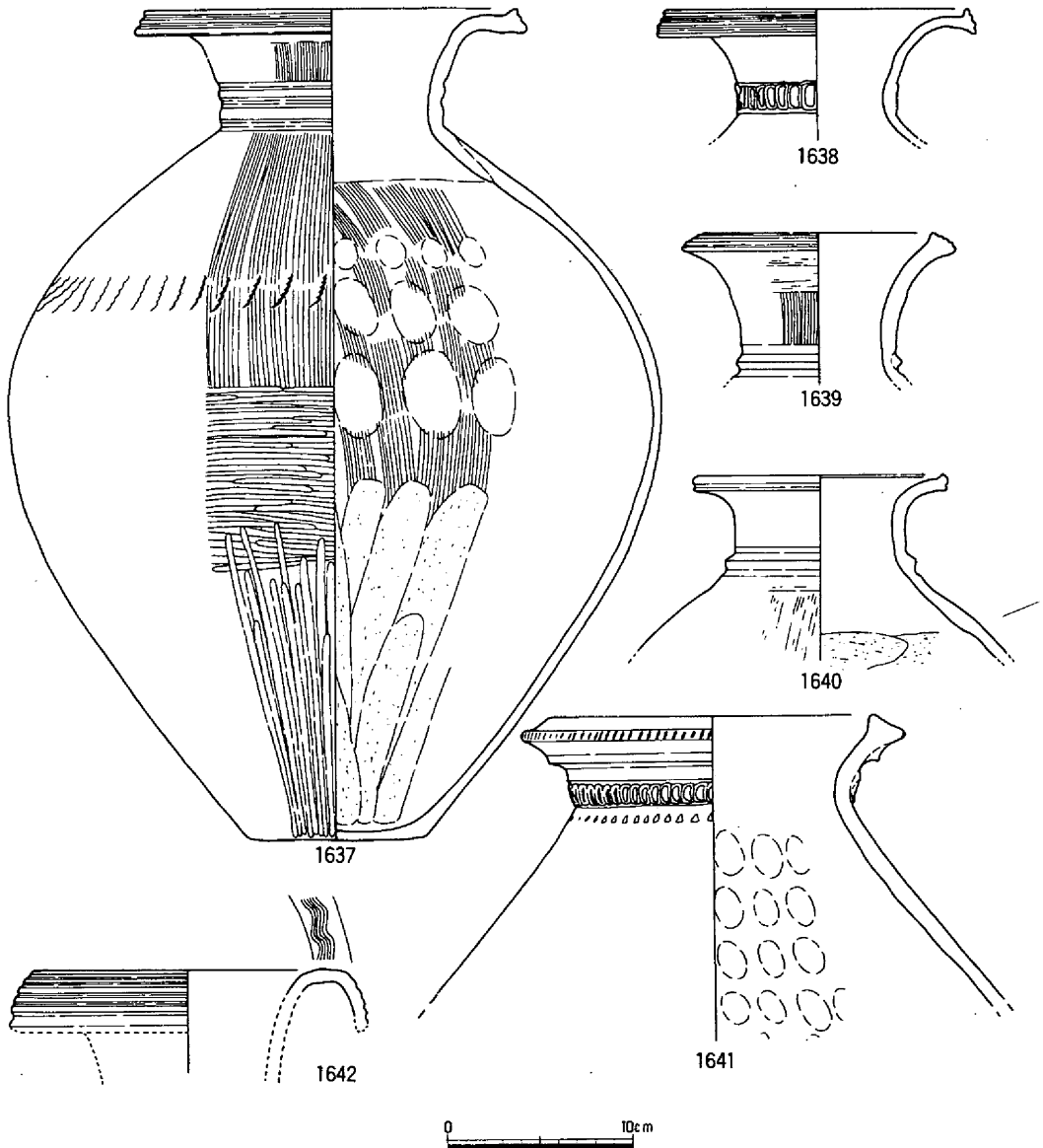


第389図 溝—14 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

(5) 包 含 層 (第390～393図)

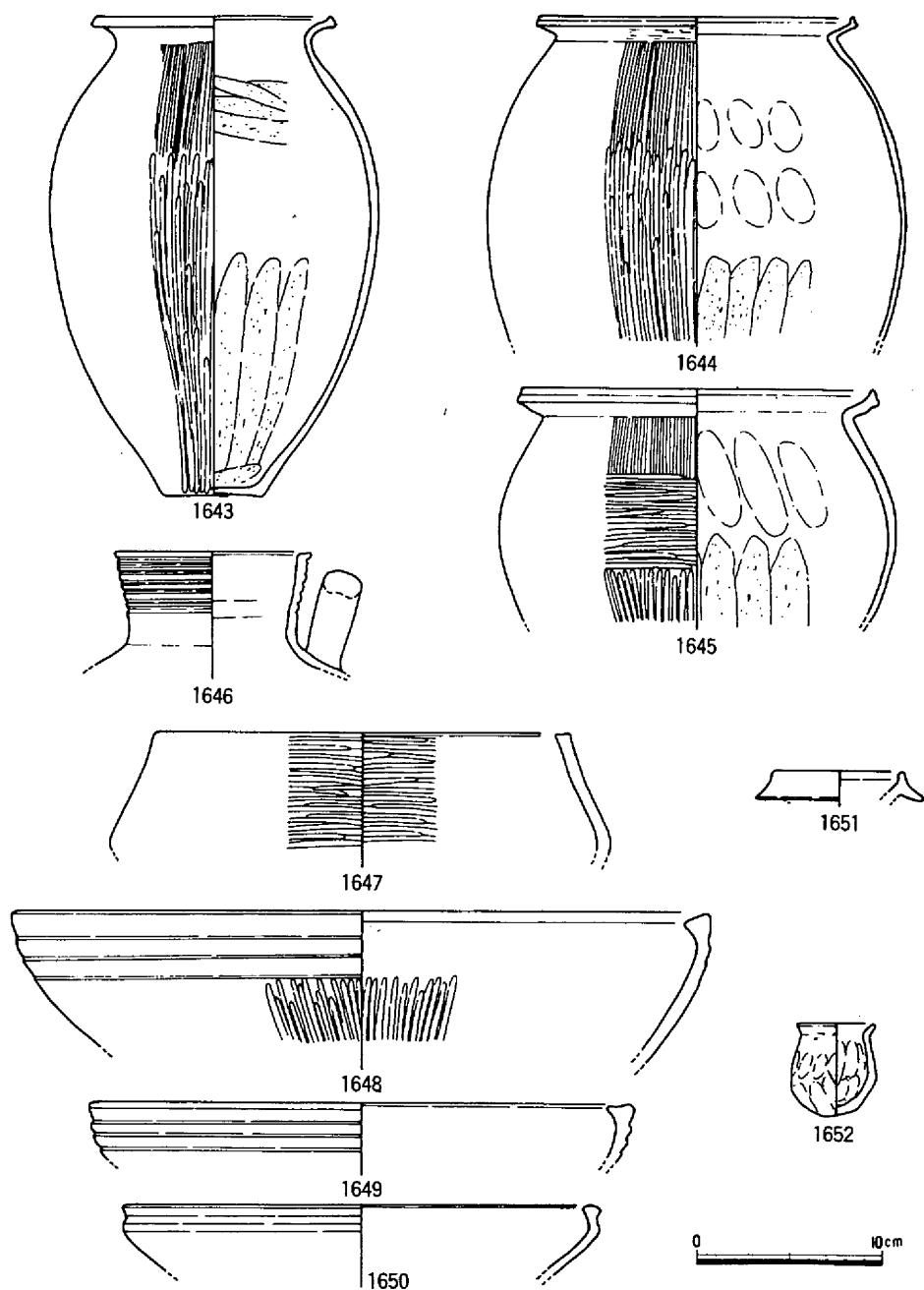
弥生中期の包含層は低水路を中心にひろがっている。径100mくらいの範囲に集中している。建物や土壌の集中する地域と重複している。ほとんどは土器で、時代的にも、建物や土壌の時期と一致している。まとまらない柱穴内出土のものも包含層にまとめた。**1637**は304-Uの柱穴出土したもの、**1641**は303-Tの柱穴から出土したものである。

土器の特徴としては、壺の口唇部に凹線文を施すものがみられ、頸部にも、指頭瓦痕文・断

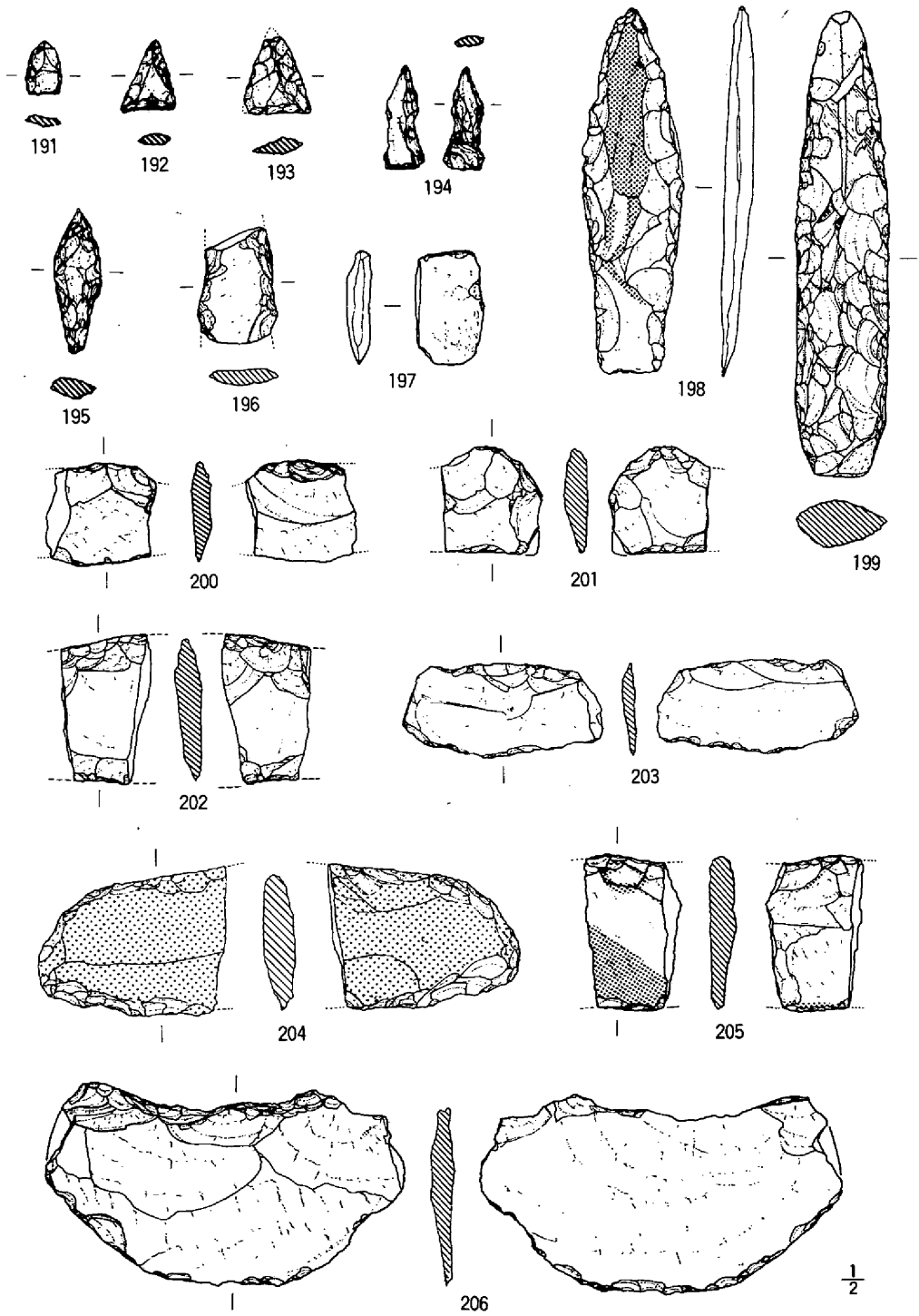


第390図 包含層出土遺物 (1)

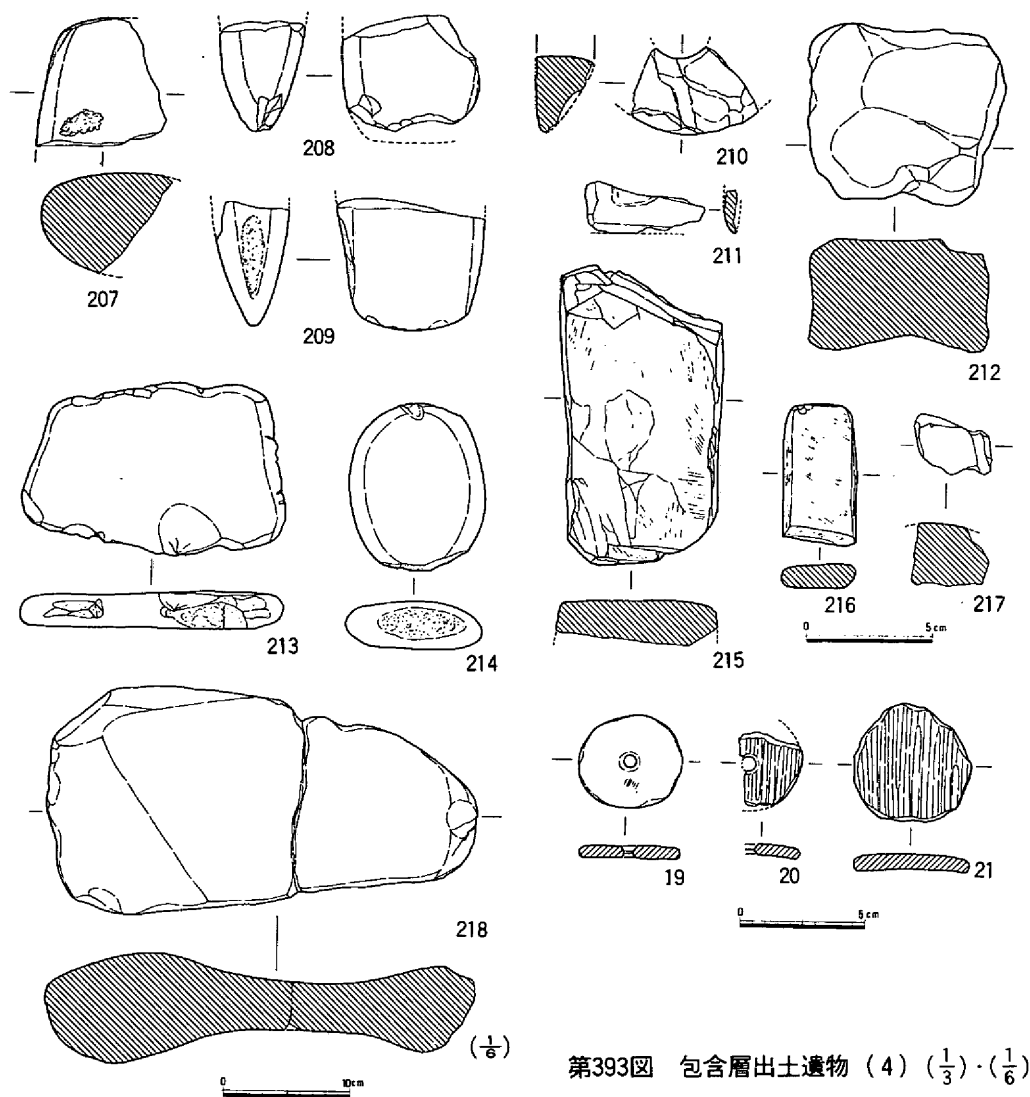
面三角形の凸帯を配するもののほか、凹線文もみられる。甕の口縁部も少し拡張がみられ、胴部下半にヘラケズリを施したものが一般的である。一部には内面上半を横位にヘラケズリを施したものもある。水差し形土器1646は他の土器に比べて少し新しい。高杯では、口縁部に文様のないのが一般的であるが、口縁部多面に凹線文を施すものも出現する。



第391図 包含層出土遺物（2）



第392図 包含層出土遺物 (3)



第393図 包含層出土遺物 (4) ($\frac{1}{3}$)・($\frac{1}{6}$)

包含層中には石器もある。207～209は太型蛤刃石斧で破損後敲石として使用している。210は環状石斧の破片である。表面はほとんど剝離している。211は磨製石庖丁の破片とみられるが、小破片のため詳細はわからない。212・215～218は砥石である。各面を使用している。218は大型の砥石で、長さ33.6cmあり、湾曲した使用面が両面にある。213・214は敲石である。

紡錘車が3点出土している。いずれも土器片転用のものである。19は完形品で、長径4.1cm、7.8gを測る。20は半欠品である。21は円形に加工されているが、穿孔されていない未製品である。以上の3点の時期は、百・中・Ⅱの新相に属する。

(正岡)

表-29 弥生時代中期土器観察表

標図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
包含層 (第243図)									
1091	壺形土器?	—	8.6	—		黄 橙 色	砂 粒 多	良 好	
堅穴式住居 - 1 (第247図)									
1092	壺形土器	13.2	5.2	29.8	・ 胴部内面は中位に押圧痕。	暗 茶 褐色	細 砂 粒	良 好	
建物 - 1・2 (第254図)									
1093	鉢形土器	8.8	—	—	・ 内外面ともハケメ後にナデ。	暗 褐 灰色	砂 粒	良 好	
1094	壺形土器	—	7.3	—	・ 外面は粗いヘラミガキ。	淡 灰 褐色	細 砂	"	・ 煤付着。
1095	"	—	4.7	—	・ 胴部下端に横位のナデ。	淡 赤 灰色	"	普 通	
1096	高杯形土器	22.5	—	—	・ 口縁部内外面とも横位のナデ。	淡 灰 褐色	"	良 好	
1097	"	—	—	—	・ 円盤充填。	褐 白 灰色	微 砂	"	
1098	"	—	—	—	・ 外面ヘラミガキ。	淡 灰 褐色	砂 粒	"	
建物 - 3・4 (第257図)									
1099	壺形土器	30.0	—	—	・ 口縁部内外面とも横位のナデ。	淡 褐 灰色	微 砂	良 好	
1100	"	—	—	—	・ 内外面とも横位のナデ。	淡 褐 褐色	砂 粒	普 通	
1101	"	18.2	—	—		淡 褐 灰色	"	"	・ 剥落顕著。
1102	壺形土器	15.8	—	—	・ 頸部外面に縦方向の調整。	淡 黄 褐色	"	"	
1103	"	—	—	—	・ 内外面ともナデ。	灰 白 色	細 砂	良 好	
1104	"	—	—	—		淡 灰 黄色	砂 粒	"	
1105	壺形土器	11.2	—	—		灰 褐 色	"	普 通	
1106	鉢形土器	—	2.7	—	・ 内外面ともヘラケズリ後にナデ。	淡 赤 灰色	細 砂	"	
1107	壺形土器	—	11.7	—		灰 褐 色	砂 粒	良 好	
1108	高杯形土器	—	—	—	・ 円盤充填。	淡 褐 灰色	細 砂	"	
1109	"	—	10.6	—	・ 外面ナデ後に部分的にヘラミガキ。	暗 灰 色	砂 粒	"	
建物 - 5 (第259図)									
1110	壺形土器	19.0	—	—		灰 白 色	細 砂 粒	良 好	
1111	壺形土器	13.0	—	—		"	"	"	・ 外面煤付着。
1112	壺形土器	—	8.4	—	・ 底部外面ユビナデ。	"	"	"	・ 外面に黒斑。
1113	壺形土器	—	11.4	—		"	"	"	
建物 - 6 (第261図)									
1114	壺形土器	35.0	—	—		灰 白 色	細 砂 粒	良 好	
建物 - 12 (第267図)									
1115	壺形土器	16.1	—	—		淡 灰 黄色	小 石 粒	やや不良	・ 器面剝離。
1116	"	14.9	—	—	・ 外面ヘラミガキ。	灰 黄 色	"	普 通	
1117	壺形土器	13.4	—	—	・ "	淡 灰 黄色	微 砂	"	・ 外面煤付着。
1118	"	35.0	—	—	・ 外面ヘラミガキ。内面ハケメ。	黄 灰 色	小 石 粒	"	
1119	"	21.0	—	—	・ 口縁部端面に凹線文。	黄 橙 色	微 砂	"	
1120	"	—	11.6	—	・ 内面はヘラケズリのあとヘラミガキ。	"	"	"	
1121	"	—	6.4	—		"	"	"	
1122	"	—	9.8	—	・ 外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	淡 灰 褐色	"	"	
1123	水差し土器	8.6	—	—	・ 外面ハケ。内面ナデ。	淡 黄 褐色	"	"	
建物 - 16 (第271図)									
1124	壺形土器	16.0	—	—		灰 白 色	細 砂 粒	良 好	
1125	鉢形土器	10.2	6.0	14.2		"	"	"	・ 完形に復原。
1126	壺形土器	8.8	—	—		"	"	"	
1127	合付鉢形土器	—	5.0	—		灰 褐 色	"	"	
1128	壺形土器	—	5.8	—		"	"	"	
1129	"	—	13.6	—		淡 黄 褐色	"	"	・ 煤付着。
1130	"	15.8	6.5	31.0	・ 外面ハケメのあとヘラミガキ。内面のハケメはうすい。	灰 白 色	"	"	
1131	"	15.0	—	—		にぶい黄橙色	"	"	
1132	高杯形土器	23.0	—	—		灰 白 色	"	"	
1133	"	30.2	—	—	・ 外面に凹線文あり。	"	"	"	
建物 - 17 (第273図)									
1134	壺形土器	12.3	5.3	26.3	・ 外面ハケメのあとヘラミガキ。	灰 白 色	細 砂 粒	良 好	・ 煤付着。
1135	鉢形土器	18.6	—	—		"	細 砂 粒	"	
建物 - 22 (第279図)									
1136	壺形土器	18.0	7.8	29.0	・ 口縁端部にハケメ工具による浅い沈線。	にぶい黄橙色	細 砂 粒	良 好	・ 完存。黒斑。
1137	"	19.6	—	—		灰 白 色	"	"	

百間川今谷遺跡

挿図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		底径	器高	口径					
1138	高杯形土器	17.0	—	—		灰 白 色	細 砂 粒	良 好	・黒斑。
建物-23 (第280図)									
1139	壺形土器	12.0	—	—		灰 白 色	細 砂 粒	良 好	
1140	甕形土器	15.5	—	—		にぶい黄褐色	"	"	・煤付着。
1141	"	—	5.0	—		"	"	"	
1142	"	—	7.2	—		"	細砂粒多	"	
建物-25 (第283図)									
1143 1145	甕形土器	—	—	—		灰 白 色	細 砂 粒	良 好	
1146	"	—	—	—		灰黄褐色	"	"	
1147	壺形土器	—	—	—		にぶい褐色	"	"	
建物-26 (第284図)									
1148	甕形土器	13.6	—	—		灰 褐色	細 砂 粒	良 好	
1149	"	14.0	—	—		にぶい褐色	"	"	
1150	鉢形土器	10.0	—	—		"	"	"	
1151	甕形土器	11.0	4.7	16.1	・口縁の屈曲部が小さい。	褐 灰 色	"	"	
建物-28 (第287図)									
1152	壺形土器	16.5	—	—	・内外面ハケメ、頸部に指頭圧痕文凸帯。	茶 灰 色	微 砂	普 通	
1153	甕形土器	37.7	—	—	・外面ヘラミガキ、内面ハケメヘラミガキ。	暗 灰 褐色	"	"	・煤付着。
1154	"	16.6	—	—		淡 灰 黄色	"	や 不 良	・外面煤付着。
1155	高杯形土器	23.3	—	—	・杯部内外面ヘラミガキ。	灰 桃 色	"	普 通	
1156	"	—	8.3	—	・脚部片、内面ヘラケズリ。	灰 黄 色	"	"	
井戸-1 (第288・289図)									
1157	壺形土器	15.5	6.8	26.8	・口縁部端面に凹線文。	淡茶灰褐色	微 砂	良 好	
1158	甕形土器	30.2	—	—	・外面はハケメののちヘラミガキ。	灰 褐 色	"	"	
1159	"	31.0	—	—	・内外面ともヘラミガキ。	暗 灰 褐色	"	"	
1160	壺形土器	17.0	—	—	・頸部に凹線文。	淡 茶 褐色	"	"	
1161	"	—	—	—	・頸部に断面三角形凸帯。	灰 褐 色	"	"	
1162	甕形土器	14.8	5.2	27.0	・外面はハケメののちヘラミガキ。	暗 灰 褐色	"	"	
1163	"	15.6	5.6	28.0	・内面上部をヘラミガキ、下部をヘラケズリ。	"	"	"	
1164	"	14.2	—	—	・内面はヘラミガキ、ナデ。	灰 褐 色	"	"	
1165	"	13.2	—	—	・内面はハケメ。	淡 褐 色	"	"	
1166	"	18.0	—	—	・口縁部端面に凹線文。	淡 茶 褐色	"	"	
1167	"	20.8	—	—	・内面はハケメののちヘラミガキ。	灰 褐 色	"	"	
1168	高杯形土器 合付鉢形土器	20.5	—	—	・内外面ともヘラミガキ。	淡 灰 褐色	"	"	
1169	"	—	9.2	—	・外面はヘラミガキ。	乳 白 色	"	"	
井戸-3 (第292図)									
1170	甕形土器	22.0	—	—	・口縁部と胴部上端ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ナデ。	淡 褐 色	微 砂	良 好	
1171	"	16.0	—	—	・胴部内面ヘラミガキ。	暗 褐 色	"	普 通	・煤付着。
1172	壺形土器	—	6.0	—	・胴部外面ヘラミガキ、内面ハケメ。	暗 茶 褐色	"	"	
井戸-4 (第293図)									
1173	壺形土器	16.8	7.8	28.3	・頸部には指頭圧痕文凸帯。	淡 褐 色	微 砂	良 好	
1174	高杯形土器	21.4	8.4	11.6	・杯部は内外面ともヘラミガキ。	茶 褐 色	"	"	
1175	"	25.2	12.3	14.1	・口縁部は肥厚。	淡 茶 褐色	"	"	
1176	甕形土器	25.8	—	—	・外内面ともヘラミガキ。	"	"	"	・煤付着。
井戸-6 (第295図)									
1177	甕形土器	17.0	—	—	・外面上部ハケメ、中央ヘラケズリ、内面ハケメ調整後粗いヘラミガキ。	内 黄 灰 色 外 茶 灰 色	微 砂	普 通	・外面煤付着。
1178	"	15.0	—	—	・口縁部ヨコナデ。	灰 桃 色	"	"	
1179	"	—	5.2	—	・外面ヘラミガキ。	茶 灰 色	"	"	
1180	"	—	9.0	—	・外面ヘラミガキ。	暗 灰 色	"	"	
井戸-7 (第296図)									
1181	甕形土器	15.6	5.8	32.0		灰 白 色	細 砂	良 好	・黒斑。
1182	"	14.8	5.5	28.3		"	"	"	・煤付着。
1183	"	13.4	5.3	25.8	・底部に焼成後の穿孔。	明 褐 灰 色	微 砂	"	"
1184	高杯形土器	—	7.4	—		灰 色	細 砂	"	・ほぼ完存。
井戸-8 (第297～299図)									
1185	甕形土器	32.2	10.2	62.8		白 灰 色	細 砂	良 好	・黒斑。
1186	壺形土器	11.2	8.2	32.1		"	"	"	"

第4章 第1節 大地調査区

地図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口徑	底徑	器高					
1187	壺形土器	17.0	—	—	・頸部に凹線か。	灰 白 色	細 砂	不 詳	・磨滅。
1188	壺形土器	17.4	6.6	33.5	・底部外面ユビナデ。	"	"	良 好	・煤、黒斑。
1189	"	15.0	—	—		"	"	"	・煤付着。
1190	"	13.8	—	—	・口縁端部にヘラ状工具による刻み目。	"	"	"	"
1191	"	16.6	—	—	・胸部外面はハケメか。	"	"	"	"
1192	"	16.2	5.4	30.4		"	"	"	・黒斑。
1193	"	17.4	—	—		"	"	"	・煤付着。
1194	"	15.8	—	—		"	"	"	"
1195	"	13.4	—	—		"	"	"	"
1196	"	9.4	5.4	18.0		灰 赤 色	"	不 詳	
1197	"	13.0	—	—	・口縁端部に2条の細い沈線。	灰 白 色	"	良 好	・煤、黒斑。
1198	"	14.6	—	—		"	"	"	・煤付着。
1199	壺形土器	16.0	—	—	・内面ヘラミガキ。	"	"	"	
1200	壺形土器	—	6.8	—	・底部周辺ヨコナデ。底部外面ユビナデ。	"	"	"	
1201	"	—	4.6	—		"	"	"	・内外面煤。
1202	"	—	8.2	—	・底部外面細かいヘラミガキ。	"	"	"	・黒斑。
1203	高杯形土器	23.0	—	—		"	"	"	"
1204	"	—	10.0	—	・脚部部に1条の凹線。	"	"	"	"
1205	"	—	9.0	—	・脚部部に2条の凹線。	"	"	"	"
1206	"	—	12.6	—		"	"	"	"
井戸 - 9 (第300図)									
1207	壺形土器	10.2	—	—	・外面ハケメ、下半ヘラミガキ。内面下半ヘラケズリ。	外縁黄褐色 内縁灰色	微 砂	普 通	・外面丹塗り。
1208	"	8.8	—	—		淡黄灰色	"	不 良	・器面剝離。
1209	"	15.5	—	—	・頸部ヨコナデ、体部外面ハケメ。	灰 黄 色	細 砂	良 好	
1210	"	13.8	—	—	・頸部外面ヘラミガキ。	淡灰茶色	"	"	
1211	壺形土器	—	8.7	—		淡灰黄色	微 砂	不 良	・器面剝離。
1212	"	—	6.1	—	・外面ヘラミガキ、内面、指ナデ。	暗灰茶色	"	良 好	
1213	"	—	5.7	—	・外面ヘラミガキ。	茶 灰 色	"	"	
1214	高杯形土器	19.2	—	—	・口縁部ヨコナデ、杯部ヘラミガキ。	暗茶褐色	"	"	
1215	"	—	8.0	—	・脚部外面ハケメ。	暗黄褐色	"	普 通	
井戸 - 10 (第301図)									
1216	壺形土器	23.2	—	—	・外面ハケメ後ヘラミガキ、内面ハケメ。	茶 灰 色	微 砂	良 好	・煤付着。
1217	高杯形土器	24.4	—	—	・杯部ヘラミガキ。	暗 灰 色	"	"	・丹の付着。
1218	"	12.0	—	—		暗茶灰色	"	普 通	
井戸 - 11 (第301図)									
1219	壺形土器	14.8	—	—	・胸部外面は粗いハケメか。	暗茶灰色	微 砂	良 好	・外面煤付着。
1220	"	14.6	—	—	・胸部外面はハケメ。	"	"	"	"
井戸 - 12 (第302・303図)									
1221	高杯形土器	15.6	—	—		明褐色	微 砂	良 好	
1222	"	14.2	—	—		灰 白 色	細 砂	"	・小片。
1223	"	—	8.2	—		明褐色	"	"	
1224	"	—	7.6	—	・脚柱部外面に3本のヘラ描き沈線。	灰 褐 色	"	"	
1225	"	—	9.2	—		灰 白 色	"	"	
1226	"	—	8.6	—		褐 灰 色	"	"	
1227	壺形土器	19.8	—	—	・口縁端部にヘラ状工具による刻み目。口縁部内面に半截竹管による斜格子文及びヘラ状工具によって刻み目を施した2条の凸帯。頸部に2孔1対の組孔。	灰 白 色	"	"	
1228	"	15.6	—	—		褐 灰 色	"	"	
1229	"	16.6	—	—	・頸部に凹線。	"	"	"	
1230	"	14.8	—	—	・口縁端部にヘラ状工具による刻み目。	灰 白 色	"	"	
1231	壺形土器	12.8	—	—		"	微 砂	"	
1232	"	14.2	—	—	・頸部内面にヘラ状工具による沈線。	明褐色	細 砂	"	
1233	"	15.0	—	—	・口縁内面に粗いハケメ。	灰 白 色	"	"	
1234	"	20.6	—	—	・内面に粗いハケメ。	褐 灰 色	"	"	
1235	"	22.0	—	—		"	"	"	・外面煤付着。
1236	"	34.6	—	—		灰 白 色	"	"	・1237と同一個体か。
1237	"	—	12.4	—	・底部外面ユビナデ、内面ヘラケズリののちユビナデ。	明褐色	"	"	
1238	"	—	6.0	—	・底部外面ユビナデ。	灰 白 色	"	"	・外面煤付着。
1239	"	—	5.8	—		灰 赤 色	"	"	"
1240	"	—	6.8	—		灰 白 色	"	"	"
井戸 - 13 (第305図)									
1241	壺形土器	15.5	—	—	・頸部ヨコナデ、外面一部ヘラ調整。	暗灰褐色	微 砂	良 好	

百間川今谷遺跡

挿図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口徑	底徑	器高					
1242	壺形土器	15.8	—	—	。頸部ヨコナデ。	暗茶灰色	微 砂	良 好	。外面煤付着。
1243	"	13.9	7.4	30.5	。外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	淡黄灰色	"	普 通	。煤付着。
1244	"	9.5	—	—	。内面ヘラミガキ。	淡黄褐色	小 石 粒	や不良	。胴部煤付着。
1245	"	15.6	—	—	。頸部から肩部ヘラミガキ。	淡白桃色	微 砂	"	。器面剝離。
1246	"	9.4	—	—	。外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	淡灰茶色	"	"	
1247	壺形土器	14.9	—	—	。外面ハケメ。	灰 褐 色	"	普 通	
1248	"	13.7	—	—	。外面ハケメ。	赤 褐 色	"	"	。内面煤付着。
1249	"	19.6	—	—	。外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	暗茶褐色	"	良 好	
1250	"	13.5	—	—	。外面下半ハケメ、下半ヘラミガキ、内面上半ナデ、下半ヘラケズリ。	赤 褐 色	"	"	。外面煤付着。
1251	"	15.8	—	—	。外面ヘラミガキ。	淡桃灰色	"	普 通	。口縁煤付着。
1252	鉢形土器	14.0	—	—	。外面ハケメ、内面ナデ。	赤 褐 色	"	"	
1253	壺形土器	—	5.0	—	。外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	暗灰褐色	小 石 粒	"	
1254	壺形土器	—	7.2	—	。外面上半ハケ、下半ヘラミガキ、内面ナデ。	暗赤褐色	微 砂	"	。外面煤付着。
1255	"	—	6.2	—	。外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	赤 褐 色	"	"	"
1256	"	—	5.3	—	"	暗茶灰色	"	良 好	。煤付着。
井戸 - 14 (第306図)									
1257	壺形土器	—	4.9	—	。外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	暗灰褐色	微 砂	普 通	。外面煤付着。
1258	"	—	6.4	—	"	灰 桃 色	"	"	。 "
土 壙 - 1 (第307図)									
1259	壺形土器	17.3	5.7	28.8	。胴部内面は中位下半に押圧痕。	暗茶褐色	細 砂	良 好	。焼成後穿孔。
1260	高杯形土器	20.3	9.3	11.0		淡灰白色	"	"	。外面風化。
1261	鉢形土器	17.1	6.0	11.8	。口縁部はヨコナデ。	暗 灰 色	"	"	。底部欠損。
土 壙 - 2 (第308図)									
1262	壺形土器	16.2	—	—		淡乳白色	微 砂	良 好	
1263	壺形土器	15.6	5.5	29.5		茶 褐 色	"	"	。完形、焼成後穿孔。
1264	壺形土器	—	8.5	—		淡灰白色	細 砂	"	
土 壙 - 3 (第309～311図)									
1265	高杯形土器	13.0	9.0	20.0	。円盤充填。 。杯部内面上半、杯部外面上端は横位のナデ。	淡褐灰色	細 砂	良 好	
1266	"	20.6	—	—	。円盤充填。 。杯部内面はハケメのちヘラミガキ。	灰 橙 色	"	"	
1267	"	—	—	—	。円盤充填。	淡褐灰色	"	"	
1268	"	—	15.8	—	。外面は横位のナデ。	淡黄灰色	砂 粒	普 通	。剝落顕著。
1269	壺形土器	11.8	—	—	。頸部外面に2列の強い横位のナデ。 。内面は横位のナデ。	淡灰褐色	"	"	
1270	"	14.6	—	—	。頸部外面は縦方向ハケメ後に凹線。 。肩部内面は指頭によるオサエとナデ。	褐 灰 色	"	良 好	
1271	"	—	—	—	。肩部内面はオサエ・ナデ後にハケメ。	淡黄褐色	細 砂	普 通	。肩部外面は剝落顕著
1272	"	17.8	—	—	。頸部上半はハケメ後に横位のナデ。	灰 橙 色	"	"	
1273	"	16.8	—	—	。内外面ともナデ。	淡褐灰色	"	"	
1274	"	13.0	—	—		淡橙灰色	砂 粒	"	。剝落顕著。
1275	"	—	—	—	。内外面ともナデ。	灰 白 色	"	"	
1276	壺形土器	23.8	—	—	。内面、口縁部、頸部外面ナデ。	淡黄灰色	微 砂	"	
1277	"	10.4	—	—	。透し孔4孔は外面から穿孔。	淡褐灰色	細 砂	"	
1278	"	14.4	—	—	"	淡黄褐色	砂 粒	"	
1279	"	12.2	—	—	。頸部外面の一部に刻み。	灰 褐 色	細 砂	"	
1280	"	13.0	—	—	。内面、口縁部外面ナデ。	淡褐灰色	砂 粒	"	。外面煤付着。
1281	"	14.8	—	—	。胴部外面は縦方向のヘラミガキ。	淡黄褐色	"	"	。剝落顕著。
1282	"	18.2	—	—	。内外面ともナデ。	灰 白 色	細 砂	"	
1283	"	23.2	8.4	43.5	。胴部外面上半は粗いハケメ、胴部内面上半は細かいハケメ。	淡褐灰色	"	良 好	
1284	"	24.0	—	—	。肩部外面は粗いハケメ、肩部内面は細かいハケメ。	"	"	"	。外面煤付着。
1285	"	22.0	10.6	53.0	。内面上半・肩部外面は細かいハケメ、胴部上半は粗いハケメ。	"	"	"	"
1286	"	16.0	—	—	。肩部外面ハケメ。	淡黄灰色	砂 粒	普 通	。剝落顕著。
1287	"	24.2	—	—		淡褐灰色	細 砂	良 好	
1288	"	25.0	—	—		褐 灰 色	砂 粒	"	
1289	"	22.4	—	—	。胴部内面は指頭によるオサエ。	淡褐灰色	"	普 通	。剝落顕著。
1290	"	21.6	—	—	。胴部外面は剝落のため不明瞭。	"	細 砂	良 好	。煤付着。
1291	"	11.7	—	—		灰 白 色	砂 粒	"	。外面剝落。
1292	"	—	3.8	—		淡褐灰色	"	普 通	
1293	"	—	8.3	—		灰 白 色	"	"	
1294	"	—	6.8	—		"	"	"	
土 壙 - 4 (第312図)									
1295	壺形土器	21.4	—	—		灰 褐 色	細 砂 粒	良 好	。外面煤付着。

第4章 第1節 大地調査区

標図番号	器 種	法 尺 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
土 壌 - 8 (第315図)									
1296	甕形土器	34.4	—	—		灰 白 色	細 砂 粒	良 好	
土 壌 - 9 (第316図)									
1297	壺形土器	15.0	—	—		灰 白 色	細 砂 粒	不 詳	・磨減。
土 壌 - 10 (第317図)									
1298	壺形土器	16.5	—	—	・口縁端面に3条の凹線文。 ・頸部下端に指頭庄痕文凸帯。 ・胴中央にヘラ刺突文。 ・口縁部ヨコナデ。頸部外面ハケメ、内面ナデ。 ・胴部外面上半ハケメ、下半ヘラミガキ。 ・内面上半ナデ、下半ハケメ。	外淡灰褐色 内暗褐色	細 砂	良 好	・口縁上端部を欠く約1/3の破片。
1299	甕形土器	26.0	—	—	・口縁部ヨコナデ。胴部両面ハケメ。	暗 褐 色	微 砂	普 通	・破片。
1300	"	—	5.4	—	・胴部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	淡 褐 色	細 砂	"	・底部のみ。
1301	高杯形土器	23.6	—	—	・口縁部ヨコナデ。杯部ヘラミガキ。	赤 褐 色	微 砂	"	・杯部のみ。
土 壌 - 12 (第318図)									
1302	壺形土器	16.0	—	—	・凹線文上に円形浮文を2個1対で数対。 ・頸部下端外面に指頭庄痕文凸帯。 ・口縁部ヨコナデ。頸部外面ハケメ、内面ヘラミガキ。胴部上半両面ハケメ。	黄 土 色	微 砂	良 好	・口頸部の約1/2現存。
1303	甕形土器	17.0	—	—	・口縁部両面ヨコナデ。	淡 黄 土 色	"	普 通	・口縁破片。
1304	"	—	4.8	—	・胴部外面ヘラミガキ、内面ナデ。	黒 褐 色	"	良 好	・底部破片。
1305	台付鉢形土器	—	5.2	—	・胴部外面ヘラミガキ、内面ナデ。	"	"	"	・炭化物付着。
1306	高杯形土器	16.6	7.4	8.8	・脚外面に竹管文を9個。 ・口縁部ヨコナデ。杯部ヘラミガキ。脚部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	黄 土 色	細 砂	やや良 好	・ほぼ完形。
土 壌 - 13 (第319図)									
1307	壺形土器	12.2	—	—	・口縁部ヨコナデ。頸部内面ナデ。	淡 灰 褐 色	微 砂	普 通	・破片。
1308	甕形土器	15.0	—	—	・口縁部と胴部上端ヨコナデ。胴部外面ハケメ、内面ナデ。	外 黒 褐 色 内暗茶褐色	"	"	"
1309	台付鉢形土器	—	6.5	—	・胴部外面ヘラミガキ、内面ナデ。脚部両面ヨコナデ。	外暗茶褐色 内 黒 褐 色	"	やや良	・脚台の完存。
1310	高杯形土器	21.0	11.0	15.5	・脚部の円孔は5個。 ・口縁部ヨコナデ。杯部ヘラミガキ。脚外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。脚端部ヨコナデ。	外暗茶褐色 内暗褐色	"	良 好	・ほぼ完形。
土 壌 - 14 (第320図)									
1311	甕形土器	13.5	5.5	27.0		淡 茶 褐 色	微 砂	良 好	・焼成後底部穿孔。
土 壌 - 16 (第322図)									
1312	甕形土器	22.0	—	—	・口縁部～体部上端は内外ともヨコナデ。 ・胴部外面上半ハケメ、下半ヘラミガキ。 ・胴部内面ハケメののち、一部にヘラミガキ。	外淡茶褐色 内淡黄褐色	微 砂	普 通	・上半分が完存。
1313	"	22.0	—	—	・器壁が少し薄く、口縁部が少し長い。	暗 褐 色	"	良 好	・破片。
1314	"	—	8.0	—	・外面上半ハケメ、下半ヘラケズリ。	"	細 砂	"	・内面炭化物着付。
1315	"	18.0	—	—	・口縁端面に深い沈線文。 ・胴部内面ともハケメ。	暗 茶 褐 色	微 砂	普 通	・破片。
1316	"	18.0	7.4	19.5	・胴部外面上方細いハケメ、下方ヘラミガキ。 ・内面は上方ナデ、下方ヘラケズリ。	外 茶 褐 色 内淡灰褐色	"	"	・約1/4現存。 ・煤付着。
1317	鉢形土器	19.0	6.8	15.5	・胴部外面上方不明、下方ヘラミガキ。 ・胴内面上方ナデ、下方ヘラケズリ。	外暗褐色 内 黒 褐 色	"	不 良	・約1/2現存。
1318	高杯形土器	—	10.0	—	・杯底部は内無充填。 ・内面不明、外面ヘラミガキ。	淡 茶 褐 色	細 砂	やや良 好	・脚部完存。
1319	"	26.0	—	—	・口縁部端面上ハケナデ。 ・杯部両面ヘラミガキ。	外赤茶褐色 内 茶 褐 色	"	普 通	・破片。
土 壌 - 17 (第323図)									
1320	壺形土器	—	8.0	—	・頸部下端に凹線文。 ・胴部上方に2段にクシの連続刺突文。 ・胴部外面上方ハケメ、以下ヘラミガキ。 ・胴部内面ハケメ、上方指圧痕多い。	外淡茶褐色 内暗灰褐色	微 砂	普 通	・口縁部欠ける。
1321	蓋形土器	—	9.5	3.4	・つまみはナデ。 ・胴部細いハケメ。	外 淡 褐 色 内暗褐色	"	良 好	・完形品。
1322	水差形土器	6.4	7.0	15.0	・口縁部外面ヘラミガキ、内面ヨコナデ。 ・胴部内面上半ヨコナデ、下半粗いハケメ。 ・胴部外面ヘラミガキ。 ・脚部内面上方ヘラケズリ、下端ヨコナデ。 ・脚部外面ヨコナデ、ヘラ掘き沈線文は螺旋。	淡黄灰褐色	"	"	・復原完形、黒底。
1323	甕形土器	30.0	—	—	・口縁部ヨコナデ。 ・屈曲部外面に指頭庄痕文凸帯を貼り付け。 ・胴部外面ヘラミガキ、内面ハケメ後ヘラミガキ。	外淡灰褐色 内 淡 褐 色	"	普 通	・破片。

百間川今谷遺跡

挿図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
1324	甕形土器	24.5	—	—	・口縁部ヨコナデ。 ・胴部外面上方ハケメ、下方ヘラミガキ。胴部内面ハケメ後ナデ。	炭灰茶褐色	微 砂	普 通	・完形品。
1325	"	14.0	5.4	26.3	・口縁部ヨコナデ。 ・胴部外面上方ハケメ、下方ヘラミガキ。内面上方ハケメ、下方ナデ。	外淡灰褐色 内暗灰褐色	細 砂	"	・完形品。 ・外面より焼成後穿孔。
1326	高杯形土器	24.0	9.0	12.8	・口縁部ヨコナデ。 ・杯部外面上半ヘラミガキ、下半ハケメ。内面ヘラミガキ。 ・胴部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	茶褐色で断面灰黒色	微 砂	"	・杯部、脚部の一部を欠く。
1327	"	11.0	6.8	15.0	・胴部両面ヘラミガキ。 ・脚部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、端部ヨコナデ。	外淡灰茶褐色、内黒色	"	良 好	・完形品。
土 壙 - 18 (第324図)									
1328	壺形土器	—	9.0	—	・頸部外面下端に凸帯の剥落痕。 ・胴部外面上方に2段のヘラ刺突文。 ・胴部外面上方ハケメ、下方ヘラミガキ。内面上半ハケメ、下半ヘラケズリ。	外 褐 色 内明茶褐色	微 砂	やや良 好	・体部の破片。
1329	甕形土器	30.0	—	—	・両面ともヨコナデ。	淡 褐 色	"	普 通	・小破片。
1330	"	17.0	—	—	・口縁端外面に細い沈線。両方ヨコナデ。 ・胴部外面ハケメ、内面ナデ。	外淡茶褐色 内黄白色	"	"	・口縁部の1/4破片。
1331	高杯形土器	—	—	—	・円盤充填。 ・杯部両面ヘラミガキ。	黒 褐 色	細 砂	良 好	・破片。
土 壙 - 19 (第325・326図)									
1332	甕形土器	35.0	12.2	—	・上げ底。	灰 白 色	細 砂	良 好	
1333	"	35.0	—	—		"	"	"	
1334	"	14.5	—	—		"	"	"	・外面煤付着。
1335	"	—	6.0	—		明 褐 灰 色	"	"	
1336	"	—	5.2	—		灰 白 色	"	"	
1337	高杯形土器	23.4	—	—		"	"	"	
1338	"	24.4	8.4	12.8		明 褐 灰 色	"	"	
1339	"	23.4	—	—		灰 白 色	"	"	
土 壙 - 20 (第328図)									
1340	甕形土器	14.4	5.0	26.0	・口唇部外面に沈線。	に ぶ い 褐 色	細 砂	良 好	・煤付着。
1341	"	13.4	4.8	25.1	・口唇部外面に沈線。	"	"	"	・煤付着、底面ナデ。
1342	"	—	5.5	—	・底部少し張り出し。	に ぶ い 橙 色	"	"	・煤付着。
1343	"	—	10.0	—	・底面ハケメ。	灰 褐 色	"	"	
1344	鉢形土器	12.0	—	—	・内面ヨコナデ。	灰 白 色	"	"	
土 壙 - 22 (第329図)									
1345	甕形土器	15.4	—	—	・口唇部外面に沈線。	に ぶ い 黄 橙 色	細 砂	良 好	・煤付着。
1346	"	24.0	—	—	・口唇部にくぼみ。	灰 白 色	"	"	
1347	"	15.8	—	—	・口唇部内側にくぼみ。	浅 黄 橙 色	"	"	・小破片。
1348	高杯形土器	—	—	—	・口縁部屈曲。	"	"	"	"
土 壙 - 23 (第330～332図)									
1349	甕形土器	31.0	—	—		に ぶ い 黄 橙 色	細 砂	良 好	
1350	"	—	12.0	—		"	"	"	
1351	鉢形土器	12.0	—	—	・透し孔は2孔一対。胴部外面に貝殻紋線による刺突文。	灰 白 色	"	"	
1352	甕形土器	15.8	6.0	—	・胴部外面にハケ工具による刺突文。	"	"	"	・外面煤付着。
1353	"	19.8	—	—		"	"	"	
1354	"	15.2	—	—	・胴部上半は細かいハケメ、下半は細かいヘラミガキ。	褐 灰 色	"	"	
1355	"	15.6	—	—		灰 白 色	"	"	
1356	"	15.6	—	—	・胴部外面はやや粗いハケメ。 ・口縁端部には凹線文及びヘラ描き斜線文が施されている。	"	"	"	・外面煤付着。
1357	壺形土器	—	—	—		"	微 砂	"	
1358	甕形土器	—	5.4	—	・底部はわずかに上げ底。	"	"	"	・外面煤付着。
1359	"	—	7.2	—	・底部はわずかに上げ底。	"	細 砂	"	
1360	"	—	5.4	—		明 褐 灰 色	微 砂	"	
1361	"	22.8	—	—		灰 白 色	"	"	
1362	"	30.0	—	—	・内面ハケメの後ヘラミガキ。	"	"	"	・外面に煤・黒斑。
1363	"	26.0	—	—		に ぶ い 黄 橙 色	細 砂	"	
1364	"	—	6.2	—		灰 白 色	微 砂	"	・外面煤付着。
1365	"	—	9.0	—	・透し孔は8個。	"	細 砂	"	・胴部に黒斑。
1366	"	—	9.4	—		明 褐 灰 色	"	"	

博物館番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
1367	高杯形土器	—	8.2	—		灰 白 色	微 砂	良 好	
1368	"	—	13.2	—		"	細 砂	"	
1369	"	22.0	—	—	◦内外面ともヘラミガキ。	褐 灰 色	"	"	◦杯部外面黒斑。
1370	"	22.0	—	—		明 褐 灰 色	"	"	
1371	小型土器	5.0	2.2	4.6	◦胴部に刺突文。	灰 白 色	"	"	◦ほぼ完存。
1372	器台形土器	—	—	—	◦口縁端部に円形浮文。	"	"	"	
土 壌 - 24 (第334～337図)									
1373	器台形土器	—	10.2	—	◦ヘラ描き沈線は不整。	淡 黄 色	細 砂	良 好	◦円孔6個。
1374	"	—	6.4	—	◦半截竹管文2列。	灰 白 色	"	"	◦円孔4個。
1375	"	—	8.4	—	◦口縁部コナデ。	に ぶ い 橙 色	"	"	◦円孔5個。
1376	"	—	8.0	—		灰 白 色	"	"	◦断面灰色。
1377	鉢形土器	10.6	—	—	◦上半部ヨコヘラミガキ。	黄 橙 色	"	"	◦脚部欠。
1378	"	10.6	—	—	◦口縁部コナデ。	灰 色	"	"	
1379	壺形土器	19.0	—	—	◦口唇部外面に凹線。	浅 黄 橙 色	細 砂	"	◦小破片。
1380	"	—	—	—	◦指頭圧痕文凸帯。	灰 白 色	"	"	◦断面灰色。
1381	"	11.2	—	—	◦内面うすいハケメ。	に ぶ い 橙 色	"	"	
1382	"	—	6.6	—	◦底面に凹凸あり。	淡 黄 橙 色	"	"	◦肩と底に黒斑。
1383	甕形土器	27.4	—	—	◦ハケメのあとヘラミガキ。	灰 白 色	"	"	
1384	"	25.4	—	—		浅 黄 橙 色	"	"	◦黒斑。
1385	"	27.7	—	—	◦ハケメののちヘラミガキ。	灰 白 色	"	"	
1386	"	14.3	10.0	36.0	◦口縁部に円形浮文。	に ぶ い 黄 橙 色	"	"	◦底部に黒斑。
1387	"	13.4	—	—	◦内面はうすいハケメのあとヘラケズリ。	に ぶ い 橙 色	"	"	
1388	"	16.6	—	—	◦口縁部にヘラ刺突文。	浅 黄 橙 色	"	"	
1389	"	17.6	6.6	26.7	◦内部上半までヘラケズリ。	に ぶ い 橙 色	細 砂 多	"	◦煤付着。
1390	"	14.0	5.5	26.2	◦内面は細かいハケメ、内面は粗いハケメ。	"	細 砂	"	◦焼成後穿孔。
1391	"	12.8	—	—	◦口唇部外面に沈線。	"	"	"	
1392	"	15.5	—	—	◦内面上半はナデアゲ。	"	"	"	
1393	"	12.2	—	—	◦口縁内面に凹み。	灰 褐 色	"	"	
1394	"	14.0	—	—	◦内部上半までヘラケズリ、外面は細かいハケメ。	褐 灰 色	"	"	
1395	"	—	7.4	—	◦底部をつまみ出す。	灰 褐 色	"	"	
1396	甕形土器	—	5.4	—		黄 橙 色	"	"	
1397	甕形土器	—	5.4	—		に ぶ い 橙 色	"	"	
1398	"	—	5.5	—	◦あげ底。	"	"	"	
1399	台付鉢形土器	16.4	10.0	17.7	◦内面上部までヘラケズリ。	灰 褐 色	"	"	◦肩と胴に黒斑、円孔対。
1400	高杯形土器	24.0	9.0	14.0	◦外面ヘラミガキ5角形。	浅 黄 橙 色	"	"	◦脚部欠8個。
1401	"	23.7	—	—	◦外面ヘラミガキ5角形。	に ぶ い 橙 色	"	"	◦断面灰色。
1402	"	24.7	—	—	◦外面ヘラミガキ5角形、内面4角形。	"	"	"	◦黒斑。
1403	"	25.0	—	—	◦間隔の粗いヘラミガキ4角形。	に ぶ い 黄 橙 色	"	"	"
1404	"	16.6	—	—	◦杯部内面うすいハケメ。	に ぶ い 橙 色	"	"	◦断面灰色。
1405	"	—	11.0	—	◦内外面ともヘラミガキ4角形。	"	"	"	"
土 壌 - 27 (第339図)									
1406	壺形土器	12.4	—	—		明 褐 灰 色	細 砂	良 好	
1407	"	16.8	8.6	—	◦胴部外面に貝殻腹縁による刺突文。	灰 白 色	"	"	◦底部黒斑。
1408	壺形土器	12.6	5.4	24.2		灰 黄 色	"	"	◦胴部下半に黒斑。
1409	"	17.8	—	—		浅 黄 橙 色	"	"	
1410	"	28.0	—	—		灰 白 色	"	"	
1411	"	25.4	—	—		明 褐 灰 色	"	"	
1412	台付鉢形土器	28.6	16.0	27.6	◦口縁端部に2条の凹線。透し孔は3個。鉢部底部裏面には脚部内面にヘラケズリを施した際にヘラの先端があたってできた沈線がある、注口は1か所。	灰 白 色	"	"	◦鉢部外面に黒斑。
1413	壺形土器	—	7.8	—		"	"	"	◦外面煤付着。
1414	高杯形土器	—	—	—		に ぶ い 黄 橙 色	"	"	◦小片。
1415	"	—	—	—		灰 白 色	"	"	"
土 壌 - 28 (第341図)									
1416	甕形土器	14.5	5.0	25.7		灰 白 色	細 砂	良 好	◦外面煤付着。
1417	"	15.6	—	—		"	"	"	"
1418	"	17.0	—	—		"	"	"	
1419	"	24.2	—	—		"	"	"	
1420	"	—	8.0	—	◦底部外面はユビナデ。	"	"	"	
1421	高杯形土器	—	8.6	—		に ぶ い 黄 橙 色	"	"	

百間川今谷遺跡

挿図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
1422	高杯形土器	—	—	—		にふい黄褐色	細 砂	良 好	
1423	器台形土器	31.2	—	—	◦口縁端部外面はヘラによる刻み目及び円形浮文。上面にはクシ描き波状文ののち円形浮文。	灰 白 色	"	"	◦1427・1428と同一個体か
土 壌 - 29 (第342図)									
1424	甕形土器	34.0	—	—		褐 灰 色	細 砂	良 好	
1425	高杯形土器	—	12.4	—		にふい黄褐色	"	"	
1426	"	—	—	—		灰 白 色	"	"	
1427	器台形土器	31.2	—	—	◦口縁端部外面にヘラによる刻み目及び円形浮文。上面にはクシ描き波状文ののち円形浮文。	"	"	"	◦小片1428と同一個体。
1428	"	—	24.0	—	◦頸部外面にクシ描き波状文・透し孔は7個。	"	"	"	◦外面に黒斑。
土 壌 - 30 (第343図)									
1429	甕形土器	22.6	—	—		にふい黄褐色	細 砂	良 好	
1430	"	—	6.4	—		灰 白 色	"	"	
土 壌 - 31 (第344図)									
1431	甕形土器	26.2	—	—	◦内面はハケメのあとヘラミガキ。	黄 橙 色	細 砂	良 好	
1432	"	—	6.4	—	◦底面平坦。	浅黄褐色	"	"	
1433	"	—	5.4	—	◦あげ底。	橙 色	"	"	
1434	高杯形土器	16.0	—	—	◦口縁部肥厚。	浅 橙 色	"	"	◦表面剝離。
土 壌 - 33 (第345図)									
1435	甕形土器	14.8	6.0	14.4	◦2孔一対の透し孔がある。	明 褐 灰 色	細 砂	良 好	◦外面に黒斑。
1436	高杯形土器	24.4	10.6	12.5	◦脚部の透し孔は7個。	灰 褐 色	"	"	"
土 壌 - 34 (第346図)									
1437	甕形土器	15.2	—	—	◦外面ハケメ・内面ハケ状工具のナデ。	淡 灰 黄 色	微 砂	良 好	◦外面煤付着。
1438	高杯形土器	19.8	—	—	◦杯部は内外面ヘラミガキ。	"	"	"	
土 壌 - 35 (第347図)									
1439	甕形土器	15.1	9.1	32.6	◦わずかにあげ底状。外面上半ハケメ。下半ヘラミガキ。胴中央にヘラにより刻み目。	黄 灰 色 底 黒 色	微 砂	普 通	◦胴部にヘラ刻み目が巡る。
1440	"	—	12.9	7.6	28.8	外 黄 灰 色 内 灰 茶 色	"	"	◦目の刻み目二段巡る。
1441	甕形土器	13.3	—	—	◦外面ハケメ。	淡 黄 灰 色	"	"	◦外面煤付着。
1442	"	—	6.0	—	◦外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	茶 灰 色	"	やや不良	"
1443	高杯形土器	—	16.0	—	◦脚部片。	淡 灰 黄 色	"	"	◦器面剝離。
土 壌 - 36 (第348図)									
1444	甕形土器	15.7	4.6	26.0	◦外面上半ハケメ。下半ヘラミガキ。内面下半ヘラケズリ。	外 黄 灰 色 内 暗 灰 色	微 砂	普 通	◦外面煤付着。
1445	"	20.7	—	—	◦外面ハケメ。	淡 灰 黄 色	"	"	
1446	"	14.1	—	—	◦外面上半ハケメ。下半ヘラミガキ。内面上半ハケ状のナデ上げ。下半ヘラケズリ。	黄 灰 色	"	"	◦外面煤付着。
1447	"	13.5	—	—		暗 茶 褐 色	"	"	◦口縁部細片。
1448	"	12.8	—	—	◦外面ヘラミガキ。内面ナデ。	暗 灰 茶 色	"	"	
1449	"	—	5.7	—	◦高台風につまみあげている。外面細かいヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	外 暗 灰 茶 色 内 暗 黄 灰 色	"	"	◦外面煤付着。底部穿孔。
1450	"	—	10.4	—	◦底部片。外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	灰 黄 色	"	"	◦外面黒色。
1451	"	—	5.9	—	◦外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	暗 茶 灰 色	"	"	◦外面煤付着。
1452	甕形土器	—	7.8	—	◦外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	黄 灰 色	"	"	
1453	高杯形土器	—	8.8	—	◦脚部片。外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。	淡 黄 灰 色	"	"	◦二段6穴。
土 壌 - 38 (第349図)									
1454	甕形土器	14.4	—	—	◦胴部底面にハケ工具による刺突文。胴部内面はやや粗いハケメ。	明 褐 灰 色	細 砂	良 好	◦外面煤付着。
1455	"	—	—	—		灰 白 色	"	"	
1456	高杯形土器	—	—	—		褐 灰 色	"	"	
土 壌 - 39 (第350図)									
1457	甕形土器	17.9	—	—		灰 色	微 砂	やや不良	◦口径は推定。
土 壌 - 41 (第352図)									
1458	甕形土器	14.6	—	—		灰 白 色	細 砂	良 好	
土 壌 - 42 (第353図)									
1459	甕形土器	17.0	—	—	◦凸部部に刻み目が巡る。	淡 黄 桃 色	微 砂	普 通	

邦国番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
1460	壺形土器	14.8	—	—	・外面ハケメ、内面肩部以下ヘラケズリ。	淡黄桃色	微 砂	やや不良	
1461	〃	13.5	—	—	・外面ハケメ、頸部はヘラミガキ。	淡赤褐色	〃	普 通	・端面刻み目。
1462	〃	11.2	—	—	・外面ハケメ、内面ナデ。	黄 灰 色	〃	〃	
1463	〃	8.2	—	—	・内面ナデ。	黄 褐 色	〃	〃	・器面剥離。
1464	〃	—	4.8	—	・高台機上げ底低部。	茶 灰 色	〃	〃	
1465	甕形土器	13.6	—	—	・外面ハケメ。	淡灰桃色	〃	〃	
1466	〃	15.2	—	—	・内面指頭圧痕。	淡黄灰色	〃	〃	・器面剥離。
1467	〃	15.0	—	—	・外面は粗いハケメ。	灰 褐 色	〃	〃	・外面煤付着。
1468	〃	19.5	—	—	・外面ハケメ、内面ナデ。	淡黄桃色	〃	〃	
1469	〃	19.2	—	—	・外面ハケメ、内面ナデ。	黄 桃 色	〃	良 好	
1470	〃	—	5.3	—	・外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	黄 白 色	〃	〃	・外面煤付着。
1471	高杯形土器	23.5	—	—	・外面ヘラミガキ。	淡黄桃色	〃	〃	・器面剥離。
1472	台付鉢形土器	20.2	8.0	11.8	・杯部内・外面ヘラミガキ。	淡黄灰色	〃	〃	・黒斑。
土 壌 - 44 (第355図)									
1473	台付鉢形土器	17.4	—	—	・頸部に断面三角形貼り付け凸帯。	にぶい黄褐色	細 砂	良 好	
1474	壺形土器	13.6	—	—		灰 白 色	〃	〃	・外面煤付着。
1475	〃	—	7.8	—		〃	〃	〃	
1476	〃	—	6.0	—		〃	〃	〃	・内面煤付着。
土 壌 - 46 (第358・359図)									
1477	壺形土器	15.2	8.2	33.0	・内面は粗いハケメ。	灰 白 色	細 砂	良 好	・肩と胴部下半に黒斑。
1478	〃	15.6	—	—	・ハケののちヘラミガキ。	にぶい橙色	〃	〃	・煤付着。
1479	〃	16.5	—	—	・うすいハケメ。	灰 白 色	〃	〃	・2～3mmの砂粒を含む。
1480	〃	16.8	—	—	・内面にうすいハケメ。	にぶい橙色	〃	〃	・底部欠失。
1481	〃	12.2	—	—	・口唇部に沈線。	黒 褐 色	〃	〃	
1482	〃	16.0	—	—	・内面はうすいハケメ。	浅黄橙色	〃	〃	・煤付着。
1483	〃	—	4.6	—	・底面ハケメ。	褐 灰 色	〃	〃	・内面剥離。
1484	〃	—	6.3	—		にぶい橙色	〃	〃	
1485	〃	—	6.0	—		〃	〃	〃	
1486	〃	32.0	—	—		〃	〃	〃	・小破片。
1487	高杯形土器	21.6	—	—	・外面は5角形、内面は4角形のヘラミガキ。	暗 灰 色	〃	〃	・円孔5個。
1488	〃	—	13.4	—	・端部肥厚。	灰 褐 色	〃	〃	・沈線は不著。
土 壌 - 49 (第361・362図)									
1489	壺形土器	17.0	—	—	・凸帯に板状工具による刻み目。	灰 黄 色	微 砂	普 通	
1490	〃	—	8.6	—	・外面肩部ハケ、胴以下ヘラミガキ、内面上半ハケメ、指オサエ、下半ヘラケズリ。	〃	〃	〃	
1491	〃	—	9.8	—	・外面ヘラミガキ、内面胴部ハケメ。	〃	〃	〃	
1492	〃	—	6.5	—	・外面上半ハケメ下半ヘラミガキ、内面上半指オサエ、下半ヘラケズリ。	暗黄灰色	〃	〃	・胴中央に刻み目。
1493	〃	—	—	—	・外面上部ハケ肩部以下ヘラミガキ内面ハケ。	茶 灰 色	〃	〃	
1494	甕形土器	16.0	—	—	・内面ナデ、口縁端面に円形浮文。	淡灰桃色	〃	〃	
1495	〃	—	6.1	—	・外面ヘラミガキ。	灰 黄 色	〃	良 好	
1496	〃	33.9	—	—	・外面肩上端部ハケ、体部内外面ヘラミガキ。	〃	〃	〃	・外面煤付着。
1497	〃	25.6	—	—	・内外面ハケメ。	淡茶灰色	〃	やや不良	
1498	〃	12.0	—	—	・頸部が厚い、外面ハケメ、内面はヘラミガキ。	淡灰黄色	〃	普 通	・器面剥離。
1499	〃	13.6	—	—	・口縁は「く」の字に急に外反し、外面はハケメ。	灰 黄 色	〃	〃	
1500	〃	13.6	—	—	・内外面ハケメ。	茶 灰 色	〃	〃	・器面剥離。
1501	〃	15.9	—	—	・外面ハケ目、内面ハケ状工具によるナデ。	淡灰黄色	〃	〃	・外面煤付着。
1502	〃	21.1	—	—	・外面ハケメ、内面ハケ。	淡灰褐色	〃	〃	
1503	〃	18.9	—	—	・内外面上半ハケメ、下半ヘラミガキ。	灰 茶 色	〃	〃	・外面煤付着。
1504	〃	—	5.6	—	・上げ底気味の底部片、外面ヘラミガキ。	灰 茶 色	〃	良 好	
1505	高杯形土器	12.3	—	—		淡灰黄色	〃	やや不良	・器面剥離。
1506	〃	20.8	—	—	・杯部ヘラミガキ。	灰 黄 色	〃	普 通	・上端黒色。
1507	〃	23.7	—	—	〃	灰 茶 色	〃	〃	・器面剥離。
1508	〃	23.1	—	—	〃	〃	〃	〃	
1509	〃	27.1	11.0	15.1	〃	暗茶灰色	〃	〃	
1510	〃	—	9.8	—	〃	茶 灰 色	〃	〃	・器面剥離。
1511	〃	—	8.3	—	・円孔。	淡赤褐色	〃	良 好	〃
1512	〃	—	7.9	—	・三角透し、杯部ヘラミガキ。	暗灰黄色	〃	やや不良	〃

百間川今谷遺跡

標記番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
土 壙 - 53 (第365図)									
1513	壺形土器	35.8	—	—	◦外面ヘラミガキ。	灰 黄 色	微 砂	普 通	
1514	"	—	14.0	—	◦やゝ上げ底、外面ヘラミガキ。	淡黄褐色	"	"	◦外面丹塗り。
土 壙 - 54 (第367図)									
1515	壺形土器	12.8	—	—	◦穿孔は内側から。	灰 黄 色	細 砂	良 好	
1516	"	16.3	—	—	◦口唇部に沈線。	"	"	"	
1517	"	—	—	—	◦口縁部内面に格子文。	淡 黄 色	"	"	◦小破片。
1518	"	—	—	—	◦頸部にしぼりめ残存。	"	"	"	◦断面灰色。
1519	壺形土器	32.6	—	—	◦口縁部に棒状浮文。	灰 白 色	"	"	
1520	"	18.5	—	—	◦口縁部に凹線文。	にぶい橙色	"	"	
1521	"	12.6	—	—	◦口縁端部拡張。	浅黄褐色	"	"	◦煤付着。
1522	"	12.0	—	—	◦口縁内側にくぼみ。	"	"	"	◦ "
1523	鉢形土器	13.6	—	—	◦2個の穿孔1対。	橙 色	"	"	◦火をうける。
1524	壺形土器	—	5.2	—	◦底面が少しあがる。	にぶい黄褐色	"	"	◦煤付着。
1525	"	—	5.0	—		にぶい褐色	"	"	
1526	"	—	6.5	—	◦底面平坦。	橙 色	"	"	◦煤付着。
1527	高杯形土器	21.6	—	—	◦口縁部に少し屈曲あり。	にぶい橙色	"	"	◦小破片。
1528	"	19.7	—	—	◦口縁部屈曲	浅黄褐色	"	"	
1529	"	13.0	—	—	◦口縁部外へ水平に拡張。	褐 灰 色	"	"	
1530	器台形土器	—	19.4	—	◦凹線文と棒状浮文。	にぶい褐色	"	"	◦底面使用痕。
土 壙 - 55 (第368図)									
1531	壺形土器	15.8	—	—		浅黄褐色	細 砂	良 好	◦煤付着。
1532	"	—	5.0	—		灰 白 色	"	"	
1533	"	18.0	—	—	◦口縁端部に3条の凹線文。	"	"	"	
土 壙 - 56 (第369図)									
1534	壺形土器	15.5	—	—	◦口唇部に2本の沈線。	にぶい黄褐色	細 砂	良 好	◦小破片。
1535	壺形土器	16.0	—	—	◦口縁部上方へ拡張。	"	"	"	"
土 壙 - 57 (第371・372図)									
1536	壺形土器	30.0	—	—		灰 白 色	細 砂	良 好	◦外面煤、黒斑。
1537	壺形土器	—	—	—	◦頸部に断面三角形の貼り付け凸帯。	"	"	"	
1538	壺形土器	27.6	—	—	◦口縁端部にヘラ描き斜線文。	灰 黄 褐色	"	"	◦小片、外面煤付着。
1539	"	16.0	—	—		灰 白 色	"	"	
1540	"	20.2	—	—		"	"	"	◦外面煤付着。
1541	"	—	6.6	—	◦上げ底。	明 褐 灰 色	"	"	
1542	"	—	8.0	—		褐 灰 色	"	"	
1543	"	—	6.0	—		明 褐 灰 色	"	"	
1544	"	—	6.6	—		"	"	"	
1545	高杯形土器	21.2	—	—		"	"	"	
1546	"	23.0	—	—		灰 白 色	"	"	◦小片。
1547	"	—	13.0	—		にぶい黄褐色	"	"	
1548	"	—	17.8	—	◦縁面に鋭いヘラ描き平行沈線。	灰 白 色	"	"	
土 壙 - 58 (第374図)									
1549	壺形土器	24.0	—	—		明 褐 灰 色	細 砂	良 好	◦
1550	"	23.4	5.2	—		にぶい黄褐色	"	"	
1551	"	16.0	—	—	◦口縁端部に1条の沈線。	"	"	"	
1552	"	16.6	—	—	◦内面不詳。	灰 白 色	"	"	◦外面煤付着。
1553	"	17.0	—	—		"	"	"	◦内面煤付着。
1554	"	—	6.0	—	◦底部外面は不整方向のユビナデ。	にぶい黄褐色	"	"	◦外面煤付着。
1555	"	—	9.0	—	"	明 褐 灰 色	"	"	
1556	高杯形土器	26.4	10.0	14.7	◦杯部内面不詳。	灰 白 色	"	"	◦外面煤付着。
1557	"	—	9.8	—	◦脚部外面はタテ方向のヘラミガキ。	"	"	"	
1558	鉢形土器	33.4	—	—	◦内面は横方向のヘラミガキ。	黄 橙 色	"	"	

押図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
溝 - 1 (第378・379図)									
1559	壺形土器	15.0	—	—	◦口縁表面に4か所刺突。	淡灰褐色	小 砂	脆 弱	
1560	"	12.0	—	—		茶 褐 色	微 砂	良 好	
1561	"	16.0	—	—		淡灰褐色	"	"	
1562	"	20.0	—	—	◦円形刺突文2か所残存。	淡灰白色	"	堅 緻	
1563	"	24.0	—	—		茶 灰 色	"	"	
1564	"	14.5	—	—		淡灰白色	"	"	
1565	甕形土器	15.0	—	—		淡茶灰色	"	脆 弱	
1566	"	13.0	—	—		淡茶褐色	砂 粒	良 好	
1567	"	15.0	—	—		淡茶灰色	微 砂	脆 弱	
1568	"	17.0	—	—		黒 灰 色	"	"	
1569	"	15.2	—	—		淡茶褐色	細 砂	良 好	
1570	"	32.0	—	—		淡灰白色	微 砂	"	
1571	"	33.0	—	—		"	"	"	
1572	"	29.0	—	—		"	"	"	
1573	"	35.0	—	—		茶 褐 色	"	"	◦風化が著しい。
1574	"	23.0	—	—		淡灰白色	"	"	
1575	"	37.6	—	—		"	"	堅 緻	
1576	"	—	4.5	—	◦底部下端はヨコナデ。	暗茶褐色	細 砂	良 好	
1577	壺形土器	12.0	—	—		淡茶灰色	微 砂	堅 緻	
1578	鉢形土器	8.6	—	—		淡灰白色	"	"	
1579	台形土器	20.0	—	—		淡 茶 色	細 砂	良 好	
1580	甕形土器	—	6.5	—	◦底部は粘土充填。	淡黄灰色	微 砂	"	
1581	"	—	9.0	—		淡灰白色	細 砂	"	
1582	壺形土器	—	7.5	—	◦底部は粘土充填。	暗 灰 色	微 砂	堅 緻	
1583	甕形土器	—	5.5	—	"	茶 褐 色	"	良 好	
1584	高杯形土器	26.0	—	—	◦口唇部内側はハリツケ。	"	"	"	
1585	鉢形土器	13.0	—	—		淡灰白色	"	"	
1586	高杯形土器	—	8.7	—		白 灰 色	細 砂	"	
溝 - 2 (第381図)									
1587	甕形土器	14.6	5.0	27.8	◦内面は上部ハケメ、下部ヘラケズリ。	乳 白 色	微 砂	良 好	◦底部穿孔。
1588	"	14.3	5.3	25.2	◦外面はヘラミガキ。	暗灰褐色	"	"	"
1589	高杯形土器	18.2	11.0	17.0	◦杯部は内外面ともヘラミガキ。	灰 褐 色	"	"	
溝 - 3 (第382図)									
1590	甕形土器	26.0	—	—	◦頸部に指頭瓦痕文凸帯。	淡茶褐色	細 砂 粒	やや不良	◦小片。
1591	"	15.0	—	—		黄 橙 色	"	普 通	"
1592	壺形土器	—	7.0	—	◦胴部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	黒 褐 色	細 砂	"	
溝 - 12 (第384～387図)									
1593	甕形土器	36.8	14.6	—		灰 白 色	細 砂	良 好	
1594	壺形土器	18.2	—	—	◦口縁端部を上下にやや肥厚させ3条の凹線を施し、その後にはハケによる刻み目、棒状浮文。口縁部内面にはクシによる斜格子文。頸部から胴部上半にはクシ描文。円形浮文は2段で、上段は4個一対、下段は5個一対でそれぞれ胴上部の対角線上に4か所貼付されている。	に ぶ い 黄 橙 色	"	"	
1595	"	15.0	—	—	◦頸部の紐孔は2孔一対で計4個。胴部外面上半には2段にわたって貝殻痕線による刺突文。	灰 白 色	"	"	
1596	"	13.6	—	—	◦頸部から口縁部の内外面はヨコナデ。	"	"	"	
1597	"	12.2	—	—	◦口縁端部に3個一対で7か所に円形浮文。	"	"	"	◦内外面黒斑。
1598	"	11.0	—	—	◦頸部に指頭瓦痕貼り付け凸帯。その下部にヘラ状工具による刺突文。	"	"	"	
1599	"	12.6	—	—	◦内外面ともヨコナデ。	"	"	"	
1600	"	19.8	—	—	◦口縁端部にヘラ状工具による刻み目。口縁部内面にはクシによる斜格子文。頸部はハケメのちヨコナデ。	"	"	"	
1601	"	—	—	—	◦半截竹管による斜格子文。	明 褐 灰 色	"	"	
1602	"	15.0	—	—	◦口縁部内面にクシ描き斜格子文。	灰 白 色	"	"	
1603	"	17.6	—	—	◦口縁端部にヘラ状工具による刻み目。	"	"	"	

百間川今谷遺跡

母図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口徑	底徑	器高					
1604	壺形土器	21.6	—	—	◦ 棒状浮文は4本1対で4か所。	にぶい黄橙色	細 砂	良 好	
1605	"	17.2	—	—		明 褐 灰 色	"	"	
1606	"	13.6	—	—	◦ 2個一対の円形浮文。	灰 白 色	"	"	
1607	"	17.0	—	—		"	"	"	
1608	"	19.0	—	—		にぶい黄橙色	"	"	
1609	"	8.2	—	—	◦ 口縁端部に1条の沈線。内外面ヨコナデ。	灰 白 色	"	"	
1610	甕形土器	17.0	5.8	21.0		にぶい黄橙色	"	"	◦ 胴部に黒斑。
1611	"	17.0	—	—		にぶい黄橙色	"	"	
1612	"	18.0	—	—	◦ 口縁端部にへら状工具による刻み目。胴部上半に貝殻紋縁綫突文。	灰 白 色	"	"	
1613	"	11.8	—	—		"	"	"	◦ 外面付着、小片。
1614	"	12.6	—	—		"	"	"	
1615	"	14.6	—	—		"	"	"	
1616	"	14.2	—	—		"	"	"	
1617	壺形土器	13.8	—	—	◦ 頸部に2孔の紐孔。	にぶい黄橙色	"	"	
1618	"	23.8	—	—	◦ 胴部内面へらミガキ。	"	"	"	
1619	甕形土器	28.6	—	—		灰 白 色	"	"	
1620	"	32.0	—	—		"	"	"	◦ 胴部外面に黒斑。
1621	壺形土器	—	7.4	—		"	"	"	
1622	"	—	8.6	—	◦ 底部外面ユビナデ。	褐 灰 色	"	"	
1623	甕形土器	—	6.2	—	"	灰 白 色	"	"	
1624	大型高杯形土器	38.6	—	—		"	"	"	
1625	高杯形土器	19.2	8.8	—		にぶい黄橙色	"	"	
1626	"	28.4	—	—		明 褐 灰 色	"	"	
1627	"	—	10.0	—		黒 色	"	"	
1628	"	—	9.4	—		にぶい黄橙色	"	"	
1629	"	—	7.8	—		灰 白 色	"	"	
1630	壺形土器	14.6	13.4	1.5	◦ 内面は指頭押えのちユビナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。	褐 灰 色	"	"	
1631	"	13.0	12.2	2.0	◦ 1630と同じ。	灰 白 色	"	"	
1632	"	—	—	—		褐 灰 色	"	"	◦ 外面黒斑。1412と同一器種か。
溝 - 14 (第389図)									
1633	壺形土器	11.2	—	—	◦ 頸部に2孔1対の紐孔。肩部にへら工具による刺突文。	にぶい黄橙色	細 砂	良 好	
1634	"	10.0	—	—		灰 白 色	"	"	
1635	"	12.0	—	—	◦ 肩部にへら状工具による刺突文。	"	"	"	
1636	高杯形土器	21.6	11.2	20.7	◦ 口縁外面はへら状工具によるヨコナデ。脚柱部内面にしほり痕。	"	"	"	◦ ほぼ完存。
包含層 (第390・391図)									
1637	壺形土器	20.0	9.5	44.0	◦ ハケメのあとへらミガキ。	にぶい黄橙色	細 砂	良	
1638	"	16.0	—	—		浅 黄 橙 色	"	"	
1639	"	12.2	—	—		"	"	"	
1640	"	13.0	—	—	◦ 肩部にうすいハケメ、内面上半は横へらケズリ。	"	"	"	
1641	"	17.0	—	—	◦ 口縁部肥厚。	にぶい黄橙色	"	"	
1642	"	14.0	—	—		灰 白 色	"	"	◦ 小破片。
1643	"	12.5	5.3	25.9	◦ 内面上半は横へらケズリ。	"	"	"	"
1644	"	17.0	—	—	◦ 口縁部外面に沈線。	"	"	"	
1645	鉢形土器	19.0	—	—	◦ 内部上半ナデアゲ。	浅 黄 橙 色	"	"	
1646	水差形土器	10.4	—	—		灰 白 色	"	"	
1647	甕形土器?	6.7	—	—	◦ 口縁部拡張。	浅 黄 橙 色	"	"	
1648	鉢形土器?	22.2	—	—	◦ 口縁部上面にくぼみ。	灰 白 色	"	"	
1649	高杯形土器	37.6	—	—	◦ 外面に凹線文。	"	"	"	
1650	"	29.4	—	—	"	にぶい黄橙色	"	"	
1651	"	24.5	—	—		"	"	"	
1652	壺形土器	4.2	—	5.0	◦ 小型の手捏ね土器。	灰 白 色	"	"	

3 弥生時代後期の遺構・遺物

(1) 竪穴式住居

竪穴式住居—6 (第395図)

今谷橋脚—0の北端に3分の1を検出したものである。推定規模は、径586cmを測りプランは円形を呈する。

プランが検出されたレベルは海拔168cmで茶灰色土層中である。壁高は、最も遺存状態のよい部分において約35cmを測る。壁体溝は認めることはできなかった。床面は、厚さ約4cm内外に淡黄褐色粘質土によって貼り床されている。

柱穴は、2か所検出されている。P—1は二段掘りとなっており径75cmほどで深さ20cmの掘り方からさらに径35cm、深さ28cmほどを一段深く掘り下げている。P—2は、P—1と同様に二段掘りとなり径68cm、深さ27cmの掘り方からさらに径38cm、深さ25cmほどを一段深く掘り下げている。

中央穴は、楕円形を呈するもので推定で径80cmほどの規模をもつようである。深さは、3cm内外で底面は凹凸がみられ明確な底面を認めることは困難であった。

時期を判断させる出土遺物は認めることはできなかったが当住居址が弥生後期の堆積層中において切り込まれていることから、この時期に相前後するものと考えるのが妥当であろう。

竪穴式住居—7 (第396図)

土壙—76の西半分を検出のため、400×250cmの範囲を西側へ拡張した際に検出されたものである。北辺から東辺にかけてのコーナー部分を検出したのみであり規模は不明である。プランについては、胴の張る隅丸方形を呈するものと推測される。

住居址のプラン検出レベルは、海拔175cmである。壁高は、18cmを測り、壁体溝は北辺において幅8cm、深さ4cmのものが存在するが、コーナーから東辺については認めることはできなかった。

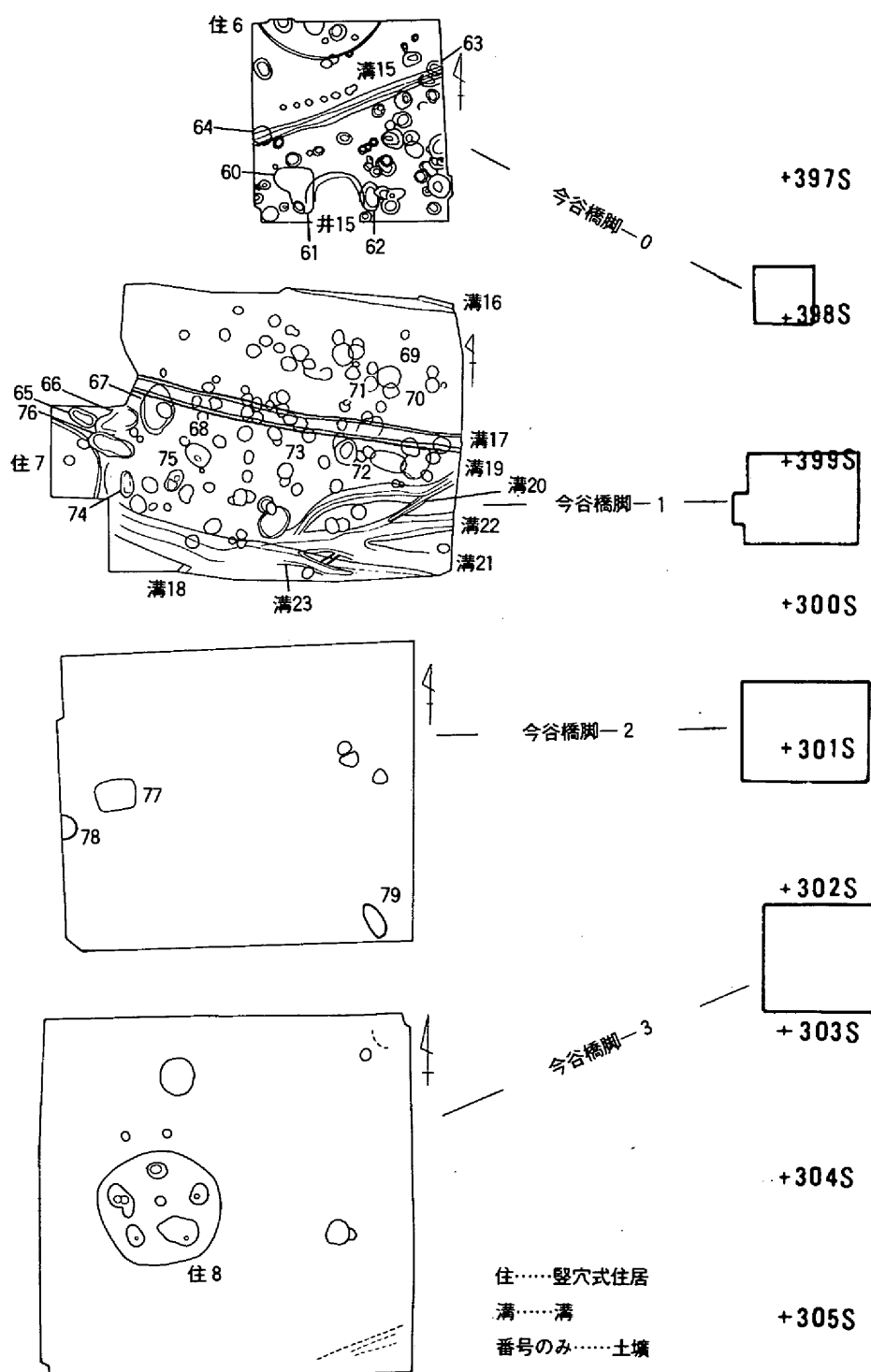
柱穴は、1か所認められ、掘り方は径42cm、深さ48cmを測り、柱痕跡は径20cmほどであることが確認された。

床面出土遺物から住居址の時期は、百・後・Ⅲと考えられる。

なお、当住居址は、南側を溝—18によって切られていることが土層断面において確認されている。(下澤)

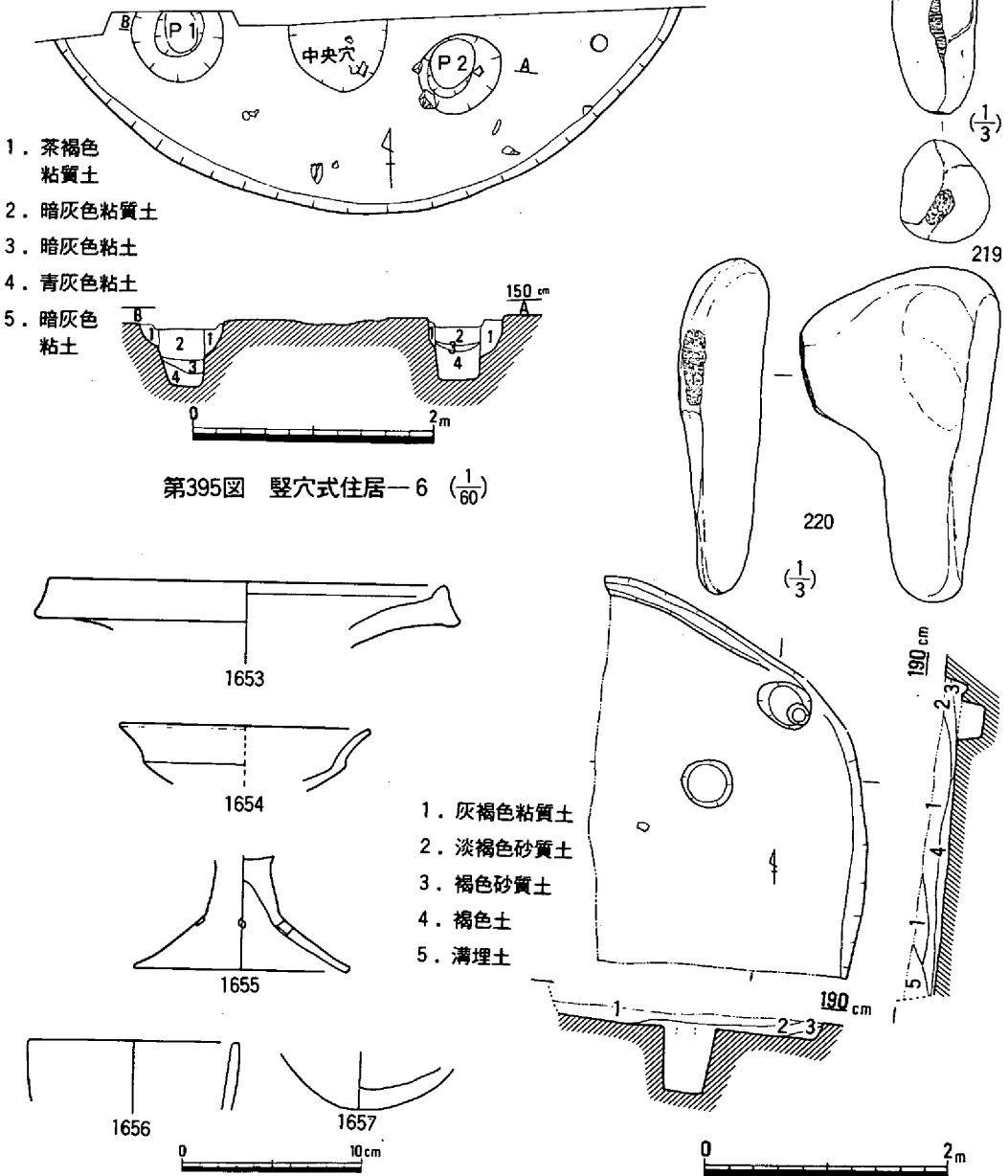
竪穴式住居—8 (第397図)

302—Sの西側中央に位置し、建物—1・3および土壙—3を切る。平面形は径約505cmの不整円形を呈し、現存壁高20cmを測る。柱穴は5本柱であり、柱穴間の距離は185～205cmとばらつきがある。深さは53～75cmである。中央穴は中央やや南側にあり、南西周辺部に灰の掻き出

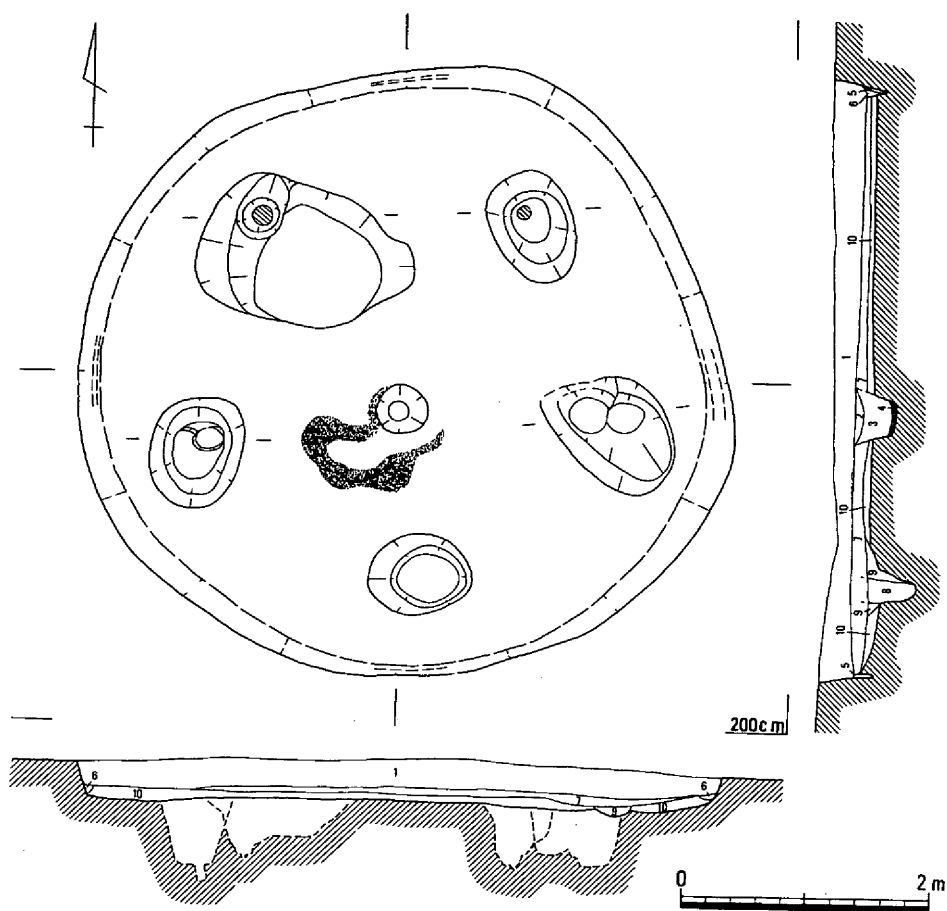


第394図 大地地区(今谷橋脚部)弥生時代後期遺構配置図 ($\frac{1}{300}$) ($\frac{1}{1000}$)

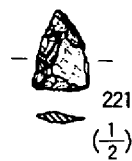
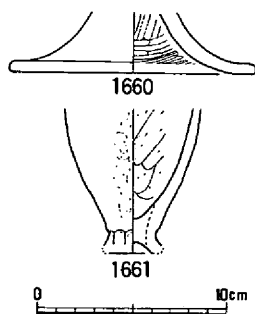
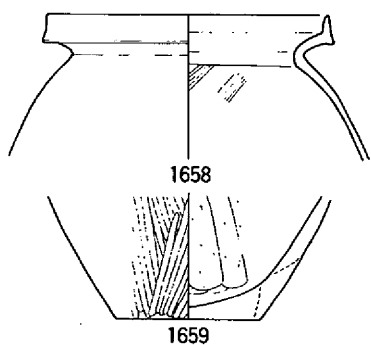
しが認められる。壁体溝は、各土層断面において確認しているが、平面では把握できなかった。7・10層が貼り床にあたる。検出面で炭化材を検出しており、火災に遇ったものと考えられる。これに起因してか、北側2本の柱根が遺存しており、柱材はアベマキとネズミサシであった。出土遺物（甕1658・1659、蓋1660、台付鉢1161、石鏃221）により、百・後・Ⅲに比定できる。（光永）



第396図 竪穴式住居—7 (1/60)・出土遺物



- | | |
|------------|------------|
| 1. 暗茶灰色砂質土 | 6. 褐色土 |
| 2. 暗茶灰色粘質土 | 7. 暗褐色砂質土 |
| 3. 暗灰色粘質土 | 8. 暗灰色粘質土 |
| 4. 炭・灰 | 9. 灰色粘質土 |
| 5. 暗褐色土 | 10. 褐灰色粘質土 |



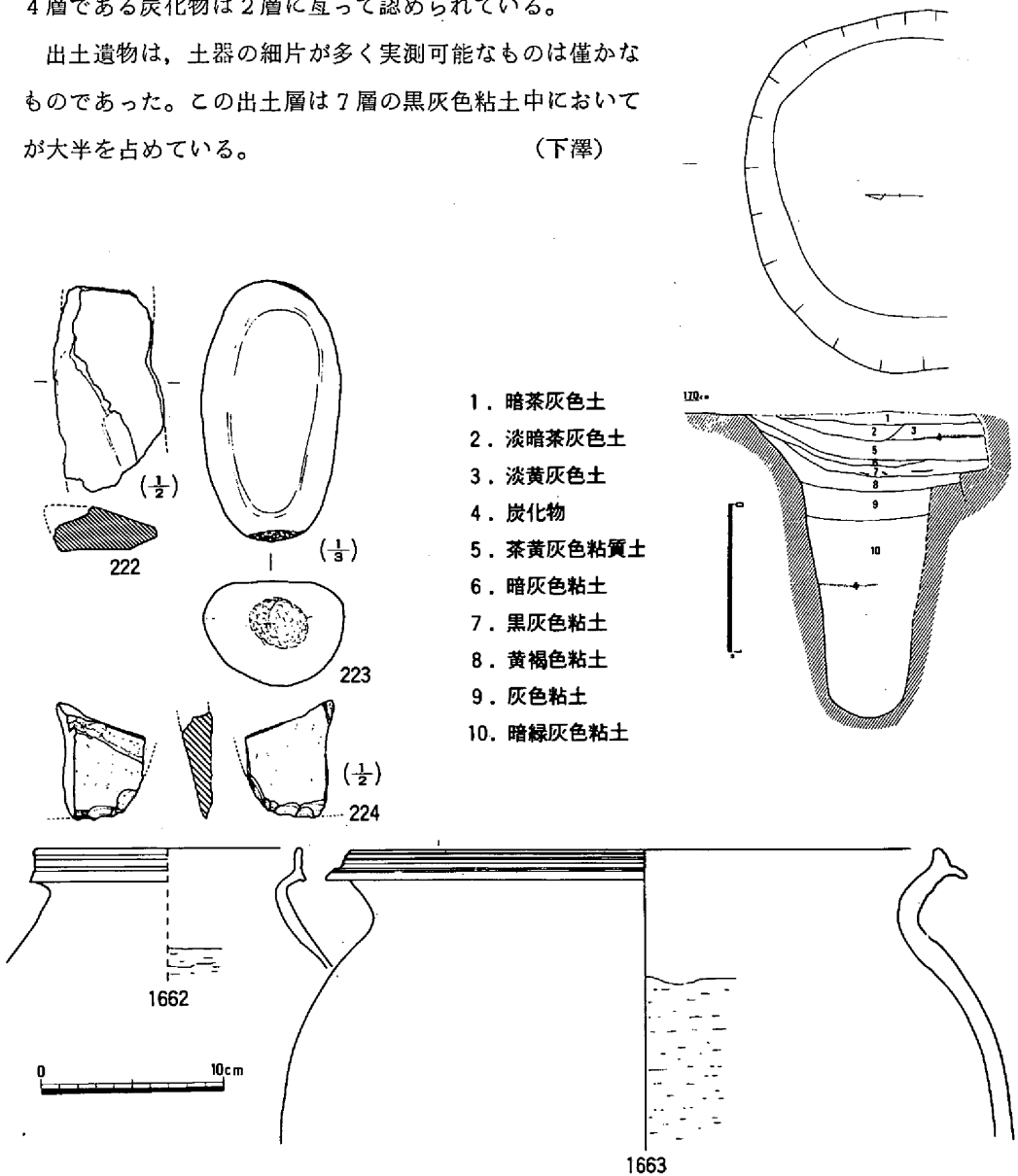
第397図 竪穴式住居—8 (1/60)・出土遺物

(2) 井 戸

井戸—15 (第398図)

北側の半分を検出したもので、プランは円形を呈し、規模は径 243 cm、深さ 205 cm をそれぞれ測る。堆積層は10層よりなるが10層の下に認められた炭化物層より下の層序については識別は困難であり、具体的に示すことが出来なかった。各層中には比較的多く炭化粒を含んでおり4層である炭化物は2層に亘って認められている。

出土遺物は、土器の細片が多く実測可能なものは僅かなものであった。この出土層は7層の黒灰色粘土中においてが大半を占めている。(下澤)



第398図 井戸—15 ($\frac{1}{50}$)・出土遺物

(3) 土 墳

土墳—60 (第399図)

東西に主軸をもつ楕円形を呈するものであるが、プラン検出時において東側を土墳—61により切られていることが認められた。規模は、短軸が89cmで深さ4cmを測る。

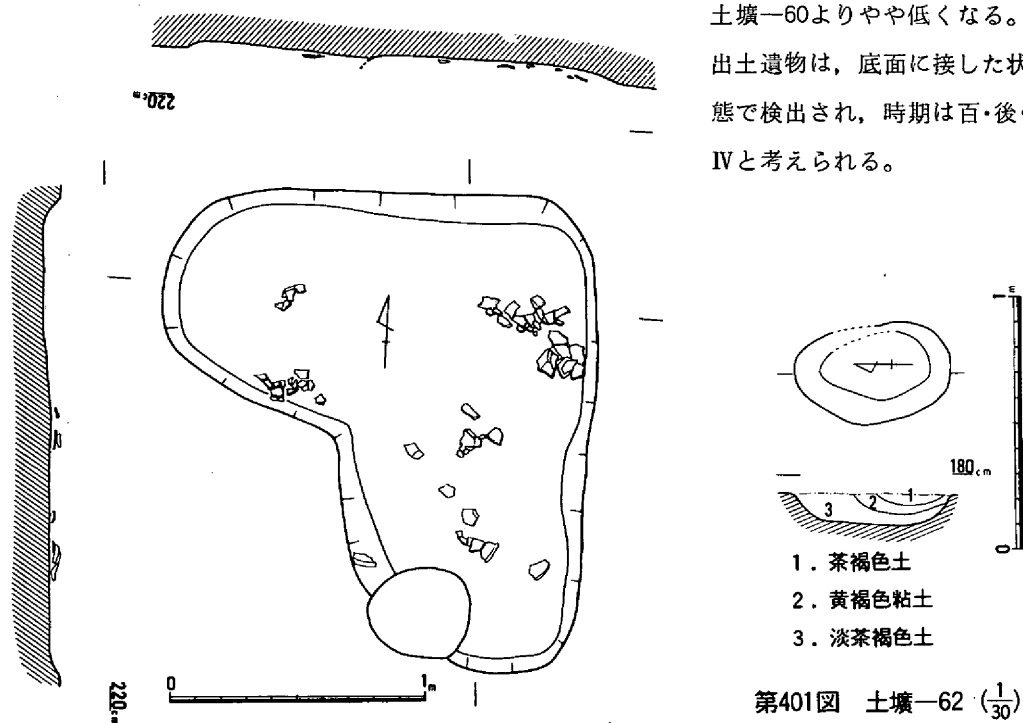
出土遺物は、土墳底面に接した状態で検出されたが、いずれも細部破片であり時期を判断すべきものは見い出されていないが、土墳—61との関係からそれらより後出するものであろう。

土墳—61 (第399・400図)

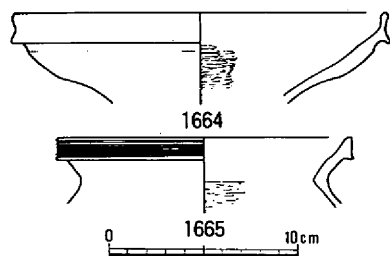
楕円形を呈するもので、規模は190×97cmで深さ5cmを測る。底面の状態は平坦であるが、

土墳—60よりやや低くなる。

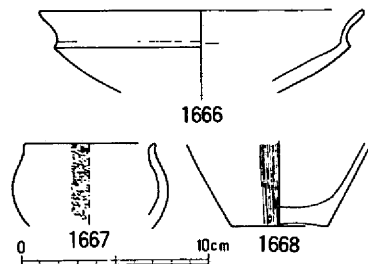
出土遺物は、底面に接した状態で検出され、時期は百・後・IVと考えられる。



第401図 土墳—62 (1/30)



第400図 土墳—61出土遺物



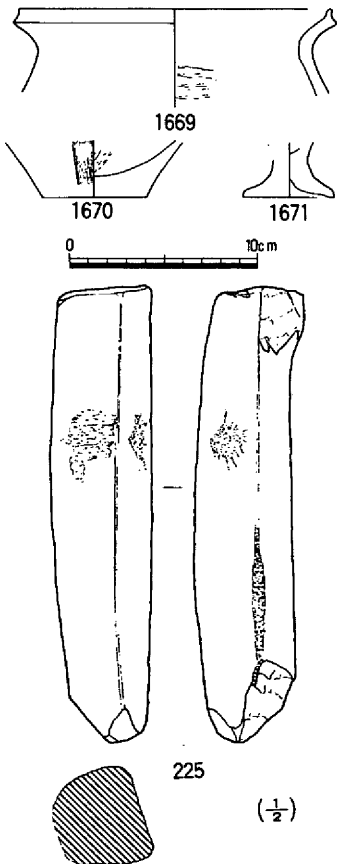
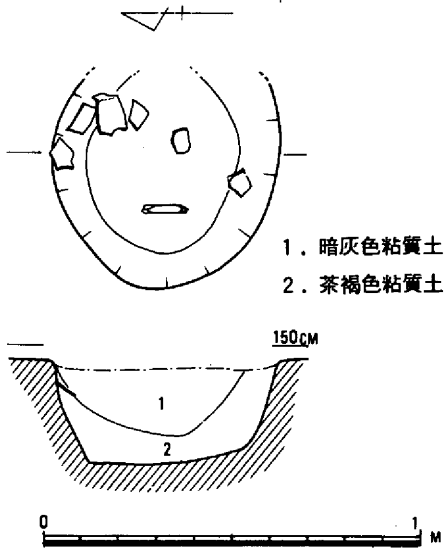
第402図 土墳—62出土遺物

土壌—62 (第401・402図)

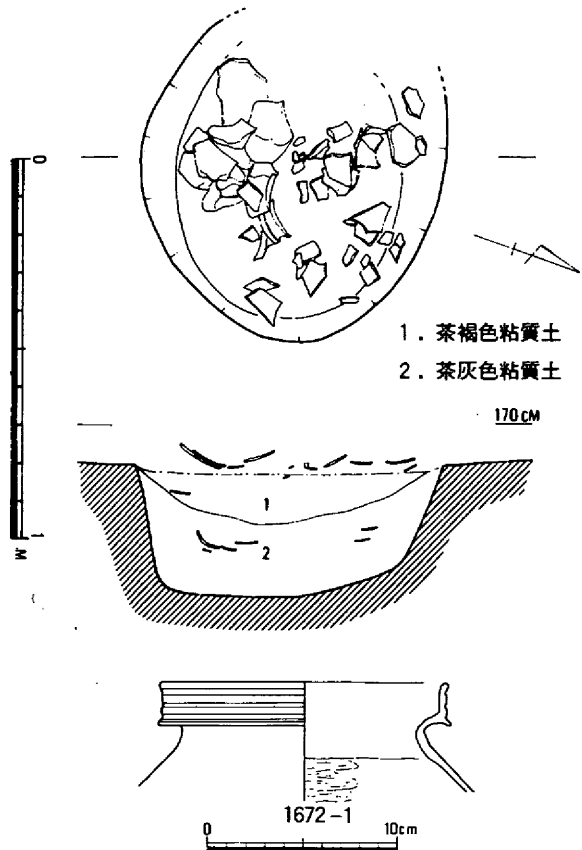
南北に主軸をもつ楕円形のプランを有するものである。規模は、 $123 \times 78\text{cm}$ で深さ 25cm を測る。出土遺物は、高杯・広口壺などがみられ、これらの土器から時期は百・後・Ⅲと考えられる。

土壌—63 (第403図)

東側を欠失するが、ほぼ円形のプランを呈するものである。規模は、径 60cm で深さ 27cm を測る。出土遺物は、甕・小型土器が出土しておりこのことから時期は百・後・Ⅳと考えられる。



第403図 土壌—63 ($\frac{1}{20}$)・出土遺物



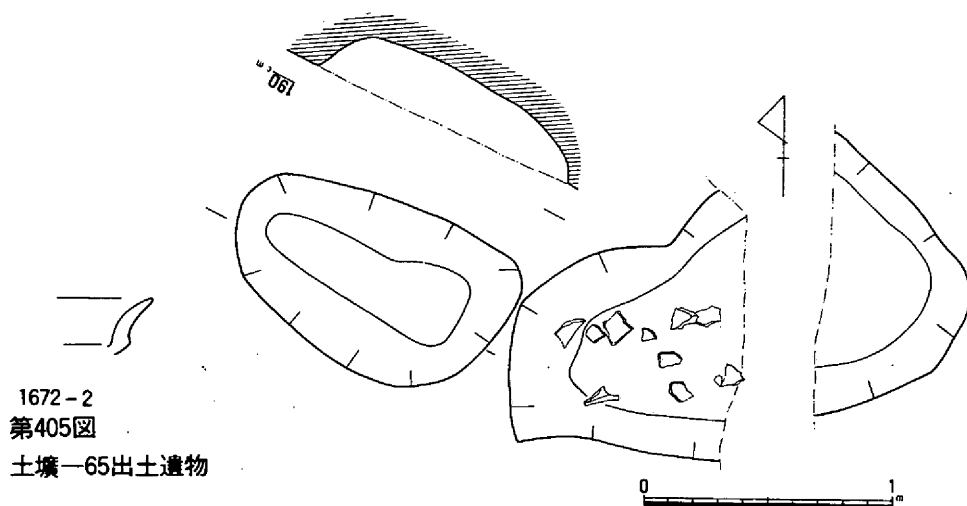
第404図 土壌—64 ($\frac{1}{20}$)・出土遺物

土壌—64 (第 404 図)

西側を欠失するが、ほぼ円形のプランを有するものである。規模は径 80 cm で深さ 34 cm を測る。出土遺物は、プラン検出面から比較的多く認められた他に、2 層の茶灰色粘質土からも出土しているが実測可能なものは僅かであった。

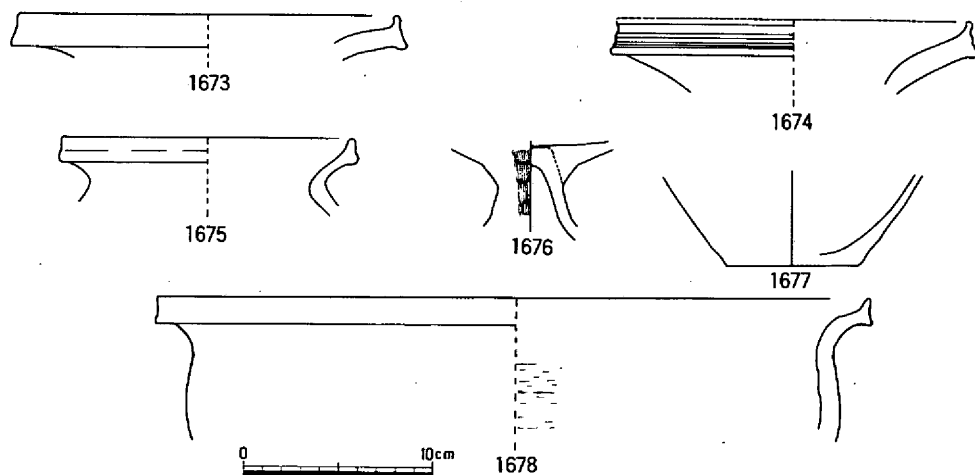
土壌—65 (第 405・406 図)

規模は、89×64cm で深さ 13 cm を測る楕円形のプランを呈する。土壌底面は若干舟形状を示す。出土遺物は、ほとんどみられず細片の状態で若干検出されている。



1672-2
第405図
土壌—65出土遺物

第406図 土壌—65・66 ($\frac{1}{30}$)



第407図 土壌—66出土遺物

土壌—66 (第406・407図)

規模は、 $187 \times 106\text{cm}$ で深さ 23cm を測る楕円形のものであるがかなり不整形になっている。側溝の掘削時において土壌中央を立ち切ってしまうている。南側において土壌—65と重複し、土層観察の結果当土壌が切って作られている。堆積土は、茶褐色土と暗茶灰色土の2層であり下層中には炭化粒を多く含んでいた。

出土遺物は、口径の計測できうるものはほとんどなくいずれも小片であるが一応図示した。

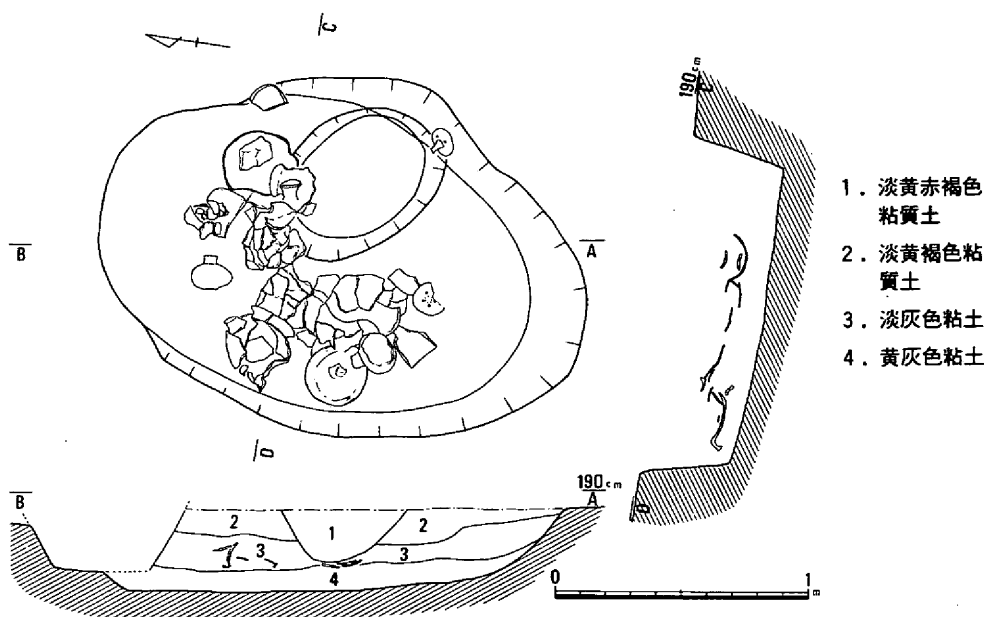
土壌—67 (第408～410図)

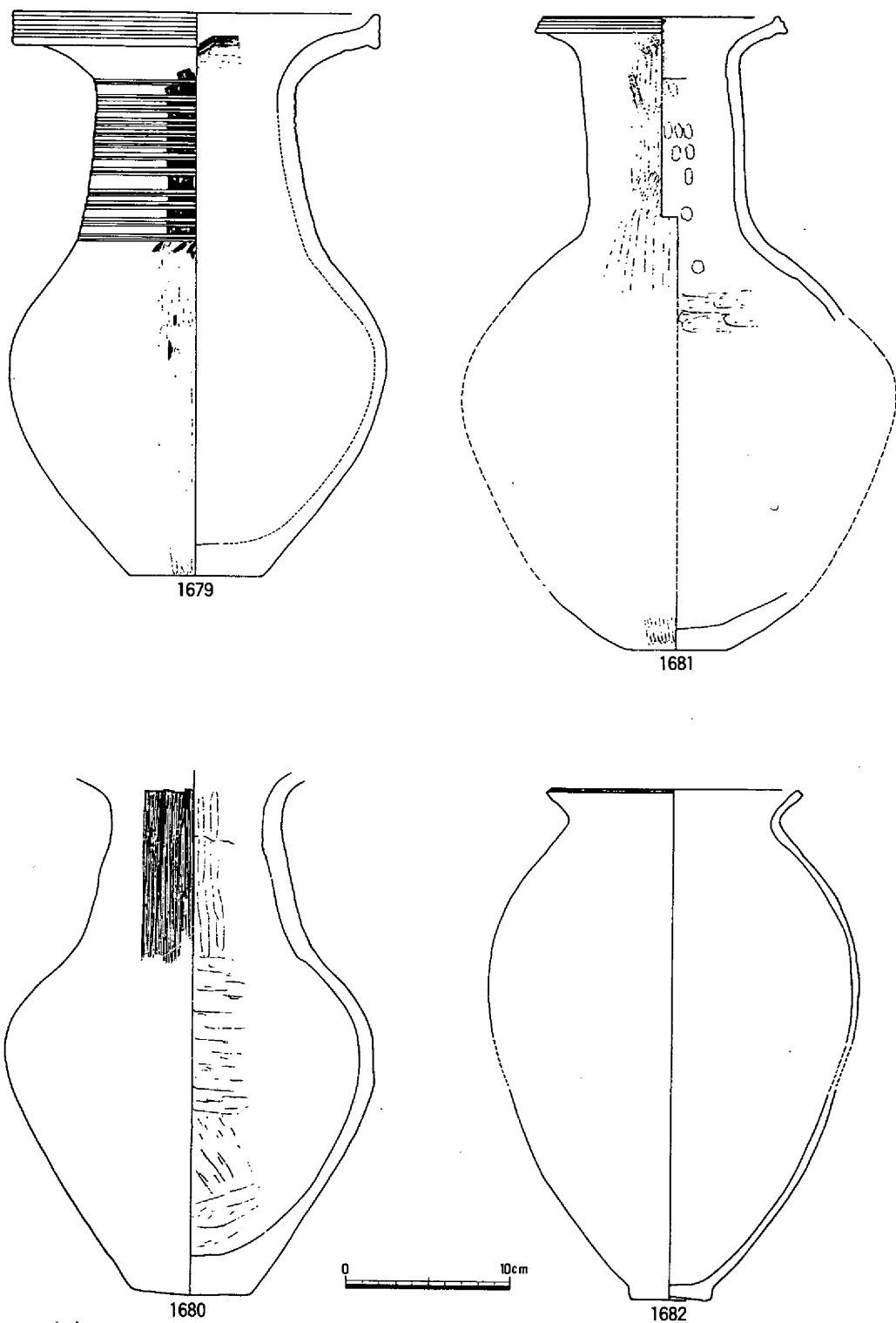
規模は、 $200 \times 145\text{cm}$ で深さ 33cm を測る楕円形のプランを呈する。北側を溝—18に切られているため上端が欠失しており、規模はこれより長くなる。土壌内には、 $72 \times 52\text{cm}$ で深さ 20cm のピットが掘り込まれている。

出土遺物は底面に接して認められたのではなく、若干浮いた状態で検出されている。またいずれの土器も土壌内に置かれた状態であったことが推測される。

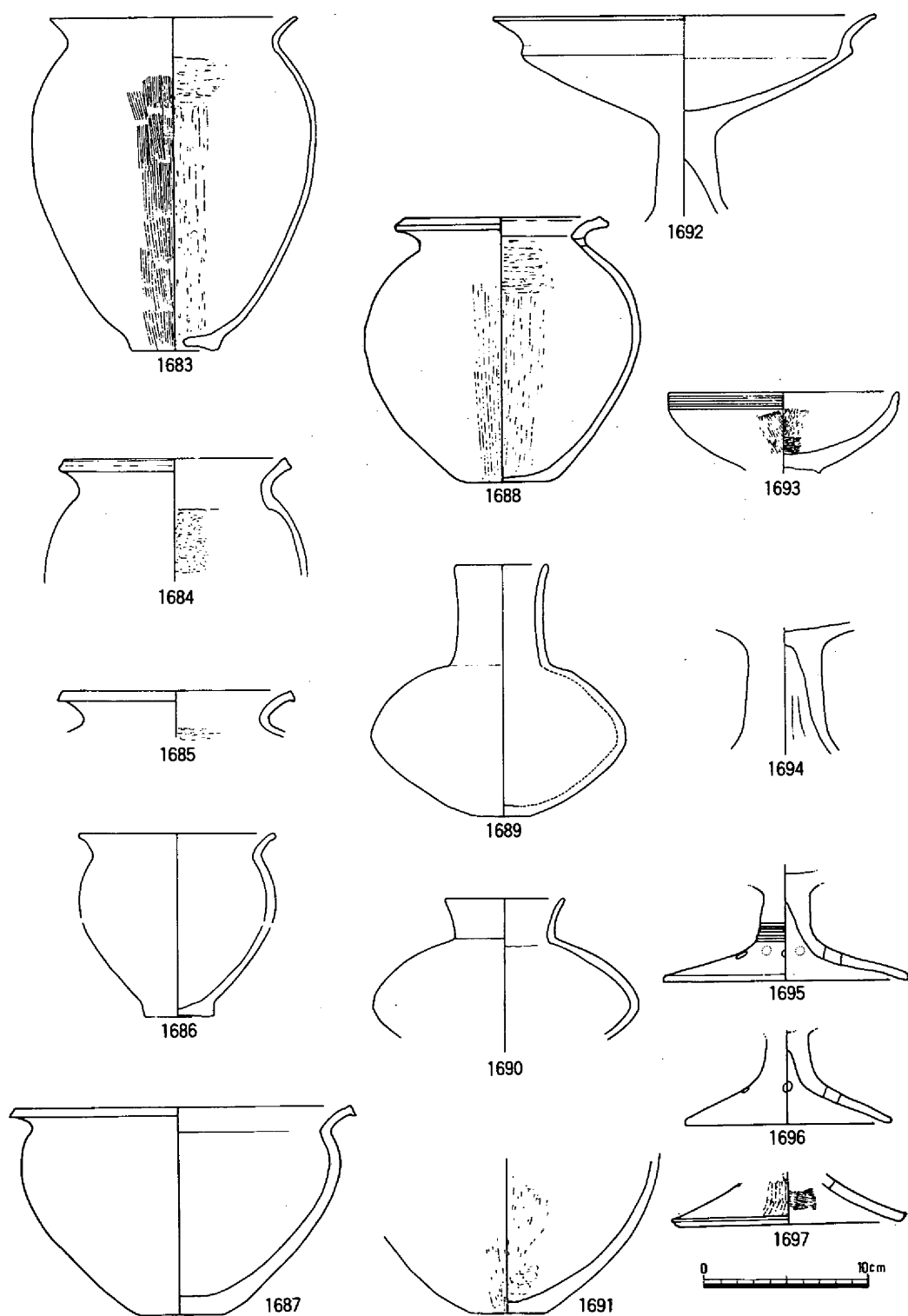
土壌—68 (第411図)

規模は、 $108 \times 49\text{cm}$ で深さ 33cm を測る楕円形のプランを呈する。底面は播鉢状となり一方向に向ってやや深めとなっている。出土遺物は、土壌内の2層からなる堆積土中の1層の茶灰色粘質土から多くの出土をみている。

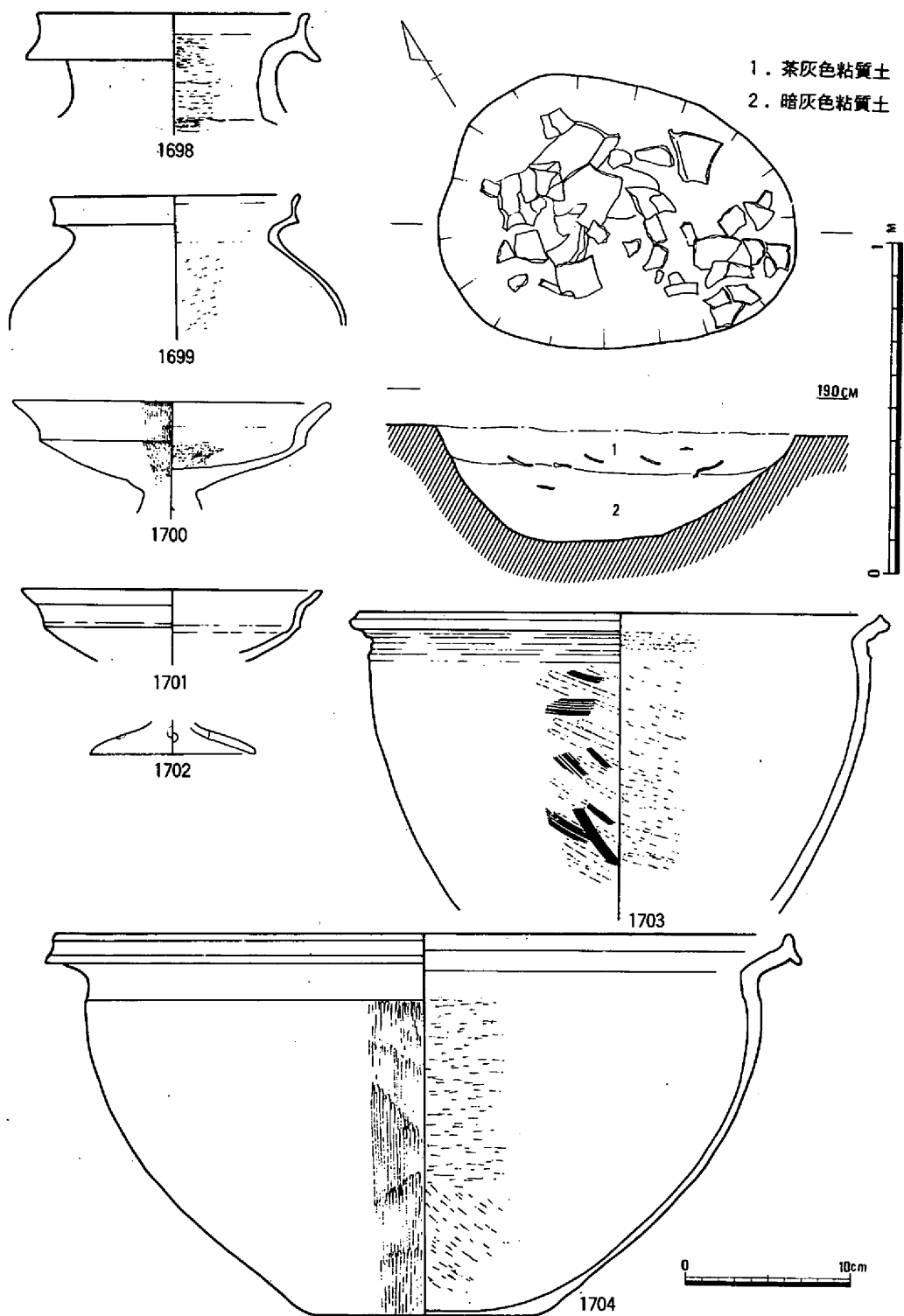
第408図 土壌—67 ($\frac{1}{30}$)



第409図 土壙—67出土遺物 (1)



第410図 土壌—67出土遺物 (2)



第411図 土壌—68 ($\frac{1}{20}$)・出土遺物

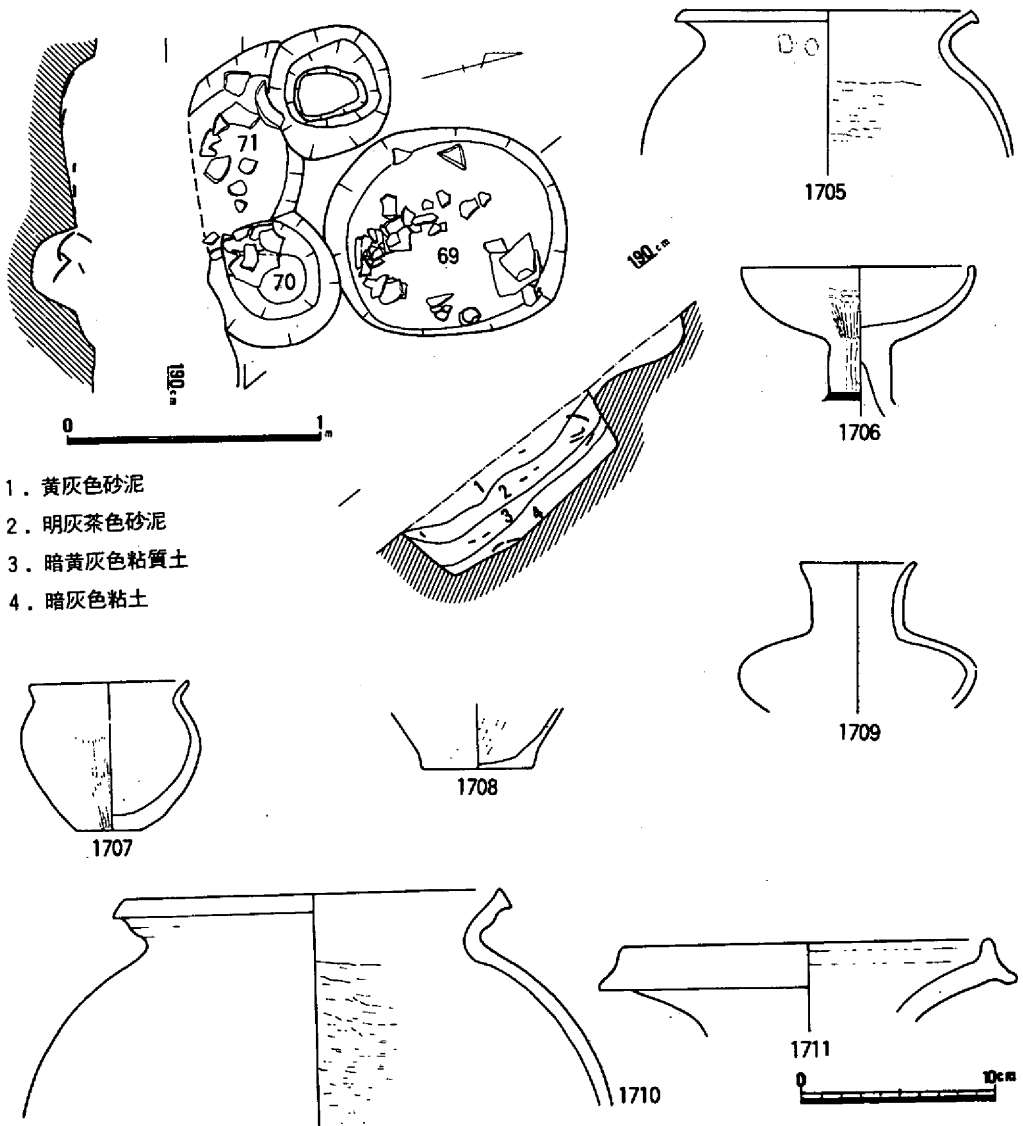
土壙—69（第412図）

規模は、95×81cmで深さ30cmの円形のプランを呈する。この土壙は南端を土壙—70により切られている。

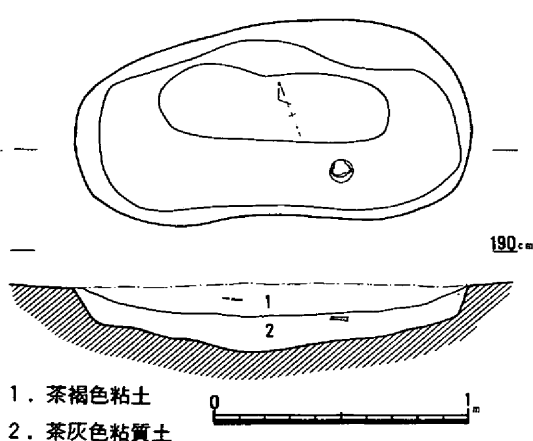
土壙—70（第412図）

規模は、径50cmほどを測る円形プランを有するものである。土壙—71と重複しているが、当土壙が新しい。

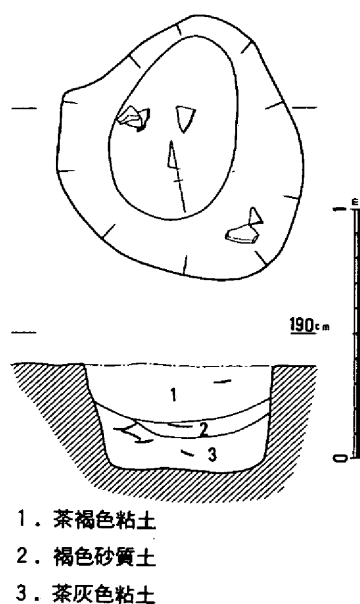
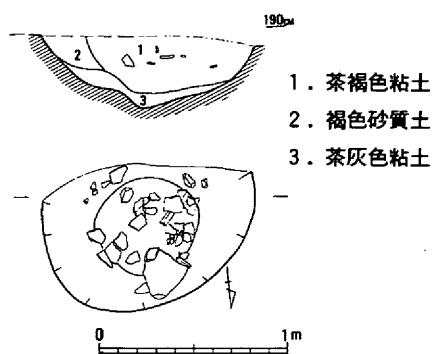
出土遺物は、甕の上半部が落ち込んだ状態で検出された。



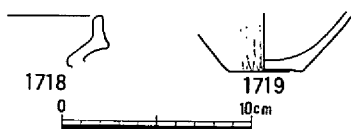
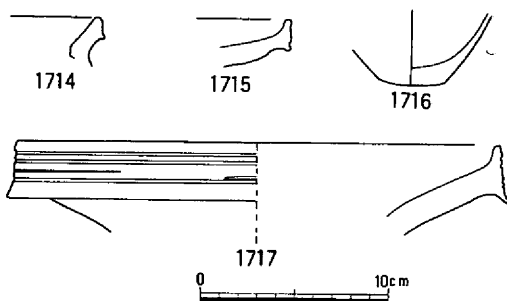
第412図 土壙—69・70・71 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物



第413図 土壙—72 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物



第414図 土壙—73 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物



第415図 土壙—74 ($\frac{1}{40}$)・出土遺物

土壙—72 (第413図)

規模は、156×76cmで深さ27cmを測る隅丸長方形を呈する。底面はやや凹凸をもっている。

出土遺物は、壺の小片と台付破片が見出されているが、埋土中からである。

土壙—73 (第414図)

規模は、103×100cmで深さ41cmを測る円形のプランを呈する。北側を溝—18に切られている

土壙—71 (第412図)

土壙—70および柱穴と重複しており、規模は不明で深さ13cmを測る。

出土遺物は、壺を認めるが他は小片で図化できなかった。

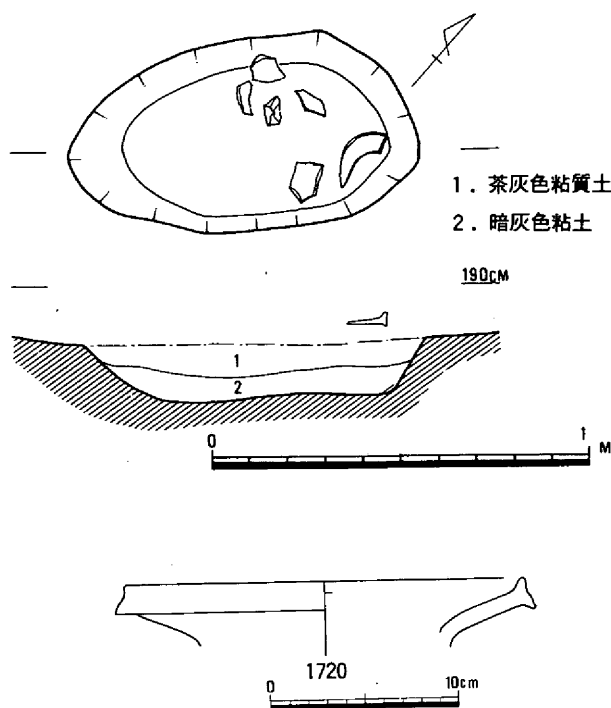
ため、規模は大きくなる。掘り方は逆台形状となり、底面は平坦である。

出土遺物は少破片だけであるが、壺 1715・1717 と甕 1714・1716 がみられる。

土壌—74 (第415図)

規模は、短軸が 112 cm で深さ 39 cm を測る 楕円形のものである。土層断面の状態から 2 層および 3 層は掘り過ぎと当初考えられたが、検討の結果土壌埋土と判断した。

出土遺物は、1 層から土器の少破片が出土した。図化できたものは、甕の口縁部 1718 と甕の



第416図 土壌—75 (1/20)・出土遺物

底部 1719 である。

土壌—75 (第416図)

規模は、92×50 cm で深さ 14 cm を測る 楕円形のプランを有するものである。

出土遺物は、プラン検出面でのものであり土壌内においては検出されなかった。

土壌—76 (第417～422図)

規模は、200×145 cm で深さ 33 cm を測る 長楕円形のプランを有するものである。土壌底面の状態はほぼ平坦となっている。

検出段階においては西側の側溝掘削時に多量の土器を認め、東側においてプランを追求しピット状のものを検出した。しかしながらそのピット内の遺物の密度が濃く、かつまた西側の調査区域外にも広がっている状態であった。このことから、西側に若干の拡張区を設定し、このピット状のものの全容を把握することに努めたのである。その結果、前述した土壌としての全容を把握することができた。

当土壌は西側拡張区において、竪穴式住居—7 および土壌—66 と重複している。竪穴式住居—7 との関係は当土壌が古く、また土壌—66 とは北西辺が切られていることから当土壌が新しいことが確認された。堆積層序は、土器の密度が高いために下層部分の土層のみ確認することが可能であった。いずれにしても、各層中には炭化粒が含まれており、特に図示した 1 層と上

層との間には炭が層として認められている。

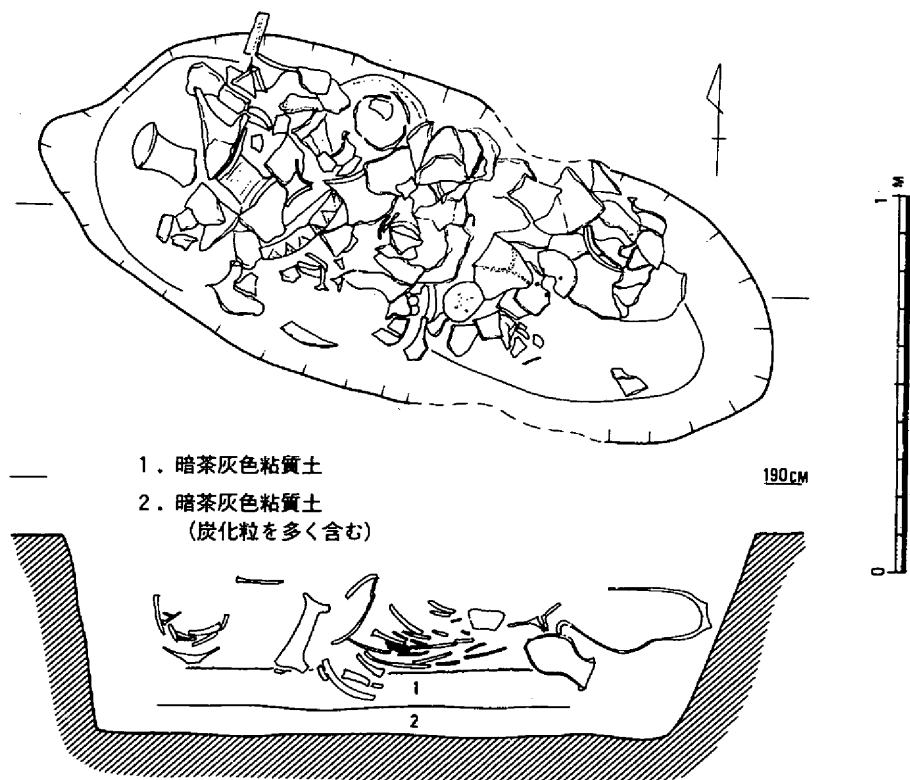
遺物の出土状態は、土壌の南東よりが若干の空間部を形成するが、他は土壌内に土器と土器との間に土をあまり含まないため埋土よりも土器の量が多い状況であった。

土器番号1747の器台が土壌内の底面に接する状態で検出され、他の遺物はいずれもそれより上から検出されている。壺の頸部にかけての破片は北東辺の上方に、また高杯についてはそれよりも下方に存在していることが調査時において認められている。

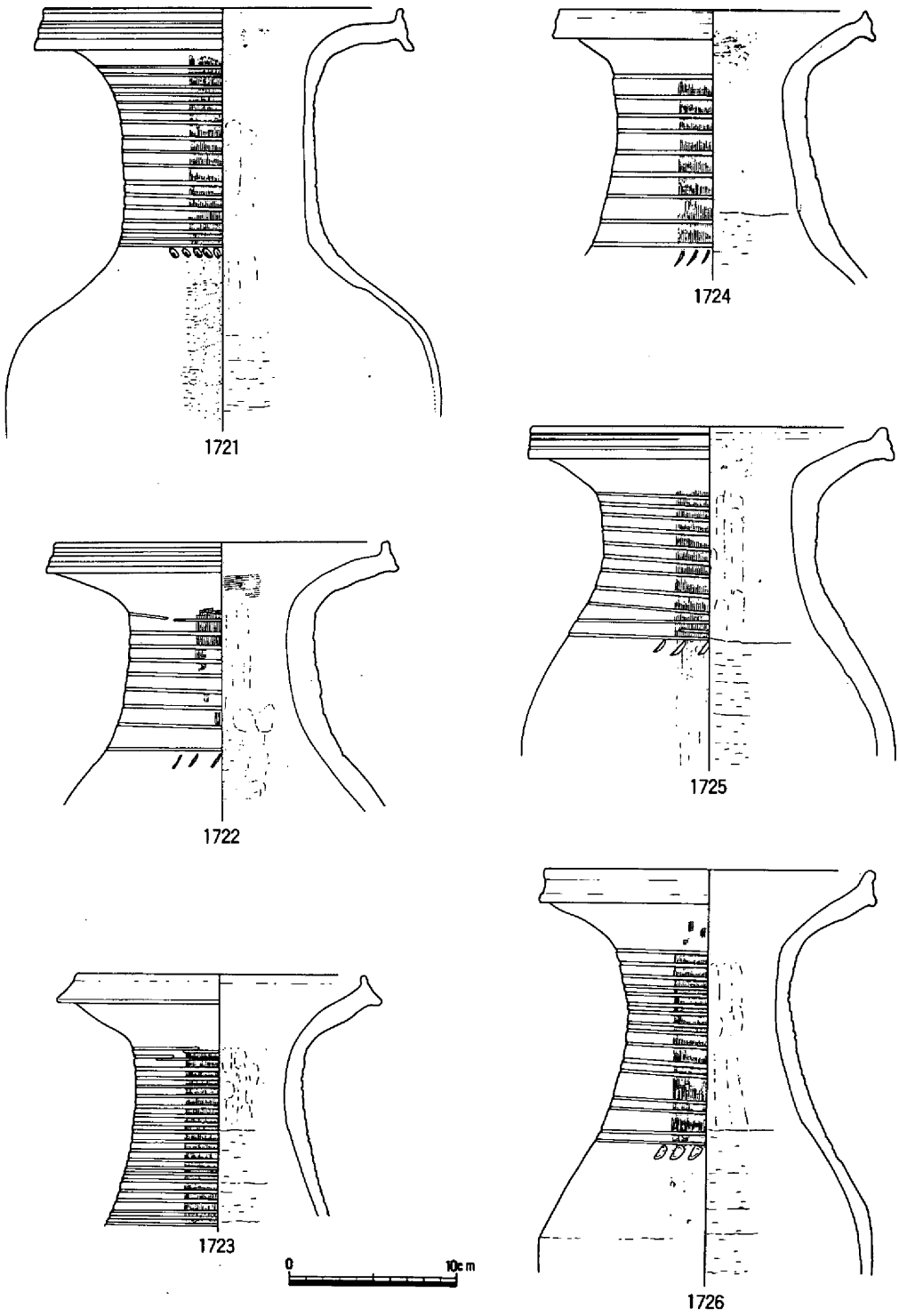
個々の土器についての状態は、比較的破片が大きく、土壌内において破損したと推定されるものである。壺のように口縁部から頸部そして肩部にかけてほぼ完形品に近い状態であるが、胴部下半から底部にかけての破片が認められないものもあり、他所での破損が考えられるものである。

いずれにしても、土壌内の遺物の出土状態からして、時間的経過を持って埋没した様相はなく、短期間に遺物が土壌内に入れられたと推測されるのである。

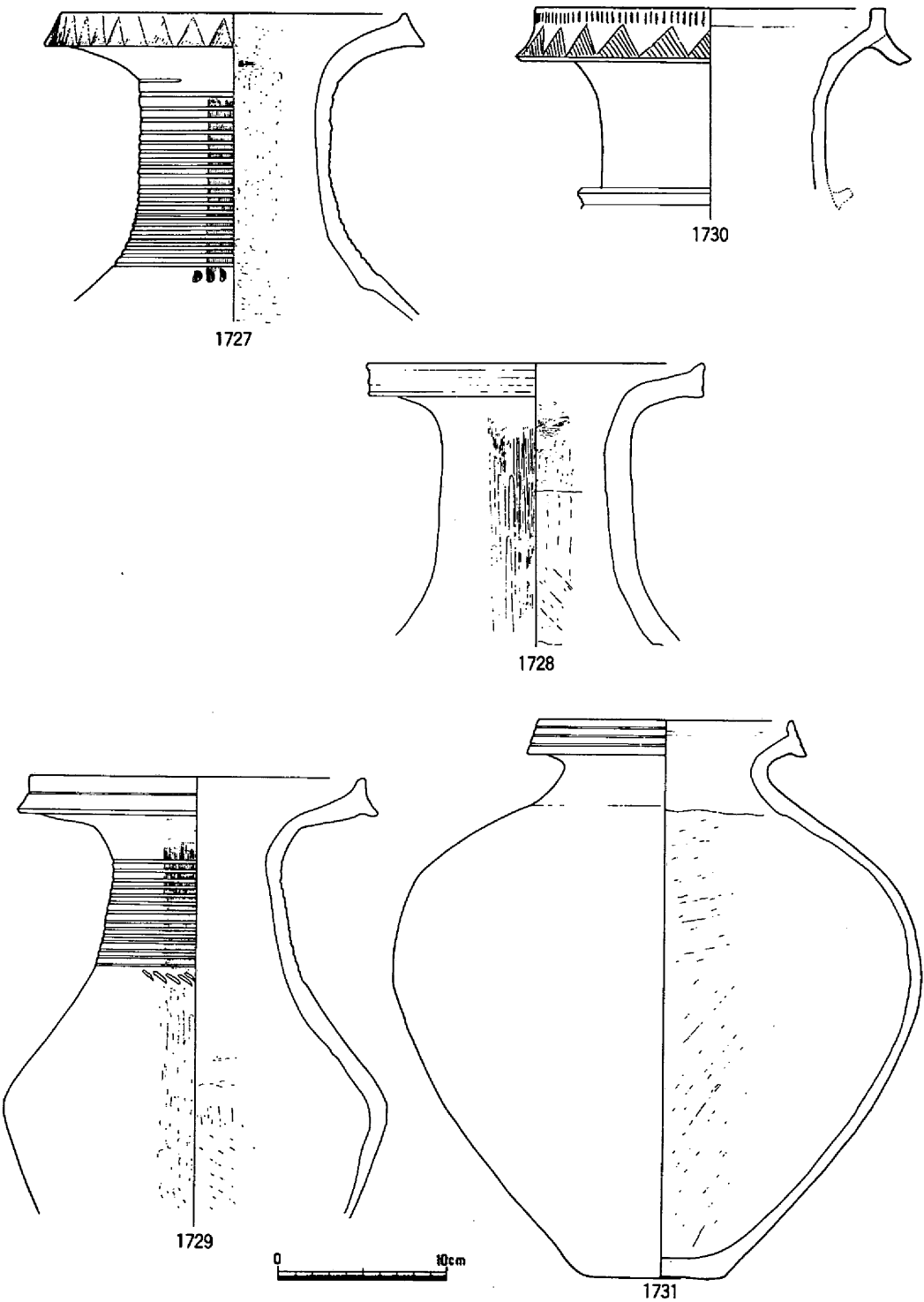
時期は、百・後・Ⅲに属する。



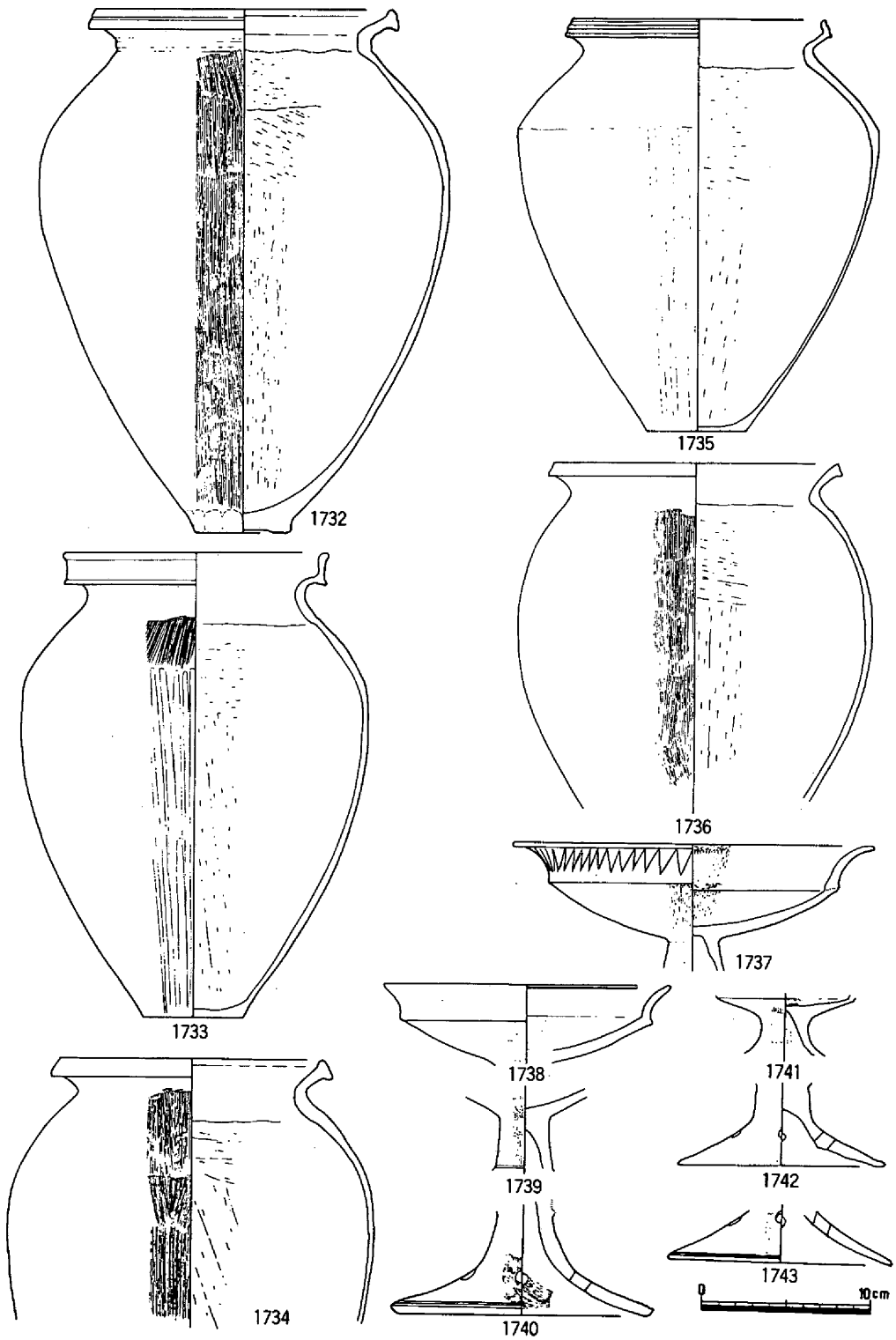
第417図 土壌—76 ($\frac{1}{20}$)



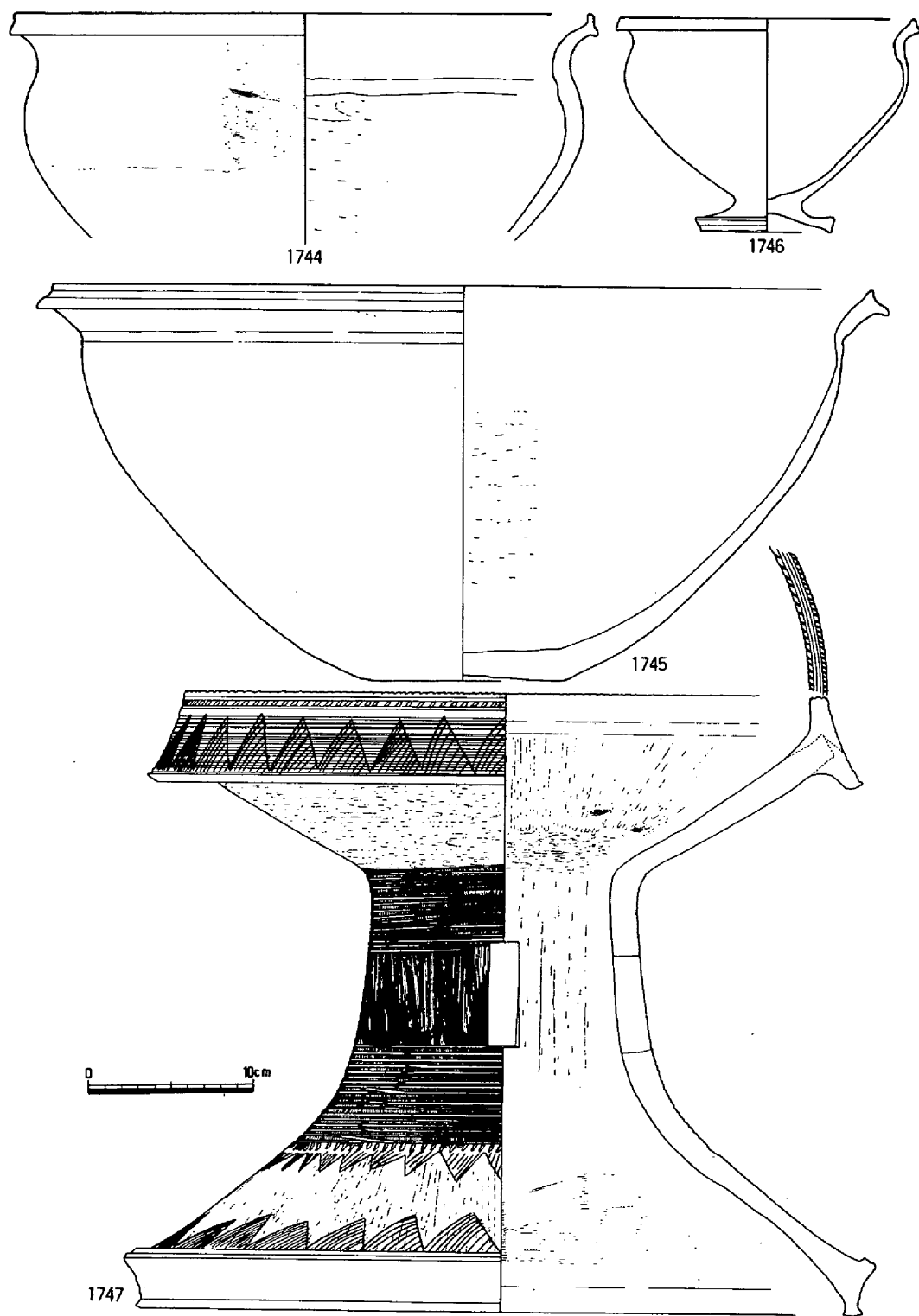
第418図 土壙—76出土遺物（1）



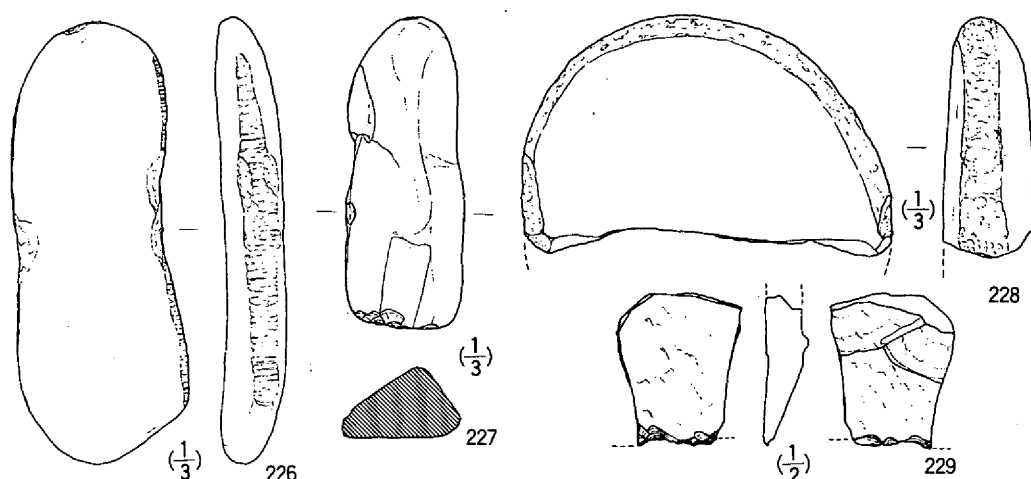
第419図 土壙一76出土遺物（2）



第420図 土壙-76出土遺物 (3)



第421図 土壇一76出土遺物（4）



第422図 土壌—76出土遺物 (5)

土壌—77 (第 423 図)

規模は、166×136cmで深さ26cmを測る隅丸方形のプランを有するものである。底面はほぼ平坦となっている。遺物の出土状態は、いずれも土壌プラン確認面において認められ、土壌内においては出土しなかった。出土遺物において土器番号1752は、包含層出土の1867と接合しないが同一個体である。

土壌—78 (第 424 図)

規模は、西側が側溝に切られているため正確には出せないが、径92cmで深さ26cmを測る不整円形のプランを有するものである。断面は鍋底形を呈し、底面はやや平坦である。2層と3層の間に炭化物の層が存在する。

出土遺物は、土壌の中ほどに検出されたが小破片であり、弥生後期であるが、それ以上は困難である。

土壌—79 (第 425 図)

規模は、130×76cmで深さ13cmを測る楕円形のプランを有するものである。東側部分が柱穴により切られている。底面の状態は平坦ではなく、北から南に下がり、断面からみれば下ぶくれの状態を示している。

土壌の時期は出土した甕から百・後・IVと考えられる。

土壌—80～86 (第 426 図)

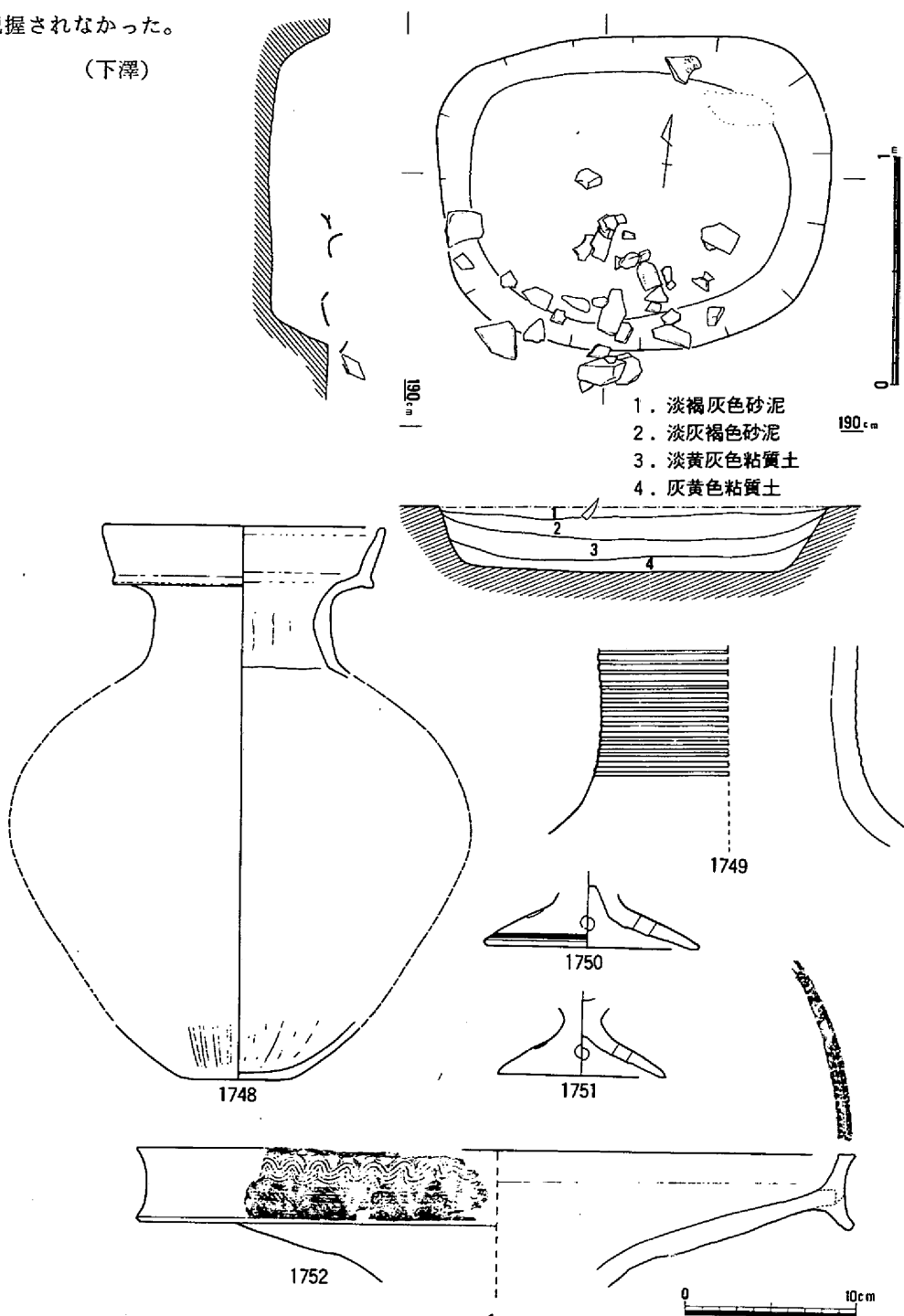
これらの土壌については、個々に図示していないが時期が明らかとなる遺物が伴出しているため記載した。

土壌—85を除いては、いずれも柱穴状を示し80, 81は明確な柱痕跡を確認している。これらの深さは、32～60cmを測る。

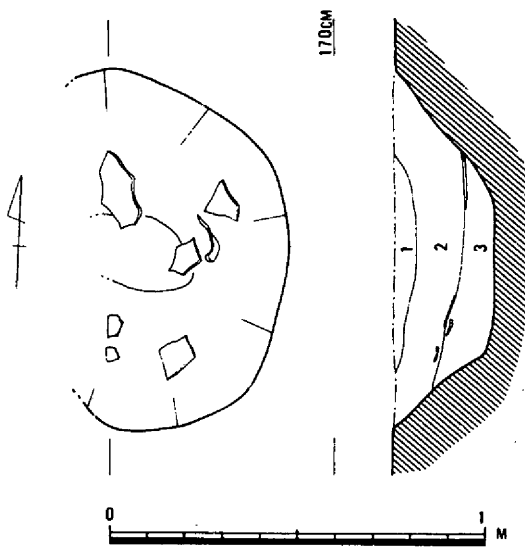
百間川今谷遺跡

なお、今谷橋脚-1においては、これらと同様のものが非常に多く確認されており、時期的にもこれら出土遺物と大差ないものと推測される。しかしながら建物としてまとまる状態では把握されなかった。

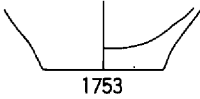
(下澤)



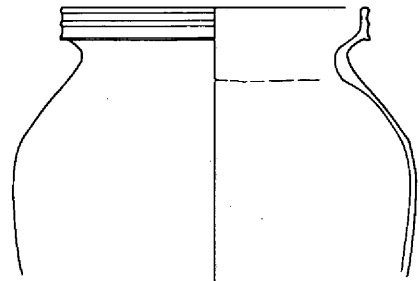
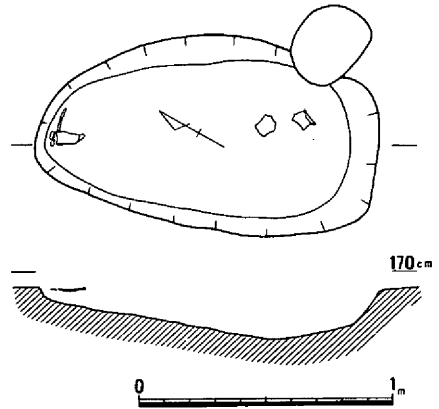
第423図 土壌-77 (1/30)・出土遺物



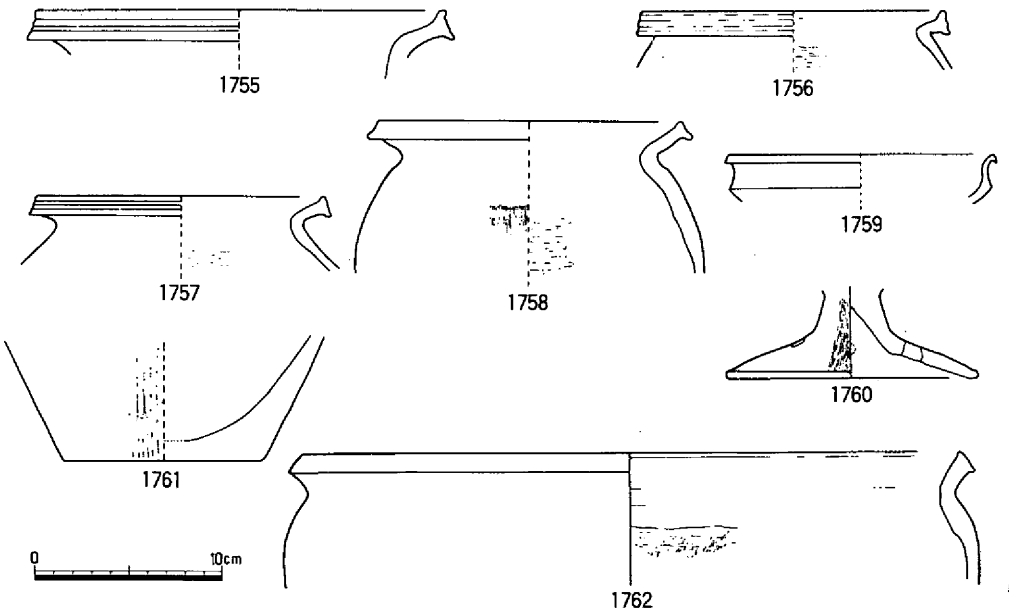
- 1. 茶灰色粘土
- 2. 暗茶灰色粘土
- 3. 灰色粘土



第424図 土壌-78 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物



第425図 土壌-79 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物



第426図 土壌-80~86出土遺物

土壇—87（第 427 図）

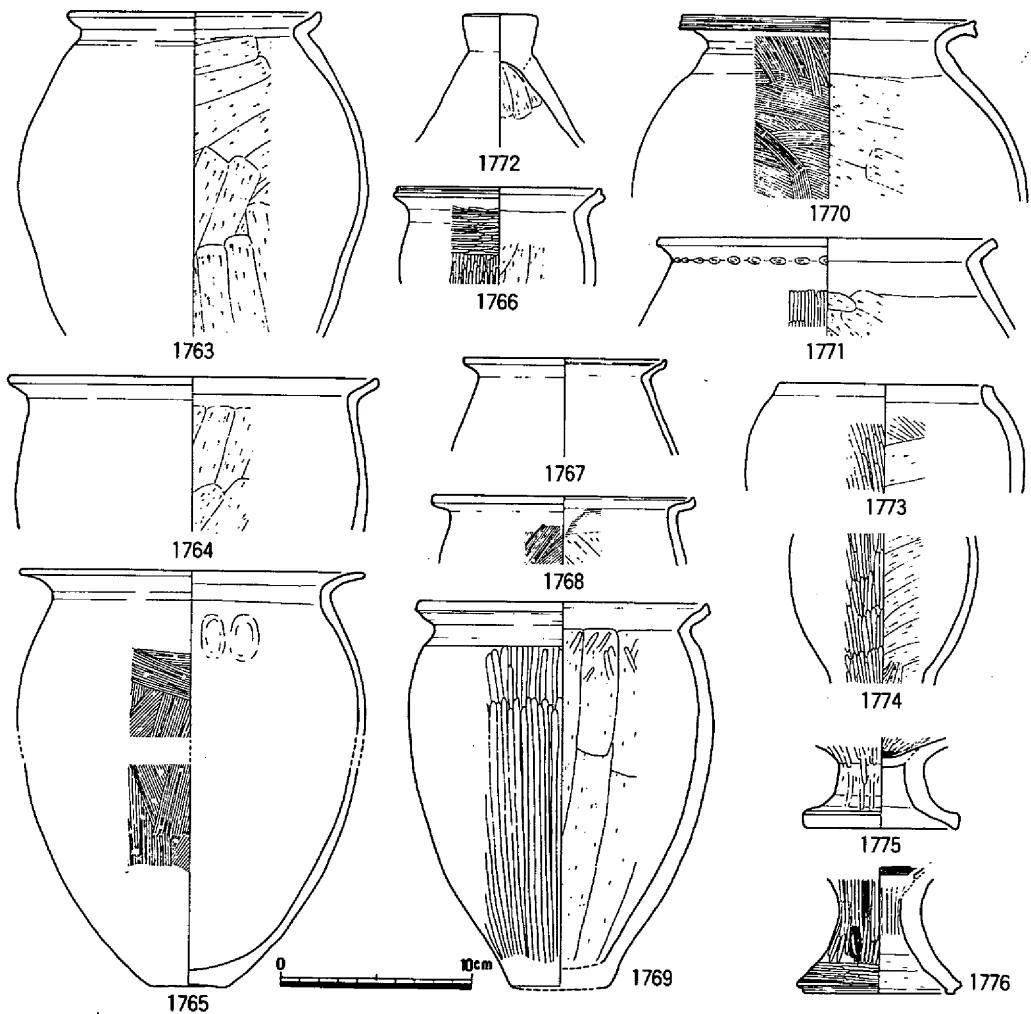
302—S 内の調査区北東隅に位置し、東半は調査区域外である。遺物は、甕1763・1770・1771・1766、蓋1772が出土しており、時期は百・後・Ⅱに比定できる。

土壇—88（第 427 図）

302—R の東端中央にあり、遺物は、無頸壺 1773、甕1765・1767 が出土している。時期は、百・後・Ⅳに属するものと考えられる。

土壇—89（第 427 図）

302—S のほぼ中央に位置する。遺物は、甕1764・1768、高杯 1775 および小型の甕胴部と考えられる1774が出土しており、これらによれば時期を百・後・Ⅱに求めうる。



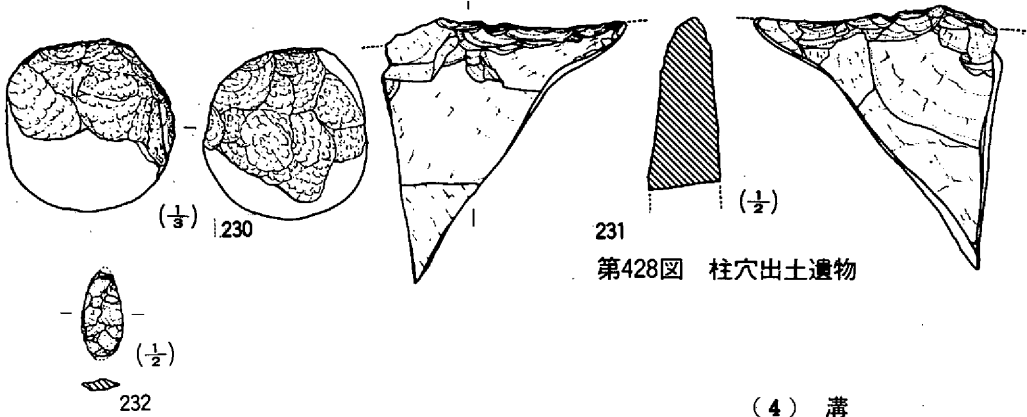
第427図 土壇—87～91出土遺物

土壙—90 (第427図)

302—Sの西北隅に位置する。遺物は壺 1769 1点であるが、これによりその時期を百・後・IVに求めることができる。

土壙—91 (第427図)

302—Sの北西隅にあり、土壙—90の西側に位置する。図示できた遺物は高杯 1776 1点であるが、他の遺物を含めた観察によれば、時期を百・後・IIに比定できる。 (光永)



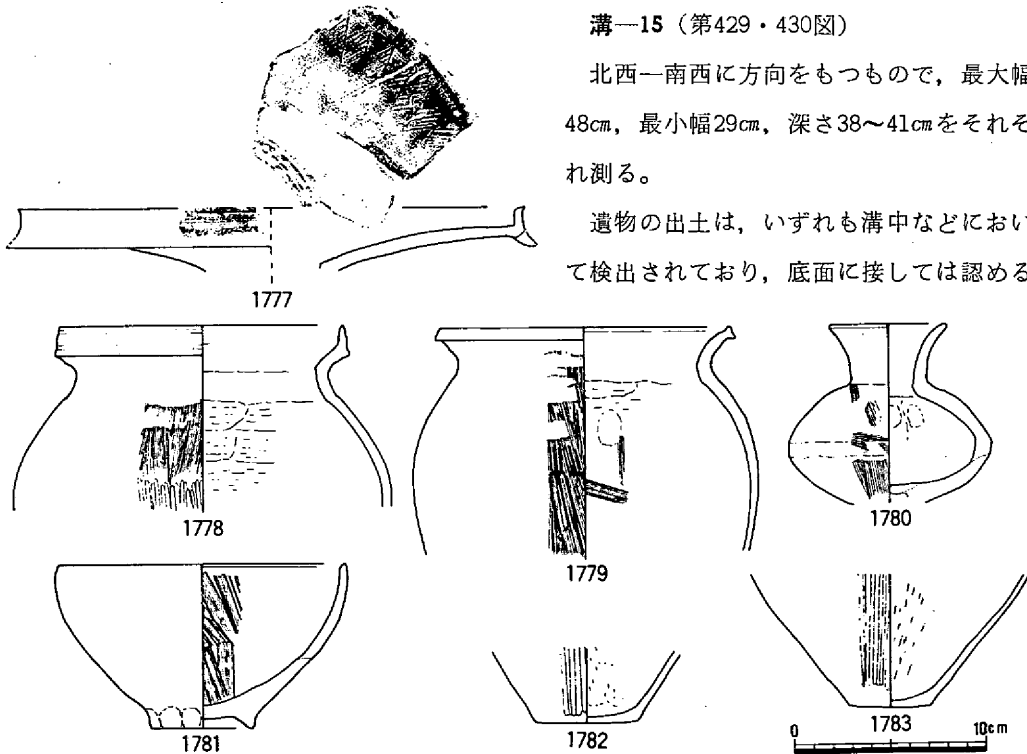
第428図 柱穴出土遺物

(4) 溝

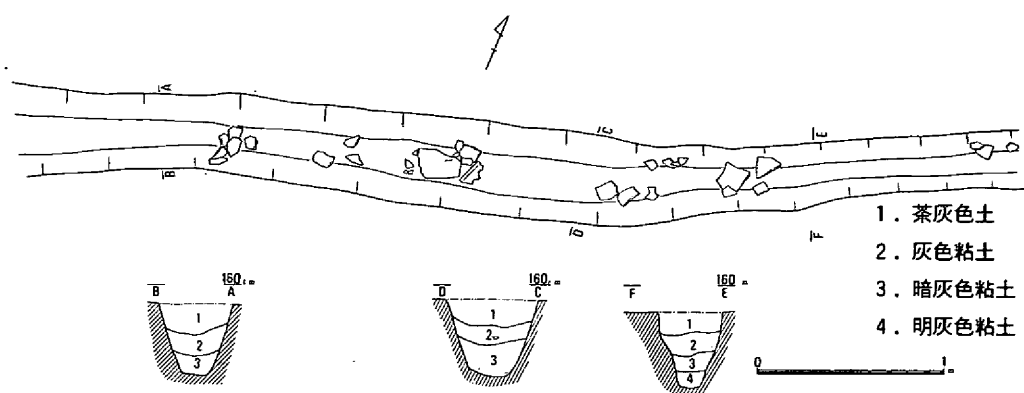
溝—15 (第429・430図)

北西—南西に方向をもつもので、最大幅48cm、最小幅29cm、深さ38~41cmをそれぞれ測る。

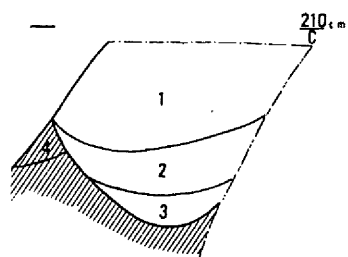
遺物の出土は、いずれも溝中などにおいて検出されており、底面に接しては認める



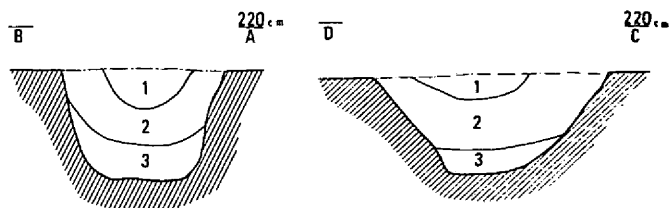
第429図 溝—15出土遺物



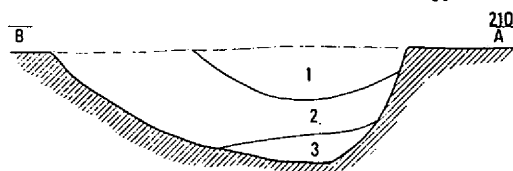
第430図 溝-15 ($\frac{1}{40}$)



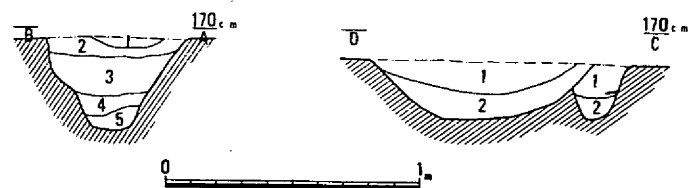
第431図 溝-16 ($\frac{1}{30}$)



第432図 溝-17 ($\frac{1}{30}$)



第433図 溝-18 ($\frac{1}{30}$)



第434図 溝19・20・21 ($\frac{1}{30}$)

溝-16

1. 淡灰黄色微砂
2. 淡灰茶色粘質微砂
3. 明灰色粘質微砂
4. 灰黄色粘質微砂

溝-17

1. 淡灰黄粘質微砂
2. 黄灰色粘質微砂
3. 灰茶色粘質微砂

溝-18

1. 暗灰茶色粘質微砂
2. 暗茶灰色粘質微砂
3. 灰色粘質微砂

溝-19

1. 炭化物
2. 黄褐色粘質土
3. 茶灰色土
4. 茶灰色粘質土
5. 灰色粘土

溝-20

2. 淡黄褐色粘土
2. 淡暗灰褐色粘土

溝-21

1. 淡黄褐色粘質土
2. 淡灰色褐色粘土

ことができなかった。これらの土器から溝の時期は、百・後・Ⅲと考えられる。

溝—16（第431図）

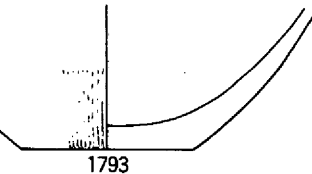
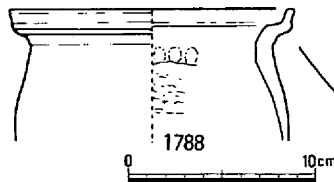
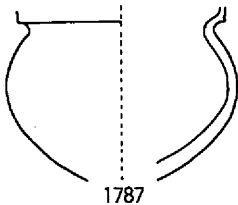
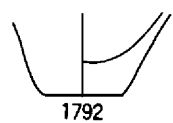
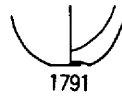
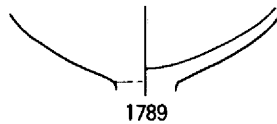
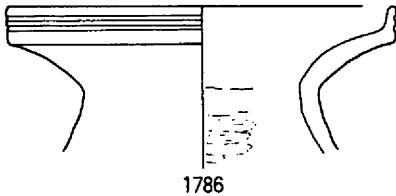
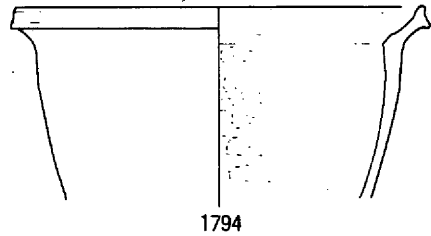
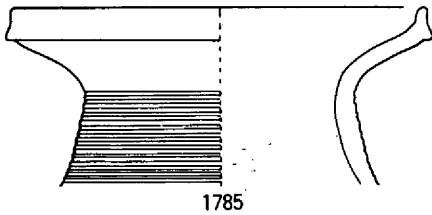
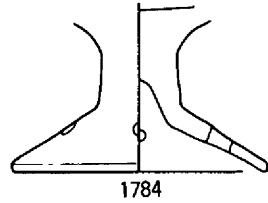
ほぼ東西の方向をもつもので、幅は一部のみ確認されたために不明であり、深さも調査区外にあるために計測できない。しかし、当溝の埋土からの推定の深さは70cmほどである。

溝—17（第432・435図）

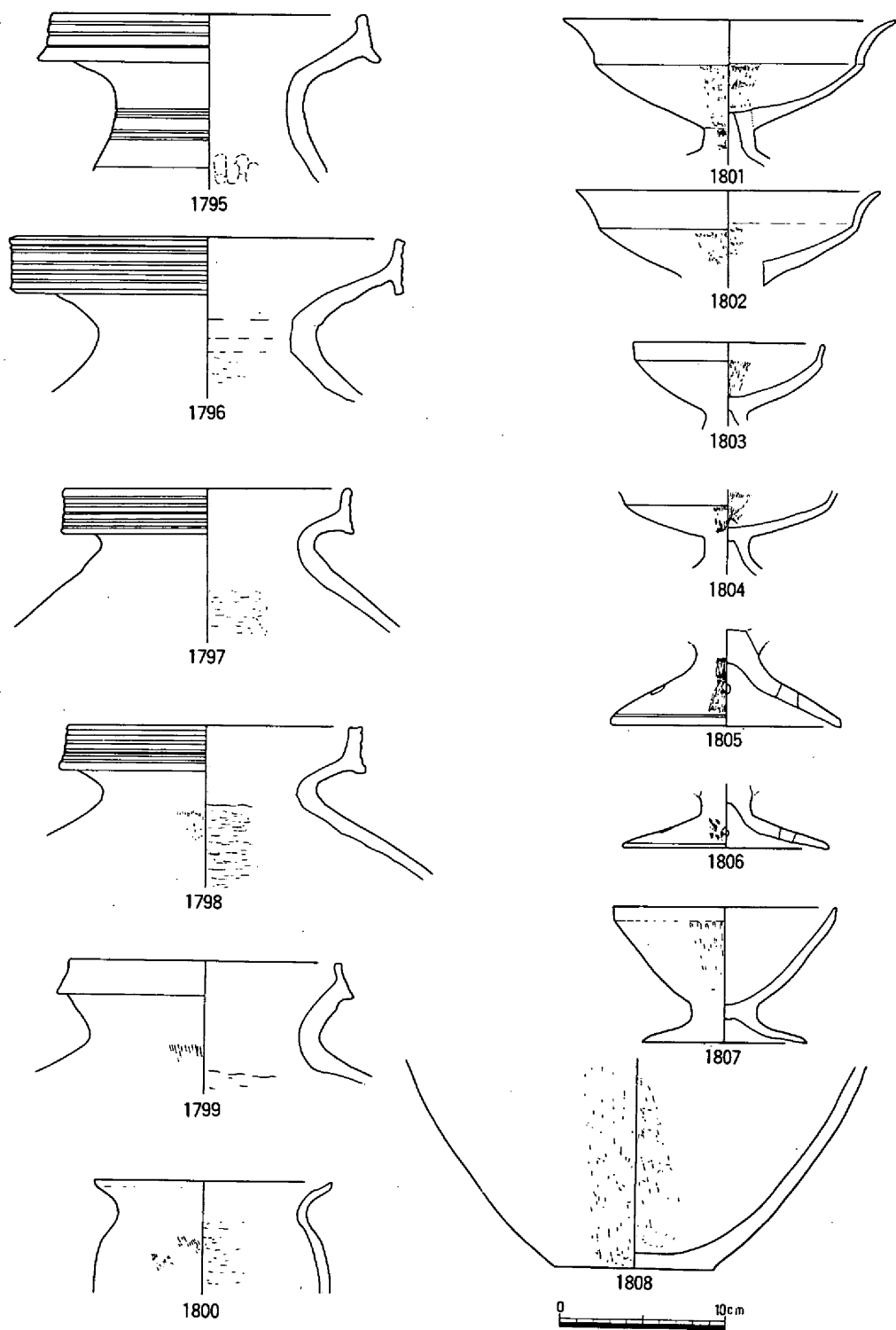
東—西でやや北に向くもので、幅70～90cmで深さは40～45cmをそれぞれ測る。溝の断面形態はほぼU字状を呈し、底面は平坦である。

溝—18・19・20・21・22・23（第433～437図）

これらの溝はいずれも重複しており、個々に記述することが困難であるためまとめて述べる。溝—18は土器溜りを取り除いた下からプランが検出されたものであり、この土器溜りの遺物もこの溝に伴う可能性が大である。他の溝については、溝—18を掘り下げた時点でプランを検出したものである。



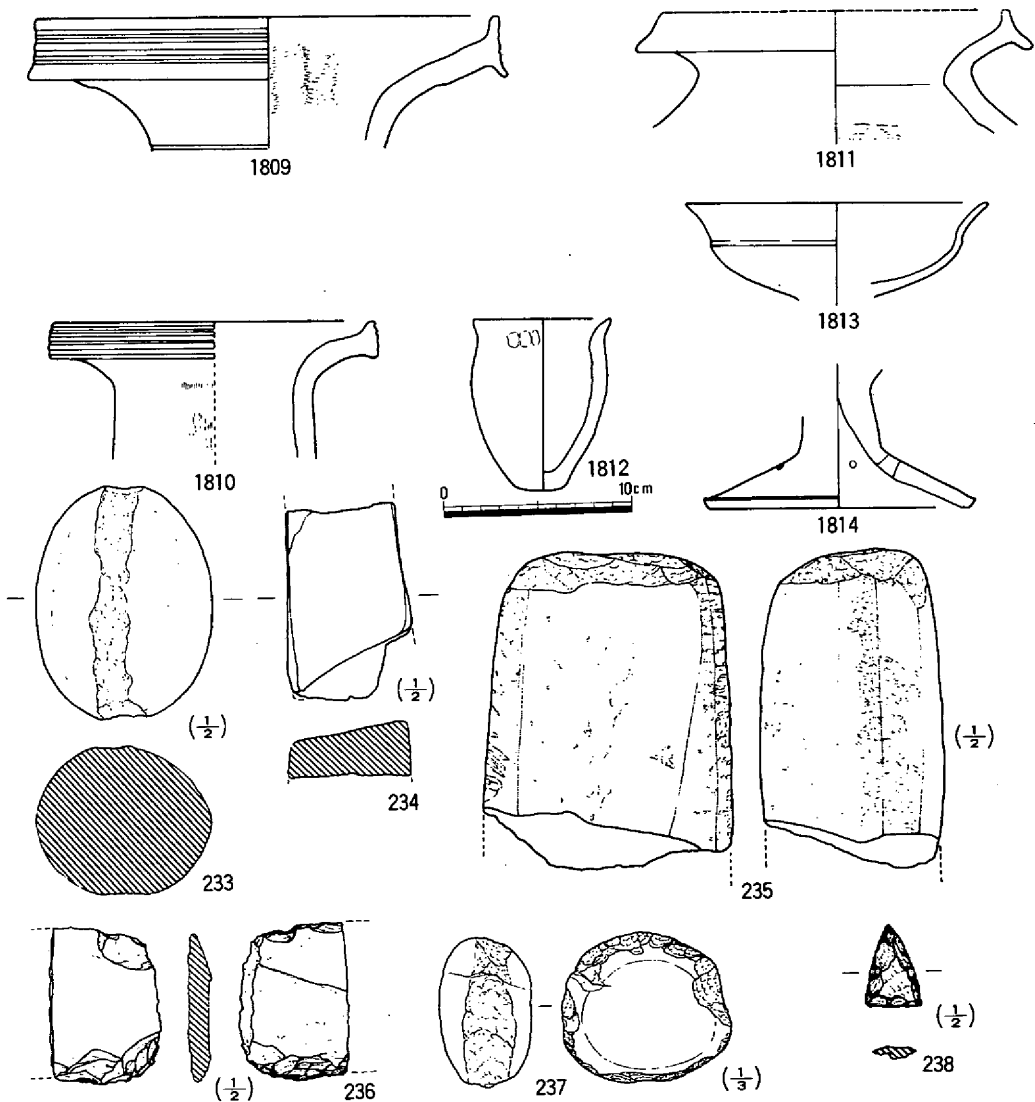
第435図 溝—17・18出土遺物



第436図 溝-21出土遺物

る。溝—19は溝—20と同一のもので、溝—19から枝分かれする。溝—21は、北東—南西方向へ続き、溝—18と切り合って僅かばかり北辺の肩が検出されており、これに溝—21が結ばれると推定される。溝—22は、溝—21の南側で検出されたものであるが、同溝と重なり合う。溝—22の南側に僅かばかり検出されたもので詳細は不明である。

以上の溝は、相互に重複しており、その関係は古い順に19→20→21→22→18として土層断面において確認されたが、溝—18は不明である。各溝からの出土遺物は、時期的な差を余り認め
ることができず、いずれも百・後・Ⅲに相当すると考えられる。

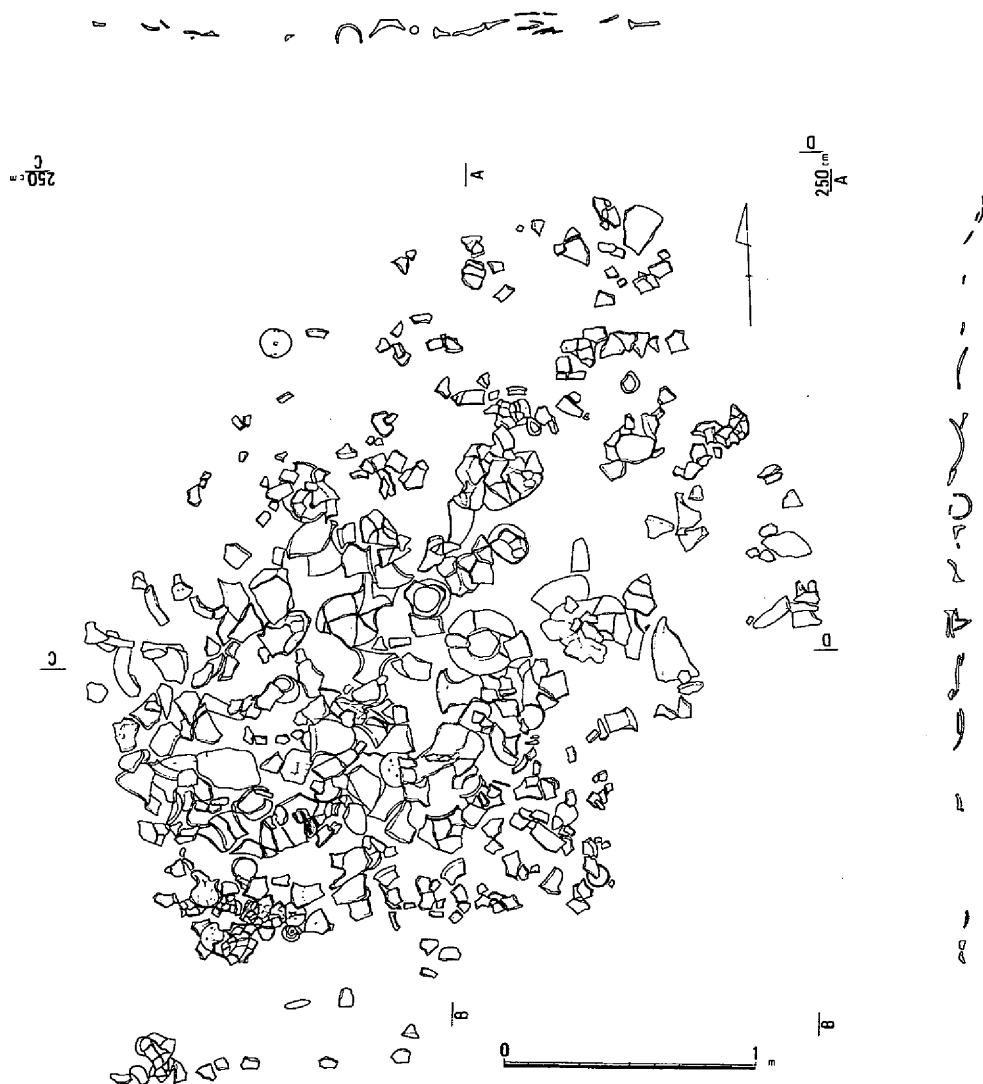


第437図 溝—22出土遺物

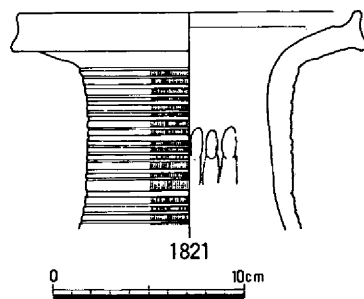
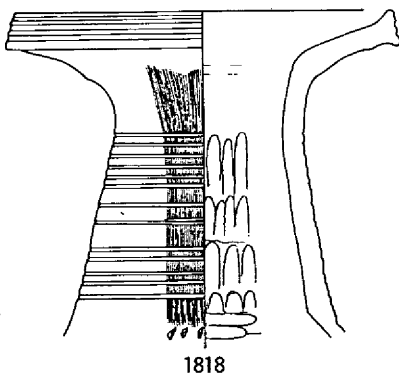
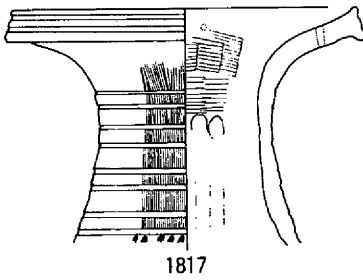
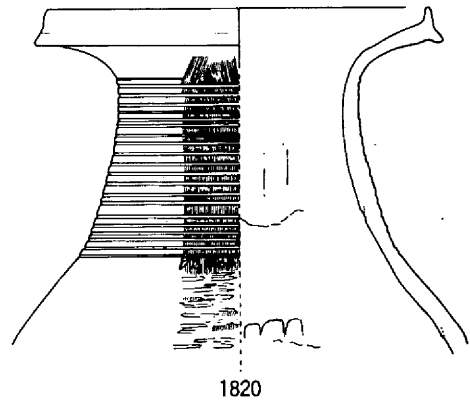
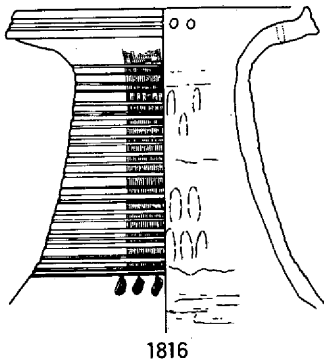
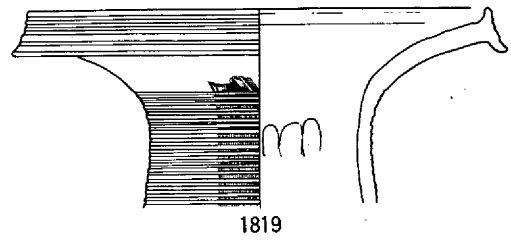
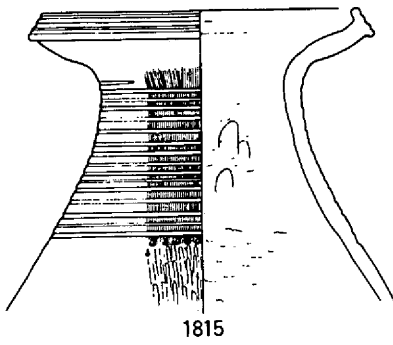
(5) 包 含 層 (第438～447図)

今谷橋脚において土器溜りは4か所認められた。土器溜りー1は、密集する状態で認められ土層は茶褐色土でありレベルにおいては海拔 200 cm 前後である。当土器溜り出土遺物番号は**1815**～**1871**である。このうち**1866**の高杯の裾部は、土器溜りー2から出土し接合できた。**1867**の器台は、土坑ー77からも同一破片が出土している。さらに**1870**の器台は、今谷橋脚ー2のピットから出土したものと接合している。

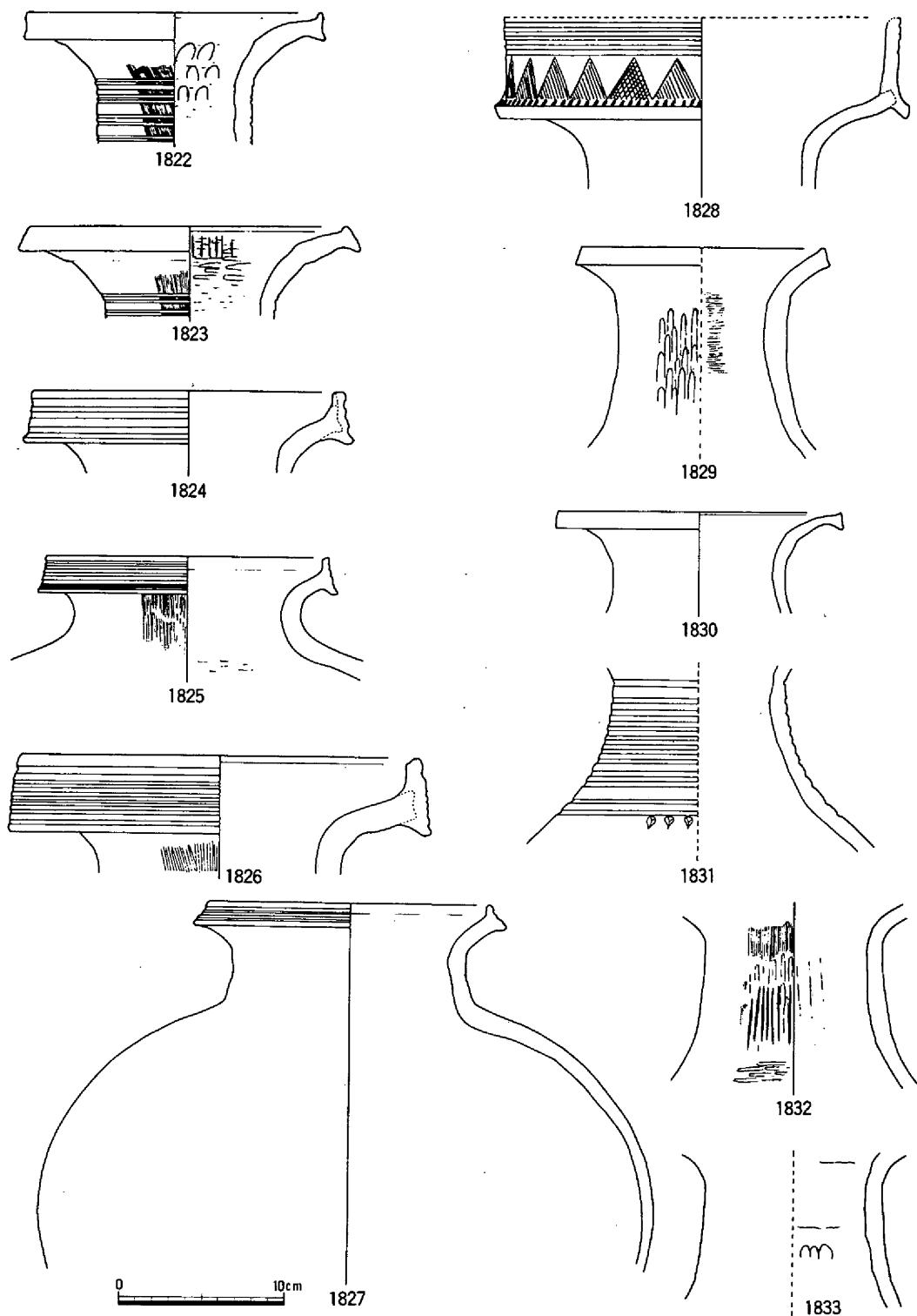
土器溜りー2は、溝ー17の下方において450×300cmの範囲において認められた。出土遺物番号は**1872**～**1882**である。



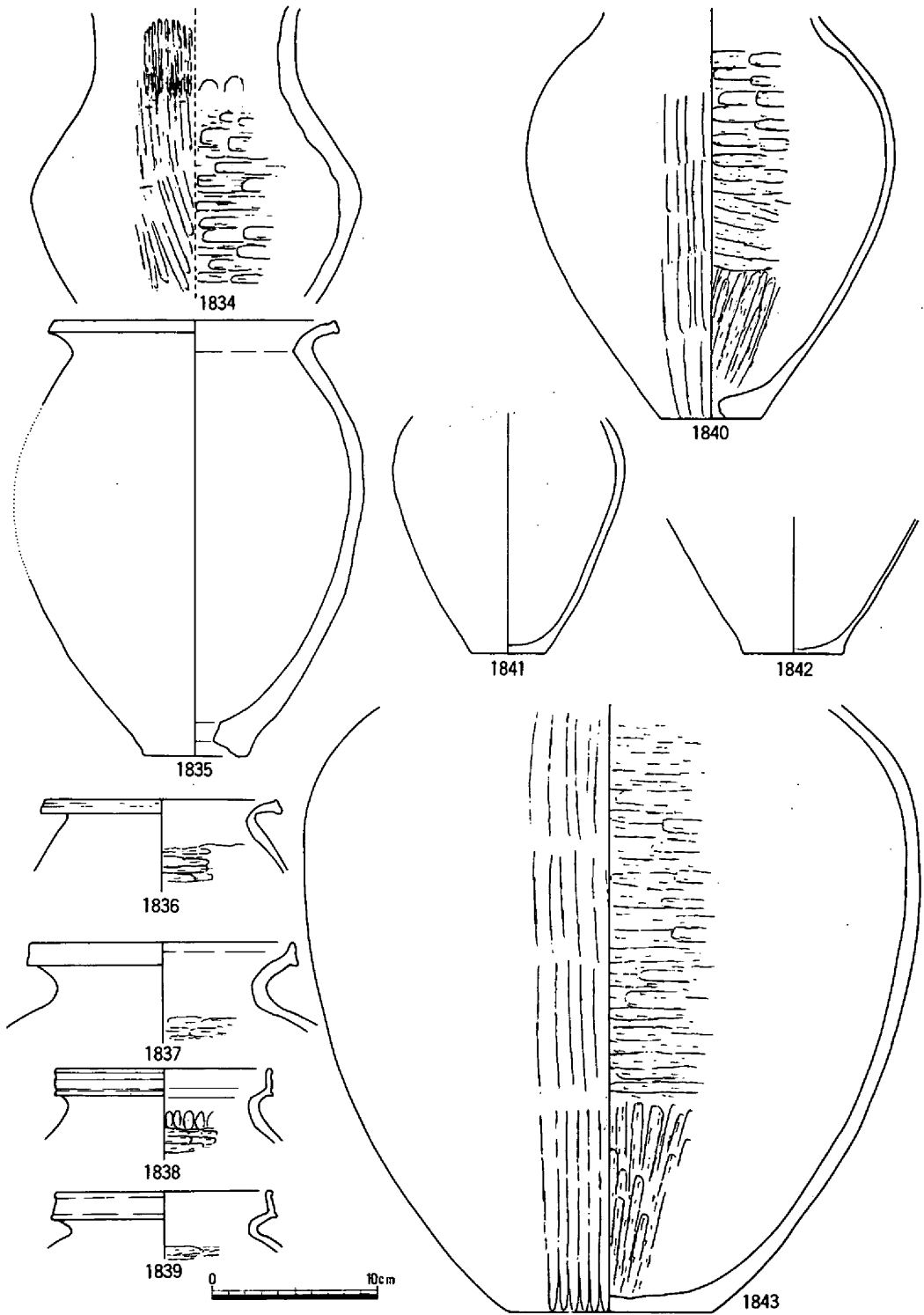
第438図 土器溜りー1 (1/30)



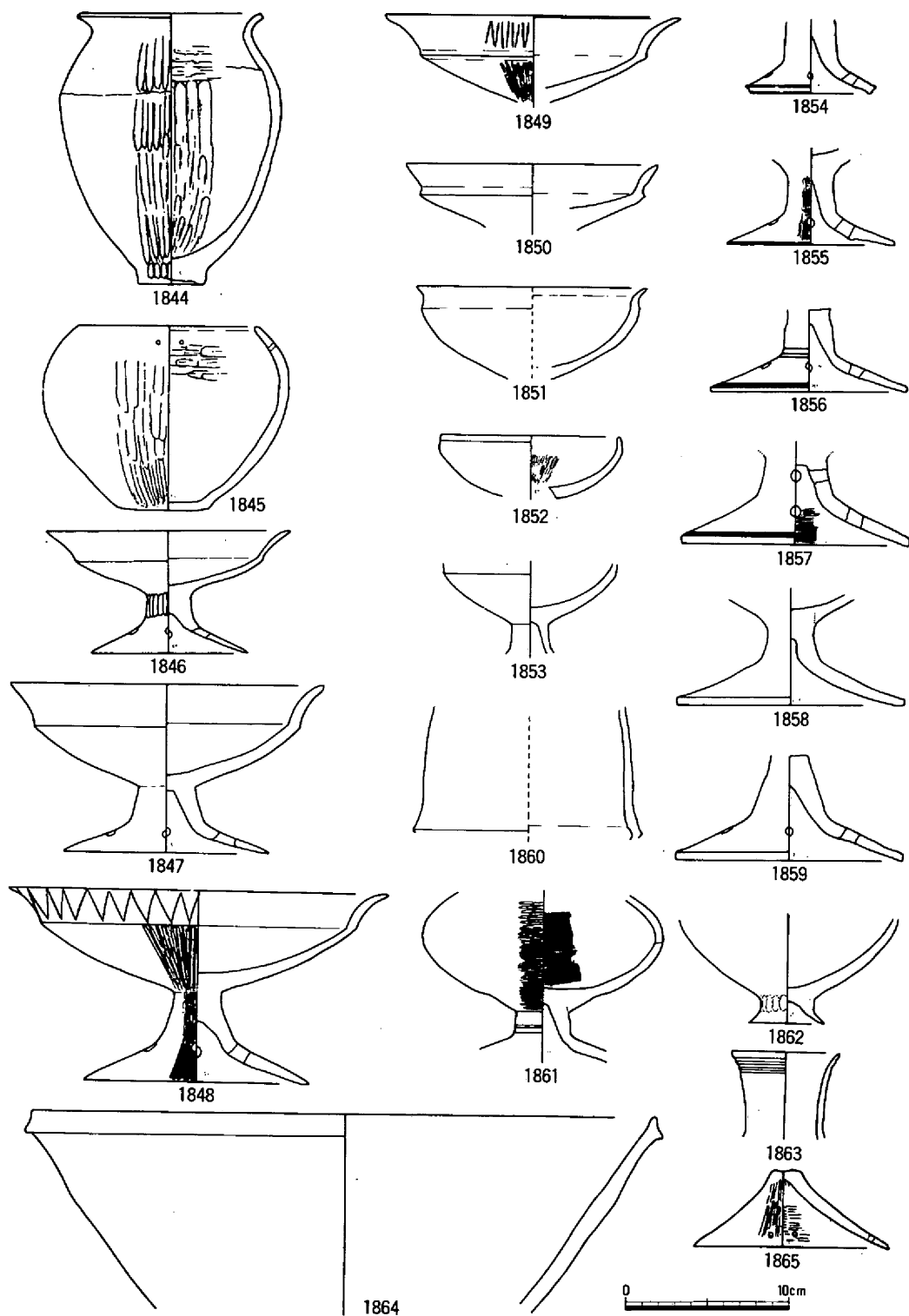
第439図 土器溜りー1 出土遺物 (1)



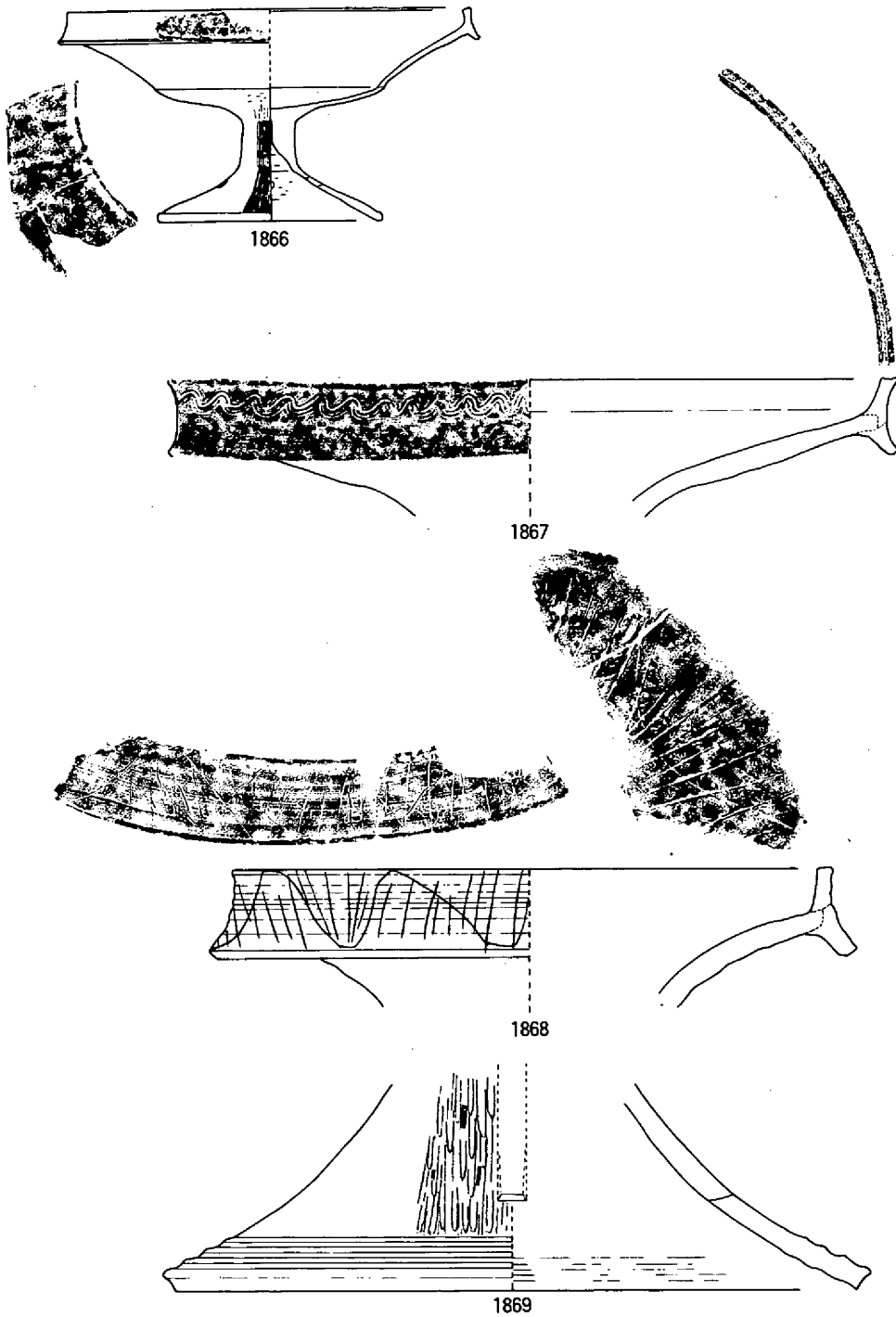
第440図 土器溜り一1出土遺物(2)



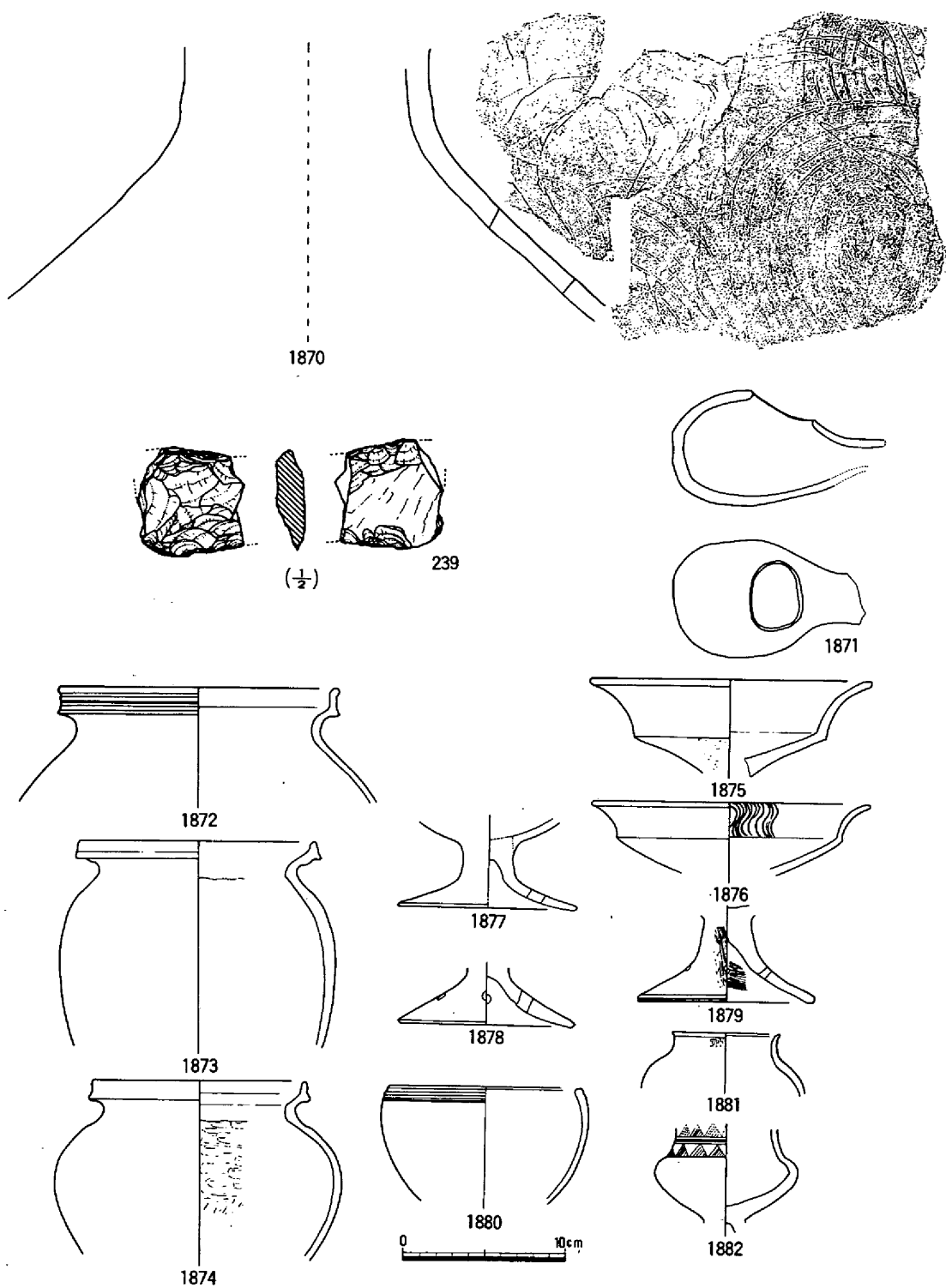
第441図 土器溜り—1出土遺物(3)



第442図 土器溜りー1出土遺物(4)



第443図 土器溜り-1 出土遺物 (5)

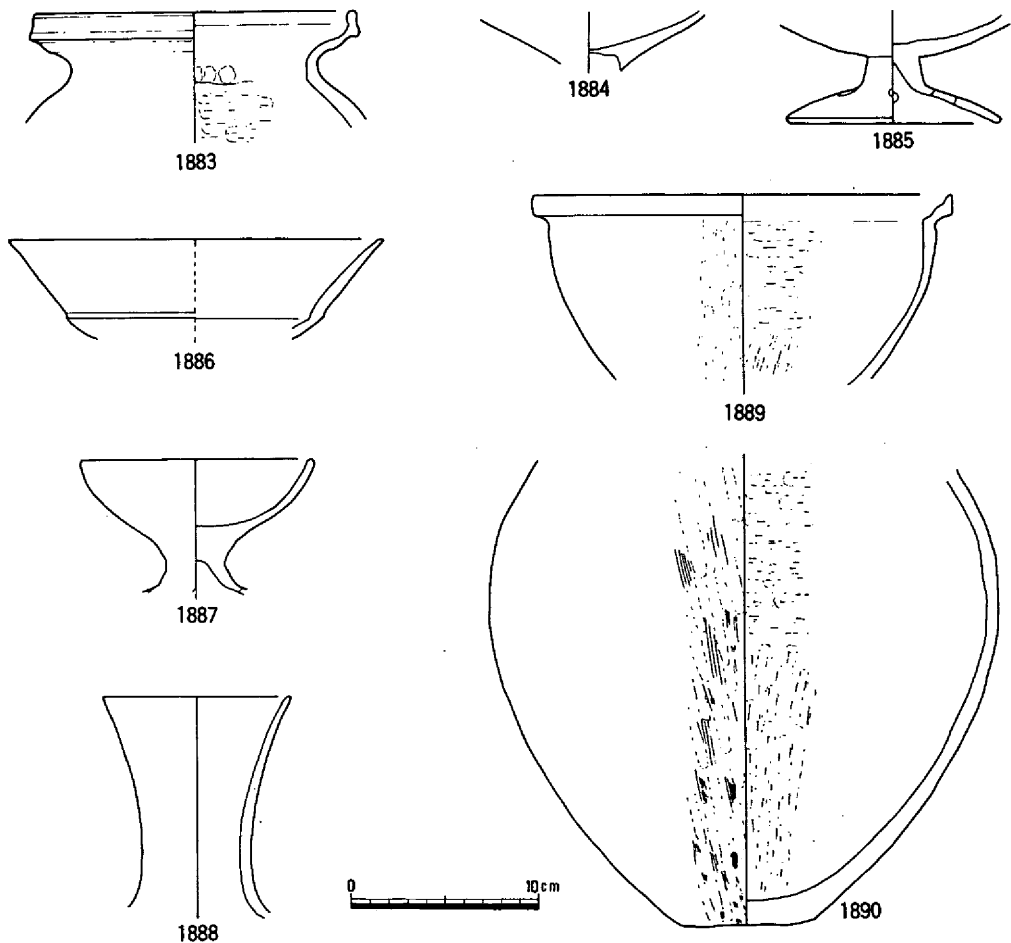


第444図 土器溜り-1・2出土遺物

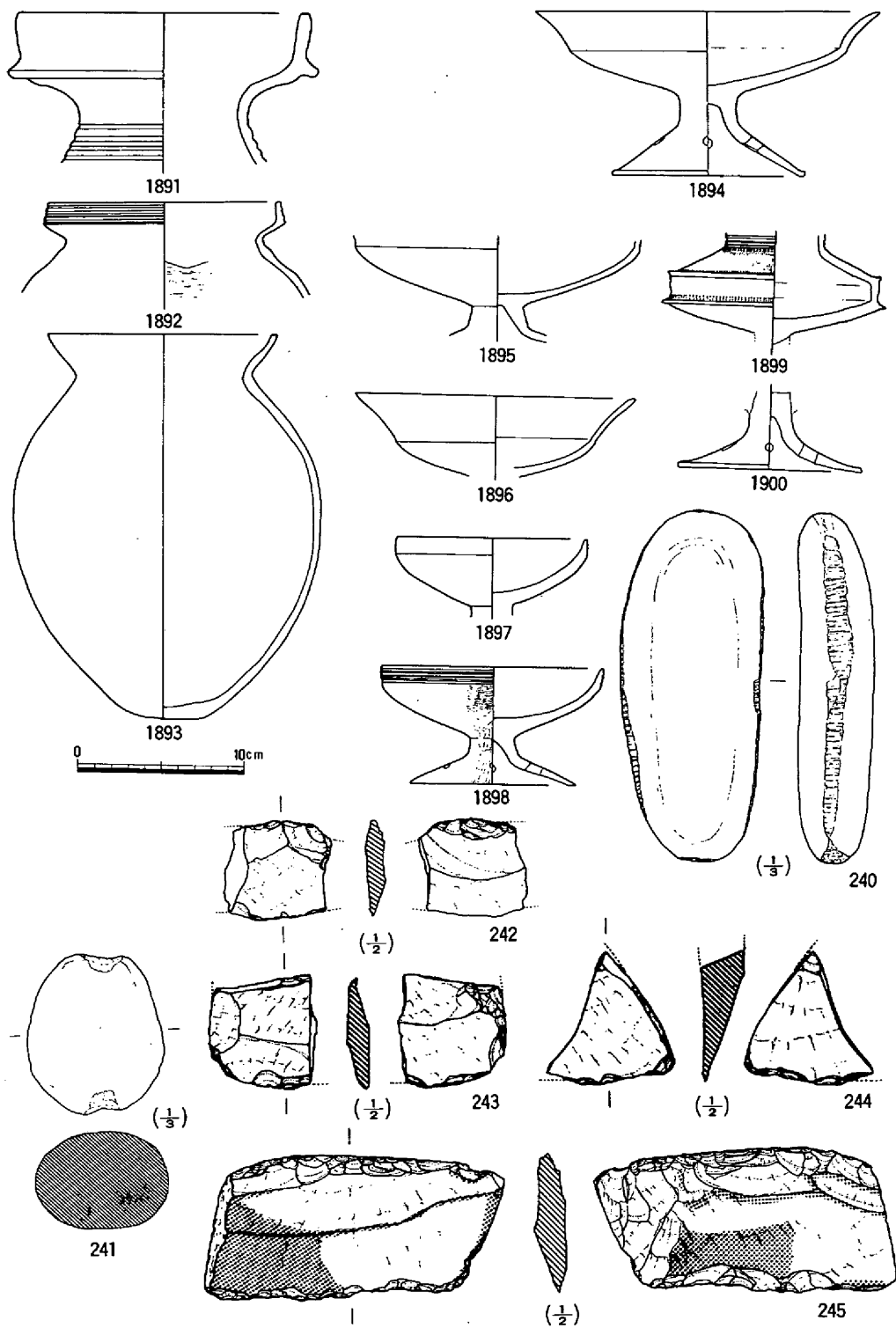
土器溜りー3は、溝ー18上に認められたもので、溝プランを検出途上で検出したものである。調査区南壁の土層断面観察によれば、溝ー18とこの土器溜りー3は溝ー18に伴う可能性を考えた方が妥当であろう。

土器溜りー4は、茶灰色粘質土層中において350×300cmの範囲に互って認められたものである。

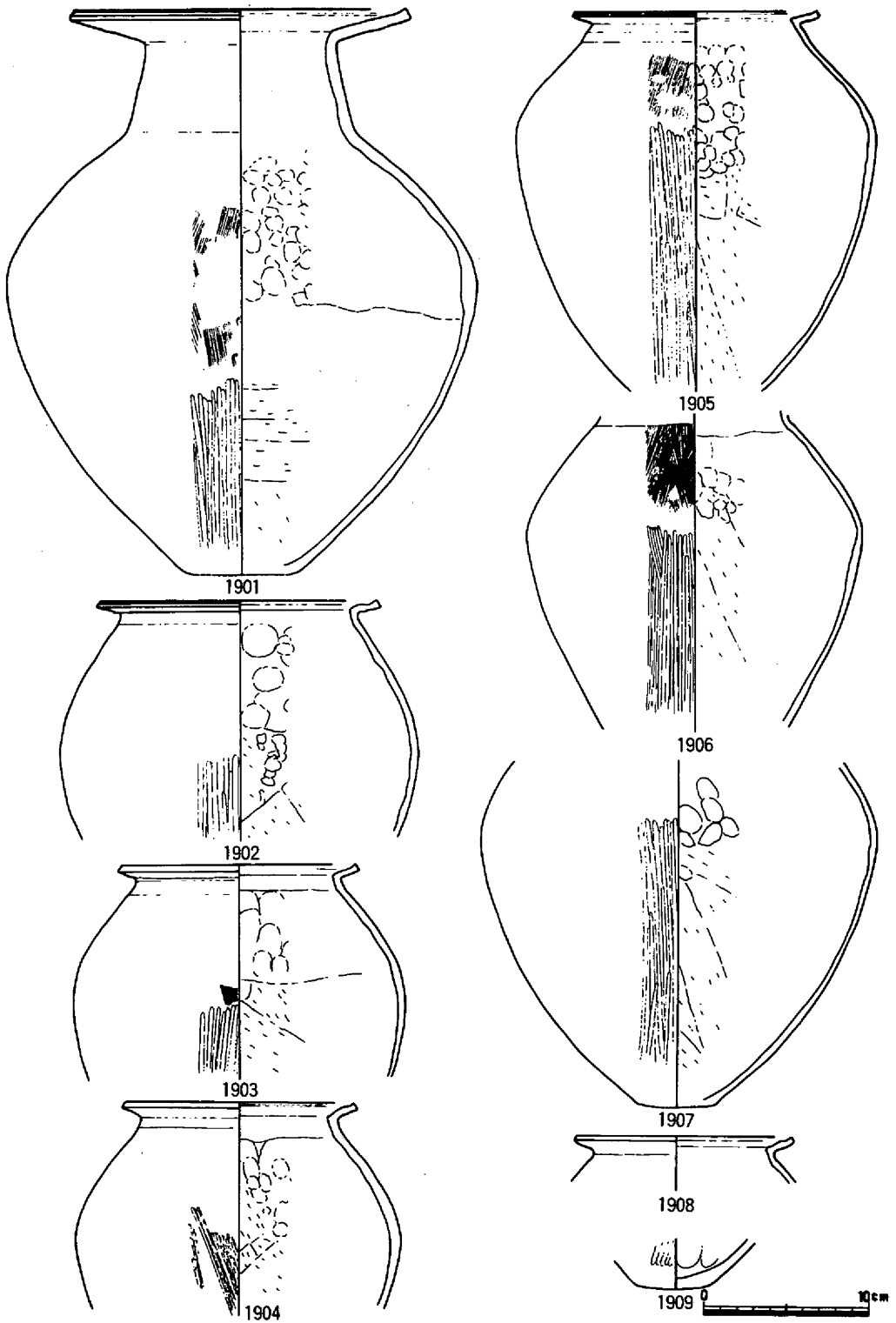
なお、1901～1909までの遺物番号の土器は、播磨系とされるものを一括して図示したものである。この土器等は、1901のみが溝ー18上の土器溜りー3より一括出土したが、他は接合破片は比較的広い範囲に互って出土していることが確認されている。(下澤)



第445図 土器溜りー3出土遺物



第446図 土器溜り-4・包含層出土遺物



第447図 包含層出土遺物

表-30 弥生時代後期土器観察表

挿図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
堅穴式住居 - 7 (第396図)									
1653	壺形土器	21.9	—	—		茶褐色	細砂	良好	・器面の剝落が著しい。
1654	高杯形土器	13.6	—	—		褐色	微砂	〃	・小破片。
1655	〃	—	12.0	—		茶褐色	〃	〃	・器面の風化が著しい。
1656	鉢形土器	11.7	—	—		淡灰白色	〃	〃	
1657	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
堅穴式住居 - 8 (第397図)									
1658	壺形土器	14.6	—	—	・肩部内面ハケメ。	淡赤褐色	細砂	普通	・剝落顕著。
1659	〃	—	7.5	—	・底部ハケメ。	灰褐色	砂粒	良好	
1660	壺形土器	12.8	—	—	・内面ヘラミガサ。	橙灰色	細砂	普通	・剝落顕著。
1661	台付鉢形土器	—	—	—	・外面は指頭による上方への強いナデ。	淡灰褐色	砂粒	〃	
井戸 - 15 (第398図)									
1662	壺形土器	14.6	—	—		淡灰白色	微砂	良好	
1663	鉢形土器	32.2	—	—		褐色	細砂	〃	
土 壌 - 61 (第400図)									
1664	壺形土器	19.6	—	—		茶灰白色	微砂	良好	
1665	〃	15.5	—	—	・クシ描きは5本。	淡褐色	細砂	〃	・煤付着。
土 壌 - 62 (第402図)									
1666	高杯形土器	17.2	—	—		暗茶灰色	微砂	良好	・煤付着。
1667	壺形土器	7.0	—	—		褐色	〃	〃	
1668	壺形土器	—	5.0	—		暗灰白色	〃	〃	
土 壌 - 63 (第403図)									
1669	壺形土器	16.5	—	—		暗灰色	微砂	良好	
1670	〃	—	5.5	—		黒色	細砂	〃	
1671	〃	—	4.8	—		褐色	微砂	〃	・手捏ね。
土 壌 - 64 (第404図)									
1672-1	壺形土器	—	15.0	—		褐色	細砂	良好	
土 壌 - 65 (第405図)									
1672-2	高杯形土器	—	—	—		褐色	微砂	良好	・小破片。
土 壌 - 66 (第407図)									
1673	壺形土器	20.0	—	—		淡灰褐色	細砂	良好	
1674	〃	19.0	—	—		暗茶褐色	微砂	〃	
1675	壺形土器	15.4	—	—		淡灰白色	〃	〃	
1676	高杯形土器	—	—	—		褐色	〃	〃	
1677	〃	—	—	—		〃	〃	〃	
1678	鉢形土器	39.0	—	—		〃	細砂	〃	
土 壌 - 67 (第410図)									
1679	壺形土器	22.0	8.0	33.8	・頸部沈線は2本1対で上の線が下の線よりも深く明確。	茶褐色	細砂	良好	
1680	〃	—	6.9	—		〃	小礫	〃	
1681	〃	14.3	6.0	38.0		〃	細砂	〃	
1682	壺形土器	15.0	4.8	30.5		暗茶褐色	石粒	脆弱	・二次的に火を受ける。
1683	〃	15.0	5.2	20.0		淡灰褐色	〃	良好	・煤付着。
1684	〃	13.4	—	—		淡褐色	細砂	〃	
1685	〃	14.0	—	—		〃	〃	〃	
1686	〃	11.8	4.2	11.0		茶褐色	〃	〃	・剝落が著しい。

第4章 第1節 大地調査区

押図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
1687	鉢形土器	20.5	5.2	12.5		暗茶褐色	細砂		
1688	壺形土器	12.0	5.0	15.9		茶褐色	粗砂	良好	
1689	直口壺形土器	5.7	3.5	15.1		褐色	細砂	脆弱	◦風化が著しい。完形品。
1690	"	7.3	—	—		"	"	"	
1691	"	—	4.5	—		"	"	良好	
1692	高杯形土器	23.0	—	—		暗茶褐色	砂粒	"	◦風化が著しい。
1693	"	14.0	—	—		暗茶灰色	微砂	"	
1694	"	—	—	—		褐色	細砂	"	
1695	"	14.8	—	—	◦透しは5か所。	茶褐色	砂粒	脆弱	
1696	"	12.5	—	—		暗茶褐色	"	"	
1697	"	13.5	—	—		淡褐色	微砂	良好	
土 墳 - 68 (第411図)									
1698	壺形土器	16.3	—	—		灰白色	細砂	良好	
1699	甕形土器	15.0	—	—		暗茶褐色	石粒	"	◦煤付着。
1700	高杯形土器	19.0	—	—		褐色	細砂	"	
1701	"	18.0	—	—		"	"	"	
1702	"	—	10.0	—		"	微砂	"	
1703	鉢形土器	31.8	—	—		茶褐色	細砂	"	
1704	"	44.0	13.0	22.6		淡褐色	微砂	"	
土 墳 - 71 (第412図)									
1705	甕形土器	15.2	—	—		淡灰白色	微砂	脆弱	◦風化が著しい。
1706	高杯形土器	12.3	—	—	◦脚部下端沈線は3本。	淡褐色	"	"	
1707	甕形土器	8.4	3.3	7.7		淡褐色	"	良好	
1708	"	—	5.8	—		暗茶褐色	石粒	"	◦煤付着。
1709	直口壺形土器	6.0	—	—		褐色	微砂	脆弱	◦風化が著しい。
土 墳 - 70 (第412図)									
1710	甕形土器	20.0	—	—		褐色	微砂	良好	◦風化が著しい。
土 墳 - 69 (第412図)									
1711	壺形土器	19.5	—	—		淡褐色	細砂	脆弱	◦風化が著しい。
土 墳 - 72 (第413図)									
1712	壺形土器	—	—	—		淡灰白色	細砂	良好	
1713	"	—	8.8	—		暗灰色	"	"	
土 墳 - 73 (第414図)									
1714	甕形土器	—	—	—		淡灰色	石粒	良好	
1715	壺形土器	—	—	—		淡褐色	微砂	"	
1716	"	25.3	—	—		暗茶灰色	細砂	"	
1717	"	—	—	—		淡灰白色	"	"	
土 墳 - 74 (第415図)									
1718	甕形土器	—	—	—	◦口縁下端は沈線。	褐色	細砂	良好	
1719	"	—	—	—		"	"	"	
土 墳 - 75 (第416図)									
1720	壺形土器	21.0	—	—		茶褐色	細砂	良好	
土 墳 - 76 (第418～422図)									
1721	壺形土器	21.4	—	—	◦頸部沈線は線施。	淡灰白色	細砂	良好	
1722	"	20.0	—	—		暗茶褐色	粗砂	"	
1723	"	17.2	—	—	◦二本一対の線施。一部一本単位。	赤褐色	細砂	"	
1724	"	18.0	—	—	◦頸部沈線は線施。	淡灰白色	微砂	"	
1725	"	21.0	—	—	"	淡褐色	細砂	"	
1726	"	19.5	—	—	◦二本一対の線施。	淡暗灰色	微砂	"	

百間川今谷遺跡

神図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
1727	壺形土器	20.5	—	—	・頸部沈線は螺旋。	茶褐色	微砂	脆弱	
1728	"	20.0	—	—		褐色	細砂	良好	
1729	"	20.0	—	—	・頸部沈線は一本単位。	"	"	"	
1730	"	21.0	—	—		暗黒灰色	"	"	
1731	"	15.3	8.5	33.2	・胴部下半から口縁部内面にかけて丹塗。	淡褐色	小礫	"	
1732	壺形土器	17.6	5.7	31.4		淡茶褐色	細砂	"	
1733	"	16.0	6.0	27.5	・底部外面はヘラミガキ。	淡灰白色	粗砂	"	
1734	"	16.0	—	—		褐色	細砂	"	
1735	"	15.0	6.0	24.5	・胴部に2次のな火を受ける。	赤褐色	"	"	・剥落が著しい。
1736	"	17.0	—	—		茶褐色	"	良好	
1737	高杯形土器	21.6	—	—	・杯に鋸歯文風の暗文。	淡茶褐色	微砂	堅緻	
1738	"	17.2	—	—	・杯部内面2本の沈線。	赤褐色	"	良好	
1739	"	—	—	—		褐色	"	"	
1740	"	—	15.0	—		"	"	"	
1741	"	—	—	—		"	"	"	
1742	"	—	12.4	—		灰白色	"	"	
1743	"	—	13.4	—		褐色	"	"	
1744	鉢形土器	35.0	—	—		赤褐色	細砂	"	
1745	"	50.0	12.0	24.0		灰褐色	小石粒	"	
1746	台付鉢形土器	18.0	8.0	13.0		赤褐色	細砂	"	・剥落が著しい。
1747	器台形土器	38.8	44.8	38.0		褐色	"	"	
土壌 - 77 (第423図)									
1748	壺形土器	15.8	6.5	32.0		淡茶灰色	石粒	良好	・丹塗。
1749	"	—	—	—		"	"	"	・小破片。
1750	高杯形土器	—	—	—		"	"	"	
1751	"	—	—	—		"	"	"	
1752	器台形土器	—	—	—		"	"	"	・土器溜りー1からも出土。
土壌 - 78 (第424図)									
1753	壺形土器	—	6.4	—		暗灰色	細砂	良好	
土壌 - 79 (第425図)									
1754	壺形土器	16.0	—	—		暗茶褐色	微砂	良好	・煤付着。
土壌 - 80~86 (第426図)									
1755	鉢形土器	21.7	—	—		黒灰色	細砂	堅緻	
1756	壺形土器	16.0	—	—		茶褐色	"	良好	・煤付着。
1757	"	15.3	—	—		淡灰白色	微砂	"	
1758	"	16.0	—	—		"	細砂	"	
1759	高杯形土器	—	—	—		褐色	微砂	脆弱	
1760	"	—	13.0	—		淡灰白色	"	良好	
1761	"	—	—	—		"	粗砂	"	
1762	鉢形土器	34.8	—	—		赤褐色	"	"	
土壌 - 87~91 (第427図)									
1763	壺形土器	13.0	—	—	・胴部外面は剥落のため調整不明。	淡茶褐色	砂粒	普通	
1764	"	19.0	—	—	"	暗灰褐色	細砂	良好	・外面煤付着。
1765	"	17.8	4.0	—	・胴部内面上半は指頭によるオサエ・ナデ。	淡黄褐色	砂粒	普通	"
1766	"	10.4	—	—	・胴部内面上半はヘラケズリ後に横位のナデ。	淡灰褐色	"	良好	"
1767	"	10.4	—	—	・口縁端部はナデによるつまみあげ。	褐色	"	普通	"
1768	"	13.6	—	—	・胴部内面上端に横位のナデ。	淡灰褐色	"	良好	"
1769	"	15.1	5.2	20.2	・胴部外面上端はヘラミガキ後に横位のナデ。	褐灰色	細砂	"	"
1770	"	15.5	—	—	・口縁端部は横位のナデ。	褐色	砂粒	普通	・胴部に煤付着。
1771	"	17.6	—	—	・頸部に指頭による圧痕。	淡赤灰色	"	良好	・黒質。
1772	壺形土器	—	3.8	—	・内面下半一部にヘラミガキ。	褐灰色	細砂	"	
1773	鉢形土器	10.3	—	—	・調整の最後に口縁部を横位のナデ。	淡灰褐色	"	"	・外面煤付着。
1774	壺形土器	—	—	—		褐灰色	"	"	

第4章 第1節 大地調査区

押図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
1775	高杯形土器	—	8.0	—	◦脚外面上半爪先の圧痕。	淡茶褐色	石 粒	良 好	
1776	“	—	8.0	—		褐 灰 色	“	普 通	
溝 - 15 (第429図)									
1777	器台形土器	26.5	—	—		褐 色	微 砂	良 好	◦二次的に火を受ける。
1778	壺形土器	15.0	—	—		赤茶褐色	砂 粒	“	
1779	“	15.3	—	—		茶 褐 色	“	“	
1780	台付直口壺形土器	6.0	—	—		淡赤褐色	微 砂	“	◦底部剝離から脚部を付す。
1781	鉢形土器	15.2	5.5	8.6		“	砂 粒	“	
1782	“	—	5.4	—		暗茶褐色	細 砂	“	
1783	“	—	4.2	—		“	“	“	◦煤付着。
溝 - 17 (第435図)									
1784	高杯形土器	—	13.0	—	◦脚部の透しは4か所。	淡 褐 色	微 砂	良 好	◦風化が著しい。
溝 - 18 (第435図)									
1785	壺形土器	22.0	—	—	◦沈線は12本以上。	暗茶灰色	細 砂	良 好	
1786	“	20.6	—	—		褐 色	微 砂	“	
1787	“	—	—	—		“	“	“	◦剝落が著しい。
1788	壺形土器	15.2	—	—		淡暗灰色	細 砂	“	
1789	高杯形土器	—	—	—		赤 褐 色	微 砂	“	◦鉄分の付着が著しい。
1790	“	—	9.8	—		褐 色	“	“	
1791	“	—	2.0	—		外面—茶褐色 内面—暗灰色	“	堅 緻	
1792	“	—	—	—		褐 色	“	良 好	
1793	“	—	9.0	—	◦内面ヘラケズリ。	外面—暗茶灰色 内面—淡褐色	細 砂 粒	“	
1794	鉢形土器	21.5	—	—	◦胴部外面ハケ調整。	暗 灰 色	“	“	
溝 - 21 (第436図)									
1795	壺形土器	18.5	—	—		淡灰白色	微 砂	良 好	
1796	“	22.3	—	—		灰 白 色	細 砂	“	◦風化が著しい。
1797	“	16.8	—	—		淡灰白色	粗 砂	“	
1798	“	17.4	—	—	◦胴部外面ハケメの上からヘラミガキ。	淡乳灰色	細 砂	“	
1799	“	16.0	—	—		淡乳白色	“	“	◦風化が著しい。
1800	壺形土器	14.0	—	—	◦胴部外面はタタキ。	褐 色	“	“	
1801	高杯形土器	20.0	—	—		“	微 砂	“	
1802	“	18.2	—	—		“	“	“	◦丹塗り。
1803	“	11.5	—	—		“	“	“	“
1804	“	—	—	—		“	“	“	
1805	“	13.8	—	—		“	“	“	
1806	“	12.5	—	—		“	“	“	
1807	台付鉢形土器	13.4	10.0	8.0		淡乳白色	“	“	
1808	“	—	9.5	—		暗 灰 色	細 砂	“	
溝 - 22 (第437図)									
1809	壺形土器	24.5	—	—		淡灰白色	微 砂	良 好	
1810	“	17.0	—	—	◦胴部内面ヘラケズリ。	褐 色	細 砂 粒	“	
1811	壺形土器	18.2	—	—		淡乳灰色	“	“	◦風化が著しい。
1812	鉢形土器	7.3	2.6	9.0		淡 褐 色	微 砂	“	◦黒斑。
1813	高杯形土器	15.8	—	—		赤 褐 色	“	やや不良	
1814	“	—	13.6	—		淡 褐 色	“	良 好	
土器溜り - 1 (第439～444図)									
1815	壺形土器	16.8	—	—	◦頸部沈線埋施。沈線は深いものと浅いもの2本が認められる。	褐 色	小 石	良 好	

百間川今谷遺跡

棟図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
1816	壺形土器	15.5	—	—	◦孔は貫通せず。沈線は深いものと浅いもの2本を認める。	褐色	細砂	良好	
1817	"	18.4	—	—	◦孔は貫通せず。胴部の押圧は目による。	淡褐色	"	"	
1818	"	20.2	—	—	◦沈線一本単位。	淡灰白色	"	"	
1819	"	24.2	—	—		褐色	"	"	
1820	"	20.0	—	—		茶褐色	"	"	
1821	"	18.0	—	—	◦沈線は深いものと浅いものと2本認める。	"	"	"	
1822	"	17.8	—	—		淡灰色	小 塵	"	
1823	"	19.0	—	—		"	"	"	
1824	"	18.6	—	—		茶褐色	細砂	"	
1825	"	17.0	—	—		褐色	微砂	"	
1826	"	24.0	—	—		"	細砂	"	
1827	"	17.0	—	—		乳白色	"	"	◦剝落が著しい。
1828	"	24.2	—	—		"	"	脆弱	"
1829	"	15.0	—	—		淡褐色	"	良好	
1830	"	17.4	—	—		褐色	微砂	"	◦風化が著しい。
1831	"	—	—	—		淡褐色	細砂	"	
1832	"	—	—	—	◦頸部に線刻がみられる。	茶褐色	微砂	"	
1833	"	—	—	—		淡褐色	"	"	
1834	"	—	—	—		暗茶褐色	細砂	"	
1835	甕形土器	16.8	6.2	25.8	◦底部押圧痕。	淡褐色	"	脆弱	風化が著しい。
1836	"	14.0	—	—		"	石 粒	良好	
1837	"	16.0	—	—		乳白色	細砂	脆弱	
1838	"	13.0	—	—		茶褐色	"	良好	
1839	"	13.0	—	—		褐色	"	脆弱	
1840	壺形土器	—	6.0	—		暗茶褐色	"	良好	◦胴部下半に二次的な火を受ける。
1841	"	—	4.4	—		淡茶褐色	微砂	脆弱	◦風化が著しい。
1842	甕形土器	—	6.0	—		茶褐色	細砂	良好	
1843	壺形土器	—	12.0	—		淡乳白色	石 粒	"	
1844	甕形土器	11.0	4.0	16.3		淡褐色	細砂	脆弱	
1845	無頸壺形土器	10.8	5.5	11.2		褐色	"	良好	
1846	高杯形土器	14.4	9.5	7.4		淡褐色	微砂	脆弱	◦風化が著しい。
1847	"	19.0	12.4	10.2		褐色	"	"	"
1848	"	23.0	13.8	11.6	◦鋸歯文は暗文。	"	"	良好	"
1849	"	18.0	—	—		"	"	堅 緻	
1850	"	15.4	—	—		赤褐色	"	良好	
1851	"	14.0	—	—		褐色	細砂	"	◦風化が著しい。
1852	"	10.0	—	—		赤褐色	微砂	堅 緻	
1853	"	—	—	—		褐色	細砂	良好	◦風化が著しい。
1854	"	—	7.2	—		"	微砂	"	
1855	"	—	10.0	—		"	"	"	
1856	"	—	12.0	—		"	"	"	
1857	"	—	14.0	—	◦透しは2組1対で3か所。	乳白色	細砂	"	
1858	"	—	14.0	—		乳褐色	"	"	◦風化が著しい。
1859	"	—	14.0	—		褐色	石 粒	"	"
1860	台付直口壺	—	—	—		赤褐色	微砂	"	
1861	"	—	—	—		"	"	堅 緻	
1862	"	—	—	—		"	"	"	
1863	"	6.6	—	—		赤褐色	微砂	良好	
1864	鉢形土器	38.0	—	—		乳褐色	"	脆弱	
1865	甕形土器	12.0	—	—	◦孔は2組1対で2か所。	褐色	細砂	良好	
1866	高杯形土器	23.0	12.4	12.0		淡褐色	微砂	"	
1867	器台形土器	41.6	—	—		"	細砂	堅 緻	
1868	"	34.2	—	—		"	微砂	良好	◦丹塗。
1869	"	—	39.0	—		"	"	"	
1870	"	—	—	—		淡灰白色	石 粒	"	
1871	"	—	—	—		褐色	微砂	堅 緻	◦底に二次的な火を受ける。

第4章 第1節 大地調査区

押図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
土器溜り - 2 (第444図)									
1872	甕形土器	17.0	—	—		褐色	微砂	良好	
1873	"	14.4	—	—		淡灰白色	小石粒	"	
1874	"	13.0	—	—		"	"	脆弱	
1875	高杯形土器	17.5	—	—		淡灰褐色	微砂	良好	・丹塗り。
1876	"	17.3	—	—	・杯部内面暗文風に施文。	褐色	"	"	
1877	"	—	11.0	—		"	"	"	
1878	"	—	10.5	—		"	"	"	
1879	"	—	11.0	—		"	"	"	
1880	鉢形土器	12.0	—	—		"	"	脆弱	
1881	短頸壺形土器	6.7	—	—		"	"	"	
1882	台付直口壺	—	—	—		"	"	"	
土器溜り - 3 (第445図)									
1883	甕形土器	7.0	—	—		暗茶褐色	微砂	良好	
1884	高杯形土器	—	—	—		淡褐色	"	"	
1885	"	—	11.0	—		褐色	"	"	・剥落が著しい。
1886	"	20.0	—	—		"	"	"	"
1887	"	12.2	—	—		"	"	"	
1888	直口壺形土器	10.0	—	—	・頸部外面へラミガキ。	"	"	"	・剥落が著しい。
1889	鉢形土器	22.0	—	—		"	"	"	
1890	"	—	6.0	—		茶褐色	細砂	"	
土器溜り - 4 (第446図)									
1891	壺形土器	17.5	—	—		淡褐色	小石粒	脆弱	・剥落が著しい。
1892	甕形土器	14.0	—	—	・口縁部沈線は4本。	淡茶褐色	細砂	"	
1893	"	13.8	3.4	23.0		暗茶褐色	"	良好	・剥落が著しい。
1894	高杯形土器	20.8	11.5	9.9		褐色	微砂	"	"
1895	"	—	—	—		"	"	脆弱	"
1896	"	17.0	—	—		"	"	良好	"
1897	"	11.5	—	—		"	"	脆弱	"
1898	"	13.3	10.0	7.0		"	"	"	
1899	台付壺形土器	—	—	—	・胴部凸帯刺突は3組1対。肩部の刺突は2組1対。	茶褐色	"	良好	
1900	高杯形土器	—	11.0	—		淡茶褐色	"	脆弱	
包含層 (第447図)									
1901	甕形土器	20.2	7.0	34.4		淡茶灰色	金・黒雲母粒	良好	・胴部中央意識的に割った痕跡。
1902	甕形土器	17.0	—	—		淡茶褐色	黒雲母粒	"	
1903	"	14.5	—	—		橙褐色	"	堅緻	
1904	"	14.0	—	—		茶灰褐色	金・黒雲母粒	"	・煤付着。
1905	"	14.6	—	—		"	"	"	"
1906	"	—	—	—		赤褐色	"	良好	
1907	"	—	4.8	—		淡茶褐色	"	堅緻	
1908	"	13.2	—	—		"	"	良好	
1909	"	—	4.5	—		"	黒雲母粒	"	

4 古墳時代の遺構・遺物

(1) 竪穴式住居

竪穴式住居—9 (第450図)

303—Tの南西隅で検出された。規模は365×320 cmで、東西に少し長い方形を呈している。壁体溝をめぐらし、北東隅と南壁中央部に接したところに土壌がある。中央部にもわずかにくぼんだところがあり、焼けていることから炉跡と判断される。南壁の土壌は、100×50 cmで、ほぼ、長方形を呈し、甕が入っている。北東隅の土壌は、70×65 cmで、深さは浅く、遺物は検出されなかった。床面を精査したが、柱穴は検出されず、壁でささえられたものと推定される。中央の土壌の西側で、埴1個が出土した。

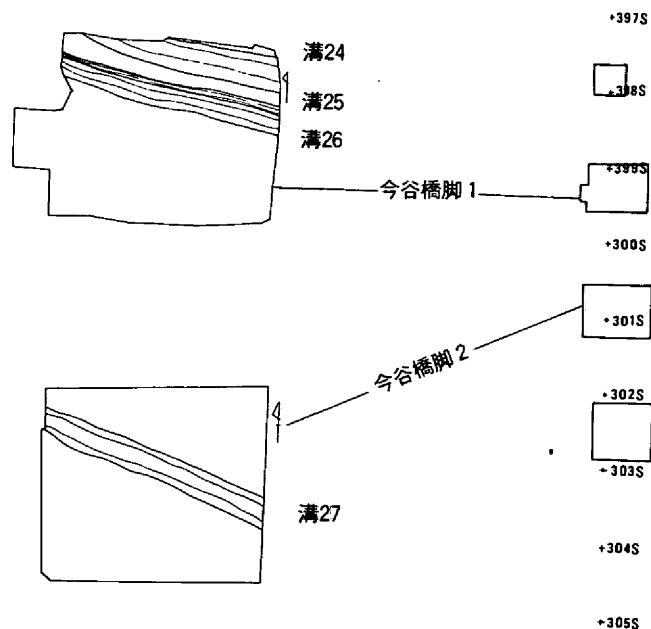
時期は、百・古・Ⅱに属する。

(正岡)

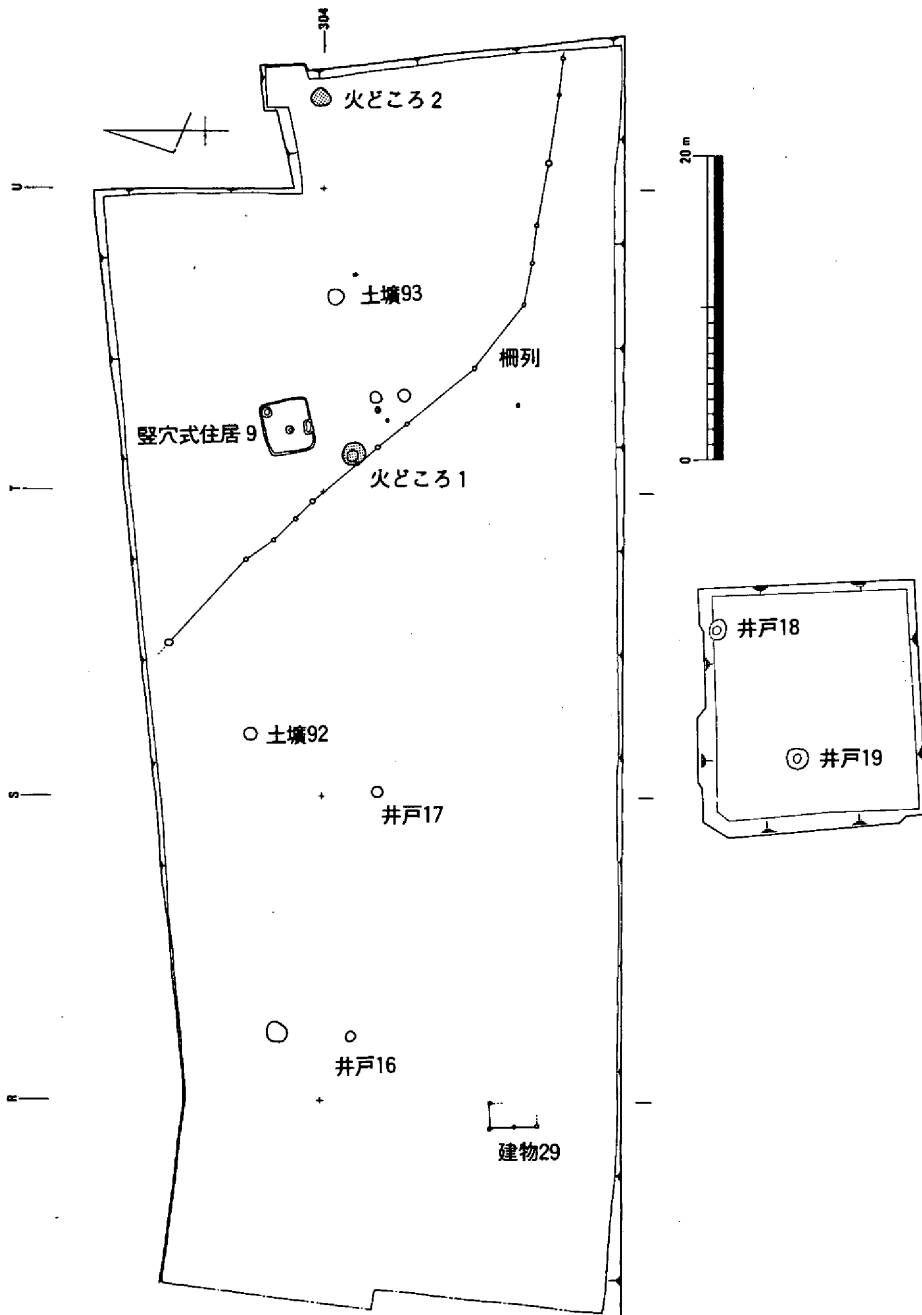
(2) 建物

建物—29 (第451図)

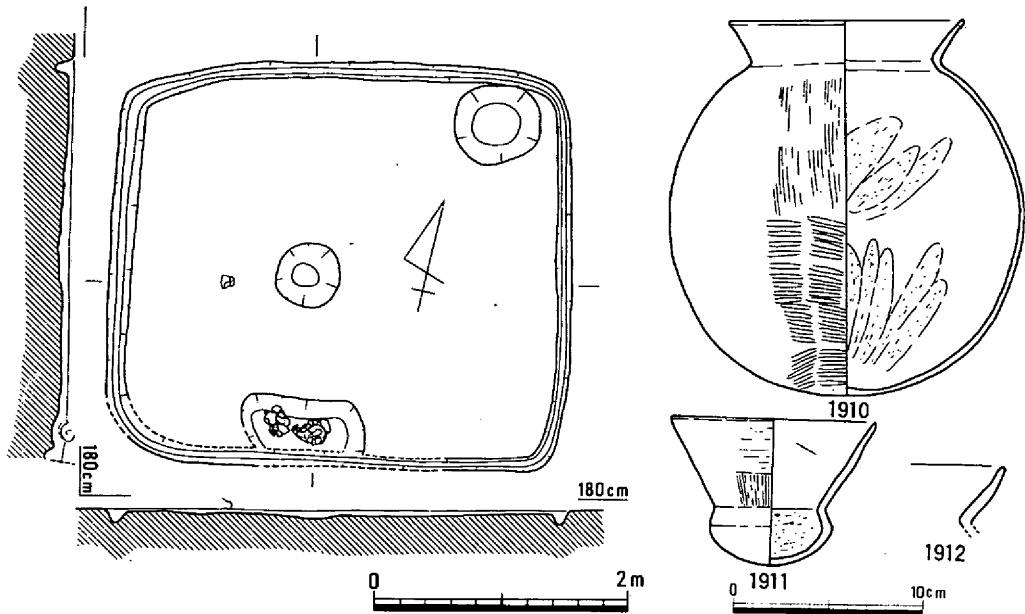
304—Qの東南部に位置する。規模は、柱穴の全ては検出されなかったものの、2×1間に



第448図 大地地区(今谷橋脚部)古墳時代遺構配置図 (1/600) (1/2000)



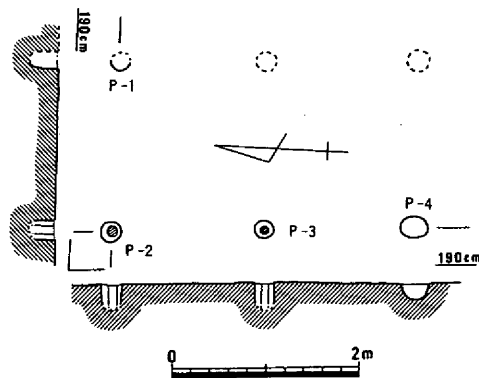
第449図 大地地区古墳時代遺構配置図 ($\frac{1}{500}$)



第450図 竪穴式住居—9 ($\frac{1}{60}$)・出土遺物

なると考えられる。柱穴の規模は、平面形はいずれも直径20cm前後の円形を呈し、深さは、検出面より15~30cmを測り、一定ではない。P-2、P-3においては、柱痕跡（淡灰色粘土）が確認できた。時期については土器が出土していないため明確ではないが、検出面及び埋土（淡灰褐色粘質微砂）からはほぼ古墳時代に比定できる。

（平井）

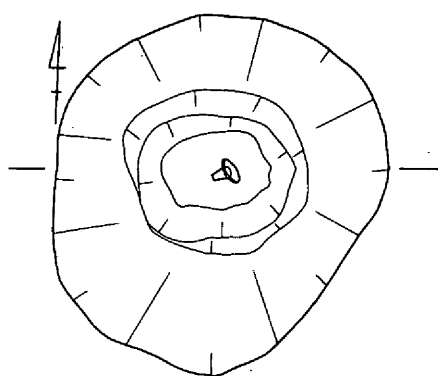


第451図 建物—29 ($\frac{1}{80}$)

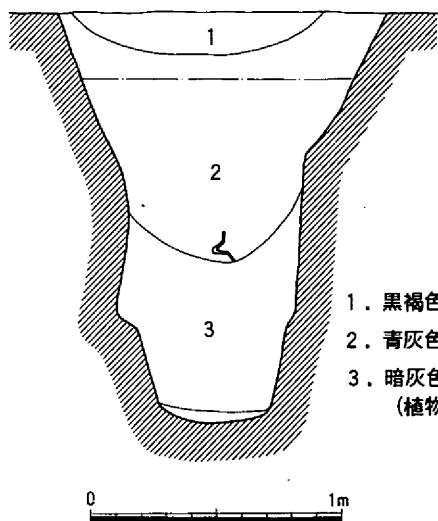
(3) 井 戸

井戸—16 (第452図)

303-Rの南西隅で検出した井戸で、平面形は不整形円形、断面形は朝顔形を呈している。大



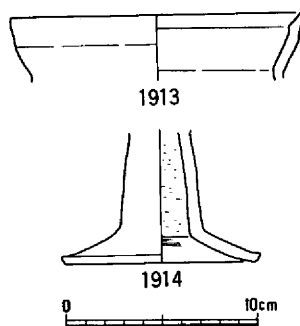
200cm



- 1. 黒褐色砂質土
- 2. 青灰色粘土
- 3. 暗灰色粘土
(植物遺体を含む)

きさは直径140cm、深さ160cmで、井戸底の海拔高は20cmを測る。これは弥生中期の井戸—3とほぼ同じレベルまで掘り下げていることを示している、この井戸を掘り上げた後何か月も非常に冷たい湧水が出土したことから、今でも水脈が変わっていないことが判った。堆積土は4層に分けることができ、遺物は3層に亘る・高杯の小破片を含むだけであった。この土器と土層観察から考えて、井戸の掘削・廃絶の時期は、百・古・Ⅲに比定できる。

(浅倉)



第452図 井戸—16 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物

井戸—17 (第453・454図)

304—Sの西端部に位置する。円形の掘り方を呈し、肩部の崩れた状況がみられる。規模は、直径125cm、深さ120cmを測る。底部中央には、深さ20cmのくぼみがある。下半部は青白色微砂層に達している。埋土の状況は、最上層部に炭を多く含んだ淡灰褐色粘土があり、甕が潰れた状況でみられる。中間部の暗灰色粘土にも少量の土器片と炭を多く含んでいる。最下層の暗灰色粘土層中から完形の甕が1個出土した。外面には煤が付着し、内面には炭化物がこびりついている。この層の直上には、炭の層が覆っている。

土器には甕が多い。下部に存在した完形のもの 1918 以外に完形に復原されたもの 1915 があり、その他にも甕の破片が多い。口縁部からみると数個体以上になる。1915は口縁部が「く」

字状にひらき、胴部は球形を呈し、丸底である。口縁端部は肥厚せず、丸くおさめている。外面のハケメはほぼ縦位のものであるが、肩部には横位ないし斜位のハケメがみられる。内面では、下半部を縦に削り、上半分にユビナデである。1918の甕は、口縁部がほぼ直立し、肥部は少し長くなる。最大径は少し上部にある。外面は縦位ないし斜位のハケメを施している。内面は、底部周辺に指頭圧痕文を施し、これより上半部はやや斜位のユビナデである。口縁端部は少し厚くなっている。これらの他に口縁部内面に張り出しのあるものがある。

以上の土器の特徴から、時期は、百・古・Ⅲに属する。

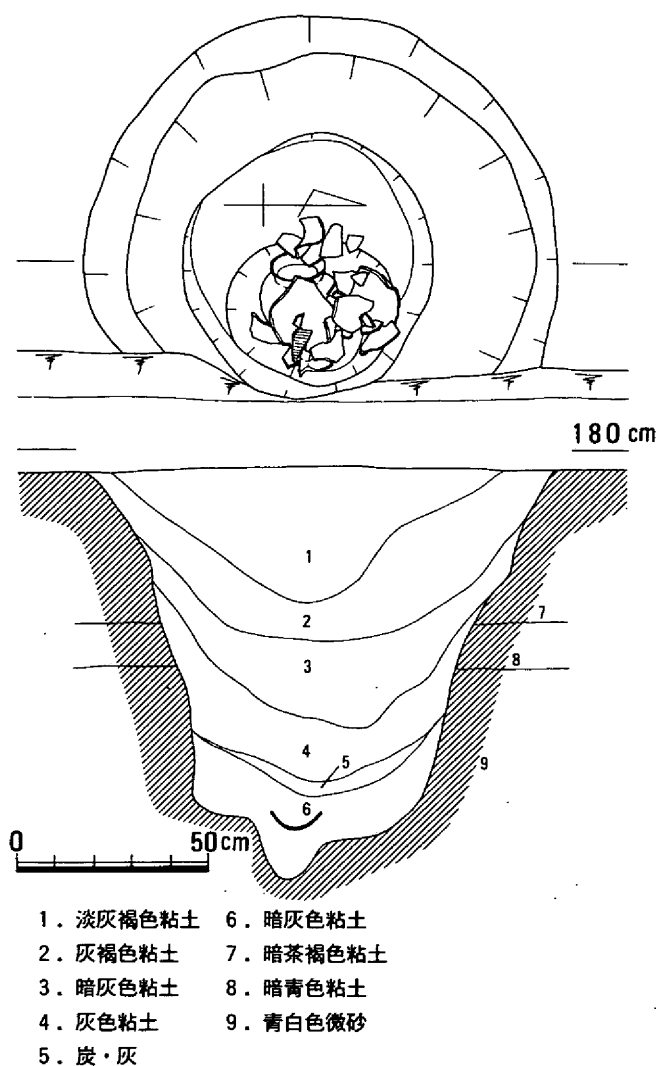
(正岡)

井戸—18 (第 455 図)

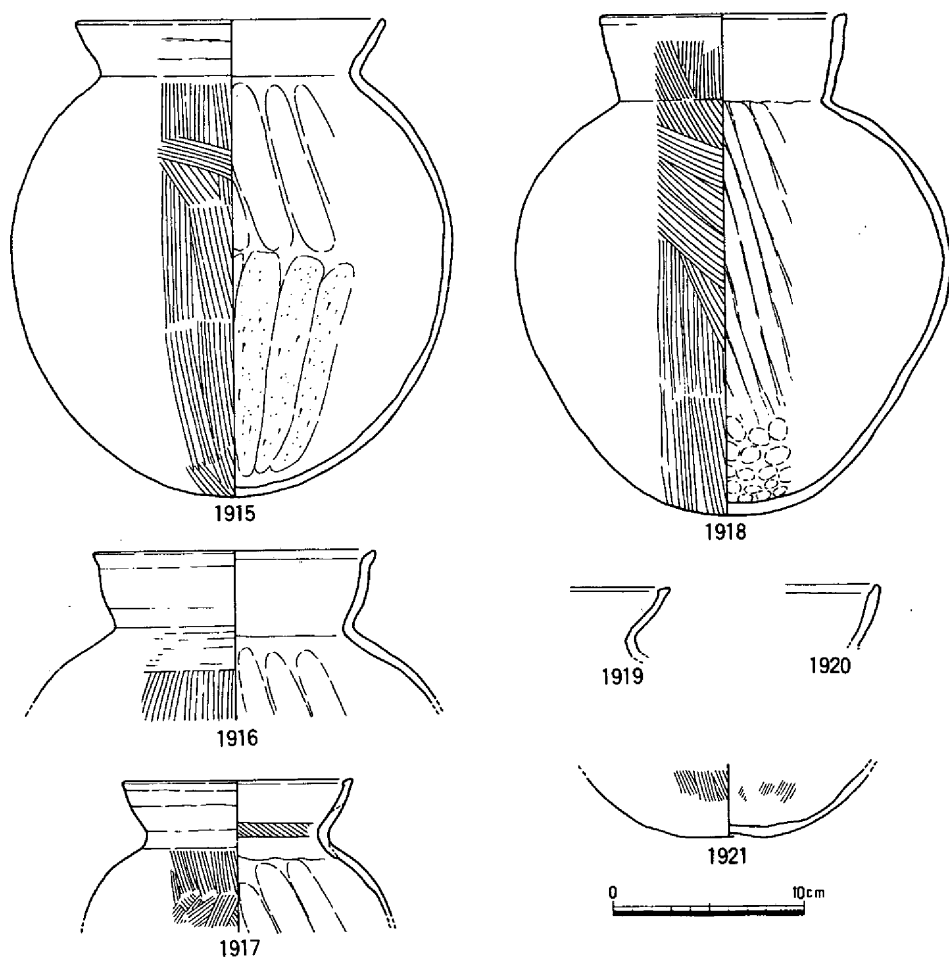
305—S 内の調査区北東隅に位置する。検出面での平面形は楕円形を呈すと考えられ、長径140cmを測る。断面形は、深さ約30cmまでは浅い播鉢状で、そこから角度を変えてほぼ垂直に下る。底は海拔55cmに達している。4・5・6・7層および10層の各上面には、炭化植物遺体が面的に堆積していた。

遺物は甕1922～1924・高杯1925が出土している。5層以下からは遺物の出土をみない。これらの遺物は、百間川原尾島遺跡左岸用水調査区の3—H—1出土の遺物(註1)に類例を求められるが、それらよりも古い様相をもっている。时期的には百・古・Ⅲに比定できるものとする。

井戸—19 (第 456 図)



第453図 井戸—17 (1/20)



第454図 井戸—17出土遺物

305—S内の調査区はほぼ中央に位置する。平面形は径約140cmを測る不整円形で、断面形は深さ約35cmまでは浅い擂鉢状を呈し、そこから角度を急にして底に至っている。底は海拔80cmに達している。

遺物は甕胴部片のみであるが、遺構検出面等から、本遺構は古墳時代前半のものと考えられる。
(光永)

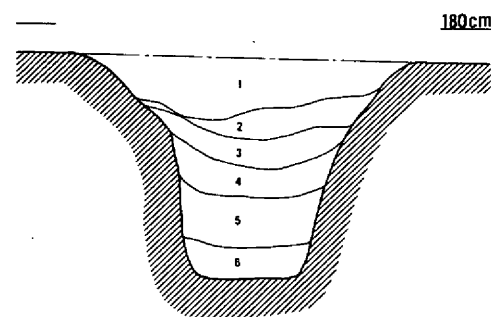
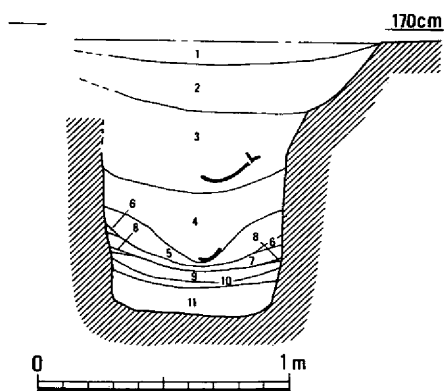
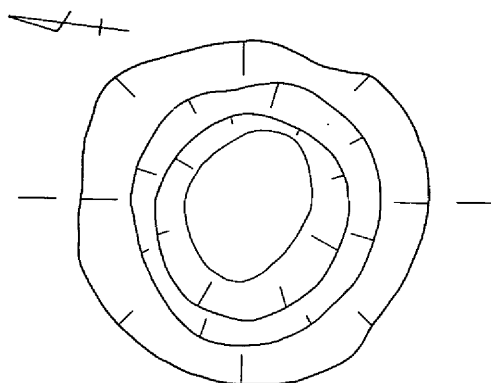
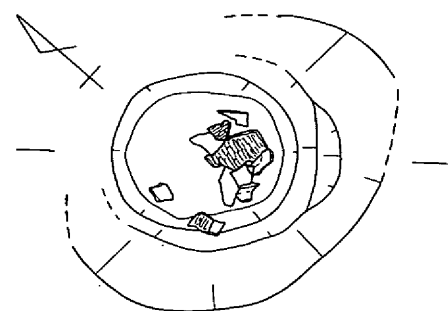
註

註1 岡山県教育委員会『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅰ百間川原尾島遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39 P92・93 1980

(4) 土 墳

土墳—92 (第457図)

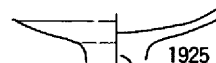
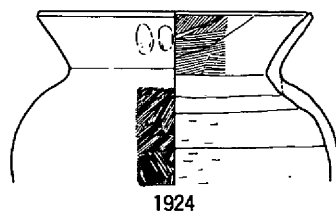
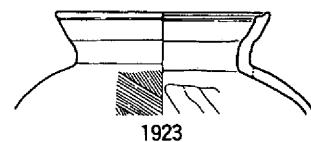
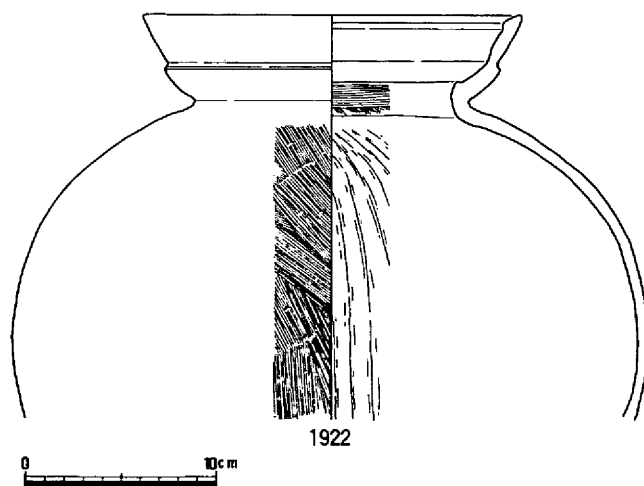
303—Sに位置する。85×82cmの円形で、深さ15cmを測る。他の遺構と同様に上部はかなり



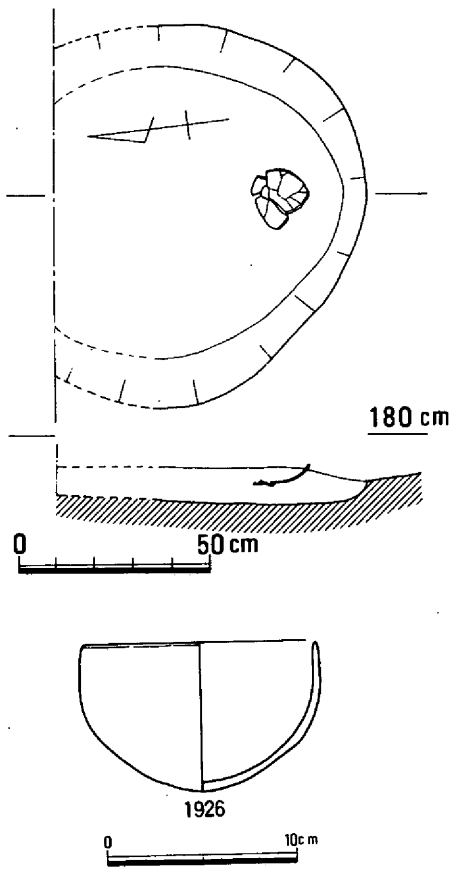
- | | |
|------------|------------|
| 1. 暗茶灰色粘質土 | 7. 暗灰色砂泥 |
| 2. 暗緑灰色砂質土 | 8. 緑灰色細砂 |
| 3. 暗灰褐色砂質土 | 9. 暗灰褐色粘質土 |
| 4. 暗青灰色砂質土 | 10. 暗褐色粘土 |
| 5. 暗灰色砂泥 | 11. 青灰色粘質土 |
| 6. 植物遺体集中土 | |

- | | |
|------------|-----------|
| 1. 暗茶灰色粘質土 | 4. 暗灰色砂質土 |
| 2. 灰茶色砂泥 | 5. 暗灰色粘土 |
| 3. 黒灰色砂質土 | 6. 暗灰色粘土 |

第456図 井戸-19 ($\frac{1}{30}$)



第455図 井戸-18 ($\frac{1}{30}$)・出土遺物



第457図 土坑—92 (1/20)・出土遺物

削平されたものであろう。埋土は、やや白い灰色粘土で、少量の土器片・炭化物を含む。土器は小破片のため明確な年代は明らかでないが、古式の土師器と推定される。

土坑—93 (第457図)

304—Tの北端部に位置する。直径1mの円形を呈し、深さ12cmである。埋土は炭を含んだ淡灰色粘土であり、鉢1点が出土した。時期は、百・古・Ⅱに属する。

(5) 柵 列

303—Sから304—Tにかけて、北西から南東へ柱穴が直線的に並び、304—Tの南寄り、ほぼ東へ屈曲する。柱間はかなり不規則である。柱穴は直径30cm前後の円形で、深さ15~20cmを測るものである。そのため上部が後に削平されたものと推測される。この柵列の東側に竪穴式住居—9、土坑—93、火どころ2か所があり、西側にも井戸、土坑などがあって、どのような意図のものかは明らかでない。

時期は、古墳時代前半期に属することは間違いないが、詳細な年代は判明しない。

(6) 火 どころ

火どころ—1

304—T北西隅近くに位置する。直径150cmの焼土があり、少量の土器片が発見された。土器片は小破片のため、詳細な年代はわからないが、古式の土師器に属すると推定される。周辺には柱穴等は伴っていない。

火どころ—2

303—Uと304—Uにかかるところに位置している。直径100cm余りの焼土があるが、これに伴う柱穴等が確認されていない。この火どころの東7mにも1か所確認されている。(正岡)

(7) 溝

溝—24

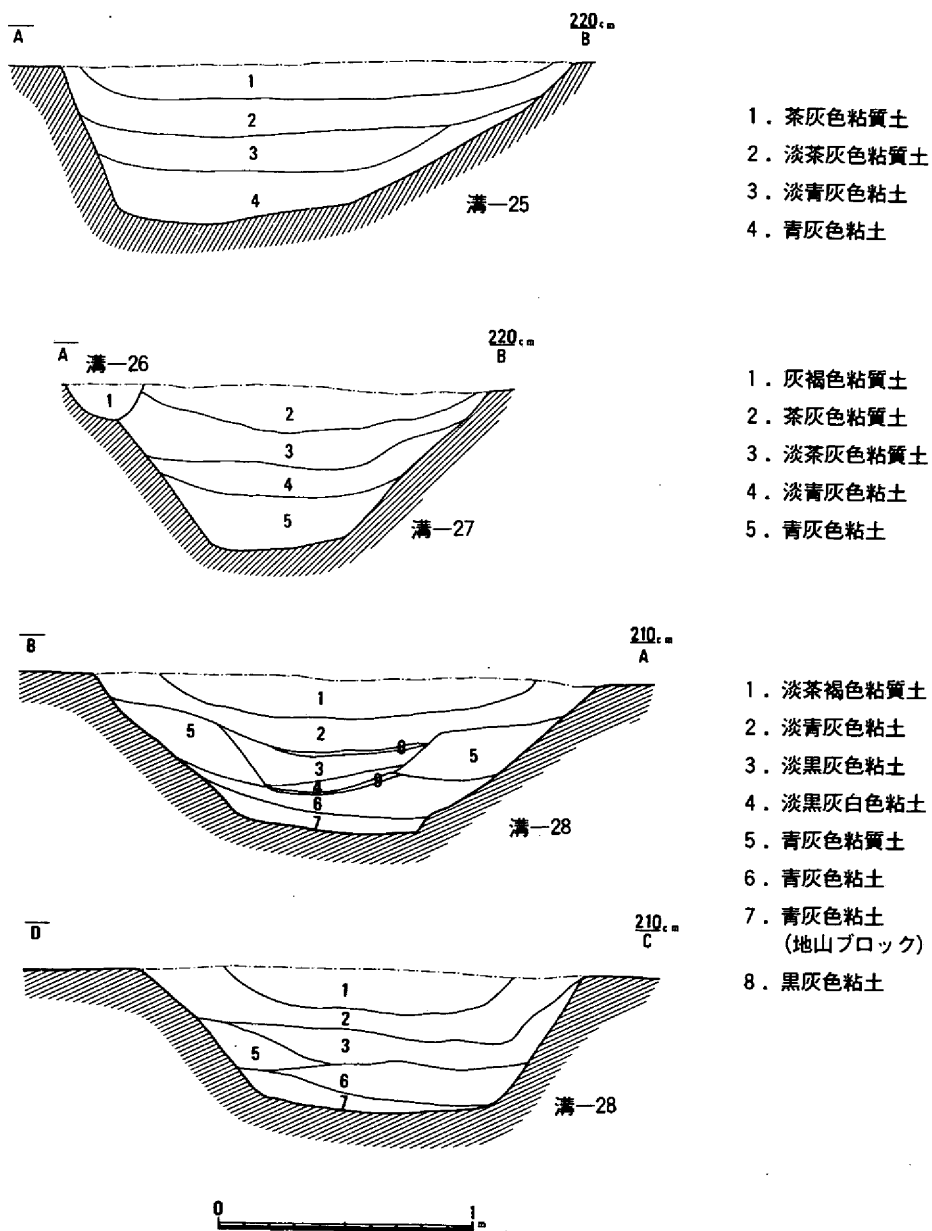
幅は2m、深さ63cmを測り、断面形状は台形を示すが南側はゆるやかに立ち上がっている。

時期については、6世紀後半のものと7世紀後半のものが出土している。

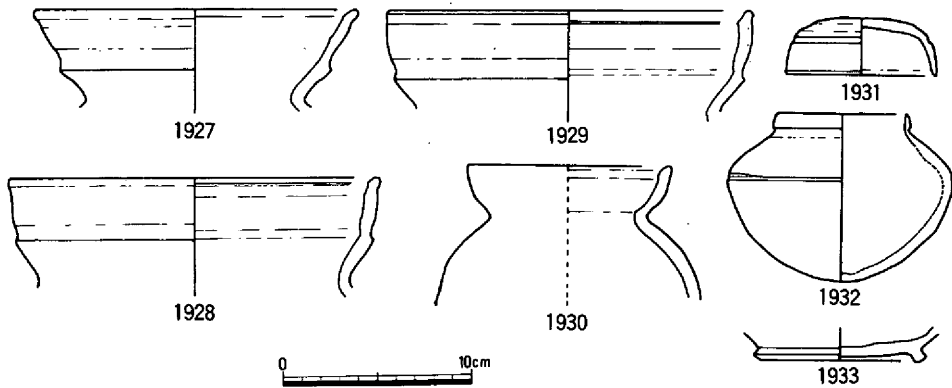
溝—25（第458・459図）

幅33cm，深さ14cmを測り，断面形状はU字形を示す。当溝は溝—26と重複している。

溝—26（第458図）



第458図 溝—25・26・27・28 ($\frac{1}{30}$)



第459図 溝—25・27・28出土遺物

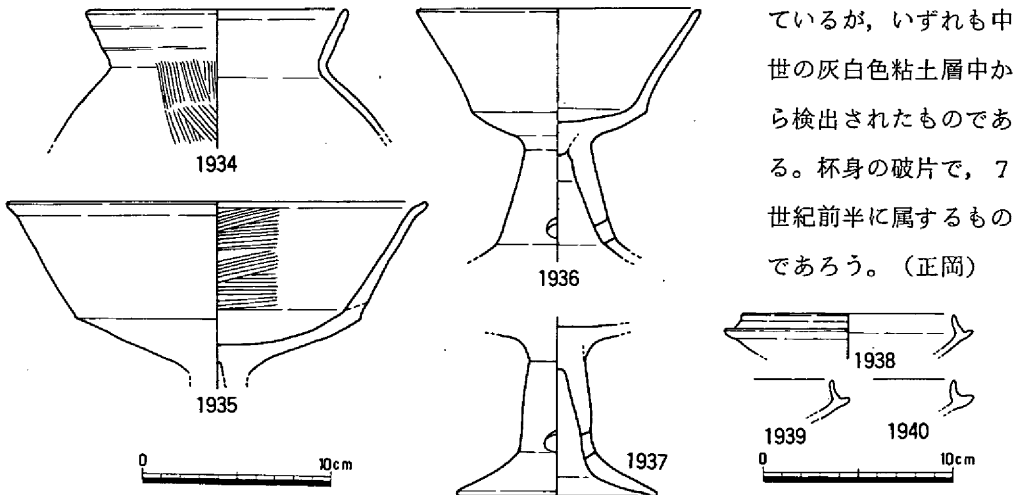
幅は140～160cm，深さ60cmを測り，断面形状はU字形をなす。埋土中からは，甕1929・1930が出土している。時期は，百・古・Ⅲと考えられる。

溝—28（第458・459図）

幅170～197cm，深さ61cmを測り，断面形状は，逆台形を示す。時期は，百・古・Ⅲと考えられる。
(下澤)

(8) 包 含 層 (第460図)

古墳時代の遺構上面は削平されたようで，広域な包含層は存在しない。303—Tには少し土器溜りがみられ，甕1934，高杯1935・1936・1937等出土している。須恵器片も若干検出され



ているが，いずれも中世の灰白色粘土層中から検出されたものである。杯身の破片で，7世紀前半に属するものであろう。(正岡)

第460図 包含層出土遺物 (1)

5 古代・中世・近世の遺構・遺物

大地調査区では、古代・中世の明瞭な遺構は未検出である。東苗代調査区と大地調査区との間に位置する南北方向の溝は、条里にのっているものであるが、掘削した年代を示す遺物は判明しない。大上田調査区で検出された「畝状遺構」と呼んでいる溝なども未検出である。しかし、古墳時代の遺構面より上に堆積した土層の状況は、徐々に水田面が上昇したあとを示しており、灰白色粘土層中には古代・中世の遺物を含んでいる。

須恵器では、奈良時代から平安時代に至る高台付杯・杯・甕等1941～1949がある。土師器には、平安時代から鎌倉時代に至る高台付碗1950～1958がある。1955～1958は、内面が黒色を呈し、いわゆる内黒で、胎土はきわめて細かい。

瓦器には、皿1959が1点ある。上面はかなり磨滅しているが、底部付近には指頭圧痕文が残り、内面に暗文の痕跡がみられる。大地調査区では、瓦器の出土数は少ない。甕1960の破片も出土している。外面にハケメを施している。

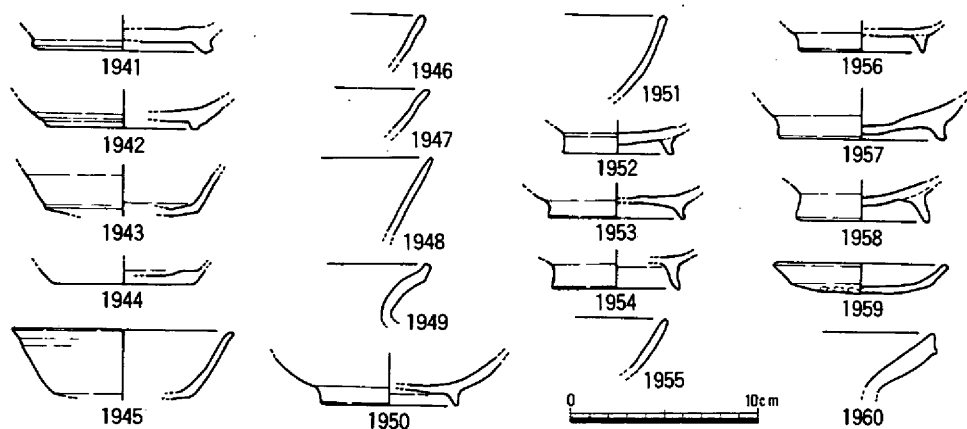
さらに上層から、永楽通宝1点、寛永通宝1点が出土した。

その他に、時期は不明確であるが、近世以降ののつぼのあとが多数あり、埋土中に魚骨等も含まれていた。また、溝中から漆塗りの碗なども検出されている。

(正岡)



第461図 包含層出土遺物 (2)



第462図 包含層出土遺物 (3)

表-31 古墳時代土器観察表

挿図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
竪穴式住居 - 9 (第450図)									
1910	甕形土器	12.4	—	19.8	◦内外凹凸多し。	灰 白 色	砂 粒 多	粗	◦煤付着。
1911	卍形土器	10.8	—	7.7	◦内面ナデ。	浅 黄 褐色	"	良 好	◦完形に復原。
1912	甕形土器	—	—	—	—	灰 白 色	"	粗	◦小破片。
井戸 - 16 (第452図)									
1913	甕形土器	15.2	—	—	◦口縁端部は内傾する面。両面ヨコナデ。	黒 褐 色	細 砂	良 好	◦口縁全部。
1914	高杯形土器	—	10.2	—	◦内面脚柱ヘラケズリ。裾部ハケメ後ナデ。	茶 褐 色	"	"	◦脚全部。
井戸 - 17 (第454図)									
1915	甕形土器	16.0	—	25.0	◦内面上半はナデアゲ。	灰 白 色	砂 粒	良 好	◦完形に復原。
1916	"	14.7	—	—	"	橙 色	"	"	"
1917	"	12.2	—	—	"	にぶい褐色	"	"	"
1918	"	12.8	—	26.8	"	"	"	"	◦内面に炭化物、煤付着。
1919	"	—	—	—	"	橙 色	"	"	◦小破片。
1920	"	—	—	—	"	"	"	"	"
1921	"	—	—	—	◦内面ナデ。	にぶい褐色	"	"	◦火をうける。
井戸 - 18 (第455図)									
1922	甕形土器	19.6	—	—	◦胴部内面は指頭によるカキアゲ。	褐 灰 色	砂 粒	良 好	◦外面煤付着。
1923	甕形土器	11.2	—	—	◦口縁内面に横位のナデによる突帯。	暗 黄 灰 色	"	"	"
1924	"	14.3	—	—	◦口縁内面・胴部外面に細かいハケメ。	褐 灰 色	"	"	◦外面下半に煤付着。
1925	高杯形土器	—	—	—	◦杯部は内外面ともナデ。	灰 色	"	"	◦黒斑。
土壇 - 92 (第457図)									
1926	鉢形土器	12.3	—	7.8	◦丸底。	灰 白 色	細 砂	良 好	◦完形に復原。
溝 - 28 (第459図)									
1927	甕形土器	17.0	—	—	—	暗 茶 灰 色	細 砂	良 好	—
1928	甕形土器	19.5	—	—	—	淡 乳 灰 色	"	"	—
1929	"	19.0	—	—	—	"	"	"	—
溝 - 27 (第459図)									
1930	甕形土器	19.0	—	—	—	外面—淡灰白色 内面—淡暗灰色	微 砂	良 好	—
溝 - 25 (第459図)									
1931	杯 蓋	8.0	—	3.0	◦天井部にナデ。	灰 色	微 砂	堅 緻	—
1932	須恵器短頸	6.8	8.8	—	◦胴部の沈線は一部二条となる。胴部下半から底部にかけてヘラケズリ。	"	"	良 好	◦口縁の一部を欠失する。
1933	杯 身	9.1	—	—	—	"	細 砂	"	◦磨滅が著しい。
包含層 (第460図)									
1934	甕形土器	17.5	—	—	—	灰 白 色	砂 粒	良 好	—
1935	高杯形土器	20.8	—	—	◦外面ヨコナデ。	橙 色	"	"	—
1936	"	14.4	—	—	◦中央部充塼。	"	精製粘土	"	◦3個円孔。
1937	"	—	10.6	—	—	"	砂 粒	"	◦2個円孔。
1938	杯形土器	11.0	—	—	—	青 灰 色	"	"	◦小破片。
1939	"	—	—	—	—	"	"	"	—
1940	"	—	—	—	—	"	"	"	—

表-32 古代・中世の土器観察表

挿図番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
包含層 (第462図)									
1941	甕形土器	—	8.7	—		灰 白 色		良 好	◦須恵器。
1942	杯形土器	—	7.8	—		"		"	"
1943	"	—	8.0	—		"		"	"
1944	"	—	7.4	—		暗 青 灰 色		"	"
1945	"	11.5	—	—		"		"	"
1946	"	—	—	—		"		"	"
1947	"	—	—	—		青 灰 色		"	"
1948	"	—	—	—		"		"	"
1949	甕形土器	—	—	—		明 青 灰 色		"	"
1950	碗形土器	—	7.1	—		灰 白 色		"	"
1951	"	—	—	—	◦内黒。		細 砂	◦土師器。	
1952	"	—	5.7	—		"	"	"	"
1953	"	—	7.0	—		"	精製粘土	"	"
1954	"	—	6.7	—		橙 色	"	"	"
1955	"	—	—	—		灰 白 色	細 砂	"	"
1956	"	—	6.5	—		"	精製粘土	"	"
1957	"	—	8.8	—		"	"	"	"
1958	"	—	7.0	—		"	"	"	"
1959	皿形土器	9.0	1.5	—		黄 橙 色	細 砂	"	◦瓦器。
1960	甕形土器	—	—	—		褐 灰 色			◦土師器。

表-33 竪穴式住居一覽表

細別 住居址	種類	形	規模 (cm)		床面積 (㎡)	主柱穴	距離 (cm)				中央穴			壁 体 溝	時 期	地 区	遺 物
			長軸	短軸			北 辺 (A)	東 辺 (B)	南 辺 (C)	西 辺 (D)	ブ ラン	幅 cm	深 cm				
1	竪穴式 住居	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	百・中・Ⅱ	398—S	甕・石錐
2	〃	円形?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃	399—S	石斧・石鏃
3	〃	—	—	—	—	4	220	170	212	165	不 整 楕 円	84×46	—	—	〃	304—T	
4	〃	—	—	—	—	4	190	150	200	195	—	—	—	—	〃	〃	
5	〃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃	〃	
6	〃	円形?	—	—	—	—	—	—	—	—	楕 円	—	5.0	—	—	397—R	
7	〃	隅丸方 形?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	百・後・Ⅲ	399—R	壺・高杯
8	〃	円形	510	480	19.6	5	210	180	—	190	円	35×47	25.0	○	〃	302—S	甕・蓋・合付鉢 石鏃
9	〃	方形	365	320	11.68	—	—	—	—	—	〃	50×50	5.0	○	百・古・Ⅱ	303—T	甕・埴

表-34 建 物 一 覧 表

建物	規模	柱間寸法 (cm)		桁 行 (cm)	梁 間 (cm)	面 積 (㎡)	棟方向	柱穴 掘方	検 出 地 区	時 期
		桁	梁							
1	3×1	166~192	235~250	519~526	235~250	13.15	東西	円形	302—S	百・中・Ⅱ
2	3×—	165~184	—	514	—	—	南北	〃	〃	〃
3	2×1	243~250	232~237	493~495	232~237	11.7315	〃	〃	〃	〃
4	1×1	187~190	139~142	187~190	139~142	2.698	東西	〃	〃	〃
5	2×1	206~243	238~260	447~455	238~260	11.83	〃	〃	304—Q	〃
6	2×1	208~215	243~264	420~432	243~264	11.4048	〃	〃	〃	〃
7	3×1	160~215	195~235	530~555	195~235	13.0425	〃	〃	304—R	〃
8	3×1	160~175	210~215	495	210~215	10.6425	〃	〃	〃	〃
9	2×1	213~263	222~231	477~478	222~231	11.0418	〃	〃	303—R	〃
10	2×1	246~253	201~239	493~511	201~239	12.2129	〃	〃	304—R	〃
11	2×1	208~231	242~253	437~443	242~253	11.2079	〃	〃	303—S	〃
12	3×1	240~260	215~220	750~760	215~220	16.72	南北	〃	303—S ~304—S	〃
13	3×1	153~170	192~210	487	192~210	10.227	東西	〃	304—S	〃
14	2×1	140~165	180~190	287~300	180~190	5.7	〃	〃	〃	〃
15	2×1	226~248	227	—	227	—	〃	〃	303—S	〃
16	2×1	237~261	220~225	496~502	220~225	11.295	〃	〃	〃	〃
17	3×1	137~190	215~230	445~470	215~230	10.81	〃	〃	〃	〃
18	2×1	147~185	205~210	325~350	205~210	7.35	〃	〃	304—S	〃
19	1×1	270	215~220	270	215~220	5.94	南北	〃	〃	〃
20	2×1	231~250	232~233	470~481	232~233	11.2073	〃	〃	〃	〃

建物	規模	柱間寸法 (cm)		桁 (cm)	行 (cm)	梁 (cm)	間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	柱穴 掘方	検出 地	出区	時 期
		桁	梁										
21	2 × 1	148~179	280~284	322~343	280~284	9.7412	東西	円形	304—S	百・中・Ⅱ			
22	3 × 1	168~216	199~207	536~558	199~207	11.5506	南北	〃	304—T	〃			
23	2 × 1	174~214	243	—	243	—	東西	〃	303—S	〃			
24	2 × 1	148~168	223~234	316	223~234	7.3944	〃	〃	303—T	〃			
25	2 × 1	172~205	270~287	378~388	205~270	9.7412	南北	〃	〃	〃			
26	3 × 1	208~236	260~297	675~686	260~297	20.3742	〃	〃	〃	〃			
27	3 × 1	137~169	242~243	445~458	242~243	11.1294	東西	〃	304—T	〃			
28	4 × 1	175~200	198~213	730~743	198~213	15.8259	南北	〃	303—T	〃			
29	2 × 1	163	—	325	—	—	〃	〃	304—Q	—			

表—35 井戸一覽表

(単位 cm)

番号	区 名	長さ×幅×深さ	平面形	断面形	出土遺物	時 期
1	304-Q	164×136×143	不整楕円形	U字形	壺・甕・高杯・石鏃	百・中・Ⅱ
2	304-R	133×100×94	不整方形	〃		〃
3	〃	102×92×127	長方形	〃	甕	〃
4	〃	152×148×143	方形	V字形	壺・甕・高杯	〃
5	303-S	100×100×88	不整円形	U字形		〃
6	304-S	89×80×141	円形	〃	壺・甕	〃
7	304-T	182×178×86	〃	V字形	甕・高杯・紡錘車・石鏃	〃
8	〃	156×153×104	〃	U字形	壺・甕・高杯・石槍・種子	〃
9	303-T	182×182×127	〃	V字形	壺・甕・高杯	〃
10	〃	107×102×118	〃	U字形	甕・高杯・スクレイパー	〃
11	304-T	205×177×134	不整円形	〃	甕・敲石・種子・木片	〃
12	303-T	83×83×109	円形	〃	壺・甕・高杯・石庖丁・種子	〃
13	304-T	164×120×133	不整楕円形	〃	壺・甕・石斧・柱材・ガラス滓	〃
14	303-U	72×68×84	円形	〃	甕	〃
15	397-R	243×?×205	〃	〃	甕・鉢	百・後・Ⅲ
16	303-R	140×140×160	不整円形	〃	甕・高杯	百・古・Ⅲ
17	304-S	125×125×120	円形	〃	甕	百・古・〃
18	305-S	140×?×110	楕円形	〃	甕・高杯	〃
19	〃	140×140×87	円形	V字形	甕	〃

表-36 土 墳 一 覧 表

(単位 cm)

番号	区 名	長さ×幅×深さ	平 面 図	断面形	出 土 遺 物	時 期
1	399-S	615×65×40	溝 状	逆台形	甕・高杯・鉢・砂粒	百・中・Ⅱ
2	301-R	—	—	—	壺・甕・砂粒	〃
3	302-S	170×130×30	不整楕円形	皿 形	壺・甕・高杯・石器	〃
4	303-Q	115×91×10	不 整 円 形	〃	壺・甕	〃
5	〃	125×89×27	不整楕円形	〃	壺・甕	〃
6	304-Q	84×74×23	楕 円 形	〃		〃
7	〃	75×67×15	円 形	〃		〃
8	〃	26×26×30	〃	U字形	甕	〃
9	〃	198×?×6	不 整 円 形	皿 形	壺・ガラス滓・砂粒	〃
10	303-R	250×?×10	長 方 形	〃	壺・甕・高杯・ガラス滓	〃
11	〃	150×100×10	不整楕円形	〃	ガラス滓	〃
12	304-R	200×110×20	楕 円 形	〃	壺・甕・高杯・ガラス滓	〃
13	〃	170×?×15	不整楕円形	〃	壺・甕・高杯・炭・焼土・ガラス滓	〃
14	〃	90×70×15	〃	U字形	甕	〃
15	〃	200×70×35	長 楕 円 形	皿 形		〃
16	〃	220×75×35	長 方 形	〃	壺・甕・高杯・鉢・ガラス滓	〃
17	〃	—	—	逆台形	壺・甕・高杯・水差・鉢	〃
18	〃	130×90×20	楕 円 形	〃	壺・甕・高杯	〃
19	303-S	143×89×23	長 楕 円 形	皿 形	甕・高杯・トウガン	〃
20	〃	?×162×70	楕 円 形	階段形	甕・鉢・ガラス滓・砂粒	〃
21	〃	104×95×?	不 整 円 形	皿 形		〃
22	〃	?×82×25	長 楕 円 形	〃	甕・高杯	〃
23	〃	375×113×24	不整長楕円形	〃	壺・甕・高杯・ガラス滓・敲石	〃
24	〃	590×190×38	長 楕 円 形	〃	壺・甕・高杯・台付鉢・石器	〃
25	304-S	157×62×10	〃	〃	ガラス滓・砂粒	〃
26	〃	90×35×10	〃	〃	壺・甕・ガラス滓・焼土・サヌカイト	〃
27	〃	226×116×16	〃	〃	壺・甕・鉢・コダイヒメモモ	〃
28	〃	176×?×22	不 整 円 形	〃	甕・高杯・器台・サヌカイト片	〃
29	〃	153×132×33	不整楕円形	逆台形	甕・高杯・器台	〃
30	〃	121×53×16	不整長方形	皿 形	甕	〃
31	〃	180×126×28	不整楕円形	階段形	甕・高杯・コダイヒメモモ・クルミ	〃
32	〃	141×124×17	楕 円 形	皿 形	焼土・炭	〃
33	〃	107×93×20	不 整 円 形	〃	壺・高杯	〃
34	〃	195×105×30	長 楕 円 形	〃	甕・高杯	〃
35	〃	150×105×20	楕 円 形	逆台形	壺・甕・高杯	〃
36	〃	80×80×70	円 形	U字形	甕・高杯	〃
37	〃	?×138×7	長 楕 円 形	皿 形		〃
38	〃	132×90×26	不整楕円形	〃	甕・高杯	〃
39	303-T	125×100×90	円 形	U字形	甕・小型磨製石斧	〃
40	〃	120×120×70	〃	〃	石鏃	〃
41	〃	182×111×14	不整楕円形	皿 形	壺・ガラス滓・炭・焼土・砂粒	〃
42	〃	120×120×20	円 形	〃	壺・甕・高杯・スクレイパー	〃
43	〃	216×91×13	不整長楕円形	〃	甕・高杯・炭・焼土・ガラス滓・砂粒	〃
44	〃	265×200×32	不整楕円形	〃	壺・甕	〃
45	〃	255×?×9	不 定 形	〃		〃
46	304-T	209×110×56	不整楕円形	階段形	甕・高杯・ガラス滓・炭・焼土	〃

第4章 第1節 大地調査区

番号	区 名	長さ×幅×深さ	平 面 形	断面形	出 土 遺 物	時 期
47	304—T	—	長 楕 円 形	皿 形		百・中・Ⅱ
48	"	150×116×57	楕 円 形	階段形		"
49	"	304×120×40	長 楕 円 形	皿 形	壺・甕・高杯	"
50	"	195×55×20	"	逆台形		"
51	"	210×60×45	長 方 形	"		"
52	"	165×75×16	長 楕 円 形	皿 形	ガラス滓・炭・焼土	"
53	"	140×90×20	不整長方形	逆台形	甕・ガラス滓	"
54	303—U	?×166×26	"	階段形	壺・甕・高杯・器台・ガラス滓・炭化米	"
55	"	111×91×18	円 形	皿 形	壺・甕	"
56	304—U	97×84×12	長 楕 円 形	"	壺・甕・炭・焼土・ガラス滓・砂粒	"
57	"	428×210×22	"	"	壺・甕・高杯・ガラス滓・砂粒	"
58	"	316×187×17	"	"	壺・甕・高杯・ガラス滓・砂粒・石胞丁	"
59	303—T	—	—	—	石器	"
60	397—R	?×89×4	長 楕 円 形	皿 形		
61	"	190×97×5	"	"	高杯・甕	百・後・Ⅳ
62	"	123×78×25	楕 円 形	"	高杯・壺	百・後・Ⅲ
63	397—S	60×?×27	円 形	台 形	甕	百・後・Ⅳ?
64	397—R	?×80×34	"	"	"	百・後・Ⅲ
65	399—R	112×68×21	長 楕 円 形	—		
66	"	187×106×23	"	台 形	壺・甕・高杯・鉢	百・後・Ⅲ
67	"	200×145×33	楕 円 形	"	"	百・後・Ⅱ
68	"	108×81×33	"	U字形	"	百・後・Ⅲ
69	399—S	?×?×13	"	皿 形	壺	"
70	"	?×?×24	円 形	U字形	甕	
71	"	95×81×30	"	台 形	壺・甕・高杯	百・後・Ⅲ
72	"	156×76×27	隅丸長方形	皿 形	壺	
73	"	103×100×41	楕 円 形	台 形	"	
74	"	112×?×39	"	U字形	甕	百・後・Ⅲ
75	"	92×50×14	"	皿 形	壺	"
76	399—R	190×83×52	"	逆台形	壺・甕・高杯・鉢・器台	"
77	300—R	166×136×26	隅 丸 方 形	"	壺・高杯・器台	"
78	"	92×?×26	不整円形	"		
79	301—S	130×76×13	楕 円 形	皿 形	甕	百・後・Ⅲ
80	399—S	50×47×29	円 形	—	壺	"
81	"	36×31×22	"	—	甕・高杯	"
82	399—R	53×?×60	"	—	甕	"
83	399—S	60×60×54	"	—	"	"
84	"	70×55×?	"	—	高杯	"
85	"	48×43×57	"	—		
86	399—R	40×34×12	"	—	鉢	百・後・Ⅳ
87	302—S	—	—	—	甕・蓋	百・後・Ⅱ
88	302—R	—	—	—	無頸壺・甕	百・後・Ⅳ
89	302—S	—	—	—	甕・高杯	百・後・Ⅱ
90	"	—	—	—	甕	百・後・Ⅳ
91	"	—	—	—	高杯	百・後・Ⅱ
92	303—S	85×82×15	円 形	皿 形		
93	304—T	100×100×12	"	"	鉢	百・古・Ⅱ

表-37 土製品一覽表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	時期
296	1	紡錘車	304-T	井戸-7	土	4.0	3.6	0.6	8.6	一部欠損	百・中・Ⅱ
393	2	"	304-S	包含層	"	4.1	3.7	0.5	7.8	完存	"
393	3	"	303-T	"	"	2.9	2.6	0.4	—	破片	"
393	4	"	304-T	"	"	4.7	4.7	0.6	16.0	未製品	"

表-38 石器一覽表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
246	138	石錐	398-S	竪穴式住居-1	サヌカイト	49.0	15.5	5.7	2.2	完存
248	139	石鏃	"	竪穴式住居-2	"	23.1	15.2	3.2	1.0	ほぼ完存
248	140	"	"	"	"	21.6+	16.3+	4.0	1.1	欠損
248	141	敲石	"	"	斑縞岩	100.2+	76.3	60.5	735.0	磨製石斧転用
248	142	"	"	"	流紋岩	72.4	27.4	19.2	59.0	完存
251	143	石鏃	304-T	竪穴式住居-5	サヌカイト	34.3	15.0	5.1	2.3	ほぼ完存
252	144	"	302-S	建物-1	"	25.3	16.0	3.2	1.1	完存
252	145	"	"	建物-2	"	16.8	22.0	3.2	0.9	ほぼ完存
255	146	敲石?	"	建物-3	花崗斑岩	39.6+	63.2	35.8	118.4	欠損
259	147	石槍	304-Q	建物-5	サヌカイト	106.5+	28.2	13.55	40.4	"
271	148	砥石	303-S	建物-16	砂岩	195.0	189.5	87.5	—	完存
279	149	磨製石斧	304-T	建物-22	安山岩	129.5	60.0	37.0	506.0	"
279	150	敲石	"	"	"	70.0	69.5	66.5	482.0	"
284	151	スクレイパー	303-T	建物-26	サヌカイト	80.2	55.6	11.2	52.5	"
284	152	砥石	"	"	"	75.6	69.1	—	—	欠損
289	153	石鏃	304-Q	井戸-1	サヌカイト	20.2+	13.3	4.2	1.3	" 鏃Ⅲ?
290	154	石庖丁	"	"	"	46.0+	35.7	8.1	14.8	" 庖Ⅲ
296	155	石鏃	304-T	井戸-7	"	27.5	18.6	4.7	1.5	ほぼ完存 鏃Ⅰ
299	156	石槍?	"	井戸-8	"	42.0+	1.9	10.3	9.3	欠損
301	157	敲石	303-T	井戸-10	閃緑岩	69.5	64.9	59.1	378.5	完存
302	158	石庖丁	"	井戸-12	サヌカイト	136.9	47.4	8.6	73.2	" 庖ⅡA(大)
304	159	磨製石斧	304-T	井戸-13	玢岩	178.2	71.1	57.5	1,082.0	"
309	160	石鏃?	302-S	土壌-3	サヌカイト	16.5+	16.0	4.9	1.4	欠損
309	161	石錘	"	"	半花崗岩	43.3	40.8	35.1	72.5	完存
330	162	敲石	303-S	土壌-23	玢岩	122.1+	62.2	51.5	674.0	一端打痕
334	163	石庖丁	"	土壌-24	サヌカイト	55.4+	56.6	14.3	39.6	欠損 庖Ⅰ(大)

第4章 第1節 大地調査区

図	番号	遺 物	出土地区	遺 構	材 質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備 考
350	164	小型磨製石斧	303-T	土 塙-39	安 山 岩	45.4+	29.9	9.7	17.5	ほぼ完存
351	165	石 鏃	"	土 塙-40	サヌカイト	21.0	17.3	3.3	1.0	完存 鏃 I
375	166	石 庖 丁	304-U	土 塙-58	"	61.9+	44.0	11.2	36.5	欠損 庖 I B
377	167	原 材	303-T	土 塙-59	"	232.0	206.2	29.85	1483.0	
"	168	石庖丁型石器	"	"	"	207.8	16.2	38.7	1,270.0	完存
"	169	石 庖 丁	"	"	"	155.8	52.9	10.5	101.80	" 庖 I B(大)
"	170	"	"	"	"	134.0	57.5	8.75	85.11	" "
380	171	磨製石斧	397-S	溝 - 1	安 山 岩	74.8+	62.9	47.8	281.3	欠損
"	172	小型磨製石斧	"	"	流 紋 岩	37.2+	220+	7.3+	7.1	"
"	173	磨製石斧	"	"	玢 岩	61.7	28.8	10.0	22.9	完存
"	174	敲 石	"	"	"	79.8+	36.9	22.9	98.2	欠損
"	175	投 弾	"	"	花 崗 岩	45.5	43.5	35.0	84.1	完存
"	176	石 鏃	"	"	サヌカイト	28.5+	16.3	3.5	1.1	ほぼ完存
"	177	"	"	"	"	50.3+	15.3	4.3	3.1	欠損
"	178	スクレイパー	"	"	"	48.2+	36.5	6.9	13.3	"
"	179	"	"	"	"	37.6+	34.5+	7.0	9.7	"
"	180	石 庖 丁	"	"	"	29.5+	52.5	9.0	15.6	"
"	181	"	"	"	"				—	
"	182	"	"	"	"	71.3+	47.0	7.3	35.6	ほぼ完存
"	183	砥 石	"	"	半花崗岩	142.3	94.3	30.1	451.5	"
"	184	"	"	"	"	160.0+	80.3+	45.2+	835.0	欠損 鏃 IV a
381	185	石 鏃	303-Q	溝 - 2	サヌカイト	35.5+	13.1	4.2	1.9	"
388	186	スクレイパー	303-T	溝 - 12	"	78.8	45.3	13.8	59.4	
"	187	石 庖 丁	"	"	"	48.6+	45.5	11.1	27.5	欠損 庖 I A b
"	188	スクレイパー	"	"	"	127.0	79.2+	17.6	149.0	ほぼ完存
"	189	"	"	"	"	77.0	47.9+	5.8	23.0	刃部欠損
389	190	石 庖 丁	304-U	溝 - 14	"	42.2+	55.1	9.2	26.9	欠損 庖 I(大)
392	191	石 鏃	304-Q	包 含 層	"	10.6	10.0	2.0	0.5	完存
"	192	"	304-T	"	"	21.1	16.0+	4.0	1.1	ほぼ完存 鏃 II
"	193	"	303-S	"	"	22.8+	19.6+	4.9	1.8	一部欠損 鏃 I
"	194	"	303-T	"	"	30.5	12.0	4.3	1.3	完存
"	195	"	"	"	"	42.0	14.0	6.3	2.9	ほぼ完存 鏃 IV b
"	196	石 槍	"	柱 穴	"	34.0+	23.0	5.7	5.3	欠損
"	197	小型磨製石斧	304-T	包 含 層	"	33.4	20.0	7.2	6.7	ほぼ完存
"	198	石 槍	304-Q	"	"	107.6	29.2	8.0	23.0	完存 石庖丁再利用?
"	199	"	304-T	"	"	136.4	26.7	14.5	—	"

百間川今谷遺跡

図	番号	遺 物	出土地区	遺 構	材 質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備 考
392	200	石 庖 丁	300-S	南 側 溝	サヌカイト	32.1	30.2	6.0	7.4	欠損
"	201	スクレイパー	303-T	井 戸-10	"	29.4+	31.3	7.3	7.5	"
"	202	石 庖 丁	304-U	柱 穴	"	44.1	26.2+	8.2	12.4	" 庖 I
"	203	スクレイパー	303-T	土 塙-42	"	55.8+	27.2	4.3	8.2	ほぼ完存
"	204	石 庖 丁	304-T	包 含 層	"	55.7+	42.9	10.3	31.1	庖 I Ab 刃部 再生か
"	205	"	303-Q	"	"	28.3+	45.6	9.0	14.3	欠損
"	206	スクレイパー	304-S	"	"	104.2	58.3	7.2	42.7	ほぼ完存
393	207	大型蛤刃石斧	"	"	玢 岩	51.7+	50.9+	41.2	144.2	欠損
"	208	"	304-T	"	"	45.0+	53.0+	34.0	—	"
"	209	"	304-S	"	流 紋 岩	52.1+	57.8	28.2	109.0	"
"	210	環 状 石 斧	303-T	"	細粒花崗岩	"	30.0	24.8	32.7	"
"	211	磨製石庖丁	"	"	"	48.0+	21.0+	4.0+	—	"
"	212	砥 石	304-T	"	砂 岩	80.0	68.0	44.0	—	ほぼ完存
"	213	敲 石	303-S	"	"	103.3	68.9	—	—	"
"	214	"	304-S	"	花 崗 岩	66.4	53.2	18.9	97.3	完存
"	215	砥 石	303-S	"	粘 板 岩	119.0+	65.2	18.1+	211.7	欠損
"	216	"	304-T	"	"	56.0	29.5	9.5	—	完存
"	217	"	304-S	"	"	30.8+	24.1+	—	—	
"	218	"	304-T	"	砂 岩	337.0	182.0	89.0	—	
395	219	敲 石	397-S	竪穴式住居-6	半花崗岩	128.0	37.2	42.2	237.2	完存
"	220	"	"	"	玢 岩	138.0	82.4	36.8	341.5	"
397	221	石 鏃	302-S	竪穴式住居-8	サヌカイト	21.8	15.0	3.3	0.9	"
398	222	砥 石	397-S	井 戸-15	石英斑岩	84.0+	45.8	18.8+	86.2	欠損
"	223	敲石・磨石	"	"	花 崗 岩	106.7	57.0	41.5	365.0	完存
"	224	石 庖 丁	"	"	サヌカイト	24.0	32.0+	7.9	5.7	欠損
403	225	敲 石	"	土 塙-63	流 紋 岩	121.0	26.9	22.7	134.7	完存
422	226	"	399-S	土 塙-76	"	118.0	45.1	18.0	129.3	"
"	227	砥石・敲石	"	"	玢 岩	123.2	47.0	32.2	247.8	"
"	228	磨石・敲石	"	"	細粒花崗岩	63.6+	97.3	23.7	208.1	欠損
"	229	石 庖 丁	"	"	サヌカイト	32.5	41.1+	11.5	18.0	"
428	230	敲 石	398-S	柱 穴	細粒花崗岩	69.0	67.4	67.5	396.0	完存
"	231	石 庖 丁	301-S	"	サヌカイト	66.6	69.6	19.9	64.4	欠損
429	232	石 鏃	398-S	溝埋土中	"	22.6+	11.0	3.2	0.8	"
437	233	石 鏃	"	"	流 紋 岩	62.1	46.0	39.6	162.3	完存
"	234	砥 石	399-S	"	砂質頁岩	52.4+	33.8	17.1	31.8	欠損
"	235	磨製石斧	"	"	安 山 岩	84.1+	65.8	47.0	421.0	"

第4章 第1節 大地調査区

図	番号	遺 物	出土地区	遺 構	材 質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備 考
437	236	石 庖 丁	301-S	溝埋土中	サヌカイト	42.0	29.3+	7.3	12.0	欠損
"	237	敲 石	"	"	花 崗 岩	67.1	59.2	36.5	197.1	完存
"	238	石 鏃	399-S	"	サヌカイト	22.0	14.5	3.0	0.8	"
444	239	石 庖 丁	301-S	土器溜り-1	"	33.0+	33.7	8.6	12.0	欠損
446	240	敲 石	399-S	包 含 層	玢 岩	106.3	43.0	22.1	163.8	完存
"	241	石 錘	"	"	花 崗 岩	72.6	60.8	45.0	262.1	"
"	242	石 庖 丁	301-S	南 側 溝	サヌカイト	32.1+	30.2	6.0	7.4	欠損
"	243	"	397-R	包 含 層	"	32.1+	34.0+	6.3	8.9	"
"	244	"	"	"	"	38.4+	40.0+	13.9	12.2	"
"	245	"	399-S	"	"	91.2	38.5	11.2	50.3	完存
"	246	"	304-T	"	"	31.2	56.2	9.8	23.1	欠損
"	247	"	"	"	"	40.3	29.8	7.5	10.4	"
"	248	"	304-S	"	"	53.1	31.3	4.6	8.9	"
"	249	"	303-T	"	"	34.2	55.0	6.1	13.0	"
"	250	"	304-T	"	"	44.8	30.8	6.7	10.8	"
"	251	"	303-S	建 物-16	"	27.9	21.9	6.3	—	" 庖Ⅲ
"	252	"	304-T	土 塙-49	"	24.7	24.2	7.3	4.3	" 庖ⅠB
"	253	"	"	包 含 層	"	21.8	21.0	5.0	—	"
"	254	"	399-S	"	"	41.7	38.0	10.0	15.0	" 庖ⅡA
"	255	"	300-S	"	"	24.9	35.0	7.2	—	"
"	256	"	399-S	"	"	37.2	36.1	7.5	11.8	" 庖ⅡA
"	257	"	302-S	"	"	37.8	33.7	10.3	9.5	" 庖ⅠA
"	258	"	"	土 塙-3	"	16.7	35.5	8.1	4.5	" "
"	259	"	397-S	包 含 層	"	35.0	43.1	11.4	18.8	" 庖Ⅰ
"	260	大型石庖丁	300-S	柱 穴	"	66.6	69.6	19.9	64.4	"
"	261	石 槍	304-T.S	包 含 層	"	41.5	46.3	15.3	39.2	"
"	262	"	304-T	土 塙-49	"	82.2	41.7	16.7	73.2	"
"	263	"	302-S	包 含 層	"	25.3	22.7	6.9	4.6	"
"	264	"	399-S	"	"	31.8	30.8	12.7	11.6	"
"	265	石 鏃	304-S	"	"	20.3	13.8	3.3	0.8	ほぼ完存 鏃Ⅰ
"	266	"	"	"	"	28.2	17.1	3.6	1.8	欠損
"	267	"	303-T.S	"	"	22.4	15.7	2.9	1.0	ほぼ完存 鏃Ⅰ
"	268	"	303-T	包 含 層	"	21.4	19.3	4.1	1.4	欠損 "
"	269	"	304-T	"	"	27.0	20.1	5.3	2.7	" 鏃Ⅳ
"	270	"	"	"	"	23.9	17.0	3.2	1.1	ほぼ完存 鏃Ⅱ
"	271	"	"	"	"	33.8	14.7	5.5	2.6	欠損 鏃Ⅳ

百間川今谷遺跡

図	番号	遺 物	出土地区	遺 構	材 質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備 考
	272	石 鏃	302-S	包 含 層	サヌカイト	23.3	19.2	3.2	1.0	ほぼ完存 鉄Ⅰ
	273	"	"	"	"	22.5	15.1	4.6	1.7	欠損 "
	274	"	305-S	"	"	15.9	15.8	3.0	0.5	ほぼ完存 鉄Ⅱ
	275	"	302-S	"	"	17.2	16.7	2.6	0.8	欠損 鉄Ⅰ
	276	"	"	"	"	20.0	20.0	6.2	2.6	" "
	277	"	"	"	"	31.2	15.1	3.8	1.4	ほぼ完存 鉄Ⅰ
	278	"	399-S	包 含 層	"	21.7	14.1	3.9	1.0	" "
	279	敲 石	"	"	細粒花崗岩	73.2	59.2	28.5	147.4	欠損
	280	"	"	"	流 紋 岩	96.5	51.6	30.0	195.8	"
	281	"	"	"	石 英 斑 岩	50.7	45.5	45.0	138.1	完存
	282	"	397-S	"	流 紋 岩	149.0	63.5	38.0	505.0	"
	283	"	"	"	石 英 斑 岩	98.9	39.5	30.5	152.6	"
	284	"	300-S	"	玢 岩 ?	94.2	64.7	24.2	231.1	欠損
	285	"	397-S	"	流 紋 岩	133.5	34.2	28.2	187.8	完存
	286	砥 石	"	"	細粒花崗岩	191.0	111.5	72.5	1,637.0	欠損
	287	砥石・敲石	399-S	"	"	97.7	30.5	16.2	80.5	完存
	288	砥 石	397-S	溝 - 1	流 紋 岩	271.0	204.0	83.0	5260.0	"
	289	"	399-S	包 含 層	結 晶 片 岩	32.9	23.7	43.3	35.2	欠損
	290	"	"	"	半花崗岩?	83.1	35.5	14.0	65.3	ほぼ完存
	291	"	397-S	"	蛇 紋 岩	61.7	17.8	15.5	12.0	欠損
	292	"	"	"	細粒花崗岩	95.0	75.2	50.5	397.0	"
	293	"	"	"	頁 岩	50.4	48.5	23.3	58.5	"
	294	"	"	"	流 紋 岩	54.6	37.7	33.7	79.2	"
	295	スクレイパー	303-S	"	サヌカイト	37.3	26.8	5.6	5.6	"
	296	"	304-T	"	"	13.1	16.5	4.8	0.7	"
	297	"	304-U	表 採	"	102.5	56.2	11.8	75.4	ほぼ完存
	298	"	303-S	土 塙-24	"	26.1	26.4	4.0	3.2	欠損
	299	"	304-T	包 含 層	"	39.1	24.0	4.6	3.4	"
	300	"	"	"	"	46.3	40.9	6.2	-	完存
	301	"	300-S	"	"	36.2	35.2	8.2	10.8	欠損
	302	"	302-S	"	"	20.0	22.2	5.9	2.4	"
	303	"	"	"	"	36.3	22.7	6.7	5.8	"
	304	"	"	"	"	21.1	33.3	6.6	5.1	"
	305	"	"	"	"	39.5	21.7	6.5	5.0	"
	306	"	"	"	"	24.9	27.9	6.7	4.8	"
	307	"	399-S	"	"	50.0	31.7	7.8	13.9	ほぼ完存
	308	"	397-S	溝 - 1	"	48.5	31.3	11.5	20.8	"

第4章 第1節 大地調査区

図	番号	遺 物	出土地区	遺 構	材 質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備 考
	309	スクレイパー	302-S	包 含 層	サヌカイト	68.5	39.1	6.5	—	ほぼ完存
	310	"	397-S	溝 — 1	"	44.3	27.1	9.0	10.8	欠損
	311	"	399-S	包 含 層	"	81.4	50.7	15.1	54.1	"
	312	"	"	"	"	20.8	26.2	6.7	3.5	"
	313	"	302-S	"	"	17.2	21.2	4.9	2.3	"
	314	"	"	"	"	33.2	24.4	5.2	3.7	"
	315	"	"	"	"	33.7	29.2	8.2	6.7	"
	316	"	399-S	竪穴式住居-2	"	23.6	16.8	5.0	1.9	"
	317	"	"	"	"	68.4	30.2	7.1	11.3	ほぼ完存
	318	"	"	土 墳-76	"	16.2	31.8	6.3	3.4	欠損
	319	"	302-S	竪穴式住居-7	"	28.5	25.0	6.9	4.7	"
	320	"	300-S	包 含 層	"	22.7	28.3	5.2	3.3	"
	321	楔形石器	304-T	"	"	41.5	31.8	15.1	22.1	完存 楔形Ⅱ
	322	"	304-S	土 墳-26	"	27.9	22.3	10.3	—	欠損 "
	323	"	304-T	包 含 層	"	45.3	28.0	9.6	—	完存 "
	324	"	300-S	"	"	46.5	32.0	12.5	29.6	" "
	325	"	302-S	"	"	22.9	16.4	5.2	2.7	" 楔形Ⅰ
	326	"	397-S	"	"	51.0	32.5	17.3	—	" 楔形Ⅱ
	327	"	"	溝 — 1	"	29.0	26.5	6.7	4.7	" 楔形Ⅰ
	328	"	399-S	包 含 層	"	42.1	30.6	13.0	18.9	" 楔形Ⅱ
	329	"	302-S	"	"	39.8	27.5	12.5	13.8	" "
	330	"	"	"	"	23.1	27.1	8.0	5.4	欠損 "
	331	"	"	"	"	36.8	33.4	9.7	11.4	" "
	332	"	399-S	"	"	23.1	18.5	9.5	4.5	" "
	333	石 錘	"	"	花 崗 岩	72.7	68.6	53.8	361.0	完存
	334	石 核	300-S	"	サヌカイト	35.3	36.5	12.6	19.9	
	335	不明石器	304-T	"	"	15.5	28.9	7.7	2.9	欠損
	336	"	"	"	"	36.2	26.5	5.5	5.3	"
	337	"	"	"	"	15.7	21.6	4.2	—	"
	338	"	302-S	"	"	23.0	42.9	20.0	14.3	"
	339	"	"	"	"	18.3	43.3	11.9	12.2	"
	340	"	300-S	"	"	55.8	31.7	9.7	17.8	"
	341	"	303-Q	"	"	32.5	11.3	4.4	—	ほぼ完存
	342	砥 石	"	"	流 紋 岩	63.7	45.8+	16.0	—	欠損
	343	小型磨製石斧	"	"	安 山 岩	41.7	29.6	8.0	—	ほぼ完存
	344	磨製石斧	304-Q	"	"	48.3	46.1	20.8	58.7	欠損 扁平片刃?
	345	"	304-R	井 戸-4	玢 岩	111.8	70.9	46.8	630.0	" 大型蛤刃

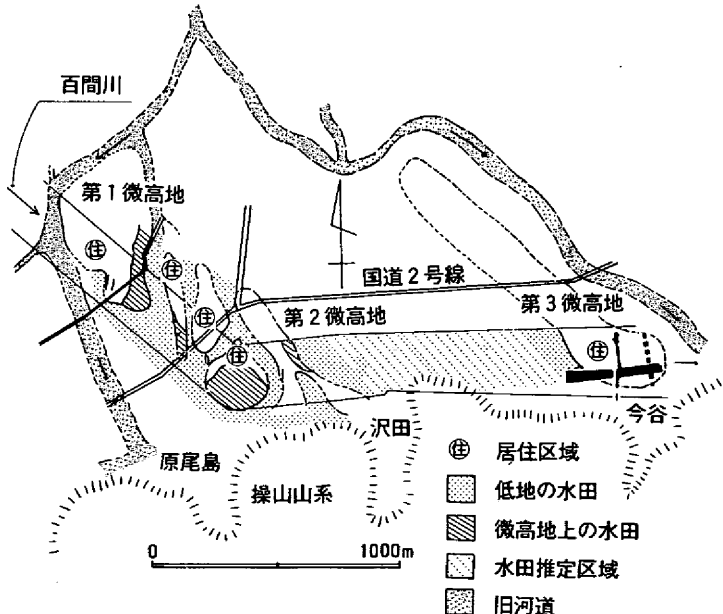
第5章 ま と め

第1節 兼基・今谷遺跡の集落

現代の旭東平野には南流する旭川より枝を分け、南東方向に平野を貫流し、操山山塊を東回りに流走して児島湾に注ぐ河川と、南下して再び本流に注ぎ込み、操山山塊を西回りにて児島湾に注ぐ2種類の流路が存在する。前者の中心になる河川が「百間川放水路」であり、後者の中心になる河川「祇園用水路」である。

さて、時代を遡って「百間川」のできる以前万治四年（1661）の絵地図（註1）を見ると、小規模でもあり、若干位置は上下するが基本的には前述した東西に分水をする同一の流走方向の溝が5～6条存在していたことが認められる。絵地図より他に気づく点は「ふけ」と記されている場所が存在し、水捌けの悪い所とか低位部を呈示している。

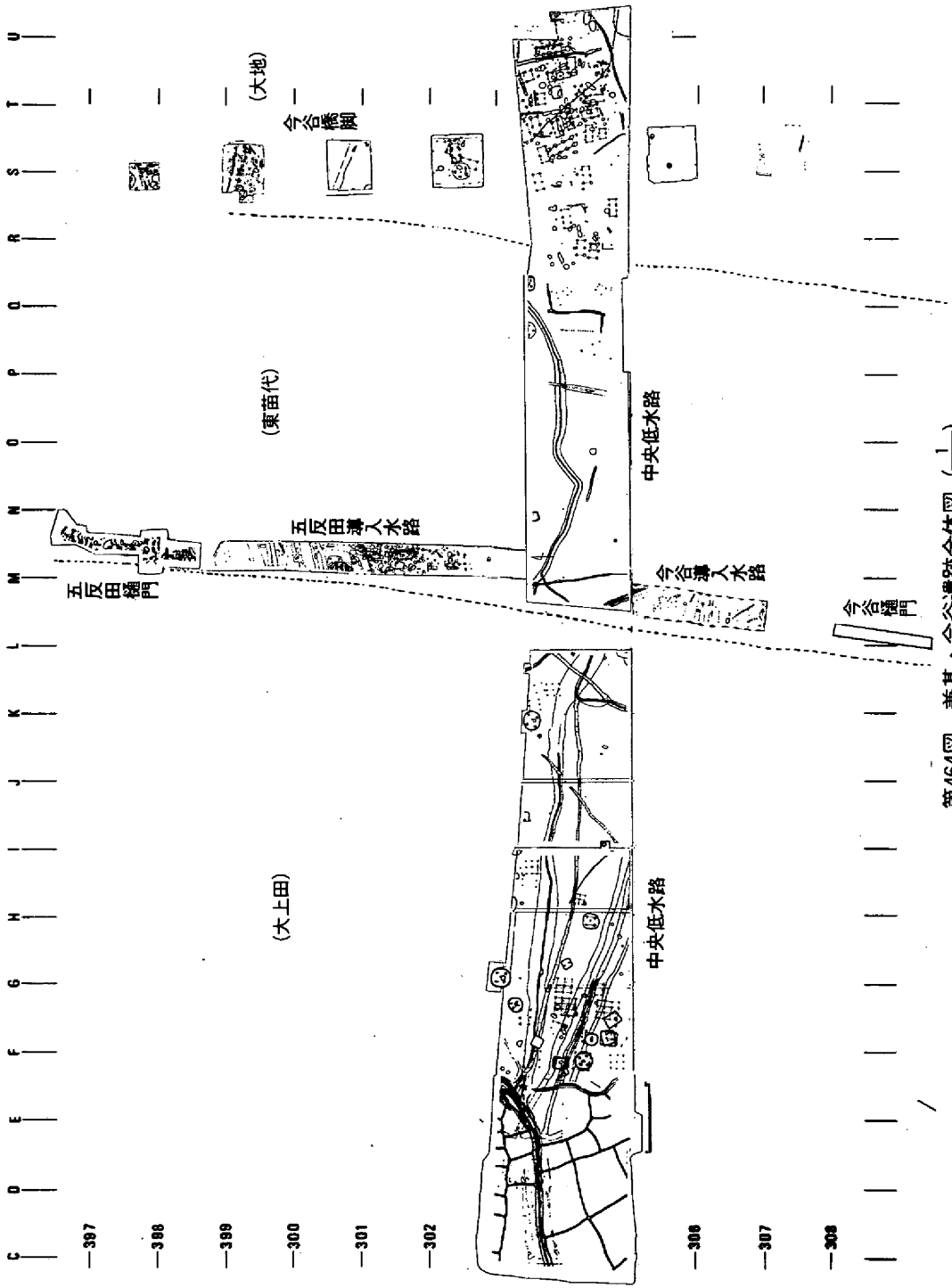
そして、「ふけ」の方向は万治四年図の流路に沿う状態を呈しているものが多く、以前に大規模な河道が同一方向に流走していた痕跡をとどめている。本河道については、今日の航空写真においても一応確認が可能である。



第463図 微高地形状と水田の分布図 ($\frac{1}{30000}$)

前述した大規模な河道に挟まれた、東西約3 Km、南北約1.5 Km内に西方より第1・2・3微高地が存在し、南側には操山山塊がひかえており、今回報告の兼基・今谷遺跡（第3微高地）は旧河道に挟まれた東端部に位置する（第463図）。

百間川河床の調査より総合的に推定できる第3微高地の範囲は、



第464図 兼基・今谷遺跡全体図 (1/2000)

東流する旧河道に東側面を制約され、それに沿う形で北西より南東に1 Km以上、北東より南西に約200~300mを測り、長楕円形を呈していると考えられる。

調査区にて確認できた微高地は東西約400m、南北約200mを測り、微高地を斜位に横断した格好となり、そして、南端に微高地の下がり、西端に下がりに近い水田を検出し、北、東に微高地が延長することが判明した。

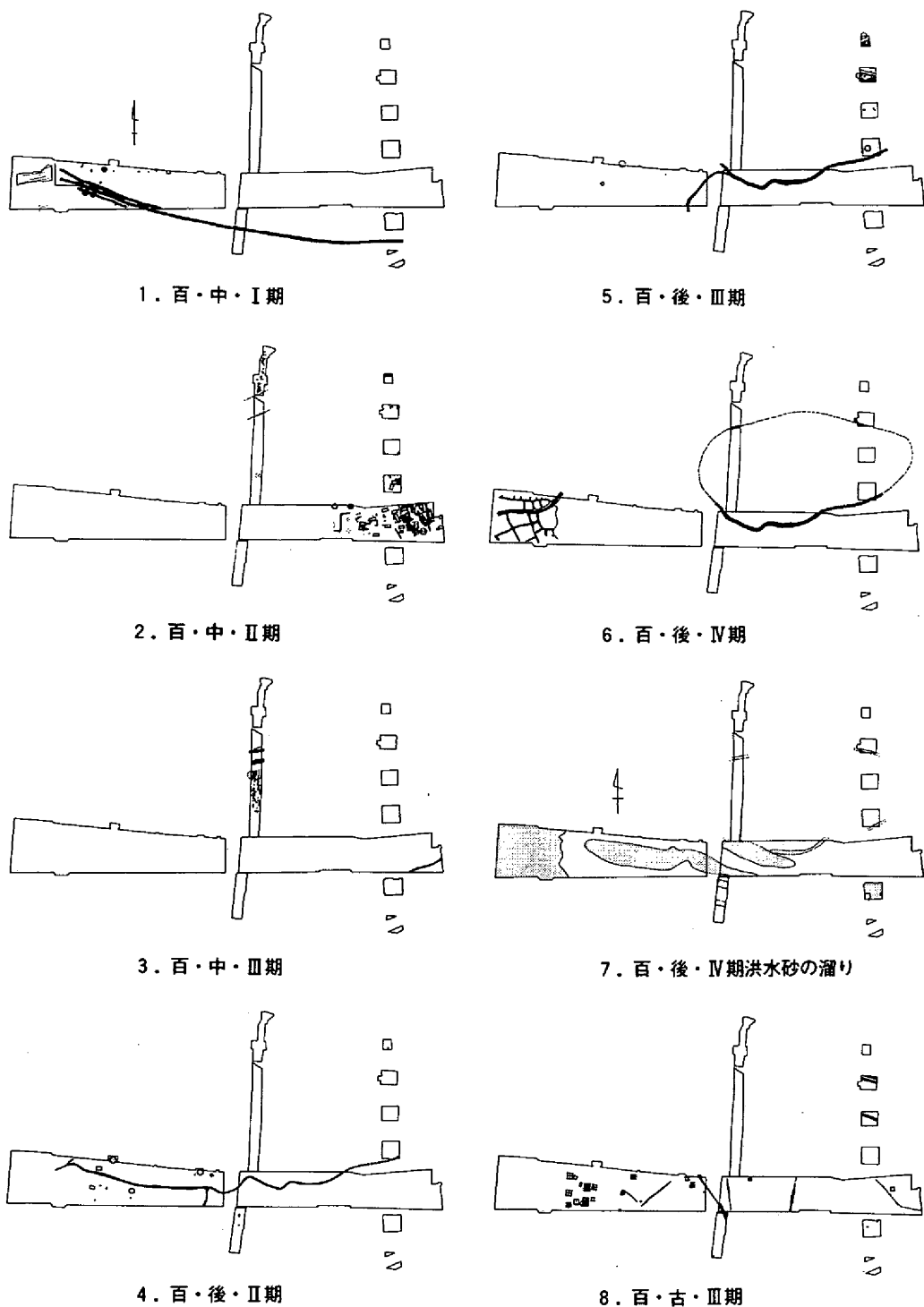
微高地上にみられる水田を埋没させた洪水砂（以下水田埋没砂）下位の海拔高より地形を求めてみると、高所は五反田導入水路399—M（海拔213cm）、橋脚398—S（海拔230cm）を結ぶ右上りの東西線上に位置することがわかる。最高所は398—S付近に求められ、そこより地形は除々に四方に下がり、低丘状になってゆくようである。南側305—Lでは洪水砂下位で海拔140cm、基盤層では118cmを測り、北側396—Mでは洪水砂上位で海拔175cm、基盤層で海拔115cmを測る。低水路は微高地南縁に近い部分であることが判明し、五反田樋門・橋脚北端では微高地北縁に近づいていることを知ることができる。

微高地の細部の形状については、水田埋没砂と同時期に微高地上に堆積した砂の有無、あるいは溝・堅穴式住居、建物等の位置、方向により推定することが可能である。

まず、水田埋没砂の堆積状況は303・398—S周辺には確認されておらず、他の調査区内では若干の高所を除きほぼ全域に堆積分布が認められ、なかでもベルト状の凹地部（第465—7図）の水田埋没砂を手がかりに地形を復原することができる。2本のベルト状の凹地は西より東に南下し、304—Q付近で最も低くなり、そこより変換して西より東へ北上し、弧状を呈する。すなわち、微高地地形に沿った東西ベルト状の凹地と凸地が交互に存在し、横皺状の形態を呈するものである。また、この状況は東西ほど顕著ではないが南北方向にも縦皺状の起状が認められる。そして、凹地部には溝・井戸・水田等が、凸地部に堅穴式住居・建物等が立地する傾向がうかがえる。この傾向は百・中・Iより百・後・IVの時期まで継続しており、同一の微高地利用方法が認められる。

遺構からそれをみると、百・中・Iでは西より東に向って南下する横皺状の凸地に溝3本、百・中・IIでは東より西へ南下する横皺状の凸地に建物群、百・中・IIIでは建物群に沿って南下する横皺状の凹地に溝が認められ、Qの低地部に集中すると考えられる。百・後・I、IIでも西より東に南下する横皺状の凹地に溝2本、百・後・IIIではさらに東西より下降する溝の弧状を呈示する部分が304—Nにて認められる百・後・IVも百・後・IIIの溝を踏襲する格好で存在する。

この傾向は百・後・IVの洪水前まで継続し、洪水を期に一変する。以後集落は若干南下し溝は小規模化し、流走方向は東西より南北に変化する。



第465図 兼基・今谷遺跡の時期別遺構分布図

1 集落の占地と変化

兼基・今谷遺跡は弥生時代前期(百・前・Ⅲ)の土器分布に始まり、百・中・Ⅰより百・古・Ⅲ、古代、中世、近世そして今日まで継続している。検出遺構総数は約400を数える。

ここでは弥生～古墳時代の時期別に遺構の在り方を述べ、今後の旭川放水路(百間川)内の調査・研究に備えたい。

百・前・Ⅲ期

大上田・東苗代・大地の各調査区に数片ずつの出土が認められるが、時期を呈示するものとして遺構に判うものは存在しない。

百・中・Ⅰ期(第465図)

居住区は大上田地区の微高地西端高所の東西約80m間に集中しており、小型の竪穴式住居4軒、土壇24基、水田が存在する。他の調査区には同時期の遺構は認められず、百・中・Ⅰの新相期には小範囲に集落が営まれた可能性をうかがわせる。また、これらの竪穴式住居に切られる格好で微高地地形に沿う3本の溝が出土しており、百・中・Ⅰの新相より古い時期の遺構が存在したことが理解できる。

百・中・Ⅱ期(第465図)

百・中・Ⅰの居住区は継続せず、約60m隔てた東部と北部に集落(130×260m)の中心が現われている。なかでも東部に集中しており、掘立柱建物28棟(大型建物を2棟含む)、竪穴式住居5軒、土壇59基(中にガラス溶滓を含むものあり)、井戸14基、溝13本と微高地内では最大の密集度を持つ場所である。これらは微高地の横皺状の凸地と縦皺の凸地を併用利用していると考えられる。しかし、従来みられた微高地南縁に沿う溝は認められず、北部に北東より南西に流れると考えられる大溝—30が存在する。大溝は百・中・ⅡよりⅢにかけて廃棄されたと考えられる。

百・中・Ⅲ期(第465図)

遺構の密集地は百・中・Ⅰ・Ⅱ期とはほとんど重複することなく、ほぼ中央部分の60×10mの範囲に遺構が集中している。また東端に微高地の横皺状の凹部を利用した東より西に流走する溝が一本検出されている。他にほぼ同一場所に重複、切り合いを持つ竪穴式住居4軒、東西に流れる溝2本が存在する。北側で東西に流走する溝が微高地高所に位置する。百・中・Ⅱ、Ⅲ期を通じて同一方向に流走する溝は東の調査区(今谷橋脚)、西端の調査区(低水路)においてその接続可能と認められる同時期のものは検出されておらず、水路の機能を考察するうえでは不十分である。

百・中・Ⅰ～Ⅲ期に関しては集落規模が直接有機的な関係を持たず、若干の距離を有してま

とまりとして存在している。各期内においての近い時期の切り合い関係は存在するが、百・中・Ⅰ、Ⅱが切り合うとか、百・中・Ⅱ、Ⅲが切り合う関係はほとんど認められない。この事実は、微高地の西端に居住をした集団が何らかの事情にて微高地東部に移動し、再び微高地中央に移動してきた状況を呈示するものとも考えられる。あるいは百・中・Ⅰの新相と百・中・Ⅱの新相間に存在する土器を使用した集団は他の微高地上に居住していた可能性もうかがえる。前者は兼基・今谷遺跡より北方約14kmに位置する雄町遺跡（註2）の第3、4調査区において百・中・Ⅰ～Ⅲと並行関係にある集落が認められている。そして雄町遺跡の編年にて3・4・5類に分類されている土器が百・中・Ⅰ・新相、Ⅱ・新相、Ⅲ・中相に対比可能である。兼基・今谷遺跡と同様のきわめて類似する居住パターンをもつ占地形態を有している。

百・後・Ⅰ期

この時期の遺構、遺物は少く、東西に流走する溝が1本と土塋2基のみである。両者は位置が大きく隔っており、有機的関連は求めがたい。しかし、溝は百・後・Ⅱ以後、百・後・Ⅳまで踏襲されており、東西溝の基本となる初形態が認められる。

百・後・Ⅱ期（第465図）

百・中・Ⅰ～Ⅲにかけての比較的小規模なまとまりをもつと考えられた集落分布に比較すると微高地上に若干広がりを見せはじめる時期と考えられる。

微高地地形に沿って流走する溝が大上田、東苗代、大地地区を貫って東西ベルト状に認められ、ほぼ中央で南下する溝に合流する。百・中・Ⅰにみられた流走方向とはほぼ一致し、同一機能を有していたと考えられるが、溝の位置は全体的に北の高所に移動している。他に竪穴式住居3軒、建物2棟、土塋7基が大上田地区を中心に分布している。出土土器の量は各期を通じて最も多い。

百・後・Ⅲ期（第465図）

百・後・Ⅱが微高地西部大上田地区を中心に行っている事実と比較して、百・後・Ⅲ期は東苗代、とくに大地地区北部に集中が認められる。

溝は百・後・Ⅱの中央で南下する溝より東側部分を踏襲している。溝自体は拡張されており、溝底は高くなっている。他に竪穴式住居2軒、土塋16基等が認められる。そして、遺構付近には土器溜りが伴って出土している。

百・後・Ⅳ（第465図）

いわゆる「水田埋没砂」の洪水期前後にあたり、砂の埋没により微高地地形を復原する方法をあたえてくれる。洪水砂を除去して検出できた遺構、遺物が使用の同時性を呈示することはいうまでもない。ここでは、微高地西端の大上田地区にて水田、竪穴式住居1軒、そして、東苗代・大地地区での百・後・Ⅲの溝を踏襲しながら砂で埋まった、規模を若干縮少する溝1本

が検出された。その溝は大地・東苗代調査北側に洪水砂の堆積した同種の溝が認められ、一巡する可能性が考えられる。しかし、これは、北側が高所にあたり、微高地高所を巡るという格好にはなりがたい。また、水田のすぐ東側に存在する竪穴式住居は立地条件等より、水田の管理小屋的な役目を想定することが可能である。

百・古・Ⅰ期

この期の遺構・遺物もほとんど認められず、微高地西端の大上田地区の「水田埋没砂」上より掘り込まれた土壌4基にとどまる。2基づつがまとまる出土状況を呈している点等からは竪穴式住居の柱穴の可能性もうかがえる。非常に密度の低い占地である。

百・古・Ⅱ期

百・古・Ⅰ同様に遺構密度が低く、大地地区の東端に竪穴式住居が1軒、土壌1基のみという状況である。

百・古・Ⅲ期（第465図）

百・古・Ⅰ，Ⅱに比較すると爆発的に増加した状況を呈示しており、ほぼ全域に分布する傾向をみせる。洪水期以前に見られた溝方向とは流走方向が異なり、南北方向で小規模な溝が多くなる。今谷橋脚北側部では須恵器を含む溝が出土している。他に建物13棟、竪穴式住居4軒、井戸8基、土壌3基が存在した。この時期で特筆すべてものは、比較的まとまって出土した掘立柱建物群である。

計画性を持った配置を示し、なかでも総柱建物—5・9・11、建物—6・10・12は南北縦列に2棟が並び、東西横列に3棟が並ぶ形態をとる。建物—5・6、建物—9・10は面積、配列等より同一機能を有するものと考えられる。

しかし、同時存在か、あるいは、南の横列建物—6・10・12が北の建物より優先して存在し、それを北側に移動した可能性もうかがえる。

（高畑知功）

註

註1 「児島湾北岸の新田開発と百間川」池田家文庫等貴重資料展岡山大学附属図書館 1979

註2 正岡睦夫他「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会 1972

第2節 竪穴式住居

今回の発掘調査で検出された竪穴式住居は弥生時代から古墳時代に渡り、総数 30 軒を数える。報告された竪穴式住居の中で、最も古いものは、百・中・Ⅰまでさかのぼり、大上田調査区で 5 軒検出した。基本的には、平面形は円形であるが、方形、長方形もみられる。また火に関連を有する施設と考えられる深い中央穴を設置したものが 3 軒あり、百・後・Ⅳまで共通してみられる。柱穴は 4 本が主流であるが、竪穴式住居—3 のように、2 本柱は構造上、特徴的である。遺物は竪穴式住居—3 より、勾玉、管玉が出土しており、県内の玉類出土例としては、時期的に一番古く、貴重な資料である。また竪穴式住居—4 からは、石鏃の外に、サヌカイト片が密に検出されていることは興味深い。次に百・中・Ⅱの竪穴式住居は、大地調査区で 7 軒確認した。いずれも不完全なものであり、構造上、指摘できる特徴的なことは無い。百・中・Ⅲにおいては、東苗代調査区のみ、重複も含めて 4 軒検出した。調査区内の微高地上では、一番高いレベルに立地し、地形上安定した地を選択しているようである。前の時期と同様、隅丸方形を基調として、4 本柱である。柱穴内に礎石を想定させる河原石を含む柱穴を二本確認した。

後期の竪穴式住居の中で古い段階は、今回の報告では百・後・Ⅱの時期である。大上田調査区で 3 軒、大地調査区で 1 軒ある。報告された竪穴式住居の中では比較的大きく、床面積が 30 m^2 前後の中規模のものである。径が約 6 m の円形の竪穴式住居—6 からは、ガラス小玉、鉄鏃などが出土しており、竪穴式住居の規模に比較して、かなり重要な遺物を出土しており、単に偶然的な事柄として棄てざることはできないであろう（註 1）。百・後・Ⅲでは、大上田調査区で 2 軒、大地調査区で 1 軒ある。大上田調査区の竪穴式住居—7 は 2 本柱であり、規模、形態から、作業小屋的な性格が濃い。また、大地調査区の竪穴式住居—8 は円形で 5 本柱である。さらに、弥生時代最終末（百・後・Ⅳ）では、覆土に「水田埋没砂」をもつ、竪穴式住居—11 を大上田調査区で検出した。水田が機能していた時期と有機的な関連を想わせる好資料である。

古墳時代と考えられる竪穴式住居は大上田調査区で 4 軒・大地調査区で 2 軒ある。今回の報告では、カマドや高床部を有する竪穴式住居検出例は皆無である。高床部については、それが消失する時期より新しい段階の住居であることが大きな理由であろう（註 2）。規模は一辺が 300 ～ 500 cm のもので、方形～長方形を呈する。柱穴は 4 本柱、2 本柱、柱が確認されぬもの等、様々である。いずれの竪穴式住居も須恵器の出土はみられないが、古式須恵器を伴出する可能性を有する土師器を確認することができる。遺物としては、甕・高杯・鉢・甑などの土師

器で、須恵器は一切含まれていない。また滑石製22孔円板、勾玉、鉄鏃の出土をみる。

なお、火災により廃棄された竪穴式住居は、12例の報告がある。炭火材、茅炭炭化物を良好に存し、上屋構造の復元に好資料を示唆してくれるものである。時期別には、弥生中期5軒、後期4軒、古墳時代前半3軒である。

以上、時期的な特徴を概観したわけであるが次に竪穴式住居の規模・平面形について若干の分析を試みたい。表一39は報告された竪穴式住居の規模・平面形的変遷を一覧表にまとめたものである。まず、平面形態は時代の推移と共に、「円」中心型→「円・方」混在型→「方」中心型の一般的パターンを提示（註3）しており、「方」中心型へ移行する転換期を百・後・Ⅲと百・後・Ⅳの時期の間に一応、線を引くことが可能である。

表一39 竪穴式住居面積一覧表

時期	住居址番号	平面形状	床面積 (㎡)	地 区
弥生中期	竪穴式住居—2 —3 —4	円・4 円・2 不整・4	● ● ●	大 上 田
	竪穴式住居—5 —?	円・8 隅丸・4	■? ●?	大 東 苗 地 代
	竪穴式住居—1 —3	隅丸・4 〃・4	■? ■?	東 東 苗 苗 代 代
弥生後期	H—7 H—8	円・4 楕円・6	● ●	△新田サイフォン △新田サイフォン
	竪穴式住居—6 —8 —10	隅丸・4 隅丸・4 円・4	■ ■ ●	大 上 田
	竪穴式住居—8 —7 —9	円・5 隅丸・2 円・0	■ ● ●?	大 大 上 地 田
	竪穴式住居—11	長方・0	□	大 上 田
古墳前半	2—H—1 1—H—5 H—1	長方・2 長方・? 方・4	□ □	△左 岸 用 水 △新田サイフォン
	2—H—6 竪穴式住居	方・4 方・4	□ □	△左 岸 用 水 地
	竪穴式住居—12 —13A —13B —14	方・0 方・4 長方・2 長方・0	□ □ □ □	大 上 田
古後墳半	3—H—1 H—5 H—6	長方・4 方・0 方・0	□ □ □	△左 岸 用 水 △新田サイフォン △

(註) 1. ● 円形および楕円形 ■ 隅丸方形 □ 方形および長方形
2. △ 『旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査報告Ⅰ』より

恐らく、大上田調査区北部より東苗代調査区にかけて微高地の核となりうる地域に大型竪穴式住居の存在の可能性は充分あり得ると思われる。そして、百・古・Ⅰの時期に、新田サイフォン調査区、H—I竪穴式住居の如き、超大型竪穴式住居の出現をもって、増大傾向は頂点に達すると考えられる。それ以後は、平均15㎡前後の一段と小規模化・定理化した竪穴式住居が一般化していく様相を呈している。

(渡辺 光)

註

註1 近藤義郎、渋谷泰彦「津山弥生住居址群の研究」1957

註2 柳瀬昭彦、岡本寛久「南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』40, 1981

註3 大林太良「日本古代文化の探究家」社会思想社

註4 正岡睦夫他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会 1972

第3節 弥生時代中期の建物群

大地調査区では、建物が集中して検出された。建物は全部で28棟ある。調査結果からすると、東西80m、南北60mくらいの範囲内に集中している。東端部のひろがりについては十分に確認されていないため、さらにひろがるものと推定される。

建物は、1×1間が2棟、2×1間が14棟、3×1間が11棟、4×1間が1棟である。建物―4は柱穴が小さく、1×1間であることから竪穴式住居の可能性もある。建物―19も1×1間であり、竪穴式住居の可能性もあるが、柱穴は大きく、建物と考えることもできる。この不確実なものを除くと26棟になる。調査区域の南端部では、建物が検出されないことから、ほぼ南限とすることができ、西端部は、建物―5、建物―6を西限としている。北側は橋脚部にあたるところが調査され、建物が検出されていることから、未調査区域の北側には、多数の建物の存在が推定される。

建物の規模は、最大のものが桁行7.60m、梁間2.20m、最小のものは桁行3.00m、梁間1.90mを測る。棟方向は、ほぼ東西か南北である。柱穴の掘り方は、いずれも円形を呈し、建物の規模によって、大小がみられる。最も大きいものは、建物―12・建物―28において、直径1mをこえるものがあり、深さも100cmと深い。建物―28で残存していた柱根によると、直径18cmの丸太材が使用されている。建物―24に残存していた柱根は、直径22cmの丸太を4分の1に割ったものが使用されていた。その他にも若干の柱材が残存していたものもあるが、大きさを測れるものはない。井戸―13の中から出土した柱材には、直径20cmの丸太材のものと、15×7cmの断面長方形の材木をつくり、えぐりを入れたものがある。上部になるのか下部になるのか不明だが、根がらみ構造とも考えられる。調査した建物の柱穴では、根がらみ構造は検出していない。

建物の平面形は、不確実な1×1間のものを除くとすべて長方形を呈している。長方形の建物内では、いずれの場合も火どころは検出されなかった。津山市沼遺跡E地点（註1）では、3×2間の建物とされるものが検出されているが、この場合は地山をわずかに掘り込んでおり、柱の並ぶところが壁となっていて、中央部には、火どころが残っている。このことから、この種のものは平地住居の一種と考えられる。柱の配列をみると建物と考えられやすいが、区別する必要がある。これらの柱穴は比較的小さく、柱材の規模の差がみとめられる。この種のものは、最近岡山県北部の遺跡で調査例が増加している。建物に接して、小さな柱穴の検出されたものがある。建物―12・13・14・28では、建物の柱穴よりはきわめて小さな柱穴がある。全容を確認したものはないが、建物―13の場合は桁行の柱列の外側に2本並行している。この

柱穴は建物を建てる時に必要となる足場ヤグラのあとと推定することができる。津山市・押入西遺跡（註2）の4×1間の建物には、桁行の柱列にそって、小型の柱穴が並んでいる。これらの柱穴についても同様に考えることができよう。また、建物—28の梁の南側には、1本の柱穴があり、位置関係からすれば、梯子の設置された跡と考えることもできる。しかし、ほとんどの建物が未検出であったことからして、すべて妻に入口を設けたと決めてしまうことはできない。建物—28の西側には、建物と並行して走る溝がある。多量の土器片を含んで埋設していたが、建物群の中に設けられた排水溝と考えてさしつかえなかろう。その他には、建物—16の東・建物—24の北などにも溝の一部が残存していて、これらについても同様に考えられる。

建物の柱穴からは、多くの土器片を出土している。建物—16には、ほぼ復原できる土器があり、建物—22の柱穴からは、壺の完形品が出土している。上層には弥生中期の包含層があり、建物の年代は、百間川中期Ⅱの時期に属することがわかる。建物の棟方向は東西と南北方向をとっていて、接近していたり、建物—26と建物—27のように重複しているものもある。このことから、同時に存在したものは少なくなる。柱穴等から出土する土器から判断される年代は、すべて、百・中・Ⅱ・新相に属している。この年代幅はそれ程長いものとは考えられないことからすれば、同時に存在する建物は全体の半分ないし3分の1と考えるのが妥当であろう。とすると、調査されたものだけでも、10棟くらいが想定される。未調査地域を含めるとその数はさらにふえるであろう。

従来、弥生時代の建物が検出される場合は、竪穴式住居群の近くに2棟くらい存在しているのが通常である。このことと対比してみると、今回発見された建物群の異常さが見い出されよう。建物群の周辺における同時期の竪穴式住居は、南端部に3軒と西端部に2軒確認されている。南端部のものには、建物と重複するものもあるが、建物の集中しているところでは、重複したものはない。したがって、建物だけが集中して建てられているという状況にある。

建物の集中するところには、14基の井戸と57基の土壙が検出されている。井戸は建物の近くに位置することが多く、多量の土器が投入されたものもある。土壙には、焼土・灰・土器を多量に含むものが多く、なかにはガラス質の溶滓を含んだものも多い。ガラス質の溶滓のなかには、炉壁と考えられる破片が含まれている。57基におよぶ土壙は、炉をこわしたものやその他のごみを入れたものと推定される。ほとんどに焼土がみられることから建物の近くで、火を用いたものと判断される。

このことは、建物の性格の問題にも及ぶことになるが、穀物を貯蔵する倉庫とするには、周辺で火を用いている点が矛盾することになり、それ以外のものを考えなければならない。その場合、高床式と判断されることからすると住居として使用されたことも考えられよう。炉壁の破片を多く出土することからすれば、覆屋の可能性も考えられるが、大型の柱穴を掘り、頑丈

な柱をたてていることからすれば、疑問点もでてくる。

付近に竪穴式住居が少ない点からすると高床式の住居と考えるのが妥当である。このことは、竪穴式住居が一般的である弥生時代の社会において、高温を出す炉を使用するような技術集団とのかかわりあいについても考えてみなければならないであろう。

弥生時代の建物については、多数の報告例がある。岡山県内の資料を中心に概観してみたい。

弥生前期とされるものには、佐賀県・葉畑遺跡（註3）、大阪府・山賀遺跡（註4）、岡山県・津島遺跡（註6）などがあげられている。葉畑遺跡や山賀遺跡では、 3×2 間以上の建物とされているようであるが、全体の判明したものがなく、断定するには困難性がある。津島遺跡の 1×1 間のものについては、弥生前期中葉の年代が判明しているが、 3×2 間のものについてはよくわからない。このように、弥生前期については、まだまだ十分に把握されていないのが実情である。

弥生中期になると、多数の類例が知られている。著名な登呂遺跡をはじめ、津山市・押入西遺跡、上房郡・桃山遺跡（註6）、久米郡・椋山遺跡群（註7）、岡山市・雄町遺跡（註8）、愛媛県・西野Ⅲ遺跡（註9）などで検出されている。津山市・押入西遺跡で調査された建物は、 4×1 間が1棟、 1×1 間が2棟あり、 4×1 間のものは、梁間370cm、桁行1100cmと大きな規模のものである。柱穴の掘り方は、径50～60cm、深さ50～95cmあり、柱の抜き取り穴からは多量の土器を出土している。百間川遺跡の建物の中で最も大きなものと対比される。久米郡・椋山遺跡群には、弥生中期から後期にかけて、24棟の建物群が検出されている。 1×1 間が13棟、 2×1 間が8棟、 4×1 間が1棟、 5×1 間が1棟、 7×1 間が1棟である 4×1 間のものには、焼土面があり、高床ではない。 7×1 間のものは、梁間278～285cm、桁行1026～1067cm、床面積29.4㎡である。愛媛県・西野Ⅲ遺跡では、 1×1 間が1棟、 2×1 間が1棟検出されている。 1×1 間のものは、掘り方が径76～101cmあり、梁間215cm、桁行520cmである。 2×1 間のものは、掘り方が径57～108cmあり、梁間315cm、桁行540cmである。

その他にも、岡山県下では、津山市・沼遺跡、同・アモウラ遺跡、岡山市・奥坂遺跡、同・雄町遺跡などでも検出されているが、いずれも、竪穴式住居群が所在する近くに位置していて、少数の建物が存在する状況である。

岡山市・雄町遺跡出土の弥生中期後半の土器片には、2棟の建物が描かれている。この絵は側面からみたもので、桁行が3間であることと、屋根が寄棟であることはわかるが、梁間は確認できない。高床であるかどうかについても、下半部を欠失していて断定しがたい。他に、もう1点、高床式建物を描いた土器片があるが、時期は明確にできない。大阪府・瓜生堂遺跡（註10）や奈良県・唐古遺跡（註11）の土器に描かれた建物も側面の図が描かれていて、桁行は3間である。伝香川県出土の銅鐸絵画や大阪府・瓜生堂、奈良県・唐古遺跡の例などには、

棟持柱が描かれている。百間川遺跡の建物からは、これにあたる柱穴が検出されていないし、他の例においても、現在のところ確認されていない。鳥取県淀江町稲吉出土（註12）の弥生中期の土器には、1×1間の高床式建物の絵画がある。各地では1×1間の建物址が報告されているが、絵画からも裏付けられる。

弥生後期になると、百間川遺跡の中でも、兼基や原尾島などでも検出されている。津山市・天神原遺跡（註13）、同・紫保井遺跡、岡山市奥坂遺跡、勝田郡・小中遺跡（註14）等で確認されている。天神原遺跡では、6棟の建物址が検出されているが、そのうち、3×1間のものが2棟あり、一部重複していて建て替えられたものである。柱穴の土器片などから弥生後期のものとされる。規模は、梁間410cm、桁行650cm～670cmのものと、梁間350～370cm、桁行655～660cmである。勝田郡・小中遺跡では、2×1間の建物が1棟検出されている。梁間227～251cm、桁行550cmで、掘り方は45～65cmを測る。柱痕跡も明瞭で、直径20～25cmの柱が推定される。

建物は、弥生時代の初めから普及していたものと推定されるが、初期の状況は、明確ではない。弥生中期以降は、その所在が全国的に明確にされつつある。百間川遺跡の場合は、同時に多数のものがあられ、穀倉と推定しがたいが、一般的には、穀倉として普及したものである。やがて、同様の建築様式が住居にも徐々に採用されるようになるのは、古墳時代に至ってであろう。

（正岡 睦夫）

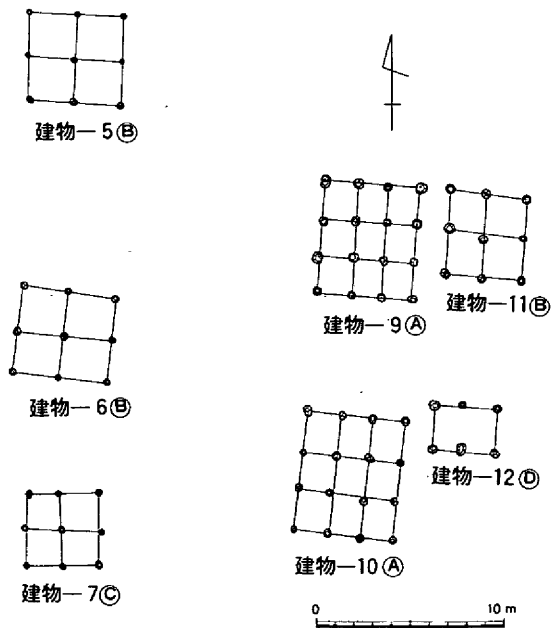
註

- 註1 河本清・柳瀬昭彦「津山市沼E遺跡発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』（9）岡山県教育委員会 1979年
- 註2 橋本惣司他「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（3）岡山県教育委員会 1973年
- 註3 田島龍太「菜畑遺跡」『末盧国』唐津湾周辺遺跡調査委員会編、六興出版 1982年
- 註4 大阪府教育委員会『山賀遺跡現地説明会資料（Ⅱ）』1981年
- 註5 岡山県津島遺跡発掘調査団『津島遺跡発掘調査概報』岡山県教育委員会 1968年
- 註6 田仲満雄他「桃山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（12）岡山県教育委員会 1976年
- 註7 村上幸雄他「椋山遺跡群」（Ⅰ）久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1979年
- 註8 高橋護他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（1）岡山県教育委員会 1972年
- 註9 長井数秋他「愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書」（1）愛媛県教育委員会 1979年
- 註10 瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡Ⅱ』1973年
- 註11 末永雅雄他『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都大学文学部考古学研究報告第16冊 1943年
- 註12 佐々木謙「宇田川—鳥取県淀江町・宇田川地区土地改良に伴う調査概要—」淀江町教育委員会 1981年
- 註13 河本清他「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（7）岡山県教育委員会 1975年
- 註14 栗野克己他「小中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（12）岡山県教育委員会 1976年

第4節 古墳時代の建物

兼基・今谷遺跡では総数12棟の掘立柱建物が検出されている。その内訳は大上田調査区に11棟、大地調査区に1棟である。建物は微高地の皺状の凸部に位置するものが多く、棟方向では南北棟の建物—9・10・17、東西棟の建物—12、方形に近い建物—5・6・7・11・14・15・16・17に分けられる。そして、建物—12・16を除いた建物が総柱であり、平面形は長方形と正方形の二種類が存在する。これらの建物のうち柱穴内に遺物の見られる建物—5・9・12・17等は百・古・Ⅲの範囲に比定できるものであろう。

比較的まとまって出土の認められた大上田調査区の11棟を概観すると、西部に7棟、約50m離れて中央部に2棟、約80m離れて東部に2棟の3ブロックに分かれて立地する。各建物間の切り合い関係は認められないが、建物—9では同規模の重複関係が存在する。この3ブロックを西部よりⅠ・Ⅱ・Ⅲと呼称する。柱間規模は 2×1 間が2棟、 2×2 間が7棟、 3×3 間が2棟の3形態が存在する。面積の平均値では $32m^2$ 、 $21.5m^2$ 、 $14m^2$ 、 $8.5m^2$ の4タイプに分類が可能であり、㊤建物、㊦建物、㊧建物、㊨建物と呼称し、3ブロックにあてはめると、Ⅰブロック（第466図）に㊤が2棟、㊦が3棟、㊧・㊨が各1棟、Ⅱブロックに㊧・㊨が各1棟、Ⅲブロックも㊧・㊨が各1棟の配置になる。Ⅱ・Ⅲブロックでは配置に規則性は認めがたいが、Ⅰブロックでは主軸の方向、建物の配置に幾分の規則性が認められる。



第466図 大上田西部建物配置図 ($\frac{1}{400}$)

すなわち、建物の主軸方向は南北（真北）、東西を基調としており、類似規模を有する建物—5・6、建物—9・10、建物—11・12が南北縦列に配置されている。また、同規模建物の東西横列をながめると、建物—5・9・11と建物—6・10・12の2列の建物群にも配置されていることが理解できる。

また、同時期の堅穴式住居の床面積と比較すると、近似傾向を示すが、同一場所に両者が共存し、使用柱数、計画性のある建物配置等から考慮すると、高床の倉庫として機能していた掘立柱建物群と思われる。（高畑）

第5節 水 田

百間川の水田遺構についての概要は、これまでに多くの報告（註1）がなされ、その度に数多くの問題点が指摘されてきた。しかし、それらについては、その後の広範囲にわたる水田遺構の調査により、徐々にではあるが判明しつつある。今回調査した水田も微高地沿辺部に営まれた水田の在り方の一端を示すものとして意義深いものといえる。以下、当調査区で検出された水田についてのまとめを行うものである。なお、それに際して、調査時に実施した花粉分析（註2）の結果を提示し、そのデータに従って古環境の復原を試みる。

花粉分析は、百・後・Ⅳの水田耕作土と考える暗灰色粘土層と、その直上に堆積した淡灰色砂層の2点について試料採取し、分析した。分析の結果は、以下のとおりである。

（1）、暗灰色粘土層＜水田層＞

針葉樹花粉17.6%（マツ属7.0%・スギ科5.3%）、広葉樹花粉27.5%（アカガシ亜属4.6%・コナラ亜属6.7%・クリ属3.5%）、草本花粉43.3%（イネ科30.6%・ヨモギ属7.0%・カヤツリグサ2.1%）、羊歯類孢子9.2%（単条型孢子5.6%・三条型孢子・ゼンマイ科）

（2）、淡灰色砂層＜水田直上層＞

針葉樹花粉22.4%（マツ属11.0%・ツカ2.3%・スギ科3.8%・コウヤマキ属3.0%）、広葉樹花粉20.5%（コナラ亜属9.1%・クリ属4.9%・クリカシ属2.3%・アカガシ亜属1.9%）、草本花粉47.1%（イネ科31.9%・ヨモギ属8.7%・カヤツリグサ3.0%・オモダカ属・タンポポ亜科・キク亜科・アブラナ・アカザ科・ナデシコ科・サナエタデ属）、羊歯類孢子4.9%

この結果、当該地域における百・後・Ⅳの古環境は、「照葉樹林帯に近い温和な気候」であり、「イネ科を主体とした草地の周囲にコナラ亜属・マツ属・スギ科・クリ属・アカガシ亜属等が良好に生育し、林地を形成」していたことが復原された。なお、ここでいう「イネ科を主体とした草地」が水田を示すことは、草本花粉の中で畑雑草としてのヨモギ属がイネ科の30.6～31.9%に対してせいぜい7.0～8.7%にすぎないことから明白である。しかも、オモダカ属の花粉が検出されたことにより、その水田が池沼に近い状況にあったことが類推される。

弥生時代後期の水田は、この他に2面存在することが推測された。それらについては、既に述べたとおりである。ところが、既に水田は、これらより古く百・中・Ⅰごろにはかなり整備された状態のものが存在していた可能性がある。それは、百・後・Ⅳの水田面下約50cmにおいて検出された百・中・Ⅰごろの杭列・板列等の在り方が、水田経営にとって必要条件である灌漑用排水路の確保を特に意識されてつくられた状況を示唆するものであったことから推測される。しかし、その時期の耕地は、当該地においてはまだ微高地にまで及んでいなかったよう

である。ここで本格的に微高地が耕地として開発されるのは、百・後・Ⅱになってからと考えられる。それは、微高地を削平して耕地の一部とした百・後・Ⅳの水田の素形が百・後・Ⅱの水田にあったことが溝の在り方に看取されることによる。つまり、中期から後期の初めごろにかけての溝が微高地をほぼ東西に貫流する直線的な流路を形成していたのに対して、百・後・Ⅱを境にこれ以降流路は北東方向から南西方向へと移ることから考えられる事象である。

さらに、百・後・Ⅳの水田についてここで詳細に述べてみると、水田は、微高地を幅約10mにわたって削平し、畝畝を盛土によりつくり、その後に営まれたものである。水田区画は、概して微高地上、もしくはこれに隣接する部分に立地するものが小さく、微高地を離れるにしたがい面積を大きくする。水田区画の大・小の変換点は、ちょうど微高地地形の低湿地への落ちに対応する。ちなみに、そういった観点から畝畝北側の狭小な水田形態をみると、この水田のすぐ北には微高地の存在が予想される。

ところで、検出できた水田で注目すべき事象に、畝畝・小畦のいずれの箇所においても水口が存在しないことがあげられる。水口は、水田への水の供給を行うという点において本来水田には欠かせない施設の1つであり、水田への水の供給は畝畝の存在により当然想像される。にもかかわらず水口が存在しないということは、おそらく水田の立地環境に原因があり、その結果水田への水の導入は水口を必要としない方法がとられていたものと考えられる。

水田形態は、水田の立地する地形に微妙に影響され、地形に応じた様相を示す。当該地は、水田遺構検出時においてもかなりの湧水がみられ、特に微高地から遠い所では湿地に近い状況にあった。これは、下層に堆積したピートの在り方からも、また、花粉分析の結果からも当時の地下水位が高く調査時とはほぼ同様の状況にあったことが推測される。すると、水田への水の導入量は、微高地に立地する水田ほどは必要としないと考えられる。それは、畝畝上面を流れる溝の規模がこれまでに百間川上流域で検出されている同様の溝に比較して、小さいことからうかがえる(註3)。では、どういう方法で水の導入を果たしたのであろうか、状況から考えられる方法としては、畝畝上面からの水のオーバーフローがある。これを想定した場合、興味深いものに畝畝上面で検出された1個の人頭大の平石がある。調査区周辺においては、人頭大の石はもちろんのこと、ましてや遺構に伴わない石の存在自体希である。さらに、同様の石がこの畝畝下層の溝にも伴っていた。そういった状況からこの石は、水の調節にある程度関係していたであろうことが推測される。おそらくは、必要とするたびに石を溝の中に置き、オーバーフローを容易とする機能をはたしていたと考える。

(島崎 東)

註

註1 正岡睦夫・柳瀬昭彦「岡山市百間川遺跡の水田址」『月刊文化財』10.1978

江見正己・中野雅美「岡山県百間川遺跡第2微高地の水田遺構」『日本考古学年報』30.1979・4

井上弘・中野雅美「水田遺構について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（46）1981・11

註2 パリノ・サーヴェイ株式会社調査部『岡山県・百間川遺跡発掘調査試科花粉分析報告書』1981・1

註3 百間川・原尾島遺跡，同・沢田遺跡に所在する水田には，この種の溝が存在する。いずれも上端幅70cmを越え，当調査区の溝の30～50cmとは比較にならない。なお，これらは，近年報告の予定である。

第6節 ガラス

出土したガラス（註1）は、大きさ、形状に著しく差異がある。大きさにおいては、拳大のものから、小さいものは粟粒ほどのものまである。また、形状においても、表面が滑沢で光沢をもつものから、表面のザラついたものまである。しかし、いずれもその内面には多くの気泡が見られる。気泡の大きさは均一ではなく、大小の差が見られる。

表面に光沢のあるものは、溶融物が、流動する過程で冷え固まった状況を呈している。そのため、全体的には、オリーブ色に近い緑色を呈するが、やや濃淡を異にした縞模様が見られる。それらガラス塊は、焼土に付着して出土したものもある。しかし、この焼土が炉壁であるのか、埴塼であるのか、現状では断定はできないが、形状等からして、非常に高温の状態において生成されたものと推定される。

表一40は、出土したガラス塊を、岡山県工業技術センターで分析した結果である。この分析値からも解るように、鉛は全く検出されず、珪酸を主成分としたガラスであると言える。また、分析値において、 Al_2O_3 の比率が高いことが、注目される。また、 Fe_2O_3 が多く含まれていることも注目される。これは、ガラスの色調に関係するものと考えられ、成品の色調に大きくかわるものと思われる。

これらガラスが集中的に出土するのは、百間川今谷遺跡大地地区である。当地区においては、検出した遺構においても、建物が多いことが注目される。建物は、 1×1 間、 2×1 間、 3×1 間、 4×1 間の規模のものが見られる。これら建物を28棟検出した。この地区においては、井戸14基、土塼59基、溝数本を検出し調査した。これら、井戸、土塼、溝等の埋土中より多量のガラス塊が出土した。そして、その総量は、約2000gを計る。

ガラスの出土状態を見ると、焼土、炭、灰を伴って出土している。炭、灰を混在する場合と、必ずしも混在しない場合にも、同一遺構内において、炭、灰が層を成している。焼土塊は、遺構内からも検出したが、前述の遺構を検出するための作業中においても、その存在が確認されていた。炭、灰を比較的まとまって検出した場合、その灰層を入念に観察すると、その層位中に、粟粒ほどの小粒を成したガラスを発見する。その発見は、けっして稀ではなく、よく観察すると処々に見い出される。それが、どのような状況のもとで混入したもののかについては十分に理解していないが、ガラスの製造に深くかかわっていることは否めないものとする。

ガラスの出土状態を見ると、遺構内から、弥生式土器と供伴する場合がある。それに伴って出土した土器の年代は、百間川遺跡群の編年表によれば、百・中・Ⅱ期に相当する。前述した遺構についても、概ね同期とすることができる。ただし、同一時期としても、その中において

新旧の差は見られるが、弥生時代中期中葉とする点においては、異同はないものと考えられる。

前述したように、ガラスが出土する範囲は限定されてくる。さらに、その範囲と重複して建物群が存在することは、注目に価するであろう。この限定された範囲内から、ガラスは出土するのであるが、それを溶解したであろう炉については、まったく検出されていない。ただ、炉を推測させる焼土の出土が見られ、炉が存在した可能性は充分にあると言えるであろう。また、炭、灰が、多く出土していることは、その可能性を、一層大きくするものと言えるであろう。さらに、灰の中に見られる粟粒ほどのガラスの存在は、それがいかなる状況の下に生成されたものであるかの解明が必要ではあるが、ガラスの製造、もしくは、ガラス製品を造る過程でできたもののかのいずれかと推定される。以上のように推定すれば、ガラス工房の存在した可能性は、非常に高くなるであろう。しかし、埴塼の出土しないこと、製品等の出土しないことなど、否定的な要素もあるが、分析表から考えられるガラスの性質として、非常に硬いガラスであることを考えれば、必ずしも埴塼（註2）の必要性はないと考えられる。そうすれば、ガラス工房址としての積極的要素には欠ける点があるが、出土した遺物等からして、ガラスの生産に関係した遺跡であることは、首肯されるのではないかと考える（註3）。（井上 弘）

表—40 ガラス成分表

成分	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	CaO	MgO	Na ₂ O	K ₂ O	Cl	Ig-loss
%	63.06	12.63	3.67	2.43	3.69	11.50	1.80	0.08	1.20

註

註1 出土したこの遺物については、「ガラス滓」と報告してきた。しかし、分析値を見れば、それは、ガラスそのものである。その点は、以前から考えていたことであり、「滓」として報告するには些かの抵抗は感じていた。ただ、それが、ガラス製品を造った残りものであるなら、「滓」とするのも誤りではないであろう。しかし、それを再溶解すれば、またガラス製品と成り得るものであるだけに、「ガラス滓」とすることには疑問を感じる。そこで、この報告では、それはガラスそのものであるとの立場から、「ガラス」の名称を使用し、一部に「ガラス塊」と記述して報告する。

註2 荻谷道郎氏（日本光学工業株式会社）より、ガラスについての多くの有益な御教示を得た。また百間川今谷遺跡出土のガラスについても種々御教示を得た。記して感謝の意を表わします。

註3 『月刊文化財』昭和34年11月号に速報として概要を報告している。

補註 中期の土壌中からは、ガラス・焼土・炭などの他に、砂が出土している。ガラスの分析からすると、これらの砂等がガラス化した可能性もある。

第7節 石 器

兼基・今谷遺跡には弥生時代の遺構が多く存在し、従って石器の出土量も多くその器種も多様である。

石庖丁・石庖丁形石器・石鏃・石槍・石錘・投弾・石錐・楔形石器・スクレイパー・磨製石斧・敲石・砥石・不明石器・未製品など総数492点を数える。また剝片・碎片も多量に検出された。

以下、幾つかの器種について若干の検討を加えたい。

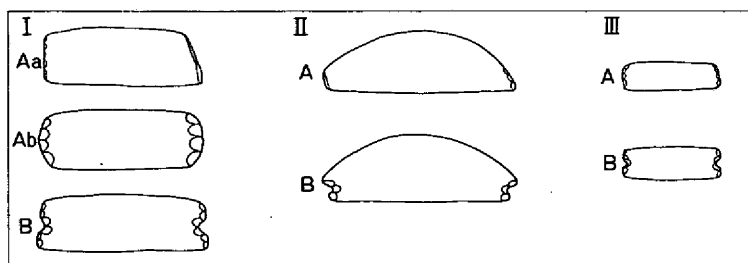
石庖丁

今回の調査では、打製石庖丁が出土しており、磨製は全くみられなかった。磨製石庖丁の県南における出土状況をみると、前期には多少認められるが、中期以降には減少し、サヌカイトの打製石庖丁一色に塗り変えられていく（註1）。このことは、弥生時代中期以降の遺構が多い当遺跡の出土状況に一致する。

打製石庖丁は、その形態・大きさ等から大きく3つに分類できる。Ⅰ類は刃部に対して背部がほぼ平行し長方形を呈するもので、側縁の抉りの有無により2つに分かれる。前者をⅠB類・後者をⅠA類とする。ⅠA類はさらに側縁の形状・調整等から、刃・背部に対して垂直あるいは斜位の側縁で背部との境が明瞭なもの（ⅠAa類）と、やや丸味のある側縁を持ち背部との境が不明瞭なもの（ⅠAb類）とに分けうる。ⅠAa類は、側縁に自然面をそのまま残すものや、調整の施されたものでも剝離痕が僅かにしか認められないものが多い。また、自然面をそのまま背部に利用したものも存在する。ⅠAb類は側縁に比較的に急な調整を施し、丸くおさめている。

Ⅱ類は背部が大きく外湾するもので、抉りを持たないもの（ⅡA類）と、抉りを有するもの（ⅡB類）とに分かれる。ⅡA類には側縁に自然面を残すものもあり、また稀には背部のみで側縁を持たないものもある。Ⅰ・Ⅱ類の中には、やや大型のものが認められる。

Ⅲ類は小型の一群で、これも抉りの有（ⅢB類）・無（ⅢA類）により分けられる。形態は



第467図 打製石庖丁形態分類図

多くがⅠ類に類似するが、幅は3cm前後と著しく狭い。磨耗痕が新たな剝離によって切られていることから、刃部再生のため幅が狭くなった

と考えられるものもあるが、殆どは当初から意識的にこの大きさに作製している。また、Ⅲ類に限り背部の敲击潰しが顕著にみられず、刃部と背部の判別が困難なものが多い。プラント・オパールが付着によると思われる光沢を持つものも少なく（註2）、手ズレ痕跡を有するものもみられないことから、使用法において他類とは異なる可能性が強い。鉄製の収穫具にⅢ類と同大の摘鎌があるが、これは木製の柄を着装するもので、その柄の縦幅は身より高くなるものと考えられている（註3）。Ⅲ類も着柄痕跡は明瞭に認められないが同様に、板をあてがうかあるいは背部を木杵に差し込むかして、持ち易いよう幅を広くした使用法が想定される。

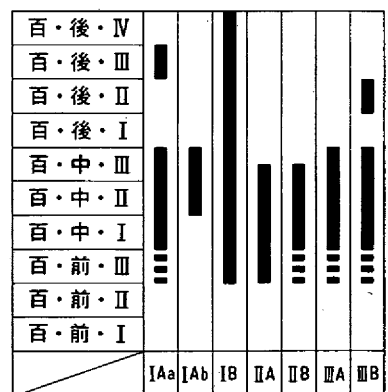
当遺跡においては、以上のタイプに分類できたわけであるが、これらを県内の出土例と比較し、検討を加えたい。

I A a類は、古くは前期末～中期前葉と考えられる百間川原尾島遺跡百間川橋側歩道橋部分の包含層（註4）より出土しており、中期中葉以降は当遺跡他比較的多くの遺跡でみられる。後期になると姿を消すが、五万原遺跡において、後期後葉と思われる2号住居址（註5）から出土した1点が例外的に認められる。I A b類は出土例が少ないが、用木山遺跡の中期後半と思われる第9支群2号住居址（註6）出土例が掲げられる。今回の調査においても百・中・Ⅱ新相の時期にみられ、ほぼ中期後半の枠内で捉えられる。I B類は、出土例は少ないながらも前期末から確実に存在し、南方遺跡土壙116（註7）や、県外だが広島県大宮遺跡S D 01上層（註8）出土のものが知られる。中期中葉以降数多く認められ、後期に入ると殆どこのタイプに集約されていき、少量ながらも後期全般にわたり存在する。最も新しいものでは、後期終末の五万原遺跡3号住居址（註9）出土例が掲げられる。

ⅡA・ⅡB類は量的に少なく、前期末の南方遺跡土壙128（註10）出土例が最も古い。その他、南方遺跡（註11）より出土している前期末～中期中葉の土器に伴うものが数点認められる。当遺跡においても百・中・Ⅲ古相の段階までで、比較的古い様相を呈するものと思われる。

Ⅲ類は、古くは南方遺跡（註12）や百間川原尾島遺跡（註13）において、前期末～中期中葉の包含層から出土したものが知られる。ほぼ中期の枠内で捉えられるが、ⅢB類に関しては、後期前半と思われる上東遺跡D-3（註14）出土のものや、百間川遺跡第1低位部（註15）出土のものなど、鉄製摘鎌に移行する前段階のものが後期中葉まで残ると思われる。

以上みてきたように中期には種々のタイプが揃い、石庖丁の形態等から細かな編年を行なうことは困難であるが、大枠はほぼ図のように抑えられる（註16）。括りのあるものは中期中葉以降と比較的新しく考えられてきた



表—41 打製石庖丁形態別消長

が、前期末から数例ながら認められる。Ⅱ・Ⅲ類もほぼ中期を通して存在するが、石庖丁として機能的に最も整った形態と思われるⅠB類や、幅は狭いがⅢB類など、挟りを持つ長方形のものが中期中葉以降増加し、後期にはこれらのタイプに統一されていく。

石庖丁形石器

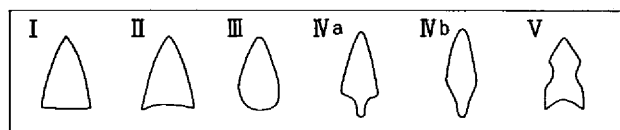
1点だが打製石庖丁ⅠB類と同様の形態・調整を持つサヌカイト製大型石器が出土している。他に例をみないが（註17）刃部附近に使用による磨耗痕跡があり日常的に使用されたものと思われる。挟りを持つことから何らかの柄の類いを着装したものと推定されるが、用途は不明である。

またこの石器は、その未製品とも考えられる打面側を若干剝離した原材（註18）と2枚の使用痕顕著な石庖丁と共に、刃部を下に立て並べるという特異な状態で出土した。このように石器がまとまって出土した例は用木山遺跡や福岡県辻田西遺跡（註19）のものが知られるが、後者は未製品の集積である。前者は使用痕が顕著で「次期収穫に備えての格納」（註20）と捉えられているが、当遺跡においては住居址からの出土ではなく、特異な状態の一括埋納ということから、むしろ非日常的な行為＝祭祀＝の結果とも考えられる。

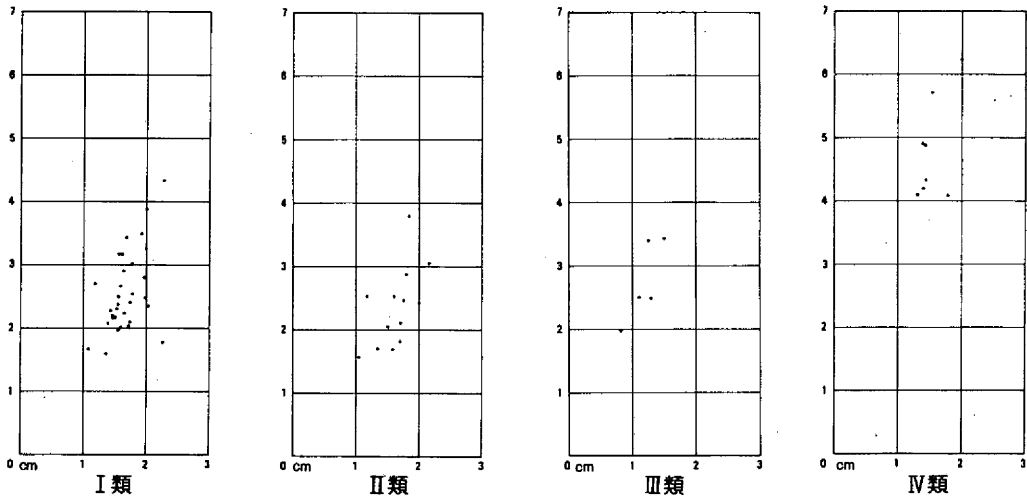
石鏃

石鏃は形態的にみて大きく5つに分類できる（第468図）。三角形を呈し基部が直線的なもの（Ⅰ類）。三角形で基部が内湾するもの（Ⅱ類）。卵形に近いもので基部が丸く突出するもの（Ⅲ類）。基部が細長く突出する尖頭器状のもの（Ⅳ類）で、これは身と茎の区別が明瞭なもの（Ⅳa類）と不明瞭なもの（Ⅳb類）に分かれる。また1点だが特殊な形態のものがある（Ⅴ類）。これはアメリカ鏃と呼ばれているもので、入念に調整を施し形態を整えている。

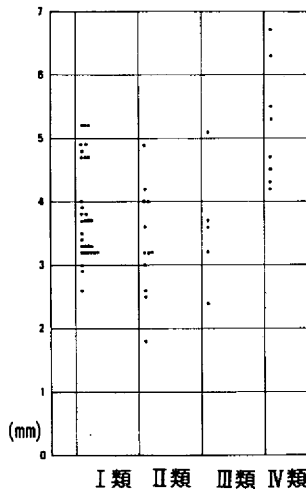
第42～44表が示すように、Ⅰ・Ⅱ類は基部の形状以外は殆ど変わらず、長さとの比率は2：1～1：1の間におさまる、長さが2～3cm、幅1～2cmのことが多い。厚さは3～4mmのものが最も多く次に5mm前後に集中する。重量も1g前後・2g前後のグループに分かれる。Ⅲ類は量的に少ないが、ほぼⅠ・Ⅱ類と同傾向にある。ただ長さとの比が2：1～3：1を示し、若干幅が狭く作られている。Ⅳ類は他と異なり長さとの比が3：1～4：1と長さに比べ幅が著しく狭い。また長さ・厚さ・重量において、それぞれ4cm以上・4mm以上・2



第468図 石鏃形態分類図



表—42 石鏃の長さとの比率



表—43 石鏃の厚さ



表—44 石鏃の重さ

g 以上と他類を圧倒し、殺傷能力において優位性を持つものと思われる。V類は基部の形状においてはII類に類似するが、他の石鏃に比べ石鏃の機能とは直接関係しないと思われる形態を必要以上に踏襲していることから、何か特殊な用途を想起させるものである。

石槍

形態・調整は、大小のバラツキはあるものの1例を除きほぼ一様である。

これは中部瀬戸内において一般的な横

長の剥片を使用し周縁にのみ調整を施すもので、大剥離面を中央に残し扁平な断面を持つ。

他の1点は、表裏全面に調整を施す断面が菱形のものである。剥離調整の後特に先端附近を著しく研磨しており、このような類例は県内では非常に少ない(註21)。

石錘

いずれも厚みのある円形の河原石を使用している。縄かけの溝を円礫の中央部全周に巡らせるもの、側縁に巡らすもの、両端を打ち欠いただけのもの等の種類がある。重量は162.3g～455.0gと幅はあるが、250g前後のものが多い。石錘に関しては、後期以降の出土例も比較的多くみられる。

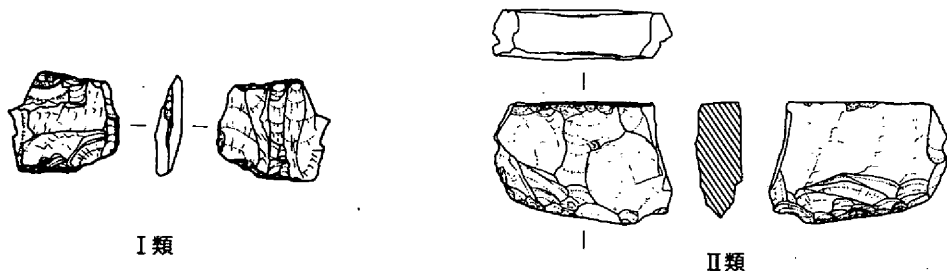
石錐

出土数は少ないが、錐部の長いもの・短いもの、大型・小型等バラエティーに富む。また、錐部断面は菱形に近い形態を呈するが、その調整は両側縁に両面から施するもの、錯交剝離を行なうもの、一方の側縁に階段状剝離によってできた剥片の縁辺をそのまま利用するもの等がみられ、一定した製作技法に統一されているというような傾向はみられなかった。

楔形石器

両極打法によると考えられる剝離痕が上下両端に認められる小型の石器が出土しており、中には截断面（註22）を有するものもみられる。これらは旧石器時代から縄文時代、さらには類例は少ないものの弥生時代にまで存続する楔形石器（ピース・エスキュー）と思われる。かかる石器の機能については、細石核説（註23）・彫器説（註24）・楔説（註25）等が唱えられている。用途は断定できないが、旧石器時代から認められることにより、農耕とは無関係に存在するものと推定できる。

また今回の調査で、平坦な面を有し、平坦面に相対する一辺が、両面からの調整により刃部状をなす、定形化した石器が認められた。かかる石器は、形態・使用痕等からクサビとして使用されたものと考えられ、これをⅡ類とし、前者をⅠ類とした。



第469図 楔形石器

Ⅱ類は大きさにバラツキはあるが、概して分厚く、上面の平坦面（折断面・自然面・ヒンジによるゆるやかなカーブを利用）には、クサビとして打ち込む際にできたと思われる細かな敲打痕が看取される。一見石庖丁やスクレイパーの欠損品と間違い易く（註26）、これまで注意されなかったものであるが（註27）、Ⅰ類に比べよりクサビとして適切なものと思われる。また使用対象としては、エッジの潰れているものが少ないことから柔らかいものが掲げられ、ある程度乾燥させた木材を分割するための道具ではないかと想定される（註28）。

スクレイパー

刃部状の調整を持つ不定形な石器を総称した。刃部が直線状のもの、半円形を呈するもの、抉りを持つもの、また大型・小型、稀には柄を持つものや円盤状を呈するものなど多種多様で

あるが、概して刃部以外の調整は粗雑である。楔形石器Ⅰ類が含まれている可能性もある。

磨製石斧

太型蛤刃石斧・偏平片刃石斧・小型磨製石斧・環状石斧等の種類が出土している。環状石斧以外は形態を越えて、殆どが玢岩・安山岩という肉眼的には判別しがたい白色の斜長石の結晶を持つ石を利用しており、河原で転石となったものを持ち込んだものと思われる。これらの石斧には剥離痕や敲打痕を残したものもあり、仕上げの研磨は必ずしも丁寧には施されていない。特に小型磨製石斧には剥片の表面を若干研磨しただけで、一見剥片と紛うものもある。

太型蛤刃石斧には完形品が全くなき、伐採時に着柄附近で折損したものと思われ、消耗度の高かったことがうかがえる。欠損後敲石に転用しているものもみられる。

未製品も出土しておりいずれも荒割り段階のものである。石斧の素材となった玢岩・安山岩の剥片・砕片も数多く出土しており、この集落内で石斧製作が行なわれていたことを物語っている。

環状石斧の県内における出土例は少なく（註29）、当遺跡例同様完形品の存在をみない。

これらの磨製石斧は、県南においては後期以後みられず、一早く鉄器にとって変わられたものと推定される。

敲石

手ごろな河原石を利用しており、特に花崗岩系統の石が多い。殆どが礫の両端あるいは側縁に敲打痕を持つものである。

これらの中に、長楕円形に近い偏平な礫の側縁に線状の敲打痕を有する一群がある。これは「屏賀坂型敲打器b類」（註30）とされているものに、形態・敲打痕・使用部位共に類似する。「屏賀坂型敲打器b類」は、磨製石庖丁の刃・背部を敲き潰すためのものとされている。打製石庖丁の場合も持ち易くするために背部を敲き潰しており、背部敲き潰しの工具と想定しうるものは、力の不均衡がないよう敲打する部位が狭く、背部に対し直交して使用するので敲石の長軸に直交する短い線状の使用痕が認められるもので、前述の一群はこれに合致する。これを石庖丁の加工具とみるならば、サヌカイトの剥片や砕片が多量に出土していることを併せ考えて、この集落内で石庖丁製作が行なわれていたことは疑いえない。

砥石

弥生時代中期中葉のものから中世くらいのものまでみられるが、ここでは弥生時代のものについて触れることにする。

出土砥石は大型で設置して使用するものから、小型の携帯用と思われるものまで数多く認められる。小型品は使用痕が顕著で、鋭利なものを砥いだと思われる細かい線状の擦痕を有するものが多い。これらは鉄製利器の砥石と考えられ、遺構から出土した鉄器と共に中期中葉の段

階で、当遺跡においても鉄製利器の普及がある程度進んでいたことを物語っている。

以上出土石器を器種別にみてきたが、いくつかの問題点について若干触れてみたい。

まず石材の供給についてであるが、出土石器の石材は石庖丁・石鏃等がサヌカイト、磨製石斧が玢岩・安山岩、石錘・敲石が花崗岩系統、砥石が砂岩・頁岩・凝灰岩等というように、器種によりある程度の選択が行なわれている。サヌカイト以外の石材は殆どが転石となったもので、原産地から持ち込まれたというよりも、近くの河原におもむき選別・採取した可能性が強い。例えば旭川では、当遺跡から直線距離にして5km程しか離れていない岡山市牟佐より上流の河原において拳大から人頭大の石が多くみられ、出土したサヌカイト以外の石材は殆ど看取できる。このようにサヌカイト以外の石材は、採取地は限定できないものの近くで比較的容易に採取し得たと推察される。

サヌカイトについては原産地が香川県にあり、直接的な採取を考えるには海上における交通手段の保持や、県北においては長距離なうへ他集団の領域を通過しなければならないことから困難であると思われる。弥生時代の社会においても、他集団とのコミュニケーションとしての一般的交換が種々行なわれていたと考えられる。サヌカイトの入手も逆方向にこういった物資が動いたかは不明であるが、交換・互酬性の中で捉えられるものと思われる。サヌカイトは多くが日常生活における直接生産用具を作出するためのものであり、その交換・交易体制は強固に保持されていたはずである。が、サヌカイトに限り大きな剝片は少なく可能な限りの使用がみられ、また破損品の再利用・石庖丁の刃部再生等の例から推し測れば、それでもなお不足しがちであり貴重なものであったといえよう。

次に石器製作における集団間分業・集団内分業の問題があるが、サヌカイト製石器を例に触れてみたい(註31)。当遺跡においては剝片・碎片が多量に出土しており(註32)、石核はないものの末製品もみられ、当遺跡で石器製作が行なわれていたことがうかがえる。近接する雄町遺跡(註33)、また南方遺跡等においても同様の状況がみられ、それぞれの遺跡で石器製作が行なわれていたと推定される。また同一器種の中で、同一技法による質的にすぐれたものが一定程度広範囲に分布するという状況にはなく、九州における立岩の石庖丁・今山の石斧のような専業集団の存在は把握できない。

当遺跡において、剝片・碎片が多量に出土した住居址としては東苗代の竪穴式住居A-7が掲げられるが、他の住居址においても少量ながら認められるものが多い。雄町遺跡(註32)でも第3調査区において、同時併存すると思われる2・3・8号住居址の床面や炉内からそれぞれ剝片・碎片が多量に検出されている(註34)。また大上田の土壇-3・東苗代の土壇-65のように、土壇内から碎片が多量に出土することも多く、炭・灰・焼土を伴うこともある。このような出土状況は各住居址内で作られた石器の屑を一掃して土壇等に廃棄したことを物語って

註

- 註1 県北では、全時期を通じて磨製石庖丁が主流をなす。
- 註2 光沢を持つものは、刃部再生のため幅が狭くなったと思われる1点のみである(第166図47)
- 註3 川越哲志「弥生時代の鉄製収穫具について」『考古論集』松崎寿和先生退官記念事業会編 1977.
- 註4 下澤公明「百間川原尾島遺跡発掘調査報告―百間川橋側歩道橋設置工事に伴う発掘調査―」『岡山県埋蔵文化財報告』(10) 岡山県教育委員会 1980
- 註5 門壁忠彦・門壁霞子「岡山県美星町五万原遺跡(住居址群)」『倉敷考古館研究集報第5号』1968
- 註6 神原英朗 他「用木山遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』(4) 岡山県山陽町教育委員会 1977.2
- 註7 柳瀬昭彦・岡本寛久「南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(40) 岡山県教育委員会 1981
- 註8 「大宮遺跡第1次発掘調査概報」広島県草戸千軒町遺跡調査研究所・広島県文化財協会 1978
- 註9 前掲註4
- 註10 前掲註6
- 註11 ①出宮徳尚他「南方遺跡発掘調査概報」岡山市教育委員会 1971.3
②出宮徳尚他「南方(国立病院)遺跡発掘調査報告」岡山市教育委員会・岡山市遺跡調査団 1981.3
- 註12 前掲註9の①
- 註13 前掲註3
- 註14 伊藤晃他「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集 岡山県教育委員会 1974.3
- 註15 高畑知功氏に御教示を得た。
- 註16 各類の出現については、前期中段階の良好な資料がなく今後さかのぼりうる可能性もある。
- 註17 当遺跡出土例とは異なるが、サヌカイト製大型石器としては県北の高本遺跡で石犁として報告されたものが掲げられる。井上弘 他「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(8) 岡山県教育委員会 1975.3
- 註18 県内の原材出土例としては用木山遺跡・城遺跡例があげられるが、当遺跡出土例を含めいずれも2次的な剝離痕がみとめられ、石核と称する方がより妥当であるかもしれない。また当遺跡のような出土状況をみると、大型石器の未製品と考えることも可能である。原材としては板状のものばかりでなく、転石となった小円礫も持ち込まれている。
- 伊藤晃他「城遺跡発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(19) 岡山県教育委員 1977.3
- 註19 「辻田西遺跡」『北九州市埋蔵文化財調査報告書第13集』北九州市教育文化事業団 1982
- 註20 前掲註5
- 註21 南方遺跡出土の1点が掲げられる。前掲註10の(1)
- 註22 「截断とは「切り落す」という意味であり、截断面を観察すると打撃が加えられた部分にネガティブな打痕やリング、それにフィッシャーがみとめられる。それは意図的に「剝離」された形跡を示すもの」と規定されている。本書でもこの概念に準じている。柳田俊雄「截断面ある石器」『ふたがみ』

1974

- 註23 滝沢浩「本州における細石刃文化の再検討」『物質文化3』1964. 4
- 註24 前掲註21の文献
- 註25 岡村道雄「ピエス・エスキューについて―岩手県大船渡市碁石遺跡出土資料を中心として―」『東北考古学の諸問題』1976
- 註26 石庖丁やスクレイパーの欠損品を再利用したものもいくらかは存在すると思われる。図示したものは他にくらべ、エッジが潰れており、形態からも、石庖丁の背部を利用している可能性が強い。
- 註27 脱稿後楠・荒田町遺跡の報告書に類例を見出した。楔形石器として報告されたものの中に、ピエス・エスキューに混じってこの種のものが数点図化されており、細分の可能性も指摘されている。『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会1980
- 註28 使用対称については下澤公明・江見正己・岡田博・平井泰男氏に御教示を得た。
- 註29 宮の前遺跡・久米庵寺・大海庵寺・椋山遺跡・便木山遺跡において各1点、用木山遺跡3点の出土例があげられる。
- 註30 上村佳典「石庖丁製作における工具について―屏賀坂型敲打器について―」『地域相研究第9号』1980.11
- 註31 玢岩・安山岩製の石斧については、剝片・碎片の出土状況が報告されておらず、未製品の出土報告により、それぞれの集落内で作られたであろうことはある程度推察できるが、細かな分析は不可能で、剝片・碎片の詳細な出土報告を待ちたい。
- 註32 石器を作りうる大きさ形状を持つ剝片（大きなものは少なくかろうじて石鏃が作れる程度のものが殆どである）約120点。碎片約1680点―うち確実に刃部等の細かな調整時に生じたと思われるもの約770点。
- 註33 高橋護他「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会 1972. 3
- 註34 正岡睦夫氏に御教示を得た。
- 註35 このように考えるならば、現象的な剝片・碎片の量の多少によって石器工房址か否かを決めるのは早計であり、今後石器だけでなく床面に付着した剝片・碎片の取り扱いが重要になってくると思われる。
- 註36 例えば、石器の荒づくりを別の場所で一括して行ない、住居址内で刃部だけを作製した可能性もないとはいえない。また土壌内より多量に出土する碎片に細かなものが多いことも注意を引く。
- 註37 中山俊紀他「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』津山市教育委員会 1981
- 註38 前掲註2
- 補註 石器の図において、磨耗痕とプラント・オパールが付着によると思われる光沢は、区別しがたいものもあり、共に同じスクリーン・トーンで表現している。

第8節 弥生時代中期の土器

百間川兼基遺跡および百間川今谷遺跡（註1）出土の弥生時代中期の土器は総数でコンテナ（54×34×15cm）約300箱を数えた。それらの調査区ごとの内訳は、兼基遺跡大上田調査区において、主に調査区の西部分（E～I地区）から竪穴式住居・井戸・土壇・溝などに伴って約10箱出土しており、また、兼基遺跡東苗代調査区では、ほぼ調査区全域にわたって約110箱の土器が竪穴式住居・井戸・土壇・溝などから出土している。更に今谷遺跡大地調査区からは調査区の南部分にあたる中央低水路部分を中心にして、竪穴式住居・掘立柱建物・井戸・土壇・溝などに伴って約180箱と最も多量の土器が出土している。これらの土器のうち今回図示できたのは約590点で、それらの個々の特徴については実測図及び遺物観察表に示したとおりである。

ところで、百間川遺跡群における弥生時代中期の時期区分についてはすでに大きく三時期に区分し、それぞれを百・中・Ⅰ、百・中・Ⅱ、百・中・Ⅲと表記することとされており、またこれまでの主な土器編年案との対応関係も明らかにされている。更に、各時期のより細かな区分については随時古相・新相といった表記法を用いることにしている（註2）。そうしたうえで今回出土の土器をみた場合、兼基遺跡大上田調査区出土の殆どが百・中・Ⅰの新相に、兼基遺跡東苗代調査区出土の多くが百・中・Ⅲの中相に、また今谷遺跡大地調査区出土の大部分が百・中・Ⅱの新相に相当するものであろうことはすでに各遺構の説明文の中に示したとおりである。ここでは、本来これら各時期の土器群についてその内容を詳しく検討すべきであるが、百・中・Ⅰの新相及び百・中・Ⅲの中相については必ずしも十分な資料が得られたとはいええず、全体の内容を明らかにするには不十分であるため、次の項において必要な点について触れることとし、まず、百・中・Ⅱの新相と考えた土器群についてその内容をまとめてみたい。

Ⅰ. 百・中・Ⅱの新相の土器について

この時期に相当する土器は、主に今谷遺跡の中央低水路部分及び兼基遺跡東苗代調査区の五反田樋門部分において、竪穴式住居・掘立柱建物・井戸・土壇・溝および包含層中よりコンテナ約220箱出土している。

これらの土器群は壺（A・B・C・D・E・F・G・H）、甕（A・B・C・D）、高杯（A・B・C）、鉢（A・B・C）、水差、器台、蓋（A・B）などで構成されている（註3）（第471図参照）。

壺は8種類が認められた。

壺A

胴部に張りをもつ体部に朝顔形に外反する口頸部をもつ壺である。外面は頸部及び体部上半

がハケメ、胴部が横方向のヘラミガキ、体部下半が縦方向のヘラミガキである。内面は頸部が指頭押え或いは横方向のヘラミガキ、体部上半が指頭押え或いはハケメ、下半が縦方向のヘラケズリである。

口縁端部の凹線文と頸部の貼り付け凸帯を基準にして次のように細分できる。

Aa1 (1136, 1137, 1173, 1605)

口縁端部はわずかに肥厚し、ヨコナデによって中央に凹部をもつものの凹線文は施されていない。頸部下端に1条の断面三角形または指頭圧痕文貼り付け凸帯を有する。

Ab1 (1473, 1607, 1608)

口縁端部の形態はAa1と同じであるが、頸部に2条の断面三角形貼り付け凸帯をもつ点異なる(註4)

Aa2 (1157, 1298, 1302, 1602)

口縁端部は上下に拡張し凹線文をもつ。頸部下端には1条の断面三角形または指頭圧痕文貼り付け凸帯をもつ。

Ab2 (1515, 1595, 1600)

口縁端部の形態は壺Aa2と同じであるが、頸部に2条の断面三角貼り付け凸帯をもつ点異なる。口縁端部に円形浮文、口縁部内面に櫛描斜格子文、胴部外面に圧痕文などが施されており、装飾の多い壺である。頸部に二孔一対の紐孔をもつものがある。

Ac1 (1227)

口縁部内面に凸帯をもち、口縁端部には凹線文をもたない(註5)。

A_{1,3} (1160, 1270)

口縁端部は肥厚せず凹線文もないが、頸部に2～3条の凹線文をもつ(註6)。

A_{2,3} (1637)

口縁端部は上下に肥厚し凹線文をもち、頸部にも2～3条の凹線文をもつ。

壺B

朝顔形に外反する口頸部をもち口縁部下に2～3条の貼り付け凸帯をもつ壺である。凸帯上に刻目をもつものもある。体部の明らかなものはないが、他遺跡の例(註7)から胴部の張る卵形を呈すると思われる。口縁端部に凹線文をもたないもの(B₁, 1603, 1641)ともつもの(B₂, 1594, 1606)とに細分できる。

壺C

胴部の張る卵形の体部の朝顔形に開く口頸部をもつ壺である。壺Aに類似しているが口頸部の外反度合が強い。また壺Bにも類似しているが口縁部下に貼り付け凸帯をもたない。口縁端部に円形浮文や棒状浮文をもつものもある。口縁端部の凹線文及び頸部の貼り付け凸帯の

有無によって次のように細分できる。

C₁ (1269)

口縁端部は肥厚せず凹線文ももたない。今回の出土品中には頸部に貼り付け凸帯をもつものはない。

Ca₂ (1186)

口縁端部は上下に肥厚し凹線文をもつ。頸部には1条の断面三角形貼り付け凸帯をもつ。

Cb₂ (1596, 1597)

口縁端部の形態は壺Ca₂と同じだが、頸部に2条の断面三角形貼り付け凸帯をもつ。

壺D (1563, 1604)

全体の器形のわかるものはないが他遺跡の例(註8)から、やや肩の張る体部に逆「ハ」字形に外反する口頸部をもつ大型の壺である。口径は20cm以上、器高は60cm以上を測る。口縁端部の凹線文の有無によって細分できると考えられるが今回の出土例では、口縁端部が上下に肥厚し3～4条の凹線文をもち、頸部下端には2段の指頭圧痕文貼り付け凸帯が施されている。

壺E

胴部の張る体部に「く」字状の口頸部をもち、器高が15cm前後の小型の壺である。頸部には2孔1対の紐孔をもつものが多い。口頸部の破片のみでは甕との区別は困難である。口縁端部に凹線文をもたないもの(E₁, 1277, 1278, 1435)ともつもの(E₂, 1125)とに細分できる。

壺F (1351, 1377)

いわゆる無頸壺である。胴部に張りをもつ体部に直立する口頸部をもち、2孔1対の紐孔をもつ。口縁部の凹線文の有無によって細分できると思われるが、今回出土したものは口縁部に数条の凹線文が施されている。

壺G

いわゆる直口壺である(註9)。全体の器形のわかるものはない。なだらかな肩をもつ体部に、わずかに外反しながら直立する口頸部をもつ壺である。頸部下端に指頭圧痕文貼り付け凸帯をもつ。口縁端部に凹線文をもたないもの(G₁, 780, 1381, 1406, 1598)ともつもの(G₂, 1599)とに細分できる。

壺H

「く」字形の短い口頸部に胴部の張る卵形の体部をもつ。口頸部に比べて体部が大きいのが特徴である。口頸部の破片のみでは甕との区別は困難である。口縁端部に刻目や円形浮文、肩部外面に刺突文をもつものもある。口縁端部の凹線文をもたないもの(H₁, 1286)ともつもの(H₂, 1297, 1357, 1386, 1407, 1477, 1478)とに細分できる。

甕

わずかに肩部の張る卵形の体部に「く」字形の口頸部をもつ甕である。口頸部にはヨコナデが施され、口縁端部はわずかに上方につまみ上げられているのが特徴でその部分に1条の凹線がめぐるものもある。外面は、体部上半に縦方向のハケメ、下半に縦方向の丁寧なヘラミガキが施されている。内面は、体部上半が指頭押えとハケメ、下半が縦方向のヘラケズリである。底部は主に平底であるがまれに上げ底のものもある。(925など)また、周縁にヨコナデを施したものや、焼成後に穿孔されたものもある。外面に煤の付着しているものも目立つ。大きさによって次のように細分できる。

甕A (1151, 1196)

口径10cm前後、器高20cm以下の小型の甕である。内面は頸部までヘラケズリが施されているものもある。

甕B (1130, 1162, 1181, 1183, 1188, 1192, 1325, 1340, 1352, 1390, 1479, 1587)

口径10～20cm、器高25～35cm前後の甕である。今回の調査においては最も多量に出土している。740は、体部外面に左上がりのやや粗いタタキメが観察できる(註10)。

甕C (1283, 1536, 1550)

口径20～30cm、器高40～60cmの甕である。体部内面にヘラケズリの後ヘラミガキを施すものもある。

甕D (大型甕) (1185, 1332, 1593)

口径30cm以上、器高60cm以上を測る大型の甕である。頸部に指頭圧痕文貼り付け凸帯をもつものがある。また、外面が体部上半までヘラミガキ、内面も体部上半までヘラミガキが施されるものもある。

高杯

杯部の形態と大きさによって4種類に区分できる(註11)。但し杯部と脚部の接合法はすべていわゆる円板充填法である(註12)。

高杯A (1174, 1175, 1306, 1310, 1326, 1338, 1400, 1436)

皿形の杯部に「ハ」字形に開く脚部が付く。口縁部は幅1～2cmでヨコナデが認められ、端部が肥厚するものもある。杯部内外面及び脚部外面はヘラミガキ、脚部内面は横方向のヘラケズリで、しぼり痕のみられるものもある。脚端部は殆ど拡張しない。脚部には円形の透し孔をもつものがあり、内面まで貫通するものとししないものがある。

高杯B (730, 927, 1169, 1265, 1327)

深い碗形の杯部に「ハ」字形に開く脚部が付く。脚部は高杯Aに比べて細長い、口縁端部はヨコナデによって丸くおさめるものと面をなすものがある。杯部及び脚部外面はヘラミガ

キ、杯部内面はヘラミガキまたはハケメである。脚部内面は横方向のヘラケズリが施されている。脚部には1段もしくは2段にわたって内側まで貫通する円形の透し孔をもつものもある。脚端部は殆んど拡張しないが凹部をもつものがある。

高杯C (757, 1589)

水平にのびる口縁部をもつ皿形の杯部に「ハ」字に開く脚部が付く。今回出土したのは2点のみである。杯部内外面 および 脚部外面はヘラミガキ、脚部内面は横方向のヘラケズリである。脚端部はわずかに肥厚している。脚部には内面まで貫通する円形の透し孔がある。

大型高杯

口径が30cm以上のものを大型高杯とする。

大型高杯A

全体の器形のわかるものはないが、高杯Aを大型にしたものと考えられる。口縁部に凹線文をもたないもの(A₁, 1624)ともつもの(A₂, 1133, 1558, 1648)とがある。

鉢

体部最大径が口径より小さく、かつ器高の低いものである。

鉢A (1150, 1218, 1344, 1378)

碗形の体部に直口する口縁部をもつ。底部は平底である。口縁端部はヨコナデによって丸くおさめるものと面をもつものがある。口縁部に小孔をもつものもある。小型のものが多い。

鉢B (1317, 1399)

「く」字状に外反する口頸部をもつ。底部は平底である。口頸部は内外面ともヨコナデ、体部外面は胴部下半までヘラミガキ、内面は胴部上半が指頭押え、下半は縦方向のヘラケズリである。口頸部だけでは甕との区別は困難である。

鉢C (1412, 1647)

胴部の張る体部から内傾しながら口縁部に至る。全体の器形のわかるものはない(註13)。

水差 (931, 1123, 1322)

全体の器形のわかるものは少ない(註14)。1322は、算盤玉形の体部に筒状の頸部をもち、肩部に半環状の把手をもつ、脚部には4条のヘラ描き沈線を施し、脚端部は肥厚しない。

器台 (1423, 1427, 1428, 1530)

上下が開き中央部が鼓胴形を呈する中空の土器である。1530は、脚部に多条の凹線文を施しその上に棒状浮文をもつ(註15)。

蓋

今回は2種類が認められた。

蓋A (1321)

直径約10cmの円盤状のものに乳頭状のつまみをもつ。縁辺部に2孔1対の紐孔がある。壺の蓋であると考えられる。

蓋B (1630, 1631)

皿を逆にしたような形態で、2孔1対の紐孔をもつ。壺の蓋であると考えられる(註16)。

これら、百・中・Ⅱの新相の土器の胎土は、1mm以上の砂粒(長石、石英など)は殆ど含まず、焼成も良好である。また、色調は全ての器種とも灰白色を基調としたものが多い。

以上、百・中・Ⅱの新相の土器について各器形ごとにその特徴を述べてきた。次に、これらの土器群について凹線文、内面ヘラケズリ、文様の3つの視点から若干のまとめを行いたい。

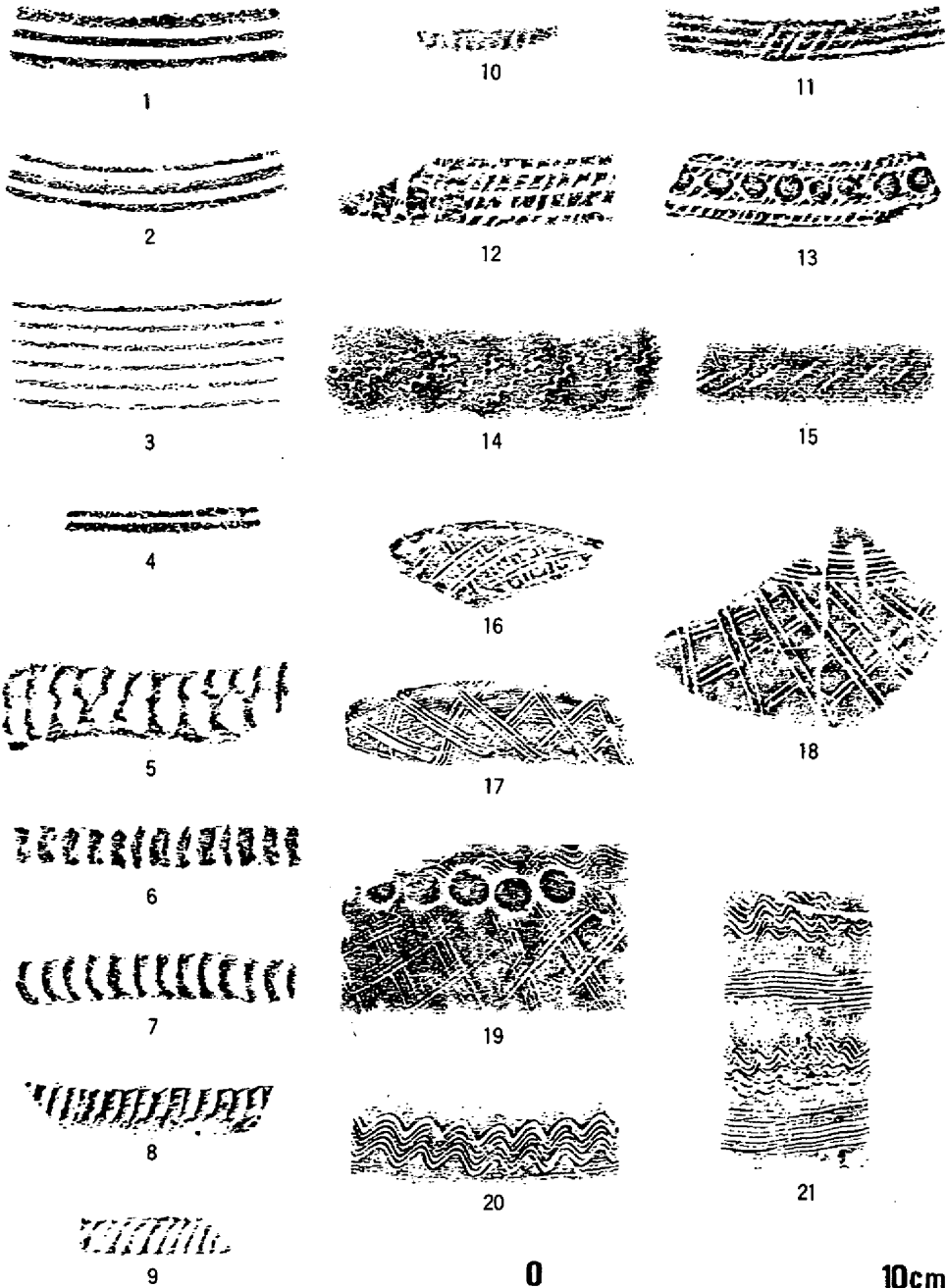
凹線文(註17)

壺ではすべての器形の口縁端部に凹線文が施されているのが特徴である。そのうち壺D・Fでは凹線文をもつもののみで凹線文をもたない個体は今回出土していない。また、これら口縁端部に凹線文を施すものの他に壺Aにおいては頸部に2～3条の凹線文が施されるものがわずかなではあるが、存在し注目される(註18)。甕では口縁端部をヨコナデによってわずかに上方につまみ上げ端面に1条の「凹線」(註19)(第470図—4)をもつものが少量みられるのみで(1188, 1195, 1345, 1352)次の百・中・Ⅲにみられるような口縁端部を折り返して凹線文を施するものは全く存在しない。また、土壙—3の1285は中型の甕Cで口縁端部が上下に拡張し4条の凹線文が施されているが、このような多条の凹線文を施す甕はこれ以外の遺構においては検出されていない。高杯では大型高杯Aにおいて口縁部に3～4条の凹線文が施されているのみで他の高杯には凹線文は全く施されていない。次の百・中・Ⅲ期でみられるような口縁下で強く屈曲し、外面に凹線文を施すものは全く存在していない。鉢には基本的に凹線文は施されていないが、特殊な器形と考えられる1412では口唇部と脚部端面に2条の凹線文が施されている。器台には多条の凹線文が施されている。水差と蓋には凹線文は施されていない。

このように、百・中・Ⅱの新相では凹線文は器種によって出現しているものとしていないものとがあり(註20)、また同じ器種においても、凹線文をもつものともたないものの両者が存在する器種と、どちらか一方のみが存在する器種とがあるという複雑な様相を示しているのである。

内面ヘラケズリ(註21)

今回、内面ヘラケズリ技法は壺D、Gでは全体の器形のわかるものがなく確認できなかったが壺A・B・C・E・F・Hにおいては体部下半に認められた。一方甕には、A・B・C・Dとも体部下半まで縦方向のヘラケズリがみられる。まれに甕Aや甕Bのなかでも、716, 1134, 1220, 1389などのように頸部まで縦及び横方向のヘラケズリが施されているものがあるが一般的なものであるとは考えられない。また鉢Bにも体部下半に認められる。更に高杯・台付鉢・



- | | |
|-----------------------|-----------------------------|
| 1～4 凹線文（口縁端部） | 14 貝殻腹縁圧痕文（体部） |
| 5～9 指頭圧痕文凸帯（頸部） | 15 ヘラ圧痕文（体部） |
| 10～11 凹線文＋ヘラ圧痕文（口縁端部） | 16, 18 半截竹管による斜格子文（口縁内面，体部） |
| 12 凹線文＋棒状浮文（口縁端部） | 17, 19～21 櫛描文（口縁内面，体部） |
| 13 凹線文＋円形浮文（口縁端部） | |

第470図 百・中・Ⅱの新相の土器文様 ($\frac{1}{2}$)

水差などの脚部内面には、観察不可能なもの以外は殆どすべてに横方向のヘラケズリが認められる。このように、百・中・Ⅱの新相は、内面ヘラズリ技法が殆どの器種において一般的に用いられる段階であると考えられよう。

文様

壺以外の甕・高杯・鉢・水差・蓋では凹線文以外には文様は殆ど施されていない（註22）。以下、凹線文以外の文様についてまとめてみたい。

貼り付け突帯文には、断面三角形貼り付け凸帯文（以下断面三角形凸帯と略す）と指頭圧痕文貼り付け凸帯文（以下指頭圧痕文凸帯と略す）の2種類がみられる。断面三角形凸帯は、粘土紐をヨコナデによって断面三角形になるように貼り付けたものである。今回の資料では壺のみに認められた（註23）。一方、指頭圧痕文凸帯には様々な形態のものが認められる（第470図5～9）。実際に粘土紐に指先を押しつけたものもあるが、多くは何らかの工具（半截竹管のようなもの）を押しつけることによって指頭圧痕文凸帯状にみせかけたもので、凸帯の幅、厚さなども一律ではない。第470図8・9は薄い粘土紐帯にヘラで刻目をつけただけのものであるが指頭圧痕文凸帯の退化したものと考えておきたい（註24）。今回指頭圧痕文凸帯は、壺のみならず甕Dの一部にも認められる。これら断面三角形凸帯と指頭圧痕文凸帯との関係は、壺Aにおいては、いずれも頸部下端に施されており、断面三角凸帯のみ2条のものがある。壺Bでは両者が共にセットになって施されているものがある（1603, 1641）。また、壺Cでは断面三角形凸帯のみで、一方、壺D・Gでは指頭圧痕文凸帯のみである。しかしながら、今回両者がそれぞれ意識的に使い分けられていたかどうかについて明確にするには不十分であり今後の資料の増加をまちたい。

櫛描文（第470図17・19～21）については、壺Bや器台などに直線文や波状文、斜格子文が施されているが、いずれも特殊な器形と考えられ、もはや一般的な文様ではなくなっていると言えよう。櫛描文は次の百・中・Ⅲ期においても壺や、大型高杯等に用いられている例がある。

圧痕文は貝殻腹縁を利用したもの（第470図14）とヘラを利用したもの（第470図15）とがあり、壺および甕Bの一部の肩部に施されているのが通常である。また壺Ab₂・B・Hなどでは口縁端部に刻目状に施しているものもある（第470図10・11）。これらは次の百・中・Ⅲ期においても引き続き用いられている。

円形浮文（第470図13）や棒状浮文（第470図12）については、通常壺の口縁端部に施されているが、個体数は多くない。今回出土した器台には口縁端部や脚裾部に認められる。これらは、次の百・中・Ⅲでも引き続き用いられている。

高杯の脚部にみられる透し孔は円形のものが殆どで、内面まで貫通するものとししないものがある。

II、百間川遺跡群における弥生時代中期の土器について

ここまで、百・中・IIの新相の土器について述べてきたが、次に、これを含めて百間川遺跡群の中期の土器の全体の流れについて今回の調査において出土した土器を中心にして述べてみたい。（表—46 岡山県下の弥生時代中期土器編年対比表参照）

（1）百・中・I期の土器

古相と新相に細分することができる。

古相の土器は従来高田式（註25）などと呼ばれているものに相当するが、今回の調査においては出土していない。

新相の土器は従来雄町3類（註26）などと呼ばれているものに相当する。今回の調査においては、兼基遺跡大上田調査区において出土した土器がこの時期にほぼ相当すると考えられる。

壺は大きく3種類のものが出土している。**57**は壺Aの系譜にのる器形であると考えられる。ほぼ球形の体部、直立気味の頸部、殆ど肥厚しない口縁端部、上げ底の底部、内面のヘラミガキや体部外面上半の櫛描文などが特徴である。**1・41・51**などは壺Bの系譜にのる器形であると考えられる。今回の調査では全体の器形のわかるものはない（註27）。ほぼ直立する口頸部に指頭圧痕文凸帯を3条施しているもの（**41**）と外反する口頸部に数条の刻目を施した貼り付け凸帯をもつもの（**1・51**）とがある。**2・11・42・47**などは壺Hの系譜にのる器形であると考えられる。全体の器形のわかるものはないが卵形で肩や胴の張らない体部、内面のヘラミガキなどが特徴である。

甕は2種類が認められる。**5・9・38・48・49・78**などは甕Bの系譜にのる器形であると考えられる。「く」字形に外反する口縁部の端部は肥厚しない。体部最大径は口頸部に比べてあまり大きくなく器高の約 $\frac{2}{3}$ の高さに位置する。体部外面上半は縦方向のハケメ、下半は縦方向のヘラミガキで、内面は口縁部から体部下半まで横方向の丁寧なヘラミガキが施されているのが特徴である。底部はわずかに上げ底を呈する。体部外面上半にヘラ圧痕文をもつものもある（**78**）。**4**などは甕Cの系譜にのる器形であると考えられる。

高杯は2種類が認められる（註28）。**16**などは高杯Bの系譜にのる器形であると考えられる。杯部外面には櫛描文が施されており、杯部と脚部の境には1条の断面三角形凸帯がめぐっている。脚部は「ハ」字状に開き、長方形の透し孔をもつ。脚端部は肥厚しない（註29）。**34・36・46・52・60**は高杯Cの系譜にのる器形であると考えられる。全体の器形のわかるものはないが（註30）、半球形の杯部に水平に屈折する口縁部をもつ。口縁部には2孔1対の小孔を穿つものが多い。脚部は「ハ」字状に開き端部は肥厚しない。**26**は脚裾部が強く外側に開き、脚柱部にヘラ描き沈線文を施している。これらの高杯はいずれも杯部と脚部との接合は円板充填法（註12）であり、脚部内面にヘラケズリは施されていない。

45は鉢Bの系譜にのる器形であると考えられる。内面全体にみられる丁寧なヘラミガキや上げ底の底部などが特徴である。

8はジョッキ形土器と呼ばれているものである(註31)。

3・13は蓋で甕の蓋であると考えられる。

これら、百・中・Ⅰの新相の土器の胎土(細かい砂粒)・焼成(良好)・色調(灰白色が基調)は、いずれも百・中・Ⅱの新相に類似している。

(2) 百・中・Ⅱ期の土器

古相・中相、新相に細分することができる。

古相の土器は従来船山5類(註32)などと呼ばれているものである。今回の調査においては出土していない(註33)。

中相の土器は従来菰池式(註34)などと呼ばれているものに相当する。今回の調査においては出土していない(註35)。

新相の土器は従来雄町4類(註26)などと呼ばれているものに相当する。これまでこの時期のものとして報告されている資料は少ないが(註36)、今回の調査においては多量の土器が出土した。これらの内容についてはすでに述べたとおりである(註37)。

(3) 百・中・Ⅲ期の土器

古相・中相・新相に細分することができる(註38)。

古相の土器は従来前山Ⅱ式(註39)と呼ばれているものの古い段階に相当する。今回の調査においては殆ど出土していない(註40)。

中相の土器としては、兼基遺跡東苗代調査区の水反田導入水路部分出土の土器などをあてたい。これらの一群は今後分離されうる可能性もあるが(例えば、土壇—115、溝—32などは次の新相に入るかも知れない)、現段階では一時期のものとして取り扱っておきたい。

壺はほぼ5種類が認められる。673・794・801・812・829・942などは壺Aの系譜をひく器形であると考えられる。全体の器形のわかるものはないが、口径でみると10cm前後の小型のものと、15～20cm前後のやや大型のものとに区分できる(註41)。口縁端部は上方へのみ拡張するものの他に下方へも拡張するものがある。口縁端部及び頸部外面には数条の凹線文を施している。やや大型のものには口縁端部に棒状浮文をもつものもある。851・876・928・941などは壺Dの系譜をひく器形であると考えられる大型の壺である(註42)。全体の器形のわかるものはないが、口縁端部は上下に拡張し3～4条の凹線文を施し棒状浮文を貼付したものが多い。口縁部内面に櫛描斜格子文や波状文を施するものもある。頸部外面には10条前後の凹線文が施される。949などは壺Fの系譜をひく無頸壺であると考えられる。百・中・Ⅱの新相に比べて胴部が張る体部に直立気味の口頸部をもつ。口縁外面には5～7条の凹線文を施し口縁端部は面

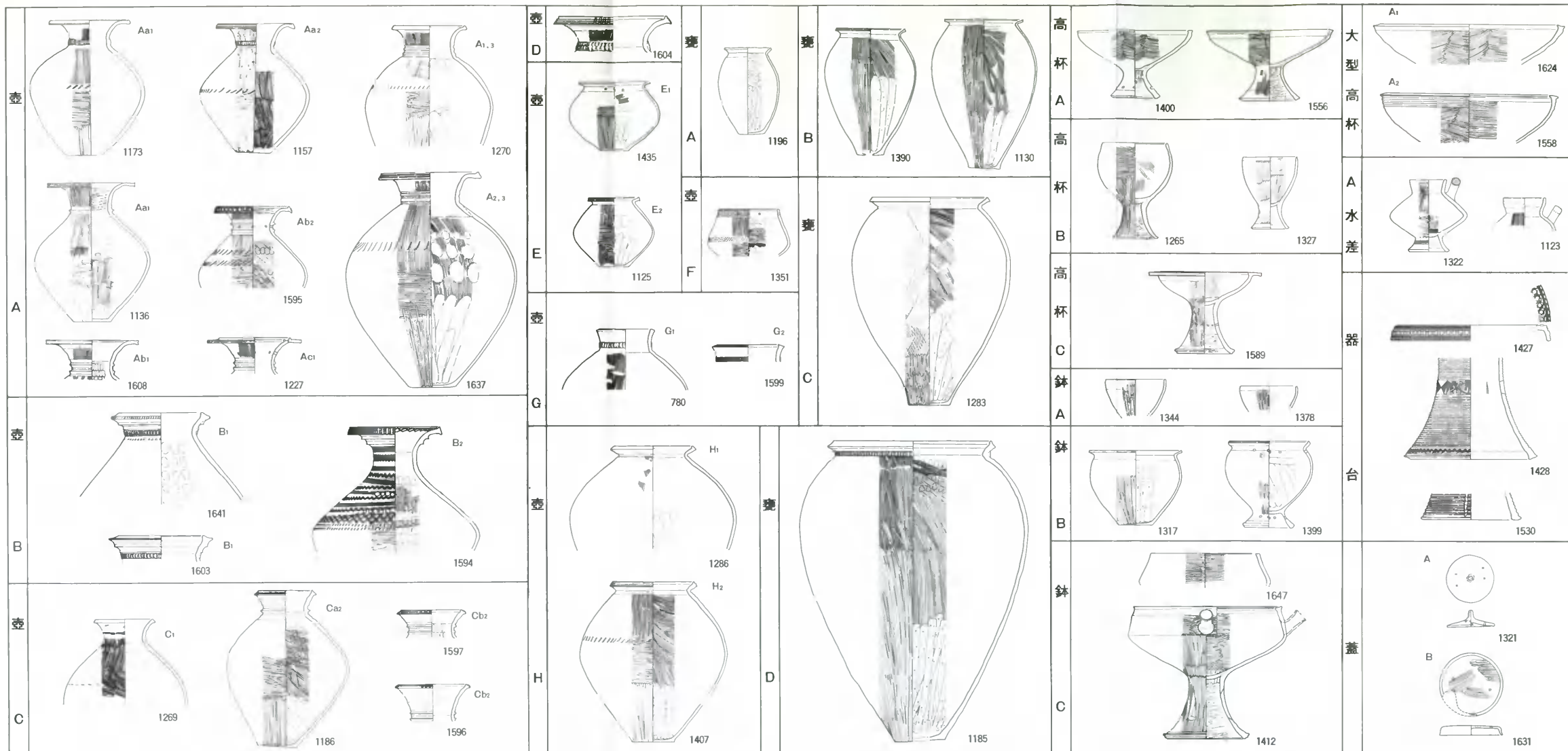
をなすものが多い。脚台が付くかどうかは明らかではない（註43）。**678・702・703**などは壺Hの系譜をひく器形であると考えられる。全体の器形のわかるものはないが、口縁端部は折り返し手法により上下に拡張し凹線文を施している。口縁端部に棒状浮文や鋭い竹管文及び肩部にヘラ圧痕文が施されているものが多いのが特徴である。

水差は2種類が認められた。**885**などは算盤玉形の体部に直立する口頸部をもつもので、**886**は卵形の体部に直立する口頸部をもっている（註44）。どちらも頸部上半に数条の凹線文を施している。口縁端部は丸くおさめるものが多い。

甕は大きさによって2種類に区分できる。**677・823・824・855・878・887・890**などは甕Bの系譜をひく器形であると考えられる。口縁端部は折り返し手法によって上方に拡張され3～4条の凹線文を施すものが多いが、**791・792・809・954**のようにやや大型のものには下方への拡張がみられるものもある。調整方法は百・中・Ⅱの新相と殆ど変わらないが、体部内面上半にハケメを施すものは少なくなり指頭押えのみのものが多くなる。**857・870・871**のように底部が上げ底を呈するものも目立つ。**869・888・953・973・980**などは甕C・Dの系譜をひく器形であると考えられる（註45）。全体の器形のわかるものは出土していない（註46）。口縁端部は折り返し手法によって上方へ拡張され3～4条の凹線文を施すものが多いが下方へ強く拡張されるものも目立つ。頸部には指頭圧痕文凸帯を施すものと施さないものがある。

高杯は3種類が認められる。**697～701・873・984**などは高杯Aの系譜をひく器形であると考えられる。口縁下部が強く屈曲する杯部に細長い「ハ」字形の脚部をもつ。口縁部外面には数条の凹線文をもつものが主体であるが、凹線文を略すものもわずかではあるが存在している。口縁端部を上から押さえて外方へわずかではあるが肥厚させたものもある。脚端部は上方に拡張し1～2条の凹線文をもつものが多い。脚部の透し孔は細長い三角形のものが殆どで、百・中・Ⅱの新相のものが殆ど円形であったのと異っている。内側に貫通するものとしないものがある。**872・938・961**などは高杯Bの系譜をひく器形であると考えられる。百・中・Ⅱの新相に比べて杯部は浅くなり口縁部外面に5～6条の凹線文を施しているのが特徴である。脚部は細長い「ハ」字形を呈し、脚端部は上方に拡張され凹線文が施されている。内側に貫通する細長い三角形の透し孔をもっている。**820・842・904**などは大型高杯Aの系譜をひく器形であると考えられる。全体の器形のわかるものはないが（註47）、口縁下部で強く屈曲する杯部に「ハ」字形の脚部をもつと思われる。口縁外面には凹線文を施している。脚部には内側に貫通する細長い三角形或いは円形の透し孔をもつ。これらの高杯の杯部と脚部の接合法はすべて円板充填法で、脚部内面にはすべて横方向のヘラケズリが施されている。

681・828・913・950などは台付鉢であると考えられる。口径が20cm以下の小型のものと20cm以上の大型のものがある（註48）。「く」字形の口頸部をもち口縁端部は折り返し手法によ



第471図 百・中・Ⅱ・新相 器種分類図 ($\frac{1}{8}$) (図中の番号は本報告書の土器番号と同じ)

り上方または下方へも拡張し3～4条の凹線文を施している。肩部にヘラ圧痕文を1段または2段施すのが特徴である。口頸部の破片のみでは甕との区別は困難である。

940・1579はこれまで「回転台形土器」或いは「台形土器」などと呼ばれているものである。940は図の円板部分の中央部分において直径約7～8cmのほぼ円形内が著しく磨滅しておりこの土器の用途を考えるうえで参考になるであろう。

その他にいわゆる「玉縁状口縁」をもつ土器が出土している(註49)。今回図示したのは5点(676・805・877・951・991)で、全体の器形の明らかなものはない(註50)。

これら百・中・Ⅲの中相の土器の胎土は緻密で、焼成は良好、色調は百・中・Ⅱの新相に比べて赤味がかったものが目立ってくる。

新相の土器としては今回資料的には不十分であるが、今谷遺跡の溝一14出土の土器をあてておきたい。従来仁伍式(註51)と呼ばれているものにほぼ相当すると考えたい。(註52)

以上、百間川遺跡群における弥生中期の土器の様相について今回出土した資料を中心にしてまとめをおこなった。百間川遺跡の調査は現在も継続中であり、すでに他調査区において中期土器の良好な資料も出土しており今後さらに検討を加えてゆきたい。(平井 泰男)

表一46 岡山県下の弥生時代中期土器編年対比表

	百 間 川		雄 町 (1)	伊藤晃(2) 「城遺跡」	高橋護(3) 「考古学ジャーナル」	南 方 (4) (国立病院)	門前池(5)	高本(6)	弥生式土器 集成(7)(山陽地方Ⅱ)
南 方	百・中・Ⅰ	古	高 田	中 期 1	Ⅲ 期	a	Ⅱ a		第Ⅱ様式 B
		新	雄町3類	中 期 2		b	Ⅱ b Ⅱ c		
菰 池	百・中・Ⅱ	古	船山5類	中 期 3	Ⅳ 期	a	Ⅲ a	Ⅰ 式 Ⅱ 式	第Ⅲ様式
		中	菰 池			b	Ⅲ b		
		新	雄町4類	中 期 4		c	Ⅲ c		
前山Ⅱ 仁 伍	百・中・Ⅲ	古	前山東	中 期 5	Ⅴ 期	a	Ⅰ 類 Ⅱ 類	Ⅲ 式	第Ⅳ様式
		中	雄町5類			b			
		新	雄町6類	中 期 6	Ⅵ 期	a b			

(文献)

- (1) 高橋護・葛原克人・正岡睦夫「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』1972
- (2) 伊藤晃・山磨康平「城遺跡発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(9) 1977
- (3) 高橋護「弥生土器—山陽1～2」『月刊考古学ジャーナル』173号・175号 1980
- (4) 出宮徳尚・神谷正義他「南方(国立病院)遺跡発掘調査報告」岡山市遺跡調査団 1981
- (5) 枝川陽・池畑耕一「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(9) 1975
- (6) 井上弘・山磨康平他「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(8) 1975
- (7) 鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成、本編1』東京堂出版 1964

註

- 註1 以下「百間川」は略して兼基遺跡、今谷遺跡と呼ぶことにする。
- 註2 江見正己他『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅰ』岡山県教育委員会 1980, P25
- 註3 これらの他にミニチュア（小型）土器が数点出土している。
- 註4 頸部の断面三角形貼り付け凸帯が1条のものと2条のものとを区別する必要があるかどうかはよくわからないが、次の百・中・Ⅲにおいて盛行する頸部凹線文が、従来考えられているように断面三角形貼り付け凸帯の変化したものであるとするならば、2条のものがより新しい傾向を示すものである可能性が考えられよう。
- 註5 口縁部内面に凸帯を有する壺Aは、これまで播磨地方に多く出土する器形であると考えられている。（今里幾次「播磨弥生式土器の動態」『考古学研究』60号 1969, P34他）、岡山県下においては、高本遺跡（井上弘・山磨康平他「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（8）岡山県教育委員会 1975）や押入西遺跡（井上弘他「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（3）岡山県教育委員会 1973）など美作地方での出土が目立つ。
- 註6 1270は2条の断面三角形貼り付け凸帯に強いヨコナデを加えることによって凹線文状にしたことがよく伺える資料であり、1439, 1637の頸部凹線文に比べて凹凸が著しい。
- 註7 例えば、高本遺跡（前掲註5, 第17図—1）や沼E遺跡（中山俊紀他「沼E遺跡Ⅱ」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第8集 津山市教育委員会 1981, Fig 16—1）で報告されている。
- 註8 例えば、菰池遺跡出土の壺がある。（鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成 本編1』, 東京堂出版 1964, PL35—25）
- 註9 後に述べる水差であるとも考えられるが、口径がやや大きいこと、および今回確実に把手のついたものが出土していないことから一応水差とは区別しておく。しかしながら、前山遺跡北斜面出土の土器（鎌木義昌「岡山県児島市福江前山遺跡の土器」『弥生式土器集成 資料編』弥生式土器集成刊行会 1968, PL 30—5）のような水差になる可能性もある。
- 註10 こうしたタタキメをもつ弥生中期の甕は畿内地方で報告されている例が多いが、岡山県下においてもわずかではあるが報告例がある。例えば、上東遺跡（伊藤晃・柳瀬昭彦・池畑耕一・藤田憲司「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第2集 岡山県教育委員会 1974, 第48図—474）や酒津—水江遺跡（間壁葎子「倉敷市酒津—水江遺跡」『倉敷考古館研究集報』第8号 1973, 図6—10）がある。
- 註11 前山遺跡北斜面（前掲註9）においては口径15cm以下、器高10cm前後の小型の高杯Aが出土している。また、畿内や播磨地方を中心にして出土し、岡山県下においては高本遺跡（前掲註5）において類似したものが出土している高杯Cの口縁端部が下方に屈曲して垂れ下がる器形があるが今回の調査においてはいずれも認められなかった。
- 註12 紫雲出山遺跡の報告書において「連続成形技法」とされているものに相当する。（『紫雲出』詫間町文化財保護委員会 1964, P126）、岡山県下における高杯の円板充填法の出現期に関しては、弥生時

代前期の高杯の資料が殆どないため明確ではないが、現在までのところ確実なのは今回みられるように百・中・Ⅰの新相からであろう。

- 註13 全体のわかる類例として雄町遺跡出土のもの（高橋護・葛原克人・正岡睦夫他「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』1972, 第57図—43）がある。また、1412は注口付台付鉢とも呼ぶべき器種であるが、鉢部のみとれば鉢Cに相当するであろう。尚、このように注口をもつものは、紫雲出山遺跡（『紫雲出』前掲註12, 第22図—270, このなかでは、注口付大型高杯形土器とされている。）や塩町遺跡（潮見浩「山陽地方Ⅰ」『弥生式土器集成 本編 1』, PL 34—35, このなかでは高杯形土器とされている）に類例がある。また、門前池遺跡では注口のみ報告がある。（枝川陽・池畑耕一他「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（9）岡山県教育委員会 1975, 第20図—4）
- 註14 菰池遺跡（前掲註8）から出土したものに全体の器形のわかるものが多くある。
- 註15 類例として雄町遺跡出土の器台がある。（前掲註13, 第57図—49）
- 註16 岡山県下においては未だ類例をみない。他地方では、瓜生堂遺跡（『瓜生堂遺跡Ⅱ』瓜生堂遺跡調査会 1973, 第12図）や摂津加茂遺跡（『摂津加茂』関西大学 1968, 図49）に類例がみられるが、いずれも今回出土したものに比べて器壁が厚いのが特徴である。
- 註17 一般的に凹線文は、弥生時代中期中葉以降に畿内から中部瀬戸内にわたる地域にみられる特徴的な文様であると考えられている。岡山県下においては、ほぼ菰池式（鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成本編 1』東京堂出版 1964）において壺の口縁部に出現し、前山Ⅱ式（鎌木義昌「岡山県児島市福江前山遺跡の土器」『弥生式土器集成資料編』弥生式土器集成刊行会 1968）では壺の頸部や甕の口縁部や高杯の口縁部などに盛んに用いられるようになり、次の仁伍式（高橋護「郷内小学校裏貝塚出土弥生式土器の編年の位置について」『遺跡』23号 1955, 高橋護「弥生土器—山陽2」『月刊考古学ジャーナル』175号 ニューサイエンス社 1980）では壺や甕などの口縁部以外では徐々に衰退してゆくものと考えられている。
- 註18 『紫雲出』（前掲註12）において凹線文B種と呼ばれているものに相当するが、百・中・Ⅲ期にみられるような多条の凹線文ではない。
- 註19 これを凹線文と呼ぶかどうかの問題があるが（例えば「尾崎遺跡」では「擬凹線」と呼んでいる。『尾崎遺跡』尾崎遺跡発掘調査団 1977, P19）、ここでは一応、百・中・Ⅲ以降みられる口縁端部の凹線文とは区別して考えておきたい。
- 註20 大きくいえば、凹線文をもつ壺と凹線文をもたない甕・高杯という組み合わせであるといえよう。
- 註21 内面ヘラケズリ技法は、一般的に中部瀬戸内地方において、弥生代時中期後半に出現する特徴的な技法であると考えられている。岡山県下におけるこの技法の出現期に関しては、菰池式（前掲註17）のうちの新しい段階、例えば「雄町4類」（「雄町遺跡」前掲註13）や「Ⅳ—C期」（高橋護「弥生土器—山陽1」『月刊考古学ジャーナル』173号 ニューサイエンス社 1980, P 26）とされており、前山Ⅱ式（前掲註17）以降においては普遍的に用いられるようになると考えられている。ところで、この技法をもつ弥生中期の土器の報告されている他地域の遺跡のいくつかをみると、例えば、播磨西部に位置する川島遺跡（『川島・立岡遺跡』太子町教育委員会 1971）や尾崎遺跡（『尾崎遺跡』

尾崎遺跡発掘調査団 1977) では、ほぼ百・中・Ⅱの新相に併行すると考えられる時期の甕の内面下半や高杯脚部の内面にヘラケズリ技法が一般的に認められる。また讃岐の紫雲出山遺跡(『紫雲出』前掲註12)では、紫雲出山Ⅱ式、Ⅲ式とされている甕の内面下半や高杯脚部内面にヘラケズリ技法がみられる(P124)。ところで、この紫雲出山Ⅱ・Ⅲ式の甕2は、「口縁部端面を上下、ことに上方に拡張し、ここに凹線文A種を2、3条めぐらせた甕」(P40)であり、百・中・Ⅲ期にみられる甕に類似している。一方、百・中・Ⅱの新相の甕に類似している甕1(「口縁端部の肥厚がいちじるしくなく、凹線文をもたない」)には、内面ヘラケズリ技法はみられないという。こうしたことから、紫雲出山遺跡の場合は、甕の内面ヘラケズリ技法は百間川遺跡群よりわずかに遅れて出現しているといえよう。山陰では、例えば、青木遺跡(『青木遺跡発掘調査報告Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』、鳥取県教育委員会 1976, 1977, 1978)において、青木0期とされている甕の内面下半にヘラケズリ技法が認められる。これらの甕はほぼ百・中・Ⅱの新相に併行する時期のものであると考えられる。これらの遺跡の他に、近年、畿内地方においても内面ヘラケズリ技法をもつ弥生中期の土器が報告されつつある。(例えば、『瓜生堂』大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター 1980, や『瓜生堂遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会 1981, や『巨摩・瓜生堂』財団法人大阪文化財センター 1982, など)これらはいずれも畿内地方の一般的な土器ではなく、他地方からの製作技法の伝播や、或いは人間集団の移動などが考えられている。そうしたなかで、摂津西部に位置する「楠、荒田町遺跡」(『楠、荒田町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1980)においては、「畿内第Ⅲ様式(古)」と考えられる甕の内面にヘラケズリの施されているものが2点報告されており注目される。

註22 但し、後に述べるように甕Dにおいては頸部に指頭圧痕文凸帯を施すものが目立つ。

註23 壺以外の稀な例として、器台に断面三角形凸帯が施されているものがある。(『雄町遺跡』前掲註13, 第57図—49)

註24 壺の頸部の断面三角形凸帯が凹線文に変化してゆくことはすでに指摘されているが(例えば、『紫雲出』前掲註12, P120), 指頭圧痕文凸帯については、このような形で退化してゆき、次の百・中・Ⅲでは、大形甕以外には一般的には用いられなくなるようである。

註25 鎌木義昌・近藤義郎『岡山県高田遺跡』『日本農耕文化の生成』東京堂出版 1961。

註26 『雄町遺跡』『岡山県埋蔵文化財報告』岡山県教育委員会 1972

註27 全体の器形のわかるものは南方(国立病院)遺跡(出宮徳尚・神谷正義他『南方(国立病院)遺跡発掘調査報告』岡山市遺跡調査団 岡山市教育委員会 1981)で多く出土しており、百間川遺跡群でも第一次調査において出土している。(葛原克人・松本和男・内藤善史『百間川遺跡第一次調査概報—旭川放水路改修工事に伴う—』岡山県教育委員会 1977, P—9)

註28 一般的に中部瀬戸内地方において高杯が増加するのは百・中・Ⅱの段階からとされているが(例えば、高橋護『弥生土器・山陽1—』前掲註21, P25), 当遺跡においては、百・中・Ⅰの新相ですでに器種構成上の主要な一部をなしていると考えられる。

註29 類例は、雄町遺跡(前掲註26, 第56図—31)や南方(国立病院)遺跡(前掲註27, 第35図—121・122)で出土している。

- 註30 全体の器形のわかるものは、南方遺跡（出宮徳尚・伊藤晃『南方遺跡発掘調査概報—山陽新幹線敷設による市道移転工事にともなう緊急発掘—』岡山市遺跡調査団 1971、第28図—④）や南方（国立病院）遺跡（前掲註27、第33図—114）や宮尾遺跡（橋本惣司他「宮尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（4）1973、第7図4）などで出土している。
- 註31 類例は、南方遺跡（前掲註30、第28図—⑥）や雄町遺跡（前掲註26、第56図—27・28）や南方（国立病院）遺跡（前掲註27、第29図—75・76・77・81）などで出土している。また、全体の器形のわかるものが百間川当麻遺跡（報告書近刊）で出土している。
- 註32 泉本知秀他「船山遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告—山陽新幹線建設に伴う調査—』岡山県教育委員会 1972
- 註33 この時期の資料は岡山県下においては、二野遺跡（高畑知功・福田正継「二野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（15）岡山県教育委員会、1977）や南方遺跡（柳瀬昭彦・岡本寛久「南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（40）岡山県教育委員会 1981の土壙42、土壙73）や南方（国立病院）遺跡（前掲註27、南方Ⅲa式）などで出土している。
- 註34 鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成 本編1』東京堂出版 1964
- 註35 この時期の資料は菰池遺跡を除くと、新邸貝塚（近藤義郎「備中新邸貝塚」『古代学研究』8号 古代学研究会 1953）や南方遺跡（前掲註33、土壙26、土壙92）や高本遺跡（前掲註5、高本Ⅰ式）などで出土している。菰池式の内容については、必ずしも明確ではないように思われるが、ここでは高橋護「弥生土器、山陽1」（前掲註21）に依っている。
- 註36 雄町遺跡の第4類土器以外では、高本遺跡（前掲註5、高本Ⅱ式が相当する）や乙多見遺跡（正岡陸夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴う出土品—主として、弥生中期の土器—」『岡山県埋蔵文化財報告』（3）1973）などで出土している。
- 註37 ところで、この時期を設定する特徴として高橋氏は、壺の頸部に「凸帯文の変化した凹線文が将来形成されつつある」こと、および、「内面ヘラ削り技法がわずかに出現を始める」ことをあげている（高橋護「弥生土器—山陽1—」前掲註21、P26）。こうした指標から今回出土の土器群をみると、すでに述べたように内面ヘラケズリ技法は壺・甕・高杯など殆ど全ての器種に認められ、内面ヘラケズリ技法の認められないものとの共存関係は殆どないといってよい。一方、壺の頸部の凹線文は全体の割合からみればほんのごく少量出土しているにすぎない。こうしたあり方をみると、頸部の凹線文と内面ヘラケズリ技法の両者が同時に新特徴として出現するものなのかどうかという問題につきあたる。この点については、全体として資料が未だ少ない現状で判断するには早計であると思われるが、一つの見通しとして今回の資料から考えるならば、内面ヘラケズリ技法が頸部凹線文より先行して出現するのではないかと考えられよう。即ち、口縁端部に凹線文、頸部に貼り付け凸帯文の壺（従来「菰池式」と考えられている壺）に内面ヘラケズリ技法の甕が伴う時期が存在する可能性が考えられるのである。
- 註38 高橋護氏の編年案（前掲註17）との関係でいえば、古相がV—a期、中相がV—b期、新相がⅥ—a・b期に相当する。しかしながら、今回の東苗代調査区における一部の遺構内出土の土器について

はVI-a期に比定できる可能性のあるものがある。すでに高橋氏もV-b期とVI-a期の区分は微妙であるとされており、今回出土の不十分な資料では明確な結論を出すには至っていない。本報告では、東苗代調査区出土の土器群を一時期のものであると判断し、これらを百・中・Ⅲの中相として捉え、この中相にはV-b期のみならずVI-a期をも含む可能性を指摘するにとどめておきたい。

註39 鎌木義昌「岡山県児島福江前山遺跡の土器」『弥生式土器集成 資料編』弥生式土器集成刊行会 1968

註40 この時期のまとまった資料としては川入遺跡法万寺調査区302号土壙（枝川陽・正岡睦夫・大谷猛「川入遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第2集 岡山県教育委員会 1974, P71）やH-6（柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（16）1977, P 33～36）から出土したものがある。

註41 全体の器形のわかる類例は大型のものとして城遺跡（伊藤晃・山磨康平「城遺跡発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（19）1977, 第12図98）出土のものなどがあり、小型のものとして上東遺跡（「川入上東」前掲註40, 第97図-196）出土のものなどがある。

註42 全体の器形のわかる類例としては雄町遺跡出土のもの（前掲註26, 第57図-50）がある。

註43 台脚をもつ類例として菰池遺跡出土のもの（前掲註8, PL 35-30）があり、もたない類例としては雄町遺跡出土のもの（前掲註26, 第58図-59）がある。

註44 全体の器形のわかる類例としては雄町遺跡出土のものがある。（前掲註26, 第58図-56）

掲45 このような大型甕は、百・中・Ⅱ及び百・中・Ⅲにおいては1つの器種として大型壺とのセット関係が確認できるが、弥生後期に入ると大型甕はもはや一般的な器種ではなくなるように思われる。

註46 全体の器形のわかる類例として雄町遺跡出土のものがある。（前掲註20, 第9図2）

註47 全体の器形のわかる類例として門前池遺跡出土のものがある。（枝川陽・池畑耕一他「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（9）岡山県教育委員会 1975, 第81図-14）

註48 全体の器形のわかる類例として雄町遺跡出土のものがある。（前掲註26, 第57図-51）

註49 岡山県下において類例の報告されている遺跡としては門前池遺跡（前掲註47）や用木山遺跡（神原英朗他「用木山遺跡」岡山県山陽町教育委員会 1977）や上東遺跡（「上東遺跡の調査」前掲註10）などがあり、総数で25点を数える。

註50 岡山県下出土の「玉縁状口縁」をもつ土器は大きく壺と鉢になると考えられる。今回出土の805・877・951・991は鉢Cの系譜をひく器形であると考えられる。また676は城遺跡出土のもの（前掲註41, 第13図-112）に類似している。

註51 仁伍式の内容については必ずしも明確ではないように思われるが、ここでは高橋護「郷内小学校裏貝塚出土弥生式土器の編年の位置について」『遺跡』23号 1955, 高橋護「弥生土器—山陽2」『月刊考古学ジャーナル』175号 ニューサイエンス社 1980 に依っている。

註52 百間川遺跡群においては、百間川沢田遺跡第1調査区の溝3でこの時期に相当すると考えられる土器が出土している。（松本和男・内藤善史他, 「百間川沢田遺跡」『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅱ』岡山県教育委員会 1980）

この節をまとめるにあたっては、文化課職員諸氏から有益な御教示をいただいた。記して感謝します。

第9節 弥生時代後期の土器

ここに取り上げる土器は弥生時代後期中葉段階である。1980年11月に報告（以後報文Ⅰ＜註1＞とする。）された中で時期区分について述べられた百・後・Ⅱと百・後・Ⅲ期に相当する。したがって、前述した報文Ⅰの出土遺物を基準として今回の兼基・今谷遺跡の土器について述べて行きたい。

報文Ⅰにおいては、左岸用水調査区D—4（以後D—4とする。）から百・後・Ⅱの良好な資料を検出している。また、百・後・Ⅲの時期は左岸用水調査区3—H—2（以後3—H—2とする。）出土遺物（註1）が報告されている。そこで、両遺構出土土器の概略を記し、今回報告する土器についての若干のまとめをしておきたい。

D—4出土遺物は壺・甕・高杯・鉢の器種がそろっている。壺は長頸・短頸・直口・広口の4種類が認められ、甕Aは口縁端部を肥厚させ凹線を施文する65～70等がある（註2）。甕Bは口縁端部を下方に張り出し気味にする55～64がある。甕Cは口縁端部を拡張しない54などがみられる。底部ではAの大型品は胴部から比較的ゆるやかに底部に移行し、大きめの底部を形成する。小型品およびB・Cにおいては胴部より急激に縮少し小さい底となる。この底部は上げ底状となり周囲を押圧により調整している。

高杯Aは96・97のように長脚で口縁部は外反し、端部近くはさらに強く外反する。高杯Bは杯部がAと変わらないが、中径が小さく短脚・裾広がり傾向を示す98・99がある。高杯Cは碗状をなし、105～107のように杯部径は対し長脚である。

鉢Aは大型品で93・94のように口縁端部を拡張し凹線文を施文・鉢Bは頸部を外方へ屈曲する83。鉢Cは緩やかに立ち上がり端部を丸くつくる79～82がある。鉢Dは84のように台を付すもの、ラッパ状に開く鉢Eは低い台が付す89～92などがある。

このD—4に相当するとされるものが土器溜り—A・B・C・D、住居—6・8などからまとまって出土している。土器溜り—Aの長頸壺は頸部から口縁にかけて弓状に外反してゆく。甕はD—4出土のものが胴部外面調整がハケであるのに対し、タタキを用いるものが多く認められる。口縁部は甕Bより甕Aのものに近く、底部までの接合資料はないが283～285がその底部とすれば別種の甕とみるべきであろうか。この甕以外に甕Bが存在する。高杯はAとBがみられ、前者は杯部径が36cmのものが存在するが全体として28cm前後の口径が主体を占める。後者は口径が大きい傾向を示している。鉢は、B・Cとも屈曲が強く内面屈曲部に稜を有するものが多く認められる。

土器溜り—Bの壺は、土器溜り—Aと同様の長頸壺を認め、他に小型で下脹れのものが存在

する。甕B・Cが存在し、これらの底部と考えられる上げ底で押圧痕を残すものが出土している。タタキを有するものが存在し、底部は平底である。高杯Bが認められ、口径が42cmを測るものが検出されている。

土器溜り一Cの壺は短頸が存在する。甕Aの小型品に近いものとBが認められる。高杯はAで口縁端部近くの強い外反は認められない。鉢は、B・C・Dの3種類が認められる。

土器溜り一Dの壺は、AとDのがあり前者については全体の器形に対する頸部の割合が高く口縁端部を上下、特に下方に大きく拡張するものがめだつ。甕はB・Cの2種類が認められる。高杯は、Aで口径が小さくなりCは26cmを測る大形のも存在する。この他に杯部から立ち上り斜外方に大きく広がり、端部は上下に拡張が認められる。鉢はA～Eのそれぞれが出土しているが、Eについては外面調整はタタキを用いている。

住居一6の高杯は、AとCが存在し前者の106が外反部分の中ほどで立ち上がりさらに外方へ屈曲する。

住居一8は、小型の壺がみられる。甕はBでタタキを有する。高杯はAで杯部からの外反はやや立ち上がり気味となり、脚は短めで裾端は丸く終らせている。

次に百・後・Ⅲの時期では、3-H-2からの出土遺物である。当遺跡から出土する遺物は、器種が一通りそろっているが壺（土器溜り一1において分ける）・鉢については量的にめぐまれていない。壺は頸部から外方へ屈曲し端部は上下に拡張するが上方へのそれが強い。**281**頸部内面はヘラケズリをおこなっている。甕Aは口縁端部を肥厚させ凹線を施文**303・304**。Bは口縁端部を上下に肥厚、特に上方へのそれが強い**282～285・301・302・310**がある。Cは口縁端部が上方へ拡張する**287～292**がある。これらに伴う底部は、上げ底で押圧痕を止めるものより平底で胴部外面をヘラ調整をおこなう個体が圧倒的に多い。高杯Aは杯部が深くなり屈曲部が上方へ立ち上がるようになる。脚はやや開き気味の短脚で、裾への移行は稜をもつ**327～336**等がある。Bは椀状のもので脚はAと同様のものが付く**337・338・340**がある。鉢は口縁端部を肥厚、特に上方へのそれが強い。

以上、3-H-2と相前後する出土遺物を出土する遺構は、土器溜り一1・土壇一67・76などが存在している。

土器溜り一1の長頸壺Aは、口縁端部を上下に拡張する**1819**がある。Bは口縁端部を肥厚させる**1816～1818**。Cは口縁端部を上方へ拡張気味にさせる**1815・1820**。Dは口縁端部を面取りする**1829**などが認められる。短頸壺は、口縁端部を拡張気味にする**1827**。口縁端部を時に上方へ大きく拡張する**1826・1828**などが認められる。甕B・Cが認められ、底部は上げ底で押圧痕を有するものが認められる。高杯はA・Bが認められ前者は口径20cmを超えるものも存在するが、全体としては小さくなってきており杯部も深くなる。脚部は、「ハ」字状に開き短めと

なり裾部への移行は稜を形成しない。裾端部は、薄くなって終らせるものと面取りをおこなうものが存在する。鉢は、逆「ハ」字状に開き、口縁端部を若干肥厚させる。器台が認められ口縁端部を上下に大きく拡張し裾部には凹線を施し長方形の透しが存在する。

土壙—76の甕はBで底部が上げ底で押圧痕を残す**1732**。Cで底部が平底となる**1733・1735**などが認められる。前者の胴部調整はハケ、後者はヘラを用いている。高杯は、AとBが認められ脚部は「ハ」字状に開き気味の長脚である。鉢は大型のものと台付のが存在する。器台は裾端部が立ち上がっている。

土壙—67の壺はBが認められ小型の広口と直口が存在する。甕は、Aと口縁端部を面取りする**1684・1685**、口縁端部を丸く終らせる**168**なども認められる。高杯はA・Bがあり脚は長脚である。

以上、報文Iに示された百・後・II・IIIと相前後する遺物について述べてきた。次にこれらの出土遺物について相互の関係について触れておきたい。

D—4においては、壺**47・50・53**と甕**68・69**などの前段階からの遺物が伴出している。しかしながら壺は口縁部が明瞭な稜線をもって斜め上方に拡張する長頸壺となり、甕はBが圧倒的に多くなっている。高杯は口径が30cm近いもので杯部屈曲部に凹線あるいは段を、脚は柱状の長脚を有する他に**99**を小型にした**98**が認められている。また鉢にしても3種類を認めるが頸部内面の稜が**93**に認められるが他は外反するものとなる。このD—4の壺より古くなる**322・352**は頸部から口縁にかけて弓状に外反するものである。これと伴出する土器は、同じような様相を示している。そしてD—4の壺より後出的なものとして土器溜り—D出土のものがある。**376**以外は口縁部が大きく外反し端部を上下に拡張させ、頸部の占める割合が大きくなる。甕は大小のバラツキがなくなり全体として均一化の傾向を示す。鉢は大小の器種にかかわらず「く」字状に外反し、内面に稜を形成しないものとなる。

これら土器群に続くものとして土壙—67の土器が上げられよう。壺は頸部が開き気味となり、甕は胴部最大径が中ほどとなり肩の張らないタイプとなるなど新しい様相を認める。しかし、高杯は口径が大きく長脚を有し、鉢も甕Bの口縁を有するものなどが存在する。また、**1688**の壺は、口縁端部を斜め下方に肥厚させているなどD—4の一群に近い様相を持つものが伴出している。そして、土壙—76の壺はそれらと対称的に頸部の占める割合が少なくなり、頸部が外へ開く傾向を一段と強めている。甕は**1773・1735**の如く土壙—67において認められなかったものが出土している。さらに**1723・1733・1738・1746**の土器は胎土・焼成・色調とも全く同一の内容を示している。**1723**の壺は、頸部内面中ほどからヘラケズリ、**1735**の甕は口縁部が内傾し器壁および底部が非常に薄くなっているなどそれぞれの器種において新しい傾向を認めることができる。また、土器溜り—1の**1819**以外の壺は、ほぼ頸部が開くものが主体を占め

1823は頸部内面をヘラケズリを行う。高杯は杯部の深さを増すが脚は短脚傾向を示すが明確な屈曲を形成するにいたっていないなど土壙—76に近い様相を示している。

以上、報文Ⅰを基とし個々の遺物について検討を加えてきた。そして土壙—76の段階において土壙—67との土器において著しい変化を認め、後者出土の土器群までを百・後・Ⅱと把握することが妥当であろう。そして百・後・Ⅲとした3—H—2までに土壙—76および土器溜り—1の土器群が存在すると思われるのである。そして、この段階において、1866の高杯の裏面にS字状の組合せとなると考えられるものと1870の器台も前者と同じようなヘラ描きをもつものが伴出している。また、1747の器台は特殊器台に見られる裾端部の立ち上がりがこの土器において認められるなど注目される内容を含んでいる時期でもある。

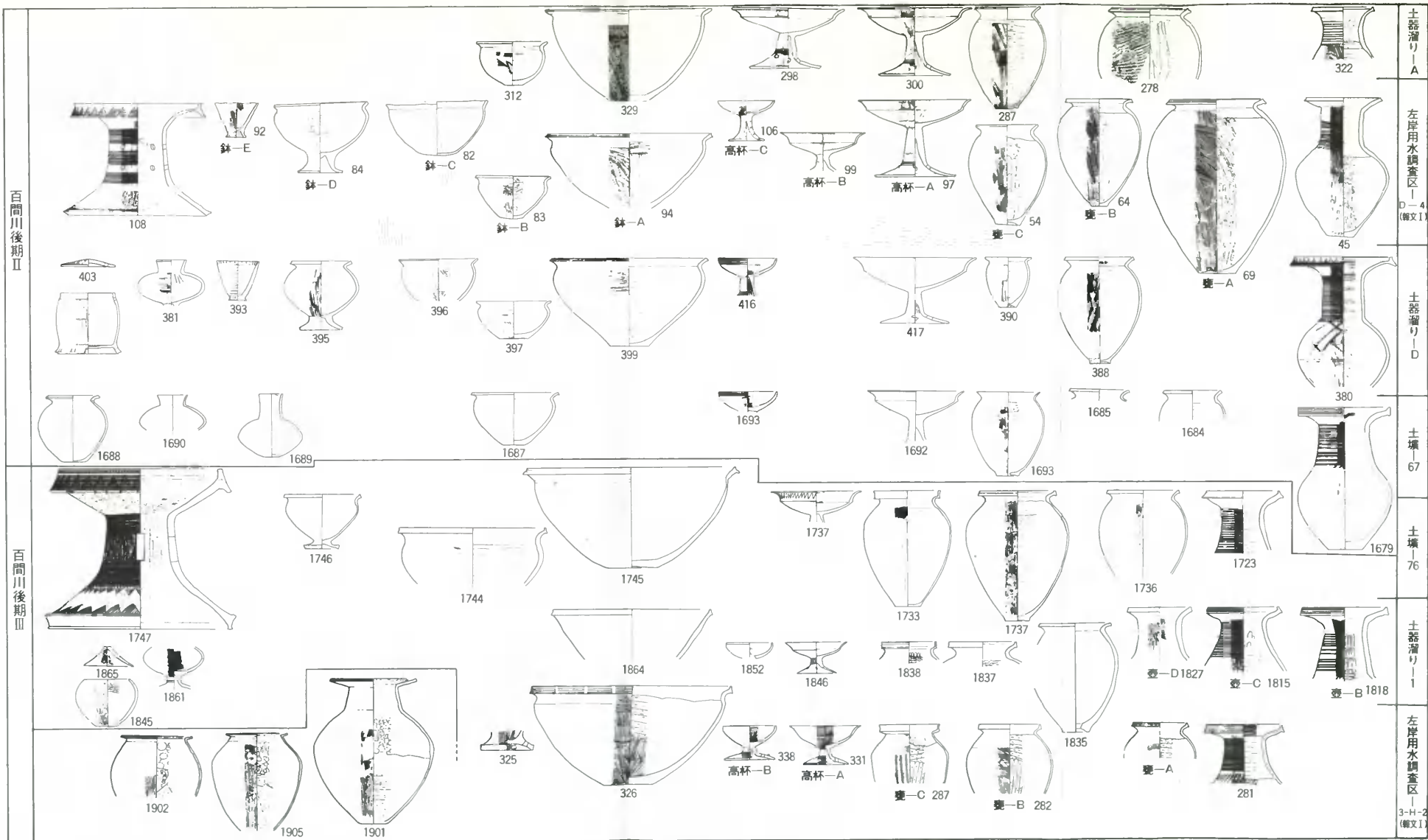
次に1901～1909までの土器は、胎土・焼成・色調とも同一内容を示し、縦来から播磨系とされてきた土器と類似しているのである。壺は頸部を「ハ」字状に下に開き口縁部は水平近くまで屈曲し端部の拡張はみない。胴部最大径は中位より上にあり張り気味の胴部を形成する。底部は欠損しているが、底部に移行する部分はやや丸味を有している。口縁部から頸部にかけての内面調整はナデで、頸部内面において押圧痕が認められる。胴部外面の下半ほどまでハケでそれ以下はヘラミガキをおこなっている。内面は、肩部から胴部最大径までは押圧痕がそれ以下はヨコのヘラケズリが、そして底部近くにおいてタテのヘラケズリを認める。

甕は1902～1904・1907にみられるような球形の胴部、1906・1908の肩の張る2種類が存在する。両者とも口縁部のつくりあるいは調整はほぼ同じような内容を示している。口縁部は水平近くまで屈曲し、端部は拡張をみない。胴部外面は、中ほどまでハケ（後からナデをおこなうものも認められた。）でそれから以下はヘラミガキをおこなっている。胴部内面頸部下はナデを行い胴部最大径前後までを押圧痕がみられそれ以下は横あるいは斜めのヘラケズリをおこなう。

これらの特徴を備える土器は、周辺地域において兵庫県川島遺跡（註3）、奈良県纏向遺跡（註4）などから比較的多く出土している。川島遺跡の壺は、胴部外面のヘラミガキが胴部最大径近くまで達し、底部は丸底となる。甕は、口縁部の屈曲があまくなりシャープさがなくなる。胴部外面のヘラミガキは、頸部近くまで達するものがみられ底部は丸味を強めている。これらの傾向は纏向遺跡においても認められている。

川島遺跡においては、B型技法として20溝独自の技法とされている。また、長越遺跡（註5）において中部瀬戸内に出自を求め讃岐系のものとしている。その讃岐においての高屋遺跡出土例の甕は、頸部の屈曲はあまき胴部外面のヘラミガキは胴部最大径までおよんでいるなど前述した遺跡出土例と同じような様相を示している。

このように周辺地域について観察したように当遺跡出土遺物より新しい様相を示してい



第472図 弥生時代後期土器対照図

る。当遺跡出土の土器群は、一括して出土したものでなく今谷橋脚0～2までに分布してみられ、かつまた接合資料は同一遺構内に止まらなかった関係から時期の特定は困難である。しかし、比較的大破片として出土した遺構は溝一18・土器溜り一3・4において多く認められている。これらの土器は百・後・Ⅳの時期に相当する。また、図示していないが第3微高地の水田床土からも出土し、その出土状況から水田埋没より古いと考えられる。水田の埋没は百・後・Ⅳであり、そのうちでも後半期（近接の雄町遺跡において12類とするもの）に相当するものであり、これよりもさかのぼることが妥当であろう。

したがって前述した土器群は、器形および調整の関係から百・後・Ⅳでも古い段階に相当することが可能であろう。そして周辺地域の出土する時期よりも古く位置付けられるであろう。このようなことから、現在の時点においてその出自を特定するのは性急すぎるであろう。

（下澤 公明）

註

- 註1 江見正己・浅倉秀昭他「百間川原尾島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（39）1980年
- 註2 住居址床面出土と住居址内のP一1から出土をしている。
- 註3 石野博信他「川島・立岡遺跡」太子町教育委員会 1971年
- 註4 石野博信他「纏向」奈良県桜井市教育委員会 1976年
- 註5 松下勝他「播磨・長越遺跡」兵庫県教育委員会 1978年



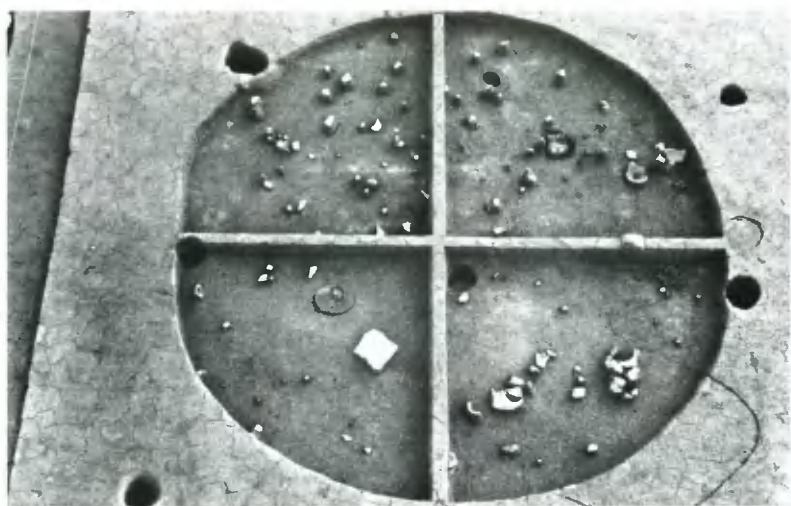
兼基遺跡 D・E・F・G 区画全景



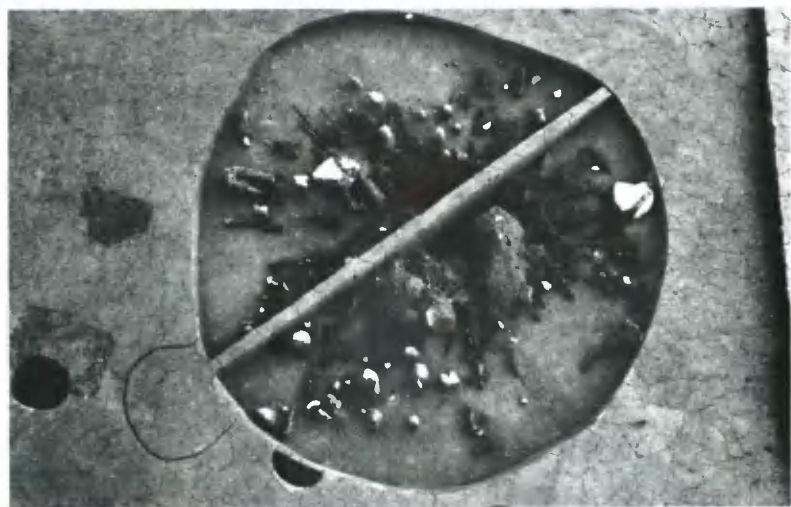
1. 兼基遺跡全景（南より）



2. 今谷遺跡全景（南西より）

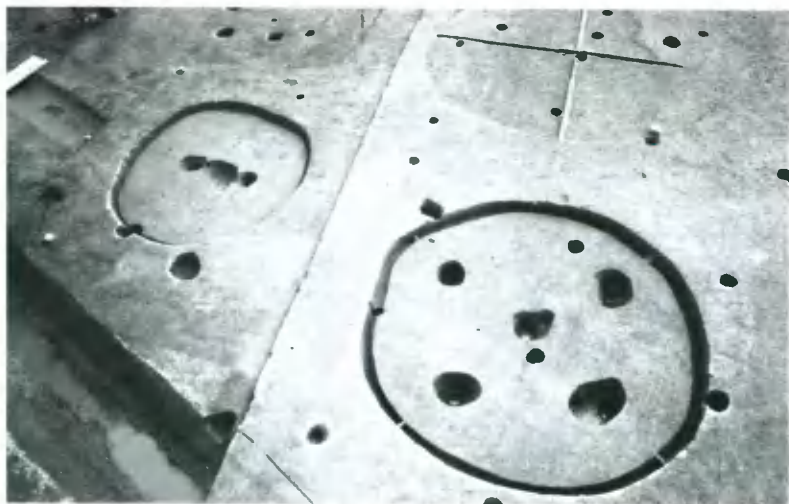


1. 竪穴式住居-2 (北より)



2. 竪穴式住居-3 (北より)

図版 4



1. 竪穴式住居-2・3 (北より)



2. 土壇-1 (南より)



1. 杭列 (東より)



2. 杭列 (西より)



1. 竪穴式住居-6 (北西より)



2. 溝-7 (西より)



1. 土器溜り-E (南西より)



2. 水田 (北東より)



1. 水田・畝畝 (北より)



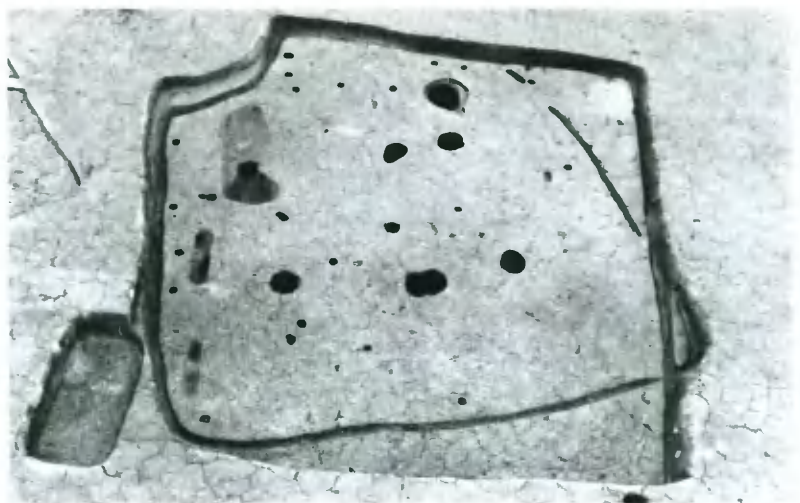
2. 水田・畝畝下の遺構 (北東より)



1. 溝-7・土器溜り-A (東より)



2. 溝-7・8・9 (東より)



1. 竪穴式住居-13A・B (北より)



2. 建物-9 (北より)



1. 大上田調査区 (西より)



2. 大上田F・G調査区 (北より)



1. 畝状遺構（北より）



2. 柵-1（北より）



1. 竪穴式住居-20 (北より)



2. 竪穴式住居-19上層 (西より)



1. 溝41遺物出土状況（南西より）



2. 溝41・土器溜り-4（西より）



1. 土壌-24 (北より)



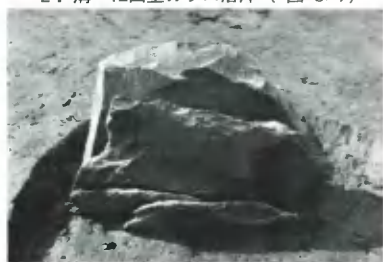
5. 溝-12 (西より)



2. 溝-12出土ガラス溶滓 (西より)



6. 建物-22 (東より)



3. 土壌-59 (北東より)



7. 建物-22 pit 8出土壺 (南東より)



4. 井戸-13 (北より)



8. 作業風景 (北西より)



1. 弥生時代中期建物群東側（北北西より）



2. 弥生時代中期建物群西側（北北東より）



62



10



78



2



4



16



784



1136



716



1157



927



1306



1156



1243



1285



1254



1196



1322



1631



1428



1316



1440



1412



1598



675



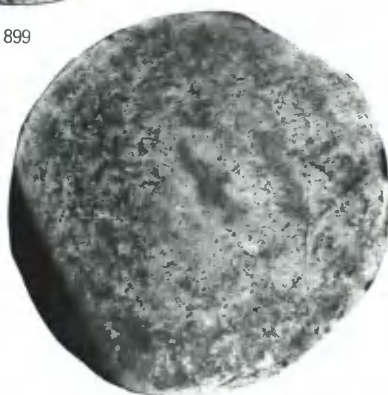
899



887



828



940



898





890



891



886



961



970



1636



207



1008



708



1016



1007



1021



178
330



233



217



241



236



248



249



343



307



280



308



286



353



252



393



355



380



416



392



395



397



382



400



418



407



1033



1698



1035



1047



1048



1725



1733



1737



1847



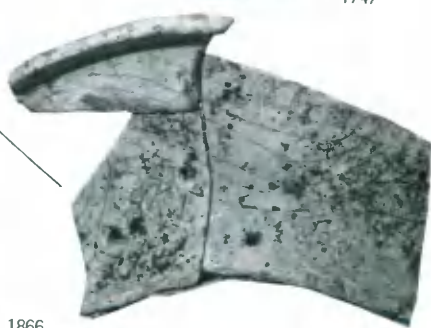
1746



1747



1866





430



451



437



431



452



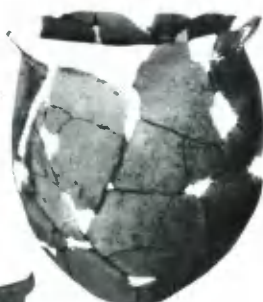
438



436



449



440



443



459



455



447



465



448



466



454



469



549



594



556



564



599



565



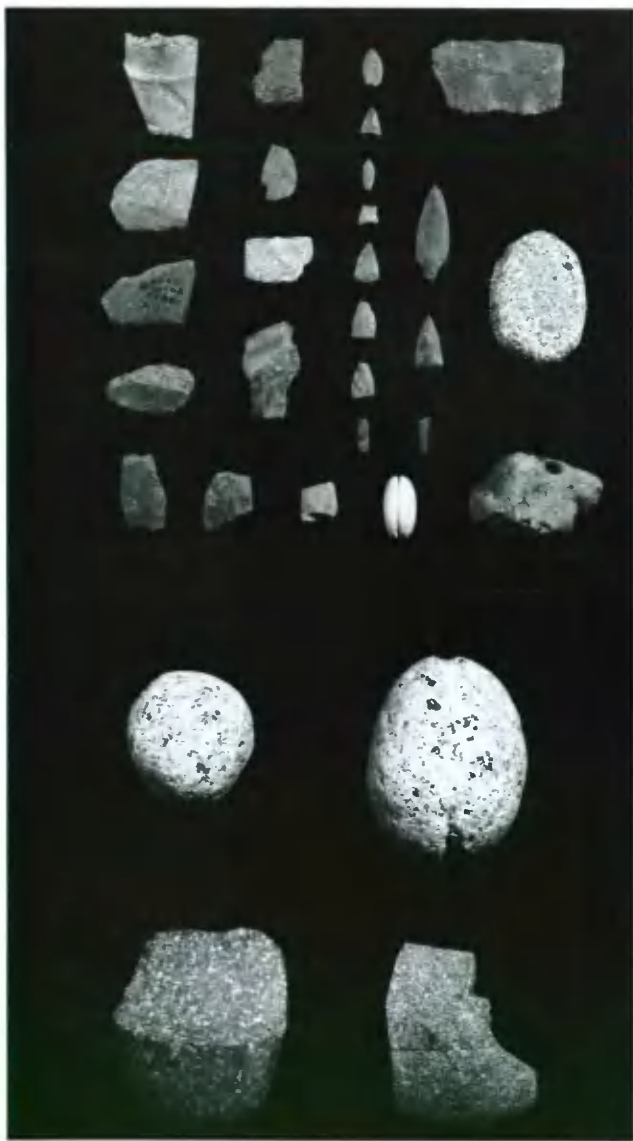
600



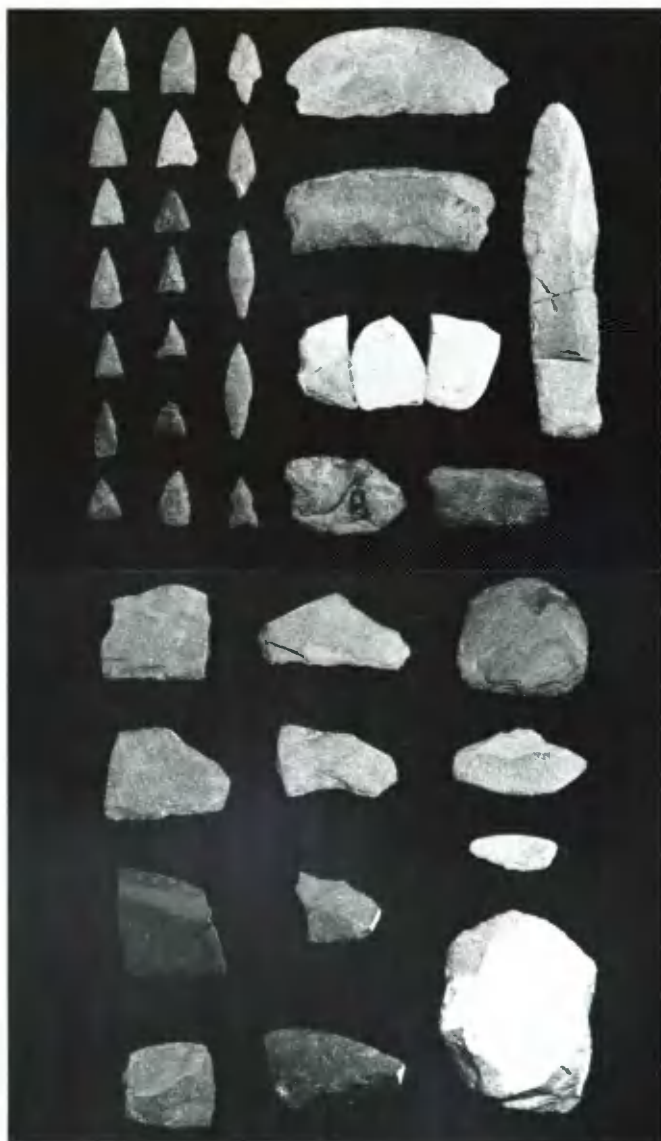
567



1918



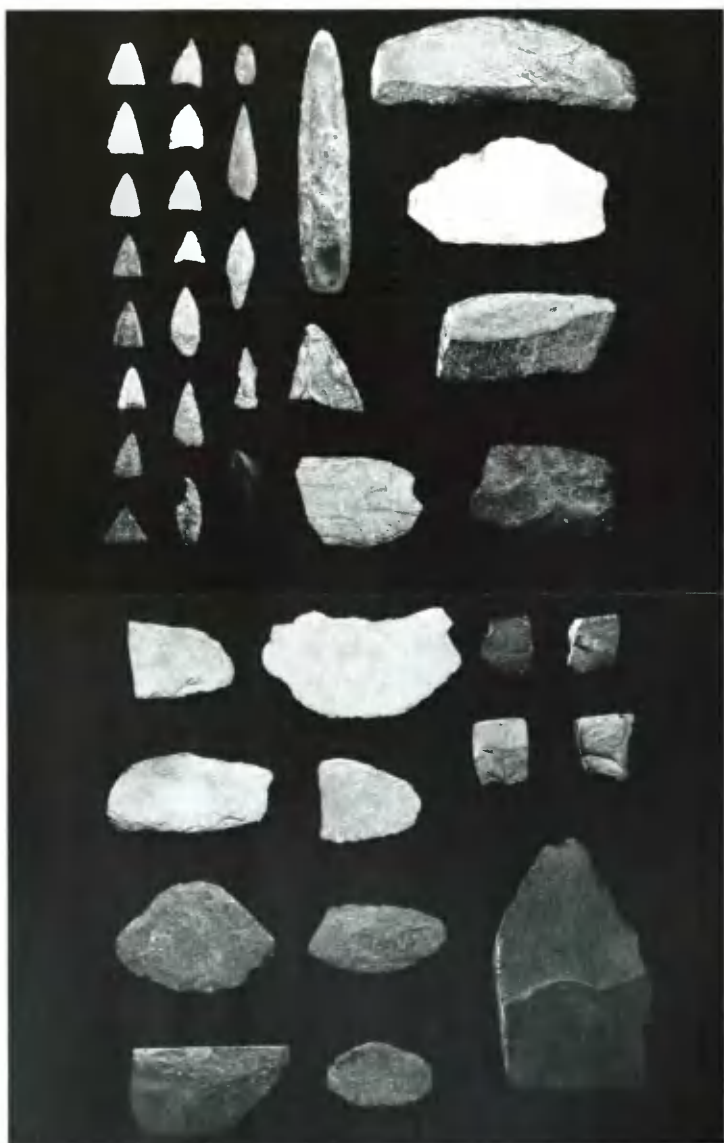
大上田調査区出土石器



東苗代調査区出土石器（1）



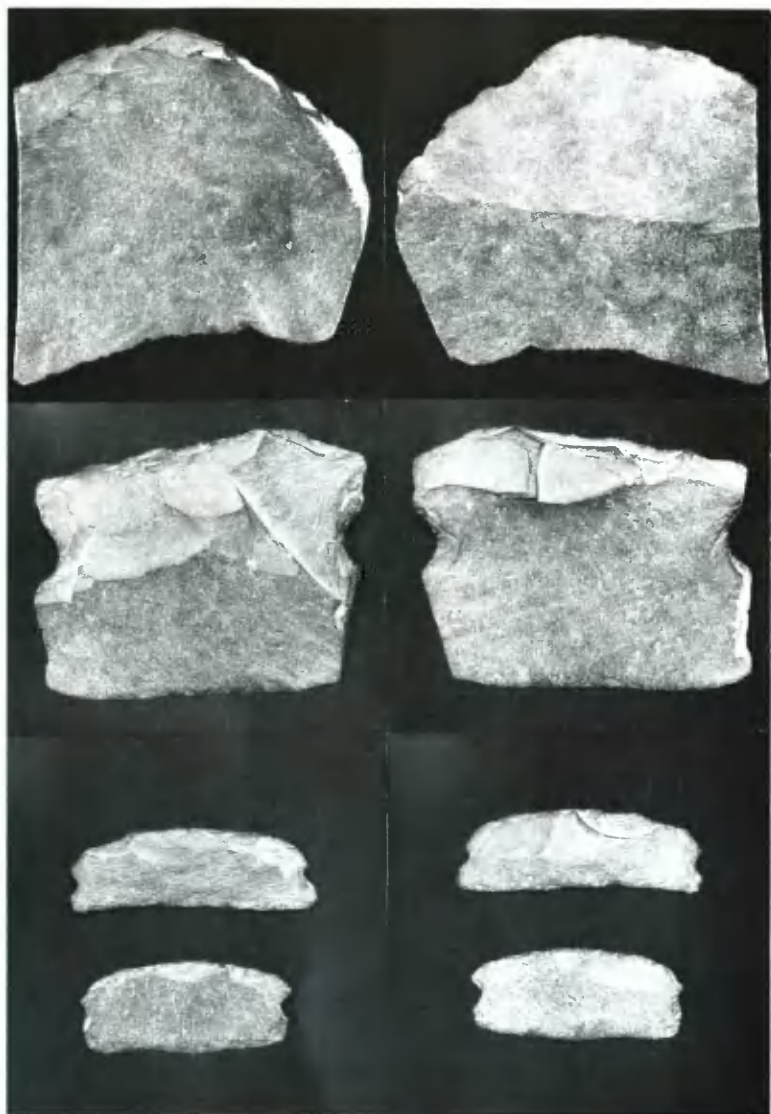
東苗代調査区出土石器（2）



大地調査区出土石器（1）



大地調査区出土石器（2）



大地調査区土壌—59出土石器（3）



1～3. 凹線文（口縁端部） 8～12. 指頭圧痕文凸帯（頸部）
 4～6. 円形浮文（口縁端部） 13. ヘラ圧痕文 14. 貝殻腹縁圧痕文
 7. 断面三角形凸帯（頸部） 15, 16. 櫛描文 17, 18. 凹線文



大地調査区土壌出土ガラス溶滓

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 51

百間川兼基遺跡 1

百間川今谷遺跡 1

1982年 11 月 30 日 印刷

1982年 11 月 30 日 発行

編集 建設省岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印刷 西尾総合印刷株式会社
岡山市津高651